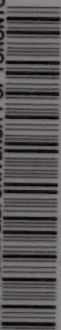


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03058 7737



UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

*purchased from
a gift by*

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

昭和八年四月一日印刷
昭和八年四月五日發行

(普及版古事類苑 全六十冊)

發行者 後藤亮一

發行者 川俣馨一

東京市芝區金杉新領町十二番地

印刷者 和田助一

東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內

發行所 古事類苑刊行會

振替東京三一七〇〇番

東京市小石川區竹早町三十二番地

發賣所 內外書籍株式會社

振替口座東京 八九六〇番
電話小石川 一〇五四番
三二六九番

明治廿九年十月三十一日印刷
明治廿九年十一月八日發行

版權所有



神宮司廳

同安縣志

卷之四

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

風俗

同	同	同	同	顧	同	同	同	助	副	編	編
兼									編		
校									修	修	修
正				問				修			裁

文正	從	從	正							正	從
學六	五	五	五							七	三
博士位	位	位	位							位	位

井	黑	栗	木	本	山	熊	佐	石	松	佐	細
上	川	田	村	居	本	谷	野	井	本	藤	川
賴	真		正	豐	信	直	久	小	愛	誠	潤
固	賴	寬	辭	穎	哉	一郎	成	郎	重	實	次郎

二位○平清盛 奉抱幼主没海中

〔天皇御元服和抄〕御元服の當日、平明に所司御裝束を奉仕す。○中主上重服を○中著御し給ひ、北
廂の大床すに立します、攝政御裾に候し、すぐに圓座に候す。○中御傍親の人参りて、攝政のかた
はしに候ふ座を給。此事天永に中納言藤原忠通嘉應右大臣藤原實文治左大將藤原良經仁治
右大臣藤原實經など候れしにや、永享には御傍親の人なきによりて、一會の傳奏たるにより
て、萬里小路大納言時房卿さふらひしよし、定親大納言記し置ぬ。寶永には櫛笥大納言隆賀卿、御
外祖父たるにて候とけるよしつたへ承りぬ。

〔皇年代私記〕桃園院諱源仁 櫻町院第一皇子、母青綺門院舍子、櫻町院勅定、以二條家爲御外戚、實母
開明門院定子、姉小路參議左中將實武女。

〔續世繼菊の記〕よにもにさせ給はで、○藤原いづかたにもうときやうにきこえさせ給ひて、きんだちなど心もとなくきこえさせ給ひしかども、世中みだれいでさてのち、もとのやうに氏の長者にもかへりならせ給き男君達もくらゐたかくならせ給て法師におはしなすも僧正ともならせ給ふ、どころくの長吏もせさせ給へり、女御ささきかた、おはして、○崇徳后聖子、よろづあるべきことみなおはしなしき、むかしどきにあはせ給ひたる一の人におどらせ給事なかりき馬をうしなひてなげかざりけんおきな、どのやうにておはしなし、げにやくるしきよをすぐさせ給てのちは、かくさかえさせ給へり、つぐらせ給ひたる御詩とて、人の申しは、

官祿身にあまりてよをてらすといへども、素閑性にうけて權をあらそはず、とかやつくらせ給へるもその心なるべし、

〔法性寺關白御集〕夏日於桂別業即事

京洛西南桂水邊、地形勝絕任天然、松杉山暗陰雲底、鳥雀林喧落日前、官祿餘身雖照世、素閑承性不爭權、尋來此處有何思、觸境逸遊感緒連、

〔愚管抄六〕中宮○順德后立子は、○中次○建保の年六年の正月より、又御懷妊と聞えて、十月十日寅の時に御産平安皇子○仲誕生、思のこどくの事出きにけり、上皇○後鳥羽ことに待よろこばせ給て、十一月廿六日にやがて立坊有けり、○中さて公經の大納言はこの立坊の春宮大夫になりて、いみじくて

候はるゝに、大方この人は閑院の一家の中に、東宮大夫公實の嫡子にたてゝ、どもゑの車なぞつたへたりける、中納言左衛門督通季のすぢ也、中納言にて若死をして、待賢門院の時外舅ぶるゑひもえせず、實能實行なご云弟共の方に、大臣大將も出きにけり、

〔玉海〕治承四年二月六日戊子、今日主上○高御覽二品壹○中宮○平治盛室進種々引出物云云、

〔百練抄後鳥羽〕文治元年三月廿四日丁未、於長門門司關、爲源軍平氏悉被責落了、前帝○安外祖母

になりぬれば、左衛門督隆○兼の家にいでさ

八二九

大赦詔早可下給可令試候緣事諸司者各召使部召仰了其詔書曰、

詔朕以薄德謬承洪基愧君臨而及七年思子育而慎口口爰外祖前大相國○道營道場於城東之地形設供養於珪白之秋禮聽善根之至焉廻翠華而臨矣新見土木之壯麗更知人民之勤功禪慮所請唯施仁之情而已大赦天下今日味爽以前大辟以下罪無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒私鑄錢八虐強竊二盜當赦所不免者咸皆赦又薰風者應口扇惠露者欲普黃仍資未得解由之徒不論僧俗同以原免庶因功德之兼二世將顯感動之在一天布告中外俾知朕意主者施行

〔皇年代略記一〕永祚二年正月五日壬午元服十一加冠外祖太政大臣信康

〔冠儀淺寡抄四〕加冠名并人體事

抑古者豫筮之此專用一族長者所以敬其老若其人有障疾病擇外戚同門等之內賢而有禮者是亦流例也並皆不例二在官數位二

或曾祖父祖父外祖父親父等加冠是雖非本儀亦古來爲流例

〔江談抄二〕濟時卿女參三條院事

爲仲云濟時卿女○藤原被參三條院之時之日夕大將參大人道殿○藤原被申云被下策車宣旨哉

件事等欲蒙莫大恩返答云々ナドカハ可無恩許之事也欲奏達云々大將不堪感悅起座拜舞退出及入內之制限雖相待宣旨已以無音敷筵道被參人也時人密號空拜大將又彼大將家前庭有紅梅便稱空拜云々

〔古事談四〕濟時大將ヲユウバイノ大將ト云故ハ女子女御○被ヲ后ニタレント被申ケルヲ勅

許アルゾト被存テ無左右下庭上被拜舞畢然而無立后仍空キ拜ノ大將ト世人云ケリ而不知案內之人紅梅ト知也

みじうおくし給ひて、御てもわななくげにや、まどのあたりちかくだによらず、無邊世界をい給へるに、關白殿色あをくなりぬ、又入道殿○道長いさせ給ふとて、攝政關白すべきものならば、このやあたれとおはせらるゝに、はじめのおなじやうに、まどのわるばかりいさせ給ひつゝ、やうようしてもてはやしきこえさせ給へるけうもさめて、ことにがうなりぬ、ちゝおどい帥殿に、なにかいる、ないそゝとせいさせ給ひて、ことさめにけり、入道殿やもどして、やがていでさせ給ひぬ、そのをりは左京大夫とぞ申し、ゆみをいみじくいさせ給ひしなり、又いみじくこのまさせ給ひしなり、けうに見ゆべき事ならねども、人のさだのいひいで給ふことのおもむきより、かたへはおくせられ給ふなめり、

〔政事要略二十九〕木幡寺鐘銘并序

江匡衡作

木幡山者、左青龍右白虎前朱雀後玄武之勝地也、四方似城、百里不絶、元慶太政大臣昭宣公○藤原基經相地之、宜永爲一門埋骨之處、爾來氏族彌廣、子孫繁昌、帝后必出於此門、王侯相將濟々焉、爰皇朝親舅左丞相○道長准範祖墓域多武峰側、建立妙樂寺、修常行三昧之例、茲山下新建道場、修法花三昧、賴曰木幡寺矣、○下略

〔天鏡裏書〕法成寺供養事

治安二年七月十四日壬午、入道前太政大臣○藤原道長建立法成寺金堂、被供養之、仍天皇○後一條臨幸、准御齋會、太政大臣已下被會矣、太皇太后宮○一條皇太后宮○三條中宮○後一條后○藏子以院○實明同以渡御、以天台座主院源爲講師、今日大赦天下、

〔法成寺金堂供養記〕治安二年七月十四日壬午、○中左大臣○藤原賴通奉勅語、臨於堂東南檻、召大外記津原真人賴隆、被仰云、可召內記檢非違使者、賴隆稱唯退出、即令參大內記菅原朝臣忠貞、左衛門權佐大江朝臣保資、各承宣旨退出、是依前大相國有被奏、被行非常大赦也、大臣又召賴隆、真人被仰云、

さるべきことのをりも、この君おそくまかりいで給へば、弓場殿に御ささばかりまゐらせ給ひて、ぞまちたゝせ給へれば、見奉り給人なんかくてはたゝせ給へると申させ給へば、いでまかり侍る也とぞおほせられける、

〔九曆〕天德四年二月十一日、右大將○藤原師尹、孫皇子爲親王、其名昌平、○村上皇子、左大臣氏人等以下、於仁壽殿東庭奏慶由、依御物忌、不參弓場殿、

〔日本紀略五〕康保五年七月廿三日戊子、於外祖右大臣○藤原師輔、立爲皇太子、

〔十訓抄六〕花山院御時、中納言義懷ハ外戚、權左中將惟成は近臣にて、おろゝ天下の權をとれり、然るを帝ひそかに内裏を出、花山に幸給由を聞て、兩人追て參上の所に、帝已に比丘たり、惟成もどゞりをさる、又義懷に語て云、外戚として重くおはしつるに、外人となりて今更に世に交らん見ぐるしかるべし、早く出家すべしと、義懷此由を存じて、同く出家す、人の教訓にてしたれば、いかゞと時の人思ひけるに、始終とふとくて、飯室に住てよまれける、

見し人もわすれのみ行山里に心ながくもきたる春かな○又見大鏡、古今著聞集、發誓子、

○按ズルニ、古事談ニ惟成ノ語ヲ以テ、義懷ノ語ト爲セルハ誤レリ、

〔大鏡七太政大臣道長〕帥○藤原のみなみの院にて、人々あつめてゆみあそばしゝに、このどの

長○道わたらせ給へれば、おもひがけずあやしと中關白殿○伊周おぼしおどろきて、いみじう聲

ようし申させ給ひて、下臈におはしませどさきにたて奉りて、まづいさせたてまつり給ひける

に、帥殿のやかすいまふたつおとり給ひぬ、中關白殿又御前に候人々も、今二度のべさせ給へと申て、のべさせ給へりけるに、やすからずおほしなりて、さらばのべさせ給へとおほせられて、又

いさせ給ふとておほせらるゝやう、道長がいへより御門ささきたちたふべきものならば、このやあたれとおほせらるゝに、おなじものゝ中心にはあたる物かは、つぎに帥殿いたまふにい

けにや、冷泉院は御物氣によりて中一年にておりさせ給ねさて圓融院の御方めでたければ花
山院の御事などあさしと云もことおろかなり、その御弟にて三條院おはしませすを、いたづら
になしむらせんとおもひて、かゝるやうどもは出さけるにや、

〔神皇正統記 後一條 天曆上村の御時、元方の民部卿のむすめ、の御息所○結の、一のみて廣平親王
をうみ奉る、九條殿○藤原の女御子の安まゐりたまひて、第二の皇子○冷泉にまゐりたまひしこ

ろより惡靈になりて、このみこも邪氣にちやまされましき、花山院俄に世をのがれ、三條院の御
目のくらく、此東宮院○小一條のかく身づからまゐりなき給ひぬるも、怨靈のゆゑなりとぞ、

〔大鏡五太政大臣公季〕このおほきおほどの公季○藤原の御は、うへは、延喜の御門○醍醐の御女、女四宮
子○藤ときこえさせき○中この太政大臣をはらみたまつり給ひて、○中つひにうさせさせ給ひ

にし、○中このうみおきたてまつらせ給へりし太政大臣殿をは、御あねの中宮○上后○安子さらなり、

よのつねならぬ御ごう思ひにおはしませば、やがてやしなひたまつらせたまふ、うちにのみ
おはしませして、みかき○村もいみじううたきものにさせ給へば、つねには御前にさふらは

せ給ふ、なに事も宮たちの御おなじやうにかしづきもてなし申させ給ふに、御ものめす御だい
のたけばかりをぞ一寸おとさせ給ひけるをけぢめに、あるきことにはさせ給ひける、むかし

はみこたちもをさなくおはしませすは、うちすみさせ給ふ事なかりけるに、このわか君○公
季のかくてさふらはせ給ふは、あるまじき事とぞまゐり申せど、かくておひたし給へれば、なべ

ての殿上人なせになすらはせ給ふべきならねど、わかうおはしませば、おのづから御たはふれ
なせのはせにも、みなく○にふるまはせ給ひしなれば、圓融院御門おなじはせのをどこぞもど

おもふにや、かゝらであらばやなきごうめかせ給ひける、又御むすめの頭中將公成君をことの
はかになしがり給ひて、うちにも御車のまゐりにせさせ給はぬかぎりはなゐらせたまはず、

雜載

家之姻與其家門號裏松亞相

小松上皇后實子道義足利義滿大

〔北山抄〕六下宣旨事

浦女御事

更衣實下所司侍實

仰辨宣作官實同外戚公卿以下奏慶

〔三代實錄〕四

清和

貞觀二年十月廿九日乙巳正三位行中納言橘朝臣岑繼業岑繼者贈太政大臣正一

位清友朝臣孫而右大臣贈從一位氏公朝臣之長子也氏公朝臣是仁明天皇之外舅岑繼所生是仁

明天皇之乳母故天皇龍潛之日陪於藩邸稍蒙寵幸岑繼身長六尺餘腰圍差大爲性寬緩少年愚鈍

不好文書天皇見其無才歎曰岑繼也是大臣之孫帝之外家若有才識公卿之位庶幾可金何其不讀

書之甚哉岑繼竊聞慙恐於心乃改節勵精從師受學書傳略通意旨

〔大鏡〕四

右大臣師輔

元方民部卿のむさ

○村上皇子

交うけの君にておはするころみかどの御庚

申とさせ給ふにこの民部卿まゐり給へるさらなり九條殿

○藤原師輔

さふらはせ給ひて人々あま

たさふらひてこうたせ給ふついでに冷泉院のはらなれおはしましたるほどにてさらぬだに

よひといかゝとおもひ申たるに九條殿こよひのすぐろくつかうまつらんとおはせらるゝま

まにこのはらなれ給へるみこをどこにおはすべくはでう六いでこどうたせ給ひけるにた

だ一せにいでくるものかありとある人めを見かはしてかんどもてはやし給ひわが御みづか

らもいみじとおぼしたりけるにこの民部卿のけしきいとおしうなりていろもあをうこそな

りたりけれさてのちにれいにいてましてその夜やがてむねにきはうちてさこそそのたま

ひけれ

〔愚管抄〕四

九條殿

○藤原

のめさき願力にこたへて冷泉院いでさておはしませ天曆上○村第

一の皇子廣平親王の外戚にて元方大納言ありけるがこの安子○村中宮におされまゐらせて冷泉院をさけ出て廣平親王はかひなき事にてありけるを思死にして悪霊とかりにける

んじ給ふに、ひつじのくだりはどにすでにことありぬ、宮の御せうと公相の大納言、皇子御誕生
ぞやといどあきやかにのたまふをきく人々のこゝち、夜のあけたらむやうなり、ちゝおとゝま
こどのたまふまゝに、よろこびの御涙ぞおちぬる、あはれなる御けしきと見たてまつる人もこ
といみしあへず、公相公基實雄大納言三人、權大夫實藤大宮中納言公持、みな御ゆかりの殿原、う
へのきぬにてさぶらひ給ふ、略中かくて八月十日すかやかに太子にたち給ひぬ、後のかみくさ
也おとゝ御心おちゐて、すゝしくめでたうおぼす、ことわりなり、おほかたかのいみじかりし世
のひゞきに、女御子にておはせましかば、いかにまほしくとくちをしからまし、いとさらさらし
うて、さしいで給へりしうれしさを思ひいづれば、見たてまつるごとに涙ぐまれて、かたじけな
うおぼえ給ふとぞ、どしたくるまでつねはおとゝ人にもものたまひける、中比はさのみしもおは
せざりし御家の、ちかくはここのほかに世にもおもく、やむことなうものし給ひつるに、この后
の宮まゐりたまふ、春宮むまれさせ給ひなごして、いよゝゝさかえたりたまふ、行すゑおしは
かられていどめでたし、父の入道どのさへ御いのちながくて、かゝる御すゑども見給ふもさこ
そは御心ゆくらめとおしはかるもまゐる、

〔太平記〕立后事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公ノ御女、子后妃ノ位ニ備テ、弘徽殿ニ入セ給フ、此
家ニ女御ヲ立ラレタル事已ニ五代是モ承久以後、相模守北條氏代々西園寺ノ家ヲ尊崇セシカバ、
一家ノ繁昌、恰天下ノ耳目ヲ驚セリ、君醍醐モ關東ノ聞エ可然ト思食テ、取分立后ノ御沙汰モ有
ケルニヤ、

〔教典卿記〕應永二十年三月十六日、裏松殿圓寂、子刻天下觸穢也、

〔續本朝通鑑稱六十一〕應永二十年三月乙未、大納言從一位藤重光逝、以外戚之親爲院執權、且依武

おほきおどや、そのかみ夢見給へることありて、源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし北山のはどりに、世にしらすゆゝしき御堂をたて、名をば西園寺といふめり、この所は、伯三位すけながの領なりしを、をはりの國松えだといふ莊にかへ給ひてけり、もとは田はたけなせおほくも、ひたぶるにゐ中めきたりしを、さらにうちかへしくづして、えんなるそのにつくりなし、山のたすまひ木ふかく、池の心ゆたかにわたつ海をたへ、峰よりおつるたきのひ々きも、げに涙もよほしぬべく、心ばせふかき所のさまなり、略中北のまんでんにぞおどやはすみ給ふ、めぐれる山のときは木どもいとふりたるに、なつかしきはどのわか木のさくらなぞうゑわたすとて、おどやうそふき給ひける、

山ざくらみねにもをにもうゑおかむ見ぬ世の春を人やしのふと、かの法成寺をのみこそいみじきためしに世繼のいひためれど、これはなほ山のけしきさへおもしろく、都ばあれて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし、峰殿藤原道家の御まうと、あづまの將軍經頼の御おほちに、よろづ世の中御心のなゝに、あかね事なくゆゝしくなんおはしける、いゝの右のおどやをさをさおどし給はず世のおもしにて、いとやんごとなくおはするとさこゆる、おくゆかしき御はさなるべし、略中まことやこぞより中宮子緒はいつしかたゝならずおはしす、六月になりてその程ちかければ、十三社のほうへい勅使たてまつらる、略中後の宮いどくるしげ載し給ひて、ひたけゆくにいゝの御物のけさもなのりいで、いみじうかしかまし、おどや賀きたのかたいかさまにど御心まどひて、おぼしなげくさまあはれにかなし、略中内には更衣ばらに若宮二所おはしませど、此御事をまじ聞え給ふとて、坊さだまり給はぬほせなり、たとひたひらかにおはしなすども、もし女御子ならばとまがゝしきあらましは、かねておもふだにむねつゝおれてくちをし、かつは我御身のまゆくせ見ゆべきさはどかしとおぼして、おどやもいみじうね

數十年の間朝廷の故實に練し、大臣大將に昇りて懸車の齡まで仕奉らる、親王の女祇子の女王は宇治の關白の室なり、よりてこの大臣をばかの關白の子にし給ひて、藤氏に變らず春日の社にもまゐり仕奉られけりとぞ、またやがて御堂○道のの息女に相嫁せられしかば、子孫も皆かの外孫なり、この故に御堂宇治をは遠祖の如くに思へり、それよりこのかた和漢の稽古を旨とし、報國の忠節をさきとする誠あるによりてや、この一流のみ絶えずして十餘代に及べり、
〔中右記〕大治五年二月廿一日甲午、立女御從三位藤聖子爲中宮、藤盛關白忠通當時執、攝政女母從三位藤宗子、故大納言宗通卿女也、當時執柄之女子立后、永承六年四條宮藤原朝之後、八十年間久絶之處、今度初有事、誠是藤氏之中興、時獻大宮右大臣父の宗通、後之末葉、皇后初立給、一家光美後代之美談也、

〔續世繼二葉松〕當代高倉は、一院白河の御子、御母皇后宮御子ときこえさせ給、贈左大臣平時信のおとゝの御むすめ也、略いま又たひらのうぢの國母女結義かくさかえさせ給うへに、おなじうぢのかんだちめ殿上人、このゑづかさなどおほくきこえたまふ、このうぢのまかるべくさかえ給とさのいたれるなるべし、たひらのうぢのはじめは、ひとつにおはしましければ、にさの家とよのかためにおはするすぢとは久しくかはりて、かたゞきこえ給を、いづかたもおなじ御よに、みかどきさおなじ氏にさかえさせ給める、平野はあまたのいへのうち神にておはすかれど御名もとりわきてこの神がきのさかえ給ふときなるべし、

〔諸家知譜拙記〕高倉當代稱載

範季 高倉祖 順徳院外祖

刑部卿從三位、元久二年薨、贈左大臣從一位、

〔増鏡五内野の雪〕いま后○後嵯峨の御父は、さきにも聞えつる右大臣實のおとゝ、その父公殿公の

大貳のむすめのはらにおはす、みゆもきよらは、和歌をせよよくはみ給ときこえ給略中三の

きみは待賢門院鳥羽后子におはします、

〔續世繼七たいれ〕ふぢなみの御まがれのさかえたまふのみにあらす、みかぜ一の人の御は、か

たには、ちかくは源氏の君たちこそよきかんだめきもはおはすなれ、堀川のみかぜの御母賢

子の中宮は、おぼどの通源の御子實師とてまゐり給へれど、まことは六條の右のおど源房

の御むすめなり略中そのゆかりのありさまみなもとを尋ねれば、いとやんどなくなん侍る、

むらかみのみかぜの御子に、なかつかさのみこ具平と申しは、六條の宮とも、後中書王とも申

すこの御ことなり略中その御子に、つちみかぜの右のおど中と申しは、はじめてみなもとの姓

えさせ給て、師房のおど中とさこえさせ給き、御身のさえもたかく、文つくらせたまふかたもす

ぐれ給略中みかぜ一の人の御よそひきも、その中にぞおほく侍るなる、御堂源房の御むすめ

は、おほくきささ圍母にてのみおはしますに、このどのゝきたのかたのみこそたゞ人はおはし

ませば、いとゞやんととなし、その御腹に堀川の左のおど中俊房、六條の右のおど中顯房と申

て、あにおどうとまらばたをへりき略中六條のおど中は、略中中宮の御おや、ほりかはのみかぜ

の御おはぢにていじめでたくおはしと、

〔續世繼七しほの題〕六條のおど中源顯昔よりふぢなみのまがれとて、みかぜの御おはぢにて

はうちつゞき給へるに、ほりかはの院の御おはぢにめづらし、みくすまは、はるこらせたま

へる、一の人の御おはぢにうちつゞきておはしますなり、

〔神皇正統記付上〕この天皇中御子多くまじゝし中に、略中具平親王六條の宮と申、中務卿に

親王名譽おほしき、よみてこれ此親王とまことに才も高く徳もおはしけるにや、その子師房姓

を賜はりて人前に列せられ者、が才藝古へに耻ぢず、名望世に聞えあり、十七歳にて納言に任じ、

ふはおとろへぬ、春花秋のみちといふ、春の霞はなびき、あきのきりたちこめつれば、こぼれて匂ひみえず、たゞひとわたりの風にちりぬるときは、水のあわみぎはのちりとこそはなりぬめれたゞ此殿の御まへの榮花のみこそ、ひらけはじめさせ給にしよりのち、千とせの春のかすみあきの霧にもたちかくされて風もうごきなくえだをならさねば、かをりをさるよにありがたくめでたき事、優曇花のごとく、まにおひたるはなはをきはちすのよにすぐれて、かにほひたる花はならびなきがごとし、

〔續世繼たけのし〕みかき關白につき奉りては、御はゝかたのきみだちをこそよにまかるべき人にておはすめれ、九條殿師輔藤原の御子の中に三郎におはしまえ、關白たえさせ給十郎にあまひ給へりし、閑院のおほきおとゞ季公のすゑこそ關白はし給はねども、うちつゝきみかぜのおほんをぢにて、さるべき人びとおはすめれば、その御ありさま申さんどて、まづみかぜのはゝがたを申つゝけ侍なり、朱雀院村上の御おほぢは堀河殿基經藤原、冷泉院圓融院の御おほぢは九條殿師輔藤原、花山院のは一條殿伊尹藤原、一條のゐん三條院のは東三條殿兼家藤原、後一條院、後朱雀院、後冷泉院、此三代の御おほぢは御堂の入道殿道長藤原、この十代みかぜは、昭宣公經基と申堀川殿のひとつ御すゑなり、後三條院こそはゝかたもみかぜの御まごにておはしませど、御は陽明門院はみだう長道の御まごにておはしませばひとつ御ながれなり、白川院の御おほぢは閑院の春宮大夫能信藤原のおなじがれにおはしますを、まごどの御おや、閑院の左兵衛督公成成のおなじ御ながれなれど、東三條殿兼家の御すゑにはおはせで、その御おとうどの閑院のおとゞ季公の御すゑなり、この閑院のおほきおとゞの御むまごにおはせし、左兵衛のかみ成公の御すゑよりつゝき御かぜの御おほぢにおはす、このさんなりの左兵衛督の御子、あせちの大なごんさねすゑは、鳥羽の院の御おほぢなり、此大納言の太郎には、春宮大夫公實と申し、經平の

始祖内大臣足扶持宗廟保安社稷淡海公比等手草詔勅筆削律令興佛法詳帝範其後后妃丞相積功累德寔繁有徒矣建興福寺法華寺開勸學院施藥院忠仁公房其始長講會昭宣公經基點木幡墓所貞信公平忠建法性寺修三昧九條右相府師建楞嚴院修三昧先考建法興院修三昧此外傍親列祖之善根德本不遑稱計方今時々詣墳墓爲建寺指點形勝略中今日擇曜宿始法華三昧刻十月定星之期廻萬代不朽之計于時蒙霧開愛日暖可謂天地和合風雨不違祖考感應垂冥助之令然也略弟子某歸命稽首敬白

寛弘二年乙巳十月十九日甲午

左大臣

〔榮花物語十五〕そのをりは左大臣道長原にてぞおはします此寺の名をば淨妙寺とぞつけられたることもはて殿の御まへをはじめたてまつり藤氏の殿ばらみな御詠經させ給僧ども祿たまはりてまかりいでぬおほかたこの事のみならずとし比まあつめさせ給へる事かずえらすおほかり正月より十二月までそのとしの中の事ども一事はづれさせたまはすこのをりふしいそぎあたりたるさるべき僧達寺々の別當所司をはじめよろこびをなしいのりまうす略中わはれなる末の世にかく佛をつくりだうをたて僧をとぶらひちからをかたづけさせ給佛法のどもし火をかくげ人をよろこばせ給て世のおやとおはします我御身はひとつにて三代のみかどの御うしろみせさせ給て六十國六齋日に殺生をどめさせ給ふまじき事をばすゝめおしきことをばどめさせ給かゝる程に衆生界つき衆生の切つきんよやこの代もつきさせ給はんどみゆ略中世の中にある人たかきもいやしきも事どこゝろどあひかがふものなりうべ木まづかならんと思へど風やまき子けうせんと思へどおやまたす一切言行にさうある物はみな死す壽命無量なりといへどかならずつくる期ありさかりける物はかゝるおどろふかうはいする物はわづらひありほうとしてつねなる事なしあるは昨日さかえてけ

都嚴久散花少僧都院源律師明榮引明慶命尊光等律師堂達林懷莊命等也。在法眼納衆冊人。此中三綱八人。讚衆廿人。梵音衆廿人。銅杖衆廿人。威儀二人。定者二人也。會指圖在別人禮上達部。右府內府前帥。奉宮大夫。右衛門督。左衛門督。中宮權大夫。權中納言。藤中納言。勘解由長官。左兵衛督。左大辨大藏卿。修理大夫。三位中將。宰相中將等也。不來人。尹中納言。式部大輔也。內藏寮冷泉院花山院皇太后中宮一品宮女御。諷誦一門男女可然。所有此事使便有祿物。西時事了。人々還出後始三昧。以院源僧都令申事由。此前打火可付香者。余道原取火打白佛言。此願非爲現世榮耀。壽命福壽。唯坐此山先考先妣及奉始昭宣公諸亡靈爲。無上菩提。從今後來之一門人々。爲引導極樂也。心中清淨。願釋迦大師普賢菩薩自證明給。打火是爲用清淨火也。早付爲悅。隨付不爲恨。祈請打火不及二度一度得火。感淚數行。見聞道俗。流淚如雨。付香舉燈明。白事由進三寶。空僧時迴吹螺。新螺聲未調不快。余作念最始吹螺欲不三寶。取螺試吹之。螺聲長大也。萬人感悅之。笛會之上達部。奉宮大夫。右衛門督。中宮權大夫。左大辨修理大夫。三位中將。宰相中將等也。別當前大僧正御修三綱。隨役官別當僧等。送房具。寺名觀修付也。式部權大輔顯文持來。有祿物。左大辨顯文。顯等書。從中宮名香繪。使公信朝臣。賜祿物供養三昧經。件經每卷初。只手自書。此外法花經一百部。心經百卷。供養事了。子時許還來。

〔本朝文粹〕十三爲左大臣道原供養淨妙寺願文

江匡衡

弟子大日本國左大臣正二位藤原朝臣前白雲山淨土釋迦尊。中昔弱冠著緋之時。從先考大相國家。屋詣木幡墓所。仰三重暗四藏。古樹參々。幽邃寂々。佛像不見。只見春花秋月。法音不聞。只聞溪鳥。猿猴啼時。不覺淚下。寫作斯念。我昔向後至大位。心事相諸者。爭於茲山脚造一堂。修三昧。補助過去恢弘方來。思以涉歲。不敢請人。爰承累葉之慶。當此之思。年三十極人臣之位。十一年。奉王佐之任。皇帝之爲舅也。皇后之爲父也。榮餘於身。賞過於分。如履虎尾。如懸龍圖。雖趨朝庭。雖居私第。發誓提心。兢迫塲觀。行住坐臥。事三寶。造次顛沛。歸一乘。抑檢家譜。萬歲藤之榮。所以草莽萬姓。其理可然。何者。

め、あめのしたをさされり、神祇をうやまひ、佛法を崇給事むかしにもこえたりけり、かの南山科の大領の跡をば寺になされけり、今の勸修寺これ也。○中略聖主醍醐寺○山科をたて、山陵をしめ給事も、この外家のあたりをむつまじくま給けるゆゑとぞ、彌益の大領は、四品に叙して宮内大輔にぞなりにける、その正しき跡はいまの二所大明神と申是なり、宮道の明神とも申とかや、今の宮道氏はこの大領のすゑにや、まことにめでたかりける御契なり、其跡伽藍となりければ、延喜の聖代の勸願なるうへに、三條右大臣一堂を建立せられたりける、威風すでになりて、ほどなくかくれ給にければ、朝成朝忠なき申御子たち、佛間の莊嚴をそへて、八月ついたちよりおなじき四日、丞相の御忌日にひたるまで南北の碩才をまねきて、一乘八座の講律をはじめおこなはる。○中略三公槐門の跡はひさしくたえにたれども、數代藤路の家いまでもすたれず、おほよそ天下の要領在して、七辨にくはゝりて、夕郎貫首をへ、八座につらなりて、朝議の開口にあづかる人、おほくは此家よりぞ出給なる、龍作特進はさだされる前途なり、丞相の大位にいたり給ふ人も代々にきこえ侍り、大織冠の御すゑ、人臣の中にはびこりたまへるうちに、この高藤のおどりの御ながれひさしく、朝家の要臣たえたまはぬ事をおもふに、義祖の忠貞のならひなり、これによりて家門の餘慶も人にすぐれたるなるべし。

〔日本紀略十一〕寛弘二年十月十九日甲午、左大臣○藤原道長、供養本幡淨妙寺三昧堂、准御齋食、今日始三昧、左大臣於佛前、取火打誓言云、若依此功、我子孫相繼可施榮華者、此火一度可付也、一度付之、衆人莫不感歎。

〔御堂關白記〕寛弘二年十月十九日甲午、淨妙寺供養、○中略辰始著寺、○中略巳時吉時打鐘、鐘聲如思、此間上達部十人許先來、午時人々來具、末時入堂、大會儀如常無樂、式部彈正著南大門内東西轡座、次諸僧入堂、外記行事、證者覺慶前大僧正、導師前大僧正、觀修、咒願大僧都定證、唄大僧都濟信、前大僧

いまだありやといひ給ふに侍よしきこえて、やがてむかしの棲へみちびきたてまつりつ、枕さだめしねやのかたにおはしたれば、よろづむかしにかはらず、女君は木丁のかたびらにはたかくれてゐたまへり、○中 かたはらに五六ばかりなる女君の、えもいはすうつくしきぞ給へる、たれならんと心えがたくて、いかなる人のなごりにてかどとひ給へども、いらへ給事はなくて、いとゝ涙の色はまざり行ば、いとあやしくおぼして、あるじのをとこに、かれはたれにかどたづね給ふに、ひとゝせみえたてまつり給てのち、たゞならずなり給て、いできぬべかなりと申に、このよひとつならぬ御ちぎり、いとあはれにおぼさる、○中 この家あるとは、このこほりの大領宮道の彌益となんいひける、こよひもかりのやどりにたびねし給て、むつとどもつきなくに明ぬれば、明日となんちぎりて宮こへかへり給ひぬ、あくる日になりなければ、○中 都より御むかへにまゐれり、八葉の御車に侍二人ばかり難色なごさるべきさまにぞありける、このたびは空だのめにはあらずりけりとはおぼしながら、我身のほぞをおぼしきりて、行すゑいかならんとあやふき心ちし給へども、むなしくかへし給べきならねば、みやこへはくれかゝる程をはからひてぞいで給ける、○中 むかへど給てのちは、かひなくしもしほのけふり一すぢになびきて、こどうらにかゝる御心なくてすぐし給ひけり、かくてふたでゝゐなくて、年月をおくり給はせに、うちつゝきをのこ君ふたどころいでき給にけり、ありしひと夜のちぎりにいでき給へりし女ぎみは、宇多院の位におはしをしける時に入内ありて、皇太后宮胤子と申、皇子いでき給にければ、高藤の公は朝家に又なき權臣にて、内大臣になり給ひにけり、皇子踐祚ありて、延喜の聖の御門○福とぞ申なる、我朝の賢王におはしをす、帝祖になり給にければ、うせ給てのちは太政大臣正一位を贈せらる、二人のをのこ君と申は、泉の大將定國、三條右大臣定方これ也、いづれも才卿にて、天下におもき人にてなんおはしける、延喜の聖主ことに律令にあきらかに、格式をさだ

〔勅修寺縁起〕閑院贈太政大臣冬嗣のおとと申は、大織冠六代の御すゑ、大納言眞楯卿の御孫、右大臣内麻呂の六男にてぞおはしける、その冬嗣の御子に、内舍人良門と申人おはしけり、昔はやむことなき人も、うひづかさには、内舍人なごにも成給けるなるべし、良門の御子に高藤と申おはしけり、わかくいとけなくおはしける、略中弱冠におはしけるころ、ちかくつかうまつるをこのどもいさなひて、たかゝりにいで給ぬ、みな山科のほどに狩ゆき給に、空のけしきさきくもり、風吹雨なごふりければ、しばしは時雨の山めぐりにやと思に、神さへおせろしく、いなびかりのかげむくつけかりければ、略中にし山ぎはに人里のみゆるを心ざして、むをにむちうち給ふ、おくゆかしきひがきに萱にてふける門したる家なん有けるに、馬に乗ながらうちいて、三間ばかりの廊のありけるにおりぬ給ぬ、略中あるじいとおせろきて、いそぎ内に歸入て、火ともしとりまつらふ、略中日もいたう暮にければ、心ならずよりふしたまひぬ、おくざまなる障子をわけて、とし十四五ばかりにやとみえたる女の、まをん色のふたつぎぬに、こきはかまきたるがあふぎさしかくして、さかづきなごとりてさし置つゝ、うちそばみてゐたれば、その日のとさだかならねども、かゝる所にあるべしともみえず、いとなさけありてぞおぼされける、略中なが月のころなりければ、すがのねのながきよすがら、草の枕におく露のまもまごろみたまはず、行すゑかけてちぎりおきて、夜もあけゆけば、かくてあるべきならねば、はき給へる大刀を、くちせぬかたみにとゞめおきてたち出給ぬ、略中鴈の翅だにもかよはず、露のたまづさのたよりもなくて、年月をぞおくり給ける、略中かやうにてする程に、むなしく歳のむとせにもなりにけり、略中ひとせ御どもなりし馬飼のをのこ、略中ちかくめしよせて、おりしかりばのあまやせりはおぼゆるやとのたまふに、わすれ侍らぬよし申に、いどうれしくて、御どもの人などおほからぬまにて、略中おはしつさぬ、あるじの男心をさひして、いそぎまゐりたれば、あるじ、女君は

條右丞相師輔の公のいへに、攝録の臣のつきけることは、小野宮せのうせ給ひて、九條殿の嫡子一條攝政伊尹攝錄により、是は圓融院の外舅にて、右大臣にてあれば、九條殿は攝錄せざりしかば、なにとて肩をよらべ競べきものなくて、かくは侍るなり。

〔大鏡裏書〕有圓堂事

安置不空羅索觀音像并四天王像也、長岡右大臣内麻呂、殊發大願所奉造也、後圓院贈太政大臣、安閑以弘仁四年造圓堂、所安置尊像也、伏惟故圓院贈太政大臣大閣下、橘仁德爲家、茂忠孝爲衣、在朝則周旦之輔、君歸釋則淨名之愛道、先考長岡右大臣殊發大願、敬以奉造不空羅索觀音像、又常歸依妙法蓮華經、尊重至深、踴仰至篤、而尊容功了、假以安置、法門感生、未遑講演、遲疑之間、舟空忽遷矣、大閣下以爲尊親莫先於同心、酬往莫先於述志、仍占勝地於伽藍中、建立堂宇於清淨之刹、遂使八柱圓堂、挺玉墀而表麗、八臂之金容、映蓮座而居尊等也、

堂之壇ツキケルガ、イタウクヅレケルニ、翁ノイデキテ、此歌ヲウタヒテツカバ、ヨモクヅレジトテ、ウタヒダシタリケル、

フダラクノ南ノキシニダウタテ、今ゾサカエン北ノフデナミ、其翁ハ春日ノ明神トゾ申ツタヘタル、其後北家ハナガクサカユナリ、〇又見三元享釋書

〔神皇正統記清和〕藤原の一門、神代より故ありて國主を輔け奉る、〇中淡海公〇不の後、參議中衛の大將房前、その子大納言眞柄、その子右大臣内麻呂の三代は、上二代の如く榮えずやありけん、内麻呂の子冬嗣の大臣、圓院の左大臣とい、藤氏の衰へぬることを歎きて、弘法大師に申し合せて、興福寺に南圓堂を立て、祈り申されけり、此時明神役者に乞はりて、補陀洛の南のさしに堂たてゝいさを榮えん北のふちなみと詠ひ給ひけるとぞ、〇中彼の略一門の榮えし事まことに祈請にこえたりと見えたり、

有家者、可不鑒前失而防未然哉、

〔文德實錄〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、壬午葬太皇太后于深谷山、遺令薄葬、不營山陵、

略○中 太皇太后姓橘氏、諱嘉智子、父清友少而沈厚、涉獵書記、身長六尺二寸、眉目如畫、舉止甚都實飽

八年、高麗國遣使修聘、清友年有弱冠、以良家子、姿儀魁偉、接對遣客、高麗大使獻可大夫史都蒙、見之而器之、問通事舍人山於野上云、彼一少年爲何人乎、野上對是京洛一白面耳、都蒙明於相法、語野上

云、此人毛竹非常、子孫大貴、野上云、請問命之長短、都蒙云、三十二有厄、過此無恙、其後清友娶田口氏

女生、后延暦五年爲內舍人、八年病終於家、時年卅二、驗之果如都蒙之言、后爲人寬和、風容絕異、手過

於膝、髮委於地、觀者皆驚、略○中 后自明、泡幻、篤信佛理、建一仁祠、名檀林寺、遣比丘尼持律者、入住寺家、

仁明天皇助其功德、施捨五百戶、封以充供養、后亦與弟右大臣氏公朝、臣議開學舍、名學館院、勸諸子

弟誦習經書、朝夕開閣、時人以比漢鄧皇后、

〔慈惠大師傳〕天慶九年丙午、僕射父藤原師輔于於楞嚴院營法華三昧堂、集衆擊燵而誓曰、若因三昧

力、光榮家族、所擊之火、不過三、便擊之、火星迸出、不至子再僕射手、以此火點長明燈、于今不滅、乃以此

宇屬師之法葉矣、

〔愚管抄〕九條の右丞相師輔は、兄の小野宮實の先に先立て、一定うせむんとせむと給ひて、

我身こそ短祚にうけたりとも、我子孫に攝籙をば傳へんに、又我子孫を帝の外戚とはなさんと

誓ひて、觀音の化身の叡山の慈惠大師と、師檀のちぎりふかくして、横河のみねに楞嚴三昧院と

いふ寺を立て、九條殿の御存日には、法花堂をまづ作りてとりて、大衆の中にて火打の火をうち

て、我此願成就すべくば、三度が中につけてうたせ給ひけるに、一番に火うちつけて、法花堂の

常燈にはつけられ、いまだに消すと申つたへたり、さればその御女后安子の腹に、冷泉圓融の

兩帝より始めて、後冷泉院まで繼體守文の君、内覽攝籙の臣、あざやかにさかり也、略○中 さてこの九

〔大鏡^七太政大臣道長〕この不比等の大臣の御むすめ二人おはしける、一所は聖武天皇の御は、后宮子娘^{○原作光明皇}給へりける、女御子を聖武天皇女帝にする奉り給ひてけり、此女帝をば高野女帝とぞ申て、二度位につがせ給ひたりける、

〔神皇正統記^{文武}〕藤原の内大臣鎌足の子、不比等の大臣執政の臣にて、律令などをえらび定められき、藤原の氏、この大臣よりいよゝ盛になれり、四人の子おはしき、これを四門といふ、一門は武智麻呂の大臣の流れ南家といふ、二門は參議中衛の大將房前のながれ北家といふ、今の執政大臣およびさるべき藤原の人々はみなこの末なるべし、三門は式部卿宇合のながれ式家といふ、四門は左京大夫麻呂のながれ京家といひしが、はやくたえにけり、南家式家も儒胤にて今に相續すといへども、唯北家のみ繁昌す、房前の大將人にことなる陰德こそおはしけめ、

〔鷲峰文集^{四十}〕甲子會紀

淡海公之執政、作律令、垂法於百世、爲兩朝之外戚、開繁榮於一時、分藤原於四流、

〔大日本史贊^三〕藤原不比等及子孫傳贊

贊曰、世勞世祿、古之所以延賞也、藤原不比等、極人臣之位、居外祖之貴、謙讓不遑、滿而不溢、故能福祚流于子孫、而南北式京世濟其美、昨之茅土、賜之美諡、朝廷時庸之典亦至矣、[○]前受顧命之重、盡匪躬之節、身雖不登顯位、而餘慶延于苗裔、名德相望、衰敝蟬聯、七世內侍、八葉宰相、未足爲比、盛矣哉、

〔皇朝史略^三元明〕外史氏曰、藤原鎌足、佐天智帝一匡天下、其有功於社稷也大矣、及其子不比等、能幹父業、加以外戚之勢、職任台司、位極人臣、厥後子孫家戚里、而世鼎錫、遂使威福之柄一歸攝關、此雖由國家待功臣之厚、抑亦任以政事之弊也、觀不比等爲右大臣、則可見外戚之盛、始於此、嗚呼、有國

●良門 勸修寺家
高藤

定方

朝忠

朝賴

朝成

爲輔 甘泉寺祖

宜孝

隆光

隆方

爲房

爲隆

顯隆 葉室祖

定國

胤子 字多良
后醍醐
母

能子 醍醐女御

和香子 醍醐女御

仁善子 醍醐女御

光房

經房

定經

資經

經俊 勸修寺祖

俊定

定資

經顯

經重

經豐

資通 万里小路
祖

宣房

藤房

季房

仲房

嗣房

時房

冬房

賢房

秀房

惟房

榮子 後奈良皇
后正親町
母

房子 正親町典
侍

女子 正親町典
侍

經成

教秀

政顯

尙顯

尹豐

晴右

晴豐

光豐

房子 後土御門
典侍

藤子 後和原宮
人後奈良
母

晴子 昭太上天
皇誠仁親
王后後鳥
成母

●眞夏日野親

濱雄 家宗 弘蔭 繁時 輔道 有國 資業

實綱 有信 實光 資長 兼光 資實 家光

賴資 經光

資宣 俊光 資名

時光 資康

重光

女子俊光體
宮人

康子俊國體宮人
後小松準母

資敎

有光

資國

盛光

資子實國女後
小松宮人稱
光母

兼仲 光業 兼綱

仲光 兼宣

仲子俊光體典
侍後國融
母

(資子)女爲實敎養

●公季 國院祖

實成

公成

實季

公實

義子一條女
御

茂子爲能信
養女
茨子堀河女御
鳥羽母

實行

公教

實房

實國 滋野牛
祖

琮子 後白河
女御

公房 柿小路
實親

公宣 正親町
公氏 三條

有子 後堀河皇
后
女子 後嵯峨御
所殿

實親

公親

實重

公茂

實忠

公忠

房子 後深草御
所殿
女子 後二條御
所殿
嚴子 後小松
母

實冬

公冬

公秀

實繼

公忠

實躬

實康

秀子 光嚴宮人
母

通季 四國寺祖

公通

實宗

公佐

實直

公仲

公廉

實兼

公衡

實衡

實氏

公相

實俊

實俊

實俊

公宗

實能 禮大寺祖

公能

實定

公繼

實俊 橘水祖

實有 清水谷祖

實雄

實基

實基

實基

璋子 白河嫡子
鳥羽中宮
河母

爲忠通
養女
多子 爲賴長
養女

忻子 後白河
中宮

實雄

實基

實基

實基

實基

實基

女子 鳥羽宮
人

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

實基

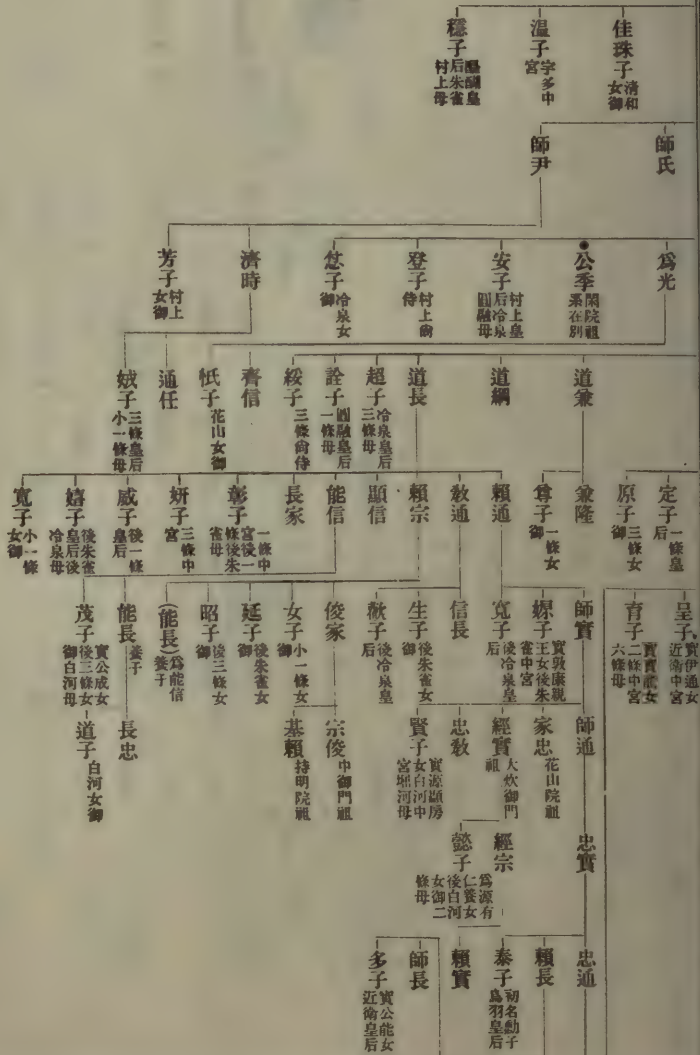
實基

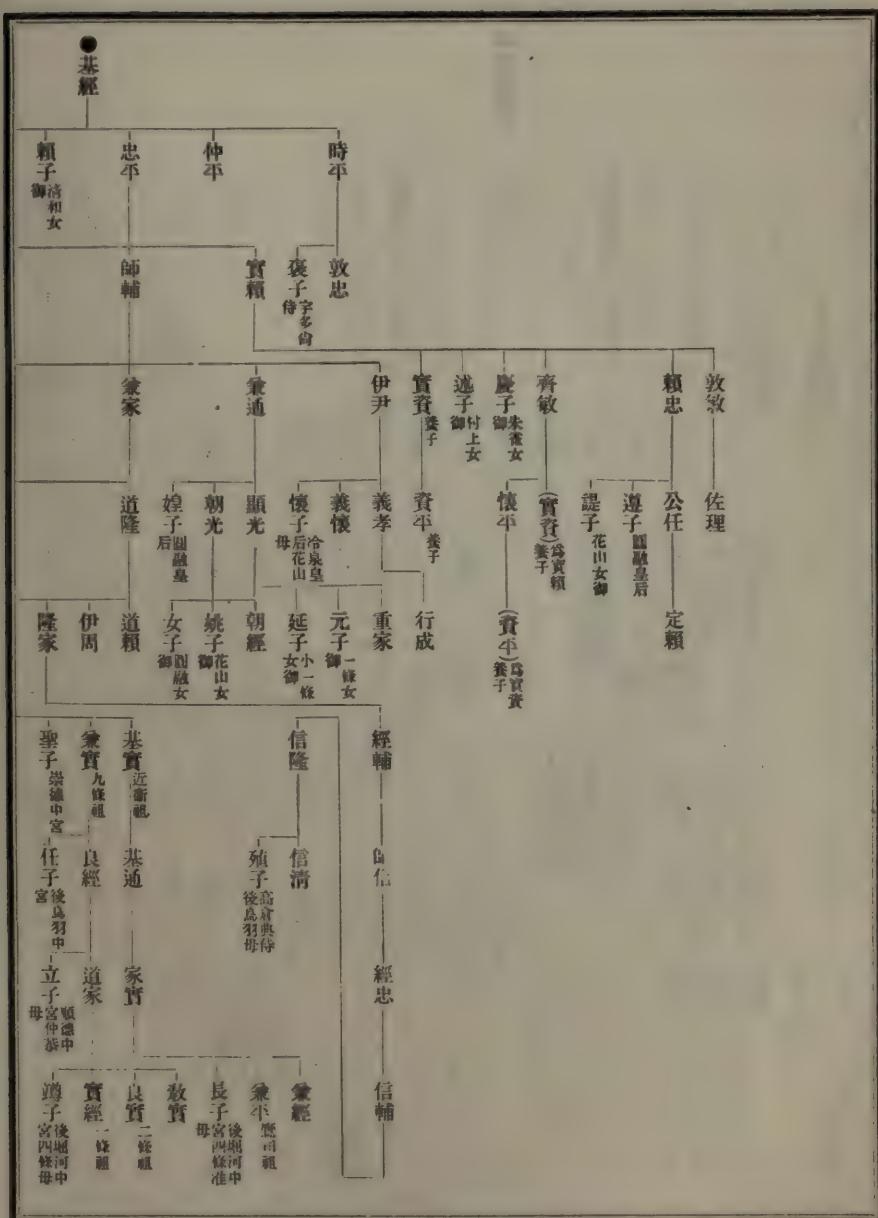
實基

實基

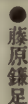
實基

實基





ニ從フ



〔讀史餘論〕六十三代冷泉より、圓融花山一條三條後一條後朱雀後冷泉、凡八代百三年の間は、外戚權を專にす。^變

〔日本外史〕外史氏曰、王權之移於武門、始於平氏、成於源氏、而基之者藤原氏也。^略中其擅政始於文德云、然余謂藤原氏驕專、其來久矣、非獨始於文德時也、鎌足助天智効力王室、其子不比等爲四朝元老、文武聖武並娶其女、而孝謙其外孫女也、而皆淫縱、惠美押勝嬖於孝謙、始危國家、實不比等孫、則其家法可知也、其後光仁桓武仁明、獨不出於藤原氏、而自平城以下、至於文德、又皆其出、文德外祖左大臣冬嗣、爲不比等四世孫、冬嗣之子良房、又納女文德生清和、文德欲立長子惟喬、而憚良房遂立清和、則藤原氏之威懾人主、非一日又可知也、清和生九歲、卽位、良房以外祖攝政、其子基經廢陽成立、光孝關白萬機攝關之號、始此、基經二子時平忠平、忠平攝政於朱雀之朝、與其二子實賴師輔並列三公、於是乎有天慶之亂、冷泉二弟爲平守平、村上欲立爲平爲冷泉儲貳、而實賴等以其非藤原氏出、沮之、而立守平、是爲圓融、於是乎有安和之變、師輔三子、曰伊尹兼通兼家兼家三子、曰道隆道兼道長、皆兄弟爭政、伊尹女生花山兼家女生一條、故兼家令道兼、雖花山遜位、而以一條代之、是其最甚者也、後一條而下三帝皆道長女所生、是其最極寵榮者也、道長二子賴通教通、相繼執政、而賴通生師實、師實生忠實、忠實疎其長子忠通、而愛少子賴長、於是乎有保元之禍、忠通三子、基實基房兼實、基實生基通、基房生師家兼實、生良經、更執朝政於源平之際、其論議可觀者、獨有兼實他充位而已、其後一姓分爲五派、更爲攝關、而其進退皆不復關天下事、不足錄也、總之良房而下、奕葉秉鈞、大抵務營私門、不以國家休戚經心、而當其爭權、父子兄弟且不相保、奔競從諛、舉朝成風、宜乎大亂之基於是、而其終與王室俱衰共頽、徒存空名、不可不哀邪。

○按ズルニ藤原氏ノ常ニ帝室ノ外戚タルコト、數十代千年以上ニ涉レリ、故ニ其本宗支屬ノ相關聯セラルモノ、遽ニ認メ易カラズ、故ニ今略系ヲ造リ、以テ讀者ニ便ス、然レドモ鎌倉幕府以

一 太政大臣伊尹のおとゞは、贈皇后宮懷子皇后の父、花山院の御祖父、

一 太政大臣兼家の大臣は、皇太后詮子皇后并贈后皇后の父、一條天皇并三條天皇の御祖父、

一 太政大臣道長のおとゞは、皇太后宮彰子皇后上東門院皇太后宮皇后中宮皇后一條后皇后尚侍皇后

後朱はるのみやの御息所の御父、當代皇后一條并春宮皇后の御祖父におはします、こゝらの御中

に后三人ならびすゑて見たてまつらせ給ふ事は、入道殿皇后より外にさえさせ給はざめり、

〔大日本史皇后七十四〕蓋後世立后必出藤原氏門、他姓不得與焉、輔佐幼冲、秉持鈞衡、外戚之權日重而

宮闈之寵益隆、

〔葛峰文集皇后四十七〕甲子會紀

竊聞姬周之興、有任姒之助、劉漢之衰、有王莽之篡、然則皇家之外戚、不可不擇焉、錄足以誅蘇氏功、其威名冠百僚、淡海公彌揚家聲、仁明皇后者、藤公冬嗣之娘、生文德、所謂五條后是也、文德又納良房公之娘爲皇后、所謂染殿后是也、文德崩、而清和幼弱、良房以外祖之權攝政、任太政大臣、所謂忠仁公是也、清和又聘良房姪女以爲后、所謂二條后是也、基經者、后之兄也、且養於忠仁公而嗣其家、威望赫赫、所謂昭宣公是也、世祿世官之貴、雖源信源融之懿親、不能比肩、況於其餘廷臣乎、故廢陽成立、光孝之柄在其手、關白之號始於此、雖不及伊尹放太甲之訓、然何劣霍光廢昌邑立病己之大事故、光孝雖欲歷其權、而未能果、延及宇多、當此時、菅丞相起自微賤、文才拔羣、度量超人、類被選舉、遂拜三公、與時平同輔佐醍醐、藤菅勢不兩立、辛酉之革命、唯有善耀之先見、然菅公不悟、果有宰府之譴、嗚呼、命也、時平獨專、民具瞻焉、天子幼冲、恭己、上皇唯念佛、嫌髮、藤氏之威權過於王室、忠平繼時平之座、諸子皆顯、朝廷安靜、延喜之政、式爲後世之軌範、朱雀之世、東有將門之亂、西有純友之寇、所謂天道虧盈之戒、可不慎乎、村上天曆之政、後世雖有慕之者、自我見之、則有疵類也、延喜以來、倭歌之風日盛、而文學月衰矣、王室漸弱、而攝家彌強矣、可謂本朝之一變也、

皇世外戚

〔大鏡^{太七}太政大臣道長〕藤氏の御ありさまたぐひなくめでたし、おなじことのやうなれど、又つゞきを申べきなり、后宮御おや、みかぜのおはぢとなり給へるたぐひをこそはわかし申さめとて、

一 内大臣鎌足のおどゝの御女二所やがてみな天武天皇にたてまつり給へり、をどこ女みこたちおはしませど、みかぜどうぐうたゝせ給はざめり、

一 贈太政大臣不比等のおどゝの御女二所、ひとりの御女は、文武天皇の時の女御、^{宮みこむ}まね給へり、それを聖武天皇と申、御母をば宮子娘^{后今}原作光明皇と申き、いまひとりの御女^{宿媛}安はやがて御おひの聖武天皇に奉りて、女みこうみたてまつり給へるを、女帝にたてまつり給へるなり、たかのゝ女帝と申これなり、四十六代にあたり給ふ、これおりたまへるに、又みかぜひと^り仁^〇津をへだて、又四十八代にかへり給へるなり、母后を贈皇后と申す、まかれは不比等の大臣の御女二人ながら后におはすめれど、高野女帝の御母后は、贈皇后と申たるに、おはしませぬよに后に給へると見えたり、かるがゆゑに不比等大臣は、光明皇后、又贈皇后宮の御ちゝ聖武天皇并高野女帝の御おほぢ、^{后と見ゆ}皇^后と申さなり、聖武の御母もおはし、よに后に立給ひて、其御名を光明

- 一 贈太政大臣冬嗣のおどゝは、皇太后順子^{明〇后}仁の御父、文德天皇の御祖父、
- 一 太政大臣良房のおどゝは、皇太后宮明子^{德〇后}文の御父、清和天皇の御おほぢ、
- 一 贈太政大臣長良のおどゝは、皇太后宮高子^{和〇后}清の御父、陽成院の御祖父、
- 一 贈太政大臣總繼のおどゝは、贈皇太后宮澤子^{明〇后}仁の父、光孝天皇の御おほぢ、
- 一 内大臣高藤のおどゝは、皇太后宮胤子^{多〇后}宇の父、醍醐天皇の御おほぢ、
- 一 太政大臣基經のおどゝは、皇后宮穩子^{醍〇后}隆の父、朱雀天皇并村上帝の御祖父、
- 一 右大臣師輔のおどゝは、皇后宮安子^{上〇后}村の父、冷泉院并圓融院の御祖父、

のけて、前の殿家實の御むすめ、子長いまだをさなくておはするまゐり給ひにき、これはいたく御おぼえもなくて、三條后のみや淨土寺とかや引こもりてわたらせ給ふに、御せうそのみ日に千たびといふばかりかよひなぞして、世中すまじくおぼされながら、さすがに后だちはありつるを、ちゝの殿攝籙かはり給ひて、今の峰殿家東山なりかへり給ひぬれば、又姫君入内ありても、どの中宮はまかで給ひぬめづらしきがまゐり給へばとて、なぞかかうしもあながちならん、もろこしには三千人などもさふらひ給ひけるとこそつたへきくにも、まなくしからぬ心ちすれど、いかなるにかあらむ、のちにはおのゝ院號有て、三條殿の後は安喜門院中のたびまゐり給ひし殿の女御は、たかつかさの院とぞ聞えける、今めかしくすみなし給へり、御はらからの姫君もかたちよくおはする、びきこめがたしとて、内侍のかみになしたてまつり給ふ、おなじき三年七月五日、關白をば御太郎教實のおどやにゆづり聞え給ひて、わが御身は大殿とて、后宮の御おやなれば、思ひなしもやんことなさに、御子どもさへいみじうさかえ給ふさま、ためしなきはざなり、あづまの將軍經山のさす、源三井寺のちやうり、昭山科寺の別當、仁和寺の御室、法みなこの殿のさんだちにておはすれば、天下はさながらまじる人少う見えたり、【榮花物語三様々の他】このさきやうの大夫どの道長の御うへ、道長けしきだちてなやまじうおぼしたれば、御讀經御修法のそうどもをばさるものにて、まゐるしありとみえきこえたるそうたちめしあつめのゝまゐる、大どの父道長よりのみや後継家女より、いかんゝとある御せうそこひまなうつゝさたりさていみまゐるのゝまゐりつれど、いどたひらかにことにあたうもなやまぜ給はで、めでたき女ぎみ子彰むまれ給を、かならずきさきがねといみじきことにおぼしたれば、大どのよりも御よろこびたびゝきこえさせ給ふ、よろづいとかひあるおほんならひなり、

なりて、の上して、如父經宗ならばやと思ひけり、さて卿二位が夫にもよろこびて成にける程に、左大臣の事申けるは、大臣の下登むげにめづらしく、有べき事ならずとおぼしめきて、え申得ざりければ、この入内の事を、殿のむすめ參て後はかなふまじ、是まゐりて後は、殿のむすめ參る事は、例も道理もは、いかるまじければ、一日この本意どげばやと、卿二位して殿下に申うけゝり、殿は院[○]後[○]に申あはせられけるを、院はこの主上の御事をばよくおろして、東宮にたてゝおはします、脩明門院[○]子の太子[○]を位につけまゐらせたらん時、殿のむすめはまゐらせよかしと思召けり、人これを去らず、申あはせられける時、いさゝかの趣なごの有けるやらんとぞ人は推知しける、さてさりとて賴實の女を入内立后なご思ひさくにしてけり、殿はまぢさいはいおぼつかなく、當時はうら山しくもやおぼしけん[○]中[○]元久三年三月七日、やうもならぬ死にせられにけり[○]申さて故攝政の女はいよゝみなし子に成て、もろつ事ながひて、いかに人と思ひたりけれども、さやうに思召きさして有ける上に、春日大明神も、八幡大菩薩も、かく皇子誕生して、世も治り、又祖父の社稷のみち心に入たるさまは、一定佛神もあはれみてらるせ給ひけん、人皆思ひたる方のすゑとはる事もあるべければにや、承元三年三月十日十八にて、東宮[○]順[○]の御息所にまゐられにけり、せうとにて、今の左大將[○]家[○]おとなには遙かにまゐりて何事もてゝの殿には過たりとのみ人思ひたれば、めでたくしてまゐらせ給にける也[○]中[○]承元四年十一月廿五日に受禪の事ありけり、さて東宮のみやす所は、やがて承元五年[○]元[○]正月廿五日立后あり、

〔増鏡^三〕はかなくあけられて、[○]中[○]寛喜元年になりぬ、此程は光明峰寺殿[○]道[○]家又關白にておはす、この御むすめ[○]子[○]女御[○]河[○]にまゐり給ふ、世中めでたくはなやかなり、これよりさきに三條のおはさおと[○]子[○]の姫君[○]有[○]まゐり給ひて、さささだちあり、いみじう時のき給ひしをおし

ぼしき事、禁中の公事などおこしつゝ、攝録の初より諸卿に意見めしなごまて、記録所殊に執行
ひてあり、文治六年正月三日主上御元服なりければ、正月十一日によき日にて、上東門院の例に
叶て、女の入内思の如くどげられにけり。○中七年久建冬の比、事共出来にけり、攝録臣九條殿お
ひこめられ給ひぬ、關白をば近衛殿通基にかへしなして、中宮も内裏を出で給ひぬ、これは何事
ぞと云に、この賴朝が娘を内へまゐらせんの心ふかくつきてあるを、通親の大納言と云人、この
御めのとなりし刑部卿三位を妻にして、子ども生せたるをこゝ置たりしを、さらに我女まゐら
せんと云文かよはしけり。○中同八年七月十四日に、京へまゐらすべしと聞え、賴朝が女、久く
煩ひてうせにけり、京より實全法師と云驗者くだしたりしも、全しるまなし、賴朝それまでもゆ
ゆしく心さゝて、宜く成たりと披露してのぼせけるが、いまだ京へのぼりつかぬ先にうせぬる
よし聞えて、後京へいれりければ、祈殺して歸りたるにてをかしかりけり。○中賴朝この後京の
事ども聞て、猶次の女を具して上らんと聞えて、建久九年はすぐる程に。○中人思ひよらぬほ
ごの事にて、あさましき事出さぬ、同十年元正正月に、關東將軍朝賴所勞不快とかやほのかに
云し程に、やがて正月十一日出家して、同十三日にうせにけり。

【尊卑分脈】賴朝

女子聖女御宜智

【愚管抄】後京極殿

其藤原は、院鳥羽もいみじき關白攝政かなどよに御心になひて、よき事ま

たりとひしと、思召てありけり。○中攝政は主上御門御元服にあひて、てゝの殿實兼の例もちか

し、又昔の例共もわざとしたりんやうなれば、むすめおほくもちて、能保が聲になりて、いつしか
まうけられたりし嫡女子立を、又ならふ人もなく入内せんとて、院にも申つゝいとなまさせける

程に、卿二位子兼

ふかく申むねありけり、大相國實賴もどの妻の腹にをのこはなくて、女御代と

て、女子

をもちたりけるを、入内の心ざしふかく、又太政大臣におしなされて、左大臣にかへり

給者也、三月十四日辛卯、別記、

立后○多事

〔台記別記〕久安六年四月廿日丙寅、昨暮無溫氣、奉書攝政殿○藤原通忠、問御經營、又申養女○藤原伊通女皇子入

内之間、若有可參、可承其月日之狀、報狀曰、恩之狀喜悅承了、忿々無極、老心惘然、臨期可申歟、今夜入

内、世間以爲余必愁憤、然而中心無所愁憤、所然者、法皇○鳥羽上皇○崇徳二代、正妃之外、無納代女堀川

院以往、所迎不唯一人、加之生子蒙寵、不依他女有無也、此狀先日奏、法皇已了、而人慣近代、推疑結憤、

甚無其理○中略、廿一日丁卯、今夜執政養女自東三條入内、今日自伊通卿家參、東三條云々、所々殿

上侍臣前、攝政及大納言三人、中納言三人、參議三人、連軍云々○中略、六月廿二日丁卯、今日有立

后事○中略、未刻朝服、此間攝政殿下參入、余○賴朝著右仗于時皇居、四條堀院、令敷膝突、使藏人辨範家申殿曰、

一昨令申、可參入之由、而昨日右大臣行召仰事之由、只今承之、若愚臣不可行歟、隨處分欲罷退、報命

曰、聞依疾坐、宇治之由、仰右大臣而已、被參入、早可催行于十五日、白宇治、報命之趣、頗以爲奇、即召大外記師業朝臣未

參、召少外記中原師直、問諸司具否、申未具之狀、仰可加催之由、良久範宗來傳勅曰、以女御從三位藤

原朝臣爲皇后、任例作宣命余聞其名、答曰、呈名、即召大内記長光未參、良久參入、仰曰、以女御從三位藤

原朝臣爲皇后、作進宣命、須臾持參宣命、莫使範宗奏之、移刻返給、賜大内記令清書○下略

〔愚管抄六〕九條の右大臣○兼は、中略、嫡子の良通大納言大將○中略、その妹に女子のまゝ同じく最

愛なるおはしけり、今の宜秋門院○任なり、それを昔の上東門院の例にかなひ、當今○後醍醐天皇御元服

ちかきにあり、八にならせ給十一にて御元服あらんずらん、是を入内立后せんと思ふ心ふか

けれど、法皇○後白河も御出家の後なれど、丹後○高階が腹に女王おはす、頼朝も女子あんななり、思さ

まにもかなはじと思て、又この本意とくまじくば、たゞ出家をこの中陰のはてにまてんと思て、

二心なく祈請せさせられけるに、又あらたにとげんする告の有ければ、思ひのぞめて善政とお

禪閣命曰、參院

白川北殿、在、大炊御門末

、陪門邊、今朝自宇治奉書其報如此、即以披見其狀曰、抑留女御立后、以今

入内人立后事、聊不存之由、攝政所申也、又皇太后可有院號云々、以女御立后故、歟后位皆闕、先例未

聞立后事、定被仰下、歟此間南向、讀心經一百八卷奉春日修、諷誦於三箇寺、六角堂、皮、清水寺、用三位衣、寺別、

戌時許人傳、禪閣依召參御前者、頃之禪閣過余家、駐駕召余、即候參上、語曰、依召參御前、上面不正、若

心不悅、歟余泣々奉請立后、其狀曰、左大臣性急、事若不成、必欲遁世、齡過七旬、將失成長子息、縱無先

例、以老僧故許之、而況堀河院母后例在近乎、即法皇使朝隆朝臣仰此狀於大相、不仰早可宣下之由、

即幸鳥羽了、疑非唯大相抑留、亦是法皇不進給、然者以不仰可宣下之狀、及不侍使歸、早幸鳥羽也、須

臾朝隆朝臣參、車下申曰、大相報奏曰、自本可宣下者、承遣仰可宣下之由、所申也云々、頃先奏院而密

所申也、即朝隆參鳥羽禪閣曰、事猶不成、今夜欲參御之狀、禪閣即參高陽院御在所、余歸入陪不動尊

御前、更深、睡眠、曉鐘動後、大舍人助源雅亮驚之、告頭辨、朝隆來由、即服直衣冠、此間禪閣賜書狀被仰、

喜悅不可言、及今日不問日之吉凶、可定雜事之由、出口、遂謁朝隆朝臣語曰、參鳥羽奏大相國復命、勅

曰、雖不知先例、入道相國所請甚切、無問舊跡、必可許之、參大相府、申此日有可宣下之報、詣禪閣申之、

被仰可仰左丞相之由、故答只今參內可承勅之由、朝隆密問云、仰本家之外宣上、聊歟、答曰、唯仰本家、

無仰別左此間、右大將衛伏地喜悅、即參高陽院、上御謁禪閣于時、禪閣奉書奏悅曰、法皇須臾參內、于

時東方漸明、昨今兩日、泰親行靈所被、女御立、后、祈立

禪閣御書

只今朝隆來申立后之由、恐悅趣無極、思給者也、凡遣申無方、次第沙汰早々可侍也、今夜上卿や可入侍らん、只勅使許可來侍歟、老後忘却無治術侍也、抑今度事、老僧身在世侍、ん事、今夜許トコソ思給つれ、猶春日大明神新に御口あなりにて、筆も不破執侍也、おさなくおはするに、いとめでたく御坐候けるすくせかなどこそうつしくおぼえ侍れ、我上いかにうれしくおぼすらん、押量思

札之旨似事已成未蒙宣旨中心奇之不聞事實重啓十六日唯告有便宣下之由了十六日發亥此日禪閣仰曰女院返報曰院仰曰可宣下之由仰太政大臣了未聞定日云々若上旨不快歟有憚重奏故申曰此事若不成臣[○]願將通世禪閣涕泣傳聞今日大相府養女[○]叙從三位大相參內奏慶云云廿日丁卯此夜招左衛門尉季賴^{法皇}奏立后事以此事遲留今入內人先立后臣將通世之狀^訓書狀廿一日戊辰三位又參內入夜季賴復命曰宣使頭藏人等奏請^手重奏曰頭藏人以聞必可許之可從詔命若不然爲天下所笑焉此言無御報一昨日使季賴奏法皇之時刻使秦親占之其占如此昨日戌時思食事成否如何

占今月廿日丁卯時加戌大衝臨丁爲用將天空中神后玄武終勝光六合御行年戌上河魁天后卦遇伏吟龍戰三交

推之可和叶歟期件日以後廿五日戊己壬癸日也

久安六年二月廿一日

雅樂頭安倍泰親

廿三日庚午禪閣上書法皇請立后其詞甚切以年過七旬欲失大臣以上子息古今未聞君憐老僧早可下宣旨之狀辰時余奉書美福門院其詞甚切及法皇已廢畏小臣歟報狀曰法皇曰使頭藏人奏若自宇治奏請之時可觸可宣下之狀於太政大臣者午刻美福門院賜書^白傳法皇詔曰只今自宇治奉書狀所請甚切因之早可宣下之由可仰太政大臣者啓懇悅之餘已忘東西之由又恐悅之由奉書奏法皇報曰今朝自宇治以懇切之詞兩度奏請是以早御沙汰之由仰太政大臣已了定有沙汰歟何日可被宣下事哉復奏曰今日可被宣下仍只今參內可得勅使者報曰今日可宣下之狀將仰太政大臣抑以宇治書狀遣太政大臣第仰可宣下之由而稱無先例不肯下朕已失計矣重奏今夜可被宣下之由此得無御報即使盛憲中詔趣於宇治^訓頌之自宇治贈法皇報書披見之處雖有可沙汰之由仰攝政之文似無一決廿四日辛未午刻盛憲歸來曰禪閣愁歎尤甚已及涕泣今聞出京申刻清種傳

重使秦親占其占如此申歲女今日申時有聞事吉凶如可

久安六年二月十一日

占今日戊午時加申傳透臨午爲用將白虎中河魁玄武終神后天后御行年戌上神后天后封遇聯茹推之當時雖驚事御向後可有御慶賀乎

雅樂頭安都秦親

十二日己未早朝問法皇報詔之趣於太政大臣有重可奏之報不告詔旨是以密上書問法皇法皇手書曰太政大臣手自勘申先例其例下賜一見返奏非執柄人女不立后之狀朕有所憚雖許彼旨入道

相國請此故以彼所請達太政大臣有便宜歟朕聊無抑留之意者詔旨巨細不得具奏主稅允貞俊曰法皇近臣

顯達季範等曰禪閣實忠出京此事早成矣以詔趣及近臣所告之狀申宇治又示出御可勸進之由於

播磨禪閣丑刻禪閣出御駐駕門下大炊暫以交語遲明參仰高陽院御在所土御十三日庚申辰刻

參高陽院午刻禪閣上書法皇請命曰可蒙立后宣旨之狀奏聞宣下將還宇治之由勘制

先例上東門院入內後冷泉圓融母后堀河院母后非等也僞奏依高陽院病參入由又書同趣

德朝隆朝臣中辨左送大相府曰朝隆爲大相使持參此書於院隨許可宣下矣禪閣曰美福門院故法皇

所愛也奉書啓彼院此事早成對曰雖事甚切恐有諂諛之名禪閣曰已爲國母何有諂諛則奉書憑親

請之求曾奉書今申刻法皇報詔來曰早可仰下之狀可示攝政者也同刻美福門院報書自到來曰以

此旨奏聞仰曰遣自宇治所上之書狀於攝政第示可宣下之由也次禪閣上書法皇美福門院奏恐悅

由余上書美福門院啓聞由戊刻朝隆朝臣參入申曰以御書獻大相府有可奏法皇之報即奏御書法

皇勅曰宜依先例故無可宣下之仰即詣大相府申此趣仰曰可申禪閣矣禪閣示余曰朝隆所告之詔

旨與御書不同尤可傾奇今夜重奏非無所憚不如廻思慮後日復奏余諾之禪閣入御宇治余歸家炊

十四日辛酉此日禪閣賜書曰昨日恐悅由奏兩院院無報詔女院美福返報曰吾亦甚悅云々報

略いまは小一條いかでつくりたてんとおぼしめす、御門もいまは御はいどげたる御心ちせさせ給らんかし、かくよろづにめでたき御ありさなれども、皇后宮にはたゞおぼつかなさのみこそは、つさせぬことにおぼしめすらめ、同じ御心にやおぼしめしけん内より、

うちはへておぼつかなさをもよにおぼめくみともなりぬべきかなとあり、かへしに、
つゆばかりあはれをしらん人もがな、おぼつかなさをもいかにと、

〔台記〕久安六年二月七日甲寅、此日立后事奏院、（鳥羽）依有伊通卿女后呈于入内之聞也、有可依先例之報詔、又有可取太政大臣（藤原）忠通處分之文、八日乙卯、此日立后事請大相國報可奏之狀、入夜間、大相國奏否於法皇、報詔曰、是夕太政大臣使範家奏公書狀、報任例可行之由了、以昨日法皇報詔到來、時刻使泰親占成否、其占如此、此事成否如何、

占今月七日甲寅時加酉、天恩臨卯爲用、將六合、中太一勾陳、終勝先青龍、御行年戌上徵明大陰、卦遇聯苑、

推之可相叶乎、期件日以後卅日内、及來三月四月七月節、中置丙丁壬癸日也、

久安六年二月八日

雅樂頭安倍泰親

九日丙辰、此日問法皇許否於大相公、其報狀有重可奏文、不示許否、參院之時間、範家答云、大相公使範家奏封書上勅曰、宣勘先例行之者、即書其旨、送大相府云々、十日丁巳、入夜與三位（藤原）賴長

俱參内宿候、上書法皇、奏大相公不示詔旨之由、手詔曰、勘例使範家奏之、大相公經營人内事、太以不

釋、故余復奏曰、唯庶幾我女御立后、聊無愁恫、入内之口矣、入夜勘入内後早立后之例、（上東門、四條宮）

門院（子侍）招範家付之、十一日戊午、未刻自内退出、入夜有行幸（近衛）御力（近衛）、今夜大相公迎伊通卿女爲子、

門院（美子）即定入内雜事云々、或曰、其入内大相國爲張本、或曰、美賴門院爲張本、法皇又許之、許爲大

相爲張本、此日大相公使範家奏余所勘中之例、法皇（加封）法皇有報書云々、以範家自殿參院之時刻、

る程に大殿の御心なにごともあさなましきまで人の心のうちをくませ給により、しばし参らせ給て、こゝらのみやたちのおはしをすに、宣耀殿のかくておはしをすいとふびんなることに侍り、はやう此御事をこそせさせたまはめとそうせさせ給へば、うへこゝにもさは思ふを、この殿上のをのこきものむかし物がたりなせおのおのいふをきけば、うせねりなせのむすめもむかしはきさきにむけり、いせも中ごろも納言のむすめのきさきにむたるなんなきなせいふをば、いかはすべからんどこそさけとのたまはすれば、ひがごと候なり、いかでかさらば故大將^時をこそは贈大臣の宣旨をくださせ給はめとそうせさせ給へば、さべきやうにおこなひ給べしとの給はすれば、うけ給はらせ給て、官におはせと給はすさべき神とあらん日をばなちて、よろしき日して、小一條の大將それがしの朝臣、贈太政大臣になして、かのはかに宣命よむべしとの給はす、辨うけ給ぬ、四月にどころせころのまのりはて、よき日して、かの大將の御はかに勅使、だりてやがて修理大夫そひてものすべくあれば、かの君もいでたちまわり給よき御子もたまひて、故大將のかくさかゆき給ふをぞよの人めでたきことに申ける、かの御いもうどの宣耀殿の女御^女芳村上の先帝のいみじきものに思ひきこえさせ給ければ、女御にてやみ給にさをとこみやひとりうみ給へりしかども、そのみやかしこき御なかりより出給へるとも見え給はず、いみじきまれものにてやませ給ひにける、その小一條のおと^男師の御むまこにて、この宮のかうおはしをす事世にめでたき事に申おもへり、さて四月^元長和廿八日きさきに給ぬ、^代皇后宮と聞えさす大夫なせにはのぞむ人もことになきにや、さやうのけしきやきこしめしける、故關白殿^隆のいつもの中納言^家隆なり給ぬ、宮づかさなせこほひのぞむ人なく、物はなやかになせこそなけれ、よろづたゝおなじことなり、これにつけてもあなめでたや、女の御さいはれのたらしには、此宮をこそまたてまつらめなせ、さうにくきまで世には申す中

ひつゝさこえさせ給へれど、年比にもならせ給ぬ、みやたちにおはしませす宣耀殿こそまづ
さやうにはおはしませさめ、内侍のかみの御事はおのづから心のせいになせうせさせ給へば、
いどけうなき御心也、この世をふさはしからず思ひたせへるよりまじきとの給はすれば、さは
よき日してこそは宣旨もくださせ給べかねれど、そうして、出させ給てには、この御事ども
の御よういあり、まに事もそれにさはり目なぞのべさせ給、べき御世の有さまならねば、二月十
四日きさきにゐさせ給とて、中宮とさこえさす、いそぎたゝせ給ぬ、その日になりぬれば、つねの
ことながら、いみじくやむさどなくめでたし、中御とし十九ばかりにぞおはしませしける、参
らせ給て三四年ばかりにぞなると給ぬらんかしとぞおしはかりまうす人々あり、大宮影千
は十二にてまゐらせ給て、十三にてこそきさきにゐさせ給けれ、されど此御前はすこしおどな
ひさせ給にけり、中やがて大騒いどどうせさせ給べし、大夫には大殿の御はらからのよろづ
のあにぎみの大納言なり給、おほかたみやづかさなきみなえりなさせ給、かくていどめでたう
ふたどころさしつゝさておはしませすを、よのたうしにめづらくなることにさこえさす、うちに
はいまは宣耀殿の女御の御ことを、いかでかとおぼしめさせ、すがやかに殿にはまうさせ給は
ぬ程に、宣耀殿にはまにともおぼしめしたゝぬ程に、大かたの女房のえんゝはつきて、さど人
のおもひのまゝにものをいひおもふは、いかにかにおまへに覺しませすらん、あさあしき世中
にはべりや、これはさべきこといはず、いどさかしがほにとふりひまゐらす人々なせある
を、此ふみをも又かうなん、それければ申するまじかりたり申す人を、女御殿はなせか、かうむづか
しいふん、だどいふ人ありども、かたうでもおれかし、こゝにはよろづ思ひたえて、いまは
たゞ後の世の有さまのみこそわりなけれなせ、物々やうにおはせざるれば、さこそあれ御心
のながまを給へれば、物のあはれありさまをもあらせ給はぬとさかしうさこえさせける、かゝ

史奉親朝臣云、除目清書可被奉左府歟云云、除目專不奉也、奉親至愚之又至愚也、奉親朝臣參八省不參內以下、庸史令奉仕御裝束、是極冷淡事也、敦頼朝臣所申也。○中後聞諸卿候東三條之間、喚使申可參內之由、打手同音喚其後、嘲哂無極、大藏卿執石打召使兩三度云云、狂亂歟、有神咎歟、有天譴歟、可謂至愚者也、廿八日乙丑、新后以亮爲任朝臣、被仰昨日行事之悅、參內一兩卿相相共參中宮御方、左府卿相數多被候、思昨日事、彌知王道弱、臣威強。○中今夜自皇太后宮退出之間、資平侍事後云、今日候內陪膳、仰云、近可祇候者、仍進候御臺盤下、仰云、昨日立后事、無止思事也、而始自大臣諸卿不參、大將藤原朝臣應召即參入、行件大事、悅思無極、久在東宮、不知天下、今適登極、可任意也、不然之事、愚頑也、有可然之時、可云合雜事之由、可傳仰此事、汝不外漏、又大將不可漏之人也、汝有所見、仍所傳仰也、仰了早起入給者、余戒云、努々不可談妻子、但明日必候陪膳、只可奏恐由也、希有仰事也、卅日丁卯、右衛門督示送云、依召今朝參內、被仰立后日事、爲公大厭、不爲皇后、上達部冷淡、不可仰盡者、後日早參行事、尤悅思、可傳仰者、且以資平令仰者、食祿之身、雖背王命、猶准之責、日夕所歎、五月一日戊辰、參內。○中右衛門督云、昨今候御前被仰云、立后事、右大將應召參入行事、一所悅思、一伊止保之久、奈武思、有可憚恐、諸卿不參、猶參執行、可傳仰此由者、奏以恐申之由、亦談云、左大臣等可爲極奇怪也、諸卿同心失朝威、歎思不少、依如此事、命意欲保、頗有所思、食歟者、申刻退出、

【榮花物語】日語十世中にはけんあすきさきたせ給べしとのみいふは、かんの殿女、○藤原道長三條后姪子にや、また宣耀殿三條后姪子女にやさも申めり、かゝる程に宣耀殿にうち○三より

春がすみ野邊にたつらんと思へどもおぼつかなきをへだてつるかな、ときこえさせ給へれば御かへし、

かすむめるそらのけしきはそれながらわが身ひとつのあらずもあるかな、と聞えさせ給へれば、おはれとおぼしめさる。○中内にはかんの殿のささきにゐさせ給へき御事を、殿長○道長にた

參歟。天無二日。土無二主。仍不懼其害耳。予○實令申云。從去夜聊有所勞。相扶可參人。已翹以前難參

入也。○中略

參內○未一諸卿不參。大外記敦賴朝臣云。南殿御裝束及所々屏幃皆立。今日事上卿未被仰

下之前。裝束使奉仕。左中辨不參。又史泰親朝臣不參。如云々者。泰親朝臣從宅仰遣下臈史。所令奉仕

也。泰親親候左府者也。若有所承歟者。參入由以資平○實平手。令示頭辨。余著仗座。小庭前立屏幃。宜

陽殿西壇同曳。小時頭辨出陣云。今日可有立后事。而爲令行其事。昨日差藏人在平仰遣右大臣許令

奏云。日來有所勞。不可參入。但無承引之人者。扶可參入者。次被仰內大臣。被申物忌由。仍所仰下臣也

者。此間藏人在平出陣。居頭辨後。似可傳仰宣旨事。依奇推示之令退。頭辨同指示而已。頭辨云。先可奏

參入。由者即參上殿上相替。在平來。編旨云。所司具乎者。答云。初無所承何事乎。如何云。今朝差內豎令

申云。大臣不可被參。今日立后內辨可奉仕。又未廻可有宣命事。早可參入者。答云。內辨事不承。內豎亦

仰可參入之由。至今有勅。可召仰之由奏聞了。○中略

其後頭辨仰云。宣耀殿女御可爲皇后之宣命。可令

作者。余問云。尊中宮爲皇后。以女御可爲中宮歟。只可爲皇后者。問云。御名娥子○藤原時女歟。云然也。者又

云。位從五位下者。內記資信參入。仰從五位下藤原娥子可爲皇后之宣命事。但中宮立給之宣命相同

歟。亦宣命前々立后時。無相違爲例。狀須先召見前々宣命。莫然而內々有所見。仍直仰了。可見合由仰

敦賴朝臣。予移南座。內記進宣命草。無事誤。見了奉左相府。時廻多移不歸。參若是無申通之人歟。頭辨

并敦賴朝臣同成此疑。相府立后事。頻有妨遏之故也。萬人致怖畏。按察中納言○藤原右衛門督○平修

理大夫○通任

等參入。自餘卿相候中宮○道長女妍子○東三條。召使令申諸卿可參內之由。召出卿相前。口

々嘲哂罵辱。不可敢云。似無公事。敦賴朝臣彈指敦賴朝臣云。左府有召然而寄事。左右豎不參者。行了

今日事之後。可參入之由仰之。今夜戌刻。東三條中宮入給內裏。萬人歸此事。忽諸立后事。宣命版數度

催後。中務同式部臨晚立標。今日事猶以承投巖。是依相府氣色也。○中略

殿上人一人不參役。送五位

五六人許歟。其外不見。○中略見度々例大床子師子形。自內被奉而左府妨遏。仍本宮令造云々。後日聞

〔大鏡三太政大臣頼朝〕をど君只今按察大納言公任と申す、略中かの大納言殿、無心の事一度どの

たまへるや、御いもうどの四條の宮子〇選后にたゞせ給ひてはじめてうちへ入たまふに、西洞院

のぼりにおはしませば、東三條のまへをわたらせ給ふに、大入道殿〇藤原家〇藤原も故女院子〇證もむね

いたくおぼしめしけるに、按察大納言殿は后の御せうにて、御心ちよくおぼされけるまへに、

御馬をひかへて、この女御子〇證はいつか后にたち給ふらんと、うち見いれてのたまへりけるを、

殿をはじめてたてまつりて、其御ぞうやすからずとおぼしけれど、をど宮〇一條おはしませば、た

けくぞよその人々もやくなくもの給ふかなどさゝ給ふ、一條院位につかせ給へば、又女御后に

たゞせ給ひて内に入給ふに、この大納言啓のすけにつかうまつり給ふに出車よりあぶぎをさ

し出して、やゝ物申さんと女房のきこえければ、何事にかとてうちより給へるに、辨内侍かはを

さしひだして、御いもうどのすはらの后は、いづくにかおはすると聞えかけたりけるに、先年の

事をおもひおかれたるなりけり、みづからだにいかにとおぼえつる事なれば道理なり、なくな

りぬる身にこそとおぼえしかど、その給ひけれ、されど人がらよろづによくなり給ひぬれば、

ことにふれてすてられ給はず、かのないしのとがなるにてやみにさ、

〔小右記〕寛弘九年〇長和元年四月十六日癸丑、入夜資平來云、右衛門督〇藤原實資〇實資來云、昨參内候御前、〇三

被仰難事次云、左大臣〇藤原為我〇藤原為我無禮尤甚、此一兩日寢食不例、頗有愁思、必彼天責歟、太不安事也

者、所被仰之趣、極以多々爲相府御氣色不宜、其次被仰云、右大將〇實資〇我方人〇爾云云、召可然之人云、

合雜事、亦有何事哉者、十八日乙卯、入夜修理大夫來談雜事、多立后間雜事也、少々事相示了、四條

宮立給間記、又々撰出可送之由同示了、事多有鬱氣、廿六日癸亥、院作示送云、明日立后事、左相府

不可被行、仍今日差藏人、可被仰遣右相府〇藤原顯光〇藤原顯光者、廿七日甲子、内豎來云、先式部仰云、大臣三人

〇藤原顯光〇藤原顯光同、有障不參、已剋以前可參内者、不知何事所推量者、若今日立后事、歟、憚左相府所不被

しうて、一のみこむされ給へるむめつ度をおきて、このにようこの給はんを世人いかにばいひおもふべからんと、人がたきはとらぬこそよけれなせおぼしつゝ、すぐし給へば、なせをかむめつ度は、いまはどありともかゝりども、かならずのきさきなり、世もさだめなきに、このにようこのことをこそいそがれめどつねにの給はすれば、うれしうて人えれずおぼしへそぐほきに、こどしもたちぬれば、くちをかう覺しめず、かゝることゝももりきこえて、右のおどやうちにまゐらせ給ことかたし、にようこの御はらからのきんだちなども、さうでさ給はず、にようこのこゝろどけたる御けしきもなければ、一ほんのみや、世にいふことをもりと給て、さやうに覺したるにこそと、よを心づきなくおぼしきこえさせ給べし。○中かゝるほかにこどしは天元五年になりぬ、三月十一日中ぐうたちたまはんとて、おほきおどやいそぎさわがせ給、これにつけても、右のおどやあさましうのみよろづきこしめさるゝほかにささきたゝせ給、いへばおろかにめでたし、おほきおどやのえ給ふもことわりなり、みかどのおほんこゝろおきてを、世人もめもあやにあさましきことに申おもへり、一のみこおはするにようこそをおきながら、かくみこもおはせぬにようこの、ささきにぬ給ひぬることやすからぬことに世人なやみ申て、すばらの、ささきとぞつけたてまつりける、されどかくてゐさせ給ぬるのみこそめでたけれ、東三條のおどやいのちあらばとは覺しながら、なほわかすあさましきことに覺しめず、

〔大日本史贊藪三〕藤原實賴及子弟藤原在衡傳贊

贊曰、咸順盛則宗室衰、權臣重則朝廷輕、此必然之勢也、兼通忘友于之誼、與兼家相軋、欲使賴忠爲關白、故奪源兼明之左相、處間散之地、而授大將於清時、若探囊中物、此與處從史得照義節度使何異、但從史猶有中使傳旨、而兼通則直授之、而無所顧、主上拱默、聽其所爲、群從子弟皆以性命博美官、世方以榮達貴顯爲賢、而材能操履無所稱道。○中奔競之風、傷化壞俗、一至於此、可勝浩歎哉、

しきこえ給ふもむかしの御なげなさとおもひ給にこそはと、こどわりにおぼさる。東三でう
のにようこはむめつばにすませ給ふ、おほんありさなあいぎやうづきけちかくうつくしうお
はします。略中 そのふゆくわんばくせの、ひめぎみうちにまゐらせたてまつり給、よのひと
ころにおはしませば、いみまうめでたきうちに、どの、おほんありさななほもおくふかくこゝ
ろにくゝおはします、むめつばは、おほかたのおほん心ありさなけちかくをかしくおはします
は、このたびのにようこは、すこし御おぼえのはせやいかにとみえきこゆれど、たゞいまの御あ
りさまにうへもまたがはせ給へば、おろかならずおもひきこえさせ給なるべし、いかにしたる
ことにか、かゝるはせにむめつばいならずなやましげにおぼしたれば、ちゝおどゝいかにい
かにとおそろしうおもひきこえさせ給へば、たゞにもおはしませぬなりけり、よもわづらはし
ければ、一二月はまのばせ給へど、さりとてかくれあべきことならねば、三月にてそうさせ給
に、みかどいみじううれしうおぼしめさるべし。略中 くわんばくせの、いとよの中をむすぼれ、
すゝろはしくおぼさるべし、ざばれとありともかゝりども、わがあらばにようこをばきさきに
もすゑたてまつりてんど、おぼしめすべし、はかなくて、天元三年かのえたつのとしになりぬ。略中
略 六月一日どらのどきに、えもいはぬをどこみこ。略一 たひらかにいさゝかなやませ給ふはど
もなくうまれさせ給へり。略中 東三でうのみかどのわたりには、としころだにたはやすく人わ
たらざりつるに、ぬんのみやたちのみどころ。略三條及尊親王 おはしますすだにおろかならぬどの
うちを、まいて今上一宮のおはしませば、いとこどわりにて、いづれの人もよろづにまゐりさ
わく。略中 かくてくわんばくせの、にようこさふらはせ給へど、おほんはらみのけなし、おどゝ
いみじうくちをしう覺しなげくべし。略中 みかどおほきおどゝの御こゝろにたがはせ給はと
どおぼしめして、このにようこささきにすゑたてまつらんと、給はすれど、おどゝなまつゝま

なりけり、御心のまゝにだにあらば、いみじきつくし九國までもとおぼせど、あやまちなければなりけり。○中 かいゝるほかに堀河の御こゝちいどやおもひて、たのもしげなきよしを世にまうす、さいつころうちに參らせ給て、東三條の大將をばなくなし奉り給てき、いまひとたびにて内にまゐらせ給ひて、よろづをそうしかためていでさせ給にけり、なに事ならんとゆかしければ、さだおとなし、かくて十一月四日准三宮のくらゐにならせ給ぬ、おなじ月八日うせ給ぬ、おはんとし五十三なり、忠義公と御いみなをきこゆ、あはれにいみじ、かくいくばくもおはし、まじりけるに、東三でうの大なごんをあさましうなげかせたてまつり給ひけるも心うし、をのゝみやのよりたゞのおどやに、よはゆづるべきよし一日そうし給しかば、そのまゝにどみかど覺しめして、おなじ月の十一日くわんばくのせんじかうふり給て、よの中みなうつりぬ、あさましくおもはずなることによに申思へり。○中 かくて年もかはりぬ。○貞元三年 左のおどや。○頼 御さまいどくめでたし、おほひめきみ。○子 遊をいかで内にまゐらせたてまつらんとおぼす、はかなくてつき日もすぎてふゆになりぬ、ねんがうかはりて天元元年といふ、十月二日除目ありて、くわんばくせの太じやう大じんにならせ給ぬ。○中 東三でうせのゝつみもおはせぬを、かくあやしくておはする心えぬことなれば、おほきおどやたびくそうし給て、やがてこのたびう大じんになり給ぬ、これはたゞふつまんのま給ふとおぼさるべし、内には中ぐうのおはしませば、たれもおぼしはゝかれど、ほりかはのおほん心おきてのあさましく心づきなさに、東三でうのおどせ中ぐうにおぢたてまつり給はず、中姫君まゐらせたてまつり給、おほどのゝひめきみをこそ、まづとおぼしつれど、ほりかはどのゝおほんこゝろをおぼしはゝかるほかに、みぎのおどやはつゝましからず覺したちてまゐらせたてまつり給、ことわりにみえたり、まゐらせ給へるかひありて、たゞいまはいどきにおはします、中ぐうをかくつゝましからずないがしろにもてな

を^干〇題どきこゆるは、東三でうの大しやうの御ひめきみなり、ござなつよりたゞにもおはし
まざりけるを、二三月ばかりにあたらせ給ひて、その御いのりなきいみじうせさせ給を、大ど
のきこしめして、東三でうの大しやうは、ぬん^〇冷のによろこ、をどこみこみ給へ、よのなかま
へんどこそいふなれなきに、くきことをさへ、たまはせければ、むつかしうわづらはしど
おぼしなかり、さりとてまかせきこえさすべきことならねば、いみじういのりさわがせ給ひけ
り、さてやよひばかりにいとめでたきをどこみこ^〇三むまれ給へり、ぬんいどものぐるほしき
おはん心も、れいざまにおはしをすどきは、いどうれしきことにおぼしめして、よろづにま
つかひきこえさせ給けり、おほきおどきこしめして、わはれうでたしや、東三でうの大しやう
は、ぬんの二宮えたてまつりて、おもひたっけんけしきおもふこそめでたけれなど、いどをこがま
しげにおぼしの給を、大しやうどのは、あやしうあやくなる心つい給へる人にこそとやすか
らずにおぼしける^〇申かゝるほどに大どのおぼすやう、よの中もはかなきに、いかでこのうだ
い^〇ぬん頼いすこしなしあけて、わがかはりのそくをもゆづらんと覺したちて、たゞいまの
さだい^〇ぬん兼明のおどきどきこゆる、えんぎのみかど^〇醜のおほん十六のみやはおはします、
それおほんこゝちなやましげなりどきこしめして、もとのみになしたてまつらせたまひつ、
さてさだい^〇ぬんには、小野宮のよりたゞのおどきをなしたてまつり給ひつ、^〇申みかどはほり
かはの院におはしなされば、われはなやましどてさとおはしますに、わりなくて参らせ給
て、この東三條の大將のふのうを奏し給て、かゝる人はよにありては、おほやけの御ために大事
いでき侍りなむ、かやうの事はいままめたるこそよけれなきそうし給て、貞元二年十月十一日
大納言の大將をとり奉り給て、治部卿になしたてまつり給つ、無官の定になしきこえまほしけ
れど、さすがにその事とさしたることのなければ、おぼしあまりてかくまでもなし聞え給へる

〔日本後紀^{桓武}〕延暦廿三年四月辛未、中納言從三位和朝臣家麻呂奏、贈從二位大納言家麻呂贈正一位高野朝臣弟嗣之孫也、其先百濟國人也、爲人木訥無才學、以帝外戚特被擢進、蕃人入相府自此始焉、可謂人位有餘、天爵不足、其雖居貴職、逢故人者、不嫌其賤、握手相語、見者感焉、時年七十一、

〔大日本史贊載〕藤原良房及子孫傳贊

贊曰、良房相業雖不多見、而文德帝期以肅何、則規模微猷、必有可觀者、^{而中}而奕世昌熾、一門不知其幾、后外戚之盛實基于此矣、仲平不履星變而欲子姪之久職、忠平能全交誼而反乃兄^時之所爲、皆有長者之風焉、

〔大鏡^三

太政大臣實賴〕これたゞひらのおどゞの一男におはします、小野宮のおどゞと申き、御母寛

平法皇^多字

の御むすめ^子、^朝大臣位にて二十七年天下執行攝政、圖白し給ひて、二十年ばかりや

おはしけん、^中大か何事にも有職に、御心うるはしく御はします事、よのつねの人の本にぞひかれさせ給ふ、をのゝみやの有おもてには、御もどゞりはなちていでさせ給ふ事なかりき、そのゆゑはいなりのすぎのあらはにみゆれば、明神御覽すらんに、いかでかなりげにてはいで、^との給はせていみじくつゝしませ給ふに、おのづからおぼしむすれぬるをりは、御袖をかつかせ給ひて、おどろささわがせ給へる、このおどゞの御女^子、^迷ぞ、女御にたゝせ給ひにき、村上の御時にや、たしかにおぼえ侍らず、

〔續世繼^七

のゆかり〕太政大臣雅實のおどゞと申しは、中宮^{白河}賢子のひとつ御はらからにて、六條

の右のおどゞ^{顯房}の太郎におはしき、^{略中}こがのおほきおどゞと申き、いと御身のさえなぞは

おはせざりしかぜ、よにおもくおもはれたる人にぞおはせし、ちゝおどゞわがななる御心にて、ひがゝしきこともまたなひけるにも、このおどゞなむり給ければとゞなりたなひけり、白河院もは、ぢさせ給へりけるとこそきこえ侍りしか、

ふがくのもどひぎよれうまやくはの翫物おそらくはていけつも仙洞も、これにはすぎじとぞみえし。

〔恩管抄〕九條殿

兼實

源

は、攝籙本意にかなひて物もなかりし、興福寺南圓堂の御本尊不空羂索

等丈六佛像、大伽藍、東大寺とはなは並べて作られけり、同

久

建

五年九月廿二日興福寺供養也、甚

雨なりけり、前の日殿は春日詣せられけり、中納言以下騎馬と聞えき、御堂

道

の

御時より始ま

れる例にや、あまりなる事なりと人思ひけり。

〔増鏡

六

の

雪

〕春

すぎ

夏

たけ

年

さりと

しき

たれば、

康元

元年

にも

なりに

けり、

大

き

おと

と

源

氏の

第二

の御

むすめ

后

深草

女御

にな

り給ふ、

女院

后

嵯峨

も御

はら

から

な

れば

す

く

し給

へる

程

なれど、

公

子

時

二年

二十四

天皇

かゝる

ため

しは

あ

また

侍

るべし、

中

かく

て

こ

とし

は

く

れぬ、

正元

元年

い

つ

し

か

后

に

た

ち

給ふ、

た

ゝ

人

の

御

むすめ

の、

か

く

后國母

に

て

た

ち

つ

き

さ

ふ

ら

ひ

給

へる

ため

し

ま

れ

に

や

あ

ら

む、

お

ど

ゝ

の

御

さ

か

え

な

め

り、

御

子

ふ

た

り

大

臣

に

て

おは

す

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

い

き

は

ひ

の

め

で

た

さ

は

め

づ

ら

か

な

る

程

に

ぞ

侍

りし、

后國母

の

御

お

や、

御

門

の

御

お

は

ち

に

て、

ま

こ

ど

に

そ

の

う

つ

は

も

の

に

た

り

ぬ

と

見

え

給

へ

り、

む

か

し

後

鳥

羽

院

に

さ

ふ

ら

ひ

し

と

こ

え

た

る

木

ず

え

と

ぞ

み

る、

か

へ

し

お

も

ひ

や

れ

み

か

さ

の

山

の

ふ

ち

の

花

さ

さ

な

ら

べ

つ

ゝ

み

つ

る

こ

ゝ

ろ

を

か

ゝ

る

御

家

の

さ

か

え

を、

身

づ

か

ら

も

や

む

と

な

し

と

お

ほ

し

つ

ゞ

け

て

よ

み

給

ひ

ける、

は

る

さ

め

は

よ

も

の

我^{○平}身の糸いぐわをきはむるのみならず、一門共に繁昌して、ちやく子まげもり内大臣の左大將、次男むねもり中納言の右大將、三男^{○盛}知盛三位中將、ちやくそんこれ盛四位の少將、すべて一門の公卿十六人、殿上人三十よ人、諸國のまゆ領る[○]諸司つがふ六十よ人なり、世には又人なくぞ見えられける。昔ましの御門の御時、神龜五年朝家に中衛の大將をはじめおかる、大同四年に中衛を近衛にあらためられしより此か[○]兄弟左右にあひならふ事わづかに三四か度なり、文德天皇の御時は、左によしふさ右大臣の左大將、右に良相大納言の右大將、これは關院の左大臣冬嗣の御子なり、まゆまやく院の御字には、左にさねより小野宮殿、右にもろすけ九條殿、眞信公^{○忠}の御子なり、後冷泉院の御時は、左にのりみち大二條殿、右によりむねはり川殿、御堂の關白^{○道}の御子なり、二條の院の御字には、左にもとふさ松殿、右にかねさね月の輪殿、法性寺殿^{○忠}の御子なり、是みな攝ろくの臣の御子そく、凡人に取ては其れいなし、殿上のまじはりをだにさらはれし人^{○平}の子孫にて、禁色雜袍をゆり、綾羅さんまうを身にまとい、大臣の大將になりて、兄弟左右にあひならふ事、末代とは云ながら、ふしぎなりし事共なり、其外御むすめ八人おはしき、皆とり[○]にさいはひ給へり、^{○中}一人^{○德}は后にた[○]せ給ふ、廿二にて皇子^{○安}御誕生有て、皇太子にたち、位につかせ給ひしかば、院がうかうふらせ給ひて、建禮門院とぞ申ける、入道相國の御娘なるうへ、天下の國母にてましませば、どうか申におよばれず、一人は六條の攝政殿^{○藤原}の北のまんと所にならせ給ふ、是は高倉の院御ざいの御時、御母代とて准三后のせんじをかうふらせ給ひて、白川殿とておもさ人にてぞまじ^{○中}ける、^{○中}日本あきつしきは纔に十六かこく、平家知行の國卅よか國、すでに半國にこえたり、其外莊園田畠いくらといふかすをまらず、さらちうさんして、だう上花のことし、けんきぐんじゆして、門前市をなす、やうまうの金けいまうの玉、ごさんのあや、まよくかうの錦、七ちん万ほう、一つとしてかけたる事なし歌だう

漢ノ才智ヲキハメサセ給フノミニアラズ天下ノマツリゴトヲヨク／＼キハオカセ給テ御即位ノ後、サマ／＼ノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功トイフコトナガク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクレリケルニ、國ノ重任ヲ關白大・二・條・殿○藤原マゲテ申サセ給ケルニ、コトカタクシテタビ／＼ニナリケレバ、主上逆鱗ニオヨビテオホセラレテ云ク、關白攝政ノオモクオソロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハムゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ事ノ外ニ御ムツカリアリケレバ、殿座ヲタチテイデサセ給フトテ、大聲ヲハナチテノタマハク、藤氏ノ上達部ミナマカリタテ、春日大明神ノ御威ハケフウセハテスルゾトイヒカケテイデ給ヒケレバ、氏ノ公卿、マコトニモ一人モノコラズミナ座ヲタチテ殿ノ御トモニイデケレバ、事ガラオビタハシクゾアリケル、

〔古事談王道后〕寛治比、行幸河堀出御之時、左府源房已下列立、右府源顯房南殿巽角石ニ尻ヲ懸テ被坐テ、宿老ノ大臣帝祖ナドハ、カヤウニテ居タルゾト被云ケリ、

〔愚管抄五〕清盛が子共重盛宗盛左右大將になりけり、我身は太政大臣にて、重盛は内大臣左大將にて在ける程に、略承安元年十二月十四日、この平大相國入道盛落が女后高倉子を入内せさ

せて、やがて同し二年二月十日立后中宮とてあるに、皇子を生させまゐらせて、いよく帝の外祖にて世を皆思ふさまにとりてんと思ひけるにや、様々の祈どもして有けるに、先は母の二位時平日吉に百日いのりけれとあるしもなかりければ、入道云やう、われが祈るゑるしなし、今見給へ、祈出でんと云て、安藝國嚴島をこどに信仰したりける上、はや船をつくりて、月詣を福原より初て祈りける、六十日ばかりの後御懷妊と聞えて、治承二年十一月十二日、六波羅にて皇子誕生、思ひの如くありて、思さまに入道帝の外祖になりけり、

〔平家物語〕「我身のえいぐわの事

て、佛師ども百人ばかりなみゐてつかうまつる、おなじくはこれこそめでたけれどみゆ、御だうのうへを見あぐれば、たくみども二三百人のぼりゐて、大きな木どもには、ふどきをつけて、こゑをあはせておさへ、さどひきわけさわく、御堂の内をみれば、佛の御座つくりかゝやかす、いたじきを見れば、どくさむくの葉なぞして、四五百人手ごとになみゐてみがきのとふ、ひはだぶき、かべぬり、かはらつくりなぞかすをつくしたり、又としおいたる翁法師なぞの、二尺ばかりの石を心にまかせてきりめどゝのふるもあり、池をはるとて、四五百人おりたち、山を疊むとて、五六百人のぼりたち、又おほちのかたを見れば、ちから車にえもいはぬおほきどもにつなをづけて、さけびのゝまりひきもてのぼる、かも河のかたをみれば、いかだといふ物にくれ材木をいれて、さをさして心ちよげにうたひのゝまりもてのぼるめり、大津むめづの心ちするも、にしはひんがしといふ事はこれ成けりどみゆ、磐石といふばかりの石を、はかまきいかだにのせてゐてくれせしづます、すべていろゝ様々いひつくしなねびやるべきかたなし、かの須達長者の祇園精舎つくりけんもかくやありけん、と見ゆるを、冬のもろなつの風おのゝことゝなり、かゝる御いきはひにそへ、入道せさせ給てのちは、いとまさらせ給へりとみえさせ給にも、なほなべてならざりける御ありさまかなど、ちかうみたてまつる人はたうどみ、どほきひととははるかにをがみまゐらす、いまはこの御堂の木草どもならんとおもへる人のみおほかり、

〔古事談^六 亭宅^六 諸宅^六 宇治殿^六 頼通^六 藤原^六 京極殿^六 頼通^六 師賢^六 御車後^六 ニノセテ御行アリケルニ、二條東洞院二町ヲ築籠テ、大二條殿^六 頼通^六 頼通^六 被造作ケルヲ御覽ジテ、京中ノ大路ヲモカクハ籠作ニヤト令申給ケレバ、担任テハ不可有事ナレドモ、我等ガセム事ヲバ誰カハ可答ヤト被仰ケリ、仍高陽院ヲバ四町ヲ築籠テ令作給云々、

〔續古事談^一 王道后^一 後三條院ハ、春宮ニテ廿五年マデオハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和

らにもいはずきこえさせんかたなし^略○中 この御なやみは寛仁三年三月十七日よりなやませ給て廿七日に出家せさせ給へれば、日ながくおぼさるゝまゝに、さるべき僧たち殿ばらなぞ、御物がたりせさせ給て、御こゝちこよなうおはします、いまはたゞいつしかこの東に御堂たてゝ、すゞしくすむわきせん、どなむつくるべき、かくなたつべきなどいふ御心だくみいみじ、かくて目ごろになるまゝに御心ちさはやぎてすこし心のどかにならせ給^略○中 かくて世をそむかせ給へれば、御いそぎはうら吹風にや、いまは御心ちれいごまになりはてさせ給ぬれば、みだうの事覺しいそがせ給攝政のくにも、までさるべきおほやけごをばある物にて、この御堂のこゝをささどつかうまつるべきおほせ事の給殿の御まへも、このたびいきたるはことごとならず、この願のかなふべきなめりとの給はせて、ことごとくなく御堂におはします、はう四町をこめて、おほがきにしてかはらふきたり、さまゝにおぼしおきていそがせ給ふに、夜のあくるも心もとなく、日のくゝるも口をしうおぼされて、夜もすがらはやまをたゝむべきやう、池をはるべきさま、木をうゑなめさせ、さるべき御だうゝかたゝゝさまゝゝつくりつゝ、御佛はなべてのさまにやはおはします、丈六の金色の佛をかすもあらずつくりなめて、そなたをば北南どめだうをわけて道をどゝのへつくらせ給、どりのなくも久しくおぼされ、よひ曉のおこなひもおこたらず、やすきいも御どのごもらず、たゞこの御堂の事をのみふかく御心にまかせ給へり、日々におほくの人々まわりまかでたちこむ、さるべき殿ばらをはじめてまつりて、みやみやの御ふ御莊どもより、一日に五六百人の夫を奉るに、かすおほかるをばかしこきことにおぼしたち、國々のかみども、地子官物はおそなはれども、たゞいまは此御堂の夫やく材木檜皮瓦とおほくまゐらすることを、我もゝときはひつかうまつる、おほかたちかきもどほきもまゐうこみて、まなゝかたゝゝあたりゝゝにつかうまつる、ある所をみれば御佛つかうまつるど

で、だゝ滅罪生善の法をもおこなはせ、念佛の心をたえずさかばやどの給はすれど、それは
つゆ此殿ばらさこしめしいれず、いかでとくほいとけてんどの給はするを、大宮なほいまし
し春宮の御よをまたせ給べくさこえさせ給を、心うくあひおぼしめさぬ也けりと恨申させ給
へば、いかにくどのみ覺しなげかせ給、御物のけど、もいとおどろくまう申すもれいの事な
り、おほやけわたくしのだいじだ、いま是よりほかはなに事かはと見えたり、略どの、御前
さらにいのちをしうも侍らず、ささく世をまつりこち給人々おほかる中に、おのればかりさ
るべき事どもまたるためしはなくなん、内東宮おはします、三所の后、院の女御おはす、だ、い
内大臣通にて攝政つかまつる、又大納言通にて左大將かけたり、又大納言宗あるは左衛
門督信にて別當かけたり、五をこの家の位ぞいとあされど、三位中將にてはべり、みなこ
れつぎ、おほやけの御うしろみつかうまつるに、略ことなるなむなくてすぎ侍ぬ、おのが
先祖の貞信公、平いみじうおはしたる人、我、太政大臣にて、太郎小野宮の左大臣、頼二郎九條
師輔の右大臣、四郎師五郎師などは大納言にてさしならび給へりけれど、后たち給はすな
りにけり、ちかうは九條のおど、輔わが御身は右大臣にてやみ給へれど、おほ后上后安子、村
の御はらの冷泉院圓融院さしつゝ、おはします、十一人のをこの中に、五人太政大臣にな
り給へり、いまにいみじき御さいはひなりかし、されば后三どころたち給へるためしは、この國
にはまたなき事也なぞ、よにめでたき御ありさきをいひつけさせ給、ことし五十四なり、まぬ
どもさらにはちあるまじ、いまゆくすゑもかばかりの事はありがたくやあらん、あかぬ事は尙
侍子、東宮にたてまつり、皇太后宮の一品宮子後朱雀后の御事、このふたことをせずなりぬる
こそあれど、大宮おはしますし、攝政のおど、いいますすかれば、さりとともどま給事ありなんといひつ
づけさせ給、宮々殿ばらせきとめがたうおぼされ、僧俗もなみだど、めがたし、うへ義倫子はさ

も、おぼしけることゝさまなれば、いとあはれにことわりなり、げにかくもてはやし聞え給にこそはよろづのかぎりもまさらせ給ふめれ、千代もあくまじく御行すゑのかすならぬこゝちにだにおもひつゞけらる、宮のおまへきこしめすや、つかうまつれりと我ぼめし給て、宮の御てゝにてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしませす、はゝもまたさいはれ有とおもひてわらひ給ふめり、よいをどこはもたりかしとおもひたんめりと、たはふれきこえ給もこよなき御ゑひのまぎれなりとみゆ、さることもなければ、さわがしき心ちはまながら、めでたくのみきゝるさせ給、どのゝうへきゝにくしとおぼすにや、わたらせ給ひぬるけしきなれば、おくりせずとてはゝうらみ給はん物をとて、いそぎて御丁のうちをどほらせ給宮なめしとおぼすらん、おやのあればこそ子もかまこけれどうちつふやき給ふを、人々わらひきこゆ（又乳榮花物語）

〔小右記〕寛仁二年十月十六日乙巳、今日以女御藤原威子立皇后（後一條天皇之弟也、太政大臣、第三子、立三后、未嘗有略）中太閤（藤原道長）招呼下宣云、欲讀和歌、必可和者、答云、何不奉和乎、又云、誘（誘ひ）なる歌（有る）、但非宿構者、此世（平）我世（所）思望月乃虧（虧たる）事（無）思（思へば）余申云、御歌優美也、無方酬答、滿座只可誦此御歌、元稹菊詩、居易不和、深賞歎、終日吟詠、諸卿響應、余言數度吟詠、太閤和解、殊不責和、夜深月明、扶醉各々退出、

〔榮花物語（疑）〕殿の御前（略）御心ちれいならずおぼさるれば、人々も夢さわがしく聞えさするに、わが御心ちにもよろしからずおぼさるれば、このたびこそはかぎりなめれど、物心ほそくおぼさる、殿ばら宮々などにもいとおそろしうおぼしなげくに、いとまことにおそろしくしき御心ちのさまなり、かゝればよろづにいみじき御いのりどもさまなりなり（略）内（中）東宮（後一條天皇）大宮（後一條天皇）皇太后宮（三條）中宮（後一條）小一條院（明）又攝政殿（通）内の大い殿（教）なせみな御修法せさせ給程の御ありさと思ひやるべし、（中）どのゝ御まへいゝはいのりはせ

二具、又有枕宮等屏風二十帖、凡帳二十基云云、希有之希有事也、文集雜興詩云、小人知所好、懷寶四方來、奸邪得藉手、從此幸門開、古賢遺言仰以可、信當時大闇德、如帝王、世之興亡、只在我心、與吳王其志相同、廿六日丁巳、入夜、宰相重來云、參大慶○藤原道長被坐上東門第、被行髮殿、御裝束并立石引水等事、攝政已下被參入、主人昇降容易、甚以輕々、卿相追從、寸步不忘、家子達令、曳大石夫或五百人、或三四百人、然間京中往還人不靜、追執令曳、不示堪、男女亂入下人宅、放取戸并支木屋壓木敷板等、以敷板戸等敷石下爲轉料、日來東西南北曳石之愁、京内取煩愁苦無極、又止養田之水強灌入家中、嗟乎嗟乎、不念稻苗死、歟、可詠文集雜興詩、尤爲鑒誠、

〔紫式部日記〕御いかは霜月のついたちの月、れいの人々の去たてゝのぼりつとひたる、御前の有さ立繪にかきたる物あはせの所にぞいとようにて侍し、○中こよひ少輔のめのといろゆるさる、こゝしささうちしたり、みや○後一條いだき奉れり、御丁のうちにてどの、うへ○藤原道長妻倫子い

さうつし奉り給て、むざりいでさせ給へり、ほかげの御さ立けはひことにめでたし、わかいろのからの御ぞ、ぢすりの御裳、うるはしくさうぞき給へるも、かたじけなくもあはれにみゆ、大みや

○道長女一條后影女一えびぞめの五への御ぞ、すはうの御こうちきたてまつれり、殿もちひはまわり給ふ、

○中略ことはつるまゝに、宰相のきみにいひあはせて、かくれなんとするに、東おもてにどの、き

んだち宰相中將○兼隆など入てさわがしければ、ふたりみちやうのうしろにゐかくれたるを、ど

りはらはせ給て、ふたりながらどらへすゑさせ給へり、わかひとつづゝつかうまつれ、さらばゆ

るさむとの給はす、いとほちておそろしければきこゆ、

いかにいかゞかぞへやるべき八千とせのあまり久しき君がみよをば、おはれつかうまつれるかなど、二たびばかりすせさせ給て、いとどうのたまはせたる、

廬たづの齡しあれば君がよの千歳の數もかぞへどりてん、さばかりを給へる御こゝちに

りよりむねやませ給ひて、わざとにはおはしませねど、いかゞおぼしめしけん、俄に廿一日のひつじの時ばかりに略御出家し給へれど、なほ又おなほ五月八日、准三宮の位にならせ給ひて、年官年傳えさせ給ふ、三人后關白左大臣内大臣通教あまたの納言信頼家等能の御父、御門東宮の御おほぢにておはします、世をまゐりたもたせ給ふ事、かくて三十一年ばかりにやならせ給ひぬらむ、今のどしは六十におはしませば、かんのどの後朱雀の御さんののちに御賀あるべしとこそ人申めれ、いかにまたさまゝおはしませせてめでたく侍らんすらん、おほかた又よになき事なり、大臣の御むすめ三人后にてさしならべ奉らせ給ふ事、あさむしくけうのことなり、もろこしにはむかし三千人の后おはしけれど、それはすぢもたづねでたゝかたちありとさきこゆるを、どなりの國までえらびいだし、その中にやうきひとときは、あまりとさめきすぎてかなしき事あり、王昭君はえびすの王に給りて、胡のくにの人となり、上陽人は楊貴妃にそばめられて、御門に見えたてまつらで、春のゆき秋のすぐる事をもまゐらずして、十六にてまゐりて、六十までありけり、かやうなれば三千人のかひなし、わが國にはならの后こそおはすべけれど、代々に四人ぞたて給ふ、この入道殿下のひとつかさばかりこそは、太皇太后宮后彰一條皇太后宮后新三條中宮后威一條子三所出おはしたれ、まことにけうの御さいはいなり、皇太后宮后藤原時女一人のみこそはすぢわかれ給へりといへども、それも眞信公平忠の御するにおはしませば、それよそ人とおもひ申べき事かは、まかあればたいよのなかは、このどの、御ひかりならずといふ事なし、

【小右記】寛仁二年六月廿日辛亥、土御門殿○藤原寢殿以一間始自南庭至北庭之間也、配諸受領不論新舊、令營云々、未聞之事也、造作過差萬倍住跡、又伊豫守頼光、家中雜具皆悉獻之、厨子屏風、唐櫛、筒具、樟櫃、銀器、鋪設管絃具、劔其外物不可記、畫厨子納種々物、辛櫃等納夏冬御裝束、件唐櫛、筒等具皆有、

す、^略○申この殿は北の政所二所おはします、この宮々の御母うへと申は、土御門左大臣雅信のお
ど、^略の御むすめにおはします、其雅信のおどは、亭子のみかど^{○字}の御子、一品式部卿宮敦實
の、みこの御子、左大臣時平のおど、の御むすめばらにむさせ給へりし御子なり、其まきの太の
おど、のむすめを、今の入道殿下の北政所と申なり、そのはらに女君四どころ、をどこ君二とこ
ろぞおはします、其御ありさまは、只今のことなれば、み人見たてまつり給ふらめど、ことばつ
づけ申さんと也、^略○申女の御さいはひあるは、この北の政所きはめさせ給へり、御門東宮の御母
后とならせ給ふ、あるは御おやよの一人にておはするには、御子も生れ給はねども后にゐさ
せ給ふめり、女の御さいはひは、后こそきはめておはします、御事なめれ、されどそれはいと所せ
げにおはします、いみじきとみの事あれどおぼろげならねば、えうどかせ給はず、ぢんやぬれ
ば、女房たはやすくこゝろにまかせてもえつかまつらず、かやうにところせげなり、たゞ人と申
せど、御門東宮の御むばにて、三后になすらぬ御位にて、千戸のみふえさせ給ふ、年官年爵を給は
らせ給ふ、からの御車にていとたはやすく御ありきなども、中々御身やすらかにて、ゆかしうお
ぼしめしける事は、よの中のものみ、なにの法會やなどあるをりは、御車にても御さじきにても
かゝらず御らんすめり、うち東宮みやゝとわかれゝこそをしくておはしますぞ、いづかた
にもわたりまゐらせ給ひてはさしならびおはします、たゞ今三人后東宮女御關白左大臣の御
母、みかど東宮はた申さず、おほかたよのおやにて二所ながらさるべき權者にこそおはします
らめ、^略○申殿の御まへは卅より關白せさせ給ひて、一條院三條院の御時よをまつりこち、わが御
心のまゝにておはしますし、に又當代^{○後}九にて位につかせ給ひにしかば、御とし五十十一にて
攝政せさせ給ふとし、わが御身は太政大臣にならせ給ひ、攝政をばいまの關白おど、^{○類}にゆ
づり奉らせ給ひて、御年五十四にならせ給ふ、寛仁三年つちのどのひつと三月十八日、夜中ばか

朝臣源賴光贈馬三十四以頒賓客世傳以爲宴集盛事前是所無也夫賴光時爲東宮大進其職小也其祿薄也而有馬三十四何哉使當時公卿有虞天下國家者可不加之意乎蓋公卿大夫以恬熙爲務雖衣甘食漁色鬪歌而捕盜討賊之事委之武臣世官者曰是賤事耳而不省地方兵馬之富漸歸其手他日平治建久之勢隱然已胚胎於此而舉朝莫能察徒以資訪談爲樂果無人故也則其所謂才者可知已兼家子道長更極專擅家出三后身爲兩朝外祖晉咏歌其意曰此世吾之世也嗚呼何知二百年後代有此世者更有其人哉

〔古事談王道后覽〕三條院御時入道殿○藤原道長參給被申請事等不許榮緣令退出給以敦儀親王喚之親王於小板敷年立告勅喚之由入道殿歸參云如此之生宮達立板敷上召執柄人乎云々經任卿說云不歸參給鳳宮達直出給云々

〔大鏡五太政大臣伊弉〕このおどや一條攝政と申さ○中略御門○冷泉の御をち東宮○花山の御おほちに

て攝政せさせ給へば世の中はわが御心にかなはぬ事なくわさことのほかにこのませ給ひて大饗せさせ給ふに影殿のうら板のかべすこしくろかりければ俄に御んじつけてどかくみちの國の紙をつぶとおさせ給へけるがなか／＼白くきよりに侍けるおもひよるべき事かはな御家は今の世尊寺ぞかし御ぞうの氏寺にておかれたるをわやうのついでにはたちいりて見給へればまだその紙のおされて侍るこそむかしにあへる心ちしておはれに見給へれかくやうの御さかえを御んじおぎて御年五十にだにたうせ給へるあたらしさはちゝ大臣○藤原師輔にもおどらせ給はずとこそよ人をしみてなつりしか

〔大鏡七太政大臣道長〕太政大臣道長おどや法興院おどや○藤原家の御五男御母從四位上行攝津守右京大夫藤原中正朝臣女なりこの朝臣は從二位中納言山陰の卿七男なりこの道長大臣は今入道殿下これにおはします一條院三條院のをち當代○後一條東宮○後朱雀の御おほちにておはします

讀ミ給ヘル也ケリ、○今又見古歌集

〔大鏡五〕

太政大臣兼家のおど、これ九條殿○藤原師輔の三郎君、東三條のおどにおは

します、御母一條攝政○伊におなじ冷泉院融融院の御をぢ、一條院三條院の御おはぢ、東三條女

院○融融院贈皇后宮○冷泉院の御父、公卿にて廿年、攝政にて五年、太政大臣にて二年、よをしらせ給

ひさ、かえて五年ぞおはします、○中うちにまゐらせ給ふにはさらなり、牛車にて北陣までいら

せ給へば、それよりうちはなにばかりの程ならねど、ひもときていらせ給ふとぞ、されどそれは

さてもあり、すまひのをり、東宮のおはしませば、ふたどころの御衣になにをもおしやりて、御あ

せとりばかりにてさふらはせ給ひけるこそ、よにたぐひなくやむことなき事なれ、すゑには北

方もおはしませりければ、とこすみにて、東三條殿の西對を清涼殿づくりに御まつらひよ

りはじめて、すませ給ふなどぞあまりなる事に人申めりし、なほたゞ人にならせ給ひぬれば、御

果報のおよばせ給はぬにや、さやうの御みもちに、ひさしくはたまたせ給はぬともさだめ申め

りき、

〔古事談一〕

王道后○藤原一條幼主御時、夏公事日、公卿等徘徊露臺、披南殿北戸、帶涼風、其時大入道○藤原

爲攝政、放衽奉抱主上、自掖戸令指出給諸卿皆敬候云々、又云、私ニ云、此儀アマリ也云々、

〔日本紀略九〕

永延二年九月十六日庚子、攝政○藤原新造二條京極第有興宴事、左右大臣○藤原

爲以下多以集會、油頭釣臺、盃酌數廻、春宮大進源賴光率貢駒卅匹、大臣以下預之有差、會者誦詩句

唱歌、曲河陽遊女等群集給、絹卅匹、米六十石云云、今日之遊希代之事也、

〔日本政記一〕

賴義曰、一條帝亦有志於治也、曰、吾得人才、一事不讓延喜○藤原、天曆○村然吾觀其

所謂人才、如四納言世所盛稱、雖練達朝章、大抵容媚權門者耳、○中朝廷之政爲權家所擅、使天子

孰愛兄與夫焉。於是皇后不知所問之意趣。輒對曰。愛兄也。則詔皇后曰。夫以色事人。色衰寵緩。今天下多佳人。各遞進求寵。豈永得特色乎。是以冀吾登鴻祚。必與汝照臨天下。則高枕而永終百年。亦不快乎。願爲我弑天皇。仍取ヒ首授皇后。曰。是ヒ首佩于細中。當天皇寢。適刺頸而弑焉。皇后於是心裏兢戰。不知所如。然視兄王之志。不可得諫。故受其ヒ首。獨無所藏。以著衣中。遂有諫兄之情狀。

〔日本後紀^{二十}〕弘仁元年九月丁未。繫右兵衛督從四位上藤原朝臣仲成於右兵衛府。詔曰。天皇詔旨

止^真麻勅御命^乎。親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食^止宣。尙侍正三位藤原朝臣^へ子^〇中^略其兄

仲成^己妹^乃不能所^波波^乎不教正^之還恃其勢^氏以虛詐事先帝^乃親王夫人^乎凌侮^氏棄家乘路^氏東

西辛苦^季世^之如此罪惡不可數盡^理乃任^爾勸賜^比罪^罪賜^久布^有止^有所思行有依^氏輕賜^比有賜^氏藥

子者位官解^氏自宮中退賜^比仲成者佐渡國權守退^止宣天皇詔旨^乎衆聞食^止宣^〇中^略戊申是夜

令左近衛將監紀朝臣清成右近衛將曹住吉朝臣豐繼等射殺仲成於禁所。仲成者參議正三位宇合

之曾孫。贈太政大臣正一位種繼之長子也。性狠抗使酒。或昭穆无次。忤於心不憚擊蹶。及乎女弟藥子

專朝。假威益驕。王公宿德多見凌辱。民部大輔笠朝臣江人之女適仲成也。其姨頗有色。仲成見而悅之。

嫌其不和。欲以力強女脫奔佐味親王。仲成入王及母夫人家。認之。龜言逆行甚失人道。及遭害。僉以爲

自取之矣。庚戌是日廢皇太子^〇高^高弟^弟立中務卿諱^和爲皇太弟。

〔今昔物語^{二十}〕開院冬嗣右大臣并子息語第五

今昔^〇中^略此ノ大臣^〇藤^藤原^原ハ心ノ倖テ廣ク身ノ才賢クテ萬ノ事人ニ勝レテゾ御ケル又和歌ヲ

ゾ微妙ク讀給ケル御娘ヲバ文德天皇ノ御后^〇明^明ニテ水尾ノ天皇^〇清^清ノ御母也染殿ノ后ト申

ス此也其ノ后ノ御前ニ微妙キ櫻ノ花ヲ瓶ニ指テ被置タリケルヲ父ノ太政大臣見給テ讀給ケ

ル也。

年フレバヨハヒハオイヌシカハアレド花ヲシミレバモノオモヒモナシト后ヲ花ニ譬ヘテ

爲之儲貳以悅三條帝之意及一旦升遐陵土未乾又奪其位以立其外孫○後天子拱默以受其制陵替至是可勝歎哉

〔榮花物語初八〕との○藤原わかみや○一條いださたてまつらせ給て御前○一にゐてたてまつらせ給御こといどわかし辨の宰相の君御はかしどりて参り給もやのなかの戸のにしにどのうへのおはしなすかたにぞ若宮はおはしなさせ給うへの見たてまつらせ給御心ちおもひやりきこえさすべし是につけても一の○藤原子○敦のむまれ給へりしをりどみにもみずきかざりしはや猶すぢなしかゝるすぢにはたゞたのもしうおもふ人のあらむこそかひくしうあるべかめれいみじき國王の御位なりともうしろみもてはやす人なからんはわりなかるべきわざかなとおぼさるゝよりもゆくすゑまでの御ありさなぞものおぼしつゝけられてまづ人老れずあはれに覺しめされけり

〔愚管抄二〕御門○中此君は○中御母方○承明門○在子うちたえあはなる法師○龍の孫位に○即かせ給ふ事○はなしとぞ世に沙汰しける

〔増鏡七〕院○後のわか宮十三にならせたまふはきんむねの中將といひし人のむすめの御はらなり圓満院の法親王の御でしにならせたまふべしとて正月○寶治廿八日にその御よういあり承明院よりわたり給ふ院のあじろびさしの御車にてかんだちめは車どもぎねの大納言を上玄卿にて六人殿上人十六人馬にて色々にいどよそほしうめでたくておはしなしぬその夜やがて御さしおろして御法名圓助ときこゆいどうつくしげさ佛などの心ちしてあはれに見えた皇太院の宮たちの御中には御このかみにてものし給へど御げさくのよわきはいなもむかしもかゝるこいといどはしきわざなりけれ

〔日本書紀六〕四年九月戊申皇后○德母兄狹穗彦王謀反欲危社稷因伺皇后之燕居而語之曰汝

はくは元方民部卿の靈のつかうまつりつるなりといへば、このさぶらひ、それもさるべきなり。このはどの御事こそことの外にかはりて侍れ、なにがしはいとくはしくうけ給はりたることども侍るものをといへば、世つぎ、さも侍らん、つたはりぬる事はいでくうけ給はらばや、ならひにし事なればものゝ猶さかまほしく侍るぞといふけうわりげにおもひたれば、事のやうだいは、三條院のおはしなしけるかぎりこそあれ、うせ給ひにけるのちは、よのつねの東宮の御やうにもなく、殿上人などまゐりて御あそびせさせ給ふや、もてなしかしづき申人などもなく、いとつれづれにまざるゝかたなくおぼしめされけるまゝに、心やすかりし御ありさまのみ戀しく、ほけくしきまでおぼえさせ給ひけれど、三條院おはしなしけるかぎりには、院の殿上人などもまゐりや、御つかひもまげくまゐりかよひなんぞするに、人目もまげくよろづなぐさめさせ給ふを、院うせおはしましては、世の中のものおそろしく、おぼすのみちかひもいかゞとのみわづらはしくふるまひにくきにより、宮司などだにもまゐりつかうまつる事もかたくなりゆけば、ましてけすの心はいかゞはあらん、どのもりづかさの者も、あさぎよめつかうまつる事もなければ、庭のくさもまげりまざりつゝ、いとかたじけなき御すみかにておはしなす、まれまれ参りよる人々はよにきこゆる事にて、三宮^{○後}朱雀^{○後}かくておはしなすを、心ぐるしく殿も大宮^{○後}も思ひ申させ給ふに、もしうちにをどこ宮もいでおはしなすば、いかゞあらん、さあらぬさきには東宮にたてたてまつらばや、なんおほせらるなる、さればおしてとられさせ給へるなり。^{○中}さていかなる事にか、東宮御位せめおろしどりたてまつり給ひては、又御むにどりたてまつらせ給ふは、もてかしづきたてまつらせ給ふ御ありさま、まことに御心もなぐさませ給ふばかりこそさこえ侍りしか、

〔皇朝史略^六後一^條〕外史氏曰、昔哉道長之專也、既逼三條帝、令遜其位、以擁立其外孫^{○後}。又立敦明^一。

けるぞ此たうだいの御事よげにさる事ぞかし、

〔榮花物語上三〕ふして東宮院○教明一條 なにの御心にかおはしますらん、中皇后宮院○母一條に、一生

はいくばくに侍らぬに、なほかくて侍こそいといふせく侍れ、さるべきにや侍らんにしへの

ありさまにこそやすくてこそ侍らまほしけれなぞ、をりく聞えさせ給へば、みやはいと

心うき御心なり、御物のけのおもはせたてまつるならん、中とて所々に御いのりをせさせ

給、中の道長藤原のおまへにさるべき人して、かうやうになぞまねび申させ給、中殿まゐら

せたまへり、中出家とまでおぼしめされば、いとことのほかに侍り、中なぞよく御心のせか

に聞えさせ給てまかで給ぬ、そのまゝにやがて大宮后○影一條にいらせ給て、かうくの事をなん

春宮たびくの給はすれど、さらにうけひき申さぬに、めしての給ひつるやうなぞ、こまやかに

申させ給、中さても春宮には三宮朱後こそはゐさせ給はめと申させ給へば、大宮げにそれは

さる事に侍れど、式部卿宮康○教のさておはしますさんこそよく侍らぬ、それこそみかどにもすゑ

たてまつらまほしかりしかど、故院のせさせ給し事なればさてやみにき、此たびはかの宮のゐ

させ給はんは、故院の御心のうちにおぼしけんはいもあり、宮の御ためにもよくなむあるべき、

わかみやは御すくせにまかせてあらばやなん思侍るときこえさせ給へば、殿げにいとありが

たうあはれにおほせらるゝことに侍れど、故院もこと事ならず、たいろみなきによりかし

こ、おはすれど、かうの御ありさまは、たいろみならず、師中納言家○隆だに京になきこ

そなであるまじきことにおぼしきだめつ、

〔大鏡左三〕大臣師尹、さきの東宮明○教をば小一條院と申、いまの東宮一條○後の御ありさま申かぎりな

し、つひのことゝはおもひながら、たい今かくとはおもひがけざりし事なりかし、中この院の

かくおぼしたちぬる事、かつは殿下道○長藤原の御報のはやくおはしますすにおされ給へるか、又お

洞院殿とぞ申し、さて嘉禎三年三月に今の殿の躰の左大臣兼攝、同攝政讓て、同四年四月廿五日に年四十六にて出家し給、其後も威光は益壯りに御坐しけり、出家の人の參内する事は、御堂の關白道長、藤原平太政入道清盛などの外は、いたく例もなければ、車の文には蓮花をして、行粧ゆゝしめて參内し給、

〔神皇正統記四條〕四條院、諱ハ秀仁、後堀河の太子、御母藤壁門院、藤原尊子、攝政左大臣道家の女なり、壬辰の年即位、略中一とせばかりありて上皇後堀河崩れ給ひしかば、外祖にて道家の大臣王家の權を執りて、昔の執政の如くにこそありしか、東國に仰ぎし征夷大將軍賴經もこの大臣の胤子なれば、文武一にて彊勢おはしけるとぞ、

〔十三朝紀後本尾〕寛永六年十月、帝令傳旨於幕府曰、遷位以二女明正繼之、大將軍家光鑑川大驚、以自遷都以來、久不女主、至今女宮踐極、後世曰、外戚威之所爲、乃諫之不聽、

皇德後外戚

〔大鏡後一條〕つぎのみかど當代、御いみなあつなり、略中おなじみかど、申せども、御うしろみお

はくたのもしくおはしなし、御おほぢにて、たゞ今の入道殿下藤原道長出家せさせ給へれど、よの

おや、一切衆生、一子のごとくはぐゝみおはしなす、第一の御をぢにて、たゞ今の關白左大臣賴通

一天下をまつりごちておはすべき、つぎの御をぢ通教と申は内大臣にて左大將かけておはす、

あるひは東宮大夫宗頼、中宮權大夫宣龍、中納言家長など、さなふにておはします、かたのごと

くにおはしなさせば、御うしろみおほくおはします、むかしも今もみかどかしこしと申せど、臣

あまたしてかたふけたてまつるにはかたふき給ふものなり、さればたゞ一天下は、わが御うし

ろみのかぎりにておはしなせば、いとたのもしく、めでたき事なり、むかし一條の院の御なやみ

のをりおほせられけるはず、べからくは次第のまゝに、一のみこ親王數康をなん春宮とすべけれ

ど、うしろみすべき人なきにより思ひかけず、さればこの二宮をばたて奉るなりとおほせられ

るゆるされもなかりけるにや、賴朝も手にあたりたる事かなどもや思ひけん、是等は去れる人もなささかひの事也。さて帝の外祖にて、能圓法印現存して在しかば、人もいかにと思ひたりし程に、ほどもなく病て死にき。よき事と世の人思へりけり。

〔増鏡〕

神也

はかなくあけられて、仁治二年にも成にけり、御門〇四はこと去十一にて、正月五日

御げんふくし給ふ、御いみな秀仁とさこゆ、そのどしの十二月にとうゐんこ攝政殿のりの姫君

九になり給ふを、おほちの大殿道家藤原御をぢの殿原なごつたちて、いとよそほしくわらまほし

ささまにひきさて、女御まわり給へば、父の殿ひとりこそ物し給はねど、大かたのぎしき、よろづ

あかぬ事なくめでたし、うへもさびはなる御ほどに、女御もまだかくちひさうおはすれば、ひい

なあそびのやうにぞ見えさせ給ひける、天の下はさながら大殿の御ころのまゝなれば、いと

ゆゑしくなん。

〔五代帝王物語〕今は院〇後

河

もわたらせ給はず、主上〇四

も幼稚におはしませば、外祖にて大殿藤原

原道世を行ひ給ふ、將軍賴經卿は御子なれば、武家にもかたゝゝ因縁あり、前相國公經公公後院の

別當なるうへ、大殿のまうにて、これも關白一體の人なれば、二人申合て行はれけり、大殿は帝

の外祖たるうへ、攝政并征夷將軍の父なれば、世の従ひ恐事、吹風の草木をなびかすよりも速な

り、されば山の座主、三井寺の長吏、興福寺の別當みな御子也、仁和寺の御室は、代々王胤にてこそ

おはしませども、世を手を握り給うへば、北の政所の腹に、福王御前とて愛子にて御坐をば、御室

の弟子に成て、師跡をうけつぎ給き、されば大殿の御葬禮の時も、殿たちよりも上にたちておは

し、ましけるは、父の御素意のどほりなるべし、後は關白の准后助法と申、法師の准三后の宣旨是が

始なるべし、かくて大殿は世を治て目出おはし、すはさに、文曆二年嘉祿三月廿八日に攝政〇道

家子廿六にて俄にうせ給ふ、言ばかりなき事なりしを、やがて大殿又成かへり給ぬ、故攝政をば

言にも程なくへ上つてげんひゐしの別當にも、三がでまで被成給へり、此人の朝務の時、諸國のせつたうがうたう、山ぞく海ぞくなどをば、やうもなくからめ取て、一々にひぢのものどよりふつゝどうちきりゝおつはなたるされば人あく別當ぞ申ける。

〔讀史餘論〕按するに、清盛が妻平時子は、建春門院の女兄也、故に平氏ますゝ勢を得し也、又建春門院の兄大納言平時忠は、主上○高にも院白河○後にも平家にも皆親ありし故、權柄を執れり、時人これを平關白といひき。

〔玉海〕建久九年正月七日乙巳、讓位事、傳國等事、自元不及沙汰云々、幼主不甘心之由、東方頻雖令申、綸旨懇切、公朝法師下向之時、被仰子細之時、慈承諸申、然而皇子之中、未被定其人、關東許可之後、敢取孔子賦、又被行御占、皆以能圓孫○土爲吉兆云々、仍被一定了、此旨以飛脚被仰關東了、不待彼歸、來十一日可有傳國之事云々、桑門之外孫曾無例、而通親卿爲振外祖之威○母之故也、二三歲踐祚爲

不吉例之由申出云々

信清孫三歲、結季孫二歲、而博陸基通

藤原

又響應、尤可被忌例、不可及外祖之沙汰之由再三

被申行、是則其息新侍從兼基爲桑門之孫、世人爲奇異、爲休其嘲忘帝者之瑕瑾、同通親謀云々、愚哉以少人入魂爲小童之才學國家之滅亡、舉足可待歟、於占卜之吉兆及孔子賦等之條者、如此之事只

依根元之邪正有靈告之真偽也、通親忽補後院別當禁裏仙洞可在掌中歟、彼卿日來猶執國柄○世稱源博

義、又謂

今假外祖之號、獨步天下之體、只可以目歟、讓位之間、將軍兩人必可供奉、仍內大臣被停左大

將了、明日中納言中將可補云々、其後可被行任大臣、右大將昇丞相、其將軍通親可拜云々、外祖猶

必可補大臣歟、彼時又內府可被補右大臣之條、無異儀於此等之次第者、更不足爲愁、猶恐只濫刑也、

〔愚管抄〕九年久

建

正月十一日に、通親はたと讓位を行ひて、この刑部卿三位が腹に、能圓が女に

て、この承明門院○後

在子

おはしす腹に、王子○土の四にならせ給ふを踐祚して、この院も今

はやうゝ意にまかせてばやと思召によりて、かく行てけり、關東の頼朝には、いたうたしかな

〔讀史餘論〕謹按、鎌倉殿○朝天下の權を分たれし事は、平清盛武功によりて身を起し、遂に外祖の親をもて、權勢を專にせしによれり。清盛かくありし事も、上は上皇の政みだれ下は藤氏累代、權を恣にせしに倣ひしによれる也。

〔日本外史〕外史氏曰○中世稱清盛功不償其罪、舉不臣者、輒以爲稱首、而不知相家不臣已什倍清盛。清盛蓋視而學之、否則何遽至此。詩云、唯其有之、是以似之。自相門之專權也、后皆其女、天子皆其女之所生、而卿相皆其子弟親屬、苟非其族類、勦而去之。雖皇族不能免焉、甚則易置其主、視猶奕棋。清盛所爲、無一不似彼己氏者、而加以爲悍其意曰、以無功之人、猶擅權寵如此、吾之有大造於王室、何爲而不可世以其拔與之。無漸羣起咎之、而不言有爲之師者焉。且清盛所以至此、由後白河帝養成其勢爾。夫名爵公器、不可私用、人臣而私名爵、是負其君也。人君而私名爵、是負其先王也。帝濫授先王之名爵於清盛、藉以濟其私焉、而長其負功邀上之心、至於不可制、將誰咎哉。雖然、成平氏之勢者、不獨始於帝也。初、忠盛受寵於白河、鳥羽、連進官爵、人以爲不次。蓋朝廷倚其力、以抑源氏、抑源氏所以殺相家之權也。源氏自滿仲賴光、每爲相門之爪牙、攝政兼家之驅、花山也。源賴信實悍衛道、途降至文治之際、朝廷疑關白兼實之助、源賴朝亦非以其世相黨援哉。由是觀之、延平宗以杭相門、院政廟論所相傳承、其猶寬平之擢任菅氏邪。文武雖異、其意一也。以菅公之賢、猶不能無戀權之意。平氏除重盛之外、皆不學無術、其矜功擅寵、進不知止、局足尤焉。假設重盛後父而死、盡反其所爲、戒飭子弟、輔翼王室、則雖接踵比隆於藤原氏可也。

〔平家物語 十二〕平大納言のながされの事

平大納言時忠の卿は、○中出羽のせんじどものぶがまご、ぞう左大臣どきのぶの子なりけり。故建春門院の御兄、高くらの上皇の御ぐわいせき、又入道相國○平の北のかた、八條の二位殿もあねにておはしければ、げんくわんけんまよく思ひのごとく、心のまゝなり。されば正二位の大納

執進セリ、入道近參ヲ耳語申ケレバ、其儘ニアソバシテタビヌ、入道披之拜テ、今コソ憑シク候ヘトテ、ホクソ笑テ大將ニ見セラル、宗盛此上ハ左右ノ事有ベカラズト申、相國取テ懷ニ入テ立給ケルガ、ヨニモ心地ヨグニテ各御前ヘ參ラセ給ヘト申ケル時、邦綱卿被參タリ、アヤシト思ハレケレ共、人々口ヲ閉テ申事モナカリケルニ、重衡朝臣イカニゾヤト阿翁ニサハヤキケレバ、打ウナヅキテ心得タル體也ケレ共、御仲ノ人々ハ其心ヲ得ズ、國莊ヲ給リ給ヘル歟、イカバカリノ悅シ給ヘルゾ、イト審ナグ思ハレタリ。

〔玉海〕治承五年閏二月五日辛亥、禪門○

平

薨逝一定也云云、

略

已刻大夫史隆職來、雖念三誦之間、

流世間不實、召前問雜事語云、今日參陣座少辨行隆密語之去夜法皇宮武士群集之由有風聞、人以爲法皇與前幕下○平有變異之心、誠是天下喪亡之至也云云、昨日朝禪門以圓實法眼、滅國家之祚、奏法皇云、愚僧早世之後、萬事仰付宗盛了、每事仰合可被計行也云云者、勅答不詳、爰禪門有含怨之色、召行隆卿仰云、天下事偏前幕下之最也、不可有異論云云、非管東國之寇又有中夏之亂歟云云、小時退下了、相續類業來、余始念誦了、仍不謁也、

准三宮入道前太政大臣清盛、

法名淨海

者、生累葉武士之家、勇名被世、平治亂逆以後、天下之權偏在彼私

門、長女者、始備妻后而爲國母、次女兩人共爲執政之家室、長嫡重盛、次男宗盛、或昇丞相或帶將軍、次子息、昇進恣心、凡過分之榮幸、冠絕古今者歟、就中去年以降、強大之成勢滿於海內、苛酷之刑罰普於天下、遂衆庶之怨氣、答天四方之句奴成變、何況魔滅天台法相之佛法哉、非煙滅佛像堂舍顯密正教、悉成灰燼、跡相承之口決、抄出諸宗之深義秘密之奧旨、併遭回祿如此之逆罪、無非彼之唇吻、情案修因感果之理爲敵軍亡其身被懸首於戈鋒、可驅骸於戰場處、免弓矢刀劍之難、病席終命、誠宿運之貴、非人意之所測歟、但神罰冥罰之條、所以可知日月不墮地爰而有憑者歟、此後之天下安否、只奉仕伊勢大神宮春日大明神耳、

シツルヅヤ、心憂トゾ思召ケル、今ハ世ノ事モシロシメシ度モナシ、花山法皇ノ御坐ケン様ニ、山
山寺々ヲモ修行シテ、任御心バヤトゾ被思召ケル、鳥羽殿ニテハサスガ廣カリシカバ、慰ム御事
モ有シ物ヲ、由ナク出ニケル者哉ト思食ケルモ、責テノ御事ト哀ナリ、○中柏原天皇ト申ハ、平家
ノ先祖ニ御坐ス、先祖ノサシモ執シ思召ケル都ヲ、他國ヘ移シ給シモ、キヲカナシ此京ヲバ平安城ト
テ、文字ニハ平ラ安キ城ト書リ、旁以難捨、就中主上上皇共ニ平家ノ外孫ニテ御坐、君モ爭カ捨サ
セ給ベキ、是ハ國々ノ夷共責上テ、平家都ニ跡ヲトメズ、山野ニ交ベキ瑞相ニヤトゾ私語ケル、
將軍塚ノ守護神爭カ可不成、恐只今世ハ失ナンズ心憂事也、平家專モテハヤスベキ都ヲヤ、入道
○平天下ヲ手ニ把リ、心ノ儘ニ振舞給ケル餘リ、當帝ヲ奉下、我孫ヲ位ニ付進セ、法皇ノ第二ノ皇
○盛子高倉宮ヲ奉誅、御首ヲ切、太政大臣ノ官ヲ止テ、關白殿○藤原ヲ奉流、我智近衛殿ヲ攝政ニ奉成、
摠ジテ卿相雲客北面ノ下薦ニ至マデ、或ハ流シ、或ハ死シ、自由ノ惡行數ヲ盡シテ、今又及遷都ケ
ルコソ不思議ナレ、守護ノ佛神豈寧非禮給ハンヤ、

〔源平盛衰記 二十三〕新院嚴嶋御幸附入道奉勸起請事

治承四年九月廿一日新院○高又嚴嶋ノ御幸アリ、御伴ニハ入道大相國、○平前右大將宗盛、大納
言邦綱、藤大納言實國、源宰相中通親、頭左中將重衡、宮内少輔棟範、安藝守在經已下八人也、○中
彼嶋ニ著セ給テ、御參社以前ニ、入道ト宗盛ト父子二人、院ノ御前ニ參ヨリテ、自餘ノ人々ヲ被
除テ、入道被申ケルハ、東國ノ亂道ニ依テ、賴朝ヲ可追討之由御宣下ノ上ハ不審候ハチドモ、源氏
ニ一ツ御心アラジト御起請アソバシテ、入道ニ給御座候ヘ、心安存ジイヨ、御宮仕中候ベシ、
此言聞召入ラレズハ、君ヲバ此嶋ニ捨置進テ、歸上候ナント申ケレバ、新院少シモサワガセ給ハ
ズ、良御計有テ、今メカシ、年來何事ヲカ入道ノソレ申事背タル、今開始テ二心アル身ト思フラン
コソ本意ナケレバ、彼起請イトヤスシ、イカニモイハンニ隨フベシト仰有ケレバ、前右大將親紙

國此よしを承て、さては君は小がうゆゑにおぼしめし、まづませ給ひたんなり、さらんに取ては
 どて、御かいまやくの女房たちをも參らせられず、參内まいたまふ人々をもねまされければ、入道の
 けんゐにはゝかつて、參りかよふ臣下もなし、男女うちひそめて禁中いさゝしうを見えし、
 略主上はかやうの事共に御なうつかせ給ひて、つひにかくれさせ給ひけるとかや、

〔源平盛衰記 十二〕安徳天皇御位事

二月十九日、治承四年春宮位ニ即セ給、安徳天皇ト申、僅ニ三歳ニゾ成セ給、イツシカナリ、先帝高倉

モ異ナル御事モマシマサチ共、我御孫子ヲ付奉ランタメニオロシ奉ル、是モ太政入道治盛ノ萬
 事思様ナル故也ト、人々私語傾申ケリ、平大納言時忠卿聞之被申ケルハ、ナジカハイツシカ也ト
 申ベキ、異國ニハ周ノ成王三歳、晉穆帝二歳皆襁褓ノ中ニ褰レテ、衣帶ヲ正クセザリシカ共、或ハ
 攝政負テ位ニツキ、或ハ母后懷テ朝ニ望トイヘリ、後漢孝殤皇帝ハ、生テ百餘日ニテ踐祚アリキ、
 我朝ニハ近衛院三歳、六條院二歳、コレ皆天子ノ位ヲ踐給フ、非無前蹤、ナジカハ人ノ傾申ベキト
 嘆リ宣ケレバ、時ノ才人達、穴オソロシ、物云ハジ、去バ其ハ吉例ニヤハ有トゾツバヤケル、
 〔保建大記 三〕臣願曰、略淨海緣亂離建奇功、以舉朝無識柄用太過、專務鴟張輕蔑王家、終幽閉法
 皇、脅迫上皇、貶斥丞相大臣、以擁立外孫襁褓之孺子、罪惡貫盈、弑逆且旦夕、

〔源平盛衰記 十六〕遷都附將軍塚附司天臺事

治承四年五月廿九日ニハ、都遷アルベキ由有其沙汰、中法皇後白河ヲバ、福原ニ三間ナル板屋ヲ
 造テ、四面ニ波多板シ廻シテ、南ニ向テ一口ツ開タルニゾ居エ進ラセケル、筑紫武士石戸ノ諸卿
 並ニ方子ニ、佐原ノ大夫種益奉守護ケリ、一日ニ二度、如形供御ヲ進セケリ、斯リケレバ此御所ヲ
 バ、帝ハ樓御所トゾ申ケル、守護ノ武士嚴シカリケレバ、輒人モ不參、鳥羽殿ヲ出サセ給シカバ、
 タツログヤラント思召ケルニ、高倉宮ノ御謀叛ノ事出來テ、又カクノミ渡ラセ給ヘバ、コハ如何

十七日、被行除目、太政大臣師長已下、至于檢非違使信盛、卅九人解官、多是院中祇候之輩也、此中大相國可追却關外之由被宣下、十八日、前關白左遷太宰權帥、遣大夫尉康綱令追之、即以出門隨身厚景侍四五人在共、難人滿途中、見之各叫喚、前關白於路頭出家云々、前相撲守業房配流伊豆國、但逐電不逢追使、前大納言資賢卿并雅賢資時、信賢可追却京中之由被仰下也、廿日、太上法皇白河渡御、鳥羽殿、非常儀入道大相國押申行之成範、脩範等卿、法印靜賢、女房兩三之外不參入、閉門戸不通人、武士奉守護之、

〔平家物語〕六 小がうの事

中宮平の御方より、こがうと申女ばうを參らせらる、そも此女ばうと申は、櫻町の中なこんまげのりの卿のむすめ、さん中一のび人ならびなきことの上手にてぞまじくける、れいせいの大納言たかふさ卿、いまだ少將なりし時、見そめたりし女ばうなり、はじめは歌をよみ文をばつくされけれ共、玉づさのかずのみつもりて、なびくけしきもなかりしが、さすがなさけによわる心にや、つひになびさ給ひけり、されども今は君高へめされ參らせて、せんかたもなくかなしくて、あかぬわかれの涙にや、袖まはたれてはしあへず、少將略○中今は此よにてあひみん事もかたければ、いきてゐて、とにかくに人をこひしと思はんより、たゞまなんどのみぞねがはれける、入道相國清盛○平此よしをつたへ聞給ひて、中宮と申も御むすめ、冷泉の少將も又むこなり、小がうの殿に二人のむこをとられては、よの中よかるまじ、いかにもして小がうの殿をめし出いて失はんとぞ宣ひける、小がう此よしを聞給ひて、我身のうへはとにもかくにもなりなん、君の御ため御心ぐるしと思はれければ、ある夜内裏をばまぎれ出て、ゆくへもまらずぞうせられける、主上御なげさなのめならず、ひるはよるのおどいにのみいらせ給ひて、御なみだにまづさせおはします、よるは南殿に出御なりて、月のひかりを御らんじて、ぞなぐさせまじくける、入道相

止權中納言中將等

同師家

上卿權中納言雅賴職事中宮權亮通親詔書宣命等權辨兼光作云云、

余○藤原披見此狀之處仰天伏地猶以不信受夢歟非夢歟無所辨存此事由來者法皇收公越前國

放○藤原入道內大臣重德知并被補白川殿倉預前大舍人已上兩事法皇過意云云三位中將師家越二位

中將基通任中納言師家年僅八歲古今無例是博陸○基之罪科也凡此外法皇與博陸同意被亂國

政之由入道相國攀緣云云然之間昨旦夕禪門率數千騎隨兵入洛之後天下鼓騷洛中遑動故不可

云今日及昔黑中宮○平東宮○安兩宮忽欲幸八條亭自被奉相具可赴鎮西方之由風聞已兩宮行

啓供奉諸司出車已下參集禁中騷動云云爰禪門使重衛朝臣奏內裏云近日恐僧偏以弄假見朝政

之體不可安堵世間蒙罪科之後悔而可無益不如賜身暇隱居邊地仍爲奉具兩宮所催儲行啓也者

忽遣勅使被仰此儀可被行之狀即以召上卿已下有詔書宣命等之沙汰云云其後頗事似和氣然而猶又

議定之後被十六日庚午昨日以法印靜賢爲御使兩度被陳子細云云其後頗事似和氣然而猶又

有可被擯召院近臣等之由謳歌云云凡近日之巷說縱橫無極難存一定歟抑此關白之時家貽瑕玷

職付大疵於亂代者天子之位攝籙臣太以無益云云

百練抄八治承三年十一月十五日世間嗷々武士滿洛中入道大相國○平奉怨公家率一族可下

向鎮西之由風聞上皇○後以法印靜賢自今以後萬機不可有御口入之由被仰遣之今日關白前太

政大臣○藤原并權中納言師家解官以二位中將基通卿可爲關白內大臣氏長者之由宣下不被行

節會被任大臣例今度始之未曾有之珍事也

或記云上皇與關白可令減平家黨類之由有密謀之由有其聞其上師家卿超二位中將任中納言

其傳云々

位ぢもくと申は、院内の御はからひにもあらず、攝政關白の御せいはいにもおよばず、たゞ一向平家のまゝにて有ければ、徳大寺花山の院もなり給はず、入道相國のちやく男小松殿、○重盛其時はいまだ大納言の右大將にてまじくけるが、左にうつりて、次男むねもり中納言にておはせしが、ずはいのまやうらうをてうをつきて、右にくはゝられけるこそ申ばかりもなかりしか、中にも徳大寺殿は一の大納言に花族えいゆう才覺ゆうちやう、けちやくにてまじくけるが、平家の次男むねもりの卿に、かゝいこえられ給ひぬるこそいこんのまだいなれ、定て御出家などもや有んずらんと人々さゝやさわはれけれども、徳大寺殿はまばらく世のならんやうをみるとて、大納言を辞して籠居とぞ聞えし、新大納言なりちかの卿の宣ひけるは、徳大寺花山院にこえられたらんはいかにせん、平家の次男宗もりの卿にかゝいこえられぬるこそいこんのまだいなれ、いかにもして平家をほろぼし、本もうをどげんと宣ひけるこそおそろしけれ、

〔玉海〕治承三年十一月十四日戊辰、今日入道相國、○平盛入洛、宗盛卿去十一日首途、令參嚴嶋、而自路

呼還、相共上洛、武士數千騎、人不知何事、凡京中騷動無雙、今夜出仕、雖非無所恐、爲勤公事出仕、不可有横災之由、深存忠、仍令企參仕之處、果以無爲、凡洛中人家運資財於東西、誠以物恐、亂世之至也、十五日己巳、凡世間物恐無極云云、無聞實說、子刻人傳云、天下大事出來云云、不聞委事間、寅刻大夫史隆職注送云、

關白藤基通

内大臣同

氏長者同

止關白

藤基房

〔神皇正統記高倉〕清盛權を專にせし事は、殊更にこの御代の事なり、其女徳子入内して女御とす、即ち立后有りき、未つかたやうく處々に反亂の聞え有りき、清盛一家非分の業天意に背きけるにこそ、嫡子内大臣重盛は心ばへ賢くて、父の惡行なども諫めとめけるさへ世を早くしぬ、彌驕をきはめ權をほしきまゝにす、時の執柄にて、菩提院の關白基房の大臣おはせしも、中りひよろしからぬ事ありて、太宰の權帥にうつして配流せらる、妙音院の師長の大臣も京中を出ださる、その外に罪せらるゝ人多かりき、略中清盛彌惡行をのみなしければ、主上深く歎かせ給ふ、俄に遜位の事ありしも、世を厭はせましくける故とぞ。

〔平家物語〕清水えんまやうの事

仁安三年三月廿日の日、新帝高倉大とく殿にして御そくむあり、此君のくらゐにつかせ給ひぬるは、いよゝ平家の榮花とぞみえし、國母建春門院滋子と申は、入道相國清盛の北のかた、八條の二位殿の御いもうと也、又平大納言時忠の卿と申も、此女院の御兄なるうへ、内の御外せさなり、内外につけてまづけんの臣とぞみえし、其比のまよゐちもくと申も、偏に此時忠の卿のまゝなりけり、やうきひがさいはひし時、やうこくちうがさかえしとぞし、世の覺え時のきらめでたかりき、入道相國天下の大小事をの給ひあはせられければ、時の人平くわんばくとぞ申ける。

〔平家物語〕まゝの谷の事

嘉應も三年に成にけり、正月五日の日、主上高倉御げんふく有て、略中入道相國清盛の御むすめ、子女御に参らせ給ふ御とし十五さい、法皇白河院御猶子のきなり、妙音院殿師長其比はいまだ内大臣の左大將にてましくけるが、大將をまし申させ給ふ事有けり、ときに徳大寺の大納言玄つていの卿、其仁にあひあたり給ふ、又花山の院の中納言兼まきの卿も所もう有、その外故中のみかきの藤中納言家成の卿の三男、新大納言なりちかの卿もひらに申さる、略中其比の叙

ケリ、如何ナル賢王聖主ノ御政ヲモ、攝政關白ノ成敗ナレドモ、何トナク世ニアマサレタル徒者
ナンドノ、謗リ傾ケ申事ハ常ノ習ヅカシ、サレドモ此入道ノ世ノ間ハ、聊モ忽緒ニ申者ナカリケ
リ、其故ハ入道ノ計ヒニテ、十四五若ハ十六七計ナル童部ノ髮ヲ頸ノ廻ニ切ツ、三百人被召仕
ケリ、童ニモアラズ、法師ニモアラズ、コハ何者ノ貌ヤラン、一色ニ長絹ノ直垂ヲ著ル時ハ、褐ノ布
袴ヲキセ、一色ニ繡物ノ直垂ヲ著時ハ、赤袴ヲキセ、梅ノ裾ノ三尺計ナルヲ、手モト白ク汰テ右ニ
持、鳥ヲ一羽ヅ、鈴付ノ羽ニ赤符ヲ付テ、左ノ手ニスエサセテ、面々ニモタセテ、明テモ暮テモ遊
行セシム、是ハ靈鳥頭ノミサキ者トテ、大會宴ノ珠童ヲ學レタリ、又ハ耳聞也、モシ淨海ガアタリ
ニ意趣アラバ、忽緒ニ云者アルベシ、其者ヲバ聞出シテ申モ上ヨ、相尋ントノ給ケレバ、京中ノ條
里小路門々戸々耳ヲ峙思モ思ハヌモ、其アタリノ事ヲ云ヲバ聞出シ申ケレバ、答ナキアタリヲ
モ多ク損ジケリ、最冷クゾ在ケル、不祥ト云モ愚也、入道殿ノ禿ト云ケレハ、京中ニハ又モナキ高
家ノ者也、九重白川ノ在家人多ク大事ヲシテ、子孫ヲ禿ニ入ケレバ、三百人落中ニ充滿タリ、世ヲ
趨ル馬牛車、宜シキ輿車モ道ヲヨキテゾ通行ケル、禿ガ申事ヲバ、善惡ヲ糺サズ、入道許容シ給ケレバ、上
手ヲツキ腰ヲカハメ、走ノキテゾ通行ケル、禿ガ申事ヲバ、善惡ヲ糺サズ、入道許容シ給ケレバ、上
下萬人是ニ追從シテ、善モ惡モ平家ノ事ヲバ云ズ、又禿ニ惡シト思ハレタル者ハ、入道殿ニ讒セ
ラレテ、咎ナクシテ多ク損ズル者モ有ケリ、

〔玉海〕仁安三年二月十五日戊申、今日上皇

白河後

御下向、本聞明日之由、而俄有御下向、依相國

○平危

急歟、即密幸六波羅第云々、十六日己酉、亥刻許、或人告送云、來十九日可有讓位事、於閑院可有其

事云云、十七日庚戌、未刻許、參東宮、相合女房談讓位事、策昨日俄出來事云云、上皇有思食事、御出

歟、且因之令急給、又前大相國入道所惱已危急、雖不增日比、更非有滅氣、且彼人天亡之後、天下可亂、

依如此等事、頗急思食事歟云云、十九日壬子、今日有御讓位事、○六

かへらざるは、名行のやふれをめしによれる事とぞ見えたる、かくてしばし鎮まれりしに、主上
 上皇^{○後}御中惡しくて、主上の外舅大納言經宗^後に召還されて、大將までなりき、御めのと子の別當惟方等、上
 皇の御意に背きければ、清盛朝臣に仰せて召し捕へられ、配所に遣はさる、これより清盛天下の
 權をはしきまゝにして、程なく太政大臣にあがり、その子大臣の大將になり、剩へ兄弟左右の大
 將にて並べりき、^{○中}天下の諸國は、なかば過ぐるまで家領となし、官位は多く一門家僕にふさ
 げたり、王室の權、更になきが如くになりぬ、

〔源平盛衰記〕清盛捕化鳥井一族官位昇進付禿童并王莽事

清盛^{○中}仁安元年任内大臣兼宣旨并櫻祿ナカリケレ共、忠義公^{○藤原}ノ例トゾ聞エシ、同二年

ニ太政大臣ニ上ル、左右ヲ經ズシテ此位ニ至ル事、九條大相國信長公ノ外、搥ジテ先蹤ナシ、大將
 ニアラキ共、兵仗ヲ賜テ隨身ヲ召シシテ執政ノ人ノ如シ、輦車ニ乗テ宮中ヲ出入ス、偏ニ女御入
 内ノ儀式也、太政大臣ハ訓導之禮重ク、儀刑之密深ケレバ、地勢大ナリトイヘ共、賢慮不足者、無當
 其仁、雖天才高、政理不明者、猶非其器、非其人、驥ベキ官ニアラザレドモ、一天ノ安危、由身萬機ノ理
 亂在掌ケレバ、不及子細、親子兄弟大國ヲ賜リ、兼官重職ニ任ジケル上、三品ノ階級ニ至ルマデ、尤
 代ノ先蹤ヲ越、角榮ケルヲユ、シキ事ト思シ程ニ、清盛仁安三年十一月十一日、歳五十一ニテ重
 病ニ侵サレ、爲存命忽ニ出家入道ス、法名ハ靜海ナリ、其驗ニヤ宿病立ドコロニ愈テ、天命ヲ全ス、
 人ノ從ヒ付事ハ、吹風ノ草木ヲ靡スガ如ク、世ノ偏ク仰グ事、降雨ノ國土ヲ潤ニ異ナラズ、サレバ
 六波羅殿ノ御一家ノ公達ト云テケレバ、花族モ英才モ、面ヲ向ヘ肩ヲ並ル人無リケリ、太政入道
 ノ小舅ニ、平大納言時忠卿ノ常ノ言ニ、此一門ニアラス者ハ、男モ女モ尼法師モ、人非人トゾ被申
 ケル、斯リケレバ如何ナル人モ相構テ、其一門其ユカリニムスボ、レントゾシケル、^{○中}サレバ
 烏帽子ノタメヤウ、衣紋ノカ、リヨリ始テ、何事モ六波羅様ト云テケレバ、天下ノ人皆學之隨之

殿におはせられけるは、略中我身德行なしといへども、十善のよくんにこたへて、せんでい略鳥羽の太子とむまれ、世きやうはく也といへども、萬世うのはう位をかたじけなくす、上皇の尊號に
つらなるべくは、重仁こそ人かすに入べき處に、文にもあらず、武にもあらず、四の宮に位をこえ
られて、父子ともにうれひにまづみ給ふ、まかりといへども、故院おはしなしたる程はちからな
く、二年の春秋をおくれり、今舊院登遐の後、我天下をうばひ、む事何のはかりか有べき、定て
神慮にもかまひ、人望にもそむかじ物をとおはせられければ、左府もどより此君代をとらせ給
は、我身攝録において、はうたがひなしとよろこびて、もつとも思召立處まかるべしとぞす、
め申されける、

【愚管抄】主上二條院の外舅にて、大納言經宗、ことに鳥羽もつけまゐらせられたりける惟方、檢
非違使別當にて在ける、この二人主上にはつきまゐらせて、信賴同心のよしにて有ける、略中後
白河院をば、その元永曆正月六日、八條堀河の顯長卿が家におはしなさせけるに、その家には棧
敷の有けるにて、大路御覽して、下乗なぞ召寄られければ、經宗惟方なぞさだして堀河の棧敷を
板にて外よりむすくと打つけてけり、かやうの事どもにて、大方此二人して世を院にしらせ
まゐらせし、内の御沙汰にてあるべしと云けるを聞召て、院は清盛をめして、わが世にありなし
はこの准方經宗にあり、是ら思ふ程いましてまゐらせよとなく、仰有ければ、その御前に
は法性寺殿もおはしなしたるかや、清盛又思ふやうども有けん、忠景爲長と云二人の郎等し
て、この二人をからめとりて、陣頭に御幸なして、御車の前に引すゑて、おめかせてまゐらせたり
けるなぞ世には沙汰しき、その有さまはまがしければ、かきつくべからず、人皆しれるなる
べし、さてやがて經宗をば阿波國惟方をば長門國へ流してけり、

【神皇正統記】二條保元平治よりこのかた天下亂れて、武用盛に、王位輕くなりぬ、未だ太平の世に

一人内覽になりなれどこそは思はれけん、例にまかせて大臣内覽の辭表を上たりけるを返しも給はらで、後次の年正月に左大臣ばかりはもとのごとしとて有けり。略中主上の御事悲しみながら、例にまかせて雅仁親王新院御所におはしましけるむかへまゐらせて、東三條南の町高松殿にて御讓位の儀めでたく行はれにけり、されば世をまろしめす太上天皇と、攝籙の臣の親の前關白殿ともに、兄を惜みて弟をかたひさ給て、かゝる世中の最大事を行はれけるが、世の末のかくなるべき時運もつくりあはせてければ、鳥羽院知足院一御心になりて、しばし天下の有けるを、この巨害のこの世をばかくなしたりける也、されど鳥羽院の御在生までは、まのあたり内亂合戦はなくてやみにけり、

〔保元物語〕新院御むほんおぼしめしたつ事

新院御日ごろ思召けるは、昔より位をつぎゆづりをうくる事、かゝるすぢやくそんにはよら

ねども、其うつはものをえらび外せきのあんふをもたづねらるゝにてこそあれ、是は只常腹の

てうあいといふばかりをもつて、近衛院に位をおしとられて、うらみふかゝ過しところに、せん

てい體仁の親王御近かくれ給ぬる上は、重仁親王皇子繼こそ帝位にそまはり給ふべきに、思ひ

の外に、又四の宮白河院にこえられぬるこそ口をしけれど、御いさきほりありければ、御心のゆか

せ給ふ事とては、近習の人々にいかにせんするぞと常に御だんがふ有けり、宇治の左大臣賴長

と申は、知足院禪閣殿下たゞさねこの三男にておはします。略中關白殿忠と略中御兄弟の

上、父子の御けいやくにて、れいぎふかくおはしましけれども、後には御中あしきを聞えし、され

ば左大臣殿思食けるは、一院鳥羽かくれさせ給ひぬ、今新院の一の宮まげひと親王を位につけ

奉りて、天下を我まゝにとりおこなはゞやと思ひ立給ひければ、つねに新院へ参り、御殿居有け

れば、上皇も此大臣を深く御たのみ有て、おぼせあはせらるゝ事ねんころなり、或夜新院左大臣

とて、内覽の宜旨ばかり、だされにけり、あさましきことかなと一天のあやしみになりぬ、さて上々の御中あしきことは、崇徳院の位におはしましけるに、鳥羽院は長實中納言がむすめをことに最愛に思召て、初は三位せさせておはしましけるを東宮にたて、崇徳の后には法性寺殿のむすめまゐられたる、皇嘉門院也、その御子のよしにて、外祖の儀にてよく、さだしまゐらせよと仰られければ、ことに心に入て、誠の外祖のはしさに、さだしまゐらせけるに、その定にて讓位候べしと申されければ、崇徳院はさ候べしとて、永治元年十二月に御讓位ありける、保延五年八月に東宮^衛^近にはたゝせ給にけり、その宣命に皇太子とぞあらんすらんと思召けるを、皇太弟とかゝせられけるとき、こはいかにと又崇徳院の御意趣にこもりけり、さて近衛院位にておはしましけるに、當今おとなしくならせ給ひて、賴長の公内覽の臣にて、左大臣一の上にて、節會の内辨さらゝとつとめて、御堂のむかしこのもしくて有ける、節會ごとに主上御帳に出おはし、ます事のなくて、引かうふりてとのごもりゝして、ひとへに違例になりにけり、院よりいかに申させ給ひけるも、きかせおはし、さす又關白はかゞに成候なんすと返々申されけるをも、きかせ給はぬ事にて有ければ、猶これはこの關白がすると思召て、御氣色あしかりけり、されど法性寺殿はすこしも是を思ひ居たるけもなく、備前國ばかりうちしりて、關白内覽をばどゝひる人もなかりければ、出仕うちしておはしけり、^略^中かやうにてするは、ききに、この左府、悪左府といふ名を天下の諸人つけたりければ、そのまゐるしあけくれの事にて有けるに、法勝寺御幸に、實衛中納言が車やふり、又院第一の寵人家成中納言が家つるふくしたりければ、院の御心にうとみ思召にけり、兄の殿に誠によくいひけるものをと思食ながらさて過けり、^略^中さる程に主上近衛院十七にて、久壽二年七月にうせ給にけるは、ひとへにこの左府が呪咀なりと人いひけり、院もおぼしめしたりけり、證據ども、有けるにや、かくうせさせ給ねれば、今は我身は

〔大日本史贊藪三〕藤原道長傳贊

贊曰略中。賴通敎通、競以侈靡相尙、峻宇雕牆、韋負之所不能警、其無遠略、雖三尺童子、猶能知之、況

後三條之英邁乎、然賴通屏居宇治、假蹇不奉朝命、敎通脅以春日神威、則雖英邁之君、莫能如之何、權臣錯制人主、一至於此、吁、可畏哉、

〔愚管抄四〕白河院は、堀河院に御讓位有て、京極の大殿師實は、又後二條殿子師實に執政を譲りておはする程に、堀河院御成人、後二條殿又殊の外に引はりたる人にて、世の政事、太上天皇にも

大殿にもいども申さでせらるゝ事も、まじりたりけるにやとぞ申める、

〔愚管抄四〕賴長の公、日本第一大學生、和漢の才にとみて腹あしく、よろづにきはどき人也けるが、てゝの殿忠實に最愛也けり、一日攝籙内覽をえばやと、どあまりに申されけるを、一目えさ

せばやとおぼして、子の法性寺殿兄忠通にさも有なんや、後には汝が子孫にこそかへさんすれど、たびゝねんごろに申されけるを、法性寺殿のともかくもその御返事を申されざりければ、

後にはやすからずおぼして、鳥羽院にこの由を申て、叶へかなはずは次の事にて、存候はんやうかへりごとの間度候、上より仰たびて申狀をさかせられ候へど申されければ、この由仰られた

りける御返事に、存候むねはとて、年のきは賴長が心ばへはしかと、候也、かれ君の御うしろみになり候は、天下の損じ候ぬべし、このやうを申候は、いよく腹立れ候は、不孝にも候

べし、父の申候へばとて承諾し候は、世の爲不忠になり候ぬべし、仰天して候など申されたりけるをつかはされたりければ、かくも返事はありけるは、など我云には返事だになさどて、彌ふ

かく思つゝ、藤氏長者は君のしろしめさぬ事也とて、久安六年九月廿五日に藤原長者をどり返して、東三條におはし、左府に朱器臺盤わたされにけり、さて院をとかくすかし、あらせ

られけるは、まにみそかに上卿などもよはして、久安七年正月に内覽はならびたる例もあれば

〔愚管抄〕^四御堂^{○藤原道長}御子の中に、能信大納言といふ人有けり、閑院の中納言^{○公}のむすめ^{○茂子}を子にして有けるを、後三條の后にはまゐらせたる人なり、^{○中}白川院のつねに能信をば、故東宮大夫殿おはせずば、我身はかゝる運もあらまじやと仰られけるには、必々殿の文字をつけて仰られけり、やむことなき事也、

〔江談抄〕^三壺切は、昔名將劔也、張良劔云云、雄劔ト云、僻事也云云、資仲所説也、

劔ハ壺切、但壺切焼亡歟、未詳、件劔ハ累代東宮渡物也、而後三條院東宮之時、廿三年之間、入道殿^{○藤原通敏}不令獻給云云、其故ハ藤氏腹東宮之寶物ナレバ、何此東宮可令得給乎云云、仍後三條被仰之様、壺切我持無益也、更ニホシカラズト被仰ケリ、サテ遂ニ御即位ノ後、コソ被追ケレ、是皆古今所

傳談也云云、^{○又見續古事談}

〔神皇正統記〕^{白河}宇治の大臣^{○藤原賴通}の世となりて、三代の君^{○後一條、後冷泉、後朱雀}の執政にて、五十餘年權

を専らにせらる、先代には關白の後は如在の禮にてありしに、あまりなるはせになりければ、にや、後三條院の坊の御時より、あしきまにおぼしめすよしきこえて、御中らひあしくて、あやふみおぼしめすほどの事になむありける、踐祚の時、關白をやめて宇治にこもられぬ、弟の二條の教通の大臣關白せられしが、こどのはかにその權もなくおほしきまとしてこの御代^{○白河}には、院にて政をきかされたまへば、執柄はたゞ職にそまはりたるばかりになりぬ、

〔大日本史贊〕後三條天皇紀贊

贊曰、一條以來、政歸戚里、黨親連體、根據於朝廷、帝以非藤原氏出、前星始易動搖、而光芒既著於虛切劍、足使權貴望而畏之也、及躬總大政、以陽剛之才、應虎變之象、克己勵精、宵衣旰食、宜其君子豹變、小人革面、而炳煥明盛之治、如日月之麗于天也、大江匡房所謂可比隆於承和延喜者、可以稱頌帝德、而紬繹政理、專尚節儉、吏稱其職、民安其業、殆有漢宣之風、而可謂中興良主、追蹤近江朝廷矣、

東宮就明親王也而有事障于今未設殿而
東宮辭退後今日被派新宮後朱雀殿似有靈感
將公成朝臣惟亮公成朝臣明令持御藏小舍人共信參宮御方仍於殿上口取之也少將取御劔參

進畫御座方大夫即進請彼御劍持入御在所之後亮惟憲朝臣以白褂一重并袴給少將云々

進畫御座方大夫即進請彼御劍持入御在所之後亮惟憲朝臣以白褂一重并袴給少將云々

〔小右記〕萬壽元年九月廿二日丁未昨日右近中將師房叙從三位者十九日行幸叙正四位下元從四位下

階、三箇日內越階只叙三位未曾有、以關白賴通藤原養子姓異禪室道長藤原所叙歟、可感〇如何

〔小右記〕萬壽二年七月十一日辛卯、去九日丹生使藏人檢非違使棟仲、大納言能信卿道。藤原山城國

莊雜人打破小舍人頭濫行無極仍差遣使官人云々天下田地悉爲一家領所須無立錫地歟可悲之

世也。

〔小右記〕萬壽二年八月十二日辛酉禪閣○藤原道長以左衛門志爲長令取豐樂殿鴛尾豐樂守衛士之有

指宣旨軟，陳不取詞，爲長打調衛士，遂取下鵝尾，先取一鵝尾，造木鵝尾，可被置云。昨修理進豐高所申。

宰相密談，伴鴉尾以鉛鑄造，以鉛爲宛法成寺瓦料云々，萬代之皇居一人自由乎，悲哉々々

〔續世繼司〕後三條院中 なる御子におはしなし、ときちの御門後朱雀院さきのとしの冬

よりわづらはせ給て、むつきの十日寛徳二年あまりのころ位さへ給て、みこの宮冷泉後につづり

申されたまふことばかりにて春宮のたゞせ給事はともかくもさこえざりけるを能信大納言

とて、宇治どの頼通の御おどとの、たかなつ源明子の、はらにおはせしが御前にまゐり

て、二宮^{三〇}をいづれの僧にかつたてまつり侍るべきとこえさせ給ひけるに、坊にこそは

たてめ、僧にはいかゞつけん、關白○の春宮の事はまづかにといへば、のちにこそはおはせ

られけるをけふた、せ給はずばかなふまじきことに侍りと申給ひければさらばけふとてな

ん春宮はたゞせ給ひけるやがて大夫にはその能信大納言なりたをへりき君の御爲たゆみな

くすゝめ奉り給へりけん、いとありがたし、

府亦洩達資頼給官并内舍人事等示御返事云資頼事承之隨使身内舍人事早可出申文者故殿閣
白時准攝政大臣可見官奏事又々可聞案内者大略申了秉燭後資平來曰准攝政之宣旨明日可被
下也大納言公任候左府即可奉下之由被命此卿略中准攝政例見官奏事可行除目事可行一上事
等明日可被下仰也是相府詞也無御惱問詞又有被仰之類歟亦無相違歟今日主上被仰云我可避
位然而忽不思之仍讓務於左大臣若所行有非必當天譴歟是能所思得還爲彼不祥歟爲我患災也
者春宮大夫齊信云奉爲主上當時後代之無極耻辱者侍從中納言行成云春宮御代可爲攝籙臣而
俄有斯事不可被過今年歟甚愚也

〔大日本史贊載〕三條天皇紀贊

贊曰自攝政良房居外祖之重攝籙之家莫不欲生女爲后妃以徵幸宰衡之任也既進女而爲女御
由女御而冊中宮銅龍提愛一生皇子而不擇長幼不顧明闇扳而立之其意若曰是我家所生也是
我家所立也太阿之柄移於外戚歷世三公宗族盤互勢禁威懾箠執樞機而其間不能無梁冀之跋
扈揚駿之專悞雖有英明之主終莫能如之何此非一朝一夕之故席雖默麟求佑果何所益哉

〔大鏡左大臣師尹〕

このたびの東宮には

式部卿の宮

于教康

をどこそは思しめすべけれ一條院

のはかばかりしき御後見なければ東宮に當代を立て奉るなりとおほせられしかばこれもおな

じ事なりと思し定めて寛仁元年丁巳八月九日こそは九歳にて三宮

朱雀

東宮に立たせ給ひて

同月の廿三日にこそは盃切といふ大刀は内よりもて参りしか當帝位に即かせ給ひしかばす

なはち東宮にも参るべかりしをまかるべきにやありけむとかくさはりてこの年比内のをさ

め殿に候ひつるぞかし

略中故三條院度々申させ給ひしかどもとかく申しやりて奉らせざり

しどこそ聞き侍りしかされば故院もさむばれなくとも立てではどておはしなしなり

〔左經記〕寛仁元年八月廿三日戊子今朝御物忌也申二剋被渡盃切御劔於東宮

後朱雀件御劔須三御
讓位日祿渡東宮前

〔古事談^六 宅諸道〕一條院御時、以言望顯官之時、有勅許氣、而御堂^{○藤原道長}令申給云、以言者、鹿馬可

迷二世情^{上句鹿馬不變三春眠、帥內大}、ト作者也、爭洛朝恩哉云々、仍不許云々、

〔江談抄^四〕鹿鳩不變三春眠、鹿馬可迷二世情^{以言}

此句依恨暗漢雲之子細、寂感之餘、擬補藏人、雖然入道殿^{○藤原道長}并殿上人、不承引之故、不補、仍爲

放言所作也、其時殿上人諺曰、湯氣欲上云々、本姓弓削也、

〔古事談^一 道后宮〕一條院崩御ノ後、御手習ノ反古ドモノ御手宮ニ入テアリケルヲ、入道^{○藤原道長}御

覽ジケル中ニ、叢蘭欲茂、秋風吹破、王事欲章、議臣亂國トアソバシタリケルヲ、吾事ヲ思食テ、令書

給タリケリトテ、令被給ケリ、

〔愚管抄^三〕一條院ウセサセ給ヒテ後、御堂^{○藤原道長}は御遺物どものさた有けるに、御手箱の有け

るを開キ御覽ヒけるに、宸筆の宣命めかしき物をか、セおはしましたりける、はむに三光欲

明、霞重雲大精暗とあそばされたりけるを御らんじて、次々を讀せ給はで、やがて卷こめて焼

あげられにけりところ、宇治殿^{○藤原道長}は隆國^{宇治大納言}には語らせ給ひけると、隆國は去るして侍

なれ、

〔小右記〕長和四年八月四日辛巳、主上^{○三條}御目昨宜御坐由被仰、然而未供威儀饌、先日有可供之仰、

尙不快歟、^{○中略}又密語云云、仰云、讓位事左府^{○藤原道長}近日頗有催事、答云、伊勢祈後、又今年以後隨狀

可思定者、太奇事、甚恐事也、十月二日己卯、資平云、主上密々被仰云、日來左大臣頻責催讓位事、太

奇事也、又云、當時宮達不可奉立、東宮依不可堪其器、故院^{○一條}一三宮^{○後一條}足爲東宮者、於吾前所定如

此左右思慮何爲、至今讓位事都思留了、^{○中略}又被仰云、大納言公任、中納言俊賢、爲吾多不善事、催左

大臣、令責吾禪位、此事不安、仍祈申神明、口身及子孫不宜歟、十善故登寶位、而臣下何有危吾位哉、憂

心一時不休者、不可外漏、爲見合向後事所記耳、廿六日癸卯、去夜被物保重之恐、以資平令申左相

にはこよなくひきこし、廿一におはせしどきに、内大臣になし奉り給ひて、我^{○伊周}うせ給ひし年、長徳元年の事也、御病おもくなるきはに内に參給ひて、おのれかくまかりなりてさふらふほど、此内大臣伊周のおどきに、百官并天下執行の宣旨給ふべきよし申くださしめ給ひて、我は出家せさせ給ひてしかば、此内大臣殿を關白殿とて、よの人あつまり参りし程に、粟田殿^{○道}にわたりにししかば、手にするたる鷹をそらいたらむやうにてなげかせ給ふ、一家にいみじき事におぼしみだれしほどに、そのうつりつるかたも、夢のごとくにてうせ給ひにししかば、いなの入道殿^{○道}その年の五月十一日よりして、よをまろしめし、かば彼殿いとむどくにおはしえし、程に、又の年花山院の御事いできて、御官位とられて、只太宰の權帥になりて、長徳二年四月廿四日にこそはくだり給にし、御年廿三、いかばかりあはれにかなしかりし事なりな、されどげにかならずかやうの事、我おこたりてながされ給べくもあらず、よろづの事身にあまりぬる人の、もろこしにもこの國にもあるわざにぞ侍なる、むかしは北野^{○菅原}の御事ぞかしなぞいひて、はなうちかむ程もあはれに見ゆ、此殿も御さえ日本にはあまらせ給へりしかば、かゝることもおはしえすにこそはべりしか、弼式部卿宮^{○教}のむえれさせ給へる悦にこそはめしかへされ給へれ、さて大臣になぞらふる宣旨かうふらせ給ひて、あるき給ひしありさなもいと落居てもおぼえ侍らざりき、^{○中}かゝれどたい今は一宮^{○教}おはしえすをたのもしき物におぼし、よの人もさはいへど、またには追従し、おち申たりし程に、今の帝^{○後}東宮^{○朱}さしつゝきむえれさせ給へりしかば、よをおぼしくづをれて、月ごろ御病もつかせ給ひて、寛弘七年正月廿九日うせさせ給ひにしぞかし、

〔古事談〕^{王道后}寛^一後一條院未生給之間、萬人入夜參帥殿^{○藤原}依爲主上^{○一宮}後一條院生給之後、其事都絶云々、^{○教}叔父也、

さるべし、位もゆづりきこえさせ侍りぬれば、東宮にはわか宮をなん物すべうはべる、だうりのまゝならば、そちのみや^康教をこそはと思ひ侍れど、はかしくしきうしろみなど、もはべらぬばなむ、おほかたの御まつりごとにもとし比えたくなせ侍りつるをのこともに、御ようい有べきものなり、みだりごちおこたるまでも、はいどげはべりなんとし侍り、またさらぬにても、あるべき心ちもし侍らずなせ、さなへあはれに申させ給ふ、春宮も御目のごはせ給べし、さてかへらせ給ぬ、中宮はわか宮の御事さだまりぬるを、れいの人におはしまさば、せひなくうれしうこそはおぼしめすべきを、うへはだうりのまゝにどこそはおぼしつらめ、かの宮もさりともしやうにこそはあらめとおぼしつらんに、かのよのひきにより、ひきたがへおぼしおきつるにこそあらめざりとも、と御心のうちのなげかしうやすからぬ事には、これをこそおぼしめすらんといみじうこゝろぐるしういとほし、わか宮はまたいとをさなくおはしませば、おのづから御すくせにまかせてありなむ物をなせおぼしめいて、殿の御まへにも、まはこの事いかにでさうでありにしが、などなむ思はべる、かの御心の内にはとし比おぼしつらんこと、のたがふをなんいと心ぐるしうわりなきなど、なくいふばかりに申させ給へば、殿の御まへ、げにいどありがたき御ことにもおはしますかな、又さるべきことなれば、げにと思給てなんおきてつかうまつるべきを、うへおはしまして、あべい事をもをつぶしとおぼせいる、いにしへ猶あしうおほせらるゝ事なり、またいにこそとそうまかへすべきことにもはべつ、世中いとはかなう侍れば、かくてよにはべるを、りさやうならん御ありさまも、見たてまつりはべりなば、後の世もおもひなく、心やすくてこそ侍らめとなん思給ふると申させ給へば、又これもことわりの御事なれば、かへしきこえさせ給はず。

〔大鏡六 大臣道隆〕皇后宮^{〇一}定子^一と同腹の君^{〇中}、小千與君^{〇伊}とて、彼はかばらの大千代君^{〇道}

也等奉見被勸申御出家事師共出家可御供之由被契申云々○中 栗田殿○道 五箇月内自五位少辨至正三位中納言云々

花山院御出家之時天下騷動有人申大入道殿○藤原 仰云、ケシウハアラジ、ヨクモヨ云々、不令騷給云々

〔讀史餘論〕按するに道兼の妹一人○題は冷泉の女御にて、花山の第三條の母也、一人○證は圓融の后にて一條の母也、されば花山世をすて給は、我女弟のうみし皇子立給ふべし、さらば帝の外舅となりなむとの事なるべし、古事談に栗田殿五箇月の内、五位少辨より正三位中納言に至るとある事按すべし、

〔榮花物語九〕御門○一條、この頃一條院にぞおはします○中 六月○寛弘七八九日の程なり、いまはかくておりゐなむとおぼすを、さるべきさにおきて給へとおほせらるれば、殿○藤原うけたまはらせ給て、春宮に御たいめんこそは例の事なれどて、覺しおきてさせ給程に、春宮には一宮○教をどこそおぼしめすらめど、中宮○彰子の御心のうちにもおぼしおきてさせ給へるに、うへおはしおして、東宮の御たいめいそがせ給に、世人いかなべいことにかとゆかしう申思ふに、一宮の御かたぎまの人々、わか宮○一條かくてたのもしう、いみじき御なかよりひかり出させ給へる、いとわづらはしうさやうにこそはとおもひきこえさせたり、又あるひはいでやなどおしはかりきこえさせたり、東宮行啓あり、十一日にわたらせ給程、いみじうめでたし、一條院にはいかにおはしとさんとすらんよりほかのなげきに、春宮がたの殿上人など思ふ事なげなるもつねのことながら、よのあはれなることたゞ時のまにてかはりける、さてわたらせ給へれば、みすこしに御たいめありて、あるべき事ども申させ給ふにはおそろしくしうきこえさせつれど、いとさはやかによろづの事聞えさせ給へば、世の人のそらごとをもまけるかなど宮はおぼ

に花山寺におはしなして、御出家入道せさせ給へりしとぞ。略中 あはれなる事は、おりおはしな
しけるよは、ふちつほのうへの御つぼねの小きよりいでさせ給ひけるに、有明の月のいみじう
あかゝりければ、見證にこそありけれ、如何あるべからむとおはせられけるを、さりとてとまら
せ給ふべきやう侍らず、神聖寶劔わたり給ひぬるにはと、あはたのおとゞ略道さはがし申給ひ
ける事は、まだ御門出させ給はざりけるさきに、まんどはうけん手づからとりて、東宮略一の御
方に渡し奉り給ひてければ、かへりいらせ給はん事はあるまじくおぼして、まか申させ給ひけ
るとぞ、さやけさかげをまばゆくおぼしめしつる程に、月のおもてにむら雲のかゝりて、すこし
くらかりければ、わが出家は成就するなりけりとおはせられて、あゆみいでさせ給ふ程に、こき
殿の女御の御ふみの目ごろやりのこして、御身もはなたず御覽じけるをおぼしめしいで、ま
ばしとてとりいらせ給ひけるほどぞかし、あはた殿のいかにかくはおぼしめしたちぬるぞ、
たい今すぎなばおのづからさはりども、いでまうできなんとそらなきし給ひける。略中 花山寺
におはしなして、御くしおろさせ給ひてのちにぞ、あはた殿はまかりいで、おとゞにもか
はらぬすがた今一度見え、かくとあんないも申て、かならずまゐり侍らんと申給ひければ、われ
をばはかるなりけりとてこそ泣かせ給ひけれ、あはれに悲しきことなりな、日頃よく御弟子に
て侍らはんどちぎりすかし申給ひけんがおそろしさよ、東三條殿父道兼兼家は若ざる事やし給ふ
と危さに、さるべくおとなしき人々何がしかしといふいみじき源氏の武者たちをこそ御送
りにそへられたりけれ、京の程はかくれて、堤の渡りよりぞうちいでまゐりける、寺などにては
もしおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりのかたななどもぬきかけてまもり申けるとぞ、

〔古事談王一道后宮〕花山院御出家、寛和二年六月廿三日事也。略中 此御出家之發心は、弘徽殿女御公藤原為光女鍾愛之間忽薨逝、仍御悲歎之處、町尻殿藤原得便宜書世間無常法文、命終時不隨者等文、

冷泉院御位ノ時、現御心モナク御物狂ハシクノミ御坐ケレバ、ナガラヘテ天下ヲ知召サン事モイカバト思食ケルニ、御弟ノ染殿式部卿宮平ハ、西宮ノ左大臣ノ御婿ニテオハシケルヲ能人ニテ渡ラセ給フト申ケレバ、中務丞橘敏延、僧連茂、多田ノ滿仲、千晴ナド寄合テ、式部卿宮ヲ取奉テ東國ヘ越軍兵ヲ起、卽位進セント、右近ノ馬場ニテ夜々談議シケル程ニ、滿仲心替シテ此由ヲ奏聞シケルニ依テ、西宮殿ハ被流罪給ニケリ、敏延ハ播磨國ヲ賜ラン、連茂ハ一度ニ僧正ニナラントテ、斯ル事ヲ思ヒ立ケリ、滿仲返リ忠シケル事ハ、西宮殿ニテ敏延ト滿仲ト相撲ヲ取ケルニ、滿仲力劣ニテ格子ニ被抛付顔ヲ打欠タリ、滿仲不安思テ腰刀ヲ拔テ敏延ヲ突ントシケル、敏延高欄ノ根本ヲ引放テ、近竹バシヤ頭ヲ打破ラントテ立踰テ有ケレバ、滿仲不及力サテ止ヌ、時ノ人アア源氏ノ名折タリト云ケレバ、敏延ヲ失ハントテ返忠シタリトイハリ、西宮殿ハ聊モ不知召ケルヲ敏延失シ爲ニ、讒訴ノ次ニ、式部卿宮ノ御舅ナレバト讒シ申ケルヲ、一條左大臣師尹殊ニ申沙汰シテ、西宮左大臣ヲ流シテ、其所ニ成替給タリケルガ、幾程モナク聲ノ失ル病ヲシ、一月餘リ惱テ失給ニケリ、

〔大日本史贊蔽〕醍醐帝諸皇子傳贊

贊曰、醍醐諸子皆有材器○中略源高明失勢、舛望時出怨言、竟爲藤原師尹所傾、禍將不測、讒慝乘之、張大其獄、爲之株連、誣以謀反、則誠冤也、要亦其禍有所從來矣、

〔大日本史贊蔽〕村上帝皇子爲平具平二親王傳贊

贊曰、村上諸子、其稱於世者爲平具平二親王、而爲平親王以結昏於源高明、不爲攝籙者所喜、帝嘗欲傳位親王、而事多支吾、訖不能成、及外祖藤原師輔薨、益不得志、遂起橘繁延、藤原千晴等之變、而高明左降、親王別髮、勢之不可恃固然矣、

〔大鏡花一〕寛和二年丙戌六月廿三日の夜、あさむしく候し事は、人にもまられさせ給はで、みそか

宮にもたち給ふべきに、西宮殿高明源の御むこにておはしますにより、御をどのの四職院つぎの宮にひきこされさせ給へるほどの事ども、いといみじく侍り、そのゆゑは式部卿爲平御門にゐさせ給ひなば、西宮殿高明の御ぞうによの中うつりて、源氏の御さかえになりぬべければ、御をぢたちのたましひふかく非道に御おどゝをひきこし申させたてまつらせ給へるぞかし、世のなかにも宮の中にも、殿ばらのおぼしかまへけるをばいかでかはあらん、次第のまゝにこそはと、式部卿宮の御事を思ひ申たりしに、俄に若宮院融御ぐしかいけづり給へなぞ御めのとたちに仰せられて、大入道殿兼家藤原御事にうちのせたてまつりて、北の陣よりなんおはしませけるなぞこそつたへ承りしか、されば道理あるべき御かたの人たちはいかゞはおぼされけん、その此宮たちあまたおはせしかど、ことしもあれ、威儀のみこをさへせさせ給へりしよ、み給へりける人もあはれる事にこそ申けれ、そのほど西宮殿御心ちよないかゝおぼしけん、ごてどかし、おそろしくかなしき御事どもいできにしは、かやうに申も中々にいといことおろかなりや、かくやうの事は人中にてげらうの中にいとかたじけなし、ごめさぶらひなんされどなはわれながらふあひの物にておぼえ候にや、

○按ズルニ、大鏡ニ、おそろしくかなしき御事どもいで來にしかば云々ト云ヘルハ、高明ガ流竄ニ遇ヘルヲ指セルナリ、

〔大鏡三左大臣師尹〕この大臣は、忠平の大臣の五郎、小一條大臣と聞えさすめり、○中略康保四年十二月に左大臣にうつり給ふ事、西宮の筑紫へ下り給ふ御かはりなり、○中略この御事のみだれば、この小一條の大臣のいひいで給へるとぞ世の人聞えし、さてその年も過ぎず、うせ給ふなぞこそぞ申すめりしか、それもまことにや、

〔源平盛衰記十六〕滿仲讒、西宮殿事

得歟、一見セバヤト仰事アリケレバ、安候事トテ、後日書一卷持參云々、主上ハ褒ナドニヤト被思召ケルニ賦也ケリ、披御覽ジケレバ、君暗臣諛無所忍トアルヲモ、文官之間不知之取出云々、伊陟不覺在此事云々、

〔大日本史、贊叢二〕醍醐帝諸皇子傳贊

贊曰、醍醐諸子皆有材器、○中兼明親王博學能文、饒有曹植之才、居鼎鼐之重、兼傳保之任、施設將有可觀、而關白兼通欲使從兄賴忠代其位、乃尊之爲親王、其實疏而遠之、爲計深矣、親王不勝讒口之囂、賦鬼裘以見志、亦可悲矣、世謂其子伊陟闇劣、失對於一條帝、遂以賦獻、此殆不然、縱雖至愚極陋之人、豈有不知賦之爲文、裘之爲物者哉、伊陟官至納言、職兼金吾、又豈有不知文字而可以居獻納之職者哉、當此時、權相用事、轉喉觸譴、親王憤世疾邪之志、無由上達、因帝之間、冀其經覽、果使至尊動容、則寓箴規於嘲笑、明先志於泉壤、見其知而未見其愚也、

〔大鏡一〕つぎのみかど圓融院天皇と申さ○中此御門の東宮にたゝせ給ふほどはいとさゝにくゝいみじき事どもこそ侍れな、これはみな人のまろしめしたる事なれば、事もながしといめ侍りぬ、

〔讀史餘論〕按ずるに大鏡にいふ所は、爲平○村上皇子を立すして圓融を太子とし、又源高明を流せし類をさすなるべし、○中村上崩じてのち、實賴爲平をすて、圓融を太弟とせし事は、爲平も帝の同母弟なりといへども、源高明○醍醐皇子が女其妃たれば、爲平もし傳位ならば、高明のために藤氏の權を奪るべしとおもひしが故也、高明終に罪せられしも、世人實賴が此舉を議するもの多さが故にみづから疑懼の心あるが故なるべし、さらば此事は村上始にあやまりて、實賴そのあやまりをかさねし也、

〔大鏡四〕この后○村上の御はらには、式部卿の宮○爲こそは、冷泉院の御つぎに、まづ東

〔本朝文粹〕鬼裘賦并序

前中書王兼明

余龜山之下聊卜幽居欲辭官休身終老於此逮草堂之漸成爲執政者枉被陷矣君昏臣諛無處于
 黜命矣天也後代俗士必罪吾以不遂其宿志然魯隱欲營鬼裘之地而老爲公子暈被害春秋之義
 贊成其志以爲賢君後來君子若有知吾者無隱之焉因擬賈生鵬鳥賦作鬼裘賦以自廣其詞曰
 赤奮若歲清和之月陟彼西山言探其廣吟鵬賦而夕惕顧鬼裘而朝發昔隱公之逢害也誠在天之棄
 魯今我之不肖也何遭世之顛越天其何言乎四時行百物成問之不言請對以情惟天高而地廣上無
 始下無極萬物云生或消或息風雨陶冶寒暑廻薄千變萬化有何常則禍福相須憂喜不定榮枯同枝
 歌哭同徑下學人事上達天命不憂不喜其唯上聖歟伯夷得仁而飢彼無奈其盜跖以壽而終是亦若
 爲箕子囚繫比干傷夷天之與善其信未知故柳下三黜而不悔子仲長往而無歸況今趙高指鹿之日
 梁冀跋扈之時虎而冠兮匪常理之可謂鳥也鏡兮事葬倫之所資夫劒戟者嫌於柔不嫌剛而摧折梁
 棟者取於直不取撓而傾危往哲舉措無有罅縫不歎其醜雖孤漁父之謫不容何病可祖顏子之詞亦
 夫世有治亂時有否泰命有通塞迹有顯晦扶桑豈無影乎浮雲掩而乍昏繁蘭豈不芳乎秋風吹而先
 敗彼尼父之一望也歎龜山之蔽魯靈均之五顧也繞沅湘而傷楚欲問明訓於先賢以鑑幽致於萬古
 唐風雖移猶依稀於舊漢德縱厭安諂諛於新殊恨王風之不競直道之已澀聞淫蛙而長歎悲屈蠶之
 不伸俟河清日浮雲幾春凡人在世也殆花上之露如空中之雲去留無常生滅不定聚散相紛沕穆糾
 錯何可勝云不語靡言便是淨名翁之病知者默也事非玄元氏之文喪馬之老委倚伏於秋草夢蝶之
 翁任是非於春蠶冥々之理無適無莫如々之義非有非空嗟乎文王早沒吾何之恨已矣已矣命之衰
 也吾將入龜緒之巖隈歸鬼裘而去矣龜緒龜尾之故山也猶如龜尾之故山也猶如龜尾之故山也

〔古事談六〕伊陟卿村上一村上恐御宇近被召仕之間主上被仰云故宮明○兼ハ常何事ヲカセ

ラレシト伊陟申云ウサギノカワゴロモトカヤ申物ヲコソ常被玩候シカト被申ケレバ定被傳

不能張其威福、而道真左降、藤原氏獨當國、子孫世握政柄、利賞黜陟一出於其門、而其弊遂至王室陵夷、豈非帝勇於歸佛、遺落國家專用精明勸勵之力於傳法灌頂之故耶、

〔皇朝史略^五〕外史氏曰、貞觀以後、藤原氏顯權、而天子拱默受制、紀綱陵遲、宇多帝英明、有見于此、登庸菅原道真、委以大政、欲以收外戚之權、而張王室之勢矣、然帝一旦去位、而道真亦以讒去、藤原氏之權滋盛、而不可復收矣、由此觀之道真之去、就實係國家之興衰、豈得以一身之故去位哉、

〔日本政記^五〕賴義曰、國朝至文德以後、則宰執皆外戚爲之、備左右大臣大將皆以其子弟充之、而列朝紀綱一廢不復、不問其有才與否也、況望其有武功乎、武事以委源平二氏、又別其品流至不許昇殿、噫、何其與古懸絕也、

〔日本外史〕外史氏曰、及藤原氏以外戚世執政權、卿相之位、非其族人不擬、官論品流、因習成俗、庶僚百揆、概世其職、

〔神皇正統記^{朱雀}〕天皇諱は寛明醍醐十一の子、御母皇太后藤原の穩子、關白太政大臣基經の女なり、^{○中}外舅左大臣忠平^{昭宣公基經の二男、攝政せらる、○中}この御時平將門といふ者あり、上總介高望が孫なり、^{○中}執政の家に仕奉りけるが、使の宣旨をのぞみ申けり、不許なるによりて憤をばし、東國に下向して、叛逆をおこしてけり、^{○中}藤原の純友といふもの、かの將門に同意して、

西國にて叛亂せしをば、少將小野好古を遣はして追討せらる、

〔讀史餘論〕謹按、朱雀の初、東南亂るゝ事、延喜の政衰へし上、外戚の權を專にせしによれる歟、〔日本外史〕外史氏曰、自我先王之開國也、非無僭亂之臣也、而未有謀危社稷者、獨有一將門焉、^{○中}

略抑使將門得一檢非違使、則未必甘爲反賊、故天慶之亂、皆相門驕傲、壅塞上下之所致也、當其無事也、罷朝廷名爵於私門、而不恤人之失職、及其急也、乃遽揭朱紫呼號天下、使天下英雄有以窺朝廷、後世源平爭起、以功逆其上者、焉知其不基於此也、

を、まじしく御記をみん人も見あはせたらば、我ものになりておはれに侍なり、

〔政事要略 三〕阿衡事

御日記云、仁和四年九月十日云々、朕^{○宇}之博士^{○藤原}是鴻儒也、嘗以太政大臣^{○藤原}、令攝政之詔

書、令此人作之、其詔文華雅遺麗、而徒有阿衡之句、是則群邪所託意、於是公卿以下枉稱有罪之人、^{○中}

略仍召對廣和朝臣與佐世等、詳問其事、佐世以爲引阿衡者、是不預政事之義也、以此答之、欲定其事、

公卿等皆稱病退出、明日左大臣^{○源}進奏曰、太政大臣不聽事已久、連出權謀、改詔書可施行、朕聽此

言、不肯容許、大臣同請、芒刺不可知、速誅錯可防之、未然朕遂不得志、枉隨臣請濁世之事、如是可爲長

大息也、

〔梅城錄〕浪洗菩薩知鬼語、春生柳眼悅皇情、才高見忌古皆是、貝錦姜夔離織成、^{○中}

略記曰、昌泰三年庚申正月三日、帝^{○藤}行幸朱雀院與太上皇^{○宇}密議、召菅相府^{○菅原}獨對有

關白詔相府因辭因奏有召無事、人必怪訝、即以春生柳眼中爲題獻詩、是日兩帝皇行后宮各賜御

衣、榮曜無比、左大臣^{○藤原}頗變色、聖廟記曰、是年八月、公編三代家集、備御覽、帝褒寵賜詩曰、門風

自古是儒林、今日文華皆悉金、士林榮之、於是時平公忌菅氏盛名、欲陰中之、菅獨謁帝奏曰、右相有

秘畫陸下未之知乎、蓋欲廢陸下、立皇弟本康親王、而身任天下安危耳、言甚巧、聖聰惑焉、一條天皇

正曆壬辰十二月四日、安樂寺訖宣記曰、我常思昔其心不安、事元者是昌泰三年正月三日、朱雀院

行幸日事也、其事漏聽、年內成謀、明年有左遷事、

〔大日本史贊數〕宇多天皇紀贊

贊曰、^{○中}源親房稱寬平之政、有上世無爲之風、良有以也、蓋自清和溺於空寂、委政藤原氏、而相府

之權日盛、帝有省於此、故擢菅原道真於非次、而與藤原時平相並秉政、知人之鑑、經邦之猷、可謂明

遠矣、惜其崇信佛教之篤、一效清和之所爲、傳位幼主、遂其初志、幸而守豐有器、嗣主賢明、雖藤原氏

難也、光之於昌邑、以己之意立、不當立者、故輒立、輒廢、不出一歲、何其易也、基經之於陽成、則以先皇嫡嗣、不得不立也、己爲其外舅、廢之、非其利也、而廢之、不得不廢也、八歲立、輔之七年、其爲之難可知也、光孝以親王爲省卿、異於宣帝之在民間、然其疎遠、不著略同、光以丙吉奏記始知之、而基經則預察識其當立矣、光有太后爲之主、有張安世與之謀、基經已無所仰慕也、所共議公卿、如源融、源多、桀皆執袴子、是非其器識有勝於光、何能辨此、光立一宣帝而已、基經又定策字多、亦所謂當立者也、光薦外孫女於昭帝、又計納女於宣、掩妻邪謀、死、不血食、累宣之德、而基經無此事、能保功名、君臣兩美、其純爲社稷、不爲私、亦有勝於光者也、基經之勝於光也、果矣、雖然、其自用專擅、貪於權勢、則同豈皆不學無術故耶、如其門望、滋盛、子孫至、僭上、蔑君者、雖勢之馴至、非其所得知、不無有所以貽之也、

〔國史纂論〕三、順口、昭宣公歷事四朝、在職績密、以才望稱、陽成帝狂暴公廢之、擇商德而立光孝帝世

稱其功、以比之伊霍、然今察其心迹、猶是不免貪權固寵之意、如之何得比之伊霍哉、爲人臣而懷私

以事其上、要君以威權、其罪不亦大乎、

〔愚管抄〕三、この小松の御門、○光孝御病おもくてうせさせ給ひけるに、御子あまたおはしなしかれ

ども、位をつがせんことをばさだかにもえ仰られず、今われ君と仰らるゝことも此おとゞ

原○藤基

經のわざなれば、又はからひ申てんと思召けるにや、御病のむしろに昭宣公参り給ひて、今は誰にか御譲さふらふべきと申されけるに、其事也、たい御はからひにこそと仰られければ、寛平○宇

多は王侍従とて、第三の御子おはしましけるを、それにておはしなすべく候、よき君にておはしますべきよし申されければ、かぎりなく悦ばせ給ひて、やがてよびなむらせて、そのよし申させ給ひけり、寛平御記には、左の手にては公が手をとり、右の手にては朕が手をとりへさせ給ひて、

なくなく公思ふことにふかし、よくゝ是をまらせ給へと申おかれけるよしこそ申おかれたんなれ、なかゝかやうのことは、かくその御記をみぬ人まで、もれさく事のかた端を書付たる

天皇の外男なり、忠仁公の故事のごとし、この天皇性惡にして、人主の器にたへず見えたまひければ、攝政なげきて、廢立のことをさだめられにけり、むかし漢の霍光、昭帝世をはやくしたまひしかば、昌邑王を立て天子とす、昌邑不徳にして器にたへず、即廢立をおこさひて、宣帝を立てたてまつりき、霍光が大功とこそあるしつたへはべるめれ、この大臣まさしき外戚の臣にて、政をもつはらにせられしに、天下のため、大義をおもひてさだめおこなはれける、いどめでたし、されば一家にも人こそおほくきこえしかど、攝政關白は、この大臣のすゑのみぞたえせぬことになりける、つぎく、大臣大將にのぼる藤原の人も、みなこの大臣の苗裔より、積善の餘慶なりとこそおぼえはべれ。

『大日本史贊藪』陽成天皇紀贊

贊曰、廢立天地之大變、而開關以來、不有人臣行之者、孝謙皇帝以母廢子、天下猶以漢路帝之無罪爲悲、攝政基經乃以人臣擅行廢立、而朝野肅然、莫敢支吾、豈非帝之失德、有以自取歟、傳云、不有廢也、君何以興、帝之被廢、適光孝之所由興、而權歸相府、功烈震主者、亦兆於斯、究其所以、豈非天地之大變耶、

『讀史餘論』基經外舅の親によりて、陽成を廢し、光孝を建しかば、天下の權歸於藤氏、その後關白を置き、或は置ざる代ありしかど、藤氏の權おのづから日々盛也、二

『日本政記陽成』賴義曰、國朝有廢太子、未有廢天子、廢天子自藤原基經始、而當時無異議、後世稱之者何哉、由其門望無比乎、藉其父勢乎、抑其器略神識壓服中外乎、三者皆然、然有大焉者、曰所廢當廢者也、所立當立者也、立當立者、而廢當廢者、雖無三者、天下將服之、況有三者、藉而行之、如以巨船大帆乘順風壯潮、誰能禦之哉、基經不必知古有霍光者也、而能爲光之所爲、豈非大臣慮社稷者有所暗合耶、而吾以基經爲勝於光也、夫光不及基經之資望者、則基經此舉宜如易於光也、而其實爲

惟高親王ハ御位叶ハザリケレバ、小野里ニ引籠給ケリ、小野親王トハ是也、又ハ持明院トモ申ケリ、○中略其ヨリシテ山門ノ訴狀ニハ、今ノ代マデモ、慧亮碎腦、尊意振劔トハ書トカヤ○又見三元略

【本朝通紀】永非定宗曰、親王和清生而僅九月、立爲太子、當此時惟喬既四歲、固宜立矣、而立惟仁者、以其爲攝政良房之外孫故也、天皇雖欲立惟喬、豈能得乎、而釋師鍊謂、皇子爭儲位、帝令關、藝勝者得位、乃賭競馬相撲、惟喬有力士名虎、惟仁有力士善雄、名虎臂力甚強、惟仁使僧惠亮祈善雄乃得勝、於是惟仁立爲儲貳、行長之記亦載此事、然名虎之死、已在惟仁不生之前、則其虛誕可知、唯是浮屠夸說其祈驗、而人人吠虛傳訛耳、豈足信也哉、

【讀史餘論】神皇正統記に、光孝より上つたは、一向上古也、萬の例を助ふるも、仁和より下つたをぞ申める、五十六代清和幼主にて外祖良房攝政す、其外戚專權の始變

【三代實錄清和二十九年】貞觀十八年十一月廿九日壬寅、是日天皇讓位於皇太子、成陽勅右大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣基經、保輔幼主、攝行天子之政、如忠仁公藤原房原故事、

【愚管抄光孝】陽成院御物氣、歟於事勿論之御事也、仍外舅昭宣公藤原基經大臣以下相談して、此御門孝光を位に即せらるゝせり、

【愚管抄三】この陽成院九にて位に即て八年十六までの間に、昔の武烈天皇の如く、なめならずめざましくおはしましければ、をぢにて昭宣公基經は、攝政にて諸の卒議有て、是はいかゞは國主とて國をも治めおはしますべきとてなんおろしまゐらせんとて、やう／＼に定めありけるに、仁明の御子にて、時康の親王孝光とて、式部卿宮にておはしましけるをひかへとりて、位に即せらるゝせられけり、

【神皇正統記陽成】天皇諱は貞明、清和第一の子、御母は皇太后藤原の高子、一條の后贈太政大臣長良のむすめなり、丁酉のとし即位、改元、右大臣基經攝政して太政大臣に任ず、子子なり、實は良房の

立皇子也、子細ニヤ及バミ給フベキト平ニ被内奏ケリ、此事誠ニ難題ニテ、公卿會議アリ、就勝負御位ヲ可被進トテ、初ニハ八幡ニ臨時ノ祭ヲ居テ、十番ノ競馬アリ、四番ハ一宮ニ付、六番ハ二宮ニ付、此上ハ惟仁親王御位ニ即給ノベカリケルヲ、天皇猶御心不飽思召ケレハ、後ニハ大内ニシテ相撲ノ節會ヲ被行テ、重テ勝負ノ有無覽、可有御讀ト議奏有ケレバ、惟高ノ御方ニハ即外祖左兵衛佐名虎參ケリ、恩愛ノ道コソ哀ナレ、今年三十四、太ク高ク七尺計ノ男、六十人ガ力アリト聞ユ、惟仁ノ御方ニハ能雄少將トテ細ク小キ男、行年二十一、ナベテノ力人ト聞ユレ共、名虎ニハ可敵對モノニ非ズ、去共果報冥加ハ、二宮ノ奉任御運トテ、不敵ニ申請テゾ參ケル、旁有御祈師、一宮ノ御方ニハ東寺ノ柿本ノ眞濟僧正也、德行高ク顯レテ、修驗譽廣ク、天皇御歸依ノ僧ナリケレバ、名虎是ヲ奉語付ケリ、二宮御方ニハ延曆寺惠亮和尚也、行業年ヲ重テ、重修日新也、忠仁公ト深ク師壇ノ契ヲ結給ケルニ依テ被奉付ケリ、惠亮ハ西塔寶幢院ニ壇ヲ攝テ、大威德ノ法ヲ修セラレケリ、眞濟ハ東寺ニ壇ヲ立テ、降三世ノ法ヲ行給ケリ、略中 既其日時ニ成ケレバ、名虎ト能雄ト出合タリ、殆金剛力士ノ如シ、略中 名虎勝スト見エケレバ、一宮ノ御方ヨリハ東寺ハ使ヲ被立ケリ、忠仁公ヨリハ二宮ノ御方既危ク侍ト使者ヲ山門ヘ被立事、追繼追繼ニ櫛ノ齒ノ如シ、和尚コハ心苦キ事哉、此時不覺ヲ我由ニ殘サン事口惜カルベシ、二宮ニ即給ハズバ、命生テモ何カハセントテ、熾ノ盛念力ヲ抽デツ、熾壇ニ立タル劍ヲ拔キ健把テ自頸ヲ突破、腦ヲ擡キ芥子ニ入レ、香ノ煙ニ燃具シテ、歸命眞經大平大威德印王、願ハ能雄ニ力ヲ付給ヒ、勝事ヲ即時ニ合得給ヘト、黑煙ヲ立テ汗ヲ流シテ、揉ニ揉デゾ斬給フ、略中 名虎略中 身ノ力落テ心惘然トシテ覺エケル處ヲ、能雄名虎ヲ脇ニ引挾、南庭ヲ三廻シテ、其後曳ト云フテ擲タレバ、名虎大地ニ被打付テ、血ヲ吐テ不起、上藏人等走寄、大内ヨリ昇出シテ家ニ返シ遣タリケレバ、三日有テ死ニケリ、惠亮腦ヲ摧シカバ、能雄ニ力ハ付ニケリ、名虎相撲ニ負シカバ、惟仁位ニ即給フ、清和帝ト申ハ彼親王ノ御事也、

被命云、天安皇帝有讓寶位于惟喬親王之志、太政大臣忠仁公○藤原房、摠攝天下政爲第一、眞憚思不出、自口之間、漸經數月云々、或祈請于神祇、又修秘法、祈于佛力、眞濟僧正者爲小野親王○作、祈師、眞雅僧都者爲東宮○緒、護持僧云々、各專祈念、互令相催云々、

〔大日本史贊〕
〔文德皇子惟喬親王傳贊〕

贊曰、立適以長、不以賢、立子以貴、不以長、古之道也、蓋諸母皆同母、則母以子貴、嫡母所生、則子以母貴、義雖行而不相悖、故正嫡有子、則庶子雖長不得立、亦甚明矣、惟喬親王文德之長子、而帝無正嫡、則嫡御皆同母也、易爲不立親王爲儲貳、而立幼冲之清和、是有所蔽而然也、清和所生藤原氏以相國良房之女、位次稍貴於親王所生紀氏、然未至如魯隱公之母賤而桓公之母貴也、既立其子爲太子、易爲不立其母爲皇后、六宮爭寵、勢有所不可也、然則易爲舍親王而立清和、良房之權重也、帝嫌太子之弱、而欲權立親王、以待其長、此又不可行者也、使帝有明斷、則不畏良房之權、立親王以從長子守器之義、不然、速正藤原氏之位號、以明嫡庶之分、不由此道、而優柔不斷、既立之又欲易之、此殆啓殺端也、豈不危哉、幸而帝納源信之諫、國本不動搖、此社稷之福也、

〔源平盛衰記 三十二〕
惟高惟仁位論事

昔文德天皇ノ御子ニ惟高親王惟仁親王トテ、御兄弟二人御坐ケリ、惟仁ハ第二ノ皇子、惟高ハ第一ノ皇子也、互ニ御位ヲ御意ニ懸サセ給ヘリ、天皇モ分ル御方ナク難棄御事共ニテ、淑慮思召煩ハセ給ヘ共、御嫡子ナレバ惟高親王トゾ内々ハ被思召ケル、第一皇子惟高親王ト申ハ、御母ハ從四位左兵衛佐名虎ガ女、從四位上紀靜子ト申、第二皇子惟仁親王ト申ハ、御母ハ太政大臣良房忠仁公御女、藤原明子、後ニハ染殿后ト申是也、一宮ノ御事ヲバ、外祖紀名虎取立奉ラントテ、帝運ノ可然ニテ第一皇子ニ出來御坐セリ、御恙ナシ、サレバ御位ハ此公ニコソハ類ニ内奏申ケリ、二宮ノ御事ヲバ、外祖ニテ忠仁公奉取立トテ、一宮ハ落胤腹名虎ガ御女也、次弟ハ是執柄家ノ御女后

不然文德何以不敢立所愛長子而立生甫九月之嬰兒乎。至如源常源信並以嵯峨子位與良房抗，使一發異議，天子將倚以爲重，乃甘附和之，以成其勢，何取於宗室大臣也。豈亦以己爲良房舅而私之耶。其後平清盛之暴進官爵，由於後白河之欲立愛子，而當時朝臣連姻平氏者，黨焉其情同也。

〔大鏡裏書〕四品惟高親王東宮諱事

文德天皇第一皇子，母從四位下紀靜子，正四位下名虎女。嘉祥三年十一月廿五日戊戌，惟仁親王清和

和爲皇太子，誕生之後九箇月也。先是有童謠云：大枝於超天奔超天，騰加利躍上利超天，我耶謙謙毛留

田仁耶搜阿佐食味志岐耶雄伊志岐耶識者以爲大枝謂大兄也。是時文德天皇有四皇子，第一惟

高第二惟條第三惟彥第四惟仁，天意若曰：超三兄而立，故有三超之謠焉。承平元年九月四日夕，參議

實賴朝臣來也，談及古事，陳云：文德天皇最愛惟高親王，于時太子幼冲，帝欲先暫立惟高親王，而太子

長壯時，還繼洪基，其時先太政大臣其房藤原基房作太子祖父爲朝重臣，帝憚未發，太政大臣憂之，欲之使太

子辭讓，是時藤原三仁善天文，諫大臣曰：懸象無變事，必不遂焉。爰帝召信大臣清談良久，乃命以立惟

高親王之趣。信大臣奏曰：太子若有罪，須廢黜，更不還立。若無罪，亦不可立他人。臣不敢奉詔，帝甚不悅。

事遂無變，無幾帝崩，太子續位，後應天門有火，良相右大臣伴大納言計謀欲退信左大臣，其參陣座時

後太政大臣基藤原細爲近衛中將兼參議，良相大臣急召之，仰云：應天失火，左大臣所爲也。急就第召之，

中將對云：太政大臣知之，賦良相大臣云：太政大臣偏信佛法，必不知行如此事。中將則知太政大臣不

預知之由，報云：事是非輕，不蒙太政大臣處分，難輒承行。遂辭出，到職曹司，令諸太政大臣，各令人奏曰：

左大臣是陛下之大功之臣也，今不知其罪，忽被戮，未審因何事。若左大臣必可見誅，老臣先伏罪。帝初

不知聞，大驚怪，報詔以不知之由，於是事遂定矣。爾後太政大臣幾清和天皇爲之期中，不舉樂云々，此

等事皆左相公所語也。

〔江談抄二〕天安皇帝〇文有讓位于惟喬親王之志事

〔天安皇帝〇文有讓位于惟喬親王之志事〕

橘逸勢伴健岑等謀反之由日暮不得開窮○中乙卯勅使左近衛少將藤原朝臣良相率近衛冊人

圍守皇太子直曹○中是日詔曰○中不慮外○上太上天皇○嵯峨崩○依天盡夜○止久矣○此哀迷○此焦○禮御

坐○春宮坊乃帶刀舍人伴健岑○伊際○仁乘○天與橘逸勢合力○天逆謀○乎搆成○天國家○乎傾亡○无止○此事

皇太子○波不知○毛在○世不○善人○仁依○天相累事○波自古○利言來○留物○奈又先○仁令○法師等○天呪咀○止

云人多○安而止○毛隱○乎撥求○无事○乎不欲○天抑忍○留又近日○毛或人○乃云○屬坊人等○毛有謀○止云○若其

事○乎推究○波恐○波不善事○乃多○无事○乎加以○後太上天皇○乃○厚御恩○乎顧○天那○无求○无事○乎不知○波

今思○久保○仁皇太子○乃位○乎停○天彼此無事○波善○久有○止都○之思○女又太皇太后○乃御言○仁如此○毛奈

思○留世故○是以皇太子○乃位○乎停○退介○賜不○可知○事人○止為○天奈大納言藤原朝臣愛發○波乎○天京

外○仁中納言藤原朝臣吉野○波乎○天宰員外帥○仁春宮坊大夫文室朝臣秋津○波乎○天出雲國員外○乃守○留仕賜

比○有賜○止宣○天皇○我御命○乎衆○開食○止與○宣丙辰廢皇太子

〔日本政記○仁〕賴○義曰國家盛衰之機每由於繼續之際不可不深察也繼續之為事大矣而難言也

愛憎主其中而黨援乘其外大利所在大禍所伏也不斷以公道而狹私用術自謂濟其志而適為大

衰之地者往往而然○中仁明生文德出於藤原氏生十四而淳和崩又二年嵯峨不豫罷橘氏公右

太輔以藤原良房代之四日而嵯峨崩翌日葬之其明伴橘之獄起噫何其速也據獄詞所傳則伴橘

為不軌矣而不可盡信也至其曰二上皇登遐太子不得安則當時之情已廢太子初請遜而不得流

涕大息及其受圖曰吾知有此事久矣則仁明之心不可掩也良房者新太子○德文之母之兄也故仁

明引以為之羽翼又納良房女於東宮帝崩文德立之月清和生而生而九月立為太子七年而起拜良

房為太政大臣帶劍上殿其明年文德天面誓觀之天子立外祖攝政焉亦何速也而後王室之事不

可復託矣夫大臣託孤何世無之當用天下之英賢焉何必賴外戚乎是亦私心馬爾論者以為王室

之衰由文德以幼主為禍余則曰由仁明之用私於繼續之際而已至文德之時則藤原氏勢已成矣

雜物宜悉收之、即遣使固守三關。略○中此夜押勝走近江、官軍追討。丙午高野天皇勅令開迹臣惠美仲麻呂盜取官印已逃去者、忝爲人臣、飽承厚寵、詭梅禍滿、自陷淫○本傳一利、仍復却略愚民、欲爲健僕、若有勇士、自能謀計、急爲剪除者、即當重賞。壬子、軍士石村村主石楯斬押勝、傳首京師、押勝者近江朝內大臣藤原朝臣鎌足曾孫、平城朝贈太政大臣武智麻呂之第二子也。率性聰敏、略涉書記。略○中天平六年授從五位下、歷任通顯、勝寶元年至正三位大納言兼紫微令中衛大將、樞機之政、獨出掌握、由是蒙宗右族皆妬其勢、寶字元年橘奈良麻呂等謀欲除之、事涉廢立、反爲所滅、其年任紫微內相、二年拜太保、優勅加姓中惠美二字、名曰押勝、賜功封三千戶田一百町、特懸鑄錢、舉積及用惠美家印、四年轉太師、其男正四位上真光、從四位下訓儒麻呂、朝薦、並爲參議、從五位上小湯麻呂、從五位下薩雄、辛加知執棒、皆任衛府關國司、其餘顯要之官、莫不姻戚、獨擅權威、猜防日甚、時道鏡常侍禁掖、其被寵愛、押勝患之、懷不自安、乃諷高野天皇爲都督使、掌兵自衛、准據諸國試兵之法、管內兵士、每國二十人、五日爲番、集都督衙、簡閱武藝、奏聞畢後、私益其數、用太政官印而行下之。大外記高丘比良麻呂懼禍及己、密奏其事、乃收中宮院鈴印、遂起兵、及其夜相招黨與、遁自宇治、奔據近江。略○中官軍攻擊之、押勝衆潰、獨與妻子三四人乘船浮江、石楯獲而斬之、及其妻子從黨三十四人皆斬之、於江頭第六子刷雄以少修禪行免其死、而流隱岐國。

〔續日本後紀仁明〕承和九年七月己酉、是日春宮坊帶刀伴健岑、但馬權守從五位下橘朝臣逸勢等、謀反事發覺、令六衛府固守宮門、并內裏遣右近衛少將從五位上藤原朝臣富士麻呂、右馬助從五位下佐伯宿禰宮成率勇敢近衛等、各圍健岑、逸勢、私廬捕獲其身。略○中先是彈正升三品阿保親王、緘書上呈嵯峨太皇太后、太后喚中納言正三位藤原朝臣良房於御前、密賜緘書以傳奏之、其詞曰、今月十日伴健岑來語云、嵯峨太皇太后、今將登遐、國家之亂、在可待也、請奉皇子。○皇太子入東國者、書中詞多不可具載。庚戌、遣參議從四位上左大辨正朝王、參議從四位上右大辨和氣朝臣真綱於左衛門府推勘。

比物等將六衛兵團長屋王宅壬申巳時遣一品舍人親王新田部親王大納言從二位多治比真人
池守中納言正三位藤原朝臣武智麻呂右中辨正五位下小野朝臣牛養少納言外從五位下巨勢朝
臣宿奈麻呂等就長屋王宅窮問其罪癸酉令王自盡其室二品吉備內親王男從四位下膳夫王無
位桑田王葛木王鈞取王等同亦自縊乃悉捉家內人等禁著於左右衛士兵衛等府丙子勅曰左大
臣正二位長屋王忍戾昏凶觸途則著盡惡窮奸頓陷疎網茹夷奸黨除滅賊惡宜國司莫令有乘仍以
二月十二日依常施行

〔日本政記

聖武

略

聖武之爲太子舍人新田部二親王並以祖叔父輔佐之稍習聽政然後

元正禪之位豈非謂其已堪負荷矣哉然即位未周月輒事巡遊當此時太白數晝見蝦夷叛發九國
兵伐之將帥未復命而車駕復而矣所以消災異者讀經度僧而已矣長屋王之獄發於倉卒不繼而
決莫能審其由

○中

則帝之不君柔暗不待智者而知也橘諸兄身爲大臣而不能匡救不足深責也

獨惟二親王久居輔儲之位及其未立必賂其不君之質矣何不自元正廢昏立明以二親王之資望
烏有不可爲哉不能賂其不君乎不明也賂其不君而不能決廢立乎不斷也豈其衰邁耄耆不能有
爲邪抑勢有不可也何哉帝者藤原氏之出也鎌足之勳在於社稷不比等歷事四朝身生二后朝廷
崇寵之至欲拜太政大臣而爲帝之大援所以不可搖焉烏知非長屋王之賢實擬易儲成範所諱而
讒間入之哉故將兵圍其第就焉窮治者皆不比等之子也而二親王不敢爲別白焉其事情可見也
○中是君權所以漸下移非待文德清和而然也

〔續日本紀

二十

卷七

天平寶字八年九月乙巳太師藤原惠美朝臣押勝逆謀願泄高野天皇

○孝

遣少納

言山村王叔中宮院鈴印押勝聞之令其男訓儒麻呂等邀而奪之天皇遣授刀少尉坂上莉田麻呂將
曹壯鹿嶋足等射而殺之押勝又遣中衛將監矢田部老被甲騎馬且却詔使授刀紀船守亦射殺之勅
曰太師正一位藤原惠美朝臣押勝并子孫起兵作逆仍解免官位并除藤原姓字已畢其職分功封等

古事類苑

帝王部 二十七

外戚下

事補

〔扶桑略紀崇峻〕五年壬子二月、天皇密勅皇子戸○蘇我馬子、內縱私欲、外似驕飾、雖與如來之教、誠無忠義之情、爲之如何、皇子奏曰、忍辱德深、陛下宜行慈忍矣、

〔日本書紀崇峻〕五年十月丙子、有獻山猪、天皇指猪詔曰、何時如斷此猪之頸、斷朕所嫌之人、多設兵

仗、有異於常、壬午、蘇我馬子宿禰聞天皇所詔、恐嫌於亡、招聚僮者謀弑天皇、十一月乙巳、馬子宿

禰在於草臣曰、今日進東國之調、乃使東漢直駒弑于天皇、（中略）或本云、大伴續小乎子、根籠之妻、使人

誑而詔曰、如斯猪類、何時斷朕所嫌之人、且於

〔神皇正統記崇峻〕崇峻天皇は欽明第十二の子、御母は小姉君娘、これも稻目の大臣の女なり、（中略）

ある人はいはく、外舅蘇我馬子の大臣と御中惡しくて、かの大臣のためにころされ給きともいへ

り、

〔日本書紀推古〕三十二年十月癸卯朔、大臣馬子○蘇我造阿曇連、阿倍臣摩侶二臣令奏于天皇曰、葛

城縣者、元臣之本居也、故因其縣爲姓名、是以覺之、常得其縣以欲爲臣之封縣、於是天皇詔曰、今朕則

自蘇我出之、矢口亦爲朕舅也、故大臣之言、祕言矣、則夜不明、日言矣、則日不曉、何辭不用、然今當朕之

世、頓失是縣、後君曰、愚疑婦人臨天下、以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後棄之惡名、則不聽

〔日本書紀皇極〕二十四元年中、是歲蘇我大臣蝦夷立己祖廟於葛城高宮、而爲八僧之儀、（中略）又盡殺舉

古事類苑

帝王部二十七

外戚下

專權

七二五

皇室依外戚

七六六

驕傲

七六九

謹飭

七八三

爭納后妃

七八四

累世外戚

八〇二

外戚興家

八一

雜載

八二四

又御子ども中關白殿○道あはた殿○道法成寺入道殿○道これふたゝびなり、ちかくは法性寺殿の御子ども、六條殿○道松殿○道月輪殿○道是どやがていまの峯殿○道の御おほぢよ、かやうの事いとたまゝあれど、あはた殿もせんじかうふり給へりしばかりにて、七日にてうせ給ひにしかば、天下執行し給ふにおよばず、松殿の御子もろいへのおど、夢のやうにてまかも一代にてやみたまひにき、いづれも御すゑではおはせざりしに、この三所の御後のみいまにたえず、御ながれ久しきふぢなみにて、たちさかえたまへるこそたぐひなきやんごとなさなめれ、するのよにもありがたくや侍らん、今の攝政殿をば、のちには圓明寺殿○道眞とぞきこゆめりし、一條殿の御家のはじめなり、攝政にて二とせばかりおはしき、女院○道后○道結子○道の御父○道眞○道藤原も太政大臣になりたまひて、手車ゆり給ふ、さるべき事といひながらいとめでたし、

るに、治承三年の冬より、いかなるべしとも思ひわかれ、佛神に祈りて、攝籙の先途には必ず達すべしと有りて、下年の後け六待つけつるどいはれけり、十六日やがて拜賀せられにけり、其夜ことは重なりたりけり、さて後法皇^{白河}には、心去づかに見参に入てありければ、我はかくなにとなくやゝ憂る身なれど、世をば久く見たり、はゞからすたゞよかつたことにおこなはるべき也なと佛有て、おほえの丹後と云は、澤上寺二位宜陽門院^{後白河}の御母也、出あはせなとて在けり、

〔保曆間記〕建久三年三月十三日法皇崩御ナル、後追號ヲバ後白河院ト申、保元ヨリ打續キ世亂レテ、御心安キ事モ無テ、年ヲ送セ御坐キ、是末代ニ成リヌル故ニ、皇法ノスタイル行ト覺エタリ、主上^{鳥羽}、幼帝ニ坐シケレバ、昔ノ如ク攝政ヲ^{後白河}政事ヲ仕給ケリ、大方ハ一向關東ノ任ニゾ成ケル、

〔公卿補任〕攝政正二位藤道家 承久三年四月廿日、詔氏長者依新帝^{後白河}外男也、

〔愚管抄^二〕攝政左大臣道家^{中略}外祖男、爲大臣之時、^{後白河}攝政之例、^{藤原}被還補攝政云々、希代例也、

〔百鍊抄^四〕嘉祿元年三月廿八日辛酉前關白^河道家^{藤原}被還補攝政云々、希代例也、

〔保曆間記〕天福元年十二月二日主上^河宮^{藤原}ニ讓國アリキ、先帝ヲバ後堀川院ト申テ、院

中ニテ政ヲセサセ給フ處ニ同二年文暦元年也、八月六日崩御成セ給フ、當今僅四歳ニ成セ給ケ

リ、幼帝ニテ爲渡給ケレバ、關白道家昔ノ如ク攝政シ給ケリ、關東ノ將軍^{頼朝}モ此息男ニテ御坐

シケレバ、公家武家一ニテゾ有ケル、

〔増鏡^五〕寛元も四年になりぬ正月廿八日春宮^{後深草}に御位ゆづり申させ給ふ、この御門も

父兄にぞならせ給ふめでたき御ためしどもなれば、行すゑもおしはかられ給ふ、光明峯寺殿^道

年御三郎君、左大臣^{頼朝}のおとこ、御とし廿四にて攝政し給ふ、いどめでたし、御あにの福光園院

殿^實もど關白にておはしつる、うらみてまふくにおはしけれどちからなし、御はらから三

人までせつる、まふすへるためし、ふるくは謙德公^伊忠義公^{義通}東三條大入道殿^{兼家}その

うけ給りに参り候、いかゞと申ければ、その事なり、攝政はさればいか成べきぞと仰有て、無左右如本とこそはあるべけれど仰られけるを、たゞゞとさうなく稱唯して、やかて束帶さはらとならして立ければ、そのうへをばどもかくも仰られず、やがて殿下参りて、例にまかせてどく行はれ候べきよし御氣色候と申て、ひしゞと行はれにけり、如元とこそはあるべけれども、公實が申やうはなぞ、仰られんと思召けるを、あまりにこはいかにあるべくもなき事かなど、かざりていかでかざる事候べきと思ひけるにや、九條の右丞相○師の子なれ共、公季思ひもよりで、その子孫實成公成實季と五代までたえはて、ひとへの凡夫にてふるまひて、代々をへて、攝政にはさやうの人のいるべきはどのつかさかは、ざる事は又ひかしも今もあるべきことならずと、親疎遠近、老少中年、貴賤上下、思ひたることをいさゝかも思召煩ふは、おさましきことかなと思けるなるべし、ざりとて又公實の和漢の才に富て、北野天神の御跡をもつぎ、又知足院○忠宣に人がらやまと魂のまざりて、識者も實資なきやうに思はれたらばやあらんずる、たゞ外舅になりたるばかりにて、まざしき攝録の子孫にだにへぬ人こそおはかれ、いかに公實もさほどには思ひよりけるにか、又君も思召煩ふべき程の事かはとて、この物語はみそか事にて、うちまかせてよの人のしりてきたする事にては侍らぬなめり、されどせめて一節を思て、家をおこさんと思はんも、我身になりぬれば、誠に又大臣大納言の上臈などにて、外祖外舅なる人の攝録の子孫なるが執政の臣に用ゐられぬことは一度もなければ、さほどにも思よりけるにや、あまねき口外にはあらねども、かくこそ申つたへたれ、

〔愚管抄六〕九條の右大臣○藤原兼實は、文治二年三月十二日につひに攝政の詔、氏の長者と仰下されにけり、去年十二月廿九日より、内覧臣許にて、我も人も何ともなく思てありけるに、かく定りにければ、世の中の人もげに、しき攝録の臣こそ出されと思へりけり、さて右大臣いはれけ

河位につかせ給しにも又關白にならせ給しかば、四代のみかどの關白にて、ふたゝび攝政と申き、昔もいとたゞひなきことにこそ侍りけり、おほきおとゞにもふたゝひなり給へりし、いどわりのたゞ侍りき。

〔續世繼^五のほつ花〕攝政前右大臣^{○藤原}とてちかくおはしなましは、法性寺のおとゞ^{○忠}の

太郎にぞおはしなまし、^略中二條のみかどくらむにつかせ給しに、ちゝおとゞのゆづりにて、保

元三年三月十六日關白になり給、御年十六どぞきこえ侍し、むかしよりかくきびはにてなり給

へる一人の人、これやはじめにておはしなすらん、からくに、甘羅といひける人は、十二にてぞ大

臣になり給ける、よの人をさなしも申さゝりけり、人によるべきことにこそ侍めれ、^略中永萬

元年六月みかどくらむ、みこ^{○六}にゆづり奉らせ給し日、攝政にならせ給ふ、

〔恩管抄^四〕鳥羽院踐祚の時、御母は實季のむすめなり、東宮大夫公實は外舅にて、攝籙の心ありて、

家すでにて九條右丞相の家にて候、身大納言にて候、いまだ外祖外舅ならぬ人踐祚にあひて攝籙

する事候はず、さ候はぬたゞ、は、大臣大納言などにその人候はぬ時こそ候へど、白川院にせ

の申けり、我御身も公成のむすめの腹にて、ひき思召御心やふかゝりけん、思召煩ひて御思案あ

らんとや思召けん、御前へ人のまゐる道を三重までかけなして、御どのごもりけり、其時今日

すでに其日なり、未催なんどもなし、こはいかにとおどろき思ひて、其時の御うしろみ、さうなき

院別當にて俊明大納言ありければ、束帯を正しくさうぞさてまわれりける、御前さまの道みな

どちたりければ、こはいかにとてあらゝかに引けるを、うけ給りてかけたる人いできて、かうか

うといひければ、世間の大事申さんどて俊明がまゐるに、猶かけよと云仰はいかであらん、た

だあけよといひければ、皆あけてけり、近くまゐりてうちしはふさければ、誰と問せ給ふに俊明

どなおりければ、何事ぞと仰ありければ、御愛禪の間の事いかに候やらん、日も高くなり候へば

長和五年正月廿九日、受禪於京極臺、即以外祖父左大臣爲攝政。

〔榮花物語^{十五}〕殿の御まへ、

○道長

世まりはじめさせ給てのち、御門は三代にならせ給、わが御世は

廿三四年ばかりにならせ給に、みかど○一條後わかうおはしますときは攝政と申、おとなびさせ給

ふをりは關白と申ておはしますに、このころ攝政をも御一男、たゞいまの内大臣○賴通に讀させ

えさせ給て、我御身は太政大臣の位にておはしますをも、つねにおほやけにかへし奉らせ給へ

ど、おほやけさらにきこしめしいれぬに、たゞくわりなくすすませ給、御心にはすさまじう

おぼさるゝ事かぎりなま、

〔日本紀略^{十三}〕

後一

寛仁三年十二月廿二日甲辰、攝政内大臣

○藤原

上表謝攝政、即詔停攝政、令關白

萬機

○中略

廿八日庚戌、令關白内大臣、以攝政儀行、官奏除目、

〔愚管抄^四〕

宇治殿

○藤原

は後一條後朱雀後冷泉三代の御門の外別にて、五十年ばかり執政の臣

にておはしけり、後冷泉のすゑに、攝政を大二條殿○通教と申は、宇治殿の御弟也、てゝの御堂○道長

もよき子とおぼして、宇治殿にもおとらずもてなされけるが、年七十にて左大臣よりけるを我

御子には道房の大將とて、かぎりなくみめよく人用ゐたりける御子の、廿にてうせられける後、

京極の大藏師實は、むげにわかき人にてありければ、越れむ事のいたましくおぼさるゝ程の器

量にて、大二條殿ありければ、譲らせ給ひけるを、世の人宇治殿の御高名、善政の本體と思へりけ

り、

〔續世繼^五〕

みかど

ちかくおはしなまゝ、法性寺のおとゞ

○藤原

は、○中保安二年のとし關白に

ならせ給ふ、御とし廿五にぞおはしなまし、同四年正月に、さぬきのみかど○崇徳引くらゐにつかせ

給しかば、攝政と申さ、みかどおとなにならせ給て關白と申しはせに、近衛のみかど位につかせ

給しかば、又攝政にならせ給ひき、久壽二年七月この衛のみかどかくれさせ給ひて、この一院○後

そうせさせ給ひければ、むづかしうやおぼしめされけん、後にはわたらせ給はざりけり、されば
うへの御つばねにのぼらせ給ひて、こなたへとは申させ給はで、我々るのおとゞにいらせ給ひ
て、なくく申させ給ふ、その日は入道殿はうへの御つばねに候はせ給ふ、いひさしういでさ
せ給はねば、御むねつふれさせ給ひける程に、ごばかり有て、どおしめけてさしいでさせ給へり
ける御かほは、あかみぬれつやめかせ給ひながら、御くちは心よくあませ給ひて、あはやせん玄
くだりぬどこそ申させ給ひけれ、いさゝかの事だにみな此よならず侍るなれば、いはんやかば
かりの御ありさまは、人のともかくもおぼしおかんによらせ給ふべきにもあらねど、いかでか
は院をおろかにおもひ申させ給はまし、中關白殿道あはた殿うちつゝさうさせ給ひ
て、入道殿にようつりしほどは、さもむねつふれてきよくとおぼえ侍りしわきかな、

〔小右記〕長和四年七月十日丁巳、安和御時、冷故殿坐關白主上御惱之間、關白被下、可見官
奏之、宜旨、彼例可尋送之由、先日有命、仍聊書出奉之、先了、今日重引出書寫、付資平奉之、其御記云、康
保四年八月十五日伊尹卿來云、依御惱不御覽官奏之間、准攝政大臣、可見之由、將奏聞之云云、先是
兼家朝臣奏聞被許了云云、公卿奏事由可仰大辨之事也、

〔小右記〕長和四年十月廿七日甲辰、今日京官除目、而無外記告、中今朝官奏除目雜事、准攝政儀宣
令左大臣、長道行之由被下、宜旨、大納言公任奉下之、官奏事仰左大辨、除目雜事也、仰大外記文義、大
納言所談也、余、實藤原問云、若勞御間とやあると云、不然者、

正二位行權大納言兼太皇太后宮大夫藤原朝臣公任、奉勅除目等雜事、宣令左大臣、准攝政儀行
之者、

長和四年十月廿七日、大外記小野朝臣文義奉、

〔二代要記六後一條天皇中〕

〔公卿補任一〕攝政正二位藤道隆 正暦四年四月〇日、上表辭職、廿二、辭攝政、勅令關白萬機、除目官奏於御前行之。十一

〔日本紀略後一三〕長和五年正月廿九日甲戌未刻、三條院天皇逃位讓皇太子。〇後于時皇太子春秋九歲、于時御坐上東門院、令新帝外祖左大臣藤原道長朝臣攝行政事、如忠仁公故事。

〔愚管抄三〕内大臣にて伊周もど内覽の宣旨かうふりたる人にて在けるに、大納言にて御堂原藤長はおはしけるは、道兼道隆の弟也、この伯父の大納言その器量拔群にして世も人もゆるしたりけり、我身もこの時伊周執政の臣たらば、世は亂れうせんず、わが身を攝錄の臣におかれなば世はおだしかるべしとさいく、と仰られけり。

〔大鏡七〕太政大臣道長女院子は入道殿道長をどりわきたてまつらせ給ひて、いみじうおもひ申させ給へりしかば、帥殿周はうとくしくもてなさせ給へりけり、みかど一皇后宮伊をねんごろにときめかさせ給ふゆかりに、帥殿はわけくれ御前に候はせ給ひて、入道殿をば

さらにも申さず、女院をもよからず、ことにふれて申様をおのづから心やえさせ給ひけん、いともほいなき事におぼしめしけることわりなりな、入道殿のよをまらせ給はんことを、みかど一いみじうしふらせ給ひけり、皇后宮父おと道おはしなで、よの中をひきかはらせ給はんことを、いど心ぐるしうおぼしめして、あはた殿兼をもとみにやはせんじくだせさせ給ひし、されど女院のだうりのまゝのこともおぼしめし、また帥殿をばよからずおもひきこえさせ給ひければ、入道殿の御事をいみじうまふつせたまひけれど、いかでかくはおぼしめしおぼせらるゝぞ、大臣こえられたる事だにいとくをしう侍りしに、ちゝおどやのあながちにま侍りし事なれば、いなきせ給はずなりにしにこそ侍れ、あはたのおどやにはまさせで、これにしも侍らざらむは、いとをしさより御ためなんいとびなくよの人もし入なし侍らんぞ、いみじう

ことなり。

〔歷代皇紀〕四内大臣藤兼通元中納言

天祿三年十一月廿七日任四十不經大納言八。去十月廿七日寅、太政大臣不從事之間、宜勤行公務者、即日又召御前曰、朕未更事、汝可爲輔佐者。

〔公卿補任〕四關白正三位藤兼通

天延二年二月八日、爲氏長者廿八日、聽養車三月廿六日、詔、帝

御年十六、關白萬機、賜内舍人二人、近衛各四人、爲隨身、同聽牛車。

〔愚管抄〕三花山院には、義懷の中納言こそは、外舅なれば、執政すべけれど、踐祚の時は、藏人頭にこそ初て四位侍從に任じて、やがてとく中納言になりて、三條關白如元としておはしけれど、

も、國の政はおさへて、義懷おこなひけるは、とに、わづかに中一年にて、不可思議の事出來にければ、云ばかりなし、大入道殿兼家はこの繼めに、と、日比の遠恨を思しけれども、外祖舅にもあら

ず、小野宮實兼家の、子、九條殿師輔の子、たゞ同じ事なれば、もと宿老になりて、關白ならんとおもふべきやうなしと思召けるも、道理にて、この時はやみにける。

〔大鏡〕三太政大臣賴朝「このおとゞ、小野宮實賴大臣次郎なり、御母時平大臣御むすめ、敦敏少將おな

とはらなり、大臣の位にて十九年、關白にて九年、中一條院位につかせ給ひにしかば、よそ人に

て、關白はのかせたまひに。」

○按ズルニ、よそ人トハ、當代ノ外戚ナラザルヲ云フ、

〔日本紀略〕九寛和二年六月廿三日庚申、花山天皇偷出禁中、奉劍璽於新皇、年七外祖右大臣藤原

家兼、參入令、同禁内、警備、翌日行先帝諸位之禮、右大臣藤原朝臣攝行萬機、如忠仁公藤原故事、

〔日本紀略〕九正暦元年五月八日、詔、令内大臣藤原朝臣道隆、關白萬機、廿五日、勅聽關白内大臣

乘牛車出入宮内、廿六日、詔以關白内大臣改關白、攝行政事、如昭宣公基眞信公忠故事、

乘牛車出入宮内、廿六日、詔以關白内大臣改關白、攝行政事、如昭宣公基眞信公忠故事、

乘牛車出入宮内、廿六日、詔以關白内大臣改關白、攝行政事、如昭宣公基眞信公忠故事、

なり、伊尹の大納言の御さいはいひみしくおはします。○中 東宮○花の御年ふかつまり、○中 かるはどに五月廿日、一條のおど○伊攝政の宣旨かうふり給て、天下我御心におはします、東宮の御おほぢみかどの御をちにて、いとく有べきかぎりの御おほえにてすきさせ給此御ありさまにつけても、九條殿の御有様のみぞなほいとめでたかりける。

〔愚管抄三〕この九條右丞相師輔の公のいへに、攝籙の臣のつきにけることは、小野宮○實の給ひて、九條殿の嫡子、一條攝政伊尹攝籙になりぬ、是は圓融院の外男にて、右大臣にてあれば、九條殿は攝籙せざりしかば、○中にとて肩をならべ競べきもよくてかくは侍る也、地體は藤氏長者といふことは、上よりなさるゝ事なし家の一人に次第に、朱器臺盤印などをわたしくする事なり、その人また同じく内覧の臣とはなる也、關白攝政といふことは、必しもたえずなる事はあらず、攝政は幼主の時ばかり也、忠仁公の後、たゞ藤氏長者内覧の臣になりぬるを一人とは申也、内覧もかならずしもなき事也、關白も昭宣公攝政の後に、關白の詔始りけり、漢の宣帝のとき、霍光がまづあづかり聞しめて後に、白せよどうけ給はりける例なるべし、小野宮殿の攝政をへすして、關白詔始りけるをばおそれ申されけり、されば延喜の御時、時平うき給ひてのちと、天曆の御時には内覧の臣だになく、まして攝政關白といふつかさもなされず、たゞ藤氏長者一のかみにて、延喜の御時は、貞信公○忠のちにこそ、朱雀院八にて御位なれば、攝政にはならせ給へ、村上には初は貞信公關白如元とてありけれど、うきさせ給ひて後は、左大臣にて小野宮殿こそはたゞ一の上にて事おこなひて、冷泉院の御時直に關白の詔ありければ、時の君の御器量

がらにてかつは置るゝ事也、世の末はみな君も昔には似させ給はず、誠の聖王は有がたければ、今は様のごとく攝政關白の名はたゆる事なし、それも御堂のはじめ、一條院三條院、知足院殿○實のはじめ堀河院、このふたゝびは内覧ばかりにて、關白にはならせたまはざりけり、やさしき

ぬるにや、

〔濫觴抄〕_丁關白

宇多元年_{丁未}^{仁和三}十一月廿一日、太政大臣_{基經公}^{五十二}始任之、同廿六日乙丑上表、勅答云、社禮之臣非

朕之臣、宜以阿衡之任爲卿之任、左大辨橘廣相作之、時人阿衡之字難云云、仍朝家及嚴密之御沙汰之間、橘廣相思死云云、

〔神皇正統記〕_{宇多}踐祚のはじめより、太政大臣基經また關白せらる、この關白薨じて後は、しばらくその人なし、

〔日本紀略〕_{醍醐}延長八年九月廿二日壬午、天皇逃位讓於皇太子寬明親王_朱^五、詔曰、左大臣藤原朝臣_{平忠}保輔幼主攝行政事、

〔神皇正統記〕_朱天皇諱は寬明、醍醐十一の子、御母皇太后藤原の穩子、關白太政大臣基經の女なり、_{略中}外舅左大臣忠平_{昭宣公の三男}、攝政せらる、寬平に昭宣公薨じてのちには、延喜御一代

まで攝關なかりき、この君また幼主にてたちたまふによりて、故事にまかせて萬機を攝行せられけるにこそ、

〔二代要記〕_朱攝政

左大臣忠平_{略中}

天慶四年十月卅日辭攝政、十一月廿八日爲關白、

〔日本紀略〕_朱天慶四年十一月廿八日、詔萬機巨細百官總已、皆關白於太政大臣_{忠平}、然後泰下

如仁和故事、

〔榮花物語〕_{月の}安和二年八月十三日なり、御門_冷おりさせ給ぬれば、東宮_融くらゐにつか

せ給ひぬ、御年十一なり、東宮におりぬの御門の御このちをみやゐさせたまひぬ、師貞親王_山

臣波内外乃政乎取持天勤仕奉止夙夜不懈又皇太子乃舅氏利見其情操幼主乎寄託之然則少王乃未親萬機之間波攝政行事止許近久忠仁公乃如保佐朕身久相扶仕奉下略之○

三代實錄三十一貞觀十八年十二月甲辰朔右大臣基經抗表辭攝政言伏奉去月二十九日傳國詔命

曰少主未親萬機之間臣基經攝行政事如忠仁公德崇功大仁義兼資况先帝德之親見陛下和請

外祖人望皆歸官爵既貴陛下知其元老專俾攝政天下萬民僉以爲宜今臣年出不惑惟猶童蒙職至

大臣効無匡濟朝夕流汗責深罪重夫代天治民者人君也導君從天者人臣也而詔命曰比年災異仍

見此復重臣罪責也漢代以災異免三公之官臣所尤可懼也臣平生備員之日陛下猶引過於一人臣

非常受寄之時今上何明德於四海塞驥既疲坦途况雲巖不知遠近乎短機無利夷浪况澗水不測邊

涯乎任重道悠不知所處今公卿大臣在位者多皆是有德良人陛下察而用之亦亡叔忠仁公居縉之

夕重託扶掖陛下莫愆始終之教臣今緣詔命離去仙砌攝事朝廷進退失教退恐違命臣始謂稟遊之

轉翠華誰知憂心之脫黃屋臣將隨陛下爲雲中之吠犬何更歸城闕爲車表之鳴鶴臣之至誠既其如

此臣誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言不許矣又見本

神皇正統記光孝天皇諱是時廣小松の御門とも申す陽成去りてけられ給ひし時攝政昭宣

公基經諸の皇子を相し申されけりこの天皇中人主の器量餘の皇子たちにくぐれましま

しけるによりて即ち儀衛をどゝのへて迎へ申されけり中謀詐のはじめ攝政を改めて關白

とすこれ我朝の關白のはじめなり漢の霍光攝政たりしか宣帝のとき政を還して還さけるを

萬機の政なほ光に關り白さしめよとありしがその名をとりて授けられたけり中この御世

より藤氏の攝籙の家も他流にうつらず昭宣公の苗裔のみぞたゞしくつたへられにたる上は

光孝の御子孫天照大神の王統とさだまり下は昭宣公の子孫天兒屋根命の嫡流となりたより

り二神の御ちかひたがはずして上は帝王三十九代下は攝關四十餘人四百七十餘年にちなり

〔濫觴抄下〕攝政 本朝

清和元年戊寅^{天安二} 外祖太政大臣良房公始任之^{五十}

〔神皇正統記^{清和}〕天皇諱は惟仁、水尾の帝とも申す、文德第四の子、御母は皇太后藤原の明子、^中攝政太政大臣良房の女也、我朝は幼主位に居たり、事稀なり、^中の天皇九歳にて即位、戊寅の年なり、己卯に改元、踐祚ありしかば、外祖良房の大臣はじめて攝政^中なる、^中天皇ふと

び給ければ、攝政政を還し奉りて、太政大臣にて白河に閑居せられにけり、君は外孫に交し、^中ば、^中はも權を專りにせり、るどもあらず、人あるまじくや、されど謙退のこゝろふかく、閑適をこのみて、常に朝參なぞもせられざりけり、

〔天日本史贊^三〕藤原良房及子孫傳贊

贊曰、良房相業、雖不多見、而文德帝期以蕭何、則規模微闕、必有可觀者、與耕田之禮、欲使幼主知稼穡之艱難、則其輔贊彌縫之功、可推而知也、基經廢昏立明、一爲社稷大計、可謂至公、無私、近於在光之所爲、而其器過於傅亮、徐美之遠矣、然文德帝畏良房勢、不得立、惟喬親王、宇多帝驟基經之譏、遂收阿衡之詔、則威權之逼、不啻負芒之懼、而奕世昌域、一門不知其幾、后外戚之盛、實基子此矣、

〔三代實錄^{清和二十九}〕貞觀十八年十一月廿九日壬寅、天皇讓位於皇太子^中、^中勅右大臣從二位兼行左

近衛大將藤原朝臣基經、保輔幼主、攝行天子之政、如忠仁公^中、^中故事、詔曰、現神^止、大八洲國所知

倭根子天皇^我、^中勅御命^中、親王諸王諸臣諸司百官^乃、人等天下公民衆諸聞食^止、宣朕以薄德

天天日嗣^中、^中賜^中、日夜無間^久、慎畏^利、御坐^須、而君臨漸久^久、年月改隨^中、熱病頻發^利、御體疲弱

天之不堪^中、^中今所思^波、^中昔以幼穉^天、得鐘此位^利、賢臣乃保佐^中、^中賴^天、得至於今日^利、然則

良佐乃翼戴^波、皇太子乃大成^止、何遠之有^中、^中念行^須、故是以皇太子止^中、^中貞明親王^中、此位^中、授

賜^中、諸衆此狀^中、悟^天、清直心^中、持^天、皇太子^中、輔導^岐、仕奉^天、天下^中、^中令有^中、^中右大臣藤原朝

尙危若能廻聖慈、矜臣深志、賜以優閑、任其將息、則再造之恩更渥、三舍之惠彌深、豈敢偏惜衰朽之身、唯貪久視、太平之化、伏願陛下別垂哀許、不省焉。

〔大鏡〕

太政大臣良房

太政大臣良房

のおとやは、

略中

文德天皇の

を、

太皇太后宮明子の御ち、

清

和天皇の御祖父にて、

太政大臣准三宮位にのぼらせ給ひ、

年官年爵の宣旨くだり、

攝政關白など

し給ひて、

十五年こそはおはしなしたれ、

おほかた公卿にて

卅年、大臣の位にて

廿五年をおはせ

し、

此殿ぞ藤氏のばじめて

太政大臣攝政し給ふ、

めでたき御ありさななり、

〔平家物語〕がくうちろんの事

本朝にぞうていの例を尋ぬるに、清和天皇九さいにして、文德天皇の御ゆづりをうけさせ給ふ、それはかの周公旦の成王にかはり、南面にして一日萬機の政事ををさめ給ひしにまざらへて、外祖忠仁公幼主をふぢし給へり、これを攝政の始なる、

〔愚管抄〕

三

さて文德の王子にて清和出來給ふ、

略中

一歳にて東宮にぬゝせ給ひけり、

九歳にて位

に即せ給ひければ、

幼主の攝政は日本國にはいまだなければ、

漢家の成王の御時の周公旦の例

をもちゐて、

母后のてゝにて、

忠仁公良房を初て攝政におかれけり、

其後攝政關白といふことは

出來たる也、

それも始はたゞ内院の臣に置れて、

誠しく攝政の詔下さるゝ事は、

七年をへて後、

貞

觀八年八月十九日にて有けるとぞ日記には侍る、

〔愚管抄〕

三

忠仁公、

其房

清和の御門が日本國の幼主の初にて、

外祖にて初て攝政におかれて後、

この攝政の家々、

帝の外祖外舅ならん大臣のわらん必々、

攝政の臣なるべき道理は、

ひしど作り

かためたる道理にて、

一度もさなき事はなし、

〔職原抄〕

上

攝政、

略中

清和天皇幼而即位、

外祖忠仁公、

其房

奉、

文德遺詔而攝政、

是本朝以人臣爲攝

政之初也、爾來彼一門爲執政之臣、

しより専ら輔佐の器としてたちかへり、神代の幽契のまゝになりぬるにや、閑院の大臣多嗣氏のおとろへたることをなげきて、善をつみ功をかされ、神にいのり、佛に歸せられける、そのまゐるしも相くはゝりはべりけんかし。

〔三代實錄〕十三貞觀八年八月十九日辛卯、勅太政大臣攝行天下之政。略○中

廿二日甲午、太政大臣

從一位藤原朝臣良房抗表言、竊以疲瘁倦路、雖責以逐日之能、猶轉忘飛、豈望其凌雲之効、伏惟聖朝陛下聰跨軒輊、德配成昭、泣辜之惠、非深扇賜之仁、猶薄臣以庸材、謬膺佐命、唯獻血誠之無比、潛欽日就而不覺、遂乃天從人願、神感聖仁、大成之日已來、歸老之期行及、臣不敢忘盈滿之誠、又深企二疏之風、然而聖慈不許出於直廬之外、臣誠不忍離自玉階之前、徘徊恩澤、滯侍禁中、而去六年冬、大病以還、體氣疲茶、心魂惘然、坐念立忘、昨知今惑、加以長樂宮御藥之事、夙夜刻思、無順私第、自然心將事、懶性與物疎、唯欲助衰以明恩、那堪勤政以資化、而今忽降綸旨、更預機務、乍承驚悚、諾謝忘言、臣雖質情之愚薄、而當昔之全狀、唯以勤格之力、幸獲免於罪戾、而今身已衰朽、勤等何申、心已昏迷、恭恪胡施、即知於公无益、爲私多傷、徒招眼下之耻、還損身後之名、臣竊思古人致身之言、夫去楊葉百步而射、百發而百中、然其弓撓鉤、氣衰力倦、則百發之功盡廢矣、何況平生材望、幸賴偶中、器局力衰之後、更向百步之業、假令雖專、愚者猶當知其不可爲、伏願陛下察其深衷、矜其疲勞、更廻靈詔、改賜旋旆、則親々聖帝、無偏之德、彌新歎々微臣、有涯之生、少損、無任誠懇之至、謹拜表以聞、不許、勅曰、適者災異萃臻、內外騷動、然須賴公助理、且得謠謠、廿四日丙申、太政大臣重抗表言、先領丹寶、仰紫闥而天顧弗廻、微情無感、愚衷尙屈、弊喻彌申、跼焦原而非危、履虎尾而倍懼、臣聞日月猶示盈昃、山川未免崩沖、物理自然、人事何忒、臣德薄才拙、任重位高、僉賴聖哲、欽明天人叶贊、得免罪戾、久處宸階、常愧深恩不窮、淺効無答、如踏鐵炭、似履春冰、況今老大逼來、疲病交集、藥餌無聞、每關趨奉、素餐之慙、彌倍平常、安得以此疲勞重掌機密、上黷國采、下貽身累、況復神監害盈、鬼瞰貽禍、何忘止足之分、坐待幽冥之責、臣願齡漸迫、殘命

國志紀郡當宗氏神祭幣帛使國司一人專當其事使食菰等並用國正稅永爲恒例當宗社天皇外祖母之氏神也

〔世俗淺深秘抄〕下一寛平法皇多○宇

御外祖母氏神、在河内國、所謂當宗社也、仍自仁和五年被祭之、或

說曰、實御母儀也、御母儀仲野親王女、班子子女王由雖記之、其年齡頗不可然、爲後見如此、雖註實、常宗氏女也、大概見寬平御記歟、

〔諸社根元記〕新國史云延喜十一、正六、宣旨山科神二前、右依宮道氏人內藏少允宮道良連等去年八月七日解初付官帳四度幣俱、件氏神依去寬平十年三月七日奉勅之宣旨、預享公家春秋祭禮、又預四度幣、

○按ズルニ、山科ノ神ハ、宮道氏ノ祖神ニシテ、宮道氏ハ宇多天皇ノ皇后藤原氏ノ外家ナリ、故ヲ以テ此時始メテ之ヲ祀リシナリ。

大鏡
三太

政大臣忠平〇このおとよ、これ基經のおとよの四郎君、御母本院の大臣、〇時仲びはの大臣〇

時
び
は
の
大
臣
仲○

平
におなじ、このおとこ

略○

中よをまらせたまふ事廿年、○中のちのいみな貞信公となづけたて

略〇

中のちのいみな貞信公となづけたて

虫つる

略〇

中
三人の大[○]臣忠平子寛頼師輔、師尹、たちのまゐらせ給ふれうに、小一條のみなみ、かでのこうぢ

賴○

師案

平子、寛、たちのまゐらせ給ふれうに、小一條のみなみ、かでのこうぢ

には、いしだゝみをぞせられたりしが、まだ侍るぞかし、ひなかなかの明神おはしませば、洞院うし

ろのついぢよりおりさせ給ひしに、あめなせのふる日のれうとぞうけたまはりし。○略 中 此真信

略○

中
此真信

公は宗像神明うつゝにもものなど申たをひけり、我よりは御位たかくてゐさせ給へるなんくる

しきと申たまひければ、いとふびんなる御事なるかなどて、神位は申させ給へるなり。

〔神皇正統記〕

材

上わが國は神代よりのちかひにて、君は天照大神の御すゑ國をたもち、臣は天兒

屋の命の御ながれ君をたすけたてまつるべき器となれり

略〇

中
上古には皇子皇孫おほくて、諸

國にも封せられ、將相にも任せられき

咯。

然れど大織冠氏をさかやかし、忠仁公、政を攝せられ

くもりなきよのひかりにや春日野のおなじみちにもたづねゆくらんかやうに申かよはせ給ふはどのげにくときこえてめでたく侍りしなかにも大宮のあそびしたりし、

みかさ山さしてぞきつるいそのかみふるさみゆきの跡をたづねてこれらぞな、おきまどが心のおよばぬにや、あがりてもかくばかりの秀歌えさぶらはじ、その日にとりては、春日明神のよませ給へりける、おぼえ侍り、

〔伊呂波字類抄五〕梅宮

譜牒男卷下云、太后橘氏神、祭於圓提寺、

此神始大養太夫人藤原不比等妻所祭神也、太夫人子藤原

相繼其後遷祭於此神爲仁明天皇成崇出於御上、

復託宣宮人云、我今天子外家神也、我不得國家大幣、

是何緣哉云々、天皇畏之、欲盛立神社、准諸大社、每年令崇壯、太后不肯曰、神道遠而人道近、吾豈得與

先帝外家齊乎、天皇固請之、太后曰、但恐爲國家成祟、仍近移祭於葛野川頭、太后自幸拜祭焉、今梅宮

祭是也、

〔三代實錄三十六〕

元慶三年十一月六日辛酉、停梅宮祭、梅宮祠者仁明天皇母、文德天皇祖母、太后橘

氏之祖神也、歷承和仁壽二代、以爲官祠、今永停廢焉、

〔二十二社註式〕今案仁明母、文德祖母、太皇太后橘嘉智子也、嵯峨后左大臣諸兄之曾孫、贈太政大

臣奈良麻呂之孫、贈太政大臣清友之子也、此太后者嘉祥三年五月四日崩、六十

〔三代實錄四十五〕

元慶八年四月七日丁酉、是日始祭梅宮神、是橘氏神、頃年之間停奉春秋社、今有勅更

始而祭、

〔小野宮年中行事〕四月上酉日當宗祭事、午日使立

仁和四年四月乙亥御記云、朕多字之外祖母當宗氏神、在河內國、今年始可祭之狀仰了、

〔年中行事秘抄四〕上酉日當宗氏祭事、午日使立世記云、寛平五年四月七日戊辰、是日始奉遣河內

大原社事

吉田社事

此二社者春日^平勸請^乃社也、依所^仁稱彼名^於歟、被祭本社^ナ上^和後代勸請^乃神^爾天、同時^仁被祭
事无^其謂歟、然而藤氏^乃繁昌^乃後風儀^尊崇相^同哉、氏后^和奈度^{大原野}仁行啓^す昔^乃與里^{事也}已上
『伊勢物語』上昔二條の后^藤原高子^后の春宮のみやす所と申けるころ、氏神にまうで給けるに、
うまつれりけるこの系づかさなりける翁^業○在原^平人々のろく給はりけるついでに、御車より給
はりてよみて奉る。

大原や小鹽の山もけふこそは神世のこともおもひいづらめ^{○又見古}

^{今和歌集}

〔大鏡^{太七}太政大臣道長〕春日の行幸は、さきの一條院の御時よりはじまれるぞかし、それに當代^{○後}

おさなくおはしませども、かならずあるべき事にて、はじまりたるれいになりたれば、大宮^影
子御こしにそひ申させ給ひておはします、よのつねならずどきの御おほちにてうちそひつか
ふまつらせ給ふ、殿^{道長}藤原の御ありさな御かたちなど、すこしよのつねにもおはしなさせしか
ばあかぬ事にや、そこらあつまりたるゐなかせかいのたみ百姓、これこそたしかにみてまつ
りけめ、たゞてんりんしやうわうななどは、かくやどひかるやうにおはしますに、佛を見たてまつ
りたらんやうに、ひたいに手をあてゝをがみなどふさなこどわりなり、大宮のあかいろの御あ
ふぎ、御かたの程などはすこしみえ給ひけり、かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御すきか
げもふたぎ、いかゞこそもてかくし奉るに、こどかぎりわればけふはよほしき御ありさな
も、すこしは人の見たてまつらんもなせかはやどもやおぼしけん、どのも宮もいふよしなく御
心ゆかせ給へりけることおしはかられ侍るは、殿、大宮に、

そのかみやいのりおきけんかすがのゝおなまみちにもたづねゆくかな、御かへし、

にの給はすれば、すげなくて出させ給ぬ○中。よろづあさしくめでたきとのゝありさまなり、このつちみかど殿にいくそたび行幸あり、あまたのきさきいでいらせ給ぬらんと、よのあえ物にきこえつべき殿なり、これを勝地といふなりけり、これを榮花といふにこそあめれど、あやしものどものしもをかぎれるまなども、よろこびえみさかえたり、

〔二代要記後七〕關白左大臣頼通略中

治暦三年十月五日庚戌行幸宇治平等院別莊。頼通勅曰、前太政大臣頼通、名雖爲君、臣義如父母、同七

日勅、年官年爵准三宮、賜内舍人二人、左右近衛各六人爲隨身、

〔大鏡七〕太政大臣道長、かまたりのおとゝむされ給へるは常陸の國なれば、かしこのかしまど云ふ

ところ、に氏の御神をすましめたてまつり給て、その御よりいまにいたるまで、あたらしき御門后大臣たち給をりは、みてぐらづかひかならずたつみかどならにおはしまし、時は、かしこ遠しとて、大和國みかさ山にふり奉りて春日明神となづけたてまつりて、いまに藤氏御氏神にて、おほやけをどこ女つかひたてさせ給ひ、后宮その氏の大皇公卿、みな此明神につかうまつり給て、二月十一月上申日御まつりにてなんざまゝのつかひたちのゝしる、みかどこの京にうつらしめ給ては、又ちかくふり奉りて大原野と申、きさらぎのはつうの日、霜月初子日とさだめて、どしに二度のまつりあり、又おなじくおほやけのつかひたつ、藤氏殿原みなこの御神にみてぐら十列たてまつり給、なほもちかくとてまたふりたてまつりて、吉田と申ておはしをすめり、この吉田の明神は山かけの中納言のふりたて奉り給へるぞかし、御まつり日四月後の子日、十一月下申日とをさだめて、我御さうにみかど后宮たち給ふものならば、おほやけまつりになさんどちかひ奉りておはしましければ、一條院の御時よりおほやけまつりにはなりだるなり、

〔廿二社本縁〕

女御いのりの僧どもをよはせてのゝ来る、加持をひり、うちまをしむわく、中日とらひみ
 じかりつる御いのりの来るしにや、いぬの時ばかりにいとたひらかにみこ神子の御女
 給ぬ、略中女におはしませせはうち條三にもいませすとし、心ごとにおきてとこえさせ給た、おな
 じくばとたれもおぼさるべし、されど春宮一條のむされ給へりしを、どのゝおまへ源長の御
 はつむをよにて、榮花のはつはなとこえたるに、この御ことをばつばみ花とぞ聞えさすべか
 める、略中九月にも成ぬれば、行幸の事けふあすの程にいそがせ給ふ事いみじ、宮の女房のなり
 いみじきに、かんの殿一條の御かたどのゝうへ道長の御かたわれも のゝ来るこ
 といみじ、ふねのかくなといみじくとゝのへさせ給へり、行幸の有さま、みな例のさほうなれば、
 かきつゝくまじ、大宮一條の東宮一條のむされさせ給へりしちの行幸、たゞそのまゝの育
 さまなり、略中うへ中御帳のうちにいらせ給て、月比の御物語など、心のどかに聞え給、かう
 つくしき人をいませで見さりつる事なほつでたき事なれど、この身のありさまこそくるしけ
 れ、いみじく思人のともかくもおはせんを、どみにもみぬ事、いみじくうちをしかしなご萬に聞
 えさせ給て、いざちこむかへてなかにふせて見ん、いみじうつくしさものかな、この宮達のち
 となりしをこそうつくしうみしかさ、なほそれはれいのありさまなり、これはことのほかにを
 かしくみゆるは、かみのながければなめり、なほくゝとくゝいらせ給へ、うちにてはめのとい
 るまじ、まろめのどにてはべらんなど聞えさせ給へば、ものくるほしとてすこしわらはせ給、か
 ゝる程に日もくれぬれば、上達部の御女そびになりぬるがいみじくなつかしくおもしろきに、
略中どみに出させ給まじき御けしとなれば、殿いらせ給て、よにいりはべりぬ、かばかりおもし
 るさあそびども御覽せんと申させ給へば、いとおもしろしとき、侍りがく、この系はきくこそ
 おもしろけれ、見るはをかしうやはある、さまゝのまひどもはみな見はべりぬといどのどか

仰奉行之

〔書記〕安元二年六月卅日癸卯、今日十樂院新御堂棟上也、依有口託宣奉爲贈左府時信平有此禁院司兵部卿、主典代盛職、參向行也、

犯罪處分

〔律疏〕六議

一口議親、謂皇親、及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、太皇太后者皇帝祖母也、皇太后者皇帝母也、等以上親、

〔令義解儀制〕凡五等親者、父母、養父母、夫、子、爲一等謂養子、祖父母、嫡母、繼母、伯叔父、姑、兄弟姊妹、夫

之父母、妻、妾、姪、孫子、婦爲二等謂妻亦同、子妾亦同、爲二等、父妾人二等、則其養子、曾祖父母、謂祖父之

伯叔姑、夫姪、從父兄弟姊妹、異父兄弟姊妹、夫之祖父母、夫之伯叔姑、姪、婦、繼父同居、夫前妻妾子爲

三等謂令妻妾子亦同也、夫姪爲三等、夫兄弟爲四等、謂伯叔之妻爲母、夫之姪爲子、又兄弟之、高祖

父母、從祖祖父母、謂祖父之兄、從父兄弟姊妹也、從祖伯叔父、姑、謂從祖祖父之子、即父、夫兄弟姊妹、兄弟妻妾、再從兄

弟、謂從祖伯叔父之子也、姊妹、外祖父母、舅、姑、謂母之兄弟、曰、兄弟、孫從父兄弟子、外甥、曾孫、孫婦、妻妾前夫子

爲四等、略下

車駕幸私第

〔三代實錄清和〕貞觀六年二月廿五日壬午、車駕幸於太政大臣眞房、東京染殿第、觀櫻花、中路駐蹕

於一條第、即是帝和、清和降誕之處也、太政大臣以香體賜扈從群臣、文武官、置祿物於庭中、令帝覽、訖班

賜有差、遂幸染殿花亭、親王已下、並侍焉、太政大臣別令伶人教習樂一部、喚能屬文者、五位

已上十人、諸司六位十人、文章生二十人、命樂賦詩、具醉歡樂、移自花亭、御於射場、帝御弓矢一發、中鵠、

群臣稱萬歲、親王已下、以次遞射、由城國司守正四位下紀朝臣、令守等、率郡司百姓於東垣外、行耕田

之禮、欲令帝覽之、知農民之有事也、自晨至暮、極樂而罷、賜親王公卿文武百僚祿各有差、夜分還宮、

〔榮花物語十一〕長和二年七月六日の夕かたより御けしきあるさまにおはしませは、三條后卿藤原道長

右左大臣宣奉勅依件定之、自餘停止者、省宜承知依件行之、符到奉行、

延長八年十二月九日、

〔拾芥抄_{下本}〕天慶九年四月廿六日記曰、被御位田山陵使云、

山階 柏原 嵯峨 深草 後田邑_{原本} 後山階 後宇治_{昭宣公(藤原基經)孫}

後宇治_{同公室、今上(朱雀)外祖母} 合八箇所

〔九曆〕天曆三年十二月廿三日、以貞信公_{藤原忠平}墓所、可預荷前幣之由蒙仰了、可令作官符之由仰有

相朝臣事、

〔政事要略二十九〕荷前事

新加太政大臣正一位藤原氏、在宇治郡、

太政大臣 諱實賴 太政大臣 伊尹

今案有新加墓之時、如陵不除先墓歟、又堀川相府_{通兼}可入歟、可尋知、

〔小右記〕長和三年十二月十七日己巳、昨日內大臣定申荷前使、_{今日廿七日}中略

宇治_{參議道方} 中宇治_{參議賴定} 班幣所_{參議兼陸}

〔左經記〕長元元年十二月卅日庚寅、申刻被立御荷前使、先應備龔六前居侍所、長官四位少將定良、次

官良位朝臣等著餐余_{經源}進兩三盃、此間小使二人_{官史生也}、取小簋二枚、敷南庭_{西次}、昇立置納、

荷前物、宮入足案一脚於中門外、次次官纒著_{依地溫}、昇案入從中門立簋上退出、_{使少將解纒、擲}次

小使史生取使料簋置案下簋上、御拜了、_{令著純色御裳、衣給云云}次長官昇出案中門外、_{御前聽切、案小}

次長官昇向木幡_{藤原道長墓}燒之云、

〔兵範記〕仁安三年七月廿五日甲申、今日皇太后宮_平先公贈左大臣_{時信}御忌日也、從宮被行其式

法於東山十樂院被行、是彼時七々中陰堂場也、顯尋法眼之時、有緣被用畢、今忠雲內供雖相承、依官

異同乎然朝廷奉幣必止一墓而二說不同、竟不知其爲誰墓亦太可異也、今姑據二書定爲鎌足、併舉異同以待後考、

○按ズルニ、鎌足ハ内大臣大織冠タリ、三代實錄ニ、太政大臣正一位トアルハ、往時ノ内大臣ノ、當時ノ太政大臣ニ當リ、大織冠ノ正一位ニ當ルヲ以テナリ、故ニ此前後ノ書ニ、多ク内大臣大織冠ト云ヘリ、太政大臣正一位ヲ贈リシニ非ザルヲ知ルベシ、天平十三年ノ銅版詔書ニ、鎌足不比等ノ二人ヲ藤原氏前後太政大臣ト云ヒ、興福寺緣起ニ、先正一位太政大臣、後太政大臣ト云ヘルハ、三代實錄ト同一ノ筆法ナリ、多武峯ハ、鎌足ト不比等トヲ移葬セル地ニシテ、初ニハ荷前ニ鎌足ヲ祭り、後ニハ改メテ不比等ヲ祭りシ故ニ、同一ノ藤原太政大臣多武峯墓ノ文ニシテ、三代實錄ト延喜式ト、其人ヲ異ニスルヲ致セルカ、附シテ以テ他日ノ參攷ニ備フ、

〔政事要略二十九〕太政官符中務省

應口每年荷前山陵并墓事○中略

一墓八所

大和國一所 多武峯

山城國七所

一所 贈太政大臣藤原氏、
在愛宕郡○中略

一所 贈正一位常宗氏、
在葛野郡

一所 太政大臣贈正一位藤原氏、
在宇治郡

一所 贈太政大臣正一位藤原氏、
在宇治郡

一所 贈正一位宮道氏、
在同郡

一所 贈正一位王氏、
在同郡

次宇治墓贈正一位太政大臣藤原公藤原

小野墓贈太政大臣正一位藤原朝臣

後小野墓贈正一位宮道氏在山

又宇治墓贈太政大臣正一位藤原朝臣時

〔政事要略二十九〕荷前事

多武峯墓贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣在大和國

淡海公者内大臣鎌足之長子也、依爲藤氏之先、雖多他墓別所注也、自餘墓可見式、

〔公卿補任元正〕右大臣正二位藤原不比等 養老四年八月三日薨 十月八日戊子火葬佐保山椎

岡從遺教也、

〔古事記傳二〕四墓ハ贈太政大臣正一位藤原朝臣多武峯墓、藤原朝臣冬嗣墓、尚侍藤原朝臣美

都子墓、源朝臣潔姬墓これなり、冬嗣公は文德天皇の御外祖、美都子は同御外祖母、潔姬は當代

和○清の御外祖母なればなり、然るに多武峯墓は不比等公にて、聖武孝謙の御外祖にこそあれ、

清和の御代に殊に祭らるべき由はなきに、此内に置れたるは、此時天皇は未幼坐々ば、凡て良

房大臣の御心より出たる故なるべし、さて三代實錄今本に、右の多武峯墓鎌足とあるは、後人

のなまざかしらに改めつるものなり、古本には此名なし、多武峯は不比等と諸陵式にも見え、

贈太政大臣正一位も鎌足にてはかなはぬ物をや、

〔大日本史禮樂四〕按實錄云、贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足多武峯墓、符宣鈔書法亦同、而延喜

式書多武峯墓贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣、政事要略以爲不比等、其說不合可疑、且鎌足

贈位贈官正史無所見、實錄書法亦非無疑、據大織冠傳鎌足葬山階公卿補任、帝王編年記、不比等

葬椎岡、然皆其火葬地也、意者後人或移葬二人遺骨於多武峯、定爲墳墓、而二墓竝在同地、故致此

延喜七年十二月二十一〇一、一、本、作、五、日、亦依左大臣〇藤原申止長良墓以宮道列子預荷前事、

〔延喜式諸陵十一〕

牧野墓太皇太后之先和氏在大和國廣瀨郡、

大野墓太皇太后之先大枝氏在大和國平群、

阿陀墓父在大和國藤原朝臣智光臣、日本根子推國高彥尊天皇一外祖、

村國墓和國正一位安部命婦古美奈同天皇外祖母、在大和國、

多武岑墓十市太皇太后正一位淡海公藤原朝臣、無守月、

後阿陀墓宇智太皇太后正一位藤原朝臣武智麻呂、在大和國、

相樂墓父、在山城國相樂郡、正一位藤原朝臣百川淳和、太皇太后一外祖、

後相樂墓城國正一位藤原氏同天皇一外祖、在山、

加勢山墓城國相樂郡、正一位橘朝臣清友、仁明天皇一外祖父、在、

小山墓贈正一位田口氏、同天皇一外祖母、在河內國、

後宇治墓山城國宇治郡、正一位藤原朝臣冬、關文、天皇一外祖父、在、

次宇治墓山城國宇治郡、正一位藤原氏、同天皇一外祖母、在、

愛宕墓贈正一位源氏、清和天皇一外祖母、在山城國愛宕郡、

後愛宕墓朝臣、在山城國愛宕郡、正一位美濃公藤原、

深草墓贈正一位藤原氏、陽成太上天皇一外、

河嶋墓贈正一位當家氏、在山、

八坂墓贈正一位藤原氏、在山城國愛宕、

拜志墓贈正一位藤原朝臣繼、在山城國、

愛宕墓、在山城國愛宕郡。○又見類聚符宣抄四

〔三代實錄清和〕貞觀五年二月七日庚子、下知大和國、禁藤原氏先祖贈太政大臣多武岑墓四履之部

內、百姓伐樹放牧、

〔三代實錄清和〕貞觀五年三月十五日丁丑、帝外祖母源氏源墓、在山城國愛宕郡、詔以城地四町爲

四履之限、

〔三代實錄清和〕貞觀十四年十二月十三日己酉、先是天安二年十二月九日定十陵四墓、獻年終荷

前幣、是日略○中四墓加太政大臣贈正一位藤原朝臣良房愛宕墓爲五墓、在山城國愛宕郡、

〔三代實錄清和〕元慶元年十二月十三日己卯、勅定每年獻荷前幣五墓、贈太政大臣藤原氏多武岑

墓、在大和國、贈正一位源氏墓、太政大臣贈正一位藤原氏墓、並在山城國愛宕郡、贈左大臣藤原氏墓、

在山城國宇治郡、贈正一位藤原氏墓、在山城國紀伊郡、自餘皆停廢焉、

〔三代實錄清和〕元慶三年四月十六日乙亥、故太政大臣忠仁公其房原墓、置守家一畑、

〔三代實錄清和〕元慶八年十二月廿日丙午、定每年獻荷前幣十陵五墓。略○中贈太政大臣正一位藤

原朝臣多武岑墓、在大和國十市郡、贈太政大臣正一位藤原朝臣墓、在山城國宇治郡、贈正一位藤原

氏墓、在山城國紀伊郡、贈太政大臣正一位藤原朝臣墓、在山城國愛宕郡、贈正一位藤原氏墓、在同郡、

停廢。略○中太皇太后后明子考太政大臣贈正一位藤原朝臣、妣贈正一位源氏兩墓、不預別貢荷前幣、

〔三代實錄清和〕元慶八年十二月廿五日辛亥、勅以山城國愛宕郡鳥戶鄉地四町、爲贈正一位藤原

朝臣總繼墓地、以同郡八坂鄉地十町、爲贈正一位藤原朝臣數子墓地、

〔三代實錄清和〕仁和元年十月八日己未、是日勅皇妣贈皇太后山陵、置守家五戶、外祖父贈太政大

臣正一位藤原朝臣總繼、外祖母贈正一位藤原朝臣敏子墓各一戶。略○中並在山城國愛宕郡、

〔西宮記十月〕荷前事

答於恩公食於道假之議者誰謂不宜今卿上表爲公讓之朕雖知其丹誠未忍割素意宜如前詔莫有所請

三代實錄清和十四貞觀十五年十一月六日丁卯右大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣基經上表請還故忠仁公其房原封邑云々勅答曰右大臣藤原朝臣得表已知爲故太政大臣忠仁公讓封朕聞

存立嘉庸沒受寵渥古之遺法也公儀刑道著輔導年深仁爲己任死而後已朕追加封爵同之生存答恩篤也而卿稟遺旨再三固辭朕察其至誠不拒來請唯餘位封之所輸以示厚意之不已今纔過忌禁更求讓還朕以爲古之功臣有傳世不絕之誼況公地居外祖天下權勳至其遺封未謂羹食於朕失割

腴之賞在公非爲慘論臂之貪聊添幽室之榮兼助奠祭之費朕不勝感泣卿勿復請又見都氏文集

公卿補任字多太政大臣從一位藤基經寬平三年正月十三日薨年五十六詔贈正一位階封越前國

日昭宣公號堀川太政大臣生年承和三年丙辰送山城國宇治郡攝政十一年閏白八年

恩管抄字一多關白太政大臣基經中略寬平三年正月十三日薨年五十七天皇基經

續日本紀十聖武天平二年九月丙子遣使以渤海郡信物令獻山陵六所并祭故太政大臣藤原朝臣

等墓

續日本紀十聖武天平勝寶七年十月丙午勅曰比日之間太上天皇枕席不安寢膳乖宜朕竊念茲情深

側隱中略遣使於山科大內東西安古鼻弓奈保山東西等山陵及太政大臣不藤原墓奉幣以祈請焉

三代實錄清和一天安二年十一月五日壬戌中略從四位上行右兵衛督源朝臣勤爲今上外祖母源氏

房妻源姬愛宕墓使並告以天皇卽位也

三代實錄清和一天安二年十二月九日丙申詔定十陵四墓獻年終荷前之幣中略贈太政大臣正一位

藤原朝臣鎌足多武峯墓在大和國十市郡後贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣宇治墓在山城國宇

治郡尙侍贈正一位藤原朝臣美都子中略次宇治墓在山城國宇治郡贈正一位源朝臣潔姬其房妻原

行也其先朝太政大臣藤原朝臣^{○不}者非唯功高於天下是復皇家之外戚是以先朝贈正一位太政

大臣斯實依我舍已極官位而准周禮猶有不足竊思勳績蓋於宇宙朝賞未允人望宜依太公故事追

以近江國十二郡封爲淡海公餘官如故以繼室從一位縣狗養橘宿禰贈正一位爲太夫人又得大師

^{○藤原}押勝奏僞故臣父及叔者並爲聖代之棟梁其作明時之羽翼位已窮高官尙未足伏願廻卹所賜太

師之任欲讓南北兩左大臣者宜依所請南卿^{○武智}贈太政大臣北卿^{○房}轉贈太政大臣庶使酬庸

之典垂跡於將來事君之臣盡忠於後葉善告遐邇知朕意焉

〔三代實錄^{二十}〕貞觀十四年十月十日丁未正三位守右大臣兼行左近衛大將藤原朝臣基經抗表

辭故太政大臣忠仁公^{○藤原}其房封邑曰臣聞昔樊裏侯之遺言時至猶從厥旨羊太常之終制府於不敢

違心何況忘私義讓指河口而結誠愛國忠謀歷肝膽而貽誠臣謹讀去月四日詔書贈於故太政大臣

藤原朝臣以正一位又以美濃國封之爲美濃公諡曰忠仁食封資人並同平日太政大臣之官亦如故

矣崇賞慰勸寵光輝赫聲榮之盛門閥緝萃伏計先臣幽嘆追榮舊想添見藻於天波退憚新恩贈永谷

於地底但先臣臨終誠臣曰余昔奉聖主於襁褓望成人於日月上天從欲明辟累年吾生自此而歿世

上亦有何思徒恨時運陵遲邦國凋弊雖煩開聖化於東后猶難起人謠於甫田生時既見帝藏之室死

後何招錫錄之費即我下世之後朝例攸給葬送等物凡諸應爲公煩者無小無大須宜固辭一切勿請

但如此心事須面諸皇太后殿下然而君臣禮隔男女事殊何驚長樂之宮敢幸沈淪之地吾既無男

汝即猶子宜述吾志莫忘吾言而今職位食封既同平日加之以美濃之一國公費兼倍於生時誠非先

臣提撕告誡之意也臣仍具狀以聞^{○中}勅答曰省表悉之故太政大臣忠仁公保養朕躬不測告功朝

露溢至傷如之何凡褒贈之設所以旌有功表有德也忠仁公處於外祖之顯地重以上台之元功朕思

所以加隆無所不至但尋公平日之志深秉謙損之志是用纓飾以正一位追封爲美濃公於朕之心猶

有不厭軍法斬一牙門將者封侯萬里之外夫斬一將之功孰與安寧天下況亦有天爵者人爵從之朕

〔宣胤卿記〕文明十二年正月廿六日丁未、自左少辨許宣下兩通正月十三日正二位藤原朝臣信實、叙太政大臣、到來、極位者內府也、贈官者故大炊御門內府、可尋也、今日忌日也、當今御門、御母、信子藤原御

父分也、仍及此沙汰者也、則下知大內記、

〔台德院殿御實紀〕六十一元和九年七月廿七日公秀忠、德川は此日より天下を御讓與せし、御みづ

からは大御所と稱し奉る、略中御隱退前後十年にして、寛永九年正月廿四日亥刻、西城の正寢に

して薨じ賜ふ御壽五十四略中二月廿九日勅使參向ありて、台德院殿と勅證せられ、正一位

を贈らせらる、主上正明は太上天皇の尊號を御追贈あらまほしき叙慮おはしけれ、御平常御

謙遜の御志ふかくまし、けるゆゑこなたよりはかたぐ御辭退ありければ、先正一位にのぼ

せ給ひけるとぞ聞えし、

〔諸家知譜拙記〕三園基音

靈元院外祖、權大納言正二位號南宗院、承應四、二十七薨、五十二、贈左大臣、

一本云、基音公、寛文七、七、五贈左大臣、勅使少納言豐長朝臣向誓願寺讀宣命、依當今外祖也、

〔十三朝紀〕聞七弘化元年正月贈故外祖權大納言經逸內大臣、

〔今日抄〕孝明嘉永三年正月二十七日、贈外舅權中納言實光左大臣、

〔公卿補任〕元正右大臣正二位藤原朝臣不比等、養老四年八月三日薨、略中聖武孝謙二代外祖、中

十月十日壬寅、詔遣大納言正三位長屋王、略中就右大臣第宣詔、贈太政大臣正一位、諡曰文忠公、

食封資人並如全生、

〔續日本紀〕聖武天平十三年正月丁酉、故太政大臣藤原朝臣比等不家、返上食封五千戶、二千戶依舊返、

賜其家三千戶、施入諸國分寺、以充造丈六佛像之料、

〔續日本紀〕淳仁天平寶字四年八月甲子、勅曰、子以祖爲尊、祖以子亦貴、此則不易之彝式、聖主之善

没後賜封

はれり、範季がめひ刑部卿の三位と云しは、能圓法師が妻也、能圓は土御門院の母后、承明門院の父なり。

〔愚管抄〕六當今佐渡院○順御母は、建永二年六月七日院號ありき、立后はなし、二位せさせ給てきと、准后の官になり給て、修明門院と云院號ありけり、この例は八條院の御時より始りける。とぞ、又東宮御即位の後、院號近例かならず有事也、されば又範季の二位も贈左大臣に成にき、出家いよいよにすべかりし人のこの事を思ひて、出家もせずしてうせにしかば、たしてかゝればめでたき事也。

〔増鏡四神也〕阿波院○土の宮○後は、○中御は、はつちみかどの内大臣みちちかの御子に、宰相の中將みちむねとて、わかくてうせにし人の御むすめなり、○中さて仁治三年三月十八日御そくぬよろづあるべきかぎりめでたく過もてゆく、○中當代かくめでたくおはしませば、通宗宰相も左大臣從一位おくれ給ふ、御むすめ後の位をおくり申されし、いどめでたし。

〔贈官宣下記〕文安元年五月六日乙卯、是日贈官位宣下也、御外祖父綾少路源少將經有、去應永十九年五月十五日逝去、今年今月相當三十三年遠忌之間、被贈左大臣從一位者也、國母○後准后之御父也、庭田中將重賢朝臣之祖父也、上卿權中納言藤原定繼卿、職事藏人右中辨同資重、○本行少納言菅原繼長朝臣、權少外記中原康顯、右大史高橋員職等參陣也、其儀上卿著仗奥座、次職事進仰勸語、上卿移著端座、令敷弔召少内記高橋員職、仰宣命位記事、其詞云、外親父右近衛少將源經有、贈左大臣從一位、例作進部、宣命位記、員職退持參宣命草一通並一卷、○納宮上卿披見之、令持内記參進弓場、付右中辨奏之、即被返下之、○殿下之後、上卿歸著陣披見宣命位記等、○内記於弓場、取替清書宣命、○草取中出、令返給空宮於内記、猶位記宣命者留前、令退内記、次上卿召少納言於弔、給宣命位記少納言、少納言翌日宣命位記等相其向墓所也、○伏見

〔朝野群載二十〕正二位藤原朝臣實季

右可贈正一位

中務朝之泉戴世之國華、抽精誠於魏宮、流餘慶於烟帳、嗟乎音響長隔、歲月其徂、睦親之義、惻隱于懷、宜遵飾終之禮、式申贈爵之恩、可依前件、主者施行、

嘉承二年十二月十三日

〔續世繼三花圖の句ひ〕このみかど〇二の御母は、大納言經實の御むすめ、その御母春宮大夫公實の

御むすめなり、その大納言の中の君は、花ぞの、左のおと〇源の北の方なれば、あねの姫君を

子にして、院の、ま宮とおはしまし、に奉られたりまなり、このみかど〇仁うみおき奉りてうせ

給にき、後の位をおくられ給て、贈皇太后宮懿子と申なるべし、御おやの按察大納言〇輕も、おほ

きおと〇や、おほきひとつのくらゐおくれ給へるとなんうけ給はる、さる事やあらんともまら

うせ給にしかども、やんごとなき位をへられ給へり、御すゑのかぎりなるべし、

〔兵範記〕仁安三年六月廿九日己未、今上主上〇六外祖父母有贈官位事、去三月御即位以後此議出

來、連々相障于今延引上卿著陣、召中務少輔定長下給詔書、次召少納言泰經下給宣命位記各二通、

泰經出敷政門、令持外記史生向彼幕所、東山四條末十樂院東、故顯尋法眼結界之地、有緣殯歛彼在

生時、依連理之契、御坐一所也、仍兩所位記宣命泰經一人爲勅使、右兵衛督以案内者、被副少納言爲、

指南也、贈左大臣正一位平時、信贈正一位藤原祐子、

〔玉海〕治承三年六月廿九日丙辰、白河殿〇平清盛女藤原基實妻、准后薨逝間事、〇中

宣命贈位事、准淑子〇藤原良真女、并代々外祖母等例者、可被贈正一位、〇下

〔愚管抄〕贈左大臣範季〇中は、後鳥羽院を養ひ進んで、踐祚の時もひとへに沙汰しまるらせ

し人也、さて加階は二位までしたりしかども、當今〇順の母后〇重のちより、さて贈位もたさ

〔三代實錄四十五〕元慶八年三月十三日甲戌、天皇外祖父故從五位上藤原朝臣總繼、外祖母正五位下藤原朝臣數子、並贈正一位、

〔三代實錄四十八〕仁和元年九月十五日丙申、詔曰云云、朕外祖父贈正一位藤原朝臣總繼云云、贈以太政大臣、十六日丁酉、藤氏公卿大夫詣闕拜舞、稱賀贈帝、外祖父太政大臣也、

〔皇胤紹運錄〕桓武天皇

仲野親王、二品式部卿、贈一品太政大臣、字多天皇爲外祖故也、

〔勸修寺緣起〕ありしひと夜のちぎりにいでき給へりし女ぎみは、宇多院の位におはしまえける時に入内ありて、皇太后宮胤子と申、皇子いでき給にければ、高藤の公は朝家に又なき權臣にて、内大臣になり給ひにけり、皇子踐祚ありて延喜の聖の御門とぞ申なる、我朝の賢王におはします、帝祖になり給にければ、うせ給てのちは、太政大臣正一位を贈せらる、

〔日本紀略一〇〇〕寛平九年十二月十七日戊午、詔贈外祖母故從二位操子女王正一位、

〔日本紀略一〇〇〕延喜九年四月四日、左大臣藤原朝臣時平薨、九五日、贈故左大臣太政大臣正一位、有固關警固事、

〔日本紀略三〕

〔日本紀略三〕天曆三年八月十八日己丑、戊時葬太政大臣〇藤原忠平於法性寺外良地、詔贈正一位、

貞信公、勅使大納言清蔭卿、中納言元方卿、參議庶明朝臣等向彼所、

〔日本紀略五〕康保四年十月廿四日己卯、詔贈故從三位藤原盛子正一位、天皇外祖母、九條右大臣

師〇藤原室也、宣命使民部大輔源行正、率局史生一人向金龍寺、

〔日本紀略九〕永延元年二月十六日己酉、贈故藤原時姬〇藤原時母正一位、

〔扶桑略記二十九〕天喜二年四月廿六日、皇后〇藤原母氏從五位下源朝臣祇子贈從二位、

〔古事談一〕道后宮、白河院延久五年五月六日、天皇先妣藤原茂子〇中贈皇后位、又故權大納言

藤原能信卿贈太政大臣正一位、又外祖母藤原社子贈正一位、

冢一烟

〔續日本後紀^{仁十七}〕承和十四年九月丁酉詔贈大納言從三位橘朝臣奈良麿更贈太政大臣正一位崇
帝戚也

〔續日本後紀^{仁十七}〕承和十四年三月戊子神祇伯正四位下田口朝臣佐波主卒也詔贈從三位以
祇太皇太后之外戚也

〔文德實錄^二〕嘉祥三年七月壬辰追崇外祖父^{○一本外祖父下}正一位藤原朝臣冬嗣爲太政大臣外

祖母尙侍從三位藤原朝臣美都子贈正一位策命曰天皇勅命^{○我勅命}坐宣久尊祖比敦親^{○須事波}食國

乃恒典^{○利}故是以追^{○氏}太政大臣乃官贈賜^{○崇賜}布勅命^{○平}散位從五位下藤原朝臣雄胤^{○平}差使^{○氏}

申賜^{○久}宣詔曰貴德重親前王之令圖悼往飾終有國之通典朕外祖父左大臣正一位藤原朝臣風標

秀上器宇凝深德爲時宗位居朝棟至忠報國世異名新遺愛在人身徂德盛外祖母尙侍從三位藤原

氏自家刑國以孝率忠續規縛於采蘋母則賢於大嫔春花早落翫流芳而有餘石火不留繼殘焰而仍

照朕寓形苦填沈思鼎湖至哀之餘懷夫親鑒況國憲有恒崇班攸歸宜加寵章式表拱木外祖父可贈

太政大臣外祖母可贈正一位布告遐邇稱朕意焉

〔三代實錄^一〕天安二年十一月廿六日癸未贈故正三位源朝臣潔姬正一位遣從四位上行越中守

源朝臣啓於神樂岡冢告以贈位潔姬帝之外祖母也

〔三代實錄^{三十}〕元慶元年正月廿九日辛丑詔曰紀德錄勳代既異而加等飾終追遠身雖謝而及恩況

乃天愛之深理切敦族人道之重情殷睦親外祖父故中納言從二位藤原朝臣^{○長}識度夷雅餘慶延

於身後外祖母藤原氏門傳圖訓家著圖儀蘋藻之禮彌恭松蘿之茂交映並征耀旗借貨晚景於西峰

圍水易驚遂遊魂於東岱悲玉樹之早落不見孫榮訪瓊蘭之遺芳宜從子貴外祖父可左大臣正一位

外祖母可正一位死而有知嘉茲哀贈主者施行^{○又見都}

三位藤原朝臣宇合、大藏卿從三位鈴鹿王、右大辨正四位下大伴宿禰道足、就縣犬養橘宿禰、宜詔贈從一位、別勅莫収食封資人。

〔續日本紀^{十二}〕天平九年十月丁未、贈民部卿正三位藤原朝臣房前正一位左大臣、並賜食封二千戶於其家、限以二十年。

〔續日本紀^{三十八}〕延曆四年五月丁酉、詔曰、春秋之義、祖以子貴、此則典經之垂範、古今之不易也、朕君臨四海、子茲五載、追尊之典、或猶未崇、與言念此、深以懼焉、宜追贈朕外曾祖贈從一位紀朝臣^人正一位太政大臣。

〔日本後紀^{十四}〕大同元年六月辛丑、詔曰、尊祖追榮、先王之茂範、敦親贈號、曩哲之嘉猷、朕以菲薄、嗣守洪基、思欲奉循舊章、篤崇典禮、宜朕外祖父贈從一位內大臣藤原朝臣良繼追贈正一位太政大臣、外祖母贈從一位尚藏安倍朝臣古美奈贈正一位。

〔日本後紀^{二十四}〕弘仁六年七月壬午、立夫人從三位橘朝臣諱^子爲皇后^中、贈皇后父正五位下橘朝臣淨友從三位。

〔日本紀略^{淳和}〕弘仁十四年五月己未、詔曰云々、外祖父贈右大臣從二位藤原朝臣^川、外祖母尚縫從三位藤原氏云々、宜加崇班、式照幽壤、外祖父可太政大臣正一位、外祖母可正一位。

〔續日本後紀^{仁明}〕天長十年三月乙卯、詔曰、盛德無沫、必資加等之榮、徵烈惟昭、非修崇號之制、故使敬宗尊祖、義煥曩筮、追遠飾終、不隔異代、朕外祖父從三位橘朝臣^友、疏基顯族、驥首高衢、外祖母從三位田口氏、毓彩芝田、騰芳薰圃、但屬運謝、已從闕川、朕以菲薄、丕承洪業、緬尋既往、想清渾之眇焉、乃詢

舊章、宣稱禮而有貴、宜外祖父及外祖母並追贈正一位也、橘朝臣位記狀曰、地居貴戚、僭隆而加榮、德蘊餘芳、人雖謝而追遠、宜申朝典、式貢泉扃、田口氏位狀記曰、曾慶潛行、誕茲婉孌、粉川行閱、蘭郁猶流、欽若舊章、睦親斯在、宜崇寵贈、允迪追榮、勅山城國相樂郡持山、冀河內國交野郡小山、冀並宜置守。

行贈位也。又位記宣命可内覽哉否。被問先例。大外記定俊申云。閑院太政大臣時兼不可内覽之由。殿下被仰者。仍令少外記申。此旨於殿下返來云。彼例不可内覽者也。（條奏本不内覽也。宣命位記草可奏聞哉否。條先被問大外記申云。可被奏聞是先例也。清書請印之後。重相具宣命可被奏者。仍隨定俊真人申被仰也。九日無平座。依爲廢朝中也。但内藏寮居酒肴於殿上。如例諸司供菊花。十一日例幣延引之由。有大祓。宰相中將保實行之。）（右少辨退參。不該著者。） 十二日早朝上御。儀并有音奏。依避日次引及今日歟。

〔柱史抄下〕贈官位事

母后并外祖父母多有此事。上卿召内記。内記參賦。仰云。某人可贈。（虫損） 后宮某人可叙其位。詔書宣命位記。任例可奉仕者。被仰下。准據之例。即各成草。參進内覽。奏下如恒。（若於位記者。直清書上卿於本座。召大内記。仰清書事。清書覆奏。如例。詔書有御書。上卿召中務輔賜之。贈后宮宣命使。參議次官五位殿上人也。上卿召少納言給贈位位記宣命。）（皆文於條所條之。至立記者。持向彼子息。略中。）

〔大鏡後一條〕

世はじまりてのち。大臣みなおはしけり。（略中） あるひはみかどの御おほち。あるひは

御門の御をちぞなり給ふゆる。またまかのごとく帝王の御おほちをちなごにて御うしろみし給ふ。大臣納言かずおほくおはす。うせ給ひてのち。贈太政大臣など。なり給へるたぐひあまたおはすゆり。ごやうのたぐひ七人。（或本） ばかりやおはすらん。わざどの太政大臣はなりがたくすくなくぞおはする。

〔續日本紀元正〕

養老四年八月癸未。是日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨。十月壬寅。詔遣大納言

正三位長屋王。中納言正四位下大伴宿禰旅人。就右大臣第宣詔。贈太政大臣正一位。

〔愚管抄元正〕

不比等大臣は。養老四年八月三日薨。諡號淡海公。聖武の外祖にて。病に臥給ふより重

く殊にもてなされ給ふ。贈太政大臣と云々。

〔續日本紀元正〕

天平五年十二月辛酉。遣一品舍人親王。大納言正三位藤原朝臣武智麻呂。式部卿從

二にばらせ給けり。○中どのばらみな皇太后宮の御うすにはひにておはしまし、みやつかさな
せこまやかなりつるに、くろつるばみにならせ給世中の十が九はみなにふみわたりたり、いは
ば諒闇ともいひつべし。おほやけよりも諒闇せよといふ宣旨くだりたればなりけり。

〔日本紀略後十三卷〕萬壽四年十二月一日丁卯。○四月一日丁卯、誤。入道前太政大臣藤原道長公薨於法成
寺無量壽院。法名行覺、年六十二。十一日丁丑、月次祭神今食等、依入道大相國薨被停止畢、仍有大祓。

〔中右記〕寛治八年。元○嘉保、年。九月五日、此曉右大臣源房、薨、年五十八、六條卒。先十餘日、勞赤痢病、遂以薨逝、仍今

日雖可有宇佐遷宮并官奏、皆以止了、主上河○堀御愁歎之餘、雖供朝夕膳無出御、八日丙午、今夜藤

大納言左大辨季參仕、使座、官人置、藤突。有右府薨奏事、先外記申、其由上卿令藏人右少辨時範奏、薨奏候

之由、仰聞食了、由外記指薨奏於文杖覽上卿之見了、後進御所邊、令時範奏留御所、返給文杖、抑從彼

家被申云、贈物別給葬司等被停止者、上卿還著使座、時範仰云、可贈正一位、贈物別給任葬司等隨申

請、警固并廢朝三日者。明日平座停止之由、別中、不被仰、便、贈物等事、可隨申、請由被仰時範了、仰史、上卿

召内記、少内記菅原宣資參進。大内記在、其、羅、九條前太政、大、臣、依、召、文、聖、生、少、内、記、也。被仰可作宣命並位記之由、此間且召外

記、被問六府參入由、皆以參仕者、令内監召六府入從、西中門方、列立使座前庭、右少將有賢、左衛門權

佐有信、除四府將監尉等也。六位、留、可、立、北、上、也、而、南、上、若、誤、然、佐、尉、異、位、重、行。无名對面、次仰可警固、由次位記宣命草等内

記覽上卿入宮、上卿進御所邊、令時範奏返給歸著使座、仰内記令清書清書了後、被位記請印儀如常、

但中務輔俄不參仕、依以右少將有賢爲代官。留、少、納言、家後、請印、於、位、記、上、卿、進、御、所、重、奏、覽、返、給、

之後著使座、目使左大辨、左大辨參上卿前、給宣命於左大辨、次召中務輔代主殿頭公經朝臣給位記、

爲使人相具。内監一、宣、命、使、位、記、使、等、起、座、行、向、彼、家、六、條、亭、時、範、仰、云、來、十、一、日、例、幣、延、引、其、由、可、行、大、祓、上、

卿召外記返給寫了、次被仰云、廢朝三日、又來十一日例幣延引者、又召右少辨時範、十一日可行大祓、

之由宣下、時範則仰史、已及夜半事了、上卿先丙午之日有贈位例被相尋、法性寺太政大臣時午日被

知食今日薨奏固關警固等事被行宜歟固關被付國最可佳以遣使不可爲重給官符不可爲輕前々式依國司中被停遣使或有隨時之儀被弱猶國此度已及歲暮事煩可多被止使一計也廢朝依勘申可被行三箇日且今日著御錫紵第四日除可宜歟外記勘申云天慶元年十一月十二日記云四品勤子內親王今月五日薨主上去九日薨奏同日服御錫紵同十一日滿三箇日除錫紵也而當御衰日仍及四箇日所除也者如件勘文延一日例分明也天曆八年九月七日重明親王薨奏服錫紵廿三日除給已及四箇日件例注出又御衰日除給康保三年十二月廿二日壬午中務卿式明親王薨奏服錫紵廿四日甲申御衰日除給避復日給也亦重日除給例延喜十年二月廿五日乙酉子內親王薨奏服喪服廿七日丁亥除給同注出付頭辨御衰日重日例不宜前太政大臣御事能避事忌可被注也亦日限不滿之例側所覺也而未尋出抑日數減例與延行例且可在御定者也事事大概以賴隆相傳外記勘文一見了返授于辨云可然之樣相定可仰下者依重事所申達也辨云可有賻物乎如何御使候哉余答云至賻物無官職人不可給但前々親々人有臨時賻物歟又云物數如何答云可依太政大臣例歟又云勅使乎子答云殿上四位辨如何可有勅定亦云可有弔喪御使乎答云尤可然事也御使何等人哉余答云宣命時勅使納言但位記使宰相歟至別勅使四位如何可有勅定事也又云此間觸下官可左右者尙書隨身賴隆歸參依可仰下歟中將歸來云以藤宰相一々可申通關白被報云以頭辨令問畢今如此消息今日薨奏服御錫紵事警固固關可行也錫紵四箇日除給有兩度例尤從事也依彼等例及四箇日除給也者入夜中將從內退出云今日中納言道方卿固關事造國々官符內進御所令奏警固事同行之略頭辨云臨時賻物更不可給由關白被命云又云弔喪勅使可遣左大辨定賴次召遣使者云不知在所者上達部供奉非送御共至中將給故宮素服可有事忌源中納言相同仍兩人行固關等事今夜前太政大臣禪閑於烏戶野非送略十日丙子中將來云卯時令除錫紵給云々

〔榮花物語三十卷〕

萬壽四年十二月四日うせさせ給て

藤原

ついたち七日の夜御非送御年六十

御記了、明年節會等事、欲開案內付中將令達口、歸來云、藤宰相廣業關白被報云、其承口、但明日可行、葬送事、同日可有薨奏、御錫給警固固關口歟、心神不覺、可然之樣、可申行、貞信公○藤原忠平御葬家子大、臣冠歟、直衣歟、如何、可示案內者、余報云、因永祚例、一々可被准行、先有固關、其後有薨奏、次第違濫有、不靜云々、先有警固固關等、由被問云々、猶先可被行薨奏、只明日服着錫、令除給之日、當重且尋前、跡可被行歟、可被縮日數歟、將可被延歟、臨歲未遣固關使、有事煩歟、被屬猶國可宜乎、又貞信公御葬、送事清慎公○實賴不被憶記、但葬禮皆着、因服、不可着直衣乎、清慎口信公從家不被行葬禮、先移山寺、從彼行葬禮、仍從家相從、上下其裝束、如尋常、且明年正月節會等事、大略申達、忠仁公九月二日薨、口、年十一月豐明節會止、明年正月十六日節會賭射等停、又永祚例、前太政大臣○藤原家七月二日薨、八月考定釋奠、過七々忌景晦被行、且三條太后十一月一日崩、正月元日七口十六日節會賭射等止、依、御冊九日內也、就中御本服三箇月、及明年十一月、太后與臣下尊卑相累、然而太后者、不御御服、親前、太政大臣、雖臣下外祖父也、隨亦可有三箇月御心喪、御心喪限內也、不可被行節會等、亦先朱雀院踐、祚時、法帝○顯宗七月十九日崩、御心喪五箇月、及十一月、仍大嘗會延引、次定謂之、御心喪內不可行、如此之事等歟、藤宰相相傳云、尤被甘心者、入夜頭辨來傳關白○關白消息云、可被行警固事、御錫給日、數不滿限日事、頗可轉歟、先行固關等事、又擇吉日、薨奏、警固固關等、同日被行如何、又廢朝日數有過、御錫給日數之例歟、此間事能々可申行者、仰大外記賴隆、令勘申前例、次定勘文、明且令見下官、可計行者、但案內之故者、夜間有可被尋覽之文、黃檢知前跡、明日可承置事由、不待返事退去了、明且可報件返事等、七日癸酉、早朝中將來、參御堂者、薨奏等事有使、今可令達漏之由、大外記賴隆真人持了、示可來會余給之由、仍早參相待之間辨來、以賴隆傳關白消息云、外記勘文如此、可計行者、固關事可付國歟、薨奏可行、且御錫給除給日數事、可定申、心神不覺、不能具申者、余報云々、以賴隆先有固關後、日有薨奏之事、只永祚也、似不被尋行、薨奏以前、不可給固關之官符、依其事、可給官符而無薨奏、不可

石大臣○藤原武智麻呂第授正一位拜左大臣即日薨遺從四位下中臣朝臣名代等監護葬事所須官給武

智麻呂贈太政大臣不比等之第一子也

〔續日本紀三十八〕延曆三年十月乙未尙藏兼尙侍從三位阿倍朝臣古美奈薨遺左大辨兼皇后宮大

夫從三位佐伯宿禰今毛人散位從五位上當麻真人永繼外從五位下松井連淨山等監護喪事古美

奈中務大輔從五位上梗虫之女也適內大臣贈從一位藤原朝臣良繼生女即是皇后○藤原也

〔日本紀略六〕貞元二年十一月八日甲午依太政大臣○藤原兼通病大赦天下老人賜物大臣於堀川院

薨○中略左大臣○藤原經忠仰云諸陣可打固者宜陽建春宜秋陰○陰或陽明等門開令出入雜人者今

夜子刻故太政大臣遷東山雲居寺九日乙未左大臣仰云瀧口武者帶弓箭可免出入之者右大臣

雅信源以下諸卿參仗權中納言朝光以散位紀以文令申者故太政大臣存日命云可被停止官喪儀贈

位等事者上卿云明日春日平野祭也過件神事可奏者○中略十四日庚子故太政大臣葬送也仍上

官等參廿日丙午奏故太政大臣薨由廢朝三个日固三關詔贈正一位封遠江國爲遠江公諡曰忠

義公食封資人並同生日本官如元

〔小右記〕萬壽四年十二月四日庚午巳時許式光來云禪問○藤原道長昨日入滅而昨夜有搖動氣云云○中略

頭辨來以人相傳云入道相府不可存云云此口太不審先可被下御簾乎余云薨奏後可垂御簾但

女院御坐同所必所有聞食薨奏以前下御簾可宜歟可被尋前例抑可依大入道○藤原兼家例歟且當時

有臨幸不可准他時歟節會等事如何七々忌內難被行歟大入道七月二日薨四十九日內無節會三

條太后十二月一日崩正月節會停止七日只牽白馬誠雖御后位不御服親禪室○藤原兼家云云下已是祖父

已蒙准三后宣旨之人也猶准被三條太后例可被行歟依重被行何如○中略六日丑申頭中將顯基

問薨奏并着御錫結事等以師重相傳左兵衛督示送云女院別當依御重服院司可着服給者件事見

邑上天德四年御記九條丞相薨時中宮職司等不可着服口在明法勘狀不可著由被下宣旨了見遺

寛治三年十月四日

從五位上	行直	講	中原朝臣章貞
從五位上	行直	講	清原真人定康
正五位下	行助	兼石見守	中原朝臣在國
正五位下	行助	兼越中守	清原真人
正五位上	主稅頭兼大外記博士伊與權介		中原朝臣師平

〔朝野群載二十〕文。薨奏。

太政官謹奏

無位藤原朝臣睦子○藤原實季妻、鳥羽母后政子母、鳥

右人去月廿四日辛今月二日葬儀制令云、皇帝外祖母喪、不視事三日者、仍錄事狀、謹以申聞、謹奏、

永久二年三月七日

〔玉海〕治承五年閏二月十四日庚申、此日有禪門○平清盛薨奏、雖爲出家之人、依康和之例、被行云云、從今

日廢朝三箇日云云、

〔續日本紀十一〕聖武天平五年正月庚戌、內命婦正三位縣犬養橘宿禰三千代薨、遣從四位下高安王等暨

護喪事、賜葬儀、准散一位、命婦皇后○藤原光明子之母也、

〔續日本紀十二〕聖武天平七年十一月己未、正四位上賀茂朝臣比賣卒、勅以散位葬儀送之、天皇之外祖母

也、

〔續日本紀十二〕聖武天平九年一月辛酉、參議民部卿正三位藤原朝臣房前薨、送以大臣葬儀、其家固辭不

受、房前贈太政大臣正一位不比等之第二子也、

〔續日本紀十二〕聖武天平九年七月丁酉、勅遣左大辨從三位橘宿禰諸兄右大辨正四位下紀朝臣男人、就

薨八日奏自此日止音奏警蹕帝祖河而十日十一日共復日也仍十二日雖爲凶會日強不忌則上御
簾畢

〔續日本紀八元正〕養老四年八月癸未是日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨帝深悼惜焉爲之廢朝舉
哀內寢特有優勅吊賻之禮異子群臣大臣近江朝內大臣大織冠鎌足之第二子也

〔公卿補任清和〕太政大臣從一位藤良房 貞觀十四年九月二日薨在官廿五年同四日賜正一位號
白河殿又染殿諡云忠仁公封美乃國權朝三箇日是日葬山城國愛宕郡白河邊

〔日本紀略三村七〕天曆三年八月十四日乙酉戌時太政大臣藤原忠平薨年七一條第十病間公家賜度
者卅人又大赦天下十七日戊子太政大臣薨奏仰廢朝三箇日固關警固

〔日本紀略六元應〕貞元二年十一月廿日丙午奏故太政大臣兼通藤原薨由廢朝三箇日固三關
〔百練抄五河〕寬治三年十月四日諸卿定申源隆子薨事右大臣源件人雖爲當今外祖母前中宮河后

改姓爲藤氏仍令諸道勘申之就所養不可有錫紱但廢朝三ヶ日之由被定了凡爲人養子之者本
生傍親服不可著之由僉議了

〔朝野群載二十〕禮喪廢朝

勘申從二位源朝臣隆子薨遊間所被行事

儀禮喪服經曰爲外祖父母同疏曰小功五月章曰爲外祖父母傳曰何曰小功也以尊加也外祖之服
不過緦麻以祖是尊名故加至小功春秋左氏傳杜氏注曰天子絕傍期唯有心喪大唐開元禮云皇帝
本服大功以上及外祖父母皇后父母百官一品喪皇帝不視事三日

就件等文雖可被行外家之義猶非無物疑又准據之文經典無所見然則心喪廢朝之禮依時議
可被行歟

右依宣旨勘申如件

〔公卿補任〕後冷泉關白左大臣從一位藤賴通 康平二年二月十一日、上表請罷職并隨身近衛等勅答近衛依請三月六日、大赦天下大臣病、九日、依病重辭大臣、無勅答、

〔中右記〕寬治七年十一月五日、今日伊勢公卿勅使參宮之日也。中今日內大臣參使座有不堪田定、

入夜有臨時免者、未斷輕犯聊依有所思食有此恩赦、也是右相府源之所惱猶以無祇氣、大概此恩

赦依件事歟、抑如此大神宮公卿勅使參着之日、有免者之例先被相尋、或被問外記、或被問民部卿並別當但慥先例未見歟、八々所被申中不有一定、但依無日次、推今夜有此事歟、藏人兵部大輔沙汰許事、

〔百練抄六七〕仁安三年二月十六日、依入道太政大臣清盛平病、被行非常赦、

〔百練抄十四〕仁治二年十一月卅日癸丑、被行非常赦、依禪定太閤家實所惱也、雖非外戚執政之

故、異他之故也、

政後應遇

〔令義解九〕凡天皇爲本服二等以上親喪服錫約、凡八人君即位、服絕傍期、唯有心喪、故云本服、其三

令、子爲一等、故稱二等以上、即外祖父母亦同、依同令、皇帝不視事、與二等爲三等以下、謂四等以上、即

親故也、依禮制令、三等親喪、皇帝不視事一日、即及諸臣之喪、謂禮制令、皇帝除帛衣謂白外通用雜色、

〔日本紀略一〕延喜七年十月十七日辛酉、從三位宮道朝臣列子高藤葬、葬之外祖母也、有薨奏、

廿六日庚午、詔贈從三位宮道列子正二位、殊賜絹布等、天皇服錫約、

〔百練抄四〕後冷泉天喜元年六月十一日、從一位源倫子薨、天皇外祖母左大臣藤原賴通母、號宣司殿廢朝三箇日、主上著錫

約、

〔令義解六〕凡中皇帝二等以上親、及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、皇帝不視事三日、謂依喪

發哀日始計至三日、其親王亦同、給葬具及禮物、親王與散一位同故也、

〔禁秘御抄〕廢朝

廢朝三箇日被仰メレバ止、音樂警蹕、禁中無物貢、垂清涼殿御簾、中又同年寬治順房公薨、五日

づかさ左衛門尉ためかたをば、使かけさせ給宣旨くださせ給、また御堂には五百戸の御封よせさせ給宣旨おなじくくだりぬ、どの、御堂へいみじううれしきおほせなりと返々なく、よろこび申させ給、うへは又なにごとをど覺しめさるれど、又申させ給事なきをくちをしようおぼしめさる、女院の御かたにいらせ給へれば、女院いみじくなかせ給て、どの、いみじううれしきことによろこびなき給が、かへす、うれしきこと、よろこび申させ給、あはれに心うきこと見給ふなどいみじうなかせ給、中宮さておはしませばおなじさまの御事どもこそは、對面などとはどみにえあるまじきにこそなせ、あはれにかたらひ申させ給、さていどくかへらせ給ぬ、おはやけより此御堂にきぬ三百疋布千段誦經におこなはせ給けり、殿の御壽命のための御誦經なりけり、そのはどげに世のためしにまつべく、ふりがたうめでたき御ありさまなり、ひとの御堂供養に、行幸行啓なせおぼしあはせられてかへらせ給ぬ、かくて八日に成ぬれば、東宮の行啓あり、同じくどの、御堂へ、一日のやうにさるべきさまにておはしませす、東宮見奉らせ給に、あはれにあさましきまでなかせたまへば、殿もいみじうなかせ給ふ、あべい事ども申させ給て、いみじうなかせ給ふにも、御心のうちに我よにあはせ給はすなりぬる事を、あはれにくちをしうもあるかな、心のはど見えたてまつらんとおもひつる物をどおぼさるゝに、いどかなしう覺しめさるゝなりけり、いまはかく行幸行啓にまかりあひぬれば、いまなんおぼつかなく心どまる事なくて、極樂にも心きよくまわり侍るべきとてもなかせ給へば、いどあはれにいみじうみたてまつらせ給ふ、女院の御かたにいらせ給ても、この御事よりほかのことは何事かあらん、さてもどくかへらせ給、まばしもおもへど、おきる給へるがいどくるしければ、どの給はせても又なかせ給、どの、御堂へは今はいど心やすし、げふまで世にはありつるなりとの給はするにつけても、僧俗そこらの人々、なみだをながせ、いみじうしのびやかなり、

からん日しておはしませ給へかし、たゞ思事は、いごなめげにふしなが御覽せし事を思ふ
なり、さらばよき日してどのたまはす、この月○萬壽四年十一月廿五日よろしき日なれば、その日行幸の
御用意あり、東宮の行啓はおなじ日あるべけれど、心あはたやしかるべければ、おなじ日の廿八
日とさだめさせ給さてその日になりて、たつのときばかりに行幸あり、昨日御々しきとせ
給て、御けさころもなご来らせ給て、世のつねの御有さまにて、御脇足におしかりておはし
す、うへいといみじうあはれに見たてまつらせ給て、せきもどめすまかせ給ふ、おさましうあ
らぬひとにはせ給へる御ありさま、哀にかなしく心うく見たてまつらせ給、さてなに事を
かおぼしめすこととはあるときこえさせ給へば、いまはこのよにすべて思ふ事候はず、世中
におほやけの御うしろみつかうまつりたる人々おほかる中に、あかりてもかばかりさいはい
あり、すべき事のかぎりつかうまつりたる人々ふらはず侍、まづはおほやけのおほぢやなごこ
そはかやうにて候に、まだかゝるをりの行幸候はず、ちゝみかご母ぎさきの御事にこそは候め
れ、それすらさしもあらぬたゞひごもあまたさふらふ、まづちかうは三條院六月にくらゐにつ
かせ給て、十月七日冷泉院の御心ちおもらせ給し、行幸あるべくおはせられしかど、諸卿のさだ
めになほ御ものゝけのいとおそろしうおはしすよし申侍しかば、行幸候はずなりにきなご
いとさはやかに申つゝけさせ給へば、此御心地はちからなげさのいみじきにこそあめれ、御
心ちはゆめにかはらせ給ことなし、あはれやめたてまつらばやどおぼすにいとかなしうて、お
ほさんまゝの事の給へと返々申させ給へば、すべて思事候はず、世はじまりてのち、この行幸こ
そはためしに候めれ、これよりほかの事は何事かはたゞしこの御堂の事つかうまつりつるを
のこどもをなんひとつの事をせんと思ひたまへつると申させ給へば、いとやすき事なりとて、
關白殿のかみの家司因幡前司ちかたゝをば、よりあきららがかりに美濃になさせ給、しもの家

十四日庚戌上東門院○影仰諸寺轉讀壽命經二萬六千餘卷中宮令讀金光明經涅槃經維摩經等關白左大臣○藤原賴通行萬僧供養依新入道前大相國之除病也十七日癸丑舞姬參入無御出依禪下病也十八日甲寅鎮魂祭無御前試依禪下病也今日中宮奉爲入道禪下被行修法左府○賴通爲入道禪下集百口僧令轉讀觀音經十九日乙卯今日於法成寺藥師堂爲入道禪下除病中宮令百口僧行仁王經讀經廿六日壬戌天皇幸法成寺依入道前相國之病也以封戶五百烟施入寺家又修諷誦供養南北諸寺僧萬人依被申請以因幡守庶政任美濃守左衛門權少志豐原爲長爲檢非違使又造塔事可遂之由云々廿九日乙丑春宮○後朱雀行啓法成寺依同病也御坐法成寺阿彌陀堂南廳

〔小右記〕萬壽四年十一月十三日己酉民部大外記賴隆來云今日被行非常敕依前太政大臣○藤原道長

病按察大納言行成○大內記右衛門權佐爲善奉宣旨先是別當經通來廉下訪所勞又陳可有敕令之由入夜中將來云禪閣○道長無増減夜前沐浴被始念佛外人聞其聲上下走迷存入滅訖由云々公家

被奉千人度者廿四日庚申關白○道長御消息云日者携御堂御病心神不覺如醉人公家之例事

一々可被驚示又明日行幸禪室可被行功德事何等事宜乎未思得可然之事可被示也非常敕令此時可被行而早被行至今何爲者余○藤原實實報云有所勞寵侍心神不例徒然送日事與心迷欲申不得

行幸日功德事左右難申敕令早被行事更有何事乎以早可爲善抑後日被行萬僧供又被行賑給如何不比等大臣病時臨幸只給度者九十人被行非常敕令鎌足大臣病時行幸給大織冠任內大臣其

外無所見亦東三條院御病又有行幸

〔榮花物語三十の林〕殿○藤原道長の御安へ○中かくて日さるにならせ給へばほいのさまにてこそは

おなじくはとて阿彌陀堂にわたらせ給もこの御念誦のまにぞ御まづらひしておはします○中略

うち○後朱雀後より東宮○後朱雀よりみかく今までに見奉らせ給はぬなげきの御消息しさればよ

下病恩給之例、雖有一兩、是爲有功勤公之輩也、今臣○藤原年來經病、無由出仕、而蒙不涯之恩、不知所奏者、此仰具承、中納言傳之、被物自大褂一重、廿二日、昨日因給度者、且分配卅人、令鎮朝律師申上成祈願、

〔九曆〕天曆三年八月十四日、太閤○藤原薨御事戊刻、此夕有詔賜度者三十人事、又有赦令事、十六

日、遣固關使又警固事、十八日、御葬送俄事、廿五日、開關事、

〔九曆〕天德二年二月廿二日、左大閤實類藤原御惱殊重、仍又加修法壇云云、爲救左大臣病、給度者十五

人是依奏請云々、

〔歷代皇紀冷泉〕關白

左大臣藤原實賴○中

安和元年六月十四日、給度者卅人、依所惱也、

〔日本紀略九條〕正曆元年五月十二日、詔、賜入道太政大臣○藤原兼家度者一百人、大赦天下、大辟以下常

赦所不免者、赦除、又免調庸加賑給、

〔日本紀略後十三條〕寬仁三年三月廿一日、戊寅、前太政大臣從一位藤原朝臣道長落飾入道年五十四、法名行觀、

後改依胸病也、戒師法印院源、剝御頭律師定基、入夜小一條院○敦明、並太皇太后宮○一條皇后、三

條后中宮○後一條后子、以渡御○中、四月三日、庚寅、詔、大赦天下、大辟以下罪無輕重、常赦所不

免者、赦除、依入道前相國之病也、

〔小右記〕寬仁三年四月辛卯、早朝、彼是口入道殿○藤原道長、重惱給○甲、去夜被非常赦、中納言行成卿承

之、臨曉更赦免云々、

〔日本紀略後十三條〕萬壽四年十一月八日、甲辰、中宮○藤原子、行啓法成寺、依入道前太政大臣○藤原道長、所惱

也、○中十三日己酉、詔、大赦天下、又免調庸加賑恤、依救入道大相國之病止○止也、又給度者千人、

禱之費。九日己卯詔曰：酌訓皇源，陶風帝範，未有不施厚恩，以崇盛德，降殊貸以慰元功者。朕外祖父太政大臣藤原朝臣功蓋三代，位極上台，仁襟被九州而有餘，德水霑千里而無盡。自朕在襁褓以至今時，其顧復保佐之勤，豈以周且濛為伍？朕念不賞之功，將加非常之寵，知其至謙之性，不敢開口而言，聊且欲磨爵加封，以酬萬一，而損挹彌深，遜讓尤切。感夫乃情不惑，相忤朕之庶幾，賴彼撝謙之誠，增其延壽之福，長生久視，輔導朕身，令若倚南山，坐平原也。是以屈己從人，不奪其志，恐天下以朕為不知恩也。而今寢瘳私第，日月彌留，珎幣相尋，祈禱未効，朕自鍾此患，寢食無安，心墮思焦，言與淚俱。深患救復之方，誠無所不到矣。聞諸內經，度人歸道之功，能救人之厄，命又先王德政，議獄緩刑，矜老養孤，若施斯仁，貸副朕篤情，縱雖病在膏肓，幸使藥得其宜，賜度者八十人，又大赦天下。今日味爽，已前所犯大辟已下，罪无輕重，已結正未結正，已發覺未發覺，皆赦除。唯犯八虐故殺謀殺，私鑄錢，及強竊二盜，常赦所不免者，不在赦限。又天下道俗高年者，鰥寡孤獨，篤癘之類，量加賑恤，普告遐邇，俾知此意。

〔管家文章〕

八

〔答太政大臣〕

○字多

藤原基經

謝為病

賜度者

免罪人

勅

○字

多

勅太政大臣雅言悉之。皇天不知公病無損，朕前行志，冥助惟求，欲令出獄門者，開法網以為公處療之方。入禪道者，轉戒珠以為公加持之力，功重報輕，朕之過也。謝章忽至，增愧深焉。又國家庶務，關白於公，朕自樂成業在恭己，而今具叙其意，固辭此職，非唯退閑之謀，期以消伏之術。既云過害，朕豈忤之？雖暗前途，暫順來請，不有日月乎？不有山川乎？所患少間，視事如故，勿使朕當淵水奔馳之危，以無舟楫御轡之備而已。嗟摩朕之砭石，朕之股肱，豈圖令股肱不安和，為砭石所治，攝捨心而歎刻骨以傷，公強加治，莫忘社稷。

寬平二年十一月十九日奉勅製之

〔日本紀略〕

朱

天慶七年十月廿四日癸亥，依關白太政大臣

○藤原

忠平

重病，賜度者五十人。

〔九曆〕

天曆三年正月廿一日，頭有相來仰云：御病重由，助憂不少，為息災給度者五十人者，復命云：依臣

而不承仍被停止了者、

〔扶桑略記二十〕長元六年癸酉十一月廿九日、於關白左大臣藤原賴通高陽院、賀母氏從一位源倫子

外祖母後一條二十七十算、有童舞、翌日天皇召覽童舞於禁省、件童等三人被聽昇殿、

〔日本書紀二十二〕二十二年八月、大臣蘇我馬子臥病、爲大臣而男女并一千人出家、

〔公卿補任文〕大納言從二位藤原朝臣不比等 慶雲二年五月大納言藤原朝臣臥病、詔賜度者廿

人、是賜度者兼以布四百端、米八十石、施京諸寺、

○按ズルニ、公卿補任ニ不比等ヲ以テ、度者ヲ賜フ始ト爲スト雖モ、既ニ蘇我氏ノ時ニアルコ

ト、前ニ引ク所ノ日本書紀ノ文ヲ見テ知ルベシ、

〔續日本紀元正〕養老四年八月辛巳朔、右大臣正二位藤原朝臣不比等病、賜度三十人、詔曰、右大臣正

二位藤原朝臣疹疾漸留、寢膳不安、朕見疲勞惻隱於心、思其平復、計無所出、宜大赦天下、以救所患、養

老四年八月一日午時以前、大辟罪已下罪、無輕重已發覺未發覺已結正未結正繫囚見徒、私鑄錢及

盜人并八虐常赦所不免、咸悉赦除、其廢疾之徒、不能自存者、量加賑恤、因令長官親自慰問、量給湯藥、

勤從寬優、僧尼亦同之、壬午、令都下四十八寺、一日一夜讀藥師經、免官戶十一人爲良、除奴婢一十

人、從官戶爲救右大臣病也、

〔愚管抄元正〕不比等大臣ハ養老四年八月三日薨、年六十二諡號淡海公、聖武の外祖にて、病に臥給ふよ

り、重く殊にもてなされ給ふ、

〔續日本紀十二〕天平九年七月乙未、大赦天下、詔曰、比來緣有疫氣多發、祈祭神祇獨未得可、而今右大

臣藤原智慶身體有勞、寢膳不穩、朕以惻隱、可大赦天下、救此病苦、自天平九年七月廿二日昧爽以前、大

辟罪已下咸赦除之、其犯八虐、私鑄錢及強竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限、

〔三代實錄二十一〕貞觀十四年三月七日丁丑、太政大臣藤原房患咳嗽、時是日資錢五十萬以充祈

下衣被

〔小右記〕長和四年十月廿五日壬子、今日皇太后○一經上東門宅賀左相府○影于交五十算、佛兩界曼陀羅經、大般若一部、壽命經五十卷、十僧外百口僧威儀師二人行事、但十僧給法服、左大臣、內大臣、大納言、道綱、齊信、賴通、公任、中納言、俊賢、行成、懷平、致通、賴宗、經房、參議、兼隆、定成、通任、三位、左中將、能信、右兵衛督、憲定、參議、賴定、等著、饗座東對、撤御在所殿、爲法會堂、佛具新調、幡花、綵代、同調、花綵、代殿上人調進云々、庭中構舞臺、其北屬南階、件舞臺、焚香、鑪、簋、每座立標位、池東西諸僧參入著座云々、堂童子座立庭四位、各方二人、五位口人、僧不著座之前、左大臣已下起饗座、著堂前座作法云々、大行道廻池邊、師大僧都定隆、俄有所煩辭退、補大僧都慶命、十僧一人闕、補僧都文慶、百僧內多有僧綱云々僧綱八人、大僧都慶命、少僧都文慶、扶公、如源、律藏人頭、資平先進、左大臣許申給度者、由相次就高座下、仰導師慶命、錫杖後云々、給祿於資平云々、資平於東對坤庭再拜、內御誦經、勅使、中宮東宮御使、當御誦時著座、南階寶子、佛事了、除右大臣之外、執祿被僧、左右相分、上達部座在南階東西簀子、殿上人地下人同執祿了、僧侶退下、講演中間乘燭、撤僧座、敷上達部座母、屬北、上北面、左大臣已下著御前座、居銜重有盃酒、左大臣供御膳於太后、大納言公任執打敷、進母屋御簾下、上達部取膳、膳體不能具記、風流殊甚、件御膳自西方度御前供之、卿相雲上人等絲竹頻唱、漸及醉鄉、有和歌興、左相府折佛前作花爲插頭、內府大納言原道○續下、官傳取同插冠、依相國命、諸卿祖大納言公任執盃出會、其後左大臣設卿相雲上人祿有差別、立明主殿寮官人、左大臣隨身、左大將隨身○實、隨身足絹云々、宮所給歟如何、左大辨諸卿臨東對南面馬一疋、志內大臣、左相國加大納言道綱、令脫衣單、給左將軍、次內大臣脫單衣、給左大臣隨身右府生公忠、次左相國脫阿古女一襲、給余隨身番長保重事了退出、亥終許也、左大臣直廡設寢殿與東對渡殿四尺御屏風六帖、其和歌近習上達部讀書讀人名、他難具相、辭

〔台記〕久安六年十二月廿五日丁卯傳聞關白○忠息童八歲於近衛亭加元服關白加冠權中納言忠基卿理髮上達部直衣殿上人衣冠宗能忠基經定等之外無來客無飲食事冠者直衣○主於堂上拜

加冠云々今夜無叙位禁色昇殿等事云々○中上皇○初及皇嘉門院○崇德后聖御件亭依此事去

夜上皇移御三條第元服了還御○中元服人三箇日留近衛亭居女房局云々は夜元服禮儀未知誰

人何年例京師傾奇

〔冠儀淺寡抄一說〕後世○中於正寢然而嫡家嫡子必行之於正寢之廂庶流末子者乃於東西對及

出居廊廂或曹司等行之○略於禁中行之者是聖寵之至也○中又於仙洞並女院等行之亦殊恩也

〔公卿補任高會〕散位 非參議從三位平清宗 治承四年五月卅日叙○中

前大納言正二位平宗盛一男母贈左大臣時信公女 承安二正五從五下建春門院同加元服於當年御給

院後白河同日被聽內昇殿即聽禁色雜袍御所加之

〔玉海〕治承元年十二月卅日乙未○中其夜有小除目云々花山中納言○錄息大相國入道加元服即

夜叙爵從五位下昇殿又拜任侍從云々拜賀候時可被許禁色候由兼被仰云々攝錄之息尙未聞元服之

夜授官候例中納言子息元服之日昇殿太以過分也但權門之事不能論是非歟

〔三代實錄七〕貞觀五年十月廿一日庚辰天皇宴太政大臣○藤原於內殿以賀滿六十之齡有衣被

寶物之贈每色叶於六數皆是乘與服御之物也特喚諸大夫年六十已上者於仗頭賜飲太政大臣家

令從五位下菅野朝臣弟門授從五位上藤原朝臣直方從五位下從四位下藤原朝臣儉子進從四位

上無位藤原朝臣多美子從四位下從五位下上毛野朝臣滋子正五位下慶賀之餘歡恩券及餘家人

也○中廿三日壬午屈六十僧於內殿限三箇日轉讀大般若經十一月廿六日乙卯中宮○其房

於太政大臣染殿第大設齋會演大乘經賀太政大臣滿六十也限三日訖公卿大夫多參陪焉十二

月廿四日壬午中宮爲賀太政大臣齡滿六十設廣議親王已下五位已上並侍焉梅歎而罷賜親王已

令加冠焉其幘頭巾子皆是乘輿之所撤也、

〔公卿補任清和〕參議從四位下藤基經 貞觀六年正月十六日任、元藏人頭左中將、中將如元、

家傳云、年十八、於東宮和清寢殿上加冠、天皇德仁覽之、賜元也

〔三代實錄光孝〕九、仁和二年正月二日壬午、太政大臣基經藤原第一之男時平、於仁壽殿加元服、于時年

十六、帝自手取冠加其首、令主殿助從五位下藤原朝臣末並理賢、即日授時平正五位下、其告身天皇親筆書黃紙以賜之、勅參議左大辨從四位上兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相作告身文、其所須冠巾皆是服御之物也、

〔本朝文粹二位記〕

橘贈納言相廣

無位藤原朝臣時平

右可正五位下

中務伯禽封魯辟疆侍中、吾爾時平、名父之子、功臣之嫡、及此良辰、加汝元服、鳳毛酷似、符命宜殊、可依前件、主者施行、

仁和二年正月二日

〔神皇正統記光孝〕この天皇、昭宣公基經藤原の定によりて立ちたまひしかば、御志も深かりしにや、

その子平時を殿上に召して元服せしめ、御自ら位記をあそばして、正五位下になし給ひけることぞ、

〔扶桑略記字多〕二十、寛平二年二月十三日己巳、大臣基經藤原參入言曰、可加小童仲平元服、即簾前立倚

子、就之、大臣祇候、爰使散位定國先結髮、次朕著冠、此時左大臣融朝臣參入、太政大臣並仲平相具舞踏、賜仲平白褂一領、朕即手造位記曰、無位藤原仲平、今可正五位下、先帝孝光御宇之日、兄時平加元服、皆奉其流也、

格賞實○實談續酬勞明主梓則其藤原朝臣仲麻呂晨昏不怠恪勤守職事君忠赤施務無私愚拙則降其親賢良則舉其怨殄逆徒於未戰黎元獲安固危基於未然聖曆終長國家無亂略由若人平章其勞良可嘉賞其伊尹有莘媵臣一佐成湯遂荷阿衡之號呂尚渭濱之遺老且弼文王終得營丘之封況自乃祖近江大津宮內大臣足繼已來世有明德翼輔皇室君歷十帝年殆一百朝廷無事海內清平者哉因此論之淮古無匹汎惠之美莫美於斯自今以後宜姓中加惠美二字禁暴勝強止戈靜亂故名曰押勝朕舅之中汝卿良尙故字稱尙舅更給功封三千戶功田一百町永爲傳世之賜以表不常之勳別賜錦錢舉稻及用惠美家印

〔續日本紀二十一〕天平寶字二年八月丙寅外從五位下津史秋主等卅四人言船葛井津本是祖別爲三氏其二氏者蒙連姓訖唯秋主等未露改姓請改史字於是賜姓津連

〔續日本紀四十四〕延曆九年十二月壬辰朔詔曰春秋之義祖以子貴此則禮經之垂典帝王之恒範朕君臨寓內十年於茲追尊之道猶有闕如興言念之深以懼焉宜朕外祖父高野朝臣訓弟外祖母土師宿禰並追贈正一位其改土師氏爲大枝朝臣夫先秩九族事彰常典自近及遠義存襲舊亦宜菅原真仲土師菅麻呂等同爲大枝朝臣矣○又見日本朝月令

〔續日本後紀四〕承和二年正月己巳是日後太上天皇○嵯峨幸姬橘氏○嘉智子所誕育皇子爲親王左京人右馬寮權大允清友宿禰真岡散位同姓魚引等賜姓笠品宿禰非其願也公家避贈太政大臣橘氏父清友之名耳

〔續日本後紀九〕承和七年十一月辛巳勅橘戶、螻橘、橘連、伴橘連、橘守橘等六姓與橘朝臣○清相涉宜賜橘戶、螻橘連、伴橘連、橘守、橘等自餘以橘字爲姓之類亦以替換之

〔續日本後紀十三〕承和十年七月庚戌致仕左大臣正二位藤原朝臣緒嗣薨○中緒嗣者參議正三位式部卿太宰帥宇合之孫而贈太政大臣正一位百川之長子也桓武天皇延曆七年春喚緒嗣於殿上

ゐ給ひて、ものなせそうし給ふ、すのうちに、女房さくらのからぎぬせもくつろかにぬぎたれつゝ、ふぢやまふきなせいろ／＼にこのもしく、あまたこはじとみのみすよりおし出たるはせ、日のおまゑのかたにおものまゐるあしおとたかしけはひなせをし／＼といふ聲きこゆうらうらどのせかなる日のけしきいとをかしきに、はての御はんもたる藏人まゐりて、おものそうすれば、なかの戸よりわたらせ給ふ、御どもに大納言殿まゐらせ給うて、ありつる花のものにかへり給へり、宮子○一條后定、伊周伊周妹、の御まへの御きちやうおしやりて、なげしのもとに出させ給へるなど、たいなにごともなくよろづにめでたきを、さぶらふ人もおもふ事なきこゝちするに、月も日もかはりゆけどもひさにふるみひろの山のといふふることを、ゆるゝかにうちよみ出してゐ給へる、いとをかしとおぼゆる、げにぞちとせもあらまほしげなる御ありさまなるや、

〔續日本紀聖武〕神龜四年十二月丁丑、正三位縣犬養橘宿禰三千代○聖武后藤原安宿媛母、縣犬養連五百依安麻呂、小山守大麻呂等是一祖子孫、骨肉孔親、請共沐天恩、同給宿禰姓、詔許之、

〔續日本紀孝謙〕天平寶字元年八月癸亥、夫人正二位橘朝臣古那可智、无位橘朝臣宮子橘朝臣麻都賀又正六位上橘朝臣綿裳、橘朝臣眞姪改本姓賜廣岡朝臣、

〔續日本紀孝謙〕天平寶字二年六月乙丑、大和國葛上郡人從八位上桑原史年足等男女九十六人、近

江國神埼郡人正八位下桑原史人勝等男女一千一百五十五人、同言曰、伏奉去天平勝寶九歲○天寶元年五月二十六日勅書、稱內大臣○藤原鎌足、太政大臣○不比等之名、不得稱者、今年足人勝等、先祖後漢苗裔、劉言興言帝利等、於難波高津宮御宇、天皇○仁德之世、轉自高麗、歸化聖境、本是同祖、今分數姓、望請

依勅一改史字、因蒙同姓、於是桑原史、大友桑原史、大友史、大友部史、桑原史、史戶六氏、同賜桑原直姓、船史、船直姓、

〔續日本紀仁德〕天平寶字二年八月甲子、以紫微內相藤原朝臣仲麻呂任太保、勅曰、褒善懲惡、聖主

加以兩院上皇不棄渭陽之勞功、擢以親舅矣。今上陛下不遺豐沛之父老、實以外祖焉。太后降尊、忝存爲子之道、少陽厚禮、猶有稱孫之名。其外竹園蘭坂、多是臣之枝苗、二府九卿、半又臣之弟姪、書契以還、未有才德薄寵榮厚如臣者矣。是以葉公魂驚、何更扶龍圖而招半死、華封齡老、唯須祝風曆而送餘生。臣縱通崇班、以棲野雲、命存則可、仰聖化、臣若叨重寄、以先朝露、位尊亦無益、微躬方今塵曠漸深、慙懼彌劇、昔秉釣柄而過九十、事非安平之強健哉。今辭官職而至再三、則是暗懦之庭羸也。雖降十勅、何改一心、伏望鴻慈、殊矜微懇、聽臣款闕之請、不異敢諫之鼓、靜臣懸旆之心、自爲進善之旗、無任抱滿之至。謹重遣正四位下行右近衛中將兼伊豫守藤原朝臣道賴、抗表陳乞、以聞。臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、謹言。

永祚二年四月廿一日太政大臣從一位藤原朝臣某上表

〔公卿補任一條〕攝政太政大臣從一位藤兼家出家人准永祚二年五月五日辭攝政太政大臣、更詔

關白八日返關白、依病入道法名如意十二日詔賜度者一百人、廿三日詔書云、准三宮任人賜爵之儀、擬三

宮以不改采邑茅土之制、割二千而殊加者、固辭不受。七月二日、薨于東三條第。

〔公卿補任一條〕左大臣正二位藤道長長德二年七月廿日、叙正二位、廿一日、大將如元、八月九日、辭

大將、以童六人爲隨身、十月九日、停童爲左右近衛府生各一人、近衛各四人。

內覽童隨身六人給之、九條右大臣（師範）例云々。

〔本朝文粹五〕爲入道太政大臣道長藤原辭左大臣並章奏隨身等表

臣某言頻表仰恩、未蒙矜遂、馳意半漢、秋覲之騎方危、盡詞披陳、春木之筆欲廢、臣某中臣聲源淺薄、才

地荒蕪、偏以母后〇一條母之同胞、不次昇進、亦因父祖之除慶、匪德登用、彼周公旦之夕見七十也、臣

未能薦一士、叔孫通之朝儀三千也、臣未能出一言、冰魂雪汗、四廻于茲、天譴鬼瞰、萬念于懷、〇中伏望

弘慈曲降、敕鑑臣所帶官、及內外章奏、觸臣宣行之事、忽從停止、又隨身近衛府已下十人、名付本府、令

定內舍人二人左右近衛各四人但任人賜爵等並准三宮一如先帝策命忠仁公故事

〔公卿補任〕藤原左大臣從二位藤時平 延喜二年正月廿八日賜別封二千戶

〔公卿補任〕朱雀攝政左大臣正二位藤忠平 延長九年五月廿日賜內舍人隨身左右近衛四人任人爵人並

准三宮中略承平二年二月廿九日宣旨聽乘牛車出入上東門十一月廿六日叙從一位

〔日本紀略〕朱雀天慶二年正月廿八日太政大臣忠平藤原任人賜爵並准三宮一如貞觀故事

〔公卿補任〕關白關白太政大臣從一位藤兼通 貞元二年十月十一日依病辭關白并太政大臣上表

即有勅許十一月四日依請停關白讓于左大臣賴忠藤原同日詔任人爵人准三宮

〔本朝文粹〕二勅書充華山法皇外祖母惠子女王封戶年官年爵勅 慶保胤

勅漢武即位減兒遇封誠是眇代之恒規抑亦前史之令典也朕外祖母王氏伊藤原禮法在心閨閑垂

範朕當幼旦早別先妣子祖母視朕亦猶子朕報祖母未如親往年厭世歸道出家爲尼何以塵俗之

風妄訪勸念之月授邑土三百戶并年爵內外官三分等聊爲湯沐資兼與役從之輩主者施行

永觀二年十二月十三日

〔日本紀略〕九條寬和二年六月廿八日乙丑勅賜攝政右大臣兼藤原內舍人二人左右近衛各四人爲

隨身

〔本朝文粹〕四表爲入道前太政大臣兼藤原辭職并封戶准三宮第三表

江匡衡

臣某言頻獻表奏未蒙照臨仰前疏而增戰栗濡秃筆而慙虞松臣某謝中臣伏惟察能授官上聖爲之布

德揣分受職往賢由其全身若授受乖其宜則如養魚鼈於層雲之嶺棲鳥雀於重淵之底者也臣齡先

懸車而身已病器非負鼎而力早衰駸駸之病也驚馬先之況驚馬之病乎孟賁之衰也庸夫蔑之況庸

夫之衰乎凡登高秩者必飾謙退之詞至大年者即述歸老之志今臣所請異於彼焉夫事無兩全物難

俱有連枝或臨艾服分凋枯臣之餘六旬者可謂家老末葉多列桃庭兮榮顯臣之居三公者是摠國卿

後一條四年己未寬仁五月八日入道前太政大臣道長藤原重勅如故出家以後希代之例也

〔扶桑略記後二十九〕治曆三年丁未十月七日壬子前大相國賜准三宮勅書年官年爵食邑三千戶內舍

人二人左右近衛兵衛各六人爲隨身資人卅人如忠仁公舊事

〔公卿補任崇德〕散位前太政大臣從一位藤忠實保延六年二月十日宣旨聽乘輦車出入中重六

月五日勅宣年官年爵一准三宮又食邑三千戶以內舍人二人左右近衛各六人爲隨身兵仗并給帶

仗資人卅人如忠仁公故事者

〔兵範記〕久安五年十月十六日甲子今日攝政殿忠通藤原北政所從一位藤原朝臣宗子有准三宮勅書

事上卿左兵衛督重通卿依召參右仗藏人頭以皇太后宮權亮爲通朝臣宣下之大內記長光創作之

其勅文曰

勅略中從一位藤原朝臣者攝籙之嫡室皇后時爲崇德后聖子之母儀也訓導克宣施榮輝於掖庭之

月節儉夙標傳佳譽於曲阜之風況朕義同祖母禮如順孫撫養之恩惟深報酬之忠最切是以誼語

芳闕於倭漢將准徽號於宮闈宜授本封外邑土三百戶年爵并内外官三分主者施行

久安五年十月十六日

〔台記〕久安六年正月廿二日庚子申刻大相府忠通藤原與書曰禪閣忠實藤原嚴命如此宜計示者即見禪

閣御消息載三箇條一條殿欲加階已爲從一位可益加何事乎角振隼宜加一階憲雅可加階而重喪

人有憚否此等事與左大臣長賴謀議可否候以聞法皇者報狀曰一條殿已極位無所可益加竊以爲

帝之高祖母齡過九旬是年九十一被准三宮理尤可然角振隼加階亦必可略中是夜候內後聞內大臣奏

勅書云々勅有功必酬貽弊範於竹帛積善永顯傳佳猷於典墳從一位藤原朝臣全子師通藤原者攝籙

大相國之祖母也四德俱備六行相兼二代宰臣之致輔弼也受彼餘裔當時皇后之儼啓令也爲其曾

孫仍縱擬安擇之歡寧忘褒崇之道宜授邑土三百戶并年爵内外官三分主者施行

從歸歟、俾夫天地之德、施而彌新、日月之明、照而更盛、無任危懼謙退之至、謹重上表陳請以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

長德四年三月十二日左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

〔日本紀略

^{後十三卷}

〕長和五年六月十日壬午、勅、左大臣^{道長}、原年爵年官准三宮、本封外加食邑三千戶、

以內舍人左右近衛、左右兵衛等爲隨身兵仗、并給帶刀資人卅人、如忠仁公^{良房}、故事、又室家源倫子本封外給邑土三百戶、年爵內外官三分、十月二日癸酉、攝政辭表、載左大臣並准三宮事、勅答不許、

〔小右記〕寬仁三年五月八日甲子、四條大納言被示送狀云、昨日依有攝政^{賴通}、原御消息、今日參入、可行勅書事、是入道殿^長、御封事云々、大入道御時事若有所聞、食歟、御曆被注乎、故宜義抄出詔勸之中、有此勸、先入道關白任人賜爵、猶擬三宮封戶不改、勸云々、書中任人賜爵之儀、擬三宮不改、采邑茅土之制、割二千而殊加云々、表狀云、讀月日勸書、賜其封二千戶、任人賜爵、擬三宮云々、勸答辭其准三宮之儀、謝以封二千之制云々、案之最初勸書、割二千、新加之文、本封^仁、似加別封二千、依之端、所書文者、宜義所注也、出家之人何有位、封職封乎、表并勸答者、只有別封加字、非無所疑如何、又勸書無御畫者、不就、御所只可奉攝政歟、先例雖幼主皆奏、近代不然、今被加御元服、如此事如何者、報云、曆無所注、或書云、只入道殿例、注准三宮年爵、年官并別封二千、抑出家人不可有位、職等封歟、忽無御畫之文、不可被奏者、古跡亦就御所奏聞、從御所被遣攝政所、而近代不然、但事已不輕、進御所被奏、宜歟、可有事疑者、先示奏者、隨案內被進止如何、近代事不似古昔耳、九日己丑、昨日勸書趣并進奏不等事、間達大納言御許、報云、任人賜爵如故、可被給封戶二千戶、不可有位、職等封、仍只被給別封二千戶云々、如大入道殿御時、於入道殿申案內、付御所可宜者、依進御所奏覽、攝政被候、御所者、此事合恩案、

〔濫觴抄〕法准三宮

加以兩院上皇不弄渭陽之勞功。擲以親舅矣。今上陛下不遺豐沛之父老。賞以外祖焉。太后降尊。忝存爲子之道。少陽厚禮。猶有稱孫之名。其外竹園蘭坂。多是臣之枝苗。二府九卿。半又臣之弟姪。書契以還。未有才德薄。寵榮厚如臣者矣。是以葉公魂驚。何更扶龍圖而招半死。華封齡老。唯須祝鳳曆而送餘生。臣縱進崇班。以棲野雲。命存則可。仰聖化。臣若叨重寄。以先朝露。位尊亦無益。微躬方今塵曠漸深。慙懼彌劇。昔乘釣柄而過九十。寧非安平之強健哉。今辭官職而至再三。則是暗懦之疴麻也。雖降十勅。何改一心。伏望鴻慈。殊矜微懇。聽臣欺闕之請。不異敢諫之鼓。靜臣懸旆之心。自爲進善之旗。無任抱滿之至。謹重遣正四位下行右近衛中將兼伊豫守藤原朝臣道賴。抗表陳乞。以聞。臣某誠兢誠惕。頓首頓首。死罪死罪。謹言。

永祚二年四月廿一日太政大臣從一位藤原朝臣某上表

〔公卿補任一條〕

攝政太政大臣從一位藤兼家

出家人准三宮初例

永祚二年五月五日辭攝政太政大臣。吏詔

關白八日返關白。依病入道。

注名如意

十二日詔賜度者一百人。廿三日詔書云。准三宮任人賜爵之儀。擬三

宮以不改采邑。茅土之制。割二千而殊加者。固辭不受。七月二日。薨于東三條第。

〔公卿補任一條〕

左大臣正二位藤道長。長德二年七月廿日。叙正二位。廿一日。大將如元。八月九日。辭

大將。以童六人爲隨身。十月九日。停童爲左右近衛府生各一人。近衛各四人。

內覽童隨身六人給之。九條右大臣(師輔)例云々。

〔本朝文粹〕

表五

爲入道太政大臣。

藤原道長

辭左大臣。並章奏隨身等表。

江匡衡

臣某

言頻表仰恩。未蒙矜途。馳意半漢。秋覲之騎方危。盡詞披陳。春木之筆欲腐。臣某

中

臣聲源淺薄。才地荒蕪。偏以母后○一條母之後。子之同胞。不次昇進。亦因父祖之餘慶。匪德登用。彼周公旦之夕。見七十也。臣

未能薦一士。叔孫通之朝儀三千也。臣未能出一言。冰魂雪汗。四廻于茲。天譴鬼瞰。萬念于懷。○中伏望

弘慈曲降。徽鑑臣所帶官。及內外章奏。觸臣宣行之事。忽從停止。又隨身近衛府已下十人。名付本府。令

弘慈曲降。徽鑑臣所帶官。及內外章奏。觸臣宣行之事。忽從停止。又隨身近衛府已下十人。名付本府。令

定內舍人二人左右近衛各四人但任人賜爵等並准三宮一如先帝策命忠仁公故事、

〔公卿補任醍醐〕左大臣從二位藤時平 延喜二年正月廿八日、賜別封二千戶、

〔公卿補任朱雀〕攝政左大臣正二位藤忠平 延長九年五月廿日、賜內舍人隨身左右近衛四人、任人爵人並

准三宮略○中 承平二年二月廿九日、宣旨聽乘牛車出入上東門、十一月廿六日、叙從一位、

〔日本紀略朱雀〕天慶二年正月廿八日、太政大臣忠平○藤原 任人賜爵並准三宮、一如貞觀故事、

〔公卿補任醍醐〕關白太政大臣從一位藤兼通 貞元二年十月十一日、依病辭關白并太政大臣上表、

即有勅許、十一月四日、依請停關白、讓于左大臣賴忠○藤原 同日詔、任人爵人准三宮、

〔本朝文粹勅二書〕充華山法皇外祖母惠子女王封戶年官年爵勅、

慶保胤

勅漢武即位、咸兒遇封、誠是眇代之恒規、抑亦前史之令典也、朕外祖母王氏伊尹妻○藤原 禮法在心、閨闈垂

範、朕當幼日、早別先妣子○儲 祖母視朕亦猶子、朕報祖母未如親、往年厭世歸道、出家爲尼、何以塵俗之

風、妄訪勸念之月、授邑土三百戶、并年爵內外官三分等、聊爲湯沐資、兼與役從之輩主者施行、

永觀二年十二月十三日

〔日本紀略一條〕寬和二年六月廿八日乙丑、勅賜攝政右大臣兼藤原 內舍人二人左右近衛各四人爲

隨身、

〔本朝文粹四表〕爲入道前太政大臣兼藤原 辭職并封戶准三宮第三表

江匡衡

臣某言、頻獻表奏、未蒙照臨、仰前疏而增戰栗、濡禿筆而惱臆、松、臣

德、揣分受職、往賢由其全身、若授受乖其宜、則如養魚、鼈於層雲之巔、棲鳥雀於重淵之底者也、臣齡先

懸車而身已病、器非負鼎而力早衰、駑驥之病也、驚馬先之、況驚馬之病乎、孟賁之衰也、庸夫蔑之、况庸

夫之衰乎、凡登高秩者、必飾謙退之詞、至大年者、即逃歸老之志、今臣所請、異於彼焉、夫事無兩全、物難

俱有、連枝或臨、艾服分凋、枯臣之餘六旬者、可謂家老、末葉多列、槐庭分榮、顯臣之居三公者是、摠國卿、

謗於朕躬。夫太政大臣法當食邑三千戶。及隨身兵仗。國有成式。又准三宮給年官。先帝之禮寵也。至于封邑固讓二千。唯享千戶。隨身等事皆辭不受。朕以祿法所當。古賢不辭。既能有其功。居其位。何不食其祿。增其威。然則所辭封邑等事。乖元老崇班之義。非國家褒飾之心。故今不敢論法。唯盡其所當。宜其封戶全食三千。以內舍人二人。左右近衛左右兵衛各六人。爲其隨身之兵。又給帶仗資人三十人。年官准三宮事。亦當奉遵先帝之遺詔。又大臣所保官爵。皆是先朝之寵章也。於朕之時。無一加益。仍欲增一位之餘階。而深忌亢極。固自遜辭。朕不敢違。全其冲挹。斯亦屈己之志。成人之美也。普告遐邇。令知朕意。

十四日庚寅。太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表曰。臣伏奉。今月十日勅旨。賜臣以食邑。如舊。命年官准三宮。帶刀資人隨身兵仗等事。荷恩不力。踴躍無聞。臣聞太政大臣者。上理陰陽。下經邦國。一人有慶。師範猶施。四海無波。儀形自用。而先帝不棄臣庸。預委以此崇班。純陽未免履水。臘月逾添流汗。自愧形影深執。猶謹唯許。減封三分有一。又隨身兵仗等事。雖舊貫不敢當其仁。年官則恩是新情。臣未堪爲其首。故臣並固辭。以視不虛受。今陛下更憲章先帝。重宣惠鴻私。忠誠不移。先後惟一。臣欲推賢以避路。何私陛下公選之官。將扶老以干城。何分陛下宿衛之士。況比年調和不偶。水旱重仍。倉廩少禮。節之資。城池失金湯之險。故去十一年六月二十六日。聖主下勅曰。服御常膳並宜減撤。同年七月二日。公卿上奏曰。五位已上封祿亦宜減折。其議未復。其事猶存。豈君臣偏好卑謙。蓋內外共待豐稔。若以斯時。全食彼邑。祿耻格於先帝。而取嫌猜於當時也。且尸素者天奪其鑒。充盈者鬼瞰其家。溫飽有餘。何以忘止足。年齡已暮。暫欲養遊魂。臣所以不奉遵。公私兼濟而已。不任懇款屏營之至。謹修表狀。陳讓以聞。不許。見都

氏文集
家文
官

〔三代實錄四十一〕元慶六年二月甲戌朔。勅曰。男氏太政大臣藤原朝臣基。朕自在提抱。賴其保護。思

隆非常之渥寵。以答莫大之元功。其職封職田資人等。累經以聞。自遜辭。朕不敢違之。聽其所請。又舊儀所賜隨身內舍人二人。左右近衛各六人。左右兵衛各六人。然而隨其固辭。不更加給。依前日之分配。減

なり。

〔吾妻鏡 二十八〕寛喜三年二月廿一日、京都飛脚參著去十二日、中宮將軍家（藤原賴經）御子降誕之由申之云々、四月十七日、京都使者參著、依中宮御入内賞去八日、將軍家令叙正四位

下、御之由申之、

賜封戸

〔續日本紀 三〕慶雲四年四月壬午、詔曰、天皇詔旨勅久、汝藤原朝臣乃〇不仕奉狀者今乃不在、掛

母畏支 天皇御世御世仕奉而今、又朕卿止爲而以明淨心而朕乎助奉事乃重支勞事乎所念坐

御意坐附依而多利麻比氏夜夜彌賜彌間忌忍事附似事奈母志常勞彌所念坐止宣、又難波大宮御宇掛

母畏支 天皇命乃〇汝父藤原大臣乃〇仕奉流狀乎建内宿禰命乃仕奉買事止同事止叙勅而治賜慈

賜利買、是以令文所載多流跡止爲而隨令長遠、始今而次次被賜將往物止、食封五千戸賜止久勅命聞

宜辭而不受、減三千戸賜二千戸、一千戸傳于子孫、

〔公卿補任 文〕攝政從一位藤良房 天安二年十一月七日宣旨爲攝政准三宮、食封賜内舍人左右

近衛爲隨身、帶仗資人卅人、依爲帝外祖被抽賞也、

〔濫觴抄 下〕准三宮

清和十四年辛卯貞觀十三三月十日丙戌、勅攝政太政大臣准三宮、賜年官封戸三千、内舍人左右近衛兵

衛六人、隨身兵仗資人四十人、

〔三代實錄 十〕貞觀十三年四月十日丙戌、勅功多者賞厚、先王之通規、德茂者位尊、往昔之聲訓、是故

蒼精既著、增高於曲阜之基、朱火以光、加映於博陸之地、爰及本朝、亦有舊典、皆迹存於鉛槧、事絢於綵

蒸、太政大臣外祖父藤原朝臣風柴沉遠、器度淹凝、摘騰之寄、攸歸據計之任、是重朕自在襁褓、賴其保

生、義爲君臣、恩過父母、蓋有不世之功、須受非常之寵、而鳴謙在心、卑損無已、所以顯著之績、春秋繁茂、

降崇之典、歲月寂寞、今朕已得成人、大臣類齡漸暮、若遂培多之美、不崇加異之章、則恐當時後代、將歸

右近衛大將正二位源朝臣雅實^兼將曹良定、伴良貞、申文、頭中將依仰持參御前也。事了大臣、取除目、退歸於殿上、召清書上卿^{權中納言}給之上卿著陣行清書并下名事等云々。此間大將參弓場殿付頭中將奏慶賀、次拜舞^{至後再拜之時、隨身等追前、後問右府命云、後拜ト云ハ先一拜、次之拜時、隨身可、退前也、而至左右左舞踏後二拜、追前是隨身等失也者、左少辨重實、諷諫云々、拜間、官人發歌笛聲、次府生等^ニ御酒給^ニ被奏^{賜、作調前二、次將以下、奏云々、}勅許之後、渡南庭參中宮御方、令權亮國信朝臣慶賀、由拜了還本路出敷政門代引、率公卿并次將以下、歸還養所^{○中}。事了人々退歸之後、大將下南庭、被拜嚴親右相府云々。右府有牽出物馬一疋者^{○中}。}

人々被談云、新大將此年之間、被拜任事、誠大運也。祖父故土御門右府^{○師}五十餘任大將、嚴親右府^{○師}餘任此職、至此納言者、已卅餘也。隨及子孫、彌以早速也。就中時口二三の人子姪爲大將之事、誠未曾有也。右相府奇不可思議歟。

十二月廿七日庚午、依任大將事有除目、未時許內府令蒙勅授帶劔宣旨給、頭辨仰下上卿左兵衛督內府、則於弓場殿令奏慶賀、由拜舞之後、令著仗座給^{去廿五日、雖可有勅授宣旨、依口後日引及今日也、}左大臣^{權細綱、綱、參}內藤大納言中宮大夫^{○師}、中納言中將殿上人親五六輩扈從、前驅十餘人許、此中四位一人^{○中}、將宗通朝臣、此間出御使往反院^{○中}。

左右大臣、左右大將、源氏同時相置例、未有此事。今年春日御社類恠異、興福寺大衆亂逆、若此微歟、加之大納言五人之中、三人已源氏、六衛府督五人已源氏、七辨之中四人也。他門誠希有之例也。爲藤氏甚有懼之故歟。

〔續世繼^{男三}〕保延五年にや侍りけん、つちのどのひつじの年五月十八日、よになくけうらなる玉のをのこ宮^{○近}うまれさせ給ぬれば、院^{○鳥}のうちさらなり、世の中もうごくまてよるこびあへるさまいはんかたなし^{○中}。八月十七日春宮にたゝせ給、昭陽舍に御まつらひありてわたらせ給、大夫には堀川の大納言^{○師}なり給、御母^{○鳥羽}のをちにおはして、ことにえらばせ給へる

給へどうちいだして申ければ、みかどおほせられけるは、おどどうなれども、右大將中宮の御おやにて、このたびならずば法師にならんといふなり、又上らうども有て、われこそなるべけれなきいへば、それもすてがたきなりとおほせられければ、大納言大臣になり侍ることはかならずしも一二といふこと侍らず、なるべき人をえりてなされ侍るなり、又國のつかさへたる人いかにせ申侍りければ、ずがはらのおどい道もさぬきのかみどかしとおほせられければ、江帥申けるは、はかせはべちのことに侍り、又さいがくたかく侍らんあにを大臣になさせ給はんに、出家するおどどうともよに侍らじと申ければ、堀川殿はなり給へりけるとぞ、六條のおどいはそのうちにぞなり給し、中宮の御おやほりかはのみかどの御おほちにていどめでたくおはしき、〔中右記〕寛治七年十一月十五日己巳、今夜有大將召仰藏人頭左中將宗通朝臣奉仰令内豎召權大納言源朝臣雅實卿、于時在右府則被參仗座、候宗通朝臣仰云、可成賜右近衛大將日時撰申者、則奉此旨退出、中略

今夜召仰後、大納言還家書定文、件定文宮内大輔俊信書之云々、

抑今夜五節帳代試也、先被相尋例之處、或有除目下名、或有臨時叙位者、仍所被仰下也、彼大納言年少卅五、是雖有右府讓超越數輩之上、薦被補顯要之大任、甚有恐事也、但國母之人、先例又如此、是一之道理也、可然云々、戚里之貴誠矣斯言、中略

廿日甲午、依可任大將事有除目、今日禁中御物忌也、仍殿下内府令參籠給也、未時許大納言參内、細嫌御有文帶、紫漢緒前驅八人、右兵衛督以下、右府子族五人皆扈從、暫徘徊陣壁外、内大臣此間著仗座、諸卿同被候、則供御前御裝束、其儀如官奏、東面但依御物忌北第一間、只一垂御簾、御物忌付廂御簾、又大臣圓座外、加敷殿下御料圓座、須臾出御、御直執柄殿下令候御、召藏人頭宗通朝臣被仰、可召大臣由、宗通朝臣出仗座召之、内大臣參上、著御前座、即召人藏人兵部大輔通輔參候、依仰持參紙筆等、

正暦二年九月七日

〔權記〕長德四年十月廿九日甲寅依召參院。○一條母后東道長 仰云、年來御坐左大臣。○藤原土御門家、亦

月來御此一條、依有先例欲給爵賞於大臣室家之由可奏、又給三位階如何、其由同加用意可洩由者、

依不知御名、詣彼殿案內、丞相命云、名倫子、元從五位上。○中抑此事先日承仰已了、而今爲仰下、内々

令申事由之處、仰旨如此、若有難澁御氣色、歟、有事次見氣色可示了。○更不記、即參内申院御消息、仰。○

云、尤可然事也、早可仰下者也、即奏只今上卿不參右大將藤原朝臣。○道候院使可仰歟、仰云有便之

事也、依讀。○中即奉勅命先參院、奏御返事旨。○大臣室倫子、可叙三位之趣也。

〔日本紀畧十一〕寬弘三年三月四日丙午、天皇自東三條遷御一條院中宮。○彰同行啓、是日也、天皇先

於東三條殿命花宴。○中左大臣室、○藤原道長妻倫子並子息家司等各增爵。

〔日本紀畧十一〕寬弘五年十月十六日癸卯、天皇賀鳳禁、行幸中宮彰子御所上東門第、依第二皇子。○後

一誕生也、有音樂、即以皇子爲親王、御名敦成、左大臣。○藤原道長以下於南殿拜舞、宴遊之後給祿有差、又

左大臣室源倫子叙從一位家司等叙位、子刻還御。○其中左大臣子息二人、賴

〔御堂關白記〕寬弘五年十月十六日癸卯、道方朝臣召右大臣。○藤原光賴前御書叙位、以道方被仰云、可

賜一階如何、奏聞云、官位其高、仕公間非無其恐、不賜爲慶、又仰云、可然家司一人賜賞、可奏其人者、以

季隆奏也、叙位了、右府著座、正二位藤原朝臣齊信從二位源朝臣俊賢、藤原朝臣賴通從四位下敦通

從四位下季隆、以道方奏云、實成朝臣上達部亮被給一階、仰云書落也、早可入者、右大臣承也、書加從

三位實成、源倫子從一位、慶賀人々奏聞其由、余並内府同奏、是依子慶也。

〔續世繼七〕六條殿。○源房は、よのおぼえわに。○源よりもまさり給て、大納言の大將、中宮。○白

子賢のおはんおやにておはせしに、大臣あきて侍りけるを、白川のみかおぼしわづらはせ給て、

ひごろすぎけるに、匡房の中納言におはせられあはせければ、ほりかはの大納言。○後をなさせ

給^止去春夏間^{利興}仰給大坐而大臣乃懇^爾加志許^{利末}辭讓申^仁依^天今^未延來^禮今畏^岐本御意早
行^倍物^奈利^仰給^不御命^{利母安}故是以太政大臣官^爾上給^比治給^止久^勅但攝政之職^波今母^彌益々^爾
勤奉仕^止勅御命^平衆聞食^止宣

〔三代實錄^{四十三}〕元慶七年正月十五日壬午從四位下行越前權守藤原朝臣弘經卒弘經者贈太政
大臣正一位長良朝臣子太政大臣昭宣公^基藤原之弟也^略弘經天皇之外舅也故天皇特愍十二
月晦日^{六年}元慶授從四位下就床下賜告身七年正月遷爲越前權守後四日卒年四十五
〔今昔物語^{二十二}〕高藤內大臣語第七

此ノ高藤ノ君止事无ク御ケル人ニテ成上リ給テ大納言マデ成給ヒヌ彼ノ姫君[○]胤ヲバ宇多
院ノ位ニ御シケル時ニ女御ニ奉リ給ヒツ其ノ後幾ク程ヲ不經ズシテ醍醐ノ天皇ヲバ產奉リ
給ヘル也^略中祖父ノ大領^{彌益}宮道ハ四位ニ叙シテ修理ノ大夫ニナム被成タリケル醍醐ノ天皇
位ニ即セ給ヒニケレバ祖父ノ高藤ノ大納言ハ內大臣ニ成給ヒニケリ其後彌益ガ家ヲバ寺ニ
成シテ今ノ勸修寺此也向ノ東ノ山邊ニ其妻堂ヲ起タリ其名ヲバ大宅寺ト云フ此レ彌益ガ家
ノ當ヲバ哀レニ睦シク思食ケルニヤ有ケム

〔權記〕正曆二年九月七日任大臣事諸司裝束南殿廂從額間云々時刻卿相參陣大內記爲時朝臣持
宣命^略令覽於中納言顯光卿^略中

天皇^我詔旨^{其萬}勅御命^平親王諸臣百官人等天下公民衆聞食^宣太政大臣乃官ハ攝政正二位
藤原道隆朝臣乃可任^{なり}而謙讓心神^{之天}內大臣乃官^を辭申^天支此般猶令昇進^めハ彼心^爾
違^のべし右大臣從一位藤原爲光朝臣數代^爾歷仕^ハ天朝乃重臣^とあり仍殊^爾太政大臣乃官^仁
上給^比詔賜^布正二位行權大納言藤原道兼朝臣ハ朕乃親舅^{なり}朝恩^を可蒙^幾人^{なる}仁依^天
那^半殊^爾內大臣乃官^爾任賜^中勅^布天皇^我御命^平衆聞食^宣

〔續日本紀四十〕延曆九年二月甲午、詔授正五位下百濟王玄鏡從四位下、從五位上百濟王仁真正五位上、正六位上百濟王鏡仁從五位下、是日詔曰、百濟王等者朕之外戚也、今所以擢一南人、加授爵位也、

〔類聚國史三十〕弘仁五年四月乙巳、幸左近衛大將正四位下藤原朝臣冬嗣、開院供張之宜、甚有雅致、天皇染翰、群臣獻詩、時人以爲佳食、授冬嗣從三位、无位藤原美都子從五位下、賜五位以上衣被、

〔類聚國史十六〕天長十年正月丁未、出雲守正四位下紀朝臣咋麻呂卒、爲人無才、以田原天皇〇文外戚特至四位、終以天命、時年七十九、

〔文德實錄九〕天安元年二月丁亥、右大臣正二位藤原朝臣良房爲太政大臣、〇中宣制曰、天皇我我萬勅御命平親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣不、右大臣正二位藤原良房朝臣波朕之外舅、利那又雅親王止大坐時利興助導供奉禮所利毛安今毛又忠貞留心乎持天食國乃天下乃政乎

相安奈那比申賜比助奉留事毛漸久利奴奴、古人有言利、德止之無不酬止奈聞食須、而今所在乃官波掛畏支先帝乃治賜留所利、朕未有所酬、是以殊爾太政大臣官爾上賜比治賜、〇中

食止宣、略天皇御命平衆聞

〔三代實錄三十八〕元慶四年十二月四日癸未、天皇御紫宸殿、喚公卿及百官於殿庭、策拜右大臣正二位藤原朝臣基經爲太政大臣、公卿百僚拜舞而罷、策命曰、天皇我我萬勅御命平親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、右大臣正二位藤原基經朝臣波朕之親舅、利奈忠貞心乎持氏御世御世利

天下政乎相安奈々比助奉母久奈利奴又朕未及初載之時、利興輔導崇護供奉禮所利母安因茲掛畏太上

天皇清乃〇詔命平持天攝政乃職爾事與佐治賜利倍朕我食國乎平久安久天照之治聞食須故波此大

臣之力奈而所帶官波攝政乃職波爾不相當止頃年參利加大坐都、今掛畏太上天皇乃詔旨毛職波貴天官波賤天也久年平歷倍太政官乃其人止最此卿乎可謂止勅御命利安掛畏波御命乃任仁上給治

五派ト爲リ、之ヲ五攝家ト稱シ、互ニ外戚タリト雖モ、其勢益微ナリ、足利幕府ノ時、攝家ノ輩、將軍ノ偏諱ヲ受クルニ至リテハ、益言フニ足ラズ、

〔伊呂波字類抄久〕外戚^{シヤク}

〔空穂物語^{初秋}〕なかた、ないしやくにも外[○]し。やくにも、女といふものなんともしく侍る^{○中も}。

しは、かたの外玄やくこそ、かのごしかげの朝臣のきむはつかうまつらめ、

〔承久軍物語^六〕十月十日^{○承久}とさのくに、せんかう^{○土}あるべきにさだめられけり^{○中}。げ。

し。く。のつちみかどの大納言さだみち卿参りて、なくく御車をよす、

〔下學集^下〕外戚^{シヤク}、

〔愚管抄^三〕九條の右丞相^{○中} 我子孫を帝の外戚^{シヤク}とはなさんと誓ひて、觀音の化身の叡山の慈惠

大師と師檀のちぎりふかくして、横河のみねに楞嚴三昧院といふ寺を立、

〔増鏡^七〕の末々院の宮たちの御中には、御このかみにてものし給へど、御げさくのよわきはいま

もむかしもかゝること、いとくはしきわざなりけれ、

〔運步色葉集^二〕外戚^{シヤク}

〔下學集^下〕外戚^{シヤク}、

〔令義解^六〕親戚^{シヤク}親戚者^{シヤク}内親也、

〔安齋隨筆後編〕内戚外戚 父方の親類を内戚と云、母方の親類を外戚と云、親族に内外を稱

する皆是なり、

〔續日本紀^八〕正養老五年正月壬子、授從三位縣犬養橘宿禰三千代^{○藤原不比等} 正三位、

○按ズルニ、天皇ノ外戚ニシテ、官祿ヲ授ケラレタルモノ、其例甚多ク悉ク載スルニ勝ヘズ、故

ニ今史ニ明文アルカ、若クハ其特ニ著明ナルモノ、ミテ取レリ、

シニアラズ、是ヨリ後外戚ノ王室ニ於ル、大ニ前日ト其觀ヲ異ニセリ、

源賴朝府ヲ鎌倉ニ開クニ及ビテ、亦藤氏ノ觀ニ倣ヒ、其女ヲ後宮ニ納レント欲シテ成ラザリシ以來、足利幕府ニ至ル迄、遂ニ將軍ノ女ヲ入ル、ノ事ナシ、當時ハ武家天下ノ政權ヲ掌握セシカバ、皇家ノ外戚モ、其力ニ頼ルニアラザレバ、全ク其勢ナシ、是ヲ以テ鎌倉幕府ノ頃ニハ、西園寺氏ハ將家ノ親ヲ以テ、累世帝戚トナリ、室町將軍ノ時ニハ、日野氏、基松氏等ハ幕府ノ姻ニ依リテ、盛ニ其家門ヲ興セリ、豐臣氏ノ時ニ及ビテ、近衛氏ノ女關白秀吉ノ養子トナリテ、後陽成天皇ノ宮ニ入リシハ、少カ其類ヲ異ニスト雖モ、蓋シ亦其力ニ頼ルナリ、後水尾天皇ノ朝、征夷大將軍德川秀忠、其女ヲ納レテ中宮トス、鎌倉幕府ヨリ以來、將軍ノ女ニシテ后位ニ居ルモノ、前後絶エテアルコトナシ、明正天皇ハ德川氏所生ノ皇女ナリ、孝謙天皇以後、女主ヲ立ツルノ例久シク絶エタリシガ、是ニ至リテ復女帝アリ、論者或ハ以テ外戚專横ノ致ス所トス、然レドモ德川氏ハ之ヲ以テ權威ヲ加ヘントスルニハアラズシテ、之ヲ以テ榮トセントスルニ過ギザリシナラン、此時代ニ在リテハ、復外戚ノ爲ニ社寺ニ奉幣布施シ、或ハ度者ヲ賜ヒ、敕令ヲ行フガ如キ事ナシ、而シテ其沒スルニ當リテハ、忌服廢朝、贈位贈官等ノ事、猶舊典ニ據リテ之ヲ行ヘリト雖モ、復固關警固ノ事ナキニ至レリ、時世ノ然ラシムル所ナリ、

要スルニ我皇室ノ外戚ニ於ケル、之ヲ世界萬國ニ求ムルニ、終ニ其比ヲ見ザル所ニシテ、外戚ハ必ズ藤原氏外戚タルニアラザレバ、執政タルヲ得ザルノ姿ナリシカバ、天照大神ノ御子孫ハ、長ク瑞穗國ニ君臨シ給ヒ、天兒屋命ノ後裔ハ、長ク執政ノ臣ト爲リテ、萬世替ルコトナキハ蓋シ二神ノ幽契ニ起レリト、云フ說アルニ至レリ、而シテ藤原氏ハ冬嗣ヨリ以後、房前ノ子孫常ニ上流ニ居リ、道長以後其嫡長タル人常ニ攝關タリシガ、鎌倉幕府ノ時、分レテ

ヲ極メ、其富天下ニ冠タリ、諸子亦朝ニ列シテ、高キハ攝關大臣ニ至リ、卑キモ納言參議ヲ失ハズ、百事己ノ意ノ如ク、一事モ缺ケザルヲ以テ自ラ十五夜ノ月ニ比シ、此世ヲ以テ我世ト爲スニ至ル、實ニ攝關ヲ置キテヨリ以來、未ダ富貴滿盈ナルコト、道長ノ如キモノハアラザルナリ、道長ノ子賴通亦先人ノ餘風ヲ承ケテ、驕傲父祖ニ讓ラズ、身ハ三代ノ執柄トナリテ、權ヲ專ニスルコト凡ソ五十餘年ナリ、而シテ敦康親王ノ女嬪子ヲ養ヒ、名ケテ眞ノ所生ト爲シ、是ヲ後朱雀天皇ノ中宮ト爲ス、亦外戚ノ權ヲ貪ルニ過ギズ、而シテ藤原氏ニハ此轍ヲ踏ムモノ殊ニ多シ、

後三條天皇ハ、藤原氏ノ出ニアラザルヲ以テ、儲位ニ升リ給フモ頗ル難カリシガ、登極ニ至リ甚ク藤氏ノ權ヲ制シ給ヒシニ由リ、外家ノ勢力頓ニ挫折シテ、復昔日ノ如クナラズ、白河天皇ノ中宮ハ、賴通ノ子ナル師實ノ女ニシテ、實ハ源顯房ノ女ナリ、堀河天皇ノ朝、顯房外祖ヲ以テ榮達シ、兄俊房ト共ニ左右ノ大臣ト爲リ、大將ヲ兼テ、子族亦納言衛府辨官等ノ顯要ニ列シタリ、藤氏ニアラズシテ兄弟左右ノ大臣タルハ、此ヨリ前ニ絶エテ無キ所ナリ、亦以テ世變ヲ觀ルベシ、且ツ當時ハ天下ノ政皆院中ヨリ出ヅルヲ以テ、藤原氏益勢力ナシ、然レドモ外戚タランコトニ汲々タルハ猶從前ニ異ナラズ、

堀河鳥羽崇徳ノ三天皇ノ朝ヲ歷テ、近衛天皇ニ至ル、時ニ賴通ノ玄孫賴長、父忠實ノ寵ヲ恃ミテ、兄忠通ト善カラズ、互ニ女ヲ養ヒテ之ヲ後宮ニ納レント欲シ、父子相陷レ、兄弟交軋リ、以テ保元ノ亂ヲ釀シ、更ニ平治ノ變ヲ變テ、平清盛ヲシテ殊勳ヲ樹テシム、是ニ於テ藤氏ハ從前ノ威權ヲ舉ゲテ之ヲ平氏ニ屬セリ、清盛モ亦藤氏ノ所爲ニ倣ヒ、女ヲ納レテ高倉天皇ノ中宮トシ、竟ニ天皇ニ逼リテ外孫ナル皇子ニ讓位セシム、安德天皇是ナリ、清盛愈威權ヲ弄シ、跋扈跳梁至ラザル所ナケレドモ、多クハ功績ニ矜リシモノニテ、専ラ外戚ノ親ヲ怙ミ

平守平二親王ヲ生メリ、村上天皇殊ニ爲平親王ヲ愛シ、冷泉天皇ノ太子ニ立テントシ給ヒシカド、外家ノ援ナキヲ以テ成ラズ、村上天皇崩ジ給フニ及ビテ、實賴遣詔ト稱シテ守平親王ヲ立テ、左大臣源高明ヲ貶竄シ、弟師尹ヲ以テ之ニ代ヘタリ、高明爲平親王ヲ以テ婿トス、故ニ廢立ノ意アリト云フヲ以テ、讒ヲ蒙リシモノニシテ、醍醐天皇ノ朝ニ、菅原道眞ガ宇多天皇ノ皇子齊世親王ノ外舅タルヲ以テ、流謫セラレシト同一轍ナリ、亦以テ當時外戚ノ狀態ヲ見ルベシ、圓融天皇ノ時、外祖九條師輔ノ子伊尹、伯父實賴ニ繼ギテ攝政トナル、凡ソ攝關ハ常置ノ職ニアラザレドモ、伊尹之ニ任ジテヨリ、子弟相續ギ、永ク絶エザルニ至レリ、兼通兄伊尹ニ嗣ギテ關白トナリ、弟兼家ト互ニ女ヲ宮闈ニ納レント爭ヒ、從弟賴忠ヲ引キテ援トス、賴忠亦兼家ト爭フ、兼家花山天皇ヲ簾シテ、其位ヲ遷レシメ、一條三條二天皇ノ外祖トナリ、驕奢日ニ盛ニシテ、紆ヲ放チテ幼主ヲ抱キ、親王ヲ罵ル等ノ事アリ、其長子道隆、次子道兼、相繼ギテ關白トナリ、自專愈盛ナリシガ、三子道長ニ至リテ殆ド其極ニ達セリ、初メ道隆ノ女定子立チテ一條天皇ノ皇后トナリ、敦康親王ヲ生ミシガ、道長又其女彰子ヲ納レテ中宮トシ、敦成親王ヲ生メリ、二后竝立スルコト之ヲ以テ始トス、後相沿ヒテ流例トナリ、名分大ニ紊レタリ、

三條天皇位ヲ嗣ギ給フニ及ビテ、一條天皇敦康親王ヲ以テ皇太子ニ立テ給ハントス、中宮彰子モ亦其父道長ニ勸メテ之ヲ立テシメントス、而ルニ天皇、道長ヲ憚リ、終ニ敦成親王ヲ立テ、皇太子トシ給フ、道長又外孫ノ早ク登祚シ給ハント欲シ、三條天皇ニ逼リテ讓位セシム、敦成親王乃チ立チタマフ、是ヲ後一條天皇トス、時ニ皇太子ハ三條天皇ノ皇子敦明親王ナリ、道長又己ノ女ノ出ニアラザルヲ以テ、其位ヲ去ラシメ、敦良親王ヲ立テ、後一條天皇ノ皇太弟トセリ、亦道長ノ外孫ナリ、是時ニ當リテ、道長三天皇ノ外祖ト爲リ、位人臣

和天皇ノ外祖父トナル、桓武天皇其父ノ故ヲ以テ、長子緒繼ヲ殿上ニ召シテ加冠セシメ給フ、外戚殿上ニ於テ元服スルコト、是ヲ以テ權輿トス、嵯峨天皇ノ后橘氏ハ、諸兄ノ孫清友ノ女ナリ、弟氏公右大臣ト爲リ、橘氏復大ニ興リ、仁明天皇ニ至リ、其氏神モ官祠ニ列セラル、天皇房前ノ玄孫冬嗣ノ女順子ヲ納レテ女御ト爲シ給フ、順子文德天皇ヲ生ム、文德天皇立テ給フニ及ビテ、冬嗣ノ子良房、又女明子ヲ納レテ其外舅トナリ、威權日ニ重シ、天皇ノ峻嚴ナル猶之ヲ憚リ、長ヲ舍テ幼ヲ立テ給フニ至ル、是ヲ清和天皇トス、良房、文德天皇ノ遺詔ヲ奉ジテ萬機ヲ攝セリ、攝政ノ稱是ニ昉マル、卽位ノ元年、始テ十陵四墓ノ制ヲ定ム、四墓ノ列ニ在ルモノハ、藤氏ノ祖ト外祖父母、及ビ外祖父ノ父母トノミ、後増減アリト雖モ、要スルニ外家一門ノ外ヲ出デズ、良房其姪基經ヲ養ヒテ子トス、又外舅ノ大臣ヲ以テ陽成天皇ノ朝ニ攝政トナリ、後ニ至リテ始テ關白トナル、後世攝關ノ職、必ズ之ヲ外祖外舅ノ大臣ニ取ルノ例ハ、良房父子ヲ以テ其先蹤ト爲ス、基經、天皇ノ失德アルヲ以テ之ヲ廢シテ、光孝天皇ヲ迎ヘ立ツ、是實ニ人臣ヲ以テ廢立ヲ擅行スル始ナリ、是ヨリ大權全ク相門ニ歸シ、威權王家ヲ震ス、光孝天皇ガ基經ヲ臥内ニ引キテ皇太子ノ事ヲ託シ、宇多天皇ガ阿衡ノ事ヲ以テ自ラ責ヲ引キ給ヒシガ如キ、以テ其一端ヲ窺フニ足ルベシ、宇多天皇ハ英主ナリ、一旦其權ヲ收メント欲シ、菅原道真ヲ擧ゲテ政ヲ輔ケシメ給ヒシカド、其效ナキノミナラズ、積重ノ威、愈激シテ愈盛ナリ、基經ノ子時平、亦醍醐天皇ノ朝ニ驕ル、天皇ハ高藤ノ女ノ産ム所ニシテ、高藤ハ良房ノ弟良門ノ子ナリ、久シク世ニ沈淪セシガ、是ニ至リテ復タ盛ナリ、是ヲ勸修寺家ノ始祖トス、當時數世ノ間、皇后ヲ立テ給ハザリシハ、蓋シ鑑ミル所アリシ故ナルベシ、朱雀天皇幼冲ヲ以テ立テ給フニ至リテ、時平ノ弟忠平マタ之ガ攝政トナリ、嫡子實賴亦冷泉天皇ノ朝ニ關白タリ、是ヨリ先キ村上天皇ノ中宮ハ實賴ノ弟師輔ノ女ナリ、天皇及ビ爲

マタ二十二代ニシテ崇峻天皇ノ時、馬子ノ變アリ、馬子ハ武内宿禰ノ子、蘇我石川宿禰ヨリ出ヅ、石川四世ノ孫ヲ稻目ト云フ、二女ヲ俱ニ欽明天皇ニ納レテ、用明推古崇峻三天皇ノ外祖トナル、即チ馬子ノ父ナリ、馬子ノ子蝦夷、孫入鹿、相繼ギテ大臣ト爲リ、父祖ノ威烈ニ藉リ、專恣ヲ極メ、擅ニ封民ヲ役シテ大墓ヲ築キ、祖廟ヲ建テ、八伯ヲ舞ハシメ、其墓ヲ陵ト云ヒ、其家ヲ宮門ト呼ビ、其子ヲ王子ト稱シテ、密ニ不軌ヲ圖リシカバ、天誅踵ヲ回サズシテ、竟ニ中大兄皇子^{智天}ノ討伐ニ遇ヒ、一門悉ク亡滅ニ歸セリ、而シテ其密議ニ參シ、大墓ヲ殫シ、國家ヲ安ンゼシハ、藤原鎌足ノ功ナリ、是ヲ以テ其子不比等、文武天皇ノ朝ニ當リ、若リニ榮達シテ、天下ノ樞機ヲ掌リ、一門漸ク盛ナリ、其病デ臥スヤ、詔シテ度者ヲ賜ヒ、諸寺ニ布施シ、天下ニ大赦シ、其薨ズルニ及テハ、太政大臣正一位ヲ贈リ、食封賁人並ニ生時ノ如クセシム、外戚ノ爲ニ敕令ヲ發シ、贈位贈官及ビ賜封ノ舉アル、蓋シ之ヲ以テ嚆矢トス、時ニ聖武天皇ハ皇太子ニシテ、不比等ノ外孫ナリ、卽位ニ至リ、遂ニ不比等ノ女安宿媛ヲ立テ、皇后トス、古來皇后ハ多クハ之ヲ皇胤ニ擇ブヲ以テ例トシ、大實ノ令ニハ、妃モ猶之ヲ内親王ニ取リシガ、是ニ至リテ始テ臣下ノ女ヲ採リ、皇后ニ列スル例ヲ開ケリ、是時ニ當リテ、不比等ノ子、武智麻呂、房前、宇合、麻呂等、何レモ顯要ニ列シタルノミナラス、皇后ノ異父兄、橘諸兄ノ如キモ亦大ニ登用セラレ、大臣ノ位ニ昇リ、外戚ノ權甚ダ重シ、是ヨリ藤原氏累世外戚タルノ故事ヲ馴致セリ、孝謙天皇、藤原皇后ノ位ヲ以テ、聖武天皇ノ後ヲ繼ギ給フニ及ビテ、詔シテ外祖ノ名ヲ諱ミ、且ツ外家ノ姓ヲ避ケシム、外戚ノ威益熾ナリ、淳仁天皇ノ朝ニ至リ、終ニ不比等ヲ近江十二郡ニ追封シテ、淡海公ト稱シ、其室ヲ以テ太夫人ト爲セリ、此時惠美押勝ノ亂アリ、押勝ハ武智麻呂ノ子ナリ、

稱徳光仁二天皇ノ際ニ當リテ、宇合ノ子百川、輔弼ノ功アリ、女旅子ヲ桓武天皇ニ納レテ、淳

古事類苑

帝王部二十六

外戚上

天皇ノ外戚ハ、上古ニ在リテ固リ之ヲ特待セル跡ナキニアラズト雖モ、未ダ其制度ノ見ルベキモノアラズ、其之アルハ蓋シ近江朝廷ノ頃ナルベシ、然レドモ當時ノ制ノ今ニ存セザルヲ以テ亦之ヲ知ルニ由ナシ、大寶ノ制ヨリ以後其制ト例ト昭々トシテ致フベシ、凡ソ天皇ノ外戚タルモノハ、毎ニ其官位ヲ進メ、三宮ニ準ジテ封戸ヲ給ヒ、直衣ヲ著スルヲ聽シ、臺盤所ニ入ルヲ得シムルノミナラズ、其病ムニ及ビテハ度者ヲ賜ヒ、諸寺ニ布施シ、神祇ニ奉幣シ、或ハ天下ニ大赦シ、賑給ノ令ヲ發シ、以テ之ヲ救済スルコトアリ、其犯罪アル、皇太后ノ四等以上ノ親、皇后ノ三等以上ノ親モ皆六議ノ恩典ニ霑ヘリ、是レ其生前ニ於ケル待遇ナリトス、其没スルヤ天皇爲ニ錫紵ヲ服シ、或ハ帛衣ヲ除キ、廢朝ノ事ヲ行ヒ、或ハ賻物葬儀ヲ賜ヒ、贈位贈官ノ使ヲ發シ給フ等ノ事アリ、而シテ其尤モ貴顯ナルモノニ至リテハ、警固固關シ、爲ニ節會ヲ停廢シ、其墓ハ山陵ニ準ジテ墓戸ヲ置キ、荷前ヲ進メ、天下事アル時ニハ必ズ之ニ告グルヲ以テ例トセリ、是レ其死後ニ於テ事クル所ノ待遇ナリトス、

外戚ガ其生前死後ニ於テ享クル所ノ待遇ハ、大要此ノ如シ、是ヨリ少カ其故事ニ就テ陳ズル所アラントス、茲ニ我國家ノ治亂盛衰ノ跡ヲ歴覽スルニ、外戚ニ關係スルモノ實ニ尠シトセズ、神武天皇ヨリ十一代ニシテ垂仁天皇ノ朝ニ至ル、此時始テ外甥狹穗彥ノ反アリ、後

祭外家神

輔政

七〇七

七一〇

古事類苑

帝王部二十六

外戚上

名稱
授官位
賜封戶
聽著直衣
聽入臺盤所
姓名特典
吉事恩遇
疾病恩遇
歿後恩遇
贈官位
歿後賜封
冢墓
犯罪處分
車駕幸私第

六五九

同

六六五

六七一

六七二

六七三

六七四

六七八

六八四

六九一

六九七

六九九

七〇五

同

ノ時ハ御簾入ナシ、是親王タルニ由テ也、御入與トハ、俗ニ云婚姻ノ事也、

〔續史愚抄桃〕寛延二年二月七日丙戌、太宰帥典仁親王、於仙洞櫻町入于無品成子内親王御宮、中

女、方簾中、九日戊子、無品成子内親王、院、御宮、廿一歲、中御門自櫻町殿院、御移徙太宰帥典仁親王

院開第條、恩從公卿皇太后宮大夫宗長已下五人、六條前中納言前驅殿上人、右中將實親朝臣已下九

人、

源氏のさ大しやう、高明えもいはすかしづき給ひとりむすめを、さやうにとほのめかし聞え給ければ、みかどもみやも、おほんけしきさやうにおぼしければ、よろこびてやがて其夜参り給例の宮たちは、我さどにおはしそむる事こそ常の事なれ、これは女御更衣のやうに、やがて内におはしますに参らせ奉り給べきさだめあれば、例の女御更衣の参はさることなり、これはいどめづらかにさまかはりいせめかしうて、おほん元服の夜やがて参り給帝ささきの御よめあつかひの程、いとおかしくなんみえさせ給けり、

〔大鏡左大臣師尹〕今一所の女君は、略れんせいゐんの四のみこ道、帥宮と申御うへ。○にて、二三年計おはせしは、略に、○下

〔台記〕康仁二年六月十八日癸卯雅仁親王夫人生男、

〔康富記〕文安元年四月廿六日乙巳、今夜有准后宣下事、常令（後花園）并二宮之御母、伏見入道親王北政所、令蒙此宣下給、○中

略御名字從三位源幸子也、故源宰相經有卿息女也、仍爲經子、而被改之爲幸子云々、

〔百一錄〕延寶四年四月六日平明伏見宮之御臺所、好君御方薨御、女院之女二宮之御息女、急病也、八音遇害、

〔百一錄〕元祿十年十一月十六日、仙洞元宮綾宮御方、准后可爲伏見殿、中之由有言入事也、

十一年四月廿九日、綾宮御方伏見殿御翠簾入、仙洞姫宮廿有餘歟、五月二日、綾宮御方、今夕伏見殿亭へ渡御、堂上北面等數輩供奉、

〔故實拾要〕姫君御入與

是姫宮ノ親王攝家ヘ御入與アル時、攝家ハ其姫宮ノ御所ヘ、御入與以前ニ伺候有テ、御所ニ一宿有テ、翌朝退出シ給フ也、之ヲ御簾入ト云也、御簾入有テ以後ニ、攝家ノ方ヘ御入與アル事也、攝家ハ臣下タルニ由テ也、御入與ノ時ハ、必攝家ノ方ヨリ先有御簾入事也、亦親王家ヘ御入與

等得間逃出隱膽駒山。略中終與子弟妃妻一時自經俱死也。

〔日本書紀三十持統〕朱鳥元年十月庚午賜死皇子大津於譯語田舍時年二十四。妃皇女山邊。略天智被髮

徒跣奔赴殉焉見者皆歎歎

〔續日本紀十武〕天平元年二月癸酉令王。略皇自盡其室二品吉備內親王。略中等同亦縊

〔文德實錄五〕仁壽三年五月乙巳無品齊子內親王薨親王嵯峨太上天皇第十二女也母正五位下文

室真人久賀麻呂之女從五位上女子也親王適三品太宰帥葛井親王。略皇內外戚皆耻其非成禮

〔明月記〕建曆三年四月十七日今夜通光卿娘參六條宮。推成親王十九日傳聞竹園古事有三箇

夜儀廿一日今夜初參院三位中將通方卿暫相談一夜供奉宗行雅清通時家兼師季顯任定衡有

教資俊顯平仲能資賴棟基泰光長資十五人云々清信守通雅具等不作云々雜人等今夜云以此女

房名號可稱女御平可稱御息所乎云々末代人心曾不知物由不異猿猴歟天無二日尾籠之至也

成長云聞世繼有式部卿宮女御是若親王妻歟戴冠奉公者年餘三十所存如此末代之極歟世繼之

外不見及歟可悲々々若是重明爲平娘事歟奇異々々

〔吾妻鏡四十九〕正元二年二月五日癸卯酉剋故岡屋禪定殿下兼經公御息女。略皇爲最明寺禪家北

條時御猶子御下著則入御山內亭是可令備御息所。略皇給云云

〔榮花物語一〕九條殿のささきの御はらからの中のさみはまげあきらのまきふさやうのみや

のさたのかたにてぞおはしける

〔榮花物語一〕かゝる程に后のみやも御門上。略村も四の宮。略皇をかぎりなきものに思ひ聞え

させ給ければそのけしきにまたがひてよろづの殿上人上達部なびきつかうなつりてもては

やし奉り給程にやう／＼十二三ばかりにおはしませばおはんげんぶくのことおぼしいそが

せ給おはんむすめもたまへるかんたちへはいみじうけしきばみ聞え給に宮の大夫と聞ゆる

○按ズルニ、王勝間ニ云フ所ノ諸王ハ、人アルニアラズシテ、年爵ノ爲ニ假ニ其名ヲ設ケシモノナラン。

〔古事談通七〕天德四年五月十日夜、強盜入武藏權守源滿仲之宅、爰滿仲射留類人倉橋弘重、弘重指申中務卿親王第二男、及宮内丞中臣良村、土佐權守蕃基之男等所爲、檢非違使右衛門志錦文明參内奏聞、中務卿親王家人申云、件孫王今曉入親王家、其同類紀近輔、中臣良村等在此家、仍以事由告親王、親王令申云、男親繁、日來重煩病病在此家内、不堪起居、待平安時可進者、依宣旨使官人等搜求同類輩親王家内、遂不捕獲、於成子内親王家内皇女捕獲紀近輔、近輔申云、親繁王爲首入滿仲家事實也、賊物悉可在彼親繁王許ト云、勅云、依不進男、忽科親王罪、猶伺親繁之出外可召捕者、〔薩戒記〕享保六年四月二日己酉、飛鳥井中納言示送云、今度御百首、伏見宮并玉河宮等就端作有被尋問事、伏見宮者親王也、然而已入道給、其儀可同法親王歟、然者可被書沙門某歟、於玉川殿者諸王也、可爲某王歟者、予答云、伏見宮者、只法名二字許可、令書給、如入道關白之類也、玉川宮者可爲某王也云云。

○按ズルニ、伏見宮ハ崇光天皇ノ皇子榮仁親王ニシテ、玉河宮ハ長慶太上天皇ノ御子ナリ、

皇親

〔日本書紀十〕男大迹天皇繼體。譽田天皇五世孫、彥主人王子也、母曰振媛、振媛活目天皇仁七世

孫也、天皇父聞振媛顏容妹妙甚有微色、自近江國高嶋郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、納以爲妃、遂產天皇。

〔神皇正統記敏達〕二年癸巳の年、天皇の御弟、豐日皇子明の妃、御子を誕生す、脱戶皇子にてなす。

〔日本書紀二十四〕二年十一月丙子朔、山背大兄用明皇孫、仍取馬骨、投置内寝、遂率其妃并子弟

男山口王、長津王、船王之男、葦田王、及孫他田王、津守王、豐浦王、宮子王、去天平寶字八年、賜姓三長真人、配丹後國、從四位下三嶋王之女、河邊王、葛王、配伊豆國、

〔續日本紀^{三十二}〕寶龜三年二月癸酉、先是從五位上、掃守王男、小月王、賜姓勝間田、流信濃國、至是復屬籙、

〔續日本紀^{三十二}〕寶龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐奸小家內親王、除名、

〔續日本紀^{三十}〕天平五年閏三月戊子、諸王飢乏者二百十三人、召入於殿前、各賜米鹽、詔責其懶惰、令治生業、

〔類聚國史^{七十八}〕弘仁十三年七月丙申、以新錢一百貫、班給諸王貧者、

〔國太曆〕康永三年正月六日、及晚、叙位聞書到來、續左、^{○中}

從五位下爲實王、^{天曆(村上)御後○中略}

康永三年正月五日

〔國太曆〕貞和二年正月二日、傳聞今日叙位執筆、中院大納言、其外日野大納言、右衛門督四條宰相、左大辨、右大辨等參陣云々、清書事、右衛門督奉行云々、執筆左大辨也、七日、午廻聞書到來、^{○中}

從五位下宗友王、^{天曆(村上)御後○中略}

貞和二年正月六日

〔玉勝間^五〕中ひろ々では諸王おほかりし事

國太曆康永三年の除目に、從五位下爲實王、^{天曆御後}貞和二年の除目に、從五位下宗友王、^{天曆御後}同三年の除目に、從五位下資方王、^{寬和御後}延文四年の除目に、從五位下資能王、^{寬和御後}などあり、このほ

々では諸王もなほおほかりしと見えたり、

高子 大樹家慶公御臺所

寬政七年六月十四日生、號樂宮、文化元年九月三月下向子關東、同六年十二月一日婚禮

十五

女子 贈從一位德川齊昭卿室

文化元年九月廿五日生、號登美宮、

〔近代帝王系圖〕開院宮

直仁親王

女子 四本願寺光啓室

享保五年七月十三日生、號始宮、元文五年九月廿二日嫁、

倫子 大樹家治公御臺所

元文三年正月廿日生、號五十宮、寬延元年閏十月廿一日來春東行治定、同二年三月五日

發與、實曆四年十二月十日婚禮

除王名

伊豆國三嶋

〔續日本紀^{二十三}〕天平寶字五年三月己酉、茅原王坐以刃殺人、賜姓龍田真人、流多嶺嶋、男女六人復

令相隨、茅原王者、三品忍壁親王之孫、從四位下山前王之男、天性凶惡、喜遊酒肆、時與御使連麻呂博飲、忽發怒、刺殺屠其股肉、便置胸上而脍之、及他罪狀明白、有司奏請其罪、帝以宗室之故、不忍致法、仍

除王名、配流。

〔續日本紀^{三十一}〕寶龜二年七月乙未、故從四位上守部王之男、笠王、何鹿王、爲奈王、正三位三原王之

與_{十二歲}

職仁親王

女子 德川岩千代室

延享二年九月廿四日生、號長宮、寶曆二年十月廿一日嫁

董子 近衛右大臣經顯公室

寶曆九年三月十一日生、號孝宮、安永四年正月廿五日移于仙洞、同五年十月廿六日入興

治定、號恭宮、十一月廿四日從仙洞嫁_{十九歲}

音仁親王

女子 爲職仁親王、佛光寺(興祐)室、

延享三年五月二日生、號兼宮、明和四年十二月一日嫁_{廿二歲}

職仁親王

女子

安永九年七月十三日生、號富貴宮、寬政三年二月藝州入興治定、同四年九月二日赴于關

東_{尾州}、同五年二月十五日、從尾州嫁于藝州_{十四歲}

女子 大膳大夫齊房室

天明二年七月十三日生、號同宮、同五年五月長州內約、寬政九年十月五日赴于關東、十一月三日嫁_{十六歲}

「理子紀伊中納言吉家嫡室」

元祿四年生號真宮 寶永三年三月十一日赴東武 十一月一日嫁十六歲

「百一錄」元祿九年十月廿四日、伏見殿姫宮、可爲勢州一身田門徒簾中云々、同若君爲仙院御養子爲常修院宮御弟子、可爲新大納言局母代云云、

「近代帝王系圖」京極宮

智仁親王

女子 西本願寺真如室

慶安元年八月十七日薨、號珠光院

文仁親王 號京極、靈元院皇子

女子 嘉修寺圓嚴室

寶永七年十一月四日生、號美目宮 享保十二年二月廿三日高田一身田聘納 同十四年十

二月十六日婚禮

「近代帝王系圖」有栖川宮

幸仁親王

女子 東本願寺光性室

元祿四年九月廿四日生、號淑宮、同十五年閏八月一日光性大僧正室治定 十二月四日入

岡大魚動神等五人、並山村王之孫也、其祖父山村王、以去養老五年、編附此部、自爾以來子孫蕃息、或七八世、分爲數烟、依格六世以下、除承嫡者之外、可科課役、望請承嫡之戶、遷附京戶、自除與姓科課於下、所司檢皇親籍、無山村王之名、仍從百姓之例、但不與真人之姓、

諸王爲人臣嗣

〔執次詰所本御系譜〕閑院宮

直仁親王

藤原輔平憲司關白左大臣

寛保三年十月四日爲櫻町院御猶子、同廿七日應司家相續、一條殿下兼香公爲猶子、延享二年九月十九日移于應司家、

女王壽條

〔近代帝王系圖〕伏見宮

貞清親王

女子紀伊大納言光貞輔室、號安宮、

明曆三年九月廿七日入興

顯子大樹家綱公御座所

明曆三年七月十日入興

〔百一錄〕延寶四年八月五日、大樹公之御臺所伏見殿御姊御薨逝、御年序三十、依內籙也、音樂七日遇密云、

〔近代帝王系圖〕伏見宮

貞致親王

〔續日本紀二十四〕天平寶字七年十月丙戌、參議禮部卿從三位藤原朝臣弟貞、弟貞者平城朝左大臣正二位長屋王子也。○中略勝寶八歲、安宿黃文謀反、山背王陰上其變、高野天皇嘉之、賜姓藤原、名曰弟貞。

〔類聚國史七十九〕延曆十一年七月乙卯、勅、頃年京職、輒賜諸王姓、即著籍帳、以成常、自今以後、六世以下之王、情願賜姓、注所願姓、先以申請、然後行之。

〔日本後紀十二〕延曆廿三年正月己亥、制、延曆十一年七月三日格、六世已下王、情願改姓者、注所願之姓、先申官待報、然後改之、不得輒行者、頃年之間、未有申請、既達格旨、自今以後、除承嫡之外、猶不改者、宜抑止計帳、不得疎口。

〔續日本後紀三〕承和元年二月甲午、三品明日香親王薨焉。○中略先太上天皇。○嵯峨在祚時、親王上表、自請除親王號、同之諸臣、不見許、更祈所生男女、賜朝臣姓、感其懇誠、乃聽之、孫王賜姓、從此競效之。

〔皇胤紹運錄〕

桓武天皇

葛原親王

平高棟 天長二、間七、賜平姓

〔續日本後紀一〕天長十年五月甲寅、六世長岡岡於王等男女廿七人、賜姓清原真人。

〔續日本後紀十〕承和八年七月己卯、右京人、六世御津井王、是雄王、異雄王、國雄王、本吉王、淨道王、稻雄王、多積王、安富王、伊賀雄王、三輪女王、坂子女王、七世新男王、春男王、三守王、並雄王等十六人、賜姓

有澤真人。

〔續日本後紀十七〕承和十四年七月甲申、右京人、六世賀我王、七世真桑王等十三人、賜御高真人姓。

〔續日本紀三十七〕延曆二年九月丙子、近江國言、除王姓、從百姓戶五烟、口一百一人、戶主槻村井上大

廷是故召王等令問其狀者臣葛城等本懷此情無由上達幸遇恩勅味死以聞昔者輕瑯原大宮御宇天皇元孝曾孫建內宿禰盡事君之忠致入臣之節創爲八氏之祖永遺萬代之基自此以來賜姓命氏

或真人或朝臣始姓王家流終臣氏飛鳥淨御原大宮御大八洲天皇武天德覆四海威震八荒欽明文

思經天緯地太上天皇明元內脩四德外撫萬民化及翼麟澤被草木後太上天皇正元無改先軌守而不違率土清淨民以寧一于時也葛城等親母贈從一位縣犬養橘宿禰上歷淨御原朝廷下建藤原大

宮事君致命移孝爲忠夙夜忘勞累代竭力和銅元年十一月二十一日供奉舉國大嘗二十五日御宴

天皇明元譽忠誠之至賜浮杯之橘勅曰橘者果子之長人之所好柯凌霜雪而繁茂葉經寒暑而不凋

與珠玉共競光交金銀以逾美是以汝姓者賜橘宿禰也而今无繼嗣者恐失明詔伏惟皇帝陛下武聖

光宅天下充塞八埏化被海路之所通德蓋陸道之所極方船之貢府无空時河圖之靈史不絕記四民

安業萬姓謳衢臣葛城幸蒙遺時之恩濫接九卿之末進以可否志在盡忠身隆絳闕妻子康家夫王賜

姓定氏由來遠矣是以臣葛城等願賜橘宿禰之姓載先帝之厚命流橘氏之殊名萬歲無窮千葉相傳

壬辰詔曰省從三位葛城王等表具知意趣王等情深謙讓志在顯親辭皇族之高名請外家之橘姓

尋思所執誠得時宜一依表令賜橘宿禰千秋萬歲相繼無窮

〔新撰姓氏錄左京東門〕橘朝臣

甘南備真人同祖敏達天皇皇子難波皇子男贈從二位栗隈王男治部卿從四位下美努王美努王娶

從四位下縣犬養宿禰東人女贈從一位縣犬養橘宿禰三千代大夫人生左大臣諸兄中和銅元年

十一月己卯大嘗會二十五日癸未曲宴賜橘宿禰姓於大夫人天平八年十二月丙子詔參議從三位

行左大辨葛城王賜橘宿禰諸兄

〔續日本紀十八〕天平勝寶四年八月乙丑從三位智努王等賜文室真人姓

○按ズルニ智努王ハ天武天皇ノ皇子長親王ノ御子ニシテ即チ文屋淨三是ナリ

二品征夷大將軍、左大將、中納言、中將、元弘三、五、廿二出家、關東滅亡故也。

〔皇胤紹運錄〕

順德院

忠成王

查仁王

忠房親王文保三、元應元、二、十八、
无品親王宣下、彈正尹、
守子内親王

〔光臺一覽〕親王之事

皇子は童形といへ共親王宣下、生ながらを宮様と稱し候、御元服の時は、當代の後腹は三品、外之腹は四品也、又伏見、有栖川、京極、閑院之御子は、皇孫と申者にて、直の王子とは違有、故に天子或は院方の御猶子になり給ひ、親王と申給ふ也、

〔光臺一覽〕總別親王之御子は、現在皇孫と申者なれ共、二代目は天子か院の御猶子に御成不被成候得者、親王宣下無之候、○中又親王家御子數多有之時は、御門跡方の御附弟と成給へ共、御得度已後法親王宣下有事なれば、いづれも御猶子と云ものに不被爲成して不叶事也、況や俗親王として、天子の御連枝と格の立御家を知り給はんをや、臣下の列に落給へば、今の清華の格が上上也、源經基朝臣、平高望等の格見つべし、何れにても皇孫臣下に落給へば、源氏を給ふ通例也、今の清華之内、久我廣幡其縁也、古への事也、

○按ズルニ、靈元天皇以後ノ法親王ハ、何レモ御養子ニシテ、御猶子ハ甚ダ稀ナリ、又皇孫ニ姓ヲ賜フ事、必ズシモ源氏ニ限ラザルナリ、

〔續日本紀〕十天平八年十一月丙戌、從三位葛城王、從四位上佐爲王等上表曰、臣葛城等言、去天平五年、故知太政官事一品舍人親王、大將軍一品新田部親王、宣勅曰、聞道諸王等願賜臣連姓、供奉朝

小一條院諱教明、長和五、正、廿九立坊、寛仁元、八、九辭之、即授院號、

敦貞親王三品式部卿、中務卿、爲祖帝(三條)子、

敦元親王爲祖帝(三條)子、

俱子內親王配權中納言信家、三條院爲子、

嘉子內親王齊宮、寛德二、三、十卜定、

〔小右記〕寛仁三年三月五日、早朝宰相來云、故三條院女親王皇后宮腹一被叙三品、當時院〇小男

男者左大臣女腹、女者前太政大臣女腹、高松、爲親王之宣旨下也、爲故三條院王子、今被下爲親王之宣旨云々、故花山院御

子二人爲故冷泉院王子、爲親王、依彼例所被行云々、已不相合之例也、所以者〇冷泉院御〇之時爲、

彼王子、而三條院崩已及三箇年、令更爲彼王子如何、一時議歟、就中高松腹生年産給、以崩後産給女

王、入彼三條院王子爲親王、天下如有言乎、

〔勸仲記〕弘安十年十月四日、諸卿著座、中頭辨於弑宣下云、中納言源朝臣康爲親王、令叙二品、

上卿召大辨被仰之、略中次頭辨又宣下云、二品惟康親王宣令聽帶劔、中抑孫王親王宣下先例頗

稀、近則菩提院宮澄覺法親王云々、

○按ズルニ、惟康親王ハ、後嵯峨天皇ノ皇子、宗尊親王ノ御子ナリ、當時征夷大將軍タルニヨリ、

特旨ヲ以テ親王宣下アリシナリ、

〔皇胤紹運錄〕

後深草院

久明親王一品、式部卿、征夷大將軍

守邦親王

子一脚又以西一許丈立掃部女孺床子二脚前又立班祿臺一脚用長床子掃部座西南四許尺立聞司床子聞司西北去八許尺立來著床子六脚祿以西五許尺更南折一許丈立別當以下令史已上床子自此以北樹板障子辨備已畢御紫宸殿正親司引女王等自月華門參入女王先入就幄下座訖別當已下入就座即唱名賜祿

〔儀式〕正月八日賜女王祿儀十一月新嘗會亦同

其日內侍於縫殿院點檢女王○中佑一人執名簿唱曰某親王之後于時一祖之胤皆下座稱唯進就

賜祿座座定執簿一々唱名即稱唯受祿退出其賜內外命婦祿或七日夕或此日或殿上或庭唯臨時勅裁之

〔延喜式三十九〕凡正月八日給祿女王所司設座於殿庭立幄二字於安福殿前積祿於版位南亦供奉

殿上裝束天皇御紫宸殿內侍率女官就座本司官人引女王自月華門參入女王先就幄下座以世爲次不據

長次官人共趨就前庭座佑一人執簿唱曰某親王之後即一祖之胤皆下座共稱唯就庭中座座定執

簿一々喚名女王即稱唯進受祿退出餘亦如之其祿法人別絹二疋綿六屯新嘗會准此十一月十一

凡賜祿女王定二百六十二人其隨闕補代代及改姓不爲闕事並同上條

凡給女王二節祿見參簿當日早旦奏之

〔貴嶺問答〕嚴札之旨謹承候了二世以下四世以上謂之女王五世者自入命婦宮人之例近年彼顯子之外無女王仍祿事停止歟但可尋先例事也

〔中右記〕嘉承二年十一月十八日今夕有王祿左宰相中將忠教右中辨顯隆勳之是雖無節會先例有

王祿云々

孫王爲親王

〔皇胤紹運錄〕

三條院

右造式所起請假太政官去延曆二十年十二月十三日符云職事諸王上日不滿應預王祿但不直本司經二季已上量情可實宜解見任者案職制律云以官當徒者六位以下以一官當徒一年仍解見任者今檢此律六位以下諸王不上卅五日以上自須官當解任而官符二季以上乃可解任此乖法冀加以解官之罪於事不輕而無奉勅字若爲處分者大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣宜奉勅宜改先符經百二十日不直者解却見任永爲恒例

弘仁十年十二月廿一日

三代實錄

清和十七

貞觀十二年二月二十日壬寅公卿奏請減諸王季祿兼立給祿定額曰○中伏見故從

四位上豐前王等意見表曰利國之政節用爲先今府帑稍空貢賦少入當停諸王之祿存救弊之計者臣等商量上表之旨頗有可取但專停之則似疎皇親全給之則可闕國用取捨之方宜斟酌中又王氏蕃昌萬倍曩日計其祿賜所費難支伏望當時預祿者四百二十九人爲定員後生年足者隨闕補之但自願賜姓屬籍者不以爲闕重以去年炎旱農民失望聖上撤服御常膳群下減食封位祿而至于王祿依舊不悛求諸通論政涉踳駁事須准之位祿同從減折然則適時之要理无二途濟世之權事從一揆謹錄事狀伏聽天裁奏可廿五日丁未勅減諸王季祿四分之一

延喜式

三十九正親

凡給季祿男女王同世之中有同名者遂令申換載帳進之但新名下注本名

女王賜祿

內裏式

上八日

月○正賜女王祿式月同

其日近衛次將令所司鋪設於殿庭安福殿前積祿於版位南紫宸殿南廂西戶外建三尺畫障子辨備御饌膳子雜餅等殿南并皇后御座饌及女御尙侍已下散事已上饌座並同其御座以西二許丈設皇后御座東東之座同御座御座以東設女御以上座用臺座並同立臺盤置銀筋匙但饌各御座以東二許丈南北相對立孫王尙侍典侍等床子以下同東廂南北相對立散事床子以上同鋪並同立空床等東第一間安酒器別記祿東頭少北進北面立內侍床子又西去八許尺立女史床子床子前立空床

〔續日本紀^{十六}〕天平十七年五月壬午，制无位皇親給春秋服者，自今已後，上日不滿一百四十，不在給例。〔計上日七十給春服，秋冬亦如之。〕但給乳母，王不在此限。又據格，承嫡王者，直得王名，不在給服之限。

〔三代實錄^十〕貞觀七年二月二日，甲寅，從四位上行伊豫守豐前王卒。〔中〕先是，諸王自二世至四世，賜夏冬衣服，不限人數，隨年足符出多少賜之，或至五六百人，是時裁簿進官者四百餘人，豐前上疏曰：諸王給服人數不定，徒費帑藏，何無紀極？望請以當時所在爲定數，隨闕補之，不聽輒過從之。

〔延喜式^{十八}〕凡皇親時服者，與季祿共給之。

〔延喜式^{三十九}〕凡諸王年滿十二，每年十二月，京職移宮內省，省以京職移即付司，令勘會名簿，訖更送省，明年正月待官符到，始預賜時服之例。

〔延喜式^{三十九}〕凡諸王給春夏時服者，二世王，絹六匹，絲十二絢，調布十八端，錄三十口，四世王以上並如令，正月廿日錄送省，秋冬准此。〔但以補代錄，以銀代絹五口。〕皆向大藏受之，不得遣人代請。

凡諸王有出家，停給時服，其女王節祿亦停。

凡賜時服王，定四百廿九人，待其死，闕，依次補之，但改姓爲臣之闕，不補其代，隨即減定額數。

〔續日本紀^{二十一}〕天平寶字三年六月丙辰，參議從三位上真人鹽燒奏，臣見三世王已下給春秋祿者，是於王親而今計上日，不異臣姓，伏乞依令優給，勿求上日。

〔令集解^{二十三}〕延曆六年格云，六位諸王，任六位官者，依官祿，任七位官者，依王祿，自今以後，永爲恒例。

〔令集解^{二十三}〕延曆二十年十二月十三日，官符云，應職事諸王，上日不滿，預王祿，事右夢石大臣宣稱，準例諸王給祿，不勘上日，而今任官之後，計日入祿，上日不足，一無預祿，是緣得官還失其祿，事乖弘恕，理須改易，自今以後，職事諸王，上日不滿，宜給王祿，但不直本司經二季以上，量情可責，宜解見任。

〔享祿本類聚三代格^六〕太政官符

應職事諸王，不直本司解，却見任事。

〔續日本紀元七〕靈龜二年四月壬申、以從四位下大野王爲彈正尹、

〔續日本紀元八〕養老二年三月乙巳、以正三位長屋王略中爲大納言、

〔續日本紀元九〕神龜元年二月甲午、以右大臣正二位長屋王爲左大臣、

〔三代實錄光孝〕仁和二年五月十八日丙申、授無位在世王從四位下、子時在世爲伊勢齋內親王家別當也、

〔職原抄上〕神祇官 伯一人 昔者諸氏混任、或又大中臣氏任之、中古以來花山院御子、彈正尹清仁

親王、後胤相續、他人不任之、彼流四五品之時、給源姓、雖任中少將等、任伯之日、復于王氏是近例也、

〔帝王編年記十〕皇子清仁親王 此親王子、康資王神祇伯、昔者諸氏混任、或又中臣氏任、中古以來、

彼親王流相續、他人不任之、

〔三代實錄清和〕天安二年十一月十一日戊辰、無位坂子女王重子女王、並授從四位下、是塞御帳之女

王也、凡天皇即位之日、擇王氏女有容儀者二人、充塞御帳之職、因而賜爵、他皆效此、

〔二代要記孝謙〕小宅女王天平勝寶元年九月六日、以從三位三原王舍人親王御子女、小宅女王爲齋王、

○按ズルニ、女王ノ齋宮ト爲リ給ヒシ例甚ダ多シ、神祇部伊勢齋宮篇參看スベシ、

〔令義解四〕凡食封者、略中正一位三百戶、從一位二百六十戶、正二位二百戶、從二位一百七十戶、正三

位一百三十戶、從三位一百戶、

〔續日本紀三〕慶雲三年二月庚寅、詔曰、略中案令諸王諸臣位封、自正一位三百戶、差降止、從三位一

百戶、冠位已高、食封何薄、宜正一位六百戶、差降止、從四位八十戶、

〔令義解四〕凡皇親年十三以上、皆給時服料、春施二匹、絲二絢、布四端、鐵十口、秋施二匹、綿二屯、布六端、

鐵四廷、其給乳母王者、謂二世王、其親王者不見令、雖可有別式、若皇親任官、及

端、

食封

時服

等未蒙恩望、望請同被、獨除許之、

○按ズルニ、本文ニ據ルニ、皇親ハ十一世ニ及ビ賜姓ノ後モ猶課循ヲ獨免セラルヽナリ、

〔續日本紀文一武〕三年六月丙午、淨廣參日向王、卒、遣使弔賻、丁未、命直冠已下一百五十九人、就日向王第會喪、

叙位

〔令義解公七〕凡應叙親王四品、諸王五位、

〔日本後紀祖五武〕延曆十五年十二月丙寅、詔曰、皇親之蔭、事具令條、而皇室之胤、枝族已衆、欲加榮班、難

可周及、是以進仕無階、白首不調、眷言於此、實合矜愍、宜其四世五世王、及五世王嫡子年滿廿一者、叙正六位上、但庶子者降一階叙、自今而後、永以爲例、

〔日本書紀三十三〕五年正月癸酉朔、賜親王、諸臣、內親王、女王、內命婦等位、

〔續日本紀聖九武〕神龜元年二月丙申、授從四位下海上王、智奴王、○中並從三位、正四位下山形王、正四

位上、

〔續日本紀三十八〕延曆四年五月癸丑、先是皇后宮亦雀見、是日詔曰、○中宜天下有位、○中賜爵一級、

略○中四世五世、及承嫡六世已下、王年二十以上、並叙六位、

〔日本書紀二十武〕九年三月己丑、吉備大宰石川王病之薨於吉備、天皇聞之大哀、則降大恩云々、贈諸

王二位、

〔官職秘抄上〕神祇官 伯 以孫王、若三四世王氏任之、太政官○中 左右內大臣○中 一世源氏、

二世孫王○中 任之、

〔官職秘抄下〕諸道官○中 大學頭○中 諸王或任之、諸王任例往代事也、已絕畢、○中 諸王任例、實世、

高棟、未給、
姓以前也、

〔日本書紀二十武〕四年三月庚申、諸王四位栗隈王爲兵政官長、

任官

以允貴名之禮從之。

待遇

〔日本書紀三十一〕四年七月甲申詔曰凡朝堂座上見親王者如常大臣與王起立臺前二王以上下座而跪。

〔三代實錄清和十〕貞觀十二年十二月廿五日制無位二世王遇三位下馬七位已下遇無位二世王不下馬。

〔延喜式四十〕凡無位孫王逢三位已上下馬六位已下逢無位孫王不下。

〔令義解一〕凡戶主皆以家長爲之戶內有課口者爲課戶無課口者爲不課戶不課戶皇親謂四世以上本隆五位雖非皇親宜不課六世王者雖准本隆比五位子亦是不課七世王者雖云絕隆比五位孫故輪調免傷可得出仕八世以下者實隆已絕免科賦役一准白丁也。

〔政事要略五十九〕勅○中夫王氏者王號乃止於五世資蔭不過於六世典制斯存沿來浸久今諸王等

以天河末流還少液流若木下枝早虧榮拂仍抗章表殊祈優恤凡所稱引抑亦可採朕情在推惠事尙德竟是以推按古今聽其所請宜七世以下計數至于五世課役蠲除其既賜姓者不論先後一依王蔭計世容之亦同此例豈非糾合枝幹式雍帝載之義乎主者明之稱朕意焉。

天長九年十二月十五日○又見享祿本類聚三代實錄。

〔三代實錄清和七〕貞觀五年十月廿七日丙戌攝津國河邊郡人九世散位正六位上川原公清宗正七位上川原公清貞從八位下川原公清方十一世大膳大進正六位上爲奈真人菅雄等五人之戶並蠲課役清永等宣化天皇皇子火焰之後計其世數未可徵課役也。

〔三代實錄三十八〕元慶四年十月廿七日丁未免攝津國河邊郡人九世從七位下川原公福貞無位川

原公福繼有馬郡人無位川原公千被河邊郡人十世從八位下川原公夏吉大初位下川原公有利等五戶課脩福貞等自言宣化天皇第二皇子火焰親王是川原公爲奈真人等之祖謹檢天長九年十二月十五日詔書儀○中爲奈真人菅雄川原公清永等賴詔旨貞觀五年閏六月十九日被免課脩福貞

接物之道爲人所避尋常直於侍從局品藻人物以爲己任談笑消日庶幾不拘諸王五世以下帶五位者法不聽著紫豐前爲五世五位著紫爲有司所糾然後著緋

〔類聚符宣抄〕^四右大臣宣奉勅自今以後孫王諸王同色者用下階孫王爲上唯異色者如常例

弘仁三年正月五日

〔續日本紀^三文武〕大寶三年十二月甲子始皇親五世王五位已上子年滿二十一已上者錄其歷名申送式部省

〔類聚國史^{百七}職官〕元慶五年五月十日丁巳制令正親司進四世已上諸王歷名帳於太政官每有闕補隨

令改正一如式兵二省補任帳下季祿符之日即備於勘會

〔享祿本類聚三代格^{十七}〕太政官符

應押署諸王計帳事

右得宮內省解僞正親司解僞檢案內去承和元年造王親籍于今四十餘年今省仰諸王年足省符至者勘會籍帳早速申送者須隨符到勘會合不而彼年以來諸王籍帳無在司家望請押署計帳一通留司然則勘據有便假濫無聞者省依解狀謹請官裁者大納言正三位兼行陸奥出羽按察使源朝臣多宣奉勅依請口下知左右京職依件令行若有依人愁與改判者同待押署然後判之

貞觀十七年七月八日

〔延喜式^{三十九}正親〕凡諸王計帳者令造二通司加押署東京職判畢一通留司待年足符即勘會申省

〔延喜式^{三十九}正親〕凡六位已下諸王死去者喪家申司司即申省

〔三代實錄^{三十九}陽成〕元慶四年三月十六日己巳勅諸王喚辭准諸臣之狀宣告文武百官先是式部省奏

言依令三位四位五位六位於太政官寮已上司及中國已下各有喚辭或稱大夫或稱姓今觀流例只爲諸臣施此制也於諸王則不論四位五位總稱某王商量事理尊卑失序望請稱大夫稱姓一准諸臣

絕皇親之嫌，遂入諸臣之例，顯念親王之恩，不勝絕籍之痛，自今以後五世之王，在皇親之限，其承嫡者，相承爲王，自餘如令。

〔續日本紀元六〕靈龜元年九月己卯，詔皇親二世准五位，三世以下准六位。

〔續日本紀聖十〕天平元年八月癸亥，天皇御大極殿，詔曰略○中五世王嫡子已上，娶孫王生男女者，入皇

親之限，自餘依慶雲三年格。

〔日本紀略祖武〕延曆十二年九月丙戌，詔曰云云，見任大臣良家子孫，許娶三世已下，但藤原氏者，累代相承，攝政不絕，以此論之，不可同等，殊可聽娶二世已下者云云。

〔草祿本類聚三代格十七〕勅，依令五世之王，雖得王名，不在皇親之限，爰逮慶雲，昇居親限，如聞頑聞之輩，苟規微祿，携養庸流，名爲己胤，遂附屬籍，以汚宗室，非徒速禍於一己，固亦延黜於七廟，朕所以丁寧過於再三，曾不改悟，彌長奸黨，靜言其弊，深合懲清，宜停後格，一依令條，俾夫玉石殊貫，蘭艾不難，主者施行。

延曆十七年閏五月廿三日

〔續日本紀二武〕大寶二年五月辛未，勅若五世王，自有辭訟，須受理者，特給座席，而與所分。

〔續日本紀三武〕慶雲三年二月己亥，五世王朝服，依格始著淺紫。

〔續日本紀元八〕養老四年五月辛酉，制皇親服制者，以王孫准五位，疎親准六位焉。

〔續日本紀元八〕神護景雲元年四月辛巳，始授諸王四世者正六位上，五世者從六位下，其朝服用緋色。

〔續日本紀元九〕神護景雲三年正月辛未，御大極殿受朝，文武百官及陸奥蝦夷各依儀拜賀，是日勅六等已上，身有七位，而帶職事者，始著常階之色，列於六位之上，六位諸王著緋者次之。

〔三代實錄清和〕貞觀七年二月二日甲寅，從四位上行伊豫守豐前王辛略○中豐前爲性簡傲，言語夸浪。

有之候へば、官位の品に依て公卿王之字之品極リ申也、白川殿之王ハ格別事也、

〔歷代皇紀〕宇多天皇 元慶八年四月十三日爲源氏八任侍從、號王侍從、

○按ズルニ、宇多天皇當時孫王タリシヲ以テ王侍從ト云ヒシナリ、

〔日本書紀〕天武二十九年二月癸未、天皇初娶鏡王女額田姬王、生十市皇女、

〔日本書紀〕持統五年正月癸酉朔、賜中內親王、女王、內命婦等位、

〔續日本紀〕文武三年正月甲申、淨廣參坂合部女王卒、

〔榮花物語〕二樣々の悦、まことや、このころの齋宮にては、式部卿の宮平爲の女御子碗の御おとうどのなかのみや子華ぞおはします、

〔榮花物語〕玉村あるがなかのとおとみや子輝は、三條の入道一品宮平爲の御子にまてまつらせ給ひし、十ばかりにやおはしますらん、こたみの齋宮にゐさせ給ひぬ、

○按ズルニ、コトニ云ヘル宮ハ即チ女王ナリ、

〔榮花物語〕月寒朱雀院は、御子たちおはしますさざりけり、たゞ王女子御保明女子照子とさこえける御はらに、えもいはずつくしき女みこ子昌一所ぞおはしますしける、

〔源氏物語〕若菜内にてても里にても、ひるはつくくどながめくらして、くるればわう命婦子をせめありきたまふ、

○按ズルニ、わう命婦トハ、皇族ニシテ命婦タルヲ云フ、

〔令義解〕繼嗣凡皇兄弟皇子皆爲親王、中以外並爲諸王、自親王五世、雖得王名不在皇親之限、

〔六典〕東部親王之子承嫡者爲嗣王、皇太子諸子並爲郡王、親王之子承恩澤者亦封郡王、諸子封郡

公、其嗣王郡王及特封王子孫承襲者、降授國公、

〔續日本紀〕文武慶雲三年二月庚寅、准令五世之王、雖有王名不在皇親之限、今五世之王、雖有王名、已

宰相を以て三度迄被仰遣之、大納言勅答兩度迄ハ、親王被爲思召切之由奏上、至三度兎角勅諭之趣可然ト申候ヘ共、親王御合點無之に付、九月十二日の夜、御側衆轉法輪右大將勸修寺中納言ヘ被仰付、禁裏内ヘ被内通、與力同心召速、兩勸使小倉大納言宅ヘ相越、早速寺ヘ不遣之段不届被思召候、親王可相渡、其方父子は、閉門被仰付候由、勸諭之旨申渡直に飛鳥井隱居屋敷ヘ奉移、武士警固之由、右之儀に付、中國宰相、竹淵刑部大輔、敏大納言、同中將、鷲津左京大夫、阿野宰相、右何も閉門也云云、五の宮御年七松木大納言之息女、新大納言之腹、此王子御位可被爲立旨、京都より注進之、
 【紳書】此立太子東の御時、勸使關東ヘ參向有しに、其人に親しき關東の御家人詣て物語せしに、今度立太子の御事にて御下向の由、路次の御疲勞察入候、さて此度の御使こそうたてしき御事なり、抑天下の大體と申事を、何れも御存知なき故に、關東を始天下にて、朝廷ヘ歸し參らする様をこそ知し召れぬ、某承り傳ふるに、一の宮には御障子に取付給ひて御歎きありしを、其御手を引放て引立參らせて、御出家を成させ申、今の太子を立させ給ふ由、驚き恐入てこそ候ヘ、天子の第一の宮にてわたらせ給ふを、かくあらけなく引立參らせ、御心にも染まぬ御出家成させ奉りて苦しからぬ御事に侍らば、今一階押のぼせて、かゝる振舞致しても苦しかるまじき歎と存すれば、さて淺ましき世には成下り候と涙にむせびて申されし程に、勸使も兎角の返答に及ばざりしとぞ、

○

諸王初見

〔日本書紀天武〕四年三月庚申、諸王四位栗隈王、爲兵政官長、八年十二月戊申、由嘉禾親王、諸王諸臣及百官人等、給祿各有差、十二年十二月丙寅、遣諸王五位伊勢王中等、巡行天下、限分諸國之境、

〔光臺一覽〕王とは、皇子にても皇孫にても、親王宜下なく、姓も不給は皆王と稱ヘ申候、叙位任官

〔和長卿記〕明應三年八月一日丁巳、秘傳云、一休和尚者、後小松院落胤皇子也、世無知之人、

〔孝亮宿禰記〕元和七年十一月十五日壬子、昨今古筆求出、○中一休和尚等筆也、皇太子、後小松院第一

純祿主、正月元日
日出降、臨宮也、

〔基量卿記〕天和二年十月廿八日、早天向勸修寺、今日門主渡也、當今、○重一宮、○寬中納言典侍、小倉

言實起卿女
○寬清所生依御生質不宜、從去年大覺寺へ御弟子ニ可被遣之由仰之處、彼宮出家之義、無御素意

之由達而固辭之間、小倉大納言并中納言典侍等、同前ニ辭申時、實、寂慮不快之由、去年小倉父子三

人流罪并親族之輩閉門了、然處大覺寺殿より、彼宮之義申請事迷惑之由、固辭被申之間、今度勸門

死去、件寺無住之由、彼宮ヲ被遣了、慈尊院僧正勸門院家也、依之諸事令申沙汰、予彼僧正有内縁之

間、可參訪由、兼日蒙仰之間參向了、

宮親王宣下、去廿五日有之云々、

著座公卿

前源大納言通義卿 日野中納言資茂卿 風早前宰相實種卿

刻限罷催之處、宮覓角無御同心之間、悲歎以外也、種々清閑寺大納言、○照萬里小路、予等雖令申、無

御覺悟之間、戒師慈尊院僧正被申旨、如此之御樣外、中々於本堂難沙汰之間、於御居間可遂行也、先

年仁和寺殿最樹院殿後水尾院御
兄○真仁得度之時、如此之流例有之、如何可有哉之旨也、各申言於例者可

然、若今日御落髮無之時者、彌以父帝逆鱗可爲以外也、如形被遂行哉之旨申之間、衆僧等各參會、御

手足ヲ取、無理ニ令落髮了、誠先代未聞之事、不可說之事共也、及暮各退了、勅使梅溪中將五、權被遣、

本院使堀川宰相、○則新院使橘箇中將、○隆等各參、無御對面也、

〔近世見聞錄〕天和元年辛酉、此一之宮、○鑑元
子寬清皇仁和寺へ御弟子に可被遣之由、主上御内意有之處、

御出家之儀、御心に不被爲叶、大納言、○小倉
實起も無是非被存候由、然處仁和寺へ可被遣旨、勅使阿野

實伏見式部卿貞致親王男 元祿九年十二月廿五日爲御養子、養母新大納言局、

寺怨法親王

實京極兵部卿文仁親王男 享保三年六月廿四日爲御養子、准母敬法門院、○東山母后宗子

桃園院

深仁法親王

實閑院太宰帥典仁親王二男 寶曆十年八月廿八日爲御養子、准母恭禮門院、○桃園后宮子

光格天皇

承眞法親王

實有栖川中務卿繼仁親王男 文化五年三月十四日爲御養子、以民部卿典侍賴子爲養母、○前略

略

〔小河一敏筆記〕岩倉具親公ノ御説ニ、御養子親王ハ、燕寝侍御ノ女官ヲ御母代ニ定メラレ、眞ノ母子ノ如ク親昵ニ音信等アリ、參内ノ時ニモ御母代ノ局ニ通り、時々響應ナドモアリタリ云云、

〔桂宮御自記〕靈元院御代迄ハ、御養子ノ事停止被仰出、皆御猶子也、然所女中之沙汰歟、御養子始る、法親王ノ事故次第ハ、かいろう可爲處、御猶子之法親王より御養子ハ上座云云、

〔葉黃記〕寛元四年十一月十五日庚午、櫻井宮○仁被補、熊野三山檢校法親王補之、今度始之、前大僧

正道慶依入道大納言御吹舉被蒙御約束了、今轉移之間相違歟、吉田中納言書院宣○後進之件書樣在裏不似先例歟、

仁安三年四月廿五日無品道惠法親王薨帝御叔父、鳥羽院皇子五月廿一日有薨奏廢朝三箇日、可傳音奏之由被仰之、不可有廢朝以後政始之旨被仰之、今日御錫紵三箇日、

嘉應元年十二月十一日二品覺住法親王薨帝御叔父、同院皇子同廿一日有薨奏廢朝三箇日、可止音奏之由被仰之、今日御錫紵、略○中

四條院

正應元年九月三日三品尊性法親王薨帝御伯父十月廿二日有薨奏廢朝三箇日、可止音奏警蹕之由被仰之、今日御錫紵即除御、

龜山院

文應元年十月廿三日無品尊守法親王薨帝御嵯峨院叔父、後醍醐院皇子

伏見院

正應三年八月十八日無品忠助法親王薨帝御叔父、同院皇子同六年二月三日無品最助法親王薨帝御叔父、同院皇子皇、永仁三年七月廿七日無品應助法親王薨帝御叔父、同院皇子

後伏見院

正安元年六月七日二品深性法親王薨帝御叔父、後深草院皇子

已上件年々、無薨奏廢朝御錫紵等事乎、

閏九月七日

大外記中原師茂

法親王母代

〔執次詰所本御系譜〕

靈元院

道仁法親王

無品定惠法親王、今上後鳥羽御伯父、建久七年四月十八日御事、同年六月廿六日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、同日御錫紵、

無品承仁法親王、今上後鳥羽御叔父、同八年四月廿七日御事、同年五月四日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、不可有廢朝以後致、始之由被仰外記、

無品仁助法親王、今上龜山御伯父、弘長二年八月十一日御事、同月廿四日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、同日御錫紵、

二品圓助法親王、今上後宇多御伯父、弘安五年八月十二日御事、同年十月五日有薨奏、廢朝三箇日、之由被宣下、同日御錫紵、

二品覺雲法親王、今上後醍醐御伯父、元享三年十月十八日御事、同月十九日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、不可有廢朝以後致、始之由被仰外記、同日御錫紵即除御、

右例依仰注進如件

貞和二年閏九月十五日

依仁和寺一品法親王御事、禁裏廢朝、御錫紵可爲何事故事、粗引勘先規候之殿、御室二品守覺法親王、建仁二年八月廿五日御事、聖護院無品靜惠法親王、同三年三月十二日御事、南法親王、後白河院、

二品道助法親王、實治二年正月十六日御事、後鳥羽院皇太子、後嵯峨院御叔父、帝後深草、御從祖父、御、件年々廢朝御錫紵事、外記

記無所見、口可被得、其御意給哉、師茂誠恐謹言、

後九月四日

左大史小槻清澄

一二等法親王者有故時、有廢朝錫紵例、

高倉院

師茂 請文

入道親王法親王叙品

〔海人藻芥〕法親王叙品之事

御政事の得失にこそかゝり給ふべけれ、すべて此等の事よく、御心せさせ給ふべき所也と申せし也、此封事御覽の後仰下されし事ふたゝび三たびのち申す所そのことわりあり、されどこれ國家の大計也、よく御思惟有べしと仰下されしに、やがて今の法皇（山）の皇子秀の宮とか申す御事親王宜旨あるべき由を申させ給ひたりけり、

二品ハ御室バカリ叙之、而近代諸門跡連綿歟、一品高尾御室

後深草院

於僧中者始叙之、而又大覺

寺龜山院皇子

青蓮院後伏見院皇子

令望叙之云云、

〔仁和寺御傳〕大御室

性信、三條院御四御子、

中永保三

年三月十三日於禁中六條修孔雀經法

同二十日直叙二品

御年七十九、僧位始也、正曆元攝政家出、家後、被蒙准三宮宣旨、准此例令叙給云云、

〔長秋記〕大治四年正月廿二日辛丑大理云、仁和寺二品親王、

法

每年任諸國掾之由所示給也、如此

事如何、權大納言預別給之人可然、於巡給別給可給巡年歟、能可被尋前例攝政聞此事云、問外記可被一定歟、又別當云、如此法親王別當、參議已上可被補歟如何、下官云、入道師明法親王別當、參議師成卿也、覺行法親王別當、大納言公實卿也者、有何妨哉、凡親王男女童後皆同事也、法親王何別沙汰候哉、權大納言云、尤可然者、

〔園太〕貞和二年八月三十日、後聞仁和寺一品御室

寛性法親王

今夜子剋御入滅、御年五十八、閏九月

一日、今日許定延引之由有御敷實一品御室事故歟、且爲驚申此事、申廻許參院良久有出御入見參、

難訴已下之事、經顯卿尋沙汰、法親王有事之時無停止例云々、又御首被講事延否未定云々、

依仁和寺宮事、廢朝錫給事被尋例云々、當今

光者上皇

光御猶子也、仍今之口令隔給歟、此例清

隆後日持來、仍續之、其外不審候間尋大理卿口爲俊卿奉行被尋云々、

依仁和寺一品法親王御事、廢朝錫給有無例事、

法親王待遇

せ給ふ御事共はあるなれ、まかはあれど、儲君の外は、皇子皇女皆々御出家の事においては、今もなほおどろへし代のさまにかはり給はず、凡匹夫匹婦の賤しきも、子を生ては、必ず其室家あらむ事を思ふ、これ天下古今の人の情なり、また今農工商の類だにも、男には其資財をわから、女には其婚嫁をもとむ、ましてや士より以上、ことごとくみなまからざるはなし、かゝる世のならはしとなりて年久しければ、朝家には今まで申させ給ふ御事こそなからめ、此等の御事ねがはせ給ふべき所ども思はれず、たとひ又朝家には申させ給ふ御事こそなからめ、これらの御沙汰なからむ事上につかふまつらせ給ふ所をつくされしども申べからず、當時公家の人々、家領のはどもあるなれば、皇子立親王の事おはしませむにも、いかほどの土地をこゝらせらるべき、皇女御下嫁の事おはしませむにも、いかほどの國財をか費し給ふべき、この國天祖の御後のかくのみおはしませむに、當家神祖の御末は、常盤堅盤に榮えおはしませむ事を望まむは、いかにやはさふべき、されど某が申すごとくならむには、これより後代々の皇子皇女、其數多くおはしませむに至ては、天下の富もつがせ給はぬ所ありぬべし、など申す事も候はん歟、古より皇子皇女數十人おはしませし代々もすくなからぬぞ、これらの御後、今に至り給ふは、いくばくもおはしませず、天地の間には、大算數といふものゝある也、と古の人は申たりき、これ等の事は、人の智力のおし量るべき所にあらず、只理の當否をこそ論じ申すべけれ、或は又皇子の御後多からむには、つひには武家の御ため、不利の事ども出来ぬべきなど申す事もあるべきにや、高倉宮の令旨によりて、諸國の源氏起りし事もあれど、これは平相國入道のひが事のみ多くして、家滅びぬべき時にあたれるなり、もし此等の事を以て滅どすべきも、高時入道滅びし時に令旨なされしは、梨本の御坊（觀眞）にはおはしませずや、さらばたとひ御出家の御身といふども、それらの事あらじとは申すべからず、これらはたゞ武家

比丘尼御所

堯典上宣云、件内親王出家人也、有一品字否、雖然不改一品字、
〔雲上明覽〕文久三年比丘尼御所

大聖寺宮

大聖寺御無住 御宗旨 摩

寶鏡寺宮

寶鏡寺御無住 御宗旨 摩

曇華院宮

曇華院御無住 御宗旨 摩

光照院宮

光照院御無住 御宗旨 四宗兼學

靈鑑寺宮

靈鑑寺宗諄入道女王 御宗旨 摩、光格天皇御養子、
實伏見故貞敏親王御女、

圓照寺宮

圓照寺文秀入道女王 御宗旨 摩、今上（孝明）御養子、
伏見入道、樂親王御女、

林丘寺宮

林丘寺御無住 御宗旨 摩

中宮寺宮

中宮寺尊澄成淳女王 御宗旨 眞言、今上（孝明）御養子、有栖川故
一品親王御子、内實伏見故貞敏親王御子、

〔折たく柴の記〕廿七日○寶永六年正月に參し時に、また封事を奉る、其事の大意は、略中當家の神祖

家康天下の事をあろしめされしに及びてこそ、朝家にも絶たるをも繼ぎ、廢れしをも興さ

青蓮院宮

青蓮院御無住御宗旨天台

知恩院宮

知恩院入道尊秀親王御宗旨淨土、今上(孝明)御養子、大樹公、御

勸修寺宮醍醐帝御新願所

勸修寺御無住御宗旨眞實

梶井宮圓融院御門跡、又梨本御門跡、

梶井入道昌仁親王御宗旨天台、光格天皇御養子、

曼殊院宮

曼殊院御無往御宗旨天台

圓滿院宮號平等院、柏櫻井、

圓滿院御無住御宗旨天台

孫王爲法親王

〔釋家官班記上〕孫王親王例

山澄覺親王後鳥羽院御孫、雅成親王息、文永十一年三月二日叙、

山承鎮親王順德院曾孫、忠成王孫、三院御猶子、尊胤親王師匠也、叙、

內親王入道

〔續日本後紀十九〕嘉祥二年閏十二月庚午、此月四品安勅內親王入道上表還爵品許之、

〔續日本後紀二十〕嘉祥三年二月辛亥、勅四品安勅內親王、依願令入道、宣封戶及帳內資人品田収公、

但无品本封帳內資人依舊行之、

〔日本紀略一〕延長三年三月口日、三品綏子內親王落髮、

〔日本紀略三〕長和四年四月廿六日乙亥、一品資子內親王薨、先是落飾五月十日己丑、資子內親王

〔百一錄〕寶永三年十月三日、仙洞^〇 遷 御養宮、元有栖川宮之宮也、知恩院門主御儲也、今日大樹川^〇 綱鑑

吉 御養子云々、先々每節爲大樹御養子、居知恩院門主云々、

〔門跡傳〕^坤 勸修寺御門跡

尊信法親王

常磐井一品親王恒明息、龜山法皇孫、後醍醐帝御猶子、

寬寶法親王

伏見殿貞建親王息、延享二、十、二爲櫻町院御猶子、同三、五、八爲親王、同十八入寺得度、

〔雲上明覽〕^{文久三年版} 三、御門跡方

輪王寺宮^號 日光宮

輪王寺准后慈性親王^{御宗旨天台、光格天皇御養子、實有栖川故親王御子、一品、}

毘沙門堂御無住^{御宗旨天台、輪王寺宮御兼帶、}

仁和寺宮^{御室御所、又御室宮、}

仁和寺入道純仁親王^{御宗旨眞言、仁孝天皇御養子、實伏見入道親王御子、一品、}

大覺寺御門跡^{稱嵯峨山嵯峨院、又嵯峨御所、嵯峨殿、}

大覺寺御無住^{御宗旨眞言}

妙法院宮^號 新日吉御門跡

妙法院御無住^{御宗旨天台}

聖護院宮

聖護院雄仁入道親王^{御宗旨天台、光格天皇御養子、實伏見故貞敬親王御子、一品、}

照高院御無住^{御宗旨天台、聖護院宮御兼帶、}

退入上卿召官人被仰辨可召之由左中辨信輔朝臣參執奉之辨於宣仁門外召史仰之史康有立留辨前一揖奉之又一揖退次予歸昇小板敷參御所方小時退出仁惠故院○後宮檢校宮御弟子云々法親王事以卿忠世朝臣奉行今夕所相語予也○中今夕不被仰勅別當且近例如此

建長四年八月廿八日

法親王宣下 以權大僧都尊助○上御宣爲親王

文永十一年三月二日

法親王宣下 前大僧正澄覺○後鳥宣爲親王

宮門跡

〔門跡傳〕日光御門跡

尊敬親王

後水尾院第四皇子寬永廿一十十一才親王宣下慶安元三四叙二品十五才同九移東叡山

公紹法親王

有栖川昭仁親王息光格天皇御養子文政十三廿五爲親王四廿五入室里坊即日得度六二下向

關東

〔門跡傳〕知恩院御門跡

良純法親王

後陽成院第八皇子元和元六廿八征夷大將軍家康公爲猶子智恩院御門跡最初寬永十九十二

十六廿九才爲親王

尊統法親王

有栖川幸仁親王息靈元院御養子元祿十一八十三智恩院相續寶永三十三常憲院殿○鎌川爲

猶子同四三廿九爲親王○十二才

略

聞海外、衆受病之後二十餘日、遂以入滅、吁嗟哀哉、

〔中右記〕天永三年十二月廿七日、○中次召仰頭辨來仰以行信可爲親王者是院、○白御子仁和寺之

宮也、○覺出家以後有親王宣旨也、大將仰下左大辨重資也、

〔續世繼志〕六實の御魂待賢門院、○鳥羽后うみ奉り給へる第五のみこは、本仁の親王と申し、わらは

より出家し給て、仁和寺の法親王、○覺と申なるべし、ささきばらのみや法師にならせ給ふこと

ありがたきこと、申せども、佛の道をおもくせさせ給、いとめでたきことなるべし、この宮いと

よき人におはして、眞言よくならひ給ひ、御てもかゝせたまひ、詩つくり歌よみなどもよくし給

き、

〔百練抄〕十二仲楚、承久三年十月十三日乙丑、權僧正尊性、權少僧都道深、宜爲禪定仙院、○鳥羽後親王之由、藤

大納言師經被宣下之、

○按ズルニ、尊性道深ハ、竝ニ後鳥羽天皇ノ同母兄守貞親王ノ子ナリ、故ニ後鳥羽天皇ノ皇子

トナシ親王宣下アリシナルベシ、

〔百練抄〕十五後深草、寛元元年十月廿七日庚子、當今○後嵯峨御弟宮、令渡三條宮給、御出家、公卿扈從、雲客騎

馬、

〔百練抄〕十六後深草、建長元年正月廿八日庚子、上皇○後嵯峨若宮、令入圓滿院宮給、御弟子之儀也、卽今夜御

出家、○助二月十五日丁巳、法親王宣下也、

〔勸傳記〕弘安七年二月十日己丑、及晚參殿下、○藤原兼平内覽事、今夕法親王宣下之由所申入也、次伺申

立親王御參事於左大將殿、御方件日有御故障之由被仰下、且入見參申了、次參内相觸女房、法親王

宣下之由申入、上卿辨散狀所進入也、○中中院中納言具房參入、經床子座前著奥座、○中小時上卿立

奥座著端座、○中次子又參、弼仰云、○兼兼平、以法印權大僧都仁惠宣令親王、○上上卿被氣色、次右廻

給める、

〔後二條關白記〕康和元年正月三日丙午、有行幸召仰事、○中有頃還御、被仰賞事、仁和寺宮○覺被下

親王宣旨、

〔初例抄〕法親王始

仁和寺御室 康和元年正月三日、仁和寺御室令蒙親王宣旨、○御年二鳥羽殿朝觀行幸、○堀仙院○白

河御賞也、法親王初例也、此日御室○覺參入、法興院大相國、○藤原出家後蒙准三宮之宣、令持院

御居箱、以件例今被叙親王云々、○中御出家以後、蒙親王宣旨初也、仁和寺御室白川院御子、

自少僧都蒙親王宣旨例

少僧都道深○後高倉皇子金剛光院是也、承久元年月日任、具在別、

僧正後蒙親王宣旨例

僧正最雲○堀河皇子保元三年三月一日日、御祈於中堂七佛、樂師法賞蒙親王宣下、

〔古事談三僧行〕白川院御時、中御室○覺御修法勤行間、初夜時ニ令昇給タリケルニ、此佛キト供養シ玉

ヘトテ、諸人不見、知之繪像一鋪ヲ被獻之、即密密有御聽聞云々、奉掛其像於本尊前、ヤガテ令供養

給テ、新被圖繪供養給ヘリ、常具利童子トテ、其天ノ功能本誓目出タク令釋給ヘリ、爲奉試俄有此

儀云々、御感之餘、後朝被下法親王宣旨云々、法親王之始也、

〔中右記〕長治二年十一月十九日、從殿下○藤原忠實被仰云、去夜亥時許、彼仁和寺二品覺行親王、已以入

滅于仁和寺新造北院、年卅一云々

法親王者、太上皇○白河御子、母前大貳經平女也、往年出家、從寬意權大僧都、深傳真言道、其後頻關

勸賞蒙親王宣旨、并叙二品、關巡給也、出家之後親王宣旨始於此人、可謂希代之例矣、抑親王、誠是佛日之光華、法門之棟梁也、加之言語分明、文章優妙也、云容體云心性、誠叶大器、依之威滿天下、名

〔恩管抄〕^十宮たちは入道親王にて、御室の中にも有がたかりしを、山にも二人^{○順德皇子、尊覺ならびておはしませすめり、新院^德當今^{○後堀河}又二宮三宮の御子なご云て、數えらすをさなき宮々法師法師にと、師共の許へゐてがはるめり。}

〔孝亮宿禰記〕慶長六年三月五日、今日親王御方、^{中山大納言之女、仁仁和寺御入室、鳥丸大納言、廣橋大納言、中山中納言、勸修寺宰相、上冷泉、五條、子已上七人供奉之、於仁和寺、五獻有之、親王御方只有御落涙、漸院家計有御對面夕陽人々歸家、}

法親王宣下式

今迄正親町院御所、親王爲御座所、今日令出彼御殿給之時、供奉人々各落涙也、^{○又見義、准后記}

〔夕拜備急至要抄〕法親王宣下

日次 上卿大臣多奉行、大辨、大辨、中少、勅別當、^{法親王或仰之、或御之、}官外記、親族拜一向、^{仰詞以}

則^{後鳥羽皇子宣令爲親王、建保親父奉行之時如此}

法親王

〔本朝世紀〕康和元年正月三日丙午、法皇^{○白河}子覺行蒙親王宣旨、法興院太政大臣^{○藤原兼家}出家之後、准三宮入道師明親王叙二品之等例也、十一日甲寅、被^下親王宣旨^{行覺上卿左大臣^{○源後房}}

〔續世繼^八〕^{顯々}の御毛仁和寺に覺行法親王とさこえたまひしは、白河の院のみこにおはす、御ぐしおるさを給て、やうくおどなにならせ給はせに、いとかひくしくおはしければ、さらに親王の宣旨かぶり給とぞさこえ侍りし、おは御むろとておはしましは、三條院の御子師明親王とさこえ給し、まだちこにおはしとして、御子の御名えたまひければ、法師の、ちも親王のせんとかぶり給はず、その宮につけたてまつりたまひしに、御でしのみや^{○覺行}はわらはにても、親王の御名えたまはねども、親王のせんじかぶり給へり、後二條のおと^{○藤原師通}出家の後は例なきよし侍りけれども、白川院内親王といふこともあれば、法親王もなごかなからんとて、はじめ法師ののち、親王とさこえ給しなり、かくてのちぞうちつゝき、いづくにも出家の後の親王とさこえ

御車、袖外有於寢殿東廊南面、新大納言實候御簾若宮例御直衣、其色甚濃、御紋將二藍龜甲二倍乘、御車、御車也、於寢殿東廊南面、新大納言實候御簾若宮例御直衣、其色甚濃、御紋將二藍龜甲二倍乘、御之間如躡居、先出東中門外、幸相中將云、無品位、又非親王、而公卿可奉、居歟、如何云、雖經親王、法雖孝、居不可有、祿雖、從法親王、白河院御在生之時、三條太政大臣、同內大臣、神奉、居是相國、泰御之時、公卿皆又居之、只可、當時宜、又覺、親王法印之時、三條太政大臣、同內大臣、神奉、居是相國、泰御之時、所歟、他人不居、只隨便可、酌者、相公云、可然事也、此間殿留御車、大納言候御車後、以前、令、自、御、所、參入之、由、不、著、御、不、定、之、體、可、云、存、事、歟、衣、予、并、宰、相、中、將、於、馬、場、殿、北、方、乘、車、幸、相、中、將、車、白、中、騎、冠、車、大、納、言、前、車、有、二、人、皆、著、布、衣、騎、可、云、衣、予、并、宰、相、中、將、於、馬、場、殿、北、方、乘、車、幸、相、中、將、車、白、中、騎、童、同、新、調、雜、色、八、人、皆、垂、簾、藏、人、右、少、辨、親、宗、也、著、衣、冠、騎、馬、候、御、車、後、右、近、將、監、奏、兼、賴、同、候、御、車、後、次、公、卿、車、也、出、南、殿、西、面、北、樓、門、北、門、行、更、入、北、殿、西、而、南、方、樓、門、渡、御、棧、取、前、給、御、棧、取、在、出、御、此、門、者、御、見、物、之、門、難、調、也、出、北、方、西、面、樓、門、經、河、原、橋、橋、京、極、大、路、北、行、三、條、大、路、東、行、此、間、所、行、列、之、故、遙、令、馬、場、方、給、也、出、北、方、西、面、樓、門、經、河、原、橋、橋、京、極、大、路、北、行、三、條、大、路、東、行、此、間、所、行、兩、許、歟、廻、座、主、房、北、東、入、南、門、給、大、納、言、於、門、外、下、御、車、頭、下、御、車、井、下、座、於、上、著、衣、冠、御、車、幸、中、門、鹿、大、納、言、被、候、御、簾、此、間、予、相、公、入、門、下、御、之、間、即、昇、中、門、廊、若、宮、經、透、渡、殿、令、人、寢、殿、南、底、東、向、障、子、給、座、主、裝、束、兼、母、屋、西、方、東、向、被、座、其、內、儀、不、見、及、南、底、御、簾、被、垂、也、公、卿、著、寢、殿、東、底、座、殿、上、人、等、在、中、門、南、廊、座、源、大、納、言、房、被、座、北、面、簾、中、依、座、主、親、昵、內、々、被、來、訪、歟、供、御、膳、陪、膳、權、少、僧、都、實、修、云、々、頃、之、依、右、少、辨、命、大、納、言、以、下、移、著、寢、殿、東、北、廊、中、居、坐、子、不、似、常、候、依、次、飯、次、菜、二、高、杯、今、四、本、也、人、御、簾、垂、之、也、一、獻、居、冷、汁、下、落、二、獻、居、熱、汁、三、獻、居、粥、漬、伏、著、復、本、座、役、人、侍、也、此、所、非、御、前、強、非、御、大、納、言、候、御、前、之、間、不、參、其、方、之、由、可、推、示、歟、公、卿、須、候、之、儀、於、仁、和、寺、御、室、被、獻、御、贈、物、實、是、大、師、御、如此、云、々、彼、者、法、皇、御、息、也、爲、親、王、是、爲、凡、人、誰、准、歟、聯、可、有、會、釋、之、詞、歟、被、獻、御、贈、物、實、是、大、師、御、實、是、地、師、以、爲、系、源、大、納、言、被、取、之、云、々、先、年、座、主、親、王、爲、此、座、主、第、子、實、成、候、御、云、々、右、少、辨、取、之、賜、御、共、廳、官、次、座、主、令、輩、御、車、於、寢、殿、南、階、間、大、納、言、候、御、車、簾、此、間、殿、上、人、騎、馬、予、相、公、下、立、中、門、外、子、時、小、雨、上、下、擁、等、但、御、車、不、覆、雨、皮、於、河、原、雨、止、經、本、路、還、給、今、度、不、廻、馬、場、直、令、入、七、條、殿、西、面、南、門、給、人、中、門、輩、御、車、出、御、予、相、公、不、進、出、南、庭、下、御、之、後、昇、中、門、廊、此、後、上、下、退、出、

〔百練抄〕八、安元二年十月廿三日、上皇白河後、若宮御、入內、是、依、爲、主、上、御、猶、子、也、

のせんじのみ。おはします、その山科の宮に、略中 まうで給ひて、略下

○按ズルニ、せんじのみことハ、仁明天皇ノ皇子人康親王ナリ、

〔日本紀略一〕延喜二十年閏六月九日、一品式部卿是忠親王出家、號南院親王、

〔日本紀略十三〕寛仁三年三月某日、師明親王、性信 於仁和寺出家、子時童稚也

〔釋家官班記〕入道親王

仁性信 仁和寺大御室、寛弘八年十月五日立親王、七 爲師、仁

仁覺性 榮金童寺御室、大治四年十月廿四日爲親、仁

山尊快 後鳥羽院御子、山梨木承圓僧正弟子、承久二年八月廿二日爲親、仁

山道覺 後鳥羽院御子、山梨木承圓僧正弟子、承久二年八月廿二日爲親、仁

山尊圓 伏見院御子、青蓮院、延慶三年六月廿八日爲親、仁

寺尊悟 伏見院御子、圓滿院、延慶三年六月廿八日爲親、仁

法性勝 後鳥羽院御子、法守親王弟子、仁

山尊道 後伏見院御子、曆應四年七月廿四日爲親、仁

已上山門園城具載人數、於仁和寺者、覺性以後皆入道親王也、

〔初例抄〕入道親王始

大御室性信〇三條皇太子

〔山槐記〕安元元年八月十六日、今日法皇〇後河若宮、承七 延春門院御子、實遊女一、福禎、號丹爲天台

座主權僧正明雲顯通、弟子始令渡彼房、給予爲尾從、先 日內々自女院有此、仰申可已、刻參院御

所七條殿着直衣、乘侍從、兼口車、頗顯之故也、差綱車、一人、但御棧、數前渡、七八皆垂、括、午、刻、參、院、御、車、庇

〔文德實錄〕仁壽元年二月丙寅、无品常康親王落髮爲僧、親王者、先皇明第七子也、母紀氏、少而沉敏、風情可察、先皇諸子之中、特所鍾愛、親王追慕先皇、悲鍾無已、遂師佛理、求冥救也、

〔三代實錄二〕貞觀元年五月七日壬戌、四品守彈正尹兼行常陸太守人康親王出家入道、上表曰、臣

人康言、身居雲漢之末、才無涓流之效、空備簪纓、徒繫疾病謝中、臣欲遂願、怯於聖日、不慮幽人長往之蹤、

將盡筋骨於明時、豈歸真如寂滅之道、然而蒙昧之身、荷榮顯、鬼必瞰其滿盈、尊崇之地、處虛羸、天宜奪

其年算、斯乃臣所以一寒一暑、膚腠作祟、患之機、或晦或明、心肺皆養、網之府著矣、臣今年二月、熱發甚

篤、醫藥無所施其方、針灸遂不通、其術即知魂遊岱岳、九原多一死之悲、夢上鈞天、七日無再生之効、綿

綴之間、纔發此念、出家功德、免三途苦、仍先請二師、已受十戒、形猶禿丁、服是僧祇、豈計非更生之藥、起

朽質於玄廬、無返魂之香、招飛精於鬼錄、此乃如來謔念、菩薩加持之力矣、已得蒙其冥助、不得背其深

期、伏望被陛下之殊私、爲梵門之禪侶、將使金魚脫佩、長檣紫服之粧、銀驄伏櫪、永罷繡衣之職、陛下若

遇臣厚者、思拾獲其保全、若矜臣優者、宜獎取其封職、不勝荒迷之至、謹拜表以聞、詔、人康親王辭其官

爵、歸於釋侶、宜准國康親王、収其品封、但本封舊并帳內資人、准無品例充之、人康親王者、仁明天皇之

第四子也、承和十五年正月、叙四品、拜上總太守、仁壽二年、遷彈正尹、齊衡四年、兼常陸太守、親王自少

年時、有歸大乘道之意、今謝病、遂本懷焉、

〔續日本後紀四〕承和二年正月壬子、平城舊宮處水陸地三十餘町、永賜高岳親王、親王者、天推國高

彥天皇平第三子也、大同年中、未少登儲貳略、遂遭時變、失位、落髮披緇、位于東、

〔三代實錄六〕貞觀四年十二月廿五日己未、大藏大輔正五位下在原朝臣善淵奏言、略、竊見禪師

親王高昔攝堂舍之地、今來荒廢、基趾猶存、略、中

〔伊勢物語〕昔たかきこと申女御おはしなしけり、うせ給ひて七々日の御わざ安祥寺にてまけ

り、右大將藤原のつねゆきといふ人いゝまそかりけり、其御わざになうで給ひて、かへさに山しな

古事類苑

帝王部二十五

皇親下

入道親王注親王

〔官職難儀〕法親王は法中にてあるなり、それに差別あり、御出家以前、先俗名にて親王宣下ありて、さて御出家あるをば、入道親王と申て、規模とせらるゝ也、御出家已後宣下あるをば、法親王と申、さりながら入道親王をもその御義勢にあり、さりながらおもてむき法親王とも申事は勿論なり、

皇子出家

〔元享釋書〕^{方圓}釋開成光仁帝子、桓武之兄也、幼敏穎、而志佛乘、上甚鍾愛、天平神護元年正月一日、潛出宮入勝尾山、疊石爲塔、禪宴其側、二月十五日、仲算二師經行山中、^略○中 卽日就二師剃落受戒、^略○中 天應元年十月四日、手執香爐、向西低頭而寂、壽五十八、

〔續日本後紀〕^{仁明}嘉祥二年十二月丁亥、三品上總太守基貞親王上表曰、臣基貞言、臣近披肝膽、遠叫形園、九重隔深、未蒙矜許、臣聞人心所欲、上天或從之以仁、物性攸偏、明主不强之以化、故唐堯道洽、皮冠未妨箕嶺之遊、漢祖風高、羊裘猶全富春之樂、臣幼有厭俗之志、緣叨聖主之恩、矯性勵心、強齒簪紱、欲盡忠勤、而獻勸猶苦穉生之不堪、至今已沉痼疾、不復全人、卽知天授之攸、鍾遼難以人事、矯激伏惟聖主陛下、仁超飛帝、德駕輪王、既能鑒因果而不疑、冀賜感宿業之攸、遠又臣幸以頑質、厚被聖恩、知在此身、終難報答、但望出家功德、念佛勝利、雖戒行不全、而或補萬一、若更裹頭髮、再塵印章、則生爲失志之具、臣死爲含恨之愚鬼、不任懼切之至、重亦拜表以聞、許之、

女王初見

六三一

諸王制度

同

待遇

六三四

叙位

六三五

任官

同

食封

六三六

時服

同

季祿

六三七

女王賜祿

六三八

孫王爲親王

六三九

諸王賜姓

六四一

諸王爲人臣嗣

六四四

女王婚嫁

同

除王名

六四七

雜載

六四八

○

皇親妃

六四九

古事類苑

帝王部二十五

皇親下

皇親妃嬪

入道親王法親王

六一三

皇子出家

同

法親王宣下式

六一七

法親王

同

宮門跡

六二〇

孫王爲法親王

六二二

內親王入道

同

比丘尼御所

六二三

入道親王法親王叙品

六二五

法親王待遇

同

法親王母代

六二七

雜載

六二八

○

諸王初見

六三〇

被聞食候旨、可申渡于有栖川宮殿下垂命、則被申渡候旨、武傳被示、少選御受被示候、此由以大御乳人申入候。

〔實麗卿記〕萬延元年十月十八日、巳刻參内、如日來、今日若狹侍從、横瀬侍從等、參内有御對面、和宮御縁組之事、御許容被仰出、略○中右大將以二紙被示續左、

和宮御縁組之事、自關東再三被懇願候に付、正徳年中八十宮御約定、并東福門院○後水尾后徳川秀忠女御入内之御例も被爲在候儀、且深思食も被爲在候間、御許容被仰出候事、

酉下刻退出、直參和宮申談有子細、又爲御使女房越後大御乳人代云云御縁組御許容之事、被仰進、略○下

○按ズルニ、和宮ハモト有栖川家ニ婚儀治定アリシヲ、後改メテ徳川家茂ニ降嫁セラレシナリ、

慶内親王

〔續日本紀二十九〕神護景雲三年五月壬辰、詔曰、不破内親王者、先朝有勅削親王名、而積惡不止、重爲不敬、論其所犯罪、合入唐、但縁有所思、特宥其罪、仍賜厨真人厨女姓名、莫令在京中、

〔續日本紀三十二〕實龜三年十二月戊午、復厨真人厨女屬籍、

〔類聚國史八十七〕實龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐討小ภายใน親王除名内親王削屬籍、

後守正喬御入興の事總督を仰付られ、來春納采の御使をも命せらる、十六日、こたび御定婚ありし法皇の姫宮を、八十の宮御方と稱し奉るべき旨仰出さる、

〔有章院殿御實紀^{十四}〕正徳六年^{元年}〇享保二年二月五日、阿部豊後守正喬納采の御使として發足す、其御

贈物は、八十宮の御方に紅白練絹百端、色絹百匹、綴子百卷、五種五荷、主上^{御中}へ守次の御大刀、金

三十枚、三種二荷、法皇へ宗恒の御大刀、金五十枚、三種二荷、女院に銀二百枚、二種一荷、閏二月廿

一日、阿部豊後守正喬京より歸り謁し、茶芋島大刀馬料の金を獻る、廿二日、御納采を賀し、群臣

出仕して幸臣に謁す、萬石以上の人々、宿老御側用人少老の宅にまかりて賀す、廿三日、さの人

の事により、萬石以下の人々諸老臣に詣賀す、致仕臥病、并に幼稚の輩使者を出し、在封の人々よ

り使札を獻す、

〔有章院殿御實紀^{十五}〕正徳六年^{元年}〇享保三年三月七日、勅使徳大寺右大將公全卿、庭田前大納言重條卿、

法皇使東園前中納言基雅卿、引見あり、^略〇中御納采の御祝とて、大内より御大刀一振、馬料金三枚、

三種二荷、院より御大刀一振、馬料の金五枚、三種二荷、女院より一枚、^略〇下

〔執次詰所本御系譜〕

皇女

弘化三年^午閏五月十日降誕 同月十七日號和宮 嘉永四年七月十二日有栖川帥宮御

縁組御治定

〔言成卿記〕文久元年四月十九日、今日和宮御諱、親子内親王宣下、

〔議奏言渡〕萬延元年八月廿六日、從殿下^{〇九條}以御世話卿和宮^江被申上相濟、御縁組御延引御理

爲近衛關白左大臣尙嗣公北政所 寛永十三年十一月廿三日嫁于近衛殿 同十四年十

二月八日内親王宣下略 節

〔百一錄〕元祿十五年八月廿六日、近衛關白基 御臺級宮子 常 御方薨御、六十四歳、號無上法院、後水尾院姫君、廢朝三箇日、市井同斷禁之、

〔百一錄〕貞享三年七月廿三日、後西院姫宮賢宮子 益 爲内親王、上卿今出川大納言、八百宮御妹也、

廿五日、今夜九條大納言殿實 輔 御簾入于賢宮御方、中筋通故准后新廣儀門院舊御所云々、廿七日、賢宮移徙于九條殿新造之御殿、從二條辻固勤之、前驅殿上人扈從公卿三輩、綾小路清閑寺相公、

伏原三品、

〔執次詰所本御系譜〕

靈元院

吉子内親王

正德四年八月廿二日生、號八十宮、同五年八月廿七日爲征夷大將軍家繼公川 德 御臺所

同六年二月十八日有結納之儀、東使阿部豐後守正喬、同四月三十日家繼公薨去、依之

在住皇都、享保十一年十一月廿八日内親王宣下略 節

〔基熙公記〕正德五年五月廿三日戊午、前攝政被來、今度於關東執權中、兩傳奏へ申旨有之、大樹御嫁

縁之事也、申請院姫宮度云云、細難記之、只歎息而已、兩傳奏今日可奏院云云、委事前攝政可有注

記、嗚呼々々、遣書狀東武有要用故也、依上件事、自前攝政被遣飛脚了、

〔有章院殿御實紀十三〕正德五年九月廿九日、群臣總出仕あり、法皇元 靈 の姫宮御定婚あり、御入與

あるべきよし仰出さる、十月三日御定婚により、日光山御宮に代參使を立らる、五日阿部豐

皇女降嫁臣下

〔日本紀略朱雀〕元慶元年十一月五日、四品勳子內親王養、先帝（醍醐）第二皇女中納言師輔室、

〔二代要記四〕醍醐、勳、子、內親王、配、帝六女、延喜廿年二月十七日爲親王、始

〔皇胤紹運錄〕

小一條院

假子內親王 配、權中納言信家、三條院爲子、

〔勸仲記〕弘安七年八月十四日己未、抑今夕內大臣殿、原、令、迎、新、院、皇女十六、日、來、與、按、察、二

品御同宿云々、俄有此儀、頗希代之例也、上皇密々御幸二品第、御出立事有報覽云云、御車自內府被進之、侍二人、殿上人一人云々、密々儀云々、忠仁公嘉例云々、頻勞形歟、今度時宜定有子細歟、

〔執次詰所本御系譜〕

後陽成院

清子內親王

爲應司關白信尙公北政所 慶長六年十二月九日內親王宣下

貞子內親王

爲二條太閤康道公北政所略

〔執次詰所本御系譜〕

後水尾院

昭子內親王

事の障子のもとにてぞたてまつりける、みかどは日かずを月なみのかはりにせさせ給なれば、三日御ふくとぞきこえける、

〔百一錄〕延寶二年九月十二日、夜陰永井伊賀守、同大學上著女一宮江○、元皇女爲吳服料黃金百兩、年々可有進呈之由申來、本院正○明御所へ金千兩、是者當年耳、

〔百一錄〕延寶九年八月廿三日、新院姫宮院○、皇女後四樣へ御合力米貳百石

内親王家令

〔令義解家令職〕親王、内親王准此、但文學不在此例、

○按ズルニ、家令以下ノ職員ハ、上文親王家令ノ條ニ掲ケタリ、故ニ今又此ニ贅セズ、

〔類聚國史詳六十五〕延曆十六年六月辛酉、三品朝原内親王獻白雀御監及家司等、賜物有差、

内親王品田

〔延喜式武部〕凡授品田者、親王内親王其數一同、

内親王食封

〔日本書紀天武〕五年八月丁酉、親王以下小錦以上大夫、及皇女姫王内命婦等、給食封各有差、

〔續日本紀文三〕慶雲元年正月己卯、益二品永高内親王、略○中益封各一百戶、

〔續日本紀元六〕和銅七年正月己卯、益二品永高内親王、○刊本、脱内親二字、據本食封一千戶、

〔續日本紀元六〕靈龜元年正月甲午、三品泉内親王、四品水主内親王、長谷部内親王、益封各一百戶、

〔日本紀略十一〕寛弘四年正月戊午、勅、二品脩子内親王叙一品、年官年爵准三宮、本封外加千戶、

猶子

〔御湯殿の上の日記〕天文廿二年正月廿八日、ひめ宮○後奈具皇女、聖秀尼王の御方、ふけ義晴の御ゆうとに

なし參らせらるゝとて、ふけへ十かう十か、みだいへ五かう五か參らせらるゝ、これは廿五日の

御事なり、けふきんげ院ぞのへさだめ參らせられて、御てらより五かう五か參る、ひめ宮の御か

たならしむして、ほうくわうあんまゐられて、御さか月まゐる、めでたし、十二月十一日、ひめ宮

の御かた、きんげ院ぞのへ御入室にて、すけ殿ながはし御まゐりてんきよく、すがゝとくわん

御なりて、めでたし、御てらより十かう十か參る、御じゆかいあり、

家辭而不受、

〔三代實錄^六〕貞觀四年二月廿五日甲子、无品有子内親王薨、淳和太后奏請不被任葬儀司、詞旨懇切、因而不任、^{清和}後朝三日、内親王者、淳和太上天皇之女也、母贈皇后^{諱高}、桓武天皇之女、生一男三女焉、

〔類聚符宣抄^四〕被右大臣宣傳、紀内親王^{皇女}、薨之由、今日奏聞既訖、宜仰辨官始自今日、令神祇官

獻御贖物者、

仁和二年六月廿九日

大外記大藏善行^奉

即日仰告當直左少史凡春宗訖

〔類聚符宣抄^四〕中納言兼右近衛大將藤原朝臣師尹宣奉勅一品康子内親王^{皇女}、今月六日薨、須

依例任葬官而依喪家辭申停任件官者、

天曆十一年^元天德六月十日

少外記國公眞^奉

〔日本紀略^四〕天德元年六月六日辛酉、一品康子内親王薨、^{諱第十}給贖物、件薨胞衣不下之故也、

於右大臣^{師輔}坊城第薨、十日乙丑、御躰御卜如例行之、天皇不服、錫紵以前有御卜奏於禁中儀

於陣外奏之、此間故康子内親王家別當掃部頭藤原在滋、於待賢門付外記申云、今日親王葬送也、葬

官不可任之由有遺誠者歟、有薨奏事、今日以後三箇日、不可有音樂之由、仰内暨畢、今夕件内親王、葬

西八條東河島邊

〔續世繼^六〕女宮は一品宮とておはし、は、^{皇女}皇子の内親王^{皇女}、^{皇女}とて、賀茂のいつき

にたち給へりし、御なやみにては、どなくいで給ひにき、長承二年十月十一日御とし十二にてか

くれさせ給にき、^中廿七日薨奏とてこのよし内裏に奏すれば、三日は廢朝とて御殿のみすも

おろされ、なに事もこゑたて、えそうすることなせ侍らざりけり、みかぜ^皇は御いもうとにお

はしませば御ふくたてまつりなせしけり、もんもなき御かふり、なはいいなせきこえて、年中行

○按ズルニ、吉備内親王ハ、文武天皇ノ皇妹ニシテ、長屋王ノ妃ナリ、其ノ男女王ハ、内親王ノ子ナルヲ以テ、夫王ノ世系ニ關セズ、特ニ皇孫ノ列ニ入レラレシナリ、

〔續日本紀文一武三十五〕三年九月丙子、新田部皇女薨、勅王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜九年五月癸酉、三品坂合部内親王薨、道從四位下壹志濃王等監護喪事、所須並官給之、天皇爲之廢朝三日、内親王天宗高紹天皇仁光異母姊也、

〔續日本紀光仁三十六〕天應元年二月丙午、三品能登内親王薨、道右大辨正四位下大伴宿禰家持、刑部卿從四位下石川朝臣豐人等監護喪事、所須官給、道參議左大辨正四位下大伴宿禰伯麻呂就第宣詔、

曰、天皇大命眞麻能登内親王爾告止與詔大命平宣、此月頃間身勞止須聞食氏伊都之可病止氏參入〇岐、

岐岐朕心毛慰麻佐幸今日加有幸明日加有幸所念食都待比賜問爾安加良米佐須如事久於與〇岐、

豆禮加年毛高久成多朕平置氏罷奴止食毛氏驚賜比悔備〇此下恐大坐須如此在幸知末世心〇岐、

置氏談比賜比相見之毛末物平悔加哀毛加云部〇部上恐不知然之毛在加朕波汝乃志平憂乃久間毛忘得〇岐、

末之自備賜比之乃比賜比大御泣哭川大坐須然毛治賜止所念之位止奈一品贈賜不子等平二〇岐、

世王爾上賜比治賜不勞久思曾之罷麻佐道波平幸久都々幸事無久宇志呂毛輕久安久通眞世告〇岐、

止與詔天皇大命平宣、内親王天皇之女也、適正五位下市原王、生五百井女王、五百枝王、薨時四十九、

○按ズルニ、五百井女王、五百枝王等ハ、内親王ノ子タルヲ以テ、夫王ノ世系ニ關セズ、二世王トセラレシナリ、

〔三代實錄清和〕貞觀二年閏十月廿日丙寅、無品同子内親王薨、帝不視事三日、内親王者淳和太上天

皇之皇女也、母池子丹墀氏從五位上門成之女也、廿五日辛未、是日任同子内親王裝束山作等司、

從四位下行越中權守房世王爲裝束司長官、治部少輔從五位下安倍朝臣房上爲次官、判官二人、主

典二人、散位從五位下廣山王爲山作司長官、從五位下藤原朝臣大野爲次官、判官二人、主典二人、喪

〔言成卿記〕文久元年四月十九日今日和宮御諱親子、內親王宣下陣儀已刻、上卿內大臣、齊敬中山大納言、忠能別當三條西中納言、孝知右宰相中將、實隆家司敬直朝臣、中務實梁侍職事長季、小倉大天敷久能夫云、

〔新儀式五〕內親王初謁事

內親王年七八歲、有初謁事、先定吉日、月夜當日晚景垂、東廂御簾、御帳中立倚子、撤書御座、時剋皇上著御御座、親王進出當御座、於東廂肅拜退、更召給祿、白藏一重、延長五年、康子親王之時、又親王乳母給祿、各領子或有給其什物等之事、

內親王叙品

〔儀式八〕正月八日叙內親王以下儀

皇帝未御紫宸殿之前、掃部寮立漆案於內廂、當座皇帝既御、內侍置位記筥於大臣之座前、掃部寮即立案即臨東檻喚大臣、大臣稱唯、升殿就座、大臣喚內暨二聲、內暨稱唯、入立東庭、大臣宣喚中務、資內暨稱唯出喚輔以上、若當多稱唯、入自日花門立東庭、大臣宣參來、輔唯、卿先升受三位以上位、置於案上退下、次輔昇進置五位以上、於同案退下、次大臣退下、內侍率可被叙者、列南廂東面北上、異位重行、卿先昇叙之退、出宣仁門、次輔昇叙之退下、其被叙者、隨叙北面東上立、肅拜訖引還、掃部寮昇却案、

〔延喜式中務〕凡叙內親王以下品位者、卿叙品及三位已上、輔叙五位已上、其授宮人位畢下知縫殿寮

〔續日本紀三十〕寶龜十一年十一月丁亥、授四品彌努摩內親王三品、

〔日本後紀十二〕延曆廿三年正月辛巳、曲宴某內親王、高之房授親王三品、淳和贈

〔扶桑略記後三十〕延久元年六月十九日甲寅、第一內親王聰子叙一品、中俊子內親王叙二品、佳子

篇子兩內親王各叙三品、

內親王待遇

〔令義解後宮職〕凡內親王、女王、及內命婦、朝參行立次第者、各從本位、

〔續日本紀六〕靈龜元年二月丁丑、勅以三品吉備內親王男女皆入皇孫之例焉、

難歟、如此事、被問、太政大臣、被用、被定、申趣、可宣歟、廿九日庚戌、頭光賴朝臣來曰、內親王改壽子、爲姝子、皇女者、示可書下之由、即書檀紙授之、

〔兵範記〕仁安三年八月廿七日丙辰、略中太政官符中務省

惇子內親王

右內親王所定如件、省宣承知、依件行之、符到奉行、正四位下行權右中辨平朝臣

左大史正六位上兼皇太后宮少屬中原朝臣

仁安三年八月廿七日

〔百練抄十四條〕貞永元年十一月廿四日庚午、當今四條同胞妹親王宣旨也、御名字暉子、暉子一代要記式部大輔爲長卿擇申、

〔平戶記〕延應二年仁治元年四月廿一日、今夜兩姬宮被下、親王宣旨、大府卿勘申兩御名字、注、載一紙以消息付頭辨云々、白河姬宮後高倉院姬宮也、御名能子持明院姬宮今上姊也御名暉子百練抄之由被定仰、不被問人々、只今申合入道殿給云云、

〔百練抄十四條〕仁治元年四月廿一日乙卯、親王宣旨、暉子、內親王、後堀河院御女能子、內親王、後高倉院御子一宮、御名治子、今夜即令預別給給云々、

〔實麗卿記〕文久元年四月十九日丁丑、內親王仁孝皇女親子宣下也、略中先內大臣齊入敷政門著陣、略中職事長順朝臣來下、御名字、內府、被結申、長順朝臣仰仰詞退入、略中次內府仰官人召辨、權右中辨博房著賦、內府賜御名字、博房結申、內府被仰仰詞、博房退仰史、次長順朝臣著賦、仰以權大納言藤原朝臣可爲勅別當之由退入、

〔類聚符宣抄^四〕太政官符、中務式部民部大藏宮内等省、

昌子内親王歳壹

右太上天皇^{○朱}親王所定如件、省宜承知、依例行之、將到奉行、

右中辨

左大史

天曆四年八月十日

〔榮花物語^{月一}〕朱雀院は御子たちおはしまさし、たゞ王女御[○]ときこえける御はらに、えも

いはずうつくしきをんなみこ[○]昌一所でおはしましける、はゝにようごも御子みつにてうせ

給にしかば、みかど[○]朱われひとゝころ、こゝろぐるしき物にやしなひたてまつり給ける、いか

でささにすゑたてまつらんとおぼしけれ、れいなきことにてくちをしくてぞすぐさせ給

ける、昌子内まゐらうとどきこえさせける、

〔本朝世紀〕治曆四年八月十四日、^{○中}又内大臣於仗座被下、女親王四人宣旨、^{皇太子、皇太子、皇太子、}左少辨正家

奉之、

〔台記〕久壽元年八月十八日己亥、饗儀了參内、^{○中}更闌光賴朝臣來曰、只今新大納言參入、可用壽字

之由所申也、余答曰、壽者衛宣公之子、遇殺者名也、^{見桓十六年左傳}非無其忌如何、光賴退告大納言、大納言

曰、夜及深更不能奏、烏羽勘例、統子内親王宣旨後改名、依彼例今夜用壽字、後日改名何事之有乎、余

即著陣、光賴朝臣下親王名、余結申、光賴曰、可爲内親王、余稱唯卷之、召左大辨下之、大辨退下、次光賴

來、仰以侍從藤原朝臣^{成通}爲内親王、別當之由、即仰左大辨^立、又示成通卿、次成通公教重通公能

等卿進射塲奏慶、此間余參烏羽^{殿北}奏慶、土佐守季行朝臣^{別當}傳奏、是大將慶也、此間曉鐘頻報、次昇

堂、家司職事申慶了、余退出、^{東三}大將擧三獻間、新大納言奏、院宣送親王名字勘文、曰、依闕下定申本

勘申、依壽諱不被用、依仰重擇申也、見件勘文、載妹擇好三字、申曰、禮儀中間不能勘文書、但妹擇無殊

〔皇胤紹運錄〕良純法親王

慶長十九年十二月十六日爲親王、元和元年六月爲東照宮○德川家康御猶子、同五年九月十七日入寺得度、十六寬永廿年十一月十一日遷於甲州天目山、四十萬治二年六月廿二日歸洛、住泉涌寺、中新善光寺○中略、明和五年八月嘗百年忌復本位。

○按ズルニ、十三朝紀聞ニヨルニ、是歲詔罷知恩院法親王良純、放之于天目山、近婦女茹葷醒故トアリ、

皇女初見

〔日本書紀七景行〕四年二月、喚八坂入媛爲妃、生七男六女、○中第六曰淳耐斗皇女、第七曰淳名城皇女、

第八曰五百城入姫皇女、第九曰麿依姫皇女、第十二曰高城入姫皇女、第十三曰弟姫皇女、

内親王稱

〔運步色葉集二那〕内親王皇女帝之姉妹伯母也、

〔日本書紀三持統〕五年正月癸酉朔、賜親王、諸臣、内親王、女王、内命婦等位、

〔續日本紀二文武〕大寶元年二月己未、遣泉内親王侍於伊勢齋宮、十二月乙丑、大伯内親王薨、天武天皇之皇女也、

内親王宣下

○按ズルニ、是レ内親王ヲ以テ名ノ下ニ連稱スル始メナリ、

〔續日本紀二淳仁〕天平寶字三年六月庚戌、帝御内安殿喚諸司主典已上、詔曰、○中兄弟姊妹悉稱親王、止宣天皇御命衆聞食宣、

〔續日本紀三光仁〕寶龜元年十月己丑朔、即天皇位於大極殿、十一月甲子、詔曰、○中兄弟姊妹諸王子等悉作親王、冠位上給治給、○中酒人内親王三品、從四位下衣縫女王、難波女王、坂合部女王、能登女王、美努摩女王、並四品、

○按ズルニ、從四位下衣縫女王以下、並ニ四品ニ叙ストハ、即チ内親王ニ陞セシナリ、

〔皇胤紹運錄〕

順德院

忠成王

彥成王

廢親王

〔季連宿禰記〕元祿十六年四月三日戊寅傳聞入江陵御北丘尼、後西院皇女入滅去月廿七日歿、御閉眼今夜奏聞云、廢朝無之、依無親王宣下之儀歟、洛中自今夜三ヶ日止音曲云云、

〔續日本紀二十〕仁天平寶字八年十月壬申、○中又詔曰、船親王波、○中又仲麻呂何家物計夫、瀧書中

仲麻呂等通家謀乃文有、是以親王乃名波下氏、諸王等成氏、隱岐國流賜布、又池田親王波、此夏馬

多集天事謀止所聞支、○中是以親王乃名波下賜天、諸王等志土佐國爾流賜布、詔大命乎、聞食止宣、

〔日本紀略平城〕大同二年十月辛巳、蔭子藤原宗成、勅中務卿三品伊豫親王潛謀不軌、十一月乙酉、

徙親王并母夫人藤原吉子於川原寺、幽之一室、不通飲食、乙未、親王母子仰藥而死、時人哀之、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十年三月己亥、詔朕有所思、宜復故皇子伊豫夫人藤吉子等本位號、

〔續日本後紀八〕仁明承和六年九月癸未、中使就故贈二品伊豫親王墓、詔曰、○中宜贈榮班以資幽寬、可

贈一品、

○按ズルニ、此伊豫親王ハ、京都上京ナル上御靈神社祭神八柱ノ内ニアリ、御靈會ヲ行フ事ハ、

貞觀五年ヨリ興レリ、

〔德川禁令考〕紫宸殿御條目

一親王宮御不行跡之節者、被任先例、可令遠流事、

寛保二壬戌年日欠

號八條、豐臣關白秀吉公猶子、童名古佐麻呂

〔皇胤紹運錄〕

後陽成院

良純法親王

慶長九年三月廿九日誕生、稱入宮、同十九年十二月十六日爲親王、元和元年六月爲東照宮

○德川 家康 御猶子、

皇子皇女不爲親王

〔源平盛衰記十三〕高倉宮廻宣附源氏汰事

一院○後河第二ノ御子以仁王ト申ハ、○中三條高倉ニ御坐ケレバ、高倉宮トゾ申ケル、○中既ニ三

十二成セ給ヌレドモ、親王ノ宣旨ヲダニモ不被下シテ、沈テゾ御坐ケル、御手跡モ嚴ク、御才覺モ

優ニ御坐ケリ、御位ニ卽セ給タラバ、末代ノ賢王トモ申ツベシナド人々申ケレドモ、女院○後白

春門院ニハ繼子ニテ渡ラセ給ケレバ、被打籠ツ、○中等閑ニ年月ヲ過サセ給ケリ、

〔皇胤紹運錄〕

土御門院

秀子
春子
知子
信子
是子

〔近代帝王系圖〕

後光明院

靈元院

後水尾院皇子、爲後光明院御猶子、承應三年五月廿五日降誕、號高貴宮、明暦四年正月

廿八日立親王、叙二品、五歲略○

○按ズルニ、當代ノ天皇ニ、未ダ皇后女御等ノ入内ナキ時、又ハ入内アリトモ未ダ皇子ノオハセザル間ハ、他ノ皇子ヲ猶子養子トセサセ給ハザル例ニテ、此時後西院天皇ニハ未ダ皇子ヲハセザリシユエ、靈元天皇ヲ先帝即チ後光明天皇ノ御猶子トセサセ給ヒシナリ、

皇子爲人臣養子

〔執次詰所本御系譜〕

後陽成院

藤原信尋

爲近衛三載院關白准三后信尹公養子、任關白左大臣、

藤原昭良

爲一條自淨心院前關白左大臣內基公養子、任關白左大臣、

〔執次詰所本御系圖〕

陽光院

智仁親王

〔本朝世紀〕寛和二年四月廿八日、四品盛明親王出家入道、醍醐天皇第十五皇子也、春秋五十九云々、
略○中 件入道親王、初賜朝臣姓、後更爲親王也、

〔日本紀略一〕延喜廿一年十二月十七日、以第十皇子雅明爲親王、實者法皇○字 御出家之後、所生皇子也、爲今上御子、

〔日本紀略十一〕寛弘元年五月四日丁亥、以冷泉院皇子昭登清仁爲親王、實花山院御出家之後產生也、

〔築花物語八〕花院山○花このみやたちのまのびがたく、あはれにおぼえ給へば、中つかさがはらの一のみこ、○昭むすめのはらのみこ、○清ふた宮を、どの○道に申させ給て、これ冷泉院の御子のうちにいれさせ給へどある御消息度々あれば、○中内にまゐらせ給て、ことのよしをうせさせ給て、よきひして宜旨くださせ給ふ、おやばらの御子をば五の宮、むすめばらの御子をば六の宮とて、おのゝみななべてのみやたちのえ給ふほどの御封をもたまはらせ給ふ、

〔執次詰所本御系譜〕

後伏見院

光明院

後伏見院第二宮、爲光嚴院猶子、

後小松院

後花園院

應永廿年六月十八日降誕、實者後崇光院皇子、爲後小松院御猶子、

於嵯峨太上天皇請以定爲親王曰、○中皇家之胤、徒淪胥庶、猶子情深、矜恤謹檢、弘仁五年五月八日詔旨、除親王之號、賜朝臣之姓、如可關者、朕殊裁下、特望齒列親王、榮曜貽孫、方寸之思、伏聽天裁者、嵯峨太上天皇遂不聽焉、

〔三代實錄十二〕貞觀八年三月二日戊寅、勅沙彌深寂、賜姓貞朝、臣名登、○中先是貞觀五年九月二十

日、三品中務卿親王○中等奏言、深寂是仁明天皇更衣三國氏所生也、承和之初、賜姓源朝臣、預時服

月俸、厥後依母過失、被削屬籍、仍出家入道、嘉祥之末、更垂優矜、○中今善緣不遂、再落俗塵、○中出家

之時、既列皇子、還俗之日、何爲非兒、然則准之人間、宜復本姓、但伏聞嵯峨遺旨、母氏有過者、其子不得

爲源氏、望請賜姓名貞朝、臣登、叙位階、貫京職、至是詔許之、

〔三代實錄五十〕仁和三年八月廿五日丙寅、詔曰、朕之諸兒、皆賜朝臣之姓、斯誠節國用、息民勞之計也、

○中第七皇子定省、年二十一、便侍朕躬、未曾出閣、寬仁孝悌、朕所鍾憐、前被毘昆弟之屬行、遽編一戶、

今欲傳祖宗之駿命、何澁請任、苟不爲身、誰嫌反汗、其削臣姓、以列親王、心星宜省、帝子之名、俗岳曷辭、

天孫之號、

○按ズルニ、定省親王ハ其ノ明日立チテ皇太子トナリタマフ、宇多天皇是ナリ、

〔帝王編年記十七〕貞元二年四月廿四日、左大臣源朝臣兼明、停大臣爲親王、叙二品、十二月十日任

中務卿號、前中書王是也、

〔榮花物語二〕大藏藤原おぼすやう、世の中もはかなきに、いかでこの右大臣藤原いさすこ

しなしあけて、わがかはりのそくをもゆづらんと覺したちて、たゞいまの左大臣兼明のおどや

どきこゆる、延喜のみかど藤原の御十六の宮におはします、それ御心ちなやましげなりどきこ

しめして、もどのみこになしたてまつらせ給ひつ、さて左大臣には、小野宮の頼忠のおどやをな

したてまつり給ひつ、

たり、皇胤の貴種より出ぬる人、蔭をたのみいと才なきも、剩へ人にをこり慢する心もあるべきにや、人臣の禮にたがふ事ありぬべし、寛平の御記に其はし見え侍りしなり、後をもよくかゝみさせ給ひけるにこそ、

〔續日本紀三十九〕延暦六年二月庚申、勅諸勝賜姓廣根朝臣、岡成長岡朝臣、

○按ズルニ、諸勝ハ光仁天皇ノ皇子岡成ハ桓武天皇ノ皇子ニシテ、皇子賜姓ノ始メナリ、

〔公卿補任桓武〕延暦廿一年十二月己酉、賜良峰朝臣姓于安世、桓武貫右京、

〔享祿本類聚三代格十七〕詔朕嵯峨常揖讓纂踐天位、德愧睦邇、化謝覃遠、徒歲序屢換、男女稍衆、未識

子道、還爲人父、辱累封邑、空費府庫、朕傷于懷、思除親王之號、賜朝臣之姓、編爲同籍、後從事於公、出身之初、一叙六位、唯前號親王、不可更改、同母後產、猶復一例、其餘如可關者、朕殊裁下、夫賢愚異智、顧育同恩、朕非忍絕、廢體餘分、析枝葉、固以天地惟長、皇王遞興、豈競康樂於一朝、忘彫弊於萬代、普告内外、令知此意、

弘仁五年五月八日○又見河海抄

〔新撰姓氏錄左京皇別〕源朝臣 源朝臣信年六腹廣弟源朝臣弘年四腹上毛弟源朝臣常年四、弟源

朝臣明年二已上二人妹源朝臣貞姬年六腹布妹源朝臣潔姬年六、妹源朝臣全姬年四已上二人妹

源朝臣善姬年二腹百信等八人是今上嵯峨親王也、而依弘仁五年五月八日勅、賜姓貫於左京一條

一坊、即以信爲戶主、

〔三代實錄清和〕貞觀五年正月三日丙寅、大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定薨、略○中定者嵯峨

太上天皇之子也、略○中弘仁五年特蒙明詔、諸皇子未爲親王者、皆賜姓源朝臣、定是源氏之第六郎也、

其源之命氏始於此矣、太上天皇以定奉淳和天皇爲子、淳和天皇受而愛之、過所生之子、更賜寵姬永

原氏、令爲之母、故世稱定有二父二母焉、原姬所謂亭子女御也、天長四年二月廿八日、淳和天皇奉書

皇子賜姓

〔神皇正統記村〕源氏と云事は、嵯峨の御門世のついえを思しめして、皇子皇孫に姓を給ひて人臣となし給ふ、すなはち御子あまた源氏の姓を給はる、桓武の御子葛原親王の男高棟平の姓を給はり、平城の御子阿保親王の男行平、業平等有原の姓給る事も此後の事なれど、是はたゞの義なり、弘仁以後、代々の御後はみな源の姓を給ひしなり、親王の宣旨を蒙る人は、才不才によらず、國々に封戸なき立られて世のついえなりしかば、人臣につらね、官學して朝要にかゝり、器に才たがひ昇進すべき御おきてなるべし、姓を給る人は直に四位に叙す皇子皇孫に才たがひ器に才たがひ昇進すべき御おきてなるべし、姓を給る人は直に四位に叙す、三位なるべしと云、定卿三位に叙せしむ、是も嵯峨の御子、大納言かくて代々のあいだ姓を給ひし人百十餘人もや有けん、然れど他流の源氏大臣以上にいたりて、二代と相續する人の今やでさこえぬこそいかなる故ならんとおぼつかない、嵯峨の御子姓を給ひし人二十一人、此中大臣にのぼる人常の左大臣兼大將、信の左大臣、融の左大臣、仁明の御子に姓を給る人十三人、大臣にのぼる人多の右大臣兼大將、光の右大臣兼大將、文德の御子に姓を給はる人十二人、大臣にのぼる人能有の右大臣兼大將、清和の御子に姓を給る人十四人、大臣にのぼる人十世の御末に、實朝の右大臣兼大將、親王の苗裔なり、陽成の御子に姓を給る人三人、光孝の御子に姓を給る人十五人、宇多の御孫に姓を給りて大臣にのぼる人、雅信の左大臣、重信の左大臣王の男なり、殺實親、醍醐の御子に姓を給はる人二十人、大臣にのぼる人高明の左大臣、兼大將、兼明の左大臣、後二親王とす、中務卿なり、此後は皇子の姓を給ふ事はたえにけり、皇孫にはあまたあり、任大臣を本と記すによりてことごとく不載、ちかくは後三條の御孫に有仁の左大臣、兼大將、輔仁の親王の男、白河院の二世の源氏にて大臣にのぼれり、かやうにたゞく大臣にいたりても、いづれか二代とあひつづける、はとむと納言以上にて傳はれるだに稀なり、雅信の大臣の末ぞおのづから納言までものぼりて残りたる、高明の大臣の後、四代大納言にて有しもはやく絶にき、いかに故ある事かとおぼえ

任也、但一代親王一巡ヅ、悉被任之極秘說也云云、

別巡給

第一親王每年二合依別勅也、今案別巡給是也云云、別巡給トハ、當帝后腹親王不論男女、可預別巡給之由被宣下ヌレバ、一人御坐ノ時ハ、每年任之、二人之時ハ、隔年任之、只可依別巡給之人數也云云、

別給

依勅定懸親王巡也、又非后腹當代親王給之號也、一人之時每年任之、但末代無沙汰、寛元宗尊親王非后腹當代親王也給可有之歟、不有之歟有沙汰、遂不被申之、非后腹當代親王給某親王當年別給ト在之、勝子內親王例也、此義可然歟、依勅定懸親王巡云々、寛平九六、廿六、宣旨云、尙侍藤原淑子別給掾一人、一分一人、是年給一分之外也、每年任之、先人之說也云云、今案攝州師遠歟

〔三代實錄清和〕貞觀七年正月廿五日丁未、太政大臣從一位臣藤原朝臣良房略等奏議言、伏見自延曆至仁壽六代親王、年料給分、主典史生等、每代各一人、互稱一代、不用通計、是以或隔一年、即給、或經數年、稀給、或省內親王、不關給例、執論各殊、披訴聞出、天慈攸及、還似不平、謹按此事、格式不載、宣旨非切、從見流例、未詳本源、方今年中所出之給、始自三宮、至於諸司、有勞應補者、居常苦其不足、而親王之數四十有餘、非隔數年、難可周給、伏請總計親王、不別代々、輪轉而給、鱗次弗愆、將使先後無恨、男女共欣、永々相承、以爲成式、但先來有勅、所別給者、不入此限、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

〔本朝世紀〕天慶元年十月八日、太政大臣參入職御曹司、被定行雜事、大納言平伊望卿着宜陽殿西廂座、召大外記三統公忠、仰云、四品行明親王、去延長五年八月、官符僞、件親王今上親王所定如件者、而所司自延長六年、以件親王爲寛平御後、載巡給簿行來久、不可追改、宜准故雅明親王例、從彼延長六年爲寛平御後、宛其年官者、即書件宣旨、續納已了、

〔除目抄〕

一親王巡給事巡給、別巡給、別給、已上其號有三種、年給目一人、一分一人、外巡給二合事也、

一巡給巡給事又
在別抄、

一代御後親王、不論男女預之、寛平御後親王有例巡給別巡給云々、延喜六年五月宣、

一説假令

白川院親王 一年 堀川院親王 一年 鳥羽院親王 一年

今案、是其代親王一巡、悉被申任之心也、

一説假令

白川院第一親王 一年 次年同院第二親王 次年同院第三親王

次年堀川院第一親王 次年同第二親王

次年鳥羽院第一親王 次年同第二親王

今案、是其代ノ親王一人ヅ、可被申之心歟、

一説

一年白河院第一親王 堀河院第一親王 鳥羽院第一親王

次年白河院第二親王 堀河院第二親王 鳥羽院第二親王

次年白河院第三親王 堀河院第三親王 鳥羽院第三親王

今案、是其代ノ一二親王遠ヲ分別シテ、一年ヅ、可被申之心也、

古抄云、江帥卿示予師遠云、巡給ハ一代々々親王ヲ可作巡給之次第也、假令後朱雀院親王

一巡、次後冷泉院親王一巡、次後三條院親王一巡之類是也、云云、而予師遠所案異之、只依巡

給宣旨之次第可被任也、假令巡給ノ人三人アラバ三年ニ一度、四人アラバ四年ニ一度可

〔日本後紀^{平城}〕大同三年五月乙巳，停有品親王月料。

〔續日本紀^{文武}〕大寶三年九月辛卯，賜四品志紀親王，近江國鐵穴。

〔續日本紀^{文武}〕慶雲二年四月庚申，賜三品刑部親王，越前國野一百町。

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

應禁皇親之祿，乞賣賤價事

右檢案內太政官去延曆十六年四月廿四日下諸國符傳，自今以後公私舉錢，宜限一年收半倍利，雖積年紀不得過責者。今右大臣宣奉勅，如聞王親或募多祿，先受少價，或設重質，貸乞賤物，苟貪目前，不顧後弊，報價之日，既過一倍，因茲所司豪民，競求利潤，好爲與借，班祿之日，濫訴繁多。自今以後，賣買祿物，不得過於半倍之利，如有違犯，依法科處。

延曆十八年三月九日

〔類聚三代格^{十二}〕太政官符

一應皇親准主典奪祿事

右同前^{京職}左解僞，被太政官去弘仁十年十一月五日符傳，當路不掃漬，穿垣引水，藥水侵途等，諸司諸

家并內外主典已上，移式部兵部貶考奪祿，四位五位錄名奏聞，无品親王家及所々院家，以其別當官

准諸家司亦移省貶奪其雜色番上已下，不論陰贖決答五十者，今案符旨，皇親此雜色之內，須不論陰

贖決答，謹案律條，皇親議論人也，蔭同三位，誠雖被下符，贖理不便，望請准主典移省奪祿者，其前符疎

而不勞皇親，今如所請，當奏請之，但皇親蕃多事，惟輕碎，宜依請。

以前大納言正三位兼行右近衛大將良峯朝臣安世宣奉勅，宜依件行之。

天長五年十二月十六日^{○又見政事略八十二}

〔拾芥抄^{中未}〕親王 諸國日一人，一分一人，^{或云：當代第一親王者，每年賜祿，白餘親王者，又或式部卿者，一分二人也。}

大同四年六月廿三日

〔日本後紀^{十二}〕延暦廿三年九月甲午、式部省言、案公式令、親王一品已下、職事初位已上、並可自牒諸司、雖是三位已上、皆無以家司牒及解向官司之文、而案去延暦廿一年九月廿三日格云、親王內親王、並年滿四歲、始充帳內者、今親王內親王、或年未成人、或不便文筆、至經官司若爲申牒、又同令牒式、三位已上去名、然則親王四品已上、去名明矣、而散事數人、同品及同官位姓之類、既不署名、何以辨知、仍問法家、答云、如此之類、可有別式者、未審所從者、勅、幼稚親王、既不便筆、三位已上、亦無可署、准據令格、還成疑滯、必須自牒、事有不穩、自今以後、宜親王四品已上、及職事三位已上、並聽以家司牒申牒諸司、其牒首、並具注其官品其親王家、及其官位姓名家牒、以別同異、牒尾家令已下兩人署之、无品親王內親王者、並別當官人署名申牒、牒式准^上定、別當人、依勅處分、^略下

時服

季祿

〔延喜式^{十二}中^略時服^略〕無品親王時服、^{亦同}親王、絹五十匹、細布四十七端、二丈一尺、^{各加三端二百屯}

〔續日本紀^二文^武〕大寶元年八月己酉、皇親年滿者、不論官不、皆入賜祿之額、

〔延喜式^{十八}式^略〕凡親王知太政官事者、其季祿准^右大臣、預議政者、一品二品准^大納言、三品四品准^中納言、

式

〔續日本紀^三文^武〕慶雲三年二月辛巳、知太政官事二品穗積親王、季祿准^右大臣給之、

〔古京遺文〕建多胡郡辨官符碑

辨官符^略中、和御四年三月九日甲寅宣、^略中、太政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、^略麻右

大臣正二位藤原尊、^比不

○按ズルニ、親王ノ季祿ハ右大臣ニ准ズト雖、其官ハ左大臣ノ上ニアルナリ、

〔續日本紀^{二十三}〕天平寶字五年二月丙辰朔、勅、朕以除閏、歷覽前史、皆降親王之禮、並在三公之下、是以別預議政者、月料馬料春秋季祿夏冬衣服等、其一品二品准^御史大夫、三品四品准^中納言給之、

○按ズルニ、親王品田ノコトハ、俸祿部位田ノ篇ニ詳ナリ、就テ看ルベシ、

〔令義解^四〕凡食封者、一品八百戸、二品六百戸、三品四百戸、四品三百戸、內親王^中祿中、

〔延喜式^二〕凡職封者、解官并身薨即還收^略、^中品位封者、薨年之料、全納喪家、無品封亦准此、

〔日本書紀^二〕十一年三月辛酉、詔曰、親王以下、至于諸臣、被給食封、皆止之、更返於公、

〔續日本紀^二〕大寶元年七月壬辰、勅親王已下、准其官位賜食封、

〔續日本紀^三〕慶雲元年正月丁酉、二品長親王、舍人親王、穗積親王、三品刑部親王、益封各二百戸、三

品新田部親王、四品志紀親王、各一百戸、

〔續日本紀^三〕慶雲二年十一月庚辰、有詔加親王諸王臣食封各有差、先是五位有食封、至是代以位

祿也、

〔續日本紀^六〕和銅七年正月壬戌、二品長親王、舍人親王、新田部親王、三品志貴親王、益封各二百戸、

略○^中封租全給其食封田租全給封主、自此始矣、

〔續日本紀^九〕神龜元年二月甲午、是日一品舍人親王、益封五百戸、

〔類聚三代格^八〕太政官謹奏

應賜無品內親王食封事

右奉勅件封戸、大同三年十月十九日論奏云、一品已下食封、并四位祿等並據令訖、但先經恩賜、更不
收返、其加階進級之日、即便廻給各得其所、又大同三年六月廿九日式云、無品親王食封二百戸、男女
並同、但叙品之後、一從停止者、今檢奏、無品內親王叙四品之日、封邑一百五十戸、然則無品之日封
二百、叙品之時還失五十、事之所在、良不穩便、宜議定奏聞者、謹依勅旨商量件封戸、大同三年論奏、依
令已訖、然則女者良宜半減、內親王准令半之、其先經恩賜、後據論奏、更不取返、謹錄事狀伏聽天裁、謹
以申聞、謹奏、勅依奏、

〔三代實錄九〕貞觀六年八月八日壬戌右京人二品秀良親王家○令正六位上宇自加臣吉人賜姓笠

朝臣○中阿波國名東郡人二品治部卿兼常陸太守賀陽親王家○令正六位上安曇部栗麻呂改部字

賜宿禰

結朋舊

〔西宮記臨時〕諸宣旨云云

當代親王勅別當上卿奉勅賜辨辨仰史令書宣旨

〔類聚符宣抄七〕從二位行權中納言兼中宮大夫右衛門督藤原朝臣齊信

左中辨源朝臣道方傳宣左大臣宣奉勅件人宜爲今上敦成親王家別當者

寬弘五年十月十六日

左大史小槻宿禰奉親奉

〔貞信公記〕延長五年二月十二日甲午東宮御修善於山座主所行也十親王約口內裏彼親王別當○淑有朝臣依院御消息昇口親王及陪從四位以下六位以上賜祿有差

〔令義解五〕凡給帳內一品一百六十人二品一百四十人三品一百二十人四品一百人○中女藏牛減數不等從多給

帳內舍人

〔續日本紀元正〕養老三年十月辛丑詔曰○中舍人新田部親王百世松桂本枝合於昭穆萬雉城石維

聲重乎國家理須吐納清直能輔洪胤資扶仁義信翼幼齡然則太平之治可期隆泰之運應致可不慎

哉今二親王宗室年長在朕既重實加褒賞深須旌異然崇德之道既有舊貫貴親之理豈無於今其賜

一品舍人親王內舍人二人大舍人四人衛士三十人益封八百戶通前二千戶二品新田部親王內舍

人二人大舍人四人衛士二十人益封五百戶通前一千五百戶其舍人以供左右雜使衛士以充行路

防禦於戲欽哉以副朕意焉凡在卿等並宜聞知

〔令義解三〕凡位田一品八十町二品六十町三品五十町四品三十町

〔延喜式二十二〕凡授品田者親王內親王其數一同

親王品田

徳川内府○征夷御委任候廣大政返上將軍職辭退の雨條斷然被開召候御癸丑○嘉永元年、以幸未嘗有の國難先帝○孝頻年被惱辰襟被御次第衆議の所望に付依之御慮被決上政復古國威挽回御基被爲立候間、自今攝關幕府等廢絶即今先般の總裁議定、參與の三職を置れ、萬機可被爲行、諸事神武創業に基き、綽紳武辨堂上地下の別なく、至當の公議を盡し、天下御休成を固く可被遊報慮に付、各勉勵舊愆の汚習を洗ひ、盡忠報國の誠を以て可奉公事○略中

三職人撰

總裁 有栖川宮

議定 仁和寺宮 山科宮○略中

太政官始追々可被立候間、其旨可被心得候、

親王家令

〔令義解一家令職具〕親王、内親王、准此、但文學不在此例、

一品

文學一人、家令○執、攝、攝、授、餘文學准此、家令一人、掌總知家事、餘家令准此、扶一人、掌同家令、餘扶准此、

大從一人、掌檢校家其餘從准此、少從一人、掌同大從、大書吏一人、掌勘寫文案、餘書吏准此、少書吏

一人、掌同大書吏、

二品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、大書吏一人、少書吏一人、

三品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

四品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

〔伏見宮系圖〕朝彦、文久二年九月三日、國事扶助被命、

〔議奏言渡〕慶應元年十月六日、尹宮以使兩役へ被附、

不肯^臣朝彦、段々蒙仰昨日迄御用者相務候處、豈計不誠爲得止次第、相成積年之寂慮、不仕實
微恐入候、是全^{臣等}不盡其職之儀、下恨身外無之、實以不違恐懼候、仍不忠罪被正、扶助被爲免候
樣、伏相願候事、

十月六日

朝彦

議奏傳奏衆中^江

右經内裏、以權少輔申上被召留諸大夫召設申渡候、七日、被召留候御請、不取致、以使被申上、權少
輔申上候、

〔議奏言渡〕慶應二年九月四日^略○中尹宮被附

先年來不肯^{朝彦}、格別蒙朝恩畏入候、然處去月晦夜、不願恐諸藩召之儀、押而言上、何共恐入候大
算、是迄トテモ不行届、此後尙又不計御失體ヲ、願候儀、而者實ニ恐懼之至、仍國事扶助以御情
堅被免候、權侍御沙汰候事、

九月四日

朝彦

右於御前御評議之處、被止御前、

〔議奏言渡〕慶應二年九月廿七日、常陸宮^{○山陽宮與}王^{○山陽宮與}、已下御答被仰出、

常陸宮、此度國事掛依所勞理乍申上、他出、利止宿、且從來不行跡、旁以盤居被仰出候事、

國事掛被止候事^{○中}

但常陸宮諸大夫召設、室殿御申渡、小時御請以^{四分}上、被申上候、

〔嘉永明治年間錄^{十六}〕慶應三年十二月十二日、勅シテ總裁議定參與^{三職ヲ置キ}、

太宰府 帥 親王任之 權帥○中略北山抄云、爲尊親王爲太宰帥正、惟仲帥之時、以彼親王任他官、此事無謂、可任權帥也、何以正帥任他官哉、

〔日本書紀二十〕十年正月癸卯、是日以大友皇子拜太政大臣、

〔日本書紀三十〕四年七月庚辰、以皇子高市爲太政大臣、

〔續日本紀三〕大寶三年正月壬午、詔三品刑部親王、知太政官事、慶雲二年九月壬午、詔二品穗積

親王、知太政官事、

〔公卿補任文武〕慶雲三年、知太政官事二品穗積親王、二月辛巳、准有大臣、

〔續日本紀八〕元正、養老四年八月甲申、詔以舍人親王爲知太政官事、新田部親王爲知五衛及授刀舍人

事、

〔增鏡五〕建長四年正月八日、院○後略の御前にて御かうふりし給ふ、○中略御とし十一なるべ

し、中務の卿宗尊親王と申めり、おなほ二○二、百、二、抄、四、月十九日、都を出給ふ、其日將軍の宣旨かうふ

り給ふ、かゝるためしはいまだ侍らぬにや、上下めづらしくおもしろき事にいひさわぐべし、

〔勸仲記〕正應二年十月九日、親王○後深草皇子久明今夜被宣下、征夷大將軍事、十日、今日將軍御下向關東、

先未明入御六波羅、八葉長物見御事、

○按ズルニ、此他宗尊親王ノ子惟康、久明親王ノ子守邦ノ二親王モ亦、征夷大將軍ニ任ゼラレ

タレド此ニ略ス、官位部征夷大將軍篇參看スベシ、

〔神皇正統記後醍醐〕かくて親王○後村上元服したまひ、直に三品に叙し、陸奥の太守に任じまします、

このくにの太守ははじめたることなれど、たよりありとてぞ任じたまふ、

〔三代實錄四十二〕元慶六年六月廿六日丁酉、是日以一品行式部卿兼常陸太守諱○光孝親王爲左相

撲司別當、以三品行兵部卿本康親王爲右相撲司別當、兩親王下紫宸殿庭奉勅拜舞而出、

二品 左右大臣

三品

四品 大納言 太宰帥 八省卿

〔延喜式^{十八}〕凡諸王諸臣任太政大臣者、不得以親王爲左右大臣、但得任八省卿、諸臣任太政大臣者、不得以諸王爲左右大臣、親王任左大臣者、得以諸王爲右大臣、但親王諸臣不得爲左右、

〔官職秘抄^上〕八省卿 中務 式部 兵部 以上必以親王任之 治部 民部^{〇中} 以親王被任例
實爲親王

〔官職秘抄^下〕彈正臺 尹 爲親王官

〔類聚三代格^五〕太政官符

應親王任國守事

上總國 常陸國 上野國

右檢中納言從三位兼行左兵衛督清原真人夏野奏狀稱、設置八省職寮相隸、百官守職庶務俱成、一事有關萬事皆緩、今親王任八省卿、此地望素高、不得就職、無知辟務、仍官事自懈、政迹日蕪、非是庸愚之所致、因地勢使之然也、凡官人遷代必畧解由、至有缺物、不免償物、居此之費、見其如此、望請點定數國爲親王國、迭任彼國、身留京都、意欲居京官者、一兩人將聽、若有守闕者、不補他人、其料物者、納置別倉、支无品親王之粟、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峰朝臣安世宣奉勅依奏、但件等國守官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太守、限以一代、不可永例、

天長三年九月六日

〔官職秘抄^下〕諸國 守^{〇中} 上總、常陸、上野、太守爲親王、介爲受領、仍歷外記史輩、不任之、與親王不可相並之由、二條關白被執之、然而其例多、又近代不及此儀歟、

〔續日本紀九〕神龜元年二月甲午、二品新田部親王授一品、

〔皇胤紹運繼〕賀陽親王（額武皇子）二品利部卿、兵部卿、治部卿、貞觀十三、

大野親王（額武皇子）四品治部卿、延

坂本親王（額武皇子）四品治部卿、延

有明親王（額武皇子）三品兵部卿

〔小右記〕寬弘八年九月十日庚辰、故院（後）一宮達叙四品之御慶事、送書狀於母氏許也、十八日戊子、

昨日戌刻、故院宮達參內於射場、令奏慶賀訖、（其道理、故院門）即被聽昇殿、依召參御前候、又廂以管圓

座爲座、豐可令退下、中納言隆家、行成、參議經房等相從親王云云、候御前之間、左大臣（藤原）候御帳

邊云云、資平所談、

○按ズルニ、故院宮達トハ、後朱雀天皇ナルベシ、皇胤紹運繼ヲ按ズルニ、後朱雀院（諱敦實、母

弘六十一、廿五降誕、同七、正十六爲親王、二、トアリ、御母ハ上東門院ナリ、此天皇ヲ除クノ外ハ皇

子ナキナリ、

〔光臺一覽〕母親王御昇進の次第は、親王宣下は有て、いまだ位に叙し給はぬを無品親王と申、夫

より四品三品二品と上り給ひ、一品は至極の先途と心得べし、官は中務卿、式部卿、兵部卿、又は太

宰帥、彈正尹等也、

〔有栖川系圖〕詔仁親王

弘化二年二月廿七日一品宣下、非一世親王者、其例邂逅雖不容易、被及六旬有餘、且病氣危篤之

間、以格別之敬慮、被宣下不可爲後例、

〔令義解（宣下）〕親王

一品 太政大臣

任官

〔令義解^{十一}〕凡決大辟罪皆於市五位以上及皇親犯非惡逆以上聽自盡於家^{謂今罪人在家自死也}

〔日本書紀^{三十三}〕朱鳥元年十月己巳皇子大津謀反發覺逮捕皇子大津庚午賜死皇子大津於譯語

田舍

〔續日本紀^{十一}〕武天平元年二月辛未左京人從七位下漆部造君足无位中臣宮處連東人等告密稱左

大臣正二位長屋王私學左道欲傾國家壬申遣一品舍人親王^略○中等就長屋王宅窮問其罪奏

西令王自盡其室甲戌勅曰^略○中長屋王者依犯伏誅雖准罪人莫醜其葬矣

〔日本書紀^{二十九}〕十四年正月丁卯更改爵位之號仍增加階級明位二階淨位四階每階有大廣并十

二階以前諸王已上之位

○按ズルニ此時ノ制ハ親王諸王同一ニシテ諸王トイヘドモ尙諸臣ト異ナリキ

〔續日本紀^二〕武大寶元年三月甲午始依新令改制官位號親王明冠四階諸王淨冠十四階合十八階

略○中始停賜冠易以位記

○按ズルニ此ニ至リテ諸王諸臣ノ位階ハ同一トナリ親王ノ位階ノミ特異トナレリ

〔令義解^一〕親王

一品^{謂品位也親王稱}二品 三品 四品^略○簡

〔令義解^七〕凡應叙親王四品

〔光臺一覽〕親王の位は臣下の如く正從を不分上下をいはず位と稱へず三品四品或ハ二品一

品と稱へ無位の親王は無品の親王と稱へ申事也

〔續日本紀^四〕和銅元年正月乙巳是日授四品志貴親王三品

〔續日本紀^六〕靈龜元年正月癸巳授二品穗積親王一品

〔續日本紀^八〕元正養老二年正月庚子詔授二品舍人親王一品

親王、太政大臣、大臣若有國之元老、朝之重臣、別聽乘輦車出入宮中。

〔文德實錄〕^五仁壽三年六月癸亥、一品太宰帥葛原親王薨。^{○中}勅賜輦車入宮、禮儀異諸親王。

〔文德實錄〕^九天安元年四月丙戌、有勅許無品惟喬親王帶劍、子時皇子年十四、未加元服。

〔令義解〕^{後一}凡親王及子者、皆給乳母。^{謂者內親王、據諸王所生子者不在給限也。}親王三人、子二人、所養子年十三以上、雖乳母身死、不得更立替其考叙者、竝准官人。

〔令義解〕^四凡陰皇親者、親王子從四位下、諸王子從五位下、其五世王者、從五位下、子降一階、庶子又降一階、唯別勅處分不拘此令。

〔律疏名例〕六議

一曰議親謂皇族及五等以上親。^{○下}

○按ズルニ、皇親罪アレバ、先ヅ其罪ヲ議センコトヲ奏請シ、裁可ヲ待チテ後決罰スルナリ。

〔令義解〕^九凡百官在職薨卒、常司分番會喪、親王及太政大臣散一位、治部大輔監護喪事。^{○中}內親

王女王及內命婦亦准此。

〔令義解〕^九凡職事官薨卒、賜物。^{○中}親王及左右大臣准一位。^{○中}其無位皇親准從五位三分給二。

〔令義解〕^九凡皇親及五位以上喪者、並臨時重給送葬夫。

〔令義解〕^九凡親王及三位以上、暑月薨者。^{謂六月}給水。

〔延喜式〕^{十一}凡親王及大臣薨、即任裝束司及山作司。^{或在主行所及山作所、經重閣三品高下、事見葬記。}送葬之日、勅使二人、

一人持詔書、一人持位記、若無贈位者、一就弟子弔贈。

〔百一錄〕延寶三年六月廿五日、八條中務卿宮薨去。^{行年廿一}新院^{○後}第一皇子、禁裏御柱立依、三日、廢朝

延引、兼而今日可被行之處也。七月十九日、吉良上野介上著、中務卿宮^{八條}依薨逝爲御侮。

〔百一錄〕元祿七年五月十八日、伏見殿一品式部卿貞致親王薨、遺市中歌舞三ケ日。

龜井隱岐守家來

福原權左衛門

五月十八日

御附札

書面之通御心得不苦候事

一右御同人様御用人西金大夫方を以演説

攝家親王方之御同宿之儀、書面之通御心得不苦候得共、於彼方同驛止宿ハ殊之外六ヶ敷被

申候由美濃守及承候儀も有之候、心得之儀ハ、書面之通ニて宜候得共、右之義ハ御勘辨可有

之義ト存候、此段御心得迄申候様被、申聞候旨被申候、略 節

〔途中行逢會釋〕享和元酉年二月四日、遠藤但馬守様方高家戸田土佐守様江御問合

堂上之衆於途中行逢候節會釋之儀別に禮節も無之事に候間、旅中にて當地之通相心得、攝

家親王門跡方は、乘輿之儘片寄在足見計通行可致旨、伊豆守殿御書取を以被仰渡候、依之爲心

得書付差出、同年二月十六日伊豆守殿江伺置候處、同廿八日御差圖馬上勤之嫡子途中にて堂

上衆行逢候節之心得も御書取を以、左之通御差圖有之、

乘輿にても馬上にても、同様之儀と差別無之事、略 節

〔五街道取繕〕御朱印其外行逢候節之心得又は及不敬候もの之事

攝家親王門跡方行逢候節乘輿之儘片寄罷在候は主人之義にて、陪臣之分は、乘輿御届相濟行

列之内に候共、駕籠之儘罷在候儀には有之間敷下乗いたし可申事に候、尤下に時宜いたし候

分には無之候得共、立居候筋には有之間敷候、略 節

〔帝王編年記〕文武大寶元年、今年以皇子號親王、又被止親王乘馬出入宮門、

〔新儀式〕五時下親王公卿有別勅、隨乘輦車出入宮中并帶劔事

〔延喜式彈正〕凡三位已下於路遇親王者下馬而立但大臣斂馬側立

〔政事要略八十四〕彈例曰凡相遇親王者三位下馬而立四位已下跪座但大臣斂馬側立又條曰三位

於宮中遇親王者跪座但大臣不得跪座者

〔西宮記臨時〕致敬禮

車禮雖不載式彈正式以親王大臣共相遇者各留車前駢下納言逢親王大臣抑車大臣前駢下

〔拾芥抄仲末〕車禮雖不載式彈正式以

親王大臣共相逢者留車前駢下納言逢親王者抑車大臣前駢下參議逢親王大臣者參議放牛立榻

式不立納言以下逢親王者放牛可立榻

〔弘安禮節〕路頭禮事

一遇親王禮 大臣共扣車僮僕互下馬大臣前駢以下列居車傍親王前駢步行過之親王車過畢大

臣僮僕騎馬進行若親王車自後來者大臣車直對親王車立之自餘同輩准之

〔准后親王座次事〕飛鳥井雅康正筆ノ寫

立車事

二品親王御車ハ殿下ヨリ上ニ可立之無品親王ノナラバ殿下ヨリ下ニ立之太政大臣ヨリハ上

也但於陽明門者雖二品親王御車殿下ノ御車ヨリ下ニ立

〔途中行逢會釋〕文化十四丑年五月十八日大目付井上美濃守様江差出候處御附札濟

一御攝家方親王方御門跡方御行逢之節ハ乘輿ノ儘片寄扣罷在見計致通行候哉

但御旅中ニテ右之御方之御泊驛ハ可相成丈ヶ止宿不致心得ニ罷在候然處跡方右之御方

之御通行ニテ自然川留等有之先之驛迄御越不被成萬一同様御泊ニ相成候節ハ御先方御

差支不相成候之様本陣明ヶ同驛ニテ脇本陣或ハ寺院等江止宿仕罷在候儀ハ不苦候哉

政大臣見親王及親王、並不動也、以外不動、

〔日本紀略卷八〕弘仁十年六月庚戌制諸司於朝堂見親王太政大臣以禮折代跪伏以起立代動座者、

〔延喜式式部十〕凡在朝堂座見親王及太政大臣者皆磬折而立若見左右大臣及左右大臣見親王及太

政大臣者並起座即就座及出門訖乃以次就座、

〔延喜式式部十八〕凡親王任省卿臺尹就曹司廳者五位已上並立床前六位已下磬折而立就座訖乃以次

就座其雜公文令錄疏取署、

〔延喜式式部十一〕凡親王太政大臣左右大臣入朝堂者諸司皆起座親王太政大臣座定乃以次復座退

出亦同、

〔延喜式彈正十〕凡親王大臣及一位二位於五位以上答拜於六位以下不須、

〔禁中方御條日十七箇條〕一、公之下親王其故者右大臣不比等、著舍人親王之上殊舍人親王仲野

親王贈太政大臣穗積親王准右大臣是皆一品親王以後被贈大臣時者先三公之下可爲勿論賦親

王之次前官之大臣三公在官之内者雖爲親王之上辭表之後者可爲次座、

○按ズルニ公卿補任ニ刑部親王穗積親王知太政官事タル間ハ三公ノ下ニ列スサレドモ續

日本紀ヲ見ルニ親王ハ皆三公ノ上ニ列セリ不比等ノ舍人親王ノ上ニ著クト云ヘルハ誤ナ

リ補任ニ養老四年右大臣藤原不比等八月三知太政官事舍人親王八月四ト見エタレバ不比

等ノ薨後ニ任セラレシモノナリ二品仲野親王ハ宇多天皇ノ御外祖ナリ一品太政大臣ヲ贈

ラレシナリ二品穗積親王ノ右大臣ニ准セラレシハ季祿ヲ右大臣ニ准ジテ賜ヒシナリ要ス

ルニ此條日ハ深ク典故ヲ考究セザルナリ、

〔令義解卷下〕凡在路相遇者三位以下遇親王皆下馬謂親王者有品无品並同若無品親王遇有品

下不及親王此條亦有品无品見別故也以外准拜禮其不下者皆斂馬側立謂二位以上遇親王三位遇一位

退出

次上卿引率諸卿參本宮著對代座座端勅別當留立中門外申慶再拜以可補家司者職訖加著對代

座端

次勅別當依召參進寢殿簾下給家司職事藏人侍者御監等夾名書折紙二通一女復座

次別當召家司上臈一人賜家司御監等折紙

次召職事上臈一人賜職事藏人侍者等折紙

次家司以下列立中門外申慶賀申次離列申事由加立列各二拜

次上卿以下退出諸卿退出勅別當留座

次職事覽家司以下之令旨入宮置座職事退入

次侍者持參硯置座退入

次勅別當加署

次侍者撤硯

次勅別當召家司賜家司御監等令旨取之退入

次勅別當召職事賜職事藏人侍者等令旨作入宮取之退入

次勅別當退出

〔新儀式臨時〕親王初謁見事

童親王初謁見一同正月朝覲之儀但不賜酒肴或乳母給祿

〔日本書紀持統〕四年七月甲申詔曰凡朝堂座上見親王者如常大臣與王起立堂前二王以上下座而

跪

〔令義解儀制〕凡在廳座上見親王及太政大臣下座左右大臣當司長官即勅座謂左右大臣見親王及太政大臣即勅座其太

職事

實豐○風早越前權介 國典○芝山宮內大輔

藏人

大江俊迪○北小路差次藏人 大江俊常○北小路藏人

侍者

小槻輔世○王生新藏人

御監

平清德○粟津左衛門少尉以下地下官人略之

立親王宣下次第

先諸卿著仗座

次上卿移著端座

次上卿令官人敷拭

次職事著拭下御名字

次上卿披見結申職事仰可爲今上親王之由

次上卿令官人召辨賜御名字大辨辨候者召大辨給之仰可爲親王可作官符之由辨退去仰史令成官符宣旨

次職事著拭仰以某人可爲今上親王勅別當之由

次上卿召辨仰其人今上親王勅別當事某人在座者上卿示之而後更召辨仰之

次上卿令官人撤拭

次諸卿起座

次親族拜近代不立各列上卿以下進弓塙拜舞以頭藏人爲申次終退出勅別當殘留更令職事奏別當展拜舞

○按ズルニ、是即チ親王宣下ノ始ナルベシ、

〔續日本紀三十一〕寶龜元年十月己丑朔、即天皇位於大極殿、十一月甲子、詔曰、中兄弟姊妹諸王等、悉作親王、氏冠位上給治給、中天皇御命衆聞食宜授從四位下諱、武桓四品、

〔勅仲記〕永仁元年十二月十日辛卯、入夜著東帶、用參內、立親王定也、職事定房奉行、中親王定上

卿權大納言運參之間、所被相待也、小時參入之間、諸卿著仗座、權大納言、中御門中納言、衣笠中納言、

下官、堀川宰相等也、小時移著端座、令敷帟、次職事定房下、御名字、藤子、龜山皇女爲親王、職事退、

次上卿召辨、右少仲親參進被下、御名字、辨結巾退、次職事仰勅別當、以權中納言藤原朝臣爲意子內

親王別當、召辨仰之、次上卿口口起座、進弓場有親族拜、中次定房、舞踏如例、一揖之後退出、中御門中

納言一人立留奏勅別當慶申、次同前中御門黃門一人可參、本所殿云々

〔輔世卿記〕天保六年九月十八日、今日已刻儲君、明立親王宣下也、奉行頭右中辨正房朝臣、中

立親王宣下

公卿

右大臣○九條 權大納言○藤原

新源大納言○廣幡

源中納言○久我

右衛門督○藤谷

宮内卿○梅小 左兵衛督○飛鳥

辨

光暉朝臣○日野

勅別當

新源大納言

家司

能通朝臣○六角

公前朝臣○姊小

延房朝臣○池尻

言成朝臣○山科

定德○梅小路

寬平

權大納言藤原朝臣公實

右中辨源朝臣重資傳宣、右大臣宣奉勅件人宜爲今上親王別當也、

康和五年二月九日

左大史紀盛言奉

奉字

可忌由見延木
記臣下無擇

臨字

可忌由見天册
記涉真臨義

太政官符、中務式部、民部、大藏、宮内省、

無品崇尊親王、歲二、

右今上親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

已上召仰、

參議左大辨從四位上兼行讃岐權守紀朝臣

延喜四年二月十日

左大史正六位上御船宿禰有方

去年十一月四日丙寅誕生于今七十箇日

太政官符、中務省

式部、民部、大藏、宮内等同

無品宗仁親王

右今上親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

修理左宮城使正四位上行左中辨兼越前權守源朝臣重資

康和五年六月九日

正六位上行左大史紀朝臣盛言

〔續日本紀二十〕天平寶字三年六月庚戌、帝御内安殿喚諸司主典已上詔曰中兄弟姊妹悉稱親王、止宣天皇御命衆聞食宣略中從三位船王、池田王並授三品略中從四位下室王、飛鳥田王並四品、

宗仁 尊明 後又慶仁
今上 實朝 朝臣 擇申

善仁 守成

院 明 實朝 朝臣 擇申、
後三條院 東宮、

貞仁 有成 博時

貞尊 不宜由公卿等申之 能見實朝等

陽成院 華山院 三條院云云 並貞字

故院仰曰、還可爲例、明衡曰、帝王三人被用、貞字、可謂無耻辱、

後三條院 後冷泉院 義忠朝臣 擇申

親仁 尊仁 能成

後朱雀院 後一條院 匡房朝臣 擇申

敦成 敦良 敦人

三條院

一一條院 齊光朝 擇申

一華山院 同上、或說輔正云々、

一圓融院 維時 擇申

一冷泉院 在衡卿 擇申

維時 擇申 故慶賴親王名、仍在衡卿 擇申 由見九條記、

一村上

一朱雀院等 可尋之

年月日書部

寬弘康和、以口宣仰下之於頭左中辨、大臣以下著仗座、道方依大藏人頭下、宣旨於大臣、大臣用

大辨下之、不可結、幸重不結、大辨出、服床子下史、凡大史、後日成官符、右狀必載今次公卿歷階下、參於弓場

殿、依執柄告可參歟、以藏人承曆內大臣、信長原不列而退出、願不叶時務、

列立、西面北上、應源氏近代必列、康和、大臣以下不列立、但外家公卿二人、殿上、

次執柄加列上、自殿上、出

以藏人頭被奏、其詞、某人、人候不云云、

人數多時、右乃大イ萬不千君等候、不止、可申歟、曾申返來、持符、願向御所方願曰、聞食ッ、不受拜之前

退、但下、自殿上、於三字、津保柱邊、可取、笏歟、公卿拜舞了、陣此間被仰勅別當、納言於大臣、大臣又如始仰下之、或於弓場殿

被仰下之、

別當一人留弓場殿拜

次公卿相引參入本宮

勅別當仰下家司職事人等、付福人等、

家司四位三

寬弘廿人、承曆康和三人、

職事四位五位

承曆康和三人

侍者二人、藏人二人、

予依擇申故敦文親王名辭退畢

今宮 正家朝臣擇申 未得解由

五月六日

松平越中守

武傳三卿宛

以上以越後申入披露濟被返書候、

親王宣下式

〔新儀式^五時下〕皇子給親王號事

皇子可給親王號大臣奉勅宣下所司此日外戚氏公卿於仁壽殿東庭令奏慶賀之由舞踏退出

〔江家次第^十〕當代親王宣旨事

藏人頭奉仰仰上臈博士令勘申御名字兼日示氣色當日仰之

博士進勘文^{江家不注年月日}

三以下^{並注本文并音訓有義紙懸紙川檀紙}

勘申御名字事

某書某反一也

同上某反一也

右勘申如件

年月日官姓名

頭以文刺奏之

於定被用嘉名

藏人頭書下^{宣旨無義紙懸紙}

少員時或有口宣例然而猶以書爲吉歟長曆小野大臣僞無先例不下範圍宣旨書於大辨

治曆四年院一人被下親王宣旨^{別紙}親王猶書之男女親王可爲別紙^{山内府}被申承曆實政爲頭

以博士勘文下之不可然云云往年注御年近代不然可爲今上親王^{近代不字}

月十日、中川宮自今被改稱賀陽宮候旨被仰出、三條殿御奉申達簡

○按ズルニ、賀陽宮ハ、明治維新後ニ久邇宮ト改稱アリ、

〔議奏言渡〕元治元年正月九日、濟範勅免之旨、殿下輔照司傳宣、御本役御承、

元勳修寺濟範多年謹慎、且今度一橋中納言已下、段々建言之次第モ有之、誠難被默止之間、以格

別之思召御答被勅免、伏見家江復系還俗被仰出候事、

勅免御世話卿代廣橋殿御申渡、復系還俗等武傳被申渡候、明十日右御請廣橋殿武傳申上、以女房

申上候、十七日、元勳修寺濟範、自今被稱山階宮候旨關白殿傳宣、六條殿御奉、廿七日、山階宮親

王消息宣下相濟旨、頭左中辨言上、以藤丸中上候、山階宮當今御納子、御願之通被仰出候旨、以大御

乳人御申出、廿八日、山階宮御參被伺天氣、今日元服任官常陸太守宣下、且昨日御納子親王宣下、

御冠拜領、勅使賜物等御禮被申上、賜祝酒、後時於常御殿御對面賜二獻女房、訖令退給簡

〔禁裏御所領〕元和三年禁裏御所領并公家衆御知行附略○中

一千石 有柄川中務卿職仁親王 一千石 閑院彈正尹直仁親王

一三千六百六十八升 八條宮式部卿親王 一千壹石七斗三升三合伏見院刑部卿親王

〔議奏言渡〕元治元年五月六日略○中武傳被附、

中川宮御家領 井伊掃部頭領分上知、近江國神崎郡位田村、市田村、河曲村、築瀬村之内、右四箇

村ニ而千五百石被相渡候尤地所割方、并鄉村引渡等之儀者、追而可相達旨年寄共申聞候、此段

右家江御達被成候様にと存候事、

五月

山階宮御方江 御家料千石被進之候

右之通被申出候間、御三卿江御達可申旨年寄共申聞候、右宮江被成御達候様にと存候以上、

如斯趣にて、秀宮様には下立賈御門之内下ル處へ、東山院之御舊殿を被用、從江戸造作被成、進千石に而親王家一軒、新規之御取立被進、今之閑院様是也、是も中御門院御幼年之砌は、隨分御懦弱に見へ給ひける故、其事關東へも洩聞へ、若もの事欠にと思召入有之而俗親王にて被差置也、夫故格別の思召入依有之被仰出けると、去御秘談承りし所也、然共末代俗親王四軒の列に立給ふ事、結構成御事也、關東の御書出しなかりせば、何地かの門跡方の御附弟となり給ひ、沙門の物うき御境界たるべきに、文昭院様^{○鎌川}天下をまろし召れし時、禁庭御裁判之始なりし故國王へ對し、仙洞様へ之御手前何角にかく被仰出ける物ならんと、無沙法に乍恐奉感歎御事ぞかし、^{○節略}

〔折たく柴の記〕^中廿七日^{○寶永六}年正月^略に參し時に、また封事を奉る^{○中}此封事御覽の後仰下されし事ふたゝび三たびのゝち申す所のことわりあり^{○中}やがて今の法皇^{○東}の皇子秀の宮とか申す御事、親王宣下あるべき由を申させ給ひたりけり

○按ズルニ、伏見、有栖川、桂、閑院ノ四家ヲ世襲ノ親王家ト爲シ、之ヲ四親王家ト稱ス、
〔實麗卿記〕文久三年二月一日、從正親町回文來、^{附九}日

青蓮院宮

方今國事扶助精勤ニ付、非常以格別思召、還俗御内意被仰出候旨、加勢長谷三位被申渡候、^{○下}

〔議奏言渡〕文久三年二月十七日、青蓮院宮、自今被稱中川宮候旨、阿野殿御奉被仰出候旨申達、八

月廿七日、頭左中辨、彈正尹宮、任官消息宣下相濟旨言上、^{御名字朝彦}以兒申上、彈正尹宮、今日元服

任官宣下目出思召候、御大刀一腰、御馬一匹、^{代前金}綿十把、二種一荷等賜之旨、目錄以越後被出、愛

宕侍從申渡尹宮參上、被伺天氣、今日元服任官宣下名字宸翰拜領、以御使御品々拜領御禮被申上、

賜祝酒、後時於御前御掛緒拜領御禮等、各以表使申入候、十二月九日、尹宮御參、今日隨身兵仗勅

授帶劔宣下御禮被申上、以表使申入、先是消息宣下相濟候旨頭辨言上、以藤九申上、元治元年十

愛仁親王 光格天皇御猶子

文政十一年八月廿三日親王宣下 ○節略

〔議奏日次第〕實永七年八月十一日甲辰東山院若宮秀親王家可有御取立之由被仰出之、享保三年正月十二日辛酉以秀宮可被稱閑院之由召被_{内々}法皇_{重元}思_令櫛司前大納言被仰於宮方、廿三日壬申辰刻親王_{仁直}宣下陣儀也、上卿藤大納言_{永福}兼榮、勅別當源大納言_{惟通}奉行職事重孝朝臣爲御祝儀御大刀御馬代_{十兩黃金鯛尾二}昆布_{一箱}御樽_{一被遣之}御使園中納言、二月十一日庚寅直仁親王今日元服被任彈正尹_{參入、自長橋車寄方被_參於常御所被拜龍顏申次右大將_{金公}賜_二獻_{女中}之爲御祝儀御大刀一腰御馬_{二十兩黃金一匹}紗綾十卷_紅昆布一箱、鯛一箱、生鯛一折、御樽一荷等被遣之、御使兼親〔光臺一覽〕親王家と申は、伏見京極、有栖川、閑院の宮也、已前は三軒にて有しが、中御門院の御父帝東山院宮方多くいましける中に、新大典侍の御腹とて、櫛司前故内大臣隆賀公之御女之腹に御兩宮、中御門院は御せうと、今の閑院直仁親王は秀宮とて御弟也、外に女院の御本腹に、一ノ宮貴の宮様とて、姫宮一方居坐かりける、實永六己丑年極月十七日東山院崩御の砌も、貴の宮様と秀の宮様とは、御部屋住にて御座被成けるを從關東被及聞食、御諸司代松平紀伊守信庸江御書到來せり、其寫し傳奏衆へ參り拜見覺工居申候、御文言には、一秀宮之御事、東山院御病中、被遊御苦勞候段被爲聞召候に付、今般親王家一家新規に被成、御取立、家領千石被遣之候、是者格別之思召依有之、後々之例には難相成思召候御事、右之趣、兩傳奏衆迄其方差越、急度可申達旨御謔之御事候、恐々謹言、}

御老中連名印如前

土屋相模守名乘書判

月日

松平紀伊守殿

文政五年十一月十五日爲御猶子^{十一} 同六年九月廿三日親王宣下^{十二}

熾仁親王 仁孝天皇御猶子

嘉永元年十月十八日爲御猶子^{十四} 同二年二月十六日親王宣下^{十五}
○節略

〔近代帝王系圖〕閑院宮

東山院

直仁親王

寶永七年八月十二日爲親王家 享保三年正月十二日稱閑院 同月二十三日親王宣下

興仁親王 櫻町院御猶子

寬保三年九月四日親王宣下

美仁親王 桃園院御猶子

寶曆十三年十月十六日親王宣下

孝仁親王 光緒天皇御猶子

文化五年三月四日親王宣下

寛文七年七月六日相續 同九年八月廿九日親王宣下 同十二年六月八日改花町稱
有栖川

正仁親王 東山院御猶子

寶永四年爲御猶子 同五年九月廿九日親王宣下

職仁親王 靈元院皇子

享保元年十月十一日正仁親王跡相續 同六年十二月三日移于新第 同十一年十一
月廿八日親王宣下

普仁親王 櫻町院御猶子

寛保二年三月十六日爲御猶子 同三年九月四日親王宣下

織仁親王 桃園院御猶子

寶曆十二年十二月七日爲御猶子 同十三年十月十六日親王宣下

昭仁親王 光格天皇御猶子

文化四年十二月十三日爲御猶子 廿四歲 同五年二月廿一日名字勘進 三月四日親王
宣下

幟仁親王 光格天皇御猶子

年三月十六日親王宣下

節仁親王 仁孝天皇皇子

天保六年七月廿三日御相續御治定 同七年三月四日依御違例移于桂家 同月五日親王宣下

淑子內親王 仁孝天皇皇女○節略

○按ズルニ、淑子內親王ハ、天保十三年九月十五日親王宣下、文久二年十二月廿三日內親王ニテ相續セラレタリ、

〔近代帝王系圖〕有栖川宮

後陽成院

好仁親王 高松

慶長十七年十二月廿六日親王宣下、二品彈正尹、

良仁親王 號「花町」、又號「桃園」、後水尾院皇子、

正保四年九月十五日爲親王 十一月廿七日相續改高松稱花町、即移彼亭、承應三年十一月廿八日踐祚、號後西院

幸仁親王 號「有栖川」

長仁親王 後西院皇子

寛文七年十一月穩仁親王跡相續十二 同九年二月廿五日親王宣下

尙仁親王 後西院皇子

延寶三年八月十二日長仁親王跡相續 貞享元年十一月廿七日親王宣下十四

作宮 始正宮、號常磐井、靈元院皇子

元祿二年十月十五日尙仁親王跡相續稱號改常磐井、

文仁親王 號京極、靈元院皇子

貞享五年八月六日有栖川幸仁親王爲養子、後被召返仙洞、元祿九年九月四日賜常磐井宮遺跡相續號京極宮、同十年五月十一日親王宣下

家仁親王 東山院御猶子

寶永五年十二月爲御猶子 同六年四月七日親王宣下

公仁親王 櫻町院御猶子

寛保二年三月十六日爲御猶子 延享二年二月一日親王宣下

盛仁親王 光格天皇皇子 號桂

文化七年九月十八日御相續稱號依思召自今被稱桂宮、十二月十八日御移徙 同八

御未ダ入内ナカリシカバ、先帝即チ仁孝天皇ノ猶子トナラセ給ヒシナリ、

〔後深心關白記〕應安元年正月廿一日、今夜上皇光崇一宮立親王宣下云云、及天明之程、三條大納言來相謁、語云、今夜宜下上卿云々、御名字榮仁、公卿亞相、權中納言實綱平宰相等參入、依別勅各立親族拜云云、

〔貞常親王記〕康正二年十月口日、從内御使源黃門來、故院被用異紋以下之事、其儘永世當家可用、且永世伏見殿御所ト可稱敬慮之旨傳申、

〔近代帝王系圖〕京極宮

正親町院

陽光院

智仁親王

號八條、關白秀吉公猶子、童名古佐麻呂、

天正十九年正月十六日親王宣下十二歲

智忠親王

元忠仁、號八條、

寛永三年十二月四日親王宣下

穩仁親王

後水尾院皇子

寛永廿年四月廿九日生、號幸宮、爲智忠親王養子、明暦元年十月十四日親王宣下、

邦忠親王 櫻町院御猶子

寛保二年三月十九日爲御猶子 同三年十月廿五日親王宣下

貞行親王 桃園院皇子

寶曆十年六月十八日御相續 同十三年十月八日親王宣下

邦頼親王 櫻町院御猶子、勅勤修寺寛實法親王、

延享二年十二月一日御猶子、勅修寺相續 同三年五月八日親王宣下 安永三年十二月廿五日還俗、伏見家相續 同月廿六日親王宣下

貞敬親王 後桃園院御猶子

寛政九年閏七月十日御猶子 八月五日親王宣下

邦家親王 光格天皇御猶子

文化十四年正月十一日爲御猶子 二月十四日親王宣下

貞教親王 仁孝天皇御猶子

弘化四年五月三日爲御猶子 十二歲 嘉永元年三月廿三日親王宣下 〇節略

○按ズルニ、當代ノ天皇ニ、未ダ皇后女御等ノ入内ナキ時、又ハ入内アリトモ未ダ皇子ノ御誕生ナキ間ハ、猶子養子ヲセサセ給ハザル例ニテ、伏見宮貞敬親王ハ、當時光格天皇ノ中宮ニ未ダ皇子オハセザリシ故ニ、先帝即チ後桃園天皇ノ猶子トナリ、貞教親王ハ、當時孝明天皇ノ女

永祿六年十二月廿一日親王宣下

邦房親王貞康親王男、實弟、元邦真、

天正三年二月廿一日親王宣下

貞清親王後陽成院御猶子

慶長十九年正月十九日叙二品

邦尙親王依所勞、未元服

承應二年十一月廿九日薨四十歲

貞致親王邦道親王跡相續、後水尾院御猶子、

萬治三年十月十七日親王宣下

邦道親王邦尙親王跡相續

慶安二年十一月廿六日親王宣下

邦永親王靈元院御猶子

天和三年三月十二日爲御猶子 元祿八年十二月十四日親王宣下

貞建親王東山院御猶子

寶永六年五月廿一日親王宣下

榮仁親王體有酒川

應永五年五月廿六日出家四十歲

貞成親王體伏見、後小松院御猶子、

應永卅二年四月十六日親王宣下 文安四年十一月廿七日尊號太上天皇七十歲 號後

崇光院

貞常親王體伏見殿、貞成親王二男、後花園院御弟、

文安元年二月廿日親王宣下廿歲

邦高親王元邦康、後土御門院御猶子、

文明六年四月廿六日親王宣下

貞敦親王後柏原院御猶子

永正元年二月廿五日親王宣下十六歲

邦輔親王後安貞院御猶子

享祿四年四月廿四日親王宣下

貞康親王

全仁親王 三品中務卿、太宰帥、號常磐井、

滿仁親王 無品出家

直明王 ○後改直仁

全明親王 無品、彈正尹、後崇光院御猶子、

恒直親王 太宰帥、後柏原院御猶子、

〔皇胤紹運錄〕

後二條院

邦良親王 早世、本寺宮、文保二、三、九元、服立太子、正中二、三、廿、薨、

康仁親王 本寺、中務卿、春宮、廢春宮井親王號、

邦恒王 早世

世平王 早世

邦康親王 二品中務卿

靜覺法親王 二品御室、後花園院御猶子、

〔康宮記〕康正元年十月廿八日、是日木寺宮有御元服、今年正月有親王宣下、爲仙洞法皇○後松御養子、令護親王宣旨給、後二條院御末孫也○中興、是日即御叙品任官事被宣下、非陳儀消息宣下也、是又文安三年三

月式部卿親王宣下御例也、令叙三品給、又令任中務卿給、

〔近代帝王系圖〕伏見宮

崇光院

〔延喜式^{中修}〕凡諸王以上、娶臣家女爲妻者、不得准夫品位、其內親王及女王、亦不得准夫品位、但五世

王者得准夫位、

〔令義解^{職一}〕正親司

正一人、掌皇親名籍、謂二世以下四世以上名籍、案戶令皇親、舊佑一人、大令史一人、少令史一人、使部

十人、直丁一人、

〔延喜式^{十一}宮內〕凡親王諸王名籍者、皆於正親司案記、

〔類聚符宣抄^六〕

皇親籍三卷

勘出帳一卷

並延曆八年作

右外記曹司無有件實、而今四部之書在正親司、望請取彼一部以爲官料、

弘仁十二年十一月四日

右大臣宣依請、

參議左大辨直世王^奉

〔延喜式^{三十一}宮內〕凡其有品內親王、若有請事者、申省、省受申官、即朝參及勅召者、申縫殿寮、又內侍知之、

〔官職難儀〕さていま天子の皇子にてもなくて、二代三代の御末にて、親王宣下侍るは、一向道理に

叶はぬ事也、されどもいづれも天子御猶子の號にて宣下也、まからざるはなきなり、

〔類例略要集〕親王家、御家督御相續之節、御所之御養子ニ被成、仍而御代々稱親王、若無其儀、

稱何宮、又ハ何王なり、

〔皇胤紹運錄〕

龜山院

恒明親王 一品式部卿、常磐井宮、

皇子初見

親王初見

りばらトハ、其母ノ皇族ナルヲ云ヘルナリ、

〔日本書紀六仁〕二十三年冬十月壬申、天皇立於大殿前、誓津別皇子侍之、

○按ズルニ、是レ皇子ヲ以テ、名ノ下ニ連ラテタル始メナリ、

〔日本書紀二武十九〕八年十二月戊申、由嘉禾親王諸王諸臣、及百官人等、給祿各有差、

〔續日本紀一武〕四年六月甲午、勅淨大參刑部親王、略中撰定律令、賜祿各有差、

○按ズルニ、同紀是ヨリ先キ、正月丁巳、授新田部皇子淨廣貳ト見エ、四月癸未、淨廣肆、明日香皇女薨ト載タリ、然ルニ本文ノ如ク、六月ニ至リテ、刑部親王ト名ノ下ニ連稱シタリ、蓋シ親王ノ稱ハ、此間ニ於テ制定セラレシモノナランカ、

〔帝王編年記十武〕大寶元年、今年以皇子號親王、

〔神皇正統記文武〕皇子を親王といふこと、此御時にはじまる、

〔令義解四綱〕凡皇兄弟皇子皆爲親王、女帝子亦同、謂號爲四世以上所生何者案下以外並爲諸王、自

親王五世雖得王名不在皇親之限、

〔六典二吏部〕皇兄弟皇子皆封國、謂之親王、

○按ズルニ、女帝ノ子ヲ親王ト爲ストハ、內親王ノ諸王ノ妻トナリテ御子ヲ生ミ給ヒ、夫王歿シテ後ニ即位シ給ヒシ時ノ事ニテ、其御子ハ親王タル事ヲ得ルヲ云フナリ、日本書紀齊明紀ニ、天豐財重日足姬天皇、明齊初適於橘豐日天皇、明用之孫高向王、而生漢皇子、後適於息長足日廣額天皇、明舒而生二男一女、略中明年正月后即天皇位トアリ、漢皇子ハ即チ此例ナリ、

〔令義解二凡〕凡主皆以家長爲之、戸内有課口者爲課戸、無課口者爲不課戸、不課戸皇親、略下

○按ズルニ、五世王ニシテ親王ヲ娶レバ、其子ハ二世王トナルガ故ニ此制アルナラン、

親王制度

〔榮花物語石九〕ち。宮の、いみじうあわてさせ給ふはどのうつくしきにも。略下

〔紫式部日記〕いと宮いだし奉らんと殿のたまふを、いとねたきことにし給ひて、あゝとさいなむ。

○按ズルニ、いと宮トハ最モ季ナル宮ヲ云フナルベシ。

〔榮花物語初八〕花中宮の若宮。一〇後今宮朱雀後さしつゝきて、月日の如くにて光りいで給へるに。略下

〔大鏡五〕太政大臣兼家いさひとつのおほいさみは、冷泉院の女御にて、三條院彈正宮。〇〇爲

王帥宮。〇〇敦道親王の御母にて、三條院位につかせおはしまし、かば、贈皇后と申さ。

〔源氏物語五〕兵部卿の宮は、いとわてになまめい給へれど、にはひやかになどもあらぬを。略下

〔紫式部日記〕中務の宮。〇〇具平親王わたりの御事を御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼして

かたらはせ給ふ。

○按ズルニ、彈正宮ハ彈正尹ニ任ゼラレ、帥宮ハ太宰帥ニ任ゼラレ、兵部卿の宮、中務の宮、マタ

各其官ニ任ゼラレタルナリ。

〔伊勢物語下〕昔心つきて色このみなる男、長岡といふ所に家つくりてをりけり、そこのとなりな

りける宮ばらに、こともなき女どもの。略下

○按ズルニ、宮ばらトハ、其母ノ皇族ナルヲ云フ。

〔源氏物語六〕左衛門のめのとて、大貳のあまのさしつぎにおぼいたるがむすめ、大輔の命

婦とて、うちにさぶらふ。わがむどはりの兵部の大輔なるがむすめなりけり。

〔落窪物語〕わかんどはりばらの君とて、母もなき御むすめおはす。

○按ズルニ、わかんどはりハ、河海抄ニ王家無等倫ノ字音ニテ王孫ヲ云フト云ヒ、閑田耕筆ニ

王家統天子の御系ト云ヒ、和訓栞ニ和漢通リノ義也ト云ヒ、黒川春村ノ北史國語考ニ稚子

御統みきよノ義ナルベシト云ヒ、古來諸説一樣ナラズト雖、其皇族ヲ云ヒシコト明ナリ、わかんどは

〔大鏡^七太政大臣道長〕第一の女君は、一條院の御時に、長保元年十一月一日、御年十二にて女御にぞ
ゐらせ給ふ、^略中宮と申し程に、うちつゝきてを。と。こ。み。こ。二人うみ奉り給へりし、

〔榮花物語^一月^一〕基經のおどりの御女の女御の御はらに、醍醐の宮達あまたおほしましける、

〔玉勝間^四〕宮と申す稱

天皇の御胤を宮と申すこと、いにしへは皇子皇女にかざれり、皇子の御子よりしては、宮と申
すことなかりき、然るを中よりして、皇子の御子をも申し、近くは親王の御すぢをば、世々
すべて宮と申す事となれり、

〔榮花物語^一月^一〕按察のみやす所、とてさぶらひ給を。と。こ。三。の。宮。女。三。の。み。や。う。みたてまつり給つ、
又この九條殿の女御を。と。こ。四。五。の。み。や。う。まれ給ぬ、又宣耀殿女御男。六。八。の。み。や。う。まれ給へり、
^略中麗景殿の女御を。と。こ。七。の。宮。女。六。の。宮。生れ給にけり、式部卿の宮の女御女。四。の。宮。ぞうみた
てまつり給へりける、廣幡御息所女。五。の。宮。うまれ給へり、按察の御息所を。と。こ。九。の。宮。うまれ給
なとして、又九條殿の女御七。九。十。の。宮。なぞあまたさしつゝさうまれさせ給て、^略中おほかたを
と。こ。宮。九。人。女。み。や。十。人。ぞおほしける、

〔玉勝間^四〕女一宮女二宮など申唱へ

女一宮女二宮など申す女子、音によみならへれども、榮花物語などに、男一宮男二宮などある
男は音によむべくもあらず、必をここの宮などいよむべければ、女もいにしへは、をんな一
の宮をんな二の宮などよみつらむ、ことわりをもて思ふにも、字音にはよむまじきつゝさ
なり、

〔源氏物語^二者^二〕もてわづらはせたまふ姫宮の御うしろみに、これをやなぞ、びとしれずおぼしよ
りけり、

一トナリ、一位ヨリ五位ニ至リ、蔭子ハ初メ從五位下、若クハ正六位上ニ叙セラル、ヲ例トス、官ハ大臣、納言、神祇伯、或ハ大學頭等ニ任ゼラル、是レマタ諸臣ノ下ニ立タシメズシテ多クハ長官ニ任ゼラル、例ナリ、其位記官職アルモノニハ位田食封ヲ賜ヒ、一般ノ男王女王ニハ、其ニ春秋二季ニ時服料及ビ季祿ヲ賜フ、後諸王漸ク蕃衍スルニ及ビテハ、時服ヲ賜フベキ諸王ノ數ヲ限定シ、其死闕ヲ待チテ、順次之ヲ補フコトニ定メラレタリ、

凡親王ニシテ大罪アレバ、先ツ屬籍ヲ削ル、伊豫親王ノ幽セラレタル、不破内親王ノ流ニ處セラレタル時ノ如キ是ナリ、諸王ニシテ大罪アレバ先ツ王名ヲ除ク、鹽燒王ノ獄ニ下サレタル、長野女王ノ配流セラレタル時ノ如キ是ナリ、但シ親王諸王共ニ、多クハ姓ヲ賜テ庶人トナシ、然ル後處罰セラル、ヲ例トス、

〔日本書紀三〕諸皇子

〔類聚名義抄六〕親王ミコ

〔連步色葉集四〕親王唐帝大王、竹園、宗園、天枝、

〔下學集上〕親王唐帝、一品、二品、三品、四品、

〔徒然草上〕竹のそのふの末葉まで、人間のためね、ぬぞやんことなき、

〔史記五十八〕於是孝王築東苑、方三百餘里、

〔邦輔親王御誕生記〕永正十年三月廿一日、中抑從禁裏御大刀口絶久爲御使、若宮誕生珍重之由

被仰下、廿七日、前内府大刀口一腰持參、竹園○伏見宮御對面、廿八日、典藥頭親就朝臣、大刀大

藏卿大刀兩御、四辻大納言、大刀賴孝、大刀等持參、各竹園御對面、新興侍殿來臨、一荷兩種被進、三條

内府同前大刀持參、於產所有三獻云云、以後竹園御對面、

ビ京極ト改稱シ、更ニ改メテ桂宮ト稱セラレシガ如キ是ナリ、

世襲親王ハ、天皇ノ猶子タラザレバ親王タルヲ得ズ、而シテ世襲親王ノ子ノ宮門跡タルニハ、天皇ノ猶子アリ養子アリ、或ハ又初メ天皇ノ養子トナリ、更ニ將軍ノ猶子トナリテ、然ル後親王宣下アルモアリテ一樣ナラズ、猶子ハ嵯峨天皇ノ皇子源定ヲ以テ、淳和天皇ノ猶子ト爲シ給ヒシニ始マリタレドモ、是ハ普通ノ猶子ニアラズ、次デ宇多天皇ノ皇子雅明ハ、醍醐天皇ノ猶子トナリ、花山天皇ノ昭登清仁ノ二皇子ハ、冷泉天皇ノ猶子トナリテ、其ニ親王宣下ヲ蒙レリ、蓋シコノ時ノ制タル、天皇御出家後ノ所生ノ皇子ハ、親王タルヲ得ザリシ故ニ、斯ルコトモアリシナリ、其他臣下ノ猶子トナリ給ヒシハ、後奈良天皇ノ皇女聖秀尼王ノ、足利義晴ノ猶子トナリ、陽光院ノ皇子智仁親王ノ、豐臣秀吉ノ猶子トナリ給ヒシ類ニシテ、臣下ノ養子トナリ給ヒシハ、後陽成天皇ノ二皇子信尋、昭良ノ、近衛家及ビ一條家ノ養子トナリテ、共ニ其家ヲ相續シ給ヒシ類是ナリ、

諸王ノ稱ハ、既ニ大寶以前ニ見エテ、天武天皇二年ノ紀ニ、諸王四位栗隈王トアリ、又其十二年ノ紀ニ、諸王五位伊勢王トモ見エタレドモ、女王ノ稱ハ文武天皇三年ノ紀ニ、坂合部女王トアルヲ始メトス、大寶ノ制、五世王ハモト皇親ノ限ニアラザリシヲ、慶雲三年ニ至リ親ヲ絶ツニ忍ビズトテ、特ニ皇親ノ列ニ入ルコトハナレリ、然ルニ桓武天皇延暦十七年ニ至リ、奸濫ノ徒宗室ヲ汚ス懼レアリトテ、再ビ古制ニ復シテ皇親ノ以外ト定メ、其名籍計帳等諸王ニ關スル一切ノ事ハ、總テ正親司ニテ管理シタリ、

諸王ノ待遇ハ、親王ニ比シテ大ニ差降アリト雖、マタ諸臣ト同ジカラズ、其辭訟アル時ハ、特ニ座席ヲ賜ヒ、皇親以外トイヘドモ、永世不課戸トシテ、特ニ課役ヲ蠲除スル如キ、優遇他ニ異ナルモノアリ、位階ハモト天武天皇ノ時ハ、親王ト等シカリシモ、大寶ノ制ニテ、諸臣ト同

白河天皇ノ皇子高倉宮以仁王、後西院天皇ノ皇女貞宮ノ如キ、及ビ後世總テ比丘尼御所ト稱スルモノ、如キハ、其ニ親王宣下ヲ得ズシテ諸王タルモノナリ、而シテ孫王トイヘドモ宣下ヲ蒙レバ、或ハ親王タルコトヲ得ルナリ、孫王ニシテ親王宣下ノ初例トモ見ルベキハ、小一條院ノ御子敦貞敦元ノ二王、及ビ俱子嘉子ノ二女王トス、然レドモ、二王ハ三條天皇ノ皇子ニ准ジテ親王ト爲シ、二女王ハ天皇ノ養女トシテ内親王ノ宣下アリシナリ、此親王宣下ノ制ハ、維新ノ後廢セラレテ古制ニ復スルコト、ナレリ、

中世以降、皇親漸ク蕃衍シ府庫ヲ費スコト多キヲ以テ、悉ク封戸ノ制ニ從フコト能ハズ、是ニ於テ姓ヲ賜ヒ人臣ニ列スルコト起リ、桓武天皇延暦六年、諸勝岡成ノ二皇子ニ廣根朝臣長岡朝臣ノ姓ヲ賜フ、是ヲ皇子賜姓ノ始メトス、次テ嵯峨天皇ハ、ソノ八皇子ニ悉ク源朝臣ノ姓ヲ賜ヘリ、爾後皇子ノ人臣ニ列スルモノ世々絶エズ、然レドモ種々ノ事情ニヨリ、賜姓ノ後再ビ親王宣下アリテ、皇親ニ列セシモノナシトセズ、醍醐天皇ノ皇子兼明親王ノ如キハ、コノ類ナリ、諸王ノ姓ヲ賜ヘルハ、聖武天皇天平八年ニ、敏達天皇ノ玄孫葛城王等ニ橘宿禰ノ姓ヲ賜ヒシ類ニテ、稱徳天皇天平勝寶四年ニハ、皇孫智努王等ニ文室真人ノ姓ヲ賜ヒ、爾後漸クソノ數アリ、降リテ仁明天皇ノ朝ニ至リ、明日香親王ガ其所生ノ男女ニ姓ヲ賜ハシコトヲ懇請シタマヒテヨリ、孫王賜姓ノコト益多シ、後ニハ王號ヲ稱スルモノ大ニ減ジ、獨リ神祇伯ヲ以テ世職トセル、白河家ノミハ、永ク王號ヲ繼續シタリ、コノ賜姓ノ事ト、前ニ述ベタル皇子皇女出家ノ事トニヨリテ、皇族ノ數ハ極メテ少クナリ、且世襲親王トテハ、古クハ常盤井宮木寺宮近クハ伏見桂、有栖川ノ三親王ニ過ギザリシヲ、後又閑院宮ヲ立テラレテヨリ、四親王家トナレリ、但シ世襲親王家ニ嗣ナクシテ、皇子ノ入テ其家ニ嗣トナリタマフ時ハ、多クハ宮號ヲ改メ新ニ其家ヲ興スヲ例トス、タトヘバ八條宮ノ常盤井ト改メ、再

天皇ノ皇女親子内親王ノ十四代將軍家茂ニ降嫁アリシニ過ギズ女王婚嫁ノ例ニ至リテハ、攝關將軍諸侯門跡等極メテ多ク、攝關ニテハ有栖川宮職仁親王ノ女孝宮ノ近衛經熙ニ嫁シタル、將軍ニテハ伏見宮貞清親王ノ女顯子ノ德川家綱ニ嫁シタル、諸侯ニテハ同親王ノ女安宮ノ德川光貞伊紀ニ嫁シ、有栖川宮織仁親王ノ女富宮ノ德川齊昭戸水ニ嫁シタル、門跡ニテハ有栖川宮幸仁親王ノ女淑宮ノ東本願寺光性ニ嫁シ、閑院宮直仁親王ノ女始宮ノ西本願寺光啓ニ嫁シタル如キ是ナリ、

入道親王ト法親王トハ、其ニ皇兄弟姊妹、皇子皇女、若クハ孫王ノ佛門ニスレルモノニテ、親王ニシテ入道セルヲ入道親王ト稱シ、出家ノ後親王タルヲ法親王ト號ス、但シ孫王ノ法親王タルハ異例ニシテ普通ノコトニアラズ、抑出家入道セシモノ、親王ニハ平城天皇ノ皇子眞如アリ、親王タラザル皇子ニハ、光仁天皇ノ皇子開成、花山天皇ノ皇子深觀、豐源ノ如キアリ、然レドモ此等ハ未ダ入道親王又法親王ト稱セズ、入道親王ノ稱ハ、三條天皇ノ皇子惟信入道親王ニ始マリ、法親王ノ稱ハ、白河天皇ノ皇子覺行法親王ヲ始メトス、其他孫王ニシテ法親王タリシモノアリ、後鳥羽天皇ノ皇孫澄覺法親王、順德天皇ノ皇曾孫承鎮法親王ノ類是レナリ、而シテ此等ノ皇子皇孫ハ何レモ一旦天皇ノ猶子トナリテ、然ル後法親王タルヲ例トス、中世以後皇親ノ制度漸ク衰ヘ、武家ノ權勢盛ナルニ及ビテハ、諸王ハモトヨリ、皇子皇女等多クハ落飾シテ僧尼トナリ、寺門ニ入り、皇子ノ住職シ給フベキ寺ヲ宮門跡ト唱ヘ、皇女ノ寺ヲ比丘尼御所ト稱シ、何レモ十數箇寺アリシナリ、

皇子皇女ハ、モト生レナガラニシテ親王タリシヲ、淳仁天皇以後、親王宣下ト云フコト始マレリ、蓋シ淳仁天皇ハ、皇孫ヲ以テ入テ大統ヲ繼ギタマヒシユエ、自ラ斯ルコトノ起リシモノニテ、後ニハ皇子皇女モ、宣下ヲ待タザレバ親王タルコトヲ得給ハザルニ至レリ、即チ後

ニ刑部親王ト記セルヲ始トス蓋シ此時ニ定メラレタルモノナラン、此ヨリ後ハ何レモ某親王又ハ某内親王ト書シテ、名ノ下ニ連稱スルコトハナレリ、

親王ノ座次ハ、常ニ諸王諸臣ノ上ニアリテ、諸王諸臣ハ、朝堂ニ在テハ座ヲ避ケ、途上ニ於テハ歩ヲ譲ラザルベカラズ、其他親王罪ヲ犯セバ、先ヅ其罪ヲ議センコトヲ奏請シテ裁可ヲ請ヒ、其薨ズル時ハ、天皇爲メニ朝ヲ廢シ、賻物ヲ賜ヒ、使ヲ遣シテ葬事ヲ監セシメ給フ等、待遇極メテ優渥ナリ、其位階ハ品ト稱シテ、諸王諸臣ニ分チ、一品ヨリ四品ニ至ル、品ニ叙セラレザルヲ無品親王ト云フ、蔭子ハ初メ從四位下ニ叙セラル、ヲ例トス、官ハ大臣、太宰、帥、八省卿等ニ任ジ、或ハ彈正尹、三國大守等ニモ任ゼラル、是レ親王ハ人臣ノ下ニ立タザル制ナルヲ以テ、長官タルヲ得レドモ、次官タル可ラザル故ナリ、俸祿ニハ品田アリ、食封アリ、時服及ビ季祿アリ、所屬ノ職員ニハ、文學、家令、家扶、家從、書吏、及ビ帳内等アリ、中古以降ハ勅別當、家司、職事、藏人、侍者、御監等ヲ置キ、特ニ内舍人、大舍人等ヲ賜フモアリ、而シテ此等ノ俸祿職員ハ、其品位ニヨリ、又ハ官職ニヨリテ多寡均シカラズ、又男女ニヨリテ其數ヲ異ニシ、大抵内親王ハ男親王ノ半ヲ減ジテ賜フヲ定例トス、後世ニ至リテハ、封戸ノ制多ク行レズ、年官年爵ヲ以テ俸祿ニ代フルニ至レリ、

内親王トハ、天皇ノ皇姉妹皇女等ノ稱ニシテ、天武天皇ノ紀ニ始テ見エタレドモ、之ヲ名ノ下ニ連書スルハ、文武天皇大寶元年ノ紀ニ、泉内親王、大伯内親王ナドアルヲ以テ濫觴トス、内親王ノ臣下ニ降嫁セルコトハ、古クハ醍醐天皇ノ皇女勸子内親王、及ビ韶子内親王ノ藤原師輔源清盛等ニ降嫁セル、近クハ後陽成天皇ノ皇女清子貞子ノ兩内親王ノ、應司信尚及ビ二條康道ニ降嫁セル類是ナリ、後世攝關ニハ其例甚ダ多カレドモ、其他ニハ只德川氏ニ一二ノ例アルノミニテ、靈元天皇ノ皇女吉子内親王ノ七代將軍家繼ニ結納ノ儀アリ、仁孝

古事類苑

帝王部二十四

皇親上

皇親トハ、皇兄弟姊妹及ビ皇子皇孫以下スベテ天皇ノ親族ヲ云フ、日本書紀ニ據ルニ、其始メ皇親ノ男子ハ皆某尊、又ハ某命ト書シ、女子ハ何レモ某姬又某媛ト記セリ、某皇子、某皇女ノ稱ハ始メテ垂仁紀景行紀ニ見エ、諸王ノ稱ハ推古紀ニ見エタリ、此ヨリ後ハ、天皇ノ御子ハ多クハ某皇子某皇女ト云ヒ、或ハ某王某女王トモ稱セリ、降リテ天武天皇ノ時ニ至リ、親王諸王ノ別アリ、文武天皇大實元年ニ至リ、皇親ノ制度ヲ立テ、皇親ヲ親王ト諸王トニ別チ、皇兄弟姊妹及ビ皇子皇女^{一世}ヲ親王トシ、皇孫^{二世}皇曾孫^{三世}皇玄孫^{四世}マデヲ諸王トス、玄孫ノ子即チ五世王以下モ、王ト稱スルコトヲ得レドモ、皇親ノ限ニアラズ、又諸王ハ親王ヲ娶リ若クハ諸臣ニ嫁スルコトヲ得レドモ、親王ハ諸臣ト婚スルコトヲ聽ルサハル等ノ制アリ、古事記日本書紀ニハ、皇子ヲ稱スルニ某王ヲ以テシタレドモ、續日本紀以後ノ國史ニハ、皇孫以下諸王ニアラザレバ某王ト記サズ、從ヒテ之ヲ訓ズルニモ、親王ハミコ、諸王ハオホキミト差別セリ、

親王トハ、天皇ニ最親シキ王ト云フ義ニシテ、コレニ親王、内親王、入道親王、法親王等ノ別アリ、親王ノ稱ハモト隋唐ノ制ニ、皇帝ノ子ノ某國ノ王タル者ヲ親王ト云フニ依リシモノニテ、此稱早ク天武天皇ノ時ヨリ見エタレドモ、之ヲ名ノ下ニ連書スルハ、文武天皇四年ノ紀

廢內親王

六一一

時服

五九〇

季祿

同

年官年爵

五九一

皇子賜姓

五九四

賜姓後復親王

五九六

猶子養子

五九七

皇子爲人臣養子

五九八

皇子皇女不爲親王

五九九

廢親王

六〇〇

○

皇女初見

六〇一

內親王稱呼

同

內親王宣下

同

內親王叙品

六〇四

內親王待遇

同

內親王家令

六〇七

內親王品田

同

內親王食封

同

猶子

同

皇女降嫁臣下

六〇八

古事類苑

帝王部二十四

皇親上

皇親妃嬪

稱號

皇子初見

親王初見

親王制度

世襲親王

親王宣下式

待遇

叙品

任官

親王家令

勅別當

帳內舍人

親王品田

親王食封

五五四

五五七

同

同

五五八

五七一

五七七

五八二

五八三

五八七

五八八

同

同

五八九

〔百練抄四條〕長德四年十二月三日、強盜入宣耀殿東宮條○三御息所子○綾希代事也、

〔小右記〕長元五年九月十三日辛巳、東宮○後御息所一品禎子、戊刻產女子、

〔玉葉〕承元三年三月廿三日、此日故攝政前太政大臣○藤原經長女有入宮事、名立子、生年十八、與余同、

廿六日、早旦著直衣、參東宮○順德御方即參御息所、御方即退出、歸一條亭、今日以下每夜御息所昇

給也、

〔續史愚抄十六〕正和三年五月廿日乙巳、春宮○後醍醐御息所藤原朝臣禰子入道前太政大臣實兼女、母

秋監取給、因無參入、候、著帶、

〔近代御系譜〕青綺門院藤舍子、二條關白吉忠公女、享保十八年九月廿八日、爲東宮○櫻町御息所、

妃名於萬代

〔日本書紀持三〕高天原廣野姬天皇持少名鸕野讚良皇女天命開別天皇天第二女也母日遠智

娘更名美禮天皇深沈有大度天豐財重日足姬天皇明齊三年適天淳中原源真人天皇武爲妃

〔續日本紀相四〕延曆九年閏三月丙子是日皇后崩甲午參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美率謀

人奉誅諡曰天高藤廣宗照姬尊中皇后姓藤原氏諱乙牟漏贈內大臣贈從一位良繼之女也母尙

侍贈從一位阿倍朝臣古美奈后性柔婉美姿儀閑於女則有母儀之德焉今上之在儲宮也納以爲妃

生皇太子賀美能親王高志內親王

〔日本紀略一〕延喜十九年十月十一日乙巳女御藤原氏皇太子保於東宮賀右大臣忠平四十

算

〔日本紀略一〕長德元年四月六日壬午關白正二位藤原朝臣道隆依病入道年四中宮子并東宮

女御三條女御行啓彼里纂

〔大鏡七〕太政大臣道長つぎの女君子はそれも内侍のかみ十五におはしなすにいまの東宮朱後

十三にならせ給ふとし治安元年二月一日まゐらせ給ひて春宮女御にてさぶらはせ給ふ、どう

くはでんにぞおはしなし、との長道入道せまめ給ひて後の事なればいまの關白殿連の御

女となづけたてまつりてこそはまゐらせ給ひしか、

〔續世繼三〕大内流としもかはりぬれば院羽の姫宮子東宮條二の女御にまゐり給高松の院と

申御事なり

〔百練抄四〕正曆四年閏十月廿日小右記云中十四日正曆五觀修僧都來云近曾東宮更衣右

時將修法時猛靈忽出來略下

〔河海抄〕六條御息所秋好中宮母儀中將御息所貞信公女前

寬弘八年六月十三日

後一條院踐祚

敦明親王立坊

長和五年正月廿九

後冷泉院踐祚

後三條院立坊

後朱雀皇子

寬德二年正月十六日

白河院踐祚

實仁親王立坊

後三條皇子

〔薩戒記〕應永三十二年二月十六日丁巳辰刻許下人云小川宮

院後小松第二御子內稱光御一殿爲儲君近頃勤修寺中納言經典頗奉養

實件御所被納言家也即奉同宮者也

今曉薨御御頓死也云々仰天馳參

略中

昨日及秉燭無殊御氣自去丑刻許令苦惱御非殊御事歎之由存之處女房被告危急之由於中納言云々

略中其後日野大納言入道參入召醫師先是御息令絕御乎言語道斷御事也者

略中或人曰當年三合災也又去頃有怪異等一日吉社竹枯

是竹園災也

一日吉大宮寶前有死猿無首云々彼宮申御歲也當時此宮爲申歲此宮御怪異也云々

彼猿事正月廿二日事也云々

○

皇太子紀

〔日本書紀十七〕八年正月太子妃春日皇女晨朝晏出有異於常太子意疑入殿而見妃臥床涕泣惋痛

不能自勝太子惟問曰今旦涕泣有何恨乎妃曰非餘事也唯妾所悲者飛天之鳥爲愛養兒樹巖作巢

其愛深矣伏地之虫爲護衛子土中作窟其護厚焉乃至於人豈得無慮無嗣之恨方鍾太子妾名隨絕

於是太子感痛而奏天皇詔曰朕子麻呂古汝妃之詞深稱於理安得空爾無答慰乎宣賜匱布屯食表

保明親王醍醐子 元名崇象、口養太子

慶賴太子保明子

實仁親王後三條子

惟善親王後二條太子

○按ズルニ、薨太子ハ此ノ他ナホ後醍醐天皇ノ皇子邦良親王、恒良親王、後小松天皇ノ皇子小川宮等アリ、

〔國太曆〕貞和四年十月廿七日庚寅、今日儲皇光冠儀、并讓國光立坊仁直重疊嘉禮之日也略中、依踐祚立坊同日例、於陣被行之、右大臣參議忠嗣執筆、

踐祚立坊同日例

淳和天皇踐祚

恒世親王立坊

弘仁十四年四月十七日

圓融院踐祚

華山院立坊

安和二年八月十三日

華山院踐祚

一條院立坊圓融皇子

永觀二年八月廿七日

三條院踐祚

後一條院立坊

御ノ跡ニテハ傳奏ヲハジメ所司議奏ナド參ラルベシ、コノ響應ニハ權之進タチ參リテハヤシ
 ナドアルベキカト仰ラル、申モ恐アルコトナガラ、何ノコトニモセヨ、天下ノ式トナルコトハコ
 レアルベキコトナリ、御身ノタメノミナラズ、御上ノ御爲ニモ然ルベカラズ、初テノ御コト重テ
 ハトモカクモ此タビハカクアルベキコト、奉恐察、イツモノ拜賀元服ナド、ハチガヒテ、殊外
 ニ心遣ヒナルコトナリ、渡御ノ間ハ諸卿ヲ初トシテ末マデ不殘平折敷ナリ、還幸ノ跡ノ響應ハ、
 大臣ハ大臣、公卿ハ公卿、殿上人ハ殿上人ト、夫々ニ膳部ヲカヘテ、三寶モアレバ足打立モアリ勿
 論平折敷モアリ、夫ユエ二段ニナリテ、別シテヤカマシキコトナリト仰ナリ、十九日、昨日渡御
 御祝儀參候、昨日ハ隨分ノ御機嫌ニテ、朝モ正辰刻渡御ニテ、御獻上引ワタシナド相スミテ、乘馬
 御覽、御方ノ與ヨセノ前ヲ馬場トシ、竹ヲ渡シ、叙覽ノ假座ニムラサキノ幕ヲ引、最中ニ御簾ヲ下
 シ、前ノ椽ガハニ高欄ヲツケテ、簾外ニ准后關白ノ御座アリ、乘馬ハ左衛門、一角、甚内新八ナリ、夫
 ヨリ御庭御覽、御泉水ノ築山ノ上ニハ、初葺松葺ヲ多ク植ラレタリ、寢殿段上マデ御歩行ニテ還
 幸、御料理スミテ御靈祭御覽、御格子ノ前ニ神輿ヲ下シ奉幣ナドアリ、還幸ノ後御出スグニ初更
 前ニ還幸ノヨシ、前ニ記スゴトク上ヘ獻上ヲ初メトシテ、女中下々マデ引出物アリ、アナタヨリ
 モ御ミヤグアリ、上ヲ初トシテ諸大夫隱居諸大夫近習青士女中方不殘下サレモノアリ、

〔二中歴人代〕堯逝太子

苑道稚郎皇子 應神一御子

木梨輕王 允恭子

脫戶皇子 用明子 號聖德太子

草壁皇子 天武子 文武父

聖武皇子 不知名

ノ風流ノ御歌ニアラバコソ、父帝ヲシタヒ參ラセテヨミタマヒシユエナリ、ソレハ又一時ノ感
情ヨリ出ヅトモ云ベシ、コノ御コトハ一時ノ感發トモ云ガタシ、治世ノ第一ト云ベシ、母后ヲシ
タヒマス御心モ、八歳ノ宮ニオトリ給ハズ、八月十二日參候、仰ニ來ル十八日ニハ、東宮御方御
本殿へ渡御ナルベシト仰出サレタリ、日出度コトニ思シメス、近代ナキコト、メヅラシキ御コト
ナリ、近代ハ急度御外祖ニ執柄ノ家珍ラシキコトユエ其沙汰ナシ、昔御堂殿○藤原へ東宮ノ渡
御アリシハ格別ノ御コトニテ、五十匹ノ競馬ヲツガヒテ御覽ニ供セラレシコト御記錄ニアリ、
近代ニテハ後水尾院ノ應山ノ櫻ノ御所へ渡御ナリシハ微々ノ御コトニテ度々ナリシ、其後ハ
執柄ノ御外祖タルコトナキ故、コノ御家ニモメヅラシ、未ダ御人衆モシカトハ究ラズ、先刻ハ治
部大輔ガ來リテ、本殿ノ表替掃除ノコトナドカクノ如ク取込ノ由、東宮ヲ初メ奉リ、女中公家地
下ノ役人マデ、不殘御餐應ノ上御土產ヲ進セラレシモノアリ、小サキ御厨子棚フンダミ金ノ高
マキエアリ、上ノ段ニ指圖ヲ一通リ不殘ソロヘテ、尉翁ヲ初トシテ小面平太等ヲ並ベラレタリ、
香箱へハ微塵人形ヲツメラレタリ、外ニ東求院良山御筆ノ法書ノ卷、物一卷梅ノ折枝ニ付テ獻
ゼラル、コレニ付テフト仰ラル、ハ、大事ノ故實アリ教フベシ、世ニ佐理行成道風ヲ三跡ト云、此
三跡ノ字ハ、本ト御堂殿へ渡御ノ時ヨリ初テ云習セシコトナリ、コノ時御堂殿ノ獻上、佐理ト道
風トノ筆跡ノ卷物ヲ獻ゼラレシガ、今一卷ヲ行成ニカ、セテ梅ノシモトニ付テ上ラレシヨリ、
世ニコレヲ三跡ト云シコト御記錄ニアリ、行成ノ手柄世ニ面目ト云ベシ、古ノ佐理道風ニナラ
ベテ行成ニカ、セラレシハ、行成ガ手柄ナリトノミ御咄アリシガ、コノタビモコノ例ヲ追ハル
ハナルベシト恐察シ奉ル、○中略又當日ハ何ゾ外ニ御ナグサミゴトニテモアリヤト伺フ、仰ニ、カ
チテハ何ゾトコ、ロガケシガ、コノ渡御ハ私ノコトニ非ズ、式正一々天下ノ取沙汰トナルベシ、
然レバ何ゴトニモセヨ、コノコトアリト風説アリテハ批判アルベシト思召テ止メラレタリ、還

シニ、親王ノ御方ツクハ、ト聞シメシテ、ソレハナニユエニト勅問アリ、コノ度東宮立坊ノ御沙汰ニテ候。サアレバ御道具ドモ、多クナレバ、今ホドニテハ御セバキユエ、幸ノ御次手ニ、内々ノ勝手アシキ、毫ヲモ改易セシムルナリト申シ上シカバ、シバラク御思惟ニテ仰出サレシハ、東宮ノ御沙汰アレバ、程ナク御位ニモ御即ナサルベシ、サアレバ父帝御中ノ御殿ニ御移リナサルベシ、其上ニテ父帝ノ改メラルハ、格別、コノ御殿ハモト新中和門院後鳥羽ノ御座所ニテ、コトニ御内々ハ常ニ馴テ御住居ナリシ處ナレバ、ダトヒイカホド御不自ナリトモ、御勝手アシクトモ、東宮ニテ御座アランホドハ、少シモ改ムベカラズト仰出サレシホドニ、大乳ノ人モ六條殿モ何ト申上ベキ言葉モナク、只感涙ニ堪ズシテ退キ、カヤウハ、ノ思召ノ上ハ、勝手方ニ於テハ少シモ御好ミモナシ、表向ノ御差圖ノミヨクハ、吟味セラレヨトアリシホドニ、數日未決ノコト一日ニコトスミ候ト、武家モ臣下モ世ニアリガタキコトニ奉存ナリ、コレヨリ惣ロシゲツキテ、表向ニ差圖モ御覽ニ入ズバ、穴カシコ後悔アルベシトテ御覽ニ入シカバ、イザトヨ見ルニ及ゲベカラズ、中ノ口マデハ女御ノ御方ニモ常ニハ成セラレシ處ナレバ、コレヲ改ムルハ世ニイマハシクコソオボシメセ、表向ノコトハトモカクモ儀ノ調テヨキニハカラヒ申セ、上ヨリノ思シ召ハ少シモナシト仰出サル、又々何レモ肝ヲヒヤシテ感歎シ奉ル、准后御方ニモ世ニ御ウレシゲニ忝クモアリガタキコトニ覺召ス、コノ御心ニテハ後來モ御タノモシキコトナリ、御代ノ長久、寶祚ノ御繁榮ウタガヒナキモノカト仰アリ、兩人ヨリ女中力ヲハツテ、細ドモモハバ、カノ御心中イカバカリ御ウレシクモ、又女御ノ御方ノイマササバ、イカバカリノ御孝行ニ、申上ルモカハシマサンモノゾトオボシメスベシト恐察シタテマツリテ、感涙ニテコトバナシ、申上ルモ恐レアルコトナガラ、八歳ノ宮○後醍醐ノ御發明ナノ、御奇特ナリノト申シ上ルコトニハアウズ、唯々天ノナセル麗質ノ御德義ヨリ出タルコトニテ、全クオノコトニアラズト申上シカバ、イカニモ汝ガ申條尤ナリト仰ナリ、日本ニテ八歳ノ宮ノ御歌トテ、古今マレナルコトニ申スモ、外

東宮宣下ノ事案記ナシト云フ事義通ジ難シ、若ハ其東宮宣下トアルハ、儲君宣下ノ事ヲ混ジ云ルニテモアラン歟。○中 靈元院ハ明曆四年正月廿八日立太弟ニテ、其前ニ儲君宣下ノ事見エズ、是ハ東山院、中御門院、當今○根ナドノ如ク、皇考ヨリ位ヲ繼ギタマフニ非ズシテ、皇兄後西院ノ位ヲ嗣ギタマヘレバ、先帝ノ皇弟ニシテ、皇子ニ非ザルガ故ニ、儲君宣下ナカリシナルベシ、然レバ靈元院立太子ノ事ハ案記アリテ、儲君宣下ノ事ハ案記ナキト云フ事ハアルマジ、

○按ズルニ、本書ニ古來女帝ノ立太子イマダ所見アラズトアレド、孝謙天皇ハ、聖武天皇ノ皇太子ト爲リ給ヘリ、ナホ、皇女爲太子ノ條參看スベシ、

〔桃記〕享保十二年五月廿四日參候。○中 人ニハ咄モナラズ、咄スベキモノモナシ、汝ニカタラントコノホドヨリ思召ス、汝モシルゴトク、今般親王○根ノ御方、東宮立坊ノ御沙汰アリテ、舊殿ヨリ戊亥ノ方ヘタラ出サル、筈ニテアリ、御儀式ノ殿ドモノナクテカナハヌ、寢殿大廣間殿上車寄等、忽チ東宮節會ニ諸卿群列ノ儀式行ハル、ヤウニ、表向ノ事ハ自ラ御世話ナサラチバナラヌニナリテ、先日ヨリ度々御内ヘモ御成アリ、關白ノ第ヘモ御出アリタル事ナリ、奉行ハ石井中納言ナリ、大方儀式ノ御殿其差圖ドモハ出來ズ、内々ニナリテハ儀式ハイラズ、勝手ヨキ、ヤウニ女中方ヨリノ好ミニマカセテオケバ、色々ノ好ミドモ出デ、段々ニ推シ出シテ、表ヘツマリテ肝心ノ儀殿ドモノ割ニナルコトアリテ、御差圖サダマラズ、色々ト御難儀ニ思召ス處ニ、一昨日御參内ノ刻、石井申サレシハ、御内々ノ御差圖ハスキト相スミヌ、表向ハ先達テ定メ置レタル通ニテ、早速ニ皆々埒アキスト申サル、ソレハイカニト尋シニ、コノゴロ御内々ノ御差圖モ大カタニキハマリテ、申シノ口モ二間ヲ一間ニシ、御納戸モセバキヲヒロゲ、御湯ドノモクラキユエヒロゲテ前ニ廊下ヲツケナド致セバ、常ノ御殿ノ前ノ假山草花等ヲ崩サチバナラズ、コトニ御秘藏ノ山吹ヲ多ク栽ラレタリ、ウカバハズバ御氣色イカバナリトテ、大乳ノ人六條ナド申シ上ラレ

明正院ノ皇太弟ニ立タマフベキ事ナレドモ、是モ立太弟ノ事無リシニヤ、近代紹運錄ニモ、後光明院ノ御元服ノ加冠理髮ノ人ノ名ヲサヘ舉タルニ、立太子ノ文ナシ、古例ヲ考フルニ、必ズ太子ニ立テ、後ニ位ヲ讓リタマフニモ非ズ、國史ニ見ユル所、上代ハ綏靖仁德以下、卽位先帝ノ叡慮ヨリ出タル者ハ、皆立太子ノ事アリ、是此時世ニハ讓位ト云コトナクシテ、崩御マデ御在位ナル故、太子ヲ立テザレバ、次ノ位定マラザルガ故ト見エタリ、皇極天皇ニ至リテ、初メテ位ヲ孝德天皇ニ讓リタマヘリ、而シテ孝德立太子ノ事ナク、輕皇子ト云シヨリ直ニ受禪シタマヘリ、故ニ天智天皇ト互ニ辭遜シタマヒシナリ、是本邦讓位ノ初ニテ、則チ太子ニ立テズシテ位ヲ讓リタマヘリ、其後陽成天皇位ヲ光孝天皇ニ讓リタマフ、是モ立太子ノ事ナク、光孝一品式部卿親王ニテ在シニ直ニ讓位シタマヘリ、中世以後モ、應安四年三月廿一日、後圓融院ニ親王宣下アリテ、同廿三日後光嚴院讓位シタマフ、中間唯一口、本ヨリ立太子ノ沙汰ナキコト後愚昧記ニモ明ナリ、此外モ數多アルベケレド急ニ考舉ゲ難シ、是ヲ以案ズルニ、必讓位シタマフベキ皇子アリテ、早クヨリ其叡慮アラバ立太子アルベク、叡慮遅ク定マリタラバ直ニ讓位アリテ、立太子ニ及バザルト見エタリ、然レバ明正院ノ後光明院ニ讓リタマフモ、急ナル叡慮ニテ、立太子ハ無リシナルベキ歟、

靈元院有立太子之事則不可無東宮宣下之事

靈元院ハ、立太子ノ事案記アリテ、東宮宣下ノ事案記ナシトアルヨシ、此事通ゼズ、立太子則東宮宣下ニテ二事ニ非ズ、貞觀儀式以下諸次第ノ立太子ノ式ヲ見ルニ、皇子某ヲ太子ニ立ルヨシノ宣命ヲ群臣ヘ讀聞シムル、是則立太子ノ儀式ナリ、強テ之ヲ別タバ、儀式ナクシテ唯宣下アルヲ東宮宣下ト云ヒ、其宣下ヲ群臣ヘ露顯スル儀式ヲ立太子ト云シ、歟、然ラバ宣下アリテ儀式ナキ事ハ有ル事モアルベシ、儀式アリテ宣下ナキト云フ事ハアルベカラズ、立太子ノ事案記アリテ、

文德天皇

承和元年八月四日

十七歳

白河院

延久元年四月廿八日

十八歳無例

十九歳

村上天皇

廿歳無例

廿一歳無例

廿二歳

嵯峨天皇

大同元年五月五日

〔増鏡^九〕

文永十一年正月廿六日春宮^{宇多}に位譲り申させたまふ^略中東の御方^{藤原深草后}の

若宮^見伏

を坊に立奉りぬ十月五日節會行はれていじめでなし^略中御門^{宇多}よりはいま二ば

かりの御このかみより儲の君御年をされるためし遠き昔はさておきぬ近頃は三條院小一條

院高倉院などやおはしなれけん高倉院の御末を今もかく榮えさせおはしなればかしこき例

なめり

〔羽倉考〕立太子東宮宣下

明正院後光明院後西院不可有立太子乎之事

明正院後光明院後西院三代ハ立太子ノ事見エザルヨシ案ズルニ明正院ハ女帝アレバ立太子ノ事アル可ラズ古來女帝ノ立太子イマダ所見アラズ後西院ハ花町殿トテ一品式部卿親王ニテ在シニ後光明院御在位ニテ俄ニ崩ジ賜ヘレバ是亦立太子ノ事ナキナルベシ唯後光明院ハ

六歲例

常令○高倉 仁安元年十月日

七歲無例

八歲無例

九歲

恒貞太子 天長十年二月卅日

醍醐天皇 寬平五年四月二日或十四日

圓融院 康保四年九月一日

三條院 寬和二年七月十六日

後朱雀院 寬仁元年八月九日

十歲無例

十二歲

後冷泉院 長曆元年八月十七日

後三條院 寬德二年正月十六日

二條院 久壽二年九月廿三日

十三歲無例

十四歲

仁明天皇 弘仁十四年四月十八日

十五歲無例

十六歲

也帝位ノ事ナド非祈申、オモハジトハスレドモ、自有即位時ナド思マジユル事時ニ出來ル也此
條奉爲君依可爲不忠此事ヲ恐申テ拜シ奉ル也云々、成尊聞此御詞涕泣スト云々、

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰此日有冊命立太子事、○中略

一歲立太子例

清和天皇 嘉祥三年十一月廿五日戊戌

冷泉院 天曆四年七月廿三日

鳥羽院 康和五年八月十七日

近衛院 保延五年八月十七日

二歲例

陽成院 貞觀十一年二月一日

保明太子 延喜四年二月十日

華山院 安和二年八月十三日

實仁太子 延久四年十二月八日

三歲例

慶賴太子 延長元年四月廿九日

朱雀院 延長三年十月廿一日

四歲例

後一條院 寛弘八年六月十三日

五歲例

一條院 永觀二年八月廿七日

三〇後御出家の御師のことは、この次に仰せおかるべくや候らんと申たりければ、こはいかに二宮東宮にたゝんずる人をばと勅答ありけるをきゝて、さてはけふその御さた候はで、いつかは候べきと申たりければ、まことにおもひわすれてやまひ重くてとおはせられて、宇治殿めし返して讓位の宣命に皇太子のよしのせられにけり、能信をば閑院東宮の大夫とぞ申、この申やうこそふかしぎなれど人もおもへり、白河院^{三〇後三}のつねに能信をば故春宮大夫殿おはせずば、我身はかゝる運もあらまじやと仰られけるには、かならず殿の字を付ておはせられけり、やんごとなきことなり、

〔續世繼^二御法の呪〕東宮^{三〇後}におはしましける時、よのへだて多くおはしましければ、あやふくおぼしけるに、檢非違使の別當にて經成と云し人、なほしにかまはばさみにて、やなぐひおひて中門廊にゐたりける日は、いかなることの出さぬるぞとて、宮の内の女房より始めて隠れさわぎけるとかや、おはしましける所は二條東洞院なりければ、其わたりを軍のうちめぐりてつゝみたりければ、かゝる事こそ侍れなぞ申あへりける程に、別當のまゐりたりければ、東宮も御直衣奉りなぞして御ようい有けるに、別當檢非違使めして、をかしの物はめしとりたりやと問ければ、既にめして侍りと云ければこそ、どもかくも申さでまかり出られければ、おもくあやまちけるもの、おはします近きあたりに籠りゐたりければ、うちつゝみたりけるに、もし東宮ににげいる事もやあるとてまゐりたりけり、かやうにのみあやふされ給て、東宮をもすてられやせさせ給はんずらんとおもほしけるに、殿上人にて衛門權佐ゆきちかど聞えし人の相よくするおぼえ有て、いかにも天の下まろしめすべきよし申けるかひありて、かくならびなくぞおはしまし、

〔古事談王^一道后宮〕後三條院春宮ノ御時、御持僧成尊僧都奉問云、北斗ノ御拜候や、被仰云、毎月奉拜

〔歷代皇紀光明〕皇太子成良親王、後醍醐皇子、母准三宮廉子、建武三年十一月十四日立、元上野大守征夷大將軍、

〔皇年代略記光明〕建武三年十一月十四日、以先帝光後皇子成良親王爲皇太子、十二月先帝又御出奔之後廢之

〔歷代皇紀崇光〕皇太弟直仁親王、一院圖第二皇子、母徽安門院、貞和四年十月廿七日立、十四讓位

宣命、次觀應三年十一月廢之、

〔椿葉記〕崇光院は、中觀應二年十一月七日、南朝より取たてまつりて御くらゐを廢す、中同三年閏二月廿日、南朝上後の天氣によりて、兩上皇光明、康新院光崇、儲皇直仁親王八幡の軍陣に幸

し、立し、中さてどう宮仁直は廢せられて、光嚴院第二宮光嚴、同八月十七日踐祚あり、ちゝ

の御ゆづりにもあらず、ふしやう足利のはからひとして申おこなふ、

〔大鏡一後一條〕むかし一條の院の御なやみのをりおほせられけるは、すべからくは次第のまゝに、

一のみこ康敦をなむ春宮とすべけれど、うしろみすべき人なきにより思ひかけず、さればこの

宮をばたて奉るなりとおほせられけるぞ、此たうだい一條後の御事よげにさる事ぞかし、帝王の

御次第は申さずともありぬべけれど、入道殿下道長藤原の御榮花もなにゝよりひらけ給ふぞと

思へば、まづ御門后の御ありさまを申なり、うゑ木はねを生じてつくろいおほしたてつればこ

そ、えだもまげりてこのみをもむすべや、まかあればまづ帝王の御つゞきをおぼへて、つぎに大

臣の御つゞきはわかざんとなり、

〔愚管抄四〕さて後朱雀の御やまひおもくて、後冷泉に御讓位ありけることを、宇治殿藤原通あゐ

りて申しさたまてたゝせたまひけるに、後三條の御ことのなにも沙汰もまかりけるに、御堂

道長藤原をど子の中に能信の大納言といふ人ありけり、閑院の公成中納言のむすめを子にして

ありけるを、後三條の后にはまゐらせたる人なり、宇治殿たゝせたまひける跡になゐりて、二宮

子○康節會也、

〔増鏡^{十五}時雨〕元弘元年○中

略

かゝるにつけては、一御ぞうのみいまはわくかたなんさだまり給ふべきかと世の人も思ひきこゆる程に、龜山院の御ながれのたゆべきにはあらずとにや、先

坊^其○邦の一宮^仁○康

を太子にたてまつる、御めのどの雅藤の宰相の、法性寺の家に渡らせ給へるを、土御門高倉の先坊の御跡へ入たてまつりて、十一月八日に坊にさだまり給ふ、今は思た

えぬる心ちしつるにいとめでたし、松が浦島に年へ給ひぬる入道の宮も、御おやの心ちにて

おはしませすべければ、太上天皇になすらへて、崇明門院^紀○邦^其と聞ゆ、

〔歴代皇紀^{光嚴}〕

皇太子康仁親王、元弘元年十一月八日立、^{九月二十五日}立親王

二年五月廢之、

〔續史愚抄^{後醍醐}〕

元弘三年五月十七日己酉、於伯耆船上行宮詔曰、宜廢新帝^{光嚴}院皇位、及康仁親王

皇太子位、

〔歴代皇紀^{後醍醐}〕

皇太子恒良親王、當今皇子、母准三宮藤原子、元弘四年十一月廿四立、延元元年十月

十三日、爲義貞北國沒落、

〔南方紀傳〕南朝延元四年北朝曆應二年四月十三日、恒良親王薨逝、^{十五}

○按ズルニ、恒良親王ノ北國ニ行啓アリシ後、光明天皇ハ成良親王ヲ太子ト定メ給ヒシカバ、

恒良親王ハ自ラ廢セラレシモノニテ、神皇正統記後醍醐天皇ノ條ニ、八月^{三年}○建武^{三年}に至るまで

度々合戦有しかど、官軍すゝませ、依て都には、元弘の時の僞主^顯○光の御弟に、三の御子豐仁^光○

明と申けるを位につけ奉る、十月の頃にや主上都に出させ給ふ、いとあさしかりし事なれ

ど、また行末をおぼしめす道ありしにこそ、東宮^其○恒は北國に行啓あり、左衛門督實世卿以下

の人々、左中將義貞朝臣をはじめて、さるべき兵もあまたつかうまつりけり、主上をば尊號の

儀にてましく、御心をやすめ奉るためにや、成良親王を東宮にすゑ奉る、ト見エタリ、

〔永鏡^{仁明}〕承和九年七月十五日、嵯峨法皇うせさせ給ひにき、當代の御ちへにおはします、十七日平城天皇の御子に阿保親王と申し人、嵯峨のおほぎさきの御もとへ御せうそくをたてまつりて申給ふやう、東宮のたちはさこはみねと申ものまできて、太上天皇すでにうせさせ給ひぬ、世中のみだれいでき侍りなんす、東宮を東國へわたしたてまつらんと申よしをつけ申給ひしかば、忠仁公^{其房}の中納言と申ておはせしを、后よび申させ給ひて、阿保親王の御ふみをみかどにたてまつり給ひき、この事はみねと但馬權守橘逸勢とはかれりける事にて、東宮はまり給はざりけり、廿四日に事あらはれて、廿五日に但馬權守を伊豆國へつかはし、こはみねをおさへつかはす、又中納言よしの宰相あきつなとながされにき、^略中東宮おそりおぢ給ひて、太子をのがれんと申給ひしかば、みかどこの事はこはみねひとりか思ひたちつることとなり、東宮の御あやまりにあらす、どかくおぼすことなかれとて、たゞもとのやうにておはしなさせき、^略中八月三日みかど冷泉ゐんに行幸ありてすまさせ給ひしに、東宮もやがてまゐらせ給ひたりしに、いづかたよりともなくてふみをなげいれたりき、こはみねが東宮ををしへたてまつりたることゝもありしかば、にはかに東宮の宮づかさたちはさおもと人など百餘人とらへられて、東宮を淳和院へかへしたてまつりて、四日當代の第一親王を東宮にたて申給き、文德天皇これにおはします、

〔三代實錄^{光孝}四十六〕元慶八年九月廿日丁丑、恒貞親王薨、不任葬司、以喪家不經奏聞殯殮既訖也、皇帝不視事三日、親王者淳和太上天皇之第二子也、母太皇太后諱正子、嵯峨太上天皇之女焉、天長十二年立爲皇太子、承和九年廢皇太子、依橘逸勢帶刀舍人伴健岑、反逆之謀也、嘉祥二年正月授三品、恒貞出家爲沙門、名曰恒寂、崇信佛道精進持戒、無病而薨、時年六十、遺命薄葬、務從率儉、

〔光嚴院御記〕元弘元年十月廿一日癸亥、以通顯卿、自內親王立坊事被申之、十一月八日己卯、立太

〔三代實錄二十四〕貞觀十五年十一月十四日乙亥從四位上行大和守在原朝臣善淵前肥後守從五位上在原朝臣安貞等上表請無品高丘親王入唐之後多歷年序歸却之期已過存亡之分難決而偏准於平當猶愛其封邑靜而思之慙慙難耐望請早被返收將免謗議勅有亡難卜何許來請

〔續日本後紀仁明〕承和九年七月乙卯是日詔曰現神止大八洲國所知倭根子天皇我詔其萬宜御

命親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣不慮外爾太上天皇嵯峨崩依天晝夜止无久

哀遂比焦禰御坐爾春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊際仁乘天與橋逸勢合力天逆謀平構成天國家平

傾亡正止此事波平皇太子波平○淳和不知毛在此女不善人仁依天相累事波自古利言來留物利又先

仁令法師等天呪咀止云人多利安而毛隱疵平撥求无女事平不欲之天抑忍留又近日毛或人乃云屬坊

人等毛有謀止云若其事平推究波惡波不善事乃多无事平加以後太上天皇乃○厚御恩平願天

毛究求无女事平不知奴今思久波佐直仁皇太子乃位平停天彼此無事波善久有止部之思女須又太皇大

后乃○嘉御言毛仁如此毛久奈思保世故是以皇太子乃位平停退介賜不又可知事人止毛天奈大納言

藤原朝臣愛發波平廢天京外仁中納言藤原朝臣吉野波平衆聞食止世宣丙辰廢皇太子劍四口納袋付

波出雲國員外乃守爾任賜比宿賜止宣天皇我御命平衆聞食止世宣丙辰廢皇太子劍四口納袋付

勅使右近衛少將藤原朝臣富士麻呂進藏人所二口納珠爾勅遣參議正四位下勅六等朝野宿禰

鹿取等於嵯峨山陵告廢皇太子狀曰天皇我御命爾坐掛畏山陵爾中賜止奏久比者東宮帶刀舍人

伴健岑與橘朝臣逸勢挾懷惡心天謀傾國家利掛畏山陵乃厚顧爾依天其事發覺奴搜求事跡事緣

皇太子因茲食國法隨皇太子位停退爾狀平惡毛中賜止中八月甲戌遣參議正躬王送廢

太子於淳和院備前守從四位上紀朝臣長江自院逢迎其儀駕小車出禁中到神泉良角駕牛車先是

童謠曰天波琵琶平折那玉兒牽括乃坊爾牛車波善爾辛乃小莒之華有識咸言童謠不虛乎今

驗之矣

をみかどの御おとゝの早良親王東宮とおはせしが、人をつかはしていころさしめ給ひて
き、略中かくて十月に、東宮をおとくにでらにこめたてまつり給へりしに、十八日までその命
たえ給はざりしかば、あはぢの國へながしたてまつり給ひしに、山さぎにてうせさせ給ひに
き、略中同十九年七月己未、みかと思ふところありとのたまひて、前東宮早良親王を崇道天皇
と申、又井上内親王を皇太后とすべきよし仰られき、おのゝまさぬあどもにも、うらみの御心
をまづめたてまつらむとおぼしめしけるにこそ侍るめれ、

〔大鏡三〕

左大臣師尹

世はじまりてのち、東宮位とりさげられ給ふ事は、八九代ばかりにやなりぬら

ん、なかに法師東宮おはしけるこそは、うせ給ひて後に贈太上天皇と申ていはひすゑられ給へ
ば、おほやけもまろしめして、しゆだう天皇とて、官物のほつをさきにたてまつらせ給ふめり、

〔日本後紀二十〕

嵯峨

弘仁元年九月庚戌、廢皇太子、立中務卿諱和爲皇太弟、

〔紹運要略〕

嵯峨

廢太子高岳親王、平城子、後號眞如親王、大同四年四月日立坊弘仁元年九月十二日廢之出家、渡唐、逆旅之間遷化、

〔水鏡下〕

嵯峨

弘仁元年、略中九月に内侍のかみ子、太上天皇、城をすゝめたてまつりて、位にか

へりつきて、われ后にたゝんといふ事いできて、世中靜ならずさゝめきあへりし程に、みかど
内侍のかみのつかさ位をとり給ひ仲成子、藥を土佐國へながしつかはすよし宣旨をくださ

せ給ひしに、略中十一日に太上天皇いくさをおこして、ないしのかみとひとつ御こしにたて

まつりて、東國のかたへむかひ給ひしに、略中大納言田村麻呂宰相綿麿をつかはして、そのみ

ちをさへぎりて、仲成をいころしてき、太上天皇すぢなくてかへり給ひて、御よしおろして入

道し給ひてき、御年三十七なり、内侍のかみみづから命をうしなひてき、おそろしかりし人の

心なり、太上天皇の御子の東宮、高をすてたてまつりて、みかどの御おとゝの大伴親王とて、

淳和天皇のおはしましゝを、東宮にたて申させ給ひき、

かは、みかどよからんさまにおこなふべしとの給ひしかば、○中百川いつはりて宣命をつくりて、人々をもよふして、太政官にして宣命をよましむ、皇后及皇太子をはなちおひたてまつるべきよしなり、此事をある人みかどに申にみかどおほきにおどろき給ひて、百川をめして、后なほこり給はず、まばし東宮を去りぞけんどこぞ申こひつるに、いかにかゝる事はありけるぞとの給ふに、百川申ていはく、去りぞくとはながく去りぞくる名也、母つみあり子おこれり、誠にはなちおはんにたれる事なりと、すこしも私あるけしきなく、ひとへに世のためと思ひたる心かたちにあらはれて見えしかば、みかどかへりて百川におち給ひて、どもかくもの給はせずして、うちくになげきかなしび給ふ事かぎりなかりき、

〔續日本紀三十八〕延暦四年九月乙卯、中納言正三位兼式部卿藤原朝臣種繼、被賊射斃、丙辰、車駕

至自平城、捕獲大伴繼人、同竹良等黨與數十人、推鞠之、並皆承伏、依法推斷、或斬或流、十月庚午、遣

中納言正三位藤原朝臣小黒麻呂、大膳大夫從五位上笠王於山科山陵、○天治部卿從四位上壹志

藥王、散位從五位下紀朝臣馬守於田原山陵、○光中務大輔正五位上當麻王、中衛中將從四位下紀

朝臣古佐美於後佐保山陵、○聖以告廢皇太子○早之狀、

〔日本紀略恒武〕延暦四年九月庚申、詔曰、云々、○中是日皇太子自內裏歸於東宮、即日戌時、出置乙訓

寺、是後太子不自飲食、積十餘日、遣宮内卿石川垣守等、駕船移送淡路、比至高瀬橋頭已絕、載屍至淡

路葬、

〔帝王編年記十二〕延暦十九年七月、遣勅使於淡路國、取早良親王之骨、○光仁第三皇子、納大和國八島

寺、○上部諡稱崇道天皇、○八所御

○按ズルニ、崇道天皇ノコトハ、追尊天皇ノ條ヲ參看スベシ、

〔水鏡恒下〕八月○延暦になりの京へ行幸侍りき、○中長岡の京には中納言種繼留守にて候し

〔續日本紀三十二〕

寶龜三年五月丁未、廢皇太子他戶王爲庶人。詔曰、天皇御命其庶宣御命乎、百官人

等天下百姓衆聞食止宣、今皇太子止定賜他戶王、其母井上內親王、乃廢魅大逆之事一二、遍仁能味

不在、通久發覺、其高御座天之日嗣座波、非吾一人之私座止、奈所思行、須故是以天之日嗣止、定

賜比儲賜流部皇太子位、謀反大逆人之子乎治賜部卿等百官人等天下百姓能念其麻耻志賀多

自氣奈志、加以後世乃平久安長久全久可在在後政毛仁不在止神奈賀所念行仁依而奈他戶王乎皇太

子之位停賜比却賜止宣天皇御命乎衆聞食止宣、

〔續日本紀三十三〕寶龜六年四月己丑、井上內親王、他戶王並卒、

〔類聚國史七十九〕延暦廿二年正月壬戌、外從五位下槻本公奈氏麻呂授從五位上弟正七位上豐人、

豐成從五位下、並賜姓宿禰奈氏麻呂父、故右兵衛佐外從五位下老、天宗高紹天皇仁、光之舊臣也、初

庶人戸王、居東宮、暴虐尤甚與帝武、觀不稔遇之無禮、老竭心奉帝、陰有輔翼之志、庶人及母廢后上、井

王觀聞老爲帝所昵、甚怒喚之、切責者數矣、及后有巫蠱之事、老按驗其獄、多發奸狀、以此母子共廢、社稷

以寧、帝追思其情、故有此授、

〔永鏡下〕光この后内親王御年五十六になり給ひき、此御腹の他戸の親王は、御門の第四の御子

にて、御年などもいまだいどけなくおはしまして、こどしは十二にぞなり給ひしかども、此后

の御はらにておはせしかば、兄たちを置たてまつりて、こどの正月に東宮に立給ひしぞかし、

略○中百川此はどの事どもをうかひ見るに、后まじわざをして、御井にいれさせ給ひき、みか

どをどくうしなひたてまつりて、我御子の東宮を位につけてまつらむといふ事どもなり、

其井にいりたる物ある人とりて、宮のうちにもてあつかひしかば、此事みな人まりにき、中

略百川此ことをきゝて、あさましく侍る事なり、后を去ばし縫殿の寮に渡したてまつりて、こ

らしめたてまつらん、又東宮もあしき御心のみおはす世のためいと不便に侍ると申し

茂由梅乃啓皇子曰願勿害太子臣將議由是太子自死于大前宿禰之家伊豫國十二月壬午穴穗皇子即天皇位

廢太子

〔大鏡裏書〕廢太子事九人可動之

道祖親王天武天皇孫一品新田部皇子男天

他戶親王光仁天皇皇子寶龜二年立之

早良親王道崇天皇光仁天皇皇子天應元年四月四日立之延暦四年十月廢之左遷瀨頭國

高岳親王平城天皇皇子大同四年立之出家

恒貞親王淳和天皇皇子天長七年立之承和元年廢之

○按ズルニ廢太子ハ此他康仁親王成良親王直仁親王等アリ

〔續日本紀二十〕天平寶字元年三月丁丑皇太子道祖王田部親王子天武天皇孫新身居諒闇志在淫縱雖加教勅

曾无改悔於是勅召群臣以示先帝武遺詔因問廢否之事右大臣已下同奏云不敢乖違願命之旨

是日廢皇太子以王歸第四月辛巳勅曰國以君爲主以儲爲固是以先帝遺詔立道祖王昇爲皇太

子而王諒闇未終陵草未乾私通侍童無恭先帝居喪之禮曾不合憂機密之事皆漏民間雖屢教勅猶

無悔情好用婦言稍多狠戾忽出春宮夜獨歸舍云臣爲人拙愚不堪承重故朕竊計廢此立大炊王中

略宜從天廢却還本色七月庚戌分遣諸衛掩捕逆黨更遣出雲守從三位百濟王敬福太宰帥正四

位下船王等五人率諸衛人等防衛獄囚拷掠窮問黃文改姓名多道祖改姓名麻大伴古麻呂多治比賣養

小野東人賀茂角足改姓乃等並杖下死

〔續日本紀三十一〕寶龜二年正月辛巳立他戶親王爲皇太子詔曰明神御大八州養德根子天皇詔旨

勅命平親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣隨法爾皇后御子他戶親王立爲皇太子故此

狀悟氏百官人等仕奉詔天皇御命諸聞食止宣

皇子宜爲儲君臣今日出家爲陛下欲修功德天皇聽之即日出家法服因以收私兵器悉納於司壬午入吉野宮時左大臣蘇賀赤兄臣右大臣中臣金連及大納言蘇賀果安臣等送之自荒道返或曰虎著翼放之是夕御嶋宮癸未至吉野而居之是時聚諸舍人謂之曰我今入道修行故隨欲修道留之若仕欲成名者還仕於司然無退者更聚舍人而詔如前是以舍人等半留半退

〔古事記〕九下天皇崩之後定木梨之輕太子所知日繼末即位之間其伊呂妹輕大郎女○中是以百官及天下人等背輕太子而歸穴穗御子○安爾輕太子畏而逃入大前小前宿禰大臣之家而備作兵器爾時所作矢者爾其箭之穴穗王子亦作兵器此王子所作之矢者也是謂穴穗箭也於是穴穗御子與軍圍大前小前宿禰之家○中爾其大前小前宿禰舉手打膝儻詞那傳自詞下三歌參來○中如此歌參歸白

之我天皇之御子於伊呂兄王無及兵若及兵者必人咲僕捕以貢進爾解兵退坐故大前小前宿禰捕其輕太子率參出以貢進○中故其輕太子者流於伊余湯也

〔日本書紀〕九下二十三年三月庚子立木梨輕皇子爲太子容姿佳麗見者自感同母妹輕大娘皇女亦艷妙也太子恒念合大娘皇女畏有罪而默之然感情既盛殆將至死爰以爲徒非死者雖有罪何得忍乎遂竊通乃悒懷少息二十四年六月御膳羹汁凝以作氷天皇異之下其所由卜者曰有內亂蓋親相奸乎時有人曰木梨輕太子奸同母妹輕大娘皇女因以推問焉辭既實也太子是爲儲君不得罪則流輕大娘皇女於伊豫

〔日本書紀〕十下四十二年正月天皇○九崩十月癸卯葬畢之是時太子行暴虐淫于婦女國人謗之群臣不從悉隸穴穗皇子爰太子欲襲穴穗皇子而密設兵穴穗皇子○安復興兵將戰故穴穗括箭輕括箭

始起于此時也時太子知群臣不從百姓乖違乃出之匿物部大前宿禰之家穴穗皇子聞則圍之大前宿禰出門而迎之穴穗皇子歌之曰於朋摩弊鳥摩弊輪區塗餓訶那杜加礙河區多智豫羅泥阿梅多知夜梅牟大前宿禰答歌之曰瀨椰比等能阿由臂能古輪孺於智珥岐等瀨椰比等等豫牟佐杜弭等

れりしが、太子みづからうせ給ひぬ尊おどろきなげき給人事かぎりなし、されどのがれますべき道ならねば癸酉の年即位、

〔日本書紀^{十五}〕白髮天皇

聖

三年四月、立億計王

〇七

爲皇太子、立天皇

〇八

爲皇子、五年正月、白髮

天皇崩、是月皇太子億計王與天皇讓位、久而不處、由是天皇姊飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政、

十一月、飯豐青尊崩、十二月、百官大會、皇太子億計取天皇之璽、置之天皇之座、再拜從諸臣之位、

曰、此天皇之位、有功者可以處之、著貴蒙迎、皆弟之謀也、以天下讓天皇、天皇願讓以弟、莫敢即位、又奉

白髮天皇先欲傳兄立皇太子、前後固辭曰、日月出矣、而燭火不息、其於光也、不亦難矣、時雨降矣、而猶

浸灌、不亦勞乎、所貴爲人弟者、奉兄謀逃脫難、照德解紛而無處也、卽有處者、非弟恭之義、弘計不忍處

也、兄友弟恭、不易之典、聞諸古老、安自獨輕、皇太子億計曰、白髮天皇以吾兄之故、舉天下之事、而先屬

我、我其羞之、惟大王道建利、運聞之者歎息、彰顯帝孫見之者殞涕、惘惘指紳、忻荷戴天之慶、哀黔首

悅逢履地之恩、是以克固四維、永隆萬業、巧隣造物、清猷映世、超哉邁矣、粵無得而稱、雖是曰兄、豈先處

乎、非功而據、咎悔必至、吾聞天皇不可以久曠、天命不可以謙拒、大王以社稷爲計、百姓爲心、發言慷慨、

至于流涕、天皇於是知終不處、逆兄意、乃聽而不即御座、世嘉其能以實讓曰、宜哉兄弟怡怡、天下歸

德、篤於親族、則民興仁、元年正月己巳朔、大臣大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉讓天下、陛下正

統、當奉鴻緒爲郊廟主、承續祖宗無窮之烈、上當天心、下厭民望、而不肯踐祚、遂令金銀蕃國、群僚遠近、

莫不失望、天命有屬、皇太子推讓聖德彌盛、福祚孔章、孺而勤謙恭慈順、宜奉兄命、承統大業、制曰可、乃

召公卿百僚於近飛鳥八鈞宮、卽天皇位、百官陪位、皆忻忻焉、

〔日本書紀^{二十八}〕

天武

天命開別天皇

〇天

元年、立爲東宮、四年十月庚辰、天皇臥病以痛之甚矣、於是遣蘇

賀臣安麻呂召東宮引入大殿、時安麻呂素東宮所好、密領東宮曰、有意而言矣、東宮於茲疑有隱謀、而

憤之、天皇勅東宮授鴻業、乃辭讓之曰、臣之不幸、元多病、何能保社稷、願陛下舉天下附皇后、仍立大友

太子辭而不即
帝位

〔日本書紀^{十一}〕四十一年二月、譽田天皇^{○神}崩、太子菟道稚郎子讓位於大鸕鷁尊^{○仁}、未即帝位、

仍詔大鸕鷁尊、夫君天下以治萬民者、蓋之如天、容之如地、上有驩心、以使百姓、百姓欣然、天下安矣、今

我也、弟之、且文獻不足、何敢繼嗣位、登天業乎、大王者、風姿岐嶷、仁孝遠聆、以齒且長足、爲天下之君、其

先帝立我爲太子、豈有能才乎、唯愛之者也、亦奉宗廟社稷重事也、僕之不佞、不足以稱、夫昆上而季下、

聖君而愚臣、古今之常典焉、願王勿疑、須即帝位、我則爲臣之助耳、大鸕鷁尊對言、先皇謂皇位者、一日

之不可空、故預選明德、立王爲武、祚之以嗣、授之以民、崇其寵章、令聞於國、我雖不賢、豈棄先帝之命、輒

從、弟王之願乎、固辭不承、各相讓之、^{○中}既而興宮室於菟道而居之、猶由讓位於大鸕鷁尊、以久不即

皇位、愛皇位空之、既經三載、^{○中}太子曰、我知不可奪兄王之志、豈久生之煩、天下乎乃自死焉、時大鸕

鷁尊聞太子薨、以驚之、從難波馳之到菟道宮、愛太子薨之經三日、時大鸕鷁尊標擗叫哭、不知所如、乃

解髮踰屍、以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、愛大鸕鷁尊語、太子曰、悲兮惜兮、何所以歟、自逝

之、若死者有知、先帝何謂我乎、乃太子啓兄王曰、天命也、誰能留焉、若有向天皇之御所具奏、兄王聖之

且有讓矣、然聖王聞我死、以急馳遠路、豈得無勞乎、乃進同母妹八田皇女曰、雖不足納采、僅充掖庭之

數、乃且伏棺而薨、於是大鸕鷁尊素服爲之發哀、哭之甚慟、

〔古事記^中〕於是大雀命^{○仁}與宇遲能^{○仁}和紀郎子二柱、各讓天下之間、海人貢大贄爾兄辭令、貢於弟、

弟辭令、貢於兄、相讓之間、既經多日、如此相讓、非一二時、故海人既疲往還而泣也、故諺曰、海人乎、因已

物而泣也、然宇遲能和紀郎子者、早崩、故大雀命治天下也、

〔神皇正統記^仁〕應神かくれまし、かば御兄たち、太子^{○菟道稚郎子}をうしなはんとせられしを、此尊

○大鸕鷁尊さとりて、太子と心を一にしてかれを誅せられにき、爰に太子天位を尊にゆづり給ひ、尊か

たくいなみ給ふ、三年になるまでたがひにゆづりて位をひなしくす、太子は山城の宇治にます、

尊は攝津の難波にましける、國々の御つぎ物もあなたかなたにうけとらずして、民の愁へとな

せこまかにきこえんと心づよくおぼしめしつれど、まことになりぬるをりはいかになりぬる
 事ぞとさすがに御心さはがせ給ひぬ、むかひ聞えさせ給ひては方々におくせられ給ひにけり
 どや、たゞきのふのおなじさまに中々事すくなにおはせらるゝ御をりは、さりともしいかにか
 はおぼしめしよりぬるぞなきやうに申させ給ひけんかしな、御けしきの心ぐるしさをかつは
 見たてまつらせ給ひて、すこしをしのはせ給ひて、さらばけふよき日なりとて、院になしたて
 まつらせ給ひて、やがて事どもはじめさせ給ふ日よろづの事さだめおこなはせ給ふ、判官代に
 は宮づかさども藏人などかはるべきにあらす、別當には中宮の權大夫をなしたてまつり給へ
 れば、おはしてはいし申させ給ふ事どもさたよりはてぬればいひでさせ給ひぬ、いとあはれに侍
 りける事は、殿のまださふらはせ給ひける時、母宮の御かたより何方の道よりたづねまゐりた
 るにか、あらはに御覽するもえらぬけしきにて、いとあやしげなるすがたしたる女房の、わなゝ
 くゝゝいかにかくはせさせ給へるぞと、こゑもかはりて申つるなん、あはれにも又をかしうも
 どこそおほせられけれ、略○中ひたき屋、ぢん屋などどりやられけるほどにこそえたえずしの
 びねなく人々侍りけれ、まして皇后宮はり川の女御殿などは、さばかり心ふかくおはしまさふ
 御心どもに、いかばかりおぼしめしけんとおぼえ侍りし、略○中さていかなる事に、東宮御位せ
 めおろしどりたてまつり給ひては、又御むこにとりたてまつらせ給ふほどもてかしづきたて
 まつらせ給ふ御ありさま、まことに御心もなぐさませ給ふばかりこそきこえ侍りしか、おもひ
 まゐらするをりは、大げんせころにおはしまして、御だいやばんなどまで手づからのとはせ給
 ふ、なにをもめしこゝろみつゝなんまゐらせ給ひける、御さうしぐちまでもおはしまして、女
 房にたまはせ、殿上にいだす程にもたちそひてよかるべきさまにをしへなど、これこそは御は
 ゐよとあはれにぞ、○又見三集花物語二

のなきに、まぢかきほどなれば、たよりにとも思ひてせうをこし聞えつるなり、そのむねは、かくて侍ること本意ある事と思ひ、こゝろのまゝおかせ給へる事をたがへたてまつらむも、かたがたには、いかり思はぬにあらねど、かくてあるなん思ひつゝくるにつみふかくもおぼゆる、うちの御ゆくすゑはいどはるかにものせさせ給ふ、いつともなくてはかなき世にいのちもまゐりがたし、このありさまのきて心にまかせておこなひをもし、物まうでをもし、やすらかにてなんあらまほしきを、むげにさきの東宮にてあらむは見ぐるしかるべきなん、いんがう給ふて、どしに受領などありてなんあらまほしきを、いかなるべき事にかどつたへ聞えられよとおほせられければ、かしこまりてまかでさせ給ひぬ、そのよはふけにければ、つとめてぞ殿にまゐらせ給へるに、略中東宮にまゐりたりつるかとどはせ給へば、よべの御消息くはしく申させ給ふに、うなりや、おろかにおぼしめさんやは、おしておろしたてまつらむ事は、いかりおぼしめしつるに、かゝる事のいできぬる、御よろこびなほつきせず、まづいみじかりける大宮門院の御宿世かなどおぼしめす、民部卿後源殿に申あはさせ給へば、たゞとく／＼せさせ給ふべきなり、なにかよき日もとらせ給ふ、すこしものびばおぼしかへして、さうでありなんどあらむをばい、かはせさせ給はんと申させ給へば、さる事とおぼして、御こよみ御らむするにけふもあしき日にもあらざりけり、やがて關白殿藤原通もまゐらせ給へるほどに、とく／＼どそゝのかし申させ給ふ、まづいかに大宮に申てこそはどて、うちにおはしをすほどなれば、まゐらせ給ひて、かくなんどきかてたてまつらせたまへば、まゐして女の御心はいかゞはおぼしめされけん、それよりぞ春宮にまゐらせ給ふ、かう申事は、寛仁元年八月六日の事なり、略中母の宮だにもまゐらせ給はざりけり、かくこの御方に物さはがしきを、いかなる事ぞあやしくおぼしてあないし申させ給へど、れいの女房のまゐるみちをかためさせ給ひてけり、殿にはどしとろおぼしめしつる事な

ておはしますを心ぐるしく、殿も大宮門^{上院}東も思ひ申させ給ふに、もしうちにをどこ宮もいでおはしなばいかゝあらん、さあらぬさきに東宮にたてたてまつらばやとなんおほせらるなり、さればおしてとられさせ給へるなりなぞのみ申を、まことにしもあらざらめぞげに事のさまもよほどおぼゆまじげなればにや、きかせ給ふ御心はいとやうきたちたるやうにおぼしめされて、びたふるにとられんよりはわれどやのきなまじとおぼしめすに、又たか松ののみくしげ殿まゐらせ給ひて、殿のはなやかにもてなしたてまつらせ給ふべかなりとて、れいの事なればよの人さまへ、さだめ申を、皇后宮きかせ給ひていみじうよろこばせ給ふを、東宮はいとよかるべき事なれど、さだにあらばいとや我おもふ事えせじ、なほかくてえあるまじくおぼしめされて、御母宮にまかへ、なんおもふと聞えさせ給へばさうなりやいとゝあるまじき御事なり、見くしげの御ことをこそまことならばすゝみきこえさせ給はめ、さらにゝおぼしめしよるまじき事なりと聞えさせたまひて、御もののけのするなりと御いのりをもせさせ給へど、さらにおぼしめしとゝまらぬ御心のうちをいかでかよひともきゝけん^中さて東宮はつひにおぼしめしたちぬ^中皇后宮にもかくとも申させ給はず、たゞ御心のまゝに殿に御せうそく聞えんとおぼしめすに、むつましうさるべき人もものし給はねば、中宮の權大夫殿のおはします、四條の坊門どにしの洞院とは宮ちかきぞかし、そればかりをこと人よりはとやおぼしめしよりけん、藏人なにがしを御つかひにてあからさまにまゐらせ給へどあるを、^中略まゐらせ給ふほど日もくれぬ^略見まはさせ給ふに、にはの草もいとふかく、殿上のありさまも春宮のおはしますとは見えず、あさましうかたじけなげなり^中あさがれひのかたにいでさせ給ひて、めしあればまゐり給へり、いどちかくこちとおほせられて、ものせらるゝ事もなきに、あないするもはかりおほかれど、おどやにきこゆべき事のあるを、つたへものすべき人

らさら○さらさらハおぼしめしそとせし給ふにさらばたゞ本意もあり、出家にこそはあ
んなれどなたまはするに、さまでおぼしめす事ならばいかゞはとも申さんうちに奏し
侍りてをど申させ給ふをりにぞ、御けしきいとよくならせ給ひにける、さて殿うちにまゐらせ
給ひて、大宮にもうちにも申させ給ひければ、いかゞはきかせ給ひけん、このたびの東宮には式
部卿の宮○教廉はど○はどハこそはおぼしめすべけれど、一條院のはかゞしき御うし
ろみなければ、東宮にたうだいをたてたてまつるなりとおほせられしかば、これもおなじ事な
りとおぼしきだめて、寛仁元年丁巳八月五日こそは九さいにて、三宮○後東宮にたゝせ給ひて、
略○中寛仁三年己未八月廿八日、御とし十一にて御元服せさせ給ひしか、さきの春宮○教をば小
一條院と申略○中、小一條院わが御心もてのがれ給へる事ははじめとす、略○中この院のか
くおぼしたちぬる事かつは殿下の御報のはやくおはしますすにおされ給へるか、又おほくは元
方民部卿の靈のつかうまつりつるなり、略○中事のやうだいは、三條院のおはしますしけるかぎり
こそあれ、うせ給ひにけるのちは、よのつねの東宮の御やうにもなく、殿上人なごまゐりて御あ
そびせさせ給ふや、もてなしかしづき申人なごもなく、いとつれづれにまざるゝかたなくおぼ
しめされけるまゝに、心やすかりし御あり、さまのみ戀しく、ほけづしきまでおぼえさせ給ひ
けれど、三條院おはしますしけるかぎりは、院殿上人なごもまゐりや、御つかひもまげくまゐりか
よひなごするに、人目もまげく、よろづなぐさめさせ給ふを、院うせおはしますしては、世中もの
おそろしく、おほちの往來もいかゞどのみわづらはしくふるまひにくきにより、宮司なごだに
もまゐりつかうまつる事もかたくなりゆけば、ましてげすの心はいかゞはあらん、どのもりづ
かさのまもべもあさぎよめつかうまつる事もなければ、庭のくさもまげりまざりつゝ、いとか
たじけなき御すみかにておはします、されゝ参りよる人々は、よにきこゆる事とて、三宮かく

之心、仍余申給受領給如何其氣色甚能、仍聞可給之由了、又隨身事同被命、承此由等退出、參内啓皇太后宮○藤原彰子、此由其氣色非可云候宿、七日壬申、早朝從内罷出、可然上達部多來、相定云、如此事日可延、只今吉平可被問日、又申曰、非可忌者、召吉平問、申、明後日吉日、彼日早可被行者也、雜事相定了、即參皇太后啓案内退出、

〔左經記〕寛仁元年八月十七日壬午、參内大殿以頭左中辨被聞攝政殿云、前坊奉授院號并年官年符如舊○時春宮、又停止進屬被任判官代主典代如元、兼又左右近衛各五人、可爲隨身之由等也、今日依欠日、不被下宣旨、廿三日戊子、申二刻被渡壺切御劔於東宮○時春宮、御劔須御讓位日被渡東宮也、而有降頗○日渡新宮、廿五日庚寅、又改前坊爲小一條院并年官年符御封等事如元、兼又止進屬爲判官代主典代、并以左右近衛各五人、可爲隨身之由、右少辨奉宣旨仰右大將、大將即召大外記文義朝臣於膝突仰之云々、

〔大鏡左大臣師尹〕一のみこ敦明親王とて、式部卿と申し程に、長和五年正月廿九日、三條院おりさせ給へば、たうだい○後一條位につかせ給ひて、この式部卿の宮東宮にたせ給ひにき、○中院院○三うせさせ給ひてのち、二年ばかりありて、いかゞ思召けん宮たちと申しをり、よろづにあそびならはせ給ひて、うるはしき御ありさまいとくるしく、いかでかくてあらばやとおぼしならひて、皇后宮○三條后媛にかくなんおぼえ侍ると申させ給ふを、いかでかはげにさもとはおぼさんする、すべてあさましくあるまじきことゝのみいさめ申させ給ふに、おぼしあまりて入道殿○藤原道長に御消息ありければ、まゐらせ給へるに御物がたりこまやかにて、此位さりてたゞ心やすくてあらんとなん思ひ侍ると聞えさせければ、さらにくうけたまはらじ、さは三條院の御すゑはたえねとおぼしめしおきてさせ給ふか、いとあさましくかなしき御事なり、かゝる御心のつかせ給ふ御事はこと事ならじ、古冷泉院の御ものゝけなどのおもはせたまつるなり、さ

許而不爲太子

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年四月壬寅、先立侍從從四位下恒世王爲皇太子、太子上表固辭、仍立正良親王爲皇太子、

〔神皇正統記嵯峨〕一旦國をゆづり給ひしのみならず、行末迄もさづけましまさんの御心ざしにや、新帝和の御子恒世親王を太子に立給ひしを、親王又かたく解退して世をそむき給ひけるこそありがたけれ、上皇嵯峨ふかく謙讓しましけるに、親王又かくのがれ給ひける、末代までの美談にや、むかし仁徳兄弟相讓給ひし後には聞ざりし事なり、

〔水鏡下〕弘仁十四年、みかど位を御おどゝの東宮和にゆづりたてまつりて、やがてその御子の治部卿親王恒世を東宮にたて申給ひしを、親王あながちにのがれ申給ひて、こもりゐて御つかひをだにかよはし給はざりしかば、仁明天皇の御子にておはしましゝを、東宮にたて申たまひき、位をこそ東宮にておはしませばかぎりありてゆづりたてまつり給はめ、わが御子のおはしまさぬにてもなさに、おどゝの御子を、東宮にさへたてたてまつらむとし給ひし御心は、ありがたかりしことなり、

太子辭儲位

〔百練抄後四〕寛仁元年八月九日、皇太子敦明親王依病辭遁、廿九日、停前春宮坊爲小一條院、

〔日本紀略後十三〕寛仁元年八月九日甲戌、皇太子敦明親王請退儲皇、即日立帝同胞弟敦良親王爲

皇太弟、略中以前春宮坊爲小一條院、年給官爵如元、

〔御堂關白記〕寛仁元年八月六日辛未、以能信從東宮、明有今日可來消息、仍詣彼宮攝政、藤原大

將、藤原左衛門督、藤原二位中將、藤原相從、以雅康令啓、參入由即參御前、被命云、爲申停春宮

事、聞消息、立寄事慶申者、余申須承由、能思定可被仰者也、皇后宮、藤原左大臣、藤原被何申者、

命給様定不快、左大臣任心者、日來間思定所聞也、早停此春宮號、可然相定可宣者、申云、攝政候、召彼

同定申者、召攝政相定申、年官年爵如本、御封又如本、此外各有思食事者、只隨仰、御氣色有可給受領、

〔榮花物語^{月一}〕月日も過て康保四年になりぬ、月頃うち^上村にれいならず、なやましげにおぼしめして、^略中御心ちいとおもければ、小野宮のおと^中、^實藤原^源玄のびて奏し給、もし非常のこともおはしなまば、東宮にはたれをかど御けし給はりたまへば、式部卿の宮^平をどこそおもひしかど、いまにおきてはえる給はじ、五宮^融をなんまか思ふとおはせらるれば、うけたまはり給ひぬ、^略中つひに五月廿五日にうせ給ひぬ、東宮^融を^冷くらむにつかせ給^略中、春宮の御事、まだともかくもなきに、よの人みな心々に思さだめたるもをかし、おと^中はみなまゐりておはすめるものをと、よろづ御のちの事せもいといみじ、^略中すこし心のさかになりても、春宮の御事有べかめる、式部卿宮わたりには、人まれすおと^中の御けしきをまぢおぼせど、あへておとなければいかなればにかど御むねつふるべし、源氏のおと^中、^{高明}源もしさもあらずば、あさましうもくちをしようもあべきかなど物思ひにおぼされけり、かゝる程に九月一日東宮たち給、五宮^融をたせ給^略中、源氏のおと^中、あさましく思ひのほかなる世中をぞ、心うきものにおぼしめさるゝ程に、年もかへりぬ、^略中かゝる程に世中にいとけしからぬ事をぞいひ出たるや、それは源氏の左のおと^中の式部卿の宮の御事を覺して、みかどをかたふけ奉らむとおぼしかまふといふ事いできて、よにいとさゝにくゝのゝまゐる、いでやよにさるけしからぬ事あらじなぞ、よ人申思ふ程に、佛神の御ゆるしにやげに御心のうちにもあるまじき御心やありけん、三月廿六日^安和二年に、この左大臣殿にけびるし打かこみて、宣命よみのゝしりて、みかどをかたふけたてまつらむどかまふるつみによりて、大宰権帥になして、ながしつかはすといふことをよみのゝしる、^略中式部卿の宮の御心ち、おはかたならんにてだにいみじとおぼさるべきに、まいてわが御事によりていできたることゝおぼすにせんかたなくおぼされて、われもゝといでたちさわか

せ給、

ふにかちにけり、二の宮位につかせ給ふ、清和の帝是也、後には水のをの天皇と申さ、其よりして山門にはいさゝかの事にもゑりやうなづきをくだけば、二帝位につき、そんいけんをふつしかば、皆相納受し給ふ共つたへたり、是のみや法力にても有けん、其外は皆天照大神の御はからひ也とぞみえたりける、

〔源平盛衰記 二十〕大嘗會儀式附新嘗會事

延暦寺衆徒等誠惶誠恐謹言、○中所謂惠亮摧腦尊意振綱、凡捨身事君、無若我山、

○按ズルニ、平家物語ノ説ハ、信ズベカラザルコトナレドモ、廣ク世上ニ流傳スルモノナレバ、姑ク此ニ掲ケタリ、

〔大鏡一〕此御門の東宮にたゝせ給ふは、いとしゝに、いみじき事どもこそ侍れな、これはみな人のゑろしめしたる事なれば、事もながしといめ侍りぬ、

〔大鏡四〕右大臣師輔此后安子村の御腹には、式部卿の宮平爲こそは、冷泉院の御次にまづ東宮にも

たち給ふべきに、西宮殿高明の御むこにておはしゑすにより、御おどゝのつぎの宮四にひき

こされさせ給へるは、いとしき事どもいといみじく侍り、そのゆゑは、式部卿御門にゐさせ給ひ

なば、西宮殿の御どうによの中うつりて、源氏の御さかえになりぬべければ、御をぢたちのたま

しひふかく非道に、御おどゝをばひきこし申させたてまつらせ給へるぞかし、世の中にも宮の

中にも、殿ばらのおぼしかまへけるをばいかでかはしらん、次第のまゝにこそはと、式部卿宮の

御事を思ひ申たりしに、俄に若宮の御くしかいけづり給へなご御めのどたちにおはせられて、

大入道殿藤原御車にうちのせたてまつりて、北陣よりなんおはしゑしけるなごこそつたへ

うけ給はりしか、されば道理あるべき御かたびどちちはいかゞはおぼされけん、中そのはど

西宮殿御心ちよないかゞおぼしけんさてぞかし、おそろしくかなしき御事どもいできにしは、

親王家の御祈には、外祖忠仁公の御ち償ひゑい山のゑりやう和尚どうけ給はられける、何もおどらぬ高そうたち也、どみに事行がたうや有んずらん、人々内々さゝやき合れけり、あんのこどく御門かくれさせ給ひしかば、公卿せんぎ有けり、抑臣らがおもんはかりをもつてえらん、で位につけ奉らん事、ようゑやわたくし有ににたり、萬人唇を返すべし、ゑらずけい馬すまふのせつをどげ、其うんをゑり、ゑゆうによつてはうそをさづけ奉るべしと議定をはんぬ、去程に同ゑき九月二日の日、二人のみや違うこんのばゝへ行啓有けり、略中ゑんせい僧正は東寺にだんをたて、ゑりやう和尚は大内のゑんどんゐんにだんをたていのられけるが、ゑりやうはうせたりといふひろうをなさば、ゑんせい僧正すこしたゆむ心もやおはすらんとて、ゑりやうはうせたりといふひろうをなして、かんだんをくだいていのられけり、すでに十ばんのけいばはじまるはじめ四ばんは一の御子これたか親王家かたせ給ふ、後六ばんは二の宮これ仁親王家かたせ給ふ、やがてすまふのせつ有べしとて、一の御子これたか親王家よりは、などらのう兵衛のかみとて、およそ六十人が力あらはしたるゆゝしき人を出されたり、二の宮これ仁親王家よりは、よしをの少將とて、せいちいさうたへにして、かた手にあふべし共見えぬ人、御むさうの御つけ有とて、申うけてぞ出られける、去程に名どらよしをよりあひて、ひしゝとつゑせりしてのきにけり、ゑばらく有てなどらつとより、よしをゝ取てさゝげ、二丈ばかりぞなげ上たる、たゝなほつてたをれず、よしを又つとより、などらを取てふせんとす、され共などらは大のをとこかにまはる、よしを猶あふなう見えければ、御母儀そめ殿の後より、御つかひくしのはのこどくにゑげうはしりかさなつて、御かたすでにまけいろに見ゆ、いかゞせんと仰ければ、ゑりやう和尚は大ゐどくのほうを行はれけるが、こは心うき事なりとて、どつこをもつてかうべをつきやぶり、なづきをくだしにうにわしてこまにたき、くろけぶりを立て一もみもまれたるければ、よしをすま

事遂無變無幾帝崩太子續位後應天門有火良相右大臣伴大納言計謀欲退信左大臣共參陣座時後太政大臣基藤原爲近衛中將兼參議良相大臣急召之仰云應天門失火左大臣所爲也急就第召之中將對云太政大臣知之歟良相大臣云太政大臣偏信佛法必不知行如此事中將則知太政大臣不預知之由報云事是非輕不蒙太政大臣處分難輒承行遂辭出到職曹司令諸太政大臣太政大臣驚令人奏曰左大臣是陛下之大功之臣也今不知其罪忽被戮求審因何事若左大臣必不可被誅老臣先伏罪帝初不知聞大驚怪報詔以不知之由於是事遂定矣爾後太政大臣薨清和天皇爲之期中不舉樂云云此等事皆左相公所語也

〔江談抄二〕天安皇帝文有讓位于惟喬親王之志事

被命云天安皇帝有讓寶位于惟喬親王之志太政大臣忠仁公良房總攝天下政爲第一臣憚思不

出自口之間漸經數月云云或祈請于神祇又修秘法祈于佛力眞濟僧正者爲小野親王祈師眞雅僧都者爲東宮和護持僧云々各專祈念互令相摧云々

〔平家物語〕名どらの事

むかし文德天皇天安二年八月廿三日かくれさせ給ひぬ御子の宮たちあまた御位にのぞみをかけてましくければ内々御祈共有けり一の御子これたかの親王をば木はらの皇子共申さ王者の才量を御心につけ四かいの安危たな心の中にてらし百王のりらんは御心につけ給へりされば賢聖の名をも取せましくぬべき君なりと見え給へり二の宮これ仁の親王は其頃のしうへい忠仁公の御娘子殿の后明の御はら也一門の公卿べつしてもてなし奉らせ給ひしかば是も又さしおきがたさ御事也かれはしゆ文けいていのさきやう有是は萬機補佐の臣さう有かれもこれもいたはしくていづれも思召わづらはれき一の御子これたかの親王家の御祈には梯の本の紀僧正まんせいとて東寺の一の長者弘法大師の御弟子也二の宮これ仁

見其面庭中禮拜天地四方共飲鹽汁誓曰將以七月二日關頭發兵園内相宅殺却即園大嚴退皇太子次傾皇太后宮而取鈴璽即召右大臣將使號令然後廢帝簡四王中立以爲君於是追被告人等隨來悉禁著各置別處一一勘問

〔水鏡〕下天平勝寶九年四月に大臣以下を召て東宮にはたれをかたてたてまつるべきとさだめ申べきよしおほせ事あり○申かくてのちこの東宮にえらびすてられたまひつる王たち又心ざしある人々あまたよりあひてみかど東宮をかたふけたてまつり仲麻呂をうしなはんとすといふ事おのづからもれきこえしかばなかなる内にまゐりてこのよしを申しかばさまゝのつみをおこなはれき

〔大鏡〕一つぎのみかど清和天皇と申ける○ちみかど位につかせ給ひて五日といふ日生れ給へりけんこそいかにをりさへはなやかになりてたかりけんとおぼえ侍れこれたかの御子の東宮あらそひし給へりけんもこの御事とこそおぼゆれ

〔大鏡裏書〕四品惟高親王東宮諍事

文德天皇第一皇子母從四位下紀靜子正四位下名虎女嘉祥三年十一月廿五日戊戌惟仁親王清和

和爲皇太子誕生之後九箇月也先是有童謠云大枝於超天奔超天騰加利躍土利超天我耶謠毛留

田仁耶搜阿佐食母志岐耶離雄伊志岐耶識者以爲大枝謂大兄也是時文德天皇有四皇子第一惟

高第二惟條第三惟彥第四惟仁天意若曰超三兄而立故有此三超之謠焉承平元年九月四日夕參

議實賴朝臣來也談及古事陳云文德天皇最愛惟高親王于時太子幼冲帝欲先暫立惟高親王而太

子長壯時還繼洪基其時先太政大臣其藤原房作太子祖父爲朝重臣帝憚未發太政大臣憂之欲使太

子辭讓是時藤原三仁善天文諫大臣曰懸象無變事必不遂焉愛帝召信大臣清談良久乃命以立惟

高親王之趣信大臣奏曰太子若有罪須廢黜更不還立若無罪亦不可立他人臣不敢奉詔帝甚不悅

前朝爲儲君後
朝爲太子

〔皇胤紹運錄〕後桃園院 寶曆九年正月十八日爲儲君、同年五月十五日爲親王、明和五年二月十九日立太子十一

〔賴言卿記〕寶曆九年正月十八日庚子、已刻參内、○中申刻退出、女院、女御儲君殿下、前殿下參賀了、五月十五日甲午、今日儲君御名字英仁、後、桃園春秋二歲、立親王宣下也。○中自今日御次第、親王准后ト被立了、

〔知音卿記〕明和五年二月十九日戊寅、今日立太子節會、英仁親王、先帝〔桃園〕第一皇子、御母准后女御、

○按ズルニ、後桃園天皇ハ、桃園天皇ノ寶曆九年ニ、儲君ニ立テ給ヒシガ、桃園天皇大漸ノ時ナホ、幼冲ヲリシカバ、後櫻町天皇皇位ヲ繼承シ給ヒ、其明和五年更ニ皇太子ニ立テ給ヒタリ、

欲爲太子而相
爭

〔續日本紀二十〕天平寶字元年四月辛巳、天皇召群臣問曰、當立誰王以爲皇嗣、右大臣藤原朝臣豐成、

中務卿藤原朝臣永手等言曰、道祖王兄鹽燒王可立也、攝津大夫文室真人珍努、左大辨大伴宿禰古麻呂等言曰、池田王可立也、大納言藤原朝臣仲麻呂言曰、知臣者莫若君、知子者莫若父、唯奉天意所

擇者耳、勅曰、宗室中舍人新田部兩親王是尤長也、因茲前者立道祖王、而不順勅教、遂縱淫志、然則可擇舍人親王子中、然船王者、閨房不修、池田王者、孝行有闕、鹽燒王者、太上天皇武聖責以無禮、唯大炊

王雖未長壯、不聞過惡、欲立此王、於諸卿意如何、於是右大臣已下奏曰、唯勅命是聽、先是、大納言仲麻呂、招大炊王居於田村第、是日遣内舍人藤原朝臣薩雄中衛二十人、迎大炊王、立爲皇太子、七月己

酉、○中内相仲麻呂侍御在所、召鹽燒王、安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂五人、傳太后詔宣曰、鹽燒等五人、平人告謀反、汝等爲吾近人、一毛平吾可忍事者、不所念、汝等平皇朝者、己已太久、高治賜

平、何、怨、所、加、志、然將爲不有奈、加、止、所念、是以汝等罪者免賜、今往前然莫爲止宣、詔訖五人退出南門外、稽首謝恩、庚戌、詔更遣中納言藤原朝臣永手等、窮問東人等款云、每事實也、無異斐太都語去

六月中期會謀事三度、始於奈良麻呂家、次於圖書藏邊庭、後於太政官院庭、其來者安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂、多治比賴養、多治比禮麻呂、大伴池主、多治比鷹主、大伴兄人、自餘衆者、聞裏不

〔議奏日次案〕文化四年六月廿六日丁酉關白政照參入被親天皇氣皇子寬宮可有立親王、深叡慮之

旨、被仰下將軍家之事、於小御所下段關白召正由宿禰武士從被仰之、武家傳奏廣橋前大納言、千種

前中納言、被候座、七月十八日戊午、關白參入被親天皇氣召御前、辰半刻正由宿禰從參入於小御

所下段、關白令謁給、去六月廿六日、寬宮可有立親王、被仰進于將軍家申勅、答武家傳奏廣橋前大納

言、千種前中納言、被候座廣橋前大納言忠并清閑寺前大納言山科中納言、六條前中納言、千種前中

納言等召御前常御所關白被傳仰御繼體之事、厚叡慮有之處、自仙洞後御懇篤被仰進、自中宮格光

內親王亦敢被仰上、依之今度寬宮爲中宮御實子被定、儲君來九月立親王御治定之事、九月廿二

日辛酉、儲君仁親王宣下也、

〔非藏人日記〕文化六年二月五日、立太子仁日時、來月廿四日辰刻被仰出

〔言成卿記〕天保六年六月廿一日、回文自久我到來、其寫如左、

熙宮明追々御生長、自今日被定、儲君來八九月之間、立親王宣下御治定、尤准后御方御養子、御

實子御同儀、被仰出候事、熙宮自今被稱儲君候事、御次第可爲准后御方御次事、儲君江言上

之儀、於禁中言上可然之事、今明日中御所々々准后御方、儲君等へ參賀可然候事、

右之通傳奏議奏列座、大宮權大夫被申渡候、仍早々申入候也、

六月廿一日

基豐

七月廿二日、今日儲君准后御方江、飛香舍也御移徙被爲在、九月十八日、今日儲君立親王宣下、予

依家司已刻前著束帶參本宮中廻文到來、親王御名字統仁佐右御治定候事、儲君御次第可爲准

后上候、尤節朔以下、儲君江言上之事、可爲是迄之通之事、右之通大宮權大夫被申渡、

〔實久卿記〕天保十一年正月廿八日己未、已終刻參殿下政通立太子日時御治定慶賀申入、三月

十四日乙巳、今日立太子明也、

宣下也。

〔羽倉考〕立太子東宮宣下

儲君宣下ハ、初ヨリ嗣位タルベシト、明ナル皇子ヲ先儲君ト定メテ、立太子以前ヨリ其禮自餘ノ皇子ト同ジカラズ、當今〇櫻町モ立太子以前ニ儲君宣下アリ、年月ハ忘却ス中御門院モ立太子ノ前年、寶永四年三月廿二日儲君宣下、東山院モ立太子ノ前年、天和二年三月廿五日儲君宣下アリ、但靈元院ハ明暦四年正月廿八日立太弟ニテ、其前ニ儲君宣下ノ事見エズ、是ハ東山院、中御門院、當今ナドノ如ク、皇考ヨリ位ヲ繼ギタマフニ非ズシテ、皇兄後西院ノ位ヲ嗣ギタマヘレバ、先帝ノ皇弟ニシテ、皇子ニ非ザルガ故ニ、儲君宣下ナカリシナルベシ、

〔議奏日次卷〕享保十三年二月三日甲申、關白

家久

近衛

參入召御前、當六月立坊御治定之旨、被仰下諾

臣、五月廿二日壬申、就立坊、自來廿七日七ケ日、七社

伊勢

松尾

勢石

清水

賀茂

下上

七ケ寺

延暦寺

仁和寺

東大寺

興福寺

東寺

御祈之事、被仰出子御祈奉行秀定、六月四日癸未、七社七ケ寺御祈之解狀卷數等、奉行

職事秀定、附內侍所獻之、十一日庚寅、以昭仁親王

櫻町

被立皇太子、節會也

略中

此間壺切御劔、以

內侍從、鬼間籠中、被出之、隆兼朝臣進、簾下、給之、持參本宮、

〔賴言卿記〕延享三年正月廿一日丁巳、申刻過、茶地宮

〇桃

御繼體御治定候、近々可有親王宣下之由

被申渡了、

茶地宮、從今日被稱儲君之旨、帥中納言被申渡候、仍申入候也、

正月廿一日

立親王宣下也、

三月十六日壬子、儲君

〇御名

字

立親王宣下也、

〔賴言卿記〕延享四年三月五日乙未、立坊來十六日御治定、十六日丙午、遷仁親王可爲皇太子、仰宣

命之事、大內記家長朝臣作進、

通枝

帝王部二十三 皇太子下

栖川殿亭

內裏子

可爲假殿有栖川殿者可被借用關白

兼照司

京極亭就此儀雙方可加修理其間者

有栖川殿暫可

被移居女御里亭

女御本殿向也

之事被仰下柳原前大納言高野前中納言等奉之召關白家

有栖川家之諸大夫於便所傳仰各被申領狀八日今日議奏等召御前柳原前大納言高野前中納

言兼候儲君御殿可有造營於凝花洞被思召內々被仰入院令武家兩傳奏被仰聞於武家也各其旨

可存知之由被仰十八日今日辰時儲君御方遷御于假殿

有栖川亭

廿九日今日已刻儲君立親王宣

下也

〔百一錄〕寶永四年三月廿三日增宮御方

○中御門通記長宮=作ル

可爲儲君之由諸家中へ被仰渡家公番奉

行被仰出儲君御方附堂上九人被仰出藤浪三位甘露寺辨千種中將五辻彈正近習被仰付岩倉三

品北小路中書儲君御方云々廿七日儲君增宮御方御參內供奉堂上十人計衣冠步儀山口安房

守最後供奉未刻過還御四月廿九日儲君御方有親王宣下上卿二條內大臣勅別當德大寺大納

言奉行頭中將五月廿五日上使島山下總守上著被立儲君御賀儀也廿七日上使參內從大樹

○德川

御樽三荷御香三種綿三百把從大納言御方同二百把御臺所縮綿十卷准后白銀二百枚御

樽香三荷三種從亞相公同百枚御臺御方縮綿十卷大准后銀百枚御樽香同隨五十枚

○並相公仙院縮綿二十卷從亞相公羽二重十疋從御臺御方縮綿十卷女院御所同上賦聊有差異失念

了

〔通誠公記〕寶永五年二月十六日今日已時以慶仁親王

○中御門

被立皇太子節會也

○中

壺切御劍以內

侍從鬼間簾中被出之隆典朝臣進簾下賜之持參本宮廿四日東宮行啓始也

〔議奏日次案〕享保五年十月三日丙申兼而以御慮院真關東へ被仰遣之當冬若宮御方立親王宣下

之事被任思召之旨自關東言上之由權大納言

通稱

中山大納言等披露之十六日己酉關白

寶參入召御前儲君御方立親王宣下來月四日御治定也十一月四日丁卯儲君

○御名

立親王

舊殿於番衆所各給饗暫時有召各御對面也、著御童裝束更之御袍二也供奉之輩各廣御所其後御見

舞之輩者各依御由緒於御小座敷御對面也其後退下參內珍重申入及暮迄有御酒各沈醉無正體

事也珍重々々、八月四日今日儲君御治定爲御祝義從武家使進上由良信濃守子儲君へ可參由

仰之間令參了從禁中參集柳原高辻愛宕子三室戶押小路持明院等也、九月廿三日依召參儲君

今日攝家中其外内々之公卿雲客未拜尊顏之輩可有御對面可參云々予愛宕柳原持明院中將等

爲御肝煎可參由從禁中被仰之間參了是每度如是之刻依有御由緒如此也未刻儲君出御於廣御

所御童裝束殿下小直衣烏帽子次左大臣直衣冠前關白左冠內大臣同上近衛大納言同上九條大納言同上兩傳奏申次之

體也其後被申御咄各退下攝家中御對面之時御苗計也撤厚帖殿以下被候下段御殿狹少之間

上段へ不被召候由花山院各へ被申也其後被退下次内々公卿雲客御禮次儲君非藏人申御禮内

々公卿等ハ無申次如何々々雲客之中可勤事也其後予等給夕饗退下了、廿四日參儲君親王門

跡外樣諸家非藏人等御禮次法親王大覺寺宮妙法院宮一條院宮實相院若宮毘沙門堂宮曼珠院

宮御禮右之衆御禮之刻ハ御苗計也攝家中昨日御禮之刻尤其通也其後敷浮疊二帖其上設御苗

外樣公卿雲客御禮於公卿昇長押雲客簀子也非藏人等於落緣申御禮昨日今日頭中將頭辨等昇

長押申御禮其後予輩給饗退出了、十二月二日今日儲皇親王宣下也、三日今日親王可有入内

也、十日今日親王立坊事諸家へ以番頭被仰出來年二月中可有御沙汰也爲珍重參儲君禁中

○按ズルニ儲君ノ字ハ履中紀二年正月ノ條ニ始メテ見エタレドモ直ニ皇太子ヲ指シタル

モノニテ後世ノ儲君トハ其義自異ナレリ、

【季進宿禰記】天和三年二月八日辛巳今日辰刻於左府御亭有立太子山東召仰

【通誠公記】寶永四年三月廿二日乙亥今日長宮御方中御門春秋七歲當今東山皇子母藤新被定儲

君、四日儲君當時御殿者從先年被假用林丘寺宮里坊前仙湖南門此所甚狹少也本所造畢之間有

消息此義從大樹御祝義不被申上以前諸家御祝義獻上事可爲無用由稻葉丹後守申之然也。予義格別之間難波へ令相談尤之由也依之今日進上丁。六月十八日略中儲君御在所事舊院御殿可然由從關東被申依來二十七日可有御移徙云々經營以外事也。廿日依召參内仰云當今御移徙之後從舊院後水禁中近臣輩へ被仰出御誼書有之様々思召也若留書等有之候は可獻上由也則退下窺家公御記之内引勘之所見之間近臣中御誼書一通并寛文十一年老輩中四人ノ誓狀并寛文三年御膳方役人之誓狀等進上則持參於小御所拜天顔別而御機嫌之由仰也猶此類若所見候は可獻上由仰也。廿三日依當番參内終日儲君渡御之儀御沙汰也。廿四日依召參内儲君廿七日下午御殿へ渡御治定之間其刻各致伺候諸事内外之儀可被申沙汰宮御方御由緒之者無之候間渡御以後折々可致伺公由於御前仰也。

園前大納言 柳原大納言・難波中納言 愛宕宰相 予也各畏入了、

今日公卿雲客供奉之儀被仰出也公卿五人殿上人十人儲君へ伺公之非藏人松本信濃介松室壹岐守松室大和介佐々下總松室若狹松室遠江介被仰付也。廿六日明日舊院御殿へ儲君渡御方角惡敷之間唯今二階町故新殿今夜密々池尻前中納言亭へ御渡明早天可有渡御由治定也今晚渡御密儀也然也供奉之儀有之予參著儲君常御板與也禁中仕丁奉申下刻御出先武家與力同心拂御先同心二十人與力一兩人歟次鳥飼十人計次取次五六人各袴肩衣次雲客群行不守次第三室戸右兵衛權佐持明院中將押小路中將難波中將同少將新藏人土御門兵部少輔伏原大藏卿今城中將池尻宮内大輔次御輿公卿群行御輿之左右園大納言三條大納言葉室大納言正親町中納言愛宕宰相千種宰相川端宰相梅園三位柳原大納言高辻中納言予等也各狩衣大々也也不及淺沓次諸家青侍次二佐野修理太夫伺公也珍重其後各參内珍重申入退下。廿七日今日黎明參池尻亭供奉之輩漸參集之節也予内々蒙仰之間柳原大納言難波中納言三室戸持明院等同道參

古事類苑

帝王部二十三

皇太子下

皇太子妃（傳）

諸君

〔集量卿記〕天和二年三月廿五日、入夜有召參內、仰云、儲君事、第五宮（東山）中御門、女御立后事、應司前殿下、（房）二條殿下、（光）等五百石加增、右今度傳奏上洛之刻、從武家被申上也、御機嫌不斜、於御前被下天酒、珍重云々、廿七日、儲君へ伺公之衆被仰出、

正親町中納言 川鐸前宰相 梅園右兵衛督 池尻宮內大輔 園中將 花山院中將 難波侍從 四辻侍從 土御門兵部少輔

右儲君へ可致伺公御移徙之後詰番可致也、其迄ハ折々御見舞可申上也、

近臣神仰出衆 西洞院宰相中將 今城中將

從今日可爲近臣由被仰出右年寄衆へ書付被申渡、其後儲君伺公之輩、爲御迎參、儲君各供奉、宮方御參內、從女御方御參、御與（常）之板與、（侍）十人計、諸家儲君參、其後於御學問所、近臣衆御對主上、（元）同出御、（御）面疊上、宮御方御右之方ニ御座也、（有一）獻、鶴吸物各給也、參衆之雲客役送戌剋儲君御方還御、（日）比二階門傳真軒ニ御座也、（元）新造也、予候供奉、其後儲君御方ニ而有御祝強飯御酒等也、今日從宮御方御樽肴御進上山也、近臣之輩各獻上御肴、（三十）枚、珍重々々、君臣繁榮、千秋萬歲、今日盡切御劔被進、以密儀土御門兵部少輔令持參也、本儀近衛中少將可持參也、廿八日、今日儲君へ諸家各參賀、但諸君伺候之輩ハ持參銀劔云々、各無御對面、卅日、儲君へ獻上御肴、（十）松木亞相へ附

古事類苑

帝王部二十三

皇太子下

皇太子妃備人

儲君

五〇七

前朝爲儲君後朝爲太子

五一三

欲爲太子而相爭

同

辭而不爲太子

五一九

太子辭儲位

同

太子辭而不卽帝位

五二五

太子暴逆自取敗亡

五二七

廢太子

五二八

雜載

五三五

○

皇太子妃

五四六

りしかど、參議百川と云し人、此天皇に心ざし奉て、はかりごとをめぐらして定申てき、

〔日本書紀二十〕四四年六月庚戌、讓位於輕皇子、立中大兄、天爲皇太子、

〔革命勘文〕天智天皇者、息長足日廣額天皇舒明之太子也、讓位於母天、豐財重日足姬天皇極、及

男天萬豐日天皇孝德廿一年間、猶爲太子攝萬機、

〔皇年代略記天智〕推古天皇廿二年甲戌降誕、孝德天皇大化元年乙巳六月立太子、二代太

〔日本書紀二十〕九十年二月甲子、是日立草壁皇子尊爲皇太子、

〔日本書紀三十〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨、

〔皇胤紹運錄〕草壁皇子諡曰並知皇子、諱成一位、天武十二年立太子、而當皇帝登遐之時、母后

〔續日本紀六〕明靈龜元年九月庚辰、天皇禪位于永高內親王、詔曰、以此神器欲讓皇太子、聖而

年齒幼稚、未離深宮、今傳皇帝位於內親王、公卿百寮宜悉祇奉以稱朕意焉、

〔續日本紀九〕元正神龜元年二月甲午、天皇禪位於皇太子、聖

〔永鏡元中〕元明天皇位をさり給ひし時、聖武天皇を東宮と申しかば、位をつぎ給ふべかりしか

ども、そのとしど御元服し給ひて、御年十四になり給ひしに、なほいまだいとけなくおはしそ

すとして、此御門は御をばにて讓をえたまひしなり、

〔續日本紀三十〕寶龜元年八月癸巳、天皇崩于西宮寢殿、春秋五十三、左大臣從一位藤原朝

臣永手、右大臣正二位吉備朝臣真備、參議兵部卿從三位藤原朝臣宿奈麻呂、參議民部卿從三位藤

原朝臣繩麻呂、參議式部卿從三位石上朝臣宅嗣、近衛大將從三位藤原朝臣藏下麻呂等定策禁中、

立諱、仁爲皇太子、左大臣從一位藤原朝臣永手受遺宣曰、今詔久、事卒爾、有依天、諸臣等議中、

壁王、諸王、乃中、年齒、長利、又先帝、乃功、在故、太子止定、天奏、波、奏、流、麻爾麻宣、宣給止

勅止宣、

〔神皇正統記光仁〕稱德かくれまし、かば大臣以下皇胤の中をえらび申けるに、おのゝ異議あ

先帝崩後爲太子

年長爲太子

〔皇年代略記反正〕仁德四十年降誕、履中二年正月己酉立太子五十

〔皇胤紹運錄〕武烈天皇 允恭三十九年誕生、仁賢七年正月立太子四十

〔皇胤紹運錄〕安閑天皇 雄略十年誕生、

〔日本書紀十七〕七年十二月戊子、詔曰略中、懿哉麻呂古開、安示朕心於八方、盛哉勾大兄開、安光吾風

於萬國略中、宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

○按ズルニ、安閑天皇ハ、雄略天皇十年ノ降誕ナレバ、繼體天皇七年ハ、御年四十八歳ナリ、皇胤

紹運錄、皇年代略記等ニ、安閑天皇ノ立太子ヲ繼體天皇ノ二十年トセルハ誤ナリ、

〔皇年代略記天武〕推古卅一年癸未降誕、天智七年二月戊寅爲皇太弟、

○按ズルニ、天武天皇ハ、推古天皇三十一年ノ降誕ナレバ、天智天皇七年ハ、御年四十六歳ナリ、

〔皇胤紹運錄〕光仁天皇 和銅二己酉誕生略中、神護景雲四、八、一、爲皇太子六十

〔神皇正統記光仁〕稱徳かくれましまし、かば、大臣以下皇胤の中をえらび申けるに、おのゝ異議あ

りしかど、參議百川と云し人、此天皇仁光に心ざし奉て、はかりごとをめぐらして定申てき略中

先皇太子にたち則受禪御年六

〔皇年代略記桓武〕天平九年丁丑降誕略中、實龜四年正月十四日庚寅立太子卅七

〔台記〕久壽二年九月二十三日丁卯、今上第一皇子略中、先被下親王宣旨、次立爲太子略中、今朝太子

渡御鳥羽南殿法皇後白河美福門院夜前渡御、節會了、關白已下參彼殿云云、太子御洛外未聞先例、上下傾奇、

〔日本書紀十五〕白髮天皇略中、二年四月遂立、德計天皇仁爲皇太子、五年白髮天皇崩、天皇仁以

天下讓弘計天皇崇、爲皇太子如故、

〔日本書紀二十三〕十三年十月丁酉、天皇崩于百濟宮、丙午、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時東宮開別

皇子智、天年十六而誅之、

爲親王即日爲太子
數朝爲太子

被待四歲頗似延怠、歲内頗雖卒爾、何不_レ被_レ遂行哉、然者今年何事候乎者、歸參奏達了、後參院申此之由、仰云、早可有沙汰之由、重可奏内者、定能申云、奉行職事可被_レ定仰歟云云、仰云、汝早可行云云、事已爲大事、重代之輩、奉行宜歟之由、雖達天聽、已無勅許、只今參内可奏、去夜院宣云云、即馳參内了、入道相國一昨夕俄上洛、依此事云云、廿九日戊子、略中又人人十二月其例不快、實仁太子、白河皇太弟、立、此外仍可被待四歲之由、有豫議云云、愚案四歲立坊不可然、但吉事爲先、近日就中末代之政、每事急速也、至此事強不可待四歲歟、月之吉凶強之沙汰也、只歲内被行之條、可叶亂世之政者歟、十二

月十五日甲辰、此日有冊命立太子事、十二月立坊、實仁太子之外無此例、尤有禁議、然而二歲三歲立坊、又以不吉被待四歲者、事似延怠、御之輕重、歲重月輕、四之歲

内所被急行、云云、依康和五年鳥羽院一仁安元年當今六歲立之等佳例、有沙汰云云、增鏡おごるの下建保二年十月十日、一の御子藤むされ給へり、略中十一月廿一日やがてみこ

王親になしたてまつり給て、おなじき廿六日坊に給ふ、いまだ御いかだにきこしめさぬに、いちはやき御もてなしめづらかなり、心もとなくおぼされければなるべし、

〔增鏡三表〕ことしもはかなくくれて貞永元年になりぬ、略中ここの二月、后の宮の御はらに一の御子〇四いでき給へりしかば、やがて、〇十月二太子にたゝせ給しぞかし、れいの人のくちさがなさは、かの承久の廢帝〇仲のむされさせ給ふとひとしく坊に給へりしは、いとふようなりしをなせいふめり、

〔明月記〕寛喜三年二月廿二日己卯、仰云、東宮不坐給之時、不立坊而直踐祚、親王崇徳院、六條院、土御門院皆不吉、於堀河院者、實仁東宮依坐給、無御立坊、不似當時歟、一歲立坊之内、清和鳥羽院春誕生、秋冬立給吉例也、雖一歲不過五十日、百日立給、冷泉安徳又_レ不吉歟、仍今年秋冬猶可有立坊、〇四歟、由存之申云、此條尤可然歟、但竊案猶國家之煩歟、

〔皇年代略記 後深草〕寛元元年六月十日誕生、同廿六日、爲親王、八月十日、立太子、

布告百官咸令知聞、

〔續日本紀^十〕神龜五年九月丙午、皇太子薨、

〔大鏡^{清和}〕このみかどは嘉祥三年三月廿五日、母かたの御おほぢおほきおとゝの小一條のいへ

にて父みかどの位につかされたまひて五日といふ日、生れ給へり、^略中やがて生れたまへる歳の

十一月廿日東宮にたち給ひて、天安二年八月廿七日、御歳九歳にて位につかせ給ふ也、

〔大鏡^{陽成}〕このみかど貞觀十一年二月一日、二歳にて東宮にたゝせ給ひて、同十八年十一月十一日につかせ給ふ、

〔日本紀^{略一}〕延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、^略中太子年二、

○按ズルニ崇象親王ハ、後ニ御名ヲ保明ト改メラル、

〔榮花物語^{月一}〕天曆四年五月廿四日に、九條殿の女御男みこ^略冷うみ奉り給つ、^略中はかなう御

いかなども過もていきて、むまれ給て三月といふに、七月廿三日に東宮にたゝせ給ひぬ、

〔百練抄^五〕^{堀河}康和五年八月十七日、立第一親王宗仁^〇爲皇太子、^略一歳立坊清和冷泉二

代之例也、

○按ズルニ、聖武天皇ノ皇子ノ如キ、亦一歳立坊ノ例ナリ、然レドモ立坊後間モナク薨去アリ
シユエ、コヽニハ數ヘザルモノナラン、

〔皇代記^{近衛}〕保延五年五月十八日丁酉、酉時降誕、八月十七日甲子、立爲太子、^{一歳}

〔皇年代略記^{安徳}〕治承二年戊戌十一月十二日誕生、十二月十五日甲辰立太子、^一

〔玉海〕治承二年十一月廿八日丁亥、早旦頭中將定能來云、去夜亥終許、自院^〇後有急召、即以馳參、時

忠卿候御前、仰云、立坊事二歳三歳共、以其例不快、今年被遂行如何、且被仰關白、可有其沙汰之由、只

今參内早可奏聞者、即參内奏聞之處、可仰關白云云、向彼亭仰此狀、被申云、如被仰下二三歳共不吉、

太子

○按ズルニ、道祖大炊ノ兩王ハ、共ニ孝謙天皇ノ族叔祖父ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

天武

草壁

文武

聖武

孝謙

舍人

大炊

○仁 淳

新田部

道祖

再族伯祖父爲太子

〔續日本紀三十一〕寶龜元年八月四日癸巳、高野天皇德崩、群臣受遺、即日立諱仁爲皇太子、

〔皇年代略記光仁〕諱白壁號日本根子天宗高祖、天智孫田原施基皇子第六子、神護景雲四年八月一日癸巳、大臣已下議定策禁中爲皇太子、六十二、稱德元、繼嗣、病急、仍群臣議立之、

○按ズルニ、光仁天皇ハ稱德天皇ノ再族伯祖父ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ

シ

天智 施基 光仁

舒明

天武

草壁

文武

聖武

稱德

皇女爲太子

〔續日本紀十三〕天平十年正月壬午、立阿倍內親王孝爲皇太子、

幼沖爲太子

〔日本書紀十〕天皇以皇后討新羅之年、歲次庚辰冬十二月、生於筑紫之蚊田、皇太后攝政之三

年立爲皇太子、三年

〔續日本紀十〕神龜四年閏九月丁卯、皇子誕生焉、十一月己亥、天皇御中宮、太政官及八省各上表、

奉賀皇子誕生、并獻玩好物、中詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神靈新誕皇子、宜立爲皇太子、

る、いとわづらはしう、さやうにこそはとおもひきこえさせたり。○中 東宮行啓あり。○中 みすこしに御たいめありて、あるべき事ども申させ給。○中 位もゆづりきこえさせ侍りぬれば、東宮にはわか宮をなん物すべうはべる、だうりのまゝならば、そちのみや。○中 就をこそはと思ひ侍れど、はか／＼しきうしろみなどもはべらねばなむ。○中 などさま／＼あはれに申させ給ふ、

○按ズルニ、後一條天皇ハ、三條天皇ノ從姪ニシテ、太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

村上一
冷泉 三條
圓融 一條 後一條

再從姪爲太子

三從兄弟之子爲太子

〔皇年代略記 後醍醐〕嘉暦元年七月廿四日、後伏見院皇子量仁親王○光爲立太子、

〔皇年代略記 光嚴〕元弘元年十一月八日、立故皇太子邦長親王子康仁爲太子、

○按ズルニ、光嚴天皇ハ後醍醐天皇ノ再從姪ニシテ太子トナリ、康仁親王ハ光嚴天皇ノ三從兄弟邦良親王ノ御子ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

後深草 伏見
後伏見 光嚴
後嵯峨 龜山 後宇多
後醍醐

叔父爲太子

族叔祖父爲太子

〔百練抄 六條〕仁安元年十月十日、以憲仁親王○高爲皇太子、

○按ズルニ、高倉天皇ハ、二條天皇ノ御異母弟ニシテ、六條天皇ノ叔父ナリ、

〔續日本紀 十九〕天平勝寶八歲五月乙卯、是日太上天皇○聖崩於寢殿、遺詔以中務卿從四位上道祖王爲皇太子、

〔續日本紀 二十〕天平寶字元年四月辛巳、是日遣內舍人藤原朝臣薩雄中衛二十人、迎大炊王立爲皇

〔權記〕寛弘八年五月廿七日庚子、雖有所勞、無使寵居、相扶參内、有召候御前、仰云、可讓位之由一定已成、一親王○教事、可如何哉、即奏云、此皇子事、所思食歎尤可然、抑忠仁公○藤原寛大長者也、昔水尾天皇○清者、文德天皇第四子也、天皇愛姬紀氏所産第一皇子○惟、依其母愛亦被優寵、帝有以正嫡

令嗣、皇統之志、然而第四皇子○仁、以外祖父忠仁公朝家重臣之故、遂得爲儲貳、今左大臣○藤原道長、亦當今重臣、外戚其人也、以外孫第二皇子○後、定應欲爲儲宮、尤可然也、今聖上○一條雖欲以嫡爲儲、

丞相未必早承引、當有御惱之時代、忽變事若嗽々、如不得弓矢之者、於議無益、徒不可令勞神、橫仁和

先帝○光、依有皇運、雖及老年、遂登帝位、恒貞親王始備儲貳、終被棄置、前代得失、略以如此、如此大事、

只任宗廟社稷之神、非敢人力之所及者也、但故皇后宮○敦康母、外戚高氏○高階成忠、之先、依齋宮之事、

爲其後胤之者、皆以不和也、今爲皇子、非無所怖、能可被祈謝大神、猶有愛憐之御意、給年官年爵并年

給受領之吏等、令一兩宮臣得格勤之便、是上計也者、是亦自去春來、每有雍容所被仰、亦所上奏之旨

耳、即重勅曰、汝以此旨仰左大臣哉、如何、即奏曰、左右可隨仰、但如此之事、以御意旨、面可賜仰事歎、因

有天許未參御前之間、於大盤所邊、女房等有悲泣之聲、驚問兵衛典侍云、御惱雖非殊重、忽可有時代

之變云云、仍女官悲歎也、此間主上出御、盡御座、蒙仰、仰以有難忍之事等、今朝左大臣參東宮○三被

申御讓位案内云云、此事自昨所發也云云○略

〔榮花物語九〕九、かくて御かゞ○一條いかでおりさせ給なんとのみおぼしのたまはすれど○中い

まはかくておりゐなむとおぼすを、さるべきさまにおきて給へとおぼせらるれば、殿○藤原道長

けたまはらせ給て、東宮に御たいめんこそは例の事なれとて、思しおきてさせ給程に、春宮には

一宮○教をどこそおぼしめすらめと、中宮の御心のうちにもおぼしおきてさせ給へるに、うへ

おはしまして、東宮の御たいめいそがせ給に、世人いかなべいことにかとゆかしう申思ふに、一

宮の御かたさまの人々、わか宮○一條かくてたのもしういみじき御なかよりひかり出させ給へ

命の理りかたはけなくおそれ思ひければにや、俄に立太子のさた有しに、龜山は此君○後醍醐をすゑたてまつらんと思しめして、八幡宮に告文ををさめ給ひしかど、一の御子さしたるゆゑなく、てすてられがたき御事なりければ、後二條を居給へりし、

〔二代要記十五條〕太子富仁親王

〔皇年代略記花圓〕諱富仁、伏見院第二皇子、後伏見院御猶子、○中正安三年八月廿四日立太子、

〔二代要記十五條〕太子尊治親王

〔皇年代略記後醍醐〕諱尊治、後宇多第二皇子、○中德治三年九月十九日立太子、○後二條院、有法、

皇統、仰、關東有沙汰、

三從兄弟爲太子

〔皇年代略記光明〕建武三年十一月十四日、以先帝○後醍醐皇子成良親王爲皇太子、

○按ズルニ、後二條天皇ノ後伏見天皇ニ於ケル、花園天皇ノ後二條天皇ニ於ケル、後醍醐天皇ノ花園天皇ニ於ケル、其ニ再從兄弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、而シテ成良親王ノ光明天皇ニ於ケルハ、三從兄弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

後伏見六——光明

後深草二——伏見五

花園八

後嵯峨一

後二條七

龜山三——後宇多四

後醍醐九——成良

從姪爲太子

〔百練抄三四條〕寛弘八年六月十三日受禪、是日立、敦成親王、○後一條爲皇太子、四歲、一條

誰能激揚大節可以顯著天皇固辭曰僕不才豈敢宣揚德業億計王曰弟英才資德爰無以過如是相讓再三而果使天皇自許稱述俱就室外居乎下風略中億計王起舞舞既了天皇次起自整衣帶爲室

略中壽畢乃赴節歌曰伊儼武斯廬荷簾沂比野懼擬寐逗愈凱慶懼弭企於已陀賀曾能泥播宇世儒

小楯謂之曰可伶願復聞之天皇遂作殊舞詰之曰倭者彼彼茅原淺茅原弟日僕是也小楯由是深奇異焉更使唱之天皇詰之曰石上振之神根伐本截末於市邊宮治天下天萬國萬押磐尊御裔僕是也小楯大驚離席帳然再拜承事供給率屬欽伏於是悉發郡民造宮不日權奉安置乃詣京都求迎二王白髮天皇聞意咨歎曰朕無子也可以爲嗣與大臣大連定策禁中仍使播磨國司來目部小楯持節將左右舍人至赤石奉迎白髮天皇三年正月天皇隨億計王到攝津國使臣連持節以王青蓋車迎入宮中四月立億計王賢仁爲皇太子立天皇宗顯爲皇子

○按ズルニ仁賢天皇ハ清寧天皇ノ再從弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ其系左ノ如シ、

仁德
履中
市邊押磐皇子
仁賢

允恭
雄略
清寧

〔日本紀略後十三條〕長和五年正月廿九日甲戌立先皇三第一皇子式部卿敦明親王〇小一條爲皇太子宣制畢大臣以下諸衛等奉劔璽等

○按ズルニ敦明親王ハ役一條天皇ノ再從兄ニシテ太子トナリタマヒシナリ其系左ノ如シ、

村上天皇
冷泉
三條
敦明
圓融
一條
後一條

〔二代要記後十五伏見〕太子邦治親王

〔皇年代略記後二條〕諱邦治後字多第一皇子〇中永仁六年八月十日立太子、

〔神皇正統記後醍醐〕龜山後字多世をしろしめさすなりにしをたひく關東に仰給ひしかば、大

ぬ、東宮には梅つばのわかみや^{條一}ゐさせ給ぬ、いへばおろかにめでたし、世はかうこそはとみえきこえたり。

○按ズルニ、花山天皇ノ御父冷泉天皇ト、皇太子^{即チ皇太子}ノ御父圓融天皇トハ、異母ノ御兄弟ナリ、

〔日本紀略^{九條}〕寛和二年七月十六日壬午、冷泉院第二^{○第二下恐}居貞親王、^{○三條}今日立親王爲^{皇太子}、

○按ズルニ、一條天皇ノ御父圓融天皇ト、皇太子^{即チ皇太子}ノ御父冷泉天皇トハ、同母ノ御兄弟ナリ、

〔二代要記^{十四}後字也〕頭書 太子熙仁親王、^{○伏}後深草第二子、母玄輝門院、建治元年十一月五日爲皇太子、

〔神皇正統記^{伏見}〕後嵯峨の御門繼體をば龜山とおぼしめし定めければ、後深草の御ながれいかごとおぼえしを龜山弟順の儀をおぼしめしけるにや、此君^{○伏}を御猶子にして東宮にすゑ給ぬ、^{○中}關東の輩も龜山の正統をうけ給へる事はまじ侍りしかど、近頃となりて世をうたがはしく思ひければにや、兩皇^{○後深草}の御流れをかはるゝすゑ申さんと相はからひけりとなん、

○按ズルニ、後宇多天皇ノ御父龜山天皇ト、皇太子^{即チ皇太子}ノ御父後深草天皇トハ、同母ノ御兄弟ナリ、又兩統更立ノコトハ、踐祚篇兩統更立條ニ詳ナリ、就テ看ルベシ、

再從兄弟爲太子

〔日本書紀^{十五}〕白髮天皇^{○清}二年十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡親辨新

嘗供物、適當縮見屯倉首縱賞新室、以夜繼晝、爾乃天皇謂兄億計王^{○仁}曰、避亂於斯、年踰數紀、顯名著貴方屬今宵、億計王惻然歎曰、其自導揚見害、孰與全身免厄也歟、天皇曰、吾是去來穗別天皇^{○履}之孫、而因事於人、飼牧牛馬、豈若顯名被害也歟、遂與億計王相抱涕泣、不能自禁、億計王曰、然則非弟

也、

○按ズルニ、仁明天皇ノ御父嵯峨天皇ト、皇太子恒貞親王ノ御父淳和天皇トハ、異母ノ御兄弟ナリ、

〔扶桑略記二十〕永觀二年八月廿七日甲辰、天皇○中禪位於皇太子師貞親王、○花同日懷仁親王

一 立皇太子、

〔榮花物語二〕時々の事どもはかなく過もて行て、七月○永觀すまひも近くなれば、これを若宮

○一に見せばやと宣はすれど、おど○藤原少しふさはぬ様にて過させ給に、たび○兼家く交わら

せ給へとうちよりめしあれど、みだりかせなせさ○中まゝのおほんさはりども申させ給ひつゝ

まゐらせ給はぬを、すまひちかくなりてまきりにまゐらせ給へどあれば、まゐり給へれば、いと

こまやかに御ものがたりありて、くらゐにつきてことし十六年になりぬ○中東宮○花位につ

き給なば、わかみやをこそは、春宮にはすゑめとおもふに、いのりところ○中によくせさせて、お

もひのごとくあべくいのらすべし、おろかならぬこゝろのうちをまらで、たれも○中こゝろよ

からぬけしきのあるいとくちをしきことなり、あまたあるをだに、人はこをばいみじきものに

こそおもふなれ、ましていかでかおろかにおもはんなど、よろづあるべきこと○中もおほせらる

る、うけたまはりてかしこまりてまかで給てにようごとの○一條母にものさゝめき申させ給

て、おほんとなふらめしよせて、こよみ御らんじてところ○中におほんいのりつかひどもたち

さわぐをかうくゝとの給はせぬど、どのの中の人々けしきを見ておもへるさ、いふもおろか

にめでたし、このいへのこのさんだち、いみじうえもいはぬ御けしきどもなり○中おど○中のお

ほんこゝろのうち、はれくしうてまじらはせ給、かくて八月になりぬれば、廿七日御讓位とて

のゝしる、其日になりぬれば、みかど○中はおおりさせ給ひぬ、どうぐ○花はくらゐにつかせ給

從兄弟爲太子

〔公卿補任〕後醍醐明和五年二月十七日立太子。○後醍醐

○按ズルニ、後醍醐天皇ハ、後櫻町天皇ノ御異母弟ナル桃園天皇ノ皇子ナリ、

〔續日本後紀〕仁明天長十年二月丁亥、立恒貞親王爲皇太子。詔曰、天皇我詔旨其勅御命平親王等

諸臣等百官人等天下公民樂聞食止宜朕以拙弱臣掛畏支倭根子天皇我朝廷乃厚慈平蒙天皇太

子止成利貴比晝夜止尤之然乎慮外大日嗣平授賜布依天不堪流狀乎再比三比畏利申賜

毛止容賜須波今思行久厚恩平蒙人之必敬理利有故是以正嗣止有女恒貞親王平皇太子止定賜

布故此之狀平悟天百官乃人等仕奉止宣布天皇我御命乎衆聞食止宣○中後太上天皇○淳遣權

中納言從三位藤原朝臣吉野奉書天皇辭立皇太子曰、暴觀今日詔再立愚子恒貞爲皇太子、微旨謬

隆、盛典曲施、夫浴雷位重、承禋事祿、非德不具、非賢何守、恒貞年實蒙幼器、非夙惠安可妄鍾、大禮猥主、

ヒ豐、肅奉周遑、內知云冥、請停嚴命、更擇賢才、在於童情、寔知免暗、縱使天倫不駐、上令必行、則失萬國

以貞之望、虧三辰曰敬之職、三月戊子朔、天皇緣後太上天皇辭立太子、奉答表曰、臣某言、伏願詔旨

曰、恒貞年實蒙幼器、非夙惠安可妄鍾、大禮猥主、ヒ豐、夫輕者重之端、小者大之本、故魏宮鼓嶽、非老大

之情、晉儲神姿、是幼稚之謂、然則聰惠在性、不限年齡、伏稽前言、既有故實、臣頻表懷抱、心事共違、家賓

之慙、猶誰爲助、伏願假彼重明、照曜味資、其寬博備遺忘、臣之至愚、聖衷所驗、雖云無德、庶幾有隣、冀垂

矜憐、賜綏愜憤、至誠不飾、至敬無文、伏表丹懇、無地取喻、後太上天皇復奉書曰、內探已審、請易太子、冲

臨未廻憂心、如灼易曰、主器莫若長子、禮曰、登筮受冊、以上嗣斯皆溫文既習、敦敬克躋、然後正位、前星

貴業東序者也、今恒貞漢莊難繼、周儲不遺、將何以神光聖明、助聰天展、而恩衰逾顯、血謝不成、獨雖非

宜、與談孰許、恐龍樓之守、爰墜庖俎之譏、有聞望昭丹辭、必收紫煥山朝事隔、無可開言、父子體同、理當

分疏、異於髮、不恤緯戶、不越樽之義、是以重復鋪陳、佇蒙矜聽、天皇不許奉還其書、

〔水鏡〕仁明天皇○恒貞と申は、淳和天皇の御子なり、みかど○仁には御いとこにておはしまし、

○按ズルニ、皇太子正良親王ハ、淳和天皇ノ御異母兄ナル嵯峨天皇ノ皇子ナリ、
 『日本紀略四六』安和二年八月十三日戊子、立先帝〇冷第一皇子師貞親王〇花爲皇太子、〇山在一条
 第

〔神皇正統記四〕圓融院諱ハ守平、村上第五の御子、冷泉院同母の弟なり、

〔公卿補任花〕文保二年二月廿六日庚午、踐祚新帝〇後醍醐三月九日庚寅、邦良親王爲皇太子、

○按ズルニ、邦良親王ハ、後醍醐天皇ノ御異母兄ナル後二條天皇ノ皇子ナリ、

〔神皇正統記後醍醐〕後二條世をはやくし〇後て、父の上皇〇後宇多〇後なげかせ給ひし中にも、よろ
 づ此君〇後醍醐にぞ委附し申させ給ひける、やがて儲君のさだめありしに、後二條の一の御子邦良
 の親王居給ふべきかど聞えしに、おぼしめす故ありて、此親王を太子にたて給ふ、彼の一の御子
 をさなくさせせば、御子の儀にて傳へさせ給べし、若邦良の親王早世の御事あらば、此御すゑ
 繼體たるべしとぞあるしおかせ〇中けりける、彼親王鶴膝の御病ありて、あやうくおぼしめし
 ける故なるべし、〇略にかゝりし程に後宇多院かくれさせ給ひて、いつしか東宮〇邦の御方にさ
 ふらふ人々ぞば〇に聞えしが、關東に使節をつかはされ、天位をあらそふまでの御中らひに
 成にさ、あづまにも東宮の御事をひきたて申す輩ありて、御いさぞほりのはじめとなりぬ、元亨
 甲子の九月のすゑつかた漸事あらはれにしかども、うけたまはりおこなふ中にいふがひなき
 事出きにしかど、大方は事なくてやみぬ、其後はさなく東宮かくれ給ふ、神慮にもかなはず、祖皇
 の御いさしめにもたがはせ給ひけり、とぞおぼえし、

〔歷代皇紀光明〕皇太子益仁親王〇崇光院〇光皇子母前權大納言藤公秀女、建武五、八十三立、〇五去八
 日立親王、後日改名興仁、

○按ズルニ、益仁親王ハ、光明天皇ノ御同母兄ナル光嚴天皇ノ皇子ナリ、

皇兄爲太子

皇姪爲太子

〔皇年代略記龜山〕正嘉二年八月七日、立皇太弟一後深草同母兄龜山雖有繼嗣爲上皇勅立之、
〔皇年代略記崇光〕貞和四年十月廿七日、以花園院第二皇子直仁親王爲光嚴院爲皇太弟、

○按ズルニ、崇光天皇ハ光嚴天皇ノ皇子ナリ、

〔日本書紀仁賢〕億計天皇仁賢弘計天皇宗同母兄也、白髮天皇清二年四月、立億計天皇爲皇太子、五年白髮天皇崩、天皇仁賢弘計天皇爲皇太子如故、

〔日本書紀成務〕四十八年三月庚辰朔、立甥足仲彥尊仲爲皇太子、

〔神皇正統記仲真〕仲哀天皇は、日本武尊第二の子、景行の御孫なり、中太祖神武より第十二代景行文では、代のまゝに繼體し給ふ、日本武尊世をはやくし給ひしにより、成務是を繼給ふ、此天皇を太子としてゆづりまじしより、代と世とははれるはじめなり、

〔日本書紀推古〕元年四月己卯、立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、

○按ズルニ、厩戸皇子ハ、推古天皇ノ皇兄用明天皇ノ皇子ナリ、

〔續日本紀元正〕神龜元年二月甲午、天皇禪位於皇太子武聖

○按ズルニ、皇太子即チ聖武天皇ハ、元正天皇ノ御同母弟ナル文武天皇ノ皇子ナリ、

〔日本紀略嵯峨〕大同四年四月己丑、立高岳親王爲皇太子、

〔紹運要略〕高岳親王平城子、後醍醐親王、大同四年四月日立坊

○按ズルニ、皇太子ノ御父平城天皇ハ、嵯峨天皇ノ御同母兄ナリ、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年四月壬寅中立侍從從四位下恒世王淳和爲皇太子、太子上表固辭、

仍立正良親王明爲皇太子、癸卯、太上皇嵯峨遣權中納言藤原朝臣三守令賀辭皇太子書、上今

上略中即令三守奉返、甲辰、上表太上皇曰、臣諱淳和言、伏奉昨詔、不許立正良爲皇太子云云、先是皇

太子移權中納言藤原朝臣三守宅、即差三守等迎之、兵衛陣列御車前後至待賢門、更御轡入坊、

立之。

〔日本紀略^五〕冷泉康保四年九月一日丙戌立先皇第五皇子守平親王^〇融爲皇太弟^九卽任坊官。

〔神皇正統記^四〕融圓融院諱は守平村上第五の御子、冷泉同母の弟なり。

○按ズルニ、日本紀略安和二年八月十三日ノ條ニハ、天皇讓位於皇太子^〇融トアリ、

〔御堂關白記〕寛仁元年八月九日甲戌、以三宮^〇後三條立皇太弟、

〔神皇正統記^{後一條}〕東宮^〇教しりぞき給ひしかば、此天皇同母の御弟、敦良親王^〇後朱雀立給ひき、

〔帝王編年記^{後三條}〕寛德二年正月十六日癸酉、立爲皇太弟、

〔神皇正統記^{後三條}〕朱雀の御素意にて、太弟に立給ひき、又、三條の御末をもうけ給へり、ひかしも

かゝるためし侍りき、兩流を内外にうけ給ひて、繼體の主となりましゝき。

〔百練抄^五〕白河延久四年十二月八日、是日立實仁親王爲皇太弟、

○按ズルニ、實仁親王ハ、後三條天皇ノ皇子ニシテ、白河天皇ノ御異母弟ナリ、

〔皇年代略記^{近衛}〕保延五年八月十七日爲皇太弟、崇德^〇近衛皇子坐、依上皇御氣色立之、

〔續世繼^二〕八重の湖路今の女院^〇鳥羽后美時めかせ給ひて、近衛のみかど生奉せたまへる、東宮に

奉りて位讓り奉せ給ふ、^〇中みかどの御やしなひ古例なきとて、皇太弟とぞ宣命には載られ侍

りける、

○按ズルニ、近衛天皇ハ、最初皇太子ニ立テ給ヒシガ、永治元年十二月崇德天皇御讓位ノ時、鳥

羽法皇ノ御意ヲ以テ、更ニ皇太弟ト改テ受禪セシメ給ヒシガ如シ、ナホ讓位篇皇太弟受禪ノ

條參看スベシ、

〔神皇正統記^{土御門}〕天下を治め給ふ事十二年、太弟^〇順にゆづりて尊號例のごとし、

〔皇年代略記^{順德}〕正治二年四月十五日庚子、立太弟^四

のみかどを東宮には立てたてまつらせ給ひしなり。

〔續日本紀三十六〕天應元年四月壬辰、立皇弟早良親王爲皇太子。

〔康道公記〕寛永二十年十月三日、今日避位明傳皇太子光。

○按ズルニ、後光明天皇ハ、明正天皇ノ御異母弟ナリ。

〔忠利宿禰記〕寛文三年正月廿六日乙未、今日被行御讓位西院後節會中御讓位次第中大藏人來

仰云、以識仁親王元爲皇太子、即讓位。

○按ズルニ、靈元天皇ハ、後西院天皇ノ御異母弟ナリ。

〔日本書紀二十七〕八年十月庚申、遣東宮大皇弟於藤原内大臣家。

〔日本書紀二十八〕天淳中原瀛真人天皇武天命開別天皇智同母弟也略天命開別天皇元年、

立爲東宮。

○按ズルニ、扶桑略記天智天皇七年二月ノ條ニ、以大海人皇子立皇太子ト見エテ、當時皇太弟、

皇太子ノ兩稱ヲ互ニ用キシガ如シ。

〔日本紀略平城〕大同元年五月壬午、詔彈正尹某嵯峨定賜皇太弟。

〔神皇正統記嵯峨〕桓武第二の子平城同母の弟なり、太弟に立給へりしが、己丑のとし即位略桓

武の帝鍾愛無雙の御子になんおはしける、儲君に居給ひけるも、父の帝繼體のために願命しけ

るにこそ。

〔日本紀略嵯峨〕弘仁元年中九月庚戌、是日略立中務卿淳和爲皇太弟、詔曰、現神云云。

〔神皇正統記朱雀〕天皇御子ましまさず、一腹の御弟太宰の帥の親王上を太弟に立て、天位をゆ

づりて尊號あり。

〔皇年代略記村〕天慶七年四月廿二日甲子、立皇太弟十九元三品太宰帥朱雀無男子、以舍弟爲子

涉經史、頗愛屬文、兼能書、淨御原帝武天嫡孫、授淨大肆、拜治部卿、高市皇子薨後、皇太后統引王公卿士於禁中、謀立日嗣、時群臣各挾私好、衆議紛紛、王子進奏曰、我國家爲法也、神代以來、子孫相承、以襲天位、若兄弟相及、則亂從此興、仰論天心、誰能敢測、然以人事推之、聖嗣自然定矣、此外誰敢間然乎、司削皇子在座、欲有言、王子叱之乃止、皇太后嘉其一言定國、殊閱授正四位、拜式部卿、時年卅七、

〔扶桑略記元明〕和銅七年六月廿八日庚辰、以豐櫻彥親王武立皇太子、于時年十四歲、令加元服、是聖武天皇也、

○按ズルニ、聖武天皇ハ文武天皇ノ皇子ニシテ、元明天皇ノ皇孫ナリ、
〔日本紀略醍醐〕延長元年延喜二年四月廿九日癸酉、詔以故文獻彥太子息慶賴王爲皇太子、三年

○按ズルニ、文獻彥太子ハ、醍醐天皇ノ第二ノ皇子保明親王ノ諡號ナリ、

〔神皇正統記朱〕御兄保明の太子證を文彦早世、其御子慶賴の太子も打つゝきかくれましゝかば、保明一腹の御弟にてたちたふ、

〔吉口傳〕以宮子立坊末代不可有事

一品被相語云保明太子者醍醐天皇第二皇子也略延長元年三月廿一日薨廿一歲曰文彥此時保明御子以慶賴延長元年四月廿九日立皇太子三歲同三年六月十八日薨五歲此時醍醐天皇勅定云保明太子早世遺愛之餘以彼子立坊之處又早世以宮子立坊之條末代不可有事也云云仍此後一切無其例也凡桓武以後慶賴之外中絶人立坊之條未聞其例者也

○按ズルニ、後陽成天皇ノ如キモ亦皇孫ナレドモ立太子ノコトナカリシユエ此條ニ載セズ、
〔日本書紀十二〕二年正月己酉立瑞齒別皇子正爲儲君、

〔水鏡反上〕仁德天皇第四御子履中天皇の御をどゝ也略○中履中天皇の御子おはせしかども、こ

に、皇大神のどゞめ申させ給ひけるなるべし、後に芳野へ入せましくて、御目の前にて天位をつがせ給ひしかば、いどゞ思ひあはせられてたふどくも侍るかな、

〔秀長卿記〕應安四年三月廿三日丁未、今日有御讓位事、今上二宮（後、緒仁）先當日有御元服事、宣命、緒仁親王（平）今日新加元服（氏）皇太子（ト）定賜（天、比）此天日嗣（平）授賜（布、略）○

○按ズルニ、歷代皇紀同日ノ條ニ、無立太子儀トアルハ誤ナリ、

〔武徳編年集成（四十）〕慶長五年十二月十二日、當今（陽成）後第二ノ皇子、政仁親王（水尾）儲王ニ定メラ

ル、御母近衛殿信尹公ノ女也、當今御愛君ニテ、最初皇太子タルベキ所、菊亭右大臣晴季公、德善院

玄以ト胥議シ、大闇秀吉へ告ゲ、第一ノ皇子良仁親王（母、中山大納言親、總、納ノ女）ヲ皇太子ニ立ラル、元ヨリ此

事、叡慮ニ應ゼザル故、頃日近臣ヲ以テ、神君（家）廉へ密詔アリ、神君曰、凡子ヲ知ル事、父ニ如ハナシ、

臣モ亦男子トシト雖ドモ、繼嗣タル事、臣ガ心ニ在ルノミ、第一第二ノ皇子ノ内、皇太子タラン事、

孰レ成トモ、叡慮ニ任セララルベシ、殊ニ政仁親王、母君貴キ上ハ、猶更然ルベシト奏セラレケレバ、

大ニ叡威有テ、此御沙汰ニ及ブト云云、

○按ズルニ、皇子ヲ太子トセラレシ例ハ、此他ニモ猶多ケレド略ス、

〔續日本紀（一、武）〕高天原廣野姬天皇（統）十一年、立爲皇太子、

〔日本書紀通證（三十五）〕私記引王子枝別記曰、文武天皇（略、中）持統天皇十一年春二月丁卯朔壬午、

立爲皇太子、今按壬午十六日、蓋脫文也、

〔神皇正統記（持統）〕草壁の皇子は太子に立給しが、世をはやくし給ふに依て、其御子輕王を皇太子

とす、文武にまします、

〔懷風藻〕葛野王

王子者、淡海帝之孫、大友太子之長子也、（略、中）器範宏遠、風鑒秀遠、材稱棟幹、地兼帝戚、少而好學、博

皇孫爲太子

〔日本紀略一編〕延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子。

〔扶桑略紀二十九條〕延久元年四月二十八日甲子、以今上第一皇子貞仁親王河白立皇太子。

〔百練抄十五卷〕寛元元年八月二日、於中宮御方、被定立儲君。雜事、其所事兼日被仰合人々、大進時繼

書定文、公卿大夫已下參仕云云、四日、自今日依立太子御祈修五壇法、六日、今日立坊御所御裝

束始也、八日、頭中將師繼朝臣、參向右大臣亭、實經召仰立太子事、十日、今上第一皇子、久深仁草

有立太子事。申刻被始行。節會云云。畢於御前被行坊官除目。坊官等於弓場申慶。又奏本宮申慶。公卿

相引參本宮事畢自內裏被獻御劍壺切紛失之間被渡他御劍勅使頭中將師繼朝臣賜祿再拜退出

〔吉續記〕文永五年八月一日、來廿五日、可有立坊云云、可悅可悅、俄有沙汰被仰合關東之處、可然之由

申御返事故歟、本所頭辨藏人方左佐奉行云云、一向爲院嵯峨御沙汰、四日、今夜立太子定、親朝定

文奏聞洞參執筆樞中納言云云可尋記
廿五日甲辰今日立太子宇多也藏人方光朝俄奉行云云

本所藏人佐親朝奉行予御膳勅使兼日被相催之間申領狀扶所勞申斜套內節會已被始

〔帝王編年記〕正應二年四月廿五日立太子節會親王。○後伏見

又の年戊寅の春二月略陸奥の御子村上行又東へむかはしめ給ふべき定む

親王は侍の君にならせ給ふべきむね申さかせ給ふ道の程もかたじけなかるべし略

七月の末つかた伊勢に赴させ給ひて神宮に事のよしを啓して御船のよそひし九月のはじめ

とすつなをとかれしに十日比のてとにや上総の地ちかくより空のけしきおとスくしく海

上よりくはなしかはう伊豆の鮎といふ方にないよはれ侍しにいとい、波風おたひいしくな

して、また、その船は、さうな、
 佐美の港に、かゝる、中

方々にありては此二つの力まじりて互に強め合はるる所の世にあらざらん

るためしにぞ侍るべき、儲の君にさだまらせ給ひて、例なきひなの御住居もいかゞとおぼえし

〔日本書紀^{三十一}〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨。

〔日本書紀^{三十}〕十年七月庚戌、後皇子尊^市○高薨。

〔皇胤紹運錄〕按草壁薨後、高市立爲太子、仍稱後皇子尊。

〔續日本紀^{三十二}〕實龜四年正月戊寅、立中務卿四品諱^武○桓爲皇太子。

〔水鏡^下〕實龜四年正月十四日に、山部親王の、中務卿と申ておはせし、東宮にたち給ふ、^略中大

臣以下御門に申ていはく、まうけの君はまばしもおはせずしてあるべき事ならず、すみやか

にたて奉り給へど申しかば、御門たれをか立べきとの給はせしかば、百川すゝみて、第一御子

山部親王をたて申給ふべしと申さ、^略○中濱成申ていはく、山部親王は御母いよし。おはすい

かでか位につき給はんと申しかば、御門まことにさる事也、酒人内親王をたて申さんとのた

まひき、濱成又申ていはく、第二御子稗田親王御母いよしからず、此親王こそたち給ふべけれ

と申しを、百川目をいからかし、大刀をひきくつるきて、濱成をのりていはく、位につき給ふ人

さらに母のいやしきたふときをえらぶべからず、山部親王は御心めでたく、世の人も皆また

がひたてまつる心あり、濱成申事道理にあらず、我命をもをしみ侍らず、又二心なし、只はやく

みかどの御ことわりをかうぶり侍らんとせめ申しかば、みかどのもかくものたまはで、立て

内へ入給ひにさ、百川此事をうけたまはりきらむとて、はをくひまばりて、少しもねぶらずし

て、四十餘日たりき、みかど百川が心のつよくゆるがざる事を御覽じて、さらばとく山部親

王の立べきにこそと、まふくに仰出し給ひしを、御ことばいまだをはらざりしに、庭におり

て手を打よろこぶ聲、おびたいしく高くして、人々皆おどろきさわぎ、百川やがてつかさづか

さをめして、山部親王の御許へたてまつりて、太子にたてまつりにさ。

〔三代實錄^五〕仁和三年八月二十六日丁卯、天皇聖體乖豫、是日立第七皇子諱^多○宇爲皇太子。

〔新撰姓氏錄左京皇別〕上雀部朝臣。中應神御世代於皇太子大鸕鷀尊繫木緒緒尊監御膳因賜名

曰大雀臣。

皇子爲太子

〔日本書紀神武〕四十有二年正月甲寅立皇子神淳名川耳尊綏爲皇太子。

〔日本書紀綏靖〕二十五年正月戊子立皇子磯城津彥玉手看尊安爲皇太子。

〔日本書紀崇神〕四十八年正月戊子天皇勅豐城命活目尊仁汝等二子慈愛共齊不知易爲嗣各

宜夢朕以夢占之二皇子於是被命淨沐而祈寐各得夢也會明兄豐城命以夢辭奏于天皇曰自登御

諸山向東而八廻弄槍八廻斃刀弟活目尊以夢辭奏言自登御諸山之嶺繩紆四方逐食粟雀則天皇

相夢謂二子曰兄則一片向東當治東國弟是悉臨四方宜繼朕位四月丙寅立活目尊仁爲皇太

子以豐城命令治東國。

〔古事記仲哀〕坐穴門之豐浦宮及築紫詞志比宮治天下也此天皇中又娶息長帶比賣命神是大

后生御子品夜和氣命次大耜和氣命亦名品陀和氣命柱此太子神之御名所以負大耜和氣命者

初所生時如靉穴生御腕故著其御名是以知坐腹中定國也。

〔日本書紀應神〕四十年正月戊申天皇召大山守命大鸕鷀尊問之曰汝等者愛子耶對言甚愛也亦問

之長與少孰尤焉大山守命對言不逮于長子於是天皇有不悅之色時大鸕鷀尊預察天皇之色以對

言長者多經寒暑既爲成人更無怙矣唯少子者未知其成不是以少子甚憐之天皇大悅曰汝言寔合

朕之心是時天皇常有立菟道稚郎子爲太子之情然欲和二皇子之意故發是問是以不悅大山守命

之對言也甲子立菟道稚郎子爲嗣即日任大山守命令掌山川林野以大鸕鷀尊爲太子輔令知國

事。

〔日本書紀欽明〕十五年正月甲午立皇子淳中倉太珠敷尊敏爲皇太子。

〔日本書紀天武〕十年二月甲子是日立草壁皇子尊爲皇太子。

古立太子不
必一人

〔古事記中〕凡此大帶日子天皇行之御子等所錄廿一王不入記五十九王并八十王之中若帶日子命成與倭建命亦五百木之入日子命此三王負太子之名

〔古事記傳二十六〕三王負太子之名とは是上代の常なり抑上御代々々に日嗣御子と申せるは

皇子たちの中に取分て尊崇めて殊なるさまに定め賜へる物にて其は必しも一柱には限らず或は二柱三柱も坐しことなりまづは皇後の御腹の御兄なりかくて御位は必其日嗣御子の中なるを繼坐ける○中い其證を具に云ひには先葺不合命の御子たち四柱の中に五瀬

命と若御毛沼命天神武と二柱太子に坐けむこと又神武天皇の太子は神八井耳命と神沼河耳

命綏靖天皇と二柱にて坐しこと共に彼御段に委く辨へたるが如し次に書紀崇神卷に四十八年

豐城命と活目命垂仁天皇と二柱の内を御夢に因て嗣に定賜へるも元來此二柱太子に坐るが故

なり次に垂仁卷に卅年天皇詔五十瓊敷命大足彥尊曰汝等云々とある此も此二柱太子に坐しが故なり若然らずばい此二柱に限りて此詔あらむ五十瓊敷命の御夢諸陵式に載て後まで祭賜ふをも思ふべし次に應神卷に四十年天

皇召大山守命大鷦鷯尊問之曰云々とある是又此二柱も宇遲稚郎子と共に三柱元より太子

に坐が故なり故其より前二十八年の處にも太子菟道稚郎子と記され仁德卷には初天皇生

日木菟入子產殿云々則取鷦鷯名以名太子曰大鷦鷯皇子と見え此記明宮段にも太子大雀命

姓氏錄臣條朝にも應神御世皇太子大鷦鷯尊とあり此ら皆上代よりの傳言の隨に記せる文

なり又宇遲若郎子の帝位を固く大雀命に讓避賜ひしも大雀命は御兄にて共に太子に坐が

故なるをや

〔日本書紀十〕二十八年九月高麗王遣使朝貢略○中時太子菟道稚郎子讀其表怒之責高麗之使

〔日本書紀仁德〕元年正月己卯大鷦鷯尊即天皇位略○中初天皇生日略○中則取鷦鷯名以名太子曰大

鷦鷯皇子

性薄愚志耽玄極遊魂彼岸銷意道場過去之世身歷數十遷化漢土僅爲王族鍊法通覺期到淨土而今叨領儲君委以萬機神器難滿實祚易類伏惟陛下紹徽號居紫極御八州以仁壽之化撫三才以柔和之猷海表隨化率土因蹤嘉瑞頻來豐稷相係伏願陛下擇賢良以輔治用善哲以撫民則萬國歡心四海平安臣出家入道爲度外者與隆佛教紹耀玄風天皇不聽勅曰阿兒勿驚汝爲耳且姥非阿兒何由治國太子不敢固辭天下之人民聞而大悅如遭慈父愛母本願緣起云臣等願儲君位者與隆佛教紹耀玄風天皇不聽不敢固辭故製三十七憲章爲王法之規模流布諸藩莫作教爲佛法之模範

〔皇年代略記〕天智孝德天皇大化元年乙巳六月立太子辛酉年七月齊明崩以來皇太子厚至孝不稱即位壬戌以來於岡本宮攝政五箇年八年己巳正月戊子即位

〔神皇正統記〕齊明皇太子と申は中大兄皇子○天の御事なり孝德の御代より太子に立給ふ此御時は攝政し給ふと見えたり

〔革命勘文〕天智天皇者息長足日廣額天皇○舒之太子也讓位於母天豐財重日足姬天皇○皇及別天萬豐日天皇○孝二十一年間猶爲太子攝萬機

○按ズルニ職原抄神皇正統記等ハ皇太子ノ攝政ヲ以テ齊明天皇ノ朝ニ繫ケ革命勘文ハ皇極天皇即位ヨリ齊明天皇崩御マデノ間二十一年間トス而シテ皇年代略記ニハ齊明天皇崩御ヨリ天智天皇即位マデノ間トセリ但シ天智天皇ハ齊明天皇ノ崩後六年ヲ間テハ其ノ七年正月戊子ニ即位セラレタレバ皇年代略記ノ攝政ヲ五ケ年トシ即位ヲ八年正月トセルハ共ニ誤ナリ

〔日本書紀〕天武十九十年二月甲子是日立草壁皇子尊爲皇太子因以令攝萬機

〔續日本紀〕元正八養老三年六月丁卯皇太子○聖始聽朝政焉

○按ズルニ皇太子始聽朝政トアルハ太子攝政トハ異ナレドモ類ヲ以テ此ニ附載ス

臣是公、中納言種繼等並爲留守、

〔水鏡桓武〕延暦三年十一月十一日戊申、長岡の京にうつり給ふ、同四年八月にならの京へ行幸侍りき、長岡の京には、中納言種繼留守にて候しを、みかぜの御おどゝの早良の親王東宮とおはせしが、人をつかはして、いころさしめ給ひてき、ことのおこりは、みかぜつねにこゝかしこに行幸し給ひて、世のまつり事を東宮にのみあづけたてまつりしかば、天應二年に佐伯今毛人といひし人を宰相になさせ給ひたりしを、みかぜかへらせ給ひたりしに、この種繼、佐伯の氏のかゝることは、いまだ侍らずと御門に申しかば、宰相をとり給ひしを、東宮よにくちをしき事におぼして、種繼をたまはらんと申しを、みかぜむつかり給ひて、さらに聞給はずして、このゝち東宮にまつり事をあづけたてまつり給ふ事なくなりにしを、やすからずおぼして、そのひまをとしころうかひたまひつるに、よきをりふしにて、かくまたまひつる也、

太子攝政

〔職原抄上〕攝政○中略推古天皇朝皇太子厩戸皇子推古也攝政、齊明天皇御宇皇太子中大兄皇子○智天又攝政、

〔日本書紀二十用明〕元年正月壬子朔、立穴穗部間人皇女爲皇后、是生四男、其一曰厩戸皇子、聖名耳聰或云法主王此之皇子初居上宮、後移班鳩於豐御食炊屋姫天皇古推世位居東宮、摠攝萬機、行天皇事、語見豐御食炊屋姫天皇紀、

〔日本書紀推古二十〕元年四月己卯、立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、

〔神皇正統記推古〕厩戸皇子を皇太子として、萬機の政をまかせ給ふ、攝政と申き、太子の監國と云事もあれど、それはまばらくの事なり、是はひとへに天下を治め給ひけり、

〔聖德太子傳曆上〕推古天皇元年四月、天皇初聞群臣奏勅曰、吾女人也、性不解物、萬機日填、國務滋多、宜天下之事皆啓太子、即日立太子爲皇太子、仍錄攝政萬機悉委焉、太子受儲君位、固辭再三曰、臣天

天皇出御晝御座

吹以掌侍召皇太子

皇太子參進御前

次典侍持御衣奉皇太子

皇太子進孫廂拜舞初如

次入御

皇太子還御之便令參二間廂拜母后給訖還御以下事相從如初

〔實久卿記〕天保十一年三月二十六日丁巳今日東宮明拜觀也辰終刻許自昭陽舍東宮出御坊官

供奉於清涼殿廣廂御拜舞云云

太子監國

〔令義解儀六〕凡車駕巡幸及還百官五位以上辭迎留守者不在辭迎之限謂執掌之長官留守者也假令監國之太子若執契之公卿之

〔令義解公七〕勅旨式略○中皇太子監國亦准此式以令代勅

〔令義解公三〕勅旨式略○中穴云宰相以上留守之時不用式耳跡云問監國未知无皇太子差宰相以

上令留守者何行爲答不合行事也以令代勅謂棄勅行令啓耳朱云皇太子監國亦准此式以令代勅

謂不得行詔書耳問皇太子留守條師記云雖給鈴契不可給內印又不在御所事餘公事不可行者未

知依此式可行令旨此何色事答言云云不明決耳

〔令義解公七〕便奏式略○中其皇太子監國謂天子巡幸太子留守是爲監國亦准此式以奏勅代啓令

〔令義解公七〕凡車駕巡幸京師留守官給鈴契謂留守官者皇太子若不在此餘官留守者亦是也中略其供上候太子監國之日唯得用勅旨及領契以外大事

不得施行

〔續日本紀三十八〕延曆四年九月丙辰車駕至自平城略○中至於行幸平城太子早及右大臣藤原朝

用挾右脇、左脇、復座、長橋、次御拜、傳候御後、次令出盡御座給、二枚杉戸ノ方、御出取脂燭了、次令入、議定所了、脂燭殿上人範篤朝臣、輝季朝臣、保房、房季、丹波尙秀、各束帶、奉行光綱也、

〔俊矩記〕文化六年三月十四日甲戌早朝出納來面昨夕之趣、委細演說、即內豎、戸屋主有之、盡之交名、一紙返却、此通諸司參勤被仰出間、來月七日巳刻可相催旨申渡、最早別段以切紙不申送旨申間、內藏權頭承知、即示談之上、下行員數令治定、如左、

御拜觀御下行

五斗 出納 一人

三斗 內豎 一人

三斗 小舍人 一人

三斗 所衆 一人

二斗 戸屋主 一人

壹斗五升 仕人 一人 ○中略

皇太子拜觀儀

刻限皇太子出御在所、令參御殿給、

傳取御裾學士二人、亮二人、大夫二人、左右相分前行、上萬、左萬大進少進等候御後、或傍親公卿在御供、

天皇出御

豫御帳中立御倚子御座、御蓋

皇太子進孫廂當御前西面拜舞、

此間傳大夫留寶子、亮以下候便所、

次拜舞訖、暫令候、昆明池障子後給、

次入御

此間撤御帳中御倚子、更供尋常御座、弘廂北第一間敷東京錦茵、爲皇太子御座、孫廂敷圓座一枚、爲關白座、

拜舞於後廊中訖退出于時天皇下倚子御座御平敷御座更令內侍召還皇太弟還參著座南第三廂
而故四頃之掌侍侍子取御祿祿衣一襲青色長御衣蘇芳屬下襪綾表御攝政取御祿授於大夫卿其中
以拍單御衣奉掛御頸又步進南廂再拜舞踏退出儀式行列如初便參皇太后宮是御在殿更參也又再拜舞
踏依母后御氣色入御簾中有御祿女裝束以單御衣奉掛御頸再拜舞踏又如初此間作法神妙上下
見者感淚難禁推而可察次大夫以下進以上給祿各有差大夫白大襪一襲學士亮大進等各紅衾一
賜之北上下西皇太弟御本殿公卿以下有饗饌也

〔台記〕久壽二年十月五日己卯傳聞東宮條〇二自鳥羽南殿行啓同田中殿先例召在禪閣之真信公青

絲毛今度被用在院之青絲毛云云件車故待賢門院爲中宮常出入之時白河院被送云云太子御裝束闊腋袍螺鈿劍絲鞋云々近後一條院爲太子拜觀日之例也見爲善記之由亮親朝臣所談也

〔渡邊舊記〕享保十三年六月二十三日今晚御拜觀御所中御門へ御成櫻拜觀之義數百年御中絕之

御沙汰今度御再興誠以恐悅御事也御衣紋高倉殿御參於清涼殿御作法有之由坊官不殘御參地
下之輩不及參勤

〔公卿補任中御門〕享保十三年六月二十三日皇太子町櫻御拜觀

〔資方朝臣記〕享保十三年六月二十三日東宮拜觀也今夜亥刻計也東宮傳兼香令候議定所庇圓座
給南而東宮出御于議定所良方之御座次東宮大夫實憲取御劍御次傳卷御簾次東宮出御經布

障子高遣戶ノ邊ヲ御通り有之傳以下供奉脂燭之輩布障子ノ前ノ妻戶之内取脂燭長橋ノ邊西
ノ妻戶ノ邊迄也入御于鬼間御休垂簾也傳被候鬼間ノ孫庇北面也此間主上出御于晝御座御帳

臺無儿帳立御倚子無晝御座之疊垂簾之内左右有菊燈臺簾外同前次頭辨候御簾歟次傳目左少
辨植房從御目傳仰左中辨宣誠可來由宣誠相從次孫庇ノ邊ニ御出之道ノ構ヲ被命次從簾中卷

簾太子御出傳以下供奉太子令著晝御座簾外之疊給大夫取緣行于鬼間孫庇之程亮跪取緣了左

○按ズルニ、此他ナホ東宮ニ供スベキ調度用途ノ類多ケレド略ス、官位部東宮坊篇ヲ參看スベシ、

〔儲君親王宣下部類〕明曆四年正月十九日、儲皇元親王宣下之儀有御沙汰廿一日參院、親王宣下之事條々有沙汰、今度親王宣下、同日可有叙品宣下哉否事、法皇舊院親王宣下同日叙品宣下云云、然ハ爲御佳闕之間、此旨可致沙汰歟之由伺申、仰云、儲君之儀不混自餘親王、縱者歸無品各別ニ御崇敬、以之爲御規模、乍然法皇舊院同日御吉例之間、其通可有御沙汰之由御氣色也者退出、

〔季連宿禰記〕天和二年十一月三日丙午、儲君山御臺所賄料千儀、從武家被獻之由風聞、

〔通誠公記〕寶永五年二月三日、內院中東宮御次第事、主上、仙洞東宮、女院中宮大准后、可爲此通之由御治定也、

〔賴言卿記〕寶曆九年五月十五日甲午、今日儲君桃圖立親王宣下也、自今日御次第、親王准后ト被立

了略節

〔言成卿記〕天保六年九月十八日、今日儲君明立親王宣下、廻文到來、儲君御次第、可爲准后上候、右

之通大宮權大夫被申渡、略節

〔西宮記〕正月重親王拜親事

延喜九年二月廿一日、皇太子始朝親、乘輦入、自玄暉門至清涼殿北簷下、簀、候息所直曹藏人供奉御

裝束尋常親立意子、不立、置物机、即太子進當御座拜舞、寬平入、自南方、於又廊、舞踏此、此間左大臣候、簾下奉引、

禮了還、

〔外記〕日記太子部類所引、寬仁元年八月二十一日丙戌、此日皇太弟朱初參御所朝謁天皇、其儀申二刻

皇太弟出東北面對、西行乘御在所殿南庇參給、前攝政并攝政并傳右大臣、坊官大夫權中納言藤原

教通卿同賴宗卿等立前後他坊官等於殿下伺候、皇帝後一條御倚子御座、此御座立於殿南第四間南面皇太弟進而

太子拜親

〔文德實錄〕嘉祥三年四月己酉、公卿上啓曰、○中遺制云、皇太子○文可於柩前、卽皇帝位、一依周漢

故事、伏惟殿下深仁植性、純孝因心、寢門問暨、竭愛敬之誠、馳道中虞、盡溫恭之禮、臣子之道、克宣、天人

之望、允集、宜肅奉聖旨、屬茲時來、居南面之尊、高應北辰之大、實而偏經、罔極之至哀、不忍割情、以就禮、

涉旬踰月、以至今日、臣等願々深所未達、況乎先帝○仁已有遺勅、孝善述父志、何得拘匹夫之情、孝錄

萬乘之典章、謹案春秋、例人君卽位、有四初喪卽位一也、旣葬卽位二也、踰年卽位三也、三年諒闇終卽

位四也、殿下已在初喪而忘制、宜追旣葬而示儀、上承七廟之靈、下定萬民之望、臣等自負舊恩、於丘山

思致新主於堯舜、不任慙歎之至、謹奉啓以勸進、令曰、雖有遺詔、旣踰旬月、況亦陵土未乾、不忍卽正、不

聽、

〔令義解公七式〕東宮 皇太子 殿下 右如此之類、並闕字、

〔延喜式伊四伊勢大神宮〕凡王臣以下不得輒供大神幣帛、其三后皇太子若有應供者、臨時奏聞、

〔百一錄〕寶永四年四月廿九日、儲君御方○中有親王宣下、上卿二條內大臣、勅別當德大寺大納言奉

行頭中將、經慶卿改、經敬、儲君御諱慶仁、依避之也、五月朔日、隆慶卿改、隆賀、季慶朝臣改、季通依

避御諱也、

〔延喜式四十三香宮〕凡東宮初立、頓料絹一百五十疋、調布五百端、調綿五百屯、錢百五十貫文、白米百斛、黑

米百斛、鹽廿斛、油八斗、

凡東宮湯沐二千戶、

凡六月一日、內藏寮供御櫛卅枚、十二月亦同

凡八月二日、御被料長絹二十疋、白綿二百屯、申官請受、

凡十二月二日、來年雜用料絹三百疋、綿七百屯、絲五百鈞、調布一千端、銀一千口、錢五百疋、御履革四

張、職文革二張、申官請受、

宮へ、白銀三十枚、一種一荷（一箱）、井伊掃部頭獻上、禁中へ、御大刀一腰、蠟燭二千挺、御馬（代）黃金三十兩、一匹、東宮へ、御大刀一腰、蠟燭二千挺、御馬（代）黃金十兩、一匹、中宮へ、縮緬（白紅）二十卷、蠟燭千挺、戸田土佐守獻上、禁中へ、御大刀一腰、和紙二箱、御馬一匹、東宮へ、御大刀一腰、和紙二箱、御馬一匹、仙洞へ、御大刀一腰、和紙二箱、御馬一匹、中宮へ、和紙一箱、

六日乙未、井伊掃部頭來使、有贈物、大刀馬代也、使者口上之趣ハ、備忘切紙持參如左、

此度參内院參首尾能相勤奉、拜龍頭、天盃頂戴、仙洞東宮御目見被仰付、御盃頂戴、重疊難有奉存候、依之爲御祝儀、以使者目録之通被致進上候、（略）

〔令義解（儀制）〕凡（中）率土之内於三后皇太子上啓稱殿下、自稱皆臣妾、對揚稱名、

〔槐記〕享保十四年九月四日、晚參候、東宮立坊ノ節、滋野井ヨリ、坊官ノ者ノ表文等ニハ臣ト稱シテ苦シカラヌコトニヤ、但シ臣トハ稱スマジキコトヤト問ハル、令ノ集解東宮坊官ノ人臣ト稱スベキコト、唐朝ノ禮ナル由記セリ、唐朝ノモノニモ略出セリ、宋朝以後ノ書ニハ見當ラサドモ、日本ノ禮ハ唐禮ヲ專ラトスルコトナレバ、臣ト稱シテ全クアヤマリナラズト仰遣ハサレシガ、物ハ何ニテモ廣ク見ベキコト也、此頃賓退録ノ中ニ、宋朝太子ノ臣ト稱スルコトヲ許サレズ、ソレヨリシテ奉宮ノ坊官ヲ臣ト稱スルコトヲ廢セラレタリト記セリ、コレニテ唐朝ニテ用タルコトイヨ、憶ナリ、カヤウノコトホド面白キコトハナシ、ゴチラカラ合セズ、アチラカラ合フコトニアラザレバ、本ノコトニ非ズ、宋朝ニ廢セラレタルニテ、唐禮ノタシカルヲ日本ニハ用ユ、集解モソレヲ載ラレタリ、是等ノコトドモ近キ書ナレバ御覽アルベケレドモ、其不審ナキ時ハ徒ニ看過ナリト、地下ニ此コトノアリタル故ニヒトシホニ思召ヲ、滋野井ニ仰遣ハサレタラバ、何ホドカ嬉シカルベシ、未ダ仰ツカハサレヌト仰ラル、

兵部卿宮、上總宮、常陸宮、前內大臣、德大寺前內大臣、近習番御免、院伺候、廿七日、内々門跡、口御所々々、入道前大納言、冷泉入道前大納言、内々公卿殿上人、有成朝臣、四月二日、外様公卿殿上人、内々外様入道、廿一日、文覺寺門跡、大乘院門跡、三寶院門跡、蓮華光院門跡、實相院門跡、大乘院新門跡、三寶院新門跡、廿二日、諸禮、内院非藏人、廿四日、東本願寺、廿五日、養源院、法淨院、南禪寺、五山、小池坊、智積院、蓮臺寺、本國寺、智恩院、

右内々衆御禮以上ハ、悉御三間御對面故、不及坊官總詰、外様以下ハ、皆小御所御對面故、坊官并東宮近習總詰也、卽二月廿一日以下廿六日迄、坊官一統俊常迄、連名總詰、觸自三卿、後日被觸出由也、

東宮御禮、此日攝家中以下役人坊官近習等也、仍俊常兼日議奏觸有之、辰半刻小仕、於便所賜御祝酒、未半刻過攝家中以下、悉於御三間御對面、東宮御座中段御板茵也、傳大臣被候、南椽座敷、三卿亦南椽座敷杉戸邊列候也、俊常坊官一統之列、於西椽座敷申御對面、其次東宮近習、次近習一統西園寺等御對面也、御對面後御禮之事、於大夫以下俊常以上坊官一統連座、以表使申上御禮也、攝家中御對面而已、御盃之儀無之也、五日甲午、立坊御祝儀、關東使井伊掃部頭戸田土佐守、酒井讃岐守、同伴參内也、今日御所方進獻如左、

大樹ヨリ禁中へ、御大刀一腰、御馬代白銀三百枚一匹、三種二荷干觸一箱、見布、東宮へ、御大刀一腰、綿二百把、御馬代白銀三百枚一匹、仙洞へ、白銀百枚、二種一荷干觸一箱、見布、中宮へ、白銀二百枚、綿百把、二種一荷干觸一箱、見布、亞相ヨリ禁中へ、御大刀一腰、御馬代白銀三百枚一匹、二種一荷干觸一箱、見布、東宮へ、御大刀一腰、綿二百把、御馬代銀二百枚一匹、仙洞へ、白銀五十枚、一種一荷干觸一箱、見布、中宮へ、白銀百枚、綿百把、一種一荷干觸一箱、見布、御臺ヨリ禁中へ、白銀三十枚、二種一荷干觸一箱、見布、東宮へ、白銀五十枚、二種一荷干觸一箱、見布、仙洞へ、紗綾十卷、一種一荷干觸一箱、見布、中

院殿より銀三十枚、一種一荷、東宮に備前國光重の御大刀、銀三百枚、綿二百把、三種二荷、大納言殿より青江恒次の御大刀、銀二百枚、綿百把、二種一荷、天英院殿より銀五十枚、一種一荷、法皇に銀百枚、二種一荷、大納言殿より銀五十枚、一種一荷、天英院殿より紗綾十卷、一種一荷なり、六月廿一日、去十一日京にて立坊ありしを賀して、群臣兩城に出仕す、

〔寶曆集成絲綸錄〕延享四卯年三月十六日、立坊○桃相濟候ニ付、爲御祝儀、明廿二日服紗小袖半袴著之、四時總出仕有之候、尤西九江も出仕、大御所様大納言様江も御祝儀可申上候事、

但出仕無之面々は、月番之老中隱岐守右近將監宅江、以使者御祝儀可申上候、

一在國在邑之面々、五萬石以上ハ使札、五萬石以下ハ飛札、老中隱岐守右近將監江可差越候事、右之趣可被相觸候、

三月

〔淺明院殿御實紀〕十七明和五年二月七日、京の御使松平下總守忠刻に、備前國守家の御大刀をさづけらる、これ立坊の慶賀とて奉り給ふなり、御臺所よりの進らせられ物は、高家長澤壹岐守資祐に授らる、二十七日、群臣出仕し、京都の立坊英仁親王桃園院第を賀す、四月三日、立坊により、禁裏より屏風一雙、三種二荷、東宮より御大刀、金二枚、白綾十端、女院准后よりもおなじ、大納言殿には禁裏より畫帖、二種一荷、東宮より御大刀、金一枚、白綾一卷、女院より純子一卷、准后よりも同じく進らせらる、

〔後矩記〕文化六年三月廿五日乙酉、立坊○仁恐悅今朝仙洞御帳中宮表使殿下等令參賀、但於中宮賜御祝赤飯吸物酒者也、宮司一統如此由、即參賀之序、於御客間令頂戴御以非藏人、御肝煎迄東宮御禮式如左、

三月廿五日、攝家中兩役院兩使、三卿坊官、東宮近習、近習、西園寺中納言、廿六日中務卿宮、尹宮、

市朝、蕙帳蓬屏、欣々于巖谷、殿下威瑤光而託孕、應端氣而誕姿、生而神聰、已掩軒轅於五帝之德、立是天授、豈假羽翼於四皓之賢、既賀誕騰之有間、查悅監撫之有歸、鴻景之基固於磐石、鸞殿之志安於泰山、昔在周武之育成王、全繼聖哲之體、漢文之生景帝、定齊恭儉之名、周漢之風、于茲可親而已、嗟哉、出最之風、想煙霏於咫尺、離胎之龍子、致雲雨於須臾、斯則雖因高殖、宿分不定、猶如日之不可識、天之不可階者也、延昌等棲深山之古洞、纔驚嘉鵲之聲、樂大厦之新成、欲表賀薰之志、不勝欣躍并舞之望、謹遣寺主僧傳燈、大法師良藝等奉賀以聞、謹啓、

天曆四年八月一日

〔左經記〕寛仁元年八月九日甲戌、申刻東宮立給、○後作法如常、二十一日丙戌、仁和寺僧正被示云、

寺僧爲申慶可參攝政殿先例、僧綱并所司大衆相會、摠二十人參入給祿、僧綱大褂一領、所司大衆等袈各一條也云々、入夜歸參、二十五日庚寅、今日與福寺僧等參、東宮令申御慶賀之由、北陣達令、

重上、即有給祿事、僧綱二人、別當權別當、白大衆各二領、進取之、已講、摠所參僧等二十一口也、傳聞與福寺僧先參攝政殿、攝政殿也、次參東宮攝政殿、同有給祿事云々、

〔常憲院殿御實紀〕天和三年二月九日、京にて親王立坊、○東山、女御立后ありしをほがせ給ひ、賀使

進らせ給ふ、松平讃岐守頼常これを奉り暇賜ふ、高家畠山民部大輔基玄もさしそひまかるべしと命せられ、同じく暇下さる、その儀物は主上○置に、儀刀一振、銀三百枚、皇太子に、真包御大刀銀

三百枚、綿二百把、各三種二荷をふ、本院に銀百枚、新院中宮に、銀二百枚、綿百把、ともに二種一荷をひたり、御臺所より禁庭に、銀三十枚、東宮に五十枚、中宮には三十枚、各二種一荷をひたり、二十

一日、群臣さうのぼり、老臣に謁し、立坊立后を賀し奉る、

〔有德院殿御實紀〕二十七享保十三年五月廿一日、立坊、○攝の慶賀使酒井雅樂頭親本に、進らせ給ふ品々を授らる、禁裏に御大刀、銀三百枚、三種二荷、大納言殿より御大刀、銀二百枚、二種一荷、天英

裏ノ火事ニヤケテ、身バカリノコリタリケルニ、ツカサヤヲ作リテダセラレタル也、

〔百練抄四〕後冷泉康平二年正月八日、皇居一條院燒亡、主上渡御上東門院御所、壹切劔爲灰燼、不、被、獻、東宮也

〔百練抄十五〕後冷泉寛元元年八月十日、今上第一皇子後久仁有立太子事、申刻被始行節會、節會畢、於御

前被行坊官除目、坊官等於弓場申慶、又參本宮申慶、公卿相引參本宮事畢、自內裏被獻劔、壹切紛失之間、被渡他御劔、勅使頭中將師繼朝臣賜祿再拜退出、

〔園太曆〕觀應三年元○文○初二月十三日丁亥、今夜參院○中去年□□□壹切被渡之儀、尋申之、仰云、劔

置置二階、被置折妻戸内、壹切即被置其傍、藏人範康引導左少將康清伯卿參進、範康卷御廣康清賜之、出中戸納長櫃、歟、一身三度賦之云云、

〔基量卿記〕天和二年三月二十七日、今日壹切御劔被進以密儀、土御門兵部少輔令持參也、本儀近衛中少將可持參也、先年萬治度令燒失處、作飾燒了之所、於劔者無別儀、依不及磨云云、不思儀之名劔也、累代寶物無他物也、

〔通誠公記〕寶永五年後正月六日、壹切御劔御裝束調進之事、被仰出武家、兩傳奏奉之、傳仰於武家、

二月八日、壹切御劔裝束、今日造進之、自武家、渡、於、武家、兩傳、奏、奉、於、關白內覽之後、議奏以女房大和獻之、

〔槐記〕享保九年九月七日、仰ニ、總ジテ後鳥羽院已來ノ眞記ハ、後光明院ノ時ノ禁裏炎上ニコトゴトク亡ビタリ、○中五間ニ八間ノ御文庫、一度ニ三ヶ所トモニ燒失セリ惜ムベシ、然ルニ壹切ノ

御劔、其外ニ今ニ振ノ御劔モ、念ナク燒失ケルガ、後日ニ振トモ、鞘モナクテ身バカリヲ燒跡ヨリ探シ出シ奉ルニ、兎ノ毛ノ先ニテツキタルホドノキズモナシ、不思議ト云ベシ、今ノ御劔コレナリト仰ラル、

參賀進獻

〔朝野群載文筆〕延曆寺奉賀儲君始立啓

延曆寺沙門延昌等謹啓、伏聞儲君殿下、○冷去月十三日、正太子之尊、就少陽之位、堪袍藍袖、懽々于

命祿樹一襲、

按壺切者、漢張良劒資仲長良公劒忠仁公忠仁公劒寬平昭宣公劒順榮延喜帝醍醐東宮之

時被進之、寬平五年四月二日立太海浦蒔繪有如龍摺具裝束青滑革延久海浦蒔繪野劒麒麟蝶

鈿文、人車後冷泉院康平二、正八皇居一條燒亡之時爲灰燼不披進東宮後三條院治曆四十二、十

一、爲灰燼、仍被鑄造抄或此時乃殘仍被造賴順榮承久亂逆之時、紛失之由有沙汰、寬元元仁治八、十

後深草院被新造壺切紛失被燒正嘉二、八、七龜山院自勝光明院寶藏出現亦久不紛失被燒

〔江談抄三〕劒 壺切

壺切者爲張良劒事

又被命云、壺切ハ昔名將劒也、張良劒云々、雄劒ト云僻事也云々、資仲所說也、

壺切事

劒ハ壺切、但壺切燒亡歟未詳、件劒ハ累代東宮渡物也、而後三條院東宮之時、二十三年之間、入道

殿藤原不令獻給云々、其故ハ、藤氏腹東宮之寶物ナレバ、何此東宮可令得給乎云々、仍後三條

院被仰之様、壺切我持無益也、更ニホシカラズト被仰ケリ、サテ遂ニ御即位ノ後、コソ被進ケレ、

是皆古今所傳談也云々、

〔續古事談王〕道后宮、東宮ノ御マモリニ、ツボキリト云大刀ハ、昭宣公藤原大刀也、延喜ノ御門

儲君ニオハシマシケルニ奉ラレタリケルヨリ傳ハリテ、代々ノ御マモリトナルナリ、後三條院

東宮ニ立給時、後冷泉院ヨリワタサレザリケリ、後冷泉院ウセ給テ後モトメイデハ、大二條殿藤原

關白ノ時、後三條院ニタマツラレニケリ、立坊ノ後二十餘年ワタサレデヤミニキ、今位ニ

ツキテ後、トメラレズトモアリナムト世ノ人申ケリ、後三條院オホセラレケル、神靈寶劒エウ

ナリシカドモ、二十餘年スギニキ、何カクルシカラントテトバマリニケリ、其後ホドナク二條内

次傳以下再拜畢昇殿 次五位藏人持參御膳具相小舍人立南門外令亮啓事之由 次亮還出召

勅使勅使著殿上 次亮取祿白大藏授勅使勅使賜之退出 此間小舍人計渡御膳具 次御劍

勅使捧御劍立南門外引小舍人令權亮啓事之由 次權亮還出召勅使 次勅使昇殿上沓脫參進御

殿簾前授御劍於權亮權亮取之持參夜御殿 次權亮取祿授勅使白大藏 次勅使降殿再拜退出

次諸卿參入立南門外令亮啓賀 次亮還出仰聞食之由 次諸卿進南庭再拜西上畢退列立南

門外 次諸卿更令權亮啓昇殿之事 次權亮還出復命 次諸卿再拜不進 次關白以下公卿著

殿上豫設饗於臺盤 次一獻大夫起座勸盃大進取瓶子 次二獻權大夫起座勸盃權大進取瓶子

次居汁物關白大臣前四位殿上人役之納言以下豫居之 次三獻權亮勸盃權少進取瓶子 次

賜祿亮取關白祿白大藏四位殿上人取大臣祿各白大五位殿上人取大納言以下參議以上祿各白

領一 次諸卿退出 次供御膳大夫勤仕陪膳 次神祇官人奉仕大殿祭少進引 若入夜時御階下

主殿署奉仕立明

〔西宮記臨時五〕東宮行啓

寬平九年正月御記曰大丞相奏云云昔臣父有名劍世傳斬壺但有二名田邑天皇德文喚伴劍寶陰

陽師即爲厭法埋云于時帝崩陰陽師逃亡是見鬼者也而不知劍所在彼陰陽師居神泉苑爰推量其

所堀竟援得此劍拔所著劍令覽者是也光彩電耀目驚霜及還納室云云令候東宮劍若是歟

〔禁秘御抄〕寶劍神靈

抑壺切代々東宮寶物也又時々在公家延喜以少將定方被渡東宮是始歟東宮略一重

〔禁秘御抄階梯〕寶劍神靈略中

延喜被渡東宮保明太子諡文醍醐天皇皇子西宮記延喜四年二月十九日召左大臣仰立太子

宣命旨云々使左近少將定方持切壺劍賜皇太子曰吾爲太子初天皇賜此劍故以賜之定方奏復

少納言退出召之、次外辨參列標下異位重行、西上北面、次內辨召宣命使賜宣命、次宣命使降立軒廊、

次內辨降殿就標、次宣命使就版、宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣再拜、次宣命使復本列、

次內辨以下退出、脫靴改淺履還著仗座、天皇入御近仗退出、次職事奉仕除目御裝束、次職事

來弼召大臣、次大臣著殿上、次出御書御座、關白著廂圓座、次職事奉仰出殿上召大臣、次

大臣參著御前圓座、次依天氣大臣召男共五位藏人豫參進候、賀子、大臣仰可持參硯續紙之

由五位藏人持參之、次大臣依天氣書坊官除目、次奏問御覽畢返給、次大臣取副除目於笏還

著仗座、次大臣以官人召外記、仰可持參硯之由、次外記持參硯置參議座上、次大臣召清書參

議於座前授除目、參議取副除目於笏復座、次參議候氣色執筆、傳一枚黃紙、兩大夫一枚折

學士亮一枚折、次參議清書畢持參大臣前、次大臣披見清書、次大臣召外記、外記持

參篋、次大臣納清書於篋給外記、外記持篋候小庭、次大臣進弓場外記、奏清書御覽畢返給、

次大臣還著陣、外記置篋退出、次大臣更令官人召外記六位外記候小庭、次大臣問式省候否、

外記申候由、大臣仰可召之由、外記稱唯退出、外記進小庭申式省候由、大臣仰可召之由、外

記稱唯退出、外記又進小庭申式省候之由、大臣仰可召之由、外記稱唯退出、次式部丞立小庭、

次大臣取副除目於笏召式部丞給之、丞取之立小庭、次大臣仰仰詞丞退出、次大臣令官人

傳仰可撤空宮硯等之由於外記、次外記參進撤之、此間傳以下進弓場奏事之由拜舞公卿一列、殿上人一

列、畢參本宮昭陽舍代、次職事來弼、仰可差進啓陣之由、次大臣令官人加敷弼、次大臣召外記、仰可

召近衛之由、次左右近衛次將來弼、次大臣仰可候啓陣之由、次將稱唯退出、次大臣引率諸卿

參本宮

本宮次第

先傳以下參入昭陽舍代、列立南門外西上北面、公卿一列、殿上人一、次亮離列啓事之由、還出仰聞食之由加列、

置之、次三獻^{勳孟權亮、逆}、次賜祿、諸卿取之退出、關白祿^{白大褂}、亮取之、大臣祿^{白大褂}、四

位殿上人取之、納言參議祿^{白大褂}、五位殿上人取之、次供御膳^{膳大}、

〔輪池叢書^{公事}〕立坊の式、後光嚴院より十五代中絶にて、天和三年に再興せさせ給ひしとぞ、中

略、天和三年立坊記に云、立坊ノ儀式御執行アルベキトノ御沙汰アリ、然レドモ、近世親王宣下

ノ儀ノミニテ事スミ、立坊ノ式ハ、崇光院ヨリ至、只今十四代、二百餘年餘絶タル事也、故文獻不

足、徵諸家共考ラルベキ記ナシ、伏見殿ニ、崇光院ノ御時立坊式并親王ノ御衣トテ、則崇光院御

著用所々蟲バミノ跡アルモノ、笄刀ハ不及申、及天皇元服ノ時、自南殿清涼殿へ入御ノ時、御著

用ノ空頂黑幘等ノ物マテ存ス、其上册命立坊記萬一錄ナド云ル舊記アリ、其ニ從ヒ考ラルハ

時ニ大禮ノ儀式粗備レリ、主上悉觀覽アリ、伏見殿へ大ニ御感ノ勅詔アリシト聞ユ、既ニシテ

陰陽家ニ命ジ玉ヒ、日時ノ勘文ヲ奉ベキトノ勅定ナリ、於茲天和三年春二月九日ニ極リス、

〔後矩記〕文化六年三月二十四日立太子^{嘉仁、仁孝御}

立太子次第

前一兩日、職事奉勅向大臣第、有召仰之事、當日早旦、諸司奉仕南殿御裝束、刻限大臣著仗座、諸

卿次第著座、次大臣令官人數弼、次大臣召大外記問諸司具否、次職事來弼、仰以惠仁親王立

皇太子、可令作宣命之由、次大臣召大内記仰宣命之趣、次内記持參宣命草^{宣入}、次大臣披見、内

記退入、次大臣令職事奏宣命草、職事還來、仰可令清書之由、次大臣召内記返給宣命草、仰可

令清書之由、内記退入、次内記持參清書大臣披見、次大臣進弓場^{内記持宣}、奏聞御覽畢返給、次

大臣還著陣、給宣命於内記、仰可候陣腋之由、次大臣差其人、告可爲宣命使之由、次諸卿著外辨

次内辨起座於陣後、著靴進立軒廊^{内記持宣}、天皇御南殿^{殿中}、近仗引陣^{不殿}、次内侍臨東檻

次内辨昇殿著兀子、次開門、次開司分著、次内辨召舍人、次少納言就版、次内辨召刀禰

臣前章^{同返}大臣披見了入宮。次大臣召外記給宮^{外記持宮}。次大臣進弓場代^{外記相從}奏聞御覽了返給。次大臣還著陣。外記置宮退。次大臣召外記。六位外記候小庭。次大臣問式省候否。外記申候由。大臣仰可召之由。外記稱唯退下。外記進小庭申式省候由。大臣仰可召由^{或今度無答}。外記退。外記又進小庭申式省候由^{如初}。大臣仰可召由。外記稱唯退。次式部丞立小庭。次大臣向奥座。取副除目於笏。召式部丞賜之。丞取之立小庭。次大臣仰仰詞。丞退出。次大臣令官人傳仰外記可撤視之由。外記參進。取宮至參議座。取重硯退下。此間傳大夫以下進弓場代付職事。奏事由。拜舞^{公卿一位一列。四拜舞了參本宮。}次職事就賦。仰可差進啓陣由。次大臣令官人加敷賦。次大臣召外記。仰可召近衛由。次左右近衛次將就賦。大臣仰可候啓陣之由。次將稱唯退出。次大臣召外記。仰可召兵衛由。次左右兵衛佐就賦。大臣仰啓陣^{其詞如左}。左右兵衛佐稱唯退出。次大臣以下參本宮。

本宮次第

傳以下參本宮。次五位藏人持參御膳具^{小舍人相從}。立中門外。以亮奏事由。次亮歸出召勅使。勅使著殿上。次亮取祿^{白大御一領}給勅使。勅使取之退出^{不拜}。此間小舍人計渡御膳具。次傳以下降立中門外^{北上面公卿一列。上人一列。}亮離列奏事由。歸出仰聞食之由退加列。次傳以下再拜。次再拜了昇殿。次御劔勅使^{近衛}立中門外^{小舍人相從}。令權亮奏事由。次勅使取御劔。昇自中門廊切妻。候便宜所。權亮出逢取之。置夜御殿。次勅使著殿上。權亮取祿授勅使^{白大御一領}。勅使降庭上再拜退出。近代立坊斷絕之後。立親王時。被渡護劔。仍被任其佳例。兼依被渡之今度不及此儀。次諸卿參本宮。列立中門外。令亮奏事由。次亮歸出仰聞食之由。次諸卿進立庭中再拜^{北面上}。再拜了退。次諸卿更令權亮奏事由。奏昇殿。壓再拜^{於中門外拜之}。次關白以下著殿上^{與相分端}。兼設臺盤居置。次一獻。瓶^{勸盃}。次二獻^{勸盃}。瓶^{勸盃}。次居汁物。關白大臣前居之。四位殿上人役之。納言以下前兼居。

仙洞、仍參萬里小路、殿申出也、特參內裏付、大納言典侍、進入、出自無明門代、於弓場給小舍人、康和後之於鬼體、召、後言朝臣、內侍、藏出之、賜後言朝臣、入赤地、錦袋、仍令持小舍人、參、次俊言朝臣參青闌、次予退出、于時及曉天、○簡

〔天和三年立太子次第〕前一兩日、職事奉勅向大臣亭、仰召仰事、大臣召辨大外記仰之、當日早旦、諸

司奉仕南殿御裝束、刻限大臣著仗座、直端諸卿次第著陣、次內辨令官人數賦、次內辨召大外

記問諸司具否、次職事來就賦、仰云以朝仁親王、○東可爲皇太子、令作宣命、次內辨召大內記、仰

宣命、其詞如職事次少內記持參宣命草、次內辨以職事奏聞、職事歸來、仰可令清書之由、次內辨

召內記、返給宣命草、仰可令清書之由、次內記進清書、次內辨就弓場代、內記相從奏聞、御覽畢、返給、

次內辨還著陣、賜宣命於內記、仰可候陣、內記特宣次內辨告宣命使於其人、次諸卿著外辨、次內辨

起座、於宣仁門外著靴、進立宜陽殿壇上、命相從次天皇御南殿、或不出御次近仗陣階下、不立次內

辨取副宣命於笏、進立軒廊、次內侍臨西檻、次內辨昇西階、著兀子、次開門、次聞司著座、次

內辨召舍人、二聲次少納言就版、次內辨宣刀禰召、少納言稱唯、出召之、次外辨參列、異位重

而北次內辨召宣命使、賜宣命、次宣命使下殿立軒廊、次內辨下殿向宣命使、揖、宣命使答揖、次

內辨就庭中標、次宣命使就版、宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣再拜、次宣命使退復本列、次

內辨以下退出、改淺沓、還著仗座、次入御、次職事奉仕、除目御裝束、如女叙位次職事就賦、召大臣、

大臣著殿上、次出御書御座、關白著扇圓座、次職事奉仰、出殿上告召之由、大臣參進著執筆

圓座、次依天氣、大臣召男共、五位藏人參進候、資子大臣仰祝結紙、五位藏人持參之、次大

臣依仰書宮司除目、書畢奏聞、即返給、次大臣取詢、除目於笏、出殿上召外記、宮入之、還著仗座、外

記置宮退下、次大臣召外記、仰可持參祝之由、外記持參祝、置參議座上、次大臣目清書參議、大

辨必參議進寄大臣前、位次參議、依氣色先著座上、重依目參進、次大臣授除目、不給宮參

議復座候、氣色、摺墨染筆書之、傳一枚、黃紙兩大夫一枚、折堺亮以下一枚、折堺次清書了、持參大

近代當日宣下也於此節
會者不候仰內辨例也
次左大臣召外記并頭辨定房朝臣仰之次定房朝臣著軾仰云以富仁親王

○花可爲皇太子令作宣命
次召大內記清範仰宣命趣次內記持參宣命草次內辨於陣以頭左中

辨奏聞之次返下之次同人奏清書
先例多就弓賜奏次令定宣命使次宸儀出御南殿涼殿類問左

掌燈關白殿令候御裾給頭辨候御草鞋內侍二人候劔璽子候脂燭次內侍置劔璽於大床子東頭內

侍候御帳東邊天皇御座定床中御座大此間近衛陣立或立胡床次將參細縫廣壽給御寶胡藤丸柄帶

次諸卿著外辨辨少納言同著之內辨著取副宣命於笏立軒廊西一間內侍臨東櫃之關白相具令出

給入予同令扶持之次內辨昇東階著兀子此間上官著階下座次開門次關司分著次內辨召舍人少

納言就版內辨宣刀禰召少納言稱唯退入外辨王卿立標重行內辨召宣命使藤中納言後光宣命

使參上給宣命立軒廊第一間次宣命使著版宣制兩段段々再拜次宣命使歸本列次公卿退出還著

陣座次宸儀還御本殿其儀如出御此間藏人奉仕御殿御裝束座二枚立切燈關次主上出御盡御座直

衣次關白殿令候御前圓座給次子參進承仰召執筆大臣白御清息云コナタヘ令參給へ次左大臣

昇自殿上小板敷著執筆座次執筆召男共子參進左府云硯紙次予入硯續紙於柳簀持參之次執

筆書之書畢入柳宮奏覽次執筆左大臣歸著陣令右宰相中將清書之黃紙一枚別紙折堺一枚附

大夫折堺一枚學士亮進關并
監署載一紙清書畢大臣奏聞次奏聞次返下先是執筆令書之間上卿有召仰參著

軾之處左府被申云啓陣宣下事可令遲々早可申讀且上卿申請有其例者次子起座歸著仰云任例

令著遣除目清書奏聞之後上卿召官人令敷加軾一枚次召外記召左少將敦氏右少將爲守朝臣左

兵衛佐資名右兵衛尉仰之次坊官傳大夫權大夫等就弓塙奏慶賀予申次也代左府氣色子又深氣

氣色次持筥出深氣色仰聞食由也左府居也各舞踏主上出御之後藏人兵部大輔經世相具御膳具參宮

小路殿御所勅使立中門外右大辨雅俊朝臣出逢歸出氣色次勅使著殿上座賜祿大衛退出云々勅

使事予雖有催申子細畢坊官奏慶之後左少將俊言朝臣爲勅使被獻御劔於青蘭
宣切代也此間辨靈御

徘徊同廊，卿相五六人，仰立此所，關白在饗座，又公卿等多群集東宮畫御座，太奇怪也，但舍屋狹少之間，更無其所，仍忌憚群居，歟坊官拜畢，左大臣以下，昇自中門外方，余問云：「可被立南庭拜哉？」如何？答云：「不可。」立云云。余率人々降自中門外方，列立中門下。東上北面此間垂簾，御座御簾光長次亮重衡朝臣進出，示氣色。參御所可昇自中門外，啓事由之後，就御座下也。退歸，降自中門內方，仰聞食之由，出中門了。次余已下列立南庭。東上北面，殿上再拜了，歸立中門外。中納言已下先以退立本所。余招光長問云：「被下昇殿令旨者，今間可奏慶若可經程者，暫可昇中門邊歟？」如何？答云：「早被下口申，次人只今所參也者，即權亮維盛朝臣出來示氣色，昇自中門外方，如初參進簾下，降自中門內方，仰聞食之由，歸出了。次余已下再拜。不建前庭，牛本所拜也。次余以下，昇自中門外，著殿上饗座，豫關白及傳兩大夫等在端座，余著奥座，自餘人々相分著座，參議不著座。如何？次一獻。大夫宗盛卿勳，關白及傳兩大夫兼雅卿，次答下，汁物兼居以下著座，例也歟。次三獻。勳，盛朝臣，瓶子藏人某，像光長相觸傳云：三獻，瓶子誰取笏退出，此後給祿人々退出云云。關白并坊官等留心歟。次御劔勅使頭中將定能朝臣參上云云。後聞坊官除目御前儀了，光雅相具御劔參東宮云云。又余退出禁中之後，左府被奏除目清書藏人大進基親奏之云云。又清書之間，被仰啓陣事云云。其後被下除目，次有坊官拜云云。此等事可尋記也。

宣命

大內記業實

現神止 大八洲所知 倭根子天皇 我詔旨真萬 勅命 平 親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止
宣隨法 爾可有支政止 爲氏言仁親 日乎 ○皇太子止定賜布，故此之狀 乎 悟氏仕奉禮詔天皇勅旨 乎
衆聞食止宣

治承二年十二月十五日

〔萬一記〕正安三年八月二十四日，參內依立太子節會也。早旦諸司奉仕南殿御裝束，秉燭以後人々參集。子刻左大臣已下著依座。今日冊太子事被宣下，可召仰諸司之由。年々例前一日下知，寬仁九年，前二日被宣下，延久元年，當日宣下。

還到中門下向西稱唯出自幔南方畢次余已下經幔南人中門離人作法不知進立標下余須練也更發之上已及晚陰仍不練各揖皆悉列畢之後于時日未入內辨召宣命使其詞不問以左兵衛督成範卿揖離列經大納言列後我列前東行經大納言列末北行入自軒廊東間到東階下南傍一揖即昇階經東南簀子於東第一間西柱下一揖範面尙西進指笏下如次第八於柱宣命押上扳笏右廻若左見及經本路於階下如本傍左廻一揖右廻立軒廊西間北邊南次內辨起座右廻降自東第二間東頭立兀子經簀子降自東階北邊有階下揖者隨時之問不見及後左府於神被語云件揖出立軒廊東間此軒廊二箇間也以西間疑西二間也抑與宣命使揖揖否不見及而令用斜進自南殿巽程練始南行經大臣列後大納言列前時不練立加余上揖次宣命使出自軒廊東間南行當中門北扉程乍南向一揖更折西行就宣命版位一揖次插笏披宣命捧自上更口下讀之押合在腋是宜制左大臣已下再拜次又宣制一段群臣再拜如北山記者可誦踏歎然而代々次宣命使拔笏揖左廻經尋常版東親王標西南行更西折復列次左大臣揖離列經余前不練退下余已下從之列前經我於中門邊改著淺沓各著仗座左余臣重自四方被書端此後可有坊官除目而光雅先來仰啓陳事其間不大臣召外記外記賴業參軾大臣余已下廻東方書與此後可有坊官除目而光雅先來仰啓陳事其間不大臣召外記外記賴業參軾大臣臣仰可召四府將佐之由賴業稱唯退下此後良久不參來大臣度々雖被尋催右近少將候御所方不告得云云大臣云然者只尉可參也云云然而猶以不見凡啓陳事奏下除目之後可被仰下候也而延久康和除目清書之間被仰之今除目以前被宣下太以早速大臣同被傾奇歟將佐猶以不參之間光雅就軾召大臣大臣參上口余頃之起座參御所方於鬼間方伺見除目儀先是隆季卿在此云於御殿西面有其儀御座也主上御引直衣關白被候御座北間簀子敷南左大臣候御座當間東同間北頭長押上立切燈臺舉燈次第作法如常歟余始終不臨見參朝餉方南女房等小時御前議了大臣赴陳人少々著陣或又立小板敷邊云云須引大臣相率可參本宮也然而先例不必然之上余有所存先以退出暫參女院使人見六波羅聞人々參集之由參東宮于時坊官拜之間也余經其前昇自中門北方

二棟廊東第一二三間三箇間南廣廂上板敷釣格子敷簀子拂高欄母屋中間立御帳爲東宮查御座寢殿不能立御帳之故也以東方廊爲中宮御所於寢殿者尤被用兩方御所云云是康和度高陽院以西對爲東宮御所以東小寢殿爲院御所大寢殿非兩御所之例云云彼者廣博家也是狹少之地也舍屋員少准據憚多之由時人所傾奇也但歲末月迫之時儀爲人有煩爲世多費令須儉約之議歟此條爲善政之由又以謳歌云云申刻著東帶時輪編綱紺地平績有文帶不付魚袋參內閣院著仗座先是左大臣座端已下公卿五六人在座又相次兩三人著座此後徒經時刻是聞白未被參之聞萬事遲忘云云酉一點關白參內即藏人右少辨光雅就執仰召仰事其詞不聞大臣召外記額人外記仰之外記稱唯退下次光雅又來仰宣命之趣以前可被問也但近代有此例之由大臣自被稱之可尋之次光雅持歸宣命草仰可清書之狀大臣召內記給之仰同旨須臾持參清書大臣付光雅奏聞如草御覽畢持歸大臣召內記給之被仰近可候之由次大臣被示可就外辨之由余起座於陣末馬道著靴左大臣已下人自東幔門進立第一兀子前揖之後著之頗引寄下襲屐素第一兀子前立床子置式篋無下式篋之儀爲第二次臣外辨一辨之故也左大將已下同著之次權右中辨親宗少納言仲家等著床子座觀宗親宗之末之如常仲家自外記也各一人褰翼角幔著後床子史生等不著座外辨座體此內裏今日始著殿上廊前立部外引廻幔於三方之仍東方有幔西端幔一帖順南方引去立廟立部西上南面立兀子床子等前立床子西一其式篋廟東幔南北行立辨少納言外記史床子等當立座次余召召使音二召使暫不稱唯仍人々傳示其後稱唯趨來平伏地余仰云外記召召使稱唯退去次在外辨座之外記經辨官座下進余前跪地余問云大舍人候哉外記申候之由又問曰刀禰列候哉外記申候由余仰曰候ハ外記稱唯復座次開門叩中門也候哉外記申候之由又問曰刀禰列候哉次召舍人歟大舍人稱唯此後少納言可進也而聞開門聲先以進頗早速也聞舍人稱唯之聲余已下起座出自幔門雁列中門外西上西面余起座之間左大將已下動座如常次少納言出自中門於幔門外南北行南端召之

被命次大夫敎通進御前承昇殿人公卿及侍臣下令旨了殿上公卿侍從於殿上邊令啓慶亮惟憲傳旨攝政奉可知行宮事之令旨被加啓其事相俱拜禮中諸卿著殿上撰前攝政出自御前著慶亮更以他臺盤饗續立著元臺盤依多公卿數三巡後給藏政同預攝及子刻退出今夜供御膳大夫敎通奉仕陪膳傳已下參內令奏慶云々

〔兵範記〕仁安元年九月六日丙午今日於一院白河殿上有立太子定攝政以下院司公卿十餘人參

入院宣之後別當內藏頭敎盛朝臣依攝政命覽日時勘文次被定雜事權中納言資長朝臣執筆次覽了奏聞云云今度事併被准行康和例十月三日癸酉東三條殿修造了被始立太子御裝束右大將

兵部卿以下院司皆參定宛屬行事奉仕雜役於此殿被始行御祈等云云十日庚辰有立太子事太

上天皇第二皇子憲仁高母故正五位下兵部權大輔平時信女御年六歲去年十二月爲親王今於

東三條第有其儀自東山七條未御所行啓彼亭于時上皇御同宿御幸行啓可在同時云云中次攝

政以下更參內右府著仗座先被奏宣命草次清書次節會始右府爲內辨右將軍著外辨中次於攝

政御直廬除攝政御坐廬外中次宮司奏慶賀次奉參春宮坊云々藏人左少辨右衛門權佐長方

爲御膳具勅使藏人頭右中將實家朝臣爲臺臺下謹劔勅使供臺膳大夫卿權亮朝臣爲朝夕陪

膳次名謁藏人平時家問之云云中十一日辛巳晚頭公卿參集東三條殿有盃酌事初藏亮敎盛

朝臣藏千大進知盛二獻權亮實守朝臣藏千大三獻右少將通家朝臣藏千大十二日壬午東三條儀公

卿盃酌如昨日

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰此日有冊命立太子事奉行職事藏人右少辨光雅院方降季卿辨

內藏頭經房朝臣右中本宮中宮大夫時忠左衛門權佐光長等也又關白殊被與其事其外前太政大

臣忠雅公萬事口入云云法皇今旦朝渡御六波羅第公卿直衣殿上人衣冠云云豫於法皇三條烏丸

宮可有立坊依康和仁安例當日早且可有晴御幸之由風聞而尙於六波羅可被行之由禪門計申仍

歟、今朝有消息、然而依不知案內不報參入一定耳、卿相屬目、仍退出了、

義忠進宣命清書以資業被覽、攝政此間余出外辨、諸卿相從左兵衛陣官等居胡床、令仰不可立胡床

之由、即撤却了、右兵衛左右衛門陣不候、仰事由應經參列、召外記國儀、仰式部可列刀禰之由、小時參

列、刀禰不列、令催仰、次兵衛彈正參列、召國儀問兵部彈正參入之例、申云、天曆四年式部兵部彈正參

列者、後日見彼年外記日記云、有式部彈正、但天慶有二人、召國儀問其由、申云、依多年、小時開門

召舍人、舍人稱唯、少納言良經參進、歸出後人、慢後息氣、更進立門前、召之、須入立當門之慢後、人列先

是諸卿列立、右兵衛陣頭次第參入各就標、諸大大只三人、四位二人、立定了、內辨大臣召宣命使、中納

言行成、其詞云、中乃物申官乃權乃藤、稱唯、離列參上、自西階立內辨後、給宣命退下立西軒廊砌、內辨

退下、加列宣命使就版、辨命時中二點、宣制一段、群臣再拜、次又再拜、再拜是疑慮、編可依、式文之由、一

定云、宣命使右廻經大臣上頭復列、次大臣已下退出復仗座、依攝政御消息、右大臣、右大辨朝經參入

彼直廡、有坊官監署除目、除目在裏、還陣座、大臣下、除目、符令右大辨清書便見、下書太政官謹奏清書時注

件五箇字、密々余示傍座一兩云、可然事也、問右大辨云、依攝政命、可書之、由此事所存也、而攝錄命何

爲者、前攝政除目時、書太政官謹奏、依不被知、先傳歟、聞彼教所命也、大辨清書、別紙等、抑見天曆四年

故殿御記坊官監署除目所被承行也、而依給除目、後召大納言顯忠、被仰傳事、彼時與此時相異、彼時

例示大臣有驚氣清書、令資業覽、攝政被返之、次有可奉遣近衛陣於東宮之命、先召式部給下名、爲字

等也、介太、敷膝突二枚、下皆召著左少將誠任右少將兼房仰之、其訓兩將一度稱唯、右大臣以下參東宮、

傳并宮司等先令啓事、由致拜禮、

次攝政右大臣已下參入、攝政以權亮公成令啓事由、仰聞食由、攝政云、可下御簾、乎否、諸卿云、今日下

御簾、可無使歟、攝政云、不可下御簾者、可出御御座、而不儲裝重、之如何、卿相云、雖不出御、有何事哉、

仍不出御、件座、攝政內大臣右大臣已下進御前拜禮、攝政云、可著靴、彼是云、當時立給東宮之日著

日立皇太子詔曰天皇詔旨勅命^平親王諸王諸臣百官人等天下公民衆開食^止宣隨法^爾可有^岐政^天道康親王^平立而皇太子定賜^布故此之狀悟^天百官人等仕奉^止詔天皇勅旨^平衆聞食宣以右

大臣從二位源朝臣常爲皇太子傅左近衛大將如故參議從四位下安倍朝臣安仁爲春宮大夫從五位上藤原朝臣諸成爲亮正五位下小野朝臣爲學士是日解誓衛內裏及固兵庫之陣遣中使告於

柏原山陵曰天皇^我詔旨^爾坐掛畏^岐柏原乃山陵^爾申之^止賜^倍申久頃者東宮帶刀舍人伴建岑與橘

逸勢惡心^平挾懷^天國家^平傾止謀利掛畏^支山陵乃厚顧^爾依^天其事發覺^奴事迹^平搜^爾綠皇太子

貞^〇恒因茲皇太子位^平停退計畢^奴食國乃隨法^爾可有^岐政^天之道康親王^平立^天皇太子止定賜^不

此狀^平參議從三位兼越中守朝野宿禰鹿取散位頭正五位下楠野王等^平差使^天恐^美恐^美申賜^止久

申

〔三代實錄^{十六}〕貞觀十一年二月己丑朔天皇臨軒立^成眞明親王^〇賜^爲皇太子公卿已下五位已上於

庭諸司六位已下於承明門外拜受詔命策文曰天皇^我詔旨勅命^平親王諸臣百官人等天下公民衆

開食宣隨法^爾可有^岐政^天之眞明親王^平立而皇太子止定賜^布故此之狀悟^天百官人等仕奉^止詔

天皇勅旨^平衆聞食宣是日以大納言正三位藤原朝臣氏宗爲兼春宮傅文章博士從五位下橘朝臣

廣相爲學士參議民部卿正四位下兼行右衛門督伊豫守南淵朝臣年名爲春宮大夫刑部少輔從五

位下藤原朝臣門宗爲亮散位從五位下藤原朝臣清經爲大進

〔小右記〕寬仁元年八月九日甲戌今日皇太子^〇後立給日而無外記告問遣時刻于吉平朝臣注送云

申二點仍未刻許參入大內先左大臣參入在仗座已次卿相在皇太后宮御方則是東宮可座之所北

對東舍也藏人右小辨資業傳仰云皇太弟立宣命趣於右大臣^{宣命}大臣仰大內記義忠則進草^{有草}

依^{攝政}命^{見了}以資業被覽攝政^{〇藤原}被示可清書之由大臣給內記^{〇中}參議通任者春宮大夫也

今日參入極無心之由彼是云々望新宮大夫云々舊宮被聞前攝政云々無便事云々特其事所參入

或說今度不插書林云、天慶七年立太子時、直幹奉宣命、內辨取副宣命於笏、軒廊西一間、時刈天於內、辨九條、相府令持宣命、直幹捧符、具見李部王記云、皇御南殿、內侍臨檻、內辨即著堂上几子、此間上官內記著階下座、

〔日本書紀十七〕七年十二月戊子、詔曰、朕承天緒、獲保宗廟、兢兢業業、聞者天下安靜、海內清平、屢致豐年、頻使饒國、懿哉摩呂古、安示朕心於八方、盛哉勾大兄、安光吾風於萬國、日本皇孫、名擅天下、秋

津赫赫、譽重王畿、所寶惟賢、爲善最樂、聖化憑茲、遠扇玄功、藉此長懸、寔汝之力、宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

〔續日本紀十〕神龜四年十一月己亥、詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、

〔續日本後紀十二〕承和九年八月壬戌、朔左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位源朝臣常已下十二人上表言、周固本枝、定資重離之業、漢啓磐石、必建少陽之宮、是以三善守器、承祀之則克隆、四學

宜風、貞國之規方遠、頃者吳穹降禍、太上皇帝嵯峨昇遐、山陵未乾、逆臣謀亂、推究由緒、事屬儲闈、皆賴聖明、並羅憲網、方今上嗣佇賢、前星虛位、其皇太子者、國之元基、不可暫曠、監撫惟重、審論所歸、伏望具

舉、章章早立、明兩臣等不勝區區之至、謹上表以聞、癸亥、詔曰、適者遺家不造、慘結婉情、劍舄纒存、橋山之慕、彌切天地、改色、諒闇之居、弗寧、而凶邪扇惑、將行不軌、宗社降禍、覺靈伏辜、事屬震宮、洊雷失耀、

今群公以斷金之誠、致立嗣之請、趣由憲章、非可謙拒、然而周建季歷、木運于斯克昌、漢黜臨江、炎政藉之、延祚朕之菲薄、無子賢明、宜擇神授之英、徵立玄鑒之昭、遠展也大、成則所望矣、乙丑、公卿重上表、

言、應任天下之望、早立儲貳之狀、因循故事、輕用上聞、陛下遠布謙光、未定所請、特降明詔、更使諮資、臣等道謝、博聞職忝、端揆何能對揚、尋求帝系、匡贊皇圖、但周家季歷、漢室臨江、事據權時、非必通典、其樹

嫡以長、曠古之徵、猷立子以尊、先王之茂實也、今者皇子道康、親王文系當正統、性在溫恭、率土宅心、群后歸美、豈棄震方之元長、擇藩屏之諸王、伏願准的舊儀、立爲太子、不勝丹款之至、謹重上表以聞、是

以下部兼資宜補同宮主

已上仰上卿後日大夫同辦兼司人官外記○中

春宮坊本封外宜令奉苑一千戶

御厨諸國御厨事也內覽奏開引

同衛士仕丁任例宜分奉充

已上仰上卿大夫同

御乳母加階宣下宣下調東宮御乳母薛原

立太子由山陵使發遣任先例兼

日次上卿大夫辦官外記陰陽寮仰詞皇太子立給由可被旨申山陵事令

當日發遣上卿大夫宰相內記皆文章官外記使人參議五人次官五

〔柱史抄〕立太子由被申山陵事

上卿參仗座召內記大內記內記著賦仰云立太子事被申山陵宣命可草進者即成草持參內覽內記

持參之但可隨上卿命或內覽奉上卿上卿令持內記奏覽奏覽畢還著仗座令清書以六位內記

等令書之清書畢持參覽上卿奏下之後分賜使參議等了

立太子事

天皇讓位之時被裁加宣命是恒例也臨時立太子之時有節會其儀同立后節會刻限內辨參陣先是式部省入自日華門立親王以下標中務省入自同門執版置南殿前庭大臣召官人令敷賦職事奉勅仰可有立太子之由大臣召外記問緣事諸司參否次召內記仰以某親王可爲皇太子之宣命可草進可用何年例者內記微音稱唯退出持參宣命入大臣奏覽之後仰清書事內記即清書持參奏下如先大臣暫預宣命於內記群卿起座著外辨座內辨於宣仁門外著靴壓幔門入軒廊二間召宣命如元

略如常不必差脂燭名謂東帶小舍人主殿今良○旁書殿上不與內裏相兼殿上簡二界書之內付五位

下薦五位六位付下界亮學士不付簡受領付裏○本有改

〔夕拜備急至要抄〕立太子

日次 參陣公卿大臣已下兼申御點近衛次將右辨 少納言 內記宣命 關司 內侍扶持

大將 無御執 式宮 召內侍持或職事 南殿御裝束 官外記 奉行六位出納小舍人

除目御裝束職事祿如叙位奉行 出陣召大臣職事 除目 執筆大臣 祝 續紙二卷已上登柳

申文盛祝蓋圖一束被宣諸 清書上卿於陣可 參議

召仰當日職事就仰云今日可有立太 仰詞以兼親王可爲皇太子依其年例可令作進宣命

宣 仰啓陣建保除日清書之間仰云左右近衛各一人左右兵衛

承勅書出殿上人等給大夫四人姓名非祿人二字祿人內覽奏聞於鬼聞書之高檀紙折紙也

首書殿上人幼主時於本宮上皇被仰大夫近例也

相具御調度職事參本宮事小舍人馬廐從

御臺二脚加蓋 御膳具一具 銀飯碗一口在蓋 馬頭盤一枚

御湯器一口在蓋 御汁物器二口 御湯盞一口 四種四口

七二枚銀 窪坏二口 御盤二枚 盤六枚平

御箸二雙銀 已上入朱漆幸櫛在兩面覆

可被奉御劔密切 勅使頭中時或 內侍司差進奉行職事兼 采女差文六人奉行職事兼仰 主殿

司仰祿人 小舍人同 宮主神祇官金召差文

春宮坊頓給料任例可奉宛

同內膳屋令修理職造進

南西二面几帳立御座

南第二三間母屋東邊第五間三尺几帳直立之、又頗間夜御所南戶東隅、御座引上置於御座上、御座入水、燒座當御前敷管圍座、一棧若有關白者、又敷一棧

柱下、次令藏人頭若五位藏人召上卿

調曰、朝白乃御消息、此方令參給、上依御氣色召男共、

視帳紙持參

大臣依仰書宮司除目事訖退下於陣

御前、御座、依重召經、寶子數著、御前、令參議清書、黃紙一枚、並用折、一枚、非奏聞

如恒、次召式省給之

先召外記間、式乃會、候上、外記、申、並立小庭、上卿目之、承著、試上卿給除目、

承取之後立小庭上卿仰曰

々々、次博士已下於弓場殿奏慶、公卿一列、四位五位一列、以藏人頭若、

公卿以此間被定殿上人藏人四位五位藏人四

下再拜、此間被定殿上人藏人四位五位藏人四、主上令書出給、大夫於宮令宣下之、次被仰啓陣可差

遣由或進被仰之

大臣申請、啓、傳、候、曰、各帶劔執笏參入、其後參本宮、卷纓帶壺胡錄警衛者、不、兵、重、先

次召左右兵衛佐仰之

啓、傳、候、曰、各帶劔執笏參入、其後參本宮、卷纓帶壺胡錄警衛者、不、兵、重、先

是本府進差文將佐以下府生以上各一人近衛兵衛各十人

在此中、於本宮各有啓陣、次上卿仰供

奉諸司事次公卿以下參本宮

令、候、之、進、御、前、再、拜、淺、履、此、間、被、仰、昇、殿、人、々、已、下、公、卿、以、下、令、啓、昇

殿慶、再拜了

候、所、著、殿、上、座、被、奉、護、身、劔、對、面、日、被、奉、以、頭、中、將、兼、亮、次、將、遣、之、自、持、之、參、本、宮、立

便所、令亮奏亮歸來取之置御所次亮取祿給勅使

先、召、上、之、或、數、座、祿、代、々、不、同、或、祿、二、領、或、祿、下、庭

再拜歸參復命次差殿上饗

殿、上、人、役、送、之、執、柄、三、巡、後、給、祿、殿、上、人、取、之、大、臣、白、大、群、二、領、納、言、以、居

常臺盤或公卿退後定藏人所雜色以下

或、兩、三、人、啓、時、其、間、云、姓、名、時、氏、供、御、膳、殿、上、蓋、不、加、蓋、用、采、女

六人供奉之

先、是、本、同、朝、大、夫、多、大、納、言、奉、供、夕、亮、書、陪、膳、記、或、幼、宮、時、以、女、房、爲、陪、膳、上、女、藏、人、四、人、以、上、傳

供之藏人一人居土器二口於御簪持參即受御三把奉帳中阿末加津云

但、有、常、阿、末、加、津、云、云、但、有、常、阿、末、加、津、土、器、撤、

其後供比々奈內侍司進差文女史一人御髮上一人番所二人水取二人墨摺一人主殿女孺三人

六、或、

人厨女孺一人洗二人長女二人御側人二人油守二人掃部女孺六人采女進差文神祇官奉仕大殿

祭、人、引、導、掃、部、儀、供、本、官、中、史、下、左、先、御、殿、御、膳、宿、上、下、御、厨、子、所、御、井、等、也、給、祿、六、位、匹、絹、付、殿

上并女房及藏人所簡召能書者於所令書之其人々名簿或新書之啓之被下後付之次名謁

問、之、大

陽殿西廂板敷水明門東西內掖各鋪簾簾上各置草蓆北面中務錄入自日華門尋常版位北去一

許丈置宣命版位內裏式非前例如之式部丞錄奉史生省掌入從永安門立版南七尺東折

南立大臣版次大納言次中納言版以七尺為間東去八尺南折二尺立三參議次非參議版南七尺東折

位版次五尺次五尺版次五尺以上八尺版次五尺間版次五尺等版次五尺南折三丈五尺版次五尺立王版次五尺

床子版次五尺其南壇下庭中立白木床子二脚版次五尺東立二脚版次五尺並七尺為間版次五尺上卿座前立白

木床子一脚版次五尺今日不立宣陽殿西廂內辨兀子版次五尺但九條殿版次五尺今日不立宣陽殿西廂內辨兀子版次五尺

前一日大臣奉仰仰外記令誠所司版次五尺仰明日可令集會版次五尺又召內記令作宣命版次五尺以上近

代多當日早旦行之五位藏人持參御物版次五尺御帳二具版次五尺先是以吉時立御臺盤二脚版次五尺並御器一具版次五尺

仰內辨之後可從事歟次奏清書版次五尺持內記令候次上卿於陣座豫定宣命使版次五尺例不奏之次主上御南殿版次五尺

相從版次五尺出御或不出御左右近陣階下版次五尺次將以下立陣也版次五尺建康室胡壽輪御著版次五尺但諸衛皆如王

卿出外辨版次五尺式版次五尺召外記問諸司版次五尺大舍人候候刀綱列候候外記問諸司版次五尺大舍人候候刀綱列候候外記問諸司

軒廊版次五尺內侍臨檻內辨參上著南廂兀子版次五尺命於笏次開門版次五尺延建承明兩門版次五尺上立太子御記版次五尺開

司著座版次五尺依例論著大臣召舍人版次五尺自大舍人四人稱唯少版次五尺言著版版次五尺入自承明大臣宣刀綱召版次五尺世少納言稱

唯出召之外辨王卿參入立版次五尺標版次五尺與位重行北面西上大臣與大臣版次五尺大臣召中納言一人版次五尺微召之宣命

使參上版次五尺出白列前入自軒廊東二間於東階下揖經大臣給宣命版次五尺宣命使進警折年立給之退下於東階

有揖版次五尺或右迴年宣命使立軒廊西第一間北邊版次五尺成立二間同四年任大臣日推信立一開九師氏版次五尺大臣退

下版次五尺左迴於東階下左迴揖就庭中版版次五尺自東二間出大臣宣命使著版版次五尺自東二間出大臣宣命使著版

一段版次五尺再拜又一段訖版次五尺臣再拜北山抄日拜舞然而年例多再拜也依無別宣命版次五尺宣命使經列西

復本位版次五尺有揖折王卿退出自本路版次五尺此間差饌版次五尺不見主上還御次清涼殿裝束版次五尺如女以盡御座

帝王部 二 十一 皇太子 上

四 五 三

大夫從本列東度昇自東階就大臣兀子後授宣命文受之暫立軒廊之邊大臣起座下自東階就本位承詔者進就版宣制曰現神止大八州所知須倭根子天皇我詔旨真勅命親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣群官稱唯再拜訖更宣云隨法仁可有岐政止爲氏某乎立氏皇太子止定賜布故此狀乎悟氏仕奉禮止詔布天皇勅命衆聞食止宣王公共稱唯再拜不稱立者宣制者復本所次皇太子兩段再拜舞踏退出華門自五位已上退出宸儀還御本殿大臣依召參上御前有除日事被拜除傳學士奉宮坊官屬以上被官諸司等事畢退下又參射殿奏清書藏人昇殿者陣頭大夫侍者等下

【江家次第十七】立太子事

前一日令主殿寮掃除南殿仰左右衛門府令敷砂左衛門從長樂門右衛門從永安撤去東炬火屋置殿門北掖主上南殿御格子掃供奉女洒掃殿上主殿仕置殿東廂布障子二枚於北廂掃部官人奉史生御儀西立宣五尺漢書御屏風南向北行傍御簾內母屋柱南面四間東西行立漢書御屏風南向北行同立御屏風東其內四間敷滿廣筵并細貫簾額間設御座敷簾二色綾簾代立座時大床子一雙鋪高麗褥御帳乾角傍絹御障子立廻五尺大宋御屏風二帖南其內敷細貫簾二枚立赤漆小倚子爲御裝物所東第三間東柱西北角去二許尺立兀子一脚爲內排座近例第二間西柱邊立之西宮北山抄并近代記多如此但新儀式立第三間柱東下即當簾前云云式宜陽殿西廂板敷南西二面張斑幔從右近陣東南角滿東方北行屬射立榜柱東行免宜陽殿西廂板敷南西二面張斑幔從右近陣東南角滿東方北行屬射場西南角柱更東折至于廊東第二間西柱張同幔南角以東至北廊第二間西柱結簾又從月華門內南掖廊上南行張同幔一條又春興殿南廊西面結簾貫張同幔又自安福殿南行更東折從廊屋東北角南折至于永安門西掖張同幔承明建禮兩門前差南去東西行張斑幔各二帖移鈴印辛櫓於宣

二人上表言周固本枝定資重雖之業漢啓磐石必建少陽之宮略○中頃者吳穹降禍太上皇帝略○經昇遐山陵未乾逆臣謀亂推究由緒事屬儲闕皆賴聖明並羅憲綱方今上嗣佇賢前星虛位其皇太子者國之元基不可暫曠監撫惟重審論所歸伏望具舉彝章早立明兩略○下

〔朝野群載文華〕延曆寺奉賀儲君始立啓

延曆寺沙門延昌等謹啓伏聞儲君殿下略○冷去月廿三日正太子之尊就少陽之位略○中

天曆四年八月一日

〔北史九十四倭王姓阿每字多利思比孤略○中名太子爲利歌彌多弗利

〔北史國語考〕名太子爲利歌彌多弗利略○上の利略○中は和按ニワカミトホリと訓べし中昔の假字書どもにわかむどほりと見えたるは此語を訛れるなり略○中此語の本意をいまだ詳に明したる説なし故つらく積ふるに疑ふらくは稚子御統リゴトの義なるべし

立太子式

〔儀式五〕立太子儀

前一日太政官召式部省仰可令會集刀禰之狀當日早旦式部丞錄率史生省掌等於建禮門前庭左右相分列立刀禰爰中務丞執版參入置紫宸殿前庭退出訖所司開閣門親王以下應召左右相分參五位以上在承明門內五位以下在同門外錄稱容止如常立定宣命大夫進就版宣制曰天皇詔旨勅命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣隨法略可有後政止志某親王立而皇太子止定賜布故此之狀悟天百官人等仕奉止詔天皇勅命乎衆聞食宣訖宣命大夫復本位皇太子進拜舞而退次親王以下退出

〔新儀式五時下〕冊命皇太子事

冊命皇太子或依公卿論奏或有勅答承和仁壽延喜例也或不待上表隨法冊命也前一日大臣奉勅行事並當日早旦所司裝束南殿近仗陣階下開門親王以下五位以上依喚參入列立之儀等皆同冊命皇后之儀但親王已下列立之後應被立者入自日華門立親王前若幼稚不闕此儀雖長大不必參入矣大臣喚宣命大夫中納言

答に、東宮とは、皇太子の御身をさすといふはさる事ながら、いか成故にさはいふといはぬは答のかひなし、先此御事をいと古へは日嗣の皇子命と申し、又某の皇子命とのみも申せし也、さて後に字にては、皇太子儲君など書たり、令など行はるゝはさより、その皇太子の御在所を東宮とかき、大夫以下官人の奉仕所を春宮と書つたり、それより後々に東宮と書は即皇太子の御身をさす事となりぬ、又此答に、春宮は坊に奉仕傳大夫云云と云は誤れり、大夫以下は春宮に奉仕れり、傳と學士は輔導奉説の職故に、即太子の御在所に侍りて春宮坊にはるず、持統紀より以下の書に、皆東宮傳、東宮學士と有也、

天智紀に、太子をさして東宮と書しことあれど、是は奈良の朝にて書し物のみ、

〔下學集上〕儲君

〔源氏物語桐壺〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにてよとおもく、うたがひなきまうけのさみど世にもてかしづき聞ゆれど、此御にはひにはならび給ふべくもあらざりければ、○下

〔伊呂波字類抄〕坊東宮、

〔源氏物語桐壺〕坊にもようせずはこのみこのゐ給ふべきなめりと、一のみこの女御はおぼしうたがへり、

〔拾芥抄〕中本春宮春宮、儲武閑、青宮、昭陽、少陽、龍機、前星、諸君、明兩、閑

〔續日本紀〕二十四天平寶字六年十月己未、夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨、○中聖武皇帝儲武之

日、納夫人、生安積親王、

〔續日本後紀〕仁明天長十年三月戊子朔、後太上天皇○淳和復奉書曰、○中今恒貞漢庄難擬、周儲不追、

○中恐龍樓之守愛墜、鮑俎之識有聞、○下

〔續日本後紀〕仁明承和九年八月壬戌、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位源朝臣常已下十

ひとつだにあることなし、つら／＼思遣り奉るに、中昔の書どもに、皇子の中に、皇太子に立て給ふべきまだがたにかしづき給ふを、坊がねと稱せるに似たるを、古は其崇稱を儲て、然は大兄と稱せる例のありしにこそト云へり、以テ參考ニ供ス、

〔日本書紀持統三〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨、

〔萬葉集二〕挽歌日並○並下皇太子尊○草壁殯宮之時、柿本人麻呂作歌、

天地之初時之○中吾王、皇子之命、乃天下所知食世者○下

〔萬葉集二〕挽歌高市皇子尊、城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌○歌

〔續日本紀元六〕和銅六年五月甲戌、讃岐守正五位下大伴宿禰道足等言○中故皇子命宮○草壁檢括

飼丁之便、誤認亂等爲飼丁焉○下

○按ズルニ、皇子尊モ亦大兄ト同ジク、古ヘ皇太子ノ崇稱ナリシガ如シ、

〔選歩色葉集一〕東宮、春宮、皇太子事

〔毛詩註疏三〕頌人齊侯之子、衛侯之妻、東宮之妹、邢侯之姨、譚公維私傳東宮齊太子也正義曰太子居東宮因以東宮表太子

〔八雲御抄三〕異名春宮、はるのみや、あをき宮、みこのみや、さうけのみや

〔大唐皇帝述三藏聖教序記〕皇帝在春宮、日製此文、龍朔三年歲次癸亥六月癸未朔二十三日乙

巳建、大唐緒遂良書在同州梓廐、

〔新野問答〕春宮并東宮

東宮春宮此二品いかゞ覺悟候哉、答○野宮東宮は、皇太子の御身の上を書申候時、東宮と書

申候、春宮は、坊に奉仕傳大夫亮進役の官の名を書申候、ひつさやう二字共に同心にて候、東春

二字ども、はじめ又は一の心にて候歌には春の宮とよみ申候、

〔雜問答考〕東宮春宮と書耳

御子に用ひたるなり、さるは遂に御位を嗣坐が、其御子等の中にて、元來も然定置賜へる物なれば、彼皇太子よく當りたれども、彼は元より一人に限りて定めたる、稱此は一柱には限らざる御稱なるは同じからず、異なることあり、さればひたふるに太子の字には泥むべからず、上代のさまをよく考ふべきなり、

〔古事記〕上、豐玉毘賣命○中、白其父曰、吾門有麗人、爾海神自出見云、此人者、天津日高之御子、虛空津日高矣、

〔古事記傳〕十七、虛空津日高、谷川氏、天津日高は天子の稱、虛空津日高は太子の稱なりと云り、信に然るべし、其故は、先通々藝命、穗々手見命、藺葦草葦不合命、みな天津日高と申せる、これ天津日嗣所知看せるうへの大御稱なり、かくて此は穗々手見命いまだ皇太子にて坐はどなるが故に、天津日高之御子と申せり、さて其を虛空津日高と稱す所以は、虛空は天と地との中間なる故に、天津日高に亞で尊み申す御稱なるべし、

〔日本書紀〕十七、七年十二月戊子、詔曰、盛哉、勾大兄○中、宜處東宮、助朕施仁、翼吾補嗣、

〔日本書紀〕十九、二年三月、納五妃○中、蘇我大臣稻目宿禰女曰、堅鹽媛、生七男六女、其一曰、大兄皇子、

是爲橘豐日尊○中、用

〔日本書紀〕二十四、二年十一月丙子朔○中、於是山背大兄王等、自山還入斑鳩、

〔日本書紀〕二十五、天豐財重日足姬天皇四年六月庚戌○中、思欲傳位於中大兄○中、而詔曰云云、

○按ズルニ、大兄ヲ以テ直ニ皇太子ノ稱トハ定メ難ケレドモ、古ヘ太子トナリテ皇位ヲ繼承セラル、皇子ニハ、多ク此稱アリシガ如シ、長等山風附鎌、大兄名稱考ノ條ニモ、本語ハオホヒ子なるが音の約りてオヒ子とも申し、又オホ子ともかよはして申し奉りたりしにて、書紀に十八どころに、同じ訓ぎを註して、なべて近世によみなれたるがごとく、オホエとよめるは

二等ナリトス、又親王宣下ト云フコト始マリテ後、親王トナリテ即日太子トナリ給ヒシハ
二條天皇是ナリ、其他前後兩朝、又ハ數朝ノ間太子トナリ給ヒシハ、天智天皇、聖武天皇、及ビ
草壁太子ニシテ、先朝ニ儲君トナリ、後朝ニ太子トナリ給ヒシハ、後桃園天皇ナリ、又光仁天
皇ノ、先帝崩後太子トナリ給ヒシ如キハ、極メテ異例ナリトス、

皇太子ヲ立テ給フニ當リ、時ニ爭ヒナキコト能ハズ、清和天皇立太子ノ時、惟喬親王ノ爭ハ
レシガ如キ、圓融天皇立太子ノ時、爲平親王ノ爭ハレシガ如キ是ナリ、之ニ反シテ淳和天皇
ノ皇子恒世親王ノ如キハ、上表シテ太子タルヲ固辭セラレシモノナリ、又太子ニシテ儲位
ヲ辭シ給ヒシハ、小一條院ニシテ、太子ニシテ帝位ニ即クヲ辭シ給ヒシハ、菟道稚郎子、及ビ
仁賢天皇、天武天皇等トス、又太子ニシテ自ラ敗亡シ給ヒシアリ、木梨輕皇子是ナリ、其他廢
太子アリ、孝謙天皇ノ太子道祖王ハ、淫縱ナリシカバ廢セラレテ諸王トナリ、光仁天皇ノ太
子他戶親王ハ、其母井上内親王ノ大逆ニ坐シテ庶人トセラレ、桓武天皇ノ太子早良親王ハ、
專恣ニシテ幽流セラレ、嵯峨天皇ノ太子高岳親王ハ、御父平城天皇ノ亂ニ坐シテ廢セラレ
シカバ、出家シテ入唐シ、仁明天皇ノ太子恒貞親王ハ、伴健岑等ノ亂ニ坐シテ廢セラレ、其他
光嚴天皇ノ太子康仁親王ハ、後醍醐天皇ニ廢セラレ、後醍醐天皇ノ太子成良親王ハ、光明天
皇ニ廢セラレ、崇光天皇ノ太弟直仁親王ハ、後村上天皇ニ廢セラレ給ヒシガ如キ是ナリ、凡
皇太子ノ待遇ニツキテハ東宮坊ノ事ハ官位部東宮職ニ、供給ノ事ハ封祿部ニ詳ナリ、
皇太子ノ御寢ニ侍スルモノニハ、妃アリ、女御アリ、更衣、御息所アリ、並ニ此ニ附載ス、

名稱

〔日本書紀^三神武〕天皇生而明達、意確如也、年十五、立爲太子、

〔日本書紀^三神武〕四十有二年正月甲寅、立皇子神淳名川耳尊爲皇太子、

〔古事記傳^{二十六}〕漢國にて、王の位を嗣ぐべく定めたる子を皇太子と云、故に其字を取て、日嗣

トヲ處理セシム、此等ノ制、後世悉クハ行ハレザリシカドモ、ナホ其待遇ハ自餘ノ親王皇子ニ超出シ、而シテ其妃ハ、中世以後多クハ女御、又ハ御息所ト稱セリ、

上古、太子ヲ立ツルコト、必ズシモ一人ニ限ラザリシガ、其後定メテ一人トナシタリ、此等ノ太子ハ、自皇子ヲ立ツルヲ例トセシカドモ、種々ノ事情ニヨリテ、必ズシモ然ラザルアリテ、或ハ皇女ヲ太子トシ給ヒシアリ、聖武天皇ノ孝謙天皇ニ於ケルガ如キ是ナリ、皇孫ヲ太子トシ給ヒシアリ、持統天皇ノ文武天皇ニ於ケル、元明天皇ノ聖武天皇ニ於ケル、醍醐天皇ノ慶賴王ニ於ケルガ如キ是ナリ、皇兄ヲ太子トシ給ヒシハ、顯宗天皇ノ御兄仁賢天皇ヲ皇太子トシ給ヒシノミナレドモ、皇弟ヲ太子又ハ太弟トシ給ヒシハ、履中、天智以下、後光明、後西院天皇等極メテ多シ、或ハ從兄弟ニシテ、太子トナリ給ヒシアリ、一條、三條、伏見天皇等ナリ、再從兄弟ニシテ太子トナリ給ヒシアリ、後二條、花園、後醍醐天皇及ビ小一條院等ナリ、三從兄弟ニシテ太子トナリ給ヒシハ、光明天皇ノ太子成良親王アリシノミ、其他成務、推古、圓融、後櫻町等ノ天皇ハ、皇姪ヲ太子トシ、三條天皇ハ從姪、後醍醐天皇ハ再從姪、光嚴天皇ハ三從兄弟ノ御子ヲ太子トシ給ヘリ、殊ニ異例ナルハ、六條天皇ノ其叔父高倉天皇ヲ太子トシ、孝謙天皇ノ其族叔祖父道祖王、大炊王ヲ太子トシ、稱徳天皇ノ其再族伯祖父光仁天皇ヲ太子トシ給ヒシ類ナリ、蓋シ是等ノ諸例ハ、皇子ノオハセヌニ因レルモ多ケレド、或ハマタ種々ノ事情ニヨリテ、勢止ムヲ得ザルニ出デシモ、尠ナカラズ、彼ノ兩統更立ノ如キモ、亦當時ノ情勢已ムヲ得ズシテ遂ニ斯ル變體ヲ生ゼシモノナルベシ、

立太子ノ年齡モ亦種々ニシテ一様ナラズ、其極メテ幼冲ナリシハ、聖武天皇ノ皇子、及ビ安德、仲恭、後深草天皇等ニシテ、何レモ御誕生後數十日ニシテ太子ニ立テ給ヒタリ、之ニ反シテ、年長ニシテ太子ニ立テ給ヒシハ、反正天皇五十八歲、安閑天皇四十歲、天武天皇六十歲、光仁天皇六十歲

古事類苑

帝王部二十二

皇太子上

皇太子ハ、皇位ヲ繼承シ給フベキ皇子ヲ云フ、日本書紀履中紀ノ古訓ニハ、儲君及ビ太子王ヲヒツギノミコトアリ、繼體紀用明紀ニハ、春宮及ビ東宮ヲモ、ヒツギノミコ、又ハ、ヒツギノミヤト訓ゼリ、其他太弟ト云ヒ、或ハ坊ナド、モ云ヒテ、種々ノ稱アレドモ、共ニ皇太子ノ稱ナリ、但シ近世ハ先ヅ皇嗣ヲ定メテ之ヲ儲君ト稱シ、然ル後立太子ノ儀アルヲ例トセリ、立太子ノ詔ハ、早ク繼體天皇ノ朝ニ見ユ、爾後其儀式漸ク整頓セシガ、南北分立、崇光天皇ノ朝ヨリ後西院天皇ノ朝ニ至ルマデ、十五代二百餘年間全ク中絶シ、靈元天皇ノ天和三年ニ再興セラレタリ、立太子ノ時山陵ニ告ゲラル、コトハ、後世廢タレテ社寺ノ祈禱ト變ジタレドモ、壹切御劍ヲ傳ヘ、及ビ拜觀節會等ノ儀式ハ、曾テ絶エタルコトナシ、其他公卿寺僧等ノ參賀ハ古ヨリノ例ナレドモ、殊ニ德川氏ノ時ハ、將軍ハ使ヲ遣シテ參賀進獻ノ禮ヲ行ヒ、在藩ノ諸侯ハ、書翰ヲ以テ幕府ニ慶ヲ陳ベタリ、

皇太子ハ單ニ儲ケノ君タルノミナラズ、時ニハ國事ヲ監シ、時ニハ萬機ヲ攝行シ給フコトアリ、其命ヲ令ト云ヒ、其他ニ往キ給フヲ行啓ト云ヒ、群臣ノ皇太子ニ白スヲ啓ト云ヒ、上啓ニハ皇太子ヲ稱シテ殿下ト云ヒ、自稱ニハ臣妾及ビ名ヲ用キシム、大寶ノ制、太子ニハ傳、學士ヲ附シテ輔導ノ職ニ任ゼシメ、東宮坊ニハ大夫以下多クノ職員ヲ定メテ、東宮一切ノコ

皇姪爲太子

四九一

從兄弟爲太子

四九三

再從兄弟爲太子

四九五

三從兄弟爲太子

四九七

從姪爲太子

同

再從姪爲太子

四九九

三從兄弟之子爲太子

同

叔父爲太子

同

族叔祖父爲太子

同

再族伯祖父爲太子

五〇〇

皇女爲太子

同

幼冲爲太子

同

年長爲太子

五〇三

爲親王即日爲太子

同

數朝爲太子

同

先帝崩後爲太子

五〇四

古事類苑

帝王部二十二

皇太子

皇太子妃附

名稱

立太子式

壺切御劍

參賀進獻

皇太子待遇

太子拜覲

太子監國

太子攝政

古立太子不必一人

皇子爲太子

皇孫爲太子

皇弟爲太子

皇弟爲太弟

皇兄爲太子

四四七

四五一

四六九

四七一

四七五

四七七

四八〇

四八一

四八三

四八四

四八七

四八八

四八九

四九一

る、年廿三、出家はもとより望みなりけれども、心ならず尼になされ、こき墨染にやつれはて、嵯峨のおくにぞすまれける、無下にうたてき事どもなり、主上はかやうの事どもに御なうつかせ給ひて、終にかくれさせ給ひけるとかや、

〔太平記〕立后事 付 三位殿御局事

阿野中將公廉ノ女ニ、三位殿ノ局ト申ケル女房、中宮ノ御方ニ候ハレケルヲ、君○後醍醐一度御覽ゼラレテ、他ニ異ナル御覺アリ、三千ノ寵愛一身ニ在シカバ、六宮ノ粉黛ハ、顔色無ガ如ク也、都テ三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一女御、暨後宮ノ美人、樂府ノ妓女ト云ヘドモ、天子顧眄ノ御心ヲ付ラレズ、嘗ニ殊艷尤態ノ獨ヨク是ヲ致スノミニ非ズ、蓋シ善巧便佞、淑旨ニ先タチテ奇ヲ爭シカバ、花ノ下ノ春ノ遊、月ノ前ノ秋ノ宴、駕スレバ輦ヲ共ニシ、幸スレバ席ヲ專ニシ給フ、是ヨリ君王朝政ヲシ給ハズ、忽ニ准后ノ宣旨ヲ下サレシカバ、人皆皇后元妃ノ思ヲナセリ、驚キ見ル光彩ノ始テ門戸ニ生ルコトヲ、此時天下ノ人、男ヲ生ム事ヲ輕ジテ、女ヲ生ム事ヲ重ゼリ、サレバ御前ノ評定、難訴ノ御沙汰マデモ准后ノ御口入トダニ云テケレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ與ヘ、奉行モ理アルヲ非トセリ、關雎樂而不淫、哀而不傷、詩人探テ后妃ノ德トス、奈何セン傾城傾國ノ亂、今ニ有スト覺テ、淺増カリシ事共也、

給ひけり、そこにも聞給ひつらんやうに、入道あまりにおそろしき事をのみ申と聞しが、淺まし
さに、或夜ひそかに忍びつゝ、内裏をばまぎれ出て、今は、がゝる所の住ひなれば、琴ひく事もなか
りしが、明日より大原のおくへ思ひ立事の侍らへば、主の女房こよひばかりの名残ををしみ、今
は夜もふけぬ立聞人もあらじなぞすゝむる間、さぞなむかしの名残もさすがにゆかしくて、手
なれし琴をひくほどに、やすうも聞出されけりどて、御泪せきあへ給はねば、仲國もそゝろに袖
をまぼりける、やゝあつて仲國泪をおさへて申けるは、明日より大原のおくへ思ひ召立事と候
は、定めて御様などもや替させ給ひ候はんすらん、然るべうも候はず、扱君をば何どかし參らせ
給ふべき、努々なかなひ候まじ、相かまへて此女房出し參らすなどて、ともに召ぐしたる馬部吉上
など留めおき、そのやを守護せさせ、我身は寮の御馬に打乗て、内裏へかへり參つたれば、夜はは
のゝどぞ明にける、仲國やがてれうの御馬つながせ、女房のまやうぞくをばはね馬の障子に
打かけて、今は定めて御寝もなりつらん、誰してか申べきと思ひ、南殿をさして參るほどに、主上
はいまだ夕べの御座にぞまじゝける、南にかけり北にむかふ、かんうんを秋のかりにつけが
たし、東に出で西にながる、たゞせんばうをあかつきの月によすど、御心ぼそげに打ながめさせ
給ふ所に、仲國つと參りつゝ、小督のどのゝ御返事をこそ參らせけれ、主上斜ならずに御感あつ
て、さうば汝やがて夕さりぐして參れどぞ仰ける、仲國、入道相國のかへり聞給はん所は恐ろし
けれども、これ又勅定なれば人に車かつて嵯峨へ行向ふ、小督のどの參るまじき由宣へども、や
うゝにこしらへ奉りて、車にのせ奉りて、内裏へ參りたりければ、幽なる所に忍ばせて、夜な夜
な召れ參らせける程に、ひめ宮御一所出來させ給ひけり、坊門の女院、准母範門とは此みやの御
事なり、入道相國小督が失たりといふは、跡かたもなきそらごとなり、いかにもして失はんと宣
ひけるが、何としてかたばかり出されたりけん、小督のどのをとらへつゝ、尼になしてぞ追放た

忪のどのに似たる女房だにもなかりけり、空しう歸り参りたらんは、参らざらんより中々悪かるべし、是よりいづちへも迷ひ行ばやとは思へどもいづくか王地ならぬ、身をかくすべき宿もなし、いかゞせん、とあんにわづらふ、誠や法輪は程近ければ、月の光にさそはれて参り給へる事もやど、そなたへ向ひてぞあくがれける、龜山のあたり近く松のあるかたに、幽に琴を聞えける、峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺束なくは思へども、駒をはやめて行程に、かた折戸をたる内に琴をぞ引すまされたる、ひかへて是を聞ければ、少もまがふべうもなく、小忪のどの、つまをとなり、樂は何ぞと聞ければ、夫を想てこふとよむ想夫戀といふ樂なりけり、仲國さればこそ、君の御事思ひ出参らせて樂こそ多けれ、此がくをひき給ふ事のやさしさよと思ひ、こしよりやうでうぬさいだし、ちつとなりひて門をほととたゝけば、琴をばひきやみ給ひぬ、是は内裏より仲國が御使に参りて候、あけさせ給へどてたゝけども、どがむるものもなかりけり、漸あつて内より人の出るおとまけり、うれしう思ひて待つ所に、ぢやうをはづし、門をほそめにわけ、いたいけしたる小女房のかほばかりさし出て、是はさやうに内裏より御使など給はるべき所でも侍らはず、若かどたがへてぞ侍らふらんどいひければ、仲國へんじせば、門たてられ、ぢやうさゝれなんずとやおもひけん、せひなく押あけてぞ入にける、つゝ戸の際なるえんに居て、何とてかやうの所に御わたり候やらん、君は御ゆゑに思召まづさせ給ひて、御命も既に危くこそ見えさせましく候へ、かやうに申さばうはのそらとや覺召れ候らん、御書を賜りて候とて取出て奉る、ありつる女房とりついで、小忪のどのにぞ参らせける、是をあけて見給ふに、誠に君の御書にてぞありける、頼て御返書かいて引むすび、女房の装束一かきねそへてぞ出されたる、仲國御返事のうへは、どうかう申に及び候はねども、別の御使にても候はゞこそ、直の御返事うけ給はちでは、争か歸り参り候べきと申ければ、小忪のどのけにもとや思れけん、みづから返事し

ゆゑにおぼし召まづませ給ひなんなり、さらんに取てはとて、御かいしやくの女房達をも参らせられず、参内し給ふ人々もそねまなければ、入道の權威に憚かつて参り通ふ臣下もなし、男女打ひそめて禁中忌々しうぞ見えし、頃は八月十日あまりの事なれば、さしもくまなき空なれども、主上は御涙にくもらせ給ひて、月の光もおぼろにぞ御覽せられける、やゝ深更に及んで、人ある人やあるとめされけれども、御いらへ申者もなし、稍あつて彈正の大ひつ仲國、その夜しも御宿直に参りて遙に遠う候ひけるが、仲國と御いらへ申す、汝ちかう参れ、仰下さるべき旨ありと仰せければ、何事やらんと思ひ、御前ちかうぞ参じたる、汝若小がうがゆくへや知たると仰ければ、争かまゝ参らせ候べきと申す、誠や小がうは嵯峨の邊かた折戸とかやしたる内にあると申者のあるぞとよあるじが名をばまらずとも、尋て参らせてんやと仰ければ、仲國あるじが名を知り候はでは、争か尋ねあひ参らせ候べきと申ければ、主上げにもとて御涙せきあへさせましまさず、仲國つくづく物を案するに、誠や小督の殿は琴ひき給ひしぞかし、此月の明さに君の御事思ひ出参らせて、琴引給はぬ事はよもあらじ、内裏にて琴ひき給ひしとき、仲國笛の役にめされ参らせしかば、其琴の音はいづくにても聞えらんする物を、嵯峨の在家いく程かあらん、打廻てたづねんに、なぞか聞出さであるべきと思ひ、左候はいあるじが名はまらず候ども、たづね参らせ候べき、たとひ尋ねあひまゐらせて候ども、御書なご候はずば、うはの空とや思召れ候はんずらん、御書を賜つて参り候はんと申ければ、主上げにもとて、頼て御書をあそばいてぞ下されける、寮の御馬に乗てゆけと仰ければ、仲國れうの御馬賜はつて明月にむちをあげ西をさしてぞあゆませける、小鹿なく此山里とえいじけん、嵯峨のあたりの秋のさる、そこそはあはれにも覺えけめ、かた折戸またる屋を見付ては、此内にもやおはすらんと、扣々聞けれども、琴ひく所はなかりけり、御だうなごへも参り給へる事もやとまやか堂をはじめて、堂々見まはれども、小

〔續世繼宇四〕

白河院の御世にきさきみやすどころなぞかくれさせ給て、さるかたへも

おはせざりしに、白川殿ときこえ給ふ人おはしき、その人待賢門院をばやしなひたてまつり給ひて、院も御むすめどもてなしきこえさせ給しなり、その白川殿あさきしき御宿世おはしける人なるべし、宣旨などはくだされざりけれども、世の人ぎをむの女御とぞ申めりし、もとよりかの院のうちのつぼねわたりにおはしけるを、はつかに御らんじつけさせ給て、三千の寵愛ひどりのみなりけり、たゞ人にはおはせざるべし、賀茂の女御と世にはいひて、うれしきいはをどて、あねおどうとのちにつきてきこえしかど、それはかの社のつかさ重助がむすめどもにて、女房にまゐりたりしかば、御目ちかへりしを、これははつかに御覽じつけられて、それがやうにはなくて、これはここの外におもさきまにきこえ給ひき、

〔山槐記〕治承四年四月十二日甲午、今日初齋院、

御年四歳、新院高倉第一御女内親王也、母權中納言成範御女、號小督殿、即新院女房也。○下略

〔平家物語六〕小がうの事

主上倉高は、れんぼの御涙に思召まづさせ給ひたるを、申慰め参らせんとて、中宮の御方より、小督と申女房をまゐらせらる、そも此女房と申は、櫻町の中納言まげのりの卿のむすめ、禁中一の美人ならびなき琴の上手にてぞましくける、冷泉の大納言たかふさ卿未だ少將なりし時、見そめたりし女房なり、○中入道相國清盛此よしを傳聞給ひて、中宮と申も御娘子、冷泉の少將も又賀なり、小がうの殿に二人の賀を取られては、世の中よかるまじ、いかにもして小がうの殿を召出、いて失なはんとぞ宜ひける、小督此よしを聞給ひて、我身の上はとにもかくにも成なん、君の御爲御心ぐるしと思はれければ、或夜内裏をばまぎれ出て、行へもまらずぞ失られける、主上御歎き斜ならず、晝はよるのおどきにのみ入せ給ひて、御涙にまづさせおはしき、夜は南殿に出御成て、月の光を御覽じてぞ慰ませましくける、入道相國此よしを承つて、扱は君は小督

ぼしながら、なき御かげにもおぼしめさん事、おそろしうつゝ、ましろおぼさるゝに、そのゝち御
文、まきりにて参り給へ〜とあれど、いかでかはおもひのまゝにはいであち給はん、いかにな
ど覺しみだるゝ程に、おほんはらからの君達に、うへまのびて此事をのたまはせて、それ参らせ
よとおはせられければ、かゝることのありけるを、みやのけしきにもいなさで、どしをろおはし
ましけることゝおぼす、なにゝつけてもいとかなしう、思いで聞え給さてかしこまりてまかで
給て、はやうまゐりたまへなせ聞え給へば、あべい事にもあらずおぼしたれば、いまはじめたる
御事にもあらざるをなせ、はづかしげに聞え給て、この君たち同じ心にそゝのかし、ざるべき
御さまにきこえ給ふ、うちよりはくらづかさにおほせられてさるべきさまのこまかなる事ど
も有べし、さはどていでたちまゐり給を、御はらからの君たち、さすがにいかにぞやうちおもひ
給へる御けしきどもゝ、ずゝろはしくおぼさるべし、さて参り給へり、登花殿にて御つばねまた
る、それよりとして御どのゐしきりて、こと御かた〜あへてたちいで給はず、故宮^子の女房、
みやたちの御めのどなせやすからぬことにおもへり、かゝる事のいつしかどなる事、たゞいま
かくはおはしなすべき事かはなせ、ことしもものろひなせしたまひつらんやうにきこえなすも、
いど〜かたはらい、いたし、御かた〜には宮の御心の哀なりし事をこひまのびきこえ給ふに、
かゝることさへあれば、いと心つきなきことにすげなくそしりそねみ、やすからぬことにきこ
え給、まゐり給てのちすべてよるひるふしおきむつれさせ給ひて、よのまつりごとをまらせ給
はぬさまなれば、只いまのそしりぐさにはこの御事ぞありける、わたりなかりしおり、あやにく
なりしにやとおぼされつる御心さし、いましもいどゝまざりていみじう思聞えさせ給てのあ
まりに、人のこなせうみ給はざらましかば、ささきにもすゑてましとおぼしめしの給はせて、
内侍のかみになさせ給つ、

〔類聚國史百八十七〕

弘仁八年八月戊午朔散事從三位橘朝臣常子薨云々皇統彌照天皇○桓武納之

後宮有寵生三品大宅內親王延曆年中授從四位下宮車晏駕出家爲尼太上天皇敬重之叙從三位

〔日本紀略嵯峨〕弘仁八年八月戊午朔散事從三位橘朝臣常子薨左大臣正一位橘諸兄之曾孫正五

位下兵部大輔島田麻呂之女也皇統彌照天皇○桓武納之後宮有寵生三品大宅內親王宮車晏駕出

家爲尼薨年卅

〔日本後紀嵯峨〕弘仁元年九月己酉藤原朝臣藥子自殺藥子贈太政大臣種繼之女中納言藤原朝臣

繩主之妻也有一男二女長女太上天皇○平城爲太子時以選入宮其後藥子以東宮宣旨出入臥內天

皇私焉皇統彌照天皇○桓武應姪之傷義即令驅逐天皇之嗣位徵爲尙侍巧求愛媚恩寵隆渥所言之

事無不聽容自司衆務吐納自由威福之盛熏灼四方屬倉卒之際與天皇同筆知衆惡之歸已遂仰藥

而死

〔續日本後紀仁明〕承和十四年十一月己巳尙藏從二位緒繼女王薨女王能有妖媚之德淳和太上天

皇殊賜寵幸分陪宮掖薨時遺命不受葬使于時年六十一

〔三代實錄清和〕貞觀五年正月三日丙寅大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定薨○中定者嵯峨

天皇之子也母百濟王氏其名曰慶命天皇納之特蒙優寵動有禮則甚見尊異宮闈之權可謂無比官

爲尙侍爵至二位及薨贈一位始太上天皇○嵯峨遷御嵯峨院之時爲築別館令爲居所號曰小院太上

天皇所居爲大院尙侍所居爲其次故也權勢之隆至如此焉定生而岐嶷太上天皇在鐘愛

〔榮花物語月一〕六月○康保つごもりにみかさ○村の覺しめしけるやう式部卿の宮○重明の

北方○藤原はひとりおはすらんかしとおぼし出て御文物とさせ給ふに后の宮○藤原の御お

とゝの御かたゝをどこ君たちたゞおやともきみとも宮をこたのみ申つるにををうちけ

ちたるやうなるをわはれにおぼしまさふ○中みやの北の方はつらしき御文をうれしうお

而不參向、又重七喚、猶固辭以不至、於是天皇不悅、而復勅一舍人中臣烏賊津使主曰、皇后所進之娘子弟姬、喚而不來、汝自往之召將弟姬以來、必敦賞矣、愛烏賊津使主、承命退之、裏櫛細中到坂田、伏于弟姬庭中、言天皇命以召之、弟姬對曰、豈非懼天皇之命、唯不欲傷皇后之志耳、妾雖身亡、不參赴時、烏賊津使主對言、臣既被天皇命、必召率來矣、若不將來、必罪之、故返被極刑、事伏庭而死耳、仍經七日、伏於庭中、與飲食而不准、密食懷中之糲、於是弟姬以爲、妾因皇后之嫉、既拒天皇命、且亡君之忠臣、是亦妾罪、則從烏賊津使主而來之、到倭春日、食于櫛井上、弟姬親賜酒于使主、慰其意、使主即日、至京留弟姬於倭、直吾子籠之家、復命天皇、天皇大歡之、美烏賊津使主、而敦寵焉、然皇后之色不平、是以勿近宮中、則別拂殿屋於藤原而居也、八年二月、幸于藤原、密察衣通郎姬之消息、是夕衣通姬戀天皇而獨居、其不知天皇之臨、而歌曰、和餓勢故餓、句倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能、區茂能於虛奈比、虛豫比辭流辭毛、天皇聆是歌、則有感情、而歌之曰、佐瑳羅餓多、邇之枳能臂毛弘、等枳含氣帝阿麻多、紆泥受邇、多儂比等用能未、明旦天皇見井傍櫻華、而歌之曰、波那具波辭、佐區羅能梅涅、許等梅涅麼、波椰區波梅涅孺、和我梅豆留古羅、皇后聞之、且大恨也、於是衣通郎姬奏言、妾常近王宮、而晝夜相續、欲視陛下之威儀、然皇后則妾之姊也、因妾以恒恨陛下、亦爲妾苦、是以冀離王居、而欲遠居、若皇后嫉意少息、歟、天皇則更興造宮室於河內茅渟、而衣通郎姬令居、因此以屢遊、猶于日根野、十一年三月丙午、幸於茅渟宮、衣通郎姬歌之曰、等虛辭陪邇、枳彌母阿閉椰毛、異舍儼等利宇彌、能波摩毛能余留等枳、等枳弘時、天皇謂衣通郎姬曰、是歌不可聆他人、皇后聞必大恨、故時人號濱漢、謂奈能利曾毛也、先是衣通郎姬居于藤原宮、時天皇詔太伴宿屋連曰、朕頃得美麗孺子、是皇后母弟也、朕心異愛之、冀其名欲傳于後葉、奈何、室屋連依勅而奏可、則科諸國造等爲衣通郎姬定藤原部、

〔日本後紀五〕延曆十五年十月壬申、正四位上因幡造淨成女辛、淨成女元因幡國高草郡之采女也、天皇特加寵愛、終至顯位、

後宮雜載

此篇ハ妃夫人嬪若クハ女御更衣ニアラズシテ、殊ニ寵幸ヲ蒙リシモノヲ擧ゲタリ、而シテ其收ムル所ニハ、當時ソノ職名アリテ史冊ニ佚セルモノモアルベシ、

〔古事記中應神〕

一時天皇越幸近淡海國之時、略中

故到坐木幡村之時、麗美娘子過其道衢、爾天皇問其

娘子曰、汝者誰子、答曰、丸邇之比布禮能意富美之女、名宮主矢河枝比賣、天皇即詔其娘子、吾明日還

幸之時、入坐汝家、故矢河枝比賣委曲語其父、於是父答曰、是者天皇坐祚理、此二字恐之我子仕奉云、

而嚴飾其家候待者、明日入坐、故獻大御饗之時、其女矢河枝比賣令取大御酒蓋而獻、於是天皇任令

取其大御酒蓋、而御歌曰、許能邇邇夜、伊豆久能邇邇、毛毛豆多布都奴賀能邇邇、余許佐良布伊豆久

邇伊多流、伊知邇志麻、美志麻邇斗岐、美本杼理能、邇豆伎伊岐豆岐、志那陀由布佐佐那美邇、須久

須久登、和賀伊麻勢婆夜、許波多能美知邇、阿波志斯袁登賣、宇斯呂傳波、袁陀氏呂邇母、波那美波志、

比斯那須伊知比韋能、和邇佐能邇袁波、都邇波波陀阿可良氣美志波、邇波邇具漏岐由惠美都具理

能、曾能那邇都邇袁加夫都久、麻肥邇波阿氏受、麻用賀岐、許邇加岐多禮、阿波志斯袁美那、邇母賀登、

和賀美斯古良、邇久母賀登、阿賀美斯古邇、宇多多氣陀邇、牟邇比袁流邇母、伊蘇比袁流邇母、如此御

合生御子、宇遲能、和紀自字下五郎子也、

〔日本書紀九十三〕七年十二月壬戌朔、謚于新室、天皇親之撫琴、皇后起儻儻、既終而不言禮事、當時風俗

於宴會儻者、儻終則自對座長曰、奉娘子也、時天皇謂皇后曰、何失常禮也、皇后惶之、復起儻、儻竟言奉

娘子、天皇即問皇后曰、所奉娘子者誰也、欲知姓字、皇后不獲已而奏言、妾弟名弟姬焉、弟姬容姿絕妙

無比、其艷色徹衣而晃之、是以時人號曰衣通郎姬也、ウツロウキ天皇之志在于衣通郎姬、故強皇后而令進、皇后

知之、不輒言禮事、爰天皇歡喜、則明日遣使者喚弟姬、時弟姬隨母以在於近江坂田、弟姬畏皇后之情、

所とていますかりけるいと成けり。

○按ズルニ、おほみやすん所トハ藤原明子ヲ指スナリ、清和天皇ノ朝ニ、御生母ナルヲ以テ皇太夫人トナリ、尋テ皇太后トナレリ。

〔伊勢集〕いづれの御時にかありけん、おほみやすん所と聞ゆるみつばねにやまごにおやある人さふらひけり、おやいどかなしうゑて男などもわはせざりけるを、御息所の御せうごとしごろいひわたり給^略下。

○按ズルニ、此大御息所ハ、醍醐天皇ノ皇太夫人藤原温子ナリ、

院御息所

〔大和物語〕故源大納言宰相におはしける時、京極のみやすどころ、[○]侍亭子院^多の御賀つかうまつり給とて、かゝる事をなんせんと思ふさゝげ物一枝ふた枝せさせ給へど聞え給ひければひげこをあまたせさせ給ふて、俊子にいろく^くにそめさせ給ひけり、まきものゝおりもの

ども、いろく^くにそめよりくみ何かと、みなあづけてせさせ給ひけり、

〔小右記〕寛仁三年四月十一日戊戌、去夜者左大臣^顯二娘^院忽以已逝云々、心勞云々、

○按ズルニ、院トハ小一條院敦明親王ノ事ナリ、上皇ニアラズト雖トモ、名稱ノ同ジキヲ以テ茲ニ附載ス、

〔古事談^一王道后宮〕寛平法皇[○]與京極御休所同車渡御川原院歷覽山河形勢入夜月明令取^下御車疊假爲御座與御息所被行房內之間開塗籠之戸有出之聲法皇令問給對云融候欲賜御息所法皇答云汝在生之時爲臣下我天子何漫出此言哉早可退歸者靈物忽抱法皇御腰半死御坐前驅等皆候中門外御聲不可及達牛童頗近侍食御牛召件童舍人差寄御車令乘御息所顔色無色足不能起立令扶抱乘還御之後召淨藏大法師令加持纔蘇生云々法皇依前世行業爲日本之王難避寶位神祇奉守護追退融靈也件戸面有打物跡守護神令退入押覆也云々

〔西宮記^{臨時}〕延喜七年正月九日貞信公記云御息所御口令良少將奏大殿自大納言至左兵衛督及氏五位以上十餘人於左近陣東庭拜舞亦參東宮令啓

〔今昔物語^{二十四}〕延喜御屏風伊勢御息所讀和歌語第三十一

今昔延喜天皇[○]御子ノ宮ノ御著袴ノ料ニ御屏風ヲ爲サセ給テ其色紙形ニ可書キ故ニ歌讀共ニ各和歌讀テ奉レト仰セ給ヒケレバ皆讀テ奉タリケルヲ小野道風ト云手書ヲ以テ令書給ケレバ春ノ帖ニ櫻ノ花ノ榮タル所ニ女車ノ山路行タル繪ヲ書タル所ニ當テ色紙形有リ其ヲ思シ食シ落シテ歌讀共ニモ不給リケレバ道風書キ持行クニ其歌ナケレバ天皇此レヲ御覽ジテ此ハ何カセムト爲ル今日ニ成テハ俄ニ誰カ此ヲ可讀キ可吟所ノ歌シモナカラムコソ口惜ケレト被仰テ暫ク思食シ廻シテ藤原伊衡ト云殿止人ノ少將ニテ有ケルヲ召ス即チ參ヌ被仰テ云ク只今伊勢御息所ノ許ニ行テ此ル事ナム有ル此歌讀テトテ遣ス[○]然テ此御息所ハ極テ物ノ上手ニテ有ケル大和守藤原忠房ト云人ノ娘ナリ亭子院ノ天皇ノ御時ニ參テ有ケレバ天皇極ク時メキ思食シテ御息所ニモ被成タルナリ形チ心バセヨリ始メ故有テ可吟ク微妙カリケリ和歌ヲ讀ム事ハ其時ノ躬恒貫之ニモ不劣リケリ

〔伊勢物語^下〕昔おほやけおほしてつかう給ふ女[○]藤原の色ゆるされたる有けりおほみやすん

こよひこそなみだの河にゐる千鳥なきてかへると君はしらすや

〔大和物語〕おなじ右のおほいどの○藤原のみやうすどころ。〇醍醐女帝おはしまさすなりて後、

式部卿の宮〇宇多皇なんすみたてまつり給けるを、いかゞりけんおはしまさゞりける頃齋

宮の御もとより御文たてまつりたまへりけるに、みやすむどころ宮のおはしまさぬ事など聞

給うておくに、

まらやまにふりにし雪の跡たえていまはこし路の人もかよはず、どなんありける、御返あれ

ど本になしとあり、かくて九の君の侍従の君にあはせ奉り給ひてけり、

〔十訓抄〕成明親王〇村の位につかせ給ひたりけるに、女御あまたさぶらはせ給ひける中に、廣

幡の御息所は、ことに御心ばせあるさまに御門もおぼしめしたり、

〔續世繼〕八源氏の御息所、御門の御おほぢにはおはせねど、春宮親王〇實仁やみやたちの御母におはせ

しは、後三條院の女御にて、侍従の宰相基平の御むすめこそおはせしか、その宰相は小一條院の

御子におはしき、その源氏のみやうす所、御名は基子女御とぞ申し、

〔續世繼〕二玉〇さてこの御時にみやうす所はこれかれさだめられ給へりけれども、御をばの前齋院

〇後三條皇女〇後三條子〇ぞ女御にまゐり給ひて中宮にたち給ひし、こどのほかの御よはひなれど、をさなくよ

りたゞひなくみどりたてまつらせ給て、たゞ四宮をとかや仰せられければにや侍けん、まゐら

せ給ひけるよも、いどあかぬ事にて、御車にもたてまつらざりければ、あか月ちかくなるまで

心もとなく侍ける、鳥羽の御門の御母の女御せのまゐり給ひて、院もてなし聞えさせ給へば、

はなやかにおはしまし、かきども、中宮はつさせぬ御心ざしになんきこえさせ給ひし、

〔十訓抄〕亭子院〇宇に、御息所あまた御そうして住たまふに、河原院の見所あるさまに、いと

めでたくつくらせ給ひて、京極御息所〇向侍藤原〇藤子一どころをのみ具し奉りて、わたらせ給ひけり、

御息所
御息所

ておはせとあるあひだに、日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける、

ふんやのやすひで

春の日の光りにあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき

〔源氏物語〕一覽此みこ〇源氏むまれ賜ひてのちはいと心ことにおぼしおきてたれば、坊にもよ

うせずばこのみこの居賜べきなめりと、〇のみの女御はおぼしうたがへり、

〔伊勢物語〕上むかし春宮の女御の御かたの花の賀に、めしあづけられたりけるに、〇歌

〔玉勝間〕五東宮の御息所

二條后は、清和天皇の中宮也、貞觀八年に女御となり賜ひ、同十年に貞明親王を生奉り賜ひ、同十一年に其親王皇太子に立せ賜ふ、これ陽成天皇におはします、これよりして元慶元年に中宮となり賜ふ迄のあひだ、女御にて皇太子の御母にましますを以て、東宮の女御とも、東宮の御息所とも申けること、契沖が餘材抄、勢語臆斷なぞにいへるが如し、東宮の御母女御、御母御息所といふことなり、

〔大和物語〕上故式部卿〇字多皇二條のみやすどころにたえ給ふて、又のどしのむ月のなぬかの日に若菜奉り給ひけるに、

ふるさとゝあれにし宿の草の葉も君がためとぞまづはつみけるとありけり、

〇按ズルニ、二條のみやすどころハ、三條のみやすどころノ誤ナルベシ、三條御息所ハ醍醐天皇ノ女御藤原仁善子ニシテ三條右大臣定方ノ女ナリ、

〔大和物語〕上桂の御子〇字多皇の御もとに、よしたねが來たりけるを、母御息所さゝつけ給て、門をさへせ給ければ、夜ひと夜たちわづらひてかへるとて、かく聞え給へどて、かぞのはざまよりいひいれける、

ぶらひ給ふ、

○按ズルニ古説ニ女御更衣ノ御子ヲ生メルモノヲ御息所ト云フトアレドモ然ラズ本文ニ依ルニ御子生レ給ハヌヲモ御息所ト稱セリ、

〔空穂物語藏びらき中〕おやにするばかりにてぞ、またも西わたりには、更衣などいえずかり、その更衣は、宰相の中將のひめみこの母なり、むめつばのみやすどころといひし、

〔源氏物語桐一〕その年の夏、みやすどころはかなさこゝちにわづらひてまかでなむとし給を、いとまさらにゆるさせ給はず略、中内より御つかひあり、三位のくらゐおくり給ふよし勅使きてその宣命よむならんかなしき事なりける、女御とだにいはずなりぬるが、あかずくちをしう

おぼさるれば、今ひとききみの位をだにと贈らせ給ふなりけり、

〔源氏物語十〕さるの時に内にまゐり給、みやす所御こしにのり給へるにつけても、父おどりのかぎりなきすぢにおぼし心ざして、いつたてまつり給ひし有さまかはりて、すゑの世にうちを見給にも、物のみつさせずあはれにおぼさる、十六にて故宮にまゐり給て、廿にておくれたてまつり給ふ、卅にてぞけふまた九重を見給ける、

そのかみをけふはかけじとまのふれど心のうちにものぞかなしき

所釋女御爲御息

〔續世繼九〕むかし清和のみかぜの御とき、かたゝおほくおはしけるなかに、ひとりのみやす所原女御藤の太上法皇和清かくれさせ給へりけるとき御經供養してほどけのみちどぶ

らひたてまつられけるに、みのりかきたまへりけるまきしのいろの、ゆうべのそらのうす雲なごのやうにすみぞめなりければ、人々あやしくおもひけるに、むかし給はりたまへりける御ふみどもをまきしにすきて、みのりのれうしになされたりけるなりけり、

〔古今和歌集卷〕二條后御清和女高のどう宮のみやす所ときこえける時、正月三日おまへにめし

御息所

御息所トハ、天皇ノ御寢ニ侍スルモノナリ、其名モト天皇ノ休憩シタマフ便殿ヨリ起レルヲ以テ、更衣ヲ指シテ言ヘルナリ、然レドモ亦女御ヲモ謂ヒ、或ハ御寢ニ侍スレドモ、其職名ナキ者ヲモ謂ヘリ、之ヲ要スルニ、一箇ノ私稱ニシテ、東大寺要録ニ引ケル惠運ノ記ニ既ニ此名アルヲ視レバ、清和天皇ヨリ前ニ起リシナリ、鳥羽天皇以後ニハ亦見エズシテ、専ラ皇太子、親王ノ妃ノ稱ト爲レリ、皇太子ノ御息所ハ別ニ擧ゲタリ、

名稱

〔大和物語上〕みやすむどころ

初見

〔榮花物語月一の宴〕みやすどころ

所稱

〔東大寺要録一〕惠運僧都記文

所稱更衣爲御息

貞觀三年四月廿五日、皇太后○仁明后、并北御。○文德女御、剃頭出家、
〔大和物語〕堤の中納言の君十三のみこ○醍醐皇子、の母御息所○衣桑子、を内に奉りけるはじめに、御かどはいかゞおぼしめすらんなどいどかしこく思なげき給けり、さてみかどによみて奉り給ける、

ひとのおやの心はやみにあらねども子をおもふみちにまどひぬるかな、先帝いどあはれに思しめしたりけり、御返しはありけれど人えしらす、

〔榮花物語月一の宴〕又在衛のあせち大納言のむすめ、あせちの御息所○村上とてさふらひ給ふ、小

一條の師尹のおじやの御むすめ○方いみじうつくしくて、宣耀殿のによつと○村上ときこえ

さす、又廣幡の中なこん廣明のおはんむすめ、廣幡のみやすどころ○村上とておはす、さても

このおはなれたと、みな御子むまれ給へるもあり、御子むまれ給はぬ御息所たちもあまたさ

たゞ、めざましきものにおとしめをねみ給、おな玄程それより下らうの更衣たちは、ましてや、すからず、朝夕のみやづかへにつけても人の心をうごかし、うらみをおふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心ばそげにさどがちなるを、いよくあはれるものにおぼして、人のそしりをもえは、からせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり、

〔源平盛衰記〕清盛息女事

御娘八人御坐ケルモ、皆取々ニ幸シ給ヘリ。○中略七ニハ安藝嚴島ノ内侍ガ腹ノ娘也、指タル才藝ハナカリケレ共、美貌ハ人ニ勝給ヘリ、嬋娟タル兩鬢ハ秋ノ蟬ノ翼宛轉タル雙蛾ハ遠山ノ色トゾ見エ給フ、秋夜月ヲ待、ハツカニ山ヲ出ル清光ヲ見ガ如シ、夏日迷ヲ思初テ、氷ヲ穿紅艶ヲ見ヨリモ潔シ、此御娘十八ノ年、後白河院ヘ參給ヘリ、更衣ノ后ニテゾ御坐ケル、入道。○平清盛サシモナキ事セラレタリト申合ケリ、其上程ナク失給ニケリ、

〔増鏡五内野の雪〕○仁治三年こぞより、中宮○藤原子は、いつしかたゝならずおはします、六月。○寛元元年なりて、○中略十日のあけぼのよりその御氣しきあれば殿のうちたちさわぐ。○中略内○嵯峨には更衣ばらに、わか宮二所おはしませど、此御事をまち聞え給ふとて納さだまり給はぬは、さなり、

ひのゝある、いでさせ給夜は曉までおはしまし、御どもの人などのたちやすらふも昔物がたりの心ちす、さべきむつまじき殿上人御おくりすべき宣旨ありていどめでたし、殿ばらなぞ猶女こそもつべきものはわれなぞめで給ふ。○中略御息所更衣なぞにみな中じやう少將のむすめ受領のもみなまゐりけるを、このちかき世にはおぼろげの人はまゐり給はぬものにならひたるに、いとあさましきなり。○中略三月○延久三年九日いらせ給ふ、ぎしき有さまいどめでたし、車五六ひきつゝけていと心ことなり、女御になりていらせ給、更衣なぞいひしをだに世にめでたくめづらしきことに思申しを、げさやかにめでたくいみじく世にためしなきことに、世人このころのことぐさにまけり。

〔空穂物語 初秋〕かくてすまひの節、明日になりて、内にいとかしくまかなひにあたり給へる宮す所かういたちと、まうのぼり給ふべき事をおぼしつゝ、てつくしたる御けしやうをしおはしめす、そのすまひの日、仁壽殿にてなむきこしめしける、なえむ思ひたがへたるなるべし、その日わしたの御まかなひには仁壽殿の女御、ひるのまかなひには承香殿の女御、よさりの御まかなひには式部卿の女御、かうゐる十人、色ゆるされ給へるかざり色をつくして奉れり、更衣たちみな日のよそひし、あめの下のめづらしきあやのむをたてまつりつくし、宮す所たちまかなひつかうまつり給はぬは、うないにてなむさぶらひ給ひけり。

〔空穂物語 後春〕年十八にて侍従になりぬ、そのしの五節の心みの夜、后宮よりはじめたてまつりて、おほくの女御更衣まうのぼり給へるにも、このいだしの五節のかたちよういはかなくうちふるまへるも人にはことにて、うへには御心どめて御らんず。

〔源氏物語 桐寛〕いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなききははあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり、はじめよりわれはと思ひあがり給へる御か

祇候所

夜遣使賜物、

〔禁秘御抄〕^上上御局號藤壺上御局

后女御更衣參上所也近代爲御所

上御局號弘徽殿御局

是御行ナド有所也、女御更衣可參上、

出家

〔日本紀略〕^五冷泉、康保五年七月十五日壬寅今日先帝^上○村女御從四位上莊子女王并更衣藤原祐姬等爲尼、

更衣爲女御

〔三代實錄〕^五仁和三年二月十六日庚申、勅以更衣從五位上藤原朝臣元善爲女御、中納言從三位山蔭之女也、

雜載

○按ズルニ、コレ更衣ヨリ陞リテ女御トナリシ始メナリ、

〔藤中抄〕^下更衣、これべちのつかさにはあらねども、内侍のかみなどになさるゝをりあり、

〔大和物語〕^上先帝^多○宇の御時刑部のきみとてさふらひ給ひける更衣の、さどにまかりいで給ひて、ひさしうまわり給はざりけるにつかはしける、

おほぞらをわたる春日のかけなれやよそにのみしてのどけかるらむ

〔榮花物語〕^{三十八}枝、一品の宮にまゐらせ給ひし、侍從宰相^基○源の御むすめ、^子○基うち^三條おぼし

めすといふ事世にきこえて、たゞそなたになんおはしますなといふ程に、たゞならずならせ給

へり、おほかたもみやづかへさまにもあらずもてかしづき聞えさせ給て、たゞみやの御おなじ

ことにて、御だいなど參らすこともひめ君の御だいとて、女房とりてまゐらすに、ましてか

くさへものせさせ給へば、いと心ことにもてなさせ給ふ、^略○中七月に尾張前司つねひらといふ

人のいへにいでさせ給、このたびかへり參らせ給はんには、更衣などにてなんおはすべきとい

〔公卿補任〕朱書天慶七年甲辰參議從四位上源兼明○中母參議藤原菅根女更衣從四

〔北山抄〕六下宣旨事云々補女御事更衣者、尚侍宜下所司聽禁色

〔侍中群要〕八內親王以下宣旨

更衣事大臣於御前承可成之由即召藏人令付簡開案內付第一云々件等事可案內

〔禁秘御抄〕下女房 上臈

上古可然人女皆爲女御更衣

〔文德實錄〕十天安二年正月辛丑紀朝臣靜子○文德天皇授正五位下

〔三代實錄〕光孝十仁和元年十一月廿七日丁未授更衣從五位下藤原朝臣元子從五位上

〔小野宮年中行事〕正月廿日內宴事

仁和四年正月己未御記云太政大臣送朕書云內宴陪膳古跡以采女爲奉仕之而先帝令更衣陪膳

介間古老采女等自奏之若無更衣復舊用采女

〔山槐記〕保元四年正月廿一日丙子今日內宴也○中次陪膳典侍此役更衣役之然

〔延喜式〕三十八凡設座者○中四位命婦及更衣藏人兩面草蓐藍染調布裏

〔延喜式〕四十一凡內親王三位已上內命婦及更衣以上並聽乘絲蓐有庇之車并著緋牛轡

〔延喜式〕四十一凡車馬從者○中更衣十人

〔侍中群要〕八諸使事

更衣已上初參後朝使位以上六

女御更衣養產使藏人○一本藏人下有所民甫三字

〔新儀式〕五皇后產事

皇后有御產事先遣中使被奉問之七夜仰內藏寮令設饗饌有賜祿物藏穀倉院設女御更衣產所七

叙位

職掌

待遇

從五位上並太上天皇○經更衣也、

〔二代要記一〕更衣從五位上藤原朝臣潔子右大臣內麻呂孫、散位從四位上長岡女、

〔三代實錄二〕貞觀十八年三月十三日辛卯、皇子貞數爲親王、年二歲、母更衣、參議太宰權帥從三

位在原朝臣行平之女也、皇女識子爲內親王、年三歲、母更衣、故神祇伯從四位下藤原朝臣良近之女也、皇子長賴賜姓源朝臣、年二歲、母更衣、從五位下行信濃權介佐伯宿禰子房之女也、

〔三代實錄二〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、皇子貞真年一歲、貞賴年一歲、並爲親王、貞真親王、

母更衣、齋宮頭從五位上藤原朝臣諸藤之女也、貞賴親王、母更衣、木工允正四位上藤原朝臣真宗之女也、

〔大鏡裏書〕贈皇太后宮胤下御事字多天皇女御、醍醐天皇母橘、

勸修寺贈太政大臣高藤女、○中仁和四年九月廿二日爲更衣、同日聽禁色、

〔諸官符案〕太政官符

中務省

三世德姬女王 源朝臣久子 藤原朝臣靜子

右左大臣藤原朝臣宣奉勅宜爲更衣者、

辨 左大史

寬平四年十二月十五日

〔皇胤紹運錄〕依子內親王字多皇女、母更衣、源貞子、民部卿昇女、

〔一代要記三〕更衣源封子

〔皇胤紹運錄〕代明親王醍醐皇子、母更衣藤原鮮子、伊豫介連永女、

〔公卿補任朱資〕天慶二年己亥正四位下源高明○中母右大辨源唱朝臣女更衣從四子

更衣

名稱

更衣ハ、天皇ノ御衣ヲ更サセ給フ便殿ヲ謂ヒテ、即チ其殿ニ在リテ更衣ヲ主ルヲ以テ名トシ、亦御疑ニ侍セリ、其位女御ヨリ下レルモノニテ、多ク五位ニ過ギズ、罕ニ四位ニ進ムモノアリ、亦降リテ女御ト爲ルモノアリ、此稱ハ桓武天皇ノ更衣乙魚ガ、伊呂波字類抄ニ引ク所ノ本朝事始、仁明天皇承和三年ノ條ニ見ハレタルヲ以テ始トシ、冷泉天皇以下亦此職ニ居ルモノナシ、源平盛衰記増鏡ナドニ稀ニ其名見エタルハ古キヲ模シテ寫シ出セルナラン、カク此名ノ絶エシハ、蓋シ尙侍典侍ノ名ヲ以テ、御疑ニ侍スルモノアルニ由レルナルベシ、

〔空穂物語〕藏ひらき上上鯉さヒなどは、この頃こうみ給へる、どきのかういの御もとに奉り給へり、

〔伊呂波字類抄〕加三更衣カウイ

〔名目抄〕人ヒト體タテ更衣カウイ

〔後漢書〕三孝章永平年號十八年十二月癸巳、有司奏言、略臣愚以爲、更衣在中門之外、處所殊別、

〔河海抄〕更衣事

案之、更衣は便殿なり、主上御衣など著しかへ給ふ所なり、故に號更衣、又疑側の別殿なる故に、更衣を御息所とも稱するか、休息の儀なり、水原抄には、更衣後に御息所と見えたり、猶異進の儀歟云々、

具數

初見

〔西宮記〕臨時一清涼記云、更衣具十二人、以尙侍宣下諸司、聽著禁色、

〔本朝事始〕伊呂波字類抄所引仁明天皇承和三年、紀朝臣乙魚授從四位下、柏原天皇武之更衣也、

〔續日本後紀〕仁明承和九年正月戊戌、是日詔授從五位下秋篠朝臣康子正五位下、無位山田宿禰近

〔太平記〕立后事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公ノ御女[○]、^子後妃ノ位ニ備テ弘徽殿ニ入セ給フ、此家ニ女御ヲ立ラレタル事已ニ五代、是モ承久以後、相模守[○]、^北代々西園寺ノ家ヲ尊崇セシカバ、一家ノ繁昌、恰モ天下ノ耳目ヲ驚セリ、

〔新葉和歌集^{十六}〕^{嘉喜門院}後村上女御と申ける比、八月十五夜家に十五番歌合し侍ける時、禁中月といふ事をよみ侍りける、

福恩寺前關白內大臣

おなじくは秋の宮井に澄のぼる光をそへよ雲の上の月

〔大日本史^{八十五}〕^{后妃}歴考本書[○]新葉和歌集門院爲女御時、福恩寺前關白內大臣家有歌合、命題禁中月、關

白所詠有期望女御升后位之意、據之則門院蓋福恩寺關白之女、然福恩寺關白亦未知爲誰女御爲后之文、諸書無所考、

〔嘉喜門院御集〕けんとく二年なが月の末つかた、びはの大なる枝に、つたの紅葉のかゝりたりしをわきてそめけるも、なにどなく御めとさる心ちしてとて、女御殿[○]、^{后某}山後龜よりまゐらせられたりし御返事に、

君がはや秋の宮井にうつるべきほ色をもみちの色にこそしれ

○按ズルニ、此歌マタ新葉和歌集ニ載セテ、其端書ニ、中宮女御にておはしましける比、紅葉の枝を奉らせ給たりければト見エタリ、

御禊行幸裏書

寛和皇后同輿、又有女御代、仍尋舊例、貞觀元慶、皇后不御、又無女御代、河原指圖無其幕所也、天祿、皇后不御、女御代供奉、今案、皇后同輿時、又不可有女御代、然而承平、皇后同輿、又尙侍供奉、寛和依此例也、

〔江家次第^{十四}〕^略大嘗會御禊^{皇后同輿}

早旦御沐浴、^略中次女御代車列立、都芳門外北掖、^略南次皇后出車立其南、^略女御代參入之後、有行幸、

○按ズルニ、女御代ハ大嘗會御禊ノ女御ヨリ起レリ、上ニ舉ゲタル貞觀儀式ニ就キテ見ルベシ、後ニ幼帝ノ御禊ニ女御代ヲ置キシガ、又其後ニハ女御代ハ終ニ御禊定置ノ職ト爲リテ、成人ノ天皇ニモコレアリ、且女御代タル人ハ、御禊ノ後ニ眞ノ女御タル者モ多カレド、女御タラザル者モ亦少カラズ、

〔大嘗會御禊事〕朱雀 承平二年十月二十五日癸酉、女御代御匣殿別當命婦、^略侍藤貴子、^略左

〔榮花物語^三〕^略の條、かくて十月^略寛和^略になりぬれば、御禊大嘗會とて世のゝまりたり、みかど一條^略なゝつにおはしませば、御こしにはみや^略母后^略もろどもにたてまつるべければ、みやのおは

んかたの女ばうなごさま、いみじうのゝまりたり、女御代の御ことなどすべて、よのいみぎき大事なり、

○按ズルニ、此女御代ハ詳ナラズ、大嘗會御禊事、一條天皇ノ條ニ、女御代尙侍綾子、^略藤政家^略女ト疑ヘリ、

〔榮花物語^{十二}〕^略の村、長和五年正月十九日御讓位、^略中二月九日御即位なり、みかど一條^略は九にならせ給、^略中御禊になりぬれば、いみじうつねにもわかつ、^略中女御代には、高松殿の姫君、^略藤原女、

凡此君○高幼稚ノ御時ヨリ賢聖ノ名ヲ揚仁徳ノ行ヲ施ス御情深キ御事共多カリケル○中
 又建春門院御入内ノ比安元ノ始ノ年中宮ノ御方ニ候ケル女房ノ召仕ケル女童二人アリ一
 人ヲ芭葵一人ヲバ宿禰ト云フ葵ハ美形世ニ勝レタリケレドモ心ノ色少シ劣レリ宿禰ハミ
 メ形ハチト劣リタリケレドモ心ノ色ハ深カリケリ主上不慮ニ始メハ葵ヲ召レケルガ後ニ
 ハ心ノ色ニ御耽アリテ宿禰ニ思召ツカセ給ツ類ヒナキ御事ナリケレバ彼女房龍顔ニ近
 付進ラセテ立サル事モナシ白地ノ御事ニモアラデ夜々是ヲ被召御志深ク見エサセ給ケレ
 バ主ノ女房モ召仕コトナク還テ主ノ如クニイツキガシヅキ給ヒケリ此事天下ニ漏聞エケ
 レバ時ノ人古キ謠詠ニ云事有トテ文ヲ引テ云生女勿悲酸生男勿喜歎男不封侯女作妃ト只
 今此女房女御后ニモ立國母仙院トモ祝レ給ナンユハシカリケル幸哉ト披露スト聞召テ後
 ハ敢テ召ル事ナシ御志ノ盡サセ給ニアラズ世ノ謗ヲ思召ケル故也サレバ常ハ御ナガメ
 ガチニテ夜ノオトニゾ入ラセ給ケル

御腹女御

〔儀式〕踐祚大嘗祭儀上

其御襖座雙立五丈紺帷二字○中又去御帷二丈立七丈帷二字爲女御女孺以上候處

〔日本紀略花山〕寛和二年十月廿五日乙丑大嘗會御襖午刻御出左大臣以下參入右大臣○藤原爲

節下太政大臣息女○藤原賴子爲女御

〔本朝世紀〕治暦四年十月廿八日丁卯大嘗會御襖也二條未巳二點御出○後左右大臣内大臣以下

參入左大臣爲節下○中故入道右大臣○藤原賴宗第五女○昭爲爲女御

○按ズルニ嵯子ハ永觀二年女御ト爲リ昭子ハ治暦二年女御ト爲ル此ニ爲女御トアルハ御
 襖ノ女御トナレルナリ大嘗會御襖事ニ共ニ女御代トアレドモ蓋シ誤ナラン

女御代

〔北山抄五〕大嘗會御襖

〔平家物語〕あふひのまへの事

それに何より又哀なりし事には、中宮の御方に候はれける女房の召仕ひける上意思はざる外
龍顔^{○高}にませきする事ありけり、たゞ世のつねあからさまにてもなくして、まめやかに御心
ざし深かりければ、主の女房も召つかはず、却て主のごとくにぞいつきもてなしける。^{○中}此人
女御ささきともてなされ、こくも仙院ともあをがれなんすどて、其名を葵の前と申ければ、内
にはあふひ女御なぞささきあはれける、主上は是をきこしめして、その後はめさうけり、
是は御心ざしの盡ぬるにはあらず、只世のそしりをはからせ給ふによつてなり、されば御な
がめがちにて、つや／＼供御もきこしめさず、御惱どて常は夜のおどいにのみ入らせおはしま
す、其の時の關白松殿^房此よし承りて、主上御心つきぬる事こそおはすなれ、申なぐさめ参ら
せんとて、急ぎ御参内ありて、さやうにえい慮に懸らせましとさんにおいては、何條事か候べき、
件の女房召れ参らすべしと覺え候、まな尋ねらるゝに及ばず、基房やがて猶子に仕候はんと奏
せさせ給へば、主上仰せ有けるは、いざとよそこにはからひ申もさる事なれども位をすべつて
後はまゝさる例もあるなり、まざしう在位の時、さやうの事は後代のそしり成べしとて、聞召も
入れざりければ、關白殿力およはせ給はず、御涙をおさへて御退出ありけり、其後主上縁のうす
えうの匂ひことに深かりけるに、古き事なれども思召出で、かうぞあそばされける、

恐れど色にいでにけり我こひはものやともふと人のとふまで、冷泉の少將たかふさ、是を賜
はりついで、件のあふひの前にたばせられたれば、是を取て懷に入れ、かは打あかめ、例ならぬ心ち出
來たりとてさどへ歸り、打ふす事五六日にして、終にはかなく成にけり、君が一日の恩の爲に、美
が百年の身をあやまつとも、かやうの事をや申べき、

〔源平盛衰記 二十五〕此君賢聖并紅葉山葵宿禰付鄭仁基女事

准女御

假稱女御

〔小右記〕長和四年十月三日、今夜參議通任婚子代女御、前右大臣通兼女御一妹女御尊子

〔日本紀略四七〕天元元年四月十日甲子、左大臣賴忠二女蓮子入掖庭、准女御被免簪、

〔仁和寺諸堂記〕威徳寺 白河院御寵人東御方國女御、件人建立本佛百體大威徳也、

〔續世繼宇四〕白河院の御世に、ささき御息所などかくれさせ給ひて、ざるかたゞもおは

せざりしに、白河殿ときこえ給ふ人おはしなましき、その人待賢門院をば、やしなひたてまつり給て、院も御ひすめとてもてなしきこえさせ給ひしなり、その白河殿あさましき御すくせおはしける人なるべし、宣旨などはくだされざりけれども、世の人は祇園の女御とぞ申めりし、もとより彼院のうちのつばねわたりにおはしけるを、はつかに御らんとつけさせ給て、三千の寵愛ひどりのみなりけり、たゞ人にはおはせざるべし、加茂の女御と世にはいひて、うれしきいはひとて、あねおとうとのちにつゝきてきこえしかば、それはかの社のつかさ重助がむすめどもにて、女房にまゐりたりしかば御めちかゝりしを、これははつかに御らんとつけられて、それがやうにはなくて、これはこどのほかにおもきさまに聞え給ひき、

〔源平盛衰記 二十六〕祇園女御事

古人ノ申ケルハ、清盛ハ忠盛ガ子ニハ非、白川院ノ御子也、其故ハ彼帝河○白威神院ヲ信ジ御坐テ、常人ニ御幸ゾ有ケル、或時祇園ノ西大門ノ大路ニ、小家ノ女ノ怪ガ水汲桶ヲ戴テ、麻ノ袂衣ノツマヲ舉ツ、トビ幹ニ桶ヲ居置テ御幸ヲ奉拜、帝御目ニ懸ル御事有ケレバ、還御ノ後彼女ヲ宮中ニ被召テ、常ニ玉體ニ近ヅキ進セケリ、祇園社ノ異ニ當テ御所ヲ造テ被居タリ、公卿殿上人重キ人ニ奉思テ祇園女御トゾ申ケル、角テ年比ヲ經ル程ニ、小夜深人定テ御ツレ、ニ思召出サセ給テ、祇園ノ女御ヘ御幸アリ、

○按ズルニ、吾妻鏡正治元年八月十九日ノ條ニ、鳥羽院御寵祇園女御トアリ、恐クハ誤ナラン、

〔三代實錄五〕光孝仁和三年五月廿四日丁酉、勅爲仁明天皇女御藤原氏子、於嘉祥寺修轉念功德、餽料信濃調布二百端、公卿以下參會行事、女御者仁明天皇第八親王之所生也、

〔日本紀略五〕冷泉安和元年七月廿五日丙午、於法性寺有先皇上、女御芳子周忌御熊、

〔大鏡三〕太政大臣實親齊敏の君の御をのこゝ御おはぢをのゝみやのおどゝ實親藤原御子にし給ひ

て、さねすけとつけたてまつり給ひて、いみじうかなしうし給ひき、このおどゝ略中北方は花

山院の女御女王、ためひらの式部卿の御むすめ、院そむかせ給ひてこの女御殿にさぶらひた

まひしなり。略下

〔榮花物語十一〕一條院うせさせ給ひて後、女御更衣の御ありさをもさまゝにきこゆるに、承

香殿の女御藤原に、故式部卿宮の源宰相の君頼定の君忍びつゝかよひきこえ給ふ程に、右の

おどゝ父元子光きゝ給て、まことそらごとあらはしきこえんとおぼしけるほどに、御めにまこと

なりけりと見給ひてければ、いみじうむつからせ給て、さばかりうつくしき御ぐしを、てづから

尼になしたてまつり給ふに、うき事敷まらずみえたり、あさましうあやしきことによ人も殿の

うちにもいひさわぐ程に、其のちもなはまのびつゝかよひ給ひければ、そのたびはいづちもい

づちもおはしねどあれば、女御の御めのとゝあるは、實誓僧都といふ人のくるまやどりなり、そ

の家にわたり給ぬ宰相もさるべきにこそと思ひつゝおろかならずかよひ給ふ程に、おのづか

ら御ぐしなどもめやすくなりもていく、あやまうひがくしきことによの人も思きこえたり、

おなじきわかきんだちといへ共、これは村上の四宮源帥殿の御むすめのはらなれば、いとも

きよくものし給を、あやにくにこの殿の給をぞかへすゝあやしき事に人きこゆめる、又くら

べやの女御藤原と聞えしには、母の藤三位いまの宜耀殿の御はらからのすりのかみ藤原

をどあはせ聞えためる、

下弘宗王等監護葬事、貞子者、右大臣贈從一位三守朝臣之女也、風容甚美、婉順天至、仁明天皇爲儲貳、以遷入宸宮、寵愛日隆、天皇踐祚之初、天長十年十一月授從四位下、承和六年正月進爵授從三位、嘉祥三年七月加正三位、先是誕育一皇子、二皇女、皇子者第八成康親王是也、雖不登后位、而宮闈權勢无與、爲熾私加愛、終始無衰焉、

〔日本紀略^三〕天曆元年十月五日丙戌、女御藤原述子卒、東三條^{五年}、依抱瘡之間產生也、號弘徽殿女御、左大臣^賴實女也、十三日甲午、此夜葬弘徽殿女御、天皇詔贈從四位上、勅使左大辨朝朝臣、左近少將國紀等讀宣命文、

〔日本紀略^八〕寬和元年七月十八日辛酉、未刻女御藤原悌子卒、大納言爲光卿女也、懷孕之間、日來病腦天下哀之、件喪家前播磨守藤原共政室町西春日北宅、廿二日乙丑、贈故女御悌子從四位上位、記宣命等藏人式部少輔藤原惟成作之、

〔本朝世紀〕康和五年正月十六日丙申、今夜子刻女御有御產事、^{皇子、五條北、高倉四、右少辨、頭顯隆朝臣宅也、}一天之歡何事如之哉、廿五日乙巳、上皇^河爲令奉見皇子給御幸于女御^{自者御子顯寺、有勅賞、正五位下、藤原朝臣高松宅也、}幸去、^{佐途路之間、世爲壯觀而已、亥刻女御俄卒去、^{佐秋廿八、從四位下也、}一日之內、哀樂相變、視聽之處、莫不悲歎者、}

歟、上皇忽又御幸、令奉迎皇子給畢、女御從四位上藤原朝臣苺子薨、女御者正二位行大納言兼陸奧出羽按察使藤原實季卿女、母前太宰大貳從三位藤原經平卿女也、承德二年十月廿九月初入內、十二月爲女御、^河康和元年正月、授從四位下、五年正月十六日誕第一皇子、其後經十箇日薨、逝、二月

三日贈從二位、殯殮之日也、薨時春秋廿八、二月三日壬子、權中納言季仲^{從四位下、并廢朝事、三々無薨奏廢朝之條去、}院宣參入、^{院宣參入、依參議家政參入、被行故女御贈位事、^{今體從二位、}并廢朝事、}位源隆子時例也、家政卿給宣命、前常陸介源經仲朝臣給位記、^{依、後老以各參向女御本家、^{口町、尻}}

次被仰廢朝事、今夜被御葬送也、^{爲戶野南、通云々}

〔榮花物語松の下枝〕四月〇延久五年廿九日、御くしおろさせ給〇後三條どのゝしる〇中つひに五月七日うせさせ給ぬ、みやゝゝ女ゐんのおぼしめしまさはせ給ふさまかぎりなし、もの覺えさせたまはぬ御心にも、その日やがて一品宮〇親王女御〇殿あまにならせ給ぬ、のちにぞ戒などもうけさせ給ける〇中あさましくわはれなりともおろかなり、わかくめでたき御くしどもをそがせ給て、いかにめでたくおはしますらん、かたちかへつれば四五十の人だに、わかくこそ見ゆれ、ましていかにおはしましけん、御いみのほかに堀河女御〇藤原も成給ぬ、はり河の院におこなひてものせさせ給もあはれなり、

〔風雅和歌集雄下〕後醍醐院かくれ給ける十月に、女御榮子〇二條さまかへ侍ける戒師にて、その哀なき申とて讀侍ける、

二品法親王慈道

おもひやれふかき涙の一しはも色にいでたるすみ染の袖

〔續日本後紀仁八〕承和六年四月乙卯、女御從四位下藤原朝臣淨子卒〇大日本故紀伊守從五位下綱繼之女也、天皇納之、謚三皇子一皇女也、宗康時康新子是也寵愛之隆、獨冠後宮、俄病而困、篤載之小車出、自禁中、纔到里第、便絕矣、天皇聞之哀悼、遣中使贈從三位也、左京大夫從四位下藤原朝臣文山、少納言從五位下藤原朝臣秋常等並監護喪事、

○按ズルニ、此女御ハ、光孝天皇ノ御母タルヲ以テ、天皇即位ノ後、追尊シテ皇太后ト稱シ、墓ヲ改メテ山陵ト號シ、國忌齋ヲ置キ、十陵ニ列シ、守戸五戸ヲ置ク、蓋シ女御ニシテ皇太后ノ稱ヲ追尊スルモノ是ヲ始メトス、

〔三代實錄清和〕貞觀六年八月三日丁巳、是日仁明天皇女御正三位藤原朝臣貞子薨、勅贈從一位、葬深草山陵兆域之内、仁明天皇在平昔、賜顔色所許也、遣參議大藏卿正四位下源朝臣生散位從四位

使憲親_{布賜}女子名字_{衣賜}、衣賜二字於禮紙一曰、非可奏此書爲令知汝賜之、

○按ズルニ、多子、當時未ダ女御タラズト雖モ、已ニ入内セシヲ以テ、此叙位アリシナラン、

〔續史愚抄_{後二條}〕正安四年二月一日丙寅、此日藤原朝臣忻子_{右大臣公季女}、叙從三位、勅使藏人頭

大藏卿經繼朝臣、參一院御所申入云、

〔近代御系譜〕今上御母、皇太后藤原夙子、九條從一位尙忠公女、中嘉永元年十二月七日叙從三

位、同月十五日入内、十六同月十六日女御、同六年五月七日叙正三位、爲准三后、

〔文德實錄_三〕仁壽元年二月丁卯、正三位藤原朝臣貞子出家爲尼、貞子者先皇_明仁之女御、風姿魁麗、

言必典禮、宮掖之内仰其德行、先皇重之、寵數殊絕、雖有内愛必加外敬、先皇崩後、哀慕追戀、不肯飲食、

形容毀削、臥頭之下、每旦有涕泣處、左右見之不堪、悲感、遂爲先皇誓入大乘道、戒行肅修、無有違顛、道

俗稱之、

〔三代實錄_{光孝}四十九〕仁和二年十月廿九日甲戌、正二位藤原朝臣多美子薨、右大臣贈正一位良相朝臣

少女清和太上天皇之女御也、性安詳、容色妍華、以婦德見稱、中天皇入道之日、出家爲尼、潔齋勤修、

晏駕之後、收拾生前所賜御筆手書作紙、以書寫法華經、設大齋會、恭敬供養、奉酬太上天皇不次恩德、

也、卽日受大乘戒、聞而聽者、莫不感歎、熱發奄薨、

〔日本紀略_五〕康保五年七月十五日壬寅、今日先帝_上村女御從四位上莊子女王、并更衣藤原祐姬

等爲尼、

〔小右記〕天元五年四月九日庚午、傳聞昨夜二品女親王_{承香殿女御}、一條女御子、不使人知、密親切髮云云、或說

云、邪氣之所致者、又云、年來本意者、宮人秘隱不云、實誠早朝義懷朝臣參入、令奏此由云云、又云、是非、

多切唯額髮許云云、頗似秘藏詞、

〔日本紀略_{後十三}〕萬壽三年十二月十八日庚寅、前女御藤原義子_{女御}、一條落髮、

叙位

位童女出來行酒統子提爾後給御返事授祿后宮祿者下地隨仰歸參御返事祿陣中之間御返事令持小舍人立後祿物令持從者在後於昇殿之所自取御返事以祿懸脇參上方祿所若參置御座參朝于飯方者置巴爾馬陣御返事了退去而已此儀初度御書若年首事也當時無酒祿等但陣中御書自持從殿々之上往反有祿者即以自持不具小舍人凡御書使路頭雖逢大臣不下車云々而今樣令隱御書猶下云々

〔柱史抄〕位記

女御

中務德教已備芳徽久彰婦人之所儀形管之所記宜增榮饋式照恩輝可依前件主者施行

〔續日本後紀十四〕仁明承和十一年正月壬辰皇太子文入親於清涼殿拜舞給被授所生女御藤原氏順子從三位也

〔文德實錄三〕仁壽元年九月甲戌散事從四位下百濟王貴命卒中嵯峨太上天皇御宇之時引爲女御中弘仁十年正月叙從五位上十月十一日叙從四位下

〔三代實錄清和一〕天安二年十一月七日甲子是日進文德天皇女御從三位藤原朝臣古子階加從一位

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年十月廿九日甲戌正二位藤原朝臣多美子薨中貞觀六年春正月朔日天皇和加元服此夕以遷入後宮有專房之寵少頃爲女御是年秋進從三位九年加正三位元慶元

年授從二位七年至正二位德行甚高爲中表所依懷焉

〔權記〕長保二年八月廿日甲子勅云女御元子叙從三位事仰左大臣右大臣藤原顯光息女切々有被常又非常之事也

〔台記別記〕久安四年八月九日甲子今日女子多子九年叙從三位本無自昨日修除家中大炊御門北高右大將敷砂今朝余出巡檢平刻右大將實來余示依衆議將用多字之由對曰諾未刻範家來招之

女御○後桃園后近衛維子 入内ニ付獻上物

禁裏江

御大刀

御馬代黃金三枚宛

女御江

白銀貳拾枚

松平加賀守○以下人名略

當十二月上旬女御入内ニ付爲御祝儀使者を以右之通可有獻上候使者衣服勤方日限等者於京都土井大炊頭江承合候様可被申付候、右之通可被相達候

十月

〔天保集成絲綸錄〕文化十四丑年十一月

大目付江

女御○仁孝后 入内ニ付禁裏女御江諸家より獻上物使者來年正月十六日十七日頃迄ニ不殘京

著物揃候様可致旨可被相達候、

十一月

御書使

〔侍中群要〕御書使事

賜御書之後、置日記辛○以櫃上或置所御榻上以無人令主殿司守於直廬理鬢髮整衣服畢取御書退出陣中之間、令持小舍人小舍人令著表衣也前行至門乘車若無自取乘在門之車令相觸車主參其所於中門邊自取御書參上本家儲座召之勅使進就簾前以膝可懸而獻入御書頃之女房自簾中出至看物可

白銀貳十枚宛

松平加賀守○以下十人略

禁裏江

御大刀

御馬代黃金貳枚宛

女御江

白銀拾枚宛

松平讃岐守○以下九人略

禁裏江

御大刀

御馬代黃金壹枚宛

女御江

白銀拾枚宛

松平左京大夫○以下五人略

來月下旬女御入内ニ付、爲御祝儀以使者右之通可有獻上候、使者衣服勤方日限等者、於京都酒井讃岐守江承合候様可被申付候、右之通可被相達候

十月

〔天明集成絲綸錄〕明和九辰年十月

大目付江

松平新太郎

松平大隅守

松平相模守

松平安藝守

松平大膳大夫

細川越中守

松平右衛門佐

松平丹後守

藤堂和泉守

松平龜千代

右者禁裏_江 御大刀御馬代黃金三枚ヅ、女御_江 白銀二拾枚ヅ、

松平越後守

松平讃岐守

保科筑前守

酒井雅樂頭

右者禁裏_江 御大刀御馬代黃金二枚ヅ、女御_江 白銀十枚ヅ、女院御所_江 同斷、

佐竹修理大夫

森内記

松平淡路守

丹羽左京大夫

松平出羽守

松平大和守

本多内記

松平下總守

松平土佐守

有馬中務大輔

蜂須賀千松

上杉喜平次

右者禁裏_江 御大刀御馬代黃金三枚ヅ、女御_江 白銀十枚ヅ、

松平但馬守

伊達遠江守

宗對馬守

織田山城守

右者禁裏_江 御大刀御馬代黃金一枚ヅ、女御_江 白銀十枚ヅ、

阿部豐後守

稻葉美濃守

久世大和守

土屋但馬守

板倉内膳正

牧野佐渡守

松平美作守

右者禁裏_江 御大刀御馬代黃金一枚ヅ、女御_江 白銀十枚ヅ、女院御所_江 同斷、

〔寶曆集成絲綸錄〕寶曆五亥年十月、女御_{〇桃圖后} 一條富子 入内ニ付獻上物、

禁裏_江

御大刀

御馬代黃金三枚宛

女御_江

一 衝重 日別廿前

十日 隱岐 十一日 佐渡 十二日 飛騨

一 露顯日饗

駿河

一 内臺盤所院飯

安藝

參賀進獻

〔台徳院殿御實紀 五十二〕元和六年六月十八日、都にてはけふ女御後水尾后入内し給ふ、略

廿二日、内にはけふより廿四日迄、攝家清華の人々、あるは法親王たち女御の新殿へ参りあひ、おもひおもひに御祝ひのもの奉りことふかる、權中納言の局萬にうけはり沙汰す、廿五日、武家の輩とりく、御祝物さゝぐ、酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝はじめ、内にも女御の御方にもささげものすれば、兩傳奏御使して、この輩にも御大刀を給はり、女御の御方よりも金に御衣そへてかづけられ、女院よりも時服下さる、

〔享保集成縁繪錄 三〕寛文九酉年間十月

一來月廿一日、女御靈元后御入内ニ付而、爲御祝儀以使者、此書立之面々可被差上之旨、自老中

被相觸之所謂、

尾張中納言殿義光 紀伊中納言殿貞光 甲府宰相殿重綱 館林宰相殿吉綱

水戸宰相殿圓光 松平加賀守利綱 松平越前守通光 井伊掃部頭隆直

右者禁裏江御大刀御馬代黄金三枚ヅ、女御江白銀貳拾枚ヅ、女院御所江同斷、

尾張中將殿 水戸少將殿

右者禁裏江御大刀御馬代黄金中將殿二枚、少將殿一枚、女御江白銀十枚ヅ、

一綾掛十二重

伊豫

播磨

因幡

土佐

越中

伯耆

已上各二重

一平絹袷廿六重

越後

遠江

已上各三重

駿河

能登

出雲

甲斐

相模

讃岐

備中

長門

美作

常陸

已上各二重

一濃袴三十六腰

上總

下總

信濃

周防

安房

伊豆

淡路

攝津

河内

和泉

紀伊

出羽

已上各三腰

一打衣四領

上野

下野

已上各二領

一襪

十日播磨 十一日伊豫 十二日近江

入內用途

〔實久卿記〕嘉永元年十二月十五日乙卯、此日女御○九條入內也、已刻艷書使右中將實德朝臣參九

條亭、酉刻許入內也、先出車一兩、次殿上人實城政季、隆晃、宜諭、隆賢、親賀、在光等朝臣、藤原助胤、次諸

大夫六人、次車○八人、次後騎俊克朝臣、次公卿左大臣、○向日野大納言、○九條大納言、○幸姊小路中

納言、○公新嘗中納言、○左大辨宰相、○新右三位中將、○師等乘車扈從、亥刻許出御于夜御殿、

〔公卿補任〕○孝明弘化五年○嘉永元年十二月七日女叙位○藤原子、宣下、○消息上卿姊小路中納言、奉行俊

克朝臣、○中十五日、從三位藤原鳳子入內、同日轝車○從三位、○藤原子、宣下等、奉行俊克朝臣、十六日女御○從

位○藤原鳳子、宣下、○消息上卿姊小路中納言、辨光愛、奉行俊克朝臣、

〔台記別記〕久安五年十月廿五日癸酉、充催入內諸國所課、

諸國所課、久安五年十月廿五日催之、

一差筵

伊豫 讃岐

備中

備後

安藝

周防 美作

已上各六枚

一小筵十枚

若狹

一女裝束十三具○織物

○唐衣

美濃 尾張

但馬

加賀

參河

武藏

已上各二具

若狹一具

殿の御規式は、おぼろげならぬ御事なればしるすにおよばず、御對面は時を點じて、亥の二ツ計とどきこえける、女御の御方より御祝の奉りもの、

御さうぞくの々

夏冬

御吳服

百

銀子

清涼殿よりつねの御殿へあがりて、御式三獻の後、叙覽に備へ奉らるゝとぞ、三五の日までとりどりの御ことぶき、あけてかむふべからず。略下

〔百一錄〕元祿九年十月朔日、有栖川宮親王幸仁姫君輝宮御方子爲女御、東山可有入内之由議定、

十年二月廿五日、有栖川宮息女輝宮御方爲女御代入内、已刻事了、出車一兩轎牛駕之、次前驅七輩、扈從五輩計供奉、奉行今城黃門、御車兩牛駕之、

〔百一錄〕享保元年十一月十三日、午刻女御中御入内、近衛前攝政照息女子十七歲、扈從廣橋

亞相、廣橋黃門、水無瀬相公、小倉相公四人也、各轎自後令持、前驅十人、日野西辨、七條少將、差次藏錦小路也、此外云々、十五日、入内。略中諸家中御大刀計獻上于禁裏、女御御方由緒有之輩御着獻上、

十八日、始入御于女御御方、廿一日、松平出羽守、中條對馬守參内、參院、女御入内御使也、布衣白張素襖十餘輩出羽守召具、近來供奉之不見及珍奇也、三家使者今日勤仕、廿五日、老中國守十萬石以上使者御大刀馬代獻上、但若老中者不獻之、朽木間部等使者參上也、爲侍從以上也、廿六日、上使御暇被仰出、

〔二條家系圖〕吉忠——女子

永姫、諱舍子、享保十八年九月廿八日東宮町爲御息所、享保廿年十一月三日爲女御、元文元年

十一月十五日入内、同五年五月廿七日叙從三位准后宣下、上御坊城大納言後〇下略

御句唐櫃

一荷

御吳服唐櫃

十荷

天皇 御裝束唐櫃

右同 御吳服唐櫃

右各唐織縫御紋之覆掛之

綺羅をみがける御道具目をおどろかす計也、此持人數千人、あさぎ染の素袍を著す、執事の陪臣是を奉行す、其外の財物雜具、下つかたの女房前後の日にさし遣されて、穩便の御沙汰と云々、かくてより月卿雲客諸司格勤の輩、其程々に供奉のさうぞくを刷ひ、巳の時ばかりに二條の御所へ御むかひにぞ參られける、各殿中へ入給ひ、しばしが程ながら位次に隨ひ座につき給ひ、あるじまうけをとり、盃のめぐりも過ければ、時もやう／＼至りぬと行啓をすゝめ奉る、かすかずの御いはひ、どりわきよろづの作法をはらひの輪とて、へんばいをふせせらるゝ事までおこなはれ、出御も氣色たちぬれば、日亭午におよび供奉の行列次第にまかせて、われも／＼と出立給ふ、中略行列の次第をみださず、前後を圍めぐらし奉り、花軒香車をどゝろかし、薔々蕩々として綺羅天にかゝやき、威勢地をうごかすよそはひ、見物の貴賤渴仰の頭を傾け、感情の聲をのめり、かくて大内に入らせ給ふより、扈從の面々そのさま／＼に潜り、新造の御所へ御車をめぐらさる、武家の隨身は唐どの御門の左右をわけて床机につらなり、御壺の召次は中門の間の白洲に蹲踞す、御車よせまで廣橋前内府三條の亞相出ひかはれ、帷幄をひきはへ御車を入奉る、御供の車はつき／＼に軒の外よりおり給ふ、おの／＼五つぎぬに緋のはかまを著し、かんざしをかうぶり、つま紅のあぶぎをかざし、青女房に裙裳をひかせてぞ入られる、關白殿近衛殿一條殿をはじめ奉り、公卿の人々中門のみぎりに揖してひかへ給ふ、諸司御隨身のやからに至るまで其去りへに伺公す、伶倫はおこたらず千秋の樂を奏し、其側に候せり、御車おさまりてより、内府亞相庭上へおり、三公へ式對ありてどもに殿中へ入給へば、參勤の人々みな退き出侍りぬ、内

道をつくり、辻がための警衛、ものゝふの陪臣に仰て、所々をわちあてらる、凡此度の大營には天が下の大小名をもめしあつめてこそ行はせ給べかりしを、もとよりも儉約を用ひ奢侈をいさしめ、萬民のつひえをおぼしやらせ給ひしかば、かねて國々よりの參勤はどゞめ給ひ、だゞ御重代の大名、都近き分國の人々計ぞ召れける、前二三日の程より、見物の輩思ひの支度をかまへ、あるひは堀川のほとりに棧敷をかきならべ、あるひはかゞの葎格子さし離ちて、錦繡のどばり繪かけるすだれをかけ、晴をわたして飾あへり、洛中の貴賤、遠境の道俗、十七日の暮かけて夜もすがら行つどひ、家居にもれし輩は、この辻かしこの軒の下端まで、尺地もあらず充満ちて、東雲の空も明行ば、警固の衛士辻々をかため、二條の御所より都芳門の砌まで、十餘町のはど大路の左右につらなり、往還をたゞし、非常をいさしむ、朝まだきよりそゞぎし雨もや、晴て、辰の一てむより御物の具をぞ送られけり、

長櫃

百六拾掉

四方行器

十荷

御屏風箱

三十雙

御簾箱

一對

御几帳箱

二荷

御幕箱

三

御長疊箱

一

御丸行器

十荷

御小行器

五荷

御膳行器

二荷

御辨當

五荷

御葛籠

十荷

御挾箱

一荷

御擔

二十荷

御長櫃

百掉

御琴箱

三

廿一代集箱

一

御黒棚

一

御厨子棚

一

御貝桶

一荷

つねの御所にて三こん参る、まよこんはうそう、二こんかべに御ひら、三こんふな、御はいせんす
け殿ながはしいよ殿、女御はいせん、女中御どをりあり、そのうち御ゆどの、上御たき火にて御
はんじゆくもしたふ、日しゝ也、めでたしゝ、

○按ズルニ、女御入内ノ儀ハ、南北朝ノ頃ヨリ久シク廢絶セシガ、是ニ至リテ、豊臣秀吉之ヲ再
興セシモノナリ、

〔視聽草五集〕女御入内之記、

こゝに大樹○徳川秀忠す系の御姫君、御年比に成給しより、たゞならぬ御瑞相ありて、御かしづきも
あさからぬおはしけり、女御にそなはらせ給ふべきにさだまりぬれば、辭し給ふべきにもあら
ず、あらかじめ御まうけし給ひ、元和六のとし五月はじめの八日に、江戸の柳營を出御ならせ給
ふ、執事酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝、ならびに松平右衛門大夫正久以下の侍あまた扈從せ
られ、前後の警蹕瑤與侍女の乗物、御調度の運送、道すがらの行粧膳次を正し、事ゆへなう同じき
後、の八日の日都へいらせ給ふ、見物の貴賤ちまたをさへぎり、阡陌の紅塵雲に連る、二條の御所
に移らせ給ふべければ、内どの御使もたび重り、まして諸家の輩参りつどへり、かくて御入内の
式法さまゝに、にとりつくのはせ給ふ、天文曆の博士に仰せて其良辰をえらばせ、みな月十八日
にぞ定らる、先は國母の女院にうつらせ給ふべき宣旨ありて、舊例にもいやまし御儀式ことと
とまう催され、公卿大夫に至るまで、供奉のよそはひ華麗を盡し、六月二日に鳳輦をめぐらし三
つの位にあがらせ給ふ、めでたかりし次第也、同じき十二日には、關白殿、近衛殿、八條殿おのゝ
二條の御前へ渡御ありて、忠世利勝以下の侍臣等をめされて、其事の法要をゆだねてのたまは
せきかせらる、殊には御調度の具をこゝ高覽に備ふ、おほみきなど奉り、御土器とりゝにし
て還御ならせ給ふ、やうゝ其日も近づきにければ、二條の御所より大内までのあひだ、行啓の

戶北掖^{侍之簡}、又同朝臣書長仰書、次政所吉書、^智入知家事主稅允佐伯貞俊^年覽、親隆朝臣、親隆朝臣
見了覽、余次就初所付女房覽之、如名簿返給、下政所成返抄、加判之後、親隆朝臣向侍所召仰所司、^仰
書次下長仰書於所司親賴、次侍所吉書、職事賴方書之、下所司親賴、^{不覽余及女御、次家司親隆朝臣}
事侍等著臺盤、^{先非備置、置大夫不著臺盤云々}、食後書著到、^{一通家司、一無官侍先例依蔭定座次今度}
勘余家上日多少定之、紀久光未參、仍在最末、源宗澄少上日、而千覺加憐殊甚、仍不依上日次爲第二
簡、是依千覺之功勞也、衆庶勿憂、

〔玉海〕承安元年十二月十四日甲寅、此日院姬君^{○後白河養子、平治盛女德子、入內也、○中} 廿六日丙寅、此日女御

宜旨下、露顯日也、下官不出仕、仍不能記、主上^{○高倉}渡御、御共人攝政、左大臣、內大臣、平大納言、右衛門
督、權中納言時忠等也、^{永久五人、今度六人、}

〔百練抄^{十一}〕元久二年三月一日、有宣下、以無位藤原麗子叙從三位、四月七日、女御^子有入內

事、十三日、今日女御有露顯事、主上渡御、女御御方又被下、女御宜旨、政所并侍始、

〔百練抄^{十四}〕仁治二年十二月一日甲寅、被定女御入內事、^{御名字}被叙從三位事、十三日丙寅、今夜

女御入內也、^{故攝政(藤原實賴)御女、母攝入道、}

〔續史愚抄^{後醍醐}〕元弘三年十二月廿八日、此日左大臣^{道平、前}女藤原朝臣榮子^{母從三位、藤原朝臣、隆子、爲女御}

入內、以安福殿爲曹子、

〔尊卑分脈^{藤原}〕

○道平^{二條} 良基

女子^{後醍醐院女御坐、子、安福殿、祇候、}

〔御湯殿の上の日記〕天正十四年十二月十六日、このへどのひめぐみ、^{○近衛前子、女御、}久女前子くわんばく殿^{○秀吉}
吉ようしにし参られて、女御^{成后}に御参り、御たる十かう十か参る御くしわけ御さたありて、

執御劍女房經本路還御成難朝臣前行於晝御座範家取御插鞋次女御家司重方事行相具祿辛櫃

五合退紅下都二十人參內御方二棟廊東面妻戶下大內儀參高道戶下而今隨便喧耳頌祿色目教長卿在堂上二棟行

事先御乳母祿公親朝臣公保昇裝束置鬼間長押上他四位取絹裏祿置同所了兼長卿掃笏得公不

之取絹裏祿置臺盤所下自臺盤歸出復取絹裏祿置臺盤所安東甚重不能獨持又無振笏退出與

侍掌侍祿殿上四位已下取之自臺盤所東面簾奉入之或置簾前發子典侍祿四五位取之掌侍之命婦

藏人得選祿女官取置之鬼間長押下外對東訖使女官獻碗飯於臺盤所行事盛立二棟廊東

所東而獻之其路或經二棟廊內或經此間下家司貞俊頒女官祿下家司取之非藏人別賜之以總此

間讀誦殊甚逸興暗催余向二棟廊今麻呂見之御服所命婦望祿懇切雖無先例余仰行事賜之下取

之以殿上人祿用腰充之白帶一重濃粉一腰也為令衆心歡也得選已上祿姿女官掠取仍賜祿法於藏人邦綱仰健可頒之

由而勾當內侍常陸使女官取入祿於簾中頒之仍邦綱付祿法於彼內侍內侍賜祿了教長卿退出余

參御前今麻呂即上御冠御衣紅生渡御女御廬此間及暗今麻呂把御廬座女御服日來所著之白衣

候御前殿上人藏人等下格子御上女房乍著打出衣顏退入殿上上簾所出次上覽沃懸地調度余所

也此間女房中將取燭盃候御前著打出頃之選御余後其後撤沃懸地調度立前齋院調度度與一具也

明日使盛憲返奉沃余歸女御殿上先是撤此間親隆朝臣參入依非殿上主上次進簡及辛櫃於臺盤

所被下女御宣旨復勘可造兩所簡侍所蓋之日時不覽余令內匠寮造之察木工令盛經公基等書簡

及袋銘臺盤所簡式部大夫盛經書之侍所問同公基書之袋銘兩方俱盛經書之侍寶門院簡盛經書

而非可是于今繪存仍先健盛經而申力疲目暗不能書二簡之由仍副公基書二人書之不知先例然

副簡入進臺盤所辛櫃傍立簡臺盤上都東方侍之間在四辛櫃在無官名簿盛筥謂覽之親隆朝臣先

覽余見訖返給親隆就殿上上簾付女房覽之女房覽女御返給親隆朝臣取之退下之間余仰侍長二

人源滿義所司二人五位前內藏助為經六親隆朝臣名簿與書仰書納朱漆辛櫃簡入置侍所臺盤

次口但以多子二字上達部未參集相待之間時刻推移及未刻參集即相率列立射塲立部內家成射

射上達部一列西上北面而余右衛門督家成卿上東門院女御宣旨之日候忠基朝參議公等卿右宰相

不立之然則同姓人雖非親族皆立他姓人雖親族不立自明仍家成卿依余立之參議已下大納言信朝

臣雖可立拜依外記進參仍不立之勅北山備忘補女御事仰辨官作宣旨符內外取公議已下大納言信朝

外暇女御母同姓人可立拜列歟而同上東門院母族源氏也殿上一人列西上北面而余右衛門督家成卿

彼時派兵不立拜列與北山抄不同今用上東門院母族源氏也殿上一人列西上北面而余右衛門督家成卿

公保侍從師長右衛門佐實定殿次余招公通朝臣即出列來前使伴朝臣奏候由公通朝臣昇自小板

敷先解御簾進御所奏之退下於小板敷下仰曰聞食ッ宣余已下同音稱唯公通朝臣復列之後

俱拜舞了余昇自小板敷參御前公能卿候殿上他卿皆向女御宿座著簪座次公通朝臣應召參上奉

仕御裝束御冠直衣紅打衣白御衣二領紅出御暫御書御座邊此間殿上口四位已下卷書御座御簾

今日御物忌仍垂御簾依波御事可貴謹被藏人等卷渡殿南面御簾次左中將成雅朝臣把笏不執書

之若慈今朝可登之今始登之可貴謹被藏人等卷渡殿南面御簾次左中將成雅朝臣把笏不執書

御座御劔參入藏人右少辨範家奉御插鞋次經對西簀子渡殿南簀子人自同渡殿中間南面格子出

自同中間北面南妻戶經同小簀子女御座舍東簀子等余公能卿公通朝臣從家今應昌人自殿間

女房不出衣口簾余奏慶庭御座成雅朝臣付御劔於女房堀川忠基朝臣女擇英堀川持之四方手持御劔

出衣余自同簀子北行著端座公能卿公通朝臣範家等經東舍西簀子渡打板著座藏人右近將監爲賴取

厚衣余自同簀子北行著端座公能卿公通朝臣範家等經東舍西簀子渡打板著座藏人右近將監爲賴取

之人也此外右大納言信朝臣來如殿上人唯次一獻頭中將公通朝臣勸盃藏人右近將監爲賴取

公通朝臣公現朝臣依主上渡御提御笏著座次一獻頭中將公通朝臣勸盃藏人右近將監爲賴取

瓶二獻右宰相中將教長卿勸盃俊光殿上取瓶此間後右大臣從之能通參云云經東舍西簀子渡打板經座未著與座三獻藤宰相公隆卿勸盃治部大輔雅賴殿上取瓶居汁物余手長藏人有少辯

渡打板經座未著與座三獻藤宰相公隆卿勸盃治部大輔雅賴殿上取瓶居汁物余手長藏人有少辯

馬權頭顯定納言宰相手長右近少將公保依主上渡御殿四獻自土新中納言忠基卿勸盃公保上

上人役之役送告六位須五位交上手長役送者持御劔笏四獻自土新中納言忠基卿勸盃公保上

人取瓶余強之右府遂取之右府數五獻右兵衛督公能卿勸盃右馬權頭顯定殿上取瓶羞賀賀朝臣

不待居了食之次賜殿上人祿藏人取之不著座者持賜之藏人祿請次余右大臣公能卿起座余右大

臣候御在所東簀子公能卿渡打板經東舍西簀子參食上出自初人間余奏範家獻御插鞋成雅朝臣

入來上達部

右大將實能

右兵衛督公能

新中納言忠基

堀川宰相中將經定

右宰相中將教長

三位

中將兼長

右大辨實信

殿上人

光忠朝臣

公親朝臣

顯定

成隆

公保

能忠

教良

師長

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉早旦納插鞋於余幸櫃先取出心裏眼夫人取插鞋授余放一本鳥其次女房筑前謂有密夫早離別密取納燈盃之櫃日來所納之櫃也所生著炭之火賜敦任敦任指實

賜知家事主稅允貞俊而布衣貞俊妻早天然貞俊先向進物所令生著燈於炭次持向大炊殿結小路令

生著燈於炭歸參後使女房少納言取出餅筥自製御所二階余取之賜敦任敦任指實向西築垣下女

是生氣方也當四方令埋之貞俊同口一所舍人取畢持參筥正答著付女房此間備饗膳於殿上女

房出袖如三箇日已刻許著束帶吉服三位畫御座邊催行雜事此間三位整衣裳蘇芳織物衣八領青寬治五年入內御曆云使能遠獻口白羅裳濃袴是入內夜皇太后所賜之裝束也著小褂否頗有所疑

重長著溫打衣赤色織物五重唐衣白羅裳濃袴是入內夜皇太后所賜之裝束也著小褂否頗有所疑云如此文者似重著小褂唐衣先日高陽院所傳四條大后語曰著唐衣不著小褂著唐衣是出

例也今依此著御曆文唯能所獻不犯所傳無二物俱著時之故不著小褂著唐衣是出

居母屋座母儀著紅梅口領青單紅打衣梅共竊居帳北疊頗為何龍外祖母著厚衣在作合間細所望為緒

開遺戶頗也南一間近江越後候二間大納言堀川候三間候人不候四間右衛督中將候殿上之簾中大

夫少納言候已上著打厚衣童女二人著裝束候同間件間北道戶開之洞院候廂南二間南邊出但綿同打

土佐候廂南四間北邊用私衣依非女房負數鏡臺立視南之秘說也備主上入御所傳也脇息前二尺几

帳以己亥乙丑為妻置之余未知此事而今清職申日若如手口置脇息主人入御所傳也脇息前二尺几

筵道東對西蓋女御座間以北渡殿南蓋女御座間以南數之渡殿不數之中次著陣年刻也卿相兩三來著即令

敷膝突仍用時神官不候次公通朝臣來仰曰從三位藤原朝臣多子為女御者余召右少辨範家仰之詞其

陰陽師在憲泰親參入

可有沙汰事

日次事 正月十九日壬寅

御所事 大炊御門高倉家

御祈事 神吉佛吉在別紙

〔台記別記〕久安六年正月七日乙酉今朝授入內次第於右大將實能卿宰相中將教長卿尾張守親隆

朝臣等賜教長卿者爲令行事也專行者親隆也而先例如此大事家司之外授次第於親族上達部令

行事仍所授也大將依爲外祖授之辰時上達部殿上人來會用諸會服左馬權頭順定著縫服不可然

由有禪關命仍不出之不可然刻著束帶吉押笏紙著座上達勅使暫遲々仍偷使人問答曰頭中將參入之

後可賜御書之由有大相府仰仍所遲々也及午刻左衛門尉藤原邦綱青色布帶野銀不著絲鞋著法

色細御衣等又依諸會著野銀布帶可服青色款三說之謂未能用諸會服款又御書諸會前也可用青

中之例者宜用青色細御衣若無其例者野銀布帶可服青色款三說之謂未能用諸會服款又御書諸會前也可用青

不可服青色後日余問邦綱曰野銀布帶可服青色款三說之謂未能用諸會服款又御書諸會前也可用青

青色由無所見因是所來入自西門西中門立舍人著布袴登御書於柳筥持之前行使參來由

少將公親朝臣國藤親朝自中門廊東簀子調之不著歸昇居寢殿南底西向妻戶前申御書使參來由

即仰親隆朝臣國藤親朝數座此間公親朝諸大夫敷勅使座於同妻戶前南邊東西妻高麗一帖上加東京

次公親朝臣經初路告可來此方由於勅使勅使指笏取御書柳筥自中門廊東簀子跪同妻戶簾前

奉入御書座筆女房取之拔笏退著座正一獻左少將光忠朝臣勸盃王參院已後取

之經寢殿西北廊南弘廂寢殿西簀子等勸之了退歸件人本自次諸大夫敷管圓座五枚渡殿東上南

座問西柱下二獻三位中將兼長卿起座跪弘廂取盃落則人歷初路勸之了出戶經

子著最末圓座次諸大夫養看物於勅使及卿給折數高坏勅使各二本菓子二杯干物二盃三年

〔台記別記〕久安四年七月三日戊子、此日密々始行女子○藤原公能女、藤原長養子多子入內事以往祈禱、不記於內出居、令尾張守親隆朝臣布衣、書之、先之、大將、烏帽、被來、因之、著裝束、立烏帽先書長保元年例上、東門、余

讀御堂御記、令書之、以今度可從彼例故也、次書月日出立所祈事、次問吉日於陰陽師在、藤原泰親、申曰、

正月十九日可也、但爲陽將日、勘例中宮安子冷泉、顯融、配村上、親王時、天慶三年、中宮賢子、堀河院母

年三月九日甲午、配白河院太子、爲陽將日、應司殿配御堂、永延元年十二月十六日甲辰、爲陽將日、君臣已有吉例者、出立所、

廼者所居大炊北、高倉、東、第、不當禁忌方、藤原東三條、若小六條、若四、

入內事

長保元年例上、東門、院

二月十九日癸巳著裳

同廿一日乙未叙從三位

即日左大臣參弓場奏慶賀

九月廿五日甲辰定入內事

十月廿五日甲戌渡御西京連理宅

同廿七日丙子自大內有御使

十一月一日庚辰入內

同二日辛巳御使參

同三日三位殿被免兼、司殿

同七日丙戌被下女御宣旨

同日主上始渡御女御御方

七月三日沙汰始親、隆朝臣執筆

御使參南庇簾前令獻御書次勸盃酒一獻右少將顯雅朝臣二獻左中將宗通朝臣以上瓶子三獻右

兵衛督准後四獻藤中納言宗俊五獻源大納言師忠以上瓶自三獻居肴物御使前二本願相前一本、

夫役之次自簾中給御返事并祿肴物諸大細長唐衣裝束一具、如綾頭辨退下御令持小舍人祿物令持雜色、次殿

下右府內府中宮大夫三位中將起座被參御所爲被扈從御共也次主上渡御御衣經本道歸參了、使例有御返事、豫南殿北底供筵

道左中將宗通朝臣取御劔前行侍臣扈從次殿下令著本座給口口人數此道參上頭辨朝臣候座末他殿上人

一獻殿下陪膳右少將有家朝臣自餘役殿上五位六位奉仕、寬仁殿上人奉仕也次二獻頭辨動盃、祿次居汁、此

間秉燭五位數少召加當時祿人五位四人云々近代多殿上人奉仕也次三獻動盃次祿殿上人給之四位傳袴五位袴上達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

從如初侍臣供奉脂燭次給女房祿宰相中將三位中將三位侍從三年例達次主上還御人人扈

經綢二枚其上鋪唐錦綠地鋪同緣茵等其面頌立四尺御屏風一帖帖各其前立疊繪沃懸地御調度階

上水火取布渣杯中階北臺南打御茵前立脇息其西置御硯地舖御帳東供御座同用錦綠地鋪茵

先被鋪東二條早鋪綠地鋪茵其北立五尺御屏風其前立同疊繪二階御厨子二脚御茵二合

今度兼日無儲之上有儀被川唐純其北立五尺御屏風其前立同疊繪二階御厨子二脚御茵二合

箱二合如香御帳北間逼西壁立御衣架一脚母屋四面懸壁代東西北立廻五尺御屏風庇左右立

四尺御屏風所々御簾差筵御几帳邊鋪等如例仍不具記北面儲藝御所東對代爲女房候所其東庇

三ヶ間爲上達部座北對座敷高麗端帖八枚東西井南戶東中門西廊爲殿上人座西上對座敷

上備中國勤役東北中門東廊爲侍所安藝國奉仕之北對東十一ヶ間爲女房曹局東北渡殿爲

臺盤所其東廊北庇爲上卿御厨子御裝束及乘櫻關白殿率內府以下被參陽明門院東三條御

之由難有其儀內真當頃之右近少將顯實朝臣持參御書紅紙御付物枝近代不付之云又先例當日

大白方仍被改定了頃之右近少將顯實朝臣持參御書以前一兩度有御書今度無日次上永承五

中宮當日被改訂也右中辨師賴朝臣本宮中事由次東戶前鋪勅使座遠仲實取之院殿上侍臣也

地下覆相安可動仕次召勅使御領之使參上獻御書於簾中次勸益權左中辨基綱朝臣瓶子散位有家

二獻新中納言基忠瓶子兵折敷高坪使前二三獻新大納言將右對地下也次自簾中被出

祿女東御使差笏給之援笏起座下自中門腋東頭願進前庭再拜退出座給酒者院官勸盃又給

二階次女房乘出車東面出後門次寄御卓於南階初在帶歷巾也殿下井三信公御車副十二人冠主計

頭道言朝臣奉仕御反問事了給職散次駕御今夜御裝束女院被調奏赤色御唐衣白羅裙蘇芳色

也殿上人頭以下并諸大夫四位以下奉仕前驅陽明門院殿上人被仕也御出車十兩冠女房副八

女色衣衣在領打衣白梅唐衣童關白殿左右內三相府民部卿源大納言中宮大夫新大納言治部

卿左兵衛督新中納言二位宰相中將左大辨三位中將三位侍從右兵衛督等扈從出御院東門自室

町小路北行至二條大路西折至內裏北東小門扣御車立榻藏人左兵衛尉永實召吉上二聲仰轎車

宣旨其調兵三品內親王乃次昇居御轎於糸毛瑪尼上左右差九候五位十二人張被坐下奉御能

令進北政所給云々、藏人永實傳取奉之。十一月二日丙戌、女御入内之後、有_二尋夜餅之事_一、件餅民部

所被調進也。是高年之人所役者。紫檀宮有螺鈿立鸞形。耕地唐錦折立有蓋。銀坏三盃。餅洲濱

以鶴形置銀御箸件云々大略成主上入御帳之後圖白殿取之令進給者七日辛

卯、有後朝使事、御使藏人頭左中辨藤季仲朝臣也、未刻許闌白左右內府諸卿殿上人等、參會女御殿

方之後有御使件御使先於朝千飯方有召給御書取御書歸殿上令持小舍人衣前行經北面至東中

門、先付右中辨源師賴朝臣啓事由、此間敷御使座登二枚之位、敷茵之、次召使、則進簾前獻御書東庇對也

有孟酌初獻。左少將源顯雅二獻。左中將宗三獻。古兵衛督源四獻。中納言源大納給御返事祿等。女

東、又給三條、則歸參猷、御返事、及西刻主上初渡、御女御、御方、御直殿下右内府中宮大夫三位中將殿上

人屢從，左中將宗通、胡臣等即初前行，其路經有殺即後敷達道也，其後有公卿殿上人掣礪盃酌之事。

殺下陪葬。少將有家明臣，自余殺上五立受共，是衣衾義卸也。乘輿之後望卸，殺上人被脂燭。先綸殺上。

有
其後卽乳母與寺家寺命歸藏人女宮等合緣子有差緣行事爲房也今夜女卽殺不令上給是衣吉

一、方今聖王所合也云々、

人更乙又行反言日勿度文印段即方合有印時而尋今日無公印條是水火之利云云

今作北庭府。言上在涼州。從風從之。新不從對面。言上在北庭。故曰北庭。

○分御意宣治壬午十一月二十五日辰刻今日四宮子
○分御意宣治壬午十一月二十五日辰刻今日四宮子

女御也。參而及二年。依無主人。與園遊院御出。及二年。與從禮兩大臣。信御。蝦料。自殿下被口之。于時公

田三品篤子內親王被_レ下_二准后宣旨_一母贈后茂子與院同胞春秋三十四入_レ從大內仍未明_レ降下并北

政所令參內給發主計頭道官朝臣被問可立御帳范限爲屏覽揭文已刻又以道言御所四角各打木

自去十九日被_レ始御裝束其儀寢殿東北二棟渡殿北庇_{准_二母屋_一}自西第一間立御帳裏推紫黑組以泥

立金
御榻
几
帳下
店綉
綉外
額不
綉帷
臺三
了面
鏡懸
角御
座如
例中
央敷
於筵
打店
綉綉
裏
並置
沉御
枕一
雙其
左右
各立

尺五御几帳一基物、帷拉四比幅、掛御被兼置其中、御劔置枕上、入錦袋、用本宮御帳南間、准以二座供盡御座。

しなきことに世人このごろのことぐさに去たり、さらぬ事だにきゝにくきものいひはまして
ことわりなり、かくもてなさせ給ふも、人の御ほど御位こそあさくものし給ひしか、侍從宰相は
この齋院の御せうと小一條院の御子堀河の右大臣の御ひめぎみの御腹なぞてかわろからん
とおぼしめすなるべし。

〔中右記〕寛治五年十月十九日、殿下○藤原師實初分參陽明門院○後三條院給、是依女御入内之事也、廿五

日庚辰、有三品篤子内親王入内之事、皇白河同母弟○女御也、陽明門院養爲御子、太上乘燭之程公卿殿上人

參會之後、先有御使○右近少將藤原實朝、持小舍人、侍御書之、則參入女院御所、賜院先於中門申事、由○源師賴

事、由也、則召御前○先諸座加茂、勅使參進獻御書於簾中、次有孟酌三獻、初獻○藤原左中將源基綱、中

基大輔藤道輔、兵三獻○新大納言家昌、執事了自麗中推出祿女○裝束無御返事、勅使二拜、則歸參内、中

時○由不拜云々、及亥刻寄御車、系毛女房車十輛、童女二人合廿八人、前驅殿上人皆參諸大夫廿八人、乘御

車之間、有反閉、其路出自北門、經室町二條大路至堀川院北門、門二條、御堀川院也、門也、暫留御車、次藏人

左兵衛尉藤永實○著色、仰轡車宣旨○先小舍人著衣冠、指燭出、門前之後、仰云、吉上二聲、歸入之後、移御

轡車、寄東對代廊南庇東妻、其後公卿殿上人、有饗饌之事、門廊女御御所用此東對也、孟酌一兩巡

之後、各々退出、

今日公卿○殿下、左大臣、右大臣、內大臣、民部卿、源大納言、中宮大夫、新大納言、家中納言、治

之公、今夜女房御使、掌侍源盛子○源賴朝、有祿女裝束、御衾役殿下北政所、凡入内之義、一事以上

關白殿令沙汰給也、今夜女御御裝束、裏濃蘇芳御衣五、濃御單、同御袴、同打衣上著、梅花五重上著

黃菊五重小打著、赤色五重唐衣、白羅御裳也、

廿六、七日、三々日間於女御殿御方、有公卿殿上人饗饌之事、最初之夜、以夜御殿正寅角燈爐火付脂

燭、以藏人永實遣女御殿御方○如凡人禮三、又主上入御之間、召御草鞋、中宮大夫取之、以三位中將殿

よりよろづになにごともせさせ給ふ、さるべき人々をばんにどのゐにさしつゝ、まゐらせさせ給ふ、一品の宮にまゐりとまゐる人を、みやの仰言にてまゐるべくおほせらる、内のおぼしめし、よらぬことなくせさせ給ふに、宮にもせさせ給ふなるべし、いづれかおろかにおもひきこえさせ給ふと申ながら、このうちの一品の宮、おもひまうけさせ給へる御ありさ、世の常ならず、さればこの宮にまゐりつかうまつらぬ人なし、それをかのどのゐにもせさせ給ふなるべし、陛下の御はらからの姫君たちも皆おはして、いかにくゝどうれしきもの、おそろしくおぼす、その程になりていたくなやみ給へば、殿上人かんだちめのこりなくまゐり、内の御使宮の御使のひまもなくまゐりちがひたり、まゐるしありときかせ給ふ、そうをばめしてつかはす、そのわたり四五丁は道もさりあへず、一の人の御娘の后宮のうませ給はんもかくこそはあらめ、おもひしより過ぎたる御ありさまなり、四五日つれなくわけくれつゝ、いとあさましく、いかにくゝと内にも宮にもおぼしめす、六日といふに、いときらくかなるをどこにておはしませば、さるべき人々おきどころなくおぼさる、内の御使宮の御使、われまづ奏せんくゝとぞいそぎまゐる、かばかり年頃いづかたにもかたよりつる御ことのめづらかにあさましきとおろかなり、源中納言の四位少將いへかた御はかしもて参るを見つけたる心かなり、さるべきならでたゞうち見る人もめでたしとはこれをこそはいはめ、かゝることをまたこそ見ざりつれどあさましくめでたく見給ひけり、御湯殿の儀式ありさまなど、藏人五位よきかぎり廿人弦うち奉らせ給ふ、いへばおろかなり、御めのどには小侍従の内侍とてさふらふを奉らせたまへり、上野守範國が女尾張守惟經が女藏人よりかうぶりえたる式部大輔惟輔が女なり、三月九日いらせ給ふ儀式ありささいとめでたし、車五六ひきつゝけていと心ことなり、女御になりていらせ給ふ、更衣などいひしをだに、世にめでたくめづらしきことに思ひ申しを、けざやかにめでたくいみまぐよにため

云々、

〔榮花物語三十八松の下桂〕

一品の宮にまゐらせ給ひし侍從宰相○源の御むすめ、○基内○後おぼしめ

すといふ事世にきこえて、たゞそなたになんおはしませぬといふ程にたゞならずならせ給へ

り、かはかたちもみやづかへさせにもあらず、もてかしづききこえさせ給ひて、たゞ宮の御おな

じ事にて御だいなせまゐらすことも姫君の御だいで、女房とりてまゐらすに、ましてか

くさへものせさせ給へば、いとこゝろことにもてなさせ給ふ、もとより御門の御母になり給ふ

べきすくようものし給ふ、御夢にも紫の雲たちてなん見え給ひけるなせきこゆるを、なほさこ

そ人はものはいへといひしを、まことに只今まではかなひぬべきにやと人々はおもひいふめ

り、七月に尾張の前司つねひらといふ人の家にいでさせ給ふ、このたび歸りまゐり給はむには、

更衣などにてなんおはすべきといひのゝしる、いでさせ給ふ夜はあかつきまでおはしまし、御

ども人なせのたちやすらふもむかしものがたりの心地すべきむつまじき殿上人御おくり

すべき宣旨ありていどめでたし、どのげらなせなは女子こそもつべきものはあれなせめで給

ふ、母北の方もよしよりの中納言の娘にもおし給へる、なからひいとあてやかにむかしものが

たりのこゝちす、御息所更衣などみな中將少將のむすめ受領のも皆まゐりけるを、この近き世

にはおぼろげの人はまゐり給はぬものにならひたるにいとあさましきなり、入道殿にきさき

御門はおはしませぬものとおもふに、この關白殿右おはどのだにおとゞにてこそまゐらせたま

ひしか、かへりてかく人の宿世もさだめあるべきことかはとなるべし、かみわざのひまにはま

のびてまゐらせたまふ、御使ひまもなし、御修法御讀經などさせ給ふ程いどめでたし、母方の

おち東宮の權大夫、さきの少將といひしは刑部の權大輔またなれの權守とかいひてもあり、阿

ざりなせにても、またしくつかひいでいりし給ふも、女御のかしづきなせまたるもめやすし、宮

いろあひよりはじめなべてならすみえさせ給

〔春記〕長曆三年十二月廿一日丁丑、内大臣○藤原長女○生今夜初、内可御西北對也。其作事藏人

行事、而除目以後龍居、仰云、内大臣女可入内、可聽○中此間左少將經季、四位自

内府家歸參、御書返事、令持小舍人、小舍人腰又女裝束一具、令持隨身之、以藏人令申案内、依御物忌

也、依仰持參御書、錄白取置便亥終許、内大臣長女、參入於北陣下云々、以北御門爲主、如何而計、御所、此間左衛門尉賴資著青色袍帶、劔出陣外、小舍人二人、仰聽人、策車之事、其詞畢、退入良久、乘策車

參入給、信長頭經季、經家、顯家、取炬火前行、信長爲藏人、如何々々、内府并子族公卿等、左衛門督、四條中納言等

扈從、入給西北對已畢云々、其次女房廿人、童女參入云々、予覓見之、又無他殿上人云々、子時許、以少

將内侍差遣之、是可令上給之、由云々、搦打橋自西對、令昇給云々、策車雖被借申、關白殿不被借、仍新

作云々、事之大略、太以過差也、予可奉仕後朝、御使之由被仰也、窮老之人何爲哉、又不可辭申也、此時

許退出、廿二日戊寅、未時許、參内良久之有召、仍參御前、給御書、件御書紙有下、給頭以凡事也、予取之、退下、暫置殿

上大盤上、以經季少將、令案内、彼御方事具不也、申時許、有可參入之告、予即取御書給小舍人、白小板、教諭之

令立前參、彼御方西北予不帶劔、宮中御使之例也、右府所命也、又隨身一人、令裝束也、予於板敷下取

書奉之畢、即居無座、女房等皆出、衣如花、太以過差々々、小時敷座、高麗端一枚、其上敷茵、此對南向對

也、仍南面敷之、次居着物也、次對中將信長、勅盃、次左衛門督、次四條大納言、次新中納言、長家次三位

侍從、通基等也、酒氣重疊、心神如亂、此間自藤山、女裝一襲、予取之、但不懸頸、次給御返事、右手取之

退下、御書給小舍人、祿給隨身、參殿上、取御書等、參御前、祿置打毬御障子下、獻御書畢、退歸以主殿女

令取祿物、給隨身、暫候殿上、退私酒氣深入、心神失度、終宵惱煩、更無術計也、今日事太以過差也、但近

習人外、又他人不參、彼御方是依畏關白氣色、歟、太以無由事也、廿三日己卯、今夜宿侍、女御參上給

如昨日云、四條中納言并一族人々扈從云々、内府并北方相共臥給二間云々、彼北方奉遣御被之料

子くらべや○尊子、以上一條女御、なごまゐりこませ給たり、されどさるべきみこたちもいでおはしませで、中ぐうのみこそはかくみこたちあまたおはしませすめれ、この御かた○彰ふちつばにおはしますに、御まづらひもたますこしみがきたるは、ひかりのせかなるやうにもあり、これはてりかゝやきて、にようばうもせうゝの人の御前のかたにまゐりつかうまつるべきやうもみえず、いどいみまうあさましうさまことなるまでまづらはせ給へり、御几帳御屏風のおそひまのみな蒔繪螺鈿をせさせ給へり、にようばうはおなじきおほうみのすりも、おりものゝからぎぬなご、むかしよりいまにおなじやうなれど、これはいかにまるとまでぞみえたる、にようと○彰予のはかなうたてまつりたる、御ぞのいろかをりなごぞよにめでたきためしにまづべき、御とのゐまきりなり、よき日して御めのとゞも命ぶくら人陣の吉上衛士仕丁までおくりものを給はすれば、どしおいたる女官とじなご世にいひまらぬまで御いのりを申いのりたてまつる、御めのとたちさへきぬあやおりものゝまやうぞくぞもかすおほくかさねさせ給て、ころもばこにつゝませ給て、さまゝのものどもそへさせ給へり、

〔榮花物語十四〕二月○寛仁二年になりぬれば、おほどのゝ尙侍殿○藤原道長女威子内○後一條へまゐらせ給、よろ

づのことどゞのへさせ給へり、おとな四十人、わらは六人、まもづかへおなじかすなり、はじめのみやゝ○一條后、彰子、攝政殿なごにみな人々まゐりて、いまはえしもとおぼしめしつれど、い

づれもはちなき人々おほくまゐりこみたり、わらはゝそのよくるまよするまでえりとゝのへさせ給へるおしはかるべし、ふたみやの御まゐりのをりのことをぞ、よがたり人々きこえさすめるを、これはいませすこしませりたり、世中の人の御おきてきのふにけふはまざりてのみみゆるわざなれば、よろづそれにま、たがひてめでたし、みかど○後一條、十一の御ありさまよりは、かんのどの○威子、時こよなくおとナビさせ給へり、御かたちいみじうおかしげにあいぎやうづき、

やむことなきをばさらにもいはず、四、五、六のむすめといへど、ことにまじらひあろくなり、いでたちきよげならぬをば、あへてつかうまつらせ給べきにもあらず、ものきらゝかになりいでよきをえらせ給へり、さべきわらはなせは、によう院○一條母后東三條院立子なせよりたてまつらせ給へり、これはやがてこのたびのわらはのなせも内人院人殿人なせやうつげあつめさせ給へり、ひめぎみの御ありさまさらなることなれど、御くしたげに五六寸ばかりあせらせ給へり、御かたちきこえさせんかたなくをかしげにおはしませす、まだいとをさなかるべきはせにいさゝかいはいけたることなく、いへばおろかにめでたくおはしませす、みたてまつりつかうまつる人々も、あまりわかくおはしませすを、いかにものゝはえなくやなせおもひきこえさせまかど、あさましきまでおとなびさせ給へり、よろづめづらかなるまでにてまゐらせ給ひ、かしの人のありさまをいませゝあはするには、いどぞものぐるほしうそのをりの人のきぬすくなにわたうすくためでたきをりふしものでまじらひ、うちゝにもいかでありたへたらんとおぼえたり、このごろの人はうたてなせけなきまでさかねても、なほこそはかせなせもおこるめれ、さればいはしへのにようこささきの御かたゝゝなせ、おもふやうにかたはしだにあらずやどみえたり、かくてまゐらせ給へるに、うへ○一むげにねびものゝこゝちしらせ給へれば○一條帝時二十いどゝもののはえもあり、まはづかしうおはしませす、中ぐう○定のまゐらせ給へりしほどなせは、うへもいどわかくおはしませしゝかば、これはさらなることながら、おほんこゝろおきて御けしきなせ、すべてすゑの世のみかどにはあせらせ給へりどまでぞ世人やむことなききみにおはしませす、時の大臣公卿も申しこえさせける、故くわんばくせの○定子父の御ありさまは、いどものはなやかにいませめかしうあいぎやうつきけちかうぞありしかば、中ぐうの御かたは、てんまやう人もはそせのつねにゆかしうあらまほしげにぞおもひたりし、こきでん○義承香でん元

女御母氏在暗戸屋曹司欲纏頭於予予見其氣色直退向陣仰此事之間自彼曹司差從女令招若雄丸若雄丸不進向從女只持女裝空歸曹司見者有嘲色云々參右府之間入夜時自宅送書云慮外有外人署女裝束置侍所侍所人不取答之下人更指置東面高欄下依無由緒不取入使下人早遁去此事甚奇云々推量女御曹司人所作也仍遣取示案内於說孝辨令入其事件尙書與彼女御通家也仍令志此送物無由緒之旨令返却也家女不取入件物馳送消息時人稱之後聞女御母氏依此事有怨氣愁申院并左府云云甚憐情也

〔榮花物語三十四〕其頃後いせのたくせんなどいひて藤氏のささおはしませぬあしきことなりとてうちおぼどの教通の御くしげどの子生まゐらせ給べしといふこといできて七月

ついたちごろといそがせ給はどに六月廿七日三長暦うちやけぬ中はかなく月日もすぎてうちおぼどのゝみくしげどのまはすにまゐらせ給ふ宮の御こと姫子中宮のはぎなきになどとの通はおぼしめしたりことしぞ廿六にならせ給けるとしをろいつしかとおぼしめしける

御ことにてどの御こゝろをつくさせ給へり

上皇養子爲女御

〔玉海〕承安元年十二月二日壬寅此日於院後殿上法住被定女御入内雜事中此女御平入道結

盛姫子也而重盛爲子又院後爲子依永久例鳥羽后有沙汰凡每事殊勝以詞不

可言莫言十四日甲寅此日院姫君子入内也中入道相國女法皇後御養子永久例云々但

彼者自誕生之昔有撫育之禮隨又主上御孫也仍於儀無妨今度已可爲姉妹歟尤以有忌如何

〔百練抄八〕承安元年十二月二日入道太政大臣平爲上皇後御猶子參入今日被定

入内儀

〔榮花物語六〕大殿藤原の姫さみ子彰十二にならせ給へばどしの内に御裳著ありてや

がて内中一にどおぼしいそがせ給ふ中かくてまゐらせ給こと長保元年十一月一日のこと

なりにようぼう四十人わらは六人しもづかへ六人なりいみぎくえりとのへさせ給へるに

〔河海抄〕侍臣の女猶女御の例あり、其上大中納言の女、立后の例等もあれば、女御とだにといふか、だには猶不足の心歟、中古までは、女御も多く四位五位なり、近代は叙從三位後に女御宣下なり。

大中納言女后例

藤原高子女、中納言長耳清和天皇、陽成院母后、皇后宮嬪子故大納言三條院后、贈皇后起

子法興院入道關白藤原冷泉院女御、

公卿女爲女御例

女御藤原元善子光孝天皇女御、中納言山陰女女御橘義子宇多院女御、參議廣相女女御藤原和香子醍醐天皇女御、右大將定國女

女御藤原淑姬子同女御、參議根女女御藤原姚子花山院

侍臣女爲女御例

女御從三位橘三井子桓武女御、從四位下鹿女女御藤原澤子仁明天女御、紀伊守德繼女女御藤原煌子堀河院女御、兼

通女、子時女御贈皇后藤原超子冷泉院女御、安和元年十二月七日、爲女御、子時父法興院關白藏人頭

〔三代實錄光孝〕仁和三年二年十六日庚申、勅以更衣從五位上藤原朝臣元善爲女御、中納言從三位

山蔭之女也、

〔扶桑略記二十九〕延久三年二月廿九日、御息所從五位下源基子爲女御、

〔日本紀略後十三〕寛和二年三月七日庚子、尙侍從三位藤原朝臣成子入掖庭前太政大臣道長四

月廿八日辛卯、今日尙侍從三位藤原朝臣成子爲女御、

〔小右記〕寛仁二年四月廿八日辛卯、今日行幸以前、尙侍藤原成子女御宣旨下、氏上達申奏慶、

〔日本紀略五〕安和元年十二月七日乙卯、以從四位下藤原成子御匣殿同超子爲女御、

〔權記〕長保二年八月廿日甲子、此日御匣殿別當藤原可爲女御一之事、於朝餉奉勅命退出之間

以御匣殿別當爲女御

以御息所爲女御
以尙侍爲女御

以更衣爲女御

辨

年 月 日

〔日本紀略^{十條}〕長徳二年八月九日丁未、今日以藤原義子爲女御公孫大女

〔扶桑略記^{二十七條}〕長保二年八月廿日、關白道兼女尊子爲女御、

〔日本紀略^{三十一條}〕寛弘八年八月廿三日甲子、今日右大臣略中召右大辨道方下女御二人宣旨、一人尙

侍從二位藤原妍子、左大臣道二女一人無位藤原娥子、故大納言濟時卿女、

〔春記〕長曆三年閏十二月十三日己亥、內府娘藤原數通女生子今日可爲女御後之事、可示關白者、又參關

白殿以隆佐令申、命云承舉早召可然之上卿可仰者、即奏此由畢、遣召左衛門督入夜參入、又奏此由、

仰云、早可仰者、予於殿上仰之、以生子爲女御之由、畢、內大臣、左衛門督、新中納言、四條中納言、頭中將

信長、經家等立西廊內、以予令奏慶賀、由予奏畢、帶劔仰復命畢退入、思此事內府先被申予慶之後、相

次可被申氏人慶歎如何、

〔扶桑略記^{二十八條}〕長久三年十月、藤原延子爲女御焉、

〔官局宣旨留〕

從三位藤原朝臣風子

權右中辨藤原朝臣光愛傳宣、權中納言藤原朝臣公達宣奉勅宜爲女御孝者、

嘉永元年十二月十六日、修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史小槻宿禰輔世奉

〔二代要記^三〕女御藤原超子藏人頭從三位兼家一女、永冷也

〔源氏物語^{綱一}〕内より御つかひあり、三位のくらゐおくり給ふよし、勅使きてその宣命よむな

んかなしき事なりける、女御とだにいはせずなりぬるがわかず口をしようおぼさるれば、今一

階の位をだにと贈らせ給ふなりけり、

とて、誠に久しく人まゐるよもなくして過ぎさせ給ふ。中略宇多の院位につかせ給ひて、けふまでその御たうにおはします。母上はささきにならせ給ても、御丁のめぐりを日に一ど物かはんどみそかにいひて、めぐりありかせ給ひけると申傳たり。誠にやそれは小松宮より市に出て、物をうりかはせ給ひて、かくせねば心ちのむつかしきとて、まづれば心地のよくならせ給ひけると申傳へたり。

○按ズルニ、是レ即チ王女御班子ノ事ヲ云ヘルナリ、

〔文德實錄〕嘉祥三年七月甲申、從四位下藤原朝臣古子、無位東子女王、藤原朝臣年子、藤原朝臣多賀幾子、藤原朝臣是子等爲女御。

〔三代實錄十三〕貞觀八年十二月廿七日戊戌、以從五位下藤原朝臣高子爲女御。

〔日本紀略一〕延喜元年三月日、以藤原稔子爲女御。昭宣公女

〔類聚符宣抄四〕太政官符中務大藏宮内等省外

從四位下藤原朝臣安子

右女御如件、省宣承知依例行之、符到奉行、

右中辨

右少史

天慶九年五月廿七日

〔日本紀略五〕康保四年九月四日己丑、以藤原懷子爲女御。

〔日本紀略七〕天元年五月廿二日丙午、宣旨、以藤原遵子爲女御。

〔朝野群載四〕太政官符中務大藏宮
朝儀
内等省別作

藤原義子

右女御如件、省宣承知依例行之、符到奉行、

書名下給

遣仰爲女御之由於其所事

遺藏人若上御曹司道女藏人兼天祿四年遣御乳母云云

〔禁秘御抄〕上臈

上古可然人女皆爲女御更衣略○下

〔諸官符案〕太政官符

中務宮內兩省

從四位下藤原朝臣多美子

右女御如件兩省承知依例行之符到奉行

正五位下守左中辨兼行介藤原朝臣家實正六位上行左少史都宿禰文憲

貞觀六年○月廿七日

〔諸官符案〕太政官符

宮內省

源朝臣眩子

右去年十二月廿九日定女御如件省宣承知符到奉行

從五位上守左少辨橘朝臣正六位上行左少史伴連

貞觀○年三月十七日

〔三代實錄光孝十四〕元慶八年四月辛卯朔從三位諱女王中宮○班子爲女御

〔二代要記光孝四〕女御從二位班子女王元慶八年四月○日爲女御式部卿仲野親王女母當宗氏

〔世繼物語〕今はひかし小松の御門なんをひ清和天皇の御時位につかせたまはで小松の宮

被仰云、件人宜令候侍所者、

同年同月同日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

感使所

〔禁秘御抄上〕上御局號三藤盛上御局

后女御更衣參上所也、近代爲御所略○中

上御局號三弘徽殿上御局

是御行ナド有所也、女御更衣可參上、

女御初見

〔日本書紀十四略〕七年、是歲吉備上道臣田狹、侍於殿側、盛稱稚媛於朋友曰、天下麗人莫若吾婦、茂矣、綽

矣、諸好備矣、曄矣、溫矣、種相足矣、鉛花弗御、蘭澤無加、曠世罕傳、當時獨秀者也、天皇傾耳遙聽、而心悅

焉、便欲自求、稚媛爲女御、拜田狹爲任那國司、俄而天皇幸稚媛、

〔續日本後紀五仁明〕承和三年八月丁巳、正五位上紀朝臣乙魚、授從四位下、柏原天皇武○榎女御也、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年十一月辛丑、從四位下百濟王敎法卒、桓武天皇之女御也、

〔二代要記二桓武〕後宮

女御 從三位橘御井子 從四位下入居女也

女御 從四位下百濟王敎法

女御 從四位下紀朝臣乙魚
女御 正四位下藤原仲子參議家依女

女御 橘田村子 入居朝臣女

○按ズルニ、是レ實ニ女御ノ始メナリ、大日本史后妃傳ニハ、紀朝臣乙魚、百濟王敎法ノ二人ノ

ミヲ女御ト爲シ、他ノ三人ハ他書ニ見エザルヲ以テ取ラズト云ヘリ、

〔北山抄六〕下宣旨事 補女御事更衣者、向侍宣、所司、聽、禁色、仰辨官作官符、内外戚公卿以下奏慶、

〔侍中群要八〕內親王以下宣旨

爲女御宣旨

補任

廿三日戊寅、重奏法皇^初。曰、諸國所課自院充催得其真、私充催非無所恐、亦諸國吏不受命焉、手詔曰、先例諸國所課自本家充催供奉人自院催之、^{増大}治、^敷今度何以異彼、先自家充催其吏不受命者、自院可催者、信範傳女院仰曰、先日所借之後儀可借給者、報啓恐悅之狀是余無後儀故入内經營之間所借申也。

○按ズルニ、多子未ダ女御ノ宣旨ヲ蒙ラズト雖ドモ、久安四年七月己ニ入内セシヲ以テ、此任命アリシモノナレバ此ニ掲グ、

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉女御宣旨^{○近衛上}、^{○近衛}初渡御女御廬事

蔭子正六位上藤原朝臣仲賴

被仰云、件人宜爲侍所長者、

久安六年正月十九日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆^幸、

散位從五位上藤原朝臣爲經

久安六年正月十九日

被仰云、件人宜令候侍所者、

同年同月同日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆^幸、

正六位上行治部丞中原朝臣親賴

久安六年正月十九日

被仰云、件人宜令候侍所者、

同年同月同日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆^幸、

蔭子正六位上宮道朝臣重能

久安六年正月十九日

被仰僞件等人、宜爲三位御方○藤原多子別當者、

久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

散位從五位下藤原朝臣顯方

散位從五位下藤原朝臣賴方

散位從五位下藤原朝臣盛憲

散位從五位下藤原朝臣憲親

被仰僞件等人、宜爲三位方侍所別當者、

久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

蔭孫正六位上藤原朝臣憲賴

被仰僞件人、宜爲三位方侍所勾當者、

久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

正六位上行右衛門志佐伯宿禰義仲

右辨官史生從七位上紀朝臣俊元

已上可爲知家事、

正六位上行大炊少允高階朝臣行則

右辨官史生從七位上伴朝臣久兼

右官掌從七位上紀朝臣重兼

已上可爲案主、

被仰僞件等人、宜令從三位方政所事者、

久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

〔延喜式彈正〕凡內親王、孫王、女御略中並聽乘用金銀裝車屋形、

〔延喜式彈正〕凡車馬從者略中女御十六人、

〔延喜式雜五十〕凡乘輦車出入內裏者、妃、限、曹司、夫人及內親王、限、溫明後涼殿後、命婦三位、限、兵衛陣、但

嬪、女御及孫王、大臣嫡妻、乘輦限、兵衛陣、

〔日本後紀二十四〕弘仁六年十月壬戌、勅親王、內親王、女御、及三位已上嫡妻子、並聽著蘇芳色、象牙刀

子、但絳色鞞、勒一切禁斷略中內親王、孫王、及女御已上、四位已上內命婦、四位參議已上嫡妻子、大臣

孫、並聽乘金銀裝車、自餘一切禁斷、

〔百一錄〕享保五年正月廿日、女御御方略中御門女有准后宣下陣議、御產御不快、今日薨御、廿四日迄

五夕日廢朝、

〔享保集成絲綸錄三〕享保五子年正月

一新准后女御御事去廿日薨去ニ付、今日より廿六日迄、鳴物三日停止ニ候、

但普請者不苦候

右之通可被相觸候

〔西宮記臨時〕諸宣旨

當代親王勅別當上卿奉勅賜辨、辨仰史令書宣旨、女御同之、天慶九年以左少辨在朝、爲女御藤口子別當、即日下

〔台記別記〕久安四年八月十四日己巳、今日補兩三位家司以下妻三位、唯有二家司而已、略中

仰書樣

從四位下行尾張守藤原朝臣親隆

散位從五位上藤原朝臣敦任

所司治部丞中原朝臣在列

賴方刑部少輔藤原朝臣在列

爲經散位藤原朝臣在列

成憲散位藤原朝臣在列

憲親散位藤原朝臣在列

憲賴勾當藤原朝臣在列

今案可書臺盤所

〔享保集成絲綸錄〕享保元申年十一月

女御御里御殿御築地高掛リ金五萬石以上五畿內近江丹波播磨城主之分差出付而左之通以

書付相達之

一女御御里御殿御築地入用高掛リ金可被差出候割合等ハ從水野和泉守可相達候間可被得其

意候

十一月

井伊掃部頭以下十人署名略

待遇

〔儀式八〕正月八日賜女王儀十一月新嘗會亦同

其口內侍於縫殿院點檢女王所司預張二字於安福殿前亦設座於殿庭積祿物於版以南紫宸殿

南廂西戶外立三尺畫障子辨備御饌東之儀同御座以東設女御以上座御侍已下散事已上饌並

肴菜子等御座以西皇后座去二許丈御但不立御座以東設女御以上座用人不貴睦立臺盤置銀筋

匙但各用私匙○下略

〔延喜式〕三十八凡設座者中女御錦草墊地敷花鋪表青褐車臺床子數二色

〔延喜式〕四十凡親王以下五位以上及內親王孫王女御中等從並德著染袴

〔三代實錄清和〕貞觀八年正月十三日庚寅是日勅女御從三位藤原朝臣多美子自今以後每年給二

分官一人一分官一人

〔日本紀略三〕天曆二年正月廿七日丁丑是日下梨壺女御預年給宣旨

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉

能登國解 申進上御封庸米事

合佰斛

右當年料進上如件以解

久安六年正月十九日

守藤原朝臣基家

女御家政所返抄 能登國

檢納庸米佰斛事

右當年御封檢納如件故返抄

久安六年正月十九日

知家事主稅允佐伯 在判

別當尾張守藤原朝臣 在判

女御家侍所牒 能登國衛

可早令進上垂布十五段事

牒侍所用途料可進上之狀牒送如件故牒

久安六年正月十九日

顯方別當散位藤原朝臣 在判

名冊

〔伊呂波字類抄^二〕女御

〔簾中抄^下〕女御^ニ これ別のつかさにはあらねども、内侍のかみなどになさるゝをりあり、

〔運歩色葉集^ナ〕女御^ニ 皇后 女御、更衣^{仕人ノ名也}

〔名目抄^人〕女御^ニ

○按ズルニ、唐六典ニハ、六儀ノ下ニ美人^{正三}アリ、是ヲ周官二十七世婦ノ位トス、美人ノ下ニ

才人^{正四}アリ、是ヲ周官ノ八十一女御ノ位トス、周官即チ周禮ノ天官ニ、女御掌御叙于王之燕

寢、以歲時獻功事トアリテ禮記ノ昏義ニハ、女御ヲ御妻ト爲セリ、我邦ノ女御ノ稱ハ蓋シ此ニ

依リシナラン、

供給

〔延喜式^{中務十二}〕後宮時殿

女御、絹廿疋、曜布卅端^{冬加綿}、前件時服、夏四月五日、冬十月五日、内侍具錄人數及物色、移省造解文

申宣、

〔延喜式^{大膳十三}〕親王以下月料

女御、醬未醬各六升^{日二}、鹽六升、腊五斤十兩^{日三}、鮓九斤六兩^{日五}、紫菜、海松各一斤十四兩^{日一}、海

藻七斤八兩^{日四}

〔延喜式^{大炊十五}〕親王以下月料

無品親王、内親王、妃、夫人、女御、日米各五升

〔延喜式^{掃部三十八}〕年料鋪設

雜給兩面端帖十六枚^{厚薄各八枚、女御已上料、}

〔小野宮年中行事〕四月五日中午務省申、妃夫人嬪女御夏衣服文事

〔小野宮年中行事〕十月四日中午務卿申、妃夫人嬪女御冬衣服文事

女御

女御ハ周禮ニ依リテ立テタル名稱ニテ、亦御姦ニ侍スルモノナリ、其稱初テ日本書紀ノ雄略天皇ノ紀ニ見エタレド、況ク御姦ニ侍スルモノヲ言ヘルニテ、當時ノ的稱ニアラズ、此稱ハ實ニ桓武天皇ノ朝ニ起リテ、紀乙魚、百濟敎法ヲ以テ之ニ充ツルヲ始トス、爾後妃夫人ノ稱漸ク絶エテ、女御更衣之ニ代ル、然レドモ其初ハ四位五位ノ間ニ過ギズシテ、嬪ノ改稱ナルガ如クナリシガ、仁明天皇ノ朝ヨリ後、文德清和陽成、光孝天皇等ノ數朝ヲ歷テ、宇多天皇ノ朝マデ皇后ヲ立テ給ハザリシニ因テ、女御ノ位漸ク貴クナレリ、時ニ後宮ハ位階ノ尊キモノ、其班首ニ居リシナラン、即チ仁明天皇ノ朝ニハ、女御藤原貞子アリ、文德天皇ノ朝ニハ、女御藤原古子アリ、清和天皇ノ朝ニハ、女御藤原多美子アリ、陽成天皇ノ朝ニハ、姉子女王アリ、光孝天皇ノ朝ニハ、班子女王アリ、宇多天皇ノ朝ニハ、女御藤原温子アリ、而シテ其父攝關ノ職ニ居リテ勢力アリ、其所生ノ皇子、皇太子ト爲リ給フトキハ、下位ニ在ルモノ超進シテ皇太夫人ト爲リ、中宮ト稱ス、仁明天皇ノ女御藤原順子、文德天皇ノ藤原明子史ニ其文ナケラシナ、清和天皇ノ藤原高子ノ如キ是ナリ、藤原基經ノ女穠子、醍醐天皇ノ女御ト爲リ、尋デ皇后ト爲ルニ至リテ女御ノ位益貴シ、是ヨリ後直ニ皇后タリシモノハ極メテ少クシテ、概テ女御ヨリ進ミシナリ、故ニ女御ハ多クハ攝關等ノ女ヲ以テ之ニ充テタリ、是ニ於テ女御入内ノ儀アリテ、直ニ三位ニ叙シ、職員ヲ置キ、朝廷ヨリ書ヲ賜フアリ、又命名アリ、著袴等ノ事アリテ、其式頗ル壯ナリシガ、南北朝ノ頃ヨリ女御入内ノ儀全ク廢絶セリ、其後、後陽成天皇ノ朝ニ、豐臣秀吉、近衛前久ノ女ヲ養ヒテ、掖庭ニ入レテ女御トナシテヨリ、女御入内ノ儀マタ興ル、

〔延喜式^{中務}〕後宮時服

嬪絹四十疋、細布廿端、曝布卅端、冬加綿二百前件時服、夏四月五日、冬十月五日、內侍具錄人數及物

色、移、省造、解文、申官、

〔延喜式^{十八式部上}〕凡嬪以上位分資人、不在減限、

○按ズルニ當時供給ノ制、女人ハ凡テ半減ナリ、然レドモ嬪以上ニ至リテハ其限ニアラズ、故ニ不在減限ト云フ、

〔小野宮年中行事〕四月五日中務省申妃夫人嬪女御夏衣服文事

〔小野宮年中行事〕十月四日中務省申妃夫人嬪女御冬衣服文事

〔日本書紀^{十二}〕六年二月癸丑朔、喚鮒魚磯別王之女大姫郎姫、高鶴郎姫、納於後宮、並爲嬪、

〔日本書紀^{二十一}〕元年正月壬子朔、立蘇我大臣稻目宿禰女石寸名爲嬪、是生田目皇子、更名、尊、

〔日本書紀^{二十七}〕七年二月戊寅、納四嬪、有蘇我山田石川麻呂大臣女曰遠智娘、○中次有遠智娘弟、

曰姪娘、○中次有阿倍倉梯麻呂大臣女曰橘娘、○中次有蘇我赤兄大臣女曰常陸娘、○下

〔續日本紀^{一文一武}〕高天原廣野姬天皇十一年○文一武八月癸未、紀朝臣竈門娘、石川朝臣刀子娘爲嬪、○刊

本作紀、今據下文改、

〔續日本紀^{六元}〕和銅六年十一月乙丑、貶石川紀二嬪、○文一武號不得稱嬪、

嬪字初見

補在

貶嬪

嬪

嬪ハ夫人ニ次グルモノナリ、古訓又ミメト云フ、日本書紀履中天皇ノ紀ニ、初テ見エタルド、亦追書ニ係レルナリ、大寶ノ制、嬪四員ヲ置キ、四位五位ト定ム、此嬪ノ名ハ、天智天皇文武天皇ノ兩朝ニ見エタルノミニテ、以後曾テ所見ナシ、

名稱

〔名目抄〕人嬪

〔令義解〕後宮職見、嬪四員、右五位以上

〔令集解〕古記云、尙書曰、嬪於虞氏、注云、嬪、婦也、

○按ズルニ、唐六典ニハ淑儀等ノ六儀アリテ、之ヲ妃即チ夫人ノ下ニ居キ、是ヲ周官ノ九嬪ニ擬ス、而ルニ我大寶令ニハ、嬪ヲ置キテ、之ヲ夫人ノ下ニ位セシメタリ、

待遇

〔延喜式〕凡車馬從者、嬪十八人、

〔延喜式〕凡乘輦車出入內裏者、妃限曹司夫人及內親王限溫明後涼殿後、但嬪女御及孫王

大臣嫡妻乘輦限兵衛陣、

家司

〔令義解〕凡家令、每年本主、准諸司考法立考、嬪以上、及內親王家事、宮內省、即宮內省承主

官定、其考第也、考訖申省案記、准考應解者、同諸司法、

○按ズルニ、嬪以上ノ言ニ據レバ、妃夫人ニモ各家令アレドモ、今一分分載セズ、

〔令義解〕凡嬪以上、並依品位給封祿、不減半、故云、依品位、其封祿者、春夏給號祿者、

十二疋、糸廿四紬、布卅六端、若帶、官者、累給、秋冬亦如之、以綿代絲、

〔令義解〕凡給後宮及親王炭、謂嬪以上、其皇后、起十月一日盡二月卅日、其薪、知用多少量給、供進炭

者、不在此例、

武藤原氏子○吉敬造刻檀釋迦牟尼佛像一軀、觀世音菩薩像一軀、虚空藏菩薩像一軀、略下

〔性靈集七〕和氣夫人於法華寺奉入千燈料願文一首略○願文

○按ズルニ、和氣夫人本書目錄ニハ和命婦トアリ、眞ノ夫人カ未詳カナラザレドモ、姑ク此ニ附載ス、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年七月丁丑、故從三位夫人藤原朝臣吉子復號位帳內資人亦依法行之、

〔日本紀略醍醐〕昌泰元年六月廿二日、依天下疾疫、遣宣命使於藤原夫人人○桓武夫墳墓、

〔續日本紀十七〕天平勝寶元年四月甲午朔、從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣略○中縣犬養橋夫人乃

天皇御世重氏明淨心以氏仕奉、皇朕御世當氏無怠緩事久助仕奉、利加以祖父大臣乃殿門荒穢

須事無久守川在之自事、伊藤美之字牟賀美斯忘不給止自氏孫等一二治賜大○略

○按ズルニ、縣犬養橋夫人ハ、名ヲ三千代ト云フ、藤原不比等ノ妻ニシテ、聖武天皇ノ皇后安宿媛ノ母ナリ、此ハ眞ノ夫人ニアラズ特例ナリ、

叙位

賜贈贈位

雜載

〔續日本紀九〕元正、養老七年正月丙子授夫人武。○文藤原朝臣宮子從二位。○藤原原作土佐、

〔續日本紀十二〕聖武、天平九年二月戊午天皇臨朝授夫人無位藤原朝臣二人。○並正三位。

〔續日本紀十七〕聖武、天平勝寶元年四月甲午朔授正三位橘夫人。○古耶可智後、從二位。

〔續日本紀九〕聖武、神龜元年七月庚午夫人武。○天正三位石川朝臣大藏比賣薨、遣從三位阿倍朝臣廣庭、

正四位下石川朝臣石足等監護葬事、又遣中納言正三位大伴宿禰旅人等就第宣詔贈正二位、贈純
三百匹、絲四百絢、布四百端。

〔續日本紀二十二〕天寶字四年正月辛卯從二位藤原夫人武。○聖薨、贈正一位、太政大臣房前之女也、

〔續日本紀二十四〕天寶字六年十月己未夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨、贈純百疋、絲三百絢、布

三百端、米九十石、夫人者讚岐守從五位下唐之女也、聖武皇帝儲貳之日、納夫人、生安積親王、年未弱
冠、天平十三、○三、年薨、又生井上內親王、不破內親王、

〔日本紀略〕淳和、弘仁十四年六月甲午、正三位多治比真宗薨、參議從三位長野之女也、初桓武天皇入

之掖庭、生六親王云々、贈正二位、時年五十五、丙申、任葬司、四位二人、五位五人、六位已下十一人、

丁酉、天皇詔旨止、夫人多治比真人云々、

〔文德實錄七〕齊衡二年十月丙戌、夫人。○從三位藤原朝臣緒夏薨、夫人贈左大臣從一位內麻呂之

女也、弘仁元年十一月叙從五位上、三年正月叙從四位下、立爲夫人、六年七月叙從三位、薨後贈正二

位。

○按ズルニ、日本後紀、類聚國史ノ二書ニ、緒夏ノ夫人トナルヲ以テ、之ヲ弘仁六年ノ下ニ係ケ
タリ、然ルニ實錄獨リ三年トナス、位階ニ據リテ之ヲ推スニ、二書蓋シ誤レリ、

〔性靈集六〕東太王爲故中務卿親王、造刻檀像、願文、

伏惟皇帝陛下。○允仁允慈、含弘光大、且智且文、道義是親、所以爲故中務卿親王。○伊及故夫人桓

〔日本書紀^{二十}〕四年正月甲子，是月立一夫人春日臣仲君女曰老女君夫人。（老女君夫人，實名顯也）

〔日本書紀^{二十三}〕二年正月戊寅，夫人蘇我島大臣女法提郎媛生古人皇子。

〔日本書紀^{二十九}〕二年二月癸未，夫人藤原大臣女氷上娘生但馬皇女，次夫人氷上娘弟五百重娘生

新田部皇子，次夫人蘇我赤兄大臣女大薤娘生一男二女，其一曰穗積皇子，其二曰紀皇女，其三曰田形皇女。

〔萬葉集^二〕明日香清御原宮御宇天皇^武○天代天皇賜藤原夫人御歌一首○歌

〔萬葉集^八〕藤原夫人歌^{明日香清御原宮御宇天皇之夫人（五百重娘也，字}

〔萬葉集^{二十}〕藤原夫人歌一首^{御原宮御宇天皇之夫人也，}

〔續日本紀^一〕高天原廣野姬^持天皇十一年^{元武}八月癸未，以藤原朝臣宮子娘爲夫人。

〔續日本紀^{十七}〕天平二十年六月壬寅，正三位藤原夫人薨，贈太政大臣武智麻呂之女也。

〔續日本紀^{二十二}〕天平寶字三年七月己巳，夫人^武正三位廣岡朝臣古那可智薨，正四位上橘宿

禰佐爲之女也，天平勝寶九歲八月十八日，有勅賜性廣岡朝臣。

〔二代要記^二〕夫人高野新笠^{贈正一位乙繼女}

〔續日本紀^{三十一}〕寶龜八年八月己丑，從三位藤原朝臣曹子爲夫人。

〔續日本紀^{三十七}〕延曆二年二月甲寅，正三位藤原朝臣乙牟漏，從三位藤原朝臣吉子並爲夫人。

〔續日本紀^{三十九}〕延曆五年正月戊申，以從三位藤原朝臣旅子爲夫人。

〔帝王編年記^{十二}〕萬多親王^{母夫人藤原小原，盛取女}

〔類聚國史^{後四}〕大同四年六月丁亥，橘朝臣某^{○嘉多治比真人高子爲夫人}

〔日本後紀^{二十四}〕弘仁六年七月壬午，從四位下藤原朝臣緒夏爲夫人。

〔二代要記^二〕夫人正三位藤產子^{弘仁二年從三位，次}

〔延喜式^{三十三}〕親王以下月料

夫人醬一斗二升^{日四}、未醬六升^{日二}、鹽一斗五升^{日五}、東饌八斤^{日四}、隱岐鮑、養堅魚、烏賊、海藻各

六斤^{日三}、兩堅魚七斤^{日三}、兩二鮓十隻^{日三}、腊十八斤^{日九}、三鮓廿斤^{日十}、兩二堅魚、煎紫菜、海

松各一斤^{日三}、二錄^{日三}

〔延喜式^{三十五}〕親王以下月料

無品親王、內親王、妃夫人、女御^{日米各五升}

〔延喜式^{四十一}〕凡齋內親王^略、夫人^略、起五月、盡八月、日別一顆^水

〔小野宮年中行事〕四月朔日主水司始貢永事

中宮東宮起五月、盡八月、齋內親王妃夫人尙侍相同雜給、起五月五日、盡八月卅日、具在、主水司式

〔小野宮年中行事〕四月五日中午務省申妃夫人嬪、女御、夏衣服文事

〔小野宮年中行事〕十月四日中午務省申妃夫人嬪、女御、冬衣服文事

〔續日本紀^{三十三}〕慶雲元年正月壬寅、詔御名部內親王、石川夫人^武、益封各一百戶、

〔續日本紀^{三十三}〕神龜四年閏九月丁卯、皇子誕生焉、十一月己亥、詔曰^略、中、新誕皇子宜立爲皇太子、

戊午、賜從三位藤原夫人^{母光明子}食封一千戶、

〔日本紀略^曉〕大同四年十二月甲午、夫人正四位下橘朝臣嘉智子、正四位下多治比真人高子二人、

賜封各一百戶、

〔延喜式^{三十八}〕凡設座者^略、中、夫人錦草墊^{黃地覆武鋪夾、紫地車}

〔延喜式^{四十一}〕凡車馬從者^略、中、夫人廿人、

〔延喜式^{五十一}〕凡乘輦車出入內裏者、妃限曹司、夫人及內親王限溫明後涼殿後、

〔日本書紀^{十二}〕元年八月己酉、立大宅臣祖木事之女津野媛爲皇夫人、生香火姬皇女、圓皇女、

夫人字初見

待遇

賜封

夫人

夫人ハ其位妃一次ゲルモノナリ古訓ニミメキサキ或ハオホトジト云フ夫人ノ名ハ日本書紀反正天皇ノ紀ニ初テ見エタレドモ是亦後世ヨリ追書セルモノニテ當時此稱アリシニアラズ大寶ノ制始メテ夫人三員ヲ置キ三位以上トシ多ク大臣ノ女ヲ以テ之ニ充ツ爾後歷朝大カタ絶ユルコト無カリシガ淳和天皇以來復此名稱ヲ見ザルニ至ル蓋シ女御更衣等ノ職起ルニヨリ自然廢絶ニ歸シタルモノナルベシ

歷朝ノ間ニ於テ、人臣ノ妻ニシテ夫人ノ稱ヲ得シモノハ、藤原不比等ノ後妻橘三千代一人ノミ、其葬後ニ太夫人ト爲レリ、亦此外ニ其例ヲ見ズ、

〔令義解後一宮職員〕夫人三員、右三位以上

〔令集解六員〕古記云、漢書云、天子妾稱夫人、

○按ズルニ、唐六典ハ、惠妃麗妃華妃ヲ夫人ト云ヒシガ、我邦ニハ妃ノ下ニ夫人ヲ置ケリ。
 〈令義解七公式〉太皇太后謂天子祖母登后位者爲太皇太后也太皇太妃太皇太夫人同、
 皇太后謂天子母登后位者爲皇太后也皇太妃皇太夫人同。○中略。

右皆不出

〔令義解〕^四凡嬪以上並依品位給封祿。謂欲顯不減半故云。依品位其封祿是重倍令准男貴人位田灼然不減。其春夏給曉祿者。[○]中人
 纔十八疋。糸卅六約。布五十四端。[○]中略。若帶。宜者。累給。秋冬亦如之。以總代糸。

〔延喜式中十務二〕後宮時服

夫人、絹五十五疋、細布卅端、噐布五十端、冬加綿二百五十疋、前件時服、夏四月五日、冬十月五日、內侍具錄人數及物色移、省造解文申官

補任式

〔諸官符案〕太政官符

中務式部民部宮内等省

三品爲子內親王

右大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣時平宣奉勅以件內親王定爲妃者省承知符到奉行

藤原朝臣枝良 遣唐錄事從七位上守左少史

寬平九年七月廿五日

以夫人爲妃

〔日本後紀續一〕弘仁六年七月壬午夫人從三位多治比八高子爲妃

叙位

〔日本紀略續一〕寬平九年七月廿五日戊戌以無品爲子內親王叙三品爲妃

贈位

〔日本紀略續一〕天長三年三月己巳妃續一從二位多治比真人高子薨贈從一位年卅九遣使就第詔曰云々

贈妃

〔日本紀略續一〕昌泰二年三月十四日丁未妃三品爲子內親王薨天皇不視事三日廿一日甲寅贈故妃爲子內親王一品兼給大藏省商布民部省米宛喪料云々差中納言藤原國經等爲使就家宣制

辭職

〔續日本紀續一〕延曆七年五月辛亥夫人從三位藤原朝臣旅子薨詔遣中納言正三位兼中務卿藤原朝臣小黑麻呂參議治部卿正四位下壹志濃王等監護喪事又遣中納言從三位兼兵部卿皇后宮大夫石川朝臣名足參議左大辨正四位下兼春宮大夫中衛中將紀朝臣古佐美就第宣詔贈妃并正一位妃贈右大臣從二位藤原朝臣百川之女也延曆初納於後宮尋授從三位五年進爲夫人生大伴親王薨時年三十

〔日本後紀續一〕弘仁三年五月癸酉妃續一二品朝原內親王辭職許之 癸未妃四品大宅內親王辭職許之

第一の御子山部親王をたて申賜ふべしと申さ○中濱成申ていはく、山部親王は御母いやしくおはす、いかでか位につき賜はんと申ししかば、御門まことにさる事也、酒人内親王をたて申さんとのたまひき、

○按ズルニ、酒人内親王ハ井上皇后ノ女ニシテ、桓武天皇ノ庶妹ナリ、然ルニ大日本史后妃傳ニ、日本後紀ノ贈吉野皇后ヲ、桓武天皇ノ御母高野贈皇后ノ事トシ、桓武天皇ト酒人内親王トヲ、同皇后ノ所生トセシハ誤ナリ、其御同母ニアラザルコトハ上文ニテ明ナリ、

〔類聚國史後四十六〕大同四年六月丁亥、立高津内親王爲妃、

次妃

〔日本書紀孝四元〕七年二月丁卯、次妃河内青玉繁女、埴安媛、生武埴安彦命、

〔日本書紀開四元〕六年正月甲寅、次妃和珥臣遠祖、姥津命之妹、姥津媛、生彦坐王、

〔日本書紀五神〕元年二月丙寅、次妃尾張大海媛、生八坂入彦命、

〔日本書紀七行〕四年二月甲子、次妃五十河媛、生神櫛皇子○中、次妃阿倍氏木事之女高田媛、生武國

凝別皇子○中、次妃日向髪長大田根媛、生日向襲津彦皇子○中、次妃襲武媛、生國乳別皇子、

〔日本書紀十神〕二年三月壬午、次妃和珥臣祖、日觸使主之女宮主宅媛○中、次妃宅媛之弟小願媛小願

此云鳥中略、次妃河派仲彦女弟姫○中、次妃櫻井田部連男祖之妹絲媛○中、次妃日向泉長姫、

〔日本書紀十七〕元年三月癸酉、納八妃○中、次妃三尾角折君妹曰稚子媛○下

〔日本書紀十九〕二年三月、納五妃○中、次妃蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛堅鹽此媛生七男六女、○下

〔日本書紀二十五〕大化元年七月戊辰、立二妃○中、次妃蘇我山田石川麻呂大臣女曰乳娘、

〔日本書紀二十九〕二年二月癸未、先納皇后姊大田皇女爲妃、生大來皇女與大津皇子、次妃大江皇女

生長皇子、與弓削皇子、次妃新田部皇女、生舍人皇子、

〔日本書紀十八〕元年三月己酉、前庶妃大河内稚子媛、生一男是曰火焰皇子、是稚田君之先也、

庶妃

此云利能鯉魚利能浮池利能朝夕臨視而戲遊時弟媛欲見其鯉魚遊而密來臨池天皇則留而通之爰弟媛以爲夫婦之道古今達則也然於吾而不便則請天皇曰妾性不欲交接之道今不勝皇命之威暫納帷幕之中然意所不快亦形姿穢陋久之不堪陪於掖庭唯有妾姊名曰八坂入媛容姿麗美志亦貞潔宜納後宮天皇聽之仍喚八坂入媛爲妃

〔日本書紀八〕二年正月甲子先是娶叔父彥人大兄之女大中姬爲妃

〔日本書紀十〕二年三月壬午先是天皇以皇后姊高城入姬爲妃○中又妃皇后弟弟姬

〔日本書紀十一〕二年三月戊寅妃日向媛長媛生大草香皇子幅梭皇女

〔日本書紀十二〕元年七月壬子立華田宿禰之女黑媛爲皇妃

〔日本書紀十三〕元年二月戊辰朔爰取大草香皇子之妻中葛姬納于宮中因爲妃

〔日本書紀十四〕元年三月戊子立三妃許勢男人大臣女紗手媛紗手媛弟香香有媛物部木蓮子木蓮子此

云伊大連女宅媛

〔日本書紀二十〕元年三月立大伴糠手連女小手子爲妃是生蛸子皇子與錦代皇女

〔一代要記二〕妃三品酒人內親王天皇庶妹也第一也天皇

〔日本後紀東大寺〕天長六年八月丁卯二品酒人內親王薨廣仁○光天皇之皇女也母贈吉野皇后

內親王也容貌妖麗柔質窈窕幼配齋宮年長而還俄叙三品桓武納之掖庭寵幸方盛生皇子朝原內

親王爲性倨傲情操不修天皇不禁任其所欲嬖行彌增不能自制弘仁中優其衰暮特授二品○中薨

時年七十六

〔永鏡光下〕寶龜四年正月十四日に山部親王○桓の中務卿と申しておはせし東宮にたち給ふ

略○中大臣以下御門○光に申していはく儲君はまばしもおはせずしてあるべき事ならずす

みやかに立て奉り賜へど申しかば御門たれをかたつべきとの賜はせしかば百川すゝみて

元妃

〔日本書紀神代〕一書曰天照大神以思兼神妹萬幡豐秋津姬命ワタフチ・アキツ・ヒメノミコト配正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊マサキ・カミ・ササケ・ハヤヒ・アメノモリ・ミコト爲妃
〔日本書紀神武〕天皇生而明達意備如也○中長娶日向國吾田邑吾平津媛爲妃生手研耳命
〔日本書紀十四〕元年三月是月立三妃元妃葛城圓大臣女曰韓媛○中次有吉備上道臣女稚媛○中
次有春日和珥臣深目女曰童名君○下

〔日本書紀七〕元年三月癸酉納八妃元妃尾張連草香女曰目子媛色部名

〔日本書紀十九〕二年三月納五妃元妃皇后弟曰倉稚綾姬皇女是生石上皇子次有皇后弟曰日影皇

女是生倉皇子

〔日本書紀二十五〕大化元年七月戊辰立息長足日廣額天皇○舒女間人皇女爲皇后立二妃元妃阿

倍倉梯麻呂大臣女曰小足媛生有間皇子

〔日本書紀三〕庚申年九月己巳納媛蹈端五十鈴媛命以爲正妃

〔日本書紀十八〕元年三月己酉詔曰立前正妃億計天皇女橘仲皇女爲皇后

〔日本書紀二十八〕納天命開別天皇女菟野皇女爲正妃

〔日本書紀四〕二年二月丙寅妃倭國香媛亦名細生倭迹迹日百襲姬命亦妃額某弟生產狹島

命○下

〔日本書紀四〕七年二月丁卯○中妃伊香色謎命生產太忍信命

〔日本書紀四〕六年正月甲寅先是天皇納丹波竹野媛爲妃

〔日本書紀五〕元年二月丙寅妃伊國荒河戶畔女遠津年魚眼眼妙媛○中生豐城入產命○下

〔日本書紀六〕十五年八月壬午朔立日葉酢媛命爲皇后以皇后之三女弟爲妃

〔日本書紀七〕四年二月甲子天皇幸美濃左右奏言之茲國有佳人曰弟媛容姿端正八坂入產皇子

之女也天皇欲得爲妃幸弟媛之家弟媛聞乘輿東駕則隱竹林於是天皇權令弟媛垂而居于泳宮宮

舉釋妃

正妃

制度

〔令義解^{後一}〕妃二員 右四品以上

〔令義解^六〕古記云禮記^禮云天子之妃曰后令法用妃以下皆爲妾也朱云妃二員謂皇后之次

妻也凡妃夫人嬪者並皆天子之婦也其高下者如文列也婦數有若干色可習也如臣下不可准思妻妾耳

〔唐六典^{十二}內官〕妃三人正一品^{尚官三夫}夫人佐后坐而論婦禮者也其於內則無所不統故不以一

務名焉

〔令義解^{後一}〕後宮職員令第三^{謂妃夫人嬪此無所掌而處職員者}下有十二司^{其多者言之職員}

〔類聚符宜抄^六〕中納言兼兵部卿藤原朝臣繩主宣奉勅少納言奏有稱妃某姓邑刀自之辭自今以後

宜除姓只稱妃邑刀自若有兩妃事須相疑者更聽勅裁

弘仁八年六月廿三日

少外記高丘宿禰潔門奉

〔令義解^七〕太皇太后^{謂天子祖母登后位者爲太皇太后居妃位者爲太皇太妃太皇太夫人同}

皇太后^{謂天子母登后位者爲皇太后居妃位者爲皇太妃皇太夫人同}

右皆平出

〔令義解^四〕凡嬪以上並依品位給封祿^{謂欲領不減半故云依品位其封祿是重饒令准男實人位田灼然不減其春夏給號祿者妃純廿疋}

糸冊約布六十端^{略中若帶官者累給秋冬亦知之以綿代糸}

〔延喜式^{十二}中務〕後宮時服

妃絹六十疋細布冊端暖布五十端^{冬加綿三百}前件時服夏四月五日冬十月五日內侍具錄人數及

物色移省造解文申官

〔延喜式^{十三}大膳下〕親王以下月料

妃簪一斗二升^{合日四}未簪六升^{合日二}鹽一斗五升^{合日五}東饌九斤六兩^{日五}隱岐鰓蓑堅魚鳥賊海藻各

佚給

古事類苑

帝王部二十一

妃

妃ハ、皇后ノ次位ニ在ル御妻ノ稱ナリ、古訓ニ、ミメト云フ、即チ御妻ノ義ナリ、又キサキト云フ、其訓后ニ同ジ、キサキトハ專ラ言ヘバ皇后ヲ指シ、汎ク言ヘバ御寢ニ侍スルコトナレバ、妃ニモ此訓ハアルナリ、日本書紀ニ據ルニ、神代ヨリ此名アレド、後世ヨリ追書セシモノナレバ、其何ノ時ニ起レルヲ知ラズ、故ニ元妃ト曰ヒ、正妃ト曰ヒ、次妃庶妃ト曰ヘルモ、汎ク其等級ヲ舉グルニ過ギズ、文武天皇ノ大寶制令ニ至リ、妃二員ヲ置キ、其品秩ヲ四品以上ト定メタリ、品ハ皇族ノ位階ナレバ、皇族ヲ以テ之ニ充テタルナリ、是ニ於テ、妃ノ制度始テ見ハル、然レドモ當時妃ト稱スルモノ甚ダ少シ、僅ニ大寶元年七月ノ紀ニ、皇太妃慈クハ元明天ヲ名アルノミ、桓武天皇ノ時ニ至リ、夫人藤原旅子ニ妃ノ號ヲ贈ル、是ヲ制令後ノ再見トス、此時皇族ヲ以テ充ツルノ制ハ既ニ壞レタリ、是ヨリ後、妃ノ稱ノ史上ニ見ハル、モノ、僅ニ二三ニ過ギズ、

名稱

〔新撰字鏡〕妃以之、以爲二反、

〔類聚名義抄〕妃ニ非反、

〔名目抄〕人體妃ヒ

〔伊呂波字類抄〕妃ヒ嘉偶日妃、后妃也、

更衣進爲女御

雜載

同 同

御息所

名稱

四三〇

初見

同

稱更衣爲御息所

同

稱女御爲御息所

四三一

稱侍御寢者爲御息所

四三三

大御息所

四三四

院御息所

四三五

後宮雜載

後宮雜載

四三六

更衣

叙位

出家

贈位

追福

再嫁

准女御

假稱女御

御禊女御

女御代

雜載

名稱

員數

初見

補任

叙位

職掌

待遇

祇候所

出家

四一三

四一四

四一五

四一七

同

四一八

同

四二〇

同

四二二

四二四

同

同

四二五

四二六

同

同

四二七

同

補任

貶黜

女御

名稱

供給

待遇

家司

祇候所

女御初見

補任

以更衣爲女御

以御息所爲女御

以尙侍爲女御

以御匣殿別當爲女御

上皇養子爲女御

入內儀

入內用途

參賀進獻

御書使

同

同

三七四

同

三七六

三七七

三八〇

同

同

三八四

同

同

同

三八五

同

四〇七

四〇九

四一二

贈妃

三六五

辭職

同

夫人

制度

三六六

供給

同

賜封

三六七

待遇

同

夫人字初見

同

補任

三六八

叙位

三六九

賜賻贈位

同

難載

同

嬪

名稱

三七一

供給

同

待遇

同

家司

同

嬪字初見

三七二

古事類苑

帝王部二十一

妃

名稱

三五九

制度

三六〇

供給

同

待遇

三六一

妃字初見

同

元妃

三六二

正妃

同

單稱妃

同

次妃

三六四

鹿妃

同

補任式

三六五

以夫人爲妃

同

叙位

四

附位

同

嘉永三年二月廿七日

大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師身奉

左少辨藤原朝臣保傳宣

權大納言源朝臣基豐宣奉

勅從三位藤原朝臣雅子封宜苑賜壹仟戶者

嘉永三年二月廿七日

修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史小槻宿禰輔世奉

勅母因子貴竹帛所存封因位厚禮典所重爰從三位藤原朝臣雅子奉仕先皇○仁無險諛之心誕育

當今○孝致慈愛之誠今以報酬之誠實特准三宮之崇班宜授邑土千戶任人賜爵一如舊典主者施

行

御書二十七年二月〇〇日
嘉永三年二月〇〇日

剃髮後准三宮

〔女院小傳〕西華門院源基子後宇多妃後二條母內大臣具守一女父大相國母從三位平親繼女弘安

八月日奉誕後二條十六歲德治三、八廿六爲尼○清淨法時依後延慶元、十一、廿七叙從三位十二月准

三宮同日院號

〔女院小傳〕萬秋門院項子圓明寺關白○藤原女母中納言典侍中納言乾元二、三、五爲後二條尙侍六

同日叙從三位德治三、後八、十六爲尼○後二條元應二、三、廿六准三宮五十同日院號建武五、三、廿六

御事七十

贈准三宮

〔續三宮傳〕新崇賢門院中御門院實永六年十二月廿九日薨同七年三月廿六日贈准三宮○節

〔續三宮傳〕東京極院仁孝帝天保十四年三月廿一日薨去六十同十五年二月十三日贈准三宮○節

〔百一錄〕延寶五年七月五日、戊下刻陣儀始、新中納言殿○靈元帝母被任、准后宣下云々、上卿今出河大納言今曉新中納言殿薨逝、御年序五十有四云々、今上皇帝○靈元之御萱堂、園亞相基福卿妹、東園大納言○基姊公也、御一腹之宮方、主上御方、妙門一乘院、青蓮院宮、大聖寺殿、級宮御方、近衛殿云々、無觸穢諒闇之儀云々、但三日御廢朝、三日內著御喪服、

〔續三宮傳〕敬法門院東山帝御親、松木前內大臣宗條公女號大納言局、後稱上藏局、元祿二年正月廿九日准三宮、正德元年十月廿三日門號定、

〔嘉永三年二月廿七日准三后門號宣下次第〕准三后宣下次第

上卿著仗座、美職事來仰仰詞宮ニ准シ、御封千戸ヲ宛賜ハラシメヨ、次上卿移著端座、令官人數試、次上卿令官人召文章博士、博士著試、次上卿仰勅書事、博士進勅書草、上卿披見、訖目許博士退、次上卿召官人、仰可令持參於內記、篋由內記進篋、次上卿入於文宮、賜內記、內記取之立小庭、次上卿起座、就弓場、內記從附職事內覽奏聞訖返賜、次上卿復仗座、內記返給仰可清書之由、次內記進清書、宮入上卿披見起座、更就弓場、附職事奏聞如初訖返賜、次上卿於弓場見御畫有無、次上卿復仗座、內記置宮座前退、次上卿令官人召大外記、問中務輔候否、仰可召由中務敷試、次上卿下勅書、宮入輔取之退、次上卿令官人召大外記、大外記參試、上卿仰年官年得事、外記稱唯退、次上卿令官人召辨辨參試、上卿仰封戶事、辨稱唯退、次上卿令官人撤試、次上卿起座退出、

准后宣下上卿辨廣幡大納言胤保、奉行頭右中辨資宗朝臣、准后宣下參仕外記方、少外記邦昌、副

使宗岡行誠、使部中務省少頭職平內記局少邦昌、掃部寮權助藤原利政、陣官人橘久芳、○中

宣旨勅書等、兩局并中務省、本殿へ持參、

正二位行權大納言兼右近衛大將源朝臣基豐奉宣

勅、以從三位藤原朝臣雅子宣賜、准三宮年官年得者

官年爵者、

文安元年四月廿六日

大外記中原朝臣師鄉才

〔和長卿記〕大永六年五月廿日壬寅、今夜東洞院殿○後幸其有准后宣下事云々、上卿大納言公惟賴著陣、官外記各自參陣云々、勅書事兼日爲大內記爲藤前管相公相代作草、今度職事頭辨誤以詔書分送、御教書仍詔書之草也、予云、准后宣下必可爲勅書之子細、令演說同舊草等出授之間、令承諾畢、又彼相公所作草之文、贈准后之勅書之樣也、一向不及沙汰、不可然之間、改直者也、其文者朕叔妣也、又國忌山陵如舊典云々、本文生云、父母死云、考妣、叔妣何哉、年官年爵可書載處、國忌山陵何哉、云彼云是、言語道斷也、

今度草

勅天之所覆、逼成造化之功、人之所親、莫過母子、道前從三位藤原朝臣藤子者、奉前朝得寵幸第一之譽、登庸被進、無險諛私謁之心、平生在溫柔、內訓垂法、頃日依踐祚褒章呈誠、上以三品重准后宮、宣授邑土千五百戶、任人賜爵一如舊典、主者施行、

大永六年五月御重日

昭宣公、元慶六年二月准三后勅書、任人賜爵准三宮、如忠仁公故事云々、凡法中之准后、女中之准后之勅書者、任人賜爵之文、宣云々、左右近衛帶仗資人卅人等除之故也、內舍人二人計賜之也、爲後規巨細注之、爲散管相公之感也、

〔執次詰所本御系譜〕後陽成院御母、新上東明院准三后○後晴子、勸修寺內大臣晴右公女、

〔執次詰所本御系譜〕清子內親王○後陽成皇女、母中和門院○後水尾帶母、准三后藤前子、近衛入道前關白太政大

臣前久公女、元和六年六月二日門號定、寬永七年七月三日崩、五十六歲、

〔百一錄〕貞享二年五月廿二日、御匣殿母○後西院帝藤原隆子、被任准后云々、今日薨御八十二才、

〔康富記〕文安元年四月廿六日乙巳參伏見殿。○中略今夜有准后宣下事。國母母爲今後花園并二宮之御政所光北令蒙此宣旨給上卿權大納言藤原公保卿按察職事左中辨藤原俊秀大外記師鄉朝臣六位外

記不參官務不參六位史安倍盛時中務權大輔源家種等參之大內記菅原在治依違例不參以六位史盛時非少爲少內記入勤代召仰勅書草進事即持參草大內記內々作進之候書々職事云々職事下內記代上卿召中務

輔被下之召大外記師鄉朝臣被仰年官年符事次召左中辨被仰封戶事辨仰六位史云々御名字從

三位源幸子也故源宰相經有卿息女也仍爲經子而被改之爲幸子云々今上皇帝○後爲後小松院

御養子仍光範門院○後小松院實子爲御養母雖然兩院共非御存生之間實之御父母伏見宮并上樣也可

爲御實母歟之由自禁裏被尋申前攝政殿下處可爲御實母之由者也云々前攝政殿被申御意見仍

詔書之文被載御實母由者也云々及曉更中務輔家種東帶持參詔書於伏見殿子時土御門高倉南

婦卒也自去年冬爲竹園御所國母同宿也大外記師鄉朝臣東帶持參年官年符宣旨云々於東向御緣被召入宣旨詔書

畢庭田中將源重賢朝臣衣冠爲申次云々其後左大史晨照宿禰東帶持參封戶宣旨云々今月宣下

分配予也自局務送狀可參陣之處有故障可構參之由被相催之間致領掌之處可參之由又被示之

予不令參陣也次職事左中辨令立寄給被語云今夜大內記不參也爲少內記可被參陣詔書作進事

可被致用意之由被仰之間予申云於宣命位記等者少內記草進有連綿之例於詔勅者頗希也且當

座不覺悟之由申了及半更自禁裏職事度々雖被招引不令參仕者也如案於詔書者皆左大丞等有

申子細被裁朕之母也之字云々又幸子事武家鹿苑院相國○足利義滿之養母之御名也雖然非女院之

由有御沙汰不被憚之云々左大辨益長卿被撰進歟本御名字經子也強無其憚歟幸子事貞治二年

六月廿九日叙從三位應安二年十一月廿五日又二品歟雖然非女院准后之列之間不可被憚之由

左大辨被申之

正二位行權大納言兼陸奥出羽按察使藤原朝臣公保宣奉勅以從三位源朝臣幸子准三宮宣賜年

〔女院小傳〕皇嘉門院藤原子崇德后、近衛准母、法性寺關白藤原忠通第一女、母大納言宗通卿女、從三位藤宗子中略大治五、二、廿一爲中宮中略下

〔藤代皇紀〕伏見中宮藤鐔子、太政大臣實兼女、母內大臣源通成女、正應元年八月廿日冊、去六月八日爲女御、伏見院后、後伏見准母、

妃爲准母

〔女院部類〕徽安門院壽子、花園院皇女、光嚴院妃、後光嚴院准母、建武四年二月五日院號、略第

女御准三宮

〔扶桑略記〕二十九永承六年六月廿四日、右大臣藤原朝臣敦通三女、女御勸子、准三宮、賜年官年爵封戶千戶、一云、七月十日准三宮云々、

〔扶桑略記〕二十九延久四年十二月一日乙亥、女御源朝臣基子、准三后、給年官年爵并封戶五百畑、

〔一代要記〕五河女御從四位下藤朝臣道子內大臣能長一女、母贈從三位源濟政女、延久元年八月廿二日入太子宮、二十八、同五年七月廿三日爲女御、叙從四位下、承保二年十二月廿八日准三后、三十四、

〔平戶記〕仁治三年十二月十八日丙寅、今日故四條院女御子彦被下准后宣旨、藤原實實御猶子之儀云々、仍令申請給也、

〔續三宮傳〕新皇嘉門院仁孝帝女御文化十四年十二月十一日入內計一同月十二日、女御宣下、中略文政三年十二月廿六日、准三宮宣下、

帝母准三宮

〔玉海〕文治六年四月十九日壬寅、今日當今後母儀子叙三品、即被下准后宣旨了、是子再三所奏請也、勅別當權中納言親信卿云々、或母儀伯父也上卿內大臣、

〔業資王記〕正治元年十二月十三日辛未、主上御門土御母儀子被下准后宣旨、追日三品局所、勞務大事云々、

〔女院部類〕光範門院資子、贈左大臣藤資國女、准大臣資教爲子、後小松院妻、稱光母、後花園養母、中略應永三十一年七月廿九日准三宮、同日院號、

由被定申云々、仍今日有其定、内府以下卿相參著、仗座可號、八條院之由各被定申藏人大進於仗座、仰以左衛門權佐爲親近江守實清、大宮可爲判官代、次盛親、預年可爲主典代之、由内府召大外記師元宣下云々、后宮院號、以大夫爲別當、以進爲判官代、以屬爲主典代之、由宣下、今度之儀、何樣可被仰下哉之由、先被問公卿判官代以下可被宣下、公卿院司逐可被仰下之旨、被定申云々、仍如此、中今日之次第頗迷、可否歟、予下宿所之間、補判官代之由藏人告送、又迷是非、可參賀之由、相公殿有返答、仍束帶、平緒門先參内院司事畏申旨、付女房奏聞、次參八條殿、

〔女院小傳〕八條院、障子鳥羽第三女母長實卿女美福門院、保延四、四、九爲内親王、二年勅別當中納言伊通、中久安二、四、十六准三后保元二、五、十九爲尼、廿一、金應保元十二、十六乙卯院號、依准母直有此年、沙汰、建曆元、六御事七十

皇后爲准母

〔續世繼三男〕也、保延五年にや侍けん、つちのどのひつじのとし五月十八日、世になくけうらなる玉のをのこ宮衛、近うまれさせ給ねれば、院のうちさらなり、世中もうごくまでよろこびあへるささいはんかたなし、略日にそへてめづらかなるちこの御かたちなるにつけても、いかでかすかやかに、みこのみやにもくらゐにもとおぼせども、ささきばらにみこだちあまたおはしますを、さしてゆべきならねば、おもほしめしわづらふはきに、當代、崇の御子になし奉り給ふ事いできて、みな月の廿六日、皇子内へいらせ給ふ、御供に上達部殿上人えらびて、常のみゆきにも心ことなり、みやこのうち車もさりあへず、みるもの所もなき程になん侍りける、内へいらせ給ふにてぐるまの宣旨など、藏人仰せつゝ、すでに參らせ給て、中宮、后、皇子を御母にて、まだ御子もうまれ給はねば、めづらしくやしなひ申させたまふ、后の御おやにては、關白殿、忠通、藤原おはしませば、皇子のおほちに、かたぐみかきさきも御子おはしなさせぬに、院、羽御心ゆかせ給て、いと心よき事いできて、いつしか八月十七日春宮にたゝせ給ふ、

由被_レ仰云々下官開此奉心中所思先帝堀河_八歲即位_レ繼以行幸其後及數年_レ不可有_二母后_一要之
 處以_レ御芳門院_{准母儀}有_二立后之事_一故天道不受_レ歟今度今上_八歲_レ不可有_二御與中_一必可有_二同與人_一
 然者又必可有_二立后也_一帝賀母早_レ仁亡仍此人尤謂_レ昭穆已_レ叶_レ母儀_{立后}內大臣以下必可有_二立后_一由被_レ
 之奉天之所許世之所推誠當_レ其仁何云非_レ據_レ此旨密々先_レ申_レ殿下_{立后}內大臣以下必可有_二立后_一由被_レ
 申_略中 廿九日今夕前齋院_{子令}立后宣旨被_レ下是准母儀先_レ令入_レ內御東對也

〔續世繼_{大三}〕院_{大内}渡院_{鳥羽}の姫宮_子東宮_二の女御にまゐり給高松院と申御事なり前齋院とて

いまの上西門院_{女統子}鳥羽皇 おはしましを御母_二の女御にまゐり給とらせ給とらせ給はりしはさきさき美福門院おはしませば、べちの御母なくともおはしましぬべけれど、いさすこしねんころなる御心にや侍りけん、

〔女院記〕殷富門院_{亮子}後白河院御女、母從三位藤原成子、安德顯德二帝准母儀、保元元年四月十九

日內親王、卜定齋王、壽永元年八月十四日皇后宮_{年増}

坊門院_{範子}高倉院御女、土御門院准母儀、治承二年六月廿七日內親王、卜定賀茂齋院_年建久五年

八月退下、同六年十月廿一日准三宮_{年十}同九年三月三日皇后宮_{年廿}此日天皇_{御門}即位、准母

儀_略師

〔皇胤紹運錄〕春華門院_{昇子}鳥羽皇女_後一品皇后、順德院准母、

〔女院記〕安嘉門院_{邦子}後高倉院御女_{第二}母北白河院中納言基家卿女、後堀河院准母儀、承久三年

十一月廿五日內親王_{十三}同年十二月一日皇后宮_{年十三、此日天}皇即位、准母儀、

式乾門院_{利子}後高倉院御女、母北白河院、四條院准母儀、嘉祿二年十一月廿六日內親王、卜定齋王、

天福元年二月五日伊勢ヨリカヘリ、同年六月廿日皇后准母后、

〔女院小傳〕遊義門院_{鈴子}後宇多后、後二條准母深草一女_略中弘安八、八十九爲皇后宮_{十六}

〔爲親記〕應保元年十二月十六日甲寅、今日無品內親王、障子_{鳥羽院}被_レ成_レ母后之儀、云々、仍可有_二院號_一之由、自去比沙汰出來云々、而內親王院號、無先規、歟、其間事被_レ問入々云々、可爲_レ母儀者、院號、可宜之

內親王爲准母

〔二代要記〕八河〔中宮〕媼子內親王白河院長女今上(堀河)母儀中尊寬治五年正月廿二日壬午午時參內著左仗與座此間宣命者院被奏聞也楚歸參

宣命返給略中宣命
現神大八洲所知倭根子天皇河大命其萬勅布大命親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食宣朕以幼齡天辱嗣寶位利而太上天皇宣者無品內親王皇女媼子同胞之親天之

宣命

心整操修天御坐此內親王所生相憑相賴口口賜上觸事天心興依天如

所生算登奉仕所念行天奈故是以無品內親王云々今日宣命書後皇太后

崇奉此事只朕加恩爾始行布事爾非不往代乃賢王母舊迹有奈所聞念行入故此狀

平悟而供奉勅布天皇大命衆聞食宣

寬治五年正月廿二日

〔中右記〕嘉承二年閏十月九日前齋院女今上准母儀羽可有立后事中人々被申旨諒聞之中

不可有憚至母后准一條院母后猶早可有立后也就中御即位日必可令同與給也年前齋院同與之

條前字尤可有憚下官旨同之殊加詞申云我朝帝王皇后齋王之外無乘與人仍尤可有立后也前

齋院尤可有憚於帝妻者即位以前立后古人不許於帝母者彼東三條例尤吉例也可被用也十一

月廿六日仍召參殿下是依可有會議之事也中是前齋院依可有同與事前日令人內給了而必可

有立后歟又與帝同可御大極殿高御座歟清和母后并陽成院母后其御即位日立后之由同被載宣

命文之故今度可依彼例歟云々此日者可有院白御定由存之處仰云我卿有所思此事左右不可

知只攝政實與諸卿相議爲朝家可爲善事之樣可量中者仍俄所相定也人々互可被申之由殿

下被仰下也密々院童件事院御氣色云非帝母非帝妻之人先年放部芳門院立后世不甘心之間被女

院童件事院御氣色云非帝母非帝妻之人先年放部芳門院立后世不甘心之間被女

院童件事院御氣色云非帝母非帝妻之人先年放部芳門院立后世不甘心之間被女

院童件事院御氣色云非帝母非帝妻之人先年放部芳門院立后世不甘心之間被女

五月四日遣令奏、即警固、廢朝三ヶ日、止音奏、又有錫紵事、

五日左近騎射如常

七日除御錫紵、上御卷、又音奏被行解陣、十一日廢朝以後政始、

師茂

春花門院後鳥羽院皇女、順德院准母、

建曆元年十一月七日御事、今日關白以下於殿上議此事、九日關白以下參院御所、議定大祀以下事、十一日大禮延引、可爲明年之由議定、

十二日諸社祭延否有其沙汰、

十六日春花門院遣令奏、廢朝三ヶ日被仰警固事無同關事、天皇著御錫紵御除、是日大原野、園韓神、鎮

魂、新嘗祭停止、又大嘗會停止、大祀可行之由宣下、今夜春花門院御葬禮、十七日解陣、

十九日大嘗會、新嘗會共停止、大祀、廿二日廢朝以後政始、是日以後公事如例、

殷富門院後白河皇女、順德院養母、

建保四年四月廿一日御事件度公事當略無之、又該行事不見、

匡澄 治澄

遊義門院後深草院皇女、後宇多院皇后、後二條院准母、日來國母儀、

德治二年七月廿四日御事、廿六日御葬禮也、

八月四日北野祭御拜以下如例

同五日前遊義門院遣令奏、素服舉哀停止、廢朝三ヶ日、固關警固事被仰之、

主上著御錫紵、即除御、可爲三ヶ日之由雖有沙汰、即除御、同七日開關解陣、同十五日石清水

放生會、被付宮守、

待賢門院鳥羽院裏后、近衛院繼母、

久安元年八月廿二日御事、同廿九日遣令奏、廢朝云々、今度公家、不召錫紵、

九月三日御燈依廢朝中停止、同四日開關解陣、

同七日廢朝以後政始

匡道

從三位平盛子、高倉院御養母

治承三年六月十七日御事

七月廿日薨奏、廢朝三日、音奏停止同被仰之、替嗣之事、無沙汰、又今日有二位事、今日日本家使不及參陣云々、

同日著御錫紵、可爲三日也、但依日次不宜即除御之、

清澄

上西門院後鳥羽院准母

文治五年七月廿日御事

八月十日釋奠無穩座、十五日石清水放生會如例、十六日駒牽如例、

十月十一日遣令奏、廢朝三ヶ日、同十七日廢朝以後政始、

師茂

坊門院高倉院皇女土御門院准母

承元四年四月十二日御事

十三日齋院御禊、十四日誓固、十五日日吉祭等如例、十六日賀茂祭春宮使被止之、依坊門院御事、

也、公家依爲免與、以前不被憚歟、

十七日解陣、十九日吉田祭

七月廿五日今日中宮七々日御膳於極樂寺施之、

師茂廿九日相撲召合停止、依大納言源真恒娶也、或本、依中宮、給云々、

三人一同

郁芳門院白河院皇女、堀河院養母、

嘉保三年八月七日御事 八日女院御入棺

同十五日令諸道博士勘申郁芳門院崩後難事

同十六日諸卿著仗座被定申之御錫紵三日、廢朝五日之由有僉議

同日有遺令奏、外記依應德中宮職時例被行之、懷不申、山陵國忌事、又警固固關廢朝音奏停止等事同被仰之、今夜女院御

葬禮、

同廿日有解陣開關之事、今日主上著御錫紵、同廿二日除御錫紵

廿七日被定女院三七日御誦經使、七寺、五六七々日、毎々被定、今度寺良依天曆三年、使々依佳例、

九月四日廢朝以後政始

今度御錫紵以下事、被用延喜七年例之由有所見、

十月九日前郁芳門院舊臣公卿已下、可除服從事之由宣下、

清澄 匡達

中宮篤子 鳥羽院御繼母

永久二年十月一日御事、同七日遣令奏、廢朝五ヶ日、

同日七公家被召錫紵、即除御、同九日開關解陣、自次不宣之、被給二日數、

同十三日廢朝以後政始

清澄 匡達

大臣隆致公女、貞享二年五月十七日叙從三位、同十八日准三宮、同廿二日薨、追號逢春門院。

〔續三宮傳〕新崇賢門院、中御門帝御寶永六年九月廿八日叙從三位、同六年十二月廿九日薨、同七年正月廿三日葬于天台廬山寺、同年三月廿六日贈准三宮、同日門號、新崇賢門院。

〔續三宮傳〕新中和門院、中御門帝女、享保五年正月廿日准三宮宣下、同日薨、御同月廿七日門號定、

〔續三宮傳〕東京極院、仁孝帝御親天保十三年十二月一日叙從三位、同十四年三月廿一日薨、同年四月廿一日贈准三宮、同日院號定、

〔續三宮傳〕新皇嘉門院、仁孝帝女、御文政六年四月三日薨、去七十歲、同月六日門號定、

准母特選

〔續世繼^三內裏〕かくて年もかはりぬれば、○保元三年てうきんの行幸、○後白河びふく門院、○鳥羽后得子にせさせ

給ふ、まことの御子におはしまさねども、この系のみかとおはしまさぬ世にも、國母になぞらへられておはします、いとかしこき御さかえなり、又春宮、○二行啓ありて、姫君の御母、^{○鳥羽皇女}睦子^{○鳥羽皇女}准母とてはいし奉り給、この姫宮と申は、八條院と申なるべし。

〔園太曆〕文和元年十二月五日、今度官外記區造密禰、勘例抄之、附合年々一人之、外略之、其趣注之、

匡遠 師茂

中宮藤原温子、昭宣公三姫、醍醐天皇養母、

延喜七年六月八日、於東七條宮御事、

匡遠 依道令、不任葬司、素服舉哀、同停止之、又有誓固固關之事、

同九日中宮御葬也

師茂 同日止月次神今食、是日令紀傳明法博士勘申、中宮崩時、天子御服有無之狀、可有三日御服者、匡遠 則召縫殿寮、仰御服御衣、可縫供之、由賀布、自內藏寮進之、

十四准三宮六十二月廿四院號

〔一代要記八後深草〕永安門院標子順德院女建長三年十一月

〔帝王編年記二十五後深草〕神仙門院後堀河天皇御女康元元年三月

〔歷代皇紀龜山〕和德門院義子內九條先帝○仲女母順德院右京大夫弘長元年三月八日院號同日

先准三宮

〔女院小傳〕月華門院綜子後嵯峨一女母大宮院寶治元十一爲內親王一弘長三七廿准三宮十七

同日院號

〔歷代皇紀後宇多〕延政門院院王內後嵯峨院皇女母太政大臣公經女弘安七年二月廿八日院號同

日先准三宮八年八月廿四日尼廿八

〔帝王編年記二十伏見〕永陽門院後深草院第二皇女久子內親

〔續々紹運錄〕孝子內親王明皇女母源大典侍庭田重秀朝臣女號小一條局貞享二年四月二慶安三

年十月十五日誕生稱女一宮天和三年十二月三日爲內親王三十四寶永五年正月廿三日叙一品十五

九享保十年六月廿六日准三后號禮成門院同日薨七十七月七日葬于般若院

女院小傳修明門院藤原子後鳥羽后順德母○中承元元六七准三宮同日院號承久三七八爲尼同

〔十一廿二被辭申院號并年官年爵月諸司例給等〕

〔一代要記十三龜山〕京極院信子元皇后宮

〔歷代皇紀後醍醐〕後京極院后緒子元弘三年七月十一日爲皇太后宮同年十六崩追號後京極院

〔女院部類〕豐樂門院藤子贈左大臣藤教秀女後柏原院妾後奈良院母天文四年正月十一日崩七十

同月十二日院號

〔執次詰所本御系譜〕後西院尊良仁後水御母東福門院實逢春門院藤原隆子始稱御匣局櫛笥贈左

辭院號

崩後贈院號

取御所之號不可有其難歟但衆之所成不可毀宣陽一同之定又難被棄置歟左右可有勅定者宗賴

資實相具參院了降頭議定以前自院內被申一點余著束帶參內于時公卿少々參入申終左

大臣實房原已下參入云々即賴宗朝臣出仗座仰云親子內親王可有院號事何樣可申哉可被定申

者左大臣以下議定了招宗賴奏之大略一同宣陽門也少々雖有相加之人余仰云以親子內親王可

爲宣陽門院之由可仰下者先是宗賴自院歸參仰云中門之號誠難宗賴向陣頭仰之但不仰判官代

主典代等事云々は於院左金吾通親院近臣經宮後見今日并資實等不可仰院司之事之由示宗賴

宗賴觸余余只可隨本所之命之由仰了其故此事本家雖不可被知之事近代之事萬事不可自專之

上於此事者非房位之人院號之時於陣仰院司即無其謂之由古人所相傾也八難院例於軍仰之時

耳例之仍通親等之言非無其理加之是又勅定之由相存之故不加恩臣之詞而已其後公卿等起坐召

留兼光卿真下母儀榮子丹三可叙從二位之由余即參院候公卿座今日爲經密殿上座來相次右大

將賴實參入此間招資實入見參歸來院號宣下尤神妙云々小時三丞相○左大臣藤原實房右大

入左內閣府常稱其後數刻晚頭獻女院別當右中將通宗朝臣依召資實參御前賜院

司折紙授余余頗居向座末方置笏取折紙見之即返授仰可仰之由通宗退下次右大臣右大將左衛

門督源右宰相中將藤原公時已上公卿院司四人此外不補公起座降起中門外四位五位院司

付右中辨棟範朝臣則常奏事由御所如初步過南面歸出仰聞食之由各拜了昇堂上即余退出

〔帝王編年記二十〕嘉陽門院後鳥羽院皇女禮子內親王建保二年六月十日院

〔歷代皇紀四〕明義門院親王內順德院第一皇女母東一條院嘉禎二十二年廿二院號去十月准三宮

〔一代要記後八〕仙花門院睦子土御門女建長三年

〔帝王編年記二十〕正親町院無品皇子內親王土御門院號

〔女院次第〕室町院睦子○百練抄作小後堀河第一女延應二四廿一爲內親王三寬元元七

〔續三宮傳〕承秋門院東山帝中宮御諱幸子有栖川一品兵部卿幸仁親王御女元祿十年二月廿五日入内、寶永五年二月廿六日中宮宣下、同七年三月廿一日止中宮職、同日門號定、號承秋門院、自今奉稱女院、

○按ズルニ、三后ニシテ院ト稱スル例猶少カラズ、上文國母爲院ノ條參看スベシ、

女御以下宮人

〔増鏡九草枕〕文ことや新院山○龜にはひとへせ近衛の大殿ひらのひめ君子子位女御に參り給にしぞかし、女御と聞えつるを、此は文永十一年三月二十四日院號ありて、新陽明門院とぞきこゆる、

〔増鏡十一今日の日陸〕やうふく福永もん院の御さしつぎのひめ實女ぎみ實女はや御さかりもすぐるはどなりしを、このほうわう山○龜に參らせたてまつらせ給へりしが、かひくしく水のまら

なみにわかやがせ給て、やがてゐんがうありしかば、せうさん昭もん院とさこえつる、

〔百練抄後十五〕寛元元年二月廿三日庚午、以從三位藤原彦子女御爲宣仁門院、

〔女院小傳〕永嘉門院瑞子中務卿宗尊女、母大納言通具孫女平准后家女房、叙品并親王宣下無之歟、

正安四、正、廿准三宮、同日院號元亨四、七、廿九出家、後宇多五七日也、後宇多人

〔女院小傳〕八條院障子鳥羽第三女、母長實卿女美福門院、保延四、四、九、爲内親王、中略應保元、十二、

十六乙卯、院號、

〔百練抄後十〕建久二年六月廿七日癸卯、以親子内親王河皇女爲宣陽門院、又母儀高階業子叙從

三位、自親王院號以八條院、鳥羽皇例也、

〔玉海〕建久二年六月廿六日癸卯、此日法皇白河最後第三姬親子内親王有院號事、母法皇愛紀、丹准后

之人直院號八條院七條院後鳥羽例也、非母后之人蒙院號二條院後冷泉九條院后是也、

雖准后擬母儀、雖非母儀又皇后也、非后位、非母儀蒙院號之例、今度始也、然而時議之所推、不及是非

者歟、午刻宗賴申公卿散狀、資實爲院御使來云、院號之條、人々所申如此、注折可計申者也、人々多申

余申云、群議已一同宣陽門不可及異議歟、然而被用中門之號、未有先例、安嘉宣秋等之門如何、又被

内親王爲院

〔兵範記〕仁安三年三月十四日丙子已刻許參院可有院號事條々奉仰次歸參內上皇御旨申殿下原基曉頭公卿參著仗座左大臣宗原直被候端座召官人被敷軾次下官出軾仰大臣云皇太后宮職令定申院號且左府稱唯下官退去次令議右大辨實綱朝臣爲發語人

左大臣 中納言實房 宗家 右衛門督實國 參議親範 右大辨實綱等奉號九條院

大納言師長 安嘉門院 坊門院

參議家通朝臣 五條院 坊門院

次左府召下官於軾被示入々申趣下官退去申殿下候朝滿九條院宜由有仰旨此條須參啓上皇

可宣下由兼奉次下官出軾仰云改皇太后宮職可奉號九條院御所給九條院宜由有仰旨此條須參啓上皇

官年爾如舊御事次召右少辨重方被仰云改皇太后宮職可爲九條院內膳御飯可令停止者右少

宣旨但內膳御飯事次召右少辨重方被仰云改皇太后宮職可爲九條院內膳御飯可令停止者右少

辨於床子座左大史隆職宿禰了次公卿退出下官宿侍

〔女院記〕宣秋門院在子後法性寺殿實原御女母從三位季行卿女顯德院初號妃建久元年四月

廿六日中宮正治二年六月廿八日宣秋門院卜申略節

〔女院記〕陰明門院在子中山入道太政大臣實原女母左京大夫定隆卿女土御門院妃元久二年七

月十一日中宮承元四年三月十九日陰明門院卜申略節

〔女院記〕安喜門院有子三條入道太政大臣公房女母入道太宰大貳範能女後堀河院妃貞應二年二

月廿五日中宮安貞元年二月廿日安喜門院卜申略節

〔女院小傳〕永福門院子伏見后大相國實兼一女正中應元八廿爲中宮永仁六八廿一院號廿八

〔續三宮傳〕新上西門院子應司前左大臣敦平公御女寬永九年十一月廿一日入內天和三

年二月十四日中宮宣下貞享四年三月廿五日門號定

大宮宰相公藤原保原

可申殷富門院之由申人

左大辨實長藤原

次令官人召子予著賦、

右府各可口口之由示入々、仍次第被申、此度右府被申坊門院之由、先定度至于內府被申之、右府不被申、今度被仰予也、

次予奏聞主上此間御仰云、可觸前關白者、略中

次又奏聞、此間仰云、又可觸前關白、

次參大殿付高佐申、此間令申云、高松院可宜候、

次歸參又奏聞仰云、其旨可仰者、重奏云、御封以下事、任例可仰下、歟、仰云、定事歟、予奏云、例事、仍仰云、早可仰下、

次出仗座仰云、停中宮職爲高松院、改迷園爲判官代主典代、年官

右府被揖、予退入、略中

女院四人無其例、今始有之、

當時 皇嘉門院后崇融上西門院母二條准八條院女鳥羽皇高松院已上四后

當時后院號無其例、

東三條院以後、或母儀、或先帝后等也、而近代、以院號爲貴、歟、仍被計行歟、雖當時后、又爲后之故、歟、先此、事所被問人々也、女御依可有立后、口門院號、

高松院內府後、日被命曰、以木名爲院號、太無謂事也、謂枇杷殿、不號枇杷院、謂桂殿、未號桂院、不快事也、又被命云、高松殿、經家卿以後、美福門院之外、其主不宜也、

みかゞの御おやならでは受領なほえさせ給はじとて給はらせ給はずことくは后にお
はしとし、同じ事なり、れいはみかゞの御むすめさきにたちてのちに、女帝にゐ給ふもなく
やはありける、まして院分などかなからんと申給上達部もおはす、大女院門院上東は、我御院分を
ゆづり申さんと奏せさせ給中、此院をば二條院とぞ聞えさせける、

〔百練抄六德〕永治元年五月五日、高陽院御出家、四十七、入道前太政大臣藤原忠實女、太上天皇鳥羽爲后、

〔二代要記九近衛〕皇太后宮藤聖子新院崇徳后(中略)久安六年二月廿七日改皇太后號爲皇嘉門院、

〔十訓抄七〕皇嘉門院始て院號かうふらせ給へりける比、侍従大納言成通卿参りて、左衛門佐と云
女房にあひて物語して、此宮の院號は何と申侍ぞと問ければ、皇嘉門院とさだかにいらへたり
けり、次に兵衛と云女房に此事を云て問ければ、何とかやよづかぬやうなる御名にてとかとい
へりけるを、兵衛はゆうのもの也、左衛門佐がさりとてまらざらんやとは思て、いみじくいらへ
たりし、おやしう覺えしに、ゆうにこそおぼめきたりしかと感じ給けり、

〔山槐記〕應保二年二月五日壬寅中略予出仗座著膝突、仰云、中宮后二條院號定申、口右府藤原小

口歸出、次右府被示座中、次自下次第定申、

白河院御所爲三條坊門末付御所可申坊門院之由、被申之人々、

右大臣 内大臣宗能藤原 新藤中納言通俊 土御門宰相

當時雖無御所以御領爲其號例也、且立后之時爲御所可申、高松院由被申人々、

中宮大夫雅通源 權大夫實長藤原 宰相中將實國藤原

可申般富門院、安嘉門院之由被申人、

權中納言

高松院坊門院之間可、在勅定之由申人、

略

〔執次詰所本御系譜〕東山院諱初仁、靈御實母敬法門院藤宗子、中御門前内大臣宗條公女〇節

〔本朝紹運續錄〕中御門院諱慶仁、御母新崇賢門

〔皇胤鑑〕櫻町院諱昭仁、御母女御、近衛攝政家熙公女、新中和門院尙子、

〔續百一錄〕寛延三年六月廿七日、大宮御所〇後櫻町帝母御門號青綺門院樣と御治定候、自今可奉稱女院

樣旨被仰出候、

〔續々紹運錄〕後桃園院諱英仁、母恭禮門院藤富子、一條前關白兼香公女、

〔執次詰所本御系譜〕光格天皇〇中天明三年十月十二日、御養母盛化門院崩、同十一月十七日、渡御

子倚廬著御錫紵、

〔續三宮傳〕新清和院光格帝皇后後桃園院第一皇女、寛政六年三月七日、立太后、文化四年七月十八

日、寛宮〇仁御實子御治定、天保十二年後正月廿二日、院號定新清和院、自今

〔續三宮傳〕新朔平門院仁孝帝後應司關白政通公女、文政八年八月廿二日、聽輦車入内、弘化四年

三月十四日、皇太后宮同年十月十三日、院號定、稱新朔平門院、

〔一代要記〕白河太皇太后章子内親王承保元年六月十六日、停后、後冷泉后、

〔榮花物語〕布引后たゝせ給ふべけれど隙なきことをいかゞとおぼしめされて、さき〇後三

子を院になし奉らんと思しめす〇中十六日〇承保元年六月に、太皇太后宮后女院にならせ給

ぬ、としとろも一どころ院にならせ給べし、玄だいにては太皇太后宮ならせ給べし、さらすば中

宮こそは故院の后にもおはしまし、内〇白の御まゝ母にもおはしませばなぞ申つるを太皇太

后宮ならせ給ぬればさきにてもおはしなさで申人もあり、又ならせ給はではいかゞはな

ぞ申人もありけり、みかどの御おやならぬは、まだならせ給はざりければ、めづらしき事に人申

〔貴女抄〕光範門院資子、應永廿二、廿七、廿九、院號、後小松妃、稱光御母資國卿女、

〔盛號雜記〕嘉樂門院信子、信宗公女、後花園院后、後土御門院母、文明十三年七月廿六日、院號、

〔女院記〕豐樂門院藤子、贈左大臣藤教秀公第四女、今上○後國母、

〔女院部類〕吉德門院○藤原萬里小路宰相賢房卿女○中、正親町院母、

〔女院部類〕新上東門院晴子、贈左大臣晴秀公女母○口口、正親町院妾、後陽成院母、年月日准三宮、慶

長五年十二月廿九日、院號、

〔執次詰所本御系譜〕後陽成院、諱周仁御母新上東門院准三后晴子、勸修寺內大臣晴右公女、

〔執次詰所本御系譜〕清子內親王○後陽成母中和門院○後水尾准三后藤前子、近衛入道前關白太政大

臣前久公女、元和六年六月二日門號定、寬永七年七月三日崩、五十六歲、

〔續令紹運錄〕明正院諱興子母中宮源和子、太政大臣秀忠公女、號東福門院中宮和子、元和六年庚申六月十八日入內、爲女

御、寬永元年十一月廿八日立后、延寶六年戊午年六月十五日崩、七十二、葬于泉涌寺、

〔宣順卿記〕承應三年十月五日、秉燭之後、自殿下資熙可參之由、有御使、則伺候、御命云、院宣、京極局、主、

〔後光明〕准后院號宣下、日付去八月十八日消息宣、可爲上卿三條中納言實教辨資熙、以密儀女院可

有御沙汰之旨、以園前大納言被仰下、舊主內々、無御沙汰、此仰之旨行三黃許、可傳仰、由殿下御命

也、仍向三黃三黃云、此頃依未著陣、雖不諸下知、如此之時節、申子細如何、承之由答、此次而京極局名

字繼子、亡主御諱紹仁、同訓不可然之由申了、後從三位、改光子、壬生院、此院號院御所、准后院號等消息宣

下不可然無消息、只口ヅカラ可仰、被命、外記ニハ、參內次而召寄、可仰云々、大內記ニモ口ヅカラ

可仰云々、宣旨被請事、院號ハ宣旨、封月ハ、自待賢門院已後不請子細ハ院へ被進宣旨事有間敷

事也、○中近クハ北山院被請、仍今度宣旨不被請者、可然之由上卿被命、

〔執次詰所本御系譜〕後西院諱良仁、後水尾天皇皇子、御母東福門院實達春門院隆子、櫛笥贈左大臣隆致公女、○節

候之旨、以當家佳例、可被申、新待賢門院之由、被宣下了、本所等事、尤可被申沙汰候、建武准三后之時、被約申之子細候歟、存其由委細定、自本所可被申候、

〔細々要記〕應安二年、南方正平二十四三〇四年三月十一日、南山ノ帝崩御、御年四十三ト云々、四

月廿九日、皇太子熙成親王受禪、先帝ヲ後村上天皇ト追號シ奉ル云々、十二月十一日、先帝ノ御后藤原近衛關白經忠公ノ御女、當今後山ノ御母后ナリ、院號蒙ラセ給ヒ、嘉喜門院ト申奉ルヨシ云々、

〔皇胤紹運錄〕光嚴院中母廣義門院藤原公衡公女、光明院中母同爲光嚴院

〔圖太曆〕文和元年十月廿一日、御帥卿公秀送狀、大内門號有不審事、有抄物者可借與云々中息女

三品院號事有沙汰歟、母儀後光不及左右哉、廿二日、今日大納言云、來廿九日可有陣定、可參仕

旨藏人左兵衛佐忠光觸之、可有院號定云々、三品事歟、可謂珍重、及晚帥卿送消息、院號推量附台了、大納言參謁之間、難出仕、門號事、光範、陽祿、無巨難哉之旨仰了中廿七日、入夜三條新大納言實

繼卿來、無内外人也、仍雖服藥中、招人臥内謁之、院號間事、并院司以下事談合也、彼本人病氣以外也、大略可有大事之外、仍急可沙汰云々、廿九日及晚三條新大納言送狀、院號間事也、院司事、就本所

儀被略不可被仰云々、其間事示合也、時宜無力歟之旨仰了、追引勘之處、先蹤少々有歟、今日從三位藤原秀子、有准后宣下并院號定、陽祿門院、上卿右大臣殿權大納言實繼卿、權中納言隆

持卿、參議公直卿左中、左中辨教光朝、臣職事藏人左兵衛權佐忠光、四位左大史匡遠宿禰、大外記師茂、右大史高橋秀職等參陣、右少辨時光、草進准后勅責、

〔貴女抄〕崇賢門院仲子永德三、四、廿五、院號、後光嚴妃、後圓融御母、兼綱公女、

〔歷代皇紀後小〕通陽門院殿子、應永二年四月九日、准三宮同二年七月廿四日、院號、當今御實母、但

非母后之儀、

ち給てうせ給にき、御堂○藤原道長の御女上東門院後一條後朱雀の御母にて、御孫後冷泉後三條

で見奉り給ひしかども、みなさきだゝせ給しかば、さかさの御なげきたゆる世なく、御命あま

りながくて、中々人目をはづる思ひふかくおはしましき、これもみな一の人にて、世のおやどな

り給へりしだに、やうをかへてさまゝの御身のうれへはありき、たゞ人には大納言公實の御

女こそ待賢門院とて、崇徳院後白河院の御母にておはせしかど、それも後白河の御世をば御ら

んせず、讃岐の院の御す系もおはしまさず、されば今のやうに、たゞ人の御身にて、三代國のおも

しといつかれ、兩院どこしなへにおふきさゝげたてまつらせ給へば、さきの世もいかばかりの

くさくおはしまし、この世にも春日大明神をはじめ、よろの神開佛陀の擁護あつくものし給

ふにこそ、ありがたくだおしはかられ給ふ。

〔歷代皇紀伏見〕玄輝門院藤愔子左大臣實雄公女、母大納言隆房卿女、後深草妃、伏見母、正應元年十

二月十六日院號、同日先准后三十四

〔謚號難記〕顯親門院季子、實雄公女、伏見院后、花園院母、正中三年二月七日院號、

〔歷代皇紀後醍醐〕先帝後醍醐母○中略談天門院藤忠子、參義忠繼女、母卜部兼夏女、文保二年四月十

二日院號、

〔國太曆〕觀應三年正月二日、抑今日自賀名生殿○後村上有御書文、女房狀、副之案文、寫之續○續下恐

兩所尊號事被宣下了、存其旨可被申沙汰候也、

皇太后○後村上母事、先朝被染宸筆候、仍停皇太后宮職、可被申、新待賢門院由被仰出、

具忠朝臣無異、無事歸參候、日出候、抑彼兩所尊號事、裁別紙候、殊可被申沙汰候、

一昨日廿八日神宴無異被遂行之、且又准后○藤原御院號事、其沙汰候、尤兼日可申談之所、山中諸司

等不具之間、參仕公卿無其仁候之間、以御神樂參仕候次、被仰上卿於實守卿畢、新號又使儀難事行

〔皇胤紹運錄〕後堀河院母北白河院○陳基家卿女、

〔五代帝王物語〕中宮○後堀河后は、御懷妊ありて、寛喜三年二月十二日、四條院御降誕、あなめでた

とて、やがて十月廿八日に、太子に立せ給ふ。○中略貞永元年十月四日、主上○後堀河御位を遷て、東宮○四

條に讓奉る。御年二歳、いつしかなるうへ、先例もよろしからずおぼえ侍き、中宮は同二年○天元○四

月三日院號ありて、藻壁門院と申、此院號又いかゞとおぼえしに、同年九月に御産とてひしめく

はどに、御ものゝけこはくでうみかねさせ給ふ、内外の御いのり數をつくし、大法祕法のこる事

なしといへども、つひにかなはせ給はず、餘りに大事にして、大臣いかにせんずると、女院申させ

給へば、大殿は御涙にむせびて東西も覺え給はず、御寶物皆やさあけられれどもかひなし、九

月十八日つひにうせ給ぬ、御年廿五、あさましども云ばかりなし、

〔百練抄後十六〕實治二年六月十八日甲午、院號定也。○改中宮、後堀河后、藤原基家子。左大臣以下參仕之、

〔増鏡老十の邊〕大かた此大宮院○後嵯峨の御宿世、いどありがたくおはします、すべていにしへより

今まで、后國母おほくすぎ給ぬれど、かくばかりとりあつめいみじきためしは、いまださゝおよ

び侍らず、御位のはじめよりえらばれ参り給ひて、あらそひきしらふ人もなく、三千の寵愛ひと

りにをさめ給、兩院○後深草、龜山、うちつゝさいでものし給へりし、いづれも平らかに思ひの如く三代

の國母にて、いさはずでに御むまを○後宇多の位をさへ見たまふまで、いさゝかも御心にあはず、お

ぼしむすばるゝ一ふしもなく、めでたくおはしますささきし方もたぐひなく、行す處にもまれ

にやあらん、いにしへの基經のおとゞの御女○醍醐子延喜の御代の太后宮、二代○朱雀、上、後の國母に

ておはせしも、はじめいでき給て、ことになしうし給ひし前坊○保明におくれ聞え給て、御命の

うちにたへぬ御なげきつきせざりき、九條のおとゞ○藤原輔の御むすめ○安子天曆○上のきさきに

ておはせし、冷泉圓融兩代の御母なりしかど、めでたき御代をも見奉り給はず、御門にもさきだ

交名於院御前左衛門督時忠平書之云々重服人尤可憚歟何年例哉

別當

左衛門督平朝臣時忠元大夫重服先例

右衛門督藤原朝臣實家元

前越前守平朝臣通盛元亮

判官代

散位藤原光綱元權

散位藤原尹範元少

主典代

右衛門少尉安倍資成元少

宗賴補別當事天治之例云々彼時四品大進也全不相似彼例歟況不帶顯官院號日補之何年例哉

頗聲聞者也

〔百練抄後鳥羽〕建久元年四月廿二日乙巳以母儀從三位藤原植子奉號七條院去十九

〔神皇正統記後鳥羽〕第八十二代第四十四世後鳥羽院諱は尊成高倉第四の子御母は七條院藤原

殖子先代母儀おほくは后宮さらわは禮后なり院號ありしはみな先の立后の後の

夫信隆の女なりさだめなり此七條院立后なくて院號のはじめなりたしまづ准后の勳あり入道修理大

〔百練抄十一〕建仁二年正月十五日院號定以源在子爲承明門院今上廿七日承明門院院號之

後初御入内有勸賞二月二日今日承明門院殿上始也

〔女院小傳〕東一條院藤立子順德后先帝仲母後京極關白藤原女承元五正廿二爲中宮承

久四六廿五院號

出雲守藤原朝定同

右衛門府生同資忠元權

權中納言藤原朝臣忠親

宰相中將源朝臣通親元

勘解由次官藤原宗賴元大進

予申定可被宣下之趣被相待左大將^{○藤原}參入之間暫以遲々大將被參之後予著膝突仰左大臣云、中宮^{○平}可有院號、可奉稱何院哉、宣令申仰了之後退去、次左有必被與誓可被定申之由、次自下臈定申之^{○新宰相}

左大臣^{五條院、修明門院、春花園院、坊門院、}

左大將^{實定、宣陽門院、坊門院、}

藤中納言^{實調、建禮門院、}

堀河中納言^{建禮門院、忠親、坊門院、}

三條中納言^{朝方、建禮門院、五條院、}

別當^{實家、建禮門院、宣陽門院、}

右宰相中將^{實守、建禮門院、}

藤宰相^{實定、建禮門院、}

源宰相中將^{通親、建禮門院、東五條院、}

新宰相^{光能、建禮門院、有被、申之制、}

定了之後左府被召予仍參著膝突、左府定申詞許示給之、人々申狀未聞歟如何之由被尋之、大略奉之由申之、但少々依有不審進寄奥座相尋了、次退去昇殿申人々申狀於殿下、此次依被尋仰申內議之趣了、雖可院奏不可然之由、昨日御氣色候之由同申之、仍可爲建禮門院之由有仰是人々多定申候上、聊有內談之故也、次予出陣仰左府云、止中宮職可奉釋建禮門院改進屬爲判官代主典代、年官年爵御季御服御封雜物等如舊、但內膳司御飯可從停止者、次予退入、次上卿召、大外記清原賴業真人被仰下院號并年官年爵事、次官人出來告召之由仍參進、上卿被仰云、御封等事可令奉行歟、有先例之由所覺悟也、予申云、可隨仰、但天治之例、中辨奉行也、仍所催儲候也、許諾予退出、^{於重事者大辨度院職之時、御封以下事大辨奉行、管見未及、何況天治之次召權右中辨光雅朝臣、被仰御季御服御封雜物內膳司御飯等事、次辨仰大夫史隆職宿禰、次諸卿率參建禮門院、予又參入、每事有遲々之氣、依不有指役退出、}

後聞法皇^{中制、作臨幸云々、但其儀密幸也、}召通盛朝臣、下給院司交名、通盛朝臣申殿下、次召年預資成、下知之、次判

官代光綱參畫御座、撤圓座小筵等^{依御重裝撤大床子、以、次撤炬火屋陣屋時簡御膳棚等、次院司公}

卿以下於西中門外申慶賀通盛朝臣申次、依重喪無拜、次申院御方申次、同前二拜、次人々退出院司

代者、上卿召大外記爲長被仰下、次召辨正家被仰下、除內膳御膳之外如舊之由可仰所司者、次上達部被參被院、二藤原被補別當云々、新大納言、新宰相二人云々、

〔大外記師遠記〕天治元年十一月廿四日丁酉、午刻右大臣藤原權大納言藤原宗忠卿、源能俊卿、藤

原忠教卿、中納言顯雅卿、權中納言通季卿、同顯隆卿、源雅定卿、藤原實能卿、參議同宗輔朝臣、源師時

朝臣、藤原爲隆朝臣、同伊通朝臣參著仗座、被定申院號事、○崇德伊通申云、二條院可宜歟、爲隆申

云、美福門院如何、師時云、坊門院、顯隆卿待賢門院可宜、是上東門院、陽明門院二代母后也、以西列次

第奉號事、待賢門第三門也、第三度母后令奉號、件門名相叶宜歟、諸卿被同之、大臣以頭辨雅兼被奏

院、其後大臣先召予仰云、停中宮職爲待賢門院、改進爲判官代、改爲爲主典代、次召權右中辨顯賴朝

臣仰云、待賢門院御季御服御封雜物、年官年符如舊奉、宛但御飯從停止者、辨於床子座、仰左大史政

重宿禰其後大臣以下相引被參院須史退出、本院無饗饌事、今日被補院司以下、別當權大納言源能

中納言藤原通季卿、權大史同顯隆卿、內藏藤原家朝臣、左少辨平實親、大學頭藤原實先、主典代加本、別當以下下知以

後、於庭中有拜舞事云々、女院啓陳諸衛吉上并所々女官等、各給祿退歸云々、予申藤原中納言申云、寬

治之度院號宣旨、官外記相共持參本院、萬壽治曆無此事、今度如何、被示云、事々被用陽明門院例寬

治頗不快、不可待參後日可申此旨、於院尤有用心事也、今日無陽明門代幔、寬治有門代幔云々、今日

大臣以下相引被參院之間、上官無出立事、今日右大臣年官年符事早被仰予、予於膝突早尋申被仰

辨、大臣退出給之間、於敷政門尋申仰云、只隨有先例可下知、忽忘之故也、被聞此旨不仰官、略中

二月一日甲辰、是日待賢門院殿上始也、有饗饌事云々、公卿別當以下參著昇殿人々有其數、被補藏

人、高諸通忠、源盛宗、忠

〔吉記〕養和元年十一月廿五日、今日院號定也、依有相勞事中刻參內、此間公卿漸以參集、左大臣藤原經

相次參著仗座、先令置膝突、官人選參、以播部諸卿各以著座、或又追參加、頃之殿下藤原令參給、

國母爲院

間事等不細知後日可尋記

〔左經記〕萬壽三年正月十九日丁酉早旦參關白殿○藤原賴通即御共參大宮○後一條今日可有出家事

仍上達部多以參入及未刻關白殿入內則右府○藤原實資已下上達部引入內著左仗座關白殿候御前

飯○藤原賴房召余○藤原賴房被仰云太皇太后宮○彰子今日可有御出家事院號等事准東三條院例可被行別當

可有可被加行之事歟上達部相共可定申之由可仰右大臣者余進座下申右府云々奉輪旨移著南

座上達部相共議定令余覆奏云院號等事大略准故東三條院例可被行歟則以御在所上東門院○藤原實資

爲院號停進屬可爲判官代主典代歟又內膳御飯并御菜御封御季御服物等如舊可奉宛歟又年

官年爵彼時御出家次年也正月如元可奉宛之由有宣旨彼者依叙位除目程遠忽無宣旨歟於今度

者除目在近今日同可有宣旨歟者即參御所奏此狀仰云停太皇太后宮職爲上東門院停進屬可爲

判官代主典代又御封并御季御服物內膳御菜等皆如元可奉充但內膳御飯者自本宮被奏可停之

由仍可隨停止者又年官年爵如元可奉宛者則進陣仰此旨則奉御封并御季御服物內膳御菜等如

元可奉宛之由兼又奉可停止上內膳御飯令仰歸陣腰仰大夫史真行宿禰次右府召大外記賴降真

人膝突召仰院號并年官年爵等事云々頃之右府率上達部歸參上東門院○下略

〔左經記〕治曆五年○延久元年二月十七日甲寅午刻參內○中被仰下云可有太皇太后宮○後三條院號

之事而御所未定之間可何名申乎藤宰相○其基匠作○實仲等申云枇杷殿本御領所也若可申枇杷院

歟○藤原經賴申云只今御在所非本御所以一定可令渡御所可名申歟先々定事不候之故也口口或

同匠作○藤原經賴或同僕新大納言○藤原能長被申云可申陽明門院次右府○藤原實資更以中將被奏定申詞次仰曰

枇杷院院明門院之間以何名可申乎又被仰下藤宰相口申此名何事候哉仍可被用一所歟匠作申

云枇杷院殿久時名也可被用此歟僕申云如是之事同者以文字口可被用歟然者陽明之字尤吉候

歟人々如先口被同仰云以太皇太后可申陽明門院之由可下宣旨又以進爲判官代以屬可爲主典

申入了、

○按ズルニ、靈元天皇此年二月ヲ以テ、皇太子東山天皇ニ讓位アリ、仍テ當代ノ國母ハ、准后宗子門院法ナレドモ、上西門院モ亦先帝ノ中宮ナレバ、本文ノ如ク、權道ヲ行ハレシナリ、
〔百一錄〕享保五年二月十一日、女院御所崩御、市中禁音樂、廢朝七ケ日、春秋四十一齡、依御痘瘡也、預有院號、號承秋門院、有柄川幸仁親王姬宮女王、東山院皇后傳奏坊城亞相、奉行日野西、

〔公卿補任光格〕天明三癸卯年十月十二日、院號定維子、號盛化門、院、後桃圖后上卿右大臣、辨良顯、奉行隆彭朝臣、同夜盛化門院崩、廿二日、內裏觸穢、十一月十三日、遣令奏、并警固固關、上卿三條、大納言、辨良顯、遣令使右中將隆久朝臣、諒闇傳奏、日野前中納言、奉行賴熙朝臣、同夜盛化門院奉葬于泉涌寺、因事傳奏、日野中納言、奉行俊親、十七日、渡御倚廬、奉行賴熙朝臣、廿一日、春日祭被附社司、廿九日、自倚廬還御、奉行隆彭朝臣、同日、御禊、陪膳、隆彭朝臣、同日、開關解陣、并橡宣下、上卿右大將、辨良顯、奉行隆彭朝臣、
略○中十二月十三日、觸穢畢、清穢、奉行俊親、

女院初例

〔公卿補任仁孝〕天保十二年後正月廿二日、院號定欣子、號新清和院、外當、列官代主典代等再興、御件曹司、母公子註御件曹司、今日出家給、仍有行幸、
〔小右記〕正曆二年九月十六日壬辰、午時幸中還御、如例今日公卿善轉侍臣、略、中還御、如例、脫釋表文、著位、公卿還著、障座、藏人頭扶義、出陣、仰左大臣云、依御出家、可止職號、

及大炊寮御稻、畿內御贄、抑可有院號、歟、若可有判官代主典代、歟、若又先例如何、隨宜可定、申者、公卿令議云、淳和后嵯峨太后、染殿后母后、國史更不細記其旨、院號者、以御領處爲其號、不承其處、將又判官代主典代等事、不能尋得、體例又云、令勸進可定、申、歟、但二條皇后廢以後、有判官代主典代之由云々、是又未明也、縱雖有其例、非宜例、歟、若可避、假者可謂進代、屬代、歟、如何、抑可在御定之、由、令定、申了、被定下云、依院例、判官代主典代、可宜矣、又院號、可號東三條院、此間入夜雨降、右大臣以下參職、御曹司、戌時御出家云々、大僧都、遍賀天皇、僧者、覺慶律師、勸修、阿闍梨、嚴久、明豪等、預參其事云々、此

倚廬御裝束同御服事、

倚廬還御之後、開閣解障宣下上卿事、

廬施事

先清涼殿可爲母屋庇、先施五箇間可被替被仰云、唯階間許可被替、朝干飯、清涼殿御帳又不

蓋盤所五箇間之由予申候仰云唯朝干飯二間許可替之、殘所不可及沙汰、

可被替云々、鋪設事更其在所何所可被替哉不定、

可賜素服公卿殿上人事女房上薦中薦下薦

權中納言公兼殿上人未定 各一人

女院方事 素服人予 在數院司

御非禮供奉公卿 權帥前大納言數忠予前中納言按察 冷泉 新中納言爲廣侍從中納言 殘忘却、倚

廬傳奏中御門中納言永享中御門中納言祖父職事頭辨政資朝臣細博義之由予口入五十日之間予在數等可祇候

御寺賴安禪寺殿云々大概此條々此外以詞言上亦被仰條々繁多不被記盡、院中御法事權帥

年預俊名朝臣云々、

〔基量卿記〕貞享四年十二月廿五日、依被申上事、參攝政、攝政言上之趣來奉拜禮申行候ニ付、女院拜

禮之事、先例勘見申候所、非國母非准母女院拜禮所見無之候、中宮皇后宮に候は、非國母非准母も

拜禮勿論に候、然者當時女院新上西門院〇非國母又非准母如何候半、拜禮有間敷候歟、乍然舊記

に、件等女院拜禮無之由は不記候得共、又拜禮有之候例は不見當候、依之自攝政女院へ拜禮可

有旨被申入從女院被受間敷由被仰出候は、無何此度無拜禮可然存候、右柳原千種に内々被示

合、自攝政被申入候ども、被受間敷由被仰出様に願度旨被仰談候所、とかく柳原千種了簡仕候間、

仙洞元〇鹽へ可申入旨、兩人申候間、窺申候由也、則言上之處、尤に思召也、所詮小朝拜拜禮とも從先

日於禁中、直に攝政主上山〇東、仙洞へ被申上候事に候間、女院のも仙洞聞召所も狹少之間、可爲無

用之由、攝政へ被仰進、女院へ可被仰之間、更に女院へ、自攝政被申入に不及由仰也、則其通示攝政

云及盡有女院前御云云御年廿五年上下悲然言諸難及云僧侶云陰陽耻辱此秋也下筭算期以下皆以相違諸道陵夷何事如之十九日庚申大嘗會延引了廿四日乙丑右中辨光俊朝臣爲遣令使參陣固關警固事被宣下又諒關儀也但主上錫紵事有豫議嘉承之度卽位以前御別殿當今已成人之禮也仍可召錫紵者卅日辛未主上三歲召錫紵遷御別殿以御所北幼主七歲以前無倚廬儀又不可召錫紵也然而依禪永萬養和例聊被相違也今夜藻壁門院凶禮也大嘗會檢校行事并辨奉之條神慮難測歟

〔女院部類〕廣義門院寧子後伏見院妃花園院養母光嚴院母延慶二年正月准三宮延文二年閏四月廿一日子刻崩同年八月二日遣令奏廢朝○節

〔親長卿記〕長享二年三月五日女院○後土御門母后御不例聊雖被取延一昨日又有御發氣今一度有御對面度也忍有行幸度也其儀可爲何樣候予申云女院御所無御門可被召御與之事不可叶雖

被忍仰不可有其隱之間御步儀等是又不可叶也咫尺之時廊下等密々行幸有其例郭外之事不可然所詮御絕息有隙之時以密々之儀被召御與長橋局マテ片時有御入內之儀乍御與內御合眼可

然歟之由申了九日早旦民部卿奉折紙到來女院次第無御憑就此儀條々可被仰談今日雖爲御哀日○禁忽可參云々勸修寺同有此仰加奉返遣折紙了○中參內番衆所勸亞相未參小時相待午後

參仕兩人參仕之由申入可參御前云々於御學問所妻戶內有御對面仰云因事方事種々雖有御思案被述是非疊用脚事自江州大足利義隆自去年九月十二日于今在江州如是事被申東山殿○足利其間无無油斷候

間可被申借用御臺舟波上村每年三萬匹在所也今無沙汰可被進勾當內侍於長谷云々所詮是非共可爲差關儀尤省略事等可注付云々已被出御硯料紙勸亞相與尊子子堅固辭右筆了勸亞相右

筆○引押筆伺子氣色予申云可被申御所存分歟猶無是非之間先亮關方禁中事可被載歟仍端

書云凶事方禁中如是歟忘却倚應御殿警固固關遣令奏先可同時歟素服等宣下上卿以下

子天皇詔旨止宣詔乎親王臣百官人等天下公民衆聞食宣比來太皇太后○聖武皇后御命以氏狀
爾語宣久太政之始渡人心未定在可吾子爲皇太子止定氏先奉昇於君位畢氏諸意靜了○奈後
榜上波乎宣止爲母天奏抑問在津然今波君坐氏御宇事日月重敬是以先皇追皇止爲親母太夫人止爲
兄弟姊妹親王止爲止仰給夫貴御命乎頂受給利歡備貴美懼知恐○中略故是以自今以後追皇
舍人親王宣稱崇道盡敬皇帝常麻夫人○淳仁稱太夫人兄弟姊妹悉稱親王止宣天皇御命衆聞食
真七月丁卯從四位下佐味朝臣虫麻呂爲中宮大夫備前守如故從五位下佐佐貴山君親人爲亮

女院稱呼

待遇

〔名目抄〕女院ニテ常言ニ也、名

〔小右記〕正曆六年元年長德正月二日己酉巳時許參内今日行幸也○中風釐欲入西門之間主上○一

以藏人頭齊信朝臣先被啓也○母后東三復命之後入鳳簀於中門外下給也

〔日本紀略一〕長保三年十月三日庚子奉賀東三條院御筭諸寺諷誦事今日於右近馬塙檢非違使

行賑給事大炊寮米二百石九日丙午於上東門第有東三條院冊御賀仍天皇行幸中宮行啓令侍

臣奏舞

○案ズルニ以上二條ハ母儀ニ對スル敬禮ナレバ尋常女院ノ待遇トハ殊ナル事アルベシ此
條帝母ニ係ルモノハ皆然リ

〔小右記〕萬壽四年四月五日乙亥參東宮○後若宮著袴日也○中次供御膳○大膳六本淺香○大膳御膳中

納言長家執行打敷四位已下益供稱○是可疑事也聞自云官最初事也無○是可疑事也聞自云官最初事也無

隨○下略

〔百練抄四十〕天福元年九月十二日癸丑自去夜女院○母后御產氣云云來月御當月也人以驚

云々十八日己未御產氣日來運々今曉殊物念之間寅刻皇子降誕萬人悅豫之處皇子有御事云

女御爲皇太夫人

略 天宗高紹天皇^仁○光 龍潛之日、嬖而納焉、生今上早良親王、能登內親王、寶龜中改姓爲高野朝臣、今上即位尊爲皇太夫人、九年追上尊號曰皇太后、

〔續日本後紀^仁〕承和十一年正月壬辰、皇太子^文入觀於清涼殿、拜舞給被授所生女御藤原氏、順子從三位也、

〔三代實錄^二〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、^略中 太皇太后姓藤原氏、諱順子、^略中 仁明天皇儲貳之日、聘以入宮、寵遇隆篤、生文德天皇、仁明天皇踐祚之初、授從四位下、承和十年加從三位、嘉祥三年四月甲子、文德天皇即位、是日尊爲皇太夫人、

〔大鏡裏書〕太皇太后宮^{明子}御事^{文德天皇母、清忠仁公女、母贈正一位源潔姬、嵯峨天皇皇女、天安二年十一月廿五日爲皇太夫人、貞觀六年正月七日爲皇太后宮、}

○按ズルニ明子ハ女御ノ明文ナシト雖、文德實錄仁壽三年正月己亥條ニ、女御古子ト並ニ從三位ヲ授ケラル、蓋シ女御タリシニ由リシナラン、

〔三代實錄^上〕貞觀八年十二月廿七日戊戌、以從五位下藤原朝臣高子爲女御、

〔三代實錄^三〕天章諱貞明先太上天皇^和○^清之第一子也、母皇太后^高贈太政大臣正一位藤原朝臣長良之女也、后兄右大臣藤原朝臣基經初夢后露臥庭中、苦腹脹滿、頃之腹潰、氣昇屬天、即便成日、其後后以遷入掖庭、遂有身去貞觀十年十二月十六日乙亥、生帝於樂殿院、^略中 元慶元年正月三日乙亥、天皇即位、位於豐樂殿、^{大極殿未作、故}詔曰、^略中 辭別宣久、凡人子乃蒙福久欲爲流事、波於夜乃多米奈毛聞行須、故是以朕親母藤原氏^{高子}皇太夫人^{上奉利治奉流、略}

〔古今集目錄〕七條后者昭宣公三女諱溫子字多天皇皇后生一女^{均子內}仁和四年十月六日、^略中 爲女御、寬平九年七月廿六日爲皇太夫人^{六廿}

〔續日本紀^{二十}〕天平寶字三年六月庚戌帝御內安殿喚諸司主典以上詔曰、現神大八洲所知倭根

帝母爲太夫人

夫人爲皇太夫人

介外從五位下林連浦海六位已下官八人爲養民司左衛士佐從五位下巨勢朝臣島人丹波介從五位下丹比宿禰眞淨六位已下官三人爲作路司差發左右京五畿內近江丹波等國役夫天皇服錫紵避正殿御西廂幸皇太子及群臣舉哀百官及畿內以三十日爲服期諸國三日並幸所部百姓舉哀但神鄉不在此限勅曰中宮七々御齋當來年二月十六日宣令天下諸國國分二寺見僧尼奉爲誦經焉又每七日遣使諸寺誦經以追福焉九年正月癸亥以從二位藤原朝臣繼繩正三位藤原朝臣小黒麻呂正四位上神王正四位下紀朝臣古佐美從四位上和氣朝臣清麻呂正五位下文室真人與金從五位上藤原朝臣黑麻呂百濟王仁眞三島真人名繼從五位下文室真人八島爲周忌佛齋會司六位已下官九人丁卯百官釋服從吉是日大祓十一月戊寅勅曰中宮周忌當來月廿八日禮制乍畢新歲須及忌景俄臨彌切罔極之痛元正肇啓何受惟新之歡興言永悲不能自忍賀正之禮宜從停止焉己卯是日當新賞而爲諒闇未終於神祇官行之十二月壬辰朔詔曰春秋之義祖以子貴此則禮經之垂典帝王之恒範朕君臨寓內十年於茲追尊之道猶有闕如興言念之深以懼焉宜朕外祖父高野朝臣外祖母土師宿禰並追贈正一位其改土師氏爲大枝朝臣夫先秩九族事彰常典自近及遠義存曩籍亦宜管原眞仲土師菅麻呂等同爲大枝朝臣

〔續日本紀九〕

神龜元年二月丙申勅尊正一位藤原夫人

宮子

稱太夫人三月辛巳左大臣正二位長屋王等言伏見二月四日勅藤原夫人天下皆稱太夫人者臣等謹檢公式令云皇太夫人欲依勅號應失皇字欲須令文恐作違勅不知所定伏聽進止詔曰宣文則皇太夫人語則大御祖追收先勅頒下後號

〔續日本紀三十六〕

天應元年四月癸卯天皇御大極殿詔曰

朕親母高野高人

稱皇太夫人冠

位上奉利治奉流

〔續日本紀四十〕

延暦八年十二月乙未皇太后崩

略

中

壬子葬於大枝山陵皇太后姓和氏諱新篁

中

小黒麻呂、奉詠人奉詠、上諡曰天高知日子姬尊壬子、葬於大枝山陵、皇太后姓和氏、諱新笠、贈正一位乙繼之女也、母贈正一位大枝朝臣眞妹、后先出自百濟武寧王之子純陀太子、皇后容德淑茂、夙著聲譽、天宗高紹天皇仁光龍潛之日、轉而納焉、生今上武相、早良親王能登內親王、寶龜中改姓爲高野朝臣、今上即位、尊爲皇太夫人、九年追上尊號曰皇太后、其百濟遠祖都慕王者、河伯之女、或曰精而所生、皇太后即其後也、因以奉諡焉、

〔續日本紀四十一〕延曆九年閏三月丙子、是日皇太后乙崩、中甲午、參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美率詠人奉詠、諡曰天之高藤廣宗照姬之尊、

皇太夫人

〔令義解七公式〕皇太后謂天子母、登后位者、爲皇太后、居妃位者、爲皇太妃、皇太夫人位者、爲皇太夫人也、皇太妃、皇太夫人同、○中右皆平出、

〔皇代記聖武〕母皇太夫人宮子、右大臣不比等女、

侍遇

〔續日本紀四十一〕延曆八年十二月庚寅、勅頒者中宮不豫、稍經旬日、難勤醫療、未有應驗、思歸至道、令復安穩、宜令幾內七道諸寺、一七箇日讀誦大般若經焉、乙未、皇太后野新笠崩、丙申、以大納言從

二位藤原朝臣繼繩、參議彈正尹正四位上神王備前守正五位上當麻呂、散位從五位上氣多王、內禮正從五位上廣上王、參議左大辨正四位下紀朝臣古佐美、宮內卿從四位下石上朝臣家成、右京大夫從四位下藤原朝臣菅繼、右中辨正五位下文室真人與金、治部大輔從五位上藤原朝臣黑麻呂、散位從五位上桑原公足床、出雲守從五位下紀朝臣兄厚、雅樂助外從五位下息長、真人淨繼、大炊助從五位下中臣栗原連子公六位已下官九人爲御葬司、中納言正三位藤原朝臣小黒麻呂、參議治部卿正四位下壹志澄王、阿波守從五位上小倉王、散位從五位下大庭王、正五位下藤原朝臣眞友、因幡守從五位上文室真人忍坂麻呂、但馬介從五位上文室真人久賀麻呂、左少辨從五位上門倍朝臣弟當彈正弼從五位下文室真人八島六位已下官十四人爲山作司、信濃介從五位下多治比真人賀賀安藝

天之位深仁下濟，爰照法地之德，日月於是貞明，乾坤以之交泰，遂乃欽承，願命議定，皇儲親舉，疎心在公正，實存志於天下，永無私於一己，既而遊神慧苑，體三空之玄宗，降迹禪林，開一真之妙覺，大慈至深，建樂院而普濟，弘願潛運，設悲田而廣救，是以煙浮宸渥，寶籙呈祥，蟲影藤枝，禎文告德，遂使百神為贊，天平之化不窮，黎元樂推，地成之德逾遠，臣等入參帷幄，出廂周行，鳴佩曳綸，綿積年祀，觀斯盛德，斯昌化，臣子之義，何無稱贊，人欲而天必從，狂言而聖尚擇，謹據典策，敢上尊號，伏乞奉稱，上臺寶字，稱德孝謙皇，帝奉稱中臺天平應真仁正皇太后，上協天休，傳鴻名於萬歲，下從人望，揚雅稱於千秋，不勝至懇，踊躍之甚，謹詣朝堂，奉表以聞，僧綱表曰：沙門菩提等言。○中皇太后遊心五乘，拔擢八正，化倖應供，道雙至真，發揮神化之丹青，抑揚陶甄之銘鏡，正慮獨斷，搜離明於舜濱，深仁幽草，浮赤文於堯渚，故能遠安近肅，至治美於成康，治定功成，無為盛於軒昊，固足以垂顯號，建嘉名，軼三五而飛英，起八九而騰茂者也，陛下謙讓推而不居，菩提等竊疑焉，菩提等遂察前徵，緬鏡遐載，隨時立制，權代適宜，皇王雖殊，其揆一也，菩提等不勝丹款之誠，謹上尊號，陛下稱曰寶字稱德孝謙皇，帝皇太后稱曰天平應真仁正皇太后，伏願陛下皇太后抑謙光之小節，從梵侶之謠言，庶使蟠木之鄉，燭龍之地，間號仰澤，聽聲傾光，凡厥在生，誰不幸甚，沙門菩提等不任下情，謹奉表以聞，詔報曰。○中又見上皇太后尊號，感喜交懷，日興忘倦，任公卿之所表，從耆縉之所乞，策曰：天平應真仁正皇太后受此惟新之號，何無洗舊之令，宜改百官之名，載施寬之大澤。○下

漢書

〔日本書紀〕

九功六十九年四月丁丑，皇太后功。

○神

崩於稚櫻宮。

時年一百歲。

十月壬申，葬狹城后列陵，是日

追尊皇太后曰氣長足姬尊。

〔續日本紀〕

十九天乎勝寶六年七月壬子，太皇太后后宮子。

○文武崩於中宮。

○中

八月丁卯，正四位下安宿

王奉詔人奉，謚曰千尋葛藤高知宮姬尊。

〔續日本紀〕

四延曆八年十二月乙未，皇太后崩。

○中

明年正月十四日辛亥，中納言正三位藤原朝臣

皇后攝政

〔日本書紀〕^九 第九卷 足姬尊^神 神 稚日本根子彥大日日天皇^神 神 之曾孫氣長宿禰王之女也母曰懿城高額媛足仲彥天皇^神 神 二年立爲皇后^中 九年二月足仲彥天皇崩於筑紫橿日宮^中 十二月

辛亥生譽田天皇於筑紫略○中
明年二月皇后領群卿及百寮移于穴門豐浦宮卽收天皇喪從海路以

向京○略○中十月甲子群臣尊皇后曰皇太后是年也大歲辛巳卽爲攝政元年

〔日本書紀三十〕高天原廣野姬天皇○中略天命開別天皇○天智第二女也○中略二年○天武立爲皇后○中

朱鳥元年九月丙午、天渟中原瀛真人天皇武○天崩、皇后臨朝稱制

皇后登帝位

〔日本書紀〕二十卷推古_古豐御食炊屋姫天皇_古天國排開廣庭天皇_明中女也、橘豐日天皇_明同母妹

也。幼曰額田部皇女。姿色端麗。進止軌制。年十八歲。立爲淳中倉太玉敷天皇○敏達之皇后。三十四歲淳

中倉太王敷天皇崩三十九歲當子泊瀨部天皇○崇峻五年十一月天皇爲大臣馬子宿禰見殺嗣位既

空群臣請淳中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女以將令踐祚皇后辭讓之百寮上表勸進至于三乃

從之因以奉天皇璽印十二月己卯皇后卽天皇位於豐浦宮

日本書紀皇極天豐財重日伊弉諾之比足姬天皇淳中倉太珠敷天皇達曾孫押坂彥人大兄

皇子孫茅淳王女也母曰吉備姬王天皇順考古道而爲政也息長足日廣額天皇（明）二年立爲皇太子

十三年十月息長足日廣額天皇崩
元年正月辛未皇后卽天皇位

神皇正統記、持統天皇は天智の御女なり、御母は越智姫、蘇我の山田石川丸の大臣の女なり。

天武天皇太子に立し。○中
しより如とし給ふ。皇
后とす。略。庚寅の春正月一日即位大和の

この天皇天下を治め終へ事十年位を太子にゆつて、太子は天皇と申す。

尊號

〔續日本紀二十〕天平寶字二年八月庚子朔高野天皇禪位於皇太子。○淳仁，是日百官及僧綱詣朝

堂上表上上臺○孝中臺○孝尊號其百官表曰臣仲麻呂等言○中皇太后御德上昇善穆儼

ば、残り給ふ御名はおなじ事なるべし、

〔帝王編年記後醍醐〕仁治三年三月十八日、天皇即位于太政官廳、御歲二十三、中七月十一日、今上

御母儀通被贈皇太后宮御外祖父源通被贈左大臣正一位、

〔二水記〕永正元年七月十九日丁未、今日今上柏原御母子朝准三宮皇太后今度贈后宮御十三回、就之於城內

般舟三昧院、有御經供養導師定法寺大僧正

〔皇胤紹運錄〕正親町院 母吉德門院贈皇太后榮子、三木藤賢房女、

〔近代後宮小傳〕新中和門院藤原近衛前相國家熙公姫君、正徳二年三月七日御入内、享保五年正月

廿日准三宮宣下、同日門院號宣下、同日薨、同月葬、同十三年六月廿六日贈皇太后宮、

〔先代舊事本紀七〕八年二月、尊皇后曰皇太后、皇太后媛追贈皇太后、

〔先代舊事本紀七〕元年正月甲午、皇太子尊即天皇位、尊皇后曰皇太后、尊皇太后命追贈太皇

太后、

○此他同書ニ、景行天皇元年、皇太后御間城入姫ニ、太皇太后ヲ追贈シ、成務天皇元年、皇太后日

葉洲媛命ニ、太皇太后ヲ追贈シ、仲哀天皇元年、皇太后八坂入姫命ニ、太皇太后ヲ追贈シ、履中天

皇元年、皇太后仲媛命ニ、太皇太后ヲ追贈シ、安康天皇即位、皇太后磐之姫命ニ、太皇太后ヲ追贈

セテレシ事見エタレドモ、煩シケレバ此ニ掲ゲズ、

〔日本後紀平十〕大同元年五月辛巳、即位於大極殿、中壬午、追尊皇太后光仁爲太皇太后、

〔日本紀略六〕安和二年八月廿五日庚子、太上天皇冷尊號詔、内大記伊輔作之、又贈妣贈皇太后

藤原安子上后太皇太后、

○按ズルニ、光仁后高野新笠ハ、皇太夫人ニテ薨ジ、後ニ皇太后又太皇太后ヲ贈ラレ、村上后藤

原安子ハ、皇后ニテ崩ジ、後ニ皇太后又太皇太后ヲ贈ラレタリ、俱ニ異例ト云フベシ、

皇太夫人正一位高野朝臣新笠贈正一位乙體朝臣女、延暦八年十二月薨、諡曰天高、高下

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年五月甲寅朔、詔云々、皇妣〇桓武天皇女、延暦八年十二月薨、諡曰天高、高下云々、降年不永、早從昇天、朕在幼穉、已違

慈顧、追上徽號爲皇太后。

〔三代實錄四十五〕元慶八年二月廿二日甲寅、天皇卽位於大極殿、詔曰、〇中辭別宣久、凡人子、乃欲蒙

福事、於夜乃多米止奈聞召須、故是以朕先妣藤原氏贈正一位明皇太后尊號追贈奉〇

〔大鏡裏書〕贈皇太后〇藤子御事字多天皇女、御、勸修寺贈太政大臣高藤女母贈正二位宮道朝臣列子、

宮內大輔彌益女、仁和四年九月廿二日爲更衣、同日聽禁色、寬平五年正月廿二日爲女御從四位下同八

年六月卅日卒、同九年七月十九日贈皇太后宮。

〔日本紀略三十三〕寬弘八年六月十三日乙卯、一條院天皇逃位於新皇〇三條、十二月廿七日丙寅、詔

追尊皇妣女御從四位上藤原朝臣超子、贈皇太后、置國忌山陵。

〔十三代要略後朱〕寬德二年正月十六日癸酉、皇太子〇後醍醐天皇受禪、〇中四月八日、新帝卽位於大極

殿一廿八月十一日、追尊皇母嫡子爲皇太后。

〔十三代要略白河〕延久五年五月六日、天皇先妣藤原氏〇茂贈皇太后。

〔續世繼三花園の句〕此御門〇二の御母は、大納言經實の御むすめ、その御母、春宮大夫公實の御む

すめなり、その大納言の中〇二の君は、花ぞのゝ右のおとゝの北のかたなれば、姉の姫君を子にして、

院〇後のいま宮とておはしえしゝに、だてまつられたりしなり、この帝うみおき奉りてうせ給

にき、後の位おくられ給ひて、贈皇太后宮懿子と申すなるべし、御おやの按察大納言〇經も、おほ

きおとゞ、おほきひとつのくらゐおくられ給へるとなんうけ給はるさることもやあらんとも

あらでうせ給にし、かきもとなきくらゐそへられ給へり、御末のかざり成べし、はかなく

て消させ給にし、露の御いのちも、后贈られ給へば、生てなり給へるもむかしがたりになりぬれ

七日爲皇太后宮元慶六年正月七日爲太皇太后宮○節

〔日本紀略二卷〕天慶九年四月廿日庚辰天皇遜位於皇太弟成明親王○村上天略又皇太后○朱雀母爲

太皇太后

〔日本紀略三卷〕長和元年二月十四日壬子宣命尊皇太后○顯子融爲太皇太后

〔一代要記後七卷〕後宮

太皇太后賴子內親王永承六年二月十三日轉皇太后治曆四年四月十七日爲太皇太后後朱雀院后

〔帝王編年記二十卷〕皇后○近多子保元元年十月廿七日爲皇太后二年二月三日爲太皇太后

〔一代要記九卷〕後宮

太皇太后宮令子內親王白河皇女爲羽准母長承三年三月十九日改皇后爲太皇太后

〔一代要記九卷〕後宮

皇后宮藤原朝臣得子鳥羽院后中時永治元年十二月廿七日辛卯

〔日本後紀十四卷〕大同元年六月辛丑詔藤原某朝臣追贈皇后遣伊勢守藤原朝臣大繼等告皇后陵皇

后諱帶子贈太政大臣正一位藏原朝臣百川之女也帝城○平在儲宮納之爲妃

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年六月己丑追立贈一品高志內親王爲皇后詔曰天皇大命云々贈一品高

志內親王云々追母天皇皇后止贈賜止云々

〔延喜式二十卷〕石作陵贈皇后高志內親王在

〔續三宮傳〕仁孝帝女御新皇嘉門院御諱繫子鷹司故准后前關白政熙公御女文化十四年十二月十

一日入內廿一歲文政三年十二月廿六日准后宣下同六年四月三日薨去廿七歲同七年七月十二日贈

皇后宮宣下○節

〔一代要記二卷〕後宮

前皇太后

中宮爲太皇太后

皇后

皇后爲太皇太后

待遇

〔西宮記時五〕皇后行啓○中 太皇太后順母

〔三代實錄清和〕貞觀十三年九月廿八日辛丑太皇太后順子崩 廿九日壬寅晦諸衛警固令伊勢

近江美濃等諸關警固勅曰今月廿八日太皇太后崩事須遣使警固然而時在秋收恐妨農業況復牧

宰其人宜停發使一委國吏勤令警察 十月四日丙午太皇太后遺令不聽天下著素仍令京畿七道

停舉哀并著素服 五日丁未天皇服錫紵近臣皆素服葬太皇太后於山城國宇治郡後山階山陵

七日己酉天皇釋服近臣隨除諸衛解嚴令伊勢近江美濃國解圍

〔先代舊事本紀開化〕二年正月尊皇后曰皇太后追贈皇太后細 曰太皇太后

〔先代舊事本紀垂仁〕元年正月戊寅皇太子尊即天皇位尊皇后曰皇太后尊皇太后伊香曰太皇太

后

○按ズルニ此兩條疑無キニ非ザレドモ姑ク原文ニ從フ

〔文德實錄〕嘉祥三年五月辛巳嵯峨太皇太后崩 壬午葬太皇太后于深草山○中 太皇太后姓橘

氏諱嘉智子○中 嵯峨太上天皇初爲親王納后寵遇日隆天皇登祚弘仁之始拜爲夫人先是數日

夢出自針孔立左市中六年○弘 秋七月七日后亦夢著佛環絡居五六日立爲皇太后十四年天皇○嵯

禪位於淳和皇帝尊天皇爲太上天皇皇后爲皇太后仁明天皇受禪尊皇太后爲太皇太后

〔三代實錄陽成〕元慶三年三月廿三日癸丑淳和太皇太后崩○中 太后諱正子○中 仁明天皇受讓

之後三月二日乙丑○天長 尊淳和天皇爲太上天皇皇后爲皇太后○中 文德天皇齊衡元年四月尊

皇太后爲太皇太后

〔天鏡裏書〕太皇太后宮順子 御事仁明天皇 開院贈太政大臣公 女嘉祥三年四月爲皇太夫人

齊衡元年四月爲皇太后宮貞觀 三年二月廿九日癸酉爲太皇太后宮

皇太夫人爲皇太后

〔三代實錄二十〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、太皇太后崩、太皇太后姓藤原氏、諱順子、贈太政大臣正一位冬嗣朝臣之女也、母尚侍贈正二位藤原朝臣美都子后美、姿色雅性和厚、嘗在父大臣家晨起、澡手、有小虹降、置盥器、卜占者曰、至重之祥、其慶不可言焉、仁明天皇儲貳之日、聘以入宮、寵遇隆篤、生文德天皇、仁明天皇踐祚之初、授從四位下、承和十一年加從三位、嘉祥三年四月甲子、文德天皇卽位、是日尊爲皇太夫人、齊衡元年爲皇太后。

〔大鏡裏書〕皇太后宮班子女王光孝天皇皇后、宇多天皇母儀、式部卿仲野親王女母贈正一位當宗氏、元慶八年四月

辛卯爲女御、仁和三年正月八日叙從二位、十一月十一日爲皇太夫人、寬平九年七月爲皇太后、

女御爲皇太后

〔日本紀略九〕寬和二年七月五日辛未、詔中以母儀女御藤原詮子爲皇太后、僧尼施物又大辟以下

罪常赦所不免者赦除、即日任宮司、九日乙亥、皇太后宮自右大臣藤原兼家東三條第參入御

內裏、諸卿以下有襲祿、又正三位藤原道隆叙之、皇后同母兄也、

准后爲皇太后

〔續三宮傳〕青綺門院後醍醐院皇后、御諱金子、二條前關白贈准元文元年十一月廿五日入內、同日女御

宣下、同五年五月廿七日准三后、延享四年五月廿七日皇太后宮二十歲、

制髮後爲皇太后

〔女院小傳〕陽明門院順子後朱雀后、後三條母、三條院第三皇女、母法成寺關白藤原道長第二女、皇太后

藤妍子中長元十二十三爲中宮、廿五、三一爲皇后宮、寬德二、七、廿二爲尼三妙法、今年正月、十永

承六、二十三爲皇太后廿九、

院號後爲皇太后

〔女院小傳〕後京極院孀子入道大相國實兼三女中元應元、八、七爲中宮後醍醐正慶元、五、廿院號爲

成門院而、元弘二、八、卅爲尼、同三、七、十一爲皇太后宮、

○

太皇太后稱呼

〔令義解公七式〕太皇太后謂天子祖母、登后位者、爲太皇太后、居他位者、太皇太妃、太皇太夫人同、中右

皆平出

〔日本書紀四〕安寧磯城津彥玉手看天皇寧○安神淳名川耳天皇太子也母曰五十鈴媛命事代主神之少女也三十三年中略其年七月乙丑太子寧○安即天皇位元年中略尊皇后中略曰皇太后

〔日本書紀四〕懿德大日本彥相友天皇懿○懿磯城津彥玉手看天皇第二子也母曰淳名底仲媛命事代主神孫鴨王女也中略元年二月壬子皇太子懿○懿即天皇位中略九月乙丑尊皇后寧○安曰皇太后

○按ズルニ此他日本書紀ニ載スル所歷代大概同例ナレバ略ス

〔日本後紀十四〕大同元年五月壬午追尊皇太后新○光仁爲太皇太后皇后中略桓武后乙平爲皇太后

〔三代實錄三十五〕元慶三年三月廿三日癸丑淳和太皇太后崩中略太后諱正子嵯峨太上天皇之長

女與仁明天皇同產也中略天長四年二月爲皇后中略十年二月廿八日乙酉天皇和淳遷御淳和院

讓位於皇太子明○仁天皇詔停太上天皇及皇太后之號即使停廢后宮官屬仁明天皇受讓之後三月

二日己丑尊淳和天皇爲太上天皇皇后爲皇太后

〔日本紀略二〕朱承平元年十一月廿八日辛亥詔尊母儀皇后中略爲皇太后凡服御物湯沐邑并職

中諸事皆悉如舊典

〔續三宮傳〕新清和院光格帝皇后仁孝母后中略諱欣子後寬政六年三月七日立皇后文政三年三月十

四日御轉皇太后宮自今奉稱大

中宮爲皇太后

〔日本紀略十二〕長和元年二月十四日壬子宣命中略中宮中略爲皇太后

〔續世繼四〕藤原のささき中略のうみたてまつりたてへる姫宮章子内親王と申二條院と申

この御事なり後冷泉院東宮におはしまえし時まゐらせ給ひて永承元年七月に中宮にたゝせ給治曆四年四月に皇太后宮にあがらせ給ひき

〔女院小傳〕皇嘉門院藤聖子崇德后近衛准母法性寺關白藤原第一女母大納言宗通卿女從三位

藤宗子大治五年二廿一爲中宮永治元十二廿七爲皇太后天皇(近衛)即位日年廿一

りさせ給ふ、あかくなるに見れば御まへよりはじめ、みな墨染におはしましあふに、いじやかなし、よろづまてゝひつじの時ばかりに事はじまる、所々の御誦經なども、庭のおもて見えぬまで、池のさばに出してつみわたしたり、殿の御まへ、（藤原女院、一條上、中納言關白殿、藤原通つぎ）の殿ばら、一品宮みやづかさどもまもべまで、かたじきなさまで、つかうまつることかたはらい、たし、女房の御誦經、みなさぬをぞつゝみてつかうまつる、御誦經に御装束二くだりなり、れいの御装束に、またあまの御装束、ひるのにてせさせ給へり、（中略）ほどだけは、このつくらせ給へる阿彌陀の三尊、御經のはどおしはかるべし、講師などの申つゝけ給ふありさま、中々なる物まねびなればかゝす、

供給

〔日本紀略（淳和）〕弘仁十四年六月乙酉、奉宛封戸、太上天皇（嵯峨）、一千五百烟皇太后（嵯峨后）、十烟、

〔續日本後紀（仁明）〕承和二年三月丁巳、勅後太上天皇（淳和）、御封二千戸、皇太后（淳和）、御封一千

戸、准冷泉院（嵯峨）、御封行之、若當有損年、以公相補令進之、

〔續日本後紀（仁明）〕承和三年二月壬午、河内國丹比郡荒廢田十三町、充皇太后宮（正子）、後院、

〔執次詰所本御系譜〕青綺門院（堀河）、藤舎子（中略）、延享四年五月廿四日立后（立皇）、稱大宮（中略）、寛延

三年十月廿一日、千石御増地、

〔執次詰所本御系譜〕恭禮門院（桃后）、藤富子、寶曆五年十月十四日二千石御料被定、同十一月廿六日

入内、明和八年五月九日立太后、同九年十月六日御増地千石被定、

○按ズルニ、此他後桃園天皇女御藤原維子、仁孝天皇女御藤原祺子モ亦立太后ノ後千石増地ノ事、本書ニ載セタレドモ今略ス、

皇后爲皇太后

〔日本書紀（四）〕神淳名川耳天皇（神）、神日本磐余彥天皇第三子也、母曰媛蹈輪五十鈴媛命、事代主神之大女也、（中略）、元年正月己卯、神淳名川耳尊即天皇位、（中略）、尊皇后（武）、曰皇太后、

子正四位下、正五位下藤原朝臣宜子從四位下、藤原朝臣御康正五位下、正六位上藤原朝臣貞子、多治真人安子、無位大江朝臣告子並從五位下、七日觴宴之餘慶、特有此殊弊焉。

〔日本紀略^二〕承平元年十一月廿八日辛亥、詔尊母儀皇后^{○藤原}爲皇太后、凡服御物、湯沐邑、并職中諸事、皆悉如舊典。

〔日本紀略^{後十三}〕萬壽四年九月十四日辛亥、皇太后^{○三條}藤原妍子、依病落飾卽崩、年卅四、十六日癸丑、奉葬皇太后於大峯寺前野了。

〔榮花物語^{二十九}〕三月八日よりなやませ給て、萬壽四年九月十四日のさるの時にうせさせ給ひ

ぬ、^{○妍子}一品宮^{○三條皇女}御ふくやつれ、いとあはれに心ぐるしう繪にもかゝまほしうおは

しなす、女房みやづかさなど、皆いどくろましたり、さふらひの人々は、さすがにこきかぎり、さぬ

はかまにて冠をばしたる^{○中}、五七日にもならせ給ぬれば、日ごろつくらせ給へる、五丈尊一万

の不動尊供養えたてまつらせ給、その頃はあしき御ものゝけどもにてうせさせ給ぬれば、佛道

さまたげにやとて、今にたゞ極樂へどのみ御心ざしなりけり、講師には、けうえん法橋、いといみ

じうつかまつる、殿のうへの御前^{○藤原道長妻}、などいみじうなかせ給、女房など、あなかたはら

いたと思ふまでなけば、講師はあされつゝをやみがちなり、御法事は十月廿八日とさだめさせ

給へり、それにはまろがねの御ぐどもして、阿彌陀の三尊をぞつくり奉らせ給ける、^{○中}御法事

の僧の法服、御誦經のれうの御ぞの事、染殿にも、おほかたの人々もいそぎみちたり、かゝる程に

はかなくて廿七日になりぬれば、阿彌陀堂に莊嚴御えつらひなどせさせ給ふ、まだあかつきに、

どのゝうへの御えへ、一品宮ひとつ御車にてわたらせおはします、どのゝ御方宮など、女房車廿

ばかりあり、宮の女房こたみばかりのみやづかへとおもふに残りなく、参りたり、萬まだくらき

程にておぼつかなければ、くはしくかきあらためず、おはしましつきて、此堂の北の方の廊にお

森 少納言侍源正香

平田 中務省少丞職孚

永井 大舍人寮少丞藤井常足

細川 大藏省少丞兼木工寮弘度

小野 權助職保

平岡 掃部寮權助利常

岡田 左衛府少尉源孟綱

三上 右兵衛大尉景偕

高橋 御厨子所預宗愛

各膳部二人宛

藏人方

平田 出納職寅朝臣

山科 正恒

結城 秀伴

和田 辨侍橋吉胤

渡邊 史生平華

谷口 式部省少丞平胤典

史生

史生

清水 大允平田藤原利政

世續 右衛門府大尉藤原重登

橫田 陣官人橋久芳

後藤 內膳司奉膳高橋實定

德岡 大膳職大進小野久古

山科 御藏小舍人生直

栗津 職敬

神岡 藏人所兼象上南座文景

戶屋主

仕人

使部二人

平田 內記局少職孚

永田 史生源義直

小野 主殿寮助伴重安

火炬師

平田 藤原利和

山路 左兵衛府少尉平信實

富島 源元方

待選

〔三代實錄清和〕貞觀十年十二月五日甲子、勅遣使者於近京四十箇寺、平城四十箇寺、修轉經功德、被

錢寺別百數、賀皇太后（孝和母后）春秋盈四士、以麟餘算也、七日丙寅、天皇曲宴皇太后於常寧殿、

王公卿士並侍焉、歡樂竟日、群臣具醉、賜祿各有差、是日於朱雀門前、召集京邑貧人、賜物有差、九日

戊辰、詔授從四位上、行皇太后宮大夫藤原朝臣良世正四位下、從四位下行左中辨兼皇太后宮亮藤

原朝臣家宗從四位上、齊院長官從五位下兼行皇太后宮大進藤原朝臣忠主從五位下、外從五位下

皇太后宮少進菅野朝臣愛甲從五位下、正六位上藤原朝臣清生從五位下、從四位下上毛野朝臣滋

權大夫

從二位藤原朝臣忠能兼

弘化四年三月十四日

太政官謹奏

皇太后宮職

亮

正四位上藤原朝臣恭光兼

權亮

正四位下藤原朝臣季知兼

大進

正五位上藤原朝臣顯彰兼

權大進

正五位下藤原朝臣胤保兼

少進

正五位下藤原朝臣哲長兼

權少進

正六位上丹波朝臣賴永兼

大屬

從五位下中原朝臣職孚兼

少屬

正六位上紀朝臣定厚兼

權少屬

正六位下宗岡朝臣行誠兼

弘化四年三月十四日

參仕

押小路 大外記師身朝臣

壬生 新左大史輔世

虫鹿 右少史秀興

行事官 右史生以昌

三宅 史生代宗岡行邦

岩崎 左官掌紀氏萬

峯 右官掌紀親成

峯 紀孟親

青木 宗岡行誠

三宅 宗岡行健

平田 權少外記職孚

宗岡 史生宗岡經成

小野 紀氏明

三宅 召使宗岡行邦

青木 臨期不參 宗岡行要

衛門府

三室戸右雄光朝臣
衛門佐雄光朝臣
高野左保美朝臣

兵衛府

兵衛佐員光朝臣
兵衛佐左勤光
兵衛佐實愛朝臣

冊命使

正親町三條
右中將
實愛朝臣

御調度使

北小路極萬
大江俊常

傳奏

柳原中納言隆光卿

奉行

坊城頭左中辨俊克朝臣

四位侍從

備前隆韶朝臣
阿野公誠朝臣

五位侍從

藥室長順
河越公述

陪膳殿上人

歸小路中賴易朝臣
竹內治惟和朝臣
勸修寺少輔資生

堀大和哲長

倉橋因泰顯

陪膳諸大夫

保田利部利壽

青木治吉誠

堀大輔利壽
西村出世誠

小山兵部長教

除目二通之寫宿紙也

太政官議奏

皇太后宮職

大夫

正二位源朝臣基豐兼

石井利在正

神祇官人奉仕大殿祭少進引若入夜時御階左右主殿寮奉仕立明

立太后宣命之寫散狀之寫并役送參仕等交名除目二通之寫

現神止大八洲國所知須天皇我詔其萬宣布勅勅乎親王諸王諸臣百官等天下公民衆聞食止宣凡爲人者於夜乃恩愛乎酬天崇飾止渡米豆良可爾新伎政爾非須往代乃聖主毛行來迹事止所聞禱須故是以准三宮藤原氏乎皇太后爾上奉利崇賜乎此狀宣悟氏隨法仁供奉止勅天皇我御命乎衆聞食止宣

弘化四年三月十四日黃紙也

散狀之寫立后節會公卿

內辨

近衛內大臣公忠顯

外辨第一

花山院右大將公家厚

德大寺大納言實堅

除目陣上卿

久我權中納言病建通

宣命使

飛鳥井中納言病雅久

除目陣執筆

野宮宰相中將定祥

四辻新宰相中將公結

少納言清岡長熙朝臣

辨柳原右光愛

次將左

東園左基貞朝臣

大宮左政季朝臣

少將盤尾左公賢朝臣

右

正親町實德朝臣

油小路隆晃朝臣

少將野宮右定功朝臣

啓陣近衛府

右少將四辻公恪朝臣

中山左忠愛朝臣

卿參本宮

本宮次第

先大夫以下參本宮列立南棟門外西而南上、公驛一次亮離列啓事之由還出仰聞食之由加列次大夫以下拜舞畢昇殿次册命勅使立南棟門外亮啓事之由此間敷勅使座於渡殿高麗端次亮還出告召之由勅使著座啓冊命之趣次大夫取祿白大掛一領、請授勅使降殿拜舞退出次六位藏人相具御調度相小舍人立南棟門外亮啓事之由次大夫進出南棟門召藏人次藏人著座次權大夫取祿女發授勅使次勅使降殿拜舞退出此間賜小舍人祿匹絹於南棟門撤勅使座次宮司白亮至運送御倚子以下調度物設母屋底等此間出納計渡御膳具次六府各率官人以下一員近衛等參左右近衛左右兵衛門外次公卿大夫權大殿上人等列立南棟門外公卿一列、殿上人次令權亮啓賀皇太后著御倚子中次權亮還出復命次公卿殿上人進庭中拜舞公卿一列、殿上人次公卿昇殿著座座前豫設赤木机居肴物次四位侍從著橫敷座西而南上座前豫設黑木机居肴物次五位侍從著廊代座西而南上座前設黑木机居肴物次一獻端勸盃大納言瓶子大進與勸盃大夫瓶子權大進巡流至四位侍從四位侍從前五位諸大夫取瓶子五位侍從前大進勸盃五位諸大夫取瓶子若關白太政大臣追加著坐者立机獻盃勸盃大納言次二獻與勸盃中納言瓶子五位殿上人端勸盃權大夫瓶子五位殿上人巡流同一獻四位侍從前五位諸大夫取瓶子次居餽餽關白太政大臣前四位殿上人役之納言參議前五位殿上人役之四位五位等侍從前五位諸大夫役之各居畢參議中箸次三獻與勸盃參議瓶子五位殿上人端勸盃亮瓶子五位殿上人巡流同一二獻四位侍從前勸盃大進五位諸大夫取瓶子五位侍從前少進勸盃五位諸大夫取瓶子次居餽餽役送同各居畢參議告箸上次居冷汁次居熱汁次居追物次居菓子次居著損粥每居畢參議中箸次賜祿退出諸大夫取祿殿上人各四名、於五五位殿上人取納言參議等祿各白大權亮取大臣祿白織物大大夫取關白太政大臣祿同上次供御膳上膳女房勅仕陪膳次

可爲宣命使之由次諸卿著外辨次大臣起座於陣後著靴進宜陽殿壇上內記持宣天皇御南殿中近

仗陣階下下設次內辨取副宣命於笏進立軒廊次內侍臨東轎次內辨昇殿著兀子次開門次開司著

座次內辨召舍人次少納言就版次內辨召刀禰少納言稱唯退出召之次外辨參列標下北西上次

內辨召宣命使給宣命次宣命使降立軒廊次內辨降殿就標次宣命使就版宣制一段群臣再拜又一

段群臣再拜次宣命使復本列次內辨以下退出改轎次進履還著仗座天皇入御近仗退出次職事奉

仕除目御裝束次職事就軾召大臣次大臣著殿上次出御晝御座關白著朝圓座次職事奉仰召大臣

次大臣參進御前圓座次依天氣召男共五位藏人豫參進候質子大臣仰可待參觀讀紙之由五位藏

人持參之次大臣依天氣書宮司除目次奏聞御覽畢返給次大臣取副除目於笏退著殿上座次大臣

召外記宮納之令持外記還著仗座外記置宮退出次大臣更以官人召外記仰可持參觀之由次外記

持參硯置參議座上次大臣召清書參議於座前授除目參議復座次參議候氣色執筆兩大夫一枚折

堺亮以下一枚折堺次參議清書畢持參大臣前次大臣披見畢納宮次大臣召外記給宮外記持宮候

小庭次大臣進弓場外記奏清晝御覽畢返給次大臣還著陣外記置宮退出次大臣更以官人召外記

六位外記候小庭次大臣問式省候否外記申候之由大臣仰可召之由外記稱唯退出外記進小庭申

式省候之由大臣仰可召之由外記稱唯退外記又進小庭申式省候之由大臣仰可召之由外記稱唯

退出次式部丞立小庭次大臣取副除目於笏召式部丞給之丞取之立小庭次大臣仰仰詞承退出次

大臣令官人傳仰可撤空宮硯等之由於外記次外記參進撤之此間大夫以下進弓場奏慶賀拜舞公卿

一列殿上畢參本宮次職事就軾仰可差進啓陣之由次大臣令官人加敷軾次大臣召外記仰可召近

衛之由次左右近衛次將就軾次大臣仰可候啓陣之由次將稱唯退出次大臣召外記仰可召衛門之

由次左右衛門佐就軾次大臣仰可候啓陣之由佐稱唯退出次大臣令官人撤軾次大臣以下起座次大臣引諸

房簾、次祿、先地下召人疋絹諸大夫取之、次五位侍從黃絹各一疋、次四位侍從白絹各一疋、已上諸大夫役之、御

上之、自次參議并散三位各白大褂一領、殿上人役之、次中納言同褂各一重、次大納言、爲宮司公卿

上之、次大臣、同褂一重、加蒔黃織物褂一領、同實首緒次攝政御祿、如大臣、加女發束、次諸卿退出、

今日寢殿南面八間、除膳房西面四間、女房有打出事、紅薄樣蒔黃表著葡萄染唐衣同色打衣、

後聞理髮髮上掌侍命婦藏人等祿宮司向宿所給之、次供朝夕御膳采女六人理髮役之、皇后御大

床子、御匣殿陪膳女房八人役之、

亮定隆朝臣、於侍所令書侍女房等日給簡、下御匣殿宣旨等令旨、

主水司供御手水、

神祇官奉仕大殿祭、

主殿女孺供掌燈、

宮司以下下格子、

次亮以下名謁、

召次啓時、

所々擬衝重前物等見定文支配可尋、

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕前一兩日職事奉勅向大臣第有召仰之事、

當日早旦、諸司奉仕南殿御裝束、刻限諸卿著仗座、次大臣令官人數軾、次大臣召大外記問諸司具否、

次職事來軾、仰以准三后藤原氏、仁孝妃藤原氏子、靈司爲皇太后、可令作宣命之由、次大臣召大內記、

仰宣命之趣、次內記持參宣命草、入次大臣披見、內記退入次大臣令職事奏宣命草、職事還來仰、可令

清書之由、次大臣召內記、返給宣命草、仰可令清書之由、內記退入次內記持參清書、次大臣披見、畢更

進弓場、內記持宣命相從奏聞、御覽畢返給、次大臣還著陣、給宣命於內記、仰可候陣腋之由、次大臣差其人告

下官同馳參 法住寺御所

次攝政殿左大臣右大臣內大臣大夫以下納言參議暫被著對代南底

未刻勅使右近權中將實守朝臣參上 縫掖袍時輪佩立中門邊亮定降朝臣下逢歸昇寢殿南簾下啓

事由退出令敷座 縫殿西庇戶前高麗盤一枚其上海京錦茵諸大夫後之次定降朝臣召中使中使參上啓册命事由大夫取白大

褂一領給勅使勅使經頭降自對南階再拜退出次藏人平信廣相具御物參上 青色袍狀冬下重於中

門邊啓事由其儀如先勅使座未撤次權大夫取女裝束一襲給之信廣於前勅使所舞踏退出 再拜由

文已後存也但大進經房啓事由又召藏人次權大進光雅親宗兵衛佐盛賴左衛門佐信基持參

御物

平文御倚子一脚 在白織物面褥

二色綾毯代 金銅犀形鎮子四 已上掃部寮人持參之

螺鈿大床子二脚 在高麗敷物菅圓座一枚

師子形二頭 立洲濱御拖鞋一足 押紫織物

右兵衛督伊與守信隆亮定降於紫宸殿簾中持置也御膳具出納右衛門志中原賴光御倉小舍人丹

治宗時等相具渡御膳宿大進經房卿屬宗家令檢知預御膳宿女官畢

銀器 飯碗一口 加蓋 四種四口 盤八枚 窪器二口 汁物器二口 水坑一

口 酒盞一口 在盃 馬頭盤一枚 箸二雙 匕二枚 朱御盤四枚 中御盤二

枚 已上納朱漆唐櫃一台 在兩

御臺盤二脚 黑漆厨子一脚

次修理職獻炬屋 當南階

次內匠寮立時簡民部大夫長親書銘 於廊書之立西中門北腋木工寮立御膳棚於其後

下官奏聞先例無草奏今日依有立后事草奏也即返給仰令清黃次殿下退下直廡有宮司除目事御座撤疊敷圓座執筆圓座如例公卿座不敷加次出御御座令下官召左大辨左大辨參著圓座次召五位藏人兼光參進召祝繼紙即持參置執筆前

次除目

大夫正二位大納言源雅通

權大夫從三位右近中將平宗盛

亮正四位下左京大夫藤原定隆

權亮從四位上右近中將藤原賴實

大進正五位下左衛門權佐藤原經房藏人

權大進正五位下藤原光雅藏人

從五位上兵部少輔伯耆守平親宗

少進從五位下平時家

權少進正六位上高階經仲

大屬從五位下伊豆守中原宗家

少屬左大史中原盛直

權少屬西市祐中原久孝

除日畢執筆獻大間退下次召中納言實房卿給大間次實房卿給大間退下向陣座平宰相相伴行清書事次下二省此間下官仰上卿云皇太后宮職令差進啓陣次上卿召仰將佐了此間殿下令參皇太后宮給畢

大夫源大納言於弓場殿慶賀遂電被參本宮次大夫以下宮司於中門邊啓慶由

大輔清季今夜傳以下、無見權亮家嗣、兼大進資賴權大進成長、定高、少進光經定經權少進仲資子、
字仲實子三恐分註四位五位侍從不聞、啓將左近時實右賴房朝臣左衛門正家季右衛門權經高兵衛二人

無參來者、今夜職事可著侍由、成長俄示予、尤兼日催儲、稱障出了、後聞亮辨親定朝臣等、取入師子形、
後女房見晝御座、無師子形、奇求之處、揖入御帳之內、隱之云云、

〔女院小傳〕春花門院并子後鳥羽第一女、中建久六十、十六爲內親王、同七、四、十六准三宮、同年十二、
五入御八條院、承元二、八、八爲皇后宮四、

○按ズルニ、本文ハ後鳥羽天皇第一皇女、昇子內親王春花門院立后ノ儀ナリ、此皇女ハ御妻、マタ准
母ニ非ズシテ、皇后ト爲リタマヘリ、

〔歷代皇紀後醍醐〕達智門院 弊子內親王、後宇多皇女、今上同母弟、元應元年十一月十五日院號、同
廿一日御出家真理覺去三月廿九日爲皇后宮、元前齋宮、

〔増鏡四〕秋の深山、みかど醍醐後のおなじ御腹の前齋宮内親王も后にたゝせ給ふ、
○按ズルニ、此他御妻トナラズシテ、皇后ノ稱ヲ得給ヒシ内親王ハ准母タレバ、其條ニ出セリ、

皇太后稱呼

〔令義解七〕皇太后謂天子母也。爲皇太后。居他位者、皇太妃、皇太夫人同。○中 右皆平出、

〔西宮記臨時五〕皇后行啓略○中 皇太后長樂宮、

〔拾芥抄中本〕官位唐名、國母外戚以提右藏、總比姪娘、周文王母云大姪、周武王母云大姪、門錢門、

皇太后宮帝親母、

尊爲皇太后儀

〔兵範記〕仁安三年三月十四日丙子、今日有立后御裝束始事、其儀法住寺御所、院司皆參、定隆朝臣經

房等殊執行、略○中 廿日壬午○此日高倉、卯時內辨左大臣經宗、參著仗座、下官奉仰出帳、仰云、皇

太后宮后平滋子冊命事、可執宣命者、依例也、又當日宣下也。次上卿召大内記光範、仰宣命奏、即召、

令語給事等、左大臣内辨奏宜命清復陣座之後、不示外辨事、良久之間可罷著外辨歟、由示之答云、

出御之後コッ、答云、不可依出御歟即立了、其後いかにかくは早速に還不請云々、公房卿又立、内辨

喚止云、出御之後トコッ存候へ、不答而立了云々、權大夫殿、内辨宣命ヲ入宮、令持内記尻に具して

進東階下寄而可寄、又練樣早速になし、外辨退出時、公房卿經三位宰相之後四位宰相前、又極

奇事也、良久之後、勅使右近中將公氏參不見其事、大夫通光卿取祿、次被渡御物具、藏人參入云々、權大夫

殿取祿、給成長夜權大進今奉行於中門廊北對代異奉祿命云、向祿所可取成長云、大夫もこゝにてこそ被

取候つれ、資實卿聞之云、早可儲祿所、申狀甚無謂、即向祿所獻之、亦不繆云々、女房裝束也、可繆由被

仰、大相國於祿所簾中被見物、不繆之條大被袈裟唐衣、猶不繆袴、亦令繆予在閑所、公卿下立中門

外、如元日拜禮列立、予能季朝臣、右大將殿、御後内大臣殿、今夜伊時在御共此間不見、無取御沓之人、

不繆云云、左府係季右府家兼右大將隨身左大將能季權亮家嗣申繼進中門外蒙傳陸御氣色昇外

下氣退關白以下列立、四位五位侍從在後列存云々、經通有家已下五位侍從不立以前、公卿被拜之

間、五位一拜退云云、右府ハ關白殿家禮云云、拜訖各昇對代南階著座、前驅行時取内大臣殿御沓、甚

以不便、更不令取給事也、此男推參取之、無殿上人者召使可取也、兩大將隨身取之、予今夜不可備子

威儀之由兼申之了、著與座之人、左大臣、右大臣、右大將、大宮、大納言、自四位侍從座末、經其與著之、只

可入座末間之由、權大夫殿後日語給歸出之時、左右府被用座末云云、一獻殿下、右大將二獻左右府、

三獻内府宮大夫、皆聞計也、關白殿起給之間、右府依家禮先起座、參議不得其心之間、光親平伏、長房

長兼動座長兼引光親抱云、やれ、各啖坐云々居物事等了、公卿著隱座、亦居衝重未及左大將不居云、次不持參

勸坏之坏、先持參御遊具、權大夫殿退返給持參、坏權大夫殿勸之、即退出、次御遊右府爭右大將拍子

大夫延替按察著座此時右衛門督宣定季兼兼忠行和琴侍從實俊夜初、今御遊良久不取祿、奉行有若

亡云々、大將殿此間御退出、御共參歸座、曉鐘以後也、宮司大夫通光、權大夫良平、亮從四位上、前中務

法皇モ此事然ルベカラズト度々申サセ給ケレ共主上ノ仰ニハ天子ニ父母ナシ萬乘ノ寶位ヲ
忝セシ上ハ此程ノ事微慮ニ任スベシトテ既御入内ノ日時ヲ宣下セラレケル上ハ子細ニ及バ
ズ后ハ此御事聞召レケルヨリ引カヅキオハシマシツ御歎ノ色深クゾ見エサセ給ケル先帝
ニ後レ進ラセシ久壽ノ秋ノ始ニ同ジ草葉ノ露トモ消家ヲ出世ヲ遁タリセバ懸ル例シナキ事
ハ聞ザラマシトゾ思召ケル父ノ大臣彼宮ニ參テ世ニ隨フヲ以テ人倫トシ世ニ背クヲ以テ狂
人トスト云事侍リ既ニ詔命ヲ下サルノ上ハ子細ヲ申ニ及バズタハ疾參ラセオハシマスベ
キ也是偏ニ愚老ヲ助サセ給フベキ孝養ノ御計タルベシ知ズ此未ニ皇子御誕生ナドモ有テ君
モ國母ト祝ハレ愚老モ亦帝祖トイハルベキ家門繁昌ノ榮花ニテモヤ侍ラント様々コシラヘ
申サセ給ケレドモ皇后ハ御返事ナカリケリ只御涙ノミゾスマセ給ケル^略既ニ御入内ノ
日時ニモ成シカバ父ノ大臣ハ供奉ノ上達部出車ノ儀式心モ詞モ及バズ小夜モ漸更ケレバ后
ハ御車ニ扶ケ乗セラレオハシマシケリ色深キ御衣ヲバ召レズ殊ニ白キ御衣十許ゾ召レケル
内ヘ參ラセ給ヒシカバヤガテ恩ヲ蒙リ麗景殿ニゾ渡ラセ給ケルヒタスラ朝政ヲ勸申サセ給
フ御有様也

非御事稱后

〔中右記〕寛治五年五月廿二日壬午有立后之事^{無品内親王}其儀南殿懸御簾^{白日隱間西大略}東
西引屏幔如例已刻許右大臣^{源房}參仗座仰外記令草宣命了付藏人頭秀仲朝臣令奏覽則返給重
奏清書之後御出南殿^{是若儀御直衣}午四刻左右近衛引陣^{不立胡床立陣並胡藤時給次開門近衛}
關司着座召舍人^{二番}内豎稱唯少納言源成宗相代參入内辨仰云刀綱召^七稱唯退出外辨上卿列
立庭中右大臣内大臣^{師房}按察大納言^{實民部卿}源大納言^{權大納言}左衛門督^家皇后宮
權大夫^公二位中將^經左京大夫^公別當^左宰相中將^基右大辨^通左大辨^臣新宰相中將^保三位侍
從^能三位中將^忠令^叙三位^給皇太后宮權大夫^公以上一列四位參議一列三位内辨召皇后權大夫^{中納言}

〔日本書紀十〕

元年三月壬子、立草香幡媛皇女爲皇后。更名

○按ズルニ、内藤廣前ノ説ニ、履中ノ后ナル幡媛皇女ハ、古事記應神ノ段ニ、日向ノ泉長比賣ノ

生メル、應神天皇崩年ノ誕生トスルモ、履中ノ后ナル幡媛皇女ハ、古事記仁德ノ段ナル、日向諸縣君牛諸ノ女髮長比賣ノ生メル、波多毘能若郎女トアル皇女ナリ、サレバ履中ノ后ト雄略ノ后トハ、同名異人ナリト云ヘリ、然レドモ履中ノ后ナル幡媛皇女ヲ應神天皇ノ皇女トスル時ハ、假ニ應神天皇崩年ノ誕生トスルモ、履中ノ后ナル幡媛皇女ハ、年代合ハズ、又大日本史ニハ同人トシタレドモ、假ニ幡媛皇女ノ履中ノ后ナル幡媛皇女ハ、年代合ハズ、故ニコノ皇女ヲ生ミ給フトスルモ、雄略天皇ノ元年ニハ、七十餘歳トナレリ、是又年代合ハズ故ニコノ皇后ハ同名異人ナルカ、ハタ同人ナルカ詳ナラズ、姑ク附記シテ後考ヲ俟ツ。

〔源平盛衰記二〕二代后事

故近衛院ノ后、太皇太后宮多ト申ハ、德大寺左大臣公能ノ御娘也、中宮ヨリ太皇太后ニ上ラセ給タリケルガ、先帝ニ後レサセ給テ後ハ、九重ノ中ヲバ住憂思召テ、近衛河原ノ御所ニゾ移住セ給ケル、先朝ノ后宮ニテ、フルメカシク幽ナル御有様也ケルガ、永曆應保ノ比ハ、御年二十七ハノ程ニモヤ成セ給ケン、天下第一ノ美人ニテオハシマス由聞エサセ給ケレバ、主上〇二御色ニツムル御心有テ、密ニ高力士ニ詔シテ、外宮ニ引求サセ給テ、忍ツ、彼太皇太后宮ヘ御書有ケレ共、后ウツ、ナラズ思召レケレバ、更ニ聞召入サセ給ズ、主上ハ忍ノ御書モ度重リケレ共、空シキ御書ナリケレバ、今ハヒタスラ穂ニアラハレマシ、テ、后入内有ベキ由、父ノ左大臣家ニ宣旨ヲ下サレケリ、此事珍シキ御事也、先帝ノ后宮、二代ノ后ニ祝奉ル、如何有ベキトテ、公卿僉議有ケレ共、各意得難キノ由申サレケリ、但先例ヲ相尋ベキノ旨議定アリ。〇中本朝ノ先規ヲ勘ルニ、神武天皇ヨリ以來人王七十餘代、イマダ二代ノ后ニ立給ヘル其例ヲ聞ズト、諸卿僉議一同也ケレバ、

〔後宮譜證註〕畏庵隨筆ニ云、板本日本紀即庶母也ノ四字ノ小注アリ、古卷ニ无シ、孝元天皇ノ妃、伊香色謎命ト同名ニシテ、同人ニアラズ、年齡考フベシトアリ、書紀集解ニ、四字ノ小注ハ爲後人加筆刪去トアリ、○久爾後宮御藏本ニハ此四字ノ小注又河内志茨田郡ニ伊香澁川郡ニ伊賀々、二所ノ村名アリ、是等ヲ以テ考レバ、孝元天皇即位ノ元年、假ニ十七八歳ニテ妃トナレルト見テモ、開化天皇ノ六年ニ至リテハ、八十餘歳ナレバ、如此事ノアルベクモ非ズ、コレ同人ニ非ルコト著明ナリ、然ルヲ同名ナルガ故ニ、同人ト思ヒ誤リテ、後人ノ書入シガ、既ニ日本紀ニハ本註トナリ、古事記ニ本文トナレルナリ、

○按ズルニ、孝元天皇ノ妃ハ、古事記ニ内色許男命之女トアリ、開化天皇ノ后ハ、崇神紀ニ大綜麻杵之女也トアリテ、其父ヲ異ニセリ、天孫本紀ニ據ルニ、得色雄命ト大綜麻杵命トハ兄ニシテ、其二大水口宿禰命ノ子ナリ、然レバ、孝元天皇ノ妃ハ兄ノ女、開化天皇ノ后ハ弟ノ女ニテ、別人ナルヲ、御名ノ同ジキ故ニ混ゼシモノカ、附記シテ後考ヲ俟ツ、

〔日本書紀十二〕六年正月戊子、立幡梭皇女爲皇后、

〔日本書紀十三〕元年二月戊辰朔、天皇爲大泊瀬皇子、○雄

欲聘大草香皇子妹幡梭皇女、則遣坂本臣

祖根使主、請於大草香皇子曰、願得幡梭皇女以欲配大泊瀬皇子、爰大草香皇子對言、僕頃患重病、不得愈、譬如物積船以待潮者、然死之命也、何足惜乎、但以妹幡梭皇女之孤、而不能易死耳、今陛下不嫌其醜、將滿荇菜之數、是甚之大恩也、何辭命辱、故欲呈丹心、奉私實、名押木珠纒、一云立纒、又附所使臣根使主、而敢奉獻、願物雖輕賤、納爲信契、於是根使主見押木珠纒、感其麗、以爲盜爲己實、則詐之奏、天皇曰、大草香皇子者、不奉命、乃謂臣曰、其雖同族、豈以吾妹得爲妻耶、旣而留纒入己而不獻、於是天皇信根使主之讒言、則大怒之、起兵圍大草香皇子之家而殺之、○中爰取大草香皇子之妻中帶姫、納于宮中、因爲妃、復遂喚幡梭皇女配大泊瀬王子、

后既亡兄王何以面目莅天下耶則抱皇子譽津別命而入之於兄王稻城天皇更益軍衆悉圍其城即勅城中曰急出皇后與皇子然不出矣則將軍八綱田放火焚其城於焉皇后令懷抱皇子臨城上而出之因以奏請曰妾始所以逃入兄城若有因妾子免兄罪乎今不得免乃知妾有罪何得面縛自經而死耳唯妾雖死之敢勿忘天皇之恩願妾所掌后宮之事宜授好仇丹波國有五婦人志竝貞潔是丹波道主王之女也道主王者繼日本根子太日天皇子也當納掖庭以盈后宮之數天皇聽矣時火興城崩軍衆悉走狹穗彥與妹共死于城中

〔日本書紀仁德〕二年三月戊寅立磐之媛命爲皇后二十二年正月天皇語皇后曰納八田皇女將爲

妃皇后不聽三十年九月乙丑皇后遊行紀國到熊野岬即取其處之御網葉葉此云三而還於是日天皇何皇后不在而娶八田皇女納於宮中時皇后到難波濟聞天皇合八田皇女而大恨之則其所採御

網葉投於海而不著岸故時人號散葉之海曰葉濟也愛天皇不知皇后忿不著岸親幸大津待皇后之

船略時皇后不泊于大津更引之泝江自山背廻而向倭明日天皇遣舍人鳥山令還皇后略皇后

不還猶行之略中更還山背興宮室於筒城岡南而居之十月甲申朔遣的臣祖口持臣喚皇后略中

十一月庚申天皇浮江幸山背略中明日乘輿詣于筒城宮喚皇后皇后不參見略中于時皇后令奏

言陛下納八田皇女爲妃其不欲副皇女而爲后遂不奉見乃車駕還宮三十五年六月皇后磐之媛

命薨於筒城宮

〔女院小傳〕宣政門院懷子院光后後醍醐女母後京極院元應元六廿六爲內親王同年十廿八叙一

品元德二、十二、十九卜定齋宮同三、正、十二、准三宮元弘元月日退下自野年月日密入上皇光宮建

武二、二、院號曆應三、五、廿九潛出上皇御所御出家

〔日本書紀四〕七年二月略中妃伊香色謎命生彥太忍信命

〔日本書紀四〕六年正月甲寅立伊香色謎命爲皇后是后生御間城入彥五十瓊殖天皇神

二朝爲后

〔續日本紀三十五〕寶龜九年正月丁卯、遣從四位下壹志濃王、石川朝臣朝守等、改葬故二品井上內親王。

親王。

〔日本紀略桓武〕延暦十九年七月己未、詔曰、略○中 故皇后井上內親王、追復稱皇后、其墓并稱山陵、

○按ズルニ、井上內親王廢后ノ事ニ就キ、水鏡ニ異說アレド、信ズルニ足ラザレバ今探ラズ、

〔大鏡裏書〕皇太后宮高子御事清和天皇后、贈太上天皇長良女、母贈正一位□□□元慶元年正月

十九日爲皇太夫人宮中同六年正月七日爲皇太后宮、寬平八年九月廿二日廢后位、同廿三日賜封

四百戶、延喜十年三月廿三日薨十九年天慶六年五月廿七日追復本位、

后自去宮

〔日本書紀六〕四年九月戊申、皇后○姊母兄狹穗彥王謀反、欲危社稷、因伺皇后之燕居、而語之曰、汝

孰愛兄與夫焉、於是皇后不知所問之意、越轍對曰、愛兄也、則詛皇后曰、夫以色事人、色衰寵緩、今天下

多佳人、各遞進求寵、豈永得特色乎、是以冀吾登鴻臚、必與汝照臨天下、則高枕而永終百年、亦不快乎、

願爲我弑天皇、仍取匕首授皇后、曰、是匕首佩于細中、當天皇之寢、廻刺頸而弑焉、皇后於是心裏兢戰、

不知所如、然視兄王之志、便不可得、諫故受其匕首、獨無所藏、以著衣中、遂有諫兄之情歟、五年十月

己卯朔、天皇幸來目、居於高宮、時天皇枕皇后膝而晝寢、於是皇后既無成事、而空思之、兄王所謀適是

時也、即眼淚流之、落帝面、天皇則寢之、語皇后曰、朕今日夢矣、錦色小蛇繞于朕頸、復大雨從狹穗發、而

來之濡面、是何祥也、皇后則知不得匿謀、而悚恐伏地、曲上兄王之反狀、因以奏曰、妾不能違兄王之志、

亦不得背天皇之恩、告言則亡兄王、不言則傾社稷、是以一則以懼、一則以悲、俯仰哽咽、進退而血泣、日

夜懷抱無所訴言、唯今日也、天皇枕妾膝而寢之、於是妾一思矣、若有狂婦成兄志者、適遇是時、不勞以

成功乎、玆意未竟、眼涕自流、則舉袖拭涕、從袖溢之、沾帝面、故今日夢也、必是事應焉、錦色小蛇則授妾

匕首也、大雨忽發、則妾眼涕也、天皇謂皇后曰、是非汝罪也、即發近縣卒、命上毛野君遠祖八綱田、令擊

狹穗彥、時狹穗彥與師距之、忽積稻作城、其堅不可破、此謂稻城也、踰月不降、於是皇后悲之曰、吾雖皇

りなし、西園寺の女御子もさしつゝきてまわり給ふを、いかさまならんと御胸つふれておぼせど、さしもあらず、これは九にぞなり給ひける。冷泉のおとゞ公相の御女なり、大宮院后の御女なり、の御子にし給ふとぞ聞えし、いづれもはなれぬ御中に、いぞみきしろひたまふはどきにくき事もあるべし。略中これも后にたちたまへば、もとの中宮はあがりて、皇后宮とぞ聞え給ふ、いそ后はあそびにのみ心いれ給ひて、まめやかにも見えたてまつらせ給はねど、御おぼえおとりさまにさこゆるを、おもはずなる事に、世の人もいひきたしける。

皇后

〔續日本紀三十一〕實龜三年三月癸未、皇后井上内親王坐、巫疊廣詔曰、天皇御命止宣御命平、百官

人等天下百姓衆聞食止宣、今裳昨足島謀反事、自首之申利世勘問、申事度年經月利、法勘流足

島毛罪在倍、然度年經月毛臣奈何、自首之申平、久勸賜比冠位上賜比治賜波久、宣天皇御命平衆聞

食止宣、辭別宣久、謀反事爾預氏隱而申左、奴等粟田廣虫、安都堅石女波、隨法斬乃罪爾行賜之然思

須保大御心坐爾、依而免賜比、奈多每賜比、遠流罪爾治賜止、宣天皇御命平衆聞食止宣、授從七位上

裳、昨臣足島外從五位下、五月丁未、廢皇太子他戸王爲庶人、詔曰、天皇御命止宣御命平、百官人

等天下百姓衆聞食止宣、今皇太子止定賜流部他戸王、其母井上内親王乃、廢魅大逆之事、一逼能仁、

不在遍、發覺久、其高御座天之口嗣坐波、非吾一人之私坐止、奈所思行須、故是以天之日嗣止、

賜比儲賜流皇太子位仁、謀反大逆人之子平治賜部卿等百官人等天下百姓乃、念久、恥志賀多

自氣奈、加以後世乃、平久安長久、全久可在波政毛不在止、神奈所念行仁、依而母他戸王平皇太

子之位停賜比却賜止布宣天皇御命平衆聞食止宣、四年十月辛酉、初井上内親王坐、巫疊廢後復歷

魅難波内親王、是日詔幽内親王及他戸王于大和國宇智郡沒官之宅。

〔續日本紀三十三〕實龜六年四月己丑、井上内親王他戸王並卒。

〔續日本紀三十四〕實龜八年十二月乙巳、改葬井上内親王、其墳墓稱御墓、置守家一烟。

中宮皇子爲中宮久安六年以女御徒三位

〔續世繼男也〕同延七年元永治十二月七日御とし三にて位ゆづり申させ給ふ○近衛受おとな

にならせ給ふまゝに御ありさまゝかるべきさきの世の御ちざりと見え給へり攝政殿の御お

とゝの左のおとゝ○藤原女御子多たてまつらせ給て皇后宮にたち給ひぬなはたらすやおぼ

しめすらむ院羽より御さたせさせ給て大宮大納言伊藤藤原のひすめ子關白忠通藤原殿の御

子とて此の政所妻宗子の御せうとのむすめなれば御子にし奉り給ふ御かた々花々といぞ

みかはなるべしとのゝわに通おとと長の御なかよくもおはしませねば宮もいとゝへ

だておはかるに關白殿はうちのひとつにてひとへに中宮子呈のみのほらせ給て皇后宮の御

かたをばうとくおはしませける○中うちにはささふたりたち給ひていとかた々おほく

おはするころなるべし

〔二代要記後入〕中宮藤有子帝后太政大臣公房女母從二位藤修子貞應元年十月御親女御代同

宮依女御

中宮藤長子帝后前關白家實公女嘉祿二年六月十

〔増鏡北野の鏡〕この入道殿實氏の御おとゝにそのころ右大臣實雄ときこゆるぞ姫君あまた

もち給へる中にすぐれたるを子信らうたきものにおぼしかしづく今上山龜の女御代にい

給ふべきをやがてそのついで文應元年入内あるべくおぼしおきてたり院にも御氣色たまは

り給ふ入道殿の御孫の姫君子婿もまゐり給ふべき聞えはあれどさしも今はと出したち給ふ

いとたけき御心なるべし○中十月廿二日一代要記作まゐり給ふぎしきこれもいどめでた

し○中よろづの事よりも女御子信の御さまかたちのめでたくおはしませば上山龜もおぼし

つきにたり○中はせもなく二月八日弘長元年后立ちありしかばおとゝ心ゆきておぼさるゝ事かぎ

以神事可爲先、中宮雖爲正妃、已被出家入道、隨不動神事、依有殊私之恩、無止職號、全納封戶也、重立妃爲后、令掌氏祭、可宜歟、又大原野祭、尋其禮儀、在於后宮之所祈、而當時二后共無所勳、左大臣依氏長者獨勤其祭、雖不致闕怠、恐非神明之本意歟、是亦可謂神事之違例、小臣以藤氏末葉爲思、氏祭所申也、於其可否、只在聖擇、此間所奏雖多、不能悉詳之、主上大臣具所知食也、大臣奉勅命之後、以女裝束一襲被勅使、大臣參進御所、令奏慶由拜舞、大藏卿正光朝臣傳之亦參院上御簾啓慶再拜、予傳之予以立后舊記奉之、依先日命也、

〔榮花物語六續藤壺〕大殿道長の姫君子影十二にならせ給へば、年の内に御裳著ありて、やがて内にと思し、いそがせ給、よろづしくさせ給へり、略中かくて參らせ給ふ事、長保元年十一月一日の事なり、略中はかなく年もかへりぬれば、二年長保今年是后にたゝせ給べしといふ事世に申せば、此御前の御事なるべし、中宮隆女定子は宮々教廣の御事を思し、あつかひなぞして、參らせ給べき事、唯今見えさせ給はず、略中斯くて三月に藤壺子影后に立せ給べき宜旨下りぬ、中宮と聞えさす、此侍らはせ給子定をば、皇后宮と聞えさす、

〔十三代要略三條〕中宮藤原妍子弘弘九年二月十四日爲皇后皇后藤原娥子大納言、壽時一女、正曆年中入太子宮、弘弘八年八月廿三日爲女御、九年四月廿七日爲皇后、○節略

〔春記〕長曆四年十二月十八日、略中人々云、皇后宮○後朱雀此四年不參入給、已如棄置、不異上陽人、依故中宮子嫺參入給事也、而彼宮忽然已逝給、其後內府女御通女生子參入、仍又遲々而令彼女御、忽有事故退出、仍此宮參入給、不計事等也、世間不定如浮雲、不可愁、不可悅歟、

〔十三代要略二後冷泉〕中宮藤原寛子宇治相國藤原通女、母祇子永承六年二月三日、爲皇后十六、治曆四年四月十七日爲中宮、皇后藤原歟子左大臣藤原教通三女治曆四年四月十六日爲皇后、○節略

〔皇代略記三近衛〕皇后宮多子皇后、久安六年三月十四日、以女御從三位爲皇太后、大納言公任女、左大臣藤原賴長爲養子、

古事類苑

帝王部二十

皇后下

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、例△

中宮皇后立

〔職原抄〕上中宮職、中宮者、即皇后也、本朝並置二宮、太無其謂、

〔標注職原抄校本〕上本中宮者、即皇后也、とは、此は中宮の字を、居所の稱とせずして、后位の事と
ゑたるものなり、榮花月宴に、女御も后にたゝせ給て、中宮と申と云々、此外かくざまにいへる
詞いと多し、みな皇后と中宮とおなじきよしなり、されど上件に論ることく、令條にては、中宮
は皇后の宮の事なり、漢書の注に、師古曰、中宮、皇后宮也、これなり、然るを後に、ささき二人おは
し、さすより、一人を皇后といひ、今一人を別に稱すべき號なきまゝに、居所の名を用られたる
なり、

〔權記〕長保二年正月廿八日丙午、早旦、參内、此日藏人頭、正光朝臣奉勅詣女御○藤原御曹司傳之、左
大臣○藤原立后宣命日可令擇申之由、先日内内、以此氣色可告大臣之由、蒙勅命然而申、自院被傳
仰可有便宜之由、上諸之、此事去冬之末、太后○冷泉崩給以來、度々催奏其旨、當時所坐藤氏皇后東
三條院、○醍醐皇太后宮、○後繼子、○一條皆依出家、無勅氏祀職納之物、可充神事也、有其數然而
入道之後、不勤其事、雖帶后位、雖有納物、如尸祿素怠之臣、徒費私用空資公物、論之朝政、未有何益、度
度依怪、所司卜申神事違例之由、疑慮所至、恐在如此之漸、賊永祚中有四后、是漢哀亂代之例也、初立
之議、雖有誘毀、例致爰出、准據無難、歟、況當時所在二后也、今加其一、令勤神事、有何事哉、我朝神國也、

帝母准三宮

三五四

剃髮後准三宮

三五八

贈准三宮

同

女御爲皇太夫人

三二七

帝母爲太夫人

同

○

女院稱呼

三二八

待遇

同

女院初例

三三一

國母爲院

三三二

三后爲院

三三〇

女御以下宮人爲院

三四四

內親王爲院

同

辭院號

三四六

崩後贈院號

同

○

准母待遇

三四七

內親王爲准母

三五一

出家後爲准母

三五二

皇后爲准母

三五三

妃爲准母

三五四

○

女御准三宮

三五四

准后爲皇太后

三一八

剃髮後爲皇太后

同

院號後爲皇太后

同

○

太皇太后稱呼

三一八

待遇

三一八

皇太后爲太皇太后

同

皇后爲太皇太后

三二〇

中宮爲太皇太后

同

贈皇后

同

贈皇太后

同

贈太皇太后

三二二

皇后攝政

三二三

皇后登帝位

同

尊號

同

謚號

三二四

○

皇太夫人稱呼

三二五

待遇

同

夫人爲皇太夫人

三二六

古事類苑

帝王部二十

皇后下

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、例

中宮皇后並立

二九三

廢后

二九六

后自去宮

二九七

二朝爲后

二九八

非御妻稱后

三〇一

○

皇太后稱呼

三〇四

尊爲皇太后儀

同

待遇

三一四

供給

三一六

皇后爲皇太后

同

中宮爲皇太后

三一七

皇太夫人爲皇太后

三一八

女御爲皇太后

同

幼女爲后

〔十三代要略^二崇徳〕大治四年正月一日庚辰、天皇於土御門内裏加元服^{中略十一}。○九日從三位藤原聖子參内^{中略九}。十六日被^下女御宣旨^{中略}。五年二月廿一日、女御聖子册爲中宮。

〔五代帝王物語〕關白^{家實}藤原の女^子長^子纔に九歳にて、六月^{中略}二年^{嘉祿}參り給て、やがて廿九日立后^{中略}。○後^河后^後ゆゝしくてさふらひ給ふほどに、嘉祿二年十二月關白をどゞめられて、前攝政^{道家}寺^九明^成かへり給にければ、中宮の御光も隠れて、又その關白の御女^子參り給へば、中宮おりさせ給ひぬ、よしなかりける中かなと上下思ひたりけり。

〔二代要記^九龜山〕後宮

中宮藤嬪子^{前左大臣藤公相公女、號今出川院、弘長元年六月十四日入内女御九歳、同八月廿日爲中宮職。}

○按ズルニ、嬪子、仲資王記ニハ、嬪子ニ作ル、未ダ就カ是ナルヲ知ラズ、

事を、殿道藤原にたび／＼聞えさせ給へれど、年をろにもならせ給ぬ、宮だちあまたおはします、宣耀殿子城こそまづさやうにはおはします、内侍のかみの御事は、おのづから心のどかになぞ、そうさせ給へば、いどけうなき御心也、此世をふさはしからず思ひ給へるなりなぞ、悉じの給はすれば、さはよき日してこそ宣旨もくださせ給べかなれと奏して、出させ給てにはかに此御事どもの御用意あり、何事もそれにさはり、日などのべさせ給べき御世の有さまならねば、二月十四日元長和にさせ給て、中宮子新と聞えさす、略中かゝる程に大殿の御心、何事もあさましきまで人の心の中をくませ給により、しば／＼参らせ給てこゝらの宮達のおはしますに、宣耀殿のかくておはしますいとふびんなる事に侍り、はやう此御事をこそせさせ給はめど、そうさせ給へば、略中四月廿八日、元長和后にゐ給ひぬ、皇后宮子城と聞えさす、略中内にも御ふくたちぬる月、略中月にぬかせ給て、冷泉院の御はてもせさせ給て、今は此事略中嘗會をいみじき事にのゝまらせ給

〔中右記〕嘉承二年十一月廿九日、今夕前齋院令子立后宣旨被下、是准母后儀、先日令入内給御東對也、殿下以下諸卿参入齋院御方、對東先勅使藏人頭爲房朝臣参上、於東中門下申事、由紀伊守有佐朝臣申之對南令敷座、高麗端帖上敷、西一枚、其前敷、殿下一枚、爲殿下御座、召勅使爲房参上、殿下令相逢給、被申事、由給藏人裝束、左卿衛取之、勅使下南庭二拜退下、人々皆諫、東也、次於東庇方被定立后雜事、權右中辨爲隆、在事了退出、然有此拜賀也、

諒闇立后例

昌子内親王 康保四年九月四日立、朱雀院女、冷泉院后、即位以前、

中宮藤妍子 寛弘九年長和元年二月十四日立、御堂藤原道長中女、三條院后、即位以後、

皇后藤娥子 同年四月廿七日立、大納言濟時女、三條院后同、

件三后諒闇之中立后、但非即位日、

聞えて、たゞ人にはえゆるさじともてあつかはれける程に^略中^略老のびて御せうそこ有て、かく
れつゝ参り給ひけるほどに、日にそへてたぐひなき御心ざしにて時めきたまふ程に、たゞなら
ぬ事さへおはしければ、御いのりおせろく^略まきまでかた^略せさせ給ふほどに、女宮^中願う
み奉らせ給へれば、めづらしきをばよろこびながら、男におはしまさぬをぞくちをしうおほし
めしけるに、又うみ奉り給へるも^中おなじまなれば、まめやかにくちをしうおほしめした
れど、さすがいかゞはせんにておはしますなるべし、^略中^略まばしはあの御方なぞ申ておはしま
し、程に、三位のくらゐをへさせ給て、この御事をのみたぐひなき御もてなしなれば、世の人な
らびなく見奉るに、又、たゞならぬとおはしませば、^略中^略いひしらぬ御いのりども有けるほどに、
保延五年にや侍りけん、つちのどのひつじのとし五月十八日、よになくけうらなる玉のをのこ
宮^中近うまれさせ給ぬれば、院のうちさらなり、世中もうごくまでよろこびあへるさまいはん
方なし、^略中^略かくて同七年十二月七日、御とし三にて位ゆづり申させ給ふ、ちかくは五なぞにて
ぞつかせ給へども、心もどなさにやすかやかにゐさせ給ぬ、御母女御殿皇后宮にたゝせ給、御と
し廿五にや、

諡閣立后

〔日本紀略^五〕^{冷泉}康保四年五月廿五日癸丑、巳時天皇^上村崩於清涼殿、九月四日己丑、以三品昌子
内親王爲皇后、故朱雀院皇女、卽有宮司除目、安和元年五月廿七日己酉、於朱雀門大祓依諡、閣也、
今日申一點、音奏御膳供、魚味、

〔榮花物語^日〕^十寛弘八年六月十三日御讓位、^略中^略一十月十六日御卽位、^略中^略三なり、^略中^略かゝる程
に十月廿四日、冷泉院うせさせ給ぬ、^略中^略世の中みな諡閣になりぬ、^略中^略はかなくて月日もすぎ
て、年號かはりて長和元年といふ、元三日のありさま、たゞならぬしかば、いかにめでたからまし、
たれこめて殿上にも出させ給はずなぞして、^略中^略内にはかんの殿子^中の后にゐさせ給べき御

即位前立后

讓位後立后

〔日本紀略五〕冷泉康保四年九月四日己丑、以三品昌子內親王爲皇后、故朱雀院皇女、略中 十月十一

日丙寅、天皇於紫宸殿即位、

〔長秋記〕長承三年三月二日壬子、以院羽女御勳叙從四位下、有准三宮宣旨、來八日可立后兼

宣旨、十九日可有宣命事云々、略中 大內記令明朝臣勅旨可用何例哉、太皇太后立后例未聞者、

隨仰可令左右上卿以內記令申關白、藤原關白又被申大相國、忠實各不案得無詳仰、令明重申

云、且前大相國仕三代朝奉公尤高、仍以娘子准后之由例載何事候哉、大相國可然之由答給云々、

十九日己巳、院立從四位下勳子爲皇后、宮後日源大納言光臨次談云、未時參內、略中大納言入門間、

藏人資信待向、傳勅云、皇后宮傳上、以今后可爲皇后宮也、而本皇后宮付可傳上、可爲太皇太后宮、

可皇太后宮、敕、件事可量申者、超令昇太皇太后宮事、外記官共申無例之由、但於明法者、以帝祖母可

爲太皇太后宮、由見令文者、皇后宮准上皇母儀立后也、爲當今祖母、有何憚哉、申云々、大納言被申云、

前例之條無指證文之時儀也、如法家申者、令文既顯然也、不可依例之有無、就中立后之後、准母儀、超

中宮爲皇后宮、且爲太皇太后宮、有何難哉、內大臣民部卿被申此旨云々、此後良久資信仰左大臣云、

以皇后宮母爲太皇太后宮、以從四位下泰子爲皇后宮之宣命、可令奏者、件人本名勳子也、而

依衆難被改奏字、叶愚意、

〔二代要記五〕後宮
皇后宮藤原朝臣得子、鳥羽院后美福門院、故權中納言太宰權帥長實卿女、太上天

〔續世繼三〕院羽にはいづかたにもうどきやうにてのみおはしなしいに、まのびてまゐり給

へる御方子、得おはしなして、やゝあさまつりごとも、おこたらせ給ふさまにて、夜がれさせ給ふ

事なかるべし、いとやむごときあきゝはにはあらねども、中納言長實藤原にて、御おやはおはしける

に、母きたのかたは、源氏のほり川のおどいのむすめにおはしけるうへに、だぐひなくかしづき

行職事勾勘後日所相談也、於先例者不分明云々、

〔増鏡十一今日の日座〕西園寺大納言○藤原の姫君、伏見后六月二日、正應入内あり、八日御ところ

あらはしとて、女御の君は、○中略かくて八月廿日、后に立給、

〔歷代皇紀後二條〕中宮藤原子 前太政大臣公孝女、母内大臣公親女、乾元元、八、廿八、爲女御、嘉元元、

九、廿四、册立、

〔續三宮傳〕東福門院、後水尾皇后御諱和子德川將軍太政大臣秀忠公御女、○中略元和六年六月十八日入内、十

六歲、同日女御宣下、寛永元年十一月十八日皇后宣下、

〔扶桑略記二十九〕永承六年六月廿四日、右大臣藤原朝臣教通三女女御、教子准三宮、開年官年爵封

戸千戸、一云、七月十日准三宮云々、○中略治曆四年四月十六日丁巳、立女御藤原教子爲皇后宮、

〔歷代皇紀後冷泉〕皇后藤原教子 教通三女、准三宮、後皇后希代例也、

〔女院記〕高陽院、藤原子知足院殿○藤原忠實御女、母從三位源師子、○中略長承二年六月廿九日、太上天皇鳥羽

マキル、年廿九、女御ト申、同三年三月二日、叙從四位下、准三宮、同月十九日皇后宮、年四

〔均光卿記〕寛政六年三月七日甲午、可有立后日也、准三后、秋子内親王、○光格后、寅剋著束帶早參、職事頭中將已下

參集、

立后次第○中略

宣命 大内記、是親作、運之、

現神止 大八洲國所知、倭根子天皇、我詔止、其萬宣布大命、遠親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞

食止 宣布、人倫正、計禮天下和、嫁婚姻時、平以須理怨女曠夫、無止奈常所聞行、幸故好迷、得氏王

化、成成、久願願欲、利、爾准三宮欣子内親王、者、誠莊婉婉、乃德備、利、依、氏皇后止、定賜、布、此儀、平悟、氏隨

法、爾供奉止、勅布天皇、我御命、平衆聞食止宣、

初爲准后後爲后

大進平時繼兼

權大進藤資定兼

同高經兼

少進平時基

權少進藤

大屬安倍資高

入夜節會始云々其後諸卿率參本宮夜未曙及事之終頭云々

〔五代帝王物語〕主上

深○後

草は建長五年正月三日御元服あり女御は大宮院后○後の御妹公參

らせ給ふもとは大宮院に候はせ給て御熊野詣の時も御參ありしを圓明寺殿實○藤を鐙にと

るべしとて日限まで定りたりけるを院嵯○後の御はからひにて俄に參らせ給へば引かへ目出

度事にてぞ有ける康元元年十一月に女御に參りて同二年二月に立后あり御年ははるかの御

あねにてぞおはします

〔五代帝王物語〕正嘉二年八月七日院の第六の皇子恒仁親王山○龜

春宮にたゝせ給ふ御年十歳是

も大宮院の御腹なり正元元年八月廿六日御元服同十一月廿六日春宮位につかせ給ふ御年十

一十二月廿八日即位の儀あり略○中新帝の女御には右大臣實雄公山の女京極院文應元年十一

月廿一日御褻の女御代に供奉して同十二月廿二日入内御年十六なり同二年二月立后ありて

候給ふ

〔仁部記〕弘長元年八月廿日庚戌今日女御子○藤原有立后中○龜山事節會可參仕之由先日爲藏人次

官奉行被仰下之間雖申領狀此間痢病所勞更發之間不出仕傳聞本宮事藏人佐頼親奉行云々宮

司除目

大夫源雅忠

權大夫藤隆顯

亮藤隆保

權亮藤公孝

大進藤頼親

權大進同高朝

同俊定

少進平資兼

權少進藤定世

大屬安倍資國

少屬中原職成

少屬中原國民

前中宮○藤原

信子

今夜即令轉皇后宮給云云宮司□□次第被轉上之由被宣下之不被載除目之由奉

即召頭辨手仲仰其旨了、申刻上達部分散、廿二日己巳、殿下、余著冠參内、寢殿御裝束了、透垣邊曳、幔幕云云、未曳以前罷出、延久元年有立后事、用件日記云云、有別記、

〔玉海〕文治五年四月三日癸亥略○中 今日戌刻自天王寺、定能卿傳院宣、余女子子○在入内事聞食了、假

雖他人令申、如是令申上、不可及異議、況無他人申事、早可致沙汰、又有宸筆勅撰、其趣惟同、歡喜之思、

千廻萬廻也、略○中 六年正月十一日丙寅、此日攝政太政大臣實○兼長女從三位任子有入内事十八、

十二、蓋依長保永久例行之、略○中 十六日辛未、取御插鞋納余辛櫃、又取御衾納御辛櫃、此日御書使、

主上渡御、女御宣旨、女官祿等也、先女房等著裝束、紅梅參之、略○中 四月十四日、此日立后兼宣旨也、

羽后後鳥勅使成經朝臣、余自取祿、略○中 廿六日己酉、此日冊命立后也、以女御從三位任子爲中宮、驥

子綱在別記、廿七日庚戌、立后第二日也、盃酌如常、廿八日辛亥、立后第三日也、又御書使、實明啓

陣還祿氏院參賀、廿九日壬子、今日雖可撤御裝束、依日次不宜、明日可撤之、

〔増鏡三衣〕寛喜元年になりぬ、此ほどは光明峰寺殿、道家又關白にておはす、この御ひすめ、河後端

子女御にまゐり給ふ、世の中めでたくはなやかなり、略○中 やがて后立あり、二月十六日、藤つぼわ

たりいゝめかしく住なし給へり、略○中 おなじ三年七月關白をば御太郎教實のおとゞにゆづり

聞え給て、わが御身は大殿とて、后宮の御おやなれば、思なしもやむことなきに、御子どもさへい

みじうさかへ給さす、ためしなきはせなり、

〔平戸記〕仁治三年八月九日己未、早旦頭辨來問今日事、今日女御結子、前右大、有立后事、後睦

大納言具實卿宣命使左衛門督顯親卿云々、節會了於御前、被行宮司除目、内辨候執筆云々、藏人方

事、左衛門權佐經俊奉行、本宮事右少辨時繼奉行、晚頭頭辨來訪宮司問之故實、不經程歸了、

宮司除目

中宮大夫藤公相兼

權大夫藤實藤兼

亮平時高兼

權亮源顯房兼

程にことゑは天元五年になりぬ、三月十一日中宮たち給はんとて、おほきおとゝ急ぎさわがせ給、これにつけても右のおとゝあさましうのみ萬さこしめさるゝ程に、さきたゝせ給ひぬ、いへばおろかにめでたし、大きおとゝのま給ふもことわりなり、帝の御心おきてを世人も目もあやに淺ましき事に申思へり、一のみこおはする女御子を註をおきながら、かくみこもおはせぬ女御子の后にぬ給ひぬるを安からぬ事に世人なやみ申て、すばらの后どぞつけ奉りたりける、
〔榮花物語三の後〕今年をば正暦元年といふ、正月五日内條の御元服させ給ふ、中二月には内大臣藤原道隆の大姫君子定内へ参らせ給有さまいみじうのゝしらせ給へり、中やがて其夜のうちに女御にならせ給ひぬ、中かゝる程に大殿藤原家の御心ちなやましうおぼしたれば、中五月八日出家せさせ給、この日攝政の宣旨内大臣殿かうぶらせ給、中攝政殿御けしき給はりて、まづ此女御、后にすゑ奉らんの騒ぎをせさせ給ふ、中六月一日后にたゝせ給ひぬ、
〔後二條關白記〕寛治七年正月廿三日辛丑、未刻民部卿來臨相逢、参高陽院之由相語云、中納言口口著冠直衣、殿下師實藤原御使参女御、子賴河后爲告申立后事、廿五日癸卯、未刻参高陽院殿下参六條院給候御共、自院御方参新院給、殿下御坐殿上、即参院御前、頃之殿出自御前御坐殿上、自懷中執出一紙、下給別當通大納言雅實給了殿下参内、其後被始殿上飲食、二獻頭辨三獻、右大辨黃昏程事了、引上達部等参内、左大臣右大臣頭辨勅使數座殿下圓座也、殿勅使西源大納言取女裝束給、勅使殿歸給於座、頭辨於庭再拜了、簀子數燈臺立、召陰陽師道時朝臣、令擇立后日時、付行家奉之、召行家令書定文如常、事了被召日時件勅文者、今夜出御日時也、廿七日乙巳、女御御出高陽院、其後今日有勅文云云、勅使延引之由有聞云云、二月十三日己未、戌刻於女御有勅使事如恒、鹿嶋使文覽、予聞見即下云云、廿一日戌辰、参高陽院、南庇二階之立樣所被沙汰、二階立西御屏風面東面也、其前立二階如常、有立后宣旨、有一兩日、今日依主上御衰日、已以延引、左大臣民部卿左大辨等被申定、當日早且可被行之者也、

皇太后章子内親王後一條院長女、母中宮臈子、

長曆年中入太子○後冷泉宮、永承元年七月十日爲中宮、治曆四年四月十二日皇太后、○節略

〔扶桑略記二十九條〕延久三年三月九日甲午、左大臣藤原師實朝臣、取左兵衛督源顯房卿息女實爲養子、爲養

子、令入皇太子○白河宮、

〔扶桑略記三十條〕延久六年六月廿日丙子、女御藤原賢子册爲中宮、

〔玉葉〕承元三年三月廿三日、此日故攝政前太政大臣○藤原長女、有入宮事、名立于生年十八、與余同

陽明門院○後朱雀、四月廿三日入宮、賢子中宮○白河、三月九日入宮、日月叶萬壽例、支于同延久跡、可

吉祥耳○中略、廿六日、早旦著直衣、參東宮○順德、御方即參御息所御方、即退出、歸一條亭、今日以下每

夜御息所昇給也、但無女房來召、并覓衾之儀、今日以後有御朝餉云々、

〔百練抄十二條〕建曆元年正月廿二日、有立后事、以藤原立子爲中宮、

〔女院小傳〕後京極院○順子入道大相國實兼三女、口口入太子○後醍醐宮、文保二、四、廿從三位、七月廿八爲

女御、元應元、八、七爲中宮、

〔扶桑略記二十四條〕延喜廿三年四月廿六日癸酉、女御藤原穩子立皇后、

〔日本紀略四十七條〕天德二年十月廿七日甲辰、策立女御從三位藤原朝臣安子爲皇后、即日任宮司、

○按ズルニ、穩子ハ、日本紀略、帝王編年記、一代要記、大鏡裏書等ニハ、中宮ニ作リ、安子ハ、扶桑略

記ニ爲中宮ト見エ、帝王編年記ニ、皇后藤安子云々、號中宮ト記ス、是レ當時中宮皇后相通ジテ

稱セシナリ、

〔榮花物語二條〕其多○元年、關白○藤原賴忠、殿の姫君○蓮うちち參らせ奉り給ふ、世の一の所におは

しなせば、いみじうめでたきうちに、殿の御ありさななとも奥深く心にくゝおはします○中略、只

今の御有様に上○略もまたがはせ給へば、おろかならず思ひ聞えさせ給なるべし○中略、かゝる

前爲女御後爲后

太子者誕而三月立爲皇太子神龜五年天而薨焉時年二天平元年尊太夫人爲皇后

〔續日本紀考證〕仁授正一位爲太夫人按神龜元年授正一位爲太夫人者聖武天皇母宮子嫺而

不比等公之女一爲文武夫人史不載年月無所考蓋宮子嫺光明皇后神龜四年十一月紀天平元年八月紀並書夫人而爲夫人也

正三位藤原夫人爲皇后此亦

〔續日本紀〕延曆九年閏三月丙子是日皇后崩中甲午中皇后姓藤原氏諱乙牟漏贈內大臣

從一位良繼之女也母尙侍贈從一位阿部朝臣古美奈后性柔婉美姿儀閑於女則有母儀之德焉今

上之在儲宮也納以爲妃生皇太子城賀美能親王嵯高志內親王及於卽位立爲皇后

〔村上天皇宸記〕應和四年四月廿九日辰刻使藏人文利間中宮兼令間產養否之由還來申伊尹朝臣

令申云自今曉寅刻計氣息雖通不可敢存坐更不可行他事中又遣文利間中宮已刻崩文利還

來申云中宮已崩加持僧等皆退下皇后是前右大臣師輔朝臣第一女諱安子母故出羽守藤原經邦

之女盛子也予上在藩之時以天慶三年四月配合爲儲貳之後同八年正月以太弟妃授從五位上

及子登帝位爲女御授從四位下厥後頻進級又授從三位天曆四年五月生男子以同年七月立爲皇

太子太子初謁見之日又授從二位至天德二年策命爲皇后以應和四年四月廿四日於主殿察應誕

生女兒今日已刻終于同寮時年三十八在后位七載

〔日本紀略一〕寬弘元年十一月廿七日丁丑以正四位下藤原妍子爲尙侍左大臣第二御息女中

七年二月廿日庚子尙侍藤原朝臣妍子初入東宮三

〔日本紀略三〕寬弘八年八月廿三日甲子召右大辨道方下女御二人宣旨一人尙侍從二位藤原妍

子中長和元年二月十四日壬子宣命尊皇太后中爲皇太后中爲皇太后女御

正二位藤原朝臣妍子爲中宮

〔十三代要略二〕後宮

〔神皇正統記後醍醐〕諱は尊治中御母は談天門院藤原忠子、内大臣師繼の女、實は入道參議忠繼の女なり、

〔歷代皇紀〕稱光天皇諱躬仁、改實仁、後小松院第一皇子、母光範門院儀同三司資教女、實贈左大臣資國女、

〔宣胤卿記別記〕文明十三年七月廿六日己亥、今日當今後土御門母儀准后信子長朝臣也、故和氣鄉成朝臣爲子、其後故保家朝臣、下、後又故大炊御門入道前内大臣、十三四年云々、後六月朔、朝臣、依當今母儀也、○下略

〔御湯殿の上の日記〕天正十四年十二月十六日、このへどの前久藤原ひめぎみ子○前くわんばく殿吉秀やうしに參られて、女御成後に御參り、御たる十かう十か參る、御くしわけ御さたありて、つねの御所にて三こん參る、まよこんはうそう、二こんかへに御ひら、三こんふな、御はいせん、すけ殿ながはし、いよ殿女御はいせん、女中御とをりあり、

初爲太子妃後爲后

〔日本書紀續十七〕八年正月、太子開妃春日皇女、晨朝爰出、有異於常、中太子恠問曰、今且涕泣、有何恨乎、下略

〔日本書紀安閑十八〕元年三月戊子、有司爲天皇納采、億計天皇女、春日山田皇女爲皇后、

〔日本書紀持統三十〕高天原廣野姬天皇、少名鷦野讚良皇女、中天豐財重日足姬天皇三年、適天淳中原

瀛真人天皇武爲妃、中天淳中原瀛真人天皇元年六月、從天淳中原瀛真人天皇、避難東國、中二

年立爲皇后、

〔續日本紀淳仁二十〕天平寶字四年六月乙丑、天平應真人正皇太后光武后崩、姓藤原氏、近江朝大織

冠内大臣鎌足之孫、平城朝贈正一位太政大臣不比等之女也、母曰贈正一位縣犬養橘宿禰三千代、

皇太后幼而聰慧、早播聲譽、勝實威神聖武皇帝儲貳之日、納以爲妃、時年十六、攝引衆御、皆盡其歡、雅

閑禮訓、敦崇佛道、神龜元年、聖武皇帝即位、授正一位、正一位、三位、誤、爲太夫人、生高野天皇及皇太子、其皇

〔百練抄^七〕久安六年正月十日、左大臣○藤原女○多入内、實權中納

〔續世繼^五〕大元、ふけの入道○藤原おとゝの御子は、法性寺のおほきおとゝ○忠つぎには宇治の

左のおとゝ頼長ときこえ給へりし○中この左のおとゝは、この系のみかぜの御時、女御たてま

つり給へりき、おはいのみかぜの右大臣公能のおとゝの三君を御子にし給ひてたてまつり給

て、皇后宮多子とぞ申え、その左のおとゝの北方○幸は、大炊御門のおとゝの御いもうとなれ

ば、そのゆかりに御子にま給へるなるべし。

〔續世繼^五〕近衛のみかぜの御時の中宮皇子と申しも、太政大臣伊通のおとゝの御む

すめを、この法性寺○藤原の御子とてぞ奉り給へる、此比九條院と申なるべし、まことの御子

ならねども、院號も關白の御子とてはべるとかや。

〔女院小傳〕九條院○藤原近衛后、太政大臣伊通公女、法性寺關白○藤原爲子、母權中納言顯隆女、久

安六、二十六、叙從三位○十九四月廿八爲女御、六月廿二爲中宮。

〔續世繼^三〕二條のみかぜ、申すは、この院○後のののみこにおはしなしき○中その御

は、左大臣有仁のおとゝの御むすめ○後河まことの御おやはつねざねの大納言におはす、

〔皇胤紹運錄〕六條院

母中宮○二育子○忠實大藏

〔増鏡^一〕おとゝの御門○土の御いみなは爲仁と申き、御は、は能圓はういんどいふ人の

むすめ、さいしやうの君○後鳥羽とてつかうまつられけるは、に、この御門むされさせ給ひて、

のちには内大臣通親の御子になり給ひ、す系には承明門院と聞えき、このおとゝの北のかたの

はらにておはしければ、もとより、のちのおやなるに、御さいはひさへひきいで給ひしかば、まこ

との御むすめにかはらず、この御門も、やがてかの殿にぞやしなひたてまつらせ給ひける、

子、實は大納言源顯房女也。

〔愚管抄^四〕宇治殿

○藤原頼通

は、年八十に成て、宇治にこもりゐて、御子の京極の大殿の左大臣

○藤原師實

とておはしけるを、内裏へ日々參せよ、さしたる事なくとも目をかゝず參りて、奉公をつとむべきぞと教へ申されければ、其まゝ參りて殿上に候ていで、／＼せられけるに、主上

○後三條

は常に藏

人を召て、殿上に誰々か候々と日に二三度もとほせおはしおしけるに、度毎に左大臣候と申て

日比月比になりける程に、或日の夕に御尋有けるに、又左大臣と申けるを、是へといへど仰の有

ければ、藏人參りて御前の召し候と申ければ、めづらしき事かな、何事を仰あらんずるにかと思

して、心づくろひせられて、御裝束引つくろひて參られたりければ、近くそれへと仰られて、何と

なき世の御物語どもありて、夜もやう／＼更行ける終つかたに、みむすめやもたれたると仰出

されたりければ、ことやうに候女

○賢子

のわらは候と申されけり、我むすめにはなかりけるを、師

房の大臣の子の、顯房のむすめを乳のうちより子にしてもたせ給へりけるなり

○中略

これをき

こしめして、さやうのむすめもたらば、どく／＼東宮へ參らせらるべきなりと仰られけるを、うけ給はりかしこまりて御前を立て、世間もおぼつかなかりつるに、今はひしと世は落居ぬるといそぎ宇治殿にきかせ參らせんとおぼして、内裏より夜更てやがて宇治へ參られければ、○中略いかにも事ありとおぼして、いかに／＼何事ぞと仰られければ、日比仰のごとく、參内日をかゝすつかうまつり候つるほかに、○中略むすめあらば東宮へ參らせよといふ勅定を、眼前にうけ給は、候つれば、急ぎ參りて申候也と申されければ、是を聞せ給ひて、宇治殿はさうなくはら／＼と涙を落して、世の中のおぼつかなかりつるに、あはれ猶此君はめでたき君かな、どく／＼出立て參らせられよとて、ひし／＼とさたありて、○東宮に申は、白河院なり、東宮の女御にまゐらせられにけり、位につかせ給ひては中宮と申、立后ありて今に賢子の中宮とて堀河院の御母是なり、

〔五代帝王物語〕同年弘長六月十四日、左大臣公相、今出の女今出、女御にまゐり給ふ、御歳九なり、大宮院后、御子にせさせ給ふ。御母は徳大寺の大相國公實基の女なり、八月廿日立后、

〔續世繼初一卷〕元長曆の七日、關白左のおと頼通、宇治のおはきおと頼通、おはしまし、女

御たてまつらせ給ひかゞ朱の御あに、おはしまし、式部卿親王の御子の女子きみ頼の、

むらかみの中つかさの宮親王の御むすめの御はらにおはせしを、關白殿御子にまたてまつ

り賜て、女御に奉り給へるなり、一條院の皇后宮子定のうみたてまつり給へりし一の御子にお

はしませば、春宮にもたち給べかりしを、御うしろみおはしまさすとて、二のみにてせむだい、

一後三のみにてこのみかゞ朱ふたりみだうのむまを、關白の御おひにおはしませば、うち

つゝきつかせ給へるなり、かの一條院の皇后宮は、御せうどのうちのおと伊藤藤原の、つくしに

おはしまし、事どもにおもほしなげかせ給て、御さまかへさせ給へりしちに、式部卿の御子、

をうみ奉らせたまへるなり略中、その式部卿の御子の御むすめにおはしませば、みかゞにはめ

ひにあたらせ給へり、かくてやよひのついたらに、ささきにたゝせ給ぬ、

〔愚管抄四〕この敦康親王の母は、道隆關白の女にて、たゞの親王にて、位は思ひもよらず、されど御

前は又具平親王の御女にてありければ、宇治殿頼通の北政所をば、高倉の北政所と申にや、あ

さましく命ながくて孫までおはしけり、この北政所の弟にて、この敦康の御前にておはしけれ

ば、其御女にて、姫子の中宮はおはしますによりて、宇治殿の子にして、姓も藤原氏の中宮にて、入

内立后も有けるなり、

〔扶桑略記後三十九〕延久三年三月九日甲午、左大臣藤原師實朝臣取左兵衛督源顯房卿息女賢爲

養子、令入皇太子河白宮、

〔扶桑略記三十一〕延久六年承保六月廿日丙子、女御藤原賢子冊爲中宮、右大臣藤原朝臣師實之猶

鳥羽院はをさなくおはしなしける時、ひあひなることなぞもありて、瀧口が顔に小弓の矢射たてなぞさせ給ふと人もしりけるを恐れ給ひけるにやなぞぞ人は申ぬる、又公實のむすめ子璋を御子にしてもたせ給たりけるをば、法性寺殿○藤原忠通をむことらんとおぼしめして、すでにそのさたありける程に、日なみなせえらばるゝに及びたりけるが、まかるべくでさはりおほくいでさいでさしていまだどげられざりける程に、知足院殿むすめをえまゐらせじと申されけるに、あたに御はらだちて、待賢門院をば、法性寺殿の儀をあらためて、やがて入内ありけるとぞ、鳥羽院は、あやにくにおどなしくならせおはしなしては、殊にめでたき御心ばへの君におひなりてこそはおはしなしけれ、さて白河院は、かの公實のむすめをとりて、御子にしてもたせ給へりけるを、鳥羽院に入内立后してぞおはします、待賢門院と申はこれなり、

〔玉海〕承安元年十二月十四日甲寅、此日院姫君入内也。○中女御云、其衣濃蘇芳云、入道相國清盛平女、法皇○後白河御養子、永久例云々、但彼者自誕生之昔撫育之禮、隨又主上御孫也、仍於儀無妨、今度已可

爲姊妹歟、尤以有忌如何、二年二月十日己酉、此日有冊命皇后事。女御權子爲中宮

前後養子爲后

〔中右記〕寛治五年十月十九日、殿下○藤原忠實初令參陽明門院。○後朱雀皇后給是依女御入内之事也、

廿五日庚辰、有三品篤子内親王○鳥羽后入内之事。是後三條院第四女、母贈太女藤茂子、太上皇

使、右近少將藤原實朝臣○中略及亥剋寄御事、系毛女房車十輛、植女房十八人、合廿八人、前所殿上人皆參、其後公卿殿

上人有饗饌之事。○中略

今夜女房御使、掌侍源盛子源賴朝朝臣姫也有祿、女裝束、御衾役、殿下北政所、凡入内之儀、一事以上關白

殿令御沙汰也。○中略

十一月二日丙戌、女御入内之後、有三夜餅事、件餅民部卿所被調進也、

〔帝王編〕年記十九中宮篤子内親王後三條院第四皇女、寛治七年三月廿二日立后

憂之、走幣群神、祈請百端、后勸帝、錄囚徒、廢作役、未及終、朝渴、雨晦、合帝、逾加愛焉云々、

〔十三代要略〕後一皇_後后_尊、順子_{三條院第三女、母皇太后、姁子、萬壽四年三月廿二日入太于宮、長元十年二月十三日爲皇后、}

〔扶桑略記〕二十九永承元年七月十日戊子、章子_{後冷泉}內親王立中宮、後一條天皇長女、母前中宮藤原威子也、

〔續世繼〕_{藤四}馨子の内親王と申も、又おなじ_子○威_子御はらにおはします、長元四年に加茂のいつき

にて、同九年に出させ給ひて、永承六年十一月、後三條院東宮におはしまし、女御に參らせたまひき、御年二十三、延久元年七月廿三日、皇后にたち給、

〔續世繼〕_{虫三}の_尊永治元年十一月にや侍けん、かのどのどりのとし、又ひめ宮_{鳥羽皇}六條殿にて

うみ奉り給へりし、二條のみかど春宮と聞えさせ給し時、保元二年の頃、みやす所ときこえさせ給て、みかど_條位につかせ給しかば、平治元年二月廿一日、_{廿六日、今改}中宮ときこえさせ給

しに、永暦元年八月十九日御なやみて、御くしおろさせ給、

〔女院小傳〕宣政門院_{權子院}○光_后後醍醐女、母京極院、

〔續三宮傳〕承秋門院_{東山后}有栖川一品兵部卿幸仁親王御女、元祿十年二月廿五日、入内_{十六}同日

女御宣下、寶永四年五月三日准三宮、同月十八日、内親王宣下、同五年二月廿六日、中宮宣下、_略〔節

〔執次詰所記〕欣子_{後桃}内親王_{女、光格后、皇}

安永八年正月廿四日降誕、號女一宮、_中寛政三年六月卅日、依先帝遺詔、可被立、皇后被仰出、同

十二月四日、御齒黒始、同五年十二月廿四日、准后宣下、_降同六年三月一日、入内_{十六}同六日、御退

去于仙洞、同七日、立后奉稱中宮、被行節會宮司除目等、本宮_{仙洞被}自今稱中宮、

〔愚管抄〕_四鳥羽院位のはじめに后だちあるべきに、知足院殿_{忠實}のむすめをまゐらせよと仰

ありけるを、かたく玄してまゐらせられざりけり、人これを心得ずおもひけり、これを推するに、

之名嗟夫可不愴歟請立手白香皇女納爲皇后遣神祇伯等敬祭神祇求天皇息允答民望天皇曰可矣三月庚申朔詔曰神祇不可乏主宇宙不可無君天生黎庶樹以元首使司助養令全性命大違憂朕無息披誠款以國家世々盡忠豈唯朕日歟宜備禮儀奉迎手白香皇女甲子立皇后手白香皇女脩教于內遂生一男是爲天國排開廣庭尊明欽

〔日本書紀十八〕元年三月戊子有司爲天皇納采億計天皇女春日山田皇女爲皇后更名山田女赤見皇女

〔一代要記一〕後宮宣化

皇后橘仲皇女仁賢女天皇元年三月己酉立

〔永鏡中〕敏達の御門敏達天皇と申き欽明天皇第二の御子御母宣化天皇御女石姬皇后也

〔日本書紀二〕敏達四年正月甲子立息長眞手王女廣姬爲皇后十一月皇后廣姬薨五年三月戊子

有司請立皇后詔立豐御食炊屋姬皇女尊爲皇后欽明

〔日本書紀二十〕元年正月壬子朔立穴穗部間人皇女爲皇后

〔日本書紀二十三〕二年正月戊寅立寶皇女敏達皇子押坂彥人兄皇子子茅渟王女爲皇后

〔日本書紀二十五〕大化元年七月戊辰立息長足日廣額天皇舒女間人皇女爲皇后

〔日本書紀二十七〕七年二月戊寅立古人大兄皇子女倭姬王爲皇后

〔續日本紀三十一〕寶龜元年十一月甲子詔曰現神大八洲所知倭根子天皇詔旨止宣詔旨平親王王

臣百官人等天下公民衆聞食宣朕以幼弱身悉鴻業氏恐利畏進毛不知爾退毛不知爾所念波慶使

御命自獨能夜受給武所念氏奈毛法能麻爾麻以井上內親王定皇后止宣天皇御命衆聞食宣

〔三代實錄三十五〕元慶三年三月廿三日癸丑淳和太皇太后崩略太后諱正子嵯峨太上天皇之長

女與仁明天皇同產也母太皇太后橘氏后美姿顏貞婉有禮度存母儀之德中表則之太上天皇太皇太后甚鍾愛之淳和天皇備禮娉之納於掖庭寵敬兼人天長四年二月立爲皇后八年元旱爲災帝深

卅人節別各限二箇日給食人別日飯米二升餘節准之

右三節料依前件一度請受節別分供但射禮料用此內又十八日賭射辨備肴物給王卿及近衛次

將等○此下五月五日、七月七日九月九日節料略

攝貴族

〔日本書紀神武三〕庚申年八月戊辰天皇當立正妃改廣求華貴時有人奏之曰事代主神共三嶋溝ミヅノミヅ概耳神之女玉櫛媛所生兒號曰媛蹈躡ヲノヲノ五十鈴媛命是國色之秀者也天皇悅之九月己巳納媛蹈躡五十鈴媛命以爲正妃辛酉年正月庚辰朔天皇卽帝位於橿原宮是歲爲天皇元年尊正妃爲皇后

皇族爲后

〔日本書紀懿德四〕二年二月癸丑立天豐津媛命○安事皇子爲皇后

〔日本書紀孝安四〕廿六年二月壬寅立姪押媛○孝昭皇子爲皇后

〔日本書紀崇神五〕元年二月丙寅立御間城姬○孝元皇子爲皇后

〔日本書紀垂仁六〕二年二月己卯立狹穗姬○開化皇子爲皇后

〔古事記開化〕若倭根日子大毘毘命○開化皇子爲皇后坐春日之伊邪河宮治天下也此天皇○中又娶九邇臣之

祖日子國意祁都命之妹意祁都比賣命○意祁都三生御日子子坐王○中日子坐王○中又娶春日建

國勝戶賣之女名沙本之大關見戶賣生子○中次沙本毘賣命亦名佐波遲比賣○此沙本毘賣命者爲

后

〔日本書紀垂仁六〕十五年八月壬午朔立日葉酢媛命爲皇后

〔古事記垂仁中〕此天皇○中又娶旦波比古多多須美知能宇斯王女米羽州比賣命

〔日本書紀顯宗十五〕元年正月是月立皇后難波小野王○允恭曾孫敎天下○難波小野王雄朝津間稚子宿禰天皇

〔日本書紀仁賢十五〕元年二月壬子立前妃春日大娘皇女爲皇后○春日大娘皇女大泊天皇嫡孫也

〔日本書紀繼體十七〕元年二月庚子大伴大連奏請曰臣聞前王之宰世也非維城之固無以鎮其乾坤非掖

庭之翼無以繼其趺躄是故白髮天皇○清無嗣遣臣祖父大連室屋每州安置三種白髮部以留後世

二 別
領巾四條料紗三丈六尺^{別九尺}
絲四銖^{別一銖}
表袷裙二腰^{白一腰夾一腰}^{白一腰夾一腰}
料絹二疋一丈^{別一疋五尺}
絲一

分二銖別四銖 同腰料絹一丈別五尺 絲二銖別一銖 一下裙二腰白 料白絹二疋一丈別五尺 一疋 絲一分二銖別四銖

同腰料絹一丈^{別五} 絲二銖^{別一} 袴十五腰^紅 料絹十二疋三尺^{別五} 絲一兩三分三銖^{別三} 單袴廿腰

紅料絹八疋五丈，尺別二寸六分絲一兩二分四銖，銖別二袷衣、單袷衣、各三領、料絹五疋三丈七尺五寸，給正

一丈五尺，單別，絲二分，別四，被六條，三寸，減三寸，料絹十一疋二尺四寸，別一疋五寸，綿六十屯。

別十
 絲一兩二分
 別一分
 樨三條
 料絹五疋
 別一疋
 綿十五屯
 別五屯
 絲一分三銖
 別三銖
 御匣殿料
 絹十疋
 綿

卅屯。○此下夏秋
冬御衣略

右四季御服、並依前件、每年依數從內藏寮受之、准例染縫、臨時定色月別一日十六日兩般、均分供進、若

數不等者上般加之

大炊十五 凡供御

凡供御料稻粟並用官田。中宮東宮齊宮亦同。但齊宮者在京之間供之。其春得米一束二把五升。糯米亦同。一人日春三束。但囊充內。

膳司、其眷米女丁八人、御井中宮各三人、東宮二人、

中宮雜給、日別六升米、磨四斗平飯料、飯

〔延喜式三十九〕諸節供御料。中宮亦同。下皆准之。

正月三節

米三斗、糯米四斗六升五合、糯稻十五

四合大豆三升三合小豆二升四合清酒濁酒酢油各一斗五升醬三斗鹽六升東鯊八斤四兩隱岐鯊

十一斤一兩，養堅魚四斤二兩，螺四斤三兩，紫菜一斤，干薑一斤，棗子三升，搗栗子九升，生栗子六斗四

升二合干柿子六連椎子六升、菱子三升、橘子卅六蔭梓橘子十五枝、掇橘子一斗、長櫃五合、熬塢十八

口竹三國料理所炭十二石薪一千八百斤供奉膳部卅人膳人御十各給紺布衫一領膳三節其下番膳

供給

〔徳川禁令考^二案〕享保五庚子年二月十四日ノ令、女院^幸子女王崩御ニ付、鳴物三日停止、普請ハ不苦、

〔令義解^略〕凡食封者^{○中}中宮湯沐二千戸、

〔續日本紀^{二十}〕天平寶字四年六月乙丑、天平應真仁正皇太后^{○聖}崩、姓藤原氏、^{○中}天平元年、尊

太夫人^{○太}人^{○天}爲皇后、湯沐之外更加別封一千戸、

〔日本紀略^五〕冷泉、康保四年九月廿三日戊申、今日充中宮^子、^{○昌}御封千五百戸、

〔榮花物語^浦〕の別、宮の御前^后定^一一條の御内參りのこと、そのかし啓しつるにぞ、思したゝせ給

へる、明順道順よろづにそゝぎ奉る國々の御封なぞめし物すれど、ものすかやかに辨へ申人も

なければさるべき御莊なぞぞ、絹奉らせんなど案内申人ありければ、きぬめしてよろづにいそ

がせ給ふ^{○中}中宮には、三月ばかりにぞ御子生れ給べき程なれば、御慎みをよろづに思せど、殊

に御封なぞすがしくしう辨えへ申人なし内藏づかさより例のさまの御具どももてはこ

び、女院なぞよりも萬おぼしはかり聞えさせ給へば、それにて何事もいそがせ給ふ、

〔續三宮傳〕新清和院^光皇后^格帝、寛政六年三月七日、立皇后同日御領三千石被定進^{○略}、

〔延喜式^{十三}〕中宮、凡毎月晦日、進錦鞋三兩、但難給料臨時定之、

凡毎月十一日、請來月料米一百斛、^{白五十石、}

〔延喜式^{十四}〕中宮、

春季

正月料、^{二月}三袍十領、^{白一領、}作目料、^{白絹}四疋一丈、^{別二丈}絲一兩一分、^{別三}背子十領、^{白一領、}白料絹五疋、^{別三}絲一兩一分、^{別三}單衣十領、^{白一領、}蒲萄二領、^{藍二領、}蘇芳料絹二疋五尺、^{別一丈二}絲三分二銖

〔三代實錄三十三〕元慶元年二月廿二日甲子、掌侍從五位下春澄朝臣高子、改名給子、以中宮。母后陽成。
原高諱也。○中略。 閏二月七日己卯、正五位下安倍朝臣高子、改名基子、外從五位下葛木宿禰高子、改

名賀美子、以中宮。諱也。

〔續世繼一〕中宮。○後朱雀后藤原。又のとしもおなじやうにまかり出させ給て、丹後守ゆきたふの

ぬしの家にて、長暦三年八月十九日、猶女宮子。○藤原み奉り給て、おなじき廿八日にうせ給にき、御

年廿四、あさましくあはれる事かぎりなし、いと秋のあはれそひて、有明の月のかげも心を

いたましむるいろ、ゆふべの露のしげきも涙を催すつまなるべし、かくて九月九日に、うちより

故中宮の御爲に、七寺にみず經せさせ給ふ。みかど。○後御ふく奉りて、廢朝。とて清涼殿のみすお

ろし。こめられ、日のおもの参るも、こゑたてゝそうしなせざることもせず、よろづまめりたるま

まには、ゆふべのはたるをもあはれとながめさせ給秋のとし火かゝげつくさせ給つゝぞ、心

くるしき折ふしなりけるに、廿日ぞ解陣とかいひて、よろづれいさまにて、御殿のみすなどもま

きあげられ、すこしはるゝけしきなりけれど、なほ御けしきはつさせずぞみえさせ給ける、神無

月もすぎぬれば、御いみ末になりて、かのうせ給にし宮にて御佛事あり。○中略。まも月の七日、内

にははじめてまつりごとせさせ給。○中略。又のとし、元長の七月七日、關白殿。○藤原賴通。父に、うち

より御せうそこありて、

こぞのけふわかれし星もあひぬなりなごたぐひなき我身なるらん、じよませ給て侍りけん

こそ、いとかたじけなくなさけおほくおはしませしける御事かなどうけたまはりしか、

〔台記〕天養二年八月廿二日乙未、西剋待賢門院藤原。○鳥羽后崩、三條高上皇鳥羽。先之坐同所、病急告法

皇、即幸臨終、法皇打磐哭、泣然後群臣哭、廿三日丙申、待賢門院先入棺、次幸仁和寺三昧堂、其儀如

生、但群臣皆步行、即安置石穴云云、廿七日庚子、傳聞法皇著服。○其色黑。

領五位綿一連亮唱四位五位名賜之

五位以上令女藏人賜之若亮有闕臨時權任同日早朝中務省召職司給次侍從已上見參即別錄四位已上名簿進內侍

備令辨物三

〔延喜式〕十三同日二日受女官朝賀

其日內侍仰闌司置版位於殿上及殿庭

版位十枚方一尺內親王以下女官命婦以上以次入立於殿上闌

司引六位以下以次入立於庭爲首者當御前跪賀內侍進承令退隨便而立稱令旨再拜訖退出先是

內侍令諸司鋪座立臺盤女御以上先著座次尙侍以下四位以上次內外命婦北面次闌司引六位以下

北面列座昇殿者留著座不昇殿者退出饗宴訖賜祿妃白褂衣一襲夫人內親王各白褂衣一領三位

三位以上妻四幅被一領女孺之中給折櫃食百合祿調綿二百屯

事見式

〔延喜式〕四伊勢大神宮凡王臣以下不得輒供大神幣帛其三后皇太子若有應供者臨時奏聞

〔續日本紀〕四延曆九年閏三月丙子有勅度二百人出家又左右京五畿內高年鰥寡孤獨疹疾不能

自存者普加賑恤並爲皇后乙藤原不豫也是日皇后崩丁丑天皇移御近衛府以從二位藤原朝臣

繼繩正四位上神王從四位下常麻王從五位上氣多王從五位下廣上王正四位上紀朝臣古佐美從

四位下石上朝臣家成藤原朝臣雄友藤原朝臣內麻呂正五位下文室真人那保全從五位上藤原朝

臣黑麻呂桑原公足味阿部朝臣廣津麻呂外從五位下高篠連廣浪中臣栗原連子公爲御葬司六位

已下官八人正三位藤原朝臣小黑麻呂正四位下壹志濃王從五位下大庭王從四位下藤原朝臣菅

繼文室真人高嶋正五位下文室真人八多麻呂藤原朝臣眞友從五位下文室真人八嶋藤原朝臣眞

鷲爲山作司六位已下官十二人從五位下多智比真人賀賀外從五位下林連浦海爲養民司六位已

下官五人從五位下巨勢朝臣嶋人丹比宿禰眞淨爲作路司六位已下官三人差遣左右京五畿內近

江丹波等國役夫令京畿七道自今月十八日始素服舉哀以晦日爲限

○中

甲午參議左大辨正四

位上紀朝臣古佐美率誅謚曰天之高藤廣宗照姬之尊是日葬於長岡山陵

〔儀式^六〕正月二日朝拜皇后儀

當日早朝掃部寮設式部省輔已下座於縫殿寮東道○中已刻省丞已下列立於寮南道南面上于時史

生執簿唱列五位以上隨唱稱唯列立同道南邊先是參議已上省掌趨進云大夫等參進二聲五位已

上以次參入錄立明平門內稱省止列立玄暉門外南面上次丞錄率六位已下刀禰入列立五位之後省掌且次彈

正忠已下在式部次立定時典儀云再拜贊者承傳親王已下再拜訖職大夫出就版位賀壽者進自列

南向稱壽日儀式元復列職大夫參入令內侍啓即參入奉令旨退出傳宣大夫退出就位宣令旨親王及

群臣稱唯拜訖大夫參入典儀曰再拜贊者承傳王公百官再拜訖以次退出

〔延喜式^{十三}〕二月〇正受皇太子朝賀

其日早朝職官設皇太子版位於常事殿口西面口南差退設司賓位又南退設司贊位口口口司賓

引太子入立定司贊唱再拜太子再拜司賓引太子到東墮太子昇自口口口賀訖俛伏興引降復位

內侍進承令降詣太子前東面稱令旨太子再拜宣命訖又再拜司贊唱再拜太子又再拜司賓引太子

出事見儀式

〔延喜式^{十三}〕同日〇正月早朝受群臣朝賀

同日早朝所司舖設於玄暉門外西廊親王以下諸王五位於廊下南面式部置典儀位於同門東差東北退設

贊者位並西面南上設職大夫位於門西南面依時刻式部引五位以上六位以下列於同門外南面典

儀曰再拜贊者承傳群官俱再拜職大夫出就位爲首者進南向跪稱賀詞訖復位群官俱再拜職大夫

入申內侍內侍奉令旨傳宣大夫奉令旨退出就位南面傳宣群官稱唯再拜訖退出但中務輔引次侍

從以上著座于時內侍一人率女藏人三人納祿物於櫃二合令持職舍人四人置廊下上東自親王座

史綿六百屯受大祿省置廊下掃部寮亮進屬各一人史生二人侍賜祿所所司事訖賜祿親王以下大納言

以上各白褂衣二領中納言三位參議白褂衣一領非參議三位并四位參議褂衣一領四位小褂衣一

亮 位 姓

右春官坊啓式奉令後注啓官位姓

〔令集解二十八〕釋云名例律云稱乘輿車駕及御者太皇太后皇太后皇后並同

〔律疏〕六議

一口議親謂皇親及皇帝五等以上親及太皇太后皇太后四等以上親也太皇太后者皇帝祖母也皇后三等以上親

〔律疏〕名例

凡六議者犯死罪皆條所坐及應議之狀先奏請議議定奏裁此名議章六議人犯死罪者皆賢能應議之狀先奏請議議者原情議罪定刑之律而不正決之原情議罪者謂原其本情議其犯罪依令於官集議議定奏裁議者原情議罪定刑之律而不正決之原情議罪者謂原其本情議其犯罪故之內惟云惟犯依律合死不流罪以下減一等其犯入虐者不用此律流罪以下犯入虐者死罪不得上取正言統斬故云不正決之流罪以下減一等其犯入虐者不用此律流罪以下犯入虐者死罪不得上議流罪以下不得減罪故云不用此律

〔儀式〕六元正朝賀儀略○中

辰一刻乘輿出自建禮門御大極殿後房少時皇后亦入後房自此以下左右近衛次將各一人率將監

將曹府生各一人近衛各卅人左右兵衛尉已上各一人率志府生各一人兵衛各卅人更還自此以下

後注後訖女孺十八人執翳三行就戶前座以兩案帳內親王二人威儀命婦四人各著禮服相分以次

就座○中皇帝服冕服就高御座命婦四人以上親王以下五位以服禮服分在御前至御座下立御座

定引還後御前皇于時殿下擊鉦鉦三下皇后服禮服後就座○中皇太子再拜略王公百官再拜

〔儀式〕六元日御豐樂院儀略○中

掃部寮敷御座於高御座殿西第二間南面設皇后座○中內膳司預辨供皇帝皇后御饌主膳監供皇

太子饌大膳職設次侍從以上饌○中皇帝受群臣賀訖遷御清暑堂少時御豐樂殿皇后出御亦如常

儀諸衛服上儀

〔令義解^七式〕太皇太后、太皇太妃、太皇太夫人同、皇太后、皇太妃、皇太夫人同、皇后、

右皆平出、謂平頭抄出、即下條當時天子及國

中宮、御、御斥、至尊、謂一人也、三后亦准此、凡明神御宇如此之類、非是、說一人、故不可後平、其闕字之號、若當行上者不可闕之、猶多平出、殿下、

右如此之類並闕字

○按ズルニ此文以下律疏六議ニ至ルマデハ、三后ニ宜レル文ナリ、篇中皇太后宮、太皇太后宮ノ條ニハ、畧シテ載セズ、重複ヲ厭ヒテナリ、

〔令義解^七式〕皇太子令旨式、三后亦准此式、

令旨云々

年月日

奉令旨如右、令到奉行、

大 夫 位 姓名

亮 位 姓名

右受令人、宣送春宮坊、春宮坊覆啓訖、留畫日爲案、謂准勅旨式、更寫一通施行、或送太政官、啓式、三后亦准此式、

春宮坊啓

其事云々謹啓

年月日

大 夫 位 姓名

亮 位 姓名

奉令依啓、若不依啓者、即云、令處分云々、

宰相加赤綬侍從 大相府御祿大夫執奉、鷄鳴公卿退出、

〔孝亮宿禰記〕寛永元年十一月廿八日己卯、今日立后、○後水尾后 被行片節會并小除日、○中 廿九

日庚辰、參一條殿并兩傳奏、令申昨日之御祝儀、就立中宮之儀、自江戸大御所○德川秀忠 御使吉良少將、

御大刀馬代銀千枚、自大樹○德川家光 御使大澤少將銀千枚進上云々、自甲斐、尾張○德川義直 紀伊○德川賴宣

等中納言殿銀五十枚宛、自水戸宰相○德川綱房 三十枚有進上、十二月四日甲申、御樽一荷御着三

種進上中宮御所、兩局同道祇候、八日戊子、立后節會御訪方可書立之由、自傳奏中院有命今日局

務以下人々三十許來入、各令沙汰、

〔季運宿禰記〕寛永元年十二月五日、自妻許三荷三種進上中宮御所、又杉原十帖進權中納言局、

〔萬天日錄〕天和三年正月十八日、松平讃岐守被召也、儲君御方へ○東山 奉宮、女御御方へ○豐原房 子中

宮之宜下有之、爲御祝御使京都へ可被遣之候間、可致用意之由、筑前守被申渡之、老中之面々列座

也、○中略 二月廿日、春宮中宮宜下相濟之間、昨日注進之、依之諸大名今日登城、

〔妙法院日次記〕天和三年二月十四日、今日准后○藤原房 中宮宜下也、十五日爲立后御祝儀一荷○藤原房 大

二種○中略 被進之、禁中へも右同斷被獻也、○御使坊官 十六日、今日行啓始のよし也、○中略 十七

日、行啓御祝義として、昆布一箱被獻禁中へも右同斷御獻上、○御使坊官 一從兩傳來口上覺、

明十八日午之刻、東宮様へ院家衆御禮御座候間、此旨可被相達候、中宮様にも御勝手次第御悅可

被仰上旨ニ御座候也、以上、二月十七日、

廿四日、中宮より御使來、去頃御祝義被進候爲御返禮、一荷三種來也、

〔令義解六儀制〕凡皇后皇太子以下率土之内於天皇太上天皇上表同稱臣妾名對揚○謂凡臣下面

及太皇太后皇太后皇太后皇太子、相稱之辭不見、○自名者、唯稱某甲、不稱臣某、其太皇太后皇太后、於天皇太上天皇、皇后皇太子、於太皇太后皇太后、率

土之内於三后皇子上啓、稱殿下、自稱皆臣妾、對揚○謂名、

待遇

〔扶桑略記〕二十九治曆四年戊申四月十六日丁巳立女御藤原朝臣歡子爲皇后宮但無宣命以宣旨立之關白致通朝臣之女也母前大納言藤原公任女也

○按ズルニ立后ニハ必ズ册命アリ今宣旨ヲ以テセシハ異例ナリ

〔北山抄〕立后事略中王卿侍從相引參賀彼宮后宮

〔江家次第〕立后事

公卿相率參彼宮令亮奏慶由歸來曰聞食悅給或曰聞食ツ皇后著御倚子白織御唐衣白羅御裳公卿參

入列立再拜四位侍從以下可在後列訖退出亮告有儲由公卿著座對母屋東西對座大臣高上納言以下五位侍從著中御門北廊座次坏酌兩三巡長曆元年開白動盞二次居汁物追物等如恒執政手具四位或亮奉諸衛將佐著同廊座次居粉熱三獻居飯

次穩座圓座敷寢殿簀子上達部進著召人著砌下預敷其座敷居突重大勸坏或公卿次御遊先取出次二獻

次給祿殿上四位五位取之先參但執政祿或大夫執之付前斯大臣白大褂一重參議白大褂一領三條一領次侍從四位

白絹五位黃絹諸大召人絹四位以下取之

〔小右記〕天元五年三月十一日癸卯參殿次參內今日以女御從四位下藤遵子立皇后略中參中宮同車

以左中辨懷遠令啓慶由大進少進等如之入自中門於西對異邊拜禮此間左大臣以下參入以余被啓公卿

拜禮間皇后理髮白御衣白簪著給白御裝束著給倚子云云典侍恭子理髮云云上達部參入者被仰

云聞食者左大臣以下侍從進庭中拜禮了著西對座先是將殿御座外以燈臺炬燈此其儀以東廂爲

公卿座東面廂敷高麗端疊其上敷茵圓座等右大將之皆四位侍從座在南庇敷五位侍從座在南

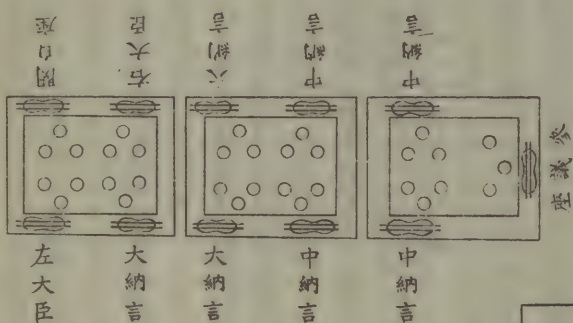
廊諸大夫座在本藏人所殿上人座本藏人所宮侍座本侍所左右近衛左右兵衛在門內左右衛門在

門外皆用平張上卿座定立机公卿兩三依座席狹假召圓座敷東頭座對大夫濟時勸盃一巡之後大相

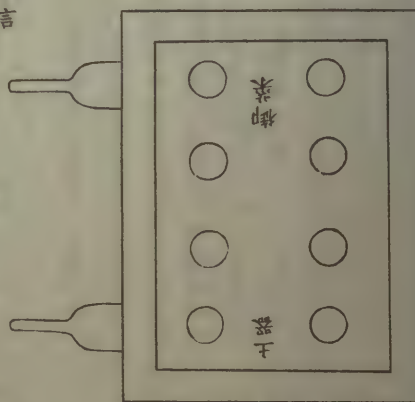
府出著座御座公卿座上東即立机下官獻盃大相獻次居飯須先居粉熟而不儲云云次右中辨獻盃

亦遞勸盃數巡之後宮司納侍從祿於韓櫃昇出庭前中務少輔致時朝臣唱見參此間公卿給祿大相二位

膳ノ二膳
御膳ハ汁ハ物ヲ云
ナ



膳ノ二膳、佐食、酒



此臺盤ハ朱塗ナリ、互ニ向合テ食之陣ノ座ノ儀ノ如シ、大勢アルバ又臺盤ヲ陪ス、參議ハ横座ナリ、竹ノ黒塗ノ箸一雙ヲ耳土器ニ居テ置ク、此耳土器ハ馬頭盤ノ形ニシテ、略シタルナリ、切臺盤ハ一人前ニテ、四角ナルモノナリ

コノ二ツノ膳ノ下ニ毯代ヲ布キ、四隅ニ銅ノ獅子ヲ置き、此ヲ鎮子ト云、毯代ノ押也、凡此打敷上ニ落タル物ハ又上テ備フ不吉、親王ノ陪膳ハ、大天勅之照此度ハ、近衛家源幼弱故ニ次ノ權大天勅之中宮ノ陪膳ハ、亮勅之親王并ニ中宮ハ、御簾ノ内ニ豫メ供シテ置き、御簾ノ外ノ内ノ事不知故ニ扇ヲ鳴シ玉フト入御ト心得御膳ヲ撤スル事也

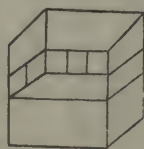
テ賜祿大掛衣ハ白キ裕ノ如キ物ナリ、關白殿下ヘハ五位人役送シ、ソレヲ家ノ諸大夫ニ遣ス、是ヲ殿下ノ一覽ニ入テ引之ナリ、殿下以下ハ五位役送シテ、直ニ其人ニ渡ス、始メ小袖ノ領ノ方ヲ右ノ方ニシテ出シテ、渡ストキハ左ノ方ニトリナホシ渡ス、直ニ請取、左ノ肩ニカケテ退出ナリ、

立后次第、別冊在

本宮次第、別冊在

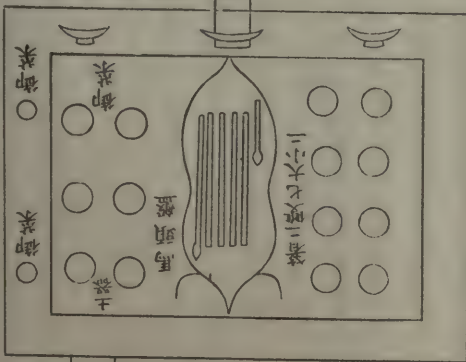
○按ズルニ、別冊所載ノ立后次第、本宮次第ハ上文引載ノ江家次第ト粗同ジケレバ略ス、

御椅子



本御

是折カ、建、如、著、其、陪、散、
二、上、取、花、上、取、花、
後、散、花、上、取、花、
建、取、花、上、取、花、
如、取、花、上、取、花、



此大床子ノ御膳四脚内ハ黒塗ニ
連子ノ如ク、シゲクサニ打ッ
縁ハウルミ朱塗、一方ニ獅子ノ如ク
ナル物向合テ居ル、紋ニツ宛アリ、凡
紋四角ナルモノハ惣テ管形ト云、尤
キヲ蠻繪ト云、南蠻ノ獸ナドノ蟬
ル形ヲ画ニヨリ蠻繪ト云、此御膳
ニアルモ、異國ノ獸、螺鈿ニレテアリ、
此本膳ハ横ニスエテ常ナリ、二ノ
膳ハ豎ニスエ、此供物、高橋
肥前、并ニ濱島内膳各調進、

上也、物召等有之、著外辨衆、大中納言參議以上八人、少納言爲適六位外記安倍亮盛史三芳英房、召使等著之、宣命使四辻中納言、小除日陣執筆左大辨宰相兼賢、入眼上卿中御門大納言資胤等也、奉行頭右中將季俊朝臣、大外記師生朝臣、左大史孝亮、節會之儀畢、於中宮御作法有之、大殿祭有之云云、

〔立坊立后記〕天和二年十二月六日、當今

元

○盤ノ女御藤房子

教

○准后宣下アリ、上卿ハ勸修寺大

納言經慶辨ハ小河坊城藏人正五位上俊方、奉行ハ油小路右頭中將隆眞ナリ、同三年二月十四日立后ノ片節會ヲ行ハル、内辨ハ應司右大臣兼照外辨ハ葉室大納言賴孝、勸修寺大納言經慶、今出川中納言伊季、兼宣命使正親町中納言公通、七條參議隆豐、庭田參議重條、奉行ハ清閑寺辨照定、少納言ハ石井行豐ナリ、中宮職大夫ハ從二位藤原朝臣實通兼之、權大夫ハ正三位西園寺中納言兼敦兼之、亮ハ高倉從四位上藤原朝臣永福兼之、權亮ハ大炊御門從四位上藤原朝臣信名兼之、但依所勞、廣幡左中將豐忠代之、大進ハ小河坊城正五位上藤原朝臣俊方兼之、權大進ハ交野彈正少弼從五位上平朝臣時香、少進ハ豐岡從五位上侍從藤原朝臣弘昌兼之、權少進慈光寺正六位源朝臣宣仲兼之、大膳ハ從五位下中原朝臣職永、少膳ハ正五位下賀茂縣主有顯、權少膳ハ從六位下宗岡朝臣信行也、六日辰刻出仕、除目ノ執筆於御前、應司兼照勤之、陣頭ニテハ庭田重條勤之、祝ハ外記ノ祝ヲ用ユ、墨ヲ磨ルニ故實アリ、末ノ上刻一會事終テ、各中宮ノ殿ハ參向、東福門院立后ノ節會アリケレドモ、諸式此度ノ如クニハ不調、催馬樂ハ寛永年中、二條行幸ノ時アリケル以後ノ事也、御椅子御履氈代鎮子大床子ノ御膳、并切臺盤等ハ出納ヨリ調進ナリ、中催馬樂ノ役人、歌物ハ綾小路俊景、并持明院基時、琵琶ハ今出川伊季、花園公晴、琴ハ白川雅元、和琴ハ四辻公韶ナリ、地下樂人六人階下ニ候ス、笛ハ上越後、山井近江、笙豐主殿園淡路守、箏築ハ東儀左衛門、窪甲斐也、三方ヨリ三人宛出座ヲ望申セドモ、二條行幸ノ時ノ樂人ノ位階ニ合セテ、用之給フト聞エシ、庭上ニ

可著座大辨外大略退出。冊命勅使師季朝臣取祿人^大被渡御調度藏人^忠殿上人隨其役外辨內府忠房雅親家良通方伊平經高少納言爲綱辨有親伶人殿下^{左府}拍子家嗣^{和學}經通實基^{比巴}

盛兼^{基平}宗平有資付歌八月一日末一點出門有參內之志於東洞院平宰相車馳融之間

不參內相共參宮早速事可始由被催云々大納言忠房雅親大夫殿中納言家嗣通方實基實參議

經高盛兼爲家家光著座殿下^{衣冠}令著端座給御著^{御座}座并四位侍從座偏同一昨日殿上人兩頭中^頭

將遇^{此相}公揖立奧座經殿上人末出弘庇跪坐末間妻戶西腋柱之程取盃^{定政}定清瓶子皇后宮權大進

光氏經西簀子南第二間進御座北^{持盃}勸坏取積酌拔笏揖之間坏及雅親卿起經本路之間頭中將

進受大辨坏即復座居汁物殿下陪膳保綱朝臣^{下兼居}以大辨申上箸下三獻通方卿大略同但入殿上

人座上妻戶^{間也}持盃不揖不取拘經本路復座次殿下令立給參議之間經高卿退出了端兩人^{兼盛}

光次第二退下簀子了殿下自南面簀子令入給之後暫復座大納言被立之間皆競立別當其實等

不揖退出之間皆立了此間舊臣仲家頻列役諸大夫云々昨日忠房卿以下濟々不委聞初獻亮二獻

經高^{同今日}三獻賴資卿云々氏院參賀云々

〔孝亮宿禰記〕寬永元年十一月十四日乙巳自傳奏西三條大納言就中宮^{後水尾}之事明日六位

史召具可來云々一條殿立中宮依上卿兩局參之^中廿四日乙亥就中宮事參一條殿窺申之事

等有之參中院中納言中宮方宣旨等之事^{封戶官符從三位中宮職之}今度不及御沙汰之由有命

廿六日丁巳禁中立后御習禮有之^{略中}廿八日己卯今日立后被行片節會并小除日內辨右大臣

兼退公殿外辨中御門大納言^{實胤}日野大納言^{實勝}廣橋大納言^{總光}四辻中納言^{季繼}白川宰相^{雅朝}

廣橋宰相^{兼賢}柳原宰相^{兼光}西洞院右衛門督^{時直}次將左水無瀬中將兼俊中山中將元親藤谷中

將爲賢北畠親顯右庭田重秀下冷泉爲尙姊小路公景庭中鳥瓶子不置之外辨昇殿無之內辨計堂

居了丁後申上下箸又居汁申上下箸如恒次三獻大時忠卿次居菓子次欲著羹菹粥而左大臣云

可略之仍不居之殿上人座一獻大進基親二獻大進基親三獻大進基親次居菓子次欲著羹菹粥而左大臣云

啓陣座又立黑柿机不居飯遲々也次大夫召宮司宗賴參上仰可召亮之由則重衡朝臣參候廣庇大

夫仰云啓陣將召或曰啓陣將可亮退下次啓陣將佐左近中將定能朝臣右近少將隆房朝臣右衛門

權佐光雅左兵衛佐光範右兵衛佐兼能等著座宣胡給銀次欲居飯爰大夫怒仰云先可居者兼可居

之不然者二獻之後可居甚以奇惟即進歸了然可行事基親失錯歟次一獻權亮維德維年少十四云

五位次二獻權亮維德維年少十四云居飯汁次五位次三獻權亮維德維年少十四云居飯汁次五位次三獻權亮維德維年少十四云

佐取祿退出了次余退出此後事不見及依爲他氏ザルナナ云フ御寺氏院等參賀不可有云々又有

八幡奉幣定云々其事大夫可行也云々打出款冬句也

〔明月記〕嘉祿二年七月廿九日壬午皇后册命日也中申刻內裏事始中宮後堀河后爲皇后宮從

三位長子後堀河后爲中宮左大臣內辨內大臣大納言忠房雅親中納言家良家嗣通方經通實基具

實賴資參議伊平經高隆親盛兼爲家家光四位中納言後如例列立了召賴資卿放列參進東階揖昇立

內辨後口指笏內辨賜宣命宣命使振笏右廻副南下階揖立軒廊東二間北方內辨右廻經實子副

北欄下階揖於西第二間揖宣命使出同間自簷下東行下東一間砌步出歷大臣後如例宣命使步出

當日華北扉揖西折練去宣命版五尺許立宣制訖左廻至于四位宰相前程練中宣命經四位宰相前

加本列內辨以下退出左廻內府以下不練經下前通方卿經高卿左廻經下前通方卿經高卿左廻經下前通方

右實忠有敎口口宮司大夫兼經內三權大夫實基亮範輔權亮定雅入道侍從大進光俊權大進範賴

亮少進經氏經高六位佐清大屬資朝口口四位侍從宣經實忠實俊順平五位侍從實忠實俊順平五位侍從實忠實俊順平

有敎信時信成親氏顯氏召仰上卿通方於本宮列立庭中拜後昇中門各退出于時及夜半依座狹不

從座在南庇五位侍從座在中門廊如去仁安儀云々以傳說所記也

宮司

大夫權大納言藤原朝臣隆季

亮左馬頭平重衡

大進勘解由次宮平基親

權大進前伯耆守藤原宗賴

權少進正六位上源兼綱賴行子賴政養子、女御之時勾當也、

御遊召人

琵琶左大將拍子宗家神箏兼雅笛成親和琴忠親篳篥定能朝臣笙時房朝臣付歌實宗朝臣、雄盛、

曲

呂 安名尊二反鳥破 席田二反

律 伊勢海 萬歲樂此同侍三臺急數反

此間公卿給祿先帝用、次中納言、十一日庚戌今日立后之處第二日也、左大臣左大將以下濟々參

入云々又御書使泰通朝臣、件御書紅澤、有上與薄、云々、水十二日辛亥此日未刻參獻○誠恐

中宮同院女院人々未參仍參院御方殿上降季卿獨候之暫言談申刻又々參集次下官及降季等著座

略○中 次左大臣內大臣參上左大臣著端內大臣著與便宜頗惡仍下官移與內府著端居替了、

今日座體對代南面三箇間對座敷高麗端有弘盛立赤木机備餐大根、下爲公卿座同南孫

庇同敷追南柱敷紫端二枚立黑梯机備餐爲殿上人座東上一行中門廊副西壁敷紫端三枚爲啓

陳座北上一行、但

先一獻亮重衡朝臣下五位二獻左大辨實綱上五位次居版居飯手長四位也、經家朝次居汁手長不

上了付藏人辨令內覽殿下令候御前給故歟、則返給又被奏、仰云、令清書則召內記返給、令進清書如
初以藏人辨令內覽後又奏覽、右府召大外記被問諸司具否、右大將○藏原已下向外辨此間陰雲俄
掩、小雨間灑、可用雨儀之由、人々議定、○中此間主上出御書御座、○藏原殿下忠實、○藤原令候給、○藤原依御氣
位、依御出告右府、入從殿上上戶、經年中行事御障子北並簀子敷、入從御座間著間座、○藤原依御氣
色召男共藏人辨參、仰祝續紙可持參之由、則入柳宮、入從執筆座南間置、大臣座前依仰被任、宮司等
宣命ニハ皇后ト雖書、除目ニハ藏書中宮職也、又太政官
諸奏字不稱書也、彼一家皆稱書、而今不稱書如何、○中略或人談云、寬平以後、大納言姬立后仕人、小
一條大將姬皇后宮娥子、與此中宮也、誠希有之例、大幸之人也、

【玉海】承安二年二月十日己酉、此日有冊命皇后、○高事、○高女御德子、○平清盛女、○爲中宮、○以皇后宮爲皇
官依遠忌、不參仕後、開內辨左大臣○藤原宣命草並清書、乍在陳座被奏之、○藤原宣命使別當成
親卿、○永久別當思教、○親卿勤仕之例云々、外辨上首左大將○藤原宗長、○藤原宣制了退出之時、左大臣不被練云々、宮司除目之
時、執筆并清書上卿、○執筆筆上中納言、許被召直廣、寬治五年立后、○幼之時也、之時、大臣以下豫參直廣、仍
今度人々存其旨之間、無召立可尋事也、宮司等拜了、則參本宮、先是宣制之後、勅使賴實朝臣參本宮、

而大夫除目以後參入、被相待彼之間、數刻候云々、下除目並仰啓陣事、左大臣被讓源中納言、左大臣
以下參本宮、出內裏之間有出立事云々、○以二條町爲朝門代、北南門被差去、于時左大臣不居陣降
自中門、人々相率少納言辨外記史以下、在左衛門陣代內、○宣掌召使參進出、大臣被御參之時、相代可參之故也、出門之後、大臣
被留之、相代召使前行追如常、至二條町、左大臣將以下雁行、○北大將追首路東面立、仍以下重立、○或第人

被留之、相代召使前行追如常、至二條町、左大臣將以下雁行、○北大將追首路東面立、仍以下重立、○或第人
願、○北東面其以下、○願カヒテ、○地方サマニ、○願行云々、大臣立還揖歸出了、其後人々次第乘車、主上御籠中、

本宮儀、先宮司中慶、次勅使被召、大夫取藤、○大得、次勅使藏人參入、○權大取、次左大臣進前庭再拜、○攝
立、○不被、次上卿著座、○攝政、○一獻、○攝政、○左二獻、○左大臣、○三獻、○源大納、○永久一獻、上薦二人被取之、尙不心得
事也、尙一獻大夫權大夫可取之也、然而代々不定、仍今度被逐永久例云々、打出款冬句云々、四位侍

輪左
之手

納言指笏進寄給之。右廂下殿侍。大臣下自殿就列。然後就宣命版。宣制一段。群卿再拜。又宣制一

段群卿又再拜納言右廂就本位大臣以下退出此間仰藏人則降差出納令奉中宮大床子二腳鋪了形二頭插鞋一足天皇還御本殿先是右大臣命云今日依當衰且不可候除目之由可申左大臣者即

申案內了、于時左大臣、令權中將成信密告源大納言參中宮、若依不可、堪除目歟、有召參御前、仰云、可

有除旦召右大將藤原朝臣子奉勅召藏人所菅圓座一枚鋪南之庇御座不垂于時殿司供燭主上出御

召人大藏卿正光參入、依仰召大將此間大臣來道經房中將於中宣發申可立大床子置師子形並可立倚子事次召紙筆左大臣豫書代獻上之也

除日訖大將退下，大夫源時中兼權大夫藤原齊信兼亮藤原正光兼權亮源則忠兼，大進大江清通兼。

權大進源高雅兼、少進橋忠範兼、藤原陳泰兼、大屬丸部兼善兼、少屬飛鳥戶光正兼、權少屬左大臣被

奏云以橘朝臣良莠命院辨爲宮內侍奏聞了亦被仰六衛啓陳依例可分遣之由仰右大臣大將暫立

壁後大臣召仰諸衛退出之後可著陣令清書也此間申左大臣參中宮後人臣以下清書之因御消息相

過藤三位問理髮事由內內相示也中宮御寢殿東對南放出四間母屋南北行東西對座鋪高麗襪土

敷上鋪圓座爲參議以上座座中及納言以下參議以上座座用高麗端南廂鋪兩面端坐爲四位侍從

南廊鋪紫端堂爲五位侍從座皆豫備如上儀東孫廟儲殿上人座信理令奉仕

門令亮正光朝臣等小由從相從訖次第著座次彈正尹太宰帥兩親王著座事了召於御前又砌下召

管絃者于時豎吹笙飛簾管數鳴萬春之樂未央一夜之漏將曙出了賜祿有差與韓中將同中歸宅

后宮爲皇太后宮。中宮職爲皇后宮。新皇后爲中宮。

（申右前）永六午正月廿六日己酉今日女御立后也略以藏人辨實光被仰下云女御從二位前

原朝臣孫可爲中書羽后由可爲憲宣倫者不參內仍被仰下也若原雅實爲大內言永寶貨借越

則道堂智有所以有意意見人人今于斯之之扭兒之之處入入新新從從名也也申云云堂案不久后后名名清清占占之時時可可

之由是言女何難事也但別當觀中云或有人之昭者于以下見其言近之由是昭然不可不

絹十匹、少貳兵衛命婦等候之、不知給物、可尋記、入夜罷出、參大夫殿、爲令申慶、依被參宮罷出、十三日乙巳、參左府令申慶由、依御出空、以罷出、次參東宮令啓慶由、拜了付殿上簡、頃之參中宮、今日召著諸衛佐等於侍所給祿判官以下直給、但例第四日早朝給之、明日依常御良日、今日女房等給祿有差、又給今夜祇候明日可罷出之由、令仰之、宮主裝束史官掌史生等同給所所撻饌如昨、給祿色目所所撻等有別紙、今日初啓時刻、又有名謁入夜參內、籠候御物忌、十五日丁未、參中宮、大夫同被參、被定所所別當預下部等、又定女房局遠侍者、大番侍者藏人等侍所名簿等同下給、與福寺僧等參入賜祿有差、廿三日乙卯、參中宮、今日始廳事、申時宮司等相率始行請印政、件印以書博士、可令書其文、而遠行以直請賀陽發、應座備酒饌、大夫不著於便所、大夫相共定遷御大裏之雜事、侍所女房簡、今日始之、女房日給女史奉之、入夜退私、

〔權記〕長保二年二月廿五日癸酉、此日立后丞相命云、今日御使前々給親昵人云云、天祿二年謙德公、天祿四年閑院大

納言、天元元年、右衛督、皆后兄弟、亦大床子師子形等、宣命了即可給者、參內、一條院、南殿裝束准紫宸殿供奉、但間數

減二間、然而御簾西間立內辨兀子如例、被仰宣命事奏云、以四條后、后、蓮子、爲皇太后宜歟、亦被仰先

先行事、亦申御使可遣之事、依仰遣召權中將、成信、頃之參入、又暫之左大臣被參宣命、刻限酉二刻也

先之右大臣被參、有召參書御座、仰云、以皇后爲皇太后、以女御從三位藤原彰子爲皇后之由、可仰、即

刻右仗仰右大臣、右大臣移南座、召官人令置膝突、令召內記、即大內記宣義朝臣參、奉仰以草覽、大臣

參御所、殿上、小板、令余奏之、仰云、依草、件草依左府命、藤原、次出御、次右大臣於便所、亦被奏、此、

母、御座下、返給之後、近仗陣階下、內侍臨檻、大臣參上、不、開門、西中、大臣召舍人、二音、大舍人

於中門外稱唯、少納言藤原朝臣朝典代就版、大臣宣刀禰召、朝典稱唯出中門外、召大納言源時仲卿、

藤原道綱卿、權大納言同懷忠卿、中納言平惟仲卿、藤原時光卿、參議藤原誠信卿、同公任朝臣同忠輔

朝臣、齊信朝臣、源俊賢朝臣等、參入就標下、四位以下、大臣召中納言平朝臣、同云、中乃物申司乃平朝

仍只召公官乃而、不朝臣稱唯、揖而離列、斜行經南殿西南渡殿昇殿、立大臣左方長押下、大臣給宣命、

今稱司乃、總案也、

亮不注其人即書一紙加封被奏云宮下司○一本作如此至大夫可在勅定者以下官可爲亮之由以
 右中辨被奏也被仰云大夫事猶以定申者此間天皇出御南殿時西內侍喚入左大臣著靴參上著座
 諸衛開門內辨召舍人二聲稱唯少納言師衛代參內辨云召刀禰者稱唯退還大納言爲光以下諸大
 夫參入內辨召中納言文鏡民部稱唯參上給宣命立東軒廊其間內辨大臣起座加列宣命使加列宣
 制如式群臣拜如式拜了左大臣以下出自承明門諸衛門閉門天皇還御大相府被參被候殿上奏云
 皇后宣命慶前後不覺頻戴朝恩不知所爲被仰云夜夜深更不召御前者唯被仰聞食由大相府被奏
 云右大將藤原朝臣時中中納言朝臣保光共是可堪仕者也濟時者爲氏公卿之內又爲上臈保光者
 爲無口口上且爲傍觀此間可在御定者仰云猶可定申者被奏云又如初奏仰云右大將藤原朝臣爲
 上臈以彼可爲大夫者大相府被退出被奏云云仰云依例壁口等可令參中宮者即仰左大臣傳聞召
 諸衛佐於膝突座御仰云云無佐之時以外召左大臣於御前被定中宮職司大夫右大將濟時兼亮下
 部大錄正信大關式肥田兼延兼頃之退下其後參射殿邊被奏清書無維延兼字仍被仰註兼字又重於陣被奏右
 大將下官於射殿以藏人宣孝令奏慶由依無近衛府下官即改註名所於殿上簡大夫下○中今夜奉
 令旨以藤詮子爲宣旨是皇后大夫以藤原淑子爲御匣殿別賞兼議佐以藤原近子爲內侍信忠守以
 下官及右中辨懷遠爲侍所別賞大進輔成朝臣奉令旨男女房簡今夜始書宣旨內侍著簡依無先例
 不著御匣殿別當少將乳母其學美子同著簡下官右中辨侍所長藤原長忠同望弘等同著簡而以四人付
 籍頗有詞晏仍加阿波守公任朝臣侍所長今夜被下令旨理御髮典侍泰○泰一子有給物云云憶不
 知色目或說云絹云云可尋問之今日午時許召侍從公任朝臣爲中使被奉中宮有給祿女裝束十
 二日甲辰參殿令申慶次參宮令申北御方○賴忠妻今日勸學院學生等參入於宮先下令旨於啓陣
 入學生令大進輔成朝臣令啓慶由傳內侍令啓仰聞食由奉拜了給匹絹被時給與或時事依倉卒不
 位赤絹口口大六畢又致拜禮云云少將乳母從昨日祇候今日給平綾六匹絹十四匹納通篋陪從女中給

〔日本後紀^{二十四}〕弘仁六年七月壬午立夫人從三位橘朝臣諱^{嘉智}爲皇后參議宮內卿正四位下藤

原朝臣緒嗣進就閣門宣命其詞曰天皇大命^{其萬勅布}大命^乎親王等臣等百官人等天下公民衆聞

食^止宣^毛食國天下政^波獨知^倍物^解不有^母必^{斯理弊}乃政^{有倍止}自古行來^當事^{皇后定}志^{闕中}乃政

波^{成物止}奈^{常毛}所聞看行^須故是以從三位橘夫人^乎皇后^止定賜^布故此狀^乎悟而供奉^{勅布}天

皇御命^乎衆聞食^止宣^毛贈皇后父正五位下橘朝臣淨友從三位云云從四位上藤原朝臣貞繼爲皇后

宮大夫從五位下紀朝臣繼足爲亮

〔小右記〕天元五年三月五日丁酉殿下^{○藤原}被命云皇后^{○圓融后}道^{事未承其日}今日吉日若可然

者令蒙^體仰定申可立皇后之日如此之事若及追事足難成^歟以之爲思早參內以此旨可洩奏者參

內此越被仰云事既一定早可奏立后之日者^{參式}中宮^{職ナルベシ}申此由即著給朝服召御前親

執給祿^{加三織物}被奏云^{○云一年來頻蒙朝恩已昇高位日夕之思}^{○思一朝恩難報重及今日更}

戴此仰載悅之深不知所爲朝恩餘身前後不覺者給祿纏頭下庭中再拜^{此間大相府}歸參內奏此由

即大相府參射場殿以余^{○藤原實}被奏慶由被仰聞食之由著劍傳給旨舞踏了參上殿上被仰趣如

前被仰云須召御前仰此由而亂間不能召御前者大相府退下被仰云以弘徽殿息所可立給皇后供

奉所司且可誠仰之由可仰左大臣至于冊命之日追可仰者左大臣依直物事候左仗即以給旨仰了

候陣公卿等參弘徽殿被申皇后慶^{○中}今夜於式被定立后雜事又以光榮朝臣被勘申立后日時也

勘申云來十一日癸卯時酉二點^{○中}十一日癸卯參殿次參內今日以女御從四位下藤原道子立

皇后其儀南殿御裝束略如相模召合儀^{○藤原}南廂東第三間立內辨兀子又不立宜陽殿兀子左大臣

被奏云可奏宣命草依內裏式文可有歟將可有鈴^{○一本}詞歟者被仰云依前前例可載鈴詞者左大

臣參射場殿以余被奏宣命草御覽了返給此間大相國被參式依召參入以余被書出中宮職司等大

進正五位下源輔成少進正六位上藤原爲政少進正六位上藤原正信大屬正六位上肥田維延大夫

府將佐各一人、

本宮儀略不記、三ヶ日參入裝束如先、至第三日、著中門廊座有盃酌、其後給祿退出、

〔續日本紀^十〕天平元年八月戊辰、詔立正三位藤原夫人爲皇后、^{〇聖武}壬午、喚入五位及諸司長官

于內裏、而知太政官事一品舍人親王宣勅曰、天皇大命^止、親王等又汝王臣等語賜^止勅、久皇朕高

御座^爾坐初^利由今年^爾至^氏六年^爾成^成此^乃間^爾天^部位^爾嗣^坐坐倍^次止^爲氏皇太子侍^其由是其婆

婆^止在^須藤原夫人^平皇后^止定賜^加久定賜者皇朕御身^毛年月積^誤天下君坐而年緒長^久皇后不

坐事^母一^豆善有^其行^爾在^又於天下政置而獨知^侍物不有^必母斯理幣能政有^之倍此者事立^爾不有

天^爾日月在^如地^爾山川有^如並坐而可有^止言事者汝等王臣等明見所知在^然此位^平遲定^來波豆^其

刀比止麻爾母已^我夜氣授^留人^波平一日二日^止擇^北十日廿日^止試定^止伊波婆許貴太斯^波意保^波

天下^乃事^夜多夜須久行^止所念坐而此^乃六年^乃內^平擇賜試賜而今日今時眼當衆^平喚賜而細事

乃狀語賜^布詔勅聞宣^賀久詔者挂畏^支於此宮坐^氏現神大八洲國所知倭根子天皇我王祖母天皇

乃始^斯皇后^平朕賜^日勅^久女^止云^波等^夜我加久云其父侍大臣^乃皇^我朝^平助奉輔奉^氏頂^波

恐^美供奉午夜半曉時^止休息無久淨^倭明心^平持^氏波々刀比供奉^平所見賜者其人^乃宇武何志^倭

事歎事^平送不得忘我兒我王過^無罪無有者捨^奈忘^奈負賜宣賜^志大命依而加^爾加久^爾年^乃

六年^平試賜使賜^氏此皇后位^平授賜^然毛^朕時^乃未^不有難波高津宮御宇大鸕鷀天皇^{〇仁}葛城曾

豆比古女子伊波乃比賣命皇后^止御相坐而食國天下之政治賜^和今米豆良可^爾新^倭政者不有本

理^由行來迹事^止詔勅聞宣^既而中納言從三位阿倍朝臣廣庭更宣勅曰、天皇詔旨今勅御事法者、常事

波^爾不有武都事^止思坐故猶在^倭物^爾有^止夜^思行^氏大御物賜^止久宣賜^兼王純三百疋、大納言二百疋、

中納言一百疋、三位八十疋、四位三十疋、五位二十疋、六位十五疋、內親王一百疋、內命婦三位六十疋、四

位一十五疋、五位一十疋、

標經大列國立納宣命使著版曲折揖如常宣制一段群臣又一段群臣再拜北山沙門拜舞云云是依日記進叙立時親族拜歟宣命使經列西復本位或從復王卿退出主上還御次令藏人召大臣進議行之而六年之例多再拜也大臣先候殿上依重召經實子敷著御前圓座次召五位藏人令進紙筆如恒大臣依仰書宮司執筆議

除目事訖退下於陣令參議清書用折楔公卿一枚非參議一枚次奏聞如恒次召式部給之外記三度申如恒立立上卿召曰未宇否承取拜舞次參彼宮令奏慶再拜

了各行事。此間勅使次將參本宮申宣命由先數座帖令著之。公卿一人執女裝束給之。長曆元年三月春宮權大夫取

之、永承六年二月十三日、藏人令持御椅子一脚、紫檀地盤、紫文綾綳、白代織物敷、四枚、加大床子二脚、座、高麗螺、梅紐、加

國座師子形二御插鞋一足盛柳筥或加御膳具
藏器並御筆盤等其儀如前公卿一人執女裝束給之
又給小舍人藤胡二匹藏人下地再拜退

立御椅子撤御帳南面茵帖
即立於畫御座跡御置鏡
師子形立御帳南
大床子二脚立帳東頭東

妻、其上敷^ニ火^ヲ置^キ、立^テ於^ニ修^リ里^ノ鐵^ノ時^ノ簡^ノ御^ニ善^ニ朋^ノ、以上立^テ於^ニ大^ノ臣^ノ波^ノ印^ノ六^ノ府^ノ客^ノ車^ノ可^シ參^リ由^ニ、或依^テ大^ノ臣^ノ召^シ秦^ノ突^ノ一

次第仰之、先左右近將、次左六府各率宮人以下一員、立前等十人參皮宮。○中坤氏宮參士大殺系

杜衡門佐、次左右兵衛佐、
 六所各差官人以下一員、
 退衛等十人、參衛官略、
 神祇官奉仕、力與多

一人引道，可令本住一供御膳人六人，祿人六人，傳取之供大床子前御筵盤，有竈一所，本所上臈女房爲陪膳。

皇后經御帳後御大床子立御箸入御次撤之如恒次又供夕膳又供御手水床子蓋於下格子後侍者

名謁奏時近代例不定被補御匣殿宣旨內侍以上大夫仰亮補侍職事以下女房、衝重所所屯食。

〔羽林要秘抄〕立后繼廢薛綽或自里亭卷縵或黑綾隨身璫垂袴

時刻渡御南殿、或渡御不左右近衛陣階下不立胡床、帶弓箭著靴或淺沓、內辨著堂上召舍人、外辨公卿列立、宣命使宣制

諸卿退下，次將退下。
自上
左近右上、左近左、右近右。以垂閣散弓箭。終退宮司除目比差近衛次將一人被申冊。

命由本宮除目了夫參
申事與張召升中門著陸賜祿降地再拜出中門退被仰六府將佐可候啓陣

由上卽著車教叩試一攻先召左右次將垂嬰委帶初奴旁幾者入宣二門著試經二柱外上卽云其宮啓

仁義故音母在是下左經五月去而又加比參支宮之等參嬰委皆勿壹用義客中用耶區不必

卿出外辨大臣著靴取副件宣命於笏進立軒廊西一間不必著內侍召人即參上著南廂第一間西下柱

元子北次開門闌司著座大臣喚舍人刀禰參入儀如常廷官四年依天長承和例不召舍大臣召中納

言一人任大臣授宣命議國式云執宣命文乃定宣命參議以上一人付內侍奏任參議受之下殿

立軒廊西第一間北邊或立二間出大臣退下就庭中標宣命使出自東二間就宣命版後置作版開門

式立標之次預置宣制一段群臣再拜又一段訖拜舞內奏儀式再拜云云而依式諸國威拜舞者其立

之例又如此則立后太子儀惟讓位可有拜舞歟仍檢舊例多川再拜但延長三年立太子日拜舞由見宣命使經列

吏部王記今按如叙位任官皆有親族拜舞立后太子等日何無此儀乎任太子日拜舞由見宣命使經列

西復本位或從親王以下退出即還御任宮司訖大臣召六府佐仰可候啓陳之由鋪陳者二枚左右一

也王卿侍從相引參賀彼宮行啓儀大略同行幸或御牛車貞觀年中也皇太后向大原野社遊所草創也立太子

儀同之但衛門陣不候上卿仰近衛次將如立后仰兵衛佐之啓陣令候即是尋常所候依佐不參也未

補帶刀之前近衛陣猶候

康保四年諒間問立后例王卿不著吉服有襪祿但入內日无其事諸衛舍人等不知案內稱頸冷由云云

〔江家次第十七〕立后事

前一日大臣奉仰云外記令誠所司又召內記令作宣命以上近代或當日早旦行之大臣參入奏宣命

草次奏清晝返給之後令次大臣於陣座豫定宣命使中納言公卿嫌御座主上御南殿或不引陣近

將建賊龜密胡壽給御著靴外記亦同中檢王卿出外辨若非第二大臣者召刀禰令下式賀召外記

非遠使由上大臣於陣後着靴取副宣命於笏進立軒廊內侍闕司著座大臣召舍人大舍人稱唯少納

宣令候之西間代例亦以不定但多依後說開門不開開門不開闌司著座大臣召舍人二大舍人稱唯少納

言着版大臣宣刀禰召世外辨王卿參入立標出自前入東二間於東階下大臣給宣命給之退

於東階下歸向掛立軒廊西第一間北邊二天德二年大臣退下使報自東二間出又與宣命就庭中

立后日師兵禰立二間同四年任大臣日雅信禰立一間大臣退下使報自東二間出又與宣命就庭中

參入^{六位已上}在承明門內式部錄稱容止如常訖宣命大夫進就版宣制其詞曰天皇大命^{其萬}勅布大命^乎親王等百官人等天下公民衆聞食止^宣食國天下政^波獨知^倍物^爾不有^{必母}斯理倍^乃政有之^倍自古行來^留事皇后定^{之天}圖中乃政^波成物止^奈常毛^{所聞}看行^須故是以其色其位某^乎皇后止^定賜布^乎故此狀^乎悟而供奉止^勅天皇御命^乎衆聞食止^宣訖各退出後日早朝外訖召式部省仰可令集會刀禰之狀時刻親王以下參入^{五位以上}在北中門外^{六位以下}于時內侍一人進宣云云五位以上六位以下稱唯拜舞退出

〔新儀式^五時下〕冊命皇后事

前一日大臣奉勅令外記召式部省仰明日可令集會刀禰之狀又召內記令作宣命當日早旦大臣參弓場以宣命草付藏人令奏之覽訖返給復座令清書重奏覽返給候之所司奏東南殿^{延喜廿三年}御立^{御屏風}供大床于南廂第三間^立時刻出御左右近仗即陣階下^{依服中儀}內侍臨東檻喚大臣大臣參上著兀子次開門關司相分座承明門左右腋中務丞入置版位次大臣喚令人少納言參入就版大臣仰可召大夫等之狀稱唯退出次親王以下五位以上參入列立庭中六位以下在承明門之外大臣喚中納言一人稱唯東度昇自東階就大臣後進受宣命退下大臣起座下殿就庭中本位^{此間承詔者候}次宣命大夫進就版宣制曰現神止^{大八洲所知}須和根子天皇詔旨止^{其萬}勅命^乎親王王公百寮人等天下公民衆聞食止^宣群官稱唯再拜訖更宣云食國天下政^波獨知^倍物^爾不有^{必母}後乃政有^倍自古行來^留事皇后定^{之天}圖中乃政^波成物止^奈常毛^{所聞}志行^須故是以某^乎皇后止^定賜布^乎故此狀悟而供奉止^勅天皇命^乎衆聞食止^宣群官俱稱唯再拜此間宣命大夫就本位訖親王以下退出即以還御大臣依召參上有除目儀^{任中宮職司也}延喜二十三年例也事訖退下大臣又參射殿令奏除目清書

〔北山抄^四〕立后事

前一日大臣奉勅仰外記令誠所司大臣奏宣命^{奏草及清書如常}返訖御南殿^{延喜廿三年}御立^{御屏風}近仗陣階下^立王

〔九成宮體泉銘〕上及中宮歷覽臺觀

〔後漢書〕卷十 皇后傳 會育司奏建秋宮帝曰皇后之尊與朕同體承宗廟母天下賈易哉

〔古事記傳〕二 太后は字のまゝに意富岐佐岐と訓べし後世の皇后なり古は天皇の大御妻等

を后と申て、其中の最上なる一柱を殊に尊みて太后とは申さしこと上卷八千矛神段の三十一

葉に云るが如し大は大臣大連などの大と同じくされど猶疑あらむ人の爲に其證をも

舉て、なほつばらに云む先古に后とは一柱に限らず後に妃夫人など申す班々を幾柱に

ても申せり今世女童の詞に十二人の御后と云ひて古に近し倭建命段に弟橘比賣命を其后とあり

て又次に坐倭后等云々とあるは橘比賣をも坐倭をも共に后と申せるなり倭建命は高を天

なり例又等と云るを以ても一柱に限らざることを知べしされば書紀反正卷に皇夫人また夫

人敏達卷にも夫人これらを倭佐伎と訓るは古にかなへる訓なり字鏡にも妃也支佐支と

あり又書紀に夫人をば意富刀自と訓る處もあるは心得ず又妃夫人嬪女御などを多くは美

實と訓りそも御實とは皇后を始奉て夫人嬪などの列までも通ひて申すべければ

此訓は就ては然も訓べけれども當時の實の稱には叶ふべくも非ず皇太后を倭佐伎と訓るを申

すべく又倭佐伎とは妃などにもわたる稱なればなりされば皇后は意富倭佐伎と訓べきなり

倭佐伎と訓て宜し凡ていづこにても妃夫人などは倭佐伎皇后は意富倭佐伎と訓べきなり

さて其後等の中の第一なるを太后と申せし證は此處を始として玉垣宮仁段に其太后比

婆須比賣命と見え謂志比宮真段に息長足比賣命を太后と申し高津宮德段に太后石之

日賣命と見え又遠飛鳥宮九段朝倉宮雄段などにも同く太后と申せり又書紀天智卷に

天皇御病甚重くならせ給へる時に天武天皇の儲君に坐けるが後事を辭申給へる御言に請

奉洪業付屬太后云々とある太后も皇后倭姬王を申たまへるなり凡て書紀の例は上代の事

は其例に違ひてたまひて當代の太后をば皇后と書き御母后をこそ皇太后と書かれたるなり此

後ノ准母アリ、此准母ハ多クハ内親王ナレド、希ニハ中宮等ニシテ准母タルアリ、准三宮ハ、准三后トモ准后トモ稱ス、三皇后ニ准ズルノ謂ナリ、是ハ女子ニ限ラズ、親王、法親王、大臣等、毎ニ此ニ居ル、蓋シ文德天皇ノ朝ニ、藤原良房、三宮ニ准ジテ、年官ヲ賜ヒシヨリ起リシガ、後ニハ一ノ職名ノ如クナレリ、而シテ后位ニ昇ラズシテ女院タルモノハ、必ズ之ヲ經由スルヲ例トス、サテ此篇ニ就キテハ、女御、女院出家、山陵、外戚等ノ諸篇、及官位部ノ中宮、職、院司等ノ篇ヲ參看スベシ、

解

〔新撰字鏡〕女嫫以也、支以爲二反

〔字鏡集〕
口十一
后
キ
サ
キ

〔令義解公七式〕皇后

〔西宮記〕 臨時五 皇后行啓 ○ 中略

之時、皇后宮職可被置歟云々、

〔拾芥抄〕中本
立書后宮長秋宮

中宮長秋宮三千人椒房

〔古今和歌集〕卷一
〔寬平御時〕。

〔築花物語〕三十七卷 七月七日〇

中
文
房

大のふやこはつさとぎうなり
 大のふやこはつさとぎうなり

三下

分靈符持異名用

〔唐六典〕禮四部外命婦朝中宮爲皇后稱觴獻壽。

院トナリテ後ニ陞ルアリ、多クハ所生ノ天皇ノ御即位ニ由ルナリ、

太皇太后ハ、皇太后ヨリ陞ルヲ以テ常トスレドモ、皇后中宮ヨリ直ニ進ムモノアリ、然レドモ女院ノ稱ノ起リテヨリ後ハ、此位ニ居ルモノ少ナシ、

皇太夫人ハ、天皇ノ御生母ナル夫人女御ヲ稱スルナリ、是ヲ中宮ト稱セシコトハ上ニ云ヘガル如シ、皇太夫人ノ稱ハ、後ニ亡ビテ復聞エズ又皇太妃アリ、令ニハ載セタレドモ、歷史上ニハ、續日本紀、文武天皇大寶元年七月ノ下ニ、纔ニ一見スルノミ、

贈號ノ事ヲ言ヘバ、皇后ノ稱ハ、妃准后ニ贈リシ例アリ、皇太后ハ、皇后ニ贈ルアリ、直ニ女御等ニ贈ルアリ、女院ニ贈ルアルナリ、太皇太后ハ、贈皇太后ニ、更ニ贈リシ外ニ例ナシ、

女院ハ太上天皇ニ准ズルモノナリ、其所屬ノ職員等概チ太上天皇ニ同ジ一條天皇ノ朝ニ、皇太后藤原詮子ヲ東三條院ト稱セシヲ以テ、女院ノ始トス、次ニ太皇太后藤原彰子アリ、後朱雀天皇ノ朝ニ女院トナリ、上東門院ト稱ス、門院ノ號此ニ始マル、是ニ於テ女院ノ稱ハ、單ニ某院ト云フモノト、某門院ト云フモノトノ二種トナリテ、後世之ヲ遵用セリ、此兩女院ハ、皆國母ニシテ剃髮シタルモノナレバ、國母ハ女院タルヲ以テ例ト爲セドモ、國母ニアラザル女院モ亦頗ル多シ、若シ后位ニ居ラザルモノハ、女院タルニハ、必ズ一タビ准后ヲ經ルヲ以テ例トス、

女院ノ稱ハ、其住處ヨリ起リシガ、後ニハ徒ニ禁門ノ名、地ノ名ヲ取ルアリ、或ハ門ニモ地ニモ由ラザルアリ、或ハ前女院ノ號ニ、後ノ字新ノ字ヲ加フルアリ、後高松院、新待賢門院ノ如キ是ナリ、要スルニ、女院ハ生前ノ號ナレド、希ニハ歿後ニ追稱スルモノアリ、後京極院ノ如キ是ナリ、

准母ハ帝母ニ准ズルモノニテ、女院タルハ常ノ事ナレドモ、或ハ皇后ト稱スルアリ、又剃髮

朝ノ高野新笠、陽成天皇ノ朝ノ藤原高子、宇多天皇ノ朝ノ班子女王、醍醐天皇ノ朝ノ藤原溫子ノ如シ、而シテ在位ノ天皇ノ后ヲ中宮ト稱セシコトハ、醍醐天皇ノ皇后藤原穩子ニ昉リ、繼デ村上天皇ノ皇后藤原安子アリ、然レドモ皇后ノ稱ハ、毎ニ贈號ニ用キ、御疑ニ侍セザルモノニモ假スコトアレドモ、中宮ノ稱ハカク汎ク用キシ事ナシ、

皇后ハ、上古ヨリ貴族ヲ擇ビテ冊立スルコトニテ、大寶令制定ノ時ニ至リテハ、妃ヲ内親王ニ限ルコトハシタレバ、后ハ皇族タルコト勿論ナリ、是蓋シ從前ノ法ナルベシ、故ニ聖武天皇ノ藤原安宿媛ヲ皇后ト爲シタマヒシ時ニハ、縷々數十言ヲ以テ辨疏シタマヘリ、是ヨリ後ニハ、皇后ハ多ク藤原氏ニシテ、以テ外戚擅權ノ端ヲ啓ケリ、然レドモ多クハ大臣ノ女ニシテ、納言以下ナルヲ以テ異例ト爲シタリ、其間ニハ執柄ノ人ニシテ、人ノ女ヲ養ヒテ入内セシムルアリ、天皇讓位ノ後ニ、之ヲ納レテ后ト爲スアリ、又十歳未滿ノ后アリ、皆異例ナリ、其異例ノ尤モ甚キハ、御疑ニ侍セズシテ后ノ稱ヲ得ルアリ、此例ハ堀河天皇ノ朝ニ、皇姉媿子内親王ヲ以テ准母ト爲シ、皇后ト稱セシヲ以テ始トス、但シ内親王ニ限ル、サテ后位ニ進ムニハ、皇太子ノ妃ヨリスルアリ、女御ヨリスルアリ、准后ヨリスルアリ、或ハ直ニ后位ニ昇ルモノアリ、或ハ其勢ナキニ由リテ、中宮ヨリ皇后トナルアリ、

皇后ハ内政ヲ理シ給フモノニシテ、大夫以下ノ職員アリテ之ニ屬シ、元日等ノ朝儀ニハ、天皇ト共ニ、皇太子以下ノ拜ヲ受ケ、其禮遇殆ド天皇ト均シキコト多クシテ、國忌山陵ヲ置ク等ノ事アリ、上古ハ其物故ヲ薨ト云ヒシガ、後ニハ是モ崩ト云ヘリ、而シテ其他ニ行キ給フヲ行啓ト云ヒ、臣庶ヨリ皇后ニ白スヲ啓ト云ヒ、其上啓ニハ殿下ト稱スルガ如キ、一ニ皇太子ノ例ニ同ジ、

皇太后ハ、皇后中宮ヨリ進ムアリ、女御ヨリ進ムアリ、准后ヨリ進ムアリ、剃髮後ナルアリ、女

古事類苑

帝王部十九

皇后上

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、併入

皇后ヲキサキト云フ、上古ハ天皇ノ御疑ニ侍スルモノヲ、汎クキサキト稱シ、其中ニテ嫡妻一人ノミヲ大后ト云ヒシガ、漢土ノ制ヲ模サレテヨリ、后ノ稱ハ嫡后ニ止マリ、御母ヲ皇太后ト云ヒ、御祖母ヲ太皇太后ト云ヒ、以上之ヲ三后又ハ三宮ト稱ス、

立后ニハ冊命ヲ以テシ、其式極メテ嚴ナリシガ、南北朝ノ比ヨリ、立后ノ典ヲ舉ゲサセ給ハザルノミナラズ、女御ヲ置カセ給フコトモ甚ダ希ニシテ、終ニ全ク廢絶セシガ、後陽成天皇ノ朝ニ、豐臣秀吉、近衛前久ノ女ヲ養ヒテ、掖庭ニ入レテ女御トナシ、後水尾天皇ガ、徳川秀忠ノ女ヲ納レテ、中宮ト爲シタマヒシニ至リ、中宮女御復興ル、

三后ハ、各同時ニ二人以上並ビ立ツヲ得ズ、故ニ一條天皇ノ朝ニ、藤原定子ガ中宮タルニ至リ、藤原遵子ノ中宮ヲ改メテ、皇后ト爲シタリ、遵子ハ帝ノ御父ノ中宮タリシカド、帝ノ御生母、皇太后タルヲ以テ、皇太后タル事ヲ得ズシテ、仍ホ中宮ト稱セシナリ、然レドモ是ハ婦姑ノ間ナレバ、其秩序ヲ紊スマデノ事ナリシニ、其後藤原道長ノ女彰子入内シテ、中宮タルニ至リ、定子ノ中宮ヲ改メテ皇后トス、是ニ於テ一帝ニ兩后アリ、是ヨリ此例ヲ逐ヒシコト間アリテ、中宮ノ勢ハ、反テ皇后ノ右ニ在リ、令ニ據ルニ、中宮ハ三后ノ總稱ナルガ、聖武天皇ノ朝ニ、皇太夫人藤原宮子娘ヲ中宮ト稱セシヨリ、毎ニ皇太夫人ノ稱ト爲レリ、桓武天皇ノ

讓位後立后

二八九

諒闇立后

二九〇

幼女爲后

二九二

古事類苑

帝王部十九

皇后上

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三后、稱人

稱呼

立后儀

參賀進獻

待遇

供給

擇貴族

皇族爲后

前帝養子爲后

前后養子爲后

大臣養子爲后

初爲太子妃後爲后

初爲女御後爲后

初爲准后後爲后

卽位前立后

二四八

二五〇

二六六

二六七

二七三

二七五

同

二七七

二七八

二七九

二八二

二八四

二八八

二八九

しきことあらん、こなたへと申せとて、やがて面をわはしけり、脩靜ふかく歡びて夙くより思ひ起せし志願の由を説示し、山陵志著述の爲に、古き御陵を尋んとて、旅寐をしつることの趣云云とかたりいづるに、蘆庵も只管感歎して、足下は得がたき學士なり、ざる志ならんには吾庵に杖をどいめて、こゝらわたりの御陵をしづかに訪求したまへとて、又他事もなくもてなしけり、これにより脩靜は日毎に古陵を尋巡に、ともすれば日暮て歸るを、主人は自ら風呂を焚て浴させぬる老人の心づかひを胸苦しとて辭とも從はず、これ等の事は、只管に客を愛する故のみならず、吾も亦かゝる奇人に宿することの、歡しさに、足下の疲勞を慰て、志なかれと思ふよしは、國の爲に力を竭す人の助にならんとてなり、必辭退したまふなどて、後々までも然かしてけり、

〔陵墓一隅抄序〕戊申

○嘉永元年

春、余觀花於芳野、過上市村、偶見一古厓、本於店頭、引而檢之、乃具載帝陵

頗備焉、但不記著人姓名、購歸難之、史籍他日閱之、宿昔疑之、未能質明者、渙然永釋、其爲喜何如歟、于嗟山陵之類廢也久矣、彼大和河内之諸地、有其物、而名或不正、若我京郊、其物既亡、名亦隨亡、悲哉、繇是前賢往々覃思極力、各就所見、樹一家之私議、彼如松下見林廟、陵記、蒲生君藏山陵志等、雖頗益後生、務主閎博、一從一違、同異混淆、不免詩非勞采也、顧茲瑣々冊子、未足窺作者全力、然而精鑿的實、較諸前書大有徑庭、余倍珍重、以示之於老友水島永政、永政亦奇之、反覆數回、謂余曰、今熟玩其辭意、非淺者之所能辨、其或成於若宮水枝之手、水枝者濃國郡上之一祝氏、自少慨山陵及式社之荒涼、著書有數種、嘗與同列不合、述居京師、終赴和、沒於龍門、土神之祠官、惜哉、天祿不長、名亦不顯、斯書必係其遺篋之物也耶、余深然之、後屢誘永政拜聖蹟、每插之行囊、苟有所見、輒加私註、題曰陵墓一隅抄、別作圖副之、頃者俱謀、更校訂以傳之世、覽者留意於茲、一隅庶幾三隅、可以反矣歟、時嘉永甲寅春正月平安後學津久井清影撰、

を促し、且その友鍵屋靜齋等が資を借て、製本全く成しかば、之を京師に獻り、及關東の摺紳並に有職の人々にまゐらせけり。○中初脩靜が山陵訪求の爲に京に赴きしとき、彼地に絶て識人なし、當時小澤蘆庵は、古學を好みて萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりとかねて傳へ聞しかば、渠が助を借らばやとて、その京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋て云云とおどなふ程に、小澤が家僕出迎へて、いづこよりと問ふ、いひよるよしもなきまゝに、脩靜まづ作りて、某は下野なる宇都宮のはどりにて、蒲生伊三郎と呼るゝ者なり、琴を好み候へども、田舎にはよき師なし、主人の翁は琴の妙手にておはするよし、東野の果をでかくれなし、是によりおはん弟子にならましく欲して、遙々と來つるにて候といふ、その僕こゝろを得て奥に赴き云云と告にけん、蘆庵は聲を高くして、あな無益しき問ごとかな、汝出てしか答へよ、主人は久しう客を辭して交を絶たれば、都の中だにも親しう物せるは稀なり、琴は若かりし時搔鳴したりけるを、あちこちの人に知られて、彼に聽せよ、此に教よといはるゝがうるさければ、近ごろ打摧きて薪に代たり、かゝれば所望にしたがふべくもあらず、他に行て求めたまへといふ聲の、むし襖一重を隔て定かにぞ聞えける、脩靜は僕が報るに及て、そがしかくといふをしもまたず、更に又推かへして云、翁のおはん答はこゝにもつばらに漏聞たり、某猶一言あり、願は枉て聞たまへ、吾は下野なる儒者なり、云々の志願あれば、屢江戸に遊學し、こたみ都に上りしかども、相識れる者絶てなし、翁の古學を好みたまふと、その氣質の俗ならぬは、かねて傳聞ものから、いひよるよしのなきまゝに、琴を學ん爲にとて來つるとはいひし也、こは長者を欺くに似たれども、その虚言は已ことを得ざりし實情より出たれば、許されて對面せられば、肝膽を吐き、志願を告て、翁の資を借らんと欲す、かくても意に稱はずば退けられんこと勿論たるべし、今一たび和殿を勞さん、此由執次たまへといふ、蘆庵もこれを洩聞て、ざりとは思ひがけざりき、そは奇しき客人なり、對面せずば悔

を勤めたるに依て諸大夫被仰付、戸田大和守と改め、其後山陵奉行を命せられ、歳俸米二百人扶持、萬石以上の格、然るに去々子年○元治元年、水府動亂事件に就き、宇津宮侯、藏高、且所替を命せられ、其後所持御沙汰止と成たり、之に依て大和守の二百人扶持返上、更に宇津宮侯、高の内七千石、新田○田下三三三、都合一萬石を以て分地となし、諸侯の列には爲せり、

〔玉勝間〕三神武天皇の御陵

大和國人に竹口英齋○中、此英齋といふ人は、すべて御世々々の天皇の御陵を始め奉りて、皇后皇子皇女たちなどの御墓まで、廣く考へて、陵墓志といふ物を著さんとすとて、かつ書出たるをも見せたりしは、おのれはた常に深く思ひわたる筋の事なれば、いどうれしくて、必なしをへられよと返す、すゝめおきしはいかになりぬらん、其後は老らずなん、

〔曲亭雜記一〕蒲の花かたみ

抑脩靜庵はもと福田氏、後に其先祖の氏郷朝臣の族より出たりと聞に及て、氏を蒲生に改めけり、○此れらのよしは、墓表に、具なればこゝに載せず、名は秀實、一名は夷吾、字は君平、脩靜はその號、下毛州河内郡宇都宮の人なり、○中脩靜、九志を編述の志あり、古昔の山陵多く荒廢して、その迹定かならざるもの有り、聞こと久しきをもて、まづ山陵志より編んとして、獨行して京に赴き、南海を越、淡路に渡るに素より路費の乏しきを憂とせず、嶮を履み、風雪を犯して、六十六國その半を経歴し、あるは里老に問ひ、或は舊圖を考へ、諸陵存亡の趣を日撃したりける、辛苦をその著述の爲に辭せず、月日は旅寢に移れども、其志移ずして、愈精力を盡しけり、かゝりし程に文化丁卯の年、北虜邊塞を憂るの風聞あり、時に脩靜江戸にあり、かの事を傳へ聞て、憂ひ且憤に堪ず、即不恤緯五編を著し上書して之を國老の執事に奉りしに、おはんどり上はなかりけり、とかくする程に、山陵志一卷やうやくに稿を脱て、刻本にせざく欲するに、脩靜素より擔石の儲なければ、同志に告て、未刻以前に入銀

神武天皇御陵之儀者、其方知行所内ニ被爲在、今度御修補ニ付、松材數本御用ニ相成、御満足被思召候、依白銀二十枚御所より賜候旨、傳奏衆被相達候間、此段相達候、尤銀子之儀者、御納戸頭申談、請取頂戴候様可被致候、

右二月廿七日元治

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年六月十六日、古來陵墓ノ不審ナルモノハ、決裁ヲ朝廷ニ請ヒ、妄リニ臆斷ヲ以テ定ムル事ヲ禁ズ、

山陵御修補に付、元來御場所未定の分、此節専ら探索方仰出され候處、兼て異論の御場所爲鑑定穿ち候様有之哉に相聞候、尊重の御場所、一己の存寄を以て勝手拜見のみならず、右様所業を以て窺定候儀、恐懼の至に思召候間、以後異論の御場所は、山陵奉行へ申出、同向々に於て一同立會、篤と敬見、遂評議候上にて、彌難決候は朝廷へ被相伺、御差圖受候様可致候、今般先帝爲御尊崇奉、行被仰付候儀に付、却て山陵に拘り候御儀は、同向へ申出、差圖受候様可致、一己の存寄を以て、妄に山陵へ手を附候儀は、決して不相成候、御尊崇難相立候間、心得違無之様可致候、且又圖々皇子皇后等の御墓、其外重き身分の墓、所々右様の類、以後大切心得、破壊不致様被仰出候、右之趣、末々不洩様急度可申達事、

右之通京都より被仰出候間、諸國津々浦々に至る迄、不洩様早々可相觸候、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年丙寅三月廿日、戸田大和守諸侯ニ列ス

野州宇都宮城主、戸田土佐守高の内七千石、新田三千石、都合一萬石、家族、戸田大和守へ分地いたし、御奉公爲相勤度、且大和守取來二百人扶持差上度旨、願之通被仰付、席の儀は、菊之間縁類と可被心得候、右於芙蓉之間、老中列座、和泉守申渡之、

此は文久二壬戌閏八月、宇都宮侯内願に依て、御陵修補御用命せられ、家老間瀬和三郎、重立是

文久三年二月

〔公卿補任〕孝明文久三年十一月廿八日、神武帝山陵使發遣日時定、依被修山陵上卿權大納言、辨勝

長、使日野中納言奉行豐房朝臣、

〔德川禁令考〕八修文久四年元治甲子年正月

叙位宣下 家茂公

叙從一位

山陵荒頽、就中神武天皇御陵、可及廢絕形勢、多年御恐懼、御憂傷之處、先年已來、追々探索、舊冬御修補成功、二千餘年之今日、至盛大復古之儀、第一御追孝相立、加之皇威を四表に輝候事、叡威不斜候、右者從往古等閑に相成居候處、當大樹朝廷尊奉之志厚、方今國事艱掌之半、御修補行屆候段、誠忠深宸賞被爲在、依之被宣下、

正月 職事清閑寺豐房

〔文久紀事〕於京都申渡候書付

二月十日元治

御刀白鞘、美濃國家信、代金二十枚

戸田越前守名代

秋元但馬守

山陵御修補之御用相勤、今般神武天皇御陵を始、千載を過候御場所、追々御修補御成功相成候段、朝廷御尊崇之御趣意深相辨、公武之御爲厚相心得候より之儀と一段事に被思召候、依之御刀拜領被仰付之、

同文言

右之通於京都申渡候事

神保重城守

〔實麗卿記〕文久三年二月十八日甲午略中頭右大辨長順朝臣來帙仰宣命趣并使事其詞神武帝山

告申御修補之由宣命使發遣宣命令作以權中納言藤原朝臣實明爲長官權右中辨藤原朝臣爲次官廿二日今日山陵使發遣

〔忠熙公記〕文久三年二月十四日長順朝臣方伺

太政官符大和國

應預奉告令修造神武天皇山陵荒廢事

使從二位行權中納言藤原實則

權右中辨正五位上兼行右衛門權佐藤原博房

右左大臣宣奉勅爲奉告令修造彼山陵荒廢差件等人宛使發遣如件國宣承知依宣行之符到奉行

正五位上行右少辨藤原朝臣判從五位上行左大史小槻宿禰判奉

文久三年二月十八日

十六日長順朝臣方山陵使宣命草ノ草別紙之通來

天皇我詔旨其麻掛畏岐欽火山東北陵爾申給波久申須高天原爾事始給比志神漏岐神漏美乃命

持氏吾皇御孫尊乃長御代遠御代止天津日嗣爾彌繼繼爾所知食來新御代中波其岐波乃亂逆

毛有氏諸陵寮乃官人毛何時志絕果氏每年乃巡檢使毛不巡檢成里御陵守留預人戶人共能不

堪守果留奴間御陵波里人乃薪樵流山止變里或波坂知呂爾作里周爾堀波埋水田止左變

果去都遠御代御代乃天皇乃高久嚴岐大御陵毛穢焦久微少久荒果岐如此荒果去流御陵等乃

穢惡清爾拂治米損壞平廣修堅志女官位姓名等平奉出志御陵乃御前爾令告申給爾仕奉

平爾安爾所念食氏天皇我朝廷道堅磐爾常磐爾謹給幸給爾又此御事負持氏大陵乃邊爾仕奉

平其人人乃覺其犯過事有遠見直聞直坐氏御心穩爾咎給波勤志令奉給爾畏美申給波久申

今度山陵御締向御普請等の御用被仰付候處、是迄御普請、其外御手傳の御用被仰付候振合と違ひ、御普請等仕方見込に御任せ相成り、國々へ家來差遣し爲仕立候事にも候間、重役の内重立引受取扱候者無之候ては、御用辨も立間敷儀に付、右和三郎へ取扱申付、萬端危畧の儀無之様、大切に爲取計被申候様被存候事、

間瀬和三郎義諸大夫被仰付、戸田家一門の事故、戸田大和守と受領有之、

戸田越前守へ、内願の趣達御聽御機嫌に被思召、今度出張御締向御普請御用被仰付候、右芙蓉間老中列座、周防守^{康直}松平申渡之、

前書間瀬和三郎、戸田大和守と改め、追て山陵奉行を命せらる歳俸米二百人扶持、萬石以上格、慶應二丙寅に至り、二百人扶持返上、宇津宮俵高の内七千石、新田三千石、都合一萬石の分地、諸侯の列に入る、

〔戸田忠友家記〕山陵修營ハ、年序ヲ經ズ速成スベク、且戸田和三郎へ奉行仰出サレ候旨御沙汰、國々山陵荒廢ニ及、多年寂慮不安ニ付、御修復ノ儀被仰立候處、去後八月遵奉、御修復御用、戸田越前守へ被申付候旨言上有之、御満足思召候、右御請ノ上ハ、不經年序、速成就有之度被思召候頃、越前守家族、戸田和三郎上京ノ旨被聞食候ニ付、於官家夫々御用掛被仰付候、然ル上ハ武邊ノ方奉行無之候テハ御不都合ノ儀被思召、幸ヒ越前守家族ノ儀ニモ候ヘバ、右戸田和三郎へ奉行被仰出候、仍此段達候事、

十月^〇文久二年
十月廿二日

戸田大和守諸大夫格ヲ命ゼラル、達^{文久二年}十月廿九日

今度山陵御取締奉行被仰付候ニ付テハ、御所向御扱方、諸大夫格今日ヨリ被仰付候事、

十月廿九日

被仰出候へば、必ず御爲筋と奉_レ存候、尤此節柄の儀に御座候へば、萬一國持衆より、右の儀天朝へ直願の程も難計哉に心痛仕候間、可_レ相成ハ早々被仰出候様奉_レ存候、今般厚き御沙汰の趣難有奉_レ存候間、愚意の趣此段奉_レ申上候以上、

戸田越前守

別紙 御陵御修補被仰出候へば、私爲_レ冥加右御用相勤申度、全く數代の御高恩を奉_レ報度微衷に御座候、尤も右御入用筋の儀、公邊御散財不相成様家來共申付工夫爲_レ仕度、私儀も元來勝手向不如意には御座候へ共、斯御時節御爲筋に相成候に付、如何様共力を盡し、家中粥を啜候共、尊敬心切を心掛修補可_レ仕候、尤も公邊御役人御出張にては、彼是御手重に相成、御入費も不少、御陵被爲_レ在候國々村里の者共、自然と迷惑可_レ仕、私へ被仰付候得ば、重役共先立風雨寒暑にも苦心奔走仕_レり、謹て修補可_レ仕候、斯奉_レ願候に付、是迄の流弊に習ひ、寸功を以て後賞を心懸候儀に無之、又名間にも無之、全く國家の御爲を存じ、此度被仰出候、流弊御一洗の一端にも可_レ相成哉と存_レ込候儀に御座候、尤も平常の御用筋にては、兼々必至困窮の勝手、中々難相勤候得共、別紙申上候通り、國家の御爲筋士氣振起の基と奉_レ存候、亦國持衆へ對し、御譜代の家筋にて、一廉の御爲筋不相勤儀、赤面の次第に付、必至の窮迫を顧みず、奉_レ願候儀に御座候、且攘夷の節に至り候ハ、御陵御用中にても早速先途仕_レり、報國の勳と仕度奉_レ存候、微忠の處御賢察被_レ成下、御陵御修補御用被仰付被_レ下置候ハ、冥加至極難有仕合奉_レ存候、尤數ヶ國所々の御儀に付、急々修補相整ひ申間敷、積年の丹誠を以て成就仕候様心掛可_レ申候、此段奉_レ願候以上、

戸田越前守

御附札 山陵御緋向御普請等の仕方見込に御任せ被_レ成候間、國々へ家來差遣し爲_レ仕立候様可_レ被_レ致候、尤も土地奉行へ可_レ被_レ談候、且又右御普請御入用金の儀、追て御下げ相成候間、御入用高等取調可_レ申間候、

書付

戸田越前守家老 間瀬和三郎

探索之勞、後世有誰亦舉之於口、何不發行鑄之銅鏡、以展喜眉、偶薩人贈其封內神代三陵圖、仍併增修斯書、以弘四方、其愚考與戶田氏進奏本異說者、宜速改之、但以抱病累月、懶事筆硯、始存其舊覽者、幸勿怪諸世稱宇都宮侯之偉効、顯績錄府以來未見其比也、實非溢美矣、嗟也余輩賤陋、非賢、亦何幸遭遇今日之盛典、追憶今古盛喜、罔已、重誌其由、乎簡左、永矢弗諼、時慶應二年丙寅之春、津久井清影跋、

〔嘉永明治年間錄十〕文久二年閏八月廿九日、戶田越前守山陵ノ修補ヲ請フ建白並指令、

此度御國政の儀、不憚忌諱申上候様厚く被仰出難有次第奉存候間、謹て言上仕候、略○中當今の急務は、士氣振氣仕候儀第一と奉存候、其士氣振起仕候には、反始報本より人情を厚し、忠孝を養ひ立候事、真に強國の基と奉存候、彼血氣の小勇より起り候強は、粗暴の所業にも至り、真の強國とは相成申間敷候、右反始報本は、祖先を不遺始本より大切に存候實情の厚より溢出る忠孝の勇を振立候、士氣盛強國の根元實滿と奉存候、此忠孝の大節を天下に示され、天朝御代々様の御陵多分荒廢相成居候、此儀古來有志の者、憂傷仕候段兼々承知仕候、乍恐萬乘御遺體を被爲納候處、荒蕪の儘にて被差置候儀、誠無勿體儀、恐懼悲傷仕候事に御座候、臣子の分にては一儀安心、難仕儀と奉存候、誠に今般從天朝御緣組被爲遊候上は、猶更御陵御修補の儀御執行被遊候様奉存候、右様相成候ば、乍恐今上皇帝には、亘遠莫大の御孝道に相成、於御當家は、廣大の御忠節相立、官武御一和の御趣意彌以相顯れ、且官武御一同に、忠節の道を以て御垂教被遊候へば、海内一般御德化に浴し、反始報本の情厚く、真の忠孝の士氣振起可仕、且御陵御修復の事、鎌倉以來數百年來絶て無御座候處、御當家に至り、御修補相成候へば、千萬年不朽の御盛功にて、御忠義の道相立候て、天朝の御氣色に被爲叶、天下の人民一統感戴仕り、武威も無限に相輝き可申と奉存候、依之御陵御修補の儀ハ、御強國の基、則天下無雙の一大成の事と奉存候間、追て御上洛前に、御修補の儀も

ク様可作、入口ヨリ内ハ不殘石ヲ敷可申、

右山陵之儀ニ付、神道兼職藤田虎之介ヘ申聞吟味致セ候處、左之通り也、

山陵之儀、古制ニ御本づき被遊、石垣堀等ニても御築立被遊候尊慮と奉存候處、此間中大和國の地理ニ拘り候書物類、大抵残りなく吟味仕候處、何れにも神武陵の地所しかと相決し兼申候、先日被仰付候通、七郎衛門河方ヘ問合候間、近日何と歟申來候儀とは存候ヘ其十の八九は分り兼候儀と奉存候扱疑はしき地所を推量にていよくこゝと申す様ニも罷成兼候故、つまる所疑しき地所一二ヶ所一ト通りのかこひニても被遊神武陵と申傳候場所故、旅人等入こみ不申様、石表ニても御立被遊候外有之間敷、仍而は山陵の御修復は出來兼候故神武田邊へなりと、檀原の神宮御建立被遊候外無之様奉存候、

藤田 彪

〔議奏言渡〕文久二年閏八月廿一日武傳被附

山陵御取締之儀ニ付而者、是迄既ニ御取調御世話も有之候得共、今度改而國々山陵御締向御普請御修復之御用、戸田越前守江可被仰付思召候間、此段御達置可申旨年寄共より申越候事、

閏八月

右以大御乳人、披露被返出返却候、

〔陵墓一隅抄〕安政己未年〇六夏余負終身幽蛰之咎、時年六十六、乃絕思於塵裏、日檢山陵筆記、其中

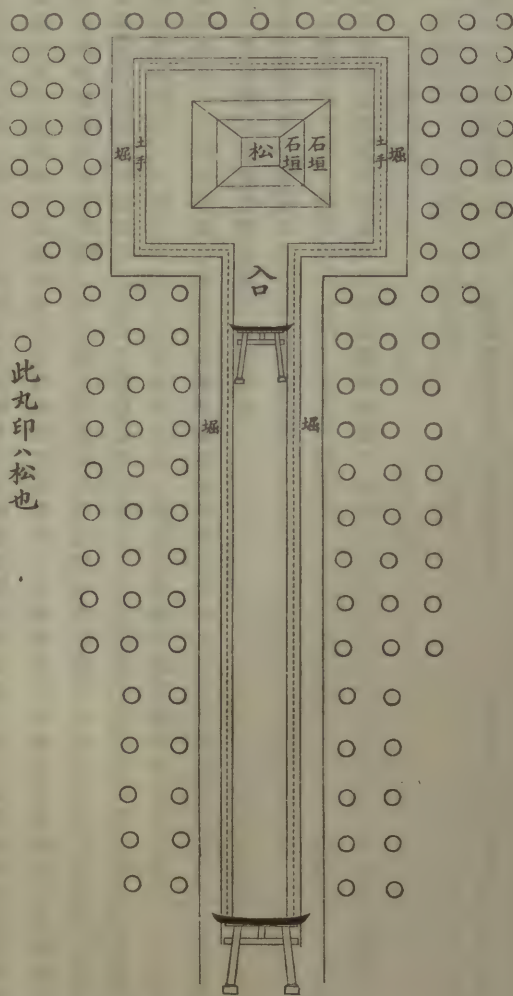
謀抽釋此書及聖蹟圖志、以遺于後世、心獨謂以寫本囑故舊、一旦嬰水火、悉付烏有、更竊謀銅鐫、人或憫之、捐貲助其志、遂又欲依其人秘之于竹生島神庫、以爲身後之頒布、而未果其事也、文久壬戌載、宇

都宮侯田氏請任諸陵修補、贖其族戶田和州代、俟率大小臣屬入京、適余輩遭赦免罪、尋命充檢校參

謀、朝廷賞下褒章、抑亦望外之榮也、乙丑年〇慶應之秋、修陵功成、宇都宮侯及和州以下、重所褒賞、或勸

云、今也百有餘所之諸陵、崇麗踰越前古、彌年度日、藉里老土人、遂至不知昔日荒廢之狀況、吾子積年

候へば、猶當禁仙洞などの儀は勿論、常ニ吟味は六ヶ敷、又火急の節はとても吟味間ニ合不申
 と申事ニ成行候半、故神武皇の山陵を取定メ置候へば、跡々は右ニならひ出来候半と被存候、
 古例等たとひ分り不申候ども、是は全く申さば上への飾にて、御手厚くさへ出来候は、古例
 ニ叶不申候とても、先ヅ不苦様被存候者也、



○此丸印ハ松也

一山陵ハ下ノ石垣ハ四方十間四方位、高サハ三丈位、中上ノ石垣ハ下ノ石垣ニならひ可然作ル、
 三段ノ上ヘハ松ヲ植ル、山陵廻リ土手ノ上ヘハ忌垣を可作、入口ト認候處ハ忌垣ヘ門サシテ開

ざる御儀と奉存候。○中略此度感應寺御建立之儀などは、西丸様殿。○家御厄年故にも可有之哉。又は御武運御長久之御祈願にも可有之哉と推察いたし候處、其上にも帝皇始祖之御廟御格被遊候は、まづ御至徳相顯れ、御武運彌御長久に可有御座と存候間、何とぞ京都へ被仰出、御修復被爲在候様不堪至願候。日光、兩山。○寛永寺、増上寺、などの御儀と違ひ、古制御斟酌之上、御格被遊候は、格別の御入用も有之間敷哉。奉存候、夫とも公邊にては御故障も御座候は、拙者より公邊へ相願候ては如何可有之哉。鹿島并領中大社の御札、追々差上來り、尙又御厄年等の節は、右之外にも伊勢にて御祈禱爲仕差上候類も候へば、爲冥加太祖の山陵御修葺爲御濟にも相成候も、日本史等編修いたし候廉へも相當り、面目無此上事に候、御承知之不經濟、莫大の入費も有之事は、所詮不相叶候へ共、格別之事にも無之候間、何れとか相辨可申候。神武天皇元年より天保五年迄は、二千四百九十四年、來る子年にて、二千五百年に相成候處、當年は西丸様御厄かたゝ故、當年より取懸り子の年には御祭にても被遊、此上皇統の無窮、武運の長久御祈願も被爲在候は、實に目出度御事に可有之と存候間、心願之趣有りのまゝ相認申進候。御存分御差圖の上、何れの道なりとも、心願成就いたし候様、御工風偏ニ致企望候。御模様次第別に書取にいたし、家老御宅へ差出候とも可致候。

〔山海二策上〕一山陵御改之儀は、如此にも相成候は、可然哉と一己。○昭徳川の了簡にて認候、圖面の覺、但し此圖面は、加州は勿論、誰へも未見せ不申、全くの了簡にて認候、置候事故、以後御改にても相成候節は、衆評の上にて、御改に可致候。

本文山陵之義は、故實吟味いたし候は、定て色々の説も出可申、第一には久敷打絶候事にて相分申間敷、又常には右様の事穿鑿も有憚、又火急の節に至り候ては、吟味も間に合不申などいふ事にては、いつとても出來可申時なければ、先づ本文の位にもいたし置候て、追々に古例等御たゞしに相成候は、可然哉に被存候。神武皇の陵にてさへ機會をのがし候ては、六ヶ敷

林の間、或は荒廢の寺院の内などに僅に存し、雜人土人の爲に犯し穢さるゝ類多し、又上古の陵には、匹維に壘して小丘を構、其營殿に數千載の後迄、方境最分明なるも有、其類は土人妄に穿つ事も不能、和州畝傍の邊にある陵は凡如此、それだに石棺を穿ち、あばきて、内に詰たる朱を奪偷も有し也、斯陵の傾壞するを開るべきに非とて、享保三四年の頃、其御沙汰有て、京師兩廳の與力石崎喜右衛門、入江安右衛門に被命、畿内近國に在處の陵を點檢させられ、各陵圖に寫して、玉垣石垣等の修理を積、又安定ならぬ事は、其邊の領主の方并地下人へ尋土地に隨て修理の品を被究、然れ共百餘皇の陵、其上往古の事なれば分明ならぬ事數多有て、年を超て不成、後年同與力加納武助、飯沼助左衛門是を繼て、其遺るを補ひ稍改畢て、陵毎に制札を建、或は玉垣、或は石垣等を修營し、後年破損に及ばず、所の者より可訴旨令して、右兩人打廻りて檢之、後來妄ならざらしむ、但適邊國に在陵の分は、京都より不指揮、是は其領の者方へ其砌達せられしや未考、其兩京所和泉寺町奉行山口安房守、諏訪肥後守なり、○又見享保年間山陵誌

〔烈公行實〕夏四月五年○天保參府、秋以太祖神山陵荒墳、臣民悲慨、故建議于幕府、欲及二千五百年期、

自太祖辛酉元年至天保十一年、歲數實二千五百年也、圖其修復、以祈寶祚無窮、武門昌熾、蓋繼義公之遺志也、

〔藤田彪手記〕天保五年甲午は、將軍家世子家慶公の四十二歳に相當せし年にして、世俗忌み嫌ふ所の厄年なれば、其厄拂ひの爲めにする所なりとて、大に感應寺といふ寺觀を建立して、冥福を修むるよし聞えければ、此時こそ山陵興復の機會なれと思ひ立ち、幕府の老中大久保加賀守忠真に書を贈り、始めて神武陵修築の議を陳べたるは九月十三日なりき、其建議に曰、拙者如きものにては申も憚多候へ共、御當家御至德之儀は、三分天下有其二、以服事殷と申處には無之、日本國中誰有之、將軍家の御下知を受不申人は一人も無之處悉く天朝を御尊敬被遊、鎌倉室町等とは格別之御儀に被爲在候故、御武運益御長久にて、二百餘年の太平を被爲保候段、實に偶然なら

右五帝陵三ヶ所一園ニ有

崇神 天武 持統 一條

一ヶ所文武 二ヶ所 二ヶ所

景行 欽明 堀川 後朱雀 後冷泉 堀川

一ヶ所 一ヶ所 後堀川御骨後睦親御塔ニ納ルノヨシ

二條 近衛 後伏見御骨仁明御塔ニ納ルノヨシ

右十四帝陵七ヶ所難一決或ハ一所ニ御骨ヲ藏ムト申傳テ不分明、

一九帝陵所園有、仁明鳥井垣等 鳥羽中門 後白川法住寺堂 花園有微笑苑堂中ニ 四條越前

唐門ノ中 後土御門同 後柏原同 後奈良同 正親町同

右園有來ニ付不及結垣、

一十二帝 仁賢 陽成 宇多 村上 花山 後一條 後三條 後深草 伏見 崇光 稱光

六條

右陵所不知

陵八十二ヶ所結垣出來、

九ヶ所園出來不及結垣

十三ヶ所難相知

右ハ松平紀伊守信 京都所司代中、蒙關東御命吟味之帳面ヲ以テ拔書之、此外ニ陵地面之圖

有之云云、其後有德院殿之時又有御吟味云云、先王廟記ノ中ヘ以朱書入置了、

〔翁草三十八〕陵之事

近世の天子は、洛東泉涌寺に陵赫々たれば、汗穢不淨の論なし、其餘は所々散在して、或は曠野山

郡勢力村天皇屋形山、同國板野郡大寺村金泉寺、同郡里村、淡路國三原郡中島村、津名郡柳澤村とも七所は、山陵のよしをうし傳ふるといへども、何帝の陵なる事たしかならず、もしくは南朝の陵にもあるべければ、これも垣牆をさうけしむとなり、

〔二老略傳〕柳澤氏、廣澤○細井先生に武備を任ず、○中添るに天下の寺社の事を司らしむ、天下大

小となく柳澤氏に歸す故なり、時に朝廷上古の諸陵、亂世を経し故やらん大に廢し、其處を失ひ、其號名をも失ひ、破たる御陵などを鬼陵など、號し、農民穢すもの多し、廣澤先生其兄細井甚藏芝山是を歎じ、廣澤先生をして公に告て、此時より初めて諸陵周垣の絶たるを繼、廢たるを起したる事舉て數ふべからず、諸陵周垣の記あり、九阜先生○知家家藏なり、

〔先哲叢談後編〕細井廣澤

名知慎、字公謹、號廣澤、○中通稱次郎大夫、遠江人、仕于河越侯、松平美濃後給仕于幕府、○中廣澤仕

子河越二年、進爲鐵砲隊長、步卒二十人屬之、領下、兼掌海内神社佛閣勘合條制之事、故廣澤能知其舊貫、班格該管隸屬等之故、嘗歎保元以降六百年、累帝諸陵、屢經兵燹、失其所在、既不知其陵者二十五、告之侯、建議、據古史紀傳所錄、搜索其不可知者、果皆得其所、在、而後修葺其屋宇、或造石垣、三年諸陵全成焉、實可謂繼廢興絶也、故當時命諸臣修撰歷代諸陵修垣實記五十卷、其事皆本於廣澤所建議矣云、

〔寶山外志〕二條陵、在船岡東北一町、元祿戊寅、公府修陵、地頭

〔寶石類書百二十〕御代々御陵

八十一帝陵場所 八十二ヶ所内嵯峨 淳和 冷泉 後鳥羽 土御門 龜山

右六帝葬所藏所或車口ト申傳テ、二ヶ所有之、

嵯峨 土御門 後嵯峨 後光嚴 後圓融

なかりし所の民^〇の田^〇とよび侍りき神武を傳へあやまると見えたり京兆の命をうけて土を重ね垣をゆひて土民近づく事を得ず其外あまたの陵も皆かくの如し誠に昭代の御政おほき中にも是等こそ唐土までも聞えて目出度御事なめりといふ知慎心の中におもひ合せ侍りぬされどことに出すべきことならぬばげにもとのみ云てやみぬかくて曉ちかきころ夢に我兄を見侍るに其よはひ三十にたらぬほどに見えて容貌ことにうれしげにうち笑ひ給ふが忽然として見え給はず夢心地にまことに世をさり給ひし人也とまたはしく悲しかりしが又まばし有て同じさまに見え給ふが夢に見奉るとはおほけれどもかくうるはしくよろこばしき有様は侍らずまさしく是はさのみのくれ帝陵の御事ども申侍りしを悦給ふならむとおもふになつかしき事も又やるかたなし

元祿十二己卯歲九月廿八日雨そぼ降日淺草の郷如意菴の南の窓のもとに識す

細井知慎

〔常憲院殿御實紀^{三十九}〕元祿十二年四月廿九日こゝに本朝元弘建武の大亂以後古帝王の寢陵荒廢して其わりかたしかならず樵牧雉兔の蹊徑となりき然るを數百年をへて修治する事もなし是は一大關典といふべしまかるを當代威に思召旨ありてこの年頃御料は代官私領は領主に仰ごと下りあまねく古跡を搜索せしめ藩籬をさうけ權采を禁せられしにこの月その事成功せるよし京職松平紀伊守信庸より注進す^{略中}すべて神武天皇より後花園院まで百三代重祚二代^{齊明}と安徳天皇を除きて外崇神仁賢繼體欽明陽成宇多村上花山一條三條後一條後朱雀後冷泉後三條堀河二條六條後深草伏見後伏見崇光稱光の廿二陵は湮沒して其跡もさだかならず現存七十八陵のうち十二陵は舊垣あり六十六陵はこたびあらたに表章せられぬ此外阿波國麻殖郡木屋平山同國三好郡白地村雲邊寺は後龜山院の御陵なりと申傳へたり又同

出侍りぬ、其秋我兄の一子世をはやうせり、又我兄も大にやまひつき給ふ、其折ふし我主知愼に命じて帝陵の御在所を考へしめ、まさに諸陵に事あらんの御あらましなければ、いそぎ我兄にかくと告奉りぬ、我兄やまひの床にありて手をあはせ、聖君あり、賢佐有時なる哉、知名死すとも骨朽ざらんと感涙をおとし給ふ、又先考先妣を拜して、其教誨によりて、此心をけふにたもちて、此時にあへりと大によるこび給ふ、知愼心におもふ、此大善事をなす人いかで福壽を得ざらん、疾病平安日をさしてうたがふべからず、且又子孫も出来て必繁茂せん、心肝に銘じてたのものしかりしに、いく日ならず、八月朔日四十二歳にてうせ給ふ、嗣子さへなくていふかひなき事どもなり、翌年寅の八月に、知愼主命により禁廷にのぼりぬ、爰かしこ帝陵を見奉れば、皆艸の周垣を新に作れり、人にとへば東武の尊命有てかくのごとし、世に有がたき御事也、國家の御祈禱、又此上有べからず、昨日今日までも、土人等登臨の處として、牛馬に草かひ侍りぬ、まことに今おもへば淺ましき事なりしといふ、さてこそかくやと思ひて、有難きに涙とゞまらざりし、又翌年卯五月、我主君知愼をして、此一冊并一紙をかくせ給ひて、是なんぢ兄弟の衷心より出てかく事ゆきぬ、爾も一通を寫して家につたへよ、又我家乘にも書載せよと宣ひぬ、我兄世にましくなばと思へばとゞまらぬ涙也、さるによりて一通を繕寫して、まづ我兄の牌前に供へ、且又我子孫に傳へて此美を殘さんと欲す、夫匹夫の志をおこして百王の寢陵におよぶ事誠に有がたきためし也、もろこしにて陵墓を修せし事、蕭統の文選にのせ、又宋の帝の陵を修補せし胡元の時、趙人有されども、それは例もかはり、わづかに一二帝のみなりしをだに、萬世に傳へて美譚とせり、我兄子孫あらましかばと思ふもはてしなき憾や、今年大和の國宇多の住人我同僚と成侍る、九月廿七日その人のがりまうでけるに語ていへらく、をどゞし帝陵の御たづね有て某も役にさゝれ、大和路の舊蹟悉く巡り侍りしが、神武天皇の陵、畝傍山の東北におはします、田の中にてゑる人

御醜類之窺竄爾後置宇佐使奉承神勅其功可與天智天皇討賊撥亂同奉稱者歟而源賴信及義家仰以爲軍神未詳其義若論軍神在古軍師道臣命及大將軍日本武尊耳凡厥流弊因襲不改蓋以其初尊祖之教有所未備歟願神武天皇神殿宏麗盡美而又修天智天皇廟倅壯大於應神天皇宮可謂盛德大業其垂者矣世人知拜神祖天照大神而不知拜帝祖神武天皇知敬近世之陵墓而不知敬先王之山陵夫繼絕興廢聖賢所褒伏望追尊太祖祭其所祭追求諸陵修其可修示孝於萬世知報本之道垂教於不朽致追遠之誠謹言

○按ズルニ、本文ハ水戸藩士森尙謙ガ幕府ニ建言セント欲シテ草スル所ナレドモ、故アリテ果ザリシト云フ。

〔鹽尻〕前王舊陵

元祿十年、和州所在の前王舊陵、更をして其圖方境を記さしめ、柳營の御府に奉らしめたまふ。其圖の詞官梨木家におり

〔諸陵周垣成就記序〕我兄芝山先生、名知名、字孟實嘗大和國郡山にすみたまへり、古の帝都なれば諸陵こかしこにおはしなす、世くだりて土民攀躋り、もしくは發ぎなせして、あさましきことを深くなげき、其國に君たる人、其所に令たる者の、世々を重ねて、心なきことをかなしみおそれ給へども、力に及ばぬ事なればと打過したまひしが、元祿十年の春、知愼がもとへ書をよせたまふ、よみて見れば、和州におはせし時、おもひ給ひしこと、いかいづらねて、今聖代にあたりて絶たるを繼廢たるを興し給ふ、爾がつかふる主、澤○柳氏は當世の柱梁として、わきて神祠佛寺修造の事を司りたまふ、又幸になんぢ其事をあづかりうけたまはるなれば、時ありて此事を聞え上てんや、萬乙此事成就せば、いかなる御いのり御造立にも踰なんなせ有、知愼かゝること申出んは、品をこえて其恐すくなからねど、かばかりの大善事をいかでやむべきやとおもひて、事のついでに申

一本御塔ト申候者、往古ハ三重之塔ニ而、本尊ハ坐像等身之阿彌陀如來、塔面東向ニ御座候、是又法皇御造營、御奉行藤中納言家成卿保延五年二月廿二日、御供養御導師覺法親王、保元元年七月二日、法皇崩御、依御遺詔、御尊骸ヲ此御塔之下ニ奉葬、則此御塔内ニ法皇御宸影奉安置、本願尊儀ト奉仰候、此御塔モ又天文十七年回祿仕候故、慶長十七年九月、建立仕候假堂ニ御座候、當御塔ニ六口之禪衆ヲ被爲置、則當時現存仕候、本御塔六ヶ院ハ、其遺跡ニ御座候、

一新御塔ト申者、是又法皇之御慮ニ而、美福門院御藏骨ノ御爲ニ、二重之多寶塔御建立、本尊ハ坐像等身之阿彌陀如來、塔面東向、御奉行少納言入道信西、保元二年十二月二日、御供養御導師、鳥羽院、第五宮覺性法親王、當御塔モ又本御塔ニ准ジ、淨侶六口被爲置之、則當時現存仕候、新御塔六ヶ院、是其遺跡ニ御座候、然ルニ美福門院薨去之節、御遺命ニ而、御骨ハ高野山ニ被爲納候ヘ共、御骨如被爲在、可奉供養、旨蒙給命候由ニ御座候、其後長寛元年十一月廿八日、近衛院御骨ヲ當御塔之下ニ奉納候由ニ御座候、當御塔ハ天文中回祿之變無之、往古之儘ニ有之候處、慶長元年閏七月十二日夜之大地震ニ顛倒仕候、同十一年五月、豐臣秀賴公、如往古多寶塔御建立、奉行片桐東市正且元ニ御座候、

〔儼塾集〕恭惟吾朝天孫之正統、自神武至今、上一百十四世、二千三百五十餘年、皇胤相繼、寶祚永保、可謂功德過於三五矣、所恨綿邈之間、陵墓或失、其地舊史所錄難推求焉、吾朝古先哲王、邦有大事、必告祖考山陵、事之如生祭之如在、遣使奉幣、置陵戶守之、每年修理、其兆域垣溝、故明德昭々、峻極于天、夫神武天皇、開吾大八洲、殄盡兇徒、創造洪基、其功德巍巍、萬世仰之、宜敬其廟、嚴其祭、光被威靈於億兆者也、夫上報本追遠之典、未全則下亦效之有甚焉者、在昔平清盛當祭其所出桓武天皇子葛原親王、而何致敏嚴島明神、源賴朝當祭其所出清和天皇子桃園親王、而何厚信鶴岡八幡、噫、二子不學之失、延及後世、不辨尊始祖之道、不及藤原氏奉崇春日談岑之爲得道也遠矣、且應神天皇者、自宇佐託宣、

壞者、令守戸修理、專當官人巡加檢校。

〔續日本紀文一〕三年十月甲午、詔赦天下有罪者、但十惡強竊二盜不在赦限、爲欲營造○齊山科

智○天二山陵也、辛丑、遣淨廣肆衣縫王、直大壹當麻真人國見、直廣參土師宿禰根麻呂、直大肆田中

朝臣法麻呂、判官四人、主典二人、大工二人於越智山陵、淨廣肆大石王、直大貳粟田朝臣真人、直廣參

土師宿禰馬手、直廣肆小治田朝臣常麻、判官四人、主典二人、大工二人於山科山陵、分功修造焉。

〔續日本紀聖十一〕天平六年四月戊戌、地大震、壞天下百姓廬舍、戊申、詔曰、今月七日、地震殊常、恐動山

陵、宜遣諸王真人、副土師宿禰一人、檢看諱所入處、及有功王之墓。

〔續日本紀考證五〕諱所、蓋謂山陵歟、八處亦未詳其所指言。

〔續日本紀聖十四〕天平十四年五月癸丑、越智山陵○齊崩壞、長一十一丈、廣五丈二尺、丙辰、遣知太政

官事正三位鈴鹿王等十人、率雜工修繕之、又遣采女女孺等供奉其事。

〔文德實錄〕嘉祥三年四月乙丑、先是深草陵○仁、宰塔婆所藏陀羅尼自發落地、遣參議伴宿禰善男

就加安置。

〔親長卿記〕文明十七年十一月十三日、今日舊院○陵山作所○慈田院寺內、本堂北、廻垣破裂、可被造直、

民部卿與予可見廻云々、仍罷向了、凡如意見了。

〔安樂壽院由緒書〕無寺務本寺真言宗、山城國紀伊郡竹田安樂壽院、○中一當院儀者、鳥羽法皇城南

離宮御院地之御佛殿也、保延三年御造營、御奉行藤中納言家成卿、同十月十五日御供養、御導師白

河院第四宮覺法法親王、勅會舞樂之曼荼羅供被行之、其後年久敷相成、及破壞候處、建武二年九月

廿二日、仰前左馬佐、令修造給、又天文十七年回祿仕候ニ付、同十一月三十日、忝再建之御綸旨、賜之

候、然シ年ヲ經候儀ニ而、其餘之興廢分明ニ難相知、當時有之候諸堂坊舍ハ、多ク慶長頃修造仕候

假建ニ御座候。

所憑決不可行。凌辱如右。蓋深草木幘。或仁和寺諸地之陵墓被剝蝕也。由於伏見聚樂之營築。至此上來之諸說。一一脗合。龜前堂之爲桓陵。山本院之爲守司。又秦氏及長三等之爲隸屬。判然而定。竟乃多日之疑。驟前洗。斷乎自得。因不自揣恭。欲作聖蹟圖志一編。以頒告四方。成稿有日。續當繕寫進呈。嗚呼。汗陵者之病癩。秦氏之絕祖。實天誅灼灼者。可不憚畏哉。今夫傭夫臺奴。逢佳時令日。猶獲上墓。望墟布香火陳酒菓。以慰其先於地下。赫々皇祖橫遭犯。噩失威靈之所託。某恒念之。痛息慨嘆。殆忘起臥。方今財路日繁。錫租之地需貢賦。封外之土羅金穀。其下不堪誅求。罪逆非理。往往而出焉。陵墓之墜實根乎此。犯者固雖不容於誅。上之人重設其格之章。誰敢穢之侮之。仰望閣下。傷陵所湮。蟻如彼。恕愚忠質。直如此。指摘典故。參畫公卿。併與閣下向來所自考定。仔細收錄。輸送大朝。載之簡冊。納之秘府。設必依舊制。不許所告訴。先簡拔眞陵顯著者。宜喻國侯邑主。厚行奉護。又其羅穢辱者。覆土石。禁芻牧。柵埒皆如初。以埃異日之裁命。其小國無租廩。及係寺觀之封內者。所轄官署。便宜共給吏者。常以歲時按部。專察奸民不法。且後村上後龜山二陵。本在橫斥中。請從今列之于諸陵。速喻其郡國同加葺理。承者苟有人心。皆驩欣順旨。若夫寬平之於仁和寺。弘仁之於大覺寺。兆域崇侈。時饗不闕。并非今日考問之例也。但有司錄之。巡視勿失其時。則長免可傷之患。今也中外多事。度支告急之時。雖然閣下少同慮。以計事宜。則不至多耗錢穀勞吏民矣。在古承應帝○後光明之崩也。買人魚屋某。盡傷天子火葬之遠祖。制威奮鳴。志有司廟廊善之。非禮遂復古典。又河尻氏吏五條日加。禮管內之山陵。令民知其可敬畏。以垂千載不遷之法。後以善政多。改任松前。嘗請造巨艦。攻山丹。其忠勇凡如此。時人錄其著者。傳之乎世。惟修陵一事。遺而不載。爲可深惜。況公侯有土之君。於封地之陵墓。闕其崇禮。而可邪。願閣下寬其罪。某誠恐以聞。

安政二年二月十七日

官長即淺野中將也。

〔延喜式二十〕凡諸陵墓者。每年二月十日。差遣官人巡檢。仍當月一日。錄名申省。其兆域垣溝若有損

一之谷其爲域內可知也。又古記載柏原陵從東邊二町許入在稻荷山南野今之御草山古之爲柏原是爲其證。大島武好山城名勝志云大谷口山有向原者是恐柏原舊跡也。又並河永山城志云柏原野在大龜谷北土人呼乞弓原類聚國史曰延曆十四年八月遊獵于柏原野又僧白慧山州名跡志云柏原地名曰谷口同所但此號今不稱中比轉云癩病原其故地在御陵土人不知之。瘞穢者間爲癩病候而號也谷口之爲柏原此丘之爲真陵是爲其證其佗參證數柄今不煩條陳別欲具一費鳴痛哉聖王之山陵名實兩廢至難父老田坡朝夕來往者不認辨之所以然者何請姑援他辨之隆治以還帝陵類圯相踵如上演而大和地爲尤甚猷廟時事樂府進奏云大和國帝陵無之元祿頃京兆尹松平源公謂曰前年事樂以何術隱伏其難隱伏者有司猶如此下情奚足怪往昔喪亂不失巍々之姿却失於昇代檢陵之日者亡他檢吏之所臨視驅役下民推究口狀來往釋釋不一而定土人不堪勞擾相爭匿真欲以免其苛督也草山志有云深草山者東西十町餘南北十八町餘舊爲深草住士秦氏之私德慶長頃其家獻馬糧於烈祖歷朝定以爲貢草地京兆府世下制章禁侵犯山中原谷凡可五十皆古跡也此記載匿數多之古跡或亦指擬陵地曰柏原僉匪徒之欺騙同和州某便遣人于秦氏後長谷川某乞貸御草山圖其家秘惜不出強請閱之曖昧罔標某夾然自失于豈偶聞山本院秀建者語遂獲其驗左傳者道曰山本院實淨藏之冑淨藏嘗以業力安法觀寺塔天子賞以深草山之地嗣法相傳住于龜前堂原中屬坊字文書悉付兵火子孫遂衰世臣秦某幸之擅奪賜地獻諸公所關原役以功已爲其頭目邇古谷口全村本垣陵之守戶詣今彼家有凶禮閭鄉來會葬事秦某亦佐執繞因示以正嘉二年諸陵雜事記一通中有云柏原下司大進阿闍梨其子永秀世又稱元祿檢陵時秦某怖奸詐之術與里人長三相談指點他山爲帝陵併沒柏原之稱呼爾後其家果厲並臻子孫不祀餘歿之所延他人有室者亦皆死于狂癩癩疾乞弓原之名果不浮今也龜前堂原及山伏家變爲野榎鉅竹只古松數株財不失舊裝會泉涌寺土木之功與山伏家古松亦所充用嘗聞伐此樹時役夫有蒙傷害者假令不真陵一旦神明之

足答上帝之眷相清邊陲之殺氣愚民之貪利帝陵后墓不識那物有盜土石斬樹木暴露歛具至甚者起亭樹窮宴佚於其上某偶觀之不覺汗洒透衣今舉狀其近以仰遠方之思察切祈閣下少垂鑒念伏惟近京如深草木幡諸地桓武以下中葉妃嬪勳戚之壘壤相望郊野歷年之久遺址存者無幾耳近時陶瓦多取材此或往々壘開田園林藪山丘漸作平野封隧奄爲稻麥嗟取陵上一坏之士吾民間棲息之屋巨罪章々壘粉其軀何以足慰神威謹按畝火山之神武陵柏原之桓武陵此帝陵之尤者宜超他顯異崇禮今此二陵實滅厥所國家之闕典莫甚之某不量其分先以檢尋柏陵爲已務或勞力履歷或覃思舊志其事雖細微勤苦不敢讓故人概昔之論者皆依準僞陵費嘴辨此即所以不得其真也一云今伏見城山古御香大龜谷總柏原之地也然而陵之所在爲城中央築城時陵墳必矣一云小栗栖管内一丘稱穴兜者即是也一云谷口人家之東左傍俗呼山伏冢即陵也帝潛龍時稱山部山伏蓋山部之轉叱也以上紛綸不決其徒殆倦搜索遂泥執於山槐記中柏原者伏見山松原中也又入伏見柏原內等之章句雷同於松○松下蒲○蒲生二氏者有之按城山古之木幡山巨幡墓及門址今現存焉陵壤之說乃不取也仍憶雄略紀載深草垣器條曰山脊國內俯見古者深草都稱伏見三峰相荷社今稱伏見稻荷此其類也然則山槐記之伏見山恐非城山矣以愚見論之山伏冢此爲初葬之陵冢畔有溪流一帶常史載大同元年十月御改葬事註云是歲大水或山陵壞損以故有遷築之舉者此邪又其東南有稱龜前堂原地豐公居伏見時穿其丘後通道山階自是遂失其位置惟南面存巍巍之狀恰與延曆年間之制合又其東方有小丘呼曰御與冢以此等人之指斯地爲葬所不亦宜哉是爲其一證陵本名柏原今偏稱擬陵不唱他以故世俗莫知谷口之爲柏原者而其邊總稱御草山廣袤東西六百十六弓南北千九十八弓中有深草管地之犬牙焉東踵于向原頂上西踵于大龜谷內大谷町此所上古和州之官道南踵于小栗栖道右北踵于瓦町東北峰四疆俱十一町乃合於兆域之古法而陵固倚西被置域內亦以有山谷經界不釐正故或云東八町西三町又云加丑寅角二岑一谷今其北方有谷呼

洛西野人津久井某謹獻書官長閣下。○中某少小最耽典籍特注心皇朝史乘偶閱山陵志中言帝陵頽壞之狀未嘗不掩卷而泣下也竊自謂方今聖上撫運百廢興發獨山陵一議未足飽人情也饒敏官家不暇修之苟食其土者何不盡尊崇焉乎哉欲試以此于諸侯顧職非其人加以吏道之倥傯未公語人矣居諸往苒空抱素志某昔以廕補蚤塵吏曹末而於材無可取於德無可議況亦天與疲弱不欲永墮賢者之路屢移病乞休退職以來周流畿甸歷拜累舉山陵因記其模制以備異日之采要越壬子春山陵點檢之命下不圖以賤息充奉役某喜出望外私於使者曰凡墳陵事蹤跡紛拏茫亡確據者不特爲少矣參稽咨謀不積以日月未輒易決定古今論者駢說互出彼此牴牾大都雖傳故家之筆札藉父老之口實要之不過臆度偏見之二今觀元祿享保之論定似少有粗漏試言其一夫寬平幽宮奉子仁和寺大內山蓋下火所在于其山後宇多野衆之所仰瞻和州適有同名以故至途謂大和國宇多陵所在不知夫審決正僞必無遺憾也識者猶觀之而況其他哉宜召學問淵博通曉今古者以插之行問兩府故事凡審實機密悲田院垣外屬例任之今亦踵襲舊制以至尊陵墓付之乎捕虜賤人恐非所以副國家恭順之意也爾曹其心之庶依學士柴野氏探訪和州故事分差使臣於四方檢討陵地嘗薦其說祭酒林君時以儒官無堪其任者弗錄用某甚失望然守志彌堅專尋振援之路矩意閣下誤聽不以某驚下訪以當世某喜懼交荷具陳帝陵頽敗之狀閣下每言稱善當是之時某心竊誇寵榮以爲帝陵事必成於閣下之手亡幾果有檢陵之令躬親巡視近郊特簡僚屬中縝密純良者贊協其議包容不吝於是好古篤志之倫爭獻所見僉願爲閣下用某領命以來感戴罔鄂刮目以望事成仄承大朝重發令曰當今以國用叢脞庶績蠅毛姑因循元享之舊制補理從前之垣柵又聞坂府奉令既就祇役若然者山陵志已降諸家所述作當真不問是狀某之所大望乎今日也恭以聖子神孫臨御宇內奕葉累世宰制生民河山之固六服來同帶礪之誓九州奔走可謂皇統億載天下一家者而山陵之典鑒未備具某竊爲明時情之比年蠻夷並進民情不靖朝廷大有事于群神於斯時也決行檢陵垂禁禦之法於將來實

陽成院崩御之時分出來、其以後破損にて、雨露も掛り候體如何ニ候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

〔朝野群載別八〕諸陵寮

請特蒙天裁被下、宣旨於五箇國、且停止國司收公、且給官使任官省符條里坪附入口要劇陵戸田作人等募權勢通避地子狀

陵基所在

山城國卅四所 大和國五十七所 河內國十五所 和泉國四所 攝津國一所要劇田廿町五分

紀伊國一所 近江國一所

右謹檢案内、被始置陵墓之後、年代尙、兆城東西南北陵戸、并要劇等田具見格式、而近代之吏背制令、悉收公、陵戸田之丁地、已以減少、只隨國司之所行、不辨陵戸之地利、因之兆城垣溝無久修造、牛馬狐狼有日夜棲、抑五箇國之中、和泉國四箇所陵墓者是、屢中仁德反正三帝山陵、垂仁天皇第三皇子墳墓也、而件陵戸田、前代以往全無收公、有信良兼二代之吏、忽以收公、論之政途理可然乎、但至于山陵兆城陵戸、并要劇田者、神社佛事權門勢家、不可成妨之由、度々之官符、嚴制稠疊、作人縱雖愚暗、國宰何乖憲法情案事情、刈伐山陵草木、闌入兆城內之輩、尙有其罪、況置陵戸田、令守陵墓、損破之時、令守戸修理、專當官人、每月一度、可加巡檢之由、式條炳焉、是則制令設而不行、人心口而無慎、爲愁之甚、最在此事、望請天裁被下、宣旨於五箇國、裁許件條、將令知陵墓之嚴重、仍注事狀謹解、

康和二年七月十七日

正六位上權助藤原朝臣資懷

正六位上行助源朝臣伊實

從五位下行頭藤原朝臣清俊

〔陵墓一隅抄〕上官長論山陵殿

ホヤケニモノシ奉ルモ勿體ナク、スヽロニ涙コボルヽバカリ也、御廟ハ萬治元年松平出羽守、此嶋ヲ預リ玉ヘル時新ニ建立也、ソレマデハ御廟モ石バカリナリシトゾ、此嶋寛永十四年ヨリ、松平出羽守アヅカリ玉フ、元祿元年ヨリ御代官、又享保四年ヨリ、出羽守アヅカリ玉フ、亦今ハ修覆モナクテアレハタタリ、

〔金ヶ原地藏院過去帳〕夫地藏院ハ、金原寺の別院にして、開山垂覺法師より、數百年の星霜を経たり、然に當山堅空泰峯上人深く金原寺の諸堂滅亡せしことを歎き、再建の志願ありといへども時至らず、猶亦兩帝の法華堂も燒失して其跡ばかりなれば、毎月十一日と十七日に、御陵前に誦經念佛せり、ある夜の夢に、或人異相を感じじしとかや、則法華堂は土御門院、嵯峨院、兩帝の御骨を此堂に納め奉る、即金原寺の北に當り、一町餘の道法、土^〇土^〇石の塚あり、これ法華堂のあとなり、時に泰峯上人、慶長十九年七月廿七日入寂せり、其のち太空說全上人前代の如く毎月御陵前に同向せられける、說全上人、寛永十二年八月廿九日遷化せり、金原寺は其名計なれば、當山より兼つとめたり、今西谷の佛石は金原寺のあとなり、當山も度々陣火にあへども、再建ありて存在せりと云、爾寛永十三年二月、地藏院主專空玄智記、

〔嵯峨覽勝志〕蓮華峯寺陵、後宇多法皇、正中元年六月廿五日、大覺寺殿にて崩す、此山に葬奉る、昔時陵園營構美を盡せりと、此邊麓の圃々でも、廻廊の礎石古瓦、土に埋れて猶存せり、陵門廻垣は皆田圃にすたれ、御塔の砌々でも、樵夫の往來となれるぞ最かなしき、近き比々で八角の小堂もて御塔を廕ひしと見え侍りて、俗みな八角堂と呼べり、近世わづかに松の屋を構て、數歩の内をかこへり、

〔後水尾院崩御記〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上剋太上法皇崩御也、^{實錄}八申剋般舟院陽空長老來謁、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬ニ願候、深草安樂行院ニ治御骨、骨堂も後

ゆるにこそ、かくても侍べかりしに、浮世の中には思をどめじとおもひ侍しかば、立離れんとし侍しはどに、新院^{の崇}の御墓所ををがみ奉らんとて、白嶺と云所に尋参侍りしに、松の一むらしげれるはどりにくぎぬきしまはしたり、是ならん御墓にやと、今更かきくらされて物も覺えず、まのあたりみ奉りし事ぞかし、清涼紫宸の間にやすみし給て、百官にいつかれさせ、後宮後房のうてなには、三千の翡翠のかんざしあざやかにて、御まなじりにかゝらんとのみしおはせ給ひしぞかし、萬機の政をたなごゝろににぎらせ給のみにあらず、春は花の宴を專にし、秋は月の前の興盡せず侍さ、おに思きや今かゝるべしとは、かけてもはかりきや他國邊土の山中のおどろの下にくち給べしとは、貝鑼の聲もせず、法花三昧つとむる僧一人もなき所に、只嶺の松風の烈さのみにて、鳥だにもかけらぬありさ、見奉るにすゝろに泪をおとし侍き、始ある物は終わりとは聞侍しか共いまだかゝる例をば承侍らず、されば思をどむまじきは此世也、一天の君萬乗の主も、しかの如くの苦みを離れまじく侍らねば、せつりもしゆだもかはらず、宮もわらやも共に果しなき物なれば、高位もねがはしきに非、我等も幾度か彼の國主ともなり給ひけんなれ共、隔生即忘してすべて覺侍らず、只行て留り果べき、佛果圓滿の位のみぞゆかし侍るどにもかくにも思ひつゝくるまゝに、泪のもれ出侍しかば、

よしや君昔の玉のゆかとてもかゝらん後は何にかはせん、と打詠られて侍き、盛衰は今に始ぬわきなれ共、殊更心のおどろかれぬるに侍り、

〔叢原北鯉隱岐國紀行〕隱岐國嶋前海士村、葛田山源福寺、真宗二百石、後鳥羽天皇御堂ノ高一丈九尺ニ、四方ハ二間ニ二間半、丸木柱、白木造、カツヲ木柿ヅキ、高欄キダ橋アリテ、外ハ丸木ノ矢來ナリ、御屋根ハ皆朽果テ、雨露尊容ヲケガシ奉レリ、軒ニハ蓬シノブ心ノマヽニ生茂リテ、符體ハ大キナル瓶棺ニ納奉リテ、上ニハツヤアルサバレ石ヲカキ上テ、下民ノ眸ニカヽラセ玉ノニヅ、オ

荒廢

掛畏岐山陵乃兆域乃内爾佛堂^平建天^平死屍^平埋世^平在止^平申事在仍今令所司委曲勘定若事有實者

即破堂撥屍^天淨掃^比奉仕^志此狀^平參議^正四位下行右大辨兼播磨權守大枝朝臣^平普人^平差使

天間奉出賜^布掛畏岐山陵平開食^天天皇朝廷^平平安爾矜賜^止恐^美恐^美申賜^波久^申

〔前王廟陵記〕今按畝傍山今奈良西南六里久米寺北俗云慈明寺山是也東北陵可百年以來壞爲

蕪田民呼其田字神武田纂汗之所爲可痛哭也餘數畝爲一其農夫登之恬不爲怪及觀之寒心夫神

武天皇繼神代草昧之蹤東征^平中州關四門朝八方王道之興治教之美實創於此我國君臣億兆當

致尊信之廟陵也洩季至於此噫哀哉

〔大和廻〕畝傍山今井八木の南道の四五町西にあり里人は持明寺山と云^略神武の陵はうね

び山の長に在今はわづかに残れり田の中に有里人は神武田と云

〔和州舊跡幽考〕佐紀山に陵三四基ありそれが中に神功皇后の陵といふものあり外はいづれの

御代の陵にやありけむわからがたし又云今この^{神功}皇后陵を見るに年ふりにければにや石棺土

を出道輪草むらのかげにのこりたり

〔山陵志〕安康陵^略中又有呼爲西蓬萊山今已犁爲田惟其溝未埋處環殘陵若半月然蓋方其未毀與

東陵屹乎相望也

〔山陵志〕花山陵在石影^略中三條陵乃列其側焉按二陵並皆壞難得其所

〔撰集抄〕新院御墓白峯事

過にし仁安の比西國はるく修行つかうまつり侍りし次に讃州みを坂の林と云所にしば

く住侍き深山への檜の葉にていはりむすびてつゝ木こりたく山中のけしき花の木末によわ

る風誰どへとてかよふこ鳥蓬の本の轉日終に哀ならずといふ事なし長夜の曉さびたる猿の

聲を聞にそゝろに腸を斷侍りかゝる栖家は後の世の爲としも侍らね共心そゝろに澄ておほ

自餘山陵告文准此。

〔文德實錄〕

^十

天安二年三月癸酉宣命曰天皇恐美恐美掛畏支深草山陵仁明○奏賜止惜奏久頃年惟異

屢示其由

^乎

卜求^爾掛畏^岐山陵乃御在所乃近地^爾汗穢事觸行已不止之所致止^卜申^利因茲參議

左大辨從四位上藤原朝臣氏宗右大辨從四位下藤原朝臣良繼等

^平

差使^天奉出^須此狀^平且聞食

天無咎崇

^{女志}

賜^借良使等乃申^爾隨^天汗穢事可令^支紕潔^狀乎恐見^毛恐見奏

〔三代實錄〕

^{三十}

元慶元年七月三日壬寅比月炎旱神功皇后楯列山陵成崇遣使巡檢守護義倉者

於倉下解鹿喫肉百姓伐取南

^移

北^功神二陵樹木三百卅二株守倉人及諸陵官人科罪十日己

酉遣使於楯列山陵申謝伐木解鹿之崇

〔長秋記〕

^長

承二年九月五日丙辰禮部云^略中人云支天下之臣四人也^中此中誰人先可死哉余

答云忠宗卿死期近云々

^略

抑忠宗卿下居於山階朝暮往反件所近天智天皇山陵定經廻彼莊之

間自然致無禮歟偏依此崇

^略

由所令存也思思件人與彼山階論田畠云々不可然由所聞也小野齊

尊僧都住醍醐山陵傍依其崇死者仁和寺覺行法親王掘小松山陵有崇

^略

薨逝彼時故民部卿俊明卿

夢有行幸怪問人答云小松帝依被破山陵參大神宮被訟申蒙裁許所還御其執人可處死刑者

^略

薨後

不經幾程薨給云云如此於山陵邊令致無禮自今以後可懲止事也

〔三代實錄〕

^{十三}

貞觀八年九月廿二日甲子是日大納言伴宿禰善男^略坐燒應天門當斬詔降死一

等並處之遠流善男配伊豆國廿五日丁卯是日遣使於柏原

^武

深草^明仁山陵告以配流善男等

深草御陵告文曰

^略

中善男掛畏^岐山陵^爾平生^爾奉仕^留舊功又每年^爾八講會^乎設^天山陵飾奉^留

勞等在

^爾

依^天一等減^天遠流賜^布又御陵乃前頭^爾嘉祥寺乃食堂^乎作^天汗穢事等在^介因茲令破

棄^天潔久^志掃奉仕^此狀^乎從三位守權大納言兼右近衛大將藤原朝臣氏宗^平差使^天聞奉出賜^布

^天

掛畏^岐山陵平聞食^天天皇朝廷^乎平安^爾矜賜^止恐^美奏賜^止久奏柏原御陵告文曰^略中善男

火災

〔三代實錄^{十五}〕貞觀十年二月十八日壬午，野火燒損田邑山陵^{○文}兆域中之樹木，廿五日己丑，詔

下公卿及諸儒博議山陵火災，並爲禮制從四位下行博士兼伊豫權守大春日朝臣雄繼議曰：禮記曰：

有焚其先人之室，則三日哭，然則當據禮而行之。文章博士從五位下兼備後介巨勢朝臣文雄議曰：漢

書曰：武帝建元六年四月，高園便殿火，帝素服五日，昭帝元鳳四年五月，孝文廟正殿火，帝及群臣皆素

服，山陵失火未見，故實[○]至于宗廟前，聞如此公卿本乎漢家之故事，斟酌禮度之所宜，取文雄議而奏於

是帝，避正殿，服錫紵，撤去常膳，進御蔬菲，輟朝五日，公卿及諸近臣皆失彩飾，一准凶儀，遣使於山陵告

以事由，告文曰：天皇掛畏[○]田邑御陵[○]恐美奏賜[○]倍奏[○]久，去十八日，不慮之外，[○]野火進引[○]天御

陵[○]燒損[○]介聞食[○]耳[○]驚怪懼畏[○]止無限量[○]志[○]此驚畏[○]留狀奇怪[○]其比[○]津[○]令奉仕之事[○]平大納言正三位

兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗從四位下行大學頭源世王等[○]差使[○]天[○]聞申[○]奉出[○]但不[○]慎護奉[○]天

致意[○]留御陵守等[○]波[○]令勘罪[○]邪[○]賜[○]掛畏[○]波[○]御陵平[○]久[○]聞食[○]天[○]天皇朝廷[○]平[○]護幸[○]比[○]國家無事[○]久[○]於助賜

止[○]倍[○]美[○]奏[○]賜[○]止[○]久[○]奏[○]

〔新記^{東大寺要}〕延喜十年七月十二日己酉，古京佐保仁正皇后[○]聖武天皇兩山陵有火災，仍

奉遣參議藤原朝臣宣方、左衛門佐平朝臣惟世等，令祈禱之。

〔扶桑略記^{三十}〕永保二年五月廿日庚子，事幣石清水宮，被告神功皇后山陵樹木燒失之由也。

〔三代實錄^{十三}〕貞觀八年八月十八日庚寅，分遣使者於諸山陵告應天門火也。田邑山陵[○]文告文云：

天皇掛畏[○]波[○]御陵[○]恐美奏賜[○]倍奏[○]久，去閏三月十日夜，應天門及東西樓[○]有火災[○]天皆悉燒失

其各[○]平[○]卜求[○]波[○]掛畏[○]波[○]御陵[○]犯穢[○]留事在[○]又猶火事可有[○]又疾事[○]毛可有[○]止[○]卜申[○]利[○]因茲恐畏[○]天利申

奉出給[○]平[○]止[○]須[○]間[○]爾[○]頻有穢事[○]天至今延忌[○]利[○]因以去十四日巡檢[○]留御陵[○]乃木數多久[○]伐事[○]止[○]阿利[○]檢申[○]利[○]

今御陵守等[○]波[○]隨法[○]爾[○]罪[○]賜[○]平[○]止[○]爲申此狀[○]中納言正三位兼行陸奥出羽按察使源朝臣融少納言

從五位上良峯朝臣繼世等[○]差使[○]天[○]奉出給[○]布[○]此狀[○]平[○]久[○]聞食[○]天[○]平[○]久[○]安久[○]護幸賜[○]止[○]恐美奏賜[○]止[○]久[○]奏[○]

從五位上良峯朝臣繼世等[○]差使[○]天[○]奉出給[○]布[○]此狀[○]平[○]久[○]聞食[○]天[○]平[○]久[○]安久[○]護幸賜[○]止[○]恐美奏賜[○]止[○]久[○]奏[○]

〔章武朝臣記〕嘉永五年四月十三日、傳奏三條家ヲ招ニ應ジ、爲名代章甫出頭之處、直接御尋之筋ニ付、可相成者後刻ニ而も直參候様被命、依之申刻出頭、大納言實萬卿面會、近來風説有之候、南都ニ而撥山陵候犯人一條ニ付、内々武邊ヨリ役邊ヲ以テ打合之儀有之、乍内々殿下政通公ハ及言上之處、官外記之外ニ東坊城聴長卿并ニ章武等學者之邊ヲ以テ勘例并所存等可勘進旨被命候間、篇と勘考、不口可申上旨被命、左之書附被渡、

於奈良奉行所召捕候盜人、成務天皇陵内、ヲ取出候物并一旦堀穿候跡、取計方等之事、但堀穿候所如元埋置有之趣之事

〔奈良奉行調書〕嘉永五年十二月、和州添下郡横領村百姓嘉兵衛外四人、

成務天皇御陵堀穿、曲玉朱管石等盜取候犯罪ヲ以テ、磔ニ處セラル、尤同人判決前死亡ニ付、鹽詰ニテ奈良町引廻シ候ナリ、

〔前王廟陵記〕高野陵○、○稱今按御陵山西北陵若是乎、往年有人發此陵、奪陵中財之黨、身腫苦死、觀者恐還財于本處云、

〔日本書紀十五〕二年八月己未朔、天皇謂皇太子億計○仁、吾父○市邊押皇○、射殺、棄骨郊野、至今未獲、憤歎盈懷、臥泣行號、志雪誓耻、○中、况吾立爲天子、二年于今矣、願

壞其陵、摧骨投散、今以此報、不亦孝乎、皇太子億計歎歎不能答、乃諫曰、不可、大泊瀬天皇正統萬機、臨照天下、華夷欣仰、天皇之身也、吾父先王、雖是天皇○、○之子、遭遇逆瀛、不登天位、以此觀之、尊卑

惟別、而忍懷陵墓、誰人主以奉天之靈、其不可毀一也、又天皇與億計、曾不蒙遇、白髮天皇○、○厚寵殊恩、豈臨寶位、大泊瀬天皇、白髮天皇之父也、億計聞諸老賢、曰無言不酬、無德不報、有恩不報、敗俗

之深者也、陛下饗國德、行廣聞於天下、而毀陵穢見於華裔、億計恐其不可以莅國子民也、其不可毀二也、天皇曰、善哉、令罷役、

はしくあり、其跡とみえ、頂上大に凹にして、いかにも盗人の所爲の跡と覺ゆる。天子の陵なれば、西面にして谷の細川南を流れ、池などの跡とも覺えず、然ども累にて上賀茂近きとて、柏原へうつされし程の所なれば、今少入念あらんか、甚窮窟の地なり、大龜谷谷口町の北側水茶屋の庭より入、うらの山麓にあり、此茶店陵戸と覺ゆる。天明大火後、大火の事禁裏の女中などより何か俗事申なし、九條殿の御領にて、深草の莊屋長谷川太郎兵衛此陵の木をさりし故、九條殿御相續の障りなど、異説も出で、此御陵へ度々御内々の御使あり、千年御忌にも御内使立し故、此陵上の凹を平均して陵のかたちを失ひ、茶店のうらより至る所を分道に直し、天子の御陵を東面にしたり、猶糺すべし。

〔公衛公記〕弘安十一年二月廿五日、官人章貞來、召取山陵犯人繼體天皇孫、勸賞事申入云云、付長官申入、自内々又可存知之由示之、贓物以下持來之、然而明後日伊勢幣家君御神事也、仍不取入返給、

仰聞食之由畢、

〔高國記〕柳本高屋合戰之事

其時分河内國ノ守護ハ畠山種長ナリ、父尙慶十八歳ニテ入道シト山ト云、高屋ノ城ヲトリ立テテ子息ニユヅリ、紀州廣ト云所エ隱居シケル、此高屋ノ城、昔安閑天皇ノ御廟ナリ、然レバ要害ヨケレバトテ城ニ築立ラレケレドモ、本城ニハ恐レテ畠山殿モ二ノ九ニ住シケル、柳本此時勢ヲ分テ、二千餘人高屋城エ馳向ヒ、其マ、押寄責ケレバ、種長難儀シ、已ニ被責落ト見ユル事度々也、
○中 此城ニ一ノ不思議アリ、安閑天皇ノ御廟ヲ城ニ用ラレシ故ニヤ、大和路ノ水越ト云道ヨリ、城エ入ル者生テ歸ル事ナシトテ、水越路ヲムカシヨリ明道ニテ、手向ノサタモナカリケル、

〔前王廟陵記上〕古市高屋丘陵、○安或曰、今高屋村城山是也、明應中、畠山或曰、近年土民發、向慶築城、得古代器物等、

上記如此。

○按ズルニ諸陵雜事注文ニ、大和青木御陵天武天皇御陵トアリ、又西大寺三寶料田畠目錄ニモ、御廟東邊二段木字青トアリ、阿不幾ハ即チ青木ナルベシ、

〔仁部記〕文永十二年二月十七日戊午、柏原山陵堀穿事、舊年窮臘被實檢了、件覆奏文、今日可奏聞也、
○中

實檢言上柏原山陵被堀發事

御在所嶺、東西一丈三尺許、南北一丈六尺餘、所堀發也、以土假以塞之、

右依宣旨實檢言上如件、抑仲山陵登十許丈、壇廻八十餘丈、但於陵中者不及實檢、仍注在狀謹解、
文永十一年十二月廿九日

諸陵寮

頭賀茂朝臣在爲

使

左大史小槻宿彌秀氏

〔山陵志〕按柏原名久廣、其地難認、廟陵記引山槐記指南云、稻荷山南則極樂寺趾、今是爲寶塔寺、其南則霞谷、是仁明帝陵所也、又其南伏見之山、有柏原焉、是桓武帝陵所也、據式條兆域及山槐記所載、閱當時地圖、即今之伏見城山、古御香、大龜谷等地、總是皆柏原、則陵之所在、想當在城之中央、蓋築城時爲所毀壞、又按仁部記、文永十一年、以盜發柏原山陵、諸陵寮上言、其狀曰、御所之巔、東西一丈三尺、南北一丈六尺、發堀上似塞以石、又云、件陵登十丈、壇圍八十丈、明是全體必不早小、而今問其所終于難認、則云、壞於築城果然也、噫、其城亦已城、桑海之感、又奚耐焉、

〔寺井菊居筆記〕柏原陵、いろ／＼近世說ありて、今の所には有べからず、桃山の内なぞ申説もあり、予明和九辰年三月、至りて御陵へも上り見しに、文永中、盜人御陵をあばきし事、名勝志にく

〔實躬卿記〕正應六年四月十二日、抑彼卿○俊相語曰、先日官人章文、於河東邊行廣法師ヲ召取、其故者天武天皇堀御廟取彼御頭、臨下取之由風聞、仍召取云云、件御頭納櫃持之取之、奉置法勝寺阿彌陀堂云云、此事實彼御頭歟、彼實否未決、件等事俊定可申沙汰之由、先日關白被仰、凡無才學事也、嘉禎堀彼御廟有盜人、官人召取之渡大路、自彼手傳取又所相傳也、白狀云云、此事爲賴藤勅使被問、諸人云云、先阿彌陀堂之御不穩便、實否落居以前奉堀、彌宜口佛由人々申之由所相語云云、件頭大過普通之由章文中入云云、

〔阿不幾乃山陵記高山寺〕

五體野口

盜人亂入事

文曆二年三月廿日、廿四日、兩夜入云云、

伴陵形八角、石壇一通一町許、歟、五重也、此五重ノ峯有森十餘株、南面有石門、門前ニ有石橋、此石門ヲ盜人等、纔人一身通許切開、御陵ノ内ニ有内外陣、先外陣方丈間許、歟、皆馬腦也、天井高七尺許、此モ馬腦、無繼目一枚ヲ打覆云、内陣ノ廣、南北一丈四五尺、東西一丈許、内陣有金銅ノ妻戸、廣左右扉各三尺五寸、七尺、扉厚一寸五分、高六尺五寸、左右ノ腋柱、廣四寸五分、厚四寸、マクサ三寸、鼠走リ三寸、冠木、廣四寸五分、厚四寸、已上屏ノ金物、六内小四分、三寸五分大、二寸四分許已上形如蓮花、古不ノ形師子也、内陣三方上下皆馬腦、歟、朱塗也、御棺張物也、以布張之、朱塗、長七尺、廣二尺五寸許、深二尺五寸許也、御棺ノ蓋ハ木也、朱塗、御棺ノ床ノ金銅厚五分、互上ヲ彫透、左右ニ入、尻頭ニ四、クリカタ四、二願、御骨首ハ普通モリスコ也、其色赤黒也、御脛骨長一尺六寸、肘長一尺四寸、御棺内ニ紅御衣ノ朽タル少々在之、盜人取殘物等被移、橋寺内、石御帶一筋、其形ハ以銀兵庫タサリニシテ、以種々玉飾之、石ニアリ、形如連錢、表手石、長三寸、石色如水精似、玉疊、御枕以金銀珠玉飾之、似唐物、依難及、言語不注之、假令其形如鼓、金銅桶一納一斗許、歟、居床、其形如禮盤、鐮少々クリカタ一在之、又此外御念珠一連在之、三匝ノ琥珀御念珠ヲ以銅ノ糸貫之、而多武峯法師取了、又彼御棺中ニ銅カケカケ二在之、已

十一月廿五日癸卯、今日實檢山陵之使、右少史時重歸洛、信實陳申云、信實弟子權上座玄實爲造持佛堂、奈保山石少々所引也、聖武天皇山陵者在佐保山所在、此山者元正天皇山陵也、所曳之石兆域之外也者、東大寺諸司申云、佐保山奈保山是一所異名也者、難一決子細見子問註記了、

〔山陵志〕聖武陵○中 按今爲眉間寺地、爲之所殘削無完也、然猶檢其跡、則後溝圓、而前溝方、所象宮事、尙有存焉、

〔山陵考略〕式○延喜 佐保山南陵、聖武天皇、在大和國添上郡、奈良の北、法蓮村眉間寺の山上に在、久

安年中に、當寺を建て、後、陵地を削れる事は山陵志に委し、但今も猶後面には環池の跡みえたり、此陵は東大寺より守護して、祭祀懈怠なし、陵地の全くして、事實の分明ならぬには、猶勝れりと云べし、按に、此地戰國の時、松永兵城を築きたり、傳ふ損壞も蓋當時の所爲にしも有べきなり、

〔百練抄十四條〕天福元年三月七日辛亥、今夜群盜亂入、鳥羽安樂壽院法華堂○鳥羽、搜取銀御塔并種々寶物云々、

〔百練抄十四條〕嘉祿元年四月八日庚午、或人云、去月廿日、以大和國高市郡天武天皇御陵爲群盜被穿、鑿搜取重寶云云、多是金銀之類云云、二年四月十五日辛丑、爲實檢天武天皇御陵被遺勅使、參議左大辨爲經、諸陵頭惟宗盛能、率寮下部參內、稱康平之例、不及穢氣沙汰歟、曆仁元年二月七日癸未、中大夫判官友景、相具犯人天武山陵參大理門前見物之車塞路壯觀也、

〔帝王編年記二十四條〕嘉祿元年四月十一日、大和國高市山陵、去比爲盜人被穿、破近邊南都并京中諸人、多入陵中、奉拜御骨等、天武天皇山陵也、

〔明月記〕文曆二年○嘉祿元年四月廿二日甲申、發山陵盜事、天武天皇大內山陵云云、只白骨相連、又御白髮猶殘云云、六月六日、晦尋入來之次、談奉見山陵者傳々說、每聞增哀慟之思、於御陵者又奉固由有其聞、定簡略歟、於女帝御骨者爲犯用銀篋、奉弄路頭了、雖塵灰猶可被尋收歟、等聞沙汰可恐事歟、

使右衛門權佐藤原朝臣實光

件文書等下給^天相尋之處、彼清水寺近代全無其跡、又立尾里在廣隆寺邊之由、寺僧等所申上也、仍不可有一定事歟、但喜多院造作之間、小松山陵時々鳴動之由、僧都所被語也、

今案件山陵四至、強不可被尋、只今度彼喜多院造作之間、爲面築垣、小松山陵之東邊爲下人頗被掘破也、被修補件所者可宜歟、其由見參之次奏聞了、

〔百練抄^五〕^河嘉承元年二月廿八日、發遣參議宗忠卿於後田邑陵^{○光}、謝申堀損之由、去十三日、令左衛門權佐實光實檢之、覺行親王修造喜多院之間、誤堀損云云、任式文可修固之由宣下、

〔本朝世紀〕久安五年十月卅日戊寅、今日右少史惟宗時重下向南都、是爲實檢聖武天皇山陵也、去十日、東大寺所司等訴申云、件山陵去七月爲興福寺上座信實被撥掘之由云云、

左辨官下大和國

應遣使實檢言上東大寺所司等言上堀類本願聖武天皇山陵、運取數多大石等事

使右少史惟宗時重 從伍人

左史生 從參人

右史生 從參人

使部貳人 從各壹人

副下東大寺解狀并山陵給面延喜式文等、

右左大臣宣奉勅堀類彼山陵、運取大石等之事、爲令實檢言上、差件人等宛使發遣如件者、國宣承知、使者經彼之間、依例勤供給官符追下、

久安五年十月卅日

大史小槻宿禰師經

右少辨平朝臣範家

是依天氣。此次聊被破件山陵邊事。依有可廻見之由仰也。雖然已臨夜陰。不知東西空居綠樹之下。只尋破損之趣許也。覺意僧都申云。故覺行法親王。被作北院僧房之時。山陵與彼房面築垣相攝之間。下人頗犯其土。人々見付天制止了。但如延喜式者。件山陵四至又不分明也。仍前日遣右衛門權佐實光。令實檢之處。四至不分明。由注申了者。以此旨可奏聞者。今日告文之趣。雖有破損之疑。未有一定。由仍且被謝申也。及深更歸來。且奏此旨了。○中略

實檢後田邑并村上二陵破損事

後田邑陵○光孝

新堀損陵東邊三箇所

一所南北十五丈五尺廣所一丈八尺、深所八尺餘、

狹所八尺餘、深所三四尺許、

一所南北八丈五尺廣所一丈三尺、深所六尺、

狹所七尺八尺許、深所三四尺許、

一所南北二丈二尺廣所一丈、深所五尺、

狹所六尺許、深所二尺、

一喜多院丑寅築垣外北小路東四十五丈五尺、廣一丈二尺、

但四至不分明之由。寺家所申也。

邑上陵○村上

加實檢之處。全無破損。四至不分明之由。寺家同所申也。

右依宣旨實檢如件

長治三年二月十三日

諸陵寮官人代山末吉

美惡美惡申賜止久申、

〔三代實錄二十七〕貞觀十七年七月三日癸未、遣從四位上行民部大輔潔世王、散位從五位下有能王、

向楯列山陵功申謝百姓伐陵中樹、兼祈甘雨、

〔扶桑略記二十九〕延久二年庚戌正月十三日、成務天皇神功皇后等、山陵兆域內狩獵、并伐損樹木之

衆、會赦否由被問法家、其後伴犯人等、令檢非違使尋捕、

〔中右記〕大治五年五月九日庚戌、今日被立天智天皇山陵使、大納言能俊卿略○中去年十二月比、備前

守忠盛朝臣郎等、切彼山陵樹木也、度々被尋問之處、依不承伏、沙汰之間、自及數月也、但一日令忠盛

朝臣召進彼下手人也、仍此使也、可被行罪之由被申云云、

掘損

〔扶桑略記二十九〕康平三年六月二日、河內國司言上、盜人撥推古天皇山陵之由、

〔扶桑略記二十九〕康平六年五月十三日、發遣山陵使、是依去三月盜人撥池後○成山陵掠奪寶物也、

九月廿六日、被定山陵寶物等如舊、可返納之狀、紀傳明經等諸道勘文、并犯人罪名被勘法家、十

月十七日、興福寺僧靜範、坐山陵事配流伊豆國、緣坐者十六人、僧俗共配、流安房常陸佐渡隱岐土佐

等國、此日立興福寺使、參議左大辨藤原經家卿、少納言源師賢等爲遣、流寺家僧被告其由也、

〔百練抄四〕康平六年九月廿六日、諸卿定申諸道勘申、山陵寶物等可返置議法、十二月十五日

盾列山陵成修覆、并返納盜人所取出之寶物、

〔中右記〕長治三年嘉承○光使可被立、日時使右大將被定申、來廿是仁和寺

法親王、去年被造房舍之間、西築垣入山陵四至內、頗被掘破了、其後彼山陵頻鳴云云、又入滅近日公

家玉體不豫之間、祖廟成祟之由見御卜、遣右衛門權佐實光實檢之處、事已實也、爲被申件事可被立

山陵使云云、予入其使、次官保隆者、廿八日午時參內、是爲勤仕小松山陵使所參入也、予給告文、出

從陽明門、行向後田邑山陵、小松陵也先二拜讀告文、又二拜、了令燒幣物、爰仁和寺別當權大僧都覺意來、

久護賜比 矜賜止 恐美 恐毛 申賜止 申

〔三代實錄〕^{十三}貞觀八年六月廿九日壬寅晦先是大和國言楮列山陵○^神守等多伐樹木神祇官卜

云炎旱之災實因伐木是日遣使申謝告文云天皇掛畏^岐御陵^爾恐美^毛申賜止^部申久比來涉旬天不

雨^之天農業失便利是有何崇咎^天所致乃災幸^其左右^爾憂歎^岐賜布^間爾大和國司上^須其掛畏^岐御

陵乃木^平陵守等數多久伐損^利依此^天旱災^波所致^之度^留部^申此^爾驚畏^天長^利御卜^爾令問求^爾此事

實^止奈^利卜^利世^利是以謹恐懼^止限量^之毛^奈犯過^留陵守并能不巡檢^留諸陵司等^波平^今任法^爾勘^倍賜^比

罪^奈賜^止波^平此狀^平參議正四位下行右衛門督兼讚岐守藤原朝臣良繩散位從四位下秀世王等^平

差使^天謝^申天畏^申爾^奉出^須掛畏^岐御陵^平久聞食^天時^毛換^須佐^甘雨令^零女^賜比^{國家}無事^久農稼

無妨^久矜惠^比助^波平^恐毛^申賜^止波^久申^{十月十四日乙酉遣使於山階}智^天田邑^總等^{山陵}申^謝

陵中樹木多被伐損之狀告文曰天皇我掛畏^岐山階^乃御陵^爾恐美^毛申賜止^申久掛畏^岐御陵^乃

木^平陵守數多伐損^利世^天犯過^留陵守并能不巡檢^留諸陵司等^平任法^爾勘^比罪^奈賜^波狀^乎

去六月七日^爾從三位守權大納言兼右近衛大將藤原朝臣氏宗等^平差使^天謝^申天畏^美申^爾奉出

賜^倍而令勘賜^爾諸陵戶等或畏^天逃退^或依病不參^仍其身侍^留限^波且任法^爾勘^比罪^奈賜^部

但被病及逃退^波相續勘賜^平此狀^乎同前使氏宗^平差^天聞^申爾^奉出^布掛畏^岐御陵^平久聞食

天^{天皇}朝廷^平謹^幸倍^賜比^{天下}無事^久矜賜^止恐美^毛申^止久^申又^{天皇}掛畏^岐田邑^{御陵}爾^恐美

恐^美毛^申賜^止申^{掛畏}岐^{御陵}乃^木陵守等數多伐損^利世^天犯過^留陵守并能不巡檢^留諸陵司等

任法^爾勘^比罪^奈賜^波狀^乎六月廿一日^爾正三位行中納言兼陸奥出羽按察使源朝臣融^平差

使^天謝^申之^畏利^申爾^奉出^賜比^而今勘賜^爾陵戶等或畏^天逃退^利多^仍其身侍^留限^波且任法^爾勘

賜^倍罪^奈賜^部但逃退^輩相續勘賜^平此狀^乎參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名

乎差使^天聞^申爾^奉出^賜布^{掛畏}岐^{御陵}平^久聞食^天天皇朝廷^平謹^幸倍^賜比^{天下}無事^久矜賜^止恐

賜半依天所苦平痊天國家無事久可有止恐美申賜久申

〔續日本後紀十三〕承和十年四月己未朔、橘列陵守等言、去月十八日食時、山陵鳴二度、其聲如雷、即赤氣如飄風、指離飛去、申時亦鳴、其氣如初、指兌飛耳、遣參議正躬王加檢察、伐陵木七十七株、至栲木等、不可勝計、便即勘當、陵守長百濟春繼上奏矣、己卯、使參議從四位上藤原朝臣助、掃部頭從五位下坂上大宿禰正野等奉謝、橘列北南二山陵、依去三月十八日有奇異、搜檢圖錄、有二橘列山陵、北則神功皇后之陵德名大足、南則成務天皇德名足之陵、世人相傳、以南陵爲神功皇后之陵、偏依是口傳、每有神功皇后之祟、空謝成務天皇陵、先年緣神功皇后之祟、所作弓劍之類、誤進於成務天皇陵、今日改奉神功皇后陵

〔續日本後紀十二〕承和九年十二月庚辰、獻橘列山陵神寶曰、天皇我詔旨掛長支神功皇后御陵、前申給止申久、御心爾念行須事有爾依天、御寶弓劍等設備天、吉日良辰平擇天、參議從四位上式部大輔兼讚岐守滋野朝臣貞主平差使賜天奉出此狀平、聞食天、御心爾念行如爾久國家平平久謹比於賜止恐美申賜久申

〔續日本後紀二十〕嘉祥三年三月壬辰、卜食申柏原山陵武、告祟、仍遣使奉宣命曰、天皇我大命掛畏

枝柏原乃御陵爾申賜止申久、頃聞物惟在爾依天卜求禮掛畏岐御陵爲祟、賜止申久、因茲恐畏已止无波標誤波若久御陵內爾犯穢留事也、在止令巡察元爲天奈參議從四位上行左兵衛督藤原朝臣助、從四位下行宮內大輔房世王等平差使天奉出須此狀平、聞食天、御體平安爾實祚无動久護賜比於

賜止倍美恐美申賜止申久、甲午、復奉宣命曰、天皇我大命止掛畏岐柏原乃御陵爾申賜止申久、頃聞

御占申爾爲祟、賜止依天、使臣平奉出天令巡察爾御陵內爾祈樹留事在利此平乍聞食天恐畏天萬利

御陵司等波法隨爾勘賜比、御陵守等波替退賜止訖、是以參議從四位上行左兵衛督藤原朝臣助、

民部大輔從四位下基兄王等平差使天、申謝奉出此狀平、聞食天、天皇朝廷平御體平安爾實祚无動

〔實麗卿記〕文久三年三月廿一日丁卯今日神武帝并神功皇后等山陵使發遣日時定上卿新大納言
資辨博房奉行豐房朝臣宣命使菊亭中納言資攘夷御祈請云云

〔扶桑略記後十九〕康平六年五月廿九日軒廊御卜深草山陵明〇仁鳴之異也

〔中右記〕天仁元年八月十五日晚頭參內是依可行軒廊御卜也近曾八幡宮言上大和國池後池上成〇

山陵鳴動事可卜申者予於仗座行御卜如常官卜申云神事不信公家御慎察又大略同意也付頭
爲房令奏仰云早可被立山陵使也件日時等可定申者則仰權辨爲隆令勘日時來廿日者則置勘文

召外記召例文令權辨書使定文使宰相俊忠次官內藏助政仲

〔葉黃記〕寬元四年八月十七日癸卯天智天皇陵鳴動事被立山陵使云云

〔百練抄後十〕建久五年七月廿三日壬午被立後白河院御廟山陵使彼御廟去月廿日依鳴動事

〔百練抄後十六〕實治元年六月廿三日甲辰大宮大納言相公參仕被發遣山陵使先被行定使二位中納

言其辨親賴朝臣也去頃天智天皇御陵依鳴動也云々

〔類聚國史帝三十六〕弘仁七年六月壬戌神祇官言伐高昌山陵〇桓武后藤原乙牟婁樹累見龜兆者勅朕〇嵯峨情

所敬唯在山陵而有司不動督察致斯咎徵求之國典其刑非輕自今以後嚴加禁斷

〔類聚國史帝三十六〕天長四年十一月癸未告柏原山陵〇桓武詞云天皇〇淳和畏畏〇毛申賜止閉申久御陵木

切禮留事檢見使等申久御在所上爾水生多利申爾依氏掃却介淨奉爲爾參議正四位下直世王左

京大夫正四位上石川朝臣河主等平差使天奉出止須申賜布狀平畏畏毛申賜止波久申

〔續日本後紀仁十〕承和八年十月乙未詔曰天皇我詔旨止掛畏支柏原乃御陵爾申賜止申久頃者御

病發天惱苦比大坐依此天卜求波掛畏支御陵乃木伐并犯穢流祟有利讀經奉仕波無咎久可有卜

申乍驚恐畏流狀平差使參議從四位下大和守正躬王右近衛中將從四位上藤原朝臣助等天奉出

卜申我已讀經毛令奉仕又巡見檢天犯狀乃隨爾山陵守等波勘賜平此狀平久聞食天護賜比矜

獻御書也、依代々例、御侍讀左大辨菅原益長卿被作進御書、御清書宸筆也、舊例如此、今度三箇所也、

後白川院山陵

法住寺

使四條宰相隆遠卿、次官右少將藤原成任、後深草院深草院使正親町宰相中

將持季卿、次官左衛門權佐藤原親長、後小松院泉涌寺使左大辨益長卿、次官左少將藤原季春等也、

藏人權右中辨俊季奉行之、自禁中使被進發云々、

新國家平安

〔吉續記〕文永五年六月廿二日、今日依異國事、元被發遣山陵使、頭中將奉行也、上卿內府被參陣御

陵七ヶ所告文、右少辨經業草、使皆參之後、內府著仗座、頭中將參進軾、可定中日時并使事之由仰之、

次召辨賴親被仰日時事、主上山內々有出御中門被御覽、略中使著仗座賜告文、略中

山陵使次第

楯列池上神功

山階智天

權中納言源朝臣通賴

權中納言藤原朝臣長雅

皇后宮少進橘長宣

前能登守高階朝臣泰遠

大內山多字

圓宗寺三條後

參議藤原朝臣高定

參議源朝臣雅言

紀伊守橘朝臣兼朝

散位源朝臣雅範

法住寺白河後

大原鳥羽後

參議源朝臣具氏

參議藤原朝臣公孝

散位源朝臣則有

左近將監源朝臣賴基

金原御土

宮內卿藤原朝臣重氏

散位源朝臣則雅

可有止思食天參議大和守從四位下正躬王平差使臣奉出狀平聞食天天皇朝廷平無動久大坐來
國家平平久謹賜比助賜止恐美恐毛申賜久申須是日遣宣命使於山科智柏原〇桓兩山陵表泉焉

〔三代實錄〕貞觀七年二月十七日己巳勅遣參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人從四位下行

中務大輔忠範王等向山階山陵告以神靈池水沸騰預防災害告文云天皇我詔旨坐掛畏支

山階御陵申賜止申久自去年至于今月天變地災不止加以肥後國阿蘇郡在神靈池無故沸

溢利乍驚卜求禮兵疫乃事可有止申利自此之外毛物惟亦多依此天左右念行掛畏御陵乃

謹賜依天無事久可有止思食天去月差使天奉出元止然忽依有穢天奉出止不得奈利

今吉日良辰擇定天參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人從四位下行中務大輔忠範王等平差

使天奉出須此狀平聞食天天下平介群臣忠心平懷峻上下有序利兵疫不發天之實祚無動久護賜比

堅聲常磐爾矜幸賜止恐美恐毛申賜止久申參議正四位下行右衛門督兼讚岐守藤原朝臣良繩

從五位上行兵部少輔源朝臣直等向柏原山陵〇桓從三位守權大納言兼右近衛大將藤原朝臣氏

宗從五位上行民部少輔源朝臣顯等向嵯峨山陵〇嵯大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫

伴宿彌善男散位從四位上茂世王等向深草山陵〇仁參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵

朝臣年名從四位上行侍從利基王等向田邑山陵〇文告文一同山階山陵

〔三代實錄〕貞觀十六年九月五日庚寅遣參議從四位上行左兵衛督源朝臣能有從四位上行

伊勢守基棟王向柏原山陵申謝風水災

〔國太曆〕康永四年八月八日傳聞今日爲替星御祈發遣山陵使〇中深草後深草後伏見御同所侍從

三位實益卿也御書在成卿草之宸筆御清書上皇御束帶有御拜御書自寢殿東面妻戶被出之

〔康富記〕文安元年三月十一日辛酉是日被立山陵使者也去年九月內裏炎上以後今年甲子也旁被

〔續日本後紀八〕承和六年十二月辛酉，天皇御建禮門，分遣使者，奉唐物於後田原。仁光八嶋。天早道
其楊梅城。平柏原。武等山陵。庚午，天皇御建禮門，奉唐物於長岡山陵。原乙武后藤。爲漏先日之頒
幣也。

幣也。

〔三代實錄一〕天安二年十月廿三日庚戌，遣外從五位下行陰陽助兼陰陽權博士笠朝臣名高，鎮謝
真原山陵。文

真原山陵。文

〔言成卿記〕文久三年二月廿四日，今日未刻，神武帝山陵使奉向陵前誦宣命，刻限主上。明著帛御服

下御東庭。被准四方令向于大和獻火山方給御拜云云。

〔續日本紀十〕神龜五年八月丙戌，天皇御東宮，綠皇太子病，遣使奉幣帛於諸陵。

〔續日本紀十九〕天平勝寶七年十月丙午，勅曰：頃日之間，太上天皇。武枕席不安，影膳乖宜。中遣使

於山科。天大內東西。持統武，安古。武真弓。同宮天，奈保山東西。元明，等山陵及太政大臣。原不

比，葬奉幣以祈請焉。

〔類聚國史三十六〕天長五年八月辛未，爲有天地災變，奉幣柏原光陵。武祈請之，其詞曰：天皇。和恐

美恐毛申賜止申久，頃間天地變異有爾依天，左右。爾念掛畏支天皇，我朝廷乃護賜比，於賜。波依

之，天平久無事，久有之，倍止，念賜天，奈大納言正三位良岑朝臣安世，左京大夫正四位上石川朝臣河主等

差使，天護賜比，於賜支，倍狀乎，恐美恐毛申賜止申久。

〔續日本後紀九〕承和七年六月己酉，物惟見于內裏，柏原山陵。武爲祟，道中納言正三位藤原朝臣

愛發等於山陵祈禱焉。

〔續日本後紀十〕承和八年五月壬申，詔曰：天皇。我詔旨。爾坐，掛畏支，神功皇后乃御陵。爾申賜止申久。

頃者在肥後國阿蘇郡神靈池，無故涸滅卅丈，又伊豆國。爾有地震之變，乍驚問求。波早疫之災及兵事

可有止申自此之外，毛物惟亦多，依此左右。爾念行。爾掛畏支，神功皇后乃護賜比，助賜。波依天，無事久

新災異

新災

告外蕃來朝

告火災

健陵

而更依入告氏破却之事如本記成此毛亦無禮之事奈今如前改正之狀差參議正四位下藤原朝臣緒嗣畏綱畏李申賜止奏是日宮中戒嚴

〔續日本紀十八〕天平勝寶四年閏三月乙亥遣使於大內○天山科智惠我○延喜諸陵式仲哀顯神

直山○延喜諸陵式元明元正等陵以告新羅王子來朝之狀

〔玉海〕壽永二年五月十五日戊寅今日被立佐保山陵○聖使被謝申東大寺大佛燒損并近日修補事云々

○按ズルニ山陵ニ告グルハ其事多端ニシテ各部各篇ニ散見セリ即位皇太子ノ篇及ヒ政治部ノ改元篇禮式部ノ元服篇等ニ各告祭ノ事アルガ如シ

〔延喜式十二〕凡臨時遣山陵使侍從次侍從若致闕意一准闕荷前使之例

〔日本書紀二十八〕元年七月壬子先是軍金網井之時高市郡大領高市縣主許梅惶忽口閉而不能言也三日之後方著神以言吾者高市社所居名事代主神又牟狹社所居名生雷神者也乃顯之曰於神

日本磐余彥天皇之陵奉馬及種々兵器○中言訖則醒矣故是以便遣許梅而祭拜御陵因以奉馬及兵器

兵器

〔續日本紀文〕二年正月庚辰遣直廣參士師宿禰馬手獻新羅貢物于大內山陵○天

〔續日本紀文〕慶雲四年七月庚子有事于大內山陵○天

〔續日本紀武〕天平二年九月丙子遣使以渤海郡信物令獻山陵六所

〔續日本紀武〕天平十四年五月庚申遣內藏頭外從五位下路真人宮守等賣種々獻物奉山陵

〔續日本紀武〕天平十七年五月戊辰奉幣帛於諸陵

〔續日本紀武〕天平二十年十二月甲寅遣使鎮祭佐保山陵○文武后藤度僧尼各一千

〔續日本紀武〕天平勝寶六年三月丙午遣使奉唐國信物於山科陵

〔日本書紀二十九〕八年三月丁亥天皇幸於越智拜後岡本天皇明○神陵、

〔小右記〕永觀二年十月廿七日癸卯辰時許參院融○融令修諷誦於七箇日家已時參御邑上山陵中

留御車於鳥居外即下御余候御劔前行之置御座時○下

告辭瑞

〔文德實錄二〕嘉祥三年十月己酉遣中納言正三位源朝臣定左京大夫從四位上正行王向山科山陵

○天散位從五位下春原朝臣末繼內舍人從六位下安陪朝臣弘行向前田原山陵○善日宮

夫從四位下藤原朝臣諸成向後田原山陵仁○光參議正四位下滋野朝臣貞主掃部頭從五位下滋野

朝臣善蔭向柏原山陵○桓中納言從三位源朝臣弘禪正大弼從四位上藤原朝臣衛向楊梅山陵○平

城中納言正三位安倍朝臣安仁從四位下宮內大輔房世王向嵯峨山陵○嵯從三位大藏卿平朝臣

高棟散位從四位下藤原朝臣輔嗣向大原山陵○和參議從四位上伴宿禰善男侍從從五位下藤原

朝臣諸葛向深草山陵○明仁告以賀瑞之由策文曰天皇恐見恐見掛畏山陵○爾申賜止倍申久維嘉祥

三年八月十七日爾公卿等奏久其攝津國美作國備前國并獻白龜利石見國獻甘露久進止奏利

如此支希世留大瑞波是薄德乃可令感致支物波爾非須掛畏山陵乃慈賜比示賜留物泰利為天奈

貴喜比受賜利畏留狀平進出恐見恐見申賜波久申

告事變

〔類聚國史三十〕六大同五年九月丁未遣使告于柏原山陵○武曰天皇○嵯御命坐掛畏支柏原大朝庭

爾申賜止申久內侍尙侍正三位藤原朝臣藥子者初太上天皇乃東宮止坐之時爾東宮宣旨止為

天仕賜比其為性乃不能所知食氏退賜比去賜氏然物平百方趁逐氏太上天皇爾近支奉氏非御

言事平御言止云都都褒貶任意氏莫所恐懼又萬代宮止定賜之平安京毛藥賜比停賜之平城古京

爾止左奉勸氏天下平擾亂百姓亡弊又其兄仲成恃已妹勢氏以虛詐事親王夫人平凌侮氏乘

家乘路氏東西辛苦世之如此罪惡不可數盡因茲藥子者官位解氏自宮中退賜仲成者佐渡國權守

退賜比又續日本紀所載乃崇道天皇○早與贈太政大臣藤原朝臣福原編不好之事皆悉破却賜支氏

生絹參拾陸疋參丈五尺

黑染絹拾疋

糸參拾約參兩

麻布佰貳拾參端

麻佰貳拾參斤

倭文拾伍端伍疋

黑葛參拾陸斤

木綿參拾捌斤捌兩

黑薦肆拾伍枚壹丈陸尺

中取一具高二尺、弘各三尺

右件幣料依例所請如件謹解

天治二年十二月口日

頭兼算博士越後介三善朝臣

〔年中行事歌合〕三十四番

右 荷前使十二月廿三日

かしこしなのぎきの箱をになひもて年にかはらずたつる使は略中

荷前とは、先皇の御陵へ、年の終に幣帛を奉らせたまふなり。

〔天書ニ武〕十二年六月、行幸于日州、拜皇祖皇考等陵、令守護之。

○按ズルニ、神武天皇ノ、日向ニ行幸アリテ、祖陵ヲ拜シ給フコト、日本書紀、古事記、古語拾遺等ニ見エズ、疑フ可シ、姑ク記シテ後考ニ備フ。

宗信法眼

鍋陵

擔夫二人雜物

〔朝野群載六太政官〕官切下文

五色絹六疋下大藏 糸七十鈞 兩面二疋 帛一疋三丈 綾一疋 苧十斤 白木唐櫃六合

紅花大十七斤九兩 黃蘗大四十三斤 茜大廿三斤 錢四貫六百元 紫草大百四十斤 白紙

二百六十枚下中務 油二斗五升六合下宮內

右奉山陵并所々荷前料內藏寮所請如件

寬弘元年十二月十二日

左少史私

左大臣宣旨充之

右少辨藤原朝臣

〔朝野群載二十一雜文〕荷前幣物請文

諸陵寮解申請 荷前幣物事

合陵墓佰貳拾參處

山陵七十七處

墓三十六處

近陵十處

一處料

生絹一丈五尺 黑染絹五尺

糸一兩 麻布一端

麻一斤 倭文一丈

木綿十三兩 黑葛六兩

裏料薦五尺

日荷前使、須依式條宜從解却者、

應和二年正月十九日

大外記主稅權助周防介御船宿禰傳說末

〔師記〕治曆四年十二月廿七日、今日荷前也。○中 僕向後田邑。○光 次官信國介申乘馬。○馬下一本、密
密留了、共人三人、向仁和寺西山松下、再拜之後、令燒幣了。

常物

〔延喜式十五〕奉諸陵幣

錦綾各二丈八尺、別各二丈八寸、兩面二丈、別二丈八寸、夾纈鵝纈帛各二疋二丈、別各一丈四尺、中綠淺綠帛各一疋四丈、別各一丈四尺、

一白絹五丈五尺、別五尺五寸、生絹三疋二丈、別二丈二尺、純五丈、別五尺、蘇芳綾紫綾支子綾紅花綾白橡綾帛各一

疋五丈、別各一丈一尺、綠綾紅花綾蘇芳綾紫綾絲白絲各四綯二兩、別各五兩、橡絲皂絲生絲各一綯八兩、別各二兩、蘇

芳綾紫綾紅綾支子綾縹綾綿帛各三屯四兩、別各四兩、雜色綾木綿大三斤二兩、別五兩、細屯綿十屯、別一屯、三嶋

木綿卅枚、別四枚、鴨頭草木綿廿枚、別二枚、色紙百五十枚、別五十枚、細布二端二丈五尺、別一丈五寸、驅布二端二丈

五尺、別一丈五寸

已上陵十所料

緋縹黃皂白等帛各一疋五丈、別各一丈一尺、綠緋縹黃等絲各二綯六兩、別各三兩、橡絲生絲皂絲各十兩、別各一兩、練

絲白絲各三綯四兩、雜色綾木綿大二斤八兩、別四兩、苧麻各大三斤二兩、別五兩、安藝木綿大十五兩、別二兩、

分紙百五十張、別五十張

已上陵十所雜給料、略中

右陵墓幣料、預前支料具錄色目、十二月上旬申省、即待官符請受、依件練染、又小刀廿柄、燈臺廿基

儲之、白木工、前一日晚差史生四人、色別備資、於縫殿寮南院候之、內侍已下從內裏退出、通夜裁成、

達曉裏畢、所別盛柳宮一合、裏以夾纈表淺綠裏結以縹帶二條、更納漆櫃安漆高案、帊以紫綾表緋

裏其雜給料、所別宮一合、裏以黃表帛裏結以縹帶二條、更以縹帶著木、略中、陵別以駕輿丁三人充

貞觀二年十二月卅日

大輔清原真人瀧雄奉

被中納言兼右大將從三位行奉宮大夫藤原時平卿宣稱奉勅雖在放免難役人宜差奉荷前幣使者

寬平五年十二月十日

少外記安倍安直奉

從五位下平朝臣忠則 源朝臣公輔 藤原朝臣滋茂

右被左大臣忠平藤原宣稱伴等人闕去年荷前儲使仍不可預今年位祿并來十一月大嘗會祿者

延長九年元承平二月六日

大外記伴宿禰久永奉

應依式科責闕荷前使侍從次侍從散位等事

右中略今被右大臣師輔藤原宣稱奉勅闕使侍從次侍從從解却并不可預節會之由式條已存非侍從

事同在彼式而近年之間人情懈怠不守法式不參者多事煩尤甚侍從等稱病輩參待賢門之時遣官掌加實檢爰其病雖非顯著依人數已多殊成優容未必解任但爲將來或抑節祿非侍從等雖不預節會未及奪位祿爰積習成常彌致懈怠至于當日依人數不足召求近邊諸司五位已上之間刻限自移物煩彌甚國家大事豈合如此宜仰所司重張嚴制侍從等參待賢門之後令使者加實檢之時自先口有其聞之中彼病顯然者依實可免俄稱本病發動之由事涉虛誕者依式即從解却又令中移移式部不可預七日節至于非侍從解其科法總如式條會不寬宥者召仰中務大錄大發其宗了

天曆元年十二月十三日

大外記三統宿禰公忠奉

大納言正三位源朝臣高明宣奉勅山城介藤原朝臣季方依闕去年荷前使召勘之日進過狀先了然則返給彼過狀當年位祿官符不得捺印者

天曆十年七月七日

大外記安倍衆與奉

橘朝臣敏通 小槻宿禰糸平 藤原朝臣時柏柏恐 藤原朝臣遠量

右權大納言正三位兼行右近衛大將奉宮大夫藤原朝臣師尹宣奉勅件等侍從闕去年十二月廿一

弘仁四年正月七日

少外記船連湊守奉

參議秋篠朝臣安人宣承前之例供奉荷前使五位已上外記所定今被右大臣藤原宣自今以後中務省點定爲恒例者但三位以上外記申上可點者

弘仁四年十二月十五日

右大臣藤原宣荷前使參近處者當日奏返事自今以後爲常例者

弘仁七年十二月十七日

大外記上毛野朝臣款人奉

右大臣藤原宣奉勅山階天後田原仁光大枝高野武母后柏原武桓長岡平城嵯峨母後大枝

藤原旅子楊梅城平石作志內親王等山陵獻荷前使宣差參議以上若非參議用三位以上立爲

恒例

天長元年十二月十六日

大外記宮原宿禰村繼奉

右大臣藤原宣獻荷前物山陵使五位已上六位已下自今以後定辰一點參供於頒庭以爲永例

天長元年十二月廿三日

少外記島田朝臣清田奉

應勘資侍從非侍從關荷前使事

右去弘仁十三年二月五日右大臣清原宣奉勅荷前使五位已上侍從次侍從關夏野息件使自今以後

解侍從任非侍從者宣奪位祿者今被右大臣宣稱宣旨之與其責已重而頃年之間猶致違闕奉公之

義豈合如此宜自今以後關事之輩不論侍從非侍從一切莫預正月七日節會共引前後之宣以令懲

將亦者

承和二年十二月九日

從五位上源朝臣叙

右人依闕今月十五日荷前使解次侍從任而今右大臣藤原宣奉勅殊免此度者

點五位已上訖使人進執獻物若御者入置御所出候御輓外隨闌司告進執幣物退出授內監大舍人等

凡供諸陵幣使大舍人者依治部移令本寮差定移送歷名

凡荷前使次侍從已上若有闕怠者移式部省不預正月七日節兼從解却

凡後田原八嶋二陵荷前使侍從次侍從往還定五箇日若此內常元會者雖身不參猶預見參

凡荷前使內舍人有闕怠者奪一年季錄大舍人奪夏冬衣服

〔延喜式十八〕凡點散位五位已上十人補荷前使侍從不參之闕其名簿預前進太政官

凡闕荷前使之侍從及次侍從者待中移移無預正月七日節非侍從者奪位錄亦無預同節

〔西宮記臨時五〕諸社使帶劔人不解劔詣賀茂御祖者可解放○中山陵使向陵拜禮同解之把笏

〔類聚三代格七〕太政官符

應停土師宿禰等預凶儀事

右太政官今月十四日論奏稱○中緬尋古風野見宿禰獻策往帝弘仁政於昔年停殉陵次垂遺愛於

後世傳曰善善及子孫惡惡止其身然則野見宿禰苗裔應當延賞之澤而竊掌凶儀不預吉禮夫喪葬

之事人情所惡專定一氏爲其職掌於事論之實爲不穩臣等伏望永從停止縱有吉凶同於諸氏其殯

宮御膳誅人長及年終奉幣諸陵使者普擇所司及左右六舍人雜色人等充之伏聽天裁謹以申聞者

畫聞既訖省宜承知年終幣使者依治部省移差陸子孫散位位子等充之自今以後永爲恒例

延曆十六年四月廿三日

〔類聚符宣抄四〕荷前

左大辨秋篠朝臣安人宣內裏獻山陵物使五位已上不參者自今以後不得預節會縱使會山陵不參奉班庭亦同者自今以後宜預舉申簡點應必參者

り、其後御代々々に廢置ありて、延喜式のころは、十陵八墓なり、かくて後々には、たゞ此近陵墓の御祭のみの如くになりて、遠陵の奉幣のことは隠れゆきて、をさゞ物にも見えず、いと心うきことなりかし、抑近陵墓は、當代に近きを殊に厚く祭り坐なれば然もあるべきことなるを、其中に天智天皇をば永く廢たかれぬことになりぬるは、此も彼漢國の制に、太祖の廟をば、百世といへども廢すと云にならひ賜へるなるべし、されど始清和の御代に、此天皇を第一に置れたるは、當代の大御父尊より、上七世なる故にこそありつらめ、必しも太祖とし賜ひしにはあらざるべし、然るを其より後々の御代に至ても、猶此天皇を殊に祭坐は何の由にかおぼつかなし、續紀御代々々の宣命に、近江大津宮御宇、大倭根子天皇乃、與天地共長、與日月共遠、不改常典、止立賜敷、賜留法乎云々、なぞありて、殊なる由もありげなれども、此天皇は皇太子に坐し、はゞより、藤原大臣足○錄と共に謀給て、蘇我入鹿を滅し給し御功と、又天下の御制度を漢様に革め給へることゝこそあれ、其他に殊なることも坐まさず、凡孝德の御世に、萬の御制の古より有來ぬるを廢て、多く漢様にしもなれるは、此天智天皇と、藤原大臣との御心より出づとぞ見えたる、後世に此天皇をしも、中興の主など申すめるは、此漢様の事を多く創坐る故なるべし、かくて此天皇の御陵をしも、永く殊に祭坐とならば、神武天皇の御陵をこそ、第一に厚く祭り賜ふべく、猶又餘にも有べきをや、

發使

〔延喜式中略〕凡十二月奉諸陵幣者、令陰陽寮擇日、詔即申官、其別貢幣者、臨幸便所奉送、其使參議已上及非參議三位、太政官定之、自餘省點之、山階柏原長岡深草田邑鳥戶後田邑小野八陵、參議已上若非參議三位一人、四位若五位一人、內舍人內暨大舍人各一人、後田原八嶋二陵略○中四位若五位二人、內舍人內暨大舍人各一人、略○中其使侍從四位已下差文、以十二月五日入太政官、當日平旦、承錄筆、史生省掌等、候御在所幔外、史生微聲計列、內舍人并大舍人等、承率內舍人等入就幔內座、即遣

天皇爲田原○光仁之皇子、而因群臣推戴、得登帝祚、於是天智之流勃興、加之天智天皇始制法令、謂之近江朝廷之令、天下百世因准之、爾來至今皆天智之一流、而爲太祖不遷之廟、豈不可乎、亦光仁已爲中興之主、故爲第二世、桓武創平安京、故爲三世、光仁桓武比周之七廟、文世室武世室、所謂劉子駿九廟之說也、其餘隨世互有廢置、然而仁明光孝醍醐、其德蓋天下、不忍毀去、是以後世聖君、遺詔不立、山陵國忌、其意者不可過七廟故也、但三女主猶可得毀之、烏羽苒子○爲羽母毀穆子○朱君村上之母、藤原氏○藤原氏之國忌者也、又案履脫爲上皇、則不置國忌、隨亦有國忌、寬元○後醍醐通子○後醍醐去安子○冷泉園融之母、藤原氏○藤原氏之國忌者也、又案履脫爲上皇、則不置國忌、隨亦有遺詔、崇道天皇、國史云、延曆廿四年四月甲辰、令諸國奉爲崇道天皇、建小舍納正稅四十束、并預國忌及奉幣之例、謝怨靈也、今案崇道天皇爲謝其怨靈、准國忌、非廢務之例、故公家固不知之也、

〔古事記傳二十〕近陵遠陵近墓遠墓とは、路程の近遠を以云に非ず、近陵墓はいはゆる十陵八墓にて、其餘を凡て遠陵墓とす、近とは、當代に親しく近き意を以云なり、故近陵の幣物は、こよなく多く、なほ又別貢の幣物も多くありて、其は別に内藏寮より供ることにて、其色目は内藏式に見え、又中務式に、凡十二月奉諸陵幣者云々、其別貢幣者、臨幸便所奉送、其使參議已上、及非參議三位、太政官定之、自餘省點之云々など、見えたる如く、近と遠とは甚く差別あるなり、抑此近遠の定まりしは、三代實錄に、天安二年十二月九日、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣とあるや、始ならむ、其十陵は、天智天皇、田原天皇、光仁天皇、桓武天皇、平城天皇、仁明天皇、文德天皇と七代、是當代の皇祖等なり、平城は然らざれども、近き故に加られたりと見ゆ、嵯峨淳和は近けれども、遺詔にて山陵を置れざる故に入らず、如此七代をしも定められしは、漢國の七廟の制をまねばれたるなるべし、さて餘の三陵は、桓武の御母后と皇后と崇道天皇となり、崇道天皇は延暦の廢太子にて、そのころ厩給へりしより殊に祭らるゝなり、○中さて又元慶八年十二月廿日、定毎年獻荷前幣十陵五墓云々、この時さきに定される内を廢かれたると、新に置れたるとい

文德天皇田邑山陵、在山城國葛野郡太皇太后藤原氏○光孝母後山階山陵、在山城國宇治郡、贈皇太后藤原氏○光孝母鳥戶山陵、在山城國愛宕郡、

〔政事要略二十九〕太政官符中務省

應每年荷前山陵并墓事○應下恐有脫字

一山陵十所

山階山陵近江宮御宇天智天皇

後田原山陵平城宮御宇天宗高祖天皇

柏原山陵平安宮御宇桓武天皇

長岡山陵贈太皇太后藤原氏平城宮御宇

八嶋山陵贈太皇太后藤原氏平城宮御宇

深草山陵仁明天皇在山城國紀伊郡

鳥戶山陵贈皇太后藤原氏光孝母

後田邑山陵光孝天皇在山城國葛野郡

小野山陵贈皇太后藤原氏醍醐天皇

後山階山陵後太上天皇醍醐天皇

右左大臣○藤原忠平宣奉勅依件定之、自餘停止者、省宜承知依件行之、符到奉行、

延長八年十二月九日

〔江家次第抄〕國忌

今案、天子七廟、或有九廟之說、故陽成天皇以前、或八廟、或七廟、其數不定、然光孝以來定爲九廟、其中以天智爲太祖廟、蓋天武、天智皆舒明之子、然文武至廢帝○淳天武之裔即位、天智之流如絕、爰光仁

頭書 勅使役之人當日早旦、先遣使令催陵戶、可令敷帖儲手水、

〔園太曆〕觀應元年十二月廿九日庚戌、欲行荷前次官無之、奉行職事季定不催具云々、外記又解怠歟、寅刻許、頭辨仲房朝臣入來、無次官可被行歟、將又停止歟、可爲何樣哉、可計旨示之、予、申云、荷前停止曾不承及事也、又無次官被行其儀之條難計申、本儀可向仲陵々也、依略儀不向、爲如泥事之處、猶又被略者、如形昇立之儀、不爲之哉、事恐尤多、仍彼是難計申、可在時宜之旨申了、但今夜內侍所御神樂云々、然者定有參仕陪從歟、以彼御神樂以後、可被用次官哉之旨申之後、聞次官遂不出來、御神樂、陪從無之上、擬侍從荷前文書不具、俄難召寄之旨、參仕權少外記利顯申之、仍遂以不被行云々、

定陵墓數

〔三代實錄〕

清和

天安二年十二月九日丙申、詔定十陵。四。慕獻年終荷前之幣、天智天皇山階山陵、在山

城國宇治郡春日宮御宇天皇

父○光仁
施基

山陵、在大和國添上郡、天宗高紹天皇仁○光後田原山陵、在

大和國添上郡、贈太皇太后高野氏

后○桓武母
新笠

大枝山陵、在山城國乙訓郡、桓武天皇柏原山陵、在山城

國紀伊郡、贈太皇太后藤原氏

母○平城
嵯峨
后○平城
嵯峨

長岡山陵、在山城國乙訓郡、崇道天皇太子○桓武廢
早良八島山陵、

在大和國添上郡、先太上天皇

城○平
楊梅

山陵、在大和國添上郡、仁明天皇深草山陵、在山城國紀伊郡、

文德天皇田邑山陵、在山城國葛野郡、

墓○四
略

〔三代實錄〕

清和

貞觀十四年十二月十三日己酉、先是天安二年十二月九日、定十陵、四慕獻年終荷

前幣、是日十陵除、贈太皇太后高野氏

后○桓武母
新笠

大枝山陵、加太皇太后藤原氏后○文德
順子後山階山陵、

以足其數、在山城國宇治郡、

略○下

〔三代實錄〕

光孝

元慶八年十二月廿日丙午、定每年獻荷前幣十陵。五。慕近江宮御宇天皇○天
智山階

山陵、在山城國宇治郡平城宮御宇天皇

仁○光
後田原

山陵、在大和國添上郡、桓武天皇柏原山陵、在山

城國紀伊郡、贈太皇太后藤原氏

母○平城
嵯峨
后○平城
嵯峨

長岡山陵、在山城國乙訓郡、崇道天皇太子○桓武廢
早良八島山

陵、在大和國添上郡、平城太上天皇楊梅山陵、在大和國添上郡、仁明天皇深草山陵、在山城國紀伊郡、

代。又無此出御云々、

〔年中行事秘抄 十二月〕荷前事立卷以前大神祭以後云々

弘仁式云、天皇御便殿、禮拜奉班、

國史云、天安二年十二月詔定十陵四墓、獻年終荷前幣使、使不憚、念誦小浴可宜云々、雖似神事、頗涉不淨、仍不行他神事、

〔類聚符宣抄 四〕荷前

大納言正三位兼行右近衛大將良岑朝臣世○宣、擇定獻山陵荷前日時、解文、所司理須預定早進、而

期促、年中不便行事、自今而後、宜仰辨官并中務省等、雖定遠日、十二月五日以前、爲例令進者、即日宣告、右大

史高丘宿禰繁門、中務大輔安倍吉人朝臣訖、

天長六年十二月十三日

大外記島田朝臣清田奉

〔類聚符宣抄 四〕荷前

被右大臣多○源、宣云、中務省擇申奉荷前事、今月廿三日可行者、而彼日當國忌、仁○光、因茲更令陰陽寮

勘申自餘吉日、寮勘申云、除件日之外、皆有可忌、避無可用之日、宜雖當國忌之日、依陰陽寮擇定、廿三

日行之、即仰左大史丸部百世了

元慶七年十二月十八日

少外記大藏善行奉

〔建武年中行事〕荷前は、つかひくを兼て定られて、おのく御陵に奉らる、使は公卿也、次官そひたり、

〔江家次第 十二月〕荷前事

荷前彩帛、廿日以前省治部受取、預錄一人、史生諸陵率陵戸辨藤原令納、省掌一人、

〔江家次第 十二月〕荷前事

時申詞、陵稱獻出、幕稱申出、

〔延喜式三十大祓〕

十二月供諸陵幣、其物納調之日、列敷正其儀隨符到、前一日、與諸陵寮依例裏備、又設御

座於建禮門外、立五丈紺帳二字、次立七丈五丈紺帳各一字、并懸幔、又於正倉院立七丈紺帳一字、列

幣、立五丈紺帳二字、一字東面、懸幔參議以上一

當日早朝掃部寮設帳下座及所司座、又鋪積幣物薦於帳前、訖即與諸陵寮共積幣物、參議以上及辨

官就座、丞進就版位、治部預申積畢狀、治部輔就座、省輔一人進就座、丞錄各一人共進就座、諸陵寮亦

就座、訖治部輔唱使人名、省丞錄二人、取幣物付使人、

凡荷前物裏備之日、縫殿寮南庭立五丈紺帳一字、懸幔、

〔延喜式三十八掃部〕

奉山陵幣御座、設於建禮門前帳下、大臣已下及辨官已上座、設於東帳下、設幣帛下敷

葉薦三枚、帖四枚、

凡辨備山陵幣之座、設縫殿寮南院、并大藏省正倉院、

〔政事要略二十九〕荷前事

清涼記、荷前事、當日早旦、供御浴、御南殿、御腰興行、幸建禮門前帳、著御帛、御衣、諸衛不稱警、

〔北山抄十二〕見荷前事

天曆八年勘申、諒、開年例、元慶四年不出御、承和九年出御、延喜十五年御記、見不出御之例、又可、令勘

申者、御記云、當物忌之中、諒、開年不出御、仍不自拜、而承和出御、然則不御失禮也、

安和二年、令勘申幼主御時、例、承平元、二、三、五年不出御、四年六七年無日記者、依承平例、不出御、當御

物忌時、不向神社山陵之由、見九條記、

〔江家次第十一〕見荷前事

裏書云、荷前天皇、行幸建禮門前帳、有此事、兩儀大臣以下向承明門外行事、天皇出御、宜陽殿西廂、近

屬以上進就座省掌率使者等神功皇后陵寮屬以上一人自餘各陵寮預入列于庭中西面北上先是大藏丞錄各一人進就
頒幣座治部輔就唱陵號座諸陵允取陵幕使者歷名札授輔輔以次唱諸陵號始唱諸陵號及唱使名大
藏取幣近錄丞取之授使者即受退事畢群官俱退其頒幣之時申詞貴所稱獻出凡所稱奉出幕稱申
出

〔皇年代略記持統〕首書 荷前事初此代云々

〔延喜式十一〕凡季冬獻幣於諸山陵及墓皆用當年調物中務省預擇大神祭後立春前之吉日十二

月五日以前申送太政官又式部點散位已上進其交名爲補侍從不參之當日參議已上少納言辨外記史

等著別供幣所經行事其幣者內藏寮供擬色數見內藏寮式至時刻天皇御建禮門前幄禮拜奉班但常幣者

參議已上一人辨外記史等向大藏省奉班其使者中務式部差定移送治部儀事見式

〔延喜式十六〕凡獻荷前日者預擇定大神祭後立春以前十二月五日申省中

〔延喜式二十一〕嵯峨陵太皇太后橘氏嵯峨后嘉智子在山城國萬野郡兆城東西六町南二町北五町守戶三烟不入順幣之例

〔大日本史禮樂四〕按皇后遺令不營山陵故不預頒幣乎

〔延喜式二十〕凡每年十二月奉幣諸陵及墓其陵別五色帛各三尺庸布一段一丈四尺倭文三尺木

綿四兩麻一斤近陵別五色帛各一丈純一疋絲一絢調布一端倭文一丈木綿十三兩麻三斤五兩裏

料薦五尺黑葛三兩遠慕及近慕幣各同遠陵例略中同月上旬錄幣物數并伊勢近江紀伊淡路等國

使名及銘數申省國別二刻縣鈴一省申官頒幣日差各陵慕預人奉但神功皇后陵差其日依時刻省

輔丞錄各一人率寮屬以上及使者集大藏省參議已上一人率辨官就版位大藏省進申積幣物記事

大藏式即參議已上令召使喚治部省如常丞進就版位即宣曰率使者等參來兩省輔寮屬已上進其就

座省掌率使者等列於庭中西面先是大藏丞錄各一人就頒幣之座治部輔先就稱陵號之座然後寮

允取使人各札授輔以次舉諸陵號始舉諸陵號及唱使名大藏授幣使人受退事畢群官共退其頒幣之

〔儀式〕奉山陵幣儀

十二月上旬諸陵寮錄幣物數并應擇日之狀申送治部省省申官行下中務省仰陰陽寮擇日（用立神曆後吉日）前十日中務省差定使次侍從以上內舍人大舍人總錄名簿進太政官式部點非侍從五位十人進之（補待從四位非常例）同月十三日大臣定參議以上使令少納言就內侍奏（定元會侍從之次同定侍從其次其侍從以上五位以上使同共奏之）使山階此一陵中納言以上柏原深草田邑後山階五陵參議以上若非參議三位以上各一人四位若五位一人內舍人一人大舍人一人楊梅一陵四位一人五位一人大舍人一人田原後田原八島三陵宇治後宇治愛宕三墓四位若五位二人大舍人一人多武峯墓內舍人一人大舍人一人別貢物內藏寮預前具錄色目申省省即申官官下符所司請受練染前一日大藏木工等省寮建禮門外橫立五丈班帷二字（北一字其下備經帷設御座南一字爲障設幣物之所）其東三許丈縱立七丈帷一字（北頭與陳幣帷相當北二同爲障以下五位其東縱立五丈帷一字設外記史以下座先是縫殿寮南庭立五丈帷一字懸幔設內侍已下裏別貢物座大藏省正倉院中區縱立五丈帷一字懸幔設參議已上一人座其南橫亦立一字設辨官座大藏省官人率藏部等襄備幣物（幣料納當年調之日別設正倉）又內藏寮差史生四人令貢幣物於縫殿寮南庭候之內侍以下從內裏退出通夜裁成逮曉裏畢所別盛楊宮一合襄以額額表淺綠裏結以縹帶二條更納漆櫃安漆高案輅以紫綾表緋裏其難給料所宮一合襄以黃表帛裏結以縹帶二條更以縹帶著木但多武峰料者襄以葉薦半枚著木陵別以駕輿丁三人充擔夫（二人幣物一人雜其擔夫皆著橡衫布袴返上）其口平旦大臣以下就座時刻乘輿輕輦訖使公卿以下進執幣（幣皆御供事入置物所復本座隨內侍宜進執幣物退出授大舍人但多武峰宇治後宇治愛宕四墓幣物不置御所便執退出同時治部輔丞錄各一人率諸陵寮屬以上及使者集大藏省參議以上一人并辨外記史各一人率史生官掌等各就帷座大藏省錄進就版申陳幣物訖（此裏幣物申率庭中）即參議以上喚召使稱唯就版參議宜喚治部省召使稱唯趨出喚之稱唯丞代進就版參議宜率使者等參來丞稱唯趨出治部大藏兩輔率諸陵寮

古事類苑

帝王部十八

山陵下

荷前名稱

〔伊呂波字類抄五〕荷前ノザキ

〔政事要略二十九〕基案義解職令義解所謂荷前者、四方國進御調荷前取奉、故云荷前式見

〔延喜式四〕伊勢大神宮略九月神嘗祭中

調荷前絹一百十三疋一丈二尺略下

〔延喜式八〕祈年祭略中

辭別伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久○中略荷前者、皇大御神能大前爾如横山打積置氏殘波平

開看略下

〔續日本後紀九〕承和七年五月辛巳、後太上天皇○淳順命皇太子○仁曰○中略又歲竟分綵號曰○

荷前○

〔萬葉集二〕久米禪師相聞妙石川郎女時歌

東人之荷向ノヘノヘ乃荷之緒ノヘノヘ爾ノヘノヘ毛ノヘノヘ情ノヘノヘ爾ノヘノヘ乘ノヘノヘ爾ノヘノヘ家留ノヘノヘ香聞ノヘノヘ

〔萬葉集略解〕荷向は、いづれの國にても、年毎に始に奉る調物を荷前と云、

〔令義解職一〕諸陵司

正一人掌祭陵靈前十二月奉是也喪葬凶禮諸陵及陵戸名籍事

儀式

山陵鳴動

二〇三

伐木

同

掘損

二〇六

火災

二一四

蒙汙饒

同

建佛堂

二一五

荒廢

二一六

修築

二二三

雜載

二四一

古事類苑

帝王部十八

山陵下

荷前名稱

一八三

儀式

同

定陵墓數

一八八

發使

一九一

幣物

一九五

謁陵

一九七

告祥瑞

一九八

告事變

同

告外蕃來朝

一九九

告火災

同

祭陵

同

祈疾

二〇〇

祈災異

同

祈國家平安

二〇二

〔類聚國史〕帝三十一延暦十九年七月壬戌、分淡路國津名郡戸二烟以奉守崇道天皇陵、大和國宇智郡

戸一烟奉守皇后后○光仁、

〔延喜式〕二十一、宇智陵皇后○光仁并上内親王、在大

八嶋陵崇道天皇、桓武廢太子早良、在

嵯峨陵大和國上郡○宇智、在

○按ズルニ、此他清和天皇皇后藤原高子ノ後深草陵ニ、守戸三烟アリ、今之ヲ略ス、

〔延喜式〕二十一、中尾陵贈皇太后藤原氏、仁明后、在

白河陵太皇太后藤原氏、文德后、明子、在山

〔續日本後紀〕十三承和十年四月己未朔、楯列陵守等言、去月十八日食時、山陵鳴二度、其聲如雷、即赤

氣如飄風、指離飛去、申時亦鳴、其氣如初、指兌飛耳、遣參議正躬王加檢察、伐陵木七十七株、至栲木等

不可勝計、便即勘當陵守長百濟春繼上奏矣、

〔延喜式〕二十一凡每年十二月奉幣諸陵及墓○中、頒幣日、差各陵墓預人奉、但神功皇后陵、差

〔愚昧記〕仁安三年四月三十日、今日即位由可被告山陵也、○中即參向山階山陵、○天令尋陵預、頃之

出來、

〔戸田忠友家記〕文久二年十二月十日伺書

一御陵守リ、一ヶ所ニ付、三竈位ヅ、ハ、被差置候様可仕候哉ノ事、

書面ノ通

右ヶ條ノ趣一應奉伺候間、御取極次第、關東へ可申立候以上、

十二月十日

戸田和三郎

陵守長

陵預

御陵守

○按ズルニ、此他允恭、推古、元正ノ三天皇陵ニ、守戸各四烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式〕二十古市高屋丘陵勾金橋宮御宇安閑天皇、在河内國古市郡、中略、守戸二烟。

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讚岐院御事、一以御墓所勅稱山陵、中略、割分民烟一兩、令守

御陵。

〔延喜式〕二十春日率川坂上陵春日率川宮御宇開化天皇、在大和國添上郡、中略、以在京戸十烟、每年差充令守、

〔延喜式〕二十菅原伏見東陵輕向珠城宮御宇垂仁天皇、中略、守戸三烟。

惠我長野西陵次門豐浦宮御宇仲哀天皇、中略、守戸二烟。

惠我藻伏崗陵輕島明宮御宇應神天皇、中略、守戸三烟。

惠我長野北陵遠飛鳥宮御宇允恭天皇、中略、守戸四烟。

傍丘磐杯丘南陵近飛鳥八鈎宮御宇顯宗天皇、中略、守戸三烟。

古市高屋丘陵勾金橋宮御宇安閑天皇、中略、守戸二烟。

磯長山田陵小治田宮御宇推古天皇、中略、守戸四烟。

〔延喜式〕二十狹城盾列池上陵鎭余稚櫛宮御宇神功皇后、大和國添下郡、中略、守戸五烟。

〔續日本後紀〕仁明承和十年五月癸卯、盾列山陵守丁、聽隨闕差京戸并浪人以當土無人差課也、

○按ズルニ、此他延喜式ニ、文武天皇皇后藤原宮子娘ノ佐保西陵、聖武天皇皇后藤原光明子ノ

佐保東陵、光仁天皇皇后紀糠姫ノ吉隱陵、光仁天皇皇后高野新笠ノ大枝陵、桓武天皇皇后藤原

乙牟漏ノ高島陵、藤原旅子ノ宇波多陵、平城天皇皇后藤原帶子ノ河上陵、淳和天皇皇后高志内

親王ノ石作陵等ニ、守戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式〕二十眞弓丘陵岡宮御宇天皇、文武皇太子草壁、春日宮御宇天皇、光仁皇考施基親、

田原西陵王在大和國添上郡、中略、守戸五烟。

皇后及追尊天皇陵、守戸

陵、守戸、重光

左少辨紀朝臣

左少史井原

康保元年十二月四日

○按ズルニ、村上天皇ノ皇后藤原安子、康保元年四月崩ズ、而シテ江家次第荷前ノ下ニ、陵ヲ今宇治ト稱ス、本文所謂宇治新陵ハ、即チ今宇治陵ノ事ナルベシ、

〔延喜式二十〕詠傍山東北陵畝傍原宮御宇神武天皇、在二

〔山陵志〕神武陵、在畝旁山東北嶺畝傍原宮御宇神武天皇、在二其下曰洞村今居者之衆也、相傳其民故神武、守戸、凡守陵者、稱之爲多、亦勢也、

○按ズルニ、延喜式ニ此他綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、成務、仁賢、武烈、繼體、宣化、敏達、元明、

聖武、孝謙、光仁、桓武、平城、仁明、文德ノ二十一天皇陵ニ、守戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式二十〕山邊道上陵磯城瑞籬宮御宇崇神天皇、在二

○按ズルニ、此他景行淳仁ノ二天皇陵ニ、守戸各一烟アリ、景行天皇ハ今之ヲ略ス、

〔延喜式二十〕菅原伏見東陵經向珠城宮御宇垂仁天皇、在二

〔續日本紀元明〕靈龜元年四月庚申、櫛見山陵天皇（垂仁）之陵也、宛守陵三戸、

〔續日本紀考證三〕此云櫛見山陵、與諸書不同、本居氏曰、伏櫛邦訓近、元融案、櫛一本作節、節見即伏

見、

○按ズルニ、延喜式ニ、此他應神、安康元明天皇ノ靈龜中、守陵四、顯宗、用明、孝德ノ五天皇陵ニ、守

戸各三烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔續日本紀元明〕靈龜元年四月庚申、櫛見山陵生目入日子伊佐知宛守陵三戸、伏見山陵大鴨天皇（安

四戸、

〔延喜式二十一〕惠我長野西陵大門口豐浦宮御宇仲哀天皇、在二

河内國志紀郡（中略）守戸四烟、

〔黒川道祐石山紀行〕十三日、天和三天智天皇ノ廟社ヲ拜ス、略中此前村ヲ陵村ト號ス、斯一村

中、十六家ノ人、斯陵ヲ守レリ、古ヘ守陵戸ノ末裔カ、到今免課役右ノ十六家ノ内、竹鼻氏ノ者ア

リ、是ハ古ノ沙汰人ノ内ニテ、給旨并御教書等ハ此家ニ殘レリ、

〔延喜式二十一〕諸陵檜隈大内陵藤原宮御宇持統天皇合葬

〔續日本紀三十五〕實龜九年三月己巳、勅淡路親王仁、三葬、宜稱山陵、其先妣當麻氏墓、稱御墓、充隨近

百姓一戸守之、

〔類聚國史三十五〕天長元年十月丙戌、陵戸五烟奉宛先太上天皇、平山陵、

〔續日本後紀九〕承和七年五月丁酉、勅後太上天皇、和崩後國忌、荷前陵戸等事宜、遵遺制以停奉

行焉、

〔三代實錄清一〕天安二年十二月十四日辛丑、奉充田邑山陵、文陵戸四烟、

〔醍醐雜事記〕御陵付寺家宣旨、

右大辨紀朝臣淑光傳宣、中納言藤原朝臣□□宣山階新陵、略陵戸五烟、衛丁貳拾伍人、暫停諸陵

寮□□醍醐寺令守御陵者、

承平四年七月十三日

左大史坂上在判奉

〔日本紀略五〕康保四年六月九日丙寅、村上御陵、略中可充陵戸伍烟、官符、

〔延喜式二十一〕諸陵後山科陵、太皇太后藤原氏仁明后順子

〔政事要略二十九〕荷前事、

太政官符山城國司

應充假陵戸伍烟事

右宇治新陵料所仰如件、國宣承知、依件行之、但隔十箇年、依例相替、符到奉行、

假陵戸

と云るにて、是は其陵戸無きか、或はたらざれば、其陵の近き民戸を差充て守らしむるをいふ、諸陵式各陵の下に、守戸とあるは是なり、

〔日本書紀^{三十一}〕五年十月乙巳、詔曰、凡先皇陵戸者、置五月以上、自餘王等有功者、置三月、若陵戸不足、以百姓充、免其徭役、三年一替、

〔延喜式^{二十一}〕凡山陵者、置陵戸五烟、令守之、有功臣墓者、置墓戸三烟、其非陵墓戸、差點令守者、先取近陵墓戸充之、

〔延喜式^{二十一}〕日向埃山陵、天津彦彦火瓊瓊杵、

日向高屋山上陵、彦火火出見、日向國、無陵戸、

日向吾平山上陵、彦火火出見、日向國、無陵戸、

〔延喜式^{二十一}〕菅原伏見東陵、大和國添下郡、中略、陵戸二烟、

○按ズルニ、此他應神天皇陵ニ陵戸二烟アリ、今之ヲ略ス、

〔延喜式^{二十一}〕山邊道上陵、日向國、代宮御宇、景行天皇、

○按ズルニ、此他仲哀、允恭、顯宗、安閑、推古ノ五天皇陵ニ、陵戸各一烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式^{二十一}〕百舌鳥耳原中陵、難波高津宮御宇、仁德天皇、

○按ズルニ、此他、履中、反正、欽明、皇極、文武、文武ノ六天皇陵ニ、陵戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式^{二十一}〕丹比高鷲原陵、泊瀬朝倉宮御宇、雄略天皇、

○按ズルニ、此他清寧、光孝ノ二天皇陵ニ、陵戸各四烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式^{二十一}〕倉梯岡陵、倉梯宮御宇、崇峻天皇、

押坂內陵、高市岡本宮御宇、舒明天皇、

山科陵、近江大津宮御宇、天智天皇、

陵戸定額

之墓トアリテ、有功ノ外ハ、皇子モ陵ト稱スルヲ得ザリシヲ以テ知ルベシ、故ニ蘇我父子ノ、大陵小陵ト稱セシハ、借越ノ至ナリ、

〔令義解〕職見諸陵司

正一人掌祭二陵三靈四○中及陵戸名籍事、

〔唐六典〕十四常寺諸陵署略○中陵戸

〔令義解〕九凡先皇陵謂先代以來帝王山置二陵戸三令守非陵戸令守者十年一替、

〔令義解〕二凡造計帳每年六月三十日以前京國官司責所部手實帳謂手實者戸頭所造也具注家口年

紀謂年紀也○中略收訖依式造帳謂造計帳連署八月三十日以前申送太政官謂錄戸送也、

〔延喜式〕二十一凡陵戸及守戸計帳者寮差專當人注名申省分遣本郷與國司共相知勘造其戸藉亦

差遣專當官人勘造

〔令義解〕二凡戸籍六年一造起十一月上旬依式勘造里別爲卷總寫三通○中二通申送太政官一通

留國其籍戸陵戸籍則更寫一通各送本司○下

凡陵戸官戸家人公私奴婢皆當色爲婚謂凡此五色相當爲婚即異色相娶者律無即名並當合既

其官戸陵戸家人是此三色者官戸爲輕二色爲重亦公

凡官戸陵戸家人公私奴婢與良人爲夫妻謂夫其妻賤及夫賤妻良並是故云爲良所生男女不知情

者從良皆離之其逃亡所生男女皆從賤

〔令義解〕三凡陵戸免課役○節

〔延喜式〕二十五凡勘大帳者略○中其依符所免爲符損入位二子三中略陵

〔律疏〕賊盜凡緣坐略中僧尼及婦人若官戸陵戸家人公私奴婢犯逆者止坐其身

〔古事記傳〕二十陵戸と云は永く其陵々に屬たる戸なり非陵戸令守と云は持統紀に以百姓充

者^略○中是日召聚耆宿天皇親展問有一老嫗進曰置目^名知御骨埋處請以奉示於是天皇與皇太子

子億計^仁將老嫗婦幸于近江國來田綿蚊屋野中掘出而見果如婦語^略○仲子^{市邊押磐}之尸

交橫御骨莫能別者^略○中由是仍於蚊屋野中造起雙陵相似如一葬儀無異五月狹狹城山君韓帝

宿禰事連謨殺皇子押磐臨誅叩頭言詞極哀天皇不忍加戮充陵戶兼守山創除籍帳隸山部連

〔古事記下〕案此天皇求其父王市邊王之御骨時^略○中爾起民掘地求其御骨即獲其御骨而於其蚊屋

野之東山作御陵葬以韓帝之子等令守其御陵

〔日本書紀十五〕白髮天皇^略三年四月立億計王^仁爲皇太子立天皇爲皇子五年正月白髮天皇

崩是月皇太子億計王與天皇讓位久而不處由是天皇姊飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政自稱

忍海飯豐青尊十一月飯豐青尊崩葬葛城口丘陵

〔延喜式二十〕壇口墓^{飯豐皇女在大和國當三郡北城}

〔續日本紀一〕四年八月戊申宇尼備^{神賀久山}賀久山^不成會山陵^{坂邊皇太子押}及吉野宮邊樹木無

故凋枯

〔延喜式二十〕成相墓^{押坂產人大兄皇太子在大和國廣瀨郡}

〔日本書紀二十〕元年四月己卯立厩戶豐聰耳皇子爲皇太子仍錄攝政以萬機悉委焉橘豐日天皇

明^用第二子也二十九年二月癸巳半夜厩戶豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮^略○中是月葬上宮太子

於磯長陵

〔延喜式二十〕磯長墓^{橘豐日天皇之皇太子名云聖德太子在河內}

〔日本書紀二十四〕元年是歲蘇我大臣蝦夷立已祖廟於葛城高宮^略○中又盡發舉國之民并百八十

部曲預造雙墓今來一曰大陵爲大臣^{蝦夷}墓一曰小陵爲入鹿^{蝦夷}墓

○按ズルニ陵墓ノ稱當時其制極メテ嚴ナリシコトハ同書孝德天皇大化二年ノ詔ニ王以上

重崇道天皇

〔延喜式二十〕八嶋陵國嶺道天皇光仁皇子桓武殿太子早夏在大和郡光城東四五町南北四町守戸二烟

〔古事記神中〕於是與登美毘古戰之時五瀬命於御手負登美毘古之痛矢串○中到紀國男之水門而

詔負賤奴之手乎死爲男建而崩○中陵即在紀國之龜山也

〔日本書紀六〕二十八年十月庚午天皇母弟倭彥命薨十一月丁酉葬倭彥命于身狹桃花鳥坂於是集近習者悉生而埋立於陵城

〔日本書紀七〕四十年十月癸丑日本武尊發路之○中逮于能褒野而痛甚之○中既而崩于能褒野

時年三十天皇聞之寢不安席食不甘味○中即詔群卿命百寮仍葬於伊勢國能褒野陵時日本武尊

化白鳥從陵出之指倭國而飛之○中於是遣使者追尋白鳥則停於倭琴彈原仍於其處造陵焉白鳥

更飛至河內留舊市邑亦其處作陵故時人號是三陵曰白鳥陵

〔古事記中〕於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵○中於是化入尋白智鳥翔天而向濱飛行

○中故自其國飛翔行留河內國之志鸕故於其地作御陵鎮坐也即號其御陵謂白鳥御陵也

〔日本書紀仲八〕元年十一月乙酉朔詔群臣曰朕未逮于弱冠而父王○日本武尊既崩之乃神靈化白鳥上

天仰望之情一日勿息是以冀獲白鳥養之於陵城之池因以視其鳥欲慰顧情則令諸國傳貢白鳥

〔日本書紀仁德〕六十年十月差白鳥陵守等充役丁時天皇臨于役所愛陵守曰杵忽化白鹿以走於是

天皇詔之曰是陵自本空故欲除其陵守而甫差役丁今視是佐者甚懼之無動陵守者則且授土師連

等

〔續日本紀二〕大寶二年八月癸卯震倭建命莫遣使祭之

〔延喜式二十〕能褒野墓日本武尊在伊勢國鈴鹿郡光城東四二町南北二町守戸三烟

〔日本書紀十五〕元年二月壬寅詔曰先王○聖德太子遺離多難殞命荒郊○中廣求御骨莫能知

帝王部十七 山陵上 一七五

〔延喜式二十一〕小野陵贈皇太后藤原氏字多后胤子在山城國宇治郡小野鄉陵戸五烟四至東限百姓口分并假修院山南限小栗栖寺山井道西限橘尼山峯北限松原山尾并百姓口

〔江家次第十二〕見荷前事

宇治三所參議以上一人被三所之例太多

太后

朱衣村上母后

太后穩子(醍醐后)

中字治

中后

冷泉國融母后

中后安子(村上后)

今字治

院母后

院白河母后茂子

〔拾芥抄十〕十陵略中

中宇治贈皇太后宮藤安子字治三所於木幡大門前使以官等兩發云云

後宇治贈皇太后宮茂子

後宇治贈皇太后宮藤安子字治三所於木幡大門前使以官等兩發云云

〔百練抄十五〕仁治三年七月十一日辛卯母儀源氏后通子贈皇后被定山陵國忌云云

〔延喜式二十一〕田原西陵春日宮御宇天皇(天智皇子光仁父)施基親王在大和國添上郡光城東四町南北二町陵戸六烟

〔延喜式二十一〕真弓丘陵國高市郡光城東四町南北二町陵戸六烟

〔續日本紀二十〕天平神護元年十月辛未行幸紀伊國是日到大和國高市郡小治田宮壬申車駕

巡歷大原長岡臨明日香川而還癸酉過檜山陵同宮天詔陪從百官悉令下馬儀衛卷其旗幟是

日到宇智郡

〔類聚國史三十〕帝王三十延曆十九年七月己未詔曰朕有所思宜故皇太子早良親王追稱崇道天皇略中其

業並稱山陵令從五位上守近衛少將兼春宮亮丹波守大伴宿禰是成率陰陽師衆僧鎮謝在淡路國

崇道天皇山陵壬戌分淡路國津名郡戸二烟以奉守崇道天皇陵

〔帝王編年記十二〕延曆十九年七月遣勅使於淡路國取故早良親王骨奉納大和國八嶋寺海上郡崇古市南崇

追尊天皇陵

后妃陵

後土御門院 嘉樂門院○後土御門 後柏原院 後奈良院 豐樂門院○後奈良 正親町院

後陽成院 中和門院○後水尾 如此御代々御火葬連綿相續仕候

〔古事記垂仁〕大后比婆須比賣命之時、定石祝作、又定土師部、此后者葬狹木之寺間陵也。

〔日本書紀垂仁〕三十二年七月己卯、皇后日葉酢媛命薨。○中土物始立于日葉酢媛命之墓。

○按ズルニ、日葉酢媛皇后ノ墓ヲ、古事記ニハ陵ト爲シ、日本書紀ニハ墓ト爲セリ、當時其稱ノ

一ナラザリシナラン、然レドモ皇后ハ普通ニハ墓ト稱セシコト、此文ニ據リテ見ルベシ、

〔延喜式諸陵〕狹城盾列池上陵○餘余雅經宮御宇神功皇后在大和國添

〔日本書紀神九〕六十九年四月丁丑、皇太后○神崩於稚櫻宮、十月壬申、葬狹城盾列陵、

〔輜軒小錄〕山陵の事

神功皇后の陵は、奈良より西、三十町許にありと云ふ、上に梓宮を奉藏する處あり、人畏れ敢て

近付かず、其脇に二斗許入る壺多くあり、大様一間四方に一つ程のわりにて、地に埋め有りと

云ふ、

〔續日本紀二十〕天平寶字四年十二月戊辰、勅太皇太后宮○文武后藤原御墓者、自今以後、並稱山

陵、

〔延喜式諸陵〕佐保山西陵○平城朝太皇太后藤原氏、文武后宮子姪在大和國

〔續日本紀二十〕天平寶字四年十二月戊辰、勅○中皇太后○聖武后藤原御墓者、自今以後、並稱山陵、

〔延喜式諸陵〕佐保山東陵○平城朝太皇太后藤原氏、聖武后安宿媛在大和國

〔續日本紀三十〕寶龜二年十二月丁卯、勅先妣紀氏未追尊號、自今以後、宜稱皇太后、御墓者稱山

陵、其忌日者亦入國忌例、設齋如式、

〔延喜式諸陵〕吉隱陵○皇太后紀氏、光仁母、后藤原、在大和國城

〔中原師夏記〕應安七年正月廿八日、酉下刻新院御仁後光應七年七月於柳原殿崩御、二月二日丁酉子刻後

光殿院御葬禮御幸也、奉送泉涌寺、廿六日、舊院御遺骨被奉納所々、深草法華堂、天龍寺金剛院

天王寺難波浦、高野山、泉涌寺、安樂光院

〔神事雜類抄〕舊院後花園仙骨、伏見大光明寺、地藏殿之築山、先年奉納由云、明後日十日、般舟三昧院之

石塔可奉渡之、如此一身燒灰仙骨一箱入歟、被置之時候、既可掘起申之上者、可爲卅ヶ日穢限存候、御所存可爲如何哉、具以可被注申旨被仰出候也、恐々謹言、

長享二
七月八日

忠富

舊院玉骨、先年被安置大光明寺、築山然來十日、可被遷申般舟三昧院之石塔云云、此條可被守改葬法歟、爲全分御灰者、卅箇日穢、勿論候乎、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今夜戌刻、有御北首事後土御門、十一月十一日辛酉、今夜御葬禮也、十二日壬戌、今朝即御收骨儀也、上卿甘露寺中納言爲內事傳奏、即有分散儀、一分如例、上卿持之、

納言豐顯云々、今度如何哉、奉籠深草法花堂、又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜之、又山國常照寺被籠之、然

寺僧不參之間、無其沙汰、比丘尼御所々々、於火屋面々取給之、雖非先規、不及制之云々、

〔顯廣王記〕永萬元年十月十五日辛卯、右大臣被參高野廟是二條院、御髮爲奉收、彼山云云、堀川院例也、

灰森

髮塔

〔俊方朝臣記後水尾院崩御記所引〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上刻、太上火皇後水尾圓淨御俗名終崩御

也、略中申刻般舟院陽空長老來駕口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬願候、深草安樂

行院ニ、治御骨骨堂モ、後陽成院崩御之時分出來、其以後破損ニテ、雨露も掛り候體如何に候間、此度之事願之由御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

口上書

〔一代要記近九〕久壽二年七月廿三日、於近衛内裏崩、八月一日、火葬船岡西野、

〔増鏡三〕此浦岐にすませ給て、十九年ばかりにや有けん、延應元年といふ二月廿二日、六々中にてかくれさせ給ぬ、後鳥近き山にて例のさほうになし奉るも、むげに人々々々に心細き御

有ささいとあはれになん、御骨をば能茂といひし北面の入道して、御どもにさふらひしぞくび

にかけて奉りて都にのぼりける、

〔増鏡十一〕今日の日、嘉元も三年になりぬ、萬里小路殿の法皇山、又御なやみとて龜山殿へうつら

せ給、中九月十五日のあけぼのに、終にかくれさせ給ぬ、中十七日に御わぎの事させ給、中

略よそほしかりつる御ありささいとほどなく、只時のまの烟にてのぼり給ぬ、

〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻御年卅七ニテ終ニ崩御ナリ、中二月二日、東山泉

涌寺へ御葬禮、中スグニ穴ニ御棺ヲ入奉テ、御輿ヲバ取除、長老ヨリテ又焼香シテ、薪ニ火ヲタ

イ松ニテツケラレ給、中同三日、御骨ヲ當寺ノ僧ノ沙汰ニテ拾奉ル、

〔山の霞〕文明二の年十二月廿六日、夜半ばかりより、法皇後御中風の御所勞いでさまし、て、

終に辰の刻ばかりに崩御ならせ給ふ、中三日文明三申の刻に、悲田院にて御葬送の儀あ

り、中ほどなく烟となり給へるを見參らせけるに、白樂天が、石火光中寄此身とつくれりしも

眼前におぼえて、

立のぼる後のけふりとなるまでに雲むに高き名をのこすかな

〔長秋記〕天永四年三月廿二日、堀河院御骨、自香隆寺、令渡仁和寺御、中及酉時奉突埋、此後立石横

重三其内安置法花經四卷經、種々要文陀羅尼等、

〔文應皇帝外紀〕嘉元三年秋、上皇山病龜山宮、中九月望、上皇崩、中閏毘後藏仙骨於三所、淨金

剛院、南禪寺、金剛峯寺、且順願命也、

分骨所

水 御石塔供養也、人々濟々參詣、

〔後拾遺和歌集^十〕圓融院法皇^十を給て、紫野に御葬送侍けるに、一とせ此所にて、子日せさせた
まひし事なき思ひ出てよみ侍ける、

紫の雲のかけても思ひきや春の霞になして見んとは。

左大將朝光

大納言行成

おくれじと常のみゆきはいそぎしをけふりにそはぬたびのかなしと

〔榮花物語^九〕寛弘八年六月廿二日のひるつ方あざましうならせ給ぬ^{〇一條、かくて八日〇七}

のゆふべ、いはかげといふ所へおはしなすぎしきあり^{〇中} おはしなつては、いみじと御有

様と申つれど、はかなき雲霧とならせたまひぬるはいかゞはあはれならぬ長き夜といへどは

かなうあけぬれば曉がたには御骨なき、そちの殿^{〇藤原}なぞとらせ給て事はてぬれば、大藏卿

正光朝臣おひ奉りて、歸らせ給はせなきいみじうかなし、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日乙丑、主上^{〇一條後}自去三月之比不例御^{〇中}漸及戌刻之間遂崩於清

涼殿、五月十三日庚寅及曉景、資業朝臣時觀等歸參申云、巡檢神樂岡東邊、自一條以南、自上東門

本以北、自御在所申方有便所以其地可爲山作所也、十九日丙申、令向山作所給^{〇中}及辰刻奉舉

茶毘^{〇下}

〔皇年代略記^{後冷泉}〕治曆四年四月十九日庚申、崩於賀陽院^{四十四、五月五日丙子、火葬}

〔長秋記〕大治四年七月十五日辛卯、法皇^{〇白}御葬送^{〇中}至高隆寺西北御墓所、于時清庭御所安御

棺、次奉移貴所^{也、禮所}次開御棺蓋、置御體、廻折松薪等上置藁、又不覆蓋、次取前火付薪、

〔中右記〕嘉承二年七月十九日癸卯、主上^{〇堀}辰刻許、御氣色斷給也、廿四日戊申、今夕御葬送也、^{〇中}

略 至高隆寺坤方野^{〇中}奉茶毘

〔中右記〕永久二年十二月廿一日、荷前也、予共人五人、檢非違使資清相具、於深草山陵鳥居_○前_○下、從車入鳥居_○洗手_○、山陵守儲手水、令燒幣物、此間解劍持笏、兩段再拜了歸洛、

〔中右記〕永久五年十二月廿四日、荷前也、○中騎馬相具共人五六人、此間乘燭、從粟田口到山科之山

陵_○、○天南鳥居前、陵守出來敷疊、令洗手、進陵前兩段再拜、

〔愚昧記〕仁安三年四月卅日、今日即位_○、○高由可被告山陵也、○中即參向山階山陵、○天令尋陵預、頃

之出來予問云、參御山歟、將候此鳥居歟、答云、此鳥居下令候也、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、○中式部大輔資業朝臣、美作守定經朝臣等向御非所、○後採

鋤覆土其後人夫等從此役、御墓上立石卒都婆藏、施羅尼、其廻立釘貫、又右衛門尉季任令人夫堀塘、

其廻令殖樹云云、

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊申、今夕御喪送也、○曜

廿五日、內大臣獨留御墓所、令作山陵、○墓上立石

卒部婆藏、施羅尼、立釘貫、

〔前王廟陵記〕或曰、二條院御墓、在舟岡北麓、所謂香隆寺、良野者是耶、上有五重石塔、近世嗜茶千利

休、取九輪爲己塔、立聚光院、又塔穿獄處爲手水鉢、不幾利休逢禪、

〔建內記〕正長二年七月四日、稱光院殿去年崩御、御殿_○渡殿_○、御路出御之門、出御之門也、北今日被撤

却之、新中納言_○、○觀光奉行之、運渡泉涌寺雲龍院也、稱光院御塔以在彼院之故也、今更催餘意者也、

五日、黑戶渡殿門等、今日悉壞、渡雲龍院云云、○四日、著狩衣、參泉涌寺雲龍院、是則兩代、○後光嚴院、

塔并稱光院御塔也、

〔續史愚抄〕○後光明承應三年十一月廿一日丁未、被供養後光明院御石塔於泉涌寺、先有御塔開眼事、

已上導帥報恩院某、公卿右大臣_○、○時實已下五人參仕、奉行藏人頭左中將宗良朝臣、

〔淳房卿記〕延寶八年十月廿三日戊申、已刻相伴右宰相中將右衛門督行豐朝臣第、詣泉涌寺舊院、○後

陵塔
石卒都婆

右中納言從三位左衛門督藤原朝臣恒佐宣奉勅件人掘畢後山科山陵湫之間宜免陣直者

承平元年十一月廿七日

少外記嶋田公鑒

同日召仰大志高志常直了

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰讀岐院○御事一以彼御墓所勅稱山陵其邊掘墮不令汙穢

〔兵範記〕久壽二年七月廿三日戊辰午刻天皇○近崩于近衛殿八月二日丁丑巳刻大納言歸向御

葬所築陵植樹掘院

陸樹

〔續日本紀八元〕養老五年十月丁亥太上天皇○元召入右大臣從二位長屋王參議從三位藤原朝臣房前詔曰○中朕崩之後宜於大和國添上郡藏寶山雅良峯造龜火葬○中庚寅太上天皇又詔曰

○中就山作龜茨棘開場即爲喪所又其地者皆殖常葉之樹即立刻字之碑

〔日本紀略嵯峨〕弘仁五年五月是月有虫食柏原山陵○武樹東北方六十丈許皆枯焉

〔文德實錄〕嘉祥三年四月辛酉遣左近衛將曹栗田真持於深草陵○仁列栽樹木間以一丈相襲成

行

〔三代實錄清和〕貞觀十年二月十八日壬午野火燒損田邑山陵○文兆域中之樹木

〔日本紀略四村〕康保四年六月九日丙寅村上御陵可殖樹之由被仰左右衛門

〔二水記〕享祿四年四月七日聖忌○柏原請一僧了午前參泉涌寺於法塔密々著直垂拜御廟了先年已

後始詣事今更拭愁淚了後土御門院御廟椿先皇御廟松也法塔○東椿西松

○按ズルニ後土御門後柏原ノ二天皇陵ハ並ニ深草法花堂ニ在リ然レバ本文御廟ト稱スル

モノハ宮内省撰定ノ陵墓一覽ニ所謂灰塚ノ事ナランカ

陵前島居

〔小右記〕永觀二年十月廿七日癸卯辰時許參院○令修諷誦於七箇日○寺已時參御邑上山陵○中略下留御車於島居外即下御余候御劔前行之置御座○所立磯上其張帳公卿侍臣帷在島居外略下

〔類聚國史〕帝三十五大同二年八月己巳大和山城二國定八嶋。○桓武殿太河上。○平城后柏原山陵兆

域陵之四至各有其限其百姓田并地在八嶋河上二陵界內者以乘田賜之但地者准估賜直

〔延喜式〕諸陵二十一柏原陵平安宮御宇桓武天皇中略兆城東八町四

〔三代實錄〕清和十四貞觀九年十二月十八日癸未庶人仲善男建立道場在山城國紀伊郡柏原山陵兆域

之內勅令移却

〔延喜式〕諸陵二十一楊梅陵平安宮御宇日本親王推國高彥尊天

〔三代實錄〕清和五貞觀三年六月十七日庚申詔定仁明天皇深草山陵四至東西限一町五段南限純子

內親王家地北限峯

〔三代實錄〕清和十二貞觀八年十二月廿二日癸巳勅改定深草山陵明○仁四至東至大墓南至純子內親王

家北垣西至貞觀寺東垣北至谷

〔延喜式〕諸陵二十一深草陵平安宮御宇仁明天皇中略兆城

〔延喜式〕諸陵二十一田邑陵平安宮御宇文德天皇中略

後田邑陵光孝天皇中略兆城東西四町南北四町

〔醍醐雜事記〕醍醐天皇崩事

延長八年從七月中旬不豫九月廿七日丁亥亥三刻先皇御車遷御於右近衛府大將曹司廿九

日上皇受於山座主三歸三聚淨戒等未刻崩於右近府春秋十六十月十日庚子亥四刻奉葬於醍醐

寺北笠取山西方四面八十町東西八町南北十町穴深九尺廣三丈校倉高四尺三寸縱橫各一丈

十一日天漸明辰四刻到醍醐寺北山陵諸寺八十六所夾路設幕擊鐘念佛十二日山作所於山陵

立卒都婆三基

〔類聚符宣抄〕四左衛門權少尉源添

山陵一云河內國石川郡高四丈方九町

〔延喜式〕諸陵二十一越智岡上陵飛鳥川原宮御宇皇極天皇中

〔扶桑略〕記齊明七年七月廿四日天皇崩山陵朝倉山陵高三丈改葬大和國高市郡越智大堀本○堀一

間山陵十一月

〔延喜式〕諸陵二十一大坂磯長陵經波長柄豐崎宮御宇孝靈天皇

〔扶桑略〕記孝德四年十月天皇崩山陵河內國石川郡大坂磯長陵十二月葬磯長山陵

〔延喜式〕諸陵二十一山科陵近江大津宮御宇天智天皇中

〔扶桑略〕記天智十年十二月三日天皇崩中山陵山城國宇治郡山科鄉北山高二丈方

〔延喜式〕諸陵二十一檜隈大內陵飛鳥淨御原宮御宇天武天皇

〔扶桑略〕記天武十五年九月四日天皇崩山陵大和國高市郡檜隈大內方五丈

〔延喜式〕諸陵二十一檜前安古岡上陵藤原宮御宇文武天皇中

〔扶桑略〕記文武慶雲四年六月十五日天皇春秋廿五崩山陵大和國高市郡檜前安古岡上高三丈方一丈

〔延喜式〕諸陵二十一奈保山東陵平城宮御宇元明天皇中

〔扶桑略〕記元正養老五年十二月四日太上天皇崩天十一元火葬于椎山陵依遺詔不具喪禮三丈

〔延喜式〕諸陵二十一奈保山西陵平城宮御宇淨足姬天皇元正

佐保山南陵平城宮御宇勝安感神聖武天皇中

高野陵平城宮御宇天皇孝謙中

淡路陵平城宮御宇天皇孝和

田原東陵平城宮御宇天宗高祖天皇光仁

檜隈寺者、奉爲欽明天皇所創建大伽藍也、北邊礎石所ノ存在故、

〔波夫理和射乃考〕砂礫を以て陵上を葺くといふは、何の料にしたるにかいまだ考へず、されど

前王廟陵記云、山科陵天皇御在、鏡山麓、陵四面野名御廟野、陵狀有八角石壇、上在六角丘、皆以礫、

築之、壇周圍亦敷礫、礫樹木叢生、とあるも同じ造狀なるべければ、此御世の頃はなべて然せる

制度なりけむと思はる、大柱を建るも何の用なるかしらず、字典に、釋氏は、上柱といふは、

はれず、又、陵土の崩、頭、口爲に、信濃國諏訪神社上殿に拜殿は有れど、宮作はなく、社地に大なる

石窟あるを神の坐所と申して、其四隅に大なる柱を立て、此を御柱と云て宮に擬へたり、此

柱を七年に一度づゝ立替あり、其祭を御柱祭といふ、木は杉、檜、被、徑何にても大木を用ふる例

なり、傳に、いへる趣なり、と云を按ふに、古へは山陵を神靈の坐所としつるものと通ゆれば、

大きな柱を建て、即神祭の料とせるにやあらむ、何にも由ありけなり、

〔延喜式諸十一〕河内磯長中尾陵略、光、語、田、宮、御、字、敏、建、天皇、中、

〔扶桑略記敏三〕十四年八月十五日、天皇春秋廿四歲崩、山陵河内國石川郡磯長中尾高、三、丈、方、二、町、

〔延喜式諸十一〕河内磯長原陵略、中、略、光、池、邊、列、概、宮、御、字、用、明、天、皇、

〔扶桑略記三〕二年四月九日、天皇崩、略、中、推古天皇元年九月、改葬河内國石河郡磯長原山陵高、三、丈、方、三、町、

〔延喜式諸十一〕磯長山田陵略、小、治、田、宮、御、字、推、古、天、皇、中、

〔扶桑略記推四〕三十六年三月、天皇春秋七十三崩、略、中、山陵河内國石川郡科長山田、或本云、山陵大

和國高市郡高、二、丈、方、二、町、

〔延喜式諸十一〕押坂内陵略、高、市、樹、本、宮、御、字、舒、明、天、皇、中、

〔扶桑略記舒四〕十三年十月九日、天皇於百濟宮崩、略、中、皇極天皇三年九月、改葬大和國城上郡押坂

〔延喜式〕諸陵十一古市高屋丘陵勾金橋宮御宇安閑天皇中略

〔扶桑略記〕安閑二年十二月十七日天皇七十崩葬于河內國古市郡古市高屋丘陵高三丈方二町

〔延喜式〕諸陵十一身狹桃花島坂上陵中略光城東野宮御宇宣化天皇

〔扶桑略記〕宣化四年己未二月十日天皇春秋七十二崩葬于大倭國高市郡身狹桃花島坂上陵高三方三町

〔延喜式〕諸陵十一檜隈坂合陵中略光城東四町御宇欽明天皇

〔扶桑略記〕欽明三十二年四月十五日天皇崩葬于大和國高市郡檜隈坂合陵高四丈方四町

〔日本書紀〕推古二十二年十月以砂礫葺檜隈陵上明則城外積土成山仍每氏科之建大柱於土山上

時倭漢坂上直樹柱勝之大高時人號之曰大柱直

〔播磨國風土記〕攝保郡日下部里立野所以號立野者昔土師努美宿禰往來於出雲國宿於日下

郡野乃得病死爾時出雲國人來到連立人衆運傳上川礫作墓山故號立野即號其墓屋爲出雲墓

屋

〔陵墓志〕檜隈坂合陵欽明天皇在大和國高市郡下平田村山字大和志曰高市郡欽明天皇陵在

平田村俗呼梅山推古天皇廿八年十月以砂礫葺陵上即是傍有翁仲二軀御陵所考曰高市郡

檜隈村近邊陵二ヶ所アリ然ドモ欽明天武持統文武ノ際一決シ難シ尙重按大和志說得正矣

御陵所考說未決然今此山陵各以砂石葺之與日本書紀合況近世此陵前周池之側掘出於檜木

大柱其地字池田其傍有稱机ノ地名是宣命場乎大柱者近隣越村醫服部宗堅秘藏而納宮希代

之柱木今細礫其屑而已以此等事考ルニ梅山陵是即坂合陵的當ス山陵ノ域内小冢多曰經塚

曰金冢石竈有之此陵或曰石山其砂石之故乎御陵所考字鐘子山今尋込之圖亦似差今俗號猿山以翁仲二

軀形呼猿訛之廟陵記云フ檜隈寺ハ今在檜隈村中道與寺側十三層石浮屠存之甚古物也往古

〔扶桑略記〕二卷卅二年癸巳正月十四日、天皇春秋八十崩、十月、葬河内國志紀郡惠我長野北原陵、三丈、三町、方

〔河内國陵墓圖〕允恭天皇御陵、岡村ヨリ十二町東、澤田村志紀郡土岐山城守領、岐ノ東南ニツバケリ、四面有

池、處處々水存ス、堤周千四百五十步、池幅四十步、或七十步、山高百二十步、餘石上、處々ノ如ナレ

分、俗ニマカ玉トイフ、青石、光山形如圖、〇圖

〔延喜式〕二十卷「菅原伏見西陵」石上穴、藤宮御宇、安藤天皇、中

〔扶桑略記〕二十卷「三年八月壬辰日」〇中、天皇春秋五十六崩、葬大和國添下郡菅原伏見西陵、高三丈、三町、方

〔延喜式〕二十卷「丹比高鷲原陵」泊瀬朝倉宮御宇、維略天皇、中

〔扶桑略記〕二十卷「廿三年己未八月、天皇年九十三崩、葬于河内國丹遲郡北高鷲原陵、高二丈、二町、方

〔延喜式〕二十卷「河内坂門原陵」磐余、東宮御宇、清寧天皇、中

〔扶桑略記〕二十卷「五年甲子正月、天皇春秋卅九崩、葬于河内國古市郡坂門原陵、高二丈、二町、方

〔延喜式〕二十卷「傍丘磐杯丘南陵」近飛鳥八約宮御宇、顯宗天皇、中

〔扶桑略記〕二十卷「三年四月、天皇四十八歲崩、葬于大和國葛下郡傍丘磐杯丘南陵、高三丈、東二町、二方

〔延喜式〕二十卷「壇生坂本陵」石上、東宮御宇、仁賢天皇、中

〔扶桑略記〕二十卷「十一年戊寅八月、天皇春秋五十歲崩、葬于河内國丹遲郡壇生坂本陵、高二丈、二町、方

〔延喜式〕二十卷「傍丘磐杯丘北陵」泊瀬列城宮御宇、武烈天皇、中

〔扶桑略記〕二十卷「八年十二月、天皇春秋十八歲崩、葬于大和國葛下郡傍丘磐杯丘北陵、高二丈、二町、方

〔延喜式〕二十卷「三嶋藍野陵」磐余、玉璽宮御宇、顯宗天皇、中

〔扶桑略記〕二十卷「廿五年辛亥二月、天皇春秋八十二崩、同年十二月、葬于攝津國嶋上郡三嶋藍野陵、高三丈、三町、方

山ノ根廻七百二十間、山ノ南ノ高十四間、北ノ高十六間四尺、中ノ高十間五尺、中島摠ジテ此陵ヨリ方角ヲ取テ、餘ノ陵所記ス、秀吉公度々此陵ニテ獵シ玉フニ、假ニ居ヲ構玉ヒケレバ、其墟ヲ今ニ茶屋山ト所ノ人云リ、

〔泉州志〕仁德天皇陵號大在舳松領兆城今所存、外堤千二百八十三間、中堤九百五十五間、山根七百六十三間、南峰高十四間、北峰高十六間四尺、四畔小塚九箇、

〔輪軒小錄〕山陵の事

仁德帝の陵は、泉州堺の東廿町許にあり、周回十丁餘ありて、まはりに堀あり、はゞ三四間あり、小舟一艘ありて往來す、上に登れば谷々ありて小山の如し、予兩回まで拜覽す、土人此を大仙陵と云ふ、

〔北窓瑣談〕中泉州堺の東、六七町ばかりに、仁德天王の陵あり、俗に大仙陵といふ、はなはだ大にして南北に長し、その長三四五町ばかりもあり、回迫に池あり、みさゝきは北の方高く、南の方ひくし、樹木おびたしく生茂がり、その大なること天造の岡山の如く、人作のやうにはみえず、今も樹木をさり下くさをはかることを官より禁じ、雜人の入とをゆるさず、天下の陵の大いなるものは、此陵を第一とすべし、

〔延喜式〕諸陵二十一百舌鳥耳原南陵餘城東四町、南五町、中

〔扶桑略記〕二六年三月十五日、天皇春秋六十七崩、十月四日、葬于和泉國大島郡百舌鳥耳原南陵、五丈、五町、

〔延喜式〕諸陵二十百舌鳥耳原北陵丹比榮、城東四町、南二町、中

〔扶桑略記〕二六年正月、天皇六十崩、葬和泉國大島郡百舌鳥耳原北陵、高五丈、廣三町、

〔延喜式〕諸陵二十一惠我長野北陵鴻飛島宮御宇、元祚天皇、中

玉手丘上陵室秋津島宮御宇孝安天皇中

片丘馬坂陵黑田膳戶宮御宇孝靈天皇中

劔池嶋上陵輕原宮御宇孝元天皇中

春日率川坂上陵春日率川宮御宇開化天皇中

山邊道上陵磯城瑞籬宮御宇崇神天皇中

菅原伏見東陵日向城東宮御宇垂仁天皇中

山邊道上陵日向城東宮御宇垂仁天皇中

狹城盾列池後陵志賀高穴穗宮御宇成務天皇中

惠我長野西陵穴門豐浦宮御宇仲哀天皇中

惠我藻伏岡陵輕島明宮御宇應神天皇中

〔扶桑略記二〕神四十一年二月十五日、天皇春秋百十一歲崩、葬于河內國志紀郡惠我藻伏陵高五丈、

〔輜軒小錄〕山陵の事

應神天皇の陵は河州にあり、大仙陵仁の如し、山少く、周回の池なし、譽田八幡と云ふ

社あり、社領二百石にて、社家社僧あり、東一院、西一院、大滿院など云ふ寺十軒許あり、于癸丑の

夏拜見す、

〔延喜式諸陵〕百舌鳥耳原中陵難波高津宮御宇仁德天皇中

〔扶桑略記二〕德八十七年己亥正月十六日、天皇一百十歲崩、廿三歲同年十月、葬于和泉國大鳥郡百

舌鳥耳原中陵五丈、八町、

〔埤鏡〕百舌鳥耳原中陵仁德此陵ハ泉河攝ノ堤、大小路ノ東ノ町外ヨリ八町許離タリ、世人大仙

陵ト云リ、天皇己亥ノ歲ニ崩ズ、宮廟ハ難波ノ邊高津ニ平野明神ト號ス、〇中山ノ間數ノ事、總

後村上天皇檜尾陵河內國餘部郡寺元村

光嚴天皇山國陵丹波國桑田郡井戶村

崇光天皇大光明寺陵山城國紀伊郡堀內村

後圓融天皇深草法華堂同上

稱光天皇深草法華堂同上

後土御門天皇深草法華堂山城國紀伊郡深草村

後奈良天皇深草法華堂同上

後陽成天皇深草法華堂同上

明正天皇月輪陵同上

後西院天皇月輪陵同上

東山天皇月輪陵同上

櫻町天皇月輪陵同上

後櫻町天皇月輪陵同上

光格天皇後月輪陵同上

孝明天皇後月輪東山陵同上

〔延喜式第二十〕畝傍山東北陵敏達天皇御宇神武天皇二町

桃花鳥田丘上陵葛城高丘宮御宇天武天皇中

畝傍山西南御陰井上陵片岡縣浮穴宮御宇安寧天皇中

畝傍山南織沙溪上陵輕曲城東宮御宇南天皇中

掖上博多山上陵掖上城通心宮御宇孝昭天皇中

後龜山天皇嵯峨小倉陵山城國葛城郡上嵯峨村

光明天皇大光明寺陵山城國紀伊郡堀內村

後光嚴天皇深草法華堂山城國紀伊郡堀內村

後小松天皇深草法華堂同上

後花園天皇後山國陵丹波國桑田郡井戶村

後柏原天皇深草法華堂同上

正親町天皇深草法華堂同上

後水尾天皇月輪陵山城國愛宕郡今城野村

後光明天皇月輪陵同上

靈元天皇月輪陵同上

中御門天皇月輪陵同上

桃園天皇月輪陵同上

後桃園天皇月輪陵同上

仁孝天皇後月輪陵同上

光緒

陽成天皇神樂岡東陵山城國淨土寺村

宇多天皇大内山陵山城國宇治村

朱雀天皇醍醐陵山城國宇治村

冷泉天皇櫻本陵京都府上京區鹿谷町

花山天皇紙屋上陵山城國葛野村

三條天皇北山陵山城國葛野村

後朱雀天皇圓乘寺陵山城國葛野村

後三條天皇圓宗寺陵山城國葛野村

堀河天皇後圓教寺陵山城國葛野村

崇德天皇白峰陵山城國阿野村

後白河天皇法住寺法華堂山城國愛宕郡三國愛宕前

六條天皇清閑寺陵山城國愛宕郡清閑寺村

安德天皇阿彌陀寺陵長門國赤間市

土御門天皇金原陵山城國乙訓郡金原村

仲恭天皇九條陵山城國紀伊郡深草村

四條天皇月輪陵山城國愛宕郡今熊野村

後深草天皇深草法華堂山城國紀伊郡深草村

後宇多天皇蓮華峯寺陵山城國葛野村

後伏見天皇深草法華堂山城國葛野村

花園天皇十樂院上陵山城國愛宕郡栗田口村

光孝天皇後田邑陵山城國葛野村

醍醐天皇後山科陵山城國宇治郡醍醐村

村上天皇村上陵山城國葛野村

圓融天皇後村上陵山城國葛野村

一條天皇圓融寺北陵山城國葛野村

後一條天皇菩提樹院陵京都府土市町京

後冷泉天皇圓教寺陵山城國葛野村

白河天皇成菩提院陵山城國紀伊郡竹田村

鳥羽天皇安樂壽院陵山城國紀伊郡竹田村

近衛天皇安樂壽院南陵山城國紀伊郡竹田村

二條天皇香隆寺陵山城國葛野村

高倉天皇清閑寺法華堂山城國愛宕郡清閑寺村

後鳥羽天皇大原法華堂山城國愛宕郡勝林院村

順德天皇大原陵山城國愛宕郡勝林院村

後堀河天皇觀音寺陵山城國愛宕郡今熊野村

後醍醐天皇嵯峨殿法華堂山城國葛野村

龜山天皇龜山殿法華堂山城國葛野村

伏見天皇深草法華堂山城國紀伊郡深草村

後二條天皇北白河陵山城國愛宕郡栗田口村

後醍醐天皇塔尾陵大和國吉野郡吉野村

應神天皇惠我藻伏崗陵郡河內國古市

履中天皇百舌鳥耳原南陵郡和泉國大津村

允恭天皇惠我長野北陵郡河內國志紀

雄略天皇丹比高鷲原陵郡河內國丹北郡南島村

顯宗天皇傍丘磐杯丘南陵郡河內國下田村

武烈天皇傍丘磐杯丘北陵郡河內國志紀村

安閑天皇古市高屋丘陵郡河內國古市

欽明天皇檜隈坂合陵郡河內國高市

用明天皇河內磯長原陵郡河內國石川

推古天皇磯長山田陵郡河內國石川

皇極齊明天皇越智岡上陵郡河內國高市

天智天皇山科陵郡河內國宇治

天武天皇檜隈大內陵郡河內國高市

文武天皇檜前安古岡上陵郡河內國高市

元正天皇奈保山西陵郡河內國高市

孝謙稱德天皇高野陵郡河內國高市

光仁天皇田原東陵郡河內國高市

平城天皇楊梅陵郡河內國高市

淳和天皇大原野西陵郡河內國高市

文德天皇田邑陵郡河內國高市

仁德天皇百舌鳥耳原中陵郡和泉國大津村

反正天皇百舌鳥耳原北陵郡和泉國大津村

安康天皇菅原伏見西陵郡和泉國大津村

清寧天皇河內坂門原陵郡河內國大津村

仁賢天皇埴生坂本陵郡河內國大津村

繼體天皇三嶋藍野陵郡河內國大津村

宣化天皇身狹桃花鳥坂上陵郡河內國大津村

敏達天皇河內磯長中尾陵郡河內國大津村

崇峻天皇倉梯岡陵郡河內國大津村

舒明天皇押坂內陵郡河內國大津村

孝德天皇大坂磯長陵郡河內國大津村

弘文天皇長等山前陵郡河內國大津村

持統天皇檜隈大內陵郡河內國大津村

元明天皇奈保山東陵郡河內國大津村

聖武天皇佐保山南陵郡河內國大津村

淳仁天皇淡路陵郡河內國大津村

桓武天皇柏原陵郡河內國大津村

嵯峨天皇嵯峨山上陵郡河內國大津村

仁明天皇深草陵郡河內國大津村

清和天皇水尾山陵郡河內國大津村

御築造ト申候而者定而御議論モ相生ジ可申候得共是迄龍前堂山頭堂ナドト申賢所之元費ヲ相省候時者是亦容易ニ御築造成功可仕奉存候乍然無據御差支之御次第柄モ被爲在前文之御儀御採用不相成是迄之御園内ニ葬御被爲在候御儀ニ御座候ハ、斷然内外一致御埋葬之御禮儀ニ被爲復御茶里無實之御規式一切御廢止ニ相成候様仕度奉存候將又名分國體者天下人心之向背ニ關係仕候儀ニ付右早々御英斷有之臣子忠孝之標準御教諭無御座候而者御陵之儀取調出來兼候ニ付微衷申上候此段奉伺候以上

十二月

戸田大和守

四日大行天皇

明孝

山陵今度依舊蹤御再興尤被營泉山

浦寺

候事右按察卿被示傳了廿七日西

刻御出棺云々

是迄御茶里無實御作法之間修御枕火於御前火殿上人取之今度山陵東山頭云々供奉

子刻比著御泉山御式濟未天曙云々葬場使左少將公允朝臣參向丑半刻許歸參其後攝政殿御退出云云

○按ズルニ山陵ノ地ハ古來其所在ヲ知ラザルモノ多カリシガ諸陵寮ニテ多年精査シテ之ヲ定メタリ今之ヲ節略シテ左ニ舉ゲ以テ參照ニ便ニス

神武天皇

畝傍山東北陵郡大和國高市村

綏靖天皇

桃花島田丘上陵郡大和國高市村

安寧天皇

畝傍山西南御陰井上陵郡大和國高市村

懿德天皇

畝傍山南織沙谿上陵郡大和國高市村

孝昭天皇

掖上博多山上陵郡大和國葛上三室村

孝安天皇

玉手丘上陵郡大和國葛上村

孝靈天皇

片丘馬坂陵郡大和國葛上村

孝元天皇

劔池嶋上陵郡大和國高市村

開化天皇

春日率川坂上陵郡大和國添町

崇神天皇

山邊道上陵郡大和國城上村

垂仁天皇

菅原伏見東陵郡大和國音寺村

景行天皇

山邊道上陵郡大和國城上村

成務天皇

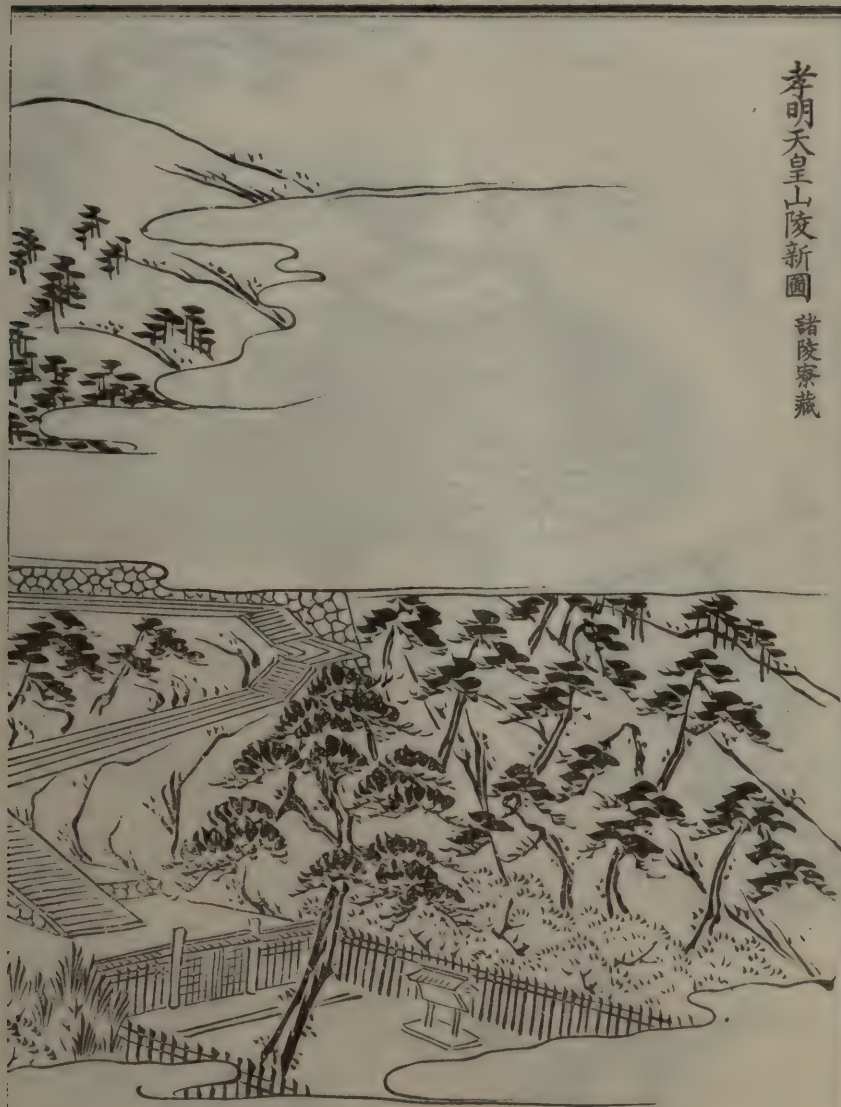
狹城盾列池後陵郡大和國城下村

仲哀天皇

惠我長野西陵郡大和國丹波村



孝明天皇山陵新圖 諸陵寮藏





戸田忠至山陵圖

孝明天皇山陵



〔公卿補任後桃〕安永八年十一月九日、天皇崩李、國院十二月十日、奉葬于泉涌寺、

〔公卿補任仁〕天保十一年十二月二十日、略太上天皇、光奉葬于泉涌寺、

〔近代御系譜〕天保十二年閏正月廿七日、以御石塔擬山陵、號後月輪陵、光

〔近代御系譜〕弘化三年二月六日、崩御內裏、仁三月朔日、以御塔號弘化廟、同月四日、略中同夜葬于

泉涌寺、

〔言成卿記〕慶應三年正月一日、右大將觸書廻文到來、御葬送是迄御茶里之分ニ而、自山頭御密行ト

被稱候得共、以來表向御埋葬、山陵御築造可被爲在旨ニ付、現任一同所有可申上、殿下被命之旨、廣

橋大納言被申渡候、略中戶田大和守建言寫、

今度御陵明、御製造之儀、取調進達仕候様、廣橋大納言殿被仰出奉畏候、中古佛法渡來以後、御

製造之形様モ變革仕、遂ニ淳朴之風、刻薄殘忍ト相化シ、奉始持統天皇御茶里之事、世々御常例

ト相成、乍恐萬乘之玉體ヲ一旦灰燼ニ奉委、九輪石之御塔御表ト仕候儀、數百年來之御定例ト

相成、遷延今日ニ至リ候段、恐懼悲歎之至、有志輩同一揆ニ御座候處、後光明天皇御新喪之御時

ヨリ、御火葬被爲廢候ヘ共、其後御代々様御葬送、御龜前堂ヘ入御、御式被爲濟夫ヨリ、山頭堂ニ

而御茶里之御作法有之、其所ヨリ御廟所迄、寺門僧侶共御密行ト奉稱、御表向御火葬、御內實ハ

御埋葬ト申御儀奉存候、元來卑賤之凡夫ニ而モ、生者始死者終、始終臣子忠孝之道ニオイテ、最

重大之事ニ奉存候故、其身分ニ應ジ、禮節ヲ重候儀御座候處、無勿體モ一天萬乘之大君ヲシテ、

表裏不合之御禮節有之候御儀ニ而ハ、四海臨御之御體裁ニオイテ、乍恐御瑕瑾ニモ可被爲涉

ト奉痛哭候、且御先代様ヨリ、尊號ニ被爲復諸國御陵モ御復古ニ相成候御時節ニ相成候得者、

何卒泉涌寺是迄之御廟所甚狹隘ニ而、可然御地所無之候付、同寺地中ニ而清淨之御地所被爲

ト、御陵築造御成候様仕度奉存候、尤數百年來、御薄葬御因循之御儀ニ御座候得者、一時ニ山陵

〔時慶卿記〕文祿二年正月五日院御所○正御心ヲ急ノ義ニ早奏少焉崩御、六日過シ曉院ヲバ盜出シ奉リ、泉涌寺へ成シマキラセ候、二月廿三日、正親町院御葬禮戌刻ニアリ、○中泉涌寺ノ構ノ口ニ奉待也。略其後下火、則各歸洛ナリ、

○按ズルニ、本文御葬所ノ事見エザレドモ、宮内省ノ陵墓一覽ニ、正親町院天皇、陵京都府山城國紀伊郡深草村トアリ、即チ所謂深草法華堂是ナリ、

〔皇年代略記後陽成〕元和三年八月廿六日、崩於洞宮、同九月廿日壬申、奉葬泉涌寺、翌朝奉納御骨於深草法華堂、

〔俊方朝臣記後水尾院崩御記所引〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上刻、太上法皇○後水尾圓淨御政仁終崩御也。○中申刻般舟院陽空長老來駕、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬ニ願候、深草安樂行院ニ治御骨骨堂モ、後陽成院崩御之時分出來、其以後破損ニテ、雨露モ掛リ候體如何ニ候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

〔近代帝王系譜〕明正院 元祿九年十一月十日崩、同月廿五日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕後光明院 承應三年九月廿日、依袍薙於仙洞、崩、同年十月十五日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕後西院 貞享二年二月廿二日崩、同年三月七日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕靈元院 享保十七年八月六日崩、同月廿九日、葬泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕東山院 寶永六年十二月十七日、申刻依袍薙崩。○中同七年正月十日、葬泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕中御門院 元文二年四月十一日、依御急症崩、同年五月八日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕櫻町院 寛延三年四月廿三日崩、同年五月十八日、葬泉涌寺、

〔公卿補任桃園〕寶曆十二年七月廿一日、天皇崩、八月廿二日、奉葬于泉涌寺、

〔公卿補任光持〕文化十年十二月十六日、後櫻町院遺詔奏。○中同夜、奉葬于泉涌寺、



泉涌寺月輪御陵圖

諸陵寮藏

四條天皇
後水尾天皇
明正天皇
後光明天皇
後西院天皇
靈元天皇
東山天皇
中御門天皇
櫻町天皇
桃園天皇
後櫻町天皇
後桃園天皇



奉懸之、納深草法花堂云々、

○本書、此文年月ヲ缺グ、

〔後小松院崩御記〕神無月廿日○永享といふに、略中夕つかたつひの御事侍り、あへなさ申ばかり

なし。略中かくておなじ廿七日のさだよひのはどに霜がれの芝の砌を出し奉りて、東山のほ

ど、泉涌寺といふ所へ御幸なし奉る、御事はあじろのいとなれたるに、前右大臣○藤原公冬以下の

上達部うへ人かちにて供奉したてまつる、略中程なくかの所に送り奉りて、御はてのわざとり

おこなはれ侍りて、つひに烟となし奉る、

〔皇年代略記稱光〕正長元年七月廿日、卯刻於土御門皇居黒戸崩、同廿九日、奉葬泉涌寺、八月四日、奉

納御骨於深草法華堂、

〔親長卿記〕文明二年十二月廿六日、卯刻許已御命終、略後上下愁傷悲歎云云、三年正月九日、先早

旦詣悲田院、今日御拾骨也、二月十一日、今日被移申仙骨於大原法華堂、略後常照寺所殘也、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今夜戌刻許、有御北首事、略後土十一月十一日辛酉、今夜御

葬禮也、十二日壬戌、今朝即御收骨儀也、上卿甘露寺中納言即有分散儀、一分如例、上卿持之奉籠、

深草法華堂、又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜之、又一分山國常照寺被籠之、

〔二水記〕大永六年四月七日、卯刻遂以崩御、略後原五月三日、今夜可有喪禮御幸也、四日、已刻源幸

相中將懸御骨於肩奉、收深草云々、

〔後奈良院御拾骨記〕弘治三年九月五日崩御、略中同廿五日、卯刻御拾骨、略中先傳奏廣橋大納言殿

長一尺四寸之板、箱ヲナニ結御肩ニ掛テ、略中即直ニ深草安樂行院ニ御骨奉納也、

〔弘治三年記〕弘治三年九月五日、今曉寅刻主上○後崩御、十一月廿二日、故院御葬禮也、奉葬東山

泉涌寺、廿五日、卯刻御拾骨也、略中廣橋大納言略國光懸御骨於頸、納于深草安樂行院、

土人云、愛宕山一鳥居傍、有稱福田寺、其堂後有古石塔、此塔後龜山院御廟也、

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

丹波國山國ト云所へ、迹ヲ銷シテ移セ給ケル、○中 翌年○貞治ノ夏頃ヨリ俄ニ御不豫ノ事有テ、

遂ニ七月七日ニ隱サセ給ニケリ、

〔太平記三十九〕法皇御葬禮事

此時ノ新院光明院殿モ、山門ノ貫首梶井宮モ、其ニ皆禪僧ニ成セ給ヒテ、伏見殿ニ御坐有ケレバ、急ギ彼ノ遷化○光ノ山陰へ御下リ有テ、御茶毘ノ事ドモ取營マセ給ヒテ、後ノ山ニ葬シ奉ル、

〔尾張本神皇系圖〕光明院康暦二年六月廿四日、崩於大和國長谷寺、御骨奉入伏見大光明寺、

〔迎陽記〕應永五年正月廿三日辛未、傳聞今日伏見法皇○崇 御葬禮也、○中 於大光明寺有其儀、

〔外記中原師夏記〕應安七年三月廿二日、故院○後 御遺骨自泉涌寺被渡、嵯峨金剛院、彼長老參泉涌

寺奉迎取云云、此外御拾骨之時、奉渡深草殿藤中納言忠光卿、奉懸頸被奉入云云、又奉入安樂光院

之由承及者也、廿六日、舊院御遺骨被奉納所々、深草法華堂、天龍寺、金剛院、天王寺、羅波浦、高野

山、泉涌寺、安樂光院

〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻御年卅七ニテ終ニ崩御ナリ、後光嚴院トゾ尊號ハ申

セ○中、二月二日、東山泉涌寺へ御葬禮、○中 同三日、御骨ヲ當寺ノ僧ノ沙汰ニテ拾クテマツル、

藤中納言頸ニカケテ、深草ノ法華堂ニヲサメテ、泣々京ヘゾ歸給ケル、

〔常樂記〕明德四年四月廿六日、後圓融院於小河仙洞薨御、○六 於泉涌寺廿七日茶毘、左大臣殿以下

公卿殿上人供奉、

〔皇年代略記後圓融〕明德四年四月廿六日辛丑崩、同廿七日、奉葬泉涌寺、○中 奉納御骨於深草

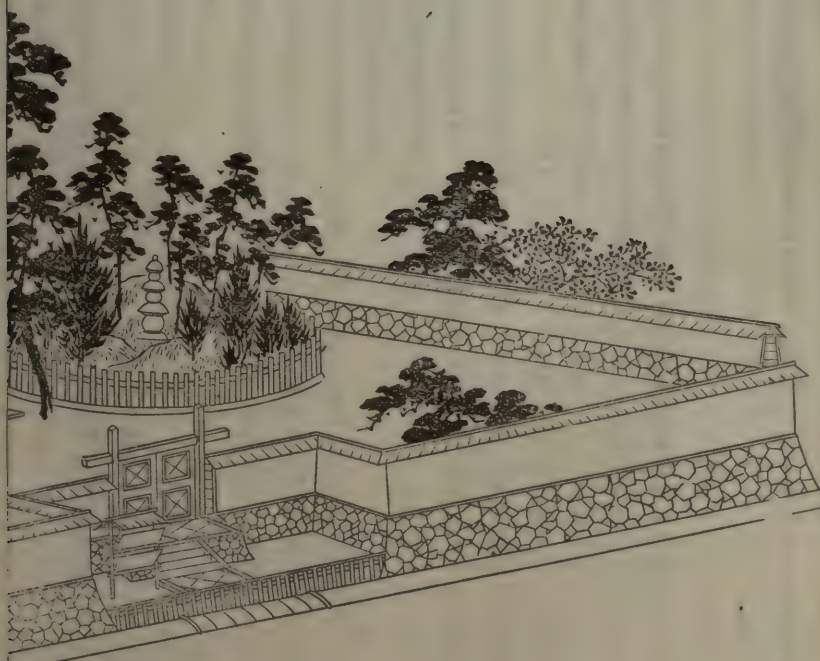
〔後小松院御葬禮記〕子刻許入御泉涌寺、○中 此後御茶毘、○中 日野新中納言人由也、入仙骨於御手匣



深草法華堂御陵圖

諸陵寮藏

後深草天皇
伏見天皇
後伏見天皇
後光嚴天皇
後圓融天皇
後小松天皇
稱光天皇
後土御門天皇
後柏原天皇
後奈良天皇
正親町天皇
後陽成天皇



おく露もひとつはちすにむすべとやけぶりもおなじ野べにきゆらん

〔皇代記後二條〕德治三年八月廿六日、崩二條高倉皇居、同廿八日、奉葬北白河殿、

〔慈嚴僧正記〕貞和四年十一月十一日、午刻太上天皇○花於仁和寺荻原仙居晏駕、十三日、御葬禮○中

略於十樂院上山、搦山作所奉葬之、

〔太平記二十一〕先帝崩御事

南朝ノ年號、延元三年八月九日ヨリ、吉野ノ主上○後醍醐御不豫ノ御事有ケルガ、次第ニ重ラセ給○中

略八月十六日丑刻ニ、遂ニ崩御ナリニケリ○中葬禮ノ御事、兼テ遺勅有シカバ、御終焉ノ御形ヲ

改メズ、棺槨ヲ厚シ、御座ヲ正シテ、吉野山ノ麓、藏王堂ノ艮ナル林ノ奥ニ、圓丘ヲ高ク築テ、北向ニ奉葬、

〔參考太平記二十一〕後醍醐天皇崩御事

毛利家、天正本云○中藏王堂ノ艮ノ林ノ奥ニト云正本云、塔尾葬奉ル云々、

〔吉野拾遺〕十五日○延元四年八月の夜○中いざよひの月と共に雲がくれさせ給ひけるに、つきまたが

ひ奉りし人々は、たゞやみぢにまよふ心ちなんし給ひける、御すがたを改奉らで、如意輪寺の御

堂のうしろのかたにをさめ奉り○下

〔新葉和歌集十六〕正平七年きさらぎの十日餘り、吉野にまうで、塔尾の御陵○後醍醐など見奉りけ

るに花はまださかぬ頃にて、よろづものあはれにおほえければ、思ひつゝけ侍ける、

祥子内親王

さく花のちるわかれにはあはじとてまだしきはどをたづねてぞ見る

〔觀心寺記〕正平廿三年四月廿日、奉葬河内國錦部郡檜尾山陵○觀心寺廿八日、奉追號後村上天皇、

〔山城名勝志九〕後龜山院仙居

〔入道左府記〕嘉元二年七月十七日、今夜後深草院御葬送也。○中御骨被納安樂行院佛壇下、

〔玉葉和歌集十〕遊義門院○後字多后かくれさせ給て後後深草院の御忌日に法華堂へ御幸あ

りてよませいけるける、
院○伏御製

こぞまではわけこし友もつゆときえてひとりしをるゝふかくさの野べ

〔増鏡十一今日の日座〕としかへりぬれば、嘉元も三どせになりぬ萬里小路殿の法皇山。○龜又御なやみ

とて龜山殿へうつらせ給ふ。○中九月十五日の明ばのにつひにかくれさせ給ひぬ。○中おなじ

十七日に御わざの事せさせ給ふ。○中御骨もこの院に法華堂をたてさせ給へば龜山院とぞ申

べかめる、

〔文應皇帝外記〕嘉元三年秋、上皇山。○龜病龜山宮召圓○龜館善量院時々侍看養。○中圓馳使告予。○龜

予便陪善量九月望、上皇崩、予陪之四日也、聞毘後藏仙骨於三所淨金剛院、南禪寺、金剛峰寺、且順

願命也、黃門侍郎藤賴藤主喪事於淨金剛院、分仙骨納五青瓷、三瓷留淨金剛院、南禪金剛峰各一圓

令予承仙姿、予擊歸龍山。○南共圓閣寶塔、

〔皇代記後字多〕元亨四年六月廿五日、寅刻崩大覺寺、同廿八日、葬蓮華峯寺傍山、

〔伏見上皇御中陰記〕文保元年九月三日、寅刻法皇見。○伏有御事、四日今日御葬禮事。山作所深草丑

刻奉入深草殿、五日、今晚前大納言經親卿、喜院院於深草出家、即直參御茶毘所、午刻事了之間、以御骨

奉懸頸、奉納後深草院法華堂、

〔皇年代略記後伏見〕延元元年四月六日、崩於持明院殿。四十號後伏見院。依道同八日、葬於嵯峨野、安

仙骨於後深草院法華堂、

〔風雅和歌集十〕後伏見院かくれ給ひてのち、仙骨を從三位守子の墓所にならべて置奉るべき

よし、御遺誠にまかせて納奉るとて、

給同五月二日、立出雲國同十四日、著御水成瀬殿、同十五日、入御大原西林院御堂、但過宮城不入、大原安置之。○中略 仁治二年二月八日、御骨自西林院御堂奉渡法華堂。

〔平戸記〕仁治三年四月十六日戊辰、清範入道送消息、問云、大原法華堂順德院後鳥羽御墓所○下略。

〔増鏡三卷〕延應元年といふ二月廿二日、六そぢにてかくれさせ給ぬ羽○後鳥羽中略、ちかき山にてれいの

さほふになし奉るも、むげに人すくなに心ぼそき御ありささいとあはれになむ御骨をは能茂といひし北面の、入道して御どもにさふらひしど、くびにかけ奉りて宮こにのぼりける、さて大原の法華堂とて、いさもむかしの御莊の所々、三昧料によせられたるにてつとめたえず、

〔二代要記十一門〕寛喜三年十月十一日崩、三十七月日、納御骨於西山カサヤ金原御堂。

〔明月記〕天福元年十二月十一日辛巳、承明門院○土御門母源子月來御經營、金原御堂、纔被終功、依明日

供養、今曉渡御件所、被奉安故院御門土御骨被立此堂御遺誠云々。

〔百練抄後十五〕寛元元年四月廿八日甲戌、佐渡院○順德御骨、康光法師奉懸首渡御大原云々、五月

十三日、佐渡院御骨、今日奉納大原御墓所。

〔佐渡年代記〕覺

高八斗七升九合七勺 佐州雜太郎竹田村之内

七斗五升九合七勺 本途

壹斗貳升 屋敷地子

右高八斗七升九合七勺に、屋敷間數整五拾間、横五拾間、

右は順德院御廟所、今度被遊御寄附候間、從當未年物成、眞野村眞輪寺へ引渡申候以上、

延寶七年未九月

曾根五郎兵衛○佐渡奉行

御勘定所

^條御即位のこと有しに、同七月廿八日、御とし廿三にて新院うせさせ給ひにき、新院とは二條院の御事なり、八月七日、かうりう寺にあらさまにやどしまゐらせて、のち彼寺のうしとらに、れんだい野といふ所にをさめたてまつる、

〔百練抄^八〕^{高倉}嘉應二年五月十七日、二條院御骨、自香隆寺本堂渡三昧堂、伴堂以二條皇居崩御殿、左大臣渡造之、

〔二代要記^十〕^略安元二年七月十七日崩^中葬栖霞寺堂、

〔山槐記〕治承五年正月十四日、新院^{高倉}已崩御云云、今夜渡御邦綱卿清閑寺小堂、抑是六條院御墓所堂云々、

〔長門本平家物語^{十二}〕養和元年正月十四日、六はらの池殿にてつひに崩御なりぬ、新院^{高倉}おはせおかせ給ひけるとて、今夜やがて東山のふもと、清閑寺といふ山寺へおくり奉る、

〔山槐記〕治承五年正月十四日辛酉、新院^{高倉}已崩御^中今夜渡御邦綱卿清閑寺小堂、抑是六條院御墓所堂云々、

〔玉海〕建久六年九月三日甲申、資實申、高倉院法華堂三昧僧供田事、六口各二町、可充賜交坂大墓兩御領之由仰畢、

〔玉海〕元暦二年四月四日丁巳、去三月廿四日午刻、於長門國壺浦合戰^略^中但舊主^德御事不分明云々、建久二年閏十二月十四日戊午、未刻參院、以資實入見參崇徳院、并安徳天皇等崩御之所建、

一堂、可資彼菩提并亡命之士卒滅罪之勝因事、可申沙汰之由仰泰經了、廿八日壬申、今日以宗頼被仰條々事等、又長門國可建一堂之由可宣下者、皆任御定、可宣下之由仰了、

○按ズルニ、安徳天皇ノ陵地此文ニテハ明ナラズ、尙下ニ掲ゲタル表ニ就キテ見ルベシ、
〔二代要記^{十一}〕^{後鳥羽}延應元年二月廿二日、於隱岐國崩^略^中同四月十二日、依有順風、御骨令渡出雲國

〔白峯寺緣起〕長寛二年八月廿六日に、御年四十六と申に崩御ならせまします。○崇徳、同九月十八日戌のときに、當寺の西北の石巖にて茶毘し奉る、これも御遺詔の故なり、

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讃岐院○崇徳御事、一以彼御墓所、勅稱山陵、

〔吾妻鏡〕元暦二年四月廿九日壬午、今日以備中國妖尼鄉、被付崇徳院法華堂、是爲沒官領、武衛所、令拜領給也、

〔兵範記〕久壽二年七月廿三日戊辰、午刻天皇○近衛崩於近衛殿。○中八月一日丙子、今日近衛院御

葬送也、寅刻陰陽助賀茂在憲、鎮山作所地。船岡西北

〔二代要記九近衛〕久壽二年七月廿三日、於近衛内裏崩。○中八月一日、火葬船岡西野、御骨暫置知足

院常行堂、

〔百練抄七後鳥羽〕長寛元年十一月廿八日、奉渡近衛院御骨於鳥羽東殿、美福門院御塔、

〔大外記師茂勸例外記師夏〕建久三年三月十三日、太上法皇後白河院崩給、十五日、法皇御葬送也、以平

生之儀奉渡蓮華王院法花堂、

〔百練抄十後鳥羽〕建久三年三月十五日丁亥、法皇後白河凶禮也、以御平生之儀、奉渡蓮華王院東法華堂、

〔吾妻鏡十〕建久三年三月十六日戊子、未刻京都飛脚參著、去十三日寅刻、太上法皇後白河於六條殿

崩御、廿六日戊戌、彼崩御事、今日具披露于關東。○中十五日、奉葬法住寺法華堂、

〔山陵志〕蓮華王院、舊是法住寺地、法住寺爲木曾義仲所火、就其墟而所創也、

〔顯廣王記〕永萬元年七月廿九日丙子、去曉新院。○二遂以崩押小路東洞院亭、八月七日癸未、先皇

○二御葬送也、高麗寺原

〔二代要記十後鳥羽〕永萬元年八月七日、葬香隆寺艮野、

〔長門本平家物語〕永萬元年の春頃より、主上○二御不豫のことおはしまし、六月廿七日、新帝六

御墓所近邊云々、御墓所衣笠岳之東下諸寺參仕十六日壬辰、山陵事辰刻也、仁和寺宮二人以下、奉拾御骨、藤宰相長實、奉懸御骨、奉送香隆寺、

〔百練抄六條〕天承元年七月九日、白河院御骨、自香隆寺奉渡鳥羽殿三重塔、是御平生寂慮也、

〔吉記〕壽永二年六月廿一日甲寅、被立山陵使、成菩提院、白河院

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊申、今夕御喪送也、河云々、略中至高隆寺、地方野云々、奉茶里、略中

奉拾御骨、奉納茶院源中納言國信卿奉懸頸、奉置香隆寺僧房、略中雖可奉置圓融院、山陵從今年大

將軍方在西、仍三箇年可御此寺也、

〔百練抄五羽〕天永四年三月廿二日、先朝河御骨、從香隆寺奉移圓融院、

〔本朝世紀〕久安五年十二月廿五日癸酉、今日御元服、由被告山陵、件山陵使、各可向安置御骨之所也、

略中香隆寺被安置堀河院御骨、而號後圓教寺也、

〔帝王編年記後二十一〕保元元年七月二日、申時法皇崩御於鳥羽殿、御年五十四、即夜奉渡安樂壽院御

塔、擬山陵也、號鳥羽院、

〔百練抄後七〕保元元年七月二日、禪定仙院羽崩于鳥羽安樂壽院、五十四、葬同、塔、擬山陵也、御

〔保元物語三〕新院御經沈附崩事

御年四十六ニテ、志度ト云所ニテ隱サセ給ヒケルヲ、白峯ト云所ニテ烟ニナシ奉ル、略中治承元

年六月廿九日、追號有テ崇徳院トゾ申ケル、

〔源平盛衰記八〕讃岐院事

長寛二年八月廿四日、御年四十六ニテ、支度ト云所ニテ遂ニ隱レサセ給ニケリ、崇讃岐御下向

ノ後九年ニゾ成給ケル、白峯ト云山寺ニ送奉リ焼上奉ケルガ、略中御骨ヲバ必高野ヘ送レトノ

御遺言アリケルトカヤ、

〔日本紀略後十三條〕寬仁元年五月十二日己酉今夜奉葬三條院於石垣、

〔帝王編年記三十七條〕寬仁元年五月十二日戊戌葬船岡西邊奉埋御骨於北山小寺中、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日乙丑主上一條後自去三月之比不例御○中遂崩於清涼殿十三日

庚寅被定難事○中及晚景資業朝臣時親等歸參申云巡檢神樂岡東邊自一條以南自上東門末以

北自御在所申方有便所以其地可爲山作所也、

〔日本紀略後十四條〕長元九年四月十七日乙丑戌刻天皇落飾崩于清涼殿五月十九日丙申奉火葬

淨土寺西原神樂岡東面從今日立伽藍於神樂岡東名曰菩提樹院御葬之間長家以下拾御骨經輔

懸御骨安置淨土寺畢、

〔百練抄後四條〕長曆元年六月二日上東門院○後一條後一條後一條院御

〔扶桑略記後二十八條〕寬德二年正月十八日太上天皇○後一條後一條院御葬春秋卅七於東三條第崩二月廿一日戊申

葬高隆寺乾原置御骨於圓教寺、

〔百練抄後四條〕天喜三年十月廿五日供養圓教寺新堂題號圓乘寺是先皇○後一條後一條院御

〔玉海〕安元三年五月三日壬寅頒書二東記云○中圓乘寺後朱雀之山賴業所申也、

〔扶桑略記後二十九條〕治曆四年四月十九日庚申寅刻天皇於高陽院中殿崩五月五日丙子葬船岳西

野安御骨於圓教寺、

〔皇年代略記後三條〕延久五年五月七日崩十七日葬神樂岡南原安置御骨於禪林寺、

〔扶桑略記後三十條〕延久五年五月七日庚戌太上天皇○後一條後一條院御葬春秋四十崩十七日庚申葬神樂岳東原

六月廿二日甲午於圓教寺被修七々御法事、

〔吉記〕壽永二年六月廿一日甲寅被立山陵使圓教寺○後三條後三條院御葬

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯今夕太上法皇○白御葬送也○中至御墓所香隆寺乾野堀河院

〔皇陵志〕冷泉○中略此火葬所山城國葛野郡小野之郷下村ニ有之、陵ハ同郡同郷上村ニ有之候、

〔日本紀略九條〕正曆二年二月十九日庚申、葬太上法皇○圖於圓融寺北原、置御骨於村上山陵傍、

〔小右記〕長德五年○長保元年七月廿三日癸卯、山陵使立云々○中略後邑上○圖參議懷平、

〔三僧記〕保壽院御幸事、保延三年九月十四日癸酉、自今夜於永嚴僧都房院○鳥羽御祈○中略件房圓融

院山陵隔壁也、代々御骨及于堀川院、皆御坐此所、仍臨幸尤可有憚云々、

〔日本紀略十一條〕寬弘五年二月十七日戊申、今夜奉葬花山法皇於紙屋川上法音寺北、

〔法成寺攝政記〕寬弘五年二月十七日戊申、花山院御葬送、大和寺東邊云々、

〔榮花物語九條〕寬弘八年六月廿二日のひるつかた、あさなしうならせ給ひ○中略一條、かくて八日

月○七のゆふべ、いはかげといふ處へおまします、

〔日本紀略十一條〕寬弘八年六月廿二日甲子、午刻太上皇○一條院中國春秋三十二、七月八

日己卯○中略今日奉葬先皇於北山長坂野、左大臣以下參集、正光卿持御骨、暫奉安置於圓成寺、

〔大鏡裏書〕寬弘八年七月八日、奉葬于北山長坂野、安置御骨於圓成寺、

〔皇年代私記一條〕寬弘八年七月八日己卯、葬石陰、暫安置、九日、奉渡御骨圓成寺、

〔權記〕寬弘八年七月廿日、酉刻歸參院、權律師懷壽尋圖云、圓融院法皇御陵邊可奉收○一條之由、御存

生有天氣○去九日早旦、於山作所、至相云、土葬非法皇御陵側、可奉置之由、御存

〔小右記〕寬弘八年七月廿日辛卯、傳聞故院○一條御骸骨、日來奉安置圓成寺、今日吉日、仍作如小韓櫃

物、深納御骨、作如倉代物○方二尺、一納辛櫃、辛櫃上造小屋居寶形、安置戶內、三箇年後、又更可奉移

御存生之時、御本意處云々○御本意處、是

〔左經記〕寬仁四年六月十六日丙申、故一條院御骨、爲避方忌、年來奉置圓成寺、而依方開、主計頭吉平

朝臣奉仰、可奉置御骨之處、卜鎮圓融寺邊、今日奉渡○中略以戌刻奉遷御骨於圓融寺北方○圓融院御

入夜堀川宰相歸參內、依無陵所也、於仁和寺中雖相尋、更無御所、參御室尋中之處、遺詔不置陵云々、其上無才學之由、被仰之間、空歸參、

〔大日本史禮樂四〕文永中、不能識其處者、可疑矣、意帝遺詔不置山陵、故仁和寺僧徒、拘泥遺詔、而不之告乎、

〔日本紀略一〕醍醐延長八年十月十日庚子、奉葬大行皇帝醍醐、於山城國宇治郡山科醍醐、醍醐寺北、窆取山西小野寺下、

〔扶桑略記二十五〕朱雀延長八年九月廿九日、太上天皇崩醍醐、十月十日、葬後山、山科山陵、

〔江家次第十一〕一、荷前事略、中、

後山階、頭書路、或自北山階車、或臨阿彌陀嶺乘馬、曼荼羅寺長角也、

〔皇年代略記朱〕天曆六年八月十五日崩、葬山城國來定寺北野陵、置御骨於醍醐山陵、

〔帝王編年記十五〕天曆六年八月十五日崩、御年三十、同廿日癸卯、葬來定寺、或記云、葬法性寺東中尼

南原陵、置御骨於醍醐山陵傍、

〔日本紀略五〕冷康保四年六月四日辛酉、今夕奉土葬先皇上、於山城國葛野郡田邑鄉北中尾、

〔山槐記〕治承四年七月廿一日辛未、於福原被立山陵使、中村上仁和寺八條三位清宗、

〔日本紀略十一〕冷寬弘八年十一月十六日乙酉、今夜奉火葬太上天皇上、於櫻本寺前野、中木工頭

雅通朝臣奉持御骨、奉安置伴山傍、奉埋御骨了、

〔帝王編年記十六〕冷寬弘八年十月廿四日崩、御年六十二、同十一月十六日乙酉、葬櫻本寺乾原、

〔法成寺攝政記〕寬弘八年十月廿四日癸亥、入夜則隆來云、院上御惱極重、不覺給云々、仍馳參、口時

崩給、十一月十三日壬午、參入冷泉院、以惟貞朝臣并吉平等、令見御葬所并御陵所、還來申云、櫻本

寺北方在平地、伴處御葬所并御陵吉由、吉平定申者、

勤深草山陵使未刻許參內^{○中}向嘉祥寺從西大門南行更頗東行下居山陵前^{○下}

〔文德實錄〕天安二年九月庚申大納言安倍朝臣安仁率陰陽權助滋岳朝臣川人助笠朝臣名高等

至山城國葛野郡田邑鄉真原岳點定山陵甲子夜葬大行皇帝^{○文}於田邑山陵

〔三代實錄〕^{清一和}天安二年十二月十日丁酉詔改真原山陵爲田邑山陵

〔三代實錄〕^{陽成三十}元慶四年十二月七日丙戌是夜酉四刻奉葬太上天皇^{○清}於山城國愛宕郡上栗

田山奉置御骸於水尾山上

〔二代要記〕^{清四利}元慶四年十二月四日崩于圓覺寺詩年卅一同七日火葬於栗田山白川陵置御骨於

水尾山

〔山陵志〕水尾山本丹波國地今隸于山城葛野

〔日本紀略〕^{村三}天曆三年十月三日壬申今夜奉葬陽成院太上天皇於神樂岡東北^{○又見大鏡裏書}

〔扶桑略記〕^{光孝二十}仁和三年八月廿六日丁卯是日巳二刻天皇崩於仁壽殿^{○春秋五}九月二日壬申

葬山城國葛野郡後田邑陵^{一云小松山陵}

〔帝王編年記〕^{字多十四}承平元年辛卯七月十九日崩八月五日庚申火葬葛野郡大內山陵^{仁和寺與池尾山}

〔勅撰和歌名所要抄〕^{十九}仁和寺の奥池尾の山を大内山と號す

〔仁和寺御傳〕^{宇多法皇}承平元年七月十九日甲辰崩仁和寺^{御年六}亥時奉移大內山魂殿^{依不遺}

〔吉續記〕文永五年六月廿二日今日依異國事被發遣山陵使^{○中}

大內山^{多○字}

參議藤原朝臣高定

紀伊守橘朝臣兼朝^{○中}

〔續日本紀三十七〕延曆元年八月己未、遣治部卿從四位上壹志濃王略中等六位已下、解陰陽者、合一十三人於大和國、行相山陵之地、爲改葬天宗高紹天皇仁光也。

〔續日本紀三十九〕延曆五年十月甲申、改葬太上天皇仁光於大和國田原陵延喜式、田原東陵、作北。

〔日本後紀十三〕大同元年三月辛巳、天皇崩於正寢、癸未、以山城國葛野郡宇太野爲山陵地、是日西北兩山有火自焚、丁亥、是日日赤無光、大井比叡小野栗栖野等山共燒、煙灰四滿、京中晝昏、上城平以爲所定山陵地、近賀茂神、疑是神社致災火乎、即決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、室從龜不從也、今災異頻來、可不慎歟、即自禱祈、火災立滅、四月庚子、葬於山城國紀伊郡柏原山陵、

〔類聚國史三十五〕大同元年十月辛酉、令天下諸國以今月十一日、素服舉哀、改葬皇統彌照天皇仁桓也、庚午、改葬皇統彌照天皇於柏原陵、

〔類聚國史三十五〕天長元年七月甲寅、平城天皇崩、己未、葬楊梅陵、

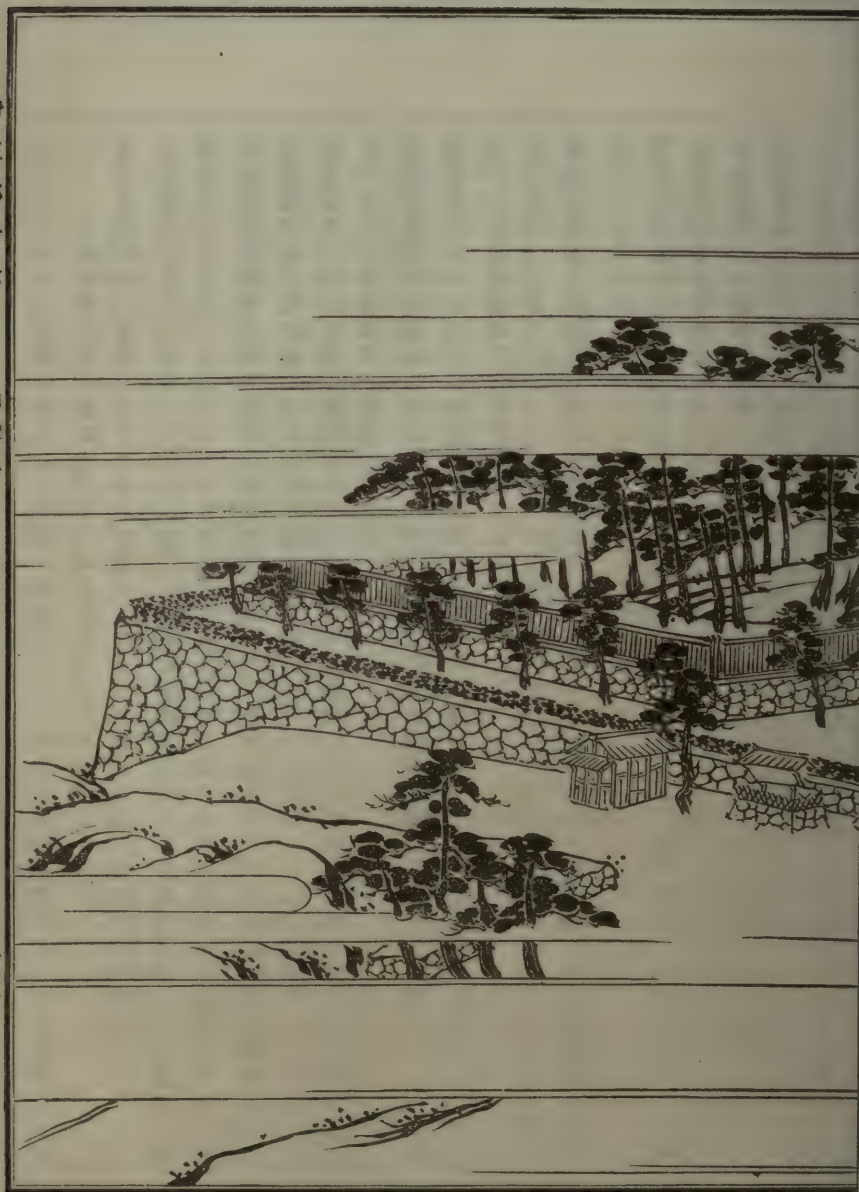
〔續日本後紀十二〕承和九年七月丁未、太上天皇嵯峨崩于嵯峨院、戊申、擇山嵯峨北幽僻之地、定山陵、略中即日御葬畢、

〔山槐記〕元曆元年八月廿三日己卯、今日被立御卽位鳥羽、山陵使嵯峨參議左大辨經房翌日於攝政亭、左大辨曰、向嵯峨不知其所、相尋邑老之處、大覺寺內北方山云々、向件寺之間、余車不通、忽騎馬向彼所拜了、

〔續日本後紀九〕承和七年五月辛巳、後太上天皇和淳願命皇太子眞恒、略中重命曰、予聞人歿、精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉、散之山中、癸未、後太上天皇崩于淳和院、戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉、奉散大原野西山嶺上、

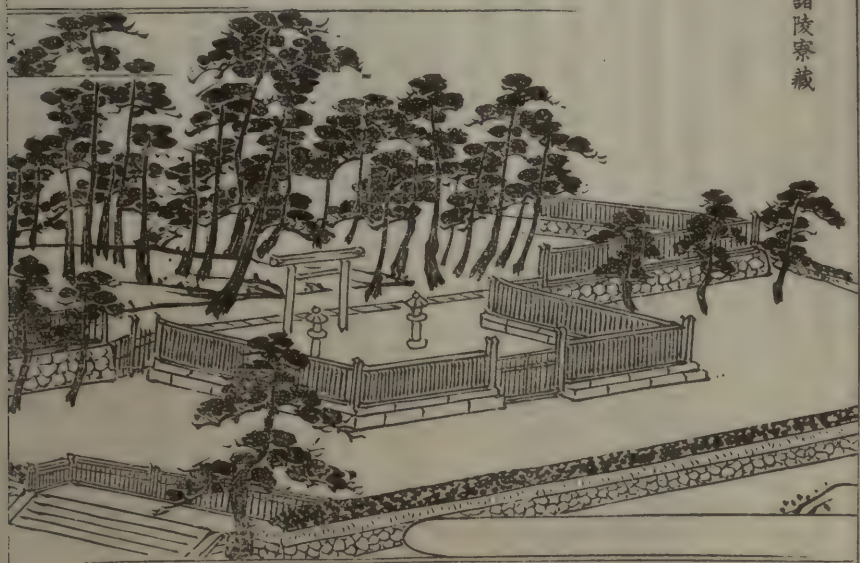
〔續日本後紀二十〕嘉祥三年三月己亥、帝崩於清涼殿、癸卯、奉葬天皇於山城國紀伊郡深草山陵、

〔中右記〕嘉承三年二月廿二日癸卯、今日御卽位鳥羽、由、被告申諸山陵使所被立也、下官宗忠依可



桓武天皇山陵新圖

諸陵寮藏



〔好古小錄〕此碑何レノ時ニカ土中ニ埋レテ後、御陵ノ南ノ崩ル、所ヨリ出タルヲ奈良坂ノ春日社ノ庭中ニ移シ立、

〔續日本紀^十〕^{聖七}天平二十年四月丁卯、是日火葬太上天皇^{正〇元}於佐保山陵、

〔續日本紀^十〕^{聖十}天平勝寶二年十月癸酉、太上天皇^{正〇元}改葬於奈保山陵、^{〇延喜式、奈保}

〔續日本紀^十〕^{聖九}天平勝寶八歲五月壬申、奉葬太上天皇^{武〇聖}於佐保山陵、^{〇延喜式、佐保}

〔續日本紀^三〕^{光三}神護景雲四年^{元〇寶龜}八月癸巳、與左右京四畿内伊賀近江丹波播磨紀伊等國役夫

六千三百人以供山陵、^{〇稱}戊戌授正五位下豐野真人出雲從四位下、從五位上豐野真人奄智正

五位下、從五位下豐野真人五十戶從五位上、以其父故式部卿從二位鈴鹿王舊宅、爲山陵故也、丙

午、葬高野天皇、^{〇稱}於大和國添下郡佐貴鄉高野山陵、

〔西大寺文書〕神護景雲三年九月四日崩于西宮寢殿、春秋五十三、即築山陵於西大寺之東北、

○按ズルニ、三年九月ハ四年八月ノ誤リナリ、

〔皇胤紹運錄〕稱德天皇、^{〇中}葬大和國高野山陵、^{〇四大寺}

〔西大寺資財流記〕夫西大寺者、平城宮御宇寶字稱德孝謙皇帝、去天平寶字八年九月十一日誓願、^{〇中}

略居地參拾壹町、在右京一條三四坊、東限佐貴路、^{〇除東北角}南限一條南路、西限京極、^{〇除八町}北限京

極路、

〔帝王編年記^十〕^{光三}天平神護元年乙巳十月崩、御年三十二、奉葬淡路國三原郡、

〔續日本紀^三〕^{光三}寶龜三年八月丙辰、遣從五位下三方王、外從五位下士師宿禰和麻呂、及六位已下

三人、改葬廢帝、^{〇淳}於淡路、

〔續日本紀^三〕^{光三}寶龜九年三月己巳、勅淡路親王、^{〇淳}幕宜稱山陵、^{〇中}充隨近百姓一戶守之、

〔續日本紀^三〕^{光三}天應元年十二月丁未、太上天皇^{〇光}崩、庚申、葬於廣岡山陵、

〔今昔物語 三十一〕元明天皇陵點定惠和尚語第三十五

今昔元明天皇ノ失給ヘリケル時、陵取ラムガ爲ニ大織冠ノ御一男、定惠和尚ト申ケル人ヲ差シテ、大和國ヘ遣シケリ、然レバ吉野郡藏橋山ノ峯、多武峯ノ岸重レルガ後ニ峯有リ、前ヘニ七ノ谷向テ有リ、定惠和尚此レヲ見給テ、哀レ微妙カルベキ止事无キ地カナ、但シ天皇ノ御墓所ニテハ左右ハ下レリ、口口ノ人、不有ジ、前々モ狹キニ依テ不取ザリケル也、ケリトテ不取ナリス、然テ其麓ニ戊亥ノ方廣キ所有リ、其ヲ取ツ、輕寺ノ南也、此レ元明天皇ノ棺前ノ陵也、石ノ鬼形共ヲ廻ノ池邊陵ノ基樣ニ立テ、微妙ク造レル石ナド外ニハ勝レタリ、

〔東大寺要錄^八〕奈保山太上天皇^明元山陵碑文

馬腦石鑄之

大	倭	國	御	谷	郡	平	城
之	宮	馭	宇	八	洲		
太	上	天	皇	之	陵	高	其
所	也						
養	老	五	年	歲	次	辛	酉
冬	十	二	月	癸	酉	撥	十
三	日	乙	酉	葬			

碑高三尺許

廣二尺許

厚一尺許

野ニ到リ、天智天皇ノ廟社ヲ拜ス、石ノ華表ニ額アリ、天智天皇ノ四字分明ナリ、毎年十二月、天皇崩日祭アリトナム、社ノ後ニ陵アリ、陵山ノ南ノ麓ニ、縱六尺許、横一丈餘ノ石ノ蓋アリ、斯下ナシ正シク奉葬所ト見ユ、陵山ノ上古木森蔚トシテ、草茅繁茂ス、古ハ四方ニ池廻レリト見エテ其跡殘レリ、

〔日本書紀二十八〕元年七月辛亥、男依等到瀬田田、則大友皇子文、左右大臣等、僅身免以逃之、中於是大友皇子走無所入、乃還隱山前以自縊焉、

〔前王廟陵記下〕山前、長等山之山前也、

〔日本書紀三十一〕元年十月壬子、皇太子聖、率公卿百寮人等、并諸國司國造及百姓男女始築大內陵、二年十一月乙丑、葬于大內陵、延喜式、繪、大内陵ニ作、

〔續日本紀三〕大寶三年十二月癸酉、從四位上當麻呂人智德、率諸王諸臣、率太上天皇、持證曰、大倭根子天之廣野日女尊、是日火葬於飛鳥岡、壬午、合葬於大內山陵、天

〔續日本紀四〕慶雲四年十一月甲寅、葬倭根子豐祖父天皇、武子安古山陵、延喜式、繪、安古山陵ニ作、

〔山陵志文武〕陵、按以陵上孤松茂、中今呼高松山、一名美、佐伊、

〔續日本紀元正〕養老五年十月丁亥、太上天皇、元召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前詔曰、中朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山、寶山產良、良峯、造龜火葬、莫改他處、證號稱某國某郡朝廷、取宇天皇、注傳後世、庚寅太上天皇又詔曰、中就山作窆、安林間、即爲美所、又其地者、皆殖常業之樹、即立刻字之碑、十二月乙酉太上天皇、元葬於大和國添上郡推山陵、延喜式、繪、推山陵ニ作、不用

葬儀、由遺詔也、

〔前王廟陵記上〕今按、據延喜式觀之、則推野字之誤、野訓奈保、

〔大日本史續編四〕新撰字鏡、推訓奈良乃木、推山即奈良山也、

〔日本書紀二十〕五年十一月乙巳、馬子宿禰中乃使東漢直駒殺于天皇是日葬天皇于會稽岡陵、

〔日本書紀二十〕三十六年三月癸丑、天皇崩、九月戊午中先是天皇遺詔於群臣曰、比年五歲不

登百姓大飢、其爲秋興陵、以勿厚葬、使宜葬于竹田皇子之陵、壬辰、葬竹田皇子之陵、

〔古事記下〕御陵在大野岡上、後遷科長大陵也、山陵ニ葬ル、

○按ズルニ、竹田皇子ノ墓ヲ陵ト云フハ、推古天皇ヲ葬ルニ就テ言ヘルナラン、

〔日本書紀二十〕元年十二月壬寅、葬息長足日廣額天皇中于淨谷岡、二年九月壬午、葬息長足

日廣額天皇于押坂陵、山陵ニ葬ル、

〔日本書紀二十〕六年二月戊午、合葬天皇財重日足繼天皇中與國人皇女中於小市岡上陵、

皇太子中天謂群臣曰、我奉皇太后天皇中之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所當永代以爲

麗城焉、

〔山陵志〕越智村西則車木村也、中其東岡崇數十仞、呼爲天皇山、是蓋山陵也、

〔日本書紀二十〕白雉五年十月壬子、天皇崩于正殿、十二月己酉、葬于大坂磯長陵、

〔扶桑略記五〕十年十二月三日、天皇崩中山陵山城國宇治郡山科郡北山中、

〔日本書紀二十八〕元年五月中是月朴井連雄君奏天皇曰、臣以有私事、獨至中、

美濃尾張兩國司曰、爲造山陵中豫差定人夫、則人別令執兵、臣以爲非爲山陵、必有事矣、中天

皇惡之、因令問察、以知事已實中下

〔萬葉集二〕從山科御陵中天退散之時、額田王作歌一首、

八隅知之、和期大王之恐也、御陵奉仕流山科、乃鏡山、附陵者毛鹿之遺書者、母日之靈、栗耳呼泣、乍在

而哉、百礪城乃大宮人者、去對南、

〔墨川道祐石山紀行〕十三日中天和三年五月、詠與白雲村ヲ出テ、三條ノ橋ヲ渡リ中日岡ニ到リ、御廟

〔大日本史〕禮樂四陵南有佛寺號高鷲山即古名之遺也

〔日本書紀〕清和五年正月己丑天皇崩于宮十一月戊寅葬于河內坂門原陵

〔山陵志〕呼爲白髮山仍其御名也○天皇御名白髮武廣

〔日本書紀〕仁賢元年十月己酉葬弘計天皇○顯于傍丘磐杯丘陵○延喜式傍丘磐

〔日本書紀〕仁賢十一年八月丁巳天皇崩于正寢十月癸丑葬通生坂本陵

〔山陵志〕今呼社計山其御名所說御名於許也

〔日本書紀〕繼體二年十月癸丑葬小泊瀬稚鷦鷯天皇○武傍丘磐杯丘陵○延喜式傍丘磐

〔日本書紀〕繼體二十五年二月丁未天皇崩于磐余玉穗宮十二月庚子葬于藍野陵

〔古事記〕下繼體御陵者三島之藍也

〔日本書紀〕安閑二年十二月己丑天皇崩于勾金橋宮○中是月葬天皇于河內舊市高屋丘陵

〔古事記〕下安閑御陵在河內之古市高屋村也

〔日本書紀〕宣化四年二月甲午天皇崩于檜隈廬入野宮十一月丙寅葬天皇於大倭國身狹桃花鳥

坂上陵

〔章保年間〕山陵誌宣化大和國高市郡鳥屋村に在字ミサンザイ

〔日本書紀〕欽明三十二年四月壬辰天皇遂崩于內寢九月葬于檜隈坂合陵

〔日本書紀〕崇峻四年四月甲子葬譯語田天皇○敏於磯長陵○延喜式磯長

〔古事記〕下敏達御陵在川內科長也

〔日本書紀〕用明二年四月癸丑天皇崩于大殿七月甲午葬于磐余池上陵

〔日本書紀〕推古二十二年九月改葬橘豐日天皇○用於河內磯長陵○延喜式磯長

〔古事記〕下用明御陵在石寸掖○掖池誤上後遷科長中陵也

山陵震動放火之異也、

〔日本書紀^{十一}〕六十七年十月甲申、幸河內石津原、以定陵地、丁酉、始築陵、是日有鹿忽起野中、走之、入役民之中而仆死、時異其忽死、以探其瘻、即百舌鳥自耳出之、飛去、因視耳中悉咋剝、故號其處曰百舌鳥耳、原者其是之緣也、

〔山陵志〕蓋壽藏自此始

〔日本書紀^{十一}〕八十七年正月癸卯、天皇崩、十月己丑、葬于百舌鳥野陵、○延喜式、百舌鳥耳原中陵ニ作ル、

〔古事記^下〕御陵在毛受之耳、原也

〔山陵志〕仁德陵上間處、名尾張谷、即尾張役夫不畢其功者然也、口碑所存、實其爾哉、

〔日本書紀^{十二}〕六年三月丙申、○中崩于稚櫻宮、十月壬子、葬百舌鳥耳原陵、○延喜式、百舌鳥耳原南陵ニ作ル、

〔古事記^下〕御陵在毛受也

〔山陵志〕呼爲美贊佐伊、在石津村北、

〔日本書紀^{十三}〕五年十一月甲申、葬瑞齒別天皇、○反于耳原陵、○延喜式、百舌鳥耳原北陵ニ作ル、

〔古事記^下〕御陵在毛受野也

〔日本書紀^{十三}〕四十二年正月戊子、天皇崩、十月己卯、葬天皇於河內長野原陵、○延喜式、惠我長

〔古事記^下〕御陵在河內之惠賀長枝也

〔日本書紀^{十三}〕三年八月壬辰、天皇爲眉輪王見獄、三年後、乃葬菅原伏見陵、○延喜式、菅原伏見西陵ニ作ル、

〔古事記^下〕御陵在菅原之伏見岡也

〔山陵志〕呼爲保天堂、安康御名穴穗穗音保、省穴字呼之、則保天堂、即穗天皇訛也、

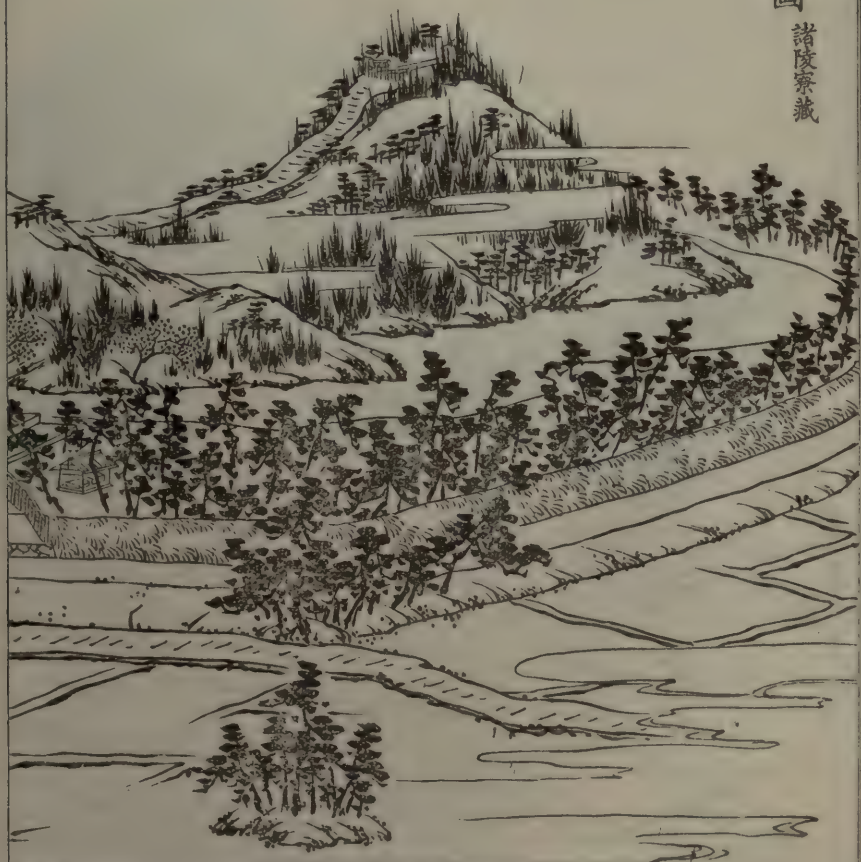
〔日本書紀^{十五}〕元年十月辛丑、葬大泊瀬天皇、○雄于丹比高鷲原陵、

〔古事記^下〕御陵在河內之多治比高鷲也



仁德天皇山陵新圖

諸陵寮藏





應神天皇山陵新圖

諸陵寮藏



〔古事記中〕御陵在菅原之御立野中也

〔日本書紀七〕二年十一月壬午葬大足彥天皇行於倭國山邊道上陵

〔日本書紀八〕稚足彥天皇成六十年天皇務崩明年九月丁酉葬于倭國狹城盾列陵延喜式城盾列

池後陵
二作ル

〔續日本後紀十三〕承和十年四月己卯使參議從四位上藤原朝臣助掃部頭從五位下坂上大宿禰正

野等奉謝楯列北南二山陵依去三月十八日有奇異搜檢圖錄有二楯列山陵北則神功皇后之陵倭名

命大足姬南則成務天皇之陵倭名世人相傳以南陵爲神功皇后之陵偏依是口傳每有神功皇后

之崇空謝成務天皇陵先年緣神功皇后之崇所作弓劍之類誤進於成務天皇陵今日改奉神功皇后

陵

〔日本書紀九〕二年十一月甲午葬天皇仲於河內國長野陵延喜式惠我長

〔古事記中〕御陵在河內惠我之長江也

〔日本書紀九〕元年二月皇后領群卿及百寮移于穴門豐浦宮即收天皇之喪從海路以向京時廣

坂王忍熊王聞天皇崩亦皇后西征并皇子新生而密謀之中乃伴爲天皇作陵詣播磨與山陵於

赤石仍編船緇于淡路嶋運其嶋石而造之則每人令取兵而待皇后

〔古事記中〕御陵在川內惠賀之雲伏岡也

〔日本書紀十四〕九年七月壬辰朔河內國言飛鳥戶郡人田邊史伯孫女者古市郡人書首加龍之妻

也伯孫聞女產兒往賀賀家而月夜還於蓬嶺丘譽田應神陵下

〔山陵志〕應神陵東北之隅營築未了處名甲斐坂土人傳是當時甲斐人所當役會其邦有故不得來

焉而後遂不復治也

〔扶桑略記二十九〕治曆二年五月廿五日石清水宮司言上去三月廿八日戊刻河內國譽田天皇應神

〔日本書紀安四〕元年十月丙申葬神湊名川耳天皇靖於倭桃花鳥田丘上陵

〔享保年間山陵誌〕綏靖 大和國高市郡慈明寺村に在字スキゼント云、

〔日本書紀鑑四〕元年八月丙午朔葬磯城津彥玉手看天皇安於畝傍山南御陰井上陵

〔古事記安中〕御陵在畝火山之美富登也、

〔享保年間山陵誌〕安事 大和國高市郡吉田村東南マナゴ山の中に在字安寧山と云、

〔日本書紀孝四〕天皇以大日本彥相友天皇鑑廿二年二月立爲皇太子、三十四年九月大日本彥相

友天皇崩明年十月庚午葬大日本彥相友天皇於畝傍山南織沙谿上陵

〔古事記中〕御陵在畝火山之眞名子谷上也

〔皇陵志上〕孝昭略此陵大和國葛上郡三室村ニ在之字天皇山與申候、

〔日本書紀孝四〕孝昭三十八年八月己丑葬觀松彥香殖稻天皇略于掖上博多山上陵

〔日本書紀孝四〕天皇以日本足彥國押人天皇安七十六年正月立爲皇太子、百二年九月丙午葬日

本足彥國押人天皇于玉手丘上陵

〔日本書紀孝四〕元六年九月癸卯葬大日本根子彥太瓊天皇考于片丘馬坂陵

〔日本書紀開四〕元五年二月壬子葬大日本根子彥國牽天皇考于劔池嶋上陵

〔古事記中〕御陵在劔池之中岡上也

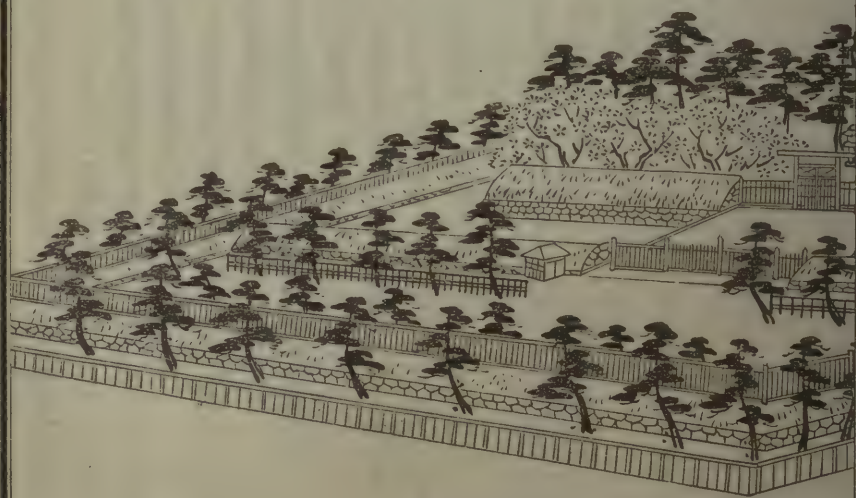
〔日本書紀開四〕元六十年四月甲子天皇崩十月乙卯葬于春日率川坂本陵一云坂

〔古事記中〕御陵在伊邪河之坂上也

〔日本書紀五〕六十八年十二月壬子崩略明年八月甲寅葬于山邊道上陵

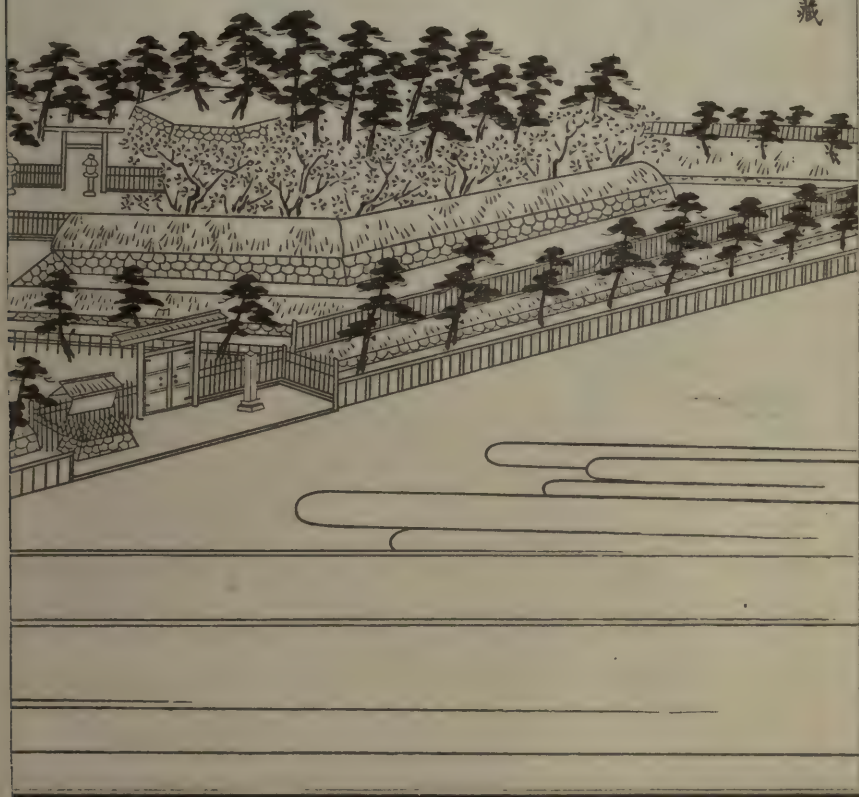
〔古事記中〕在山邊道勾之岡上也

〔日本書紀六〕元九十九年七月戊午天皇崩略十二月壬子葬於省原伏見陵見東陵ニ作省原伏



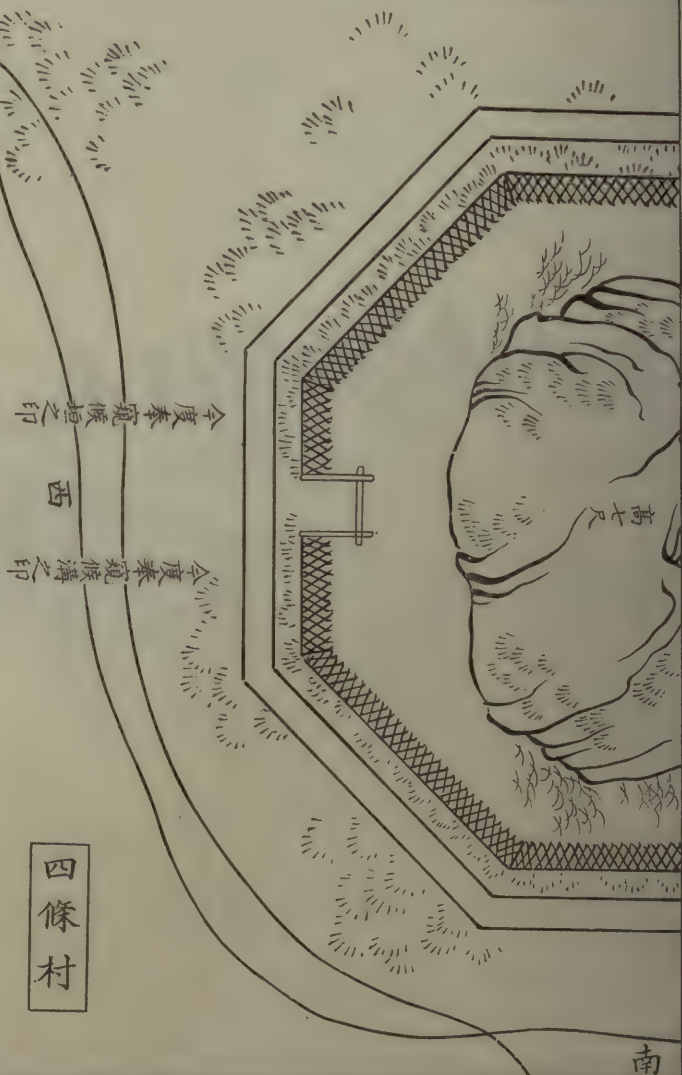
神武天皇山陵新圖

諸陵寮藏



北

南

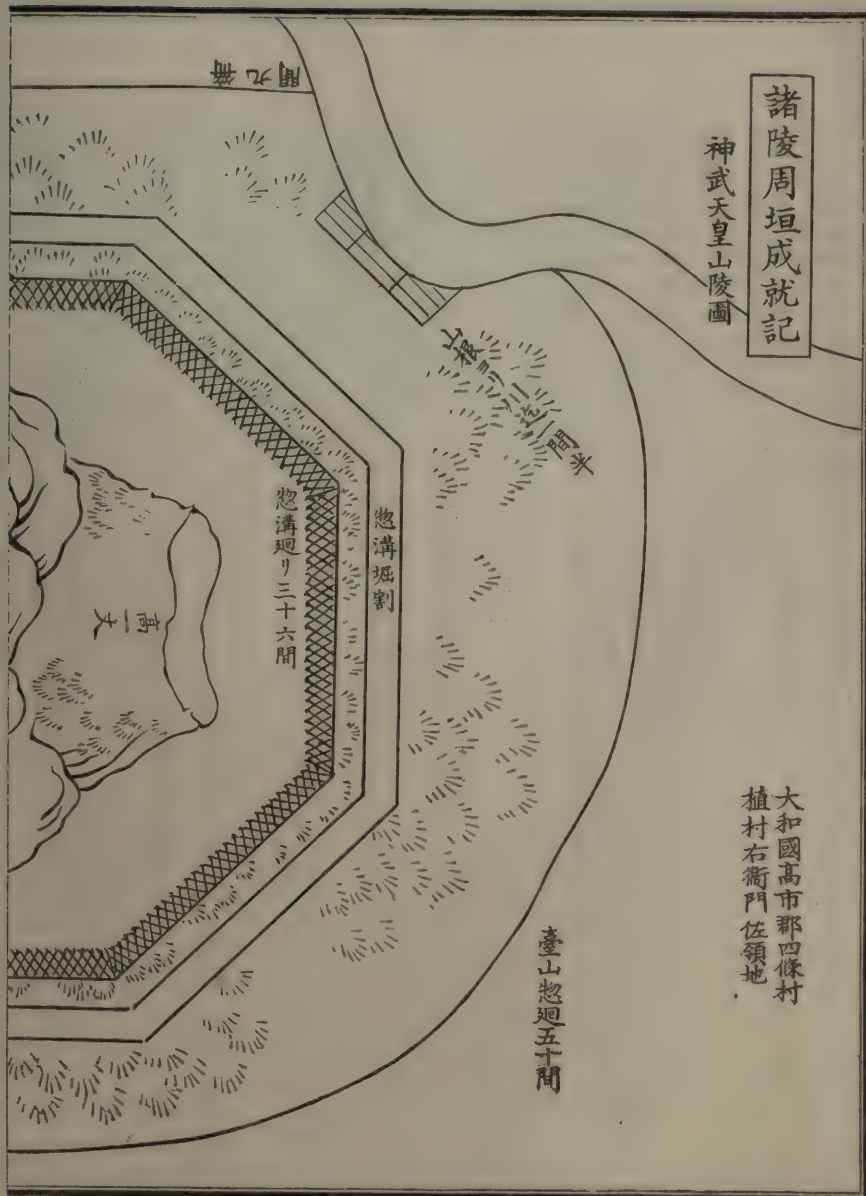


四條村

諸陵周垣成就記

神武天皇山陵圖

大和國高市郡四條村
植村右衛門佐領地



〔權記〕寬弘五年二月九日庚子、去夜亥時許院山○花、令崩給云々、十一日壬寅、令別當兼兼朝臣告遣詔於外記○中、遣詔云、舉哀素服、國忌山陵等、可停止之由、可令奏、每事不異、凡人云々、

〔日本紀略十一條〕寬弘八年六月廿二日甲子、午刻太上皇○一、崩于一條院中殿、七月八日己卯、院司

內藏頭公信朝臣參陣外、付大外記敦賴奏、遣詔、可止山陵國忌素服舉哀者、

〔日本紀略後十四條〕長元九年四月十七日乙丑、戊刻天皇落飾、崩于清涼殿、五月十九日丙申、奉火葬

淨土寺西原、遣詔、素服舉哀、不任喪司、不置國忌山陵、

〔大外記師茂勘例貞治三年七月〕延久五年五月七日、太上天皇條後三崩給、十七日、權中納言隆俊卿參

入、被奏、太上天皇遣詔事、素服舉哀山陵、荷前等、可停止、

〔百練抄後十五條〕仁治三年七月八日戊子、被立山陵使、隱岐法皇、改顯德院爲後鳥羽院、依御遺誠、不被

置山陵國忌之由、被申畢、

〔日本書紀二代〕天津彥彥火瓊瓊杵尊崩、因葬筑紫日向可愛云可愛此之山陵、

〔延喜式諸陵〕日向埃山陵天津彥彥火瓊瓊杵尊、在日向國、無陵月、

〔日本書紀二代〕彥火火出見尊崩、葬日向高屋山上陵、

〔古事記上〕日子穗々手見命者、坐高千穗宮、伍佰捌拾歲、御陵者、即在其高千穗山之西也、

〔延喜式諸陵〕日向高屋山上陵彥火火出見尊、在日向國、無陵月、

〔日本書紀二代〕彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮、因葬日向吾平山上陵、

〔延喜式諸陵〕日向吾平山上陵彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、在日向國、無陵月、

已上神代三陵、於山城國萬野郡田邑、陵南原、祭之、其兆城東西一町、南北一町、

〔日本書紀三神武〕七十有六年三月甲辰、天皇崩于橿原宮○中、明年九月丙寅、葬畝傍山東北陵、

〔古事記中神武〕凡此神倭伊波禮昆古天皇○中、御陵在畝火山之北方白檮尾上也、

〔續日本後紀仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇和○淳願命皇太子貞○曰、○中予聞人歿、精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉、散之山中、於是中納言藤原朝臣吉野奏言、昔宇治稚彥皇子者、我朝之賢明也、此皇子遺教、自使散骨後世效之、然是親王之事、而非帝王之迹、我國自上古不起山陵、所未聞也、山陵猶宗廟也、縱無宗廟者、臣子何處仰、於是更報命曰、予氣力綿微、不能論決、卿等奏聞、螻蟻聖皇、以蒙裁耳、癸未、後太上天皇崩于淳和院、戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉奉散大原野西山嶺上、丁酉、勅後太上天皇崩後、國忌荷前陵戶等事、宜遵遺制、以停奉行焉、

○按ズルニ、螻蟻淳和二天皇ノ山陵ヲ置カセ給ハザリシ事ハ、延喜ノ諸陵式ニ之ヲ掲ゲザルニテ知ルベシ、

〔三代實錄三十八〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻太上天皇和○崩圓覺寺、時春秋三十一、○中略遺詔火葬於中野、不起山陵、七日丙戌、是夜酉四刻奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上栗田山、奉置御骸於水尾山上、

〔扶桑略記二十五〕承平元年七月十九日、太上天皇崩年六十五、八月五日、火葬山城國葛野郡大內山、依遺詔不造山陵、不入國忌、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇 承平元年辛卯年七月十九日甲辰、崩仁和寺御年五十六、亥時奉移大內山魂殿、依遺詔不造山陵、不入國忌、

〔扶桑略記二十五〕天曆六年八月十五日、朱雀太上天皇、春秋三十崩、葬愛宕郡山、置御骨於醍醐山陵、傍依遺詔不造山陵、不入國忌、

〔日本紀略九〕正曆二年二月十二日癸丑、今日圓融寺法皇融○崩、十九日庚申、○中依遺詔停奉服舉哀、國忌山陵、

蓋當時所臨葬者也其狀率皆圓則人臣墓制亦從可知然其象宮車不必爲帝陵也何者其類同有之而以其非史及諸陵式之所載莫審爲何物疑是皇后皇子若重臣別勅所許或帝王改葬而其故存也
 自其內南面故其戶南向而累石爲之羨道其制嚴密既已如是以不復壞之以薄也班鳩太子^聖治壽藏于河內磯長即是制也當時太子自負聰明有才藝居作者之聖於舊章多所變替乃若山陵蓋亦然歟^{○中}迄于南都更復舊制惟其所仍正南面而已矣

〔高島敬筆記〕泉涌寺御代々陵ノ作様ハ地ヲ掘ルコト二間四方松板一尺二寸厚サノ木ヲ以テ一丈四方ノ船ヲ作リ其中ニ納メ其内ヲ厚一尺ノ作リ石ニテ築堅ム^{作石トハ石匠ヲ}其内ヘ六尺四方ノ石ノ御棺ヲ納ム^{白川石}其内ヘ御棺ヲ納ム御棺ハ棺ノ厚一尺ノ木ヲ以テ作ル其上ハ厚八寸ノ板ヲ以テ天秤指ニ作リ其上箱ハ八寸ノ板ヲ以テ造リチヤン流シ厚五寸以上御棺三重ナリ目方凡三百貫目餘御石棺ノ嚴重ニナリシハ桃園院ヨリ始ルトイフ

〔日本書紀^{推古}二十^二〕三十六年九月戊午先是天皇遺詔於群臣曰比年五穀不登百姓大飢其爲朕興陵以勿厚葬便宜葬于竹田皇子之陵

〔日本書紀^{天智}二十^七〕六年二月戊午皇太子^智天謂群臣曰我奉皇太后天皇^皇之所勅憂恤萬民之故不起石槨之役所冀永代以爲鏡誠焉

〔續日本後紀^{仁明}十二〕承和九年七月丁未太上天皇^{○中}崩于嵯峨院春秋五十七遺詔曰^{○中}擇山北幽僻不毛地葬限不過三日無信卜筮無拘俗事^{○中}穿院淺深縱橫可容棺矣棺既已下了不封不樹土與地平使草生上長絕祭祀但子中長者私置守冢三年之後停之戊申擇山北幽僻之地定山陵以

商布二千段錢一千貫文奉充御葬料即日御葬畢

〔三代實錄^{三十五}〕元慶三年三月廿三日癸丑淳和太皇太后崩^{○中}太后寢疾綿篤命左右曰天長天子^{○淳}順命火葬不置山陵無園廟之可陪^{○下}

陳制

し某天皇の御陵なぞ云ときは、美波加と云べく、其御陵を指ては、美佐邪紀とも云べし、たごへ
知の美佐邪紀は、某天皇の美波加と云むが凡て同物も、指さまこよりて名のかはる類多し、
後世になりては、陵をばすべし、美佐邪紀と申して、墓と別こといなれり、

〔令義解七〕大社 陵號 乘輿略中 右如此之類並關字

〔令義解九〕凡先皇、陵略中 兆域内略亦 不得葬埋及耕牧樵採、

〔律疏名例〕八座

二曰謀大逆、謂謀毀山陵及宮闕、謂有人獲罪於天、不知紀極、潛思謀逆、將圖不逞、遂起惡心、謀毀山陵及宮闕、

〔律疏賊盜〕凡謀反及大逆者皆斬、

〔政事要略二十九〕衛禁律云、闕入山陵兆域門者笞五十、謂周九故越垣者杖一百、謂周九故陵戸不覺減二等、謂周九故

當主帥又減一等、謂親監故縱者、各與同罪、集解云、附釋云、三秦記云、秦謂天子墳爲山、漢云陵、亦通言

山陵、

〔律疏賊盜〕凡盜山陵内木者杖一百、草者減三等、謂帝皇山陵、草木不

〔延喜式二十一〕凡陵墓側近有原野者、寮仰守戸并移所在國司、共相知燒除、

○按ズルニ、此守戸ハ、陵戸墓戸及陵墓ノ守戸ヲ云フナルベシ、

〔山陵志〕上古大朴、山陵之制未備、堯杵氏炎見氏、彥波瀲武氏邈矣、三陵皆在自太祖至乎孝元、猶就

丘隴而起墳焉、自開化其後、蓋縱有制、及垂仁始備、下至于敏達、凡二十有三陵、制略同焉、凡其營陵

因山、從其形勢、所向無方、大小高卑、長短無定、其爲制也、必象宮車、而使前方後圓爲壇三成、且環以

溝、延喜十一年、以廢太子早良爲皇、勸謝之、其塚下置宮車、勿使盜竊、夫其圓而高者、如張蓋也、頂爲一

封、即其所葬方而平者、如置衡也、其上隆起、如梁輪也、前後相接、其間稍卑、而左右有圓丘、倚其下、填

如兩輪也、及至後世、民賂之而莫能識焉、猶號曰車塚、蓋亦以是也、凡陵側之地、必有三五丘塚、乃觀之、

奈良の若草山と云ふは、仁德帝の後の陵にて、鶯の陵と云ふとなり、近年並河五一郎吟味ありて其上に標ありと云ふ、其奥に鶯の谷と云ふ處あり、

〔大日本史 禮樂四〕孝德大坂磯長陵、在石川郡、按中略、枕草紙有鶯陵、今山田讀曰鶯、

〔蜻蛉日記 下〕五月四年○康保にもなりぬ、略中十よ日に、うち上村の御藥の事ありとのゝしるはども

なくて、廿よ日のほどにかくれさせ給ひぬ、略中みさゝきや何やどきくにどきめき給へる人々

いかにと思ひやり聞ゆるあはれなり、やうく日頃になりて、貞觀殿御方原登子に、いかにな

ぞ聞えけるついでに、

世の中をはかなきものとみさゝきのうもるゝやまになげくらんやそ、御かへりごといとか

なしげにて、

おくれとどうきみさゝきに思ひいる心はしでのやまにやあるらん

〔源氏物語 十卷 院〕帝の御はかをがみ奉りたまふとて、北山へまうでたまふ、略中御山に参り侍

るを、御ことづてやどきこえ給、略中御山にまうで給て、おはしまし、御有さま、唯目の前のやう

におぼし出らる、略中御はかは道の草しげくなりて、わけ入給はせいと々露けきに、月も雲がく

れて森の木だちこぶかく心すこし、

〔和訓栞 三十〕みさゝき 日本紀に、陵又山陵をよめり、御狹々城の義なるべし、

〔古事記傳 十卷〕御陵は美波加と訓べし、萬葉二四丁に、八隅知之、和期大王之、恐也、御陵奉仕流、山

科乃鏡山爾云々、師加茂の考に、古は天皇の山陵をも、御墓とぞ云つらむ、此も御陵とは書た

れど、みさゝきとは訓がたく必みはかと訓べければなりとあり、書紀仁德卷推古卷などに、難

波荒陵と云地名もあり、源氏物語須磨卷に、院の御はかとあり、又御山ともあり、古書にも、御又

美佐耶紀と云も古き稱なり、和名抄に山陵美佐々岐、また諸陵寮美佐々岐乃豆加佐とあり、但

ノ議起ル、抑モ此議ヤ、鎌倉幕府ヨリ足利氏ヲ歷テ、當時ノ人ノ曾テ耳染ニモ觸レザリシ所ニシテ、之ヲ發スルハ徳川幕府ノ時ノ儒生細井知愼ニシテ、將軍綱吉ハ、此議ニ本ヅキテ大ニ修造ヲ加ヘタリ、實ニ曠世ノ盛事ナリ、當時ハ實ニ闇黒ヲ脱シ、開明ニ趨ケルモノニテ、文物蔚興シケレバ、王室ノ衰替ヲ歎キ、山陵ノ事ニ感ジ、之ガ爲ニ書ヲ著シ、モノモ少カラズ、松下見林ガ前王廟陵記ノ如キ其一ナリ、蒲生秀實ハ、天保ノ比ノ人ナリ、一ノ窮措大ヲ以テ、山川ヲ跋涉シ、辛苦經營シテ、以テ山陵志ヲ著シ、以テ勤王ノ志氣ヲ鼓舞セシハ、止ニ攷索ニ供スベキノミナラズシテ、其功誠ニ偉ナリトス、是ヨリ後、孝明天皇ノ朝ニ、戸田越前守忠恕ノ建議ニ依リ、將軍家茂ハ忠恕ノ家臣、間瀬和三郎忠至後ニ戸田大和守ト稱スヲシテ大ニ力ヲ修陵ノ事ニ用キシメシガ、維新ノ初ニハ、特ニ諸陵寮ヲ興シタマヒシカバ、漸次ニ舊觀ニ復スルニ至レリ、

名

〔新撰字鏡〕下陵大阜曰陵、平加、又豆不禮、又彌佐々木

〔倭名類聚抄〕下陵調度四山陵日本紀私記云、山陵、美佐

〔伊呂波字類抄〕見山陵イロキ

〔令義解〕九凡先皇陵謂先代以來、帝王山陵皆是也、帝王墳墓如、山如、陵、故謂之山陵、〇下略

〔令集解〕四釋云、帝皇葬、因陵、如陵、故云陵也、見名例、古記云、陵謂墓一種、以貴賤爲別名耳、

○按ズルニ、令集解ニ見名例トアレド、今ノ律ニ此文ナシ、恐クハ古律ナルベシ、而シテ唐律名例謀大逆ノ疏議ニ、山陵者、古先帝王因山而葬、黃帝葬橋山、即其事也、或云、帝王之葬、如山、如陵、故曰山陵トアルハ、此文ノ原ヅク所ナリ、

〔枕草子〕「みさゝきは 鶯のみさゝき、かしは原の陵、あめのみさゝき、

〔輜軒小錄〕山陵の事

禮門ニ親臨シテ御拜アリ、其使ニハ納言以下ヲ以テ之ニ充ツ、此餘ノ陵墓ノ使ハ、陵墓ノ預人等ヲ以テ之ニ充テ、大藏省ニテ幣物ヲ授ケテ發セシム、爾ルニ其後、荷前ノ儀モ漸ク衰ヘテ、後三條天皇ノ頃ニハ、僅ニ故事ヲ存スルノミナリシガ、幾モナクシテ終ニ廢絶セリ、荷前ハ恒例ノ事ナレド、臨時ニモ告祭スル事毎ニアリテ、即位ノ如キ、改元ノ如キ、外國人ノ朝貢ノ如キ、之ニ告ゲザルハナク、天皇ノ疾病ノ如キ、災異ノ如キ、亦多ク之ニ祈レリ、斯ル事モ後ニハ漸ク其數ヲ減ジ、殆ド絶無ノ姿ニナリシガ、孝明天皇ノ朝ニ、四海ノ騷擾ニ際シ、祈禳ヲ行ハセ給ヒシハ、廢典ヲ興シタマヒシナリ、

山陵ノ事ハ、治部省ノ諸陵寮ニテ掌ルコトニテ、其下ニ陵戸アリ、陵戸ハ雜戸ノ類ニテ、良民ニ齒スルヲ得ズ、調庸及ビ雜徭ヲ獨カレテ、世々山陵ヲ守ルモノナリ、原來五戸ニテ一帝ノ山陵ヲ守ルベキ制ナレド、或ハ六戸ナルアリ、乃至一戸ナルアリ、陵戸ナキモアリテ一ナラズ、而シテ陵戸少クシテ、其陵ニ充ツルニ足ラザル地ハ、陵ニ近キ百姓ヲ點ジ、年ヲ限リ庸徭ヲ除キ、守戸ト爲シテ之ヲ補ヒ、全ク陵戸ナキ地ハ、守戸ノミヲ以テ之ヲ守ラシムルナリ、守戸ハ良民ニテ、其陵戸ニ於ケルハ、恰モ品部ノ雜戸ニ於ケルガ如シ、

山陵ハ律令ニ明文アリテ、兆域門内ニ闌入シ、及ビ寸草尺木ヲ攀折スルモ罪アルノミナラズ、其意中ニ之ヲ毀タント謀ルトキハ、未ダ之ヲ實行セズト雖モ、證據明白ナルトキハ、是ヲ謀大逆ト爲シ、首從ノ別ナク皆之ヲ斬ニ處スルナリ、然ルニ其法ノ斯ク嚴ナルニ拘ハラズ、樹木ヲ伐リ、及ビ汗穢ヲ蒙ラシメ、兆域ノ内ニ佛堂ヲ建ツル等ノ事アリテ、朝廷ヨリ鎮祭シタヒシ事屢アリ、朝威漸ク衰ヘ、武人權ヲ弄シ、四海鼎沸スルニ及テハ、所在ノ山陵ハ、大ニ頽圯シテ、其狀況ハ、愚民ノ一抔ノ土ヲ取ルノミナラズシテ、凡ソ臣子タル者ノ痛哭流涕シ、言ハント欲シテ言フニ忍ビズ、筆セント欲シテ筆スルコト能ハザルモノアリ、是ニ於テ修築

當時火葬盛ニ行ハレ、且ツ薄葬ヲ以テ主ト爲シ、カバ、遺詔ニ依リテ山陵ヲ起サバル事モアリテ、其極ヤ陵ノ所在ヲモ詳ニセザルニ至ル、蓋シ至尊ノ火葬ハ、持統天皇ニ起リシ事ニテ、其遺骨ハ天武天皇ノ陵ニ合葬セシヲ以テ、其地ハ明ニ知ラレタレドモ、嵯峨淳和ノ二天皇ハ、山陵ヲ置カザルニ由リ、荷前ノ例幣ニモ預リタマハズ、清和天皇ノ御骨ヲ水尾山上ニ置キ、宇多天皇ヲ大内山ニ瘞ミ奉リシガ如キ、均シク此類ナリ、是ヨリ後ハ多ク寺院ニ葬リテ、古ノ山陵ノ如キモノ益渺ク、後白河天皇ヲ法華堂ニ收メ奉リシヨリ、法華堂ニ於テスルモノ亦多シ、後深草天皇ノ如キハ、安樂行院ノ佛壇ノ下ニ收メ奉レリ、亦法華堂ノ類ナリ、而シテ四條天皇ヲ泉涌寺ニ瘞ミ奉リシヨリ、此寺ニ收メ奉ルコトモ數世ナリシガ、後陽成天皇ヨリ後ハ、此ヲ以テ例ト爲シ、泉涌寺ハ殆ド御菩提所ノ如クナレリ、然ルニ孝明天皇ノ崩ジタマヒシ後ニ、壯大ナル山陵ヲ起シタマヒシハ、聖上ノ孝思ニ本ヅキシモノニテ、従前ノ陋習ヲ一洗スルモノナリ、

毎年ノ終ニ、使者ヲ諸陵及ビ外戚ノ墓等ニ分遣シ、幣ヲ進ラシムル事アリ、是ヲ荷前ト云フ、荷前トハ、先ヅ諸國ノ貢物ヲ抽キテ、之ヲ薦ムルノ謂ナリ、清和天皇ノ卽位ノ初ニ、十陵四墓ノ制ヲ立ツ、十陵ハ、天智、光仁、桓武、平城、仁明、文德ノ六天皇、及ビ田原、崇道ノ追尊天皇并ニ桓武天皇ノ母后、嵯峨天皇ノ母后御母平城ノナリナリ、天智、平城、崇道ノ外ハ、當時ノ本系ノ親ナリ、蓋シ天智天皇ハ制度改革ノ功ヲ以テシ、崇道天皇ハ怨魂ヲ慰スルニ出デシナラン、並ニ歷世替ラズ、平城天皇ハ其故ヲ詳ニセザレドモ、或ハ嵯峨天皇ヲ祭ラザリシニ由リテ之ニ代フルモノカ、是ヨリ二回ノ改定ヲ歷テ朱雀天皇ノ朝ニハ、天智、光仁、桓武、仁明、光孝、醍醐ノ六天皇、及ビ崇道天皇、并ニ嵯峨天皇ノ母后、光孝天皇ノ母后、醍醐天皇ノ母后ヲ十陵トス、是ニ於テ傍系ナルモノハ獨リ崇道天皇ノミ、抑モ荷前ノ幣ヲ獻ズルニハ、十陵ヲ首ト爲シ、天皇、建

古事類苑

帝王部十七

山陵上

山陵トハ帝皇ノ冢墓ヲ云フ、蓋シ其高大ナルコト、山ノ如ク陵ノ如クナルヲ以テ名ヅクル所ニシテ、或ハ古昔陵ニ因リテ之ヲ爲シ、ニ起ルト云フ其之ヲミハカト云フハ、普通ノ稱ニ敬語ヲ加ヘタルモノニテ、ミサバキト云フハ、帝皇ニ限レル特稱ナリ、原來山陵ノ稱ハ、斯ク至尊ニノミ用キルコトナレド、有功ノ皇子等モ、其墓ヲ陵ト稱スルヲ得ルハ、往時ノ制ナリ、其後孝謙天皇ノ朝ニ、特ニ勅アリテ、母后藤原安宿媛及ビ聖武天皇ノ母后藤原宮子娘ノ墓ヲ陵ト稱セシメ給ヒシヨリ、皇后ノ墓ハ總テ陵ト稱スル事ト爲レリ、然レドモ從前ノ皇后ニハ及ボサズ、且ツ此時ハ有功ノ皇子等モ、陵トハ稱セザル事トナリテ、日本武尊、飯豐青皇女ノ如キハ、原ハ陵ト稱セシガ、延喜式ニハ降シテ墓ト爲セリ、蓋シ延喜ヨリ前ノ制ナラン、是レ陵墓ノ稱ノ一變ナリ、獨リ神功皇后ハ、久シク朝ニ臨ミ政ヲ攝シ、殆ド至尊ト均シキヲ以テ、日本書紀ニハ其墓ヲ陵ト稱シ、延喜式ニモ磐余稚櫻宮御宇神功皇后ト書シテ、亦陵ト云ヘリ、當時又陵墓ニ近陵遠陵ノ稱アリ、血屬ノ親疎ニ隨ヒテ之ヲ別ツナリ、

上古ノ山陵ハ皆高大ニシテ、兆域甚ダ廣ク、四面ニ池ヲ環ラシ、美道アリテ出入スベク、其棺ハ石造ナリ、中ニ就キテ特ニ偉觀ナルヲ仁德天皇ノ陵トス、其周圍ハ十町ニ過ギ、高サハ十七間ニ近シ、是ヨリ藤原奈良ノ二朝ヲ歷テ、平安ノ初ニ至リテハ漸ク古ノ如ク壯大ナラズ、

追尊天皇陵

一七四

皇親墓稱陵

一七五

陵戸

一七七

陵戸定額

一七八

假陵戸

一七九

守戸定額

一八〇

陵戸守戸並充

一八一

皇后及追尊天皇陵戸守戸

同

陵守長

一八二

陵預

同

御陵

同

古事類苑

帝王部十七

山陵上

名稱

一〇八

陵制

一一〇

遺詔不起山陵

一一一

陵地

一一三

兆域

一五九

陵墜

一六六

陵樹

一六七

陵前鳥居

同

陵塔石卒都婆

一六八

火葬所

一六九

分骨所

一七〇

髮塔

一七一

灰塚

同

后妃陵

一七二

錫類之德彌厚、不以逸遊爲念、俯以謙卑在懷、瑞蠶藻文、薦聖壽之遐祉、寶字結象、開皇基之永昌。○中略
陛下謙讓推而不居、菩提等竊疑焉、菩提等巡察前徵、緬銳遐載、隨時立制、權代適宜、王皇雖殊、其揆一也、菩提等不勝丹款之誠、謹上尊號、陛下稱曰寶字稱德孝謙皇帝、皇太后稱曰天平應真仁正皇太后、伏願陛下皇太后、抑謙光之小節、從梵侶之證言、庶使蟠木之鄉、燭龍之地、問號仰澤、聽聲傾光、凡厥在生、誰不幸甚、沙門菩提等不任下情、謹奉表以聞、詔報曰朕覽卿等所請、鴻業良峻、祇畏允深、忝以寡薄、何當休名、而上天降祐、帳宇開平、原地薦祥、蠶文表德、竊惟此事、天意難違、俯從衆願、敬膺典禮、號曰寶字稱德孝謙皇帝。

〔續日本紀〕十八寶字稱德孝謙皇帝出家歸佛、更不奉識、因取寶字二年、百官所上尊號稱之。

○按ズルニ扶桑略記稱德天皇重祚ノ下ニ、四十九代高野天皇是也、前謂孝謙天皇トアリ、前トハ即前位ヲ謂フ、又恩管抄ニモ、重祚して位にかへりたまひにけり、○中略孝謙を此度は稱德天皇ト申けりトアリ、孝謙稱德ノ追號ハ、此尊號ヲ分稱スル所ナリ、

〔日本書紀天智二十〕天命開別天皇思長足日廣額天皇明舒太子也。

〔日本書紀通證天智二十〕天命開別天皇蓋諱入鹿定

〔書紀集解天智二十〕天命開別天皇按天智諸通時而登天位

〔皇年代略記〕天智天皇諱葛城又號天

〔日本書紀舒明二十〕二年正月戊寅立寶皇女皇爲皇后后生二男一女一曰葛城皇子御宇江大津宮

〔日本書紀天武二十〕天淳中原瀛真人天皇天命開別天皇天智同母弟也幼曰大海人皇子

〔皇年代略記〕天武天皇諱大海人又名天

漢風尊號

〔續日本紀淳仁二十〕天平寶字二年八月庚子朔高野天皇禪位於皇太子中是日百官及僧綱詣朝堂

上表上上臺中臺尊號其百官表曰臣仲麻呂等言臣聞星廻日薄懸象著明之謂天出震發乾乘時首

出之謂聖天以不言爲德非言無以暢其神聖以無名體道非名安可詮其用冬穴夏巢之世猶味典章

雲官火紀之君方崇徽號寔乃發揮功業闡揚尊名名之爲義其來尙矣伏惟皇帝諱陛下臨馭天下

十有餘年海內清平朝廷無事祥瑞頻至寶字若臻乃聖乃神允文允武諒無得而稱焉乎國絕皇嗣

人懷彼此降天尊於人顯鳴謙克光損乾德於坤儀鴻基遂固展誠敬而追遠崇慕惟深勤溫清以承顏

因心懇至故有九服宅心咸荷望雲之慶萬方傾首俱承就日之輝中臣等入參帷展出廁周行鳴珮

曳綸綿積年祀觀斯盛德戴斯昌化臣子之義何無稱贊人欲而天必從狂言而聖尙擇謹據典策敢上

尊號伏乞奉稱上臺寶字稱德孝謙皇帝奉稱中臺天平應真仁正皇太后上協天休傳鴻名於萬歲下

從人望揚雅稱於千秋不勝至懇踴躍之甚謹詣朝堂奉表以聞僧綱表曰沙門菩提等言菩提聞乾坤

高大覆載以之顯功日月貞明照臨由其甄用至於混群而有饒益撫萬物而曲成獨標十號之尊式崇

四大之極故徽猷歷前古以不朽妙迹流後葉而恒新然則表德稱功莫不由於名號伏惟皇帝陛下乃

聖繼聖括六合而承其其基乃神襲神環四海而光宅則政道於刑措駭懷生於仁宜追遠之孝尤重

〔皇年代略記〕推古天皇諱額田部，又號豐御食炊屋姫。

〔日本書紀推古二十〕三十六年三月壬子，天皇病甚，不可諱，則召田村皇子舒明。

〔日本書紀舒明二十〕息長足日廣額天皇建淳中倉太珠敷天皇敏孫，彥人大兄皇子之子也，母曰糠手姫皇女。

〔古事記敏達〕此天皇之御子等，并十七王之中，日子人太子，娶庶妹田村王，亦名糠手比賣，命生御子，坐岡本宮，治天下之天皇舒明。

〔書紀集解舒明二十三〕按，息長近江地名，皇祖母所號息長，彥人大兄皇子母，足日美稱廣額蓋表天容也。

〔大安寺伽藍緣起〕初飛鳥岡基御宇天皇舒明之末登極位號，曰田村皇子。

〔皇年代略記〕舒明天皇諱田村，號息長，足日廣額天皇，二年正月戊寅，立寶皇女舒明爲皇后。

〔日本書紀舒明二十三〕二年正月戊寅，立寶皇女舒明爲皇后。

〔日本書紀皇極二十四〕天豐財重日足姬天皇舒明淳中倉太珠敷天皇敏達曾孫，押坂彥人大兄皇子孫茅渟王女也。

〔書紀集解皇極二十四〕財即寶舒明，除皆美號。

〔皇年代略記〕皇極天皇諱實，又天豐財重日足姬天皇，四年六月庚戌，讓位於輕皇子舒明。

〔日本書紀皇極二十四〕四年六月庚戌，讓位於輕皇子舒明。

〔日本書紀孝德二十〕天萬豐日天皇諱輕，又饒二天，天豐財重日足姬天皇皇極同母弟也。

〔皇年代略記〕孝德天皇諱輕，又饒二天，天豐財重日足姬天皇皇極同母弟也。

〔日本書紀舒明二十三〕十三年十月丁酉，天皇崩于百濟宮舒明，是時東宮開別皇子舒明年十六而誅之。

〔大安寺伽藍緣起〕天皇舒明行幸筑紫朝倉宮，將崩時，甚痛憂勅久，此寺授誰參來止先帝舒明待問賜者，如何答申，憂賜爾時近江宮御宇天皇舒明奏久，開舒明髻墨刺，肩負鋸，腰刺斧，奉爲奏支。

賜者，如何答申，憂賜爾時近江宮御宇天皇舒明奏久，開舒明髻墨刺，肩負鋸，腰刺斧，奉爲奏支。

賜者，如何答申，憂賜爾時近江宮御宇天皇舒明奏久，開舒明髻墨刺，肩負鋸，腰刺斧，奉爲奏支。

賜者，如何答申，憂賜爾時近江宮御宇天皇舒明奏久，開舒明髻墨刺，肩負鋸，腰刺斧，奉爲奏支。

賜者，如何答申，憂賜爾時近江宮御宇天皇舒明奏久，開舒明髻墨刺，肩負鋸，腰刺斧，奉爲奏支。

兄光吾風於萬國略○下

〔皇年代略記〕安閑天皇諱勾大兄又廣國押武金日又廣

〔古事記下〕安閑廣國押建金日命坐勾之金箸宮治天下也

〔日本書紀通證〕二十摩呂古別號

〔古事記傳四十四〕勾は、大和國廣瀬郡なるべきか略○中 此天皇附安の御名、書紀に勾大兄皇子と

あれば、本より此地に住居坐りしなり、

〔日本書紀上〕十七元年三月癸酉納八妃、元妃尾張連草香女曰目子媛生二子、皆有天下略○中 其二曰禮

限高田皇子、是爲武小廣國排盾宣

〔皇年代略記〕宣化天皇諱高田又武小廣國排盾

〔古事記下〕宣化建小廣國押楯命坐檜之廬入野宮治天下也

〔古事記下〕明天皇娶檜天皇宣之御子石比賣命

〔日本書紀上〕十七元年三月甲子立皇后手白香皇女脩敷子內遂生一男、是爲天國排開廣庭宣是嫡子

而幼年於二兄宣治後有其天下

〔古事記下〕體天皇宣中娶意富祁天皇宣之御子手白髮命是大生御子天國押波流岐廣庭命流波

岐三字以音

〔上宮聖德法王帝說〕斯歸斯麻宮治天下天皇明飲名阿米久爾意斯波留支比里爾波乃彌已等

〔日本書紀上〕十九二年三月納五妃略○中 次蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽姬生七男六女其一曰大兄皇

子、是爲橘豐日尊明用

〔日本往生極樂記〕聖德太子者、豐日天皇明第二子也

〔日本書紀上〕二十豐御食炊屋姬天皇、天國排開廣庭天皇明中女也略○中 幼曰額田部皇女

總十九人、改宿禰賜朝臣、國牽天皇三世孫、武內宿禰第六男、葛木襲津彥之後、

〔日本書紀四〕元^{孝元}七年二月丁卯、立鸕色謎命爲皇后、后生二男一女、略中第二曰稚日本根子彥大日、

天皇、○開化

〔古事記傳二十二〕大御父天皇元孝の御名の、大倭根子に對へて、若倭根子とは稱へ奉れるなり、

〔日本書紀五〕十二年九月己丑、始校人民、更科調役、此謂男之弭調、女之手末調也、是以天神地祇共
和享、而風雨順時、百穀用成、家給人足、天下太平矣、故稱謂御肇國天皇也、

〔古事記中〕爾天下太平、人民富榮、於是初令貢男弓端之調、女手末之調、故稱其御世、謂所知初國之
御眞木天皇也、

〔古事記傳二十三〕所知初國は、波都久邇斯羅志斯と訓り、此稱辭は、後の御世に至て申せし言な
るべし、其御世と云、又大御名をも申せるなど、當御世に申せる物とは聞えざればなり、○中さ
て此は師眞淵の神武天皇を如此稱申して、○事見上文更に又此にも如此申せる故は、是より先
にはいまだ服はざりし遙の國々まで、初て皇化のゆきたらはして、天下悉く大平ぬる御世な
ればなりといはれしが如し、

〔日本書紀十四〕元年三月壬子、略中是月立三妃、元妃葛城圓大臣女曰韓媛生、白髮武廣國押稚日本

根子天皇、○清與稚足姬皇女、

〔日本書紀十五〕白髮武廣國押稚日本根子天皇、大泊瀬幼武天皇、略雄第三子也、○中天皇生而白髮

〔古事記下〕天皇、○中娶都夫良意富美之女韓比賣生御子白髮命、略清

〔古事記清下〕白髮大倭根子命、略中此天皇無皇后、亦無御子、故御名代定、白髮部、

〔日本書紀十七〕元年三月癸酉、納八妃、元妃尼張連草香女曰日子媛生二子、皆有天下、其一曰勾大兄
皇子、是爲廣國排武金日○安七年十二月戊子、詔曰、略中懿哉摩呂古示朕心於八方、盛哉勾大

勅近江崇福寺者、天智天皇之創建也。○中本願天皇、朕○字之遠祖大廟也。子末小子何不祇承。○中
略 寬平二年歲次庚戌十二月四日、散位正五位下菅原○道奉勅記、

○按ズルニ、江家次第抄國忌條ニハ、天智天皇ヲ太祖トシ、光仁天皇ヲ中祖トセシコトアリ、山
陵篇荷前條ニ引載セリ、參看スベシ、

〔日本書紀二神代〕一書曰、狹野尊○神亦號神日本磐余彥尊、所稱狹野者、是年少時之號也、後撥平天下、

奄有八洲、故復加號曰神日本磐余彥尊、

〔日本書紀三神武〕辛酉年正月庚辰朔、天皇即帝位於橿原宮。○中古語稱之曰於畝傍之橿原也、太立宮

柱於底磐之根、峻時搏風於高天之原而始馭天下之天皇、曰神日本磐余彥火火出見天皇焉、

〔日本書紀二神武〕大化三年四月壬午、詔曰、○中自始治國皇祖○神之時、天下大同、都無彼此者也、

〔日本書紀四安寧〕三年正月壬午、立淳名底仲媛命爲皇后、先是后生二皇子、○中第二曰大日本彥、昭友

天皇。○中

〔日本書紀四孝昭〕二十九年正月丙午、立世襲足媛爲皇后、后生○中日本足彥國押人天皇。○中

〔日本書紀四孝安〕二十六年二月壬寅、立姪押媛爲皇后、后生大日本根子彥太瓊天皇。○中

〔古事記傳二〕根子は尊稱にて、景行天皇の御子にも、倭根子命と申すあり、凡人にも、記中に

難波根子、書紀神功卷に、山背根子など云名見えたり、天皇は大倭國をろしめすを以て、倭根子

とは申し奉るなり。○中すべて御代々々の天皇の御通號となりて、詔命などにも、みな倭根子

天皇と申し奉ることなり、

〔日本書紀四孝武〕二年二月丙寅、立細媛命爲皇后、后生大日本根子彥國牽天皇。○中三十六年正月

己亥朔、立彥國牽尊爲皇太子、

〔續日本後紀二仁明〕承和九年十二月癸酉、右京人參議從三位兼越中守勳六等朝野宿禰鹿取、男女

右件厨子、○中天皇、○特傳賜藤原宮御宇大行天皇、○文文

〔萬葉集一〕藤原宮御宇天皇○武文代

大行天皇○武幸于難波宮時歌○略下

〔日本後紀平〕大同元年三月丙戌、上謂公卿曰、○中報曰、大行天皇、○武桓聖德弘茂、海内清平、○略下

〔文德實錄〕嘉祥三年四月己酉、公卿上啓曰、○略中、大行聖帝、○明仁明齊日月、道括乾坤、○略下

〔三代實錄清〕天安二年九月三日辛酉是日、大行皇帝○武、憂駕之後、始盈七日、遣使於近陵諸寺各

修功德、

〔日本紀略一〕延長八年十月十日庚子、奉葬大行皇帝、○略於山城國宇治郡山科陵、

〔日本紀略四〕康保四年六月四日辛酉、奉葬大行皇帝、○上於村上山陵、

〔百練抄十五〕仁治三年正月廿日、踐祚、○中諸卿群參大行皇帝、○略四、御在所院、奉三種寶物、被參新

帝御所、

〔弘化諒闇記〕弘化三丙午歲二月六日、先帝○中、追而被奉御謚號迄、被稱大行天皇、之旨被仰出

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年正月、周防守殿○中、渡書付、先帝○明、御謚號迄、奉稱大行天皇

候事、

〔革命勘文〕一高野天皇○略、改天平實字九年、爲天平神護元年之例

謹案國史○中、遠履太祖神武之遺蹟、近襲中宗天智之基業、創此更始、期彼中興、建元號於鳳曆

施作解於雷散○略下

〔神皇正統記仲〕太祖神武より、第十二代景行までは、代のまゝに繼體したまふ、

〔神皇正統記天〕此天皇中興の祖にまします、

〔菅家文章七〕崇福寺綵錦寶幢記

〔神皇正統記神武〕此御代より代ごとに宮所を遷されしかば、其所を名づけて御名とす。〇御號フ
意ナ此天皇をば橿原の宮と申なり、

○按ズルニ、代ゴトニ宮所ヲ遷スト云フコト誤ナリ、下文代ごとに都を事へ、本居宜長ノ古事
記傳二十一ニ見ユ、

〔神皇正統記元明〕三年庚戌に始めて大倭の平城の宮に都を定めらる。古は代ごとに都を改め、則
其みかどの御名によび奉りき、

〔古事記傳十八〕すべて古の御代を、古は或は近江、大津宮、御宇天皇、〇天或は飛鳥、淨御原、朝武、天
など、こそ申せるを、後世人はたゞ後の漢證をのみ知て、返て本の眞の御稱をば更にえらず、

古書に記せるを見て、何れの御代の稱とも、え辨へぬ人のみ多し、甚しき者は漢證を當昔の
眞の御名と心得て、上代を疑ふ者もあるをや、古を尙ひ人はよく思ふべき事なりかし、

〔日本書紀持統〕三年五月甲戌、命土師宿禰根麻呂、詔新羅吊使級飡金道那等曰、〇中遣田中朝臣法
麻呂等相告、大行天皇、〇天喪、〇下

〔史記十一〕中六年四月、大行爲行人、服虔曰、天子死、未有諡、稱大行、晉灼曰、禮有大行
漢書、〇帝〇漢初登遐、朝臣稱曰大行皇帝、以、此、之、知、諡、曰、不、反、之、辭、也、

魏孫毓曰、大行之稱、起於漢氏、漢書曰、大行在前殿、又曰、大行無遺詔、諡法大行受大名、小行受小
名、初崩未諡、而嗣帝已立、臣下所稱、辭宜有異、故謂之大行、言其有大德行、必受大名、若稱諡也、

〔好古小錄上〕伊祖吉部德足比賣臣墓誌
藤原大宮御宇、大行、〇天皇、〇文、御世、慶雲四年歲次丁未春二月二十五日、從七位下被賜仕奉矣、〇下

〔東大寺獻物帳〕獻盧舍那佛

御製袈合致領、〇中

大行

へども、誰も「不心付」といへり、餘り近き世の事故探り見べき日記も手廻らず、泉涌寺は、東山に有が故ならんなど、答ふる人もあれど、歴代追々御陵をしまし、今更をくれて此時東山を用ひられん事當らず、何も合點不行事也、或時書房本城小兵衛來云、泉涌寺方丈の額は、張即之の筆にして東山とありといへり、然れども是もさて不審難晴といへども、向後校正の一助にひかへおく也トアレバ、信ト爲シ難シ、又鳩巢隨筆ニハ、院といふはもと宮中屋宇の名なり、略○中東山に御座あるを以て東山院と稱するの類なりトアレド、是又明徴ナケレバ據リ難シ、兼香○一條云、御院號毎度攝家勘進也云々、内々中御門院御治定也。

〔續史愚抄櫻町〕元文二年五月五日癸巳、故院御追號、爲中御門院、去月廿七日、内々治定云、

○按ズルニ、飯田忠彦ノ野史ニ、天皇讓位ノ後、櫻町仙院ニ遷御ノ事アリ、拾芥抄ニ、櫻町、中御門北、萬里小路東南ト見ユ、今京ノ制ニハアラザレドモ據ナキニアラズ、錄シテ參考ニ供ス、

〔賴言卿記〕寶曆十二年七月廿三日甲申、御追號、儒卿三人各勘進、以一封被出也、廿六日丁亥、儒卿勘進御追號、廿八日己丑、先帝御追號、桃園院、御牌名筆者妙法院宮云々、

〔續史愚抄桃園〕寶曆十二年七月二十九日庚寅、此日以先帝御追號、爲桃園院、今度不被櫻町院、院號、依有此號、被三取用云、

古代追號

〔續日本紀元正〕養老五年十月丁亥、太上天皇元明召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前、詔曰、略○中朕崩之後、宣略○中謚號稱某國某郡朝廷、宣天皇流傳後世、

〔東大寺要錄〕奈保山太上天皇元明○元山陵牌文養老五年十一月七日崩

大倭國御谷添上謚恐郡平城之宮、取宇八洲、太上天皇之陵是其所也

養老五年歲次辛酉、冬十二月癸酉、辨誤撥恐十三日乙酉葬、

の院○後羽造に移らせたまひぬるに、のどかにて都にてあらん事いと恐れありとおぼされて、御心もて其年○承久三年閏十月十日、土佐の國はたといふ所に渡らせたまひぬ。○中略せめて近き程に○以下恐あづまより奏したりければ、後には阿波國に移らせ給ひにき。○中略おりさせたまひて○後羽後も、土佐院十二年。○下

〔皇代記〕土御門天皇、世云阿波院、

〔増鏡三〕その年○寛喜三年十月十一日、あはの院○土御門かくれさせ賜ひぬ、

〔皇代記〕順德天皇、世云佐渡院、

〔増鏡二〕新院も佐渡國に移らせ賜ふ。○中略佐渡院○順あけくれ御おこなひをのみし賜ふ、

〔紹運要略〕土御門院○寛喜三年十月十二日、崩河波國○仁治三年七月六日、可

〔陵墓一覽宮内省〕土御門院天皇陵山城國乙訓郡金ケ原村

○按ズルニ、吾妻鏡承久三年六月八日、叡山御幸ノ條ニ、上皇○後土御門院、新院○順ト云ヒ、百練抄ニモ同時ニ、一院○後土御門院、新院○順トアリテ、承久軍物語ニ、土佐國ニ遷幸あるべきに定

められけり、鷹司萬里小路の御所より御出あり、げしやくの土御門の大納言定通○外祖父藤原通親子

卿参りて、なくく御車をよすトアレバ、遜位ノ後ハ、常ニ土御門院○母后承明門院ニ御坐セシヲ以テ、當時土御門院トハ稱シ奉リケルニヤ、附シテ後考ニ供ス、

〔續史愚抄東山〕寶永六年十二月廿八日、故院御追號爲東山院、○口院被定仰者

〔章弘宿禰記〕寶永七年正月七日癸酉、今日辰半刻遣詔奏云々、故院御追號、東山院之由御治定云々、

〔中御門院御昇壇記〕寶永七年正月十日、新院御院號、奉稱東山院、

○按ズルニ、此號ノ事、伊藤長胤ノ盡善錄ニ、奉葬于東山泉涌寺、奉號曰東山院ト見エ、雍州府志ニ、泉涌寺號東山トアレド、筆者不詳ノ謚陵記ト云フ書ニ、兼而此東山之不審、折々人に尋どい

有之哉被尋下本所之處兩號被染宸筆有之由則寫之自新大納言局被入叙寶靈元孝元中正履中件兩號之間可爲何號哉靈元可然思召候猶被群議可有言上之由則申關白右府等之處少時衆議之上兩號之間可爲端方淑慮之通奉り無子細候歟殊近來明正院御例元明元正取合旁可然歟之由議奏輩奉之參御前奏之

〔續日本紀二十〕天平寶字八年十月壬申高野天皇孝遣兵部卿和氣王左兵衛督山村王中等

率兵數百圍中宮院山村王宣詔曰中帝位平退賜天親王乃位賜天淡路國乃公止退賜止勅略下

〔皇年代略記淳〕天平神護元年九月薨稱淡路廢帝

〔玉海〕安元三年七月二十九日已刻右中辨親宗爲院白河御使來云々此次親宗語事等讚岐院崇

院號并宇治左府贈官贈位等事來月三日可被行此事後聞今日被行院號等事宣止讚岐院號爲崇

德院

〔續世繼二〕讚岐におはしましゝかば崇讚岐のみかどゝこそ聞えさせたまふらめ

〔源平盛衰記八〕讚岐院事

新院崇讚州配流ノ後ハ讚岐院ト申ケル

〔承久軍物語六〕十三日承久三法皇崇隱岐國へ還幸あるべき由きこしめせば中八月五日

と申には隱岐國海部郡荊田郷と申所につかされたまへば領主あやしき御所を造りまうけて移

し奉る

〔皇代記〕顯德天皇鳥羽又曰隱岐院

〔百練抄四十〕延應元年二月廿二日壬戌隱岐法皇崩御五月廿九日戊戌侍從中納言爲家參著召

大外記師兼仰云以隱岐院鳥羽可奉號顯德院者

〔增鏡二〕中院土御門は始よりまろしめさぬ事なれば崇久あづまにもとがめ申さねど父

〔皇年代略記〕光原貞治三年七月七日崩御。○中以此間御座被擬追號。奉號光嚴院。是依遺勅也。

〔皇年代略記〕光明康曆二年六月廿四日崩於勝尾御草庵。奉號光明院。○中依遺勅。不_レ改其號。

〔敦有卿記〕應永五年正月十三日午刻法皇崩于伏見仙洞。○中御年六十五。追號崇光院。○中依遺勅。不_レ改其號。

〔椿葉記〕應永四年の冬より御惱にて、同五年正月十三日崩御なりぬ。遺勅にて崇光院と申。

〔皇年代略記〕後醍醐明德四年四月廿六日辛丑崩。○中謚號後圓融院。○中自去_レ年遺勅也云々。

〔看聞日記〕永享五年十月廿七日、御追號事、爲遺勅被定置後小松院。

〔椿葉記〕後抑仙洞。○中後此一兩年御不豫にましくつるが、同じし神な月廿日、○中永享つひに崩御なりぬ。遺勅にて後小松院と申。

〔皇胤紹運錄〕後水尾延寶八年八月十九日崩。依遺詔、奉號後水尾院。

〔後成恩寺關白諒闇抄〕正長元年七月廿一日、追號定、廿二日、爲清朝臣勸進、於前關白。○中滿教_レ原直廬

被定之。萬里小路大納言勸修寺中納言。○中經成_レ右大辨宰相_{○中}親光_{○中}等相議奉號稱光院云々。順德院御號

時、有淳陽號。○中取_レ淳和_{○中}陽成_{○中}之_{○中}仍今度就此儀、一兩勸進之内加稱光。○中稱_レ光_{○中}仁_{○中}一直依院仰進勸文云々。

儒中猶存先蹤、勸申雖勿論、淳陽既不被採用定有子細歟。今度難資准的歟。議奏之次第如何、理可然

乎、但稱光無殊難歟云々。

〔季運宿禰記〕元祿九年十一月廿五日戊寅、今日故本院。○中帝御_{○中}祐_{○中}仙洞御_{○中}神_{○中}院_{○中}號_{○中}明正院云々。遺詔奏陣

儀也。○中明正院之事、風聞云々、後日伊豫局被示云、此御院號非勸號於仙洞。○中被_レ議定云々、明正ノ二字、元明。天皇元正。天皇字云々。

〔光榮公記〕享保十七年八月廿九日、舊院御追號、被稱靈元院。○中密傳聞、此御院號、舊院思食寄、被書

付置趣、宮達言上御定云々、以元明元正兩字、稱明正院間、以孝靈、孝元兩字、被思召寄歟、由有人々說

〔宗建卿記〕享保十七年八月六日、法皇崩御。九日、議奏輩召御前仰云、故院御追號御在世之時思召

併用二帝謚爲

〔少外記康雄記〕弘治三年九月五日、當今崩御也、○中 號後奈良院、

〔公卿補任後奈良〕弘治三年、九月五日、帝崩、六十

〔皇年代略記後水尾〕延寶八年後八月八日、奉葬泉涌寺、奉號後水尾院、○後、

〔基量卿記〕貞享二年二月廿九日、參內、今日御追號之儀治定、後西院云々、淳和天皇從御兄受禪、且又

御弟○弟、恐 之子へ讓位、御在位十ヶ年、新院九年也、年數略相同、讓位受禪之處等同前之間、今日如

此御治定也、

〔季連宿禰記〕貞享二年三月五日乙丑、新院御追號事、後西院治定云々

〔中右記〕大治四年七月八日甲申、著直衣、奉新院○為 殿上治部卿被參、以右衛門督實行被仰云、○中

本院院號事、頗被沙汰、可號白河院之由、御存生之時、被仰置云々、仍其定也、○御存生之時、被書置也、

十三日己丑、奉號白河院之由、內々議定了、

〔皇年代略記後嵯峨〕文永九年二月十七日、崩於龜山殿別院藥草院、○後、嵯峨院、

〔皇年代略記後深草〕嘉元二年七月十六日、崩、號後深草院、○後、

〔皇年代略記龜山〕嘉元三年九月十五日、崩、於龜山殿、號龜山院、○後、

〔皇年代略記後宇多〕元亨四年、○正中 六月廿五日、崩於大覺寺、同廿八日、追號奉號後宇多院、○後、

〔皇年代略記後伏見〕延元元年四月六日、崩於持明院、○後、伏見院、

〔皇年代略記花園〕貞和四年十一月十一日、崩於秋原仙洞、五十三 奉號花園院、○後、

〔神皇正統記後醍醐〕後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す、

〔太平記二十一〕因遺勅被成綸旨事

群臣相議シテ、先帝ニ尊號ヲ獻ル、御在位ノ間、風教多クハ延喜○醍ノ聖代ヲ追レシカバ、尤其
寄セアリトテ、後醍醐天皇ト諡ヲ奉ル、

號事、今日治定云々、被用後。土御門。畢、

〔後法興院關白記〕明應九年十月九日、右少辨尙顯來令對面、舊主追號事、後陽成院、後土御門院、兩號何可宜哉、被申所存、就群議欲被一定矣、仰詞此分注折紙、十日、昨日之申詞、注折紙付奉行辨許如常、余申詞、

舊主追號事、土御門號、遷座御事可有其憚候歟、後陽成院無巨難候哉、

〔享年代略記後陽成〕元和三年九月廿日壬午、奉葬泉涌寺、奉號後陽成院、

〔忠利宿禰記〕承應三年十月十五日辛未、今夜酉刻先帝御追號後光御葬送泉涌寺也、

〔實久卿記〕文化十年閏十一月十一日、午刻參舊院略、御追號奉稱後櫻町院於禁中被定之由、被示評定了、

評定了、

〔後桃園院崩御記〕安永八年十一月九日、寅刻ツヒニ崩御云々、後桃園院ト追號シ奉ル、

〔公卿補任後桃園〕安永八年十一月九日、天皇崩奉號後桃園院、

〔入道左府記〕嘉元二年七月十七日、今夜後深草院無追號之定、被食御號之故也、御葬送也、

〔増鏡十一の日記〕二條宮小路にてかくれさせたまひぬ略、又の日夜に入て深草殿へいでわた

し奉る略、後深草院とぞ聞ゆめる、

〔滿濟准后日記〕永享五年十月廿四日、就諒闇事、尋申一條前攝政略、昨日返報今日到來了略、中

松院御號事、先例皆以有其寄之號所用來也、此御號當時無由緒之上、爲光孝天皇御一號之間、雖難

被用之、既爲遺詔之上者、摸後深草御號被加後字可被有用乎、已上前攝政御申詞、

〔二水記〕大永六年四月廿七日、御追號事可爲後柏原院之由有其沙汰云々、今度依仰各被撰申訖中、

御追號後柏原院治定了、桓武天皇號柏原帝也、

〔管別記〕大永六年四月廿七日庚辰、御追號後柏原院治定、陽明准后略、被撰定申云々、

〔伯耆卷〕曆應元年○延元四年八月八日○八日、當帝臨崩御し給ふ、第七皇子御位に即せ給ふ、後村上
天皇と申奉るは是なり、

〔皇胤紹運錄〕義良親王 於南朝稱君、號後村上天皇云々、

〔鷲嶺雜事記〕應安元年三月十一日、住吉御所崩御、御年四十一、奉

〔南方紀傳〕應永三十一年四月十二日、小倉殿崩御、後村上院、

〔後愚昧記〕應安七年二月二日、有諡號定、太閤其基公近衛前關白道嗣公前內府實繼公預其儀、後光

嚴院治定云々、

〔皇年代略記〕後圓融融也云々明德四年癸酉四月廿六日辛丑、未刻崩、○中同廿七日、奉葬泉涌寺、○中諡號後

圓融院、

〔親長卿記〕文明三年正月二日、舊院御追號事、後文德、後花園等、可計申之由、奉行藏人左少辨季光奉

書到來、其仰調注一紙申入了、在別案二月五日、日野大納言資綱相語云、今度御追號事、後文德院自

一條大閤藤原兼夏被申云、於文德者、田邑御門諡號也、被加後字於諡號之條、無先例、歟、無勿體之由

被申、件御追號、新大納言、後文德、後花園等、兩號勅進獻之、二條大閤、藤原持通、前內大臣、略元右大將、

御不審、重可、仍重可申所存云々、○中十九日、後聞、今日有宣下事、止後文德院號、宜爲後花園院云

云、仰調上卿日野大納言資綱奉行藏人左少辨季光服上卿仰外記云々、

〔皇年代略記〕後花園文文明二年十二月廿七日、俄御惱頓崩室町第、○中始奉號後文德院、後改爲後花

園院、改、顯德院、奉爲、

〔管別記〕明應九年十月七日戊子、參關白殿、○藤原今度之御次第共、御沙汰之時分也、○中予申云、於

追號者、非儒中之撰、諸卿内々定申也、又被仰云、傳奏類可計申之由、申請之間、二號被注進畢云々、此

上不能是非、後陽成院、後土御門、○中廿一日壬寅、今夜於番所、源相公羽林參會、被語云、御追

〔皇年代略記後鳥羽〕仁治三年七月八日、以顯德院可奉號後鳥羽。院之由重被成宣旨、其辭云、顯德乃尊號諡乎秘之天佐、世俗常仁御在所平、以氏後鳥羽院止者佐幸、可宣云々、

〔増鏡三〕初めはけんどく院と定め申されたりけれどおはしなれし世の御あら、なれりけるとして、仁治の頃ぞ、後鳥羽とは、更に聞え直されけるとなん、

○按ズルニ、文ニおはしなれし世のあらなれしと云フ、あらなれしハ豫定ト云ハンガ如シ、蓋シ遺詔ヲ奉ズルナラン、記シテ疑ヲ存ス、

〔平戸記〕仁治三年六月廿六日、今日殿下實藤原御物語云、顯德院諡號可被改、可奉號後鳥羽云々、此事前内府申行歟、案此事我朝無例歟、至漢朝者一兩度相存之由、大府卿申之、又御改名之儀、太不得其心、何故云々、不叶冥慮者又如何、

〔一代要記後堀河〕文暦元年八月六日崩、同十日、諡號定後堀河、

〔明月記〕天福二年八月十一日丁丑、世間不審、問金吾返事云、御名後堀河院云々、甚悦思此御名年來代々無申人、而無此事、今如此聖代之御名、可然事歟、奉爲公家尤可爲吉例歟、

〔増鏡飛鳥川〕十七日の朝より御氣色かはる、つひに其日の酉の時に、御年五十三にてかくれさせ給ぬ、後嵯峨院とぞ申める、ことしは文永九年なり、

〔皇年代略記後宇多〕元亨四年正中六月廿八日葬蓮華峯寺傍山、同日先追號奉號後宇多院依道、

〔皇年代略記後伏見〕延元元年四月六日、崩於持明院殿四十、奉號後伏見院依道、

〔皇年代略記後二條〕德治三年八月廿五日、崩二條高倉皇居、同廿七日、追號後二條院於關白直、

〔増鏡十二〕廿八日、先帝も御わざのさたあり、院號ありて後二條院とぞ聞ゆる、

〔神皇正統記後醍醐〕後の號をば、仰のまゝにて後醍醐の天皇と申す、

〔觀心寺記〕正平廿三年四月廿日、奉葬河内國錦部郡檜尾山陵觀心寺、廿八日、奉追號後村上天皇、

〔皇年代略記醍醐〕延長八年十月十日、葬後山科陵、

〔大鏡醍醐〕次の帝、醍醐天皇と申さ、略中みさゝき山しなにより、後の山しなといふ、

〔日本紀略村三〕天曆元年九月二十九日、後山階太上天皇醍醐國忌也、

○按ズルニ、後山階トハ、天智天皇ノ、山科陵ニ對シテ稱スル所ナルベシ、

〔二代要記醍醐〕醍醐天皇號小野、

○按ズルニ、日本紀略ニ、延長八年十月十日、奉葬大行皇帝於山城國宇治郡山科陵、醍醐寺北笠取山西小野寺下トアリ、是亦陵地ニ依テ稱スル所ナルベシ、

〔菅別記〕明應九年十月十七日、凡儒中故實者、天皇之追號、後字用音讀、大臣稱號之時、後字用訓讀、是通法之故實也、後深草院一號者、後字用訓讀云々、其様御不孝之讀、不聞好之儀也、後深草院

○按ズルニ、菅別記ニ、後字用音讀トアレド、古書往々後字ノ下ニノ、字ヲ添ヘタルモノアリ、特ニ後深草ノミニアラザルナリ、

〔類聚雜例〕長元九年五月一日、戊寅、關白相府藤原等、於殿上被定、御正日雜事、略又有可奉稱號

之儀、相府命云、尋一條院御時例、無宜旨、只奉稱一條院云々、仍准彼例奉稱、後一條院如何、彼此被申云、甚佳事也、

○按ズルニ、此次後朱雀後冷泉ノ二帝、奉號ノ事所見ナシ、拾芥抄ニ、朱雀院累代後院トアレドモ、後朱雀同院ニ移御ノコト、是亦徵證ナシ、後冷泉ハ、是モ拾芥抄ニ、冷泉院累代後院トアリテ、扶桑略記ニ、永承天喜ノ間、同院ニ遷幸ノ事アリ、是レ後冷泉ト號スル所以ナルベシ、錄シテ參考ニ供ス、

〔榮花物語松の十八〕此院をば一院とぞ人々申しける、後三條院とも申すめり、

〔山槐記〕建久三年三月十四日丙戌、昨日於舊院、院司公卿被定院號、後白河院云々、

〔皇年代略記文德〕天安二年八月廿七日乙卯、崩於冷泉院。九月六日、葬田邑山陵、號田邑帝。

〔一代要記文德〕文德天皇、號田邑。

〔三代實錄清和〕貞觀元年三月十九日乙亥、大僧都傳燈大法師位眞雅抗表曰、中田邑先皇、文無

價之寶彌照。

〔三代實錄陽成〕貞觀十八年十二月二十九日壬申、遣參議從三位行右衛門督大江朝臣晉人、從四位

下行右馬頭在原朝臣業平、向田邑山陵、文告以天皇受讓、告文曰、中掛畏、田邑御門、乃於賜、李波

厚慈、平受戴、下略。

〔古今和歌集十七〕田村のみかど、文の御時に、下

〔皇年代略記清和〕元慶四年十二月四日崩、號水尾帝、同七日、火葬、栗田山、白河、陵、水尾、帝、一

〔大鏡清和〕次の帝清和天皇と申ける、中みづのをのみかど、申す、

〔大和物語下〕水尾のみかど、和の御時、左大辨のむすめ、べんの御息所とていゝすかりける、

〔皇年代略記光孝〕仁和三年八月廿六日崩、九月二日葬小松山陵、號小松帝、

〔帝王編年記光孝〕仁和三年九月二日葬、葬于小松山陵、和野、郡、號光孝天皇、又小松帝、

〔扶桑略記光孝〕二十二年、小松天皇、光孝、孝天皇、五十九代、時廣、

〔大鏡光孝〕次の帝光孝天皇と申さ、中小松のみかど、申す、

〔仁和寺御傳序〕夫考當寺之濫觴、光孝天皇、相當城州葛野郡小松郷大内山之麓、掘荆棘、穿桑木、草創

一院、仁和寺是也、以里號、稱、二

〔滿濟准后日記〕永享五年十月廿四日、就諒闇事、尋申一條前攝政、藤原昨日返報、今日到來了、中

小松院御號事、先例皆以有其寄之號所用來也、此御號當時無由緒之上、爲光孝天皇御一號之間、下

略

臣仲世等言^{○中}後田原天皇^{○光}寶龜十一年、數奏此事、

○按ズルニ、後田原トハ、延喜諸陵式ニ、皇考施基親王陵^{寶龜元年、追尊シテ、御ヲ田原西陵ト云ヒ、此天皇陵ヲ田原東陵トアリテ、續日本紀光仁天皇紀ノ首ニハ、施基親王ヲ稱シテ、田原天皇ト云フコトモ見エタリ、是レ此天皇ヲ稱シテ、後田原ト云フ所以ナルベシ、}

〔續日本後紀^{仁明}〕天長十年三月二日壬辰、頒遣中納言從三位行民部卿藤原朝臣愛發^{○中}等於柏原長岡二山陵、豫告可即位之狀曰、^{○中}掛長俊柏原御門^{乃武}天朝^{○下}、

〔扶桑略記^{拔萃}〕桓武天皇^{世謂柏原天皇}

〔簾中抄^上〕かしは原のみかど、申す^武、これみざゝきの名なり、

〔皇年代略記^{桓武}〕延曆廿五年三月十七日崩、四月七日、葬山城國柏原陵、號柏原帝、

〔類聚國史^{百八十八}〕天長元年九月壬申、正五位下行河内守和氣朝臣眞綱、從五位下彈正少弼和氣朝臣仲世等言^{○中}、柏原先帝^略以前詔、普告天下、

〔扶桑略記^{字多}〕寛平二年庚戌二月十三日己巳^{○中}、太政大臣會語曰、白壁天皇^{仁光}時、將立皇太子、^{○中}愛藤原百川^略破其書、立柏原親王爲皇太子、大臣歎曰、我年老、視耻如此、柏原天皇^武、緣百川之功親臨、

〔皇年代略記^{仁明}〕嘉祥三年三月廿一日乙亥、崩于清涼殿、同廿四日、葬深草山陵、號深草帝、

〔愚管抄^{仁明}〕此みかどは、深草のみかど、常に人申すなり、みざゝきの名なり、^{○又見簾中抄}

〔神皇正統記^{仁明}〕第五十四代第三十世仁明天皇、深草の帝とも申す、

〔三代實錄^{清和}〕貞觀元年三月十九日乙亥、大僧都傳燈大法師位眞雅抗表曰、^{○中}嘉祥寺者、先帝^文奉爲深草天皇^{○仁}所建立也、

〔古今和歌集^{十六}〕深草のみかど^{○仁}の御國忌の日^{○下}

女院九條

〔皇代記〕廢帝仲諱懷成略○中號九條廢帝

〔帝王編年記二十四〕文曆元年五月二十一日承久先帝仲崩御號後廢帝

〔帝王編年記二十四〕後廢帝略○中大嘗會不被行以前退下世稱半帝

○按ズルニ後廢帝トハ是ヨリ先キ淡路廢帝淳アレバナルベシ

〔後成恩寺關白諱聞記〕先皇追號事

追號事略○中山陵號宇多醍醐村上等

○按ズルニ舊說多ク宇多ヲ以テ陵地號トスレドモ非ナリ大日本史ノ宇多天皇紀ニ稱亭子

院稱宇多院皆因其所居爲號トアルニ從フベシ

〔日本紀略醍醐〕延長八年十月十日奉葬大行皇帝醍醐於山城國宇治郡山科陵醍醐寺北笠取山西

小野寺下

〔帝王編年記十五〕延長八年九月廿九日崩御四十六十月十日庚子奉葬山科山陵號醍醐天皇

〔皇年代略記上〕康保四年五月廿五日崩六月四日葬村上山陵山城葛野

〔帝王編年記十六〕康保四年六月四日葬村上山陵號村上天皇

〔續日本紀二十〕天平安字二年八月庚子朔高野天皇孝禪位於皇太子

○按ズルニ村尾元融ノ續日本紀考證ニ元融案實龜元年八月紀云葬高野天皇於大和國添下

郡高野山陵又高野陵見諸陵式蓋山陵所在因以爲稱歟不詳トアレド萬葉集一ニ長皇子與志

貴皇子於佐紀宮俱宴歌秋去者今毛見如妻戀爾鹿將鳴山曾高野原之宇倍トアレバ陵號ナル

コト疑フ可ラズ

〔類聚國史百八〕天長元年九月壬申正五位下行河內守和氣朝臣眞綱從五位下彈正少弼和氣朝

陵地爲號

陵地爲一號

〔一代要記^二平城天皇^一〕俗號三宗

〔類聚國史^二帝^一〕二十八年天長十年二月辛巳、皇帝^〇遷御西院爲讓位也、

〔皇年代略記^二淳和^一〕天長十年二月廿八日乙酉、禪位^〇西^{十八}先、是天皇遷御西院、承和七年五月八日

崩^{五十五}號西院童、

〔伊勢物語^上〕ひかし西院のみかど^〇淳和と申すみかどおはしなしけり

〔神皇正統記^二淳和^一〕第五十三代淳和天皇、西院の帝とも申す、

〔一代要記^二淳和^一〕淳和天皇號西院帝、

〔拾芥抄^中宮城^未〕淳和院^{天長十上}、^{利離宮今}西院、

〔古今重蒙抄〕亭子院は、宇多のみかど、の御所なり、

〔拾芥抄^中諸名所^未〕亭子院、寛平法皇御所、

〔大鏡^{宇多}〕次の帝亭子のみかど^〇宇多と申さ、

〔皇年代略記^{宇多}〕承平元年七月十九日崩^{六十五}、於^三號亭子院、

〔日本紀略^{醍醐}〕醍醐天皇諱敦仁、亭子^〇天皇第一之子也、

〔大和物語^上〕亭子院のみかど、今はおりの給ひなんとするころ^〇下

〔後撰和歌集^{醍醐}〕亭子院のみかど^〇宇多おりる賜ふける秋^〇下

〔大日本史^{宇多}〕^{三十一}按帝脫屣後居朱雀院、及中六條院、故初稱六條院太上皇、又稱朱雀院太上皇、既

而請辭、尊號單稱朱雀院、醍醐帝從之後、又稱亭子院、稱宇多院、皆因其所居爲號、崩後停諡、故又因

襲生時之號、稱某院耳、

〔百練抄^仲〕^{十二}承久三年七月八日、主上密々渡御九條殿、

〔百練抄^仲〕^{十四}文暦元年五月二十日、廢帝^〇仲崩御、^〇中御母儀東一條院也、承久亂逆之後、御同所于

久夏六月廿六日佛七日御爲載御願文被定御號云々遺詔已後此等子細可被申口仙洞光識此
上宜在時議矣

〔太平記三十九〕光嚴法皇行脚附崩御事

光嚴院禪定法皇ハ、○中伏見ノ里ノ興光嚴院ト開エシ幽閑ノ地ニヅ住セ給ヒケル、

〔皇年代略記光〕貞治三年七月七日崩御○中以此間御座號被擬追號奉號光嚴院是依遺勅也、

〔太平記三十三〕持明院三上皇自吉野還幸事

新院○光ハ伏見ノ大光明寺ニヅ御坐有ケル、

〔太平記三十九〕法皇御葬禮事

此時ノ新院光明院殿○下

〔皇年代略記光〕康暦二年六月二十四日崩於勝尾御草庵奉號光明院日來奉號光明院依遺勅不改其號

〔皇年代略記正親町〕文祿二年正月五日崩於仙洞七十五追號正親町院

〔時慶卿記〕文祿二年二月六日今夜遺詔陣ノ儀被行云々號正親町院二條殿ヨリ定被申院ノ北ノ

御門正親町ノ通ナル故ト

〔皇胤紹運錄〕櫻町院 延享四年五月二日行幸于櫻町殿同日讓位

〔閑窓自語〕櫻町仙洞此地ハ天正十四年正親町院御讓位の後仙洞に用ゐられし地にて代々の洞

裏たり櫻町のみかき御脱履あらんとて此地に仙居を造られ延享四年二月二十八日此後櫻町

殿と稱すべき由仰らる

〔賴言卿記〕寛延三年四月廿九日辛未舊院御追號被稱櫻町院之由被申傳了

御在所爲一號

〔扶桑略記平城〕平城天皇世謂之天皇

〔帝王紀年記平城〕太上皇平城平城天皇之謂也

門北、東洞院東、前大納言邦綱朝臣家、先ニ時々爲皇居之所也トアリ、又拾芥抄諸名所部ニ、高倉殿土御門南、トアリ其京程圖ヲ按ズルニ、此圖ニ據レバ、山槐記ニ土御門北、即チ前文土御門亭
ト全ク同所ニシテ、此號ノ御在所號タル事ヲ證スルニ足ル、

〔後中記〕仁治三年正月十九日壬寅、參閣院於攝政其實原直廣、可被定舊主○四追號中殿下仰舊主追號事可定申者、拾遺相公條四條民部卿、後六二條中納言、四條、吉田中納言、後爲予、四前內府、後爲殿下、四條、重議定之時、可奉號四條院之由、人々大略一同如此、追號先例多是用御居所今度、三條西洞院、右幕下第、可爲御葬家所云々、謂三條者是四條也、號東三條是二條也、彼可准之由拾遺相公所計申也、

〔入道左府記〕嘉元三年九月欠○日御號兼被思食定、山院。仍不及追號定云々、

〔増鏡十一今日の日陸萬里小路殿の法皇、又御惱みとて龜山殿へ遷らせたまふ、略○中九月十五日○嘉元三年の曙に終にかくれさせたまひぬ、略○中御骨も此院山に法華堂を立させたまへば龜山院と

ぞ申すべかめる、

〔増鏡十二持明院殿、略○中伏見殿がちにのみぞおはしまし、程に、そこはかど御惱月日經て、文

保元年九月三日かくれさせ給にき、伏見院と申き、

〔迎陽記〕貞治三年七月十日、自殿中被下御書有召、不俟駕參仕、條々事有沙汰、舊院光院號事有勅問、御申詞有御談合、余清書副奉書遣嗣房許、

院號事近例於舊院有其沙汰歟、或御在所、或被尋御素意、被定其號、今度儀不存知子細間短慮、無左右難定申、圓融土御門間、可爲何様哉、但土御門者登極地、雖似有其資、當時皇居、尤可有儀、且以訓不可稱之、由有其說歟、旁不宜哉、圓融雖無殊由緒、聖代之徵號、被准用之條、存先規、抑光嚴院爲幽閑地、然者若可叶御素意哉、寺號傍例、醍醐寺圓融寺被用畢、不可有巨難哉、緯爲重事、猶可被決群議歟、延

○按ズルニ、此號中右記ニハ、遺詔ニ依テ稱スル所ト云フ、猶追號依遺詔ノ條參看スベシ、

〔皇年代略記堀河〕嘉承二年七月十九日癸卯、崩於堀河院、同廿四日戊申、追號堀河院、

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊寅、於攝政殿○藤原實資堀河殿御直廬、聊有會議云々、今日付代々例、可奉號堀河院、之由、以右大辨時範朝臣、被仰下大外記師遠了、

〔百練抄七〕保元元年七月二日、禪定仙院○鳥羽崩于鳥羽安樂壽院、

〔帝王編年記二十〕保元元年七月二日辛丑、崩於鳥羽殿○中略號鳥羽院、

〔百練抄七〕久壽二年七月廿三日、天皇崩于近衛皇居、

〔兵範記〕久壽二年七月廿七日壬申、有院號定云々、遂以近衛院、可奉號之由議定了、

〔皇年代略記二〕永萬元年七月廿八日、崩於二條皇居○中略號二條院、

〔續世繼三〕花園の匂ひ廿三におはしまし、御年、御病重くて若宮に譲り申させ給て、いくばくもおはしまさゝりき○中略二條院とぞ申すなる、古き后の御名なれど、二條院○後冷泉后男女かはらせたまへれば、まがはせたまふまじきなるべし、されど同じ御名は、古くも侍らぬにや、

〔二代要記十六〕安元二年七月十七日崩、同日葬栖霞寺堂、同日號六條院、

〔二代要記十六〕上皇六條院安元二年七月十七日崩、同日號六條院、宣下、

○按ズルニ、本文ニ據レバ、崩所六條、故ニ六條院ト追號セシモノ、如シ然レドモ百練抄ニハ、

日來御院○後河御所、而依病病出御、邦綱卿東山亭、於件所有此事トアリ、

〔百練抄九〕養和元年正月十四日、太上天皇○高倉崩于六波羅賴盛卿亭、御年廿一、高倉院、

〔高倉院昇遐記〕治承五年○中略殿上にて、先後の御名の定めあるにつけても、高倉いかなる大路

にて、愛名の御形見に残り○下略

○按ズルニ、山槐記ニ天皇遜位ノ後、治承四年三月四日、土御門亭ニ遷幸ノ事アリテ、注ニ土御

〔帝王編年記^{十四}〕承平元年辛卯七月十九日崩^略○中 號宇多天皇又亭子院

〔大日本史^{三十一}〕稱亭子院稱宇多院皆因其所居爲號崩後停謚故又因襲生時之號稱某院耳

〔日本紀略^二〕天慶九年七月十日太上皇^{○朱}出禁中遷朱雀院

○按ズルニ此號ハ拾芥抄ノ諸院部ニ朱雀院累代後院トアリ以テ徵ト爲スベシ

〔榮花物語^一〕の寒[○]安和二年八月十三日なりみかど[○]冷 おりさせたまひぬ[○]中 おりゐのみかど
は冷泉院にぞおはしませすされば冷泉院と聞えさす

〔日本紀略^十〕寛弘八年十月廿四日癸亥戊剋冷泉院太上天皇崩于南院^{○即冷}春秋六十二

〔日本紀略^八〕寛和元年九月十九日庚寅後太上天皇[○]自堀河院遷御圓融院

〔日本紀略^九〕正曆二年二月十二日癸丑依圓融寺法皇不豫大赦天下^{○中}今日法皇崩 十九日

庚申葬太上法皇於圓融寺北原

○按ズルニ文ニ圓融寺法皇トアリ其御在所號ナルコト知ルベシ

〔拾遺抄注^{維上}〕花山ハ山階ニアリ元慶寺ト云御寺建ラレタリ花山院ハ彼寺ニ御幸アリテ御出

家アリ仍稱花山法皇後ニ京ニ御坐ノ御所ヲ花山院ト號スルナリ

〔日本紀略^{十一}〕寛弘八年六月十三日乙卯有御讓位事 廿二日甲子太上天皇^{○一}崩一條院中殿

〔左經記〕長元九年五月一日有可奉稱號之議^{○後一條ノ崩}相府命云尋一條院御時例無宣旨只奉

稱一條院云々

〔日本紀略^{十三}〕寛仁元年五月九日丙午太上天皇^{○三}崩于三條殿

〔榮花物語^{十二}〕玉の甘露^{○中}長和五年正月廿九日御讓位^{○中}おりゐのみかどをも三條院と聞えさす

〔續世繼^二〕釣せぬ浦[○]鳥羽殿は此法皇の造らせたまへればさやうにや申さんと思へりしかども

白河にもかた[○]御所ども侍りしかば白河院とぞ定めまゐらせ侍りける

皇トアリ、以テ微ト爲スベシ、

〔皇年代略記嵯峨〕承和元年八月丁亥、遷嵯峨院、九年七月十五日崩五十八、葬嵯峨院北山地、號嵯峨帝、

〔類聚三代格〕太政官符

應充正一位平野神社地一町事○中略

右得彼社預從五位下卜部宿禰平麻呂解狀備○中略、嵯峨院去承和五年十月十五日、割取八段、賜時統宿禰諸兄○中略

貞觀十四年十二月十五日

〔類聚國史二十〕天長十年二月乙酉、皇帝○淳和於淳和院讓位于皇太子、

〔續日本後紀仁明〕承和十年二月壬戌、散位從四位下勳七等大野朝臣眞麿卒○中略、淳和天皇踐祚、天長之初、任右近衛權少將、

〔拾芥抄中〕淳和院天長、下上皇、

〔三代實錄三十八〕元慶四年十二月四日癸未、太上天皇○清和崩、自遷皇位、御清和院、

〔三代實錄三十〕貞觀十八年十二月八日辛亥、上清和天皇尊號爲太上天皇、

〔皇年代略記清和〕元慶四年十二月四日崩、後日諡號清和天皇、

〔三代實錄四十四〕元慶八年二月四日、天皇○陽成出自綾綺殿、遷幸二條院、

〔河海抄〕陽成院を二條院と號云々、脱屣之後、御此院○又見今昔物語二十卷、

〔皇年代略記陽成〕天曆三年九月廿九日、崩於冷泉院、號陽成院、

〔日本紀略二〕延長二年正月廿七日丙寅、御賀○天皇之後、宇多仙院被奉御馬四十四匹、

〔日本紀略二〕承平元年七月十九日甲辰、戊時、宇多院太上法皇崩於仁和寺御室、

弘文天皇

廢帝

淳仁天皇

九條廢帝

仲恭天皇

右之通三帝御諡被爲奉候ニ付此旨相達候事、

一帝二諡

〔神皇正統記齊明〕齊明天皇は皇極の重祚なり、重祚といふ事は、本朝には是に始まれり、異朝には、

略○中唐の世となりて則天皇后世を亂られし時、我所生の子なりしかども、中宗をすて、盧陵王

とす、同じ御子豫王を立られしも、又すて、自ら位に即きたまふ、後に中宗位にかへりて唐の祚

たえず、豫王も又重祚あり、これを睿宗といふ、是をなましき重祚なれども、二代にはたてず、中宗

睿宗とぞつらねたる、我朝に皇極の重祚を齊明と號し、孝謙の重祚を稱徳と號す、異朝にかはれ

り、是天つ日嗣を重くする故か、先賢の義定めて由あるにや、

〔大日本史贊數〕復位肇於皇極、後世上諡以分前後、蓋出於一時之議、而非萬世之通制也、

御在所爲號

〔後成恩寺關白諒闇記〕先皇追號事

於諡號并新號者及議奏於追號者内々有其沙汰、

追號事、御在所嵯峨、淳和、清和、陽成、華山、一條、○中菴室號、光嚴、光明、崇光等、

〔帝王編年記淳和〕太上皇平城稱奈良天皇是平城之謂也、

〔愚管抄平城〕おりゐのみかどにて、略○中ならにおはしなす、依て奈良のみかど、申なり、

○按ズルニ、平城ノ號ハ、日本後紀ニ、大同四年四月、天皇遂傳位、避病於數處、五遷之後、宮于平城、
ト見ユ、類聚國史ニ、天長元年七月甲寅、平城天皇崩、丙辰、奉諡曰、畏哉讓國、而平城宮御坐、志天

孝明 孝經曰、明王事父孝、故事天明、

隆祐上○
中略

大行天皇御諡號勘文、現任一同被爲見下勅問之間、明後七日中、御所意否可有言上之旨、加勢治部

卿被申渡候、

略○中

二月十六日今日大行天皇御諡號、辰刻使定陣儀云々、傳聞上卿內府忠房

公參議源宰相中將

善通

著陣奉行辨體房被下御諡號使定、執筆參議通善奉仕云々、使應司大納言政輔

著陣云々、御諡號孝明天皇、宣命令作大內記、先奉草大臣著弓場奏之云々、攝政○二條

云々、被仰清書同斷、

〔官務文書〕詔書寫

詔、諡者顯德表行、聖經之遺訓、而王者之大猷也、恭惟孝明天皇、聰明睿智、而功烈光于四海、寬裕溫
柔而仁風行於千載、容開川流、神襟蘭郁、父老堯舜、先德昭光、憲章文武、君道方被、於是蔑物不得其
所、靡國弗蒙其恩、嗚呼哀哉、晨輶解風、早銷神躬于壤末、曉蓋俄金、既散靈魄於天淵、追惟盛德、平有
大號、爰奉尊諡、恭稱孝明天皇、仰願傳大名於後昆、與磐石長不朽、耀餘威於萬邦、與日月共無疆、普
告天下、俾知朕意、主者施行、

慶應三年二月十六日

〔憲法類編十四祭典〕大友帝外二帝奉諡御祭典ノ事

庚午○明治
三年七月廿二日御布告

大友帝

廢帝

九條廢帝

三帝御諡號被奉候ニ付、明廿三日八字、於神祇官御祭典被爲行候事、

庚午七月廿四日御布告

大友帝

〔回天詩史〕太上天皇○光格

崩公○水月

聞之、又建葬祭之議於幕府、又寄書謀於關白藤公○藤

公深感公之忠誠、蓋入乙夜之覽云、藤公以爲葬祭之禮難違復古、至於謚號、則不可不奉也、乃議之

於關東、又使公贊成之、幕府不敢違、遂奉謚曰光格天皇、

〔實久卿記〕弘化三年二月十一日丁酉、自去夜祇候、大行天皇○仁孝

可被奉尊謚號、勘文、現任一同可有、

勅問殿下

○通司

被命、左大臣以下攝家人、自殿下被傳旨同上、

○中

勘者儀同三司、勘解由小路前

中納言、新宰相、式部大輔、式部權大輔等也、勘文續左、

○中

仁孝

謚法曰、慈惠愛親曰孝、禮記曰、仁人不過乎物、孝子不過乎物、是故仁人之事親也、如事天、事天如

事親、是故孝子成其身、

聽長上

十二日戊戌、御謚號勅答、今日付相役、一封獻上了、

大行天皇可被奉授尊謚號、以勘文被尋下謹奉候、仁孝 孝明 右字儀引文等、別而珍重候哉、

雖然以何被採用、存心無之候、宜在聖斷候焉、

實久上

三月一日丙辰、已刻許參內、申沙汰如日來、殿下於八景間、三條大納言以下相役各御招、今日被奉御

謚號、仁孝天皇、且御廟號可奉稱、弘化被仰傳、三條大納言於御棺前可奉告、折紙一紙被授之、其後中

殿於西庭可燒拂被命、即三條大納言被奉告了、於西庭燒拂、等扶持了、其灰鴨河令流了、昏時退出、

〔言成卿記〕慶應三年正月六日大行天皇○孝明

御謚號、現任一同、江勅問之旨、明七日中可奉返答、右大

將被示了、始進寫三折略寫三

御謚號事○中

先使長官以下於山門外下馬但於六立總門外下馬暨同雜色止同此間傳奏奉行仰列奉行先令

設漆櫃於唐門下內舍人內暨等守簿寺僧出達于總門外長老并役者自山門邊整列前行

入總門并山門於同門外止儀儀但諸大夫於唐門外各先假立于便所次解劔次下水後寺門長老以下

入同門著假座此間寺門豫後月輪山陵前敷葉薦其前設鈍色緣半帖有下數萬爲長次官及誅人座在

圖次內舍人內於唐門下解劔自漆櫃取出案儀幣物雜給幣等相共昇之參進置山陵前薦上畢退在便所

次使長官入唐門參進著座從著座誅人同著座

次使長次官誅人相共兩段再拜畢長官讀宣命或燒宣命畢後兩段再拜訖誅人奉誅之間長官授宣命於次官次

官起座進跪受之復座召內暨授之內暨參進跪賜之於瑞離內燒之內等持宣命以脂燭燒之內舍

雨降者於儀次燒幣物今度宣命許燒之於幣物者早久中絕之儀令又長次官誅人共兩段再拜次長次官誅人

等起座內舍人內出唐門經本路內於寺

次諸陵使向其陵今度幣物用代准寬治七年荷前使幣物遲來例先兩段再拜先是殷使申宣命之

趣又兩段再拜了起座出唐門略中

各傳奏奉行寺門傳奏等檢知無異之後使々退出於寺中休息

次使長官以下歸洛歸固雜色前

傳奏奉行於便所授宣命誅等寫幣物賜寺門之事請奏寫幣代早可備進之事等仰長老役者等其

品々令授之心寺門傳奏食事之後歸洛參闕白殿申萬端無異被遂行之由又以書狀告議奏是爲早

速也更明日奏開賀無異殿雖無山陵禮諸

使次官歸宅沐浴了參內申無異于義奏略儀但依舊

使々翌日參內賀無異略中

圓座給、職事等閉御屏風、退在軒廊、御劔將尙在御屏風外、

次兩段再拜給 御拜訖御咳之後、以藏人告使長官、其儀藏人隨便宣進退、

次御拜訖職事等參進、開御屏風、藏人頭供御草鞋、關白殿令執御裾給、於御屏風外、撤御笏取御扇給、

次御服人參進、刷御袖了退、

天皇還御、近衛將取御劔前行、以下准出御之儀、清涼記、衛前使執帶者退出、事畢還宮云々、今度先還御、次開長樂門、次昇出案、暫之、使退出、

此間傳奏奉行、率六位藏人催促諸事、先於高道戶邊、舍列奉行、修理職兼令、可開長樂門之旨、內々

傳仰近衛官人、同官、在、近衛官人即押開參入、直開長樂門、

次使長官起座前行、次官同起座進而指笏、內舍人內暨等入長樂門、進跪與次官相共昇案退、內舍人

執難給幣退、內舍人內暨等納漆櫃、件櫃自本在承明門南壁上、御前之儀訖、幣物昇出之後、與內藏傳奏奉行、納長櫃、密持向泉涌寺、

次長官以下各於大臣宿所、或樂人部屋、但使長官以下各樂人宿所、使、此間御裝束撤却以下之事、與

簪五位職事、且用意次第發向旨、先申關白殿、以議奏言上置、傳奏奉行、仰列奉行令整行栴、

次發遣、於待殿門騎馬、在、

先太政官直丁、持栴、前行、左內藏寮御幣、納漆櫃、擔夫二、難給幣、內舍人二人、內暨一人、次使長

官次官、次誅人、誅、自中御門、以、櫻町殿前、達、南江、萬里小路教業、達、東江、大和大路、達、南

江、伏見街道、達、順路、東山、江、參向、但於途中、一兩度休、

此間御幣發遣之後、傳奏奉行、自宜秋門方、包、之、居、白木塗、諸、外、代、每、白、銀三枚、宛、廿一、以、檀紙、

白銀仕、令、昇之、令、關、居、于、尋、常、車、野邊、副、使、包、之、之、居、白、木、塗、、外、、附、、臺、、井、、六、等、納、之、掛、、油、、黑、、以、、

守、關、、行、、三、、式、、傳、、下、、具、、當、、口、、向、、經、、便、、路、、馳、、參、、泉、、山、、先、、向、、方、、丈、、令、、昇、、合、、之、、寺、、門、、傳、、奏、、

面會問事具否、

山陵儀

今度諸陵幣被用代仍使等不進御前在外門又內舍人執難給幣從之樹案之間相去二許丈暫立於其後樹案畢後進置薦上以上帶劔者解而從事訖退出立門外

欲出御之間暫閉長樂門近衛官人開之了出左掖門在同門外又數政宣仁和

御拜出御儀中殿御殿東如何例也自孫廂至殿廊長榻乾妻戶外數道加布單御殿御裝束任近外布股

任指圖

先出御朝餉御座 關白殿令參御前給傳奏奉行早參職事等候下戶邊議奏候馬形障子邊武傳近

習候渡廊御服奉仕御劔將等候同所

此間詔書宣命等有御覽草清書御覽直焚若附內侍有御書之事如度

次著御帛御服不供御轎一本御冠者奉仕人參仕如何例操出御轎等如何例

次移御御手水間關白殿令給藏人頭候陪膳如何例

次御手水訖還御朝餉御座 關白殿御裾了石灰壇自御屏風妻經孫廂等著中殿圓座給兩役近習

候南廂御服奉仕奉行職事早參職事御劔將等候中殿簀子此間傳奏率六位藏人一兩輩徘徊南

殿宜陽殿等催促諸事使長次官著圓座內舍人置難給幣退閉長樂門之後馳參附議奏內々言上

先申關

天皇出御關白殿令候御裾給藏人頭供帛御草鞋近衛將取御劍經孫廂南廂長橋南殿乾妻戶自孫

乾妻戶外數御後中間御帳東出東面妻戶寶子敷道布降東階給白階下至軒廊宜陽殿兩數集

經軒廊五位職事二人左右相傍宜陽殿砌等入御御拜御座西廂南四々同敷滿折薦其上敷廣簾南

加紫綾褥引廻大宋御屏風開置之御座可設輕輦也然而當時例幣御拜座於南殿廂敷折薦上供

御半帖引廻大宋御屏風為御座准此例無輕輦沙汰又件御座用元旦拜山陵御座近代四方拜雖

諒開中供吉御座仍從之於御屏風外職事供御笏撤御笏令御座定關白殿帖置御裾退著同廂

次上卿以官人召大內記大內記來膝突仰仰詞如事

次內記來膝突奉草詔書不入日宣命等納一簣上卿披見內記退

次上卿以官人召職事職事來膝突被仰內覽奏聞職事參朝餉奏之先之於鬼間若就臺盤所簾下附

掌侍奏之御覽訖返給職事歸來膝突仰清書事職事退

次上卿以官人召內記內記來膝突被仰清書事內記退

次內記持參清書兩文書上卿披見一如草文但上卿披見了作官押

次上卿起座經御後宜陽殿投御座後便宜用兩儀禮就弓場內記職事出逢被仰內覽奏聞之事內記所持之清書作官授之

次職事奏聞先內一如草文御書訖返給職事歸出仰御覽訖事上卿取官奉御令持內記作覽按見御書日之有無

次上卿歸著仗座經本路內

次上卿令官人召大外記大外記來膝突為少外記問中務候否外記申候由上卿仰可召之由外記退

次中務輔來膝突上卿賜詔書被仰施行之事輔若有詔事者職事來仰之上卿召退

次上卿令官人召大外記大外記來膝突問使參否申皆參之由外記退

次上卿召官人令撤膝突

次上卿起座奉公卿并辨外記史等經宜陽春與兩殿西廂出自長樂門著外辨座同門外面西掖殿公卿座東上南面

接設辨使落座東西井前良外記史等在便所召使長官賜宣命又令召使召辨辨來膝突問

幣物具否辨申具之由訖退復座

次內舍人內監等昇案立幣立長樂門前守護期開櫃取出之又准建永元年賀茂一社奉幣幣物

退不置幣物代雜給幣內舍人等置同薦上

次使長次官起座入長樂門相共昇幣物下跪左經左掖門前到春興殿西廂北砌上為妻退立左掖門

內北掖北上面次官在後但今度假朝園座

畏哉讓國而御坐志天皇平恐美母誅白臣某畏哉日本根子天皇者久俱帝位爾御坐氏常爾資治乃道平求給止布古伊夜益須益爾深計禮故平溫氏新平知女志廢多留與志絕多毛繼岐孝平本志氏政平為志儉平專爾志物平愛美給布故爾仁恩乃光天下爾被利至奴是遠仰岐彼遠仰爾代代爾絕奴尊岐御名平奉天地乃共長日月乃共遠久稱白佐李奏麻爾御謚平奉給布臣等毛共爾稱白佐久恐美恐母誅白臣某

卿誄

畏哉讓國而御坐志天皇平恐美母誅白臣某畏哉日本根子天皇者聰明仁愛爾御坐志然毛諱讓乃心深久下遠憐美太情厚志萬乃政恐岐波謬岐百世乃則止誰加不奉仰嗚呼哀哉姑射雲暗氏龍駕何乃口加還給止李恐美恐母誅白臣某

侍臣誄

畏哉讓國而御坐志天皇平恐美母誅白臣某畏哉日本根子天皇者仁愛乃御心深計禮仕奉留人令毛厚恩平酬且奉止李恐美恐母誅白臣某

〔輔世卿記〕天保十二年後正月廿七日戊午御謚號宣下當日也各丑半刻早參兩局出納以下諸司如交名散狀交名等如左御据關白政藤原御劍言成朝臣御掃鞋光政御笏資宗御手水陪膳愛長朝臣益供恭光源常德

陣儀

先上卿著仗座

次參議同候橫敷 辨以下政官在床子座加例

次奉行職事來仰仰詞尋誄并臨時奉幣宣命之事關書之事

次上卿移著端座 令官人數膝突

拱天下乎治賜止古三十九年無事久無故久上下倍和睦久公民茂愈富足止半畏食毛氏宮殿毛乎古
乃法乃隨爾營多廢多祭禮乎與志賜布又諸乃事毛乎古爾復志賜止古多介禮毛百官毛皆慶仰岐毛公
民毛厚慈乎蒙戴氏仕奉奴讓國賜志與國家愈平爾臣庶愈忠心乎懷天仕奉天此食國乃猶毛能
治奴事波偏爾恤賜比於賜布故奈利仰岐畏美賜比天地止共爾長久孝道乎盡志仕奉止念行志世
爾近來御藥乃事有氏驚岐聞食氏朝止奈夕止奈神祇爾祈利奉利賜加志少久愈賜比古來爾稀奈
聖算乎重賜比志一多比以氏喜爾一波多比以氏懼知給爾早毛朝覲乃禮乎行給止李思保之毛大坐
坐間爾不慮毛此孝子乎捨給比姑射乃霞爾登利賜止開食氏驚岐惜爾痛爾酸爾賜比大御泣哭
之大坐利曾毛曾毛御名乃事者久俱絕奴禮孝波父嚴爾須爾大波留莫止奈又大行阿禮大名
乎受止奈開食須御謚乎不奉妻山利與高久仰奉留恩德乎伊何爾可須倍所念志又大臣毛進奏須
隨爾故是以氏吉日良辰乎擇定氏御謚乎光格天皇止稱白志奉利恒毛爾之無岐御幣乎令捧持氏
奉出利正二位行權大納言兼左近衛大將春宮大夫藤原朝臣輔照正四位下行右近衛權中將藤
原朝臣實愛等乎差使氏誅人乎率志忍美忍母誅奏志又此山爾御坐須掛長岐代々乃御陵爾正
三位行右大辨兼勘解由長官菅原朝臣胤保等天志御幣乎令捧持氏奉出賜布今與後天下乃政波大臣乃
侍從兼春宮權大進藤原朝臣胤保等天志御幣乎令捧持氏奉出賜布今與後天下乃政波大臣乃
正岐直岐心以相穴奈相扶奉麻爾治賜比長秋宮爾波欣于內親王光格后愈孝心乎盡天息須真仕奉利皇女
內親王于一人乃令妹奈禮猶毛愛給止者李所念行須天之日嗣止定賜比儲賜侍皇太子者明日
需月爾無事久成長勢賜波李古夜守日守爾護幸倍賜止倍此狀乎平久安久聞食止恐美恐美奏賜
止倍奏

天保十二年閏正月二十七日

大臣誄

同參向未刻許策命使左大將輔參向朝馬、前驅六人、連騎右兵衛佐公格次官左中將實愛朝臣誅人右大辨馳右少將通熙朝臣侍從胤保各使、各騎、各等參向權中納言傳一會頭左中辨光政朝臣和上予東久世三位勸修寺侍從寺門等御陵北方假屋座爲詰候先內暨內舍人等昇黑漆案立山陵前次置御幣與夾、繼、執、御幣次置雜給幣次左大將被著陵前座次次官實愛朝臣著座大將後方次其方少退誅人右大辨通熙朝臣胤保等著座次左大將以下兩段再拜四拜次大將被讀宣命了立了亦兩段再拜四拜也次目實愛朝臣實愛朝臣參進被渡宣命實愛爲內暨內舍人於陵前令燒宣命御幣御幣者其此間誅人申誄詞事了左大將以下退出次代々御陵有御幣自明正帝至後桃園帝九帝使右大辨勤仕兩上卿右大臣於宜陽殿西廂有御拜已上有後花園帝田院等胤保勤仕各事了使々退出予此後退出今日障續左

詔書

詔、諡者德之表行之迹周家遺訓我邦舊典也仰以太上天皇叙哲溫恭以御萬民清肅嚴默以臨四海不治而人自化無爲而事寔成履唐堯之典星辰軌道行虞舜之政風雨順時上下平章成歌望雲之虞華夷協和俱承就日之輝於是蔑物不得其所靡入弗蒙其恩蕩々仁化溢於八荒巍々德光格於四表宣上大號以旌盛德雖禮文之久闕奈孝思之無已爰上尊號恭稱光格天皇庶幾傳大名於萬代與乾坤以長施揚茂實於千秋與日月而久照普告天下俾知朕意主者施行

天保十二年閏正月廿七日

宣命

天皇掛畏岐後月輪山陵爾恐恐奏賜借奏久明久明久淨岐御意以底大八洲國所知志與端

中懸四ツ折同紙包、

今度太上皇大行御謚號之事、旨等誠仰願所候、上皇御仁愛御洪德無子論物候者、不拘久々廢絶之儀、速被任叙慮、可被奉御謚號哉、宜在聖斷矣、

實久上

十二年正月廿八日甲寅、已終刻參舊院、午終刻參内、可參朝自殿下、
（應司政通示給）謁殿下之處、今度被奉御謚號之事、關東被仰遣之處、可爲叙慮之通被申上、川越侍從代所司書取寫、爲心得見給、續左、

故院御在位、古來稀成御年數ニ而、踐祚以後、多分被爲復舊儀、公事御再興、茂不少、都而御仁愛深、衆庶一同奉蒙恩澤候儀共、全偏ニ舊典ニ慕被思召之段、於主上、茂今更御厚感被思召候ニ付、如舊儀御謚號被爲進度被思召候、併近例者、御追號ニ而、御謚號之御沙汰者、不被爲在御事ニ候得共、故院御高德被及萬代候儀、御追孝之思召を被爲盡被思召候御内慮之趣、關東、江宜申入旨被仰聞、則相達及言上候處、御謚號之儀、數年中絶ニ者候得共、故院御高德被及萬代度との叙慮之趣も有之、且者兼々御質素之叙慮深ク、修飾之儀者不被爲好御儀等者、於關東、茂被聞召及候御事、茂被爲在候間、此度者格別之御譯柄を以、御謚號之儀御内慮之通たるべき旨、可被仰出、右之趣御兩卿、江御傳可申旨、年寄共より申越候事、

正月

故院御謚號之儀、御内慮之通可被仰出候得共、後年御追號之儀、與不相混候儀有之度候間、右之趣者御記錄、江茂御書載有之候儀、關白殿并御兩卿被御心得置候様可及御示談旨、年寄共より申越候事、

正月

後正月廿七日壬午、今日尊誅謚策命使、泉涌寺、江參向也、仍已刻許予泉涌寺參向、茂東久世三位

出家の君も證をたてまつる。天皇とのみこそ申すめれ、中古の先賢の義なれども、こゝろを得ぬ事に侍るなり。

○按ズルニ、證ヲ奉ラザルコトハ、宇多天皇ニ起ルニアラズ、聖武、孝謙、稱徳等ノ御名モ、證ニアラズシテ尊號ナリ。

〔續日本後紀仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇○繼崩于嵯峨院、春秋五十七、遺詔曰○中無拘俗事、略證談中略等事。

〔李部王記醍醐寺雜〕延長八年九月廿九日、丑時院○繼御病大漸○中左大臣○藤原忠平進御所○中還陣乃命以不可上證號。

〔實久卿記〕天保十一年十二月三日己未、已終刻參舊院○中自內裏以按察前大納言御追號追可被進之旨、以一紙被仰下、續左。

先例可被進御追號之處、依被爲有叙慮、追可被進候迄奉稱故院候事。

右以女房令沙汰、廿一日丁丑、深更新源大納言被來、今度太上天皇大行可被奉御證哉、久々廢絶、依之大臣以下參議以上現任公卿、以一紙被尋下之旨被仰傳了、續左。

太上天皇如中古以來、雖可被奉御追號、御登壇以來、被興復故典舊儀公事再興不少、御在位卅有餘年、古代茂稀ニ加之被貴質素、不被好修飾、專御仁愛之聖慮、遂及衆庶、一同安懷之事、今上○仁深御威悅、依之被奉御證號、至萬代被竭御孝道度叙慮候、雖然小松帝○光以後壽永帝之外、不被奉。

御證號、今度被奉御證號、可有如何哉、被尋所存候事。

別紙之通、被尋御證號之事、久々廢絶之儀候、於有御所意者、必不被殘心中、可有言上候事。

右勅答、明廿二日中可言上被示、予謹奉了、尤以一封可附議奏卿云々、廿二日戊寅、今日以一封御證號勅答獻之了、續左、以使付議奏左兵衛督了。

聖皇后奏聞公家諸寺聽衆相共集會始行法花會

〔東大寺要錄〕東大寺櫻會緣起亦名法花會

敬白○中略以去天平十八年丙戌三月奉爲挂畏大雄大聖天皇孝謙皇帝仁聖太后莊嚴堂閼羅列

幡蓋○下略

〔皇年代略記〕光武天皇元年十二月二十三日崩諡曰光仁

〔玉海〕安元三年○治承元年七月廿九日丙寅後開今日被行贈官位○藤原賴長並院號○崇德等事○中略宣止讚

岐院號爲崇德院○大外記清原賴業奉之余案之崇德院號如何我朝太上天皇贈號未聞若可改讚岐院者只可

稱土御門土○土遜院歟崇德字未甘心通典文云々永範撰申上卿隆季卿云々

〔玉海〕元曆二年○文治元年七月三日甲申先帝○安徳御事示送頭辨之許其狀曰○中略禮紙追申

崇道天皇○祖武烈太子早良已下之例或爲太子或爲親王仍贈帝王之號其理可然不似今度之儀院號條又

不叶物議歟仍只以諡號可爲詮歟如此間事委可有歟

〔玉海〕文治三年四月廿三日甲午被下先朝○安徳諡號勅○延暦例也

〔百練抄十四條〕延應元年五月廿九日戊戌侍從中納言爲家參著召大外記師兼仰云以隱岐院○後鳥羽可

奉號顯德院者依治承崇德院例無勅書只外記承存許也件諡號字式部大輔爲長卿勸申

○按ズルニ後仁治三年ニ至リテ顯德院ヲ改メテ更ニ後鳥羽院ト改稱セラレタリ下文加後

字襲前號ノ條參看スベシ

〔百練抄十六條〕建長元年七月廿日己丑被行佐渡院追號事○顯德院

〔神皇正統記冷泉〕この御門より天皇の號を申さずまた字多よりのち諡をたてまつらず遺詔ありて國忌山陵をおかれざることは君父のかしこき道なれど尊號をといめらるゝことは臣子の義にあらず神武以來の御號もみな後代のさだめなり持統元明よりこのかた遜位あるひは

皇の御時、この天皇に特に始て、漢様の御謚を奉られたるにぞあるべき。○中猶其證とすべき

事は、伊福部臣德足比賣の墓誌に安永三年、因幡國法美郡、府藤原大宮御宇、大行天皇、大行の字、右の方へ

く書たり、御世、慶雲四年歲次丁未春二月二十五日、從七位下、被賜仕奉、和銅元年歲次戊申秋

七月一日卒云々、故謹錄、和銅三年十一月十三日己未と記せる、大行天皇は文武天皇の御事

なるを、まか大行としも稱せるは、漢國にて王の死て謚せぬ間の稱なるを、其頃まねばせ給へ

るにて、○中其は此天皇慶雲四年六月辛巳日十五に崩給ひたるに、始て漢様の御謚を奉らるべ

き御定ありて、諒闇はて、後奉らるゝまでは、大行天皇と稱し奉るべく御おきてありけるに

よれるものなるべし、故德足比賣の卒れる和銅元年七月は、元明天皇いまだ諒闇にましく、

て、いまだ其御謚奉られざりつる間なりければ、當時の御稱をもてまか記せるものなるべし、

萬葉集卷一のに、大行天皇幸于難波宮時歌、また大行天皇幸于吉野宮時歌と書る、既に岡部翁眞

淵の考おかれつることく、文武天皇の御事なるを、これもかの御謚奉られざるはどに、記おけ

るまゝの文なるを、其まゝに書集めたるものなるべし、おもひ合すべし、

漢風謚

〔續日本紀二十〕天平寶字二年八月戊申、勅曰、子尊其考禮家、所稱策書鴻名古人所貴、昔者先帝聖

武敬發法賢奉造、廬舍那金銅大像、若有朕時不得造了、願於來世改身猶作、既而銘銅已成、塗金不足、

天感至心之信、終出勝寶之金、我國家於是初有奇珍、開闢已來未聞若斯盛德者也、加以賊臣懷惡、潛

結逆徒謀危社稷、良日久矣、而畏威武欽仰仁風、不敢競鋒、咸自馴服、可謂聖武之德比古有餘也、其不

奉揚洪業、何以示於後世、敬依舊典、追上尊號、策稱勝寶感神聖武皇帝、謚稱天璽國押開豐櫻彥尊、欲

使傳休名於萬代、與乾坤而長施、揚茂實於千秋、其日月而久照、普告遐邇、通知朕意焉、

〔延喜式二十〕佐保山南陵、平城宮御宇勝寶感神聖武天皇略下

〔東大寺要錄〕天平十八年三月十六日、良辨僧正於羅索院、奉爲大雄大聖天皇、○聖孝謙皇帝、仁

文武四十二代者は淡海公所製事已幽合也其後儀式依平日之德行證號或以後院御所證成追號有山陵之由緒有庭號之遺詔彼是非一者乎

〔古事記傳十〕凡て御代御代の漢様の證のこと書紀私記に師說神武等證名者淡海御船奉勅

撰也とあり、又ここに然るべし、持統より以來御代御代の天皇崩れる時、中略先續紀を考るに、
號を奉見えて、漢様のはすべて御事にす、然るに天平實字二年八月に、實字稱德孝靈天皇に、
どて同月に、聖德太子天皇に、神武天皇に、神武天皇に、神武天皇に、神武天皇に、神武天皇に、
云々、恒武天皇の皇統云々、恒武天皇の皇統云々、恒武天皇の皇統云々、恒武天皇の皇統云々、
注せり、續紀の例、凡て古高祖天皇の漢様の證を、漢様の證を、漢様の證を、漢様の證を、
は出家仁明天皇まで、四で、御代々々古高祖天皇の漢様の證を、漢様の證を、漢様の證を、
天皇の御代に至りて、元より、御代々々古高祖天皇の漢様の證を、漢様の證を、漢様の證を、
漢様の證は、第一巻に、天武天皇の漢様の證を、漢様の證を、漢様の證を、漢様の證を、
見る處を考るに、漢様の證を見たるに、書此文を載たるに、撰ば、其某宮御宇天皇或は、
寺親長卿記などに、文武天皇の御世に、漢海公藤原不比等、に勅して、定めしむ、賜へる由ある海に、
公にも思ひまがへる、恒武の御世

〔比古婆衣五〕古事記傳漢様御證附考

延暦より前に、既に漢さまの御證を奉られし事は、淡海御船真人の、天平勝實三年十一月に撰
める由序せる、懷風藻に、文武天皇と題て、御詩を載たり、序文に作者六十四人具題、姓名並顯爵
里冠篇首と記したれば、此御證は素より、然題記したりしなり、さて其天平勝實三年は、孝謙天
皇の御世にて、御船真人は廿五の齡にて、いまだ姓を賜はらざりし時に當れり、故按に文武天
皇は、天縱寬仁、愷不形色博涉經史と續日本紀に載られ、○申さるにあはせて次の御代元明天

佛、更不奉諡、所司宜知之、

〔續日本紀^十〕^八字稱德孝謙皇帝出家歸佛、更不奉諡、因取寶字二年、百官所上尊號稱之、

○按ズルニ、大鏡一ニ太政大臣といへど、出家しつるはいみなしトアリ、いみなハ即チ諡號

ノ義、文忠公^{比等}類是ナリ、

漢風諡法

〔令義解^七〕^公天皇諡稱、蓋者累生時之行迹、爲死後之稱號、即經緯天地、爲文、撥亂反正、爲武之類也、

〔御中陰御佛凡人相違事^{聖代機要}〕^{日記所收}一依或人間太閤所答條々文明三、四、十

一諡號追號此かはりめは、諡をばおくりなどよみて、生時の行跡によりて没後の號として、仁徳ましまし候へば仁徳天皇と申し、武徳おはしまし候へば桓武天皇と申候、くはしく合ひたる事は候はねども、本説此分にて候、是は徳によりて可申候、所名にはよらず候、追號と申すは多分御在所の號、又山陵の號などを用られ候、嵯峨、淳和、陽成などは、御在所の名を御追號に用られ、宇多、醍醐、村上などは、みまゝの號にて、光嚴、光明、崇光などは、御庵室の稱にて、道勅によりて被用候、これも御在所に准じ、すべておぼしめし候、崇徳、顯徳、^{後鳥羽}順徳等三代は、遠嶋の御事にて候程に、院號を撰られておくり申され候、近頃稱光院などは此例たるべく候かにて候、然としたる御在所は候はねども、院號に用られ候、安徳天皇などは諡號の准たるべく候、諡號は其人の徳によりたる號にて候程に、後の字を加へて用られたる事は今に其例なく候、又出家の後は諡號なきにて候、是によりて寛平法皇^〇字より後は、天子の諡號たえたる事にて候、右兼良公^〇一言諡云云、

始撰定漢風諡

〔釋日本紀^九〕^{述義}私記曰、師說、神武等諡名者、淡海御船奉勅撰也、

〔親長卿別記〕文明三年二月十三日、抑今度舊院^〇後御追號事、^略中院大納言^〇源

舊院御追號可被改哉、事重預下問、彌迷勅答者也、凡諡法事、起於周道、遠及日域者、歟、神武已來、至

テ、倭根子天之眞宗豐祖父天皇ト云ヘリ、此後元明天皇ニ日本根子天津御代豐國成姫天皇ト稱シ、元正天皇ニ、日本根子高瑞淨足姫天皇ト稱シ奉ルガ如キ、並ニ史ニ明文ノ徴トスルニ足ルモノ無シトイヘドモ、大日本史ニ、謚號トスルモノ是ナルガ如シ、

〔續日本紀^{二十}〕天^仁平寶字二年八月戊申、勅曰、昔者先帝^{中略}、開關已來、未聞若斯盛德者也、^{中略}敬依舊典、^{中略}謚稱天璽國押開豐櫻彥尊、

〔續日本紀^{三十六}〕天應元年十二月丁未、太上天皇^仁光崩、癸丑^{中略}、誅人奉誅、上尊謚曰天宗高紹天皇、^{上ニ日本根子ノ四字アリ、}

〔日本後紀^{十三}〕大同元年三月辛巳、天皇崩於正寢、四月甲午朔、中納言正三位藤原雄友^{中略}、奉誅曰、^{中略}畏哉日本根子天皇乃天地乃其長久、日月乃其遠久、所白將去御謚、稱白久、日本根子皇統^{イハサス}、^{中略}止、稱白久、恐^{中略}母誅曰、臣某、

〔類聚國史^{三十五}〕天長元年七月甲寅、平城天皇崩、丙辰奉誅曰、^{中略}畏哉日本根子天皇乃天地乃其長久、日月乃其遠久、所白將去御謚、稱白久、日本根子天推國高彥尊^{イハサス}、^{中略}止、稱白久、恐^{中略}母誅曰、臣某、

〔續日本後紀^九〕承和七年五月癸未、後太上天皇^和崩于淳和院、甲申、^{中略}畏哉日本根子天皇乃天地止、其長久、月日止、其遠久、所白將往御謚、稱白久、日本根子天高讓^{イハサス}、^{中略}止、稱白久、恐^{中略}母誅曰、

○按ズルニ、凡國風謚ニシテ史ニ載セラレタルモノ、實ニ前掲七天皇ニ過ギズ、此後仁明天皇ヲ日本根子豐聰慈皇^{要記等ニ見ユ、}服網延^一、一代ト稱シ奉ルガ如キ、是亦元明元正二天皇ト同ジク國風謚ナルベシ、然レドモ本史ニ闕逸セルヲ以テ、今本項ニ掲ゲズ、

〔續日本紀^{十九}〕天平勝寶八歲五月乙卯、是日太上天皇^武崩於寢殿、壬申、勅曰、太上天皇出家歸

出家不上謚

此他國名ヲ以テ一ノ稱號トスルモノアリ、淡路廢帝^仁、讚岐院^德、隱岐院^羽、土佐院^門、阿波院^上、佐渡院^德、如キ是ナリ、

又當時ノ年號ヲ以テ稱スルアリ、仁和帝^光、寛平法皇^宇、延喜帝^仁、天曆帝^付、如キ是ナリ、

別ニ一種胎中天皇^神、聖帝^仁、有德天皇^雄、大惡天皇^上、至德天皇^皇、太后天皇^統、太皇太后天皇^上、

法師天皇^聖、帥天子^德、安田村院^元、如キアレドモ、今ハ省キテ舉ゲズ、

古代ニ在テ一種ノ稱號ト云フベキモノアリ、垂仁天皇ヲ卷向玉城宮御宇天皇ト稱シ奉ル

如キ、即チ元明天皇ノ遺詔ニ、某國某郡朝廷取宇天皇ト稱スベシトアルモノ是ナリ、今纔ニ

其例證一二ヲ收メテ、他ハ闕略ニ從フ、顧フニ是レ所謂御在所號ノ權輿ナランカ、

又太祖、中宗ハ廟號ナリ、大行天皇ハ未ダ、諡ヲ奉ラザル間ノ稱ナリ、其ニ此ニ附載ス、

尊號ハ、其帝德ヲ贊嘆褒美シテ稱スル所ニシテ、是亦國風、漢風ノ二種アリ、其國風尊號ハ、神

武天皇ヲ神日本磐余彥尊、又始馭天下之天皇ト稱シ、崇神天皇ヲ御肇國天皇ト稱シ奉ル如

キ是ナリ、此他懿德、孝安、孝靈、孝元天皇ノ御名ニ、大日本ト加稱シ、開化清寧天皇ノ御名ニ、稚

日本ト加稱シ、安閑天皇ヲ武小廣國排盾尊ト稱シ、推古天皇ヲ豐御食炊屋姫天皇ト稱シ奉

ルガ如キ、凡ソ此類皆登極後ノ尊號ナルベシ、故ニ今之ヲ此ニ收ム、其漢風尊號ハ、孝謙天皇

ヲ寶字稱德孝謙皇帝ト稱シ奉レル是ナリ、世之レヲ分稱シテ、其前位ニ孝謙ト稱シ、其再祚

ニ稱德ト稱シ奉レリ、

國風證

〔續日本紀三〕大寶三年十二月癸酉、諸王諸臣奉詠、太上天皇^〇、持證曰、大倭根子天之廣野日女尊

原日本書紀ニハ、高天原廣野姫天皇ニ作ル、

〔續日本紀三〕慶雲四年六月辛巳、天皇^〇、崩、十一月丙午、誅人奉詠、證曰、倭根子豐祖父天皇

○按ズルニ、本書文武天皇紀ニハ、天之眞宗豐祖父天皇ニ作ル、故ニ大日本史ニハ、彼此併稱シ

後鳥羽天皇ニ水無瀬、仲恭天皇ニ九條廢帝又後廢帝トモ云ヒ、一、後深草天皇ニ常磐井、富小路、龜山天皇ニ禪林寺、萬里小路、後宇多天皇ニ大覺寺、伏見天皇ニ持明院、花園天皇ニ萩原、後村上天皇ニ住吉、後龜山天皇ニ小倉等ノ別號アレドモ、今皆闕略ニ從ヒ、一二著聞ナルモノノミヲ掲グ、

陵地號アリ、醍醐、村上二天皇ノ如キ是ナリ、世或ハ宇多天皇ヲ以テ陵地號トスレドモ、今斷ジテ之レヲ御在所號ト爲ス、又陵地號ヲ以テ一ノ稱號トスルモノアリ、高野孝仁、後田原孝仁、施基孝仁、王田孝仁、柏原孝仁、深草孝仁、田邑孝仁、水尾孝仁、小松孝仁、後山科孝仁、如キ是ナリ、此他、欽明天皇ニ原、天武天皇ニ和、保、醍醐天皇ニ小野ト稱シ奉ル如キ、世ニ著聞ナラザルモノハ、今皆闕略セリ、

前帝號院號ニ後字ヲ加ヘテ稱號トスルモノアリ、後一條、後朱雀、後冷泉、後三條、後白河、後鳥羽、後堀河、後嵯峨、後深草、後宇多、後伏見、後二條、後醍醐、後村上、後龜山、後光嚴北、後圓融上、後小松、後花園、後土御門、後柏原、後奈良、後陽成、後水尾、後光明、後西院、後櫻町、後桃園、天皇ノ如キ是ナリ、中ニ就キ、前帝ノ一稱號ニ、後字ヲ加ヘテ追號トスルモノ、後深草孝仁、後小松孝仁、ハ、光孝、後柏原孝仁、武ノ一號、後奈良孝仁、城ノ一號、後水尾孝仁、水尾ノ一號、後西院孝仁、西院ノ一號、六天皇アリ、追號ノ遺詔ニ出ヅルモノアリ、白河、後深草、龜山、後宇多、後伏見、花園、後嵯峨、光嚴北、光明上、崇光上、後圓融上、後小松、後水尾、是ナリ、中ニ就キ、花園、崇光北ノ二天皇ヲ除キ、他ノ十一天皇號ノ事ハ已ニ前ニ述ベタリ、

前代天皇ノ漢證及ビ尊號ヲ、彼此一字ヅ、併用シテ追號トスルモノアリ、稱光孝仁、稱德孝仁、明正孝仁、元正孝仁、元靈孝仁ノ如キ是ナリ、追號ノ意義未ダ詳ナラザルモノアリ、土御門、東山、中御門、桃園ノ四天皇是ナリ、

峻推古、舒明、皇極、齊明、皇極ノ重祚、孝德、天智、弘文、天武、持統、文武、元明、元正、聖武、淳仁、光仁、桓武、仁明、
 文德、光孝、崇德、安德、顯德、後鳥羽ノ初號、順德、仲恭、光格、仁孝、孝明天皇、仁孝ニシテ而シテ舊史漢風諡奉
 上ノ事ヲ明記セルモノ、聖武、光仁、崇德、安德、顯德、順德ノ六天皇ニ過ザルナリ、按ズルニ、聖武
 ハ、淳仁天皇ノ天平寶字二年ニ上ル所ノ尊號ニシテ、勝寶感神聖武皇帝ノ略稱ナリ、天平寶字三年
 六月紀ニ、聖武皇帝ト見ユ、然レドモ延喜ノ諸
 陵式ニハ、綏正シク勝寶感神聖武天皇トアリ、其崇德、順德、及ビ後鳥羽天皇ノ初號、顯德ノ如
 キハ、當昔所謂院號即在所號ノ慣例ニ准ジ、或ハ謂テ院號トモ云ヘリ、一條兼良ノ說ニ、此三天
 皇ハ遠鳥ニテ崩御アリシヲ以テ、院號ヲ撰デ贈ラレタリトアリ、蓋シ尋常漢風諡ト一例ニ
 視ルベカラザルヲ云フナルベシ、又弘文、淳仁、仲恭三天皇ノ諡號ハ明治三年始テ追上セラ
 レシ所ナリ、抑漢諡ノ制、順德天皇以來永ク廢典トナリタリシニ、近世光格天皇崩御ノ時、更
 ニ復興セラレタリ、又漢諡ニ一帝二諡ノ例アリ、皇極天皇ノ再祚ニ齊明ト稱シ奉ル是ナリ、
 此後孝謙天皇ノ再祚ニ稱德ノ稱アレドモ、是レ生前ノ一尊號ヲ前後ニ分稱セシモノニシ
 テ、一帝二諡ノ例ニハアラザルナリ、
 御在所號アリ、世ニ之レヲ院號ト云フ、清和天皇位ヲ遯レテ清和院ニ坐セシヲ以テ、清和天
 皇ト稱シ奉ル類是ナリ、又追號アリ、一條院天皇曾テ一條院ニ坐セシヲ以テ、崩後一條院ト
 稱シ奉ル類是ナリ、凡御在所號ニハ皇居號ニ因レルモノアリ、一條院ノ如キ是ナリ、仙院號
 ニ因レルモノアリ、清和ノ如キ是ナリ、寺院號ニ因レルモノアリ、花山、圓融ノ如キ是ナリ、今
 其生前崩後ニ拘ハラズ、御在所號ヲ以テ稱シ奉ル所ノ天皇ヲ列舉スレバ、平城嵯峨、淳和、清
 和、陽成、朱雀、冷泉、圓融、花山、一條、白河、堀河、鳥羽、近衛、二條、六條、高倉、四條、龜山、伏見、光嚴、北
 光明、同上、正親町、櫻町ノ如キ是ナリ、又別ニ仙院ヲ以テ一ノ稱號トスルモノアリ、奈良、城平西院、
 淳亭子院、多ノ如キ是ナリ、此他嵯峨天皇ニ冷泉、宇多天皇ニ朱雀、六條、白河天皇ニ六條、鳥羽、

古事類苑

帝王部十六

諡號

諡號ニ二種アリ、其一ヲ國風諡ト爲ス、文武天皇ノ朝ニ、持統太上天皇ニ諡シテ大倭根子天之廣野日女尊ト稱シ奉ル是ナリ、此外文武、聖武、光仁、桓武、平城、淳和ノ六天皇、並ニ國風諡アリ、孝謙天皇天平勝寶八載、聖武太上天皇崩ジ給フ、勅シテ曰ク、太上天皇出家佛ニ歸ス、更ニ諡ヲ奉ラズト、又孝謙天皇紀ノ首ニモ、寶字稱德孝謙皇帝ノ生前尊號ヲ標シテ、出家佛ニ歸ス、更ニ諡ヲ奉ラズ、因テ寶字二年百官上ル所ノ尊號ヲ取テ之レコ、稱ストアリ、國風諡ヲ奉上セザルヲ云フナリ、然レドモ聖武天皇ハ、寶字二年更ニ諡シテ天璽國押開豐櫻彥尊ト稱シ奉レリ、

其二ヲ漢風諡ト爲ス、其制大寶令ニ始テ見エタリ、公式令ニ天皇諡ノ目アリテ、義解ニ、諡ハ生時ノ行迹ヲ累テ死後ノ稱ト爲ス、即チ天地ヲ經緯スルヲ文ト爲シ、亂ヲ撥キ正ニ反スヲ武ト爲ス、類ヲ云フトアリ、是全ク漢土ノ制ニ倣ヘル故ニ、今日シテ漢風諡ト云フ、漢風ノ二寶字三年六月、神武天皇以下、漢字音ヲ以テ稱スル所ノモノ是ナリ、神武等ノ諡號ハ、淡海御紀ニ見エタリ、神武天皇以下、漢字音ヲ以テ稱スル所ノモノ是ナリ、神武等ノ諡號ハ、淡海御船勅ヲ奉ジテ撰ブト云フ、或ハ淡海公藤原不比等撰ブ所トモ云フ、諸說詳ニ本文ニ見エタリ、凡漢風諡號ヲ以テ稱スルモノ、神武、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化、崇神、垂仁、景行、成務、仲哀、應神、仁德、履中、反正、允恭、安康、雄略、清寧、顯宗、仁賢、武烈、繼體、安閑、宣化、欽明、敏達、用明、崇

追號出遺詔

九一

併用二帝諡爲號

九二

國名爲一號

九三

所號不詳

九四

古代追號

九五

大行

九六

太祖中宗

九七

國風尊號

九八

漢風尊號

一〇二

古事類苑

帝王部十六

謚號 算號併入

國風謚

出家不上謚

漢風謚法

始撰定漢風謚

漢風謚

漢風謚中絕

漢風謚再興

一帝二謚

御在所爲號

御在所爲一號

陵地爲號

陵地爲一號

加後字襲前號

加後字襲前帝一號

六〇

六一

六二

同

六四

六五

六六

七七

同

八二

八四

同

八七

九〇

受戒

院被定了、予奉仰、内々參大宮、謁女房、門號被定之事申入了、今日申刻女院御薙髮也、

〔東大寺要錄真一〕菩薩戒始行

惠運僧都記錄文

貞觀三年四月廿五日、皇太后○仁明后并北御息所○文德女御、剃頭出家、貧道爲出家和上、長祿師

爲教授阿闍梨也、五月廿五日、啓奉令受比丘尼大戒、太政大臣○藤原爲崇重、延曆寺勸進皇太后令

受大乘戒○中、殿下允許、請廿僧尼傳戒師於五條宮、以受比丘尼大戒○中、皇太后法諱本覺北御息

所初法諱法忍、受戒之日、改爲空性云々、

〔三代實錄清和〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、太皇太后○仁明后崩○中、天安二年八月乙卯、文德天皇

崩、后哀慟柴毀、後遂落彩爲尼、請東大寺戒壇諸僧於五條宮、受大乘戒、屈延曆寺座主圓仁、受苦薩戒、

〔三代實錄陽成〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后○淳和后崩○中、當貞觀二年五月、於淳和

院設大齋會、延諸寺名僧講法華經、裝具囑施、傾盡財寶、便留延曆寺座主圓仁、大阿闍梨、受苦薩戒、奉

太后法名稱良莊、

〔紫式部日記〕例よりもなやましき御けしきおはしませば、○一條后藤原影子御加持どもまゐる、○中御い

たゞきの御ぐしおろし奉り、御いひ事うけさせ奉り給ふ、○中平らかにさせ給て、○後一後

事をだしきはせ、さばかり廣さもや、南の庇高欄のほどまで立こみたる僧も俗も、今一よりとよ

みてぬかをつく、

〔三代實錄清和〕貞觀六年正月十四日辛丑、延曆寺座主傳燈大法師位圓仁辛○中、貞觀三年六月、太

皇太后藤原氏○仁明后、請僧綱名僧於五條宮、四箇日間講法華經、太后受苦薩大戒、三昧耶戒及檀灌

頂行大乘布薩、

圓滿院宮師戒

僧正覺顯師明

圓滿院宮御弟子宮御刺手

御布施

戒師

織物被物一重

綾被物一重

御衣一具練貫八御衣白單

絹一懸子

綿一懸子

唄師

被物一重

裏物一

〔女院小傳〕長樂門院忻子

後二條后略○中

德治三、閏八、二爲尼眞實

〔續史愚抄桃〕

寛延三年六月廿六日丁酉、皇太后宮舍子、廿五歲、故院、櫻町、妃、二條故前關白吉忠女、

有院號定略○中

爲青綺

門院又年官爵如元、本封外加賜伍百戶者、奉行藏人頭左中將隆義朝臣、此日即新說○女院御落飾、

也藤 法諱○

〔續史愚抄後桃〕

明和八年七月九日戊申、皇太后宮富子、廿九歲、國母、桃圖院、一條故前關白兼香女、

有院號定略○中

門院又年官爵如元、本封外加賜伍百戶者、奉行藏人頭台中將隆建朝臣、此日新女院御落飾也、法

諱○

〔忠言卿記〕天明三年十月十二日庚午、此日大宮○後桃圖后

院號定略○中

太后宮院號、被稱盛化門院

之旨、日野黃門被示了略○中

後日聞、此日則有御薙髮、以一品深仁親王爲戒師云々、仁和寺宮也、

〔言成卿記〕天保十二年後正月廿二日、今日、大宮○光格后欣

院號定陣儀也略○中

傳聞今曉戌刻比、有御薙髮之儀云云略○中

〔新清和院肝煎記〕天保十二年後正月廿二日、仁門院家眞光

院號定、被參、今曉御薙髮御

道場被設之事、則御與寄切戸被進、西階昇御與寄南十五帖敷、御道場被攝、大師御像被懸、其後

佛具被飾、酉刻仁和寺宮御參略○中

今曉御薙髮、付戒師參上之旨、并御伺御機嫌、以表使申入略○中

戌刻御薙髮御吉例也、御式被始、戒師宮御受戒之御作法相濟、戌半刻過、戒師宮御退入、

〔實久卿記〕弘化四年十月十三日己未、今日大宮○仁孝后門號宣下也、上卿內大臣家參陣、新潮平門

からぬ世なり、禮成門院とかや申なり、

〔増鏡十七草の花〕禮成門院も又中宮と聞えなす、六日元弘三年六月の夜、やがて内裏へ入らせたまふ、いにし年御くしおろしにき、御惱み猶おこたらねば、いつしか五壇の御修法始めらる、

〔女院小傳〕後京極院藤子元應元、八七爲中宮、正慶元元弘二年五、廿院藤子藏元弘三年元弘二、八三十爲尼、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁三年三月廿五日壬午、皇后宮三條后藤子落飾爲尼、戒師僧正濟信、乳母年來宮仕女多以出家、

〔殿曆〕嘉承二年九月廿一日、今日中宮后藤子尼ニ成給御髮成師奉剃之、後於北師、寛慶僧都與各參入著座、僧座高麗端疊二枚、法印座ニ敷茵、御佛不懸、不置梵王經、是當時太皇太后宮御出家例也、次第如常、但花机上火舎一口、大花瓶等置之、事了布施、各裝束一具、夜裝束也、裏布施法印三裏、僧都二裏中女房御匣殿同成尼出家云々

〔吉記〕元暦二年元治元年五月一日癸未、今日建禮門院有御遁世、戒師大原本成房云々、

〔源平盛衰記四十八〕女院吉田御住居同御出家事、

五月一日元治元年女院后藤子御髮オロサセ給フ、御戒師ニハ、長樂寺ノ阿澄坊上人印西ゾ被參ケル、

〔女院小傳〕建禮門院平維子高倉后略中元暦二三、今改五、一爲尼廿九、真如覺

〔女院小傳〕安喜門院藤有子後堀河后略中寛元四、九、廿五爲尼四十、真清淨

〔女院御出家僧侶公卿御布施等例〕大宮院藤原始子後嵯峨后藤原始子

文永九年二月廿三日御年四十五

僧侶

〔源氏物語^二〕心深しやなごめたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし、思ひ立程はいと心すめるやうにて、世にかへり見すべくも思へらず。^略中つかふ人ふるごたちなど、君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身をなごいふに、自らひたひ髪をかき探りて、あへなく心ばそければうちひをみぬかし。

〔河海抄^一〕ひたひ髪 垂尼事也

〔花鳥餘情^一〕昔の尼はたれ。尼といひて、額髪を喝食などのやうに挟むなり、さるによりてひたひ髪をさぐるとはいふなり。

〔百練抄^二〕長寛元年十二月廿六日、此日皇嘉門院^{○崇徳}御出家、年來令垂給、今日被剃頭、

〔女院小傳〕皇嘉門院^{藤聖子}崇徳后^略中保元元十、十一垂尼^{藤原}長寛元、十二、廿六爲尼、^{四十}

出家後再入内

〔榮花物語^五〕長徳二年四月廿四日なりけり、帥殿^{伊周}はつくしのかた成ければ、ひつと

さるのかたにおはします、中納言殿^{伊周}はいづものかたなれば、たんばのかたのみちよりとて、いぬむぎまにおはする、御くるまひさいづるまゝに、みや^{伊周}は御はさみして御てづからあまに成給ぬとそうすれば、あはれ宮はたゞにもおはしをさやらんものを、かくものおもはせたてまつる事とおぼしつゝけて、涙こぼれさせ給へば、まのびさせ給。

〔日本紀略^十〕長徳二年五月一日庚子、今日皇后定子落飾爲尼。

〔百練抄^四〕長徳二年五月一日、今日中宮出家爲尼、中宮定子依帥^{伊周}事出家、六月廿二日入内。

人以不甘心。

〔増鏡^{十六}〕中宮^{藤原}は、其まゝに御ぐしもたぐる時もなく、沈みたまへる御有さ

まいとことばりに、遠き御別^幸は、天皇の哀しさにうちそへて、御むねのひまなくおぼしこがる、後の位もどやめられたまひて、院號の定めなご人の上のやうにはのかに聞しめす、うれし

自絹先々可賜之、今夜、諒
最末引之、又不可爲、准、
之次從僧等參進撤布施、次僧退下、公卿退下、次於同道場、被始行七今日御逆修公衛井爲行

○按ズルニ、後深草天皇ノ崩御ハ、正應六年ヨリ後ル、事十二年、嘉元二年七月十六日ニアリ、
〔女院小傳〕永福門院鐸子 伏見后略 中 正和五、六、廿三爲尼説如源、四十六、

○按ズルニ、伏見天皇ノ崩御ハ、正和五年ノ次年、即チ文保元年九月三日ニアリ、

〔女院小傳〕廣義門院藤子 後伏見后略 中 建武三、延元 二、廿五爲尼四十、

○按ズルニ、後伏見天皇ノ崩御ハ、同年四月六日ニアリ、

〔榮花物語二十〕衣七宮東門院影子上の御ありさまを見たてまつれば、紅梅の御を八ばかりたてまつりたるうへに、うきもんだてまつりて、えもいはすうつくしげにて、御ぐしはたけに一尺餘ばかりあまらせ給て、御ありさまさゝやかに、ふくらかに、うつくしうあいぎやうづきをかしげにおはしなす、たいいの國王一後條の御おやと聞えさすべきにもあらず、をかしげに女御など聞えさせんによげなる御有様なり、ことしは萬壽三年正月十九日、御歳三十九にぞならせ給ける、いみじうわかくめでたくおはしなすに、あまの御装束いみじうせさせ給へり、略中 いみじううつくしげにあまそぎたるちとどもの様にぞおはしなす、御ぐしわけさせ給へりし御有さまにもよろず見えさせ給、

〔賴世繼一〕月女院后影子は、略中 萬壽三年正月十九日に、御さまかへさせ給、御年三十九、御名は清

淨覺と申けり、略中 は、はじめは御ぐしそがせ給て、後にみなおろさせ給、

〔天鏡裏書〕上東門院彰子御事

萬壽三年正月十九日、出家、年三十九法名清淨覺、同日、院號、長曆三年五月七日、於法成寺剃除髮、

〔扶桑略記二十八〕長曆三年五月七日、上東門院后影子、令剃御髮、重受戒、大僧正明尊爲戒師、

所法皇同御坐御聽聞所南間召公衡公卿可召之由有仰仍廻公卿座方招爲行東仰其由畢爲行參進前相國御參後告申其由仍公卿著堂前座前相國衣東直公衡改著直吉田中納言東帶西女院中宮大夫東帶富小路中納言東帶滋野井中納言東帶別當東帶以上不以上七人兼被下御點也但非兼東帶被此外侍從宰相降堀川宰相左兵衛督以上東帶今日人々多等暫候公卿座邊歟此間雷鳴數聲小時戒和尚青蓮院無品法親王慈助法皇御速經實子參上給勅給不從僧侍參居箱香爐箱等入或置脇机敷草座於禮盤上退下法親王自披正面邊障子令參入令著茵上給勅給良覺大僧正法奉相從但不入正面廻後戶自妻戶參入著座次戒師起座著禮盤次塗香灑水等次女院御拜拜殿正不見其儀中先春日社次先公墳墓次准后當時令座此間事法皇令扶持申給歟次所役女房公泰局脂燭等御湯帷打懸御次奉除草髮此間御師唱不其儀先女房二人御准后指脂燭爲香儀冷泉局奉結分御髮之後奉洗之次戒師參廳中故令除之次剃手權僧正勝惠法自後戶方參入依例不其布不賜先奉剃左御髮次奉剃右御髮次剃除畢止付札左許次本役人參進撤難具等次著御法衣次女房供御手水次著御袈裟其儀仙院自令取御袈裟給自廳中被指出之尺許但今度不及其儀歟戒師進寄先是禮盤合著座下座給件座取之誦頌之後返上仙院令頂戴給又被返下如此三反畢著御之次奉授御法名冠等御中之其內被用還照雲云々次御授戒先三禮如來唄表白神分次戒體御受戒畢戒師令復本座給次預一人參上撤正面邊障子依爲布次施給施施布施本引之云々而今夜其雨太無便之間儲布施於殿階取之也公卿自下躬起座列立作合南實子先自御聽聞所東南面間公卿列立殿四作合南實子程取之也中宮權大夫賴房勅解山取之進前相國前相國取之經廣庇妻戶取出御衣蘇芳御單重青御衣著行中宮權大夫賴房勅解山取之進前相國前相國取之經廣庇入正面妻戶間令置御戒師前給出給了次絨物被物一重公衡取之被人列宜裏物一布吉田中納言取之絹二裏各五滋野井中納言別當取之絹二裏各五兩侍從宰相堀川宰相取之鈍色裝束一具之後物

明ル四月廿七日改元有テ、保元トゾ申ケル、此頃ヨリ法皇羽御不豫ノ事アリ、偏ニ去年ノ秋、近衛院先ダ、セ給ヒシ、御歎ノ積ニヤト世人申ケレドモ、業病受サセ給ヒケルナリ、日ニ随テ重ラセ給ヘバ、月ヲ追テ憑少ク見エサセオハシマセバ、同六月十三日、美福門院、鳥羽ノ成菩提院ノ御所ニテ御カザリオロサセ給、現世後生ヲ憑進ラセ給フ、近衛院モ先立給ヌ、又偕老同穴ノ御契淺カラザリシ法皇モ御惱重ラセ給フ、御歎ノ餘ニ思召立トゾ聞エシ、御戒ノ師ニハ、三瀬上人觀空ゾ被、參ケル、哀成シ事共也、

〔猪隈關白記〕建仁元年十月十八日乙未、或人云、一昨日、宜秋門院藤原任子出家云々、

〔女院小傳〕宜秋門院藤原任子後鳥羽后中建仁元、十七爲尼清淨智、

〔女院御出家年々〕宜秋門院後法性寺關白建仁元年十月廿廿七廿日御出家御年、

○按ズルニ、後鳥羽天皇ノ崩御ハ、建仁元年ヨリ後ルハ、コト三十九年、延應元年二月二十二日ニアリ、

〔女院小傳〕陰明門院藤原子土御門后中承久二、正、廿四爲尼清淨智、

〔女院御出家年々〕陰明門院中山入道太政大臣承久二年正月廿四日、御出家御年、

○按ズルニ、土御門天皇ノ崩御ハ、承久二年ヨリ後ルハ、コト十年、寛喜三年十月十一日ニアリ、

〔女院小傳〕東一條院藤原立子順德后中嘉祿二、八、七爲尼清淨觀、

○按ズルニ、順德天皇ノ崩御ハ、嘉祿二年ヨリ後ルハ、コト十八年、仁治三年九月十二日ニアリ、

〔竹林院左府記〕弘安六年八月十三日甲午、今日今出川院御年、

俊定院司奉行之但、每事當時、公卿殿上人以下、不及諸司儀、只於三身堂西園寺内、有御出家事中、右少辨

且奉仕御裝束略、中、亥刻、御戒師僧正道親、且女院御親中、參上略、○中、次仙院渡御座御座、○中、戒師起座、著半

疊所謂禮盤也、如中疊、塗香、灑水等、打磬二三禮、如來唄、啓白以下、如常、仙院御拜無起座、各向其方、氏神春日國主、故

悼亡而出家

〔三代實錄三十五〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩。○中 承和七年五月、淳和天皇崩、皇太后落髮爲尼、毀容骨立。

出家出於不得止

○按ズルニ、續日本後紀、九年十二月ニ作ル、本文ト二年ノ差アリ、附シテ參考ニ供ス、

〔岡屋關白記〕寛元四年四月廿日己卯、入夜參六條殿、鷹司院○後朝子河后、可有落飾事也、廿九、自宣陽

門院○後白河女親子、被勸申歟、有子細云々、松月上人夢想ニ、無御出家者、可爲重御惱之、由見之間、去正月

之比申之、又令密參院○後給被風聞時、有世聞、此條付總別宣陽門院被痛思食歟、此趣尤可然、取別

御心中ニハ、介恐憚太政大臣○藤原實氏、給事過千萬事、其故ハ爲天下權臣之上、當時一向被憑思食之

人也、御戒師良惠僧正○東寺長者、一唄師房圓法印○東寺長者、手ハ盛兼卿子息也、依非外人奉仕之、右大臣

兼平○藤原、已下公卿八九人許參候、依有所勞氣、早出歸近衛、

〔女院小傳〕鷹司院○藤原長子、後堀河后○中、寛元四、四、廿爲尼○廿九、蓮華作、

夫帝在世出家

〔日本紀略一〕延喜五年五月十五日、皇后○宇、藤原温子落飾○年三十四

○按ズルニ、宇多天皇ノ崩御ハ、延喜五年ヨリ後ル、コト二十七年、承平元年ニ在リ、

〔女院小傳〕高陽院○藤原泰子、本名勳之、依兼雅改之、鳥羽后○中、保延七○永治元年、五、五爲尼○清淨理主、

○按ズルニ、鳥羽天皇ノ崩御ハ、永治元年ヨリ後ル、コト十六年、保元元年七月二日ニ在リ、

〔本朝世紀〕康治元年二月廿六日○中、是日待賢門院○藤原鳥羽后、於仁和寺法金剛院御所、有御出家事○法真如

法真如、以僧正信證爲戒師、第五法親王被剃御髮、法皇○鳥羽、并上皇○崇德、同臨幸、女房二人同爲尼、故顯

仲卿女○河殿、故右京大夫藤定實朝臣女○中、女院春秋四十二、未及衰邁御、天下諸人知與不知無不

悲歎者也、

〔百練抄後七〕保元元年六月十二日、美福門院○鳥羽后、御出家、

〔保元物語〕法皇崩御事

後宮出家

受戒灌頂ハ

後宮ノ出家ハ、聖武天皇ノ皇后藤原安宿媛ニ始マリテ、其事蹟多端ナレド、殊ニ例外ナルモノハ、奉事セル天皇ノ在位中ニ出家スルト、出家シテ後ニ再ビ入内スルモノトス其出家ノ後ニ再ビ入内スル事アリシハ、婦人ノ出家ハ、多クハ額髮ヲ剃ルニ止マルニ由レリ、故ニ初ニ額髮ヲ剃リテ尼ト爲リ、後ニ全剃シテ圓顚ト爲ルモノアリ、奉事セル上皇ノ出家ノ後ニ、俱ニ出家スルモノハ其例少カラズ、

信佛數而出家

〔東大寺要錄〕或日記云、天平廿年戊子正月八日、天皇并后○聖武后藤原安宿媛御出家、四月八日受菩薩戒、〔兵範記〕仁安三年十月九日丁酉、今夜中宮○二條后藤原育子御通世、御年廿三、去永萬年中、二條院崩御以後、雖有此御願、先帝○六條在位、幼主同輿之間、于今遲々、既當此時、令途素懷給云々、下官雖有御傍親好、依神事奉行不能參入、于時御坐于高倉殿、戒師宇治大僧正覺忠、唄師法印全玄、剃除法印道圓、戒師唄師有施物云々、御名眞如覺云々、今日事大進光長奉行云々、

〔百練抄六七條〕仁安三年十月廿二日、中宮育子出家、

由疾病出家

〔續日本後紀二十〕嘉祥三年三月辛丑、嵯峨太皇太后○嵯峨后藤原智子依病入道、

〔百練抄四條〕正暦二年四月二日、太皇太后○醍醐后藤原子三條第燒亡、御式曹司○六月遷東三條南院、火事之後遺營也九月

十六日、太皇太后依御惱於式曹司出家、即號東三條院、天皇行幸、

〔女院小傳〕九條院子藤原近衛后○中久壽二、八十五、爲尼○御體年廿五、清淨觀、

〔山槐記〕永暦元年八月十九日甲子、今晚中宮○二條后藤原子依御惱危急、有御出家云々、院○後白河去夜有

御幸、曉天還御云々、先々此事御發心之由粗有其聞○中御年廿云々、大悲事也、自去春比不入御禁裏、御白河押小路殿也、

もむき申あきらめ給ふ、十戒を先の世にうけさせ給ひてやぶらせ給はざりければこそ、此世にて十善の位ながくたもち佛法をわがめ、一切衆生をわはれみさせ給ふ心、いまだむかしより今に至るまでかばかりの帝王おはしまさず、いとこよひの御戒のまゐるしに、すみやかに御惱消除せうさんして、百年の御命ながくたもたしめ給へと申さるゝ、さくにたゞ今やませたまひぬるとさこえてめでたき、さて御戒うけさせまゐらすれば、いとよくたもつゝと仰らるゝ、殿たちたもつと仰らるゝやと申させ給へばうなづかせ給ふ、

〔續日本紀二十〕天平神護元年十一月庚辰詔曰今勅久今日方大新嘗乃猶良比乃豐明開行日爾
在然此遍能常利余別仁在故方朕方佛能御弟子等天○天上菩薩能戒乎受賜天在此仁依天上都方
波三寶仁供奉次方天社國社乃神等乎爲夜備利次方供奉留親王知臣知多官能人等天下能人
民諸乎慈賜慈賜李念天還天復天下平治賜○中復勅久神等平方三寶余利離天不觸物曾止人
能念天在然經平見末佛能御法平護利末都尊流方諸乃神多知伊末志利故是以出家人毛白衣毛
相難天供奉仁豈障事波不在止念天本忌可之如方久不忌天之此乃大嘗方開行止宣御命乎諸聞食止
宣

〔續日本後紀二十〕嘉祥三年三月己丑令大法師道詮等請戒主上口受永不殺生

〔三代實錄八〕貞觀六年正月十四日辛丑延曆寺座主傳燈大法師位圓仁卒○中天安二年○中十

二月皇太子履祚明年天皇和清屈圓仁於內裏受菩薩戒

〔讃岐典侍日記〕六月廿日二年嘉承承の事ぞかし内河○細は例ぎまにもおぼしめされざりし御けし
きどもすればうちふしがちにて○中七月六日より御こち大事に重らせたまひぬれば○中
参りて見れば殿や○忠大臣殿實など院河○白より戒うけさせ給ふべきなりと奏せさせ給う
けりとしてせんせい法印めすべきさせられ其御もうけどもせらるゝ程なりけり○中今は法
印めし入よとてふたまなる聲など参らせて戒のさせさせたまふ法印をわらせ給ひぬれば
みき丁ばかりへだてゝ御なほしとりてまゐれど仰らるれば取て参りたり御手水をまゐらすべ
ければおきあがらせ給ふべきやうなければ紙をぬらして御手などのとはせ参らせなぞする
程どかなしき御かうふりなぞ持てまゐりたればずるかせぬかのほせにおし入て御なほし引
かけて参らせたる御ひもさゝむとおぼしめしたるなめりささんどせさせ給へど御手もはれ
にたればえさゝせ給はぬみる心ちぞ目もくれてはかゝまう見えぬかね打ならして事のお

て藏人辨と申けるが扇に、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者といふ文を書て、もたれたりけるを御覽せられけるよりこそ、いと御心おこりにけれ。

〔古事談^一王道后^二〕花山院御出家ノ時天下騒動ス、有人大入道殿^三家ニ申ス、仰云、ケシウハアラジ、能求ヨ云々、不令騒給云々、

〔大鏡^五太政大臣伊弉^六〕花山院の御出家の本意あり、いみじう行はせたまふ、修行せさせたまはぬ所なし、されば熊野の道に千里の濱といふ所にて、御こゝちそこなはせたまへれば濱づらに石のあるを御枕にて大どのもりたるに、いと近くあまの鹽やく烟のたちのぼる心ぼささげにかにわはれにおぼされけん、

旅の空よはのけふりとのぼりなばあまのどもし火たくかどやみん、かゝる程に御驗もいみじうつかせ給ひて、中堂にのぼらせ給へる夜、驗くらべしけるをこゝろみんとおぼしめして、御心の内に念じおはしなされば、護法つきたる法師、おはしなす御屏風のつらにひきつけられて、ふつとうさきもせず、あまひさしくなれば、いまはゆるさせ給ふおり處つげつるをそうどものがりをぞりいぬるを、はやう院の御護法のひきとるにこそありけれど、人々あはれに見奉る、それさる事に侍り、驗もまなによる事なれば、いみじきおこなひ人也どもいかでかなずらひ申さん、前生の戒力に又國王位をすて給へる、出家御功德かぎりなき御事にこそおはしなすため、ゆくすゑまでもさばかりにならせ給ひなん御心には、懈怠せさせ給ふべき事かはな、

〔日本紀略^{後十四卷}〕長元九年四月十七日乙丑、戊刻天皇^落御、崩于清凉殿、

〔扶桑略記^{聖武}〕天平廿一年^{○天平勝元年}正月十四日^{○中略}後高野天皇^{○考}受戒爲尼、名法基、

○按ズルニ、後ハ、後日ノ義ナリ、

〔帝王編年記^{孝謙}〕天平勝寶六年甲午四月、東大寺戒壇、天皇初登壇受戒、嵯真和尚菩薩戒也、

天皇受戒

かならぬ御けしきをおほさおと伊藤藤原覺しなげき御をち中納言伊藤義懐も人老れずたゞひねつふれてのみおぼさるべし説經をつねに花山の嚴久阿闍梨をめしつゝせさせ給御心のうちの道心かぎりなくおはします妻子珍寶及王位といふ事を御くちのはにかけさせ給へるも惟成の辨いみじうらうたき物につかはせ給ふも中納言も其にこの御道心こそうしろめたけれ出家入道も皆れいの事なれどこれはいかにぞやある御心ぎまのをりく出くるはことごとならじたゞ冷泉院の御ものゝけのせさせ給なるべしなど歎き申わたる程に猶あやしう例ならずものゝすゝろはしげにのみおはしますは中納言なども御どのゐがちにつかうまつ給はせに寛和二年六月廿二日の夜にはかにうせさせ給ひぬどのゝある中なつの夜もはかなくあけて中納言や惟成の辨など花山にたづねぬるにけりそこにもつゝかななる小法師にてつゐるさせ給へるものかあなかなしやいみじやとそこにふしまろびて中納言も法師になり給ぬこれまげの辨もなり給ぬあさましうゆゝしうあはれにかなしとはこれよりほかの事あべきにあらずかの御ことぐさの妻子珍寶及王位もかくおぼしとりたるなりけりとみえさせ給

【古事談王道】

玉道后寛此御出家

山花ノ發心ハ

弘徽殿ノ女御

恒公鐘愛ノ間忽薨逝

仍御悲歎ノ處町

尻殿藤原得便宜書世間無常法文

終葉時不隨者等ノ女也

等奉見被勸申御出家ノ事諸共ニ出家

御供可仕由被契申云云而令剃御首給ノ後申云大臣

父道兼家ニ替ラヌスガタヲ今一度ミエテ可

歸參ノ由申テ逐電スト云々其時我ヲ謀リケリトテ涕泣給云々

【古今著聞集十三】

花山院

世をそむかせ給事のおこりいどあはれにかなし法住寺相國藤原

光の御むすめ弘徽殿の女御とてさぶらはせ給けるが限りなく御心ざし深かりけるにおくれ

させ給て御歎き淺からず世中心細くおぼし亂れたりける比粟田關白藤原

いまだ殿上人に

定マレルニ由リテ、預メ稱シタマヒシモノニテ、藤原仲麻呂ガ既ニ太保ニ任ゼラレテ、其日建
言シテ太保ヲ置キ、類聚三代格天平勝寶元年六月廿六日ノ官符ノ、改元前數日ニ在リテ、天平
勝寶トアルガ如クナラン、彼此對照シテ以テ當時ノ狀ヲ知ルベシ、故ニ今聖武天皇ノ出家ヲ
以テ、天皇出家ノ首ニ居ケリ、

〔續日本後紀仁明〕嘉祥三年三月丁酉是日天皇落飾入道誓受清戒四品中務卿宗康親王從四位上阿波守源朝臣多同時入道並天皇之皇子也時人莫不悲之己亥帝崩於清涼殿時春秋四十一

〔皇年代略記村上〕康保四年五月廿五日崩。四十二、先御落飾、法

〔百練抄〕四山寛和二年六月廿二日夜○日本紀略作天皇偷出宮中向花山寺出家年十九法僧嚴久

藏人右少辨道兼扈從、以左少將道綱獻劔璽於東宮道兼之謀也、中納言義懷、左中辨惟成、追參花山寺、同以出家、

〔大鏡裏書〕花山院御事、在位二年
冷泉院第一皇子○中略、寛和二年六月廿三日、丑刻許密密出禁中

向東山花山寺出家。左少辨藤原道兼奉從之。先之密奉。劔繼於春宮。翌日招於權僧正。尋禪剎御頭。法名入覺。九年十

〔榮花物語二山〕一條殿の女御○花山女は○中はらませ給て、八月といふにうせ給ぬ○中うち花○

山にもたれこめてぞおはしまして、御聲をもしませ給はず、いとさなわしき迄なかせ給御めのと達せいし聞えさすれどきこしめしいれず、あはれにのみと略寛和二年にもなりぬ略いかなるころにかあらん、よのなかの人のいみじく道心おこして、おまほうしになりはてぬとのみきこゆ、これをみかどきこしめして、はかなきよを覺しなげかせ給ひて、あはれ弘徽殿ノ鴨いかにづみふかゝらん、かゝる人はいとづみおもくこそあなれ、いかでかのつみをはろばさばやとおぼしみだるゝ事ども御心の中にあるべし、この御心のあやしうたうどきをりおほく、心のど

寺聖田一百町七月乙巳定諸寺聖田地限亦大倭國分金光明寺四千町並不與此詔合續紀又曰天平勝寶二年二月壬午益大倭金光明寺封三千五百戶通前五千戶此詔豫曰五千戶亦蓋追刻時所改增也

〔日本靈異記〕^中打法師以現得惡病而死緣第三十五

宇遲王者、天骨邪見、不信三寶、略
 中 王眷屬奏於天皇、武
 聖 諦鏡法師咀于宇遲、令捉將殺、略
 中 天皇勅

詔朕亦法師、諦鏡亦僧、法師云、何殺於法師、宇遲招災、非諦鏡咎、天皇剷除鬚髮、受戒行道、故償此法師

不殺誦鏡

〔弘仁私記〕序 天平勝寶之前、
世○感○神○天○皇○聖○武○年○號○也○
號○法○師○天○皇○下○略○

〔水鏡中聖武〕次の御門聖武天皇と申さ、略中七月二日、○天平勝位を去て、御々しおろして、太上天皇

とぞ申侍りし、

〔二代要記聖武〕天平勝寶元年七月甲午、○是日御出家、法名勝滿

〔神皇正統記聖武〕天下を治め給ふ事二十五年、天位を御女高野姫の皇女謀○孝にゆづりて、太上天

皇と申、後に出家せさせたまふ。天皇出家のはじめなり。略○中 皇后光明子も、同じく出家せさせ給

五

〔續日本紀十九〕天平勝寶八歲五月壬申、勅曰、太上天皇武○聖出家歸佛、更不奉諡、所司知之、

○按ズルニ、水鏡ニハ、聖武天皇ノ出家ヲ讓位ノ後ノ事ト爲シ、一代要記ニハ、讓位ノ日ニ在リ

ト爲ス、然レドモ靈異記ニハ、天皇ノ事ヲ舉ゲテ、天皇剷除鬢髮ト云ヒ、次ニ勅ヲ舉ゲテ、朕亦法

師ト云ヒ、東大寺所藏ナル銅版詔書ニハ、菩薩戒弟子皇帝沙彌勝滿ナドアルニ據リテ考フル

ニ、在位ノ時ニ既ニ出家シタマヒシガ如シ、續日本紀天平勝寶元年閏五月癸丑ノ願文ニ、太上

天皇沙彌勝滿トアルモ、亦在位ノ時ノ事ナリ、而シテ太上天皇トアルハ、當時讓位ノ議ノ既ニ

十三年發願時之語非勝寶五年落成時之文、先後太政大臣鎌足公、不比等公、橘氏大夫人縣犬養宿禰東人女三千代也、適不比等公生光明子、和銅元年十一月賜橘宿禰姓、天平五年正月薨、天平寶字四年八月贈正一位、爲大夫人、然此詔豫曰「大夫人殊不可曉」、

又

施

封五千戶、

水田一萬町、

以前捧上件物、遠限日月、窮未來際、敬納彼三寶分、依此發願、太上天皇沙彌勝滿、諸佛擁護、法樂蓋質、萬病消除、壽命延長、一切所願皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下大地、人民快樂、法界有情、共成佛道、以代代國王、爲我等檀越、若我寺興復、天下興復、若我寺衰弊、天下衰弊、復誓其後代有不道之主、邪賊之臣、若犯若破、障而不行者、是人必得敬○敬恐辱、十方三世諸佛菩薩、一切賢聖之罪、終當墮大地獄、無數劫中、永無出離、十方一切諸天梵天、護塔大善神王、及普天率土、有勢威力、天神地祇、七廟尊靈、并佐命立功大臣將軍靈共起大禍、永滅子孫、若不犯觸敬勒行者、世世累福終降子孫、共座○歷上恐城早發覺岸、

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

右刻在前詔背、按續日本紀天平感寶元年閏五月癸丑、捨諸寺施綿布稻聖田地詔文略同、遠江國相良平田寺、亦藏是日勅書、蓋是所賜大安寺寺廢後在于此也、其紀年云天平感寶、與史同、按是歲七月讓位於皇太子、改元勝寶、然今詔在閏五月、而云勝寶者、是刻蓋同在刻勝寶五年詔之時、故記以改號耳、其在帝位、而稱太上天皇、續紀及平田寺勅書皆同、疑不能明也、又按續紀是日所捨東大

〔續日本紀聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑詔捨大安、藥師、元興與福、東大五寺各施五百疋、綿一千屯、布一千端、稻一十萬束、墾田地一百町、法隆寺施四百疋、綿一千屯、布八百端、稻一十萬束、墾田地一百町、崇福、香山、藥師、建興、法花四寺各施二百疋、布四百端、綿一千屯、稻一十萬束、墾田地一百町、因發御願曰、以花嚴經爲本、一切大乘小乘經律論抄疏章等、必爲轉讀講說、悉令盡竟遠、隨日月窮未來際、今故以茲寶物敬捨諸寺、所冀太上天皇武沙彌勝滿諸佛擁護、法藥薰質、萬病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下太平、兆民快樂、法界有情、共成佛道。

〔古京遺文〕勝寶感神聖武皇帝銅版詔書

菩薩戒弟子皇帝沙彌勝滿稽首、十方三世諸佛法僧、去天平十三年歲次辛巳、春二月十四日、朕發願稱廣爲蒼生、遍求景福、天下諸國各合脫力字、敬造金光明四天王護國之僧寺、并寫金光明最勝王經十部、住僧廿人、施封五十戶水田十町、又於其寺造七重塔一區、別寫金字金光明最勝王經一部、安置塔中、又造法華滅罪之尼寺、并寫妙法蓮華經十部、住尼十人、水田十町、所冀聖法之盛、與天地而永流、擁護之恩、被幽明而恒滿、天地神祇、共相和順、恒將福慶、永護國家、開闢已降、先帝尊靈長幸、珠林同遊、寶刹又願太上天皇、太皇后藤原氏、皇太子已下、親王及大臣等同資此福、俱到彼岸、藤原氏先後太政大臣及皇后先妣、從一位橘氏大夫夫人之靈識、恒奉先帝而陪遊淨土、長願後代、而常衛聖朝、乃至自古已來、至於今日、身爲大臣、竭忠奉國者、及見在子孫、俱因此福、各繼前範、堅字○字恐誤君臣之禮、長紹父祖之名、廣給群生、通該庶品、同辭愛網、共出塵籠者、今以天平勝寶五年正月十五日、莊嚴已畢、仍置塔中、伏願前日之志、悉皆成就、若有後代聖主賢卿、承成此願、乾坤致福、愚君拙臣、改替此願、神明効訓、右銅版詔書、藏在東大寺、二月十四日、續紀天平十九年十一月己卯詔所云亦同、然於十三年紀、則係之三月廿四日、未知何謂也、是詔在讓位後數年、而言皇帝又謂既崩元正天皇、爲太上天皇、謂太皇太后宮子、爲皇太后、謂今上寶字稱德孝謙皇帝、爲皇太子、謂皇太后光明子、爲皇后者、皆是天平

壇灌頂帝者密灌於此始焉。

〔日本紀略一四〕延喜十年九月某日、太上法皇○字多登天台山、於座主增命坊受灌頂、其次廻心御受戒、戒壇現紫金之光、天子聞之、遣使增命授法眼和尚位。

〔百練抄一四〕永延二年十月廿九日、圓融院於天台戒壇院受戒灌頂、

受衣

〔皇年代略記光嚴〕觀應二年八月八日、於河州行宮御落飾四十一、法諱勝光智、御授衣之時、延文元年月

日、於河州離宮山良覺明和尚奉令著禪衣此時御諱上、勝一字號止之、

〔皇年代略記光明〕觀應二年十二月廿八日、俄以御落飾三十一、御菩提心云々、法諱眞常、惠文和四年

八月四日、自河州東條行宮出御、伏見殿此間令著禪衣、御授覺明上人、其後遷御當所法○法、皇胤

保、安寺自去年月日、著御黑衣、御持齋云々、所々御經行、

〔國太曆〕觀應二年十二月廿八日、入夜大夫參御所、深更歸來、新院○光明、今夕酉刻御落飾、不可思議事

也、御迷惑且又定有利口等、能々可心得之旨勅定云々、

〔椿葉記〕觀應二年十二月廿八日○中、この日、光明院俄に御出家あり、御發心と聞ゆ、其後伏見のは

うわんじにて、禪衣を著しまします、長谷寺の御庵に御隱居あり、

○

天皇出家

〔東大寺要錄〕或日記云、天平廿年戊子正月八日○扶桑略記作天平廿一年、即天平勝寶元年正月十四日、天皇○聖武并后原光

子明御出家、四月八日、受菩薩戒名、勝滿、以行基菩薩爲戒師云々、

○按ズルニ、廿年恐ラクハ廿一年即天平勝寶元年誤ナラン、

〔東大寺藏勅書〕勅旨○中天平勝寶元年、平城宮御宇、太上天皇法名勝滿、

〔續日本紀ト七〕天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、御廬舍那佛像前殿、北面對佛、皇后太子並

侍焉○中、勅遣左大臣橘宿禰諸兄白佛、三寶乃ヤツ、フ、ヘ、ル、止奉ハ、ル、天皇○下

權僧正明雲爲御戒師、

〔吉記〕安元二年四月廿七日壬寅、院中後登山御幸也、昨日依雨延引也、今日依可有御受戒午刻出御、

略○中入夜著御布御法服渡御戒壇、僧綱三口權少僧都實宴御三衣持座等實全持座等實修持座等等尼從、

公卿已下同候御供、次翔磨法印顯賢、教授前少僧都顯眞等、參向中門下、翔磨沙彌入道大臣靜海清海大將等相從、次著御回心床、此後次第存先例、戒和尚座主權僧正明雲、說淨法印覺算、鐫磨教授見右、

法眼圓雲圖定、著衣衆六口、法橋顯意、靜然、永辨智海、大法師源順、道淵等也、事了和尚已下賜祿公卿

等取所司等祿書目六付寺家、依甚爾深更也、次還御講堂、有御誦經、前大僧正章實爲御導師、此間勅

使親信朝臣參上、光憲朝臣申事件勅使英川御共人歟、次參御中堂、千僧供事有啓、自章實同爲導師、次被始

藥師經御讀經、次備御燈明、次被行御誦經、

戒牒條中納言實典草之堀河中納言忠親清書之川青色紙、

度緣宣旨左中辨重方朝臣持參七條殿大理取之以光能朝臣被奏之○中略

殊樓、次常行堂、次法華堂、次四王院、次千手堂、次無動寺各有誦經、次於南山房七宮被供御膳、有御贈

物、但不參會給云云、次還御、入夜參御中堂、有番論議事云々、廿九日甲辰、後聞今日法皇參御西塔

釋迦堂行堂、次法華堂、次寶幢院、各有御誦經、著御本覺院、實修僧都供御膳、有御贈物云々、次御橫川

中堂、次法界房砂臺堂、次常行堂、次惠心院、次華臺院、次法華堂、各有御誦經、次參御中堂、有驗說事、

五月一日乙巳、今日山御幸還御也、早旦參御中堂、有御供花事、又有御誦經藥師經御讀經、結願了給

布施、次御歸洛畢、

〔增說十一今日の日程〕又の年○正應三年二月の比、一院○後深草御髮おろし給ふ、○中二月十一日、龜山殿にて

御いひ事受させ給ふ、四十八にぞならせ給ふ、御法名素實と申也、

〔元享釋書修一〕釋空海、世姓佐伯氏、讃州多度郡人、○中十有三年、○弘仁一代大同等上皇、○平入

著御座二拜次著御御所公卿侍臣皆以扈從今日終日雨下當日早旦送道粥并時於諸僧房八十師等也并次賜法服於三師宿所和上二品院僧清觀也以院使爲使都戍刻槌入堂鐘同刻臨幸

戒壇公卿侍臣束帶法皇御布法服御共僧綱三人持草座權律師寬雄持水瓶羯磨沙彌二人一人顯定男右馬權頭侍臣等執炬火前行僧侶在御後公卿同之自戒壇西廊北脇門入御次和尚羯磨教授著袈

裟大十師中權等各執香爐教授師了先例立堂前砌座下此間堂教授立留第三座邊和上羯磨各立座前從僧敷草座座具等十師向北總禮此間法皇入御堂內沙彌戒座于時和上大十師更向南方自取

草鞋置座之後其後奉請師僧如常于時庭中立柱松等入道前大相國并沙彌定遍南中門內敷草座南北每奉請師僧各三禮唱頂戴次和上以下退座徘徊西軒廊次又開堂戶槌登壇鐘和上以下下執香爐以上

壇上繞中央銅塔凡壇上作法粗如常沙彌戒導師畢講遺教經次法皇更起沙彌戒御座向口御著衣取授衣鉢如常法皇御手持衣鉢登壇次第作法了後拜御和上以下十一師三段了三師十師等列立

東軒廊給祿有差三師各白一領小十師黃各一領抑入道相國依行步不豫蒙法皇勅許先登壇奉待法皇然者於登壇以前作法者二度行之登壇以後同時行之事法皇參御大佛殿被行御誦經壇下立數大

輦積誦諸物諸僧三百口以權律師覺雅爲導師賜布施如常又有千僧供事次還御御所召寺家所司賜祿主典代等取之十一日癸卯法皇并入道大相國令登天台山給公卿侍臣皆悉供奉皆布衣也

左右大將著直衣自高陽院出御東洞院第令出立給於西坂下御手與御共侍臣十餘公卿一兩參仕其外皆退歸中納言公能三位中將忠雅秉燭著御南陽局御所前法性寺座主最雲有御儲事

〔玉海〕嘉應二年四月十九日己亥此日法皇白後河令下向南京給明日依可有御受戒事雖凶會日今日所令出京給也

〔百練抄高八〕嘉應二年四月廿日太上法皇白後河於東大寺受戒入道太政大臣同參入受之〔百練抄高八〕安元二年四月廿七日上皇白後河爲御受戒有登山御幸內大臣以下供奉關白扈從座主

大辨大江朝臣、春宮權大夫藤原朝臣等候御前、公卿座本敷長押上、當時有議、北庇敷緣端疊爲座、如本侍臣執机立僧綱前、以威儀御菜分給之、召應飯供之、公卿座給衝重、御齋畢、僧綱公卿退出、別納所養殿上饗日沒之後、蒙雨滂沱、抑漏千僧供者三百僧有令愁申、又有乞食者數百人、其聲及御所忽召別納所別當泰清朝臣、令運米五十斛、三十石給不預供養之僧、廿石施行乞者、今夕寺司賜別祿、別當僧正白大褂一重、以判官代、謹之、權別當平崇、小別當仁壽、各白大褂一領、三綱四人、造寺勾當一人、各黃染袈一條、今夜於戒壇北堂、可被行說淨事、而僧正令奏曰、大小十師屈給、日沒又依降雨、可難參見、先例不必行之、有議停之、廿三日辛卯、略中戌時還御圓融寺、

〔扶桑略記二十七條〕寛和三年○永延元年十月廿六日、圓融法皇御幸南京、巡拜諸寺、於東大寺受戒、

〔榮花物語三條〕の花山院は、この冬山にて御受戒せさせ給て、その後くまのになむらせ給ひて、まだかへらせたまはさんなり、いかでかゝる御ありきをまならはせ給けん、と、あさましうあはれにかたじけなかりける御すくせとみえたり、

〔日本紀略八〕寛和二年十月日、法皇○花於天台山戒壇院受廻心戒、

〔百練抄四〕寛和二年九月十六日、花山法皇令受天台戒給、義懷惟成兩法師同受之、

〔元亨釋書二十六表〕永長元年八月、上皇○白出家、十月、受沙彌戒于隆命、

〔本朝世紀〕康治元年五月五日丁酉、是日法皇○鳥羽并入道大相國○忠實於東大寺登壇受戒、去二日法皇從白河殿御幸宇治小松殿入道相國本自坐此所有御儲事、四日御進發、扈從公卿內大臣、左衛門督藤公教卿、權中納言同公能卿、左近中將藤忠雅卿、衣布院別當民部卿藤顯賴卿、判官代兵部權大輔平時信主、典代主計權助大江以平等、一昨日下午向東大寺爲奉仕御所御裝束也、以西室僧房爲御所、今圓融院御時、以食堂爲御所、酉刻著御東大寺西中門前御門也、脫御束、即下御門中堂、異角有一堆號禮拜墓、掃部寮其上鋪小筵供半帖、昔本願聖武天皇於此墓上遙拜大佛、相次圓融法皇如此、法皇

有發菩提心者尸毗則代鴿薩埵亦投虎彼皆異代也目所未睹也我君早捨王位新作佛奴著未嘗著之布服用未嘗用之鐵器能屈宸儀昇降戒壇之上可稱歎可稱歎又侍臣曰悲哉世皆無常命能是幾十善之主既富春秋其猶如此我等何益奔營塵區涕泗橫背少心責躬當此時也陰雲忽起風雨交會知天衆龍神之降臨也事畢參大佛殿雲開雨霽感應揭焉大佛殿南砌當佛前間敷長筵二枚其上加御壘立御屏風一帖爲御座東西敷壘爲公卿以下座于時有御誦經事庭中立十丈帳一字東西其下積信濃布一千端有中取十小端十枚御導師三會已講禮微咒願同已講長隆法用之後五百僧行道經四面步廊其路遠廻來遲數刻推移不堪徒然昇出佛前緣起障子勅左大辨大江朝臣爲讀之口如懸河響驚衆聽聖武天皇悲願寂虛可知唯虛舍那之尊體丈尺易悟御導師咒願給祿院司傳給衆僧移著食堂法皇入大佛殿逼以禮拜大佛之爲體也聚金銅以鑄其像築山岳以投其座神也妙也仰之彌高其前東西懸錦像曼陀羅二鋪色彩施諸相具足上座天井下及壇土凡仰觀俯察目眩曜焉申刻遷御食堂其禮堂設御座如大佛殿一千僧著東西長床供以熟食前日供寺家勸文白粥送二百七十厨飯信濃布三十端爲食巾法皇起座躋著西方第六床末白提御三衣清齋獨磨二僧著東陪其下諸僧悚慄皆欲下床有勅不令動座於是身積夏薦眉點秋霜之徒竊相語曰不圖下一人之昔尊加千僧之最末我等忝居其上豈非釋迦大師之恩哉嗚咽者衆矣道俗見之不覺淚下法華經不說乎讓下諸比丘今望法皇之儀遠泣釋尊之教食頃還御于禮堂御座次自公卿及六位左右相分入堂內各執鉢置僧前東西各第一床訖以澄心法師爲六種御導師左近衛權少將實方取白大樹一領給之爰大佛殿上層長方上角木朽落先是寺家結麻柱今日上此角木法皇還御之便佇立于大佛殿北廊南砌覽之更召御車榻覽御之道俗跪候上層所登夫二百人向上如無人有大工僧仁海者高立檐端揚聲行事不幾牽上召下仁海於御前給祿正絹仁海捧之先南面禮大佛次北向拜法皇人皆莞爾申時還御於晝御座姑供威儀御齋始用御鉢銀鉢塗金漆僧正權大僧都元杲權少僧都穆算權律師眞善左大將藤原朝臣左

爲一番奉禮三柱菩薩禮畢即著座教授遺留與最末大十師共拜禮著座其後各執香爐同時三度總禮次打沙彌戒鐘即和上羯磨教授起座從北橋經下厨左繞從南橋登壇上北面著座沙彌戒畢爰以教授權律師眞善兼爲沙彌戒御導師其詞曰

十戒波即十善此度三乃受給戒波加先爾鵜珠乎守給天次仁鳳闕波爾出給留物奈利乎自其落給之悉

達太子乃昔乎思造禮檀特乃山波跡暗天之見悲人少古有戒乎人爾受給布禪定聖主乃今乎奉

禮禮波日本乃國波堺舉天恩惜乎淚曾繁加利我聞久一時禪定乃帝先爾出給利萬機爾年積古天

波曾四海波通御坐分鳳曆波之不幾須龍顏浪未浸須御坐爾苦提乃御意乃發分登貴物眞悲古思

禮介五篇七聚乃戒今日古曾悉持御坐世苦不穿奴輕支御步逆爾受天不傾曾可候介留見聞隨喜

乃若干乃人御功德乎分天給利下留落淚波衣爾懸天醉乃鄉乃珠曾殘介千葉花臺乃舍那信億

蓮葉乃釋尊諸共仁百千戒乎守給天九品蓮爾昇給幣開江給幣御功德不限須法界衆生天普及乎

廻向大菩提次起座如本還下著本座此間小十師著錢著下厨座下臨前立發聲頃之相分著著衣授衣座即

御行著衣師前立作法畢還御本座次和上打小磬羯磨與和上問其詞次教授起座進御前東面著座

奉問十三難問了教授起座法皇又持衣鉢鐵鉢口經七起御座給教授立御前奉令御行南面之

東橋頭先教授登立即誦將來羯磨次奉請壇上左繞奉禮三柱菩薩次著給于羯磨前之御座次教授

乍立誦羯磨誦了即戒者拜給羯磨師三度次羯磨師大戒作法畢又拜給羯磨師如前次戒者持衣鉢

指西御行大小十師最末人奉授六念文次教授相副從西階奉下戒者奉令行大威儀誦御製其

後進給于授衣師前之御座授衣師後即向壇禮拜訖從西脇戶出御暫留御西廊常後愛和上羯

磨教授大小師起座出東脇戶即列立東軒廊給祿各有差僧正權大僧都元果白大僧一重僧律師眞

鉢小十師依次取之傳給先是祿韓櫃二合立同東軒廊有兩面覆抑御衣袈裟橫被皆用之以布御鉢

打鐵白徑又登壇之間持律有限無人相從獨提衣鉢兼持草座瞻仰之徒目不暫捨僧侶各耳語曰昔

御誦經物僧供等、復命具了之由、權律師眞善懸昇殿、同刻槌粥鐘、即引滿寺粥并供、大小十師粥、高坏各十二本、大小十師八、衛重六合、次槌入堂、鐘先和上僧正寬朝、羯磨檀大僧都元呆、教授權律師小十師十人、各衛重四合、并監所諸也、眞善、大小十師八人、東寺僧照鏡、仁延、定仁、禪求、興福寺僧承、立御屏風一帖、爲入堂以前假御座、同砌西方敷長筵、疊等爲公卿以下僧俗座、東底北第二間敷出雲筵一枚、其上供半臺爲沙彌戒所御座、北邊御座如沙彌戒所、爲著衣所御座、而中間南壁下敷長筵一枚爲著衣小十師座、其西爲教授座、東戶下敷座如先爲羯磨二人著衣座、西面俱著衣受戒時、南底西第一間供授衣所御座、如東著衣所、又敷羯磨二人座如東座、常受戒時授衣座、在內西股、壇上長角供御受戒所御座和上羯磨教授大十師小十師壇上座如常受戒時座、常受戒時座、公卿以下著朝衣、清壽法師授御三衣、延源法師持御草座、次僧侶及羯磨沙彌、次公卿以下依次候、小舍人藤原惟時、御水瓶、如御隨身、著冠帶、東西相分制難人闕入、檢非違使候南中門外、爰自廊向西御行、自同廊南折、經戒壇西軒廊、躡御堂北砌御座、次和上羯磨教授
已上著并大十師等執香爐、教授爲前、入從西廊脇門南折步進、經戒壇西軒廊東行、列立堂前座下、座下、在堂前、但教授立留第三座邊、和上羯磨大十師步進各座前、其從僧敷座具、即和上等北向總禮如常、此間法皇入御堂內御座、次和上羯磨教授并大小十師共脫淨履著堂南座、東上即奉請師僧作法如常、羯磨沙彌二人、南中門內敷草座著、北向禮拜、諸寺名僧於中門外、同音稱、敬禮詞、於數聲、和師以上、大十師以上也、
小十師中之上、薦二人爲堂達、次四人爲授衣師、次四人爲著衣師、不預列立、尋各座處著座、次堂達行事、次打登壇鐘、和上十師立座、徘徊西軒廊之間、開堂戶、東方敷公卿座、皆執香爐、教授爲前、從南面東二戶參入、登立下層壇上、左繞至北面、上即壇上各座上置香爐、但教授猶捧香爐、自餘各持座具、至南面共敷座具、總禮、次從南面西橋步、登上厩左繞塔、壇上中央、本有金銅塔形、行立南面、始自上三人

聽其祇候別當參議左大辨大江朝臣○齊有仰作御戒牒狀寬平注皇御戒牒中納言長谷部朝作之依舊實也草成獻之參議

勘解由長官藤原朝臣○佐書之紙青色其狀云蓋聞假身於浮雲沫山暗消煙浪之際寄形於輕霧蘆海

屢變桑田之程唯有德香普薰無憂花之離塵水妙梯爲便正法開之住虛空東道黃屋而忘反閑桑

門而誓心早懲赴焰之飛蛾應畏留籠之飛鳥爰契寬和二年三月廿二日於東大寺戒壇院受具足戒

唯願鏡知明了是誠和南謹疏此文之上及成壇遠置并大十師如計字鳴呼作者其人也書亦等一如東大寺常戒牒但無治部主書官人署

拔俗焉二十一日己丑寅時供御盥次供御粥遲明御車其體象唐車以青錦爲左右障子以青錦爲

出仁和寺西門略○中西刻到東大寺於西面中門外下御車門內東南二許丈有一堆處掃部所鋪小筵

一枚其上供御半疊法皇著之向巽三禮觀者攬淚詢于寺之長老曰本願聖主禮寺護法之處是也禪

定法皇欲受戒入此寺亦禮之三帝頓首誠是和靈堆也次著御宿所前二日判官代修理權亮藤原孝

忠主典代大炊允但波奉親等奉仕御裝束以戒壇院食堂假板敷爲御在所東二間爲夜御所假屋其

表覆唐綾交藤條南北東三方懸壁代同三方立廻五尺御屏風六帖施滿長簾御座如常御座御中

西方立三尺几帳二本同方立簾臺懸帽額御簾上及梁下曳繡帽額西北壁并榻子間曳廻額繡軟障

第三間爲畫御座面西又如常第五間南北各敷兩面疊二枚爲僧綱公卿南府綱北公北庇東第三戶間

懸御簾戶前作假橋其前曳廻班幔二條南庭東爲曳班幔各一帖南北以御宿所東廊三間爲俗殿上

侍馬道數如假板敷以三間爲僧殿上其西三間爲進物所自外所々隨便點定衝重主殿所供常燈進物所供

御非時僧綱公卿以下廳賜饗人定之後法皇密向戒壇院豫問明日儀便以經覽寺內僧正行前泊于

覽大炊屋米十五石一飯炊之數十人用轆轤下飯賣鑿者廿人許類飯納槽以桶引水洗飯也侍臣曰

偉哉大哉經數刻乃還行此寺草創之後堂閣屋舍類敏有日矣僧正寬朝自爲別當致以修繕土木之

功溫故結聖之飾知新歷覽之次法皇嘉歎廿二日庚寅卯時供御盥次供御粥俗殿上應設鑿判

官代中務大丞藤原師長奉勅率主典代中務少錄國雅重并藏人公文雜色等向大佛殿及食堂實檢

亦登壇受戒爲沙彌澄修等四百四十餘人授戒又舊大僧靈祐寶瓊志忠善眞道緣平德忍基善謝行
潛行忍等八十餘人僧捨於舊戒重受和上所授之戒後於大佛殿西別作戒壇院即移天皇受戒壇土
築作之○下

○按ズルニ天平勝寶六年ハ孝謙天皇即位六年ニ當ル故ニ本文所謂天皇ハ即チ聖武太上天
皇ニシテ皇太子ハ即チ孝謙天皇ナリ

〔日本紀略一藤原〕昌泰二年十一月廿四日甲寅太上法皇○字多於東大寺登壇受戒春秋十三令右大辨式
部大輔紀朝臣長谷雄作戒牒文

〔扶桑略記二十三〕延喜四年太上法皇○字多登幸叡山御於阿闍梨增命房法皇謂增命闍梨曰我昔童

年登遊此山心中發願出家住於此焉萬機政務十有餘年適遂本意而依尙侍之勸以僧正益信爲出
家師於東大寺受聲聞戒今於此山和尙爲師欲受菩薩戒共保眞密之法以遽舊懷矣敬奉叡旨忽作
御室於千光院五年四月十四日法皇於叡山戒壇院以增命阿闍梨爲師受廻心戒戒壇之上現紫

金光見者奇之○又見○又見

〔日本紀略八〕寛和二年三月廿一日己丑後太上法皇○字多自仁和寺向東大寺昨日出門廿二日

庚寅法皇於東大寺受具足戒○又見百種抄本朝世紀

〔圓融院御受戒記〕寛和二年三月十九日丁亥申刻自圓融寺遷御仁和寺內觀音院廿一日並依

也出曆博士加茂光榮奉仕御反問僧侶侍臣步從于御車之後先是可被下宣旨難事以別當右近衛中

將實資朝臣子時爲被奏大内殿名往還事可令檢非違使設御船兼制進行之事隨即以宣旨下東大

寺以藏人所藤給大和國差檢非違使左衛門少尉布瑠以孝右衛門少志安茂兼府生錦爲信等遣之

有勲從之人省約爲本以其農業未了州民有煩之故也就中左大臣○雅以院司貫首可候右大臣○兼

依外戚長者欲從別示報慮共令留之以外院司番頭并可役仕之輩及可備威儀之法侶豫令差定

信實をめて七條院○後鳥羽へ奉らせ給ければ、女院は御覽じもあへず、御めもくらせ給ふこ
ちし給ふ。

親自顯髮出家

〔皇胤紹運錄〕後鳥羽院 承久三、七八、依天下事、忽出家、法名良然、

〔後法興院關白記〕應仁元年九月廿二日、傳聞、去十七日、仙洞○後花園御出家云々、近臣四人又出家云々、

今度之就大變御述懷云云、風聞之說如此、廿三日後聞、仙洞御出家十九日、御戒師實相院增運僧

正云云、近臣兩人鳥丸儀同責任、萬里小路前大納言冬房出家云云、委細事追而可尋記、

〔皇胤紹運錄〕後花園院 應仁元年九、廿、俄手令切御本鳥給御出家、法諱圓滿智、御戒師增運僧正、陣

中隨、便宜被召之云々、

臨終出家

〔皇年代略記後朱書〕寛徳二年正月十六日癸酉、太上天皇尊號、同十八日乙亥御出家○法名精進行、即刻崩、

崩後出家

〔皇胤紹運錄〕後光嚴院 應安七、正、廿九、崩、柳原仙居七十、御閉眼之刻、御落飾、法諱光融、

〔花營三代記〕應安七年正月廿九日、寅刻新院○後光嚴崩御、依七施三、御同卯刻御出家○法名戒師泉涌、

寺長老聖阜上人、剃手安樂光院長老曇淨、

〔皇年代略記後圓準〕明徳四年癸酉四月廿六日辛丑崩○法名顯公、小三川十六亭于時故經、御閉眼之後、剃髮○法諱、

戒師泉涌寺竹岩賢怡和尚、

受戒

〔東大寺要錄〕或日記云、天平廿年戊子正月八日、天皇并后御出家、四月八日、受菩薩戒名勝滿、以行

基菩薩爲戒師云云、

〔扶桑略記按武下〕天平廿一年○天平勝元年正月十四日、於平城中島宮、請大僧正行基爲其戒師、太上天

皇○聖武受菩薩戒名勝滿、

〔續日本紀二十四〕天平實字七年五月戊申、大和尚鑒真物化、○中略聖武皇帝師之受戒焉、

〔唐大和上東征傳〕天平勝實六年四月初、於盧舍那殿前立戒壇、天皇初登壇、受菩薩戒、次皇后、皇太子

内之間、不申案内參御前了、從是穢引來禁中也、奇怪之由、人々所被談也、丑時許、周防守經忠朝臣馳參内、於朝干飯方只今白川院上皇、御出家事、令遂御了、由奏聞、則又乍驚從内御使往反、順中將殿下令馳參給、上皇御出家後、則有御幸令渡東北院御也、東北院者是故上東門今夕宿仕、院御室也在法成寺、

〔續世繼約二の浦々〕白河院^略○中位におはしまし、時は中宮^子賢の御事なげかせ給て、おほくの

みだうどもつくらせ給き、院のちは、その御むすめの郁芳門院^子○姪かくれさせ給へりしこそ、かぎりなくなげかせ給て、御々しもおろさせ給しぞかし、四十五六の程にやおはしましけん、御なげきのあまりに世をばのがれさせ給へりしかども、御受戒などはさこえさせ給はで、佛道の御名などもおはしまさかりけるにや、教王房ときこえし山の座主、御いのりのさいもんに、御名の事申されけるに、まだつかぬとおほせられければ、その心をえはべりてこそ、申あげ侍らめと申されけるとかや、

〔皇胤紹運錄〕白河院、嘉保三、^{元永長}八十、御落飾、^{四十}法諱融觀、依郁芳門院崩也、

〔實躬卿記〕德治二年七月廿六日、上皇^{宇多後}御幸壽量院殿、^略○中先幸舊院法花堂云々、□□□於壽量

院殿有御落飾事、

〔皇年代略記^{後宇多}〕德治二年七月廿六日、御出家、^{四十一、於龜山殿新御堂、法諱金剛性、成師僧}

〔増鏡^十〕^{浦千二}德治二年にもなりぬ、遊義門院^{始宇多后}○後宇多后そこはかどなく御なやみと聞えしかば、

院^{宇多後}のおぼしきわく事限りなく、よろづに御祈念はらへどのゝまじしかど、なき御事にていと浅ましくあへなし、院も夫故御々しおろして、ひたぶるにひじりにぞならせ給ひぬる、其程さ

まざまのあはれおもひやるべし、

感時事而出家

〔日本後紀^{十七}〕大同四年四月丙子朔、禪位於皇太弟、^略戊寅^略○中天皇^略○平遂傳位避病於數處五遷之後、宮于平城、而事乖釋、重政猶煩出、尙侍從三位藤原朝臣藥子、常侍帷房、矯託百端、太上天皇^平

分國也、公卿等於後戶邊取之、御戒師分綾被物一重、右大將殿令取之、依無職人布施一裏、右兵衛判官代守傳之、准大臣敷、御直衣皆具、御衣、御指、御下、御袴、以上納平裏、帥取之、預傳之、白長絹一裏、五疋、按、次唄師二口、上臈唄師分綾被物一重、萬里小路前大納言取之、布施花山院宰相中將取之、下臈分、同權大納言、冷泉宰相取之、次御刺手二口、同前、上臈分、皇后宮大夫宗氏朝臣、下結衣、取之下臈分、前藤大納言師行朝臣、下結衣、取之、此外予、吉田中納言實躬朝臣等、依餘人數不取之、次從僧等入自後戶撤布施、次難役僧二人入、後戶撤三衣以下、次僧侶退出、次公卿自下臈起座退出、○首書、難役僧、

○按ズルニ、皇代曆、一代要記、紹運要略、皇代器記、皇年代略記、皇胤紹運錄等、九月七日御出家、法諱金剛源トシ、帝王編年記、増鏡並ニ金剛覺トス、然ルニ應永二十年正月釋有諸ノ記セル、天下南禪寺記ニ載セタル、其本堂金剛王寶殿ノ梁牌銘文ニ、永仁元年大歲癸巳十一月日開山檀那金剛眼謹立ト見エ、其注ニ金剛眼ハ龜山御密號トアリ、又龜山殿御談義難記、坂萃ニモ德治三年五月十五日、今日御時以後、未刻御幸龜山殿、即依爲故禪林寺法皇之御月忌、於龜山殿大多勝院、被行御佛事云々、法皇御名當法皇御名宮御名等注給之、龜山院御法名金剛眼、當法皇御法名金剛性トアリ、法諱金剛眼ヲ以テ是トスベシ、

〔後二條關白記〕永長元年八月九日丑刻一院河○白御出家、醍醐法眼勝覺奉剃御髮了、夜半渡東北院御云々、已及拂曉、

〔中右記拔書〕永長元年八月六日、女院者諱媞子、○部芳太上皇河○白第一最愛之女、○中嘉保三年八月七日、寅時許俄崩于六條殿寢殿、有溫氣、兼又令勞邪氣也、傳聞進退美麗、風容甚盛、性本寬仁、接心好施、因之上皇殊他子也、天下威權只在此人、而七八年來、每春令勞邪氣、佛神祈請逐年無止、今當此時已令崩給、生死無常、誠如春夢歟、仰天伏地歎而有餘、上皇此後御神心迷亂、不知東西給云云、呼嗟哀哉云云、九日、○中此申刻許、上皇欲出家給有御氣色、人々參集、固以制申云云、經忠爲御使參

悼亡而出家

〔百練抄後朱〕寬德二年正月十六日，讓位於皇太子，依自去年冬玉體不豫也，十八日，太上天皇落

飾入道，即刻崩于東三條院。七十

〔百練抄白河〕延久五年四月廿一日，上皇○後御出家法名金，依病急也。○又見扶

〔二代要記土御門〕寬喜三年十月六日，落飾入道。依不御法名行源。

〔入道左府記〕正應二年九月七日癸未，今日中院山。○龜有御出家事，此事此一兩日，俄有其沙汰，是御脚

氣連々不快之上，被催清淨之觀念，楚忽依思食立也。十一、春秋今日彼岸結願，已被遂其事。○中先是新

院。（受字多）去夜（自）睡（蟻）聲，幸此御所，御足御禮，猶（快）快上恐脫（不字）之間，以御與幸南禪院云々。大宮院。○龜山母渡御南禪院上皇。○後同御彼御所，

略。此間粗伺見堂中御裝束儀。

南禪院。（神林寺殿上御堂）南西北東四方懸翠簾垂之，傍東御簾南一間敷大文高麗一枚，為上皇御座，

南北南面西一間傍南御簾敷小文疊一枚。（東西）為御戒師座，西面南二三間，傍西御簾敷小文高麗二

枚，為唄師二人，御剃手二人座。（南上）後戶東腋傍北御簾敷同疊一枚。（東西）為雜役僧座，本佛前立佛臺

懸釋迦繪像。（三尊御成）佛供如恒，立燈臺舉燈明，其前立前机，置灑水器散杖等，其前敷高麗（帖）其西方

立腋机，置塗香器一口，半帖東立磬臺幡花髻等，如日來御脇息以下雜具等兼置佛後。（後壁外裏戶內，

敷，南廣庇正面間以西敷高麗二枚。（過）為公卿座，以上御裝束大概如此，以御座後簾中為

改著御法衣之所，又以其傍為壯（壯）俗服之所，敷。

申半刻御戒師前大僧正了遍。（東寺僧等參勤，熱率唄師以下參上，○中）次僧參上，御戒師了遍僧正，

唄師二人。（法印長，通法印）御剃手二人。（權少僧部有性，雜役僧三人已講，憲基，敷，禪思，憲基之，等各入）

簾中著座，次戒師從僧等役之。（但教教禪思）持參三衣，宮并戒體等置腋机上，次上皇有御咳嗽聲，仍予起座，經公

卿後簀子，入正面間廣庇邊南面東一間，窶御簾參入簾中，於御座北頭窶南第一間東御簾上皇。（御直）

衣著。（御下御袴，先々御布袴也）出御著御御座，御座定後，予出後戶，妻戶經西簀子復座，次戒師著佛前

由疾病而出家

〔皇胤紹運錄〕陽成天皇 天曆三、九、廿一出家、

〔日本紀略三〕天曆三年九月廿六日丙寅勅奉度者三十人於陽成院略○中 依御體不豫也、廿九日

己巳、此曉太上天皇陽成院崩于冷泉院、

〔扶桑略記二十四〕延長八年九月廿二日壬午、有御讓位事、廿九日己丑、依御體危、遂落飾歸真、

未刻崩于右近衛府、御年四十六、

〔帝王編年記十五〕延長八年九月廿九日、尊意爲御出家師、法名金剛實、

〔日本紀略八〕寬和元年八月略○八月、扶桑略、廿九日辛丑、後太上天皇融、依病落髮、法名金剛法、見扶桑略抄、

〔榮花物語九〕院條○一の御なやみいとおもらせければ、御ぐしおろさせ給はんとて、法性寺座主

院源僧都めして、おほせらるゝ事どもいみじうかなしとおろかなり、略○中 かくて御ぐし、六月

十九日八年○寬弘たつの時におろしはてさせ給て、あらぬさまでおはします、

〔權記〕寬弘八年六月十九日辛酉辰刻、浴之間、右宰相中將自院示云、只今可參、即馳參、有御出家事、

條○一也、右大辨奉仰問吉平朝臣云々、申云、午時吉辰、時次吉云々、辰刻入墓之時、尤可忌、御體雖重、猶

以吉時、可有御出家、而以吉平次吉之說用、此時甚可奇、上皇御夜、大殿權僧正慶圓爲和尚、前權大僧

都院源爲阿闍梨、權律師懷壽實誓爲唄、權大僧都隆圓、前權少僧都尋光、剃御髮、權律師尋圓亦近候、

又權大僧都明救候、左大臣奉沐御髮、事了、賜祿於僧有差、奉剃之人不知案內、先奉剃御髮、次剃御鬚、

只除髮遺鬚相似外道之體、仍故實出家之人、先剃鬚也云々、

〔日本紀略十一〕寬弘八年六月十三日乙卯、有御讓位事、十九日辛酉辰刻、太上天皇條○一落髮入道、入

墓之時、雖可避忌、依御體危急、遂觀念也、

〔日本紀略十三〕寬仁元年四月廿九日丁酉、三條院太上天皇、依不豫落飾、年四十二、見百練抄、

又見百練抄、

但今暫被延引之條、彌爲天下、いかにいかに可畏入候と、如此有御奏聞云云、就之御餘波をしみな
せ、何事にても室町殿申御沙汰若可然哉、且内々相談赤松播州之處、あるべき事にて候は、
上意之御憚不可然、可被申意見歟之由答之、仍處談合也云云、予答云、如此事就先例可有見歟、而
未勘其例先可被勘先規哉、申御沙汰可然之由申意見之時、先例何事候哉と定可被尋下歟、其時無
先蹤者併可爲雅意之申狀歟之由所相存也、黃門云、尤々先例定難同歟云云、爰大外記師世朝臣來、
仍可勘之由仰遺歟、

〔皇年代略記〕

後小松

永享三年三月廿四日、御出家

御年五十五、法諱素行、
智御戒師永助法親王、

〔看聞日記〕永享三年三月廿四日、仙洞御落飾今夜御沙汰、其儀嚴重云云、御戒師一品親王、

永助
法親王

剃手理勝院僧正、真光院僧正、難役法師濟々參、

御供出家人々、西園寺前右大臣、
光公

大臣、季按察前大納言、實吉田大納言、家醫師丹三位、幸女房紀内侍、

略仙洞御事、以前再三被止

申了、而押而御沙汰之間、御供人々までも不快云々、

〔觀音寺相國記〕永享三年三月廿四日戊子、院御出家也、

十六、春秋五

此事自武家再三雖被申止、思食立之

上、已亥刻被遂、此事著座人々強不被催、面々依入魂參仕云々、

略上皇衣冠布袴、永豐朝臣出御時

内府候御旗御隨身等南庭祇候、事儀了有御布施内府以下取之云々、

〔皇年代私記〕

後水尾

慶安四年五月六日、御落飾、五十六、法戒師相國寺慈照院仲脾和尚、

〔議奏口次案〕正德三年八月十六日辛卯、今日仙洞、

御御落飾、辰刻許、以院司西園寺大納言、被奏御

辭表、判官代丹波賴庸、
主典代中原職周、
典次尙長朝臣奏聞、
輔政内院御覽、
辭表、
留御前、院司已下直退、散午刻爲御使中山前大納言

被進之、爲御祝儀黃金三枚、
二荷三種被進之、亥下刻御落飾儀式首尾能相濟、被遂素懷候旨、以頭中將基香月、

進之由也、

〔皇胤紹運錄〕靈元院、正德三年八月十六日、御落飾、六十法諱素淨、御戒師梶井道仁法親王、

リ候ハシ程ハ、皇居ヲ南山ニ移シ進ラスベシトノ勅定○後ニテ候ト被奏、○中良卿有テ新院光
 明御涙ヲオサヘテ仰ラレケルハ、天下亂ニ向フ後僅ニ帝位ヲ踐トイヘドモ、寂慮ヨリ起リタル
 事ニ非レバ、一事モ世ノ政ヲ御心ニ任セズ、北辰光消テ、中夏道闇キ時ナレバ、其ニ椿嶺ノ陰ニモ
 寄、遠ク花山ノ跡ヲモ追バヤトコソ思召ツレドモ、其モ叶ハヌ折節ノウサ、豈寂察ナカラシヤ、今
 天運圖ニ膺、萬人望ヲ達スル時至レリ、乾臨枉テ恩免ヲ蒙ラバ、速ニ釋門ノ徒ト成テ、邊鄙ニ幽居
 ヲ占ント思フ、此一事具ニ奏達有ベシト仰出サレケレドモ、顯能再往ノ勅答ニ及バズ、

〔椿葉記〕此日○觀應二年十月廿八日光明院にはかに御去ゆつけあり、御はつえんどさこゆ、

〔皇胤紹運錄〕光明院 貞和四十、廿七禪位○中觀應二十、廿八俄御落飾、三十法諱眞常惠、御戒師

泉涌寺了寂上人、

○按ズルニ、皇代略記光明院條ノ頭書ニ、法諱眞常惠、後改眞惠ト見エ、又一本皇胤紹運錄ニモ、
 後去常字ト見エタリ、

〔椿葉記〕城南の離宮には、閑素として歲月を送りたまはせたまはせどに、明徳三年十一月卅日、上皇は○崇光
 光法皇にならせ給、御戒師は常光國師○應亮なり、法親王にごそ御受戒あるべけれど、幽閑の
 院中さたに及ばず、さりながら禪律の御戒師、先例なきにもあらず、

〔皇年代略記〕崇光明徳三年十一月晦日、於伏見殿御出家五十九、法諱勝圓心、先年無極和尙定
申云々、御戒師常光國師、名諱、年

〔皇胤紹運錄〕熙成王時法名金剛心、中後後龜山院、

〔椿葉記〕三月廿四日、○永享三年院小松は法皇にならせたまふ、御戒師御室一品親王○承なり、今はい

そぢに餘らせたまへば、實算も猶長久ならん爲には、めでたき御事なるべし、

〔建内記〕永享三年三月七日辛未、早旦向廣橋、依招引也、勸修寺中納言參會、亭主黃門相談云、仙洞○後

小御落飾事、昨日自室町殿、○足利御返事無相違也、如此度々被仰下候上者、難被留申、此事已及三數

伊川ヲ御渡候シ時懸ル止事ナキ御事トモ知奉リ候ハデ、玉體ニアシク觸奉リシ事、餘リニ淺マシク存候テ、此貌ニ罷成テ候、佛種ハ縁ヨリ起ル儀モ候ナレバ、今ヨリ薪ヲヒロヒ水ヲ汲ム態ニテ候トモ、三年ガ間常隨給仕申候テ、佛神三寶ノ御トガメヲモ免レ候ハントゾ申ケル、ヨシヤ不輕菩薩ノ道ヲ行給ヒシニ、罵詈誶謗スル人ヲモ咎メズ、打擲蹂躪スル者ヲモ却テ敬禮シ給ヒキ、況我已ニ貌ヲヤツシテ、人其昔ヲ知ズ、一時ノ誤何カ苦シカルベキ、出家ハ誠ニ因縁不思議ナレドモ、隨順セン事ハ努々叶フマジキ由ヲ仰ラレケレドモ、此者強テ片時モ離レ進ラセザリシカバ、曉關伽ノ水汲ニ遣サレタル其間ニ、順覺ヲ召具シテ、潛ニ高野ヲゾ御出有ケル、御下向ハ大路ニ懸ラセ給ヒシカバ、道ノ便モ好トテ、南方主上[○]後ノ御坐アル吉野殿へ入セ給フ、此三四年ノ先マデハ、兩統南北ニ分レ、此ニ戰ヒ彼ニ寇セシカバ、吳越會稽ニ謀シガ如ク、漢楚霸上ニ軍セシニモ過タリシニ、今ハ散聖道人ト成セ給ヒテ、玉體ヲ麻衣草鞋ニヤツシ、鬘輿ヲ跣行ノ徒涉ニ易テ、遙々ト此山中迄分入セ給ヒタレバ、傳奏イマダ事ノ由ヲ奏セザル前ニ、直衣ノ袖ヲヌラシ、主上イマダ御相看ナキ前ニ、御涙ヲゾ流サセ給ヒケル、是ニ一日一夜御逗留有テ、様々ノ御物語有[○]中、今ハトテ御歸アラントスルニ、寮ノ御馬ヲ進ラセラレタレドモ、堅ク御辭退有テ召レズ、イッシカ疲サセ給ヒヌレドモ、猶雪ノ如クナル御足ニ、アラ[○]トシタル草鞋ヲ召レテ、立出サセ給ヘバ、主上ハ武者所マデ出御成テ、御簾ヲ褰ラレ、月卿雲客ハ庭上ノ外マデ送進ラセテ、皆涙ニゾ立ヌレ給ヒケル、[○]中、諸國御抖擻ノ後、光嚴院へ御歸有テ暫ク御坐有ケルガ、中使頻ニ到テ松風ノ夢ヲ破リ、舊臣常ニ參テ蘿月ノ寂ヲ妨ケル程ニ、此モ今ハ住憂ト思召、丹波國山園ト云所へ跡ヲ銷テ移ラセ給ヒケル、

〔太平記 三〕持明院殿吉野還幸事

北畠右衛門督顯能、兵五百餘騎ヲ率シテ、持明院殿へ參リ、[○]中、四條大納言隆蔭卿ヲ以テ、世ノ靜

光嚴院禪定法皇ハ、正平七年ノ比、南山賀名生ノ奥ヨリ、楚ノ囚ヲ赦サレサセ給ヒテ、都ヘ還御成
タリシ後、世中ヲイトバウキ物ニ思召知セ給ヒシカバ、姑射山ノ雲ヲ辭シ、汾水陽ノ花ヲ捨テ、猶
御身ヲ輕ク持バヤト思召ケリ、御有増ノ末通テ、方袍圓頂ノ出塵ノ徒ト成セ給ヒシカバ、伏見里
ノ奥、光嚴院ニ聞エシ幽閑ノ地ニゾ住セ給ケル、是モ猶都近キ所ナレバ、舊臣ノ參リ仕ヘントス
ルモ厭ハシク、浮世ノ事ノ御耳ニ觸ルモ冷シク思召ケレバ、來無所止去無住、拄杖頭邊活路通ト、
中峰和尚ノ作ラレシ送行偈、誠ニ由アリト御心ニ染テ、人工行者ノ一人ヲモ召具セラレズ、只順
覺ト申ケル僧ヲ一人御供ニテ、山林抖擻ノ爲ニ立出サセ給フ、略中是ヨリ高野山ヲ御覽ゼント
思召テ、略中日ヲ經テ紀伊川ヲ渡ラセ給ヒケル時、橋柱朽テ見ルモ危キ柴橋アリ、御足冷シク御
肝消テ、渡リ兼サセ給ヒタレバ、橋ノ半ニ立迷ヒテオハスルヲ、誰トハ知ズ、如何様此邊ニ臂ヲ張、
作リ眼スル者ニテゾアルラント覺タル武士七八人、跡ヨリ來リケルガ、法皇ノ橋ノ上ニ立セ給
ヒタルヲ見テ、此ナル僧ノ臆病氣ナル見度モナサヨ、是程急グ道ノ一ツ橋ヲ渡ラバトク渡レカ
シ、サナクバ後ニ渡レカシトテ押ノケ進ラセケル程ニ、法皇橋ノ上ヨリ押落サレサセ給ヒテ、水
ニ沈マセ給ヒニケリ、順覺アラ淺マシヤトテ、衣著ナガラ飛入テ引起シ進ラセタレバ、御膝ハ岩
ノカドニ當リテ血ニナリ、御衣ハ水ニ漬リテシボリ得ズ、泣々傍ナル辻堂ヘ入進ラセテ、御衣ヲ
脱替サセ進ラセケリ、古モ懸ル事ヤアルベキト、君臣トモニ捨ル世ヲサスガニ思召出ケレバ、涙
ノ懸ル御袖ハヌレテホスベキ隙モナシ、略中諸堂御巡禮アル處ニ、只今出家シタル者ト覺シク
テ、濃墨染ニシホレタル桑門二人御前ニ畏テ、其事トナク只サメ、トゾ泣居タリケル、何者ナ
ルラント怪ク思召テ、ツクヅクト御覽ジケレバ、紀伊川ヲ御渡有シ時、橋ノ上ヨリ法皇ヲ推落シ
進ラセタリシ者共ニテゾ有ケル、不思議ヤ何事ニ今遁世ヲシケルゾヤ、是程心ナキ放逸ノ者モ、
世ヲ捨ル心ノ有ケルカト思召テ過サセ給ヘバ、此遁世者御跡ニ從ヒテ、順覺ニ泣々申ケルハ、紀

人參南禪院右大將已下候公卿座狹之間人々徘徊便宜所御戒師了遍僧正參仕、叟師二人御剃手二人難役僧二人相率參也、以南禪院道場爲其所僧正入道場後簾中參仕僧等相從、○中御戒師留流轉三界中紅淚浮眼丹心銘肝哀傷之悲謂而有餘溺淚不辨前後不圖逢今儀心中惘然之外無他者也御落飾儀了入御簾中歟改御直衣本儀令書布袴給歟依密儀被用御直衣令著椎鈍衣御云々道場南面御簾上之東面御簾垂之次公卿起座取御布施自上臈次第取之○中次僧正以下退出○中御法名金剛眼三十九、三字御法名者字多、歟
三十九、三字御法名者字多、歟
三十九、三字御法名者字多、歟

○按ズルニ本文三字ノ法名トアルハ所謂灌頂號ナリ、字多上皇出家ノ條ニ引用セル台記久安三年六月十八日ノ文ヲ參看スベシ、

〔増鏡今日の日略〕正應も三年になりぬ、○中長月の初めつ方中の院山○龜は御ぐしおろさせ給ふいとあはれなる事ども多かるべし、禪林寺殿にてやがて御如法經などかゝせ給ふ、○中まばしは禪僧にならせ給ふとて、ろうさうの御衣にくはらといふけさをかけさせ給へり、

〔伏見院御落飾記〕正和二年十月十五日、今日上皇見伏見殿明後日可被遂御出家之故也、○中入道一位於一條今出河被○被範棧敷有見物、予同參其所右大將遲參之間、出御及未刻後聞

關白、○中候御車寄、中將忠兼朝臣候御、御頭辨長隆朝臣付御車、未終刻令渡棧敷前給、

〔皇年代略記伏見〕正和二年十月十七日、御出家四十九、法諱素融、

〔皇年代略記後伏見〕元弘三年六月廿六日、御落飾四十六、法諱理覺、後改行覺、御戒師前天台座主二品慈道親王、

〔皇年代略記花園〕建武二年十一月廿二日、御落飾三十九、法諱遍行、戒師法勝寺慈續上人、

〔皇年代略記光嚴〕觀應二年八月八日、於河州行宮御落飾四十一、法諱延文元年月日、於河州離宮由良

覺明和尚奉令著禪衣、此時御諱上、勝一字被止之、

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

十方三世諸佛菩薩、照視精誠、圓滿宿願、夫至孝者德之本也、報恩者善之源也、先以功德之上分、奉訪考妣兩院之御菩提矣、復請弟子以此日行化他之衆善、併資順次決定之往生、一期告終之刻、必預聖衆之來迎、九品易往之間、宜蒙如來之荷擔、乃至法界利益無邊、敬白、

嘉應元年六月十七日

佛弟子謹敬白

清書了有御諱宸筆行真玉海又見

〔雅言卿記〕文永五年十月三日、今日上皇嵯峨御幸龜山殿、明後日御逆修、件日可被遂御出家、□□□□已下御點、頗被刷歟、未斜臨幸、御隨身折花、五日、太上天皇於龜山仙宮、被始御逆修、即令出家給口也、大殿源平關白基忠已下濟濟焉、御戒師、天台座主尊助法親王令候給、一生不犯、令披一宮間、上皇殊有敬信、如此被用御戒師也、署

〔文永五年御落飾記〕十月五日、今日太上天皇春秋四十九可令除花鬘御之日也、略○中資季候大多勝院公卿座、先是關白基忠以下、多以祇候權辨、依師命令、令打鐘歟、打鐘事、此日外被略之、被行御逆修、略○中

聖憲法印爲御導師、可謂富留那再誕藏人、皇后宮大進光朝、勘解由次官棟望等、勤堂童子、事了關白取布施右中辨資宣前宰相中將取裏物、兵部卿二亞相等、猶取被物、資季取之後、直退出、新院御共殿上人信通經等相送下殿、歸宿所、

○按ズルニ、此後十二ケ日、法會ヲ修行セラレシコトアレド今略ス、

〔瑠鏡十一今日の日降

又の年三年正應二月の比、一院後深草御髮おろし給ふ、年月の御本意なれど、たゆたひ過し給けるに、禪林寺殿龜山ここの秋おほし立にしに、いとおどろかされ給ぬるにやありけむ、二月十一日、龜山殿にて御いひ事受させ給ふ、四十八にぞならせ給ふ、御法名素實と申也、

〔吉續記〕正應二年九月六日、參白川殿人々祇候御落飾龜山明日一定云々、略○中御戒師聖護院宮、被申子細、仍被仰了、通僧正仁和申領狀云々、帥卿奉行也、七日、午始參禪林寺殿、略○中隨奉行之告、人

○六者順孫也。國母仙院○平子者正妃也。忝爲三代帝王○二條、高之父祖。勞致萬機巨細之諮詢。因

茲雖去害馬。未得絕塵累。雖追虛舟。未得去浮榮。只樂幽閑於山水之栖。漸送涼燠於二六之曆。然間先朝憂駕。傷老少之無定劫。無常理。悟始終之難逃。闔苑花明。空望紅榮於春雨。紛陽葉脫。唯憐黃落於秋風。每見物之有盛衰。寔諸人事之不牢固。況不惑之齡。屢過厭俗之志。彌深仁口。虞人之貢。定殞飛說之生命。多年齊民之憂。皆結輪廻之業。因加之擒充戮竇。雖思四海之安寧。懲惡除凶。非無五利之禁法。發露之誠。此時尤切。側聞如來正教之中。殊勝之實語。逆修善業。功德無量。隨心所願。獲其果實。仍自晚夏六月十七日。迄于涼秋八月上旬。候初後相并五十箇日。佛則顯數十體之尊容。經文寫一千部之妙典。便於洛東幽邃之精舍。敬開和南敬篤之齋筵。所願者。驚子智德之輩。所唱者。魚○一本興作。頌稱讚之聲。方今憶輪王悲衰容之因。募釋提授法衣之跡。合二羽於佛前。剃雙鬢於頭上。發心日新。何待淨居天子之勸。機緣時至。便感普王如來之夢。昔爲鳳闕之尊。龍袞裁衣。今列桑門之侶。木叉携杖。隨又從今朝百箇日之間。手自爲每日之所作。修三時法華之秘密。企十部妙經之轉讀。須以百日滿千部也。抑弟子轉讀經典。積而有數。法華經則一萬五千四百四十六部。千手經則三萬四百四十卷。其外藥師經二千五百九十八卷。懺法二千五百五十七卷。阿彌陀經六千七百廿卷。阿彌陀百萬遍念誦四十七度。又千手護摩二千六百卅三時。法華護摩五百三十一時。不動護摩七百七十時。大威德護摩廿八時。阿彌陀護摩四十二時。又阿彌陀供養百六十一度。又釋迦藥師。正觀音。十一面。地藏。龍樹。普賢。文殊等各七度。法華百八十九度。千手二百十二度。如意輪二十一度。愛染王五十六度。不動明王百九十六度。大威德三百三十五度。毗沙門天百十四度。金剛童子四十九度。又長日供養法者。法華。阿彌陀。千手。不動。毗沙門等也。但每時奉讀法華經一卷。敢不交餘言。凡厥行業。薰修幾多。算師不能知。佛智宜悉見。是皆忘現世之事。偏只爲後生之營而已。於戲。襄野軒轅之跡。七聖誰轉。大法之輪。崑丘驛偏之蹄。八駿徒隔兩足之相。豈若弟子已入一實無爲之道。遂感三明不退之果。伏乞

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

六七日

奉造立金色等身不動明王像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

結願日

奉造立金色等身普賢菩薩像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

每日

奉圖繪阿彌陀如來像一鋪

奉摸寫素紙妙法蓮華經十部

在具經

已上素紙妙法蓮華經九百部也、但五十箇日間、可被滿一千部、而於今百部者、七七日可被供養矣、目錄在別、仍不載之、

右佛經造寫願錄如斯、夫以一念潛通覺月澄、菩提心之水、三諦觀察、惠風拂煩惱障之塵、甚深之理、不可得稱者、歟、伏惟謬依十善之宿因、早纂百王之洪業、撫民惟疎、遙謝垂衣之德、淳化難施、忽追脫屣之蹤、爰追顧前事、情思往緣、弟子在藩之時、待賢門院○母后、慈悲之恣、早藏登極之始、鳥羽前皇、拜覲之禮、永斷以來、傷嗟之恨、留胸慘切之憂、銘肝不圖、以孤露之微質、理一天於愚心、誠是祖宗之靈德、社稷惟保、降上玄之祐、繼嗣益弘、永曆先朝○二者長嫡也、今上陛下○高者少子也、太上天皇

般若心經五十卷

一七日

奉造立金色等身樂師如來像一體

奉模寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

二七日

奉造立金色等身彌勒如來像一體

奉模寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

三七日

奉造立金色等身千手觀音像一體

奉模寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

四七日

奉造立金色等身地藏菩薩像一體

奉模寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

五七日

奉造立金色等身釋迦如來像一體

文殊師利菩薩像一體

同三尺普賢菩薩像一體

後開入夜被始謹摩法印憲覺於東不動堂勤行御本尊三尺阿彌陀本像往古御勸助下二口、龍目召支度調儲雜具當日渡所云々、

御誦經帳 散花机 堂童子座

已上撤却、每日可供奉云々、

去保元三年謝尊號之後、重命卽至、抑退所請、地望空疲、唯有紫泥之依負、石心不轉、猶恨自去之絕交、襟懷相背、時代屢移、夫遙讓之道、遂志爲先、昔不堪厭俗而去客馬、今何求浮名而繫虛舟、三皇帝之父祖也、縱罷尊號、誰爲早、無何有之棲居也、欲樂閑放而養性、況乎羽林者、爲鳳闕之備矣、豈隨象外之遊、茅土者、非茨山之有矣、寧致草泯之責、其事皆違宿意、自今宜從停止、既追前蹤於永治、勿費後章於當時、

嘉應元年六月十七日

敬白

勤行逆修善根事

初日

奉造立金色等身阿彌陀如來像一體

勢至菩薩像一體

奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部

觀普賢經一卷

般若心經一卷

奉模寫素紙妙法蓮華經五十部

觀普賢經五十卷

同三尺觀世音菩薩像一體

無量義經一卷

阿彌陀經一卷

無量義經五十卷

阿彌陀經五十卷

永治元年五位藏人經親勤仕例云々、次堂童子分花宮散花行道了、堂童子納花宮、次堂達授御誦經文於導師、件文事未始以前、誦經行事、聽官授預賞、預僧撒立紙、次打御誦經鐘、誦誦教化如常了、揚經題名、次讀願文、次說法、次賜布施、導師、被物五重、大臣四人、大納言取之、

布施一裹參議取之、今度大相國雖取、被物、參議取、布施了、

色々布二結包革草○上革子二合、四位殿上人取之、

題名僧十一口、各被物一重、納言以下取之、

布施一裹布五段四位以下殿上人取之、

頭中將并下官取被物、五位取布施、

次每日御佛經供養

等身阿彌陀佛一鋪

三尊像供養了後、願押西方、其跡中央立佛臺、奉懸此像、其前立花机、備關伽、其左右立燈臺、供燈、

前机禮盤等如元、

素紙御經十二部

御導師禪智法印著禮盤、次法用、但無堂童子、預僧分花宮、次說法、次布施

導師被物一重、公卿取之、

布施一裹布三反殿上人取之、

題名僧十一口、各布施一裹布二反

次被始御懺法、僧徒起座於便宜所、改著五條袈裟、又安香鑪、錫杖、名香宮等、次被始例時、次事了、僧徒退下、公卿退下、

每日御佛供養以後、下官退出、以傳語記之、

次剃手二口

被物以下色目同前

公卿侍臣次第取之

次事了戒師以下退下

此間以藏人頭右中將實守御願遂了之由被申大內修理大夫奉仰、於波殿邊仰之

寬平法皇^{〇字}御遁世之日、以院司中納言被奏聞、萬壽上東門院御遁世日、以藏人頭被申大內、永

治羽^鳥依吉例以頭中將教長被申大內、今度依彼二代吉例被用頭中將也、

次被始御逆修

金色等身阿彌陀三尊、金泥法華經一部、素紙同經六十部、

有御願文、式部大輔永範卿草之、

皇后宮權大夫朝方卿清書料紙紫裏白色紙有薄、

請僧十二口、豫參集便宜所鈍色綾束、舊甲裝束、但御等師宿裝束、件僧徒護摩阿開利相加、鈍色裝束十三具、今朝分給了、

法印禪智 同尊覺 同實寬 同公顯 少僧都澄憲 同勝憲

法眼顯智 同觀智 律師良明

法橋實慶 同尊澄 同智秀

修理大夫藤原卿、令院司右少將光能朝臣奏事由、即奉仰令打鐘、法皇出御東御所簾中、次太政大臣、

忠左大臣經右大臣兼內大臣雅前大納言實定權大納言隆季、同實房前中納言光忠光隆權中納言

邦綱中納言宗家、右兵衛督兼雅權中納言成親、同資長、同忠親、修理大夫成賴、參議教盛、同家通、右大

辨實綱正三位俊盛、俊成、成範、朝方實家已上直衣、右大辨實綱一人著束帶著堂前座、但中納言以下退在西廊、此外右

衛門督時忠、參議實賢、右宰相中辨宗盛、祇候御所方不座列、次導師禪智法印著禮盤、大堂達智秀法

橋打磬、次法用堂童子著座右衛門權佐盛隆衣冠、藏人治部少輔兼光束帶其座在右方寶子、五位藏人勤此堂童子、雖存憚、

上薦剃手尊覺奉剃左御髮下薦剃手公顯奉懸御湯此間上薦唄師公聲唱毀形唄次下薦剃手公顯奉剃右髮尊覺懸御湯此間下薦唄師憲覺唱唄次剃除了左右御髮裏檜紙付札札作龍圖所作焚次下薦剃手奉剃髮御剃髮之間和菊奉懸之次法皇入御簾中脫俗服分著法衣給次供御手承此間僧徒撤雜役具御髮暫置同御厨子次法皇取御袈裟出御次戒師奉除周羅髮件周羅髮唄三五聲次定御法名眞行次戒師置袈裟於袖上頌文大哉解脫服以御袈裟奉授法皇以左右手令受給次捧御袈裟一拜即返給戒師如此三反了法皇令著給永治寬通法眼奉結御袈裟結今度等法眼奉結御袈裟次召御念珠菩薩子本精裝束念次遇哉值佛者偈次奉授沙彌十戒次說戒偈次神分次廻向次令授菩薩戒給被授中御法名行眞日奉被案撰歟次法皇入御簾中次戒師復本座次卷南廂御簾次給布施

先戒師

綾被物一重 太政大臣取之 判官代成隆○成隆一作隆傳之

布施二裏絹裏白布各七反

布袴御裝束一具裏白絹裏當日著御之御裝束也脫御之後結之裏調也

直衣御裝束一具裏同

鈍色裝束一具

長絹二裏各五匹 綿二裏各百兩

次唄師二口

各綾被物一重

布施一裏各白布五段

鈍色裝束一具

長絹一裏五匹 綿一裏五十兩

已上納言以下取之

民部卿光忠治部卿光隆取之

皇后宮大夫實定取之

權大納言隆季卿取之

權大納言實房卿取之

已上四裏權中納言邦綱以下取之

左大臣內大臣取之判官代光長奉經傳奉之

參議散三位取之

成親卿被獻內裏判官代藤原光章給笄主典代大藏少輔基兼於中門外又給笄相從權中納言引率判官代主典代逐電參內於大內頭中將相逢奏御報書次內覽納御厨子次權中納言以下歸參報書使進發之後長方朝臣賜御隨身祿左右將曹秦兼任兼國各六丈絹四匹府生秦賴文中臣近武各同絹三匹番長秦公景兼宗各同絹二匹主典代等取之近衛六人各手作布二段廳官取之修理大夫仰云各可候本府次將曹以下退出御報書事永治例右少辨朝隆奉行左中辨顯業朝臣草之右少辨朝隆清書院司權中納言家成卿爲御使

今度作者清書御使併爲彼子息吉例相叶自然之前表也

今度御報書有裏紙其上卷禮紙二枚又卷一枚次入笄以檀紙四枚各重裏之結中如例已刻攝政殿

太政大臣忠左大臣賴右大臣兼內大臣兼以下納言前納言參議散三位廿六人參入依召殿下令參

御前給有御對面次殿下令退出給日來令煩發心地給已有御氣色云々午刻前大僧正覺忠覺忠法

兩袈法印公舜同憲覺尊覺公顯已上四人宿齋東平袈大僧正以下件五人宿房齋又依別仰自去

從僧步行參上暫被候西廡末刻上皇自東廊御所渡御西面御所御裝束先御坐母屋簾中次太政大臣左

大臣依召候御前座次被召僧徒前大僧正爲戒師公舜憲覺爲唱師尊覺公顯爲剃除此外法橋實慶

阿闍梨真圓同源猷爲勤雜役祇候北廂障子外大僧正以下至于役人併八人若爲圓戒師從僧持參

三衣置掖机次上皇出御簾外御座次於南面御拜永治例次戒師著說戒座灑水次三禮唱次打

磬表白次請和尚文在請阿闍梨文次御拜先大神宮次八幡次鳥羽院陵次待賢門院御堂各向其

方兩段再拜云々先例多召人第今度次流轉三界中頌次髡毛爪皮文次善哉大丈夫頌次歸依大世

尊文次雜役僧等持參雜具御脇息實慶法橋打敷真圓阿闍梨御手洗源猷水瓶又實慶御髮剃笄又

真圓御湯帷御手巾等又源猷已上置御座此後雜役三人僧相替勤之次上皇取御冠令解本結給剃

手尊覺法印給件物等入御簾中次剃手奉結分左右御髮用紙次令開御衣襟給額袖下以御湯帷次

盡ヌルニヤ、逆モ由ナシト思食立セ給テ、一筋ニ後世ノ御勤思召タツト聞エシ程ニ、仁安四年四月八日、改元アリテ嘉應ト云、嘉應元年^{己丑}六月十七日、上皇法住寺殿ニシテ御出家アリ、御歳四十三、御戒師ハ園城寺ノ前大僧正覺忠、唄ハ法印公舜憲覺、御剃手法印尊覺權大僧都公顯也、今度皆智證ノ門徒ヲ用ラル、御布施ヲバ大相國已下ゾ被執行ケル、今日ヨリ始テ五十箇日ノ御逆修アリ、八月八日結願セラル、故ニ二條院ハ御嫡子也シカ共先立セ給ヌ、新院^條〇六ハ嫡孫、當今^高ハ又御子ニテ御坐セバ、向後マデモ憑シキ御事ナレドモ、平家朝威ヲ蔑ロニスルモ目醒ク思食ケレバ、穢土ノ習、人ノ有様モイトハシク思食ケレバ、十善ノ鬘髮ヲ落シ、九品ノ蓮臺ヲ志シ給モ最貴シ、平家ノ振舞中々御善知識トゾ思食ス、御出家ノ事、兼テ有披露ケレバ、雲上人御前ニ候テ、目出度御事ト色代申テハ、御齡モ盛ニ御坐セバ、今暫ナンド申合レケレ共、入道清盛ハ善惡物申サズ、サコソト思ケルニヤ、

〔百練抄^{高倉}〕嘉應元年六月十七日、太上天皇^{白河}御出家、^{御年十三}四御戒師前大僧正覺忠、御法名行眞、自今日被始御逆修、廿三日依上皇御逆修初七日、被行非常教、并被召返流人十五人、但興福寺前別當惠信、長谷寺前別當宗覺等不被召返、依本寺訴也、八月八日、上皇御逆修結願、其次被申上、年來御作善目錄、其薰修不遑楚竹、

〔兵範記〕嘉應元年六月十七日壬寅、今日太上天皇^{白河}令遁世給、御年四十三、追鳥羽院例此四五箇年雖有御願子、今遲引、宿善期至、令遂索懷給也、於法住寺御所、御懺法堂有其儀、兼奉仕御裝束、其儀、御懺法堂西面母屋、并南面兩面廂、御簾鋪設莊嚴、具見指圖、院司修理大夫成賴卿左少將光能朝臣、兼日奉仰致其沙汰、且隨御所便宜、且准保延七年例所奉仕也、今朝左中辨俊經朝臣、持參御報書、莫院司右中辨長方朝臣奏聞、^宣即令皇后宮權大夫朝方卿清書^紙、次奏清書、御覽了又返給、長方朝臣納朴函、以檀紙四枚^{各重二枚}裏立押合前後結中、如常表裏了又進上、次修理大夫賜之、令院司權中納言

是三字、雖誤所行已久、余○藤原奏曰、何以知誤乎、仰曰、寬平法皇、法名空理、灌頂號金剛覺灌頂時灌名之、頂後御消息、與猶書空理、不書金剛覺、則知僧灌頂號猶男字、而古賢以爲、金剛覺是法名、不知有空理之御諱、是故天子法諱三字、又有金剛之字、雖古賢不免失誤之譏、慎之令努力云々、

〔扶桑略記二十二年〕仁和五年○寬平元年己酉正月、天皇談話曰、往日素懷御記云、朕自爲兒童、不食生鮮

者、歸依三寶、八九歲之間、登天台山修行爲事、爾後每年往詣寺々修行、至十七歲、言中宮可爲沙門狀、答曰、此極善也、大原寺有練行法師、靡修者爲彼法師、裁縫細紵裝束并製裳、先可以與耳之、後日又答曰、善哉善哉、好三寶事、雖然暫見盡世間、須修此事、經三四月、復如是事、未有妻子可也、若住于世間、斷煩惱、是難耳、答曰、諾、然敢不肯許、後四ヶ月、大臣持鳳蓋奉迎先帝○光孝、恩心偷以悚戰、未及復奏、歷四ヶ年、傳此寶位、而代口人心有兩端、可治難、周文賢哲主也、

〔帝王編年記十五卷〕天曆六年三月十四日、出家傳法名

〔百練抄四卷〕寬弘八年六月十九日、先皇○一條御出家法名精進

〔百練抄六卷〕德永治元年三月十日、太上天皇御出家傳九法名空覺

〔續世繼二羽〕鳥羽院略中かくてつぎのとし○永治元年御やしおろさせ給さ、御とし四十にだにみたせ給はねども、としごろの御はいも、又つゝしみのとしにて、年頃は御隨身などともいめ

させ給て、ぐせさせ給はねども、白河のおはいのみかどやのゝむかひに、御堂つくらせ給て、くやうせさせ給に、兵仗かへし給はらせ給て、めづらしく太上天皇の御ふるまひなり、うちつゞき、幡賀茂など御幸ありて、三月十日ぞ鳥羽殿にて御くしおろさせ給す、こしも御なやみもなく、かくおもはしたつ事を、よの人なみだぐましくぞ思ひあへる、御名は空覺とどきこえさせ給し、

〔源平盛衰記三〕一院御出家事

一院○後白河被思召ケルハ、○中略清盛カク心ノ儘ニ振舞コソ然ベカラキ、是モ末代ニ及テ、王法ノ

細徒精進者之爲高迹雖尊居極而盡踏之矣、衰疾大漸、命近侍僧等、誦金剛輪陀羅尼、正向西方結跏趺座、手作結定印、而崩、宸儀不動、儼然若生、念珠猶懸在於御手、梓宮御棺其制同輿、以聖躬座崩、遂不類臥也、遣詔火葬於中野、不起山陵、使百官及諸國不舉哀、停素服、亦勿任緣葬之諸司喪事、所須總從省約、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇 昌泰二年十月廿四日、於仁和寺御出家、御年十三、御法名空理、後改金剛覺

略○中 延喜四年三月、營室于仁和寺、御俗室曰

〔日本紀略一〇〕昌泰二年十月廿四日、〇扶桑略記、蓋甲申、太上皇多落髮入道、權大僧都益信奉授

三歸十善戒、御名金剛覺、略○中即日請停尊號、其詞曰、前年讓位者爲社稷也、今日出家者爲菩提也、云々、同日天皇上表、不許上皇之命、〇又見扶桑略記

〔帝王編年記十四〕昌泰二年十月十四日甲戌、出家、御年三十四、號寬平法皇、法名金剛覺、三十

〔恩管抄一多〕寬平九年、御脫屣、三十昌泰三年月日、御出家、四十法名金剛覺、

〔大鏡一多〕寬平九年七月五日、おりさせ給ふ、昌泰二年つちのどのひつじ十月十四日、出家せさせ

たまふ、御名金剛覺と申さ、承平元年七月十九日、うせさせ給ひぬ、御年六十六、略○中このみかどの

たゝ人になり給ふはどなむとおぼつかなし、よくもおぼえ侍らず、

〔天和物語上〕みかど〇字おりむたまひて、又の年の秋、御々しおろしたまひて、所々山ぶみしたま

ひて行ひ給けり、備前の様にて橘の良利と云ひける人、内におはしましける時、殿上にさぶらひ

て御々しおろし給ければ、やがて御どもにかしらおろしてけり、人にもまられ給はでありきた

まひける御どもに、これなんおくれ奉らでさぶらひける、かゝる御ありさし給ふいとあしき事

なりとて、内より少將中將これかれさぶらへとて奉らせ給けれど、たがひつゝありき給、

〔台記〕久安三年六月十八日庚戌、今夜法皇〇鳥談話及我朝古事、略○中仰曰、我朝天子出家時、法名多

〔續日本紀二十〕神護景雲三年五月丙申、縣犬養姊女等坐、車載配流、詔曰、現神止、大八州國所知、倭

根子掛畏天皇大命平、親王王臣百官人等天下公民衆聞食止、宣久、丈部姊女波、內部止、奴止、冠位

舉給比、根可婆禰改給比、治給後、然、流物乎、反天、逆心乎、抱藏氏、己爲首氏、忍坂女王、石田女王等乎、率

氏、掛畏先朝乃、依過氏、棄給氏、厨真人厨女許爾、竊往往、岐多奈久、惡奴止、母相結氏、謀家、眞傾奉朝庭

亂國家氏、岐良比給之、水上鹽燒我、兒志計志麻呂乎、天日嗣止、爲乎、謀氏、掛畏天皇、大御髮乎、盜給利

氏、岐多奈後、佐保川乃、獨懷爾、入氏、大宮內爾、持參入來氏、厭魅爲止、己三度下、略

〔日本後紀八〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂略、中

呂略、中姊廣虫及并年許嫁從五位下葛木宿禰戶主、既而天皇略、孝落飾、隨出家爲御弟子法名法均、

〔三代實錄三十五〕元慶三年五月八日丁酉、是夜太上天皇和、清落飾入道、于時權少僧都法眼和尚位

宗叙侍焉、廿五日甲寅、奉爲太上天皇、度僧三十人、淳和太皇太后崩後例、度二十人是日從四位下

行阿波權守藤原朝臣安方請出家爲沙門、勅許之、安方侍奉清和院、隨主入道焉、

〔三代實錄三十八〕元慶四年十二月四日癸未、申二刻、太上天皇和、清崩於圓覺寺略、中

書傳、潛思釋教、應犬漁獵之娛、未嘗留意略、中于時有僧正眞雅法師、自降誕初侍護聖躬略、中眞雅遷

化、復有僧正宗叙法師、入唐求法、受得眞言奉勸天皇、結香火之因、自遜皇位、御清和院、歸念苦空、發心

菩提、朝夕之膳菜蔬、在御、妍狀豐姿、不賜顏色、嫌私寵引、自斯而斷、遂御山莊、落飾入道、是時僧正宗叙

侍焉、山莊即是圓覺寺也、天皇寄事頭陀、意切經行、便欲歷覽名山佛域、於是始自山城國貞觀寺、至于

大和國東大寺香山神野、比蘇龍門、大瀧、攝津國勝尾山、諸有名之處、經廻禮佛、或處留佳、踰旬乃去、自

勝尾山、歸於山城國海印寺、俄而入丹波國水尾山、定爲終焉之地、自後不御酒醢鹽、臨三三日一進

齋飯、六時苦修、焦毀如削、斷除業累、神念逾劇、恒厭此身、欲不御膳而捨之、至夫沙門修練者之所難行、

信佛數而出家

〔續日本紀〕十八 寶字稱德孝謙皇帝出家歸佛更下奉誠因取寶字二年百官所上尊號稱之

〔東大寺藏勅書〕勅旨略○中 天平勝寶元年略○中

今帝法名隆基略

〔續日本紀〕二十四 天平寶字六年五月辛丑高野天皇略○孝 與帝有隙於是車駕還平城宮帝御于中宮

院高野天皇御于法華堂六月庚戌喚集五位已上於朝堂詔曰太上天皇略○孝 御命以氏卿等諸語

止部宜久朕御祖太皇后乃略○孝 謙母 御命以氏朕略告之久國宮御宇天皇乃略○文武 日繼波加久氏絕幸

止爲女子能繼波爾略在母止欲令嗣宣氏此政行給岐加久爲氏今帝止立氏須麻比久間爾宇夜宇也

久自相從事波無氏斗卑等乃仇能在言期等不言岐辭母言奴不爲伎行母爲奴凡加久伊波略波爾

不在別宮爾御坐坐略時自加得言也此波朕劣爾依氏加久言止之念召槐爾伊等保爾念須又

一爾朕應發菩提心緣爾在真之止念須是以出家氏佛弟子止成奴但政事波常祀爾小事波今帝行

給部國家大事賞罰二柄波朕行幸加久能狀聞食悟止宣御命衆聞食宣

〔扶桑略記〕拔萃 天平寶字六年六月先帝高野娘薨花簪入佛道法諱稱法基尼五

〔帝王編年記〕淳仁 天平寶字六年六月高野略○孝 出家稱法基尼

〔續日本紀〕二十五 天平寶字八年九月甲寅詔曰略○中 此禪師乃略○僧 晝夜朝廷平護仕奉平見略仁先祖

乃大臣略止之仕奉之位名平繼止念天在人奈利云天退賜止奏止毛此禪師乃行平見略至天淨久佛

乃御法平繼隆止念行之朕毛導護須己師夜多夜須久退末都真念天在都然朕方髮平會利佛乃

御袈裟服天在毛國家乃政平不行已止不得佛毛經爾勅久國王伊王位仁坐時力菩薩乃淨戒平

受與勅天在此依天念力倍出家家政平行仁豈障倍物方仁不在故是以天帝乃出家天之伊末須世仁出

家之在大臣毛在之倍止念天樂末位爾波阿良補止此道鏡禪師平大臣禪師止位方授末都事平諸開食

止宣略○下

御セリ、且ツ出家ノ天皇ニハ、上古ハ繼ヲ上ラザルヲ以テ例ト爲ス、聖武孝謙ノ二天皇ノ如キ是ナリ、

女帝ノ上皇ト爲リ出家シ給ヒシハ、古來孝謙天皇一人ノミ、是ハ其願ヲ圓ニジ給ヒシニハアラズシテ、額髮ヲ剃除セシニ止マリシナリ、ナホ出家ノ事ハ、釋教部ニ得度ノ篇アレバ參看スベシ、

受戒ハ、更ニ出家ノ後ニ於テスルアリ、出家セズシテ行フアリ、或ハ初二東大寺ニテ行ヒ、後ニ重子テ延暦寺ニテ行フ等ノ事アリテ、其受戒ノ座ニ在リテハ、上皇ノ至尊ヲ降シ、布衣ヲ著ケ、鐵鉢ヲ持チ、衆僧ノ下ニ坐シ給フ等ノ事アリ、是モ釋教部ニ、戒律ノ篇アレバ就キテ見ルベシ、

灌頂受衣ノ事モ、釋教部ニ其篇アレバ此ニ贅セズ、宇多天皇ヲ金剛覺ト稱シ奉リシガ如キハ、所謂灌頂號ニシテ、灌頂ノ時ニ命ジタルナリ、

天皇在位ノ出家ハ、聖武天皇ニ昉リ、自ラ三寶奴ト稱シ、次ニ仁明天皇ハ、其大漸ニ及ビテ之ヲ行ヒ給ヘリ、花山天皇ハ、年少ニシテ世事ニ更歷シ給ハズ、帷席ノ愛ニ溺レ、奸臣ノ衛中ニ陷リ給ヒシモノニテ、亦在位中ノ事ナリ、

名稱

〔名目抄 院中〕法皇

〔東寶記〕太政官符 治部省

應加置眞言宗年分度者四人事

右太上法皇○字 勅命曰 略中 不任令法久住之思、勸狀陳請者略中

延喜七年七月四日○又見格 聚三代格

〔千載和歌集 序〕わがのりのすべらき○後につかへ奉りて、略下

古事類苑

帝王部十五

太上天皇出家

受戒灌頂受衣天皇出家受戒併入

出家トハ所住ノ家ヲ出デ、剃髮シテ佛ニ歸スルノ謂ナリ、而ルニ我邦ニテハ、在家出家ヲ問ハズ剃髮スルヲ以テ出家ト云フ、故ニ今此稱ニ依ル、

太上天皇ノ出家ヲ舉グレバ、清和上皇ハ、酒酢鹽豉ヲ御セズ、二三日ヲ間テハ、一タビ齋飯ヲ進メ、宇多法皇ハ、諸國ヲ徧歴シ、備ニ辛酸ヲ嘗メ、仁和寺ノ開祖ト爲リ、其法ヲ後世ニ傳ヘタマヒシガ如キハ、殊ニ著明ナルモノナリ、光嚴上皇ノ、吉野ノ峰ヲ攀ヂテ、南朝ノ天皇ト相見テ、互ニ嫌隙ノ念ヲ其間ニ措キタマハザリシガ如キハ、蓋シ親親ノ情厚キニ由ルト雖モ、亦以テ當時佛教ヲ崇尚スルノ一旦ヲ觀ルベシ要スルニ上皇ノ出家ハ、其緣由一様ナラズ、或ハ疾病ニ由リ、或ハ皇子ヲ喪ヒ給フニ由リ、或ハ悼亡ニ由リ、悼亡ニモ後宮ノ事ニ關スルアリ、又其間ニハ時事ノ變故ニ感ジ給フアリ、聖旨ニ出デズシテ權臣ノ壓制ニ由ルアリ、而シテ出家スルニハ、必ズ僧ノ手ヲ借ルベキヲ、或ハ親手ニ剪髮シ給フアリ、且ツ其時ヲ舉グレバ、或ハ大漸ニ及ビテ俄ニ行ヒ給フアリ、或ハ登遐ノ後ニ至リテ剃髮シ給フアリ、

出家ハ、戒ヲ受ケ、法衣ヲ纏ヒ、法名ヲ命ズルヲ以テ、上皇モ亦此例ニ依リ、且ツ太上天皇、又ハ單ニ法皇ト稱シ奉レリ、其間ニハ寺院ニ御スルアリ、清和上皇ノ圓覺寺ニ於ケル、宇多法皇ノ仁和寺ニ於ケル、圓融上皇ノ圓融寺ニ於ケルガ如キ是ナリ、然レドモ後世ハ多ク離宮ニ

天皇授戒

後宮出家

受戒、灌
頂保人

信佛教而出家

由疾病而出家

悼亡而出家

出家出於不得止

夫帝在世中出家

初剪髮未至後全剃

出家後再入內

後宮出家雜載

受戒

灌頂

四三

四六

同

四七

同

同

五一

五二

五三

五五

同

古事類苑

帝王部十五

太上天皇出家

受戒灌頂授衣、
天皇出家授戒併入

名稱

信佛教而出家

由疾病而出家

悼亡而出家

感時事而出家

出家不出聖旨

親自翦髮出家

臨終出家

崩後出家

受戒

灌頂

受衣

○

天皇出家

二

三

一二

二五

二六

二七

二八

同

同

同

三六

三七

三七

帝王部二十五

皇親下

皇親妃 解入

帝王部二十六

外戚上

帝王部二十七

外戚下

皇后下

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、
併入

帝王部二十一

妃

夫人

嬪

女御

更衣

御息所

後宮雜載

帝王部二十二

皇太子上

皇太子妃
併入

帝王部二十三

皇太子下

皇太子妃
併入

帝王部二十四

皇親上

皇親妃
併入

古事類苑

帝王部第二冊目錄

帝王部十五

太上天皇出家

受戒、灌頂、受衣、天皇出家、受戒、例

後宮出家

受戒、灌頂、例

帝王部十六

諡號

尊號 例

帝王部十七

山陵上

帝王部十八

山陵下

帝王部十九

皇后上

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、例

帝王部二十

AE
35.2
K6
1933
V. 13



神宮司廳藏版

帝王部二

古事類苑

古事類苑刊行會

AE

Koji ruien

35

.2

K6

1931

v.13

East

Asiatic

Studies

BINDING INSTRUCTIONS FROM

CATALOGUE DEPT.

Bind

front cover in	
back cover in	
both covers in	

Mend

✓

